
銀魂のごとく！ ～東京都練馬区にて～

伽藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂のごとく！ ～東京都練馬区にて～

【コード】

N5853M

【作者名】

伽藍

【あらすじ】

洞爺湖仙人の画策により銀時達がハヤテのごとくの世界へ飛ばされた！

別世界で万事屋一味とハヤテのごとくのキャラクターが繰り広げるドタバタコメディー！

第一訓 きっかけなんて何だって良い(前書き)

3年前に書いた小説の原稿が机の裏から出てきたので投稿してみました。

中三の時に書いたものですが、改良しつつ投稿して行きたいと思えます。

因みに伏せ字多くてすみません！

第一訓 きっかけなんて何だって良い

目覚めよ…

「…ん？」

聞き覚えの無い声に志村新八は目を覚ました。

「あれ…？何処だ、ここ？真っ暗だよ…」

まだ重たい瞼を擦りながら新八はゆっくりと身体を起こす。

辺りは一面真っ暗

「夢か…」

そう言っただけでまた身体を寝かせる。

目覚めよ…

「…ん、何なんだよ、一体…」

再度身体を起こして瞼を開けると…

「目覚めたか…少年」

「……………」

ガバッ

また横になる新八。

「いや、あの起きて下さい…」

「……………」

「起きろってんだろおがー!!」

「うるせえええ!!」

新八のアップーが綺麗に決まった!

「何なんですか!さっきから!僕、昨日のお通ちゃんのライブでろくに寝て無いんですよ…っつて、アレ?」

見渡すとやっぱり周りは真っ暗…

「え…?ちよつと、何処ですか?ここ…」

「よつやく気付いたか…」

頬拭いながら起きた人物は…

「あ、貴方は!」

「そつ…洞爺湖だ!」

ビシッと指差す洞爺湖仙人。

「……………誰?」

「お前、忘れたのか!お前らに必殺技を伝授してやっただろう!ももパーンを!」

「……………ああ。そういえば、」
「ようやく納得したように頷く新八」

「家族の方は大丈夫だったんですか？」

「うん…父さんが昇進して、転勤が無くなって…ってんな事はいー
だろ！」

「それより新八君、君に…」

「また必殺技ですか…もういいですよ。」

「違う！忠告しに来たんだ。」

「忠告？」

「うむ。君はまだ銀時に護られているな。」

「！」

ハツとして仙人を見上げる新八。

「確かにそれは仕方の無い事だ。だが、君にもやれる事があるはず
だ。強くなれるはずだ。」

「…強く、なる…」

「そうだ。力を求めるのでは無く、強くなりたいと気持ちを常に持
ち続ける事だ。」

「気持ち…」

新八はぐっと拳を握りしめる。

「うむ。そこで今回お前らにその心得を伝授してやるつもりだな。そのために強力な助っ人を用意したのだ。」
ニヤリツと笑う仙人。

「え？助っ人？って言うかここ僕の夢ですよ？何で人を呼べるの？」

「助っ人を紹介しよう！」

「オイ…無視か」

いきなり仙人の後ろから一人の人が現れ…

「彼が君達を変えるのを手伝ってくれ……………」

サンデー編集長の縄 だ！」

「オイイイイイイイ？」

何っー人呼んでんだ！お前は！！

これ伏せ字でもやべーレベルだろ！！この小説を一話でお仕舞いにする気か！！」

「今日彼に来てもらったのは言うまでもない。銀魂では修行と言えど限界がある！そこで、サンデー編集長の縄 君に来てもらったと言っ訳だ。」

「お前本当にいい加減にしろよ…っーかなんで君付け！？何でお前の方が偉そうなんだよ！」

「ゆくゆくはジャンプ編集長となるこの私も、銀魂を変えたいと言
う佐 木編集長の願いを汲んで、こうしてサンデー編集長と協力し
て君達にだな…」

「願ってねーよ！編集長そんな事願ってねーよ！

確かに銀魂かなりスレスレのラインだけど！下ネタ多いけど！

っーか何さらつと次期編集長狙ってんだよ！お前ただのサブキャラ
だろー！！」

願って無いはず…

「とにかくだ！今はもう時間がない…銀魂改革の為にもこれを！」
仙人は新八にサンデーを渡した！

「ちよつとおおお！！何勝手に改革しようとしてんですか！
っーかこのサンデーでどうしろと…」

「運命の歯車は回り始めた！

さあ銀時の所へ行け！そうすれば君達は…」
言い終わる事なく仙人達は消えた。

「ちよつと待てえええ！！！！」

歯車、回ったのかな…？

第一訓 きっかけなんて何だって良い(後書き)

飽きっぽい性格ですが、頑張ります。

第二訓 頼り過ぎず、過信し過ぎず（前書き）

週刊少年サンデー様、同じくジャンプ様、大変申し訳ございません！

第二訓 頼り過ぎず、過信し過ぎず

「ハッ!？」

新八は布団から飛び起きた!

「……………何だ、夢か……。そりゃそうだよな。いくら銀魂だからって……アレ?」

新八の手元にはサンデーが……

ドンドン!!

ガラ!

「新八ー!起きるアル!」

「え!？」

障子が勝手に開いたかと思うと、そこからチャイナ服の女の子が顔を覗かせた。彼女は神楽。絶滅寸前の戦闘種族『夜兎』である。

「神楽ちゃん!?!どうしたの?何

で僕の部屋に……」

「新八!今すぐ銀ちゃんの所に行くネ!夢で言われたアル!」
神楽の片手にはサンデーが。

「え、まさか神楽ちゃんも仙人の夢を!？」
そう言っつてサンデーを神楽に見せる。

「新八もアルか!?!なら話は早い
アル!銀ちゃんの所へ行くネ!」

「分かった！」

そう言つて新八は着替えて

「姉上！行つてきまーす！」

「姉御、お邪魔したアル！」

万屋に向かつた…

「因みに神楽ちゃんはどんな夢だったの？」

新八は神楽に夢の内容を聞いてみた。

「なんか洞爺湖とか言うやつとサンデー編集長のな…」

「わあああ！！神楽ちゃん、それ以上言っちゃダメ！分かった。要するに僕と同じ夢なんだね？」

「一緒にすんなヨ、ダメガネ。」

「おいしい！メガネ関係ねーだろ！！」

一方、万屋にて

「うーん…」

「ん〜」

テールを挟んで銀髪パーマの男とグラサンの男が神妙な顔つきで向かいあつてる。

二人の傍らにはサンデー、銀髪の方にはジャンプもある。

銀髪パーマの名前は坂田銀時。

この万屋のオーナーであり、この物語の主人公である。

グラサンの男は長谷川 泰三。通称マダオである。

「ちよつとお！そんな紹介は無いんじゃない？」

まるでだめなオッサン、略してマダオである。

「だから〜」

無職であり、バツイチで…

「まだ離婚してないから！」

「おい、それよりも、どうする？長谷川さんよ…」

銀時がマダオに尋ねる。

「いや、だから長谷川で良いんじゃない！？何でマダオ！？」

銀時も長谷川も唖っている？

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

ガラ！

新八と神楽がドタバタと入ってきた。

「大変です！銀さ…？長谷川さんも？どうしたんですか…？」

新八は神妙な顔つきの二人と脇のサンデーを見た。

「まさか、銀さん達も、仙人の夢を！？」

「何も言つな…新八。今長谷川さんと相談していたんだ。」

「ああ、これは俺達の命がかかっているからな…」

険しい顔で頷く二人。

「銀さん、長谷川さん…」

頼もしい二人の姿に感動する新八。

「そうアルな…事と次第によつては私達の命も…え？」

銀時と長谷川の間には東スポだった…

「いや、やっぱり銀さん。ジャスタウェイが伸びてくるよ、この脚力がだな…」

「いやいや、このチープリンパクトが…」

「ってこれ競馬だろうがぁー？何！？あんたらこの非常事態に競馬のシュミレートしてたの！？」
新八が東スポを叩きつけた。

「落ち着け、新八。このチープリンパクトはな、父親があのお有名な……」

「うるせえよ！何だよ、チープリンパクトって！安い衝撃チープリンパクトじゃなにも変わんねえんだよ！！」

「いや、大事な事なんだ、新八君。」
長谷川が割り込んできた。

「ここでの勝敗が今後の身の振りを決めるんだ。この腐ったマダオスパイラルから抜けるか否か。」

「腐ってるのはお前らの頭だろ！
もういい加減にして下さい！
今はそれどころじゃ無いでしょ！」

間

「つまり、お前らの夢にも出てきたんだな、あの仙人が……」

「って事は銀さんも見たんですね？長谷川さんも？」

「ああ俺のは洞爺湖って奴がジャンプの編集長としてサンデーの編集長さんと協力して俺らに試練を与えるって言う感じだったよ」

「（ジャンプ？乗っ取られたあああ？）」

「俺のも長谷川さんと同じ感じだったな…」
銀時も頷いた。

「どうするアルか？このままじゃ面倒なことに巻き込まれるのも時間の問題アルよ。」

「もう仙人編集長になってますよ！！ヤバいです！！」
神楽と新八が銀時に訴えた。

「オイオイ、どういうこつた？」

「僕らの夢ではまだ次期編集長でとどまってたんですよ。確実に迫ってますよ、コレ！！」

四人が無言でテーブルを囲む。

口を開いたのは銀時だった。

「つまりアレか？洞爺湖を倒せば万事解決なのか？」

「いや、倒すってどうやって…」

ピンポーン

「ー、誰だ？こんな時に。」
新八が玄関に向かおうとすると、

「銀時はいるかー！銀時！」
なんと入ってきたのはボロボロの桂だった。

「桂さん！？どうしたんですか、その格好！」
皆が驚いて桂をみる。

「ぐ…銀時、みんな、大変だ…」 そう言ってサンデーを取り出す。

「ヅラ、まさかお前もアルか？」

「ヅラじゃない…桂だ…
ああ、まさか…」

まさかイ クの組織ア カ ダもこのサンデーを狙っていたなんて
…」

「オイイイイイ！！己はこの小説を終わらせる気か？っーかアンの
のは違うから！ものすごくヤバそうな別件に巻き込まれるんですけ
ど！一体サンデーを何に使うつもりなんだよ！」

「ぐ…洞爺湖とか言うジャンプ編
集長兼サンデー副編集長とサンデーの編集長が夢で教えてくれたん
だ。」 ソファに座る桂。

「繋がってんの！？今の話繋がってたの！？」

「オイオイ、洞爺湖のヤロー遂にサンデーも取り込むつもりだぞ。思いきったね〜」
と銀時。

「やれば出来る奴だと思ってたアル。」
と神楽。

「感心してる場合じゃねえだろ。ドンドン侵食されてますよ！銀さん、このままじゃ本当にマズいです！
っ！かもこの話自体ヤバいでしょ！」
銀時に詰め寄る新八。

「落ち着け新八。」

「そうだ、新八君。こういう緊急事態の時こそ精神を高潔に保つんだ…」

銀時と長谷川がソファに腰を降ろした。

「銀さん、長谷川さん…」

「だからこの調教師のコメントをってみろよ、来てるんだって、ジヤスタウェイは…」

「いやDNAだろ、やっぱり。なんたってこいつの親父は…」

「お前らはいいい加減競馬から離れろおおお？」
新八が二人をテーブルに沈めた。

…とその時、

(どつやら役者は揃ったようだな)

「!?!」

5つのジャンじゃねえや、サンデーが光だした!

5つの光は交わり、そして…

(これからお前達に試練を与えよう)

みるみると人形になってゆく…

啞然と見つめる五人。

(お前達を別世界に飛ばす。何処が良い？選ばせてやろう。ただしサンデーにある漫画のみとする)

「ちよつとおお！どうするんですか!？」

新八がみんなを見渡して叫ぶ。

桂

「俺はマリオが居る世界なら…」新八

「サンデーじゃねえだろ！」

マダオ

「世界恐慌の時のアメリカで。皆失業しちまえ…」

新八

「お前は何っー恐ろしい頼みしてんだ！サンデーってんでしょ!」

神楽

「ドクター スンプなんかどうアルか！」

新八

「死んじやうから!!僕ら絶対生きて帰れないよ!」

銀時

「つても、サンデーの漫画なんてコソくらいしか思い付かないぜ…?」

新八

「いや、コソもマズいですよ!この面子でどうやって事件を解決

するんですか！？ 迷宮入りですよ！」

銀時

「…だな」

(どうした？ 決めないのなら適当に飛ばしてしまっぞ)

だんだん人形が洞爺湖の姿になってゆく。

新八

「っーかいつの間にかセリフの上に名前が出るし！ 明らかに作者面倒臭がつてますよ、このままだとヤバいです！ 銀さん！？ どうするんですか！？」

銀時

「お前何でも銀さんが答え知ってると思うなよ！ 銀さんだってな、分からない事だってあんだよ！ 泣きたい時だってあんだよ！ 逃げ出したい時だってあんだよ！！」

神楽

「じゃあ、この世界で…！」

一同

「人の話聞いてたああー!?!」

(分かった。では、見当を祈る!)

銀時

「オiiiiiii!何の健闘だ!字間違ってたんだろうがあああ?」

現れた洞爺湖の額には編集長と書かれたハチマキが……

銀時・新八

「サンデー?やられたあああ?」

こうして万屋は光に包まれた。

……アレ？この漫画って……ま、後で言えばいいか。

第三訓 クロスオーバーって難しい

「……ん？」

激しい頭痛に銀時は目を覚ました。

「……冷たっ!？」

急に上から冷たい感触。

上を見上げれば曇天の空。

「雪? オイオイ、今夏じゃ無かつたっけ?」

むっくりと身体を起こす。

どうやら地面に横になっていたようで……

「ん? ここ、何処……?」

まだ起きてない頭で周りを見渡す。滑り台、ブランコ、シーソー。

公園のようだが……

「え? 何で? 何で俺こんな所に居るの?……あ」

前回のやり取りを思い出した……

「……って事はここが……ンの世界なの……? マジで……? ……おわっ!？」

と、目の前に宙に浮いた洞爺湖が居た。

「……どつやら無事に着いたよう……」

「……てめえー! ……さっさと元の世界に帰しやがれ!」

洞爺湖に飛びかかるうとした銀時。……がすり抜けた。

「無駄だ…これはお前の頭の中に送られている映像のようなもの。」
「……で？一体何の用なんだよ……」
銀時が諦めたように洞爺湖に尋ねる。

「うむ。実はコソの世界にお前らを送ろうとしたんだけど、間違
って違う所になっちゃったみたいで……」

「オイ、ちょっと待て。じゃあここは……」

「知らん、が皆同じ世界に居るから…何とかなる。済まんがもう時
間がない」

洞爺湖の姿はみるみる薄れていく。

「な、ちょっと、ふざけるよおお！どうすりゃいいんだよ！」

「案ずるな、お前らなら出来ると信じている。ぐ…悪いがこれ以上
の通信は電波の関係で出来そうに……」

「『編集長ー！今日の店はいつものでいいすか』」

「『あ、うん。指名はいつもの娘で！』…と、もう電波が限界のよ
うだ。検討を祈る！」

「オイ、待て待て待ってー！あのヤロー人飛ばしておいてキャバク
ラ行きやがったよ！？健闘間違ってるって言ってんだろっが！」
銀時のツッコミも虚しく公園に響くばかり。

「はあ……」

どうしようも無く溜め息を吐いた銀時。とそこに……

「はあ……」

「ん？」

同じような溜め息が聞こえてきた。

ベンチの方でスーツを着た水色の髪の青年が溜め息を吐いていた。格好いいと言うよりかわいいと言う方が当てはまる。

「……どうしたんだ？この世の終わり見たいな顔して。何となく興味本位で話しかけてみた銀時。」

「……え？ああ、実はお金を失ってしまいました……」
そして……銀時は青年から金を失った経緯を聞いた。

「へえ、そ、そいつは……なんて言うか……ア、アレだな。」
銀時は彼のあまりの不幸体質に反応に困っていた……

「それで……100万が12円になっちゃった、と……」

「はい……」

がつくりと項垂れる青年。

「はあ……たく」

そう言つて銀時は財布を開けた。

「……ほら、これで泊まる所ぐらい出来るだろ？」
2万円を青年に渡した。

「え？いやいや！とんでもないです！そんな！」

「いいから、お前を見てるところこっちまで不幸になっちまうんだよ……」

無理矢理お札を青年に押し付ける銀時。

「で、でも…」

戸惑う青年に…

「心配いらねえよ、こつ見えて結構稼いでんだ。だから、ほら！お札を青年に握らせる。」

「あ、ありが…とつ…いれ…」

「オイオイ？泣くなよ！？こんな事で…ほら！
そう言っつて青年の背中を叩く。」

「本当にありがとついぞいます。あの御名前は？」

「んー、坂田銀時だ。」

面倒臭そうに頭を掻く銀時。

「坂田さんですね…」

「いいよ、下の名前で…」

「では…銀さん…で…いいですか？」

「ああ、良いよ。もう会う事も無いかもしるないけどな…」

「僕は綾崎ハヤテです。」

「そうか、んじゃもう金無くすなよ、ハヤテ。」

「はい！本当にありがとうございました。」
そう言つてハヤテは駆けていった…

「さて…普段の俺なら考えられねえな…」
何しろ銀時の財布の全財産は2万円だった訳で…

「はあ…」
要するに無一文になった訳だ。

「っーか俺らの金とこっちの金、一緒なのか…」

雪はドンドン激しくなつてゆく…

「ーん？止んだ？」

急に雪が止んだと思つて銀時は上を見上げると、

そこは一面綺麗な赤色…？

「あの…大丈夫？」

そこには自分の頭上に傘を差してくれているピンク色の髪の少女が

居た……

第三訓 クロスオーバーって難しい（後書き）

批判、意見、大募集中です！

第四訓 お前ん家 (再放送) (前書き)

え、大変申し訳ございません。全く銀さんっぽく無くなってしまいました。

言い訳はしません。自分の文章能力が無さすぎるので、すみません。本当にまだまだ下手な表現力なので是非アドバイス、悪い点をお願いします…

第四訓 お前ん家 (再放送)

カポーン…

「アレ？」

肩までお湯に浸かりながら銀時はすつとんきょうな声を上げた。

「ここ、風呂だよな……アレ、なんで俺こんな所に居んの？」
フワフワと立ち上る湯気。
身体中温かい…

「ちょっと待って……えっと、公園に居たんだよな？……で、無一文になって……あ、」
銀時は考えるのを止めてお湯をすくって顔を洗った。

「(そうだった…公園で拾ってもらったんだ。んで、なんやかんやで風呂に入ってる…)」
「なんやかんやが気にはなるけどそれはまた後日談で。」

取り敢えず銀時は手早く身体を洗って風呂から上がった。

洗面所には丁寧に銀時の着物が畳んである。

「(何から何まで悪いな…)」
着物を着て、リビングと思われる扉へと向かった。
ガラッ

「あ、もう出たんだ。男の人って早いのね。カラスの行水ってやつ

「？」

ソファに座っていた女の子が新聞を折り畳んで立ち上がった。

「あ、ああ。その、拾われておいて何なんだけど……」

このリビングには銀時と女の子しか居ない。

「ああ、自己紹介がまだだったわね。私の名前は桂　ヒナギク。」

「（桂……？ツラ？）いやいやいや？」

「どうかしたの？」

不思議そうに首を傾げるヒナギク。

「いや、何でも。俺は……坂田銀時だ。」

「銀時ね？私の事もヒナギクでいいわ。」

そう言ってヒナギクはエプロンを身に付けてキッチンに向かった。

「いや、拾ってもらったのは有難いんだが、見ず知らずの人間をこんな簡単に家に入れるなんて不用心過ぎないか？」

「あら、だったらこの真冬日に貴方を外に放り出せって言うの？」
ヒナギクはキッチンから振り返って言った。

「まあ、それは困るけど……」
困ったように頬を掻く銀時。

「帰る宛ても無いんじゃないの？だからあんな寒い夜に公園にいたんでしょ？」

「まあ…（仙人に飛ばされたなんて言ってもなあ…）」
銀時が頭を捻っているヒナギクがテーブルにお皿を並べ始めた。

「今から私達、晩御飯なんだけど銀時も食べていく？」

「本当にいいのか？」

「だったら無一文になった経緯くらいは教えてくれる？」
エプロンを外してテーブルに座るヒナギク。

「ああ、公園でな…」

銀時は公園で会った少年の話をした。

「あー、それはまた不幸な人も居るものね…（多分ハヤテ君ね…）」

「はあ…普段の俺ならあり得ないんだけどなあ…」
銀時は深々と溜め息を吐いた。

「だったら泊まっていつちやいなさいよ」

「おわあ！！」

いきなり隣からの声に驚いて飛び退く銀時。

「お義母さん…いつの間…」
ヒナギクが半ば呆れたように言う。

「え？お母さん？」

「そう 私がヒナちゃんの、ね。」

ヒナギクのお義母さんはテーブルに着いた。

「あ、俺は坂田銀時と…」

「聞いてたわよ、さつきから。うーん、銀ちゃんね！」

顔の前でパタパタと手をふるお義母さん。

「お義母さん…ちゃんつて？」

「あら、いいじゃない？可愛くて。そのチャームポイントのパーマなんて特に」

「違います！ウィークポイントですから！！コンプレックスですから、コレ！！」

自分の頭を指して必死に訴える銀時。

「帰る宛てが無いなら暫く泊めて上げましょう？ヒナちゃん。」
ヒナママがヒナギクに尋ねる。

「お母さん？聞こえてる？オシャレじゃ無いんですよ、コレ…」

「まあ、行く宛てが無いなら仕方が無いわよね。銀時は大丈夫なの？」

ヒナギクは銀時に尋ねる。

「いやコレはコンプレックスであって、オシャレじゃ…」

「はいはい…で？どうなの？」

「いや、それは本当に有難いだが…」
まだ躊躇いを隠せない銀時。が、

「じゃあ、決まりね」

ヒナママのこの一言が決定打となった。

「それじゃあ、食べましょうか。」

こうして銀時は桂家で暫くお世話になる事になった。

食後…

「（美味かった…）」

銀時はとても感動していた。

勿論、ヒナギクの料理にである。

ここ数日、卵かけご飯だけだった銀時にとっては至極当然の思いなのである。

「銀ちゃん！ちょっとコレ着てみてくれる？」

「？」

ヒナママが取り出して来たのは…

色彩豊か、派手な女の子の洋服だった！

「銀ちゃん、こつという格好似合つと思つのよ！だから、ね」

「ちよつおおお！！お母さん！？そつという趣味なの！？そつだったの！？」

銀時の抵抗も虚しく詰め寄られて行く。

「ちよつとだけだから。えつと、こつちがヒナちゃんが着てくれな
いフリルのワンピースで…こつちが、」

「お義母さん！何してるのよ！」ヒナギクだ。

「あ！ヒナちゃん。今銀ちゃんにこのフリルの、」
「部屋に案内するわ！ついてきて！」

「え？あ、のわあ！」

ヒナギクが無理矢理リビングから銀時を連れ出した。

「ヒナちゃんの…ケチ…」

二人は家の庭にある離れに向かった。

「ゴメンね？大丈夫？」

「はあ…危う大切な何かを失う所だったぜ…」
汗拭う銀時。

「そういえば銀時？さっきから聞いたかったんだけど貴方珍しい服着てるわよね。」

ヒナギクが銀時の服を指差して言った。

「（そういや、ここは別世界なんだよなあ…）えっと、そんなに変か？」

「ううん、別にそう言う訳じゃ無いけど…」
庭を暫く歩くと離れの建物が見えてきた。

「っーか家がかいな…」

「そう？でもこの町にはとんでもなく大きい家がたくさんあるわよ。」

「高級住宅街ってやつ？」

「まあ、いずれ分かると思うわ。」
話している内に離れに着いた。

「ここは元々お姉ちゃんが使ってた離れなんだけど、暫く帰って来ないから自由に使ってくれて構わないから。」

「いいのか？勝手に使っちゃまって…」
二人で入り口へ周り込む。

「大丈夫。ただちよつと散らかってるから…」
そう言つてヒナギクが扉を開けた。

「そのくらい気にしやしねえ…」開けた部屋には…

酒ビン、酒ビン、酒ビン。

至るところに酒ビン。

「こんな感じなんだけど大丈夫？」

「お前の姉ちゃんは何をしてるのか…そっちの方が気になるんですけど。」

銀時は酒ビンを退かして、ベッドを使える状態にした。

「私の通っている高校の教師なんだけど、一応…」

「教師！？それは……大変そうだな。」

ヒナギクは時計に目をやった。

「じゃあ、後は好きなように使っただろ？」

「悪いな……こんな急に。」

「困った時はお互い様でしょ。じゃあ、おやすみなさい。」
そう言っただけでヒナギクは離れを出て行った。

「どっかのチャイナ馬鹿にも聞かせてやりてえな……今のセリフ……」
そう呟いてベッドに腰かける。

「しかしまあ……まるで宴会の後だな、こりゃ……。しかも全部空かよ……ん？」

床に散乱しているピンを退かしていると何やら雑誌が……

「ジャンプウウウ！」

銀時の愛読しているジャンプだった。

こつして夜は更けていった

第四訓 お前ん家 (再放送) (後書き)

前回、6巻からと言いましたが原作通りに進めないと思います。
オリジナルの話も入れつつ、原作の話も織り混ぜて行きたいと思
います。

原作の時間軸は恐らくバラバラになると思いますので、ご了承下さ
い。

第五訓 お金持ちって難しい(前書き)

前回より少し銀さんらしさは戻ったと思います。

まだまだ下手ですが、よろしく願います。

因みに原作の流れ通りにはしないでバラバラになっていますので、
というよりオリジナル要素が強くなりました。

これからもオリジナルを原作の流れに組み込みたいと思っています。

第五訓 お金持ちって難しい

翌朝

ガツガツガツツ

凄まじい勢いで朝食を食べてゆく銀時。

「そんなに焦って食べなくても…?」

「ヒナちゃんのご飯美味しいでしょ?」

啞然としてるヒナギクとそれを楽しそう見ているヒナ母。

「はあ、めっひゃふまい! (ああ、めっちゃ美味しい!)」

「まあ…なら良かったけど…おかわりいる?」

「お願いします!」

間

「じゃあ私仕事だから。後はヨロシクね」

「あ、行ってらっしゃい。」
そう言っつてヒナ母は家を出て行って、ヒナギクが階段から降りて来た。

「じゃあ、私も学校があるから。お昼は冷蔵庫に作っておいたからレンジで温めてから食べて。」

「ん？ああ…済まねえな…」
銀時は食器を洗いながら言った。

「はい。合鍵。」

「ん？」

ヒナギクが銀時に鍵を渡した。

「ずっとこの家に居ても退屈だろうから。外に出るなら鍵閉めて行ってね。」

「信用し過ぎじゃ無いのか？」

「人の好意は素直に受け取る！」そう言っつて銀時の手に鍵を握らせる。

「じゃ、行って来るから。」
ヒナギクも家を出て行った。

困ったように頬を掻く銀時。

「……………さて、どうするかな」

鷺ノ宮家

屋敷内…

「お嬢様！？伊澄お嬢様！！」

「いたか！？」

「いや、こちらにはいらっしや無い。」

「また見失ったか！？」

「だからあれほど目を離すなと…！！」
黒服の男達が屋敷内を駆け回っている。

「オーイ！！皆来てくれ！」

男の一人が部屋から出てきた。

「居られたのか？」
皆が集まってくる。

「いや、これを見てくれ！」

飯までには帰ります。』

『ナギの家に行つて来ます。 晩御

書き置きだった！

「何てことだ！またお一人でお出かけになつてしまったのか!？」

「先日も迷子になつたばかりだと言つのに!！」
阿鼻叫喚。

「…もし誘拐なんて事になったら…」

一同

「……………」
「言わずもがな。緊急事態な訳で

「何をしても良い!とにかくお嬢様を探し出せ!」

…とあるお金持ちのお屋敷事情の一方…

「やっぱり別世界なんだよなあ…」

銀時は自分達の世界とは違い過ぎる景色に改めて置かれている状況を認識していた。

コンクリートの建物がずらりと建ち並び、行き交う人々の服は見たことも無いものばかり。

「そもそもこの世界はサンデーの漫画の世界なんだろう？ コンじゃ無えって言ってたしな…」

くそつ、こんな事ならサンデーちゃんと読んどくんだった…マガジンと組んで悪巧みしてたからって毛嫌いするんじゃ無かった…」

悪巧みじゃねえから！！

因みに銀時は今、散歩中。

かれこれ二時間程町を見て回っている。

「流石に喉渴いたな……お、」

公園に自販機があるのを見つけてそこへ向かった。

と、自販機の前に一人の少女。

黒いロングヘアーに綺麗な桃色の振袖を着ている。

「（着物？こっちじゃ珍しい服装なんだよな…）」

少女はお札入れを見つめている。そして巾着袋からお札を…

『天地清浄 悪霊退散』

……御札を取り出した。

「……………」

少女は御札を自販機に入れた。

ウィーン…

返却される。

「（…え？何アレ？突っ込むの？突っ込めばいいの？）」
尚も少女を見守る銀時。

また入れて、

ウィーン…

返却される。

「機械が…壊れている…」

「壊れてんのは、お前の頭！」
思わず突っ込んでしまった。

「!？」

少女が驚いたように振り返る。

「……………」

じーと銀時を見つめて、

「大変です……………」

「あん？」

「知らない人と会話してはいけないと友人に言われたのに、会話をしています……………」

「……………」

銀時は早くもやな予感に苛まれていた。

「でも大丈夫。その友人は優しい人なのできつと許してくれます……………」

「…あ、そう。」

何となく、何となくだが、今までの経験から銀時の直感が面倒事に巻き込まれると警告している……………」

「じゃ、俺はこれで……………」

「それにしても…………こんな所で迷子になってしまっ……………」

立ち去ろうとした銀時の背中に突き刺さった。

「一体、どうすれば…」
しゅんと顔を俯かせる少女。

「（知らない、知らない！銀さん何にも聞いて無い！）」

天の声

【この少女を見捨てて行くつもり

か…？】

「（いや、だってコレあれだもの！面倒事を感じしまくりだもの！）」

「

天の声

【あんなに困っているみたいなの

に？】

悲しそうに俯いてる少女。

「（大丈夫！俺が行かなくても多分この後、この世界の主人公が来て、この娘を助けてくれる！だから、帰ろう！）」
少女と目があった。

じゅ

「帰えら…」

じー

「帰………」

じゅ

「……………」

「んで？一体何処に行きたいんだ？」溜め息を吐きながら銀時は少女に尋ねた。

「この辺りの道にお詳しいのですか？」

「いや、ほとんど分からねえけど…地図ならあるしな…」
ヒナギクの家においてあったものである。

「ではお言葉に甘えてちょっと道をお聞きしたいのですが…」

「ハイハイ。」

地図を取り出して広げる。

「その…」

私は何処に行くのでしょうか？」

「……………」

「……………」

無言で向かいあう二人…

「ああ、そういう人の道的なものは地図には無いな…（なんだコレは…今までに無いタイプだ…）」早くも後悔に包まれる銀時。

「そうですか…では迷っているもの同士、力をあわせて…」

「オイ、何で頭見て言ってるんだ？」

天パか！？この天パの事言ってるのか！？」
少女が銀時の頭を指差す。

「その頭に禍の気が憑いています…」

ゆっくりと言った。

「マジでか。あくだから最近ついてないんだな…パチンコでも勝てねえし。やっぱし全てはこの頭が…ブツブツ」

「アレ、銀時？こんな所で何してるの？」

突然後ろから声がかかった。

咄嗟に飛び退く銀時。

「おわっ！？…って、なんだヒナ

ギクか…」

「悪かったわね…私で？」

「いや？あ、それよりお前学校じゃ無かったのか？」

慌てて取り繕う銀時。

「…今日は午前で終わりだったから…あら？」

ヒナギクが少女に気付いたようだ。

「こんにちは…会長さん…」

「伊澄さん…」

伊澄と呼ばれた少女はペコリとヒナギクにお辞儀をする。

「何だ、知り合いだったのか…」 銀時は安堵したように言った。

「一体どうしたの？」

「まあ『かくかくしかじか』だ」

「まだ使う人居たんだ…それ？」

取り敢えず銀時は経緯を話した。

「…なるほどね。伊澄さんはナギの所に行きたいんじゃない？」
事のあらましを聞いてヒナギクはこう結論を出した。

「……………あ、そうです、そうでした。」

ニッコリと微笑む伊澄。

「…そういえばご挨拶がまだでした…」

そう言って銀時に向きを変える。

「ん？ああ……」

「私は鷺ノ宮伊澄と言います…」ペコリとお辞儀。

「俺は坂田銀時だ。まあヨロシクな…」

「じゃあ、ナギの家まで行きましょうか。一人だとまた迷子になりそうだから…」

三人は公園から出ようとして…

「待ちな！」

「ん？」

白い服を着た集団が銀時達に立ち塞がった。

数は10人。

一人の男が前に出てきた。

「お前、鷺ノ宮家のご令嬢鷺ノ宮伊澄だな？」

「…はい？」

首を傾げる伊澄。

「ご令嬢！？え？こののほほんとしたのが？」

「鷺ノ宮家は超が付く程のお金持ち。彼女はお嬢様の中のお嬢様なのよ。」

「なるほど…じゃあこの連中は金目当ての誘拐犯ってどこか銀時とヒナギクはコソコソ話していた。」

「悪いが我々と共に来てもらおう。大人しくしていれば手荒な真似はしない。」

そう言つと5人くらいの男が前に出る。

「オイオイ、むさい連中がゾロゾ

ロと…何ですか？キノコ狩りですか？」

銀時が伊澄の前に出た。

「何だ貴様は…？」

「俺は、アレだ。伊澄こいつに雇われた今日だけボディガードだ。勿論報酬有り。」

そう言つて木刀を抜く銀時。

「（結局銀時もお金目当てじゃない？）」

「…？」

呆れているヒナギクと状況が未だに呑み込めていない伊澄。

「どうしても邪魔をするつもりだな…？」

「当たり前、ギャラ…彼女俺の客だ。」

「お金持ちと分かつた途端に…」溜め息を吐くヒナギク。そして…

「私も加勢するわ。」

ヒナギクは何処からか木刀を出して銀時の隣へ。

「な、お前！」

銀時は驚いてヒナギクを見た。

「お前はあのお嬢様を連れて逃げろ。そして後で俺に報酬を…」

「この人数なら一人より二人の方が効率がいいでしょ？」

「オイオイ、こういうのは男の仕事だ…剣と杖があるだろう？前線は剣の仕事、んで後方は杖の仕事。だから下がってる。」
銀時がヒナギクを止めようとするも…

「それって私が杖って事かしら？」

「まあとにかくここはブロードロード（俺）に任せて、お前はあのお嬢さんを…」

「大丈夫 足手まといにはならな
いから。」
ヒナギクは軽くウインク。

「知らねえぞ…俺は。」

ポリポリと頭を掻く銀時。

10人の誘拐犯達が銀時とヒナギクを囲んだ。

「相手は二人。しかも一人は女ときた。さっさと終わらせて鷺ノ宮のご令嬢を連れて行くぞ！」
説明口調で言うが早いか、三人がヒナギクにかかって行った。が…

「女だからって気を抜くと怪我す

るわよ？」

一瞬で三人の後ろに回り込み、

「はああああ！」

木刀を尻ぎ払った！

「くくわあああ！」「くくく」

吹っ飛ばす三人。

「……………」

啞然としてる銀時と残りの誘拐犯達。

「杖どころか、エクスカリバーだった!？」

「ひ、怯むな!一斉にかかれ!」誘拐犯達は銀時にも飛びかかる!

「っ!」

銀時も反撃に向かった。

「ふう」

「もう息切れ?」

公園に立っているのは銀時とヒナギク。誘拐犯達は既に跡形もなく逃げ去っていた。

「やるじゃねえか。」

「ありがとう。」

そう言っつてベンチに腰を降ろす銀時。

「流石に会長さん。完璧に正宗を使いこなしていますね。」
伊澄が二人に近づいて来た。

「正宗？」

銀時は伊澄に尋ねた。

「ああこの木刀ね？」

ヒナギクが持っていた木刀を銀時に見せた。

「え？これが正宗？」

銀時はまじまじと木刀をみた。

「いやいや、だって木刀じゃん、コレ。正宗ってアレだろ？ほら、
F でセフィ スが持つてるような刃の長い……」

「なんの話してるのよ……？」

ヒナギクの後ろから伊澄が横から出てきた。

「これは鷲ノ宮家に代々伝わる家宝。かの天才刀鍛冶……名匠正宗が
作った珠玉の一品、

『木刀・正宗』

です。「キラリと伊澄の目が光る。

「……ふーん。じゃ、その友達の家とやらに行こうぜ。」

銀時は腰を起こした。

「し、信じてませんね？本当にこれは……」

オロオロとヒナギクの持つている木刀を指して必死に訴える。

「ああ、信じてる信じてる。名匠も悩んだんだろうなあ……」

「本当なんですよ？家宝なんです。」

じつと銀時を見る伊澄。

ふと、銀時が思っていた疑問を伊澄に尋ねた。

「でも何でお前の家の家宝なのにヒナギクが使ってたんだ？」

「ああ、これはまあ色々あって貸して貰ってたのよ。」
ヒナギクが木刀を伊澄に返した。

ヒヨイ

が、伊澄の腕をすり抜けてヒナギクの手に戻った。

「……………」

じーっと銀時を見つめる伊澄。

「もしかして、ヒナギクがそれ持つてる理由って……………」

「行きましようか……………」

伊澄はそう言っって公園を出ようとして、

「ナギの家、反対方向よ？」
とヒナギク。

くるりと反対側を向く伊澄。

銀時と目が合った。

「……………」

「……………」

じーっと向かい合う。

「行きましよう……………」

「え、ええ？」

伊澄とヒナギクは目的地へ歩き出した。

「……………ま、いつか。」
銀時は後から二人を追う。

間

「さ、着いたわよ。伊澄さん。」テイズオブファン ジアよろしく、パツと移動で目的地に辿り着いた訳だが。

「あの、何ですか、コレは……」銀時は目の前の景色を指して啞然としていた。

「何って、ここがナギの……さっき言った伊澄さんの友達の家よ。」
そう言っただけでヒナギクは門を指差した。

門、と言っても高さにしておよそ5メートル。支柱と支柱の間に波のように鉄格子が張ってあり、正面には扉。その扉の右側の支柱に大きな文字で『三千院』と掘られている。
因みに、門の外からだの中の様子は分からない。見えるのは森だけだ。

まあ要するに、とてつもなくでかい敷地と言っ事。

「家よ、じゃねーだろ!!!お前コレ……」
動揺し過ぎてもはや言葉が続かない銀時。

天の声

【因みに、この三千院家の広さは練馬区の65%！およそ31,304キロ平方である。】

「練馬区？何だそれ？オイ、もっと分かり易い例え方してくれ…」
天の声

【江戸城が13個入ってもまだ余裕…】

「どんだけえー！？
分なんて！」

聞いた事ねえよ！江戸城13個

「さつきから誰と話してるのよ、銀時？
ヒナギクが突っ込んだ。」

「だってお前、江戸城13個分だよ！？コレもう幕府とか超小っさいじゃん！將軍とかもうただの将ちゃんになっちゃっじゃん！」

「幕府って…いつの時代よ？
まあ、普通は驚くだろうけど…」

「銀時様…あのマイ ロソフトの創業者ビ ・ゲ ヅの自宅は14
4…」

「ハイ！それ以上はダメ！」
伊澄をヒナギクがギリギリで止める。

門の正面で騒いでいると…

「アレ？ヒナギクさん？」

青い髪に可愛らしい顔立ち。

…ハヤテだ。

「伊澄さんも？どうしたんですか？」

「あ、ハヤテ君。ちょうど良かった。伊澄さんがナギの家に行こうとして迷子になってたから連れて来たのよ。」

「こんにちは…ハヤテ様…」

ヒナギクの後ろからひよっこりと顔を出す伊澄。

「…ああ、成る程。」

「よお。」

今度は銀時がヒナギクの後ろから顔を出した。

「あ、銀さん！」

「お知り合いだったのですか…？」

驚いているハヤテに尋ねる伊澄。

「ええ、この前、大変な所を助けてもらっただんです。」

「まあ…そうだったのですか…」

「お前、金の方は大丈夫だったのか？」

銀時がハヤテに尋ねる。

「ええ、お陰様で。あの時は本当

にありがとございました。」

「ただの気まぐれだ：普段じゃあり得なねえけどな…」
面倒臭そうに頭を掻く銀時。

「素直じゃないわね」

「Shut up!」

冷やかすヒナギクにピシッと指差す銀時。

「とにかく、ハヤテ君、後はヨロシクね。」

「ハイ。では伊澄さん、行きましようか。」

「はい…お願いします…」

ヒナギクが伊澄の事をハヤテに任せた。

「つて、え？ちょっと待って？ハヤテお前、ここに住んでるの？」
恐る恐る銀時がハヤテに聞いた。

「ええ、僕はこのお屋敷で執事をやっています。」

「……………マジ？」

「ええ。あの？どうかしたんですか？」

「何でもない…」

三千院家に伊澄を届けて銀時とヒナギクは自宅へ向かっていた。

「…しかしまあ、世の中は広いんだな…あんなでかい敷地なんて」
「あの三千院家は特別大きいからね。でもあの屋敷は別館らしいわよ？」

「別館！？アレでか！？」

「本館の大きさなんて、想像出来ないわね…」

もう日が大分傾いて、二人の影が高く伸びている。

先程の公園に着いた所で銀時がベンチに腰を降ろした。

「少し休……ん？」

銀時が何か言いかけて上を見た。

「どうしたの銀……え？」

銀時の座っているベンチの上空が光輝きだした。
そして…

上から人が…

「あゝあゝあゝ ああああ！！！」

「ええええええ！！？」

銀時の真上に落っこち来た！

ドサッ！

「痛っー！ たく何なんだよ…！」

突然の出来事に訳が分からない銀時。

「…銀さん！？」

聞き覚えのある声。

「って、新八！？」

銀時が驚いて声を上げる。

そうして新八…の眼鏡に駆け寄った。

「オイ！ しっかりしろ、新八！」 「新八くんこっちイイイ！！」

新八は銀時を蹴り飛ばした。

「新八の成分の95%はメガネだ。どっちかっーともうこっちが新八だろ。」

銀時はメガネを持ち上げて言った。

「もういいだろ！ そのボケは！！ いい加減読者も飽きてるよ！」

「えつと…」

全く状況が呑み込めていないヒナギク。

「え？」

新八が驚いたようにヒナギクを見た。

「あゝ、こいつは…まあメガネで良いよ。」

「良いわけ無いでしょ…あの、ぼ、僕はし、志村新八です。」
挨拶しながら新八はヒナギクがかなり美人である事に気付いた。

「あ、私は桂ヒナギクです。」

…ところで、えっと今上から落ちて来ましたよね？」
ヒナギクはベンチの上を指差した。

銀時・新八

「……………」

気まずい沈黙…

「…取り敢えず、家に来ます？」
沈黙に耐えきれなくなったヒナギクが新八に言った。

空から降ってきたのをどうやって誤魔化せばいいのか。帰路、銀時は悩むのであった…

第五訓 お金持ちって難しい(後書き)

ナギ達が住んでる三千院家は面積にして、約31キロ平方メートルと言つ設定らしいですね。

因みに、千代田区が約11キロ平方メートルらしいので千代田区三つ弱分になるわけです…

でか過ぎですね…

あのビル・ゲイツの自宅は144キロ平方メートルらしいですよ。世界最大の自宅で、フロリダのウォルトディズニーワールドよりでかいんです。

想像出来ないですよね〜

第六訓 95%が眼鏡で3%が水、2%がゴミらしい(前書き)

新八

「このタイトル、完全に作者喧嘩売ってるよコノヤロー？」

銀時

「オイオイ…これは『新八登場!』って訳すに決まってるだろ。」

新八

「何処の星の常識だよ!？」

銀時

「銀魂の常識だろうが。分かったらさっさとコミックス24巻を復習して来い。公式が載ってるから。」

新八

「こんな辛辣な公式見たこと無いわ!…アレ?なんか目が霞んできた……」

銀時

「んじゃ、今回もヨロシク!」

第六訓 95%が眼鏡で3%が水、2%がゴミらしい

夜

桂家 離れ

「…つまり別世界から来たって事？」

「まあそうなるな…」

新八

「何かすみません。いきなり家に上がり込んで、こんな話。」

取り敢えず三人は離れに寄った。

あの後、新八を取り敢えずヒナギクの家に連れて来た。

当然ヒナギクも事の一部始終を見ていた訳で、二人に誤魔化しの余地などあるはずも無く、サンデー等の話を省いて別世界に飛ばされたと話したのだが、

「……………もう休んだ方が良くないかしら？二人とも。」

新八

「ち、違うんです！！本当なんですよ！？疲れてるとかじゃ無くて！！」

「ええ？信じてるわよ。多分明日目が覚めれば元の世界に戻ってるかもしれないし…」

新八

「いやいや！笑顔なのに一ミリも笑ってませんよ！？」
若干引きぎみのヒナギクに必死で訴える新八。

「もういいんじゃない？お前どうせ地味で名前も忘れ易いキャラなんだから、引かれる位の方が相手の印象に残るんだよ。」

新八

「良いわけねーだろ！何の話をしてるんですか！？」

「いいか？良い男はなあ、見た目で相手に印象付けるもんじゃねえんだよ。中身で相手に印象付けるもんなんだよ。」

新八

「だから何の話をしてるんですか…」

「取り敢えず、ちょっと良い？」

ヒナギクが二人を止めようとするが…

「それなのに今の若い奴らときたら。やれワックスだの、やれ髪を染めるだの。表面しか飾らない印象に一体何の価値を見いだせと云うんだ！俺達の存在意義は髪なのか？違っただろう！」

新八

「銀さん、主旨がズレてます…何時から髪の話になったんですか…」

「あの…聞いている？」

ヒナギクの声はもはや届いていない。

「俺達が目指しているものはそんなもんじゃ無いはずだ!!
俺達が求めている魂ものは上辺だけ取り繕った仮面じゃ無い!
原点に還るんだ!
振り返って見てみる!

俺達は…

オレ達は…

ストレートヘアになりたいんだろっつがああ?」

新八

「違うわあああ?

それただのお前の願望じゃねーか!!自分の愚痴に散々セリフ使っ
て、そんな場合じゃ無いでしょ!

しかも何だよ、原点って!?

何で原点がストレートヘアなんだよ!?!」

「人は皆原点に帰ればストレートヘアなのさ…」

「……………正宗」

ヒナギクの頭に?マーク。

新八

「うっさい!お前の頭はどこまで帰っても天パーだろうが!」

「んだコラ、ダメガネ！てめーに天パーの苦しみが分かるのか！！」
新八と掴み合う銀時。

と、正宗を持ったヒナギクが二人に近づいて…

「話を…聞いてくれるカシラ？」

鬼がいた…

銀時・新八

「あの…すみませんでした…」

二人はボコボコになりながら正座している。

「

まったくもう…取り敢えず、志村君も泊まっていっていい？」

メガネ

「え？いいんですか？」

「ええ、志村君も行く所無いんですよ？」

そう言っつてヒナギクは出口に向かった。

「悪いな、迷惑かけて。」

銀時は申し訳なさそうに言う。

「まあ困った時はお互い様ね。じゃあ、私は晩御飯作って来るから、少しそこで待っててね？」

別世界の話は…その時間くから。」

ニッコリと微笑んでヒナギクは離れを出て行った。

新八

「…銀さん、女性ってああいう風に在るべきですよね…」

「まったくだ…新八君。俺達の周りの女キャラを見てると時々忘れそうになる…」

銀時が目を細めて天井を見上げる。

新八

「さっきは怖かったですけどね…」

「あれは俺達が悪い…」

二人とも身を震わせた。

新八

「どうやって知り合えたんですか？」

「あゝ、お前アレだよ。主人公だから。」

新八

「いや、アンタこの世界の主人公じゃ無いでしょ！」
「っーかこの世界ってどんな世界何だ？サンデーの漫画なんだろう？」

新八

「さあ、僕も分からないですね…それより、」
新八が喋りかけた途端、二人の前に光が現れた。

「え？」

「ん？」

(どうやら元気でやっているようだ…)

新八

「あ、貴方は…洞爺湖仙人!？」

「てめー、一昨日はよくも…」

一昨日キヤバクラで放っぽかれた銀時。

(ま、落ち着け…この世界がどういう世界か分かった。

『ハヤテのごとく』と言う世界だ。どうやらコメディ漫画のよう
だ…)

「(ハヤテって、ハヤテ?あいつがこの世界の主人公?)」
銀時が考え込んでいると…

(…では、もう時間がない。私にはまだ山のように仕事が…

「洞ちゃん!またご指名ありがとー?」

綾ちゃん、また指名しちゃった？

………と云う訳で去らばだ！武運を祈る！

銀時・新八

「どついう訳だああー！」

銀時と新八は酒ビンを投げつけた。

「あの野郎……」

銀時が拳を握りしめる。

新八

「まあまあ……とにかくコメディで良かったじゃないですか。」

一応僕らの得意分野じゃないですか！」

「まあ、推理ものとか、バトルもの、スポーツものじゃ無くて良かったけど……」

面倒臭そうに頭を搔く銀時。

新八

「それより、何で僕だけセリフの上に名前が付いてるんですか？」

「ああ、それはお前、アレだよ。作者はお前の行為を書くのが面倒臭いだよ。」

事もなしげに言う銀時。

新八

「ああ……成る程。………じゃねえだろ！そんな理由で納得出来るか！？」

勿論新八は食い下がる。

「お前なあ…考えてもみる。只でさえ新八のツツコミは字数をとるんだよ。だから作者がこれ以上新八についての字を書くのが面倒臭いんだよ。小説を見返してみる。お前の字数がいかにも多いかがよく分かるから。」

新八

「いや、そんな事言われても？」

「っ！か銀さんもセリフ長いですよ。明らかに僕が面倒がられている節がありますよね!？」

分かりました…検討します。

新八

「いや！検討じゃなくて上に付けるのを止めればいいでしょ?」

と、まあくだらないやり取りも飽きた所で

「ご飯出来たわよ。」

ヒナギクが呼びに来た。

腰を起こしす銀時。

「ああ。んじゃ行くか、新八。」

「ハイ。あ、直ってる…」

新八も立って銀時に続いた。

「……は？アマント？」

その後、ヒナギクに銀時達の世界を信じさせるのに、一時間を費やしたという。

第六訓 95%が眼鏡で3%が水、2%がゴミらしい(後書き)

後日談

銀時

「そういえば何で新八には初めて会った時敬語だったのに、俺は敬語じゃ無かったんだ？」

ヒナギク

「えっと、何となく？何か銀時は敬語じゃ無くても良い気がして…」

銀時

「オイ、まさかこの頭のせいじゃ無いだろうな？」

ヒナギク

「何でも頭のせいにするのは良くないわよ…」

銀時

「うるせー！人間って言うものはだなぁ、コンプレックスをバネにしてより高みを目指す…」

ヒナギク

「では、また次回」

銀時

「オイ！聞けえええ！！！」

第六・五訓 何があっても取り敢えず笑つとけ（前書き）

桂

「実はこの話は第六訓と七訓の間の話だ。作者が面倒がって省こうとしたが省くと話の繋がりが曖昧になりそうだから、省こうにも省けずに何かよく分からないこれまでの経緯を三人で話し合った回だ。正直、どうでも良い回なので飛ばしても構わんぞ（笑）」

新八

「いや、良いわけないじゃ無いですか。っーかアンタ今何処に居るんですか？」

桂

「今回俺と同じ苗字の上、剣術も達者で堅物キャラまで被っているヒナギク殿の存在に危惧している。（っーか早く出番来て。）」

銀時

「何一つ被ってねーから。だから安心してそのまま前書きから帰れ、二度と戻って来ないで三百円あげるから。」

桂

「何を言う！（怒）不肖桂小太郎、この戦乱の世から背を向けてすげすごと帰るものか！待っている、銀時。もうすぐお前達の元に…」

…」

銀時

「行くぜえ、ぱつつあん。」

新八

「はーい。」

桂

「と、言っ訳で！早く俺に出番を……………」

第六・五訓 何があっても取り敢えず笑つとけ

桂家

リビング

銀時と新八はテーブルに着いた。テーブルには料理が色とりどりに並べてある。

ヒナギクも向かい側に座って、

「じゃあ、食べましょうか。」

三人とも手を合わせる。

「いただきます！」

「…う、うう…」

ご飯を食べ始めてすぐに新八が声を漏らした。

「え？ちよつと、大丈夫？もしかして口に合わなかった？」

ただ事じゃない新八の様子に慌てて声をかけるヒナギク。

それに応えたのは銀時だった。

「いや…その逆だ…」銀時は苦笑して、新八の方に顔を向けると、

「ものずぐぐ、美味しいです…」

号泣していた…

「え…あ、ありがとう？でも、そんな泣かなくても…」

「すみません。向こうではここ数日、ずっと豆パンと卵かけご飯でしたから……感動しちゃって……」そう言っただけ卵焼きを口に運ぶ。

「た…卵焼きだ…これが卵焼きなんですよね！銀さん…」

「安心しろ新八。ここには暗黒物質は存在しない。」

それが万屋の理解力。

「まあ、喜んでもらって良かったわ…」
ひきつった笑みのヒナギク。

こうして何か変な方向から入った食事だったが、やっぱり食事は団らんの場合。

銀時とヒナギクからこっちであった事を聞いた新八。

「とんでも無いですね…そんな大きい屋敷なんて…見てみたいな」
にわかには信じられ無い様子の新八。

「明日見に行ってみたら？」

「なんかまた変な事に巻き込まれそうだな…」
ヒナギクの提案に溜め息の銀時。

「そういえば、お母さんが居ないな。」

銀時がリビングを見回す。

「仕事で今日は遅いのよ。」

ヒナギクの言葉に新八が気付いた

ように頭を下げた。

「何か申し訳ないですね、お母さんが不在の時に上がり込んで…」

「あ、大丈夫大丈夫？ちゃんと行って承してたから。」

「ありがとうございます。きっといいお母さんなんでしょうね。あ、すみません？会っても居ないのに勝手言っちゃって…」

「ええ、まあ優しい人よ。」

新八に笑顔で応えるヒナギク。

「……………」

銀時はその笑顔に一瞬影がさしたのを見逃さなかった。

そんなこんなで、食事も終わりに差し掛かった頃。

「それじゃ、別世界の事について教えてくれる？後こっちの世界に来る事になった経緯ももう一度お願い。」

ヒナギクは二人に向き直った。

「信じてくれるのか？」

「まあ、よく考えたら上から人が落ちてきた訳だし…まだ半信半疑
だけどね…」

銀時の問いに戸惑ったように笑う。

「じゃあ、僕から話させていただきますね。」

新八が姿勢を正して言う。

「ああ、頼まあ。」

説明が面倒な銀時は新八に任せる事にした。

「…では」

侍の国…

僕達の国がそう呼ばれていたのは今は昔の話…

二十年前…

突如宇宙から舞い降りた天人の台頭と廃刀令により、
侍は衰退の一途を辿っていた…

………

「……………えっと、突っ込んだら負けって遊び？」

「いや…全然そんな事無いんですけど……………」
信じられ無い様子のヒナギクに新八が言う。

「江戸…、天人…」
ヒナギクが考え込む。

「まあ、他の世界の話なんていきなり信じられ無いよな……………」

「まあそりゃ……………」
銀時と新八が困ったように顔を見合わせる。

「ん〜、少なくとも私の知ってる『江戸』とは、まったく違うわね……………」

「え？江戸を知ってるんですか!？」

「え、ええ…まあ。
でも貴方達の世界とはまるで違うわ。」

「詳しく教えて下さい!」
ヒナギクの思わぬ発言に身を乗り出す新八。

「……今の私達が住んでるこの東京におよそ400数年前に成立したのが徳川幕府。その幕府が置かれた政治の中心地が江戸。つまり首都ね。」

この時代は250数年続いた後、幕府が崩壊して終わりを告げた…
当時日本は鎖国体制でそれに業を煮やした外国アメリカが開国を強要。

戦力的にも日本を圧倒していたアメリカに対して幕府はやむなく開国を承諾。

でもこれを良しとしない『攘夷運動』が激化。この考えは幕府のも同じね。

この思想、幕府のガタガタの体制に危機感を覚えた改革派が倒幕を掲げて、いくたの戦争の後に幕府が崩壊し、時代が終わったの…」
すらすらと説明してゆくヒナギク。

彼女の話聞いていた新八は自分達とあまりに似た世界の話に驚きを隠せない。

「貴方達の世界と本当によく似てるけど、肝心な所が全く違うわね…
アマント？と言う存在が江戸に台頭している事や、幕府側が改革派を鎮圧した事ね。」

「そ、そうですね…桂さん達の世界の江戸で言うと幕府が滅んでいく訳ですから…」

新八も何とか理解しようと必死に思考を巡らせる。

「…ただ、決定的に違うのが発展速さね…」

貴方達の『江戸』には今の私達の世界と同じ、それ以上に発展して

いる事。私の知ってる江戸とは全く違う。テレビのある江戸時代なんて想像も出来ないわ……」

「じゃあ、その当時の江戸って……」

「貴方達のその『江戸』から200年前くらいの様子と違ってくて構わないんじゃないかしら？」

「……なるほど。それは信じてもらえ無いのも無理はありませんね……」
新八が納得したように頷く。

「(つて言うか僕達元の世界に戻れるのか?)」

……沈黙……

「心配いらねえよ……」

沈黙を破ったのは銀時だった。

「？」

「信じていれば必ず元に戻れるさ……」

「銀さん……」

新八は振り返って銀時を……

「いや、ゾフィは戻って来る！」

兄貴がやられて今はダメでも、信じていれば必ず立ち直る。

そしてまた皆がまた元通りに海賊団を……」

「そんな事だと思っただわああ？」新八が銀時の持っていたジャンプ

をもち取り叩きつけた！

「ごういう時くらいシリアスパートに便乗しろよお！頼むから！
もう台無しじゃ無いですか…」

銀時は頭を擦りながら顔を上げた。

「っ痛っつ…まあ、難しい説明云々は分からねえけど、要するに別世界なんだから手掛かり見つかるまでなんやかんやしてればいいんだろ…？」

「さっきの話合いを丸ごと無意味にしゃがったよコノヤロー？

…でも、どうするんですか？ 手掛かりなんてどうやって探せば…」

「お前コレ銀魂だよ？なんか適当にやっておけばその内流れで帰ってるよ…」

「オイ…それは銀魂の主人公にあるまじき発言だろ…」

新八と銀時のやり取りを見かねたヒナギクは話をまとめた。

「…取り敢えず二人が嘘を言ってるようにも思えないから、別世界の話は信じるとしましよう。」

「済まねえな、何か本当に色々…」

銀時はジャンプを閉じた。

「まあ、それはいいんだけど…貴方達、皆同時に飛ばされたんでしょ？どうして銀時と志村君が来た時間がバラバラだったのかしら？」

「……………アレ？」

疑問だけが増えてゆく……

桂家 離れ

銀時と新八は布団を並べて眠ろうとしている訳だが……

「銀さん……多分同じ事考えてますよね……？」

「ああ……時間のズレの事だろ？」二人は先程のヒナギクの些細な疑問に恐ろしさを隠せなかった。

「もし……もし、僕らより先に……」

「神楽がこの世界に来ていたら……」

「（大問題を起こすに違いない？）」「
二人とも気が気では無かった…」

「超お偉さんとかに何かやらかしてたり…」
「この世界の文化財とか壊しちゃったり…」

「（切腹？）」「」

翌日、二人とも寝不足だったと言っ…

第六・五訓 何があっても取り敢えず笑っとけ（後書き）

えっと、すみません。

本当に。

何か本当によく分からない感じになってしまいました…

まあ、これまでの確認の話し合いみたいな感じだと思ってくれれば。

かなりの駄文で申し訳ございません！

第七訓 平らな道が続くとは限らない 前編（前書き）

今回の前編、後編で取り敢えず一部が終わる感じですよ。

まあ、プロローグみたいなのが一段落吐くと思ってくれれば。

まあこの先もぐだぐだやっけて行くのでよろしくお願いします。

第七訓 平らな道が続くとは限らない 前編

翌朝

桂家 離れ

「…えっと、大丈夫？」

朝食が出来たので二人を起こしに行ったヒナギクだったが、

「……………」

目の下に大きな隈がある二人は明らかに寝不足である。

「取り敢えず朝食出来たから。」

私は朝練があるからもう学校に行くわ。鍵は渡してあるわよね？」

「……………ああ」

「……………はい」

ときばきと話すヒナギクに未だに上の空の二人。

「もう…しゃきつとする！じゃあ私は学校行くからね？」

パシパシと二人の背中を叩いて、ヒナギクは離れを出て行った。

「……………行ってらっしゃい……………」

リビング

「あら？貴方が新八君ね？」

二人がノロノロとリビングに行くヒナギクのお義母さんが…

「ああ、初めまして。志村新八と言います。えっと…」

「私はヒナちゃんのお母さんよ」

そう言っただけ微笑んだ…が、

「え？アレ？お母さん…ですよね？」

銀時が目を白黒させて言った。

それもそのはず。

髪型はカールがかかり、顔の周りからは何かキラキラと輝いて見える。

要するにもものすごく若返った感じ。

「なんか、ものすごく若返りましたね…」

「やだ、銀ちゃん。おだてても何も出ないわよ
実は、美容院に行ってきたのよ。」

上機嫌そうにひらひらと手を振るヒナ母。

「美容院!？」

「そう。最近の美容院は凄いのよ！」

「ならこの頭もストレートに出来るかも…」

「出来るかもね」

「マジでございますですか!?!」
思わず身を乗り出しす銀時。

「でもダメよ それは銀ちゃんのチャームポイントなんだから。」
ビシッと銀時の頭を指して言う。

「お母さん!?!何度言ったら分かるの? コレはウィークポイントなの、弱点なの、欠点なの。」

「じゃあ、私もこれから仕事だから。」

「お母さん!?!聞こえてる? 俺の気持ち届いてる? 口説き文句とかじゃ無くて。」

「後ヨロシクね」

「オイイイイイ!」

そう言ってヒナ母は出て行った。

「はあ…取り敢えず朝食をいただくこうぜ、ぱっつあん。」
溜め息を吐きながらテーブルに向かう銀時だったが、

ピンポン…

「あ、はい。今出ます！」

新八が玄関に向かう。

「すみません……あれ？」

「えっと…？」

新八が扉を開けると…メイドの格好をした女の人が入っていた。

「……えっと、ヒナギクさんはいらっしやいますか？」

女の人が二人を見て不思議そうに言った。

「ああ、桂さんなら今学校だそうです。」

「あ、そうでしたか…えっと、貴方達は？」

「ああ、えっと…」

新八は軽くこれまでの事を話した。別世界の事は勿論無しで。

「そうなんですか…そんな事が。」

「あの…桂さんに伝言なら承りましょうか？」新八がテーブルにあつた紙とペンを取った。

「いえ？大丈夫です。それよりお二人は、昨日黄色い髪でツインテ

「ルの小さな女の子を見ませんでしたか？」

「いえ、見てませんね…と言うより僕は昨日この地域？に来たばかりなので、何とも…。銀さんは？」

「いや、見てねえけど…」

銀時は既に朝食を食べていた。

「そうですか…」

女の人は困ったように肩を落とす。

「あの！もしよろしかったら話を聞きましょうか？実は僕ら万屋を営んでまして…」

仕事の匂いにピンと来たのか銀時がいち早く動いた。

「万屋…？さかた、ぎんとき？」女の人は銀時の差し出した名刺を見る。

「ええ、頼まれれば何でもやりますよ。何でも屋と思ってくれれば。」

「本当によろしいんですか？」

「まあ、取り敢えず中でお話だけでも聞かせて下さい。」
新八も久しぶりの仕事に嬉しさが隠せない。

「では…お言葉に甘えて。」

こうして女の人の話を聞く事になった。

「私はマリアと言います。」

「僕は志村新八と言います。で、こつちが……」

「銀時さんですね？」

マリアが名刺を見ながら言う。

「ええ。それでは、事情を話して下さい。」

流石に銀時。金と仕事の事となると口調も目つきも違う。

まあ仕事は金な訳だが。

「ええ、私は三千院家のメイドなのですが、実は三千院家のお嬢様であるナギお嬢様が誘拐されたみたい……」

ガタッ！！

突然銀時と新八が立ち上がって、隣の部屋に入った。

「ぎ、銀さん……三千院家って、昨日言ってたあの大きい屋敷の……」

「あ、あ、ああ……とてつもないお金持ちだ……」

「ど、どうするんですか？銀さん…」

「お、お、落ち着け新八？この依頼、も、もし成功すれば大金が手に入る？しかし失敗すれば切腹もんだ！」

「アンタが落ち着いて下さい…
どんだけ金欲しいんですか…」

「あゝ」

リビングからマリアの音がする。

「ハイハイ、すみませーん！」

リビングに戻りササツと椅子に座り直す銀時と新八。

「あの、どうかしたんですか？」

「いえ、何でも…それより誘拐の事について、詳しく話していただけますか？」

新八が促す。

「あ、はい。三千院ナギと言う名前の女の子なんですが、昨日の夕方…」

マリアが経緯を話し始めた…

三千院家

「じゃあね、ナギ。」

「ああ、伊澄も気をつけてな。迷子になるなよ？」
「マリアが伊澄を玄関まで送ってゆく。」

「ハヤテく！ハヤテく？」

「ハヤテ君なら一応明日帰って来る事になってるでしょう？」
「マリアが伊澄を送って戻って来た。」

「でも、昼間に伊澄を連れて来たって伊澄が……」

「まだナギが恥ずかしいだろうから明日帰ってくるって言って、
また出て行きましたよ？」

「む……まあ。」

「でも、ハヤテ、大丈夫かな……」
「ナギが不安そうに窓を覗く。」

「なんか渡した100万円を早速失ってしまったそうですよ。さっきそれを謝りに来たついでに伊澄さんをお連れしたようですから。」

「……………ハヤテらしいな。でもだったらどうやって昨日過ごしたんだろう?」

「親切な方に助けて貰ったとか…」

「親切か……………よし、マリア!今日の夕飯の買い物は私が行こう!」
ピシッとナギが宣言する。

「え…いきなりどうしたんですか?」

「何、たまには私が買い物に行こうと思ってな…勿論、マリアもSPもついて来るなよ?」

「あ……………」
ナギが一度言い出したら聞かない性格なのを知ってるマリアはほとんど困った顔。

「では!行ってくるぞ!」

「メモの通りに、ですよ?」

「うむ。分かっている。」

そう言っただギは扉から出て行った…

「では、お願いしますよ？皆さん。」

マリアは不安100%な様子で三千院家SP達に声をかけた。

「申し訳ございません！マリアさん！」

ナギが買い物に出掛けてから二時間。流石に心配になったマリアは屋敷を出ようとした所で走ってきたSPの一人に出くわした。

「どうしたのですか！？」

「お嬢様が誘拐されました！」

案の定と言つべきか。
マリアは頭を抱えた。

「それで、誘拐犯の様子は？」

「はい。ナギお嬢様と同じ歳位の女の子でチャイナ服を着ていて、傘を持っていました。それともものすごく大きな犬に乗っております。」

話を聞いたマリアはふつと肩の力を抜いた。

「あの…どういう経緯で連れさられたのですか？」

「我々がそろそろ時間だと思ひましてナギお嬢様に近づいた所、ナギお嬢様に勘づかれまして、お逃げになられました。公園で発見したのですが、そこを連れさられました…」

「ああ…多分それは、」

「もう一度探して参ります！」

マリアが言い終わらない内にSPは駆けて行った…

「何だかややこしい事になりましたね…」

マリアは溜め息を吐いた。

.....

「……と言いつ訳なんです。ですが多分……あの？どうかされまし
たか？」

「.....」

銀時と新八は顔を下に向けたまま黙ったきり……

「す、すみません？ちよつとそこでお待ち下さい！」
声が上がらずにまくっている新八。

「……はい？」

ダダダダダッ

ものすごい速度で奥の部屋に入る二人。

「（何やってんだあああ！？あいつはあああ！！）」

取り敢えず叫べないので心で共鳴。

「ど、ど、どーするんですか、銀さん！？

どうすればいいんですか！？

コレ、もう切腹もんですよ！！」

「お、落ち着け、新八！落ち着いてタイムマシンを探せ！」
ガタガタと引き出しを開ける銀時。

「お前が落ち着けええ！！

ヤバい！！何かやらかしてると思ったら…誘拐なんて！」

「大丈夫だ、新八！取り敢えずこの場だけでもやり過ぎそう。」

「で、でもどうやって！？」

「任せろ、秘策がある…！」

そう言つと銀時はスツと指を頭の高さまで上げて……

「…次回へ続く！」

「本当にこの場だけじゃねえかアアアア？」

第七訓 平らな道が続くとは限らない 前編（後書き）

教えて！銀八先生！！

銀八

「あゝ、不本意ながらこの小説に転勤して来た、坂田銀八だ…
まあ、何だ…質問をくれれば適当に答えるんでよろしく。」

新八

「先生！きちんとやらないと苦情が来るので、ちゃんと答えて下さい。」

銀八

「もうこんな感じでいいだろ…
面倒臭せーよ…どうせ後書きだし誰も見てねえよ…」

新八

「最低なんですけど、あの人…
責務丸々放り出そうとしてますよ…」

ヒナギク

「はあ…取り敢えず質問が来たら銀八先生が答えてくれるので、
気になった事はどんどん送って下さいね？」

銀八

「オイオイ、ちょっと。銀さんにも分からない事あるからね？
なるべく大人の事情が分かっている質問が好ましい…」

新八

「何だよ、大人の事情って…」

銀八

「あと、『どうして銀さんは天パーなの?』とか『結局髪型直す気無いの?』とかそういう質問は答えられないから。そういうのは原作者に聞きなさい。それから…」

ヒナギク

「何でも聞いて下さいねー。」

第八訓 何はともあれ結果良ければ全てよし…って前回とタイトル違くな？

遅くなって申し訳ありません！

その分、長めにしたので。

第八訓 何はともあれ結果良ければ全てよし…って前回とタイトル違くな？

桂家 リビング

ダダダダッ

物凄く不自然な様子でリビングに戻る二人。

「えっと、大丈夫ですか？何か凄い汗ですけど…」

「いやー！今日も暑いですねー！！オイ、新八！エアコン入れて差し上げる！」

「ハイ！只今！」

マリアの言う通り大量の汗をかいてる二人。

「えっと…今は冬ですよ？」

「あ、そうでした！」

何かすみませんね！ワタワタしちゃって。」

乾いた笑いを浮かべる銀時。

新八に手招きしてテーブルに着かせる。

「あの、話を戻しても宜しいですか？」

「は、ハイ！」

ビシッと背筋を伸ばす銀時と新八。

「誘拐の件なんですが、その、お願い出来ますでしょうか？お金なら…」

「いや、大丈夫です！お代なんて滅相も無い！」

「へ？で、でも…」

全力で首を振る新八に戸惑うマリア。

「本当に大丈夫ですから！僕らお金の為だけに仕事とかしないですから！」

「でもそんな訳には…」

「無償でやります！って言うかやらせて頂きます！」

「だから、警察だけは勘弁して下さい！」
もう土下座状態の二人。

「……警察？」

うつかり口を滑らせる新八。

「…あ、」

「バカ……」

さっきにも増して大量の汗が二人を伝う。

「…あの、詳しく話していただけますか？」

取り敢えず表情だけは笑顔のマリア。

表情だけは…

「……………ハイ」

「…なるほど。お二人のお連れでしたか。」

「す、す、すいませんでした!!」
新八が土下座を更に深くする。

「ホント見つけたらしばき回しますんで!勘弁して下さい!
僕らも全力で探しますんで!」
銀時もひたすら頭を下げる。

「取り敢えず、頭を上げて下さい?」
マリアが困ったように二人に促す。

「…はい……………」

三人はまたテーブルに座り直す。

「取り敢えず落ち着いて下さい。おそらくその女の子は勘違いした
んだと思うんです。」

「へ？」

銀時と新八は顔を上げた。

「どついう事ですか？」

新八が恐る恐る尋ねる。

「もし、貴方達が小さな女の子の居た所に黒い服の男の人達がやって来て、『彼女を渡せ』と言って来たらどつ思いますか？」

「え？それは……」

「……あの馬鹿。」

よく分かっている新八に対して頭を掻く銀時。

「誘拐されそうって思いませんか？」

「あ……」

マリアの結論に思わず声を上げる新八。

「だったら！」

嬉しそうに言う新八だが、

「まあ、可能性の範囲ですけど……もし、本当に誘拐が目的なら大変ですが……」

ガタッ

「新八！！とにかく俺は外を回って来る！お前は家でヒナギクをお客さんと待ってる！」

そう言うが早いか銀時は家を飛び出した。

「え、ちょっと！銀さん！」

新八が慌てて呼び止めるがもう銀時は見えなくなっていた。

「えっと、ヒナギクさんを待ちませんか？確か今日は午前授業でしたから。」

「でもマリアさんは探さなくてよろしいんですか？」

「今はSPの方々が頑張ってくれていますから。」

「そ、そうですね……」

そう言う訳で家で待機する事になった新八とマリア。

一方、銀時は…

「つても、こちとらこの辺の地理は全くだしな…」
頭を掻きながら走り回っていた。

「神楽ー！！」とにかく何も起こって無い事を祈るばかりの銀時だった。

く 負け犬公園 く

「はあ」

公園内に溜め息を吐く少女が一人。
トボトボと歩いている。

金髪のツインテールに少し不機嫌そうな顔。

三千院ナギ、その人である。

「ん…？」

立ち止まり枯れた木を見上げるナギ。

「…」

ナギは黙って目を閉じた。

昨日。正確に言うと、買い物が済んだ後の事。

.....

買い物自体は何とか無事に済んだのでそれはまた後日談としよう。

「うーむ、さっきからどうも視線を感じるな…」

買い物が済んで、少々重たい袋を持ちながら自分の家に向かうナギ。時々視線を感じるのか歩いては止まり、キョロキョロと辺りを見回す。

「…別に怖くなんか無いけどマリアが心配だな、もう少し急ごう。」
別に誰に言う訳でも無いが、急に不安になり、家路へ足を早めるナギ。

…と、一人の男性とすれ違った。

「…お前！」

「ハイ？」

ナギはその男を指差して言った。

「お前、三千院家SP・0085だな！」

「な、なにを言っているんですか！？ナギお嬢様！」

「ナギお嬢様？」

「……いや、これは！」

「なるほどな…さっきから視線が気になると思っていたら、こう言う事か。」

そう言うとナギは男が付けていたマイクを取って、

「良いか！これ以上私の後をつければ全員クビにするぞ！」
高らかにそう宣言する。

「ちょっとお待ち下さい！お嬢様！」

SPと思われる男達が塀、道の角、止めてあった車の中、あまつさ

えマンホールの中から飛び出して来た。

「二言は無い！分かったな？」

「し、しかし……」

「……分かったな？」

「……………ハイ」

渋々頷いたSP達。

まったく、とか何とかぶつくさと文句を言いながらナギは立ち去った。

「しかし、本当に大丈夫なのだろうか？」
SPの一人が同じSP達に聞く。

「追うに決まってるだろう。」

「しかし、全員クビにすると……」

「馬鹿！お前、この事がマリア様に知られたらどうなる！」

「……………」

皆が思い思いに想像をする。

「マズいな……」

「確かに……」

「クビより怖い……」

と、言う訳で

「バレるなよ……」

S P 達は更に慎重につける事になった。

「まったく……」

まだ文句を言いながら着々と足取りを進めて行く。

そうして負け犬公園までやって来た。

特に何も考えずにベンチの前を通り過ぎる……と、

ぐ

「……ん？」

何とも間抜け音が右の方向から聞こえた。

「う〜」

ベンチの上。

チャイナ服の少女がお腹を抱えて唸っていた。

「えっと……」

ナギは恐る恐るその少女に近づいてゆく。

「……むーご飯の匂いー！」

ナギの買い物袋に気が付いたのか少女がガバリッと起き上がった。

「……少し食べるか？」

そう言って袋の中の食べ物少女に渡した。

「本当アルかー！」

「って、もう食べてるじゃないか……」

間

「しご馳走様ー！」

「…ああ？」

ナギは少女の食べっぷりに若干引いていた。

「そんなにお腹がすいていたのか？」

「と言うか、さっき目が覚めたアル。お腹がペコペコだったネ。」

「こんな所で寝ていたのか？」

「気が付いたらここで寝てたアル。」

「ふーん、私はナギだ。三千院ナギ。」ナギは自分を指して言う。

「神楽アル。食べ物をありがとう。この恩は忘れないネ。」

まだ口をもぐもぐとさせて言う神楽。

「居たぞ！あそこだ！」

突然、黒服の男達が数人やって来た。

「む…！お前ら。」

ナギが溜め息を吐く。

「ナギ！こつちネ！」

「え？」

神楽がナギの手を引いて走り出した。

「待て！」

黒服の男達が、（まあSPだが）二人に駆け寄るが、

ダンダンダン!!

神楽がいとも容易く吹き飛ばしてゆく。

「定晴!」

神楽が叫ぶと、ベンチの後ろの茂みから普通ではあり得ない大きさの犬が飛び出して来た。

「何だあの犬は!?!」

SP達が驚いて後ずさる。

「ナギ!今アル!」

神楽がナギの手を引いて定晴に乗っかる。

「待て、神楽!彼等は…」

「分かってるアル。あいつらは悪い奴ネ。テレビで見た悪党と同じ格好アル!」

「(…………ま、いつか)」

二人を乗せた定晴は倒れているSPを残して去って行った。

「……う、マリア様に報告を……」

夜

「わあー、綺麗だな！」

「まるで宝石のようアルな！」

「ワン！」

二人を乗せた定晴はビルからビルへ飛びうつっていた。

夜の街の景色を定晴の上から望む。

街の灯りがとても綺麗に散りばめられている。

「こんな綺麗な景色は初めてだな……」

「そうアルな…」

因みにこんな大きい犬が上空を駆けていても、誰も気づいていないと言っ事で。

その辺は大人の事情で突っ込ま無いで頂きたい…

「ありがとナ…ナギ。」

「…え？」

空中散歩中、神楽がナギにお礼を言った。

「食べ物的事…」

少し済まなさそうに言う神楽。

「まあ…気にするな。」

それより、こちらこそ済まないな、こんな事に…」

「それこそ気にする事ないネ。」

食べ物之恩があるし、何より私達、もう友達アル。」

「友達？」

「そうアル！友達ネ！」

「友達…」

神楽がニッコリと笑ってナギが少し恥ずかしそうに俯いた。

そのまま暫く、定晴はビルを駆けた。

大分夜もふけた頃、二人と一匹は負け犬公園に戻って来た。

神楽は既に眠っていたナギを抱えて定晴の体にくるまる形で寄りかかる。

そうして神楽も目を閉じた…

「……ん？」

薄く白い光が目飛び込んで来た。

気が付けば隣には神楽、周りには白いフワフワとした毛布のような……定晴だった。

「……ん」

今までの状況を冷静に整理する。そして、隣の神楽を見る。

「……」

(友達アル！)

神楽の言葉が頭に浮かぶ。

「友達か……」

二人(一人と一匹)を起こさないようにそつと腰を浮かせる。

「友達なら……これ以上迷惑も掛けられんな。」
そつして静かにその場を離れた。

……
と言つ訳で現在に至るのだが

「……………」
ナギは目を開けると、また歩き始めた。
とにかく出口に向かって進んでゆくと、

「はあ……」
ナギと同じように木を見上げて溜め息を吐く男が一人、ベンチに座
っていた。

銀髪の天然パーマに死んだ魚のような目、やたら目を引く服装。

銀時であった。

「……………」
通り過ぎても良かったのだが、何故か話しかけてみたくなった。

取り敢えず銀髪に近づいてゆくナギ。

「なあ？」

「ん？」

重たい声と共に顔が向けられる。

「どうしてそんな溜め息を吐いているんだ？」

「……………まあ色々な……………」

銀時は少し躊躇ったように答えた。

「頭も大分くたびれてるみたいだ…」

「そうだな…いつもはサラッサラヘラーなんだけどピンチになると醜いクルクルになるんだよ。」

「地毛だろ…」

フツと微笑するナギ。

「オイ、お前。分かってて言ったな。そうやって俺を踊らせて楽しんでただろ。」

「フフツ。お前面白い奴だな…」ナギはそう言ってベンチから立ち上がった。

「お前とはまた会いそうな気がするな…」

「オイ、お前って、お前目上の人には敬語を使うのが礼儀だろ。」
お前がそれを言うか…

「む、そうか…不思議と同じ学年くらいに思えてな…」

「オイオイ、いくら何でもそれは無いだろ。中学生に間違えられたことは無いぞ？」

「…オイ？私は高校生だぞ…」

「……あー分かる分かる。早く高校生になりたい気持ちはよく分かる。なんたって中学生ついたら一番馬鹿な時期だからな。周りの

しょうもない男子共にうんざりしてるんだろ？でももう少し我慢……」

「高校生だってんだろが……！」

「ぐぼべ！？」

ナギの蹴りがもろに に入った。

「\$%&@」

() には自分が一番蹴られたら痛いと思う所を入れよう。()

「まったく!!」

ナギは怒りながら去って行ってしまった。

「痛つつつ……」涙目になりながらゆっくりと起き上がる銀時。
復活の早さは銀魂の賜。

「そつえば神楽達の事、聞いておけば良かったな……、！」
銀時はマリアの言葉を思い出した。

マリア

「黄色い髪でツインテールの小さな女の子を見ませんでしたか？」

「黄色……ツイン……チビ。」

……

「あああああ！！！」

てな訳で、

銀時もナギの後を追うことになった。

一方ナギは…

「まったく！！早起きはろくな事が無いぞ！！」
怒りながら歩いていた。

公園も出口に差しかけた所で、

「お嬢様！ここにいらっしやいましたか！」

「ん？」

黒服の男二人がナギに近づいて来た。

「三千院家SPの者ですよ。」

「さあ、屋敷にお戻りになりましょう。」

そう言ってナギに手を伸ばした。

「お前達、誘拐だな？」

「いや？我々は三千院家の…。」

「SPの顔は全て覚えているが、お前達のような奴はいない。新しく入ったと言う情報も無い。」

そうなのだ。何を隠そう、この三千院ナギは自分の屋敷にいる使用

人、SPの顔は全て覚えているのである。

「ちっ！バレちゃ仕方ねえ！捕まえるぞ！」

「おう！」

逃げようとするナギの前に立ちはだかる二人。

「くっ…！」

「さあ、大人しくしな…」

「一旦眠らせておくか…」

男の一人がスタンガンを取り出した。

「これで少し大人しくしてろよ…」

「！？」

ナギは思わず目を閉じた……

「…ぐぼー！」

「…げぼっ」

おそらく男達の呻き声。

「……え？」

ゆっくりと目を開けると……

「…………！？お前！」

目の前に銀髪の男が立っていた。ってか銀時だった。

「こいつら、お前所の人間じゃ無いよな？」

木刀を腰にしまつとナギの方を振り返る。

「…………お前」

「まあ、取り敢えずこいつらを……」

銀時は倒れている二人を引っ張って木に吊るす。

「こんな感じだな……」

ところで、お前さんと同じ位のチャイナ……？」

神楽の事を聞こうとナギを振り返ると……

「…………アレ？」

あるべきはずのナギの姿が無い。

「んー！」

今の男達の仲間であろう違う二人がナギを車に押し込めて……

「って早！？俺の意味は？」

「んー！」

ナギを乗せたまま車は去って行ってしまった。

「……参ったな……」

「銀さん!!」

「…お前!」

突然、声と共に新八が駆け寄って来た。

「どうですか?見つかりましたか?」

「どうですか?…お前、家の方はどうしたんだ?」

「ヒナギクさんは事情をSPの方から聞いたらしくて、早退して来たみたいです。後、三千院家の執事の人も一緒でした。今は三人で動いていると思います。」

「…そうか」

銀時の脳裏にハヤテの顔が浮かんだ。

「それより銀さん!三千院のお嬢様は?それと神楽ちゃんは?」

「ああ!そうだった。実はかくかくしかじかで……」

「ええ!?!誘拐って、マジですか!?!」

「ああ…マジもマジ。大マジ。」

取り敢えず俺は神楽を探してくるから、お前はそこに吊るしてある奴等の持ち物で何処へ向かってるか調べる。

ここに合流な…」

「ハイ！」

銀時は先程ナギが歩いてきた方向へ、新八は二人が吊るしてある木に近づいた。

「まったく…こんな所で呑気そうに寝やがって。」

神楽は公園を暫く行った先で眠っていた。定晴が何よりの目印になった訳だが、

「オイ、起きろ馬鹿チャイナ！」

「オイ………」

一向に起きる気配が無い。

銀時は何故か持っていた酢昆布を神楽の前に出して、

「ほーら、酢昆布食べちゃっぞ〜」

一枚かじろつと…

「酢昆布は渡さないアル!!!」

「ぐほべ!？」

アッパーが綺麗に決まった。

「……アレ？銀ちゃん？」

「ようやく起きたか……」

目を擦りながらのっそりと起き上がる神楽。
そして周りをキョロキョロと見て……

「……ナギ？ナギは何処アルか？」

「クウーン……」

定晴も起きたようだった。

「はぁ……何かもう一から説明すんの面倒だな……」

銀時は頭を掻きながら、

「とにかく来い。事情はぱっつあんの所に行きながら話す。」

「……?」

取り敢えず二人と一匹は新八の所へ向かった。

「誘拐！？本当アルか！？」

神楽の大きな声はあまり近く無い距離でも新八の耳に届いた。

「…神楽ちゃん！良かった、見つかったんですね！」

新八の元にやって来た二人に声をかける。

「誘拐ってどういう事アルか！？まさか昨日の奴等が？」

「それ違うから。昨日お前がやつつけたのはそのお嬢様の護衛の人。」

神楽の頭を叩く銀時。

「でも良かった！これで神楽ちゃんは誘拐した事にはならないですね。」

「どつという事アルか？なんで…」

「あゝ、もう面倒だ…新八、頼む。」

「え？あ、ハイ。」

あのね神楽ちゃん…」

新八が簡単に今の状況を神楽に説明した…

「失礼しちゃうアル！私がそんな事するはず無いネ。銀ちゃん達だつて日頃の私の生活見てるでしょ？」

「日頃のお前だからだよ。」
もう一度頭を叩く。

「ナギの奴、どうして何も言ってくれないアルか…友達なら…」

「友達だからこそじゃないかな？きつと神楽ちゃんに迷惑かけたく無かったんだよ…」

新八が神楽を慰めるように、

「お前本当に普通の事しか言えないアルな…だから新八は新八ネ。」

「神楽ちゃん？違うでしょ？ここはそういう流れじゃ…」

「確かに、今のは何か漫画の主人公っぽいセリフだな…新八が使った良いキャパシテイを越えてるな…」

「そんな事無いアル！新八にはこれくらい地味なセリフがお似合いネ。」

「てめー等、いい加減にして下さいよ？

つてか馬鹿やつてる暇なんて無いんですつてば！」

いつもの感じにグダグダになりそうな所で新八が流れを止めた。

「つと、そうだったな。」

新八、何か分かったか？」

「はい。二人のポケットの中から計画表が出てきました。
ご丁寧にメンバーの名前まで…」

四人書いてありますから、銀さんが見た二人は仲間と見て間違い無いと思います。」

新八が広げた紙には行き先が羽田空港と書かれていた。

「空港？つて事は飛行機で逃亡か？」

「それはマズイですね。飛行機に乗られたんじゃどうしようも無いですよ！それ以前に食い止めないと…」

「大丈夫アル！いざとなったら飛行機ごと撃ち落とせばいいネ！」

「……………」

「オイ、新八。絶対にその前に食い止めるぞ…」

「分かってます…」

もしもの事を考えるとぞつとする二人だった…

とにかく三人は公園を出ようと出口に向かった。

「ところで銀さん、この羽田って場所分かるんですか？」

「さあ？知らん。」

「いや、知らんって…」

公園の前でしどろもどろしているよ…

「銀時！」

「銀さん！」

ヒナギクとハヤテが銀時達の所に駆け寄って来た。

「桂さん、綾崎さん、丁度良かった。えっとマリアさんは……」

「ああ、マリアさんは反対方向を探しています。それより……？」
ハヤテが新八の持っていた紙を指差す。

「ああ、実はこれ……」

新八はヒナギクとハヤテに紙を渡した。

「計画表……ですかね？」

「だとしたらよっぽど間抜けな誘拐犯ね……こんなもの、捕まえて下さいって言うてるようなものじゃない……」

紙を見た二人は羽田空港と言っ言葉に目を付けた。

「羽田……」

「マズイわね……急がないと逃げられる……」

ヒナギクは急いで携帯を取り出すと電話をかけた。

「場所は分かるんですね？」

新八が二人に問いかける。

「「ええ」」

二人とも頷いた。

「だったら、今すぐ助けに行くアル！」

「……あの？そちらの方は？」

神楽の存在に気付いたハヤテが不思議そうに神楽を見る。

「もしかして…向こうでの銀時達の…」

「ああ、まあそうだな…」

ヒナギクが皆まで言う前に銀時が答えた。

「私は神楽アル！」

「私は桂ヒナギク、ヒナギクでいいわ。」

「僕は綾崎ハヤテです。三千院家の執事をやっています。簡単に自己紹介を済ます三人。」

「もしかして、この二人が迷惑かけたアルか？」
神楽は銀時と新八を指して…

「「迷惑かけてんのはおめーだよ。」」
パシッと神楽の頭を叩く二人。

「とにかく、今は一刻も早く奴等を追いましょ。」新八が紙をし

まい込んだ。
するとヒナギクが、

「今、タクシーを呼んだからそれで最悪、羽田まで行きましょう。マリアさんも方角的には同じだから途中で見つかれば一緒に。」

「でしたら僕は自転車でいきます。この待機時間で少しでも距離が縮まればいいですし……」

ハヤテは公園に何故か立て掛けてあったMTBに近づいて言った。

「いやいや？無茶ですよ、いくら何でもそれは！」

至極当然だと言わんばかりに新八が否定するが、

「そうね…ハヤテ君なら途中で追いつくかも知れないわね。」

「オイオイ…まさか本気で言ってるんじゃない？」

「ハヤテ君、銀時も乗せて行ける？彼もいた方が良くと思うわ。」

「ハイ、一人くらいなら全然余裕です。」

「オイ…ちょっと聞いてる？」

銀時を挟んでドンドン話を進めていく二人。

「銀ちゃん…ナギの事、頼むヨ。せっかく友達になったネ。」
俯く神楽。

「（…二の子）」

ヒナギクはうっすらと笑みを浮かべる。

「……ったく。分かったよ……
オイ、ハヤテ。追いつけるのか？」

「ハイ！任せて下さい！」

「……お前らもすぐに追いつけよ。」
そう言つて銀時は自転車の後ろに股がった。

「行きますよ…銀さん。」

刹那……三人の前から自転車と二人は消えていた。

「……マジですか？」
新八は啞然としか出来ない。

「本当…ハヤテ君つて凄いわよね…」お約束とはよく言ったもの。

一方…

ドドドドドドドドドド？

およそ自転車とは思えないスピード（80km以上）で銀時を乗せた自転車は爆走していた訳だが…

「ち、ちよつと？ちよつと待つてハヤテ君？

甘かった！俺の認識が甘かった！だから降ろしてくれ、マジ頼むから！！」

「ダメです！今更止まったら逆に危ないですから！我慢して下さい！」

「その逆の逆に危ないわあ！ってアレ？逆の逆だから表……じゃねえ！とにかく今既に危ない！」

「もう少し飛ばしますよ！」

「ぎゃあああ？」

銀時の叫びがこだました…

「とにかく、これに乗ってハヤテ君達を追いかけましょう。」

タクシーが公園前に着いたのは銀時達が居なくなってから五分くらいしてからだった。

「いや！二人はそれで行ってくれヨ！」

「え？でも……」

「定晴！」

突然、何処に居たのか隣の林から定晴が姿を現した。

「……………えっと、何ですか、これは？」

「ああ……家のペットですよ……」

新八は啞然と定晴を見上げるヒナギクに説明した。

「それじゃ、私も銀ちゃん達を追うネ！」

「ちよつと！場所分かるの、神楽ちゃん！」新八が止めるも、既に神楽は定晴に乗り走り去った。

「……………取り敢えず、私達も追いましょうか。」

「……そうですね。」
タクシーで後を追う二人だった。

「先輩、上手く行きましたね……」

「ああ……あの馬鹿共も役にはたつたな……」

「口を割られやしませんかね？」

「あいつらもそこまで馬鹿じゃあ無いんだ。目的地を割られても、時既に遅しだ……」

不敵に笑うのは赤い長い髪の男。後部座席には茶髪の男。隣には気を失っているのか横になっているナギが……

「ん、ん」

「ん？先輩。このお嬢様、目を覚ましそうですよ？」

「ほっておけ。」

「でも羽田で騒がれたら面倒ですよ…？」

「羽田前でまた黙らせれば良いだろ。」

「まあ、そうですね。」

「お前達…何が目的なんだ？」
むっくりとナギが体を起こした。

「おやおや、ようやくお目覚めですか？」
茶髪がせせら笑うように言った。

「安心しろ、大人しくしてれば手荒な真似はしない。」

「……だ、そうですよ？」
赤い髪は二人に背を向けながら言う。

「お前らは馬鹿か？こんな事してもすぐに捕まえるぞ？」

「それが捕まらないんですよ。ねえ、先輩？」

「フン。」

怪しげに笑う茶髪と無愛想な赤い髪。

「捕まらない？お前ら馬鹿だろう。こんな堂々と真っ昼間に…
第一、段取りが悪すぎる。」

「あらら…ダメ出しされちゃった。」

「随分と余裕だな…」

「私は誘拐した奴等全てにダメ出しをしている。」

「やっぱり眠らせた方が良くんじゃないですか？」

「……………」

三人を乗せた車は高速を出て大田区に着いていた。

「…それにハヤテも来てくれる。」

「ハヤテ…ああ、執事ですか。」

「オイオイ、何を馬鹿な…」

赤い髪が言い…

「せんぱーい。後ろから物凄い勢いで自転車が突っ込んで来ますよ。」

「な!?!」

「ハヤテ!」

「ハヤテ!もう少し近づけるか?」

「ハイ!」

ハヤテは更に加速する…

「!?!」

車の窓からナギが何やら叫んでいるのが見えた。

「銀さん!今です!」

「よつと!」

銀時はなんとハヤテのこぐ自転車から車に飛びうつった。
そして、

「お邪魔しまーす!」

助手席に足からガラスを割って飛び込んだ。

「な！？何者だ、てめえ！」

隣の赤髪はハンドルを握ったままで動けない。

銀時はすぐに後部座席にいるナギを見つけた。

「よお。」

「お前！どうして……」

「説明は後だ！とにかく……」

そう言っつて銀時はナギを抱えてると、

バン？

ドアを蹴破って上にする。

「比呂！てめえ、何で止めなかった……！」

赤髪は茶髪に怒鳴る。

「先輩、怒ったて事態は変わりません！今僕らに出来る事をやりましょう……！」

「てめえが出来る事をやれええ……もう良い！俺が上に行く！
運転変われ……！」

「へーい。」

赤髪は素早く後部座席に行くとお上に上る。

「アリ？そついや俺、未成年じゃん……」

「ハヤテ！頼む！」

銀時はナギを放った。

「お嬢様！」

ハヤテは自転車からジャンプして、

「ハヤテ！」

ナギを抱えて、見事に着地した。

「ご無事ですか？お嬢様？」

「ああ……それよりあいつは？」

ナギは去ってゆく車を振り返った。

車の上では銀時と赤髪が対峙している。

「てめえ、何者かは知らんが俺らの邪魔はさせねえ……」

「何だかどつかのマヨラーとキャラが似てやがるな……」

赤髪は刀を銀時は木刀を抜き、向かい合う。

「随分と余裕そうだが、この車は俺の仲間の……」

「せんぱーい！」

いつ車を降りたのか、ちよつと離れた所に茶髪がいた。

「な！？てめえ何で車から降りてんだ！！運転はどうした！？」

「俺まだ未成年なんで〜！すみませーん！でも大丈夫です、アクセルに重り置いといたんで。」

「馬鹿かあ！てめえは！？…つて事は！？」

赤髪は顔を青くする…

「オイ、銀髪！勝負はお預けだ！」

そう言つて赤髪は車を飛び降りて見事に着地した。

「…つて待てええ！ふざけんなああ！」

銀時は暴走する無人車に取り残された。

「銀ちゃん！」

「銀さん！」

突然、後ろから定晴に乗った神楽と新八がやって来た。

「神楽！新八！」

定晴は車に並んだ。

「銀さん、前！前！」

新八が指差す方向には……民家が迫っていた！

「ちっ！ 新八！神楽！フォーメーション だ！」

「ウツス！」

「いやいや！何、って！？」

何で神楽ちゃん知ってんの！？」

神楽は定晴から車に飛びうつって、右側のタイヤを傘で突き刺した。

「新八！急げ！フォーメーション だってんだろ！」

「いや！さつきと違ーだろ！」

新八は突っ込みながら車に飛び乗ると左側のタイヤを木刀で突き刺

す。

銀時はボンネットに飛び降りて、『洞爺湖』でバンパーを思いつきり叩き地面に着く。

「万事屋舐めんなああー？」

車はゴウゴウと地面を削り、わずかに宙に浮いて……停車した。

「凄い……」

銀時達の後を追っかけていたハヤテとナギはその光景に圧倒されていた。

「ハヤテ君！ナギ！」

暫くして、タクシーからヒナギクとマリアが二人に駆け寄って来た。

「ヒナギクさん！マリアさんも合流したんですね？」

「ええ、それよりハヤテ君、さっきの誘拐犯の事なんだけど……」
ヒナギクがハヤテに話そうとする……

「あーあ、派手にやってくれましたね…」

「てめえが原因だろうが！」
茶髪を叩く赤髪。

「お前達！」

ハヤテがナギの前に立ち塞がる。

…と、マリアがその間に立って言った。

「マリアさん！危ないですから下がって下さい！」

「いえ…実はこの方々は誘拐犯では無いんですよ…」

「え？」

クエスチヨンの二人。

「実は…」

「はあああ！？三千院家の人間？」銀時達は呆れたように言った。

「どついつ事ですか？」

新八が尋ねると、

「うちの方では無く本家の方々なんだそうです。」

「SPか？それとも執事？」

「いや、まあ三千院家本家に雇われている警察みたいなものですよ。」

茶髪が答えた。

「何でまた、こんな誘拐みたいな形で？」

「帝のじじいの命令でな。こっそり連れて来い、と……」
赤髪の方は溜め息を吐く。

「あのじじいの事だ：どうせろくなことじゃ無い。」
ナギが露骨に嫌そうな顔をする。

「まあ、任務失敗ですね……」

茶髪はニコリと笑って、

「俺は白井 比呂と言います。」

「俺は…霧碕だ…覚え無くて良い。迷惑かけたな…」
赤髪はタバコをふかす。

「あの二人は…？」

「あの馬鹿どもも一応仲間だ…」

「つたく、誘拐染みた真似をしゃがって…」

霧碕は頭を掻きながら、

「オイ、比呂。あの馬鹿ども拾って引き上げるぞ。」

「へーい。んじゃ、失礼しますね。」こうして二人は去って行った。

「何だか土方さんと沖田さんに似てませんか？」

「気のせいだろ…」

「あの馬鹿（沖田）はあんなに丁寧な奴じゃ無いネ。」

三人が話していると、

「あの…銀さん、志村さん、神楽さん、今回は本当にありがとうございませう。」

ハヤテとマリアが三人の所に来た。

「いやいや、元々この馬鹿が…アレ？」

そこに神楽は既に居なくなっていた。

神楽はナギの所に居た。

「友達って言ったのに黙って行くのはズルいアル。」

「む…済まん。私は…」

「次からはちゃんと頼って欲しいアルな！」
神楽が胸を張る。

「フフツ、考えておくか…」

「約束アルな！」

そんな様子を銀時達は微笑ましく眺めていた。

銀時はヒナギクの傍に寄る。

「なあ、」

「どうかしたの？銀時。」

「その散々世話になって悪いんだが、これ以上お前ん家に迷惑はかけられ無い。」

そう言っつて定晴を指す銀時。

「……………」

流石にヒナギクもそれは分かってるようで何も言わなかった。

「今日まで色々世話になったな…ありがとう。」

「でも、他に行く宛はあるの？」

「いや…それは…」

何とも言えない表情の銀時。

「なるほどな…事情は概ね分かった！」二人の間からひょっこりとナギが現れた。

「な！？」

「ナギ？」

「今回助けてもらった恩もある事だ……マリア！」

「ハイ 大丈夫ですよ。確認は取りました。」

「…え？」

銀時は勿論、新八も神楽もはてなの表情。

「お前達を今日からこの三千院家の護衛として雇おう！」
高らかに宣言するナギ。

「え？…でも…」

新八はしるどもどろな様子。

「心配するな…他の使用人達とは違って、本館に部屋は用意する。
まあ、お前達の話も色々と聞いてみたいしな。」

「これでまた少し賑やかになりますね！」
嬉しいそうにハヤテがいう。

「オイオイ、本当に良いのか？」

「この三千院ナギに二言は無い！」

「でも…」

まだ遠慮している銀時だったが…

「まあ良いんじゃない？ナギもああ言ってる事だし。」
結局、ヒナギクのこの一言で決定した。

「ナギ〜！大好きアル！」
ナギに抱きつく神楽。

「ば、バカ？抱きつくな！」

「よろしくお願ひしますね。マリアさん、綾崎さん。」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。」

「僕の事はハヤテで良いですよ。歳も同じみたいだし。」

「じゃあよろしくね！ハヤテ君！」

「よろしく！新八君！」

「よし！三食と寢床を貰う分、この三千院家は俺等が守ってやるよ！」

銀時が高らかに宣言して、締めと言つたことだ。

こうして、何やかんやで銀時一行の旅はまだまだ終わらないのであった。

第八訓 何はともあれ結果良ければ全てよし……って前回とタイトル違くな？

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ、質問が来たから答えるぞ。はい、最初の質問。『新八はいつまでヒナギクの事を桂さんって呼ぶんですか？』」
「……だそうだ、新八。」

新八

「え……それは……」

ヒナギク

「何だ、そんな事。そうね、お姉ちゃんもいる事だし、ヒナギクで良いわよ？」

新八

「……えっと……」
もじもじとする新八。

銀八

「お前は中学生ですか、コノヤロ！」

神楽

「マジきもいアル。暫く私に話掛けないで。」

新八

「何でそこまで言われなきゃいけないんだよ！分かってますよ！えっと、じゃあよろしくお願いしますね、ヒナギクさん？」

ヒナギク

「ええ、よろしくね？新八君？」

銀八

「よし、何の落ちも無いところで次の質問。『伊澄が洞爺湖を見たらどうなりますか？』……んじゃ、ちよつと頼まあ。」

銀八は洞爺湖を伊澄に渡した。

伊澄

「……、これは……！」

銀八

「ん？何か分かったか？」

伊澄

「ええ、ただの木刀ではありません。しかし正宗とも違った、何か不思議な……」

新八

「先生、木刀の裏に値札付いたままですよ……」

銀八

「マジか、ちゃんと剥がす様に頼んだのに……」

伊澄

「……………」

ヒナギク

「え、えっと、じゃあ時間も無い事だから今日はこの辺で……」

「伊澄

……」

銀八

「それじゃ、解散。」

伊澄

「……」

第九訓 七転び八起き（前書き）

本当は一話で完結させようと思ったんですが、二つに分割しちゃいました。

今回もよろしく願います。

第九訓 七転び八起き

結局あの後

取り敢えず、色々とお世話になった桂家へ戻った二人。

定晴は三千院家の敷地に放っておいて、一足先に神樂は三千院家に居る。

「本当に色々とお世話になりました。」
新八が深々と頭を下げる。

「ああ、本当に世話になったな……」銀時も頭を下げた。

「いいわよ？そんなに堅苦しくしないで。」

「そうよ、私達も楽しかったしね？」

「ええ。」

ヒナギクと母も笑って言う。

「困った事があつたらいつでも来なさいよ？」

銀時達の事情を知っているヒナギクはそう言ってくれた。

「じゃあ、二人とも気をつけてね。」

「ああ、それじゃ。」

二人に挨拶を終えて、三千院家に向かって歩き出した。

「本当に良い人達でしたね、銀さん。」

「まったくだ…今時、そう居ないな。うちの世界にも見習って欲しいくらいだ。」

来た道を戻りながら…

「ってか三千院家ってどうやって行くんだ？」

「いや、知りませんよ！銀さん行った事あるんでしょうっ？」

「馬鹿、お前一度で道を覚える程器用じゃ無いよ？俺は。」

「自慢そつに言わないで下さい…」

「まあ、成るようになんだろ。取り敢えずこっちの方向だったよう
な…」

「ちょっと大丈夫ですか？ヒナギクさん達に聞けば…」

「お前何でもかんでも人に聞けば良いってもんじゃ無いんだよ？
ってかさっき別れたのにまた戻ったら格好つかないだろ。」

そう言っって銀時はドンドン進んで行った。

「迷ったな……」

銀時達は全く見知らぬ森に居た。

「いや早えーだろ！どんだけ速攻で迷子になってんですか！」

「心配すんな、新八。」

こういう時は目を閉じて祈っとけ……作者が何とかして……」

「くれる訳ねーだろー!!
ってか何でいきなり森なんですか!?!さっきまで僕ら道路歩いてた
でしょ?」

「だから落ち着けよ…」
「う言っのしよっちゅだから。ウイード
リー世代は特に。」

銀時	N I S a m	8 5
神楽	G I G I a	7 5
ぱっつあん	メガネ	1 3

L
R

呪文
アイテム
使用人靴
キャラ詳細
お金を山分け

お金を集める
戻る

500 銀時
652 神楽
ぱっつあん
3

【呪文】

魔術師 9 / 9 / 9 / 9 / 9 / 9 / 9 / 「9」
僧侶 0 / 0 / 0 / 0 / 0 / 0 / 0 / 「0」
錬金術 0 / 0 / 0 / 0 / 0 / 0 / 0 / 「0」

召喚 0 / 0 / 0 / 0 / 0 / 0

エンテルクミスタ

「テイオメンテ」

ウルマクル

一度行ったことのある場所に移動

銀時 神楽 ぱっつあん

500 652 3

使用しますか

はい

いいえ

移動場所を指定して下さい。

X 1 Y 1

移動しますか？

はい

いいえ

移動しました。

謎の森を出た。

「よし！」

「良くねえええ？」

新八の踵落としが銀時に決まった。

「こんなんで解決するわけねーだろ？」

「つてかエルミ　ジユまんまパクってんじゃんか！スーフィツシ
ユ・エ　デイから苦情来たらどうするんですか！？」

「お前、こんな小説見てる訳ねーだろ？大丈夫だよ。」

「全然大丈夫じゃ無いから。
アニメでもこんな事ばかりやってるからいつも打ち切りギリギリ
になったりするんですよ！」

「この位の方が読者の想像力が養われるだろ？小説ならではの配慮
だよ……」

「もういい……ウィードリー世代は村正求めて一生迷宮さまよって
る……」

「ポリゴン世代こそクリエイターに身体中カクカクにされてしまえ。」

「うっさい！パーティー全員が石にワープして全滅しろ！」

二人でしょうもない争いをしていると……

「その声……もしかして銀さんか……？」

聞きなれた声が聞こえ来た。

「ん？」

銀時が振り返ると……

「みかん」のダンボールに体を入れて、右手には犬の手綱。左手に
はラジオ。

宿無し三種の神器を身に纏った……

「は、長谷川さん!？」

長谷川 泰造 であつた……

「この世界に飛ばされて来たのがもう一週間も前になる。」
取り敢えず長谷川の案内で森を歩いて行く銀時達。

「せつかく別世界に来たんだ……
だったらここで俺は変わるう。そしてまた向こうの世界に帰れたら
胸を張ってハツに会いに行こう……そう思ってたんだ……」

ようやく森から抜けたと思ったらあの公園だった。

「せめて銀さん達に会う前には仕事を持とうと頑張った……なのに
……」
公園の砂場の前で膝をついて崩れ落ちる。

「結局どの世界でも俺はマダオなんだ？」
俺が憎いんだろ、神様？

殺せよ！！

俺だってお前なんか大っ嫌いだバーカ！」

「ちよつと落ち着いて下さい？」

長谷川さん！」

新八が長谷川に駆け寄る。

「ママ……。あのおじさん面白い格好してるよ？」

「見ちゃいけません！」

「……………」

「銀さん……どうします？」

「いや、こればかりはちょっとウィードリー風でも直せないな…」

「分かってますよ、そんな事は……長谷川さん、取り敢えずこうなつた経緯だけでも教えてくれませんか？」

「ああ……」

長谷川はゆっくり空を見上げた……

……

俺がこの世界に来たのは多分一週間前だと思う。と言つのも、俺が目覚めてからもう一週間くらいになるからだ……

目が覚めたら河川敷に横たわっていたんだ。

最初は傍に銀さん達がいるかも知れないと思って探してみたけど、何処にもいなかった。

でも考えた訳だ……

もしこのまま帰っても何も変わらない。

俺は変わらないといけないんだ……この腐ったマダオスパイラルから抜けなきゃ俺には向こうの世界に帰る資格には無い……

この世界で変わろう……

奮い立ったのはいいが、この世界で俺の身分を証明するものは何にも無い…

前のように大きな仕事なんて就ける訳も無かった。

でも良いんだ…どんな小さな仕事でも、こつこつ頑張ろう。

取り敢えず俺はアパートを借りるためにお金を借りようとした…でも身元保証が無い俺に貸してくれる会社なんて何処にも無かったんだ…

考えれば分かる事だった。

でも仕事で頑張って貯めれば良い…
そう思ってた…

でも、小さな仕事さえも、何も無い俺を雇ってくれる場所は限られていた。

でも、何とか見つける事は出来た。

これで、俺はようやくマダオスパイラルから抜け出せる！

……はずだった。

1日目の仕事……

内容はその辺の道路工事だ。

体力は使うが、至ってシンプルな仕事だ。

なのに……俺の使っていたドリルが暴走して水道管を破裂させて、クビ……

2日目の仕事……

ビルの清掃が仕事だ……

比較的大きなビルで、そのエントランスを掃除する事になった。

清掃中に何故か落ちていたバナナ皮に足を滑らせて、ワックスをこぼしてしまい、そこに丁度通り掛かったビルのお偉いさんが転倒。拳句お偉いさんのヅラが取れて、その場でクビ……

3日目の仕事…

下水道の仕事を日雇いで見つけた…

閉めたはずのマンホールが開いていて、そこにセレブのペットが落下。

開始二時間でクビ…

4日目の仕事…は無くなっていた…

結局三日間で三回クビになった…

そして気がついたら…

……

「ダンボールに身を包み、ラジオと犬を持ったマダオになってたっ

て訳さ…」

「……」

もうかける言葉も無い。

「どうすればいいんだあゝ！」

世界が変わっても、マダオからは脱する事は出来ないなんて！
また崩れて地面を叩く長谷川。

「銀さん……」

新八は銀時に助けを求める。

「長谷川さんよ…そこでまた逃げれば向こうでの繰り返しになる…
違うか？」

「…！それは……」

「本当に変わりたいと思うなら、どんな事にも諦めちゃならねえ。
三回転ばされるんなら、四回立ち上がれば良い。
四回転ばされるなら、五回立ち上がれば良い。」

銀時は長谷川に手を伸ばす。

「倒れても倒れても起き上がる。それがマダオ（負けないダンディ
な男）じゃ無いのか？」

「銀さん……」

長谷川は銀時の手を掴んで、起き上がった。

「そうだな！こんな事で悄気ぢやいけない！銀さん、俺やるよ！……
ありがとう！」

そう言つて長谷川はダンボールを脱ぎ捨て、走つて行つた。

新八は感心したように銀時を……

「よし！これで厄介事は無くなつたな……さて、屋敷に行くか。」

「アンタには血も涙も無いんですか！？」

「大丈夫だろ？長谷川さんも復活した様だし。
こつからなら屋敷への道は大体覚えてるから。」

「銀さん一人で行つて下さい。」

僕は長谷川さんを手伝つて来ます！」

新八は肩を怒らして長谷川の後を追つて行つた。

「………つたく、とんだお節介だな……」

銀時は屋敷の方向へ向かつた。

「待って下さい！長谷川さん！」

「新八君？どうしたんだ？」

新八は長谷川に追いついた。

「僕も手伝いますよ！」

「え？でも……」

「お互いこんな状況だし。僕に出来る事があれば手伝いますよ。」

「ああ、済まないね……」

二人は商店街へ向かった。

「思ったんですけど、まず家を先に探した方が良いと思いますよ？」
「でもお金が……」

「まったく無いんですか？」

「いや、この一週間でかき集めたものがあるにはあるが……
こんなはした金じゃ……」

長谷川はポケットから二枚のお札と小銭を取り出す。

「……まだ分かりませんか？」

とにかく今日は格安の物件を探しましょうー！」

新八と長谷川は手当たり次第不動産屋に当たる事にした。

一方…

「アラ、銀さん！ご挨拶は済んだのですか？」

「ああ、まあ一応…」

銀時は屋敷に到着した。

「新八君はどうかしたんですか？」

「あゝ、それなんだけど…」

「ちよつとナギは今大丈夫か？」

「え？ ええ。多分今神楽ちゃんと一緒に遊んでいると思いますけど…何かあつたんですか？」

「まあ…実はな…」

銀時は屋敷に入っていった…

第九訓 七転び八起き（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「そんじゃ、最初の質問。

『タマは定春にひとつでも勝てる所がありますか？』だとさ。」

ナギ

「うーん、ネコだしな…」

マリア

「まあ…（トラなんですけどね…）」

銀八

「ハヤテは？何かあるか？」

ハヤテ

「そうですね…」

（まあ、人語を話せる所や、機械を使いこなせる所とかですかね…
知能とか…）」

銀八

「何か言ったか？」

ハヤテ

「いえいえ？特に無いですね…」

銀八

「…んじゃ、次の質問。
『マダオは何時出てきますか?』」

新八

「今回ですよ。この流れだと次回も話の主体になるんじゃないですか?」

長谷川

「いや、このまま仕事も見つかって生活も安定なんかしちゃった
りして…」

神楽

「オイ、それじゃマダオじゃねーダロ。読者が求めてるようなマダ
オじゃなきゃダメアル!」

長谷川

「ちよつと!それは無いんじゃない!?
おじさんにだって幸せな人生を送る権利くらいあるでしょ!」

神楽

「夢見るだけな。」

長谷川

「ちよつとおおお!?!」

新八

「神楽ちゃん、それは言い過ぎだと…」

神楽

「うつせーナ、眼鏡小僧は黙ってるよ！」

新八

「んだと、このアマア！」

ハヤテ

「先生！このままじゃ収集が付きません！」

銀八

「おゝい、静かにしろ、お前ら！分かった分かった、分かったから取り敢えず席に着け！」

皆が一応着席する。

銀八

「えゝ、じゃあお前らの意見を総合すると……」

次回でマダオは死にます。以上。」

長谷川

「総合してねえええ！総合して無いじゃん、「コレ！」」

銀八

「それじゃ、最後の質問な……」

長谷川

「オイイイイ！」

銀八

「『ハヤテとマリアとナギの銀時に対する印象を教えてください』
だそうだ。」

ハヤテ

「え、そうですね…」

とても良い人だと思いますよ。

困っている人をほっとけ無い所とか。」

長谷川

「俺たつた今見捨てられたんだけど!？」

ハヤテ

「あと、いざと言う時の行動力も尊敬してますよ。」

銀八

「お前がそれ言うんだ…」

ナギ

「天パだな、天パ。」

銀八

「オイ、チビ助。もっと他にあんだろ。銀さん以外と頼りになる、
とか…」

ナギ

「誰がチビ助だ!誰が!」

マリア

「でも遠目で見るよりだいぶ若く見えますよね。」

銀八

「そうだよ？」

銀さんこう見えてもまだピチピチの二十代だよ？」

ナギ

「さつきから思ってたんだが、マリア…なんだ、その不気味なコスプレは……」

マリア

「な！？誰がコスプレですか！？学校と言う設定を考えたら普通です！」

銀八

「いや、でも実際かなり若く見えるぞ？十代って言われても頷ける。」

マリア

「……はい？」

ナギ

「馬鹿っ！お前！？」

ハヤテ

「……………マズイですね……………」

マリア

「嫌だわ、先生。もしかして私が二十代って事ですか？」

銀八

「え…？ えっと…」

マリア

「まだ私ピチピチの17才ですよ…？」
ユラリと銀八に近づいて行くマリア。

銀八

「……あ、あの…じゃ、じゃあコレでこのコーナーは終わり…」

マリア

「先生？少し外でお話しませんか？」

銀八

「いやいや？ いや…！」

銀八はマリアに引きづられて教室を後にした。

一同

「……………」

ヒナギク

「え、えつと最後に一つ。
本文中に長谷川さんの名前が間違えて泰造になっている箇所があります。本当は泰三です。
作者の気が向いたら直すようなのでご了承くださいね…?」

銀八

「ぎゃあああああ?」

ヒナギク

「……で、ではまた次回?」

第十訓 家は即ち人の情なり（前書き）

今回は少し短めですが、後書きに新展開？です。

第十訓 家は即ち人の情なり

「取り敢えず、手当たり次第不動産屋を当たってみましょう。お金は足りなくても、候補だけでも。」

それに目的があると無いとでは仕事の張りも違うと思いますよ。」
「確かにそうだな。仕事が終わっても帰る場所がダンボールなんて死にたくなるもんな…」

新八と長谷川は商店街を宛もなく歩いていった。

「あ、ありましたよ！取り敢えず入ってみましょう？」

「よし！やるよ、俺は！」

二人は不動産屋に足を踏み入れた

「ん、何だ？銀時、ほっ！
今忙しいんだ！はっ！」

「銀ちゃん！どうしたアルか？
ほわちゃ！」

銀時はマリアにナギの所に連れて来られた。

「ああ…、ってか何やってんの？お前ら？」

「見て分からないのか？デッド トーム イレーツだ。」

二人協力用のゲームでな。ほっ！この手のゲームはマリアが忙しい時は出来なかったんだが、よっと！神楽が居るしな。」

「いやいや、普通ゲーセンに有るでしょ？そういうの。何で家にあるの？」

「ああ、神楽も来たことだしこれからは二人用もいつでも遊べると思ったからな、のわっ！さっき買った。」

「どんだけレベルの高い大人買い！？」

「…やったアル！ステージクリアネ！」

「まあ、この位のステージなら当然だな。」

「二人ともそろそろ休憩にしませんか？」

マリアが紅茶をいれて戻ってきた。

「うむ、そうだな。」

「ふ〜、いい汗かいたアル…」

「お前は動きすぎな……」

「…ん？どうした、銀時？」

ナギが突っ立っている銀時に尋ねる。

「長谷川さんの悩みって……一体……」

「ん？何にか言ったか？」

「いや……………」

「何？安い賃貸？」

「ああ…出来れば格安の物件で。安けりゃそれで良いから。雨風さえ凌げれば十分だ。」

「しかし、またどうして？」

テーブルを四人で囲んで、ティータイム。

「銀ちゃん、もしかして女でも囲うつもりアルか？」

「……………」

ジト目になるナギとマリア。

「馬鹿？何言ってるんだよ！お前は。全然違う！ 実はなあ…」

銀時は紅茶を飲んで事のあらましを説明した。

「なるほど…」

「だからさっき物件の資料を頼んだんですね？」

「まあ、そう言っちゃった。

それで、頼めないか？」

「まあ、それは良いんだが。

希望とかそう言うのがあるんじゃないのか？」

「ああ、いい。そんな事言ってる場合じゃねえから。とにかく安い

！これが第一条件だな。」

「なら、これなんてどうですか？お値段も安いですし。」

マリアがナギに資料を渡した。

「ふむ。

敷金、礼金0。家駅からは徒歩20分の格安物件…」

「おお！いい感じじゃねえか。」銀時が先を促す。

「…最新の家具家電付き。バスルームはオーシャンビュー。バルコニーからは東京の夜景が一望出来る。11LDKで、家賃がたったの150万円。」

「オイイイ！それ何処の国の物件！？聞いた事ねーよ！敷金礼金
0で150万なんて物件！
11LDKってお前！？」

「何を言っている？これが三千院不動産ではもっとも安い物件だぞ
！」

「…お前らの金銭感覚はどうなっているんだ…」

「まあ、普通ではありませんよ…（笑）」
後ろからいつの間にかハヤテが現れた。
「おお、ハヤテ！帰ったか。」

「ええ、まあ今回はなんのアクシデントもありませんでしたよ。」

「ハヤテ、実はな…」

「ええ、大体の事情は把握しました。」
ハヤテは銀時が言いかけた言葉を汲む。

「まあ、聞いての通り、お嬢様とマリアさんは金銭感覚がズレてま
すから。」

「ズレてるってレベルじゃねーだろ。もうこれサードインパクトが
起こりそうな勢いだよ…」

「何だかバカにされてるような気がしますわ…」
マリアがむくくと二人を見つめる。

「じゃあ、ハヤテに何か良い案づもあるのかヨ？」

「ええ。まあ、取り敢えず……」

ハヤテはポケットから携帯を取り出した。

「……やっぱりダメか。」

「……まあ、仕方がないですよ。身分証明書が無いんじや……」

手当たり次第、不動産屋をあたった二人。

「……向こうから持ってくれば良かったな……」

「いや、もしあったとしてもこっちの世界で見せたら大問題ですよ……」

「はぁ……やっぱりダメかなあ……」

「まだ分かりませんか？もう少し頑張りましょう？」

「っても、もう五件も回ったんだぜ？それにもう夕方だし……」

がっくりと肩を落とす長谷川。

暫く歩いていくと、裏路地にたどり着いた。

「……ん？あれは……？」

路地にうつすらとただずむ店。

『不動産 犠虜沈』

とあった。

「おい、不動産屋あったぞ？」

「……でもなんかヤバそうですよ？ギロチンって……」

「ちょっと窓から覗いてみよう。」

二人は入り口の脇にある窓からこっそり中を覗いた。

「おお、なんか良さそうな感じじゃないか？」

「いや……」

中では男達が忙しなく動いていた。
時折笑い声が聞こえる。

「なんかアットホームだな……」

「いや、どこがですか……
部屋中グラサンだらけじゃないですか……」

「グラサンの奴に悪い奴は居ないさ。」

「……長谷川さん、ここはヤバイですよ。帰りましょうっ。」

「オイオイ、身分証明書も要らないみたいだし入ろうぜ？」
長谷川が更に隅にあった看板を指す。

「尚更マズイですよ……早く帰りましょう。」

「うーん……」

新八は長谷川を掴んで無理矢理窓から離そうと…

「お宅ら、どなた……？」

強面のグラスン達が二人を掴んでいた。

「んで……？お前ら何で俺らの事務所を覗いてた？」

二人は事務所の中に連れ込まれて囲まれていた。

「長谷川さん……ここまでグラスンが揃うと壮観ですね……」

「どうしてだろう……グラスンだらけなのに全然安心しないんだけど……」

「だからじゃないですか……」

取り敢えず縮こまっている二人。

「てめえら一体何処の回し者だ？」

「いや、俺ら家を借りに来ただけと言っか…」

「こいつグラサンしてますぜ？」

組の奴じゃないですか？」

「いやいや？これはオシヤレで…」

「ああ、俺でもそう言っな…」

親玉と思われる男がニヤリと笑う。

「こいつらどうします？」

「そうだな…」

「まとまった金にしちまったらどうですか？二人なら…」

「ちよつとおおお？小説にあるまじき発言してるんですけど、この人達！」

新八が飛び退く。

「騒がれても面倒だな…やっちまうか…」

二人を囲む輪が次第に小さくなっていく。

「いやいやいや？いや？」

「ちよつ！！長谷川さん！どうしましょう！？このままじゃ、この小説…もとい僕らの人生も終わっちゃういますよ！？」

「なんでいつもこんな何だー？このままマダオで終わるって言っ

のか、俺は！」

長谷川が地に顔を伏せた…

ドォーン??

「な！？何事だ！」

「か、壁が、壁に穴が！」

「…え？」

新八が音のした方に目を向けると…

「すみません…その人達は大切な友人なんで、こちらに返して頂けませんか？」

ハヤテだった。

「こいつまさか壁を蹴破って!？」

「何だ!! てめえは！」

ハヤテを取り囲むグラサン達。

「もう一度言います…その二人をこちらに返して頂けませんか？」

「この野郎！よくも事務所を！」「やっちまおつぜー！」
一斉にハヤテに飛びかかってゆく。

「仕方ありませんね…」

「新八君？大丈夫、怪我とかは無いです？」

「うん、大丈夫…（凄いな…）」

新八の目の前には気絶したグラスンの山。

「…それより、どうして僕達の場所が？」

「執事には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わってるから…」
「そう言っつてハヤテは口に人差し指。」

「…あの〜」

「ああ、貴方が長谷川さんですね…？」

「え？どうして俺の名前を？」

「銀さんから全部事情は聞いてますよ。」

「このアパートなら、身分証明書が無くても大丈夫ですよ。」

二人はハヤテに連れられて少しボロいアパートに来ていた。

「僕の知り合いが大家さんをやっているアパートなんです。話はつけておきましたから。」

ガバっとハヤテの手を取る長谷川。

「あ、り、か、と、う、？」

大号泣である。

「ハイ！後は頑張ってくださいね。僕にできる事はこれくらいしかありませんけど。」

「ああ、ああ！俺頑張るよ！まだフリーター生活かも知れないけど、仕事見つけて、胸張ってハツに会いに行ける様に！」

「頑張ってくださいよ！長谷川さん！」

「新八君もありがとう！ハヤテ君も本当にありがとう！」
長谷川は立ち上げると膝についた砂を払った。

「これは鍵です。詳しいことは大家さんに聞いて下さい。」

「ああ！それじゃ！本当にありがとう！二人とも。」
長谷川はそう言ってアパートに向かって走って行った。

「ハヤテ君、ここまでしてくれてありがとう。」

「いや、僕は銀さんに頼まれただけだから。多身分証明書が無いだろうから、大丈夫な所を探してやってってくれって……あ、コレは内緒だよ？銀さんからは言うなって言われているから。」

「本当に素直じゃ無いな、あの人は……」

「それに……」

「ん？」

ハヤテの方に顔を向ける新八。

「長谷川さんを見ると他人事に思えなくって……」

「……………」

「おお、戻ったか！ハヤテ。新八。」

「ハイ、只今戻りましたお嬢様！」

「ご迷惑おかけしました。」

「何、気にするな。それよりハヤテ。丁度神楽とこのステージまで進んだんだ。お前も混ざって協力してくれ。」

「かしこまりました。」

「よっしゃ！勝負アル！ハヤテ！」

「いや…協力するゲームだから…」

新八はテーブルにいた銀時とマリアの所に向かった。

「ん？帰ったのか、新八。長谷川さんはどうしたんだ？」

「何とか無事に家を見つけましたよ。」

「ふうん、まあ俺には関係ないけど……」

「フフッ」

マリアがそんな銀時の様子を可笑しそうに笑った。

「あー！何してるんだ、神楽！

右だ！右！」

「ほわちやー！」

「そっちは左だー！」

屋敷に響くナギのツッコミ。

「やっぱり賑やかかって楽しいですね……」

「ああ……悪くねえ」

銀時はゆっくりと伸びをする。

「皆さん。ご飯が出来ましたよ！」

「あ！ご飯ネ！」

「あ！馬鹿！まだ終わって無いぞ！」

こうしてまた平和？な一日が過ぎていくのだった…

第十訓 家は即ち人の情なり（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「オイ、このコーナーいつまで続くんだよ…いい加減面倒くせえよ…」

新八

「ちよつとおおお！何いきなり愚痴ってるんですか!?!」

銀八

「もう良いよ…銀八とか。面倒くせーよ。やりたくねえよ…」

新八

「最低なんですけど、この人。あんたそれでも教師ですか!?!」

銀八

「だったら、今日一日だけ代わってくれよ…新八。」

新八

「いや！何で僕なんですか?」

銀八

「字が一文字違うだけだし、別に良くね?」

新八

「良いわけねーだろ!」

銀八

「あ、そうだ！なんならこれから交代制にしようぜ。そしたら色々な形で読者にも楽しんで貰えるコーナーになるよ、きっと。」

新八

「何読者の事考える振りしてんだ！！単に自分がやりたく無いだけでしょ！？」

銀八

「ハイ！つて事で今日は新八先生の番ね。」

新八

「いや！ちよつとおおお！」

教えて！！新八先生

新八

「いや！普通に何再開し直してるの！？……え？本当にやるの！？」

神楽

「さつさとやれヨ、ダメガネ教師！時間押してるんだぞ。」

新八

「オイイイイ！……まあ、分かりましたよ……えつと最初の質問です。『新八と歩はいつ出会うんですか？』……すみません。これはまだ答えられません。」

ナギ

「なるほど……そろそろハムスターが出てくる流れか……これは何とし

ても阻止しなければ。」

ハヤテ

「何で阻止するんですか…?」

ナギ

「当たり前だ! あんなハムスターなんか… (ハヤテを渡して堪るものか。)」

ハヤテ

「何か言いましたか? お嬢様?」

ナギ

「何でも無い//」

新八

「…では次の質問です。」

『タマと定春は喧嘩するの?』

「ごめんなさい。これも答えられないですね…」

神楽

「結局何も答えられないアルな。だから新八ネ!」

新八

「いや! 僕のせいじゃ無いから! 作者のせいだからね!？」

新八

「では最後の質問です。」

『ハヤテの戦闘力は昆布何枚分？もしくは不良』

ナギ

「いや、なんで昆布！？昆布一枚になんの戦闘力があるんだよ？」

新八

「…これも僕には…」

神楽

「亀梨連れて来たネ！」

亀梨

「どうも、亀梨です。」

新八

「ちよつとおおお！どうやって連れて来たの神楽ちゃん！？」

神楽

「なんか更衣室の前でカメラ持ってウロウロしてたアル…」

亀梨

「いや！違…」

新八

「またかぁー！！てめえはよぉ！」

亀梨

「「ぐぶっ！？…ちよつと！ちよつとタンマ！違ってますよ…昆布を撮るうとして…」」

新八

「更衣室で昆布とか言うんじゃないやねえ！下ネタに走ったらこの小説はおしまいなんだよ！」

いいからトットと計って下さい！」

亀梨

「分かりました…因みに男性だとK、女性だとOと言う単位になりますが、面倒なのでKで統一しましょう。

ではハヤテ君から……ほお！」

ハヤテ

「?どうしたんですか？」

亀梨

「5800Kだ…凄いな…」

新八

「結局昆布5800並べただけですよね…」

亀梨

「そこのちっこい君は…」

ナギ

「誰がちっこいだ！」

亀梨

「3Kだ…」

バキ！

ナギ

「ほう…私はスランカー並みの戦闘力とでも言いたいのか？」

亀梨

「痛ててて…そして最後はそのメイドさん。」

マリア

「……………はい？」

亀梨

「……………3000、4000、いやまだまだ上がるぞ…8000、10000。と、止まらない！」

バシュ!!!!

亀梨

「…計測不能だ…」

一同

「(ええええええ?)」

ヒナギク

「…と、言う訳で何か知らないけど、交代制になるかも知れませんが…そういえばなんで私が毎回この位置なのかしら？
まあ、取り敢えずまた次回！」

閑話休憩訓

そういえばナギと神楽の声優は同じ

宮さんだったなあ

でも小

ええと、今回はキリもいいので、休憩編です。

まあ、かなりグダグダな感じなんで、大目に見てやって下さい…

今のところは本編とは関係無いと思われませう。

では…

銀時

「ZZZ…ZZZ…」

ちょっと、銀さん？

銀時

「ZZZ…ZZZ…」

起きて下さい。始まっちゃいますよ？

銀時

「ZZZ…」

え、まあ取り敢えずどうぞ。

閑話休憩訓

そういえばナギと神楽の声優は同じ

宮さんだったなあ

でも小

閑話休憩

新八

「ハイ！突然ですが、物語も一段落した所で閑話休憩編と称して、この小説のこれからを皆で話し合いたいと思います。」

ハヤテ

「この小説を良くしていくための案の出し合いつてことだよな？新八君？」

新八

「そう！だからこうして今日は皆に集まって貰ったんだ。」

ナギ

「まあ、要するに作者のネタが早くも詰まったから、何とかこんな感じでもたせようという…」

ハヤテ

「わああ！？ダメですよお嬢様！それは言わない約束なんですから？」

マリア

「そうですね、ナギ。三年前の原稿が実は途中で切れていて、何を書いたか覚えてない作者が取り敢えずこんなぐだぐだな感じで時間稼ぎしようなんて事は全く無いですからね？」

新八

「御説明ありがとうございます……」

ハヤテ

「ま、まあ『テコ入れ』って事で？皆で話し合いましたよー！」

ナギ

「『テコ入れ』と言う事は、この小説がもう傾いてると言いたいんだな、ハヤテは。」

マリア

「ある意味ハヤテ君がとどめを刺しましたね……」

ハヤテ

「え！？ち、違いますよ！？決してそんな意味では……」

神楽

「可愛らしい顔してて、案外えげつないアルな……」

マリア

「ですね〜」

ナギ

「だな……」

新八

「いや、アンタら三人も十分にえげつないから……」

取り敢えずいつまでもこんな感じだとアレなんで案を出しあいましょうー！」

って言うかまず地の文を入れます……

伊澄

「面白そうなお話をしていますね……」
新八の後ろからひょっこりと顔を出す伊澄。

ナギ

「おお！伊澄。どうしたのだ、急に。」

伊澄

「ええ、さっき家に帰ろうとしていたのだけれど……」

ナギ

「なるほど……早速迷子か。伊澄らしいな？」

伊澄

「あら？ハヤテ様、どうされたのですか？」
伊澄は壁の隅に体育座りをしているハヤテに気付いた。

マリア

「まあ、色々と？」

神楽

「悩みの多い年頃ネ……」

伊澄

「……えつと？」
神楽を見た伊澄は不思議そうに首を傾げる。

ナギ

「ああ、成行で雇った護衛みたいなもの？かな？」

神楽

「神楽アル。ヨロシクな！」

伊澄

「鷲ノ宮伊澄です。よろしく。」神楽と伊澄が握手をする。

伊澄

「そちらの方は？」

そう言つて新八の方に顔を向ける。

新八

「ああ、僕は……」

神楽

「その辺に居るただのメガネアル。覚え無くてヨロシ。」

新八

「オイイイ！自己紹介くらいさせて!？」

伊澄

「よろしくお願いします、メガネさん。」

新八

「いやいや!!メガネなんて名前の人間この世に居ないから!？居たとしても、そんなの親の嫌がらせだからね？RPGの主人公の名前アアアアにする位の扱いだからね!？」

ナギ

「あー、分かる分かる。でもラスボスの時にもの凄いテンション下がるよな、アレ。」

新八

「いや、そうじゃ無くて！」

神楽

「うるせーな、引っ込んでろヨ。ツッコミにしか能が無いクセに。」

新八もハヤテの隣で膝を抱えた。

マリア

「そ、そろそろ本題に入りませんか？」

ナギ

「うむ！テコ入れなのだ！」

新八

「…………では、気を取り直して。これからこの小説の今後を、皆で話し合ひましょう。」

ハヤテ

「今後って言っても、話の流れは大まかには決まってるんでしょ？」

二人とも気のせいかな涙目なのは突っ込まない事にする。

ナギ

「うむ。つと言つか、ストーリーは我々がいじるべきではないだろうな。」

ハヤテ

「では…?」

ナギ

「タイトルとか、各話の構成の仕方とか、文章の書き方とか。テコ入れとはそもそもそういう所をテコ入れする事だからな。」

マリア

「タイトルですか…。」

確かに今のタイトルだと二つをそのまま併せてだけですからね…。」

新八

「まあ、でもタイトルが二つの漫画の話って分かりやすすくないとダメだと思っんですよ。」

ハヤテ

「だったら『銀魂の如く』とか、『銀魂の如く 見参』とかはどうですか?」

ナギ

「それは主旨が変わりそうなので却下だ?」

新八

「無難にZとかXとかありますよね。」

神楽

「とかとかはどうアルか？」

新八

「うん。とかは有りだと思っよ。」

ナギ

「いっそのこと『去らば！』とか『完結編』とか最終回っぽく煽るって言うのも有りだと思っけどな。」

新八

「まだ小説始まったばかりなのにそれはマズイでしょ……」

マリア

「ま、まあタイトルよりまず流れとか、構成とかを考えた方が良くんじゃないですか？」

新八

「そうですね。取り敢えずもう一度やり直しましょう。」

神楽

「その前にアイキャッチネ！」

く銀魂のじとく

く銀魂のじとく

新八

「いや？なんで小説にアイキャッチがあるんだよ……」

ハヤテ

「それは作者事情です」

マリア

「それより、あんまり時間も無い事ですし話し合いましょつ。」

と言う訳で仕切り直し

新八

「では！皆さん、何か意見はありますか？」

ナギ

「まあ無難に文章の構成を変えてみる。とかな。今のアイキャッチ然り。」

マリア

「後は、題名をまた小説に入れるとかですかね？」

新八

「ああ、なるほど。こんな感じですか。」

くだった。

平らな道が続くとは限らない

マリア

「そうですね。物語が始まってからタイトルを出す感じですよ。」

新八

「これだけでも随分印象変わりますね……」

神楽

「でもそれだけじゃ、インパクトが全然弱いアルな……」

ナギ

「インパクト……、！ならいつその事私の漫画マジカルデストロイを……」

ハヤテ

「あ、ああ！それよりお嬢様！伊澄さんがいつの間にか居られないですが……」

ナギ

「もう迷子か……伊澄……」

ハヤテ

「ちよつと探して来ます！」

ハヤテは部屋を出て行った。

と、同時に

ヒナギク

「ナギ居るかしら？」

ヒナギクが入って来た。

ナギ

「む…ヒナギク！」

マリア

「どうかされたんですか？」

ヒナギク

「この間、二人が学校を休んだ時のプリントを……ってどうしたの？皆集まって。」

ナギ

「丁度良い…ヒナギクも何か意見を出してくれ。」

ヒナギク

「どうという事？」

マリア

「実は……」

ヒナギク

「なるほど。てこ入れですか…」

新八

「すみません、何かまた急に…」

ヒナギク

「それは良いんだけど…」

ハヤテ

「お嬢様、伊澄さんを見つけました。」

伊澄を抱えたハヤテが入って来た。

ナギ

「伊澄…お前今度は何処に…」

ハヤテ

「ボイラー室にいらっしやいました。……アレ、ヒナギクさん。」

ヒナギク

「ええ、この間のプリントを届けに。」
そう言っつてハヤテにプリントを渡す。

ハヤテ

「ありがとうございます。そうだ、ヒナギクさんにも話し合いに参加して貰うのは……」

ナギ

「もう話したよ。」

……と言っつ訳で改めて、何か意見は？」

ヒナギク

「ところで…銀時は？」

新八

「……寝てますよ。」

ヒナギク

「もう昼でしょ？」

新八

「ですよね……まあ、いいですよ……あの人は。」

ナギ

「…ま、取り敢えず。」
七人はまた集まった。

ナギ

「思ったんだが、文章構成とかタイトルとかそんなものより、何か企画をするのはどうだろう?。」

新八

「なるほど、例えば?。」

ナギ

「フツツ、よくぞ聞いてくれた。」

その企画とは…。」

そう言つとナギはテーブルの上に原稿を出した。

ナギ

「これだ…!。」

テーブルの上には『マジカルデストロイ』と書かれた表紙に、厚い原稿。

ハヤテ・マリア

「あ〜」

ナギ

「なんだその苦虫を噛み潰したような顔は…!。」

ハヤテ

「お嬢様!まさかそれを載せるって言うんじゃない?。」

ナギ

「当然だ。初見の読者にも分かりやすいように第一話の前の第零話から掲載する。」

伊澄

「それは名案だわ、ナギ。」

ナギ

「おお！伊澄は分かってくれるか！」

二人は瞬く間に二人だけの世界に入っていった。

新八

「えつと……」

ハヤテ

「ああ…気にしないで。いつもの事なので。」

マリア

「でも企画と言う案そのものは良いですね。」

ヒナギク

「企画ですか……」

四人は一様に考え込む。

神楽

「フッフッフッ……」

新八

「どうしたの神楽ちゃん？」

神楽

「企画……どうせやるならこの小説のてこになるのは勿論、且私達にも重要な意味をもたらしてくれるものじゃなければ意味は無い……」

新八

「え？ちよつと？」

マリア

「何か案でも浮かんだんですか？」

神楽

「フツ、聞くがいいネ！私が提案する企画。それは今後の話を左右する事は勿論、私達もこれで全てを左右されると言っても過言では無い企画アル！」

シントとした空気が部屋を包み込む。

ナギや伊澄も話を止めて、神楽に注目している。

神楽

「その企画とは……」

一同

「企画とは……？」

神楽

「……………」

ヒロイン決定戦アル！」

マリア

「ヒロイン…！」

ヒナギク

「…決定戦？」

伊澄

「……………まあ。」

ナギ

「ほお……」

それぞれが神楽の言葉に反応する。

新八

「いや！僕ら全然関係無いでしょ！」

神楽

「甘いアルな…新八。」チツチツチと指を振る神楽。

神楽

「ヒロインと言ってもただのヒロインじゃ無いアル…そんな何人も座れるようなしみつたれた椅子には興味無いネ。」

新八

「…つまり？」

神楽

「真のヒロインの証…」

メインヒロインの座アル！」

新八

「余計関係ねえだろ！！」

女子一同

「（メインヒロイン…）」

神楽

「どうアルか？」

神楽は不敵に笑う。

新八

「いや…良いわけ無い…」

ナギ

「面白いな…確かに、只でさえ女性キャラが多い、この漫画だ…この辺で白黒はつきりさせた方が良くいようだな…」

マリア

「まあ…最近原作でも放置気味でしたしね。メインキャラなのに

…」

伊澄

「（この後、ナギの漫画はどうなるのかしら？）」

ヒナギク

「ちょっと、皆？何もそんな風に競いあわなくても…」

ナギ

「じゃあ、ヒナギクは脱落か…」

ヒナギク

「な！？別にそんな事は言ってる…」

ナギ

「逃げるのか？」

ヒナギク

「……面白いじゃない。受けて立つわ。」

四人はテーブルを挟んで向かい合う。

神楽

「決まりアルな…」

新八

「ちょっと！どうする！？このままじゃ、何か大変な事に。」

ハヤテ

「取り敢えず、この場を凌ごう。」

そう言うとハヤテは四人に近づいて行く。

ハヤテ

「あの〜、皆さん?」

ジロリと8つの視線がハヤテを貫く。

ハヤテ

「今すぐに決めるのは無理だと思いますよ…?まだ登場して無い女性方もたくさんいらっしやるですし。」
必死に目を反らしながらハヤテが言う。

新八

「そ、そうですね!今すぐ決めるんじゃない無くて、もっと登場人物が揃ってからのの方が良いですって!」

ナギ

「確かにそうだな…ライバルが増えるのはいただけじゃないが、その大勢を勝ち抜いてこそ、本物のヒロインと言うもの。」

ヒナギク

「そうですね。」

マリア

「ですね…」

神楽

「何人かかって来ようが、変わらないアル…」

四人は新八達を残し、部屋を後にした…

新八

「えー、では閑話休題はこの辺でお開きにしたいと思います。」

ハヤテ

「このまま、忘れてくれれば良いんだけど…」

新八

「ま、まあ、頑張つて何とかしよう。

では、また次の休憩編で。」

閑話休憩訓

そういえばナギと神楽の声優は同じ

宮さんだったなあ

でも小

銀時

「ちよつと待てえええ？何勝手に終わってんだ！まだ銀さん一回も出てないよ！？」

新八

「銀さんがやる気を出さないからですよ…もしかしたらこのまま主役降板なんて事も…」

銀時

「分かったああ？俺が如何に向上心があるかをこのコーナーで見せてやるよ！

次順番が回ってきたら。」

新八

「向上心欠片もねーだろ？」

教えて！！グラ子教授

グラ子

「はぁーい、皆こんにちは。」

新八

「いや、何だよ教授って！？いつからそんなに偉くなったんだよ？」

神楽

「何か教授って先生よりカッケーじゃん。」

新八

「馬鹿の考え方だよ……」

ナギ

「って言うか教授なのに何でドレス？」

グラ子

「チャイナドレスネ。替えの服がこれしか無かったアル。」

銀八

「もう良いから早く進めようぜ」先生。」

新八

「アンタ、いつの間に生徒になったんですか……」

グラ子

「それじゃ、最初の質問ね。」

『咲夜やワタルはいつ出てくの？』

…はあ、何度も言わせないで頂戴。先の事はネタばれになるから言えないのよ。顔を洗って出直してきなさい。」

新八

「いや、神楽ちゃん。読者に向かってそれは無いんじゃない？」

グラ子

「お黙り、メガネ。私の事はプロフェッサーグラ子と呼びなさい。」

新八

「グラ子教授、質問に答えてあげて下さい。」

グラ子

「どうしても答えて欲しかったら酢昆布一年分上納しなさい。

私も昔は男には色々貢がせたわ…アイツら元気にやっってるかしら…」

新八

「オイ面倒臭ーよ…どんなキャラだよ。何なんだよその喋り方。」

ハヤテ

「先生！あんまり時間がありませんが…」

グラ子

「アラ…坊や。私に口答えする気？…フッフ　まあいいわ、その可

愛らしい顔に免じて許してあげようかしら？」

新八

「すみませーん、誰か先生代わって下さい。」

グラ子

「続いでの質問ね。」

『銀時と長谷川とハヤテで賭事したらどうなりますか？』

ナギ

「ハヤテの不幸さに対抗出来る奴がいるものか！」

ハヤテ

「お嬢様…それは心に刺さるので…」

銀八

「いやいや、長谷川さんを舐めちゃいけないよ？なんたってマダムなんだぜ〜スゴいんだぜ〜」

ナギ

「何を！うちのハヤテなんかなあ…」

マリア

「何で不幸自慢し合ってるんですか…」

ヒナギク

「って言うか全部二人に刺さってるわよ…」

ハヤテ・長谷川

「……………」

新八

「っーか銀さんも入ってますから…」

ナギ

「だが面白い質問だな。どうだろうマリア、屋敷のカジノルームで

今度三人を戦わせてみないか？」

ハヤテ

「カジノ！？カジノまであるんですか!？」

マリア

「ええ。地下にですけど……」

一同

「……………」

恐るべき三千院家

グラ子

「ではその質問の答えは本編で、という事ね……」

グラ子

「最後の質問は、

『現時点でハヤテと銀時を戦わせたらどちらが強いのですか?』

…はあ、こう言う質問が一番困るのよね。後書きなんかでそんな事が分かると思ってるのかしら?」

新八

「ちょっと!いい加減にしないと、せっかく質問を頂いてるんだか

ら！」

グラ子

「そんな事だからメガネは甘いのよ。大してキャラも立ってない癖に茶々いれるのは止めてくれる？」

新八

「んだとこのアマア！さっきからその喋り方がムカつくんだよ！」

グラ子

「やんのか、ダメガネ！そのメガネ叩き割って余計に影薄くしてやるるか！」

うがあああああ

ナギ

「結局また何一つ質問に答えて無いな。」

マリア

「まあ、でも最後の二つの質問は本編でやるので心配しないで下さいね？」

銀八

「っー訳で次回はヒナギク、頼んだ。」

ヒナギク

「私!？」

ハヤテ

「ヒナギクさんなら大丈夫だと思いますよ?」

ヒナギク

「まあ、ハヤテ君がそう言うなら……」

銀八

「そう言う訳だ。次回は多分ヒナギクがやるのでそのつもりで。」

ヒナギク

「まあ、出来るかは分からないけど引き受けた以上はしっかりやるわ。」

それでは、また次回。」

伊澄

「……私、忘れられてませんか?」

一同

「……あ、」

第十一訓

ちゃんとペットの世話するのよなんて言っても結局お母さんがす

桂

「俺は一体いつ出てくるんだ!？」

新八

「だから桂さん…今何処に居るんですか？」

桂

「かくなる上はこの小説を乗っとして……ぐはっ」

銀時

「この小説にツラは出て来ません。行くぞ、新八。」

桂

「ツラじゃ無い!桂だあああ?」

……って嘘?嘘だろ?嘘だよな?」

第十一訓

ちゃんとペットの世話するのよなんて言っても結局お母さんがす

三千院家の屋敷…

言うまでも無くとてつもなく大きい。

どのくらい大きいかと言うと、練馬区の65%を占めるほどである。

庭や別館を差し引いても、屋敷の大きさは目を見張るものがある。

当然、一日やそこらで屋敷を把握する事は不可能に等しい。
まして、屋敷に来たばかりとなると迷子になるのは当然だ…

「アレ…？こつちの道を真っ直ぐだっけ？」

と言う訳で早速銀時は迷子になっていた。

「ったく、もう訳分かんねえよ…下手なダンジョンより遙かにで
えし…」

ぶつぶつ文句を言いながら適当に歩いていると…

「よお、お前か今度新しくお嬢に拾われて来た奴ってのは。」
二足歩行したトラ？にあった…

「しかしお嬢にしては珍しいな…お前ラッキーだったな。」

「……………」

「ああ、悪い悪い！俺はタマって言うんだ。お嬢のペットだ。……おっと、喋れる事はお嬢達には内緒だぞ？知っているのはあの借金執事だけだからな……」

「……………」

「それじゃ、同胞達が待ってるんでな、これで失礼するぜ。」

タマは二足歩行で去って行った。

「……いやいや、ナイナイナイ。」

銀時はまた思った方向へ歩き出した。

「アラ？銀さん、おはようございます。」

「おお、銀時。おはよう。」

「……ああ、おはようございます。」「ようやくたどり着いたのは部屋に向かって歩きだしてから20分はたっていた。」

「どうかしたんですか？顔色が悪いですよ？」「
マリアが銀時によっていく。」

「いや…何て言うか……この屋敷には面白いペットがいるんだな。」

「ああ、タマに会ったのか？」

「え…ああ、あれトラ？だよな？」

「初めて見た奴は皆そう言うんだけどな。あれはネコだ。」

「…ええ！ネコなの！？」

「ああ、タマが赤ちゃんの時に拾ってな…あそこまで育てたんだ。」

「……………」

「銀さん、朝御飯食べます？」

「あ、頂きます。」

銀時はテーブルに着いた。

「そついえばアイツらは？」

「ハヤテ君と庭に出ていますよ？後で行ってみては？」

「ああ…そうだな。んじゃ、頂きます！」

「今日は特に良い天気だな。」
庭の掃除しながらハヤテはつぶやいた。

「って言うか、本当に大きい庭だね…地平線が見えるんですけど…」
隣には新八の姿。

「……よお。」

二人の後ろからひよっこり銀時が姿を現した。

「ああ、銀さん！おはようございます！」

「おはようございます、銀さん。」

「はい、おはよう。」

銀時は二人の前に回り込んだ。

「アレ？神楽は？」

銀時は辺りを見回した。

「神楽ちゃんなら定春に乗って庭駆け回ってますよ。
新八が庭の向こうを指して言う。」

「…そうか。それより、ハヤテ…」

銀時はハヤテにそっと耳打ちした。

「どうかしたんですか？」

「いや……さっき廊下でトラみたいなのが…」

「……ああ、タマですか…」

「やっぱりアレ、トラなの？」

「まあ……トラって言えばトラですね……」

「……………」

口に手を当てて考え込む銀時。

「……どうしたんですか？」

「……いやさ、話しかけられたような気がね、寝ぼけてたのかも知れないけど……」

「……忘れて下さい。覚える必要ありませんよ……」

「誰が覚える必要無いだって？」

銀時とハヤテが声の方向を振り返ると……

「よお！借金執事、それと銀髪パーマ。」

トラが岩の上に腰かけていた。

「タマ、お前……登場の仕方位考えるよな……」

「堅い事言つなよ、借金執事。」

「……かその銀髪とはもう挨拶しちまったしな。なあ？」
「タマが銀時に振る。」

「……ああ。坂田銀時だ。」

「そのメガネも新入りか。俺はタマって言うんだ…ヨロシクな。」

「ああ、志村新八です。よろしくお願ひ……………」

つて、えええええ？」

「何だよメガネ？どうした？」

「何だよじゃねーだろ！何でトラが立ってんだよ！？何で喋ってんだよ！？」

「あゝ、タマは大分変ですから。普通は違いますよ？」

新八に説明するハヤテ。

「変って言うレベルじゃ無いでしょ！？」

「落ち着けよ…銀魂じゃこんな事しよつちゆうだろ？それに喋るペツトならエリザベスが居るだろ？」

「天人は喋ってもペットは喋って無かったでしょ！？
っーかエリザベスはペットじゃねえよ！」

すると、ハヤテが新八に近づいて、

「あのこの事はお嬢様達には内緒に…」

「そこは頼むぜ？これが知れたら俺のイメージががた落ちだからな
…」

「いや、もう既に大暴落ですよ。」

「まあ世の中知らない方が良いこともあらあ。」

三人と一匹で庭を歩いていると…

「銀ちゃん！」

神楽が定春に乗ってこちらにやって来た。

「神楽ちゃん！やっと戻って来た。定春も。」

「ワン！」

定春から降りる神楽。

「これが定春ですか…話しには聞いていたけど、大きいですね…」
定春を見上げるハヤテ。

すると…

「こいつか…」

タマがハヤテの横から現した。

「…？タマ？」

「いいか？定春とやら。この三千院家にいる限りお前は拾われた身だ…」

タマは定春を指差して説教を始めた。

「お前も拾われただろ…」

「この小説でマスコットを語る上では上下関係が必須だからな…
こちら辺でビシッと言ってやらないとな。」

「…いいか？定、今日からお前は俺の舎弟だからな…俺の事は兄貴と…」

バキッ

「…ぐばあ！」

定春が拳を振るった。

「ワン！」

定春は吹っ飛んだタマの元へ走って行き、タマをくわえて、走り去っていった。

「……行きましようか？」

「マスコットも色々大変ですね……」
「ハヤテ達は屋敷に向かった。」

「……ところで神楽、ソレ何？」

銀時は神楽の手を見て尋ねる。

「定春29号ネ！銀ちゃん、これ飼っても良いアルか？」

「ってヒルじゃねえか！！馬鹿！お前捨て来い！」

「いやアル！ペットにするアル！地面に埋められてたヨ。」

「埋められてたんじゃ無いから！自分で埋まってたの！元場所に戻してあげなさい。」

「銀ちゃん酷いネ！」

「ホラ、私にこんなに懐いているのに。」

神楽の腕には大きいヒルが引っ付いていた。

「違う！神楽ちゃん違うソレ！」

血吸われているから！お前が勝手に思い込んでるだけなんだよ。叶わぬ恋なんだよ。」

「何だヨー！カッターじゃん、定春29号！」

「オーイ！誰かコイツ病院連れてってくれ。」

ハヤテ

「ペットの世話は責任をもって自分でしましょう。」

第十一訓

ちゃんとペットの世話するのよなんて言っても結局お母さんがす

教えて！！生徒会長

ヒナギク

「え〜、こんにちは。白皇学園生徒会長の桂ヒナギクです。

では早速質問を紹介します。

『ハヤテ、ナギ、マリアに質問です。万事屋と定春の初めての印象を教えてください。』
ですって。」

ハヤテ

「銀さん達ですか…まあ一言で言うと 凄い ですかね？」

ナギ

「何だその絵に書いたような答えは…」

ハヤテ

「まだありますよ！？え〜と、温かい感じと言うか、アットホーム
って言うか…」

マリア

「あ、それは分かりますね。

何か三人それぞれが家族みたいな絆で繋がっているような…」

ナギ

「ギャグ漫画ならではのノリで何でも出来る…」

ハヤテ

「駄目ですよ！？お嬢様！それ以上は！！」

ヒナギク

「じゃあ、定春は？」

マリア

「……犬ですね。」

ハヤテ

「いや！分かってますよ、マリアさん！？」

ナギ

「でかいしな……」

ハヤテ

「いや、だから！」

銀八

「会長！もう先に進めようぜ！」

新八

「いや！アンタがヒナギクさんに任せたんじゃ！？」

ヒナギク

「では次の質問です。」

『神楽がナギの漫画を読んだら感想を教えてください。』

ナギ

「フツ！今、神楽に『マジカルデストロイ』を読ませる所だ。」

ハヤテ・マリア

「え！？アレを読ませてるんですか！？」

ナギ

「何だ！！その苦い顔は！？」

ハヤテ・マリア

「いや、だって……」

ガラッ！

神楽

「ナギー！！何アルか、この漫画は！？」

ハヤテ・マリア

「（やっぱり……）」

神楽

「続きはどうなるアルか！？」

ハヤテ・マリア

「（えええええ〜？）」

ナギ

「本当か！？本当なのか！？神楽！」

神楽

「全く予想出来ない展開に作り込まれた世界観。素晴らしいアル！」

子供から大人にまで読んで欲しい作品ネ！」

ハヤテ

「伊澄さん以外にも……」

マリア

「理解出来る人が居たなんて……」

ヒナギク

「……では、落ちもついた辺りで今回はお開きに……」

ナギ

「落ちってどういう意味だ!?!」

銀八

「んじゃ、次は誰にするか……」

伊澄

「……………」

銀八

「……………」

伊澄

「……………」

ヒナギク

「…それでは、また次回？」

第十二訓 重要なのはノリとタイミング(前書き)

すみませんでした。何か前話はかなり駄文になってしまいました。

気を取り直して今回です！

第十二訓 重要なのはノリとタイミング

屋敷リビング

「いや、今日も良い天気ですよ！」
新八がカーテンを開ける。

「…ああ。なかなかのクオリティだな。」
ナギもテレビを見ながら言う。

「……いや、ゲームの景色じゃ無くて現実の世界の天気なんだけど？」

「…テレビの方が綺麗だ。」

「………」

「お嬢様……たまには外にでましよう？もうすぐ学校も始まる事ですし。」

「…まだ始まって無いじゃん。」

「………」

新八とハヤテは部屋ですつと引きこもってゲームをしているナギを外に連れ出そうとしていたが…

ガチャ

「…やっぱりダメでしたね…」

「まあ、お嬢様の引きこもりは筋金入りですからね…」

トボトボと廊下に出ると…

「ナギ〜、電話ですよ〜？」
マリアの声が廊下に響いた。

ガチャ

「…ん？誰だ？」

「咲夜さんからですよ？」

「へえ、じゃあ咲夜さんってナギちゃんの友達なんですか。」

「ええ、幼なじみなんですよ。」

「マリアはナギが出てくるのが少し時間がかかりそうだったので、かけ直すと言って一旦電話を切っていた。」

「でも、咲夜さん、何の用事だったのでしょうか？」

「さあ？何でも昨日イタリアから帰って来たって言ってましたけど。」

「イタリアですか……」

「なんでも凱旋門が急に見たくなったそうですよ。
あのローマにある。」

「とんでもないお金持ち何ですね…その人は。」

リリリリリリン

「あら、またかかって来ましたね。
マリアが電話に向かおうとすると…」

「良いマリア、私が出よう。」
ナギがリビングに入ってきた。

ガチャリ

『あ！もしもしナー』

「ポーン。この電話は現在使われておりません。
ご用のある方は発信音のあとにメッセージを残すとお前の家が火の
海だ…」

「……………？」

ガシャーン

「さて、続きをするかな……」

ナギは背伸びをしながらリビングを出ようとする……

「ふーい、花壇の水やり終わったぜ」

「んぐんぐ……」

銀時と神楽が手伝いから戻ってきた。

「おお、何だ二人は外に居たのか。」

ナギは部屋に戻る足を止めてリビングに留まった。

「お疲れ様です、二人とも。」

マリアが二人を労う。

「神楽ちゃん何食べてるの？」

「リンゴネ！庭の木になってたアル。」

「いや、多分リンゴじゃないよソレ。何か紫色だし……何か刺々してるし……」

取り敢えず皆でテーブルを囲む。

「ってかナギちゃん、さっきの電話良かったんですか？」

「ああ、咲に関わると色々と面倒臭いからな。」

「ナギ、またそんな事言つて。」

またこの間みたい窓から……」

ガラガラガツシャーン？

「ぎゃあああああ？」

盛大に割れた窓に新八が飛び退く。

「一方的に電話を切るなと何回言わせるんや！」

女の子が窓から飛び込んで来たようだった。

「ちょっとおおお！何か突っ込んで来ましたよ！？」

「ああ…あれが相沢咲夜さん。」

先程の電話のお相手です。」

新八に説明するハヤテ。

「ん〜？イマイチ決まらんかったなあ…まあええわ。マリアさん、ウチアールグレイな。」

そう言つと咲夜はどっかり椅子に座り込んだ。

「……………」

ナギがアールグレイのカップを持っていつて…

バシヤッ

「熱！マジで熱い！あかんてそれ熱湯やん！温めじゃ無きゃリアクシオンが取れん言つてるやろ！？」

頭にかけられてゴロゴロとのたうち回る咲夜。

「十分取れてるから安心しろ。後頼むから死んでくれ。」

「……………」

目の前の光景に唾然の銀時達。

「…さつき掃除したばかりなのに…」

違う意味で呆然のマリア。

「…で？結局何しに来たんだ？お前は。」
取り敢えず片付けも済んで、テーブルに着く一同。

「連れない事言うなや、ナギ。」

「アンタが面白い連中を雇った言う噂を聞いて遙々来たんや。」

「遙々つて…別に全然遠く無いじゃん。」

「まあ、そんな事はええ。」

咲夜はティーカップを置いて銀時を指差す。

「アンタらがせやる？」

「神楽アル！将来の夢はご飯ですよをご飯にかけて大盛りで食べる事アル！」

「何やそのツッコミ所満載の夢は…！巻田、国枝！」

「かしこまりました！」

いつの間にか神楽の手にはご飯ですよをかけたご飯大盛り。

「やるアルな。久しぶりに良い勝負だったネ。」

握手し合う二人。

「坂田銀時です。趣味は十六連射です。」

「何が十六連射や！己は高 名人か！ゲームは一日一時間か！？」

「おお！何てキレのあるツッコミだ…さっきの窓の体を張ったツッコミと言い、只者じゃ無いと思ってたぜ。」

「ちゅー事はお前、私の力量を測るためにわざと餌を蒔いた言っ訳か…やるな。」

握手し合う二人。

「何かおかしいんですけど、何この会話？何この流れ？」

「そのメガネは…別にいいわ。」

「ちょっと待てえええ！僕志村新八！っ！かここでもメガネ！？何でこの流れで僕だけスルーされるんだよ！？」

「やっぱりな…」

咲夜は新八を指して言う。

「お前がこの三人の中でツッコミの役割やな？」

「…そうですね?」

「アホー!何が、そうですね?や!」

「ほべら!?」

咲夜の蹴りが新八にヒットした。

「ここは自分と役割が被ってる事を指摘して危惧を促すモノローグの一つでも入れんかい!」

「いつも通り無茶苦茶だな…サクの奴…」

「…ええ?そうですね…」

ナギとハヤテがその様子を見守っていた。

「そういえばマリアは?」

「夕御飯の支度をされてますよ。僕もそろそろ行つてきますよ。」
「うむ、そうか。」

ハヤテもマリアの元へ向かって行った。

「いや、もう新八とか良くね？」

「オイイイ！どんな再開の仕方だよ！？さっきの間で何があったんだよ！？」

「確かにそうアルな。っーかツツコミ取ったら新八なんてただのメガネ掛け機ヨ。とことん使い道が無い役立たずアル。」

「酷すぎるだろ！涙出てくるわ！ってか何だよメガネ掛け機って！？ねーよそんな器物！」

そんな万事屋の様子を見て、

「悪かったな、メガネ。」

お前ただの地味なメガネかと思ってたがなかなかのツツコミやな。」

「悪かったと思うならまずその呼び方直して貰えませんか？」

「だが！ウチもツツコミの座を安々と譲るわけにはいかへんのや。」
咲夜は新八を指差して、

「ウチと勝負や？」

言い放った。

「第25回！チキチキ真のツッコミ決定戦〜！」
ワー！パチパチ。

「いや、何ですか！？真のツッコミ決定戦って！？
何で銀さんが仕切ってるんですか…？」

「決着や！真のツッコミとはどんな恐れをも乗り越えられる勇気が
必要やねん。」

「…なるほど、アレをやるのか…」
ナギが意味深な顔で咲夜に尋ねる。

「勿論や。」

「あの…相沢さん？アレとは？」新八が恐る恐る聞く。

「今から……マリアさんに全力で突っ込んで貰う？」

ドーン！！

「第1回！マリアに全力でツッコミを入れよう！大作戦！」

「いや！だから何ですか、ソレ！？って言うか何で作戦？」

「え、今回の作戦は、地味でダメガネな新八がマリアに全力でツッコミを入れて真のツッコミを習得しようと言う作戦です。」

「いや、銀さん！？何で僕限定何ですか？対決じゃ無かったの！？」

「分かって無いな、自分。」

今回の作戦で無事にマリアさんにツッコミを入れられたらお前を認めよう、ちゅうわけや！これは立派な対決や！」

「おかしい！！何かおかしい！」

新八の叫びも無惨に響き渡る。

「でも大丈夫なのか？ツツコミってもマリアは怒らないのか？」
銀時は二人に尋ねた。

「まあ、大丈夫だ。加減さえ間違えなければマリアも分かってくるさ。」

「せやな、加減さえ間違わ無きやな。」

「いや、分かんねーよ！その加減が！！」

「もう諦めろ、新八。お前はやれば出来る子だ。」

「っと言う訳で、次回！新八がマリアに全力でツツコミを入れるぞ
」！

「ちよつとおおお！ナギちゃん！？この件次回に引き延ばすの！？」

「乞つご期待なのだ！」

一方…

「アレ、神楽さん？銀さん達の所に居たのでは？」

「途中で抜けて来たネ。それよりハヤテ！マリア！どんな料理作ってるアルか？」

「味見してみますか？」

「キヤツホオオオオ！！！」

キッチン是比较的平和だった。

第十二訓

重要なのはノリとタイミンダ（後書き）

第十三訓

ギリギリの緊張感が人を成長させる…って

監督が言ってたっけ

どんどん質問、感想を下さい！

お待ちしてます。

銀時

「っー訳だ、作者のためにも感想お願いします。」

新八

「作者のためですか？」

銀時

「そりやお前、アレだよ…」

感想があれば作者も頑張れるからだよ。」

新八

「それならどんどんお願いした方が良いですね！」

銀時

「そう言う事だ。」

ヒナギク

「そう言いつ訳でお願いしますね」

第十三訓

ギリギリの緊張感が人を成長させる…って

監督が言ってたっけ

前回までのあらすじ

銀時

「1793年 フランス。

時の独裁者ロベスピエールによる恐怖政治が人々を震え上がらせる。国王であるルイ16世は全くの無能もよろしく、あまつさえ国民を見捨ててフランスから逃亡しようとするなど大混乱の時代が続いていた。」

そんな中、花屋の娘であるユリアは一人の青年、ハイルと出会う。

これは二人が時代に翻弄されながらも果敢に戦いを挑んだ物語である。」

新八

「何一つかすって無いだろ!？」

頼むから真面目にやって下さいよ!」

銀時

「え、まあ何やかんやで新八がマリアにツッコミを入れる事になったのだった。」

新八

「いや!? 本当にやるの!？」

屋敷リビング

「第一回！マリアに全力でツツコミを入れる！大作戦〜！」

ワー！パチパチ

「いや銀さん？前回もそれやりました。」

「それでは、大会運営長の相沢咲夜さんにお言葉を頂きたいと思えます。」

「え？アレ？だから僕と対決するんじゃないの？やるの僕だけ!？」

「え〜、コホン。只今紹介に預かった相沢咲夜や。」
咲夜は咳払い一つすると、カッと目を見開く！

「ツッコミとは何や？」
新八を指差す。

「…え？」

「自分、このままでいいんか？」

「…いや、いきなりそんな事言われても…」

「アカンなあ…自分そんなんやから、本編中でも地味だのメガネだの言われるわ、人気投票も順位が微動だにしないわ、キャラグッズも少ないわ売れないわでバン イさんも困ってるんや？」

「いやいやいや！？」

何でそんな裏事情まで知ってますか！？

「…かバン イそんな事思ってねーもん！信じねえもん、そんな話」

「あゝ、そういやバン イの奴そんな事言ってたわ。最近絡み辛いつて…」

「私も相談受けたヨ。何か気持ち悪いって言ってたアル。」
神楽が咲夜の後ろからひよっこり現れた。

「何学校の友達みたいな感じで話てんだ！…っーか何か気持ち悪いって何だよ！スゲー傷付いたんですけど！？」

「そうやって少年は傷付いて大人になって行くアル。」

「いや…傷付けたのお前な…」

「…か今まで何処行つてたんだ？」

ナギが一応突っ込んでみた。

「味見アル！」

「まあそう言う訳や…視聴者いや、読者から見てツッコミが如何に大変かを教えてやろうやないか！」

「……何か主旨変わってませんか？」

「しかし何故マリアなんだ？天然ならハヤテだって…」

「甘いナギ。ツッコミはただ突っ込むだけなら誰も何とも思わない。そこに命が掛かってへんと。」

「なるほど…確かにハヤテじゃ突っ込む側にも緊張もヘツタクレも無い…」

「そうや？ギリギリのやり取りと緊張感。これこそがツッコミの真髓言つ事を教えてやらんとな。」

「あの…さつきから聞いてると、この企画そんなに危ないの？」
二人におずおずと尋ねる新八。

「まあ、大丈夫だ…要は加減だ。洒落か本気かを踏み誤まらなければ…」

「因みにマジと捉えられた場合は…？」

「……」

「…と、取り敢えず行ってみようか！」

「…せやな…」

「ちよつとおおお！…？目を合わせて下さいよ！…？」

こうして五人はキッチンに降りて行った。

「いや、キッチンっーより厨房だろ…ココ。」

「やっぱり凄いですね…三千院家…」

銀時と新八はあまりに広い三千院のキッチンに愕然としていた。

「んじゃ、頑張りや自分。男を見せるんや!」

「ええ!?!と云うか具体的に何をすれば良いんですか?」

「ごちゃごちゃ言ってるなヨ!新八!男は度胸アル!」
神楽は新八を蹴り飛ばした。

「いや!?!ちよつと!?!」

新八が覗いてたドアから飛び出す形になった。

「…アレ、新八君?どうしたの?」
ハヤテが近づいて来た。

「…ああ、いや!何にもしない何て悪いからさ?僕も何か手伝おう
と思っ…!」

「まあ、本当によろしいんですか?」

「え、ええ?何でもやりますよ!」

「では、食器を並べるのを手伝って貰えますか?」

「ハイ！任せて下さい。」
マリアに頼まれて食器棚に向かう新八。

くドアの向い side へ

「何とか第一関門突破だな…」

「いや、銀時。本番はここからやで。」

ドアの隙間からこっそりと、それでいてしっかりと覗く四人。

くキッチン side へ（っか新八）

「（ふう…何とか誤魔化す事は出来たが…ここからどうするんだ…）」

お皿を取り出してキッチンテーブルへと運んでいく。

「（マリアさんがボケたら軽い感じでは無く、全力でツッコミを入れ無くてはならない。しかもこのハリセンで…っ）っていつの間にハリセンなんて持ったんだー!?」何故か新八の手にはハリセン。

「（突っ込めってか!?何がなんでもツッコミを入れると!?!?)」

「新八君?どうかされたのですか?」

「あ!いえ、何でもありません!?!」

新八の挙動不審な様子にマリアが声をかけてきた。

「……？そうですか？」

マリアはまた調理に……

「……ん？」

「~~~~」

マリアが口ずさんでる音楽。

「（こゝ、これは！？この聞いているだけでジャンプアニメツアー2008を思いださせるイントロは………ギンタマン！？）」

ギンタマンとは……

東京と言う世界で主人公ギン太さんとその仲間達が繰り広げるドタバタコメディである。流行語大賞の『どんだけ〜』の生みの親とされた、敏腕編集者小西による時代が黄金時代とされる。今尚語り継がれる不朽の迷作。

〜ドアの向こうside〜

「いや、おかしーだろ！？何で？この世界にもあんの、ギンタマン！？」

「当然だ。ギンタマンは素晴らしい作品ではないか。多いに参考にさせて貰ってるぞ。」

「何？お前ギンタマンなんか読んでんの？止めとけよ、ギンタマンなんか読んでると大きくなるぞ？」

「オイ！ギンタマンの何処が悪いんだ。結構頑張ってたじゃないか。」

「二人とも少し静かに。気付かれるで？」

ギンタマンに対する意見を言い争う二人を咲夜が静める。

「キッチンside（っーか新八）」

「（どうする…ツッコミを入れるか？ツッコミにくいわー！って。何でよりもよってギンタマン！？って。）」

「（（（（（
「相も変わらず口ずさむマリア。」

「（いや！この材料でのツッコミはリスクが高すぎる…しかし！行くべきなのか！？行くのかコレ！？）」
新八はハリセンを握り直して、

「マリ…」
「すみません、マリアさん？それって何の音楽でしたっけ？」

新八の声は見事にハヤテに遮られる形となったが…

「ああ、ナギの部屋からよく流れてたもので…いつの間にか覚えちゃってて？」

「ああ！そういえばそうでした。何処で聞いたと思ったんですよ。」
「ハヤテも納得したように頷く。」

「（危ねえええええ！危うく自爆する所だった！）」
新八はハリセンを隠して何事も無かったように食器を並べ始める。

くドアの向こうsideく

「おお…ツツコミって意外に緊張感あるな…」

「そつやナギ。コレこそがツツコミの真髄や。」

「でも、またこれで突っ込むタイミングを待たなくちゃいけないな
つたな…」

「心配するな銀時。マリアはああ見えて天然。すぐにまたツツコミ
所が来るはず。」

『さあ、早く次のボケを…！』
一同がマリアを見つめる。

「キッチンside」

「（何故かまた不愉快な視線を感じますね…）」
「マリアがドアに向かって背を向けて調理している…」

「あら？（キッチンの）窓が壊れている…ま〜どうしましょう。」

「！！！」

「（来た！天然！）」

「（ダジャレ！）」

「（窓！）」

「（行くアル！新八！）」

四人の心の声に新八はハリセンを握りしめて、

「マリアさ…！」

「あ、マリアさん、もしかして今のダジャレですか？」

「ハヤテが被さった！」

「「アホかー？お前は…！」」

「「ぐはっ…！」」

咲夜と神楽がハヤテを蹴り飛ばした。

「全く！この借金執事は！」

「本当ネ！無駄に緊張したアル！」

二人はハヤテを引きずってキッチンを後にした。

「……………なあ、銀時。」

「……………ん？」

「ツッコミは疲れるかも知れない。」

「……………そうかも知れない。」

ナギと銀時も三人の後を追った。

一方…

「まあ咲夜さんもいらしてたんですか…晩御飯を増やそうかしら？」

「いや！そつちじゃ無いでしょ！？」
取り敢えず突っ込んだ新八であった。

「まあ、失敗したけど。あのギリギリのやり取り、楽しませて貰ったで？」

「……ありがとうございます？」新八と咲夜が握手を交わす。

「まあ、ツッコミとしてメガネの事を認めるっちゅー訳や。」

「アレ？認めてくれるのにメガネなの？」

すると、上空からバタバタと音が…

「さて、向かいも来たし今日の所はこれでお別れや！」

ヘリコプターが屋敷の玄関に着陸した。

「ほな、ナギ、それから三人ともまたな！」
そう言って咲夜はヘリに乗って飛んでいった。

「…………忙しい人でしたね。」

「まあ、これで新八のキャラもより薄くなった訳だ…
うんうんと三人で頷く。」

「いやいや！そのまとめ方は酷くないですか!？」

「皆さん、夕飯出来ましたよ。」ハヤテが玄関に降りて来た。

「んじゃ、行くか？」

銀時達は屋敷の中に入って行った。

第十三訓

ギリギリの緊張感が人を成長させる…って

監督が言ってたっけ

教えてー！銀八先生

銀八

「はい、こんにちは。

それじゃ最初の質問。

『今後オリキャラを出しますか？』と云う質問。」

新八

「オリジナルキャラですか…」

ナギ

「当然だ！まずブリトニーだろ！それから…」

マリア

「ハイハイ！そこまですよナギ…」

ナギ

「何故だ？これからせつかく…」

銀八

「オーイ！静かにしろお前ら…」

ズバリ答えます！今後オリキャラは出ると思いますが前回出たあの二人組に關係する人間だと思えます。」

新八

「ああ…霧崎さんと白井さんですか。でもあの人達ってどんな事する人達なんですか？」

ハヤテ

「三千院家本家の警察みたいなものって言ってましたけど…」

マリア

「まあ、本家はもう何があるかなんて私にも全ては分かりませんけど、あの人達はまあ本家の護衛集団と言つのが妥当ですね。」

新八

「幕府お抱えの新撰組と似てますね…銀さん」

銀八

「あんまし嬉しくないな…」

ハヤテ

「凄いですね…やっぱり本家は…」

銀八

「…と言つ訳で近いうちに出ると思つぞ。」

銀八

「それから二つ目の質問は、本編中に入れると思います。楽しみにに！」

ヒナギク

「それではまた次回、是非読んで下さいね！」

第十四訓 今年出来る事は全部やっつけ（前書き）

相変わらずの不定期更新ですが、頑張ります。

感想、質問よろしくお願ひします。

銀時

「っーかよお、そろそろ銀魂、ハヤテのごとくの周期的に長編をやるべきなんじゃね？」

新八

「ちよつと！！今そこ作者も考えてるんですから！」

銀時

「お前ギャグだけでやってくなんて作者の頭じゃ無理に決まってるだろ？」

神楽

「そつアル。適当にシリアスパートとか予告しとけば読者も釣れるネ。」

新八

「釣るとか言つなあああ？」

第十四訓 今年出来る事は全部やっつけ

この世は彼女の味方をしない

「……………マズイんじゃないかな？これは……………」

寒空の下、そう粒やく一人の少女。

西沢 歩 彼女の名前である。

「今普通〜とか思わ無かった!？」
名前に普通もクソもあるのか…

「それにしても……………マズイ。」

彼女がさっきから何でこんなに悩んでいるか？
それには深い訳がある。

世界は彼女の味方をしない

「……数学が、解らない……」

テストの点数であった。

「普通って思ったでしょ！？今絶対思ったね！？」

まあ確かに普通の悩みではあるが、学生にとってこれは由々しき問題なのである。

「そつだよ？学問の悩みは学生にとって……！」

……えっと、一番が恋愛でしょ？

二番目がコレステロールだから……三、四番目にマズイ事なんだよ！？」

……人それぞれではありますかね。

「とにかくくにも、この点数だと、せつかく冬休みの補習が終わったのに……また追試！」

つまり、冬休み中更に補習　ハヤテ君にも会えない　灰色の青春

「……勉強、しなくては！」

「アレ……？歩？」

「その声は、ヒナさん！」
ヒナギクが近づいて来た。

「……どうしたの？顔色が良くないみたいだけど……」

「勉強を！！勉強を教えてください？」

ヒナギクにすがり付く歩。

「えっと、はい？」

…と、まあしがない学生が決意を新たに拳を握る頃…

「いや、なんか商店街が大晦日ムードですね！」

「いやさあ、思ったんだけどこの小説の時間軸ってめちゃめちゃ
や無い？」

「いや、銀さん…そう言っぶっちゃけトークは後書きにして下さいよ。」

「だってだよ？今が大晦日って事は、少なくとも原作でハヤテが拾われから一年は立った事になる訳じゃん？でも実際の原作はまだGWだろ？」

「作者が浅はかだったんですよ。まあ、もうこの小説はハヤテのごとくの間軸はほとんど無視するって言う方針らしいですから。」

「って事は何？今はもう行き当たりばったり状態って事？」

「銀さん！それ以上はマズイですよ！大丈夫です。作者はちゃんとこの後の大まかな流れはしっかり考えてますよ。」

「本当にそうかね。この間の閑話休題でヒロイン決定戦とか表したのはいいけど、女性キャラが少ないから今慌てて出して…」

「ちよつとおおお！？これ本編中ですから！もう止めましょう、その話は！！」

「僕らせっかく買い出しで外を見て回れるんですから、この風景を楽しみましょうよ！」

「風景つてもなあ…大晦日なんざ、何処も同じじゃねえか…」

日に日に寒さが増すのは、今日12月31日。今日は言わずと知れた大晦日である。

三人がこっちの世界に飛ばされてからもう10日が経っていた。

因みにこの二人は只今買い物中である。
大晦日を夜に控え賑やかな夕方の商店街をフラフラと歩いているのである。

「ぱっつあんよお、俺ちよっとジャンプ買って来るから先に買い物しててくれ。」

「後からちゃんと来て下さいよ?」

「わあってるよ…」

ヒラヒラと手を振りながら銀時はコンビニに入って行った。

ウーン

「いらっしやいまー…アレ? 銀さん…」

「おお! 長谷川さんじゃねえか…」

レジに長谷川の姿を見つけた銀時だった。

「…まったく、結局来なかったじゃないか…先に帰っちゃいますよ？本当に…」

ぶつぶつと文句を言いながら屋敷へと足を向ける。

「アレ？新八君？」

公園の前を通り過ぎると聞いた事のある声に呼び止められた。

「ああ、ヒナギクさん！」

振り返るとヒナギクがこちらに手を振っていた。

新八は取り敢えずヒナギクの元へ向かう。

「どうしたの？買い物中？」

「ええ、今日は大晦日ですからね。……えつと？」

新八は歩に目を向けた。

「ああ、こちらは…」

その刹那、二人の間にコナン君が何かよく思い付いた時に頭に流れるアレが流れた。

「どんだけ適当な説明なのよ……」

二人はとっさに感じとった。

この人は……自分と同じだ、と。同じキャラでまとめられてると。同じ穴の地味な奴だと……

「ってやらすなあああ！！何が同じ穴の地味な奴だよ！？途中から完全に僕達以外の思考が混じってたたる！」

「ちよつと酷いんじゃないかな！」

「……………貴方達……？」

ヒナギクが驚いてっーか呆れ二人を見た。

息がピツタリである。

「あゝ、すみません？何か。僕は志村新八って言います。」

「あ、西沢歩です。よろしくお願いします。」

地味による地味のための地味な挨拶も終わり、

「「何でゲティスバーグの演説っぽくなってんだ（なってるのかな）」

！」「」

「本当にピッタリ……」

素直に驚いているヒナギク。

「……あの西沢さん。もしかして……同じ事を考えてませんか？」

「多分ね……」

「「初めて会った気がしない……」」
見事に八モる二人。

「……………？」

「色々、苦労してるんだね……私だけじゃ無かった。」

「ええ、本当に……これからよろしくお願いします。」

二人は堅い握手を交わす。

そう、これは友情とも同情とも、地味キャラ同盟の始まりであった。

「……………」

そんな二人をどうしていいのか分からない表情のヒナギク。

「……えっと、二人とも？取り敢えずナギの家に行かない？」

何故かそう言う結論に至った。

「へえ、じゃあ西沢さんはハヤテ君の知り合いなんですか。」

「あ…うん。ハヤテ君は昔の学校のクラスメイトで…」

「そうなんですか。そういえばお二人は知り合い何ですか？」

「ええ、まあ色々ね。」

三人は歩き出した。

「お二人はナギちゃんの家にご用が？」

「うん。今日は大晦日だしね。皆でパーッとやろうかなって。」

「それ良いですね！ヒナさん！（ハヤテ君にも会えるし。）」

「楽しい大晦日になりそうですね。」

と言う訳で、三人は屋敷に向かった。

一方…

銀時達は公園のベンチに腰かけていた。

「そっか。まだ仕事は見つからねえのか…」

「ああ、でもあのアパート家賃は安いからフリーター生活でも着々とお金は貯まるから。もう少し貯めたらしっかり探そうと思ってるんだが…」

はあっと溜め息を吐く長谷川。

「この後は仕事あるのかい？」

「いや、今のバイトで今日は終わりだ。」

「そっか…んじゃ、ちょっと付き合ってくれないかい？」
そう言つと銀時は腰を上げて歩き出した。

「銀さん？何処に行くんだよ？」

「まあ、取り敢えず付いてきなつて。」

次第に二人の影が大きく伸びゆく。

「ああ、新八君！お帰りなさい！…ヒナギクさんも西沢さんも、どうしたんですか？」

「いや、買い物帰り道にばったりお会いして、まあ今日は大晦日なんで皆で楽しくやるうって言う話に…まずかったですか？」

新八の後ろからヒナギクと歩が顔を覗かせた。

「良いですね お嬢様も喜んで…」

「…くれる訳無いだろ！大体ヒナギクはともかくなんでハムスターまで居るのだ！？」

「お嬢様？」

ハヤテの後ろからナギが突然現れた。

「む！ナギちゃん。別に良いんじゃないかな。今日大晦日だし。」

「そうですね、お嬢様？せっかくですし。」

「ダメだ！……つと言いたい所だが、まあ良いか。」

「お嬢様……」

ニッコリと微笑むハヤテ。

「今日だけだから……」

「素直じゃないわね……本当に。」

「ですね……」

新八とヒナギクは後ろで顔を見合わせる。

ナギの後に続いてヒナギクや歩も屋敷の中に入ってゆく。

入れ替わりにマリアが出てきた。

「新八君、お疲れ様です。」

「ああ、これを。」

新八がマリアに袋を渡した。

「銀さんはどうかしたんですか？」

「あゝ、あの人は……」

新八が言葉を濁す。

「あ、銀さん！」

後ろでハヤテが手を振っている方向から銀時と長谷川がやって来た。

「銀さん！どうしたんですか？」

「実は頼みがあるんだけど…」

銀時はハヤテとマリアを手招きする。

「長谷川さん！銀さんと一緒に居たんですか？」

「ああ、まあね。っーかここ、でか過ぎじゃね？」

「ハハ…」

新八が長谷川に寄っていった。

「…では中に入りましょうか？長谷川さんも。」

「え？」

「まあ、大晦日だ…一人より大勢の方が楽しいだろ？」

銀時は長谷川の肩を叩いて屋敷に入って行った。

「銀さん…」

新八も銀時の後を追った。

「いいのか？」

「大勢の方が楽しいですからね。」
「マリアも長谷川にそう言った。」

「それじゃ僕らも入りましょうか。」

三人も屋敷に入って行った。

「しかし、ことう人数が多いと宴会の間を使った方が良いんじゃないか？」

「そうですね。」

ナギの問いにマリアが答えた。

「宴会の間！？そんなものまであるんですか！？」

「まあ普段は全く使わないけどな……」

「おおおおお！！！」

一同は宴会の間と称される所に着いた。

「大きいアルな！」

「前に迷った事がありますね……」「アンタはそればっかやな……」

「神楽ちゃん、伊澄さん、咲夜さん……今まで何処に居たの？」

「では、ハヤテ君。料理を運んぶのを手伝ってくださいますか？」

「はい！」

「あ、僕も手伝いますよ。」

三人は宴会の間から出ていった。

「流石に三千院家だね……この部屋だけでウチのマンション何部屋分
？」

「ありがとね ナギ。」

二人がナギに近づいた。

「ふん！…まあ、また暇な時があったらな…」

「本当に素直じゃ無いわね」

「な！？…どういう意味だ！！」

「なんや自分、そのグラスン突っ込んで欲しいんか？」

「え？それはどういう意味？」

「何かそのサングラスに不思議な気を感じます…」

「え！？マジで！？」

咲夜と伊澄が長谷川に近づいた。

「そいつはたたのマダオアル。
覚えなくてヨロシ。」

「ちよつとおおお！？初対面の人にそれは無いんじゃ無いの！？」

「マダオ？何やそれ？」

「まるでダメなおっさん、略してマダオアルな。」

「アハハハハ！それ頂きや！」

「いや、おかしいよ！？この娘達！？」

「皆さん！ご飯出来ましたよ！」ハヤテ達が料理を運んで来た。

ガヤガヤ…ガヤガヤ…

すっかり賑やかになった宴会の間。

「銀さん。安いお酒ですけど、どうぞ?」

ハヤテが銀時の隣に来て、お酌をする形になった。

「ハヤテよお…確かに高い酒は美味いけどな…」

そう言って銀時は周りを見渡す。

長谷川

「ちよつとおおお!?!それ俺のご飯でしょ!?!」

神楽

「うっさいアル!!マダオは黙ってるヨロシ。」

新八

「神楽ちゃん！それは酷いんじゃない…」

神楽

「ダメガネ（童貞）は黙ってるヨ！」

新八

「オイイイイ？最高級の悪口だろ、てめー…！」

咲夜

「アツハハハ！神楽毒舌やな」

ナギ

「何をー！！私なんかハヤテにな…！」

歩

「私だってハヤテ君に…！」

ヒナギク

「……」

伊澄

「（ポケ〜）」

「こつやって、コイツらの笑顔を肴に飲む酒は……どんな酒より美味いからな……」

銀時は一口啜った。

「そうですわね……」

いつの間にかマリアが銀時の隣に来ていた。

「銀さん達が来てから、繋がりが大切だって皆改めて認識してるよ
うに思いますわ。勿論私も。」

「俺らは別に関係無いと思うがね……」
また銀時は一口啜る。

「フフッ……」
クスリとマリアが微笑む。

「あ、マリアさんもどうですか？」

「おお、今日くらい飲め飲め！」二人はマリアにお酒を……

「……私、未成年ですよ？」

マリアの笑顔に影がさす。

「あ、いやいや！？」冗談ですよ！？（銀さんも謝って下さい！）」

「そうそうー！！（馬鹿！ハヤテ、もっと謝れ！）」

「どうして私がお酒を飲めるって思ったのかしら？二人とも……」

ぎゃあああああああ？？

断末魔の叫びが宴会を包んだ…

…ま、そう言う訳で深夜となり…

銀時

「よーし。皆そろそろ行くぞー！」

神楽・伊澄・咲夜

「3？」

ヒナギク・歩・長谷川

「2？」

ハヤテ・ナギ・マリア

「1？」

銀時

「あけまして〜」

一同

「おめでと〜いございます？」

こうして、騒がしくて何処か微笑ましく年が明けるのだった…

新八

「いや、僕はあああああ？」

第十四訓 今年出来る事は全部やっつけ(後書き)

教えて!! 銀八先生

新八

「アレ?交代制だったんじゃない無かったんですか?」

伊澄

「……(コクコク)」

銀八

「まあアレだよ…また暫くしたらな…」

伊澄

「……(じ〜)」

銀八

「……」

伊澄

「……(じ〜)」

銀八

「んじゃ、始めるか。」

伊澄

「……!!」

銀八

「それでは、最初の質問です。」

『銀時と神楽は三千院家でちゃんと仕事してるの?』

ハイ、…ズバリ答えます!

勿論銀さんも神楽もしっかりやっています。

具体的には庭の掃除とか花壇の水やりとか屋敷の掃除の手伝いとかです。」

神楽

「いつもいつも一生懸命頑張ってるアル!」

新八

「ちよつと待てええええ!! 銀さんとはもかく神楽ちゃんほとんど遊んでばかりだろ!」

神楽

「第十二訓でも仕事してたヨ。」

銀八

「おめーは定春に乗って庭にある食い物探してただけだろ…」

ナギ

「つと言つか、そもそも三人は護衛として雇ったから本職は護衛だからな。」

マリア

「確かに今はあまり出番は無いかも知れませぬ。」

ハヤテ

「いや、無いにこしたことはないんですけどね…」

銀八

「続いての質問。」

『アイドルオタクの新八に質問です。僕にはお前みたいな糸屑の気持ちは分かりませんが、お通ちゃんが居ないけど寂しいですか？』
だとよ、新八。」

新八

「オイイイイ？明らかに僕に対する嫌がらせが含まれてるだろ！！
質問そんなじゃ無かったでしょ!？」

神楽

「変わんねーよ。どっちにしても糸屑だろうが。」

新八

「ちよつとおおお!？標準語になってんぞ!!」

銀八

「…で?どうなんだ、ぱつつあん?」

新八

「まあ、お通ちゃんの音楽はウオークマンに全て四曲ずつ入れてますから。まあ、何とか大丈夫です。あ、三曲って言っても通常収録版、ライブ版、イントロ版、アレンジ版ですから。でも…」

銀八

「もういい。うぜー」

神楽

「マジキモイアル。暫く私に話かけないで。」

新八

「……………（涙）」

銀八

「じゃあ、最後の質問だ。」

『伊澄と咲夜から見て銀さん達はどうなんでしょうか？』

「オーイ、どうなんだ。二人とも。」

咲夜

「せやな…自分らトリオのバランスがよう取れてるわ。特に銀時と神楽のポケ2に対してツツコミの割合が良いな。まあメガネのセンスは別として。」

新八

「いや、最後までメガネなんですか！？」

咲夜

「確かにメガネのツツコミは中々のもんや。ただなあ…」

新八

「もう僕に対するダメ出しになって無い？」

銀八

「んじゃ、伊澄は？」

伊澄

「最近出番が少ない気がします。」

銀八

「あゝ、分かった分かった！ちゃんと作者に言っておくから。」

伊澄

「……銀時様は何か悪い気が頭に取り付いているみたいです。」

神楽

「何アルか？」

銀八

「実は悪い魔法使いに瞳術をかけられてこんな醜いパーマになってしまったんだよ……」

新八

「銀さん…瞳術とか言っちゃダメです。」

銀八

「んじゃ、写輪眼。」

ハヤテ

「せめて伏せ字にしてください……」

伊澄
「神楽は…」

銀八
「アレ？銀さんこれで終わり？」

伊澄
「神楽は、とてつもない力が彼女を取り巻いていますね。」

新八
「（まあ、夜兔ですからね…）」

伊澄
「ナギのお友達ですし、とても良い人だと思いますよ。」

神楽
「エへへ（照）」

伊澄
「メガネさんは…良い人だと思います…」

新八
「新八君！？僕の名前は新八ですううう！！」

銀八
「え、作者から個人的に質問があるそうだ。作者！」

伽藍

「ハイハイ！すみません、え〜と【月光閃火】さんにご質問なんです
が、考えて貰ったキャラで、あれは現代の人物と考えて宜しいん
でしょうか？もしそうならば、その世界での生活とか学校とかを詳
しく教えて下さいませんか？」

銀八

「オイオイ。あんまり読者様に迷惑かけるなよ？オリキャラっての
はてめーで考えるもんだろ？」

伽藍

「うゝ…まあ折角提案してくれたんだしさ…」

銀八

「まあ、そう言う訳だ。もし読んだら質問に答えてやってくれ。」

ヒナギク

「次回は前に質問があった『銀時とハヤテ君と長谷川さんが賭けを
したら誰が勝ちますか？』
に応える本編になりますので。」

それじゃ、また次回！」

第十五訓

人生は最も過酷なギャンプル（前書き）

最近色々な人の銀魂の小説を読んでいます、どうして皆さんあんなに面白く文を書けるのだろうか…

未だに成長の無い自分が情けないです（笑えねーよ）

第十五訓

人生は最も過酷なギャンブル

「ハヤテ！銀時！ギャンブルをやるぞ！」

高らかに宣言するのは言わずと知れた三千院ナギ。

「……」

「何だどうした二人とも。そんな顔をして。」

「……いや、お嬢様？話が見えないのですが……」
そしてその執事綾崎ハヤテ。

「何だ、忘れたのか？質問があつただろう。ハヤテ、銀時、長谷川で賭けをしたら誰が勝つかってやつ。」

「まだ覚えてたのかよ……何だかんだでうやむやにしようとした作者の気持ちを汲んでやれよ。」
こちらは坂田銀時。

「いや、駄目ですよ！？銀さん。
それを言つては……」

「まあ、とにかく！思いついたら吉日だ。皆を呼んで来よう。
今日は屋敷のカジノに案内しようではないか！」そう言つてナギは

部屋を出て行くこと…

「あ、お嬢様！」

「む？どうした？」

「あけましておめでとつございます！…」

「おめでとさん。」

ハヤテと銀時がお正月のご挨拶。

「ああ、そうだったな…設定は正月だったか。」

「お嬢様…皆さんにしっかりとご挨拶を…」

「うむ！あけましておめでとつ！そして今年初めての遊戯は…ギャンブルなのだ！」

「……………」

「…そういえば後書きでそんな事言っていましたね。」

「…ってか本当にあるんですか？カジノなんて。」

取り敢えず朝御飯を食べる一同。長谷川は三千院家に泊まったという事で。他の皆さんは深夜に帰宅しました。

「まあ、カジノと言うよりギャンブルルームだな…」

前にも言ったように地下に帝のじじいが作らせたんだよ。一度も使った事が無いけど…」

「（モグモグ）しかし何でまた今日なんだ？」

サラダを頬張りながら銀時がナギに尋ねた。

「まあ、それは行ってからのお楽しみだ。」

「……………？」

疑問に思いながら取り敢えず朝御飯を片付ける一同だった。

ギャンブルルーム

「おお!!」

地下に降りて行った一同は噂のギャンブルルームに到着した。

とてつもなく長いバーカウンター、だだっ広いラウンジにスロットルーム、ビリヤード、カード、ルーレット、あまつさえ畳の広場の博奕部屋には丁半代打にチンチロリン、双六、花札に麻雀と各部屋に分かれている。

「いや、何処の国……?」

当然五人は唾然を通り越して呆然。

「本場には敵わないらしいがここもまあまあな広さらしいな。」
ナギが周りを見渡して言う。

「いやいや!!何、本場って!」?

何処と張り合おうとしてるんですか!」?

「私は時々掃除に来ますけど…実際に使うのは初めてですね……」

「掃除って、お前こんなにでかい所掃除してるの?」

「このくらい屋敷に比べなら何て事ありませんよ」

「……………」

銀時は尊敬と呆れの入り混じった目をマリアに向けた。

「でもお嬢様？こんなにあるの中の何で勝負するですか？」

「実は、今回三千院家がゲーム産業で新しい機械を開発したようだな、それがもう30分くらいで届くんだが……………」

「ゲームですか…………？」

「うむ、まあ届いてから紹介するとして、それまでは……………ってナギが周りを見渡すと、

「双方とも良いですね…………？」

「行かせ、長谷川さんよ……………」

「おう銀さん、マダオスパイラルから抜け出すために…………！」

銀時と長谷川は畳の広場の丁半代打の部屋に移動していた。

「入ります…………！」

恐らく屋敷の従業員と思われる男が器にサイコロを入れる。

因みに衣装まで本格的だ。

そして器を逆さにして、

「さあ！張った張った！！」

「「丁おおおおお？」」

客は銀時と長谷川の二人だけであつた：

「お前らは何をやってるんだ？」 呆れ顔でナギは尋ねる。

「……………」

ナギ達の前には丁半でボロ負けした惨めな顔をした二人。

「…ハヤテ君に引けを取らない運の無さですね……………」

「……………マリアさん？さりげなく刺さって来ます……………」

二人もあさましい様子。

「まあ、本当の博奕じゃ無くて良かったよな…」

「ああ、そうだよ。ツイてる。ツイてる。」

「どんだけ前向きなんだ、お前ら…」

「ギャンブルは常に前向きじゃ無いとやってけ無いんだよ。」

「いや…そうなる前に止めるよ…」

ナギが二人とそんなやり取りをしてると、

「ナギ〜！届いたアルよ！」

神楽が小さめな箱を重たそうに抱えて来た。

「どうやら来たようだな…」

「はあ…なるほど、つまりこれはゲーム機なんですか…」

箱を開けると、ボックス状のゲーム機のような物が出てきた。
ナギを中心にボックスの周りに集まる。

「うむ、機械名は【HAL】。
まだ試作品らしいのだが。」

ナギはそう言ってHALをラウンジに設置し始める。

「何かゲーム ユーブみたいアルな。」

「フツ、確かに見かけはゲーム ユーブだが、中（内容）は凄いで
？」

ナギは不敵に笑うと六人に何やらメガネのようなものを配った。

「何ですか、コレ？」

渡されたゴーグルを見て各々首を傾げる。

「取り敢えずみんな掛けてくれ。」

皆はゴーグルを装着した。

ナギ

「物語中に説明するのも面倒なので、私から【HAL】を紹介させてもらおう。」

この【HAL】は一般的に言うゲーム機だ。

このハードはセットのゴーグルを使うゲームで、【HAL】最大の特徴の一つ、ゴーグルを掛けた人間は【HAL】のゲームの世界にまるで入り込んだようになる事だ。

これはまあ、『銀魂』の17〜18巻に出てきたゲーム機と同じ特徴と考えると貰って良い。

しかし、【HAL】の特徴はこんなものではない。

実際にプレイしてない人達もゴーグルを掛けた人間ならばゲームの世界に入り込む事が出来る事だ。

しかも、この【HAL】にはゴーグルに1〜6のダイヤルが付いていて、プレイヤーは自分の番号を指定してゲームの世界に入り込む訳だが、ギャラリィはダイヤルをプレイヤーの番号に回すだけで、そのプレイヤー視点でゲームの世界に入り込む事が出来るのだ。

この【HAL】には痛みや感覚を感じる事はないが臭いなどは感じることが出来るというのが最後の最大の特徴だな…

まあ、そう言う訳だ。」

ナギは皆に説明し終わると、【HAL】のスイッチを起動させた。

「では今回はお子様から大人まで親しみのある『人生ゲーム』で三人に戦って貰う！」

ずっこける一同。

「何で人生ゲーム！？そんなものいつでも出来るだろ。賭事って質問じゃ無かったか!？」

「甘いぞ、銀時。人生ゲームは運だけではなく、知力、計算、決断力。それら全てを兼ね備えた上での勝敗を決めるゲームだ。これは立派なギャンブルだ。何せ人生が懸かってるからな……」

「いや、ただの双六だろ……」

「銀さん、ナギちゃんの言う通りだ。」

長谷川が銀時の肩に手をおいた。

「人生つてのはギャンブルだ。俺達は人生を求めてさまようギャンブラーさ……」

「うるせーよ。」

「そもそも、双六と言うものは古来インドより伝わった賭事なのだ。平安時代の文献にも記されている。まあ、当時の双六は今現在のとは全く異なるがな。」

「あの、お嬢様？そろそろ始めないと……」

「む、そうだったな……」

ナギは【HAL】にROMを書きこんで起動させる。

「で？俺らはどうすりゃいいんだ？」

「銀時、ハヤテ、え」と……グラサン。お前達三人はプレイヤーだ。ゴールの横にある赤いスイッチを押してくれ。」

銀時達三人は言われた通り赤いスイッチを押す。

「そろで私達、言わばギャラリーはもう片方の青いスイッチを押すんだ。」

残りの四人は青いスイッチを押した。

「じゃあ、プレイヤーは取り敢えず【HAL】の近くに我々は少し距離をとろう。」

では、ゲームスタート！

ここからは全てバーチャル世界での進行になります。かなりツツコミ所はありますが大目にみてやって下さい。

「おお〜？」

銀時達の前に広がるのは巨大なボード。人生ゲームのボードである。

すると突如上から光が…

「こんにちは。僕はこのゲームの案内人の天使です。」

ゲーム版人生ゲームをやった事ある人なら誰でも知っているあの天使です。

「今からこのゲームについて説明しましょう。」
銀時達三人の上から語りかける。

因みにナギ達はボードの外で三人の様子を見物中。

「では説明します！」

まずこのゲームは言わずと知れた人生ゲームです。
プレイヤーはルーレットで出た数だけマスを進んでいきます。

このゲームではマス目に止まるとイベントモードに進行します。このモードではプレイヤーがマス目に書いてある状況に飛びます。そうして、プレイヤーは試練を課される場合もありますし、選択を迫られる場合もあります。

選択次第ではゲームオーバーになるものもありますのでお気をつけ下さい。

又、ギャラリーはイベントモードの都度、プレイヤーの番号にダイヤルを合わせる事でプレイヤーがイベントをしている所を見る事が出来ます。

無事にゴールすればクリアとなります。

では頑張ってください！」

天使は銀時達の前に降りて来て一人一人の頭の上プレートを出した。

「何だ、こりゃ？」

「名前が設定されます。」

天使がそう言うと頭の上に名前が表示された。

銀時の上には『きんとき』

ハヤテの上には『はやて』

長谷川の上には『まだお』

きんとき

「いや、あの名前間違っただけど…きんときになってるんですけど…」

天使

「このゲームでは漢字以外の四文字以上の名前は設定出来ません。」

きんとき

「何でこんなにスゲー機械なのにそこだけファミコン並のスペックなんだよ…」

まだお

「って言うかなんで俺はマダオなの!？」

天使

「ではゲームの難易度とコースを設定して下さい。」

まだお

「ちよつとおおお!？」

はやて

「どうしますか?お嬢様？」

ハヤテはボードの外のナギに声をかける。

「うーん、どうしようかな。」「あまり時間が掛かってモアレです
からコースは短いので良いんでは無いですか？」

考え込むナギにマリアが提案する。

「そうだな、じゃあ一番短いこの『人生省略コース』にしよう。
難易度は普通で。」

天使

「了解しました。」

【人生ゲーム：人生省略コース】

三人はスタート地点に集められた。

天使

「では、まずプレイヤーの順番を決めます。」

そう言っつて天使はルーレットを出現させた。

天使

「では、それぞれルーレットを回して下さい！」

きんとき

「じゃあ俺からだな……」

銀時はルーレットを回す。

………3だ。

はやて

「次は僕ですね……」ハヤテのルーレットには5と出た。

まだお

「最後は俺か。」

長谷川のルーレットは2だった。

天使

「ではマダオから、ゲームスタートです！」

まだお

「何か納得いかない……」

天使の掛け声と共に

三人全員に20万円が配給される

くまだおく

まだお

「俺が最初か……よし、ここで俺はのしあがってやる！」

長谷川がルーレットを回す。

………5だった。

まだお

「おお！最初から好スタートか？」

長谷川はスタート地点から五マス目に向かって歩き出した。

まだお

「1、2、3、4……5つと！」

長谷川が五マス目に到着する

【職業選択マス】

まだお

「おお!？」

長谷川の姿が消えた。

きんとき

「アレ、消えたぞ？」

はやて

「イベントモードって言うのに飛ばされたんじゃないですか？」

では、ダイヤルを長谷川の番号3に合わせて下さい。

まだお

「ん?ココは？」

長谷川は白い空間に飛ばされていた。

????

「あのく、すみません。」

マダオ

「はい？」

振り返ると見知らぬ男が立っていた。

????

「あ、すみません！ブラッド・ピットと間違えました。」

まだお

「ぐはああああ？」

長谷川は胸を押さえて踞る。

????

「貴方のような人材を探してました。是非ともウチで俳優をやりませんか？」

まだお

「やるやる！超カッターじゃん、ブラッド・ピット！」

????

「かしこまりました。」

まだおは俳優の卵になった。

まだお

「そうか！次の職業選択マスに止まれば俺は俳優になれるんだな！」

やった？勝ち組だ？」

《ナギ》

「何ともえげつない手だな…」

《新八》

「格好良いですからね…ブラッド・ピット。」

《神楽》

「哀れな奴アルな。」

《マリア》

「ところで大丈夫何ですか？伏せ字にしないで。」

《ナギ》

「まあ、流石に世界まで行けば平気だろ。だれもこんな小説読んで無いさ。」

因みに、ギャラリーの会話は三人には届きません。

長谷川は盤上に戻って来た。

きんとき

「オーイ！長谷川さん、大丈夫か？」

プレイヤーは同じプレイヤーに起こっている事は見えません。

まだお

「いや〜！！ハハハハハハ！」

はやて

「どうしたでしょう？長谷川さん？」

きんとき

「……さあ？」

〜きんとき〜

きんとき

「次は俺か……」

銀時はルーレットを回す。

……6だ。

きんとき

「お！いいねえ！」

銀時は六マス目に向かっていく。途中五マス目の幸せそうな長谷川を通過する。

そして六マス目に到着。

【職業選択マス】

きんとき

「うお!?!」

銀時も盤上から消えた。

きんとき

「?」

見渡すと床屋のような空間。

目の前には店主と思わしきおやじ。

????

「ややつ! 貴方の頭…それは伝説の T e n N e n P a r m a n e n t では!?!」

きんとき

「オイ、ハゲ。てめーの残り少ない昆布をむしってやるのか?」

ハゲ

「フン、中々威勢の良い奴だな。……どうだ、兄ちゃん? 美容師を目指して見ないか?」

きんとき

「あ…?」

ハゲ

「お前なら美容師王になれる！
わしの目に狂いは無い！」

きんとき

「何だよ、美容師王って？
今人気のON P E C Eにひよって海賊王気取りか？
大体王になって何が得られるんだよ？」

ハゲ

「そうじゃな…例えば…」
おやじは銀時の頭を指す。

ハゲ

「お主のパーマが直る！」

ドーン？

きんとき

「……し、仕方ねえな…お、俺がやっつてやるよ…」

美容師王に俺はなる？」

《マリア》

「簡単に落ちましたね……」

《新八》

「ハハ……？」

《ナギ》

「…私も身長が伸びるなら……」

《神楽》

「ナギ……？」

銀時も盤上に戻って来る。

きんとき

「いやっほおおお？ 遂にこの頭ともお別れだー！」

はやて

「銀さんもうしたんだろっ？」

「はやて」

はやて

「さて…僕か。」

ハヤテもルーレットを回す。

………3だ。

はやて

「まあまあかな。」

ハヤテもマス目に歩いていく。

【決断マス】

はやて

「アレ？職業選択じゃ無いの！？」

盤上からハヤテも消えた。

はやて

「アレ？何処だろう？？」

黒い空間にポツンと一人。

?????

「少年よ……」

はやて

「え？」

声の方向に振り返るハヤテ。

サンタ

「久しぶりだな……少年よ。」

はやて

「貴方は！？サンタさん！」

詳しくは『ハヤテのごとく』一巻で。

サンタ

「さて……少年。ここは決断マスだ。君は今から決断を迫られる。上手く選択すれば君は幸せを手に入れられる。だが失敗すればいきなり序盤で不幸になるぞ？」

はやて

「……はい。」

サンタ

「では、決断の時だ！ジャッチメント！」

貴方の目の前に借金で泣いている女の子がいます。

どうしますか？

1・僕は男だ！「借金を肩代わりする」

2・実は女の子だ！「一緒に泣いてあげる」(注)このゲームで性別から全て女性になります。

3・もう止める！「全裸になる」

はやて

「(あ…、コイツ全然幸せをくれる気無いや…」

サンタ

「さあ！決断じゃ！」

《ナギ》

「開始一回目にして早くもピンチとは…やるなハヤテ。」

《新八》

「完全に悪ふざけですね…これ作った人達。」

《マリア》

「まあ、もう発売は出来ませんね…」

盤上にハヤテが戻ってくる。

きんとき

「おお！大丈夫か？ハヤ……」

はやて - 2億

「……………」

ハヤテの頭の上には借金の文字。

きんとき

「……………」

はやて - 2億

「……………」

ハヤテは借金が出来た。

約束手形を50枚手に入れた。

《ナギ》

こんな所でまで借金なんて、どんだけついてないんだ…アイツは…」

《マリア》

「それ以上言うとハヤテ君、泣いちゃいますよ……」

《神楽》

「運命は恐ろしいアルな。」

《新八》

「っーか初っぱなからどんだけ危険な選択肢あるんだよ!?
聞いたことねーよ、こんな人生ゲーム!!」

天使

「さて…三人の戦いは一体どういった結末を向かえるのか!？」

次回に続く!」

《新八》

「続くのおおお!？」

第十五訓

人生は最も過酷なギャンブル（後書き）

緊急告知？

銀時

「銀八先生のコーナーは次回に繰り越します。今回は緊急告知と言う事で、お送りいたします。」

新八

「一体何が緊急何ですか？」

銀時

「ヒナギク、説明を頼む。」

ヒナギク

「えっと、実はこの銀魂のごとくで遂に長編が出来る事になりました。」

新八

「おおー！！長編ですか。…でもこれのどの辺が緊急なの？」

ヒナギク

「その事何ですが、皆さんが考えてくれたキャラクターのことをまずお話ししなければなりません。」

新八

「ああ、皆様が考えてくれた…」

ヒナギク

「まず、その長編には光軍さんが考えて頂いたキャラクターが中心として登場する予定なのです。」

新八

「じゃあ、他の二人の考えてくれたオリキャラは？」

ヒナギク

「サデイストさんが考えて頂いたキャラクターはその長編の後の話に出て来る…と言うよりその話は完成しているそうです。」

神楽

「ロリコン野郎アルな。」

新八

「神楽ちゃん！まだ登場もしてないのにそれはマズイよ！」

ヒナギク

「非常に二つの作品の世界観に合っているので準レギュラーにした
いと作者が言ってますので長編が終わるまでお待ち下さい。」

新八

「長編って言っても普段より少し長い位でしょうからそんなに時間はかからないと思いますよ。」

ヒナギク

「閃火さんの考えて頂いたキャラクターは…実はまだ考えて付いていないんです。」

新八

「どうしてですか？」

銀時

「そりゃアレだよ…そのキャラクターは高校二年らしいけど、まだハヤテ達は一年の設定なんだな、コレが。」

新八

「え？だって、それじゃ時間のズレが…」

銀時

「だから色々あんだよ。つまり拾われてから一年経ってる時間軸だけど、まだハヤテは一年って言っちゃやこしい設定になってしまったんだよ…作者が馬鹿だから。」

新八

「でもだったら設定を同じく一年にすれば…」

そこは私から説明させていただきます。

作者

「まず、すみません？本当に。」

キャラクターの設定がかなり細かいので今現在、出せる材料が揃って無いのが二つ目の理由です。

二つ目はバサラを全く知らないの、そのキャラクターの家系とか何故現代人に二つ名が付いてるかが全く分からないのです。

今アニメやらパソコンで色々調べていますが、この小説の世界観とどうやって合わせるかを検討中です。これが厄介で暫く時間がかか

りそうです。

とにかく本当にすみません！

かなり遅れる可能性があります。しかし必ず出しますので、暫し「辛抱下さい。」

ナギ

「ふむ、まあ確かにバサラを全く知らないときついだろうな…しかし、バサラも知らない何て、とことんダメな奴だな…」

作者

「うるさいな…俺は代々三國無双派なんだよ…孫尚香なの！星彩なの！チヨウ蝉なの！」

ナギ

「全員女じゃん…」

神楽

「マジキモイアル。暫く私に話かけないで。」

作者

「うるせーよ。てめーら餓鬼は対象外じゃ、ボケ。」

ナギ・神楽

「何だとおおお！！？」

ヒナギク

「ハイハイ、そこまで…これは長編の告知なんだから。」

マリア

「…で？長編の大きなタイトルは考えてあるんですか？」

作者

「話は大体出来ましたけど…」

大きなタイトルですか？」

銀時

「ほら、例えば『吉原炎上編』とか『動乱編』とか。」

作者

「あゝ、それなら一応ね…」

銀時

「よし、じゃあそれを発表してトットとお開きにするぞ。」

作者

「まあ、略して

『妖魔編』です。」

ガタン？

銀時

「は？何言ってるんだよ、お前。

妖怪なんている訳ねーじゃん？

」

ヒナギク

「…銀時？何この手？」

マリア

「手、震えていますけど……」

銀時はしっかりと両脇にいたヒナギクとマリアの手を握っていた。

銀時

「馬鹿っ、オメー違うよ？お前らが怖がると思ってだな……」

ヒナギク

「……もしかして銀時、怖いのか？」

銀時

「……は？怖い？怖いって何？ホワッツ？誰か俺に教えてくれ。」
ガタっ！

急にもの音が……

ヒナギク

「……………」

銀時はテーブルの下に踞っていた。

マリア

「……………」

作者

「では、この辺でお開きですね……これからもよろしくお願いします。」

L

第十六訓 ゲームなのに直ぐにムキになる奴とか居たよね？（前書き）

今回は二本いっぺんに投稿しました。

次回から長編です！

頑張りますのでよろしくお願いします。

感想、質問もどんどんお願いします。

第十六訓 ゲームなのに直ぐにムキになる奴とか居たよね

「まだお」

まだお

「フッフ、行けえ！スターへの道！」

長谷川がルーレットを回す。

……………5だ。

まだお

「良い数だな。」

五マス目に向かうが、途中のニマス目でストップさせられた。

まだお

「何だ？」

【給料日マス】

まだおは50万を受け取った。

まだお

「まだ卵だからな。スターになれば…」

そして長谷川は五マス目へ。

【イベントマス】

盤上から長谷川が消える。

まだお

「……………おや？」

周りは工場のような所。

?????

「ほう！君が今日から働く新人か？」

まだお

「はい？」

工場長

「私は工場長だ。知人から話は聞いている。さあ、こちらだ。」

まだお

「え？」

長谷川は工場長に連れて行かれる。

工場長

「いやあ！本当に助かったよ…」

今時こんな人が居るなんてねえ。」

【まだおはジャスタウェイになった。三回休み。】

ジャスタウエイ（まだお）

「何でああああ！？っーかどういいう事！？何ジャスタウエイになるって！？」

【ここでは三回休みになるか、お金を支払う事でそれを無効に出来ます。】

ジャスタウエイ（まだお）

「払う払う！どうせ初っぱなだから安い金額だろ？」

【では今からATMで現金300万円を株式会社宛に振り込んで下さい】

ジャスタウエイ

「そつち（現実）かいいいいい！！

無理に決まってるんだろ！

何これええ！？家庭用ゲームじゃねーよ！！」

【では三回休みになります】

ジャスタウエイ

「ええええええ！？」

《ナギ》

「グラサンも早くもピンチか…ハヤテに負けず劣らずだな…」

《新八》

「三千院家が何なのか分かりませんよ…」

《マリア》

「どちらにしても三千院家はおしまいですよ…」

きんとき

「アレ？長谷川さん戻って来ねーぞ？」

【まだおは三回休みになりました次から三回分、飛ばして下さい】

〜きんとき〜

きんとき

「……………まあ、良いか。」

銀時がルーレットを回す。

……………5だ。

きんとき

「んじゃ、1、」

1マス目でストップする。

【給料日マス】

きんとき

「おお！給料日マスか…まあまだ駆け出しだからな。王になったらヤベーだろうけど……」

【きんときは30万髪を手に入れた】

きんとき

「ちよつと待てえええ？」

何、髪って！？何処の星の単位！？」

【美容師王を目指して職業に着いた場合は単位が髪になります】

きんとき

「ふざけんなああ！
何コレ！？髪の毛30万髪って事！？」

【先に進めて下さい】

きんとき

「こんな何処で使えば良いんだよ！？もしかして毎回コレなの？」

【いいから早く進めろっーんだよ、パー。】

きんとき

「パーってどういう意味じゃああ！！っーかどんだけ高性能なんだよ！？何でプレーヤーの特徴さして喧嘩売れるんだよ！？」

渋々銀時は目的マスに歩き出す。

きんとき

「……………つたく。到着だ。」

【イベントマス】

銀時も盤上から消えた。

きんとき

「……………ん？」

銀時は気が付くと、道路を走っていた。

きんとき

「…何で俺は走ってんだ？」

走り続けて角まで来ると、

?????

「ぎゃー！」

きんとき

「うわっ！」

銀時は誰かとぶつかった。

?????

「痛たたた…ちょっと！！何処見てるのよ！」

きんとき

「何か既視感バリバリのラブコメ始まった？」

?????

「ねえ！聞いているの！？」

【少女を助け起こしますか？】

助け起こす

無視して走り去る

きんとき

「いや、何で！？人生ゲームだったよね、コレ！..」

???

「じ〜」

少女は銀時を見つめている。

きんとき

「（どうする……？普通なら助け起こすだが、このゲームの事だ…助け起こすとそのまま本編が始まって休みになるかもしれない。だからと言って逃げれば…）」

《新八》

「何かえらくベタな展開になってるんすけど…」

《マリア》

「何が作りたかったんでしょう、三千院家は…」

《ナギ》

「しかし、この決断はかなり重要だぞ……」

《神楽》

「ワクワク……」

固唾を飲んで見守る四人。

きんとき

「……ホラ、捕まれよ。」

銀時は少女に手を伸ばして、少女を掴ん……

少女

「伏せて！」

きんとき

「は!?!」

少女は銀時を掴むと、いきなり銀時を地に伏せさせた。

刹那!

ダダダダダダ?

きんとき

「うおおおお!?!」

先程まで銀時が立っていた場所に無数の銃弾が撃ち込まれた。

少女

「ちっ！奴等もう気付きやがったか！！」

そう言うのが早いか少女は懐から機関銃を取り出す。

きんとき

「な！？」

少女

「オラオラオラ！！」

ダダダダダダ？

少女はぶっぱなす。

きんとき

「ぎゃあああああ？」

暫くして銃撃戦は終わる。

少女

「セーー服と機銃！是非見てくれよな！」

きんとき

「全然違う？っーか何の宣伝！？」

《マリア》

「何も起こりませんでしたね……」

《ナギ》

「全く展開が読めないな……なんて斬新なんだ！」

《新八》

「斬新過ぎるわ……！」

銀時は盤上に戻って来た。

【きんときは青春の思い出を手に入れた】

きんとき

「いらねーよ！何コレ!？」

～はやて～

はやて - 2億

「とにかく、借金をなんとかしなくては!」
ルーレットは6だ。

はやて - 2億

「……あ、給料日マスだ。」

【給料日マス】

【はやては5万ペソを手に入れた。】

はやて - 2億

「ペソ!?!もはや単位すら統一して無い!?!」

そのままはやては進んでいく。

【ワープマス】

はやて

「うわ！」

盤上から消える。

はやて

「…アレ？ここは。」

ハヤテは銀時から少し離れたマスにワープしていた。

はやて

「って、あと少しでゴールじゃないか！」

【借金を完済しないとゴール出来ません】

はやて

「…じや…じや…」

「まだお」

ジャスタウェイ中……

「きんとき」

きんとき

「…ルーレット。」
ルーレットは5を出した。

きんとき

「何かもう止めたい…いや！ストレートヘアのため！」

銀時は5マス目に到着する。

【キャトルミューティレーションマス】

きんとき

「はああ!?!」

?!?!?

「どじですかね」コレ?」

?!?!?

「やっぱりダメだ。つーかこれボックスドライバーだもん。」

きんとき

「……うん?」

銀時は目をさました。

「……?」

「まいったな。これじゃ修理出来ねーよ、PSP。」

「……?」

「やっぱりSONYに任せましょーよ……」

銀時の前には見知った二人、つか……

きんとき

「ああああああ?てめーら?」

そう。銀時の前には、あのゲーマー星人だった……

ゲーマー星人1

「やべっ!起きちゃいましたよ!?!」

ゲーマー星人2

「……」

きんとき

「てめーら!何でこんな所に!?!」

「……はっ!」

銀時は直ぐに指を見る。

「……が、異常無し。」

きんとき

「……ん?」

と思ったら、下腹部に違和感が……

銀時は隅っこに行つて確認をする。

きんとき

「てめーら……」

ゲーマー星人1

「違うんだよ！？先輩がPSP壊れたつて言うから！」

ゲーマー星人2

「あ、言うなや〜お前！ま、いいや。どうせボックスドライバーだつたし。」

ゲーマー星人は変なスイッチを押した。

きんとき

「な！？待てえええ！！俺の　　を元に戻せー？」

【きんときは　　がボックスドライバーになった】

きんとき

「ふざけんなー??」

盤上に戻って来る銀時。

きんとき

「何で俺いつもこんなばっか!?最近使って無いからか!??そんなのか!?!」

だんだんと盤上で嘆く銀時。

《新八》

「何でアイツら居んのぉ!?!もはやゲームじゃねーよ」コソ。

《マリア》

「……………//」

《神楽》

「集中放火アルな。」

「はやて」

はやて

「さてと、僕はとにかく返済を……」

……と、突如上から光が……

はやて

「……え？」

きんとき

「……ん？」

神様

「私は神様じゃ……」

《新八》

「何か知らんけど神様出て来ましたよ!?!」

《ナギ》

「ハラハラドキドキの展開なのだ。」

《マリア》

「違う意味でハラハラしますね…」

はやて

「神様？」

きんとき

「神様が何の用だよ？」

神様

「もう止めぬか…同じ人間同士で争ってどつすると言っただ？」

はやて

「……………」

きんとき

「……………」

神様

「争いはもう不要じゃ…」

誰が勝ったとか負けたとか。

皆が幸せならそれで良いでわないか…」

そう言うと神様は光を放つ。

【ゲームクリア？】

【リザルト】

きんとき 1位

はやて 1位

まだお 1位

Thank you for playing.

こうして三人の戦いは幕を……

銀時・ハヤテ

「ふざけんなああああ？」

二人は『HAL』を吹っ飛ばした。

「何だよ、皆1位って…二回分の俺らの苦労どーしてくれんだよ…」

「本当ですよね…もう人生ゲームなんて暫く遠慮したいですよ…」
二人はそのままギャンブルルームを後にした。

「……マリア。ゲームはやっぱり画面が一番だな…」

「ですね……」

「ってか良いですか、こんな最後で」
新八が呆れたように言う。

「…まあ、それよりもうすぐご飯ですね。神楽ちゃんは何が食べたいですか？」

「ロールキャベツネ!!」

「はい 分かりました。」

「じゃあ、上に行くか。」

ナギを先頭に三人はギャンブルルームを後にする。

「……アレ？長谷川さん、何処だろう…もう戻ったのかな？」

新八も首を傾げながらギャンブルルームを後にする。

「あ、神楽ちゃん！それ僕のロールキャベツでしょ！？」

「うるせーヨ、お前はコレくらいで十分ネ。」

「ちよつとおおお！？」

「まだありますからね」

マリアが鍋を開ける。

「お代わりアル！」

「早えーだろ！」

銀時と新八が神楽を叩く。

「アハハハハ！！」

ナギが面白そうに笑う。

「ナギ…最近よく笑うようになりましたね…」

「ええ…」

マリアとハヤテは微笑ましい様子でナギに目を向ける。

工場

ジャスタウェイ中……

ジャスタウェイ(まだお)

「……………(遅いな、まだ休み終わらないのかな?)」

第十六訓 ゲームなのに直ぐにムキになる奴とか居たよね（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「それじゃ、最初の質問だ。」

『歩は新八に会ったときにどう思いましたか？』だとさ。
オイ、ジミー！」

歩

「誰がジミーかな！」

銀八

「いいから早く答えろ！どんなんだ？ジミーズ？」

新八

「オイ！単調過ぎるだろ！」

歩

「え〜と、そうだね。何て言うか…共鳴にも似た、何か？」

ナギ

「普通だし、どうでも良いような答えだな…」

ハヤテ

「ハハハ…」

新八

「山崎さんと会ったときと同じ感じですね。違う世界にも同じように地味と言われている人がいる何て。」

歩

「そう！だから私はキャラを変えたりしない。地味は地味で愛されるから！」

銀八

「一生やってる。…で続いている質問は『原作沿いでミコノス島の話をするか？』」

…ズバリ答えます！

え、恐らくミコノス島の話はやるでしょうが、それはまだまだ先の話ですし、多分原作通りにはならないと思われます。」

神楽

「もともと原作沿いなんて崩壊してるネ。今更原作通りなんて無理アルな。」

銀八

「まあ、そう言うことだ。」

それじゃ今日はこの辺で。」

ヒナギク

「次回も是非ご覧になって下さいね。」

次回予告

久慈無と茉莉…

すれ違う心が生んだ一つの悲劇

【妖魔編】

「あれは鷺ノ宮家と対立する澳門家です。古くから鷺ノ宮家と澳門家は妖魔の退治を元に対立関係にあったのです……」

鷺ノ宮家 巫女 鷺ノ宮伊澄

「誰だ…？私の昼寝を妨げるのは…？」

― 澳門家当主 澳門 真司

「鷺ノ宮一族は我々澳門一族の目の上の瘤なのだ…！」

― 澳門家 宰相 澳門 昌蔵

二つの一族は一つだった？

真司

「古く、平安時代までめ遡る…
元々は一つだった一族が二つに分かれた理由には、ある二人の少女の悲しい物語があったのだ…」

二つの一族に隠された忌まわしい過去？

伊澄

「……銀時様。どうか、私達に力をお貸し下さい!!」

銀時

「……たく、帰ったらパフェ奢れよ……?」

一族を引き裂いた二人の少女達の悲しい物語とは……？

二つの一族の間にある秘密とは……？

銀時

「まあ、ナギの親友の頼みだ…

ここで断ったら、アイツに怒られるわ。」

悲しみの連鎖を断ち切る為に、銀時は立ち上がる。

次回：第十八訓 「サブタイトル前のプロローグ的な感じで結構決まってくる」

新八

「いや気合い入りすぎだろおおお！？作者にそんな力あるの！？」

作者

「頑張ります！」

第十七訓 サブタイトル前のプロローグで結構決まってくる(前書き)

え、まあいわゆるプロローグ的な感じですよ。

鷺ノ宮家の事情は完全にオリジナルなので、かなり原作と違う点があるかも知れませんが大目に見て下さい。

光軍さん。もしオリキャラが予想と違ってたらすみません！

でも考えて頂いて本当ありがとうございます！

……では、第十八訓です！

第十七訓 サブタイトル前のプロローグで結構決まってくる

昔々、今から1000年以上も前の話……

時は平安時代。

式術と言う不思議な力を操る人々がいた。

彼等は天皇を始めとする皇族に雇われて妖魔、いわゆる妖怪を退治すると言う生業を責務とされた。

その中でも飛び抜けて式術の能力が高い一族がいた。

鷲ノ宮一族である。

彼等はその腕を買われ瞬く間に繁栄していった。

鷲ノ宮が繁栄の道を切り開いてから式術で彼等の右に出るものは居なくなり、鷲ノ宮一族が皇族直属の式術集団としてはびこる時代となったのはそれから間もない事だった……

鷲ノ宮一族最盛期。歴代式術者の中でも一番高いと言っても良い人物が出て来ることになる。

鷲ノ宮 久慈無くしな

当時 5才でありながら式術の能力に開花した彼女は一族で丁重に扱われ、直ぐ様鷲ノ宮一族最強の式術者となる事になる。

久慈無を筆頭に式術集団として栄華を誇ってきた鷺ノ宮一族。

しかしそんな栄光も影を射すようになる。

久慈無18才の夏。

この日は久慈無の鷺ノ宮一族五代目当主の就任式であった。

…が、突如鷺ノ宮家分家の反久慈無派の者達がクーデターを起こす。

幸い久慈無は無事だったが、たくさんの本家の人間が生き絶え、本家は分家を一旦丸ごと破門したのであった。

分家には久慈無を支持する者達も多くいたが、これを機に全員が本家と対立を決め込む事になる。

当時、分家のトップは久慈無の親友の鷺ノ宮 茉梨まつりであったため、久慈無は話し合いを持ち掛けるが、クーデターが彼女の指示の元に行われたものと知り、対立を余儀なくされる。

後に分家は鷺ノ宮の苗字を捨て、澳門と名乗るようになる。

些細な気持ちのズレが生んだ悲劇はやがて深い亀裂となって二家を分かつ。

こうして、長きに渡る鷺ノ宮一族と澳門一族の争いが始まったのであった…

～澳門家屋敷～

ダダダダダダ？

「真司様！」

バタバタと慌ただしくやって来る男達。

「どうした？何をそんなに騒いでおる？」

障子が引かれ、中から姿を現したのは、どうやらこの屋敷の当主のようである。

「妖魔が出現したとの情報が！」

「何？して、現状は？」

当主と思わしき男が尋ねる。

「只今鷺ノ宮家が向かっていると…」

「ならば、鷺ノ宮の方に任せておけば良からう。彼等はそう簡単にやられん。」

「いけませんぞ！真司様！」

いきなり後ろから男が顔を出した。年は40代くらいだろうか。

「……昌蔵」

「真司様！ここ最近鷺ノ宮の奴等の方が妖魔の退治数が上回っております。先月もウチが15に対して鷺ノ宮は25も退治しておりますぞ！」

昌蔵と呼ばれた男は熱弁する。

「昌蔵…何度言ったら分かるのだ。我々が式術師達は妖魔から人々を守るが定め。数を競い合っただけというのだ。」

「お言葉ですが、真司様。これはそのような問題だけではありません。奴等の好き勝手にのさばられては澳門家の名が廃ります。」

「そうですよ！真司様！どうか出動要請を！」

「鷺ノ宮の奴等の好きにさせておくなんて!」

昌蔵を筆頭に当主に意見する家臣達。

「……分かった。しかし周りの被害は最小限に抑えるよ?」
溜め息混じりに当主の男が言った。

「かしこまりました!」

家臣達は立ち上がり部屋を出ようとすると…

「……お主等、間違っても鷺ノ宮家との無用な争いは避ける…
我々がすべき事を見誤まるでないぞ?」

眼光が鋭く光った。
物凄い迫力。

「…はい!」

昌蔵を筆頭に家臣達は部屋を後にした。

残された部屋に一人

「……やはり澳門と鷺ノ宮が手を結ぶ事は出来ないのか……?」

寂しい表情を浮かべていた。

第十七訓 サブタイトル前のプロローグで結構決まってくる(後書き)

銀時

「何かシリアスっぽくなっちゃったな。俺出番無かったし。」

新八

「まあ本編はこれからですから。それに今回は伊澄さんのお家の話らしいですから、伊澄さんもかなり活躍するみたいですよ。」

伊澄

「わざわざ長編にまでして貰ってありがとうございます。精一杯頑張りたいと思います……」

銀時

「でもよお、プロローグにも出てないし、あの真司とか言うやつに出番取られるんじゃないか?」

伊澄

「……………」

新八

「そんな事無いですよ?」

伊澄さんも絶対活躍しますって!こうバーンと、ドカーンと!」

神楽

「慰め方が幼稚園並アルな……」

「っ!かお前に慰められても嬉しくねーヨ!」

新八

「ちよつとおおお！？別に神楽ちゃん慰めてる訳じゃ無いんだから！」

マリア

「何だかプロローグを見る限り、私達は放置されそうな気がしますわ。」

ナギ

「確かに……ここは一つ、今度作者にガツンと言ってやらなくてはな。」

ハヤテ

「まあまあ……」

ヒナギク

「そう言う訳で、次回もよろしく願います」

第十八訓 カエルの子はオタマジャクシじゃね？なんて屁理屈言う奴にはカエル

クラウド

「どうも…クラウドです。」

……え？誰かって？ハハハ…ご冗談を…

……執事です。三千院家の執事長です！

因みに一巻から出ています！

それがどうでしょう？気付けば、早放置される日々…

しかし！今回こそは！」

ナギ

「では始まるのだ！」

クラウド

「ああ、お嬢様！そんな！」

「はあ、何であんなに空は青いんだろうか……」

「いきなり何を感傷に浸っているんですか……」

窓を覗いて溜め息を吐くのはナギ。

「もうすぐ学校じゃん……」

「そうですね、あと4日くらいですか。
マリアの後ろからハヤテも現れた。

「よし！旅に出るか……」

「何頑なに決意を新たにしてるんですか……
今年はちゃんと始業に出て下さいよ……？」

「ハヤテ、オーストラリアなんてどうだ？」

「良いですね。シャーク湾が見てみたいです。」

「聞きなさい？」

…と、まあいつも通りの屋敷の風景。

一方…

「ア〜レ〜、ダビットソン?」「ちょっとおおお!? 神楽ちゃあああ
あん!! 定春止めて〜!!!」

新八は神楽と定春に乗って走り回っていた。
神楽曰く、これはパトロールらしい。

銀時と言ひつと…

ひっそりとした朝日が僅かに零れる木々の中で、一人剣の修行に励
んでいる……

「か〜め〜は〜め〜……」

…はずも無く。

「破〜?」

銀時の両手が空を切る。

「ちょっと違うな…もう少しめのアクセントが上目だったか…」

銀時は姿勢を構え直す。

「もう一回いくか。」

「朝御飯も出来ましたし、銀さん達を呼んできますか。」
マリアがテーブルに朝御飯を並べ終わると窓を見て言う。

「あ、なら僕が呼んで来ますよ?。」

「ハヤテ君はクラウドさんをお願いします…?。」

「あゝ、分かりました?。」
苦い顔で呟くハヤテ。

「マリア、私も銀時達を呼びに行こう！」

「え！？」

突然のナギの発言に驚く二人。

「どうしたんですか！？お嬢様が進んで外に出るなんて！」

「侮るな、ハヤテ。庭は全て三千院家の敷地！即ち、これは外出じや無い！！」

ビシッとハヤテを指差すナギ。

「……筋金入りですね？」

ともあれ、庭に出るマリアとナギ。

「しかし、こっつて見ると……」

何も変わって無いな。」

「帰郷した若者みたいなこと言わないで下さい……」

「うわあああ!?!」

「きゃっほおお!?!」

二人が定春に乗って突っ込んで来た。

「おわ!」

定春はナギ達の前で止まった。

「パトロール完了であります!」

「ご苦労様です」

敬礼する神楽を労うマリア。

「いや、散歩じゃねーよ!?!こんなん!?!」

「本当にな...」

定春はまた庭に走り去って行った。

「アラ? 銀さんは?」

「銀さんは...あっちの方で修行するって言ってましたよ。」
新八は少し離れた木々を指差す。

「じゃあ、二人は先に屋敷に入ってて下さい。私は銀さんと呼んで来ますから。」

「私も行こう!」

ナギがマリアの後に続く。

「ナギ…何か企んでませんか?」

「フツ、まあな……取り敢えず銀時を探そう。」
ナギは口元をニヤリと曲げる。

「……………?」

「——破?」

「……………む?この声は銀時か?」

「修行って言ってましたけど……」

二人は声のする方向に進んでいく。

「かゝめゝはゝめゝ破ー??」

渾身の一撃は無惨にも両手が空を切った。

「はあゝ、まだまだだな…」

もういっちょ行くか！」

両手に気?を溜めて…

「かゝめゝは…!!」

そこで銀時はジト目をした二人に気付いた。

「」

「」

「えゝと…朝御飯出来ましたよ?」

笑顔だが目を合わさない二人。

「……ナギ、何か企んでたのでは？」

「いや……… 忘れた……」

二人は屋敷へと戻ってゆく。

その後ろを銀時が頭を抱えてついて行く。

「……… 大丈夫ですよ？ 私達何も見てませんから……」

「まあ、誰しも憧れは、な……」

「……… 済まねえ。ここなら全力で練習出来ると思ったから……」

そんな感じで屋敷の朝が過ぎていった。

「ハヤテ〜！ハヤテ〜？」

「ハヤテ君なら銀さんと一緒にお使いに行きましたよ。」
「マリアは廊下を歩いて来たナギにそう告げる。」

「む…そうか。」

「どうかしたんですか？」

「いや、今日仏滅だから外出するのは危険かな、と…」

「何処の昔話ですか…？」

「…む！？」

ナギは手に持っていたPSPに視線を戻す。

「私のリッ がワ キューレにやられてる！？…これは何か不吉な事があるかもしれん！」

「それはナギがよそ見をしていたからですよ……」

「うーん、きらの塔をやり直しか……」

ナギはPSPを持ち直して、リビングに戻っていった。

「……………?」

「…何だか最近秋刀魚がやたら高いですね。」

「随分タイムリーな話題だな……?」

ハヤテと銀時はスーパーの帰り道。

突然、黒猫がハヤテ達の前を横切った。

「何だか不吉ですね…」

「馬鹿言ってるじゃねーよ。黒猫くらいで…」

すると…黒猫の後ろから伊澄が…

「不吉ですね…」

「……………」

「……………はあ、黒猫を追いかけてたら迷子ですか……………」

「黒猫が御札を持って行ってしまった……………」

「はあ……………」

取り敢えず伊澄を家に連れて行く事になった。

「そういえば、咲夜さんから聞いたんですけど…また力の調子が悪いらしいよ?」

「ええ…ただ今回はある程度理由は分かってるんですが…」

「力？」

ハヤテと伊澄の会話を聞いていた銀時は首を傾げる。

「ああ、伊澄さんですね、鷺ノ宮家のご令嬢であり、同時に巫女でもあるんですよ。」

「み、巫女お！？マジで…？」

銀時が伊澄をマジマジと見る。

「何か馬鹿にされてる感じがしますわ…」

三人は鷺ノ宮家に足を進めて行く。

人通りの少ない所まで来ると…

「まあ…巫女は良いんだけどよ…」
府に落ちないように呟く。

「はい？」

「力って何？」

「あ…それは…」

ハヤテが曖昧な顔をする。

ブーン???

「!？」

目の前に……

大きな黒い鬼が現れた!!

「……………」

啞然の二人。

「まあ……」

肝心の伊澄は間の抜けた声だが、表情は真剣そのもの。

黒い鬼は赤い目を宙にさまよわせる。

「……………」

咆哮と共に銀時達に向かって来た!

「オイイイ！？漫画違う！！変わってる！！」

「伊澄さん！？これは…！？」

伊澄は二人の前に立ち塞がる。

「な！？伊澄！？」

「あれは妖魔の中でも従属の類いです。ですが恐らく鷺ノ宮家以外の妖魔ですね…」

伊澄は懐から三枚の御札を取り出す。

「……………」

鬼は伊澄に向かって拳を振り上げる。

「危ねえ！」

「大丈夫です。下がっていて下さい、銀時様。」

左手で銀時を制すと、振りおろされた拳を止める。

「八葉序式 解脱」

伊澄の御札から光が渦巻いたかと思うと、鬼は一瞬で札へと変わった。

「な…な…」

銀時は目の前の光景にただ呆然。

「…では、お家に参りましょうか。」
ニッコリと笑って伊澄は歩き出した。

「家は反対方向ですよ…?」

「……………」

また三人は鷺ノ宮家に向かって歩を進める。

「って違えだろ！何でお金持ちのお嬢様があんな化物と戦ってるんだよ!？」

「…巫女ですから。」

「何で巫女が鬼を退治してるんだよ…どんな巫女だよ…」

「伊澄さんの家は代々妖魔退治を生業としてきているそうなんです。」

その中でも伊澄さんはここ数世紀で最も凄い逸材だとか。」

「じゃあ、アレか？力がどうのこうのってのは…」

「ハイ…妖魔を伏せる力です…」伊澄はゆっくりと頷いた。

「マジ………？」

～ 鷺ノ宮家前～

「やっぱりでけえな…」

鷺ノ宮家の御屋敷は日本の屋敷を思わせるもので、三千院家には勿論至らないものの、相当大きい。

「じゃあ、僕達はこれで……」
ハヤテと銀時は伊澄を送り届けたので帰るところと……

ガタ……

「まあ伊澄、随分遅かったわね……」

「初穂お母様。」

門が開くと伊澄とよく似た女性が現れた。

「あ、伊澄さんのお母様。こんにちは。」

「アラ？……まあ……？」

「ハヤテです？三千院家の執事の綾崎ハヤテです。」

「まあ、そうでしたね……お久しぶりです。」

初穂は思い出したようにポンと手を叩く。

「お母様！そちらはハヤテ様じゃありません？」

「……本当だわ……」

初穂は銀時に挨拶をしていたのだ。

のんびりとハヤテの方を向き直して、

「……えっと……？どちら様でしたかしら……」

「ハヤテです…?」

「そうでした…お久しぶりです…」

「ハイ…?」

「こちらの方は…?」

「銀時様です…この間も助けて頂きました…」

「まあ、それは…娘がお世話になりました、金時様。」

「お母様！銀時様です…銀です…」

「あらあら…」

銀時は伊澄と初穂のコントを見ていて、

「なあ、ハヤテ…もしかして、この家で一番しっかりしてるのって…
……」

「ハイ…多分伊澄さんです…」

「せっかくですから、お二人とも上がっていらして下さいな……」
初穂は二人を見てのんびりと言う。

「すみません？僕はこの後用事がありますので。」

「では…金時様は？」

「お母様…銀時様です……」

「……あゝ、じゃあお言葉に甘えて……」
銀時は断れない空気に押されて頷いた。

「すみません…銀時様。母が……」

「いや、別に構わねーよ……」
寄ってきた伊澄に答える銀時。

「じゃあ、僕は先に帰ってますから。」

「ありがとうございます、ハヤテ様。」

ハヤテは三千院家の方向に帰って行った。

「では、銀時様。どうぞ…」

「はあ…お邪魔します。」

「まあまあ、貴方が伊澄を助けて下さった方がい？」

三人は居間で伊澄の祖母に迎えられた。

「まあ、これは初穂にそっくり…」

「それは初穂お母様ですよ、おばあさま。」
初穂を見て言う祖母に突っ込む伊澄。

「……すみません銀時様。ウチの人達はポーっとした人が多くて…」

「…なるほどな…（この家に居たら、伊澄が自分の事をしっかり者だと思ひ込むのも無理ないな…）」

「こちらへ、銀時様。」

銀時と伊澄は取り敢えず居間を出て廊下を歩いて行く。

「そっぴやさつきハヤテがお前の力がどうのって言ってたけど…ア
しって?」

「ああ、それは…」

伊澄が説明しようとするど、

ポン!

可愛い音と共に伊澄の頭に目玉の親父みたいなちっこい妖魔が現れた。

「実は…」

ポコポコと妖魔が頭を叩く。

「…力が使えたり…使えなかったり…」

ポコポコ

「…何かが邪魔を…」

ポコポコ

「……!!」

伊澄は妖魔を追い払おうとして、追いかけて行ってしまった。

「…でもさつきはめっちゃめっちゃ力を使ってたような…」

「それには少し込み入った事情があるのですよ…」
銀時の後ろからいきなり初穂が出て来た。

「…理由？」

「ええ…まあ薬があれば全て治るのですけど…」

「…薬…それは一体？」

「背骨です…」

「背骨…!?!」

銀時は驚いて自分の背骨を擦る。その様子を可笑しそうに見る初穂。

「大丈夫です とても珍しい背骨ですから。」

「…はあ。して、どんな骨で？」

「まあ、簡単に言うと、」

代々20代後半くらいで、銀髪の天然パーマで、死んだ魚のような目で普段ぐーたらですが、締める所は締める万年金欠の男の人の背骨です…」

「……………」

「冗談です」

「……ハハハ。ですよね……」

「その人の限界まで死に近づいた生き血です……」

「……」

「冗談です」

「……」

「本当は、先程も言ったように少し込み入った事情があるので……」

「……骨や生き血じゃ無くて……?」

「でも背骨や生き血があれば解決しますね……」
初穂はキラーンと銀時に目を光らせる。

「是非事情をお聞かせ願います!!」

「我々鷲ノ宮家はご存知の通り、妖魔退治を古くから生業としてきました。その中でも伊澄は飛び抜けた力を授かっていました。」

しかし、妖魔退治を生業としているのは鷲ノ宮家だけではありませんせん。」

「……と言つと?」

銀時の問いに初穂が少し遠くを指差す。

「はす向かいに澳門家と言う家があります。そこがそうなのです。」

「けど、それとアイツの力と何の関係が…」

「澳門家は古くから鷺ノ宮家と対立している家柄です。」

「つまり伊澄の力をその澳門とか言うのが邪魔していると?」

銀時は表情を真剣にする。

「私には詳しい事は分かりませんが、あの娘が澳門の家から妨害の気を感じると…」

「だったら直接言いに行けばいいじゃねえか?」

銀時は伊澄を見ながら言う。

「私や伊澄がノコノコ出向いても、無駄な争いを生んでしまうだけですから…」

近年鷺ノ宮と澳門の対立は悪化の一途を辿っています

…両家は互いに疑い、探り合っている状態なのです…」

「なるほど…だから下手に動けない…」

「…鷺ノ宮の者の大半が対立を望み、隙あらば相手方を潰そうとしています。今まではお互いが同じくらいの力関係で膠着状態でしたが…その関係も最近では崩れかかっている始末。」

「そんな中で伊澄が向こうに行けばいい口実を与えるって訳だ。」

銀時は妖魔を追っかけている伊澄を見る。

「はい……」

「でもあなたの顔を見ると、とても向こうさんに敵対してるように見えないんだけど？」

「そうですね……昔の因縁が何だとか、権力がどうとか、そういう事は私は分かりません……」

でも……やっぱり皆が笑顔で居られる事が、一番だと思いますから……」

初穂は寂しそうに笑ってみせる。

「……………」

ようやく伊澄が妖魔を捕まえて、二人の元に来て来た。

「まあ、伊澄……新しいお友達？」

「妖魔ですよ……お母様……」

のんびり微笑む初穂に妖魔を見せる伊澄。

「まあ、大きな目ね……」

「……………」

そんな初穂を見て若干不安になる銀時であった。

「……さてと、それじゃ俺もそろそろ帰るわ。」

伊澄の家に来て一時間程経っていた。

「そうですか…大してお構いも出来ませんで…」

「お母様…それは九重おばあさまですよ？」

初穂は九重の手を取っている。

「アラアラ…金時様がお母様が変わってしまったわ…」

「…すみません？銀時様／＼／」

「いや…もう慣れた…？」

「それじゃな。和菓子ごちそうさん。」
銀時は門まで見送りに来た伊澄に告げた。

「……………銀時様。」

「ん？」

帰ろうとする銀時を伊澄が引き留める。

「……………澳門の家に、行こうとしてませんか？」
じっと銀時を見据える伊澄。
その瞳は全てを見透しているようだった。

「……………聞いてたのか。」

「いけません銀時様。このような事に……………」

「赤の他人を巻き込むのは忍びないってか？」

「……………!!」

銀時はダルそうに頭を掻くと、

「お前がどう思ってるか知らねえけど……………もっ少し頼るって事を覚えて
た方が良いぞ？」
子供ガキが一人で全て背負い込むには早すぎる……………」

ポンポンと伊澄の頭を叩く銀時。

「…ですが！それでは…」

「それによお……」

「ここでお前放っておいたら、後で御主人様^{ナギ}に怒られるからな……」

「……………」

「……………」

お互いに無言の状態が続く。

「……………銀時様はとても頑固ですね……………」

「お前程じゃねーよ。」

伊澄が諦めたように笑うと、懐から御札を取り出した。

「これは……………？」

「鷲ノ宮に属する妖魔です……」

いざというときに使って下さい。」

伊澄は銀時に御札を手渡した。

「……………どうか、お気をつけて……………」

顔が完全に隠れるまで頭を下げる伊澄。

銀時は伊澄の頭をくしゃくしゃと撫でた。

第十八訓 カエルの子はオタマジャクシじゃね？なんて屁理屈言う奴にはカエル

教えて！！銀八先生

銀八

「今日最初の質問は、

『マダオから見てハヤテには貧乏神的なものが憑いてる？』だとさ。
…でどうなんだ？マダオ。」

長谷川

「先生！僕の名前はマダオではありません。長谷川です。」

銀八

「うるせーよ、長谷川^{マダオ}。文句があるなら廊下に立ってなさい。」

長谷川

「ルビにただけじゃねーか！！
何も変わって無いじゃん！」

神楽

「早くしろヨ、時間押してるんだヨ無職。」

長谷川

「いじめだよねえ！？これ絶対いじめだよ！？

……まあ、俺から言わせ貰えば、憑いてるな…なんか赤い服を着て
白い髭をはやしたオッサンの死神が見える。」

ハヤテ

「えええええ！？本当ですか！？」

ナギ

「それはいわゆる、Xmasの日に子供達に夢を配るオッサンか…」

神楽

「ハヤテには夢じゃなくて借金と絶望をプレゼントしたネ。」

ハヤテ

「……………サンタなんて、サンタなんて……………」

マリア

「すっかり落ち込んだじゃいましたね……………」

銀八

「続いての質問。

『ヒナギクは銀時と戦ってみたい？』と言う訳だ。どうだ、ツラ？」

ヒナギク

「先生！そのあだ名は止めて下さい……………訴えますよ？」

銀八

「待て待て、ヒナギク！？軽い冗談だから！！その木刀をしまえ。」

ナギ

「暴力だけに訴えるか……………」

銀八

「全然面白くねーよ！」

ヒナギク

「まあ、剣道で戦ってみたいかな？そっだ、先生。一度白皇の剣道場に来ませんか？」

銀八

「それじゃ、今日はこの辺で授業を終わるぞ〜」

ヒナギク

「先生……？」

銀八

「と言う訳で次回もよろしく。」

ヒナギク

「先生……！」

本編で出来ればやろーっと思っますので。

第十九訓 誰でも他人が羨ましく見えるもの(前書き)

クラウド

「遂に澳門家に乗れ込む銀時！」

そして澳門家で待ち受けるものとは!？」

ハヤテ

「…クラウドさん？」

クラウド

「ああ…綾崎ハヤテか。どうしたのかね？」

ハヤテ

「いや…あの大丈夫ですよ？もう少しで出番だって。

何も無理して前書きに出なくても…」

クラウド

「ようやくこの長編も20%くらいが終わりそうです。

どっかで見た事があるとか言っただけじゃないぞ?」

ハヤテ

「無視ですか!？僻んでるんですか!？クラウドさん!」

クラウド

「今までは多少？陰陽師編を参考にしてきましたが、次回からは全て作者が少ない頭を捻り考えた話です！是非温かい目で見守ってやって下さい!」

ハヤテ

「多少って言うかまんま参考になっているんだけどね…」

クラウド

「そ、そして！私に出番を…」

ナギ

「では、始まるのだ！」

クラウド

「お嬢様——！？」

第十九訓 誰でも他人が羨ましく見えるもの

〱澳門家前〱

「ここか…ちつぱでけえな…」

銀時は澳門家の門の前に立っていた。

「ちつと…」

銀時が門に触れようとすると、

ギー

門が勝手に開いた…

「いらっしやいませって事か？」銀時は中に足を踏み入れた。

バタン！

急に門が閉まる。

「な！？」

銀時が周りを見渡すと装束を着た男達に囲まれていた。

「貴様！！鷺ノ宮の回し者がよくノコノコと正面から入ってこれたな！」

男達は札を取り出して火の玉を出す。

「い！？違う違う！！俺は……」

「その懐にある鷺ノ宮の式神が何よりの証拠だ！！」

「（伊澄イイイイ！！逆効果じゃねえかアアアアアアア！！！！）」

男達の視線が一斉に銀時に向かう！

「オイイイイ！？どーすんだ、コレ！？」

そこで銀時は札を取り出す。

「…頼むぞ、本当！」

札を地面に叩きつける。

ボワーン！

銀時の前に現れたのは…

巨大なパイナップルだった！

「オイイイイ！？何処が式神だ〜！！！」

「貴様！！我等を愚弄する気か！！」周りの男達は火の玉から龍を呼び出した。

「くらえー！！！」

無数の龍がパイナップルを抜いて銀時に迫る！

「何の役にも立たねえじゃねーかー！！！」

ドーン！！！！

「やったか…」周りの男達は札をしまつ。

「オイ……誰だ？私の昼寝を妨げるのは？」

銀時の前に立ち塞がったのは、
茶髪の青年だった。

「……お前？」

銀時は目の前の青年に啞然としている。

すると、

「申し訳ございません！真司様！不審者を成敗しようとした所でございまして……」

周りの男達は頭を下げる。

「ふむ……」

青年は銀時を見定める。

「……彼は我が呼んだ客人じゃ。これ以上客人に無礼な真似をするならば……」

「真司様の御客人とは露知らず！申し訳ございませんでした……！」
一斉に一歩引く男達。

「……もう良い……下がっておれ。」

客人は我がもてなそう。」

「ハッ！」男達は下がっていった。

「済まぬの…下の者が無礼を働いた。」

「……お前？」

「フツ…紹介が遅れたの。」

我は澳門家当主……

澳門真司じゃ。」

真司は扇子を取り出して微笑した。

銀時は真司に連れられて真司の部屋に連れて来られた。

真司は畳の上に腰を下ろす。

「お主も適当に座れ。」

「ああ……」

銀時も真司の向かい会つように座る。

「…お主が来た理由は大体検討がついておる。」

「…そうなのか？」

「その腰に付けた式神を見れば、大方の予想はつく。

恐らく鷲ノ宮からのクレームと言った所だろ。」

真司は扇子を扇ぐ。

「だったら話が早え。てめーらからの妨害で伊澄の力が不安定になつてるらしい。

出来れば今すぐ止めさせて欲しいんだが…」

「……？ 何と？伊澄の力が？」真司は一転して顔色を変える。

「オイオイ、何なんだ？検討がついてたんじゃないのか？」

「…！と、当然じゃ！も、勿論そんな事は承知の上だ…」

「もう良いぞ？知らねえなら知らねえで…」

「いや…、しかし…そうか…」

「オーイ、一体何なんだよ？」

勝手に納得する真司に銀時が尋ねる。

「……我はてつきりウチの者がまた鷺ノ宮の者達に迷惑をかけたのかとな……」

バツの悪そうに扇子で顔を隠す真司。

「じゃあ何か…？伊澄の事は知らねえと？」

「…いや、そうでも無いな。」

「オーイ……」

真司は扇子を閉じると、姿勢を直す。

「お主には先に話しておかなければならないな…」

鷺ノ宮家と澳門家の関係をな……」

鷺ノ宮家と澳門家はかれこれ千年以上対立を続けておる。

お互いに妖魔を退治する生業を定めとしているからの、多少の対立があるのは仕方が無いがな。

近年の両家の対立が悪化しているのは知っているの？
お互いに隙あらば潰そうと神経を尖らしている…

しかし、鷺ノ宮家全員が澳門家に敵意を持っていると言つ訳では無い…勿論澳門もそうじゃ。

この澳門は表沙汰では一つにまとまっているが…
実は、二つに分かれている。

一つは我を支持する派閥。
もう一つは、昌蔵を支持する派閥じゃ。

昌蔵と言つのは、この澳門家の宰相を務めている男でな。
この昌蔵は鷺ノ宮家に対して敵意の塊のような男じゃ。

家来は皆、我に従事しているが、それは表向きの事情だ。
実際はもう大半の者が昌蔵に付いている。

まあ、それを表に出さないのは私の力故だろうか…

しかし、ここ最近、奴等が裏で何やら企んでいる動きがあつての…
もしや……………

「…つまり、その宰相が原因つて事か…？」話を聞いていた銀時は
怪訝な顔をする。

「さあな……確証は全く無い。

しかし、言った通り澳門の中でも大半が対鷺ノ宮派閥だからの。澳門の中からそのような妨害がされていると言う事は……」

「おめーは何で鷺ノ宮家に対立しないんだ？」

「……………」

真司は質問の意味が分からないといった表情をする。

「だってよお……家臣の大半が敵対派なんだろ？なのにそのトップがよ……」

「……………我は澳門家にとって邪魔な存在になりつつある。

確かに、上手く澳門家を機能させるならば鷺ノ宮と対立すれば面目も立つだろう。

しかし……………それは我の道ムツルに反するのだ。」

「……………」

「式術とは権力争いでも、戦いの道具でも無い。

この世界に住む者達が、皆笑顔で暮らせるように魔を払う。それが式術師の定めであると我は信じている。」

「お前……………」

「ただ、人の上に立つには我は幼い過ぎた。

いくら術力は澳門最強と言われようが、家臣皆の心に届かぬようじや、当主失格だ……」

同じ生業を持つもの同士、協力して魔を払う…そんな事さえ、今の我には手も届かないのが現状じゃ…」

真司は寂しそうに笑って見せた。

「つまらない事を話したの…
さて、伊澄の件だが、これを渡してくれ。」

真司が指を鳴らすと、目の前に丸い粒が入った袋が現れた。

「これは…?」

「薬じゃ…まあ気休め程度だが、妨害が通らなくなるだろう…
我自身からも止めさせるように言っておこう。」
真司は立ち上がると、部屋の戸を引いた。

「あまりここに長居していると昌蔵派閥の連中がまた厄介をかける
やも知れん。あまり構えずに済まんが…」

「ああ…分かった。」

銀時は真司の部屋から廊下に出た。

「…なあ。」

「ん?」

去り際に真司に声をかける。

「皆の笑顔の為に力を使いたい…伊澄だって、伊澄の家族だって、
お前と同じ様に考えてるんだ。」

例えそれが小さな灯火だろうが、願ってる奴がいる限り…その火は消えやしねえよ。」

「……灯火か…」

真司は初めて愉快そうに笑った。

「お主、名前は……？」

「坂田銀時だ…」

銀時は後ろに手を振りながら、真司の元を後にした。

「……不思議な男じゃの……」

誰に言う訳でも無く、真司は空に呟いた。

〜鷺ノ宮家〜

「まあ…それは大変でしたね。」

「お前の式神のせいで大変な目にあっただよよ！」

「あう！」

銀時は伊澄にデコピンをする。

「っーか何でパイナップル！？」

百歩譲って式神だとしても、もう少しチョイスがあるだろ！」

「……？」

伊澄は額を押さえながら首を傾げる。

「はあ…ほら、何か知らんけど澳門家の当主から薬を貰ったぞ？」

「真司様からですか…？」

銀時は伊澄に薬を手渡した。

「ってかお前ら知り合いなんだな。」

「ええ…真司様にはお世話になっています。彼が居なければ、今頃両家はとうに衝突していてもおかしくありませんから。」

「ふうん。」

銀時は先の真司の思い浮かべる。

「ところでその薬は？」

「これは食べると力が一定に安定する薬です。力が無くなった時は、これを口にすれば、ある程度回復もします。……簡単に言うと、兵両丸です……」

「兵糧丸…あ、兵丸な……」

伊澄は薬を飲むと、

「……力が戻って来ます……」
ホツとしたように笑う。

「銀時様、本当にありがとうございました。」

「…ん？ああ……」

「どうかしましたか？」

「いや…どうも引つかかるんだよなあ……」
銀時は真司から聞いた宰相の話を思い出していた。

「………？」

「それじゃ、今度こそ本当に帰るわ。」

鷺ノ宮家でのんびりしていると、いつの間にか夕方になっていた。

「ええ…銀時様、今日は本当に……」

「あゝ、良いつて良いつて……」

まあ、もっと頼る事を覚えろってこつた。」

銀時は決まりが悪そうに言うと、玄関に向かった。

その後についていく伊澄。

「……………!?!?」

銀時の後ろで伊澄が何かを感じたように振り返ったのだった……

玄関に行くと初穂が丁度部屋から出てきた。

「まあ、金時様、伊澄が本当にお世話になりました……」

「お母様……それは私です……」

「まあ、金時様が伊澄に変わってしまったわ……」

「銀時様です……お母様……」

すみませんと銀時に頭を下げる伊澄。

「まあ、俺の体が無事で何よりだな……」

「それじゃ……妖魔退治も程々にな……」

門で伊澄に挨拶をして帰ろうとすると、

「……銀時様。」

「ん？」

「お気をつけ下さい…先程から今までとは違う怪しい気の気配を感じます……」

「ああ……」

後ろに手を振りながら銀時は帰って行った。

伊澄はその背中を見送った。

「……不思議な方ですね……」

銀時も伊澄に言われたくは無いだろう……

「それにしても……この気配……

この胸騒ぎは……」

澳門の方向を見て、目を細める伊澄だった……

「あ、おかえりなさい、銀さん。」
屋敷に着くと、ハヤテが出迎えた。

「随分遅かったですね？何かトラブルに巻き込まれたりとか？」

「猫の尻尾を踏んじまったかもな……」

「尻尾ですか……？」

「（化猫じゃなきゃいいけどな……）」
不思議そうに首を傾げるハヤテ。

「ああ、そうだ。俺明日ちょっと出掛けるから。そう言っておいてくれ。」

「？……分かりました。」

「澳門家」

日もすっかり沈んだ頃、暗い部屋に数人の男。

「ム」
一人が何やら呪文を唱えているようだ。

「　　」
「　　」…これで良い…」

「　　」様、こちらは準備が整いました…いかがいたしましたでしょうか？」

「　　」功を焦るでない。下手に動けば奴にはれる。もう暫し待て。」

「　　」ハッ！」

男達は部屋を出ていった。

「ククク…見ておれ、今に澳門家はわしの物じゃ…。」

第十九訓 誰でも他人が羨ましく見えるもの（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「オーイ、てめえら席に着け！
長編だからってあんまり浮かれてんなよ？」

新八

「全然浮かれてませんよ！！
むしろ沈んでます！」

神楽

「そうアル！私の出番は定春に乗った時だけアルか！？」

新八

「そうですよ！！もう少し増やしてくれても……」

神楽

「アンタは別にいいでしょ……？」

新八

「ちよつとおおお！？神楽ちゃん、標準語になってるよ！？」

神楽

「正直もうメガネと一緒にやるの疲れたんだよね……」

新八

「それは表にしちゃいけない理由だろ！？」

銀八

「っー訳で最初の質問だ。」

『ナギは神楽とよくゲームしますか？するならどっちが上手いですか？』

ナギ

「よく…と言うかしょっちゅうだな。」

神楽

「時に笑い、時に泣く…数々の修羅場をくぐり抜けてきたネ。」

新八

「神楽ちゃん、仕事しなきゃダメだよ？」

神楽

「……………フッ。」

新八

「オイイイイ！！何だその蔑んだ笑いは！？」

神楽

「もう新八になんか言うのも面倒になったアル。本当に面倒だわ…」

新八

「お前なあああ！！どんなに心で思っても言葉に出さないのが人間の常識でしょ！？」

神楽

「…夜兔…」

新八
「……………」

銀八

「安心しろ、新八。読者から
『もっと新八（童貞）を苛めてあげて』って言う意見もある。」

新八

「何処に安心すればいいんだよ!？」

銀八

「んで、どっちが上手いんだ？」

ナギ

「五分五分だな……」

神楽

「そうアルな…ただ　　は激戦だったアル。かろうじて私が勝つ
たけど……」

ナギ

「何を言っている!？　　で勝ったのは私だ。」

神楽

「いや私アル!」

ナギ

「私だ!」

新八

「ちよつと二人とも？喧嘩は……」

神楽・ナギ

「うっさい！ダメガネ！」

新八

「息ピッタリだなあ、オイ！！！」

銀八

「続いての質問。

『マリアは肉食昆虫ゴキブリを見てみたいですか？』だとさ。」

マリア

「絶対嫌です！！！」

新八

「ああ、あの巨大なゴキブリですか……」

神楽

「アレは悪夢だったアルな……」

銀八

「そつだ！今度本編でやるか。」

マリア

「ダメです！！嫌です！！絶対にダメ！」

ハヤテ

「（マリアさん、ゴキブリ苦手ですからね……）」

銀八

「んじゃ、乞うご期待！」

マリア

「……………!!」

ヒナギク

「それじゃ、次回もお楽しみに」

第二十訓 銭湯で刺青を見たら迷わずに水風呂に行け（前書き）

クラウドの

前書きの館!!!

クラウド

「さあ、始めました…クラウドの前書きの館のお時間です。

このコーナーでは毎回物語の前書きをこのクラウドが担当していきます。」

ハヤテ

「クラウドさん……？」

クラウド

「では、今回はついに銀時が澳門の秘密に迫ります！
深刻な事態はだんだんと銀時に迫って来る！
果たして、銀時はどう事態に取り組むのか！
そして私の出番は……」

ナギ

「では始まるのだ！」

クラウド

「お嬢様ああああ！？」
わざとなんですか！？わざとでしょ！？」

作者

「戦闘シーンを書くのが難しいです…是非アドバイス下さい！」

第二十訓 銭湯で刺青を見たら迷わずに水風呂に行け

「おはようございます。新八君、神楽ちゃん。」

「あ、おはようございます！マリアさん。」

「おはよーアル…」

新八と神楽がリビングに起きて来た。

「アレ？銀さんは来て無いんですか？」

「そういえばまだ起きて無いみたいですね？」
マリアはテーブルに朝御飯を並べていく。

「ああ、銀さんなら昨日出掛けるって言ってましたよ？
今日も朝早くに出掛けて行ったんじゃないかな？」

「え……………!?!?」

「ぎ、銀ちゃんが…」

「早朝起き……………」

驚いて引く二人。

「……………アラアラ？」

ハヤテは忘れてたように付けたした。

「…そういえば銀さん、猫の尻尾を踏んだかも知れないって言っていました。」

「……猫の尻尾ですか？」

マリアが考え込むように言う。

「新八く、どういう意味アルか？」

「……さあ？」

「澳門家？ああ…あの大きな屋敷か…」

「ああ…」

まだ朝早い時間帯。

銀時は商店街を歩いていた。

いわゆる聴き込みと言っちゃつだ。

「澳門家ねえ…あの鷺ノ宮家と仲が悪いって事くらいしかねえ…」

「あゝ、他に何か無いか？噂でも何でも良い。」

かれこれ三十分、聞いて回っているが同じ答えしか聞けていない。

銀時がこの商店街に絞ったのには理由があった。

噂好きな人々が沢山集まる商店街なら意外な事が聞けるかも知れないと考えたのだ。

「うーん……そういえば、澳門家の人達が昨日の夜何処かに出掛けているのを見たなあ。」

「出掛ける？何処へ？」

「さあな…昨日見た時はあっちの方に向かって行っただけ…」

「……そうか。助かった。」

「毎度」

銀時は先程聞いた方向へ歩きながら、更に話を聞く事にした。

「あ、それなら昨日の夜中に見たねえ…7、8人があつちの方
向へ歩いて行つてたよ…」

「いや、昨日は寝てたから知らないけど、確か3日前にそれっぽい
人達があつちに向かつて行つたよう…」

「あ…それなら大体夜中にこの辺を通るな…いつも窓の外から
見えるんですけど…」

「一週間くらい前かな、酔つてあつちの雑木林を歩いてたら、そ
こにある丘で何かやっていたんだ…酔つてたから夢だったと思うけ
ど…」

銀時が一通り話を聞くと、もう大分時間が経っていた。

「夜中に雑木林の奥の丘にねえ……………」

銀時は雑木林を見つめる。

「……………帰るか。朝飯食って無いから腹へったしな……………」
銀時は屋敷方向に向かって行った。

「まあ……………金時様。」

「……………ああ……………」

街角でばったり初穂に会った。

「どうしたんですか？こんな所で？」

「いや……………まあ、な……………。それよりアンタは？」

「私は……………？」

「いや、何だよ？」「って……」

「忘れてしまいました」

「……………」

のんびり笑う初穂に最早成す術の無い銀時。

「……………金時様？どうか？」

「……取り敢えず、帰ります？」

銀時は鷺ノ宮家に向かう事になった。

「待てえええ！止まれクソガキ！」

銀時は屋根の上を全力疾走で前方の者を追っていた。
銀時から逃げているのは、一見すると子供だ。

つい数分前…

「まあ、では金時様は三千院家に務めていらっしやるのですか…」

「まあ、成行でな…」

「でも大変でしょう？頭が大変な事になってますよ？」

「…違うからね？コレは元々だから。」

「チャームポイント？」

「そう見えるなら眼科に行った方が良いぞ？」

銀時と初穂の会話は平行しているようで、していないような…

「…ところで、さっきから陰で見てるお前。何か用か？」

銀時は物陰に向かって視線を投げた。

「やあああああ！！！」

突然、物陰から子供が銀時に向かって飛びかかって来た。

子供は髪が長く、和服を着ている女の子のようだ。背丈はかなり小さく…

「うお！？」

女の子は銀時に斬りかかった！

「チッ！」

「……？」 啞然とする銀時の懐から財布を抜き取ると、屋根の上に登って行った。

「…つて待てえええ!!」
銀時も慌てて屋根へ向かった。

「あらまあ………」

で今に至る。

「くそ!!」

銀時と女の子の差は一向に縮まらない。

「何だ…これぼつちか…」

「な!?!」

女の子が銀時の財布を放った。

「あの野郎——!!——!!」

財布までダツシュする銀時。

「……………っと、ギリギリセーフ！」

ダダダダダ！…！

「…！？」

銀時が飛び退くとそこには無数の鎖付きクナイが突き刺さっていた。

「……………！？」

「でや…！」

「何なんだよ！？一体！？」

女の子は更にクナイを持った猫達を銀時に飛ばす。

「はあ…！」

「オイオイ……………って何で猫！？」

ギリギリでかわす銀時に容赦なく無数のクナイが次々と襲いかかる！

「チツ！……………！」

「……………！？」

女の子は札束を宙に放り投げた。

「何iiiiiiii!?!」

「フン……」

勿論銀時は札束に向かって全力疾走。

「これで…仕舞いだあー!!!」

両手から一斉に鎖付きクナイが照射される。

ズサアー!

「危ねえ危ねえ?」

何とか札束を抱き止める銀時は……

「ー!?!」

ダダダダダダ!!!

一斉射撃が銀時を覆った。

「小賢しいかったな…」

女の子はせせら笑うと、クナイの餌食となった銀時を…

「こつちだよ…くそガキ。」

「ー！？」

女の子のすぐ背後を取る銀時。
洞爺湖を握りしめ……

バコン！

「まあ…金時様。お怪我はございませんか？」

「殺されそうになっただけど平気だ…」

銀時は女の子を掴んだまま、初穂の元に戻って来た。

「離せー！離せー！」

「うるせーな…ジタバタするな。」

「うるさい！離せー！」

「……ったく。」

銀時に掴まれたままジタバタと暴れる女の子。

「今から警察に突き出してやるから大人しくしてろ。」

「ふざけるなー！何故私が警察などに…」

「殺人未遂に器物損害、それと窃盗罪だ。十分逮捕理由にاندらるうが。」

後、俺の財布にあった残り10万はどうした？」

「嘘つけ！2千円ぽっちしか入って無かったぞ！」

「お前…この期に及んでしらはっくれるつもりか？」

「悪魔め！」

「人殺そうとした奴に言われたかねーよ！！」

銀時と女の子が噛みつかん勢いでいがみ合っていると、

「まあ…その辺にして下さいな、おばあさま。」

「…は？」

初穂が女の子に声をかけた。

「うるさいうるさい……！」

「な！？オイ！」

女の子は銀時からスルリと抜けると、

「ぶっ殺してやるー！！！！」

服のありとあらゆる所から鎖付きクナイを弾き出した。

「どおおおお！？」

「まあ……おばあさまったら。」

「……！？しまっ、こんな時に……！」

襲いかかるかと思っただら突然顔を覆って苦しみ出した。

「オイ！どっし……！」

「…………！」

そこには小さな老婆がいた。

「………は？」

銀時は困ったように初穂を見る。

「また……無闇に力を使い過ぎですよ、おばあさま。」

「…だつて……」

「よいしょっと。」

初穂は老婆と化したものを抱き抱えた。

「……オ〜イ」

「まあ、そうでした。彼女は鷺ノ宮銀華おばあさま。
伊澄のひいおばあさんにあたるお人です。」

「………」

〜鷺ノ宮家〜

「銀華大おばあさま…ダメですよ？ 今後は気をつけて下さい。」

「………うん」

家に戻ると、銀華は伊澄に説教されていた。

因みに、

「…………大丈夫か？ハヤテ？」

「血が足りません……」

銀華はハヤテを無理矢理呼んで、血を吸ったようだ。

「すみません？ハヤテ様、大おばあさまが聞かなくて……」

「……いえ。全然大丈夫ですよ……」

「オーイ、目が虚ろになってんぞ……？」

ハヤテは虚ろな様子で明後日の方向を向きながら、

「では……まだ仕事がある……るので、失礼し……ます……」
フラフラとハヤテは帰って行った。

「ああ、じゃあ俺も帰るわ……アイツ一人にしておいたら交通事故に

でも遭いそうだからな…」

「はい…銀時様もすみませんでした。大おばあさまが迷惑をかけた
ようで…」

伊澄がすまなそうに銀時に頭を下げる。

「そんな奴に謝る必要無い！」

「大おばあさま様？」

「そいつはいきなり頭を殴ったのじゃ！酷い奴じゃ！」

「いきなりクナイで人殺そうとした奴が言う資格ねーだろ、ババア。」

「誰がババアだああ！！クソガキ！！」

「てめーしか居ねえだろ！」

銀時と銀華がまたいがみ合いを始めた。

「〜」

その間でオロオロする伊澄だった。

〜三千院家〜

「ああ！銀さん、ハヤテ君、おかえりな……」

「こるああああ！！お前今まで何処行つてたアルかー！」

「ぶばっ！？」

ハヤテが吹っ飛んだ。

「あ、間違えたアル。ゴメンハヤテ。」

「ちよつとおおお！？神楽ちゃん！？……大丈夫！？ハヤテ君！」
新八は倒れたハヤテに向かって行つた。

「今まで何処行つてたアルか？銀ちゃん？」

「大人には色々あんだよ……」

四人は屋敷に入つて行つた。

「……………」

銀時は自分の部屋で寝転がって時計を眺めていた。

コンコン

「銀さーん？ご飯出来ましたよ？」
マリアが呼びに来た。

「へーい……………」

銀時はドアを開ける。

ガチャ

「あ、そうだ。俺後で出掛けるわ……………」

「え？」

「何を踏んだか確かめねえとな……」

「……？……ハイ。」

「いや、やっぱり皆で食べるご飯は美味しいですね！」

「本当に普通の事しか言えないアルな……新八。」
はっちゃん

「いや、そのルビ何の意味があるの？」

「あ、新八。ソース取れヨ。」

「自分で取れよ！？」

「ソース取るくらいしか能が無いネ。お前。」

「オイ、チャイナ！！お前な、」

新八と神楽はいつも通り掴み合いを始めた。
まあ、一方的にメガネがボコられるだけだが。

「そういえば、お嬢様。明日　　の発売日では？」

「む！そうだったな、早くA m a o nで申し込みを…」

「ご飯食べてからですよ…」

マリアがナギを引き留めて、席に着かせた。

晩御飯が終わって、暫くした後。

「んじゃ、ちょっと出て来るわ。」

「あ、ハイ。」

銀時が面倒そうに頭を掻く。

「何処行くアルか？銀ちゃん？」

「何か遭ったんですか？」

新八と神楽は不安そうに尋ねる。

「大した事じゃねーよ…お前らは寝てる…」

「ハハーン、さては女アルな！」神楽がコン君よろしく銀時に指差す。

「……………」

途端にジト目になる皆。

特に女性陣から白い視線。

「いやいや！！違いーよ！？何そのアンモラルな視線は！？違うからね！？」

「どうですかね…」

「銀さん…」

「……………」

白い視線は強まるばかり。

「アララ、銀ちゃんの株大暴落ネ。」

「てめーのせいだろ！！どんだけ速攻で株落としてんだよ！」

「……………」

「いや、違うからね！？銀さん普段グータラだけど締める所はちゃんと締めるから！？」

「……………」

「神楽のやろ？」

半ば視線に追い出されるように屋敷を出た銀時。

「……まだ時間があるな。」

銀時は公園の時計を見る。

「屋台に寄ってくか……」

商店街に歩いて行った。

「お！いらっしやい…旦那は初めて見る顔だね。」

「最近ここに来たからな…」

「そうですか。じゃあ、今日は焼酎一杯サービスしときますよ？」

「いや…今日は酒は止めとくわ…ちくわと大根。」

「はいよ。」

「澳門家」

「昌蔵様…準備が整いました。」

「……そうか。今日で全ての準備が整う。」

「御出掛けの支度を……」

「うむ……」

昌蔵を取り巻きに数人の男達が澳門家をそつと後にした。

「……そろそろ時間だな……」
銀時はゆっくりと席を立った。

「親父…勘定。」

「はいよ。」

銀時は台に金を置いて、屋台を出る。

「毎度〜！」

銀時は商店街に足を向ける。

「さてと、んじゃ尻尾の正体を確かめに行くか…」
伸びをしながら歩き出した。

ざわざわ…ざわざわ…

夜中の雑木林は薄気味悪く、風が木々をざわめかす様子が尚も気味が悪い。

（オイオイ…どうして奴等はこんな陰気な場所が好きなのかねえ…）

銀時はゆっくりと丘のある方に進んで行く。

（つーか、何か本当に気味悪いんだけど…お、お化けとかいそうだ

し……って何言ってた、お化けなんてこの世に居ねえ！

更に歩みを進めて行く…

「
」

(……ん?)

丘の近くまで来ると人の声が聞こえた。

(……)

銀時は林の中から、丘を覗いた。

「
……」

「整いましたか？昌葎様？」

「ああ……」

(昌葎？あいつが……?)

昌蔵と呼ばれた男は歪んだ笑いを見せると、

「これで澳門は我が物だ……」
拳を握りしめた。

(オイオイ…やべーんじゃねえのか？真司の奴。)

「それで……？その陰に居るのは誰じゃ？」

(——！？)

銀時は息を潜めるが…

「無駄じゃ……出て参れ。」

昌蔵が木に向かって指を弾くと、木が尻ぎ倒れた。

「……オイ、マジかよ…どんな魔法使ったんだ？てめー。」

木の後ろから銀時が姿を現した。

昌蔵が銀時を見て目を細める。

「真司様の方の者では無いな？」

鷲ノ宮の回し者か？」

「違えよ…単なる通りすがりだ…」

「ほう…」

昌蔵は愉快そうに笑った。

「てめーに一つ質問があんだけど。」

「良いだろう。何でも申してみよ…但し、生きていればの話だが…」

「ーな!？」

いつの間にか銀時を数人の式術師が囲んでいた。

「よせ…貴様等は手を出すでない。」

「昌蔵様!？」

「せっかく力を試す良い機会だ…貴様等は先に帰っておれ。」

「しかし…」

男達が尚も躊躇すると、

「僕の言う事が聞けぬと言うのか…?」

「いえ！」

昌蔵がひと睨みすると男達は丘から雑木林へ帰って行った。

「良いのかよ……？じじい一人で？」

「人間一人等、普段の儂でも十分じゃが……」
そう言つとみるみる昌蔵の体に刺青のような黒い模様が現れる。

「お前！？」

「喜べ……貴様には特別な力を見せてやる。
せいぜいあの世で自慢するが良い。」

あっという間に昌蔵の体は黒い模様に包まれた。

「お前……それは……」

「ククツ……驚いたか？これは……」

「大丸の呪いか！？まさかてめーも！？」

「違うわああ……！！んなもんこの世にある訳ねーだろ！馬鹿か、
お前！」

昌蔵はコホンと咳払いすると、

「コレは確かに呪いだ……しかし呪いは呪いでも特別な呪いじゃ……
見せてやるつ……」

昌蔵の背中からどんどん黒いものが溢れて出てくる。

「ー!?!?」

そして、黒いものが昌蔵を包みこんだ…

「こいつ…!?!?」

銀時の目の前には真っ黒な身体に、大きく長い手がダランと伸びた何とも形容し難い化物が立っている。

赤く丸い目が銀時を捕らえて離さない。

「ーっ!?!?!」

銀時は洞爺湖を握りしめた。

「ガアアアアア!?!?!」

「!?!?」

黒い化物の腕がいきなり伸びた!

ドオオオオオオオオオ!!!

腕が木々を尻ぎ倒し、大地を削りとる。

「何つー威力持ってたよ!？」

かわした銀時にも風圧がのしかかった。

化物は手を緩めない。

「ガアアアア!?!」

手を鞭のようにしならせて銀時に放つ!

銀時は木刀を盾に、

「!?!?!」

木刀ごと弾き飛ばされた。

「ゴオオオオオオ!?!」

尚も銀時に手が伸びる。

「はああああ!?!」

「ガアアアア!?!」

ドオオオオオン!

木刀と鞭がぶつかり合う!

化物は手を引つ込めた。

「はぁ…はぁ…」

「ニンゲンニシテハオモシロイウゴキヲスルナ…」

「お前…喋れるのかよ…」

息の荒い銀時に化物は語りかけた。

「ホシイナ…オマエ…」

「生憎、俺は化物になる趣味はねーよ…」
銀時は木刀を構え直す。

「ホシイ…」

「――！！」

先程よりも速い速度で腕が伸びる！

「ガアアアアア！！」

ドオオオオオオオオオン！！！！

腕の先に銀時は……

居なかった！

「こつちだ…化物。」

「!？」

一瞬で懐に入る銀時。

「とつとと、くたばりやがれ！」

「ゴブツ…」

化物に木刀を突き刺した！

「な!？」

「グオオオオオ!!!」

化物は身体中を針状に尖らした。まるで針鼠のように…

「ーが!？」

当然銀時にも突き刺さる。

ブン！

化物は銀時を振り返す。

「ガアアアアア！！！」

続けて腕をしならせて銀時を叩きつけた！

「おおおおおお！！！」

…が、銀時はそれを木刀一つで受け止めていた。

ギシギシ……

足が地面をめり込み削ってゆく。

ギシギシ……

「おおおおおお！！！！！」

「ガアアアアア！！！！！」

鏝迫り合いが続く……

…と、化物の背中からどくどくと何本もの手が現れる。

「…何でも……有りか！？」

背中の手は形状を突起物に変えると、銀時に伸びてゆく！

「がはっ!?!」

何本もの針が刺さった銀時は脆く崩れて、

ブン!!!

吹き飛ばされた!!!

「ーづあ!?!」

銀時は地面をえぐり、木の幹に叩き込められた!

「ナミノニンゲンデハナイ…ダガ、モロイ。」

化物は銀時に迫ってゆく。

「……………」

銀時はかろつじて目を開ける。

目の前に映るのは真っ赤に染まった視界と、黒い塊。動かない身体と焼けるような痛みだけを感じられた。

「……………」

頭に浮かぶ皆の笑顔……………が赤く染まり……………

銀時は、意識を失った……………

〜三千院家〜

ピキッ……………

「アラ？窓に亀裂が？」

「本当ですね……」

一応銀時を待っていたマリアとハヤテが窓に手をかける。

「この間変えたばかりですけど……」

マリアは窓を開けて、外を伺う。

「銀さん、遅いですね……」

「ええ……」

妙な胸騒ぎのする二人だった。

第二十一訓 焦ったら負け（前書き）

クラウドスの

前書きの館！

クラウドス

「今回は迫り来る危機に対し、銀時の決意と伊澄お嬢様の覚悟が互いに展開します！

頼る事の、繋がり大切さとは何か？

鷲ノ宮の現状、澳門の現状、

それぞれの想いは一体どういった結論を生み出すのか？

そして私の出番は来るのか？

色々な意味で重要な第二十一訓ですぞ？」

ハヤテ

「いや、そんな大袈裟なものじゃ無いですからね？」

神楽

「そうネ！この小説はあくまでギャグコメディーが中心アル。シリアス展開なんてつまらない……」

新八

「神楽ちゃん！？ダメだよ！それ以上言っちゃ！？」

神楽

「新八は良いアルか？このままだと私達この長編、もう出番貰えな

いかも知れないヨ？」

新八

「良い訳あるかあああああ！！！！

そつだよ！やつぱりギャグ展開じゃないと僕達に出番は……」

クラウド

「贅沢を言つなアアアアア！！！！

出番が有るだけ有難いと思いなさい！世の中にはな……ワシのように
出番が貰えないキャラクターが沢山いるのですぞ！？」

ハヤテ

「クラウドさん……………」

クラウド

「今日こそは言わして貰おう！

早く私にも出番を……………」

マリア

「では始まります」

クラウド

「マリアアアアアア！？」

第二十一訓 焦ったら負け

(……………?)

強い光が瞼の裏に焼けるように滲みつける。

「……………ん？」

銀時はゆっくりと目を開けた。

「……………」

目の前にはクナイを持った銀華が今にも襲いかかろうとして…

「……………何やってんの？」

「何ちよっと息の根を止めようとな……………」

「……………」
銀時はまた目を瞑った。

「無視するなアアアアア！！！！」

銀華から何故か大量の猫が飛び出した！

フーツ！

猫が銀時を威嚇する。

「すみませんけど帰ってもらえませんか？
アナタに構ってると眠れないんです…」

「その棒読みの返事がム力つく！！！！」
銀華は銀時に飛びかかった！

「痛たたたたた！？止める、ババア！！」

「うるさい！クソガキ！！！！」

銀時の布団の上に乗る暴れる銀華。

「だから止め……………ん？」

銀時は気が付いたように辺りを見回す。

「……………何処だ？ココ？」

「…何処って、鷲ノ宮家に決まっているだろ…頭は外だけじゃ無くて中身もパーか？」

「パーってどういう意味じゃあああ…痛つつつ！？」

銀時は起き上がろうとしたが、酷い痛みで顔を歪める。

「あまり動かぬことじゃ。お主は普通だったら全治二ヶ月の重症の身じゃ…」

「……………！」

銀時は化物の事を思い出した。
直ぐに起きようと…

ガバツ

銀華に押し戻される。

「……………！？」

「まだ傷が治っていないじゃろうが。少しじっとしておれんのか？」

「何で俺はここに居るんだ？
あの化物はどうなった！？」

「……………やっぱり眠らせておくか。」

「ちよつと待てえええ！？取り敢えずそのクナイをしまえ！」

「何ちよつと眠らせるだけじゃ。」

「永遠の眠りになるだろうが！」

タタタタタ…

「銀時様！目が覚めたのですか！？」

「…伊澄？」

廊下から伊澄が走って来たようだった。

「心配するな伊澄。今から直ぐに息の根を止めてやるから。」

「大おばあさま？」

伊澄は銀華を銀時の布団から降ろすと、銀時の側に寄って来た。

「具合は…どうですか？」

「大した事…大有りみたいだな。まだ身体中が痛えが…まあこのくらい、いつもの事だ。」

心配そうに尋ねる伊澄に出来るだけ大丈夫そうに返す銀時。

「………そうですか。」

心底安心したように伊澄はへなへなと力を抜いた。

「……俺は何でここに居るんだ？あの後何があった？」

「……それは、」

伊澄はおずおずと切り出した。

昨日の夜、まだ銀時が屋台に居る時。

↳ 鷺ノ宮家 ↳

「……」

伊澄は自分の部屋で手習いをしていると…

「伊澄ちゃん…」

「……!?」

後ろに初穂が座ってお茶を飲んでいた。

「お母様…いつの間にいらしたんですか？」

「まあ、伊澄ちゃん…最初から居たわよ。」

「……………」

ズツとお茶を啜る初穂。

「それより…………澳門家の人達が、あの丘に集まるのが視えたわ。」

「…本当ですか。」

「ええ…今日の真夜中だと思っわ……………」

「あの丘は…確か……………」

「……………」

初穂は再度お茶を啜る。

「私行つてきます……………」

伊澄は札を多めに持って部屋を出ようとする。

「伊澄……………」

「はい?」

「気をつけなさい……やな予感がするわ……」

「はい……」

普段見せないような真剣な表情の初穂に頷く伊澄。

丁度銀時が屋台を出る時、伊澄は鷲ノ宮家を出て、商店街に向かって行った。

そして……迷った。

「……」

伊澄は相変わらず商店街とは見当違いの方向を歩いていた。

「商店街に…着かない…」

右へ左へオロオロと歩いていると、

「伊澄ー！！！」

「大おばあさま!？」

銀華が上から降りて来た。

「初穂から話は聞いた。あの澳門^{バカ}共、また何かやらかそうとしているとな…」

「どうしてここが…?」

「伊澄の事じゃ…多分見当違いの方向で迷ってるんじゃないかと思っつてな。」

「う…」

全くその通りなので返す言葉も無い訳だが…

「商店街はこっちじゃ…」

銀華は伊澄を引っ張って来た方と反対に進んで行った。

「この気配……今までに無い位大きいです……」

「チツ！」

伊澄を乗せて商店街を駆ける銀華。

そうして、雑木林まで辿り着いた。

ドオオオオオオオオオ！！！！

「な！？」

「この音は……？」

いきなり風をえぐるような生々しい音が木々を揺らした！

「行きましょう！」

伊澄達は雑木林に入って行く。

丘では思いがけない光景が広がっていた……

目の前には黒い化物がただずんでおり、化物の視線を辿ると大量の血が伸びていて……

「銀……時……様？」

血まみれの銀時が木に埋め込まれていた……

「銀時様！！！」

「マタフエタ……」

化物が赤い目が伊澄を捕らえる。

「ガアアアアア！！！」

化物が腕を伊澄に伸ばす！

「ー！？」

キイイイイイイン！！！！

「伊澄、下がれ！援護を頼む！」銀華がクナイで腕を受け止めた。

「でも！銀時様が！」

「今はこの化物を何とかするのが先じゃ！」

「……ハイ。」

伊澄は後ろに下がる。

「でやつ！」

銀華はクナイを大量に弾く！

「ゲルオオオオ……」
化物が後退する。

「大おばあさま！どいて下さい！」

「む！」

「術式八葉……」

伊澄の周りの術札が光を放つ。

「タケミカツチ建御雷神！！！！」

ゴオオオオオオオ！！！！

「ガアアアアア！？」

大きな雷が地面から化物の動きを止める。

しかし……

「効いていない！？」

化物は直ぐに雷を振り返った！

「チツ！伊澄の術が効かんのか……」
銀華はクナイを引っ込める。

「グルウウウウ……」

暫く睨み合う両者……

バツ！

「……え？」

意外な事に化物は丘を下り、逃げて行った。

「……何なんじゃ？一体？」

「……！ 銀時様……！！」

首を傾げる銀華の後ろで、伊澄が銀時に駆け寄った。

「しっかりして下さい！銀時様……！！」

「……」

伊澄が銀時を揺すが完全に銀時の意識は無い。

「……！！」

「大丈夫じゃ……まだ脈もある。」銀華は銀時に近づいてそう言った。

「とにかくここに置いとくのもアレだし、家に運ぶぞ。」

「……………ハイ…」

銀華は銀時をクナイでぐるぐる巻きにして…

「大おばあさま！それでは死んでしまいます！！」

血の気が引いてゆく銀時…

「面倒じゃのう…」

「……………と言つ訳でお前をわざわざ運んでやったのじゃ……………感謝しろ。」
銀華は銀時の前でふんぞり返ってた。

「……………つまり、」

「……………ハイ？」

銀時は伊澄の方に向いて、

「お前が遅刻しなきゃ、俺がこんな目に遭わずに済んだっつー訳だ。」

「あう！」

銀時は伊澄にデコピンをする。

「すみません……」

頭を押さえながら謝る伊澄。

「冗談だよ……アレは俺が勝手にやった事だしな。むしろ……」

伊澄の頭をポンポンと撫でる。

「助けてくれてありがとな……」

「……ハイ／＼／」

流石に撫でられるのは恥ずかしいのか真っ赤になって俯く伊澄。

「……まだあまり動くと身体に障るぞ？暫く寝ておれ。」
銀華が銀時をクナイで……

「オーイ、言葉と行動が合ってねえぞ？」

「お前には鷺ノ宮特性の薬を飲ませた。怪我が治るのも普通の数十倍早い。」

「だからそのクナイをしまえ…」

「伊澄から御守りを頼まれたのじゃ…仕方なかるう。」

「チエンジで。」

「…やんのか、銀髪パーマアアアア!!!!」

「ぎゃああああ!?!」

「大おばあさま!暴れてはダメです!」

うがああああああ

「……って、それより昨日の事は…痛っ!」

銀時は無理矢理身体を起こす。

「ええ…分かっていきます。」

「あのダイダラ ツチみたいな奴は何だ？」

「どちらかと言えばカオ シに近かったです…」

「彼処の家に何が起こってるんだ？」

「質問の多い奴じゃの…」

銀華は呆れたように言うと、銀時の布団に乗った。

「その前に、お主が見たものも、全て話て貰おうかの？」

「……………ああ…」

銀時は昨日の夜の事を覚えてる限り話した。

「昌蔵様が……………そうですね…」

「あの昌蔵バカはまたしょうもない事を……………」

「あの化物は何なんだ？何で昌蔵やっがあんなものに……………」

「あのバカのこと知らん。そもそも澳門なんぞどうなるうが知った事では無い。だが…」

「……？」

銀華はそこで言葉を切る。

「あの丘は…些かマズイの…」

「……どういうこと？」

「……あの丘には、昔鷺ノ宮家と澳門家が封印した妖魔が眠っているとされています。」

伊澄が銀華の後を汲んだ。

「封印……」

「恐らく彼はその封印を解いたのかと。」

「オイオイ、お前…そんなガムテープを剥がすみたいに。そんなに簡単に解けるもんなのか？」

「そもそもあの丘に封印されている事は澳門家では当主のみ、鷺ノ宮家では私達家族のみが知っています…」

封印の際の書物等はすべて焚書が行われたはずなのですが…」

「何らかの形で知ったのじゃろう。過程はどうあれ、あの化物は少し厄介じゃ…」

銀華が座り込み、腕を組む。

「彼が澳門を奪おうとする限り、必ず真司様に何か仕掛けるでしょう……」

「……こんな所もたまたましてていいのか？」

「ご安心下さい。あの妖魔にも弱点があります。

あの妖魔は夜にしか活動が出来ません。」

「何で分かるんだ？」

「実際にまだ書物が残ってたからの……別に光に弱い訳では無いらしいが、とにかく記録によれば日中の活動は無い。」

「だったら昼間の内に叩いちまえば……」

「焦るでない、馬鹿もの。」

昼間にノコノコ突っ込んだ所で無駄死にするだけ。

そもそも馬鹿を潰した所で妖魔本体を潰さなければ意味が無いのじや……」

銀時は頭を叩かれる。

「それにお主の怪我は重症じゃ……鷲ノ宮特性の薬でもあと二日はかかるかの……」

「……つまり？」

銀時の手に伊澄が手をのせる。

「……ここからは私達鷲ノ宮の仕事です……」

「…俺には手を引けと…」

「これ以上、銀時様を危険な目に遭わせる訳にはいきません。ナギ達にも顔向けが出来ません。それに…」

「オイババア、今直ぐに治せる方法は無いのか？」

「ー！？」

「有るには有るがの…」

銀華は怪訝な顔を銀時に向ける。

「ダメです！銀…」

「だったら今頼む。どのくらいで動けるようになる？」

バツ

伊澄が銀華の前に立ち塞がる。

「なりません。これ以上銀時様の身に危険が伴うことは許しません
！」

伊澄は銀時を見据える。

「……………ここまで関わって、ハイお仕舞いなんつってもなあ。
それに、俺は特に諦めが悪い質でね……………」

「……………」

黙って銀時の前に立つ伊澄。

「お前…一人で奴等の所に行くつもりだろ…？」

「!？」

「…やっぱりな。お前も俺と同じ馬鹿らしい…」

「な…伊澄!?!?どういう事じゃ!?!?」銀華も驚いたように伊澄を見る。

「話を聞いた以上、事は重大です… 私…」

「お前一人で奴等を、あの化物を倒せるのか？」

「…それは…でも、」

「どうしてお前はそうまでして一人で背負い込むんだ？」

暫くの沈黙の後、伊澄はゆっくりと口を開いた。

「…昔、私のせいで友達にとて怖い思いをさせた事があります…私が巻き込んだせいで。あんな事は…もう…」

伊澄は俯いたまま顔を伏せる。

「はあ……。お前なあ、もうとっくに巻き込まれてんだよ？俺は…」

面倒そうに頭を掻きながら、でも力強く答える銀時。

「……………」

「全部一人で背負い込むのは強さじゃねーよ…」

「……………私は、」

「頼りてえ時は、すがり付くくらいの気持ちで頼れば良い。巻き込んだしまった時は、思いつきり振り回せば良い。」

…今のオメーに足りねえ事だ。」

「銀時様……………」

「そつよ、伊澄。」

伊澄の後ろにはいつの間にか初穂と九重がいた。

「初穂お母様…九重おばあさま……………」

「銀時様の言う通り、巻き込んでしまったら、精一杯頼りなさい……………」

伊澄は銀時の方に向き直る。

「本当に……良いのですか……？」

「乗り掛かった船だ。

それによお……」

まだパフェ奢って貰ってねーからな……」

伊澄少し笑みを浮かべると、真っ直ぐ銀時を見据える。

「……お願い……します。私に……私達に、どうか力をお貸し下さい。
銀時様……！」

「俺だけじゃねえよ。

そのババアも、お前の母ちゃんも、ばあちゃんも……」

「……オメーの味方だ。」

伊澄は周りを見回す。

「当然じゃ。」

…まったくガキが生を言いおつて。
と銀華。

「伊澄…大丈夫。」
と初穂。

「頑張りな。」
と九重。

「ハイ。」

今度こそ、しっかりと頷いた。

「それにしても私達何でここに来たのかしら？」

「まあ、初穂。渡る間は鬼ばかりの再放送の時間じゃなかったか

しらっ。」

「そういえばそうでした……」

二人は部屋を出て行った。

「……では、早速治療するかの。」

銀華は銀時の前に移動する。

「……何で治療する人がチェーンソー持ってんの？」

「荒療治だからじゃ……」

「……」

ウィーン……

「待て待て待てえええ！？何の治療ですか、それは！？」

「大人しくせんか！下手に動くと死……余計長引くぞ？」

「死つて言った！？今死ぬって言いかけただろ！！
……伊澄！何とか……」

銀時は伊澄に助けを求めるが、
伊澄は既に障子の向こうへと移動していた。

「私は恐ろしいので、外で待ってます。

銀時様、頑張つて下さい！」

キラーンと伊澄の目が光った。

「オイイイイイイ！？」

「ジタバタするな、今すぐ止めてやる、痛みを。」

「ふざけんなあああ！？俺はまだこの世とおさらばする気はねーんだよー！」

「これは立派な治療じゃ！直ぐに楽になる。」

「何処が治療だああー！！」

治療が必要なのはお前らの頭！！！！」

「つべこべ言わずに治療されるおおー！！！！」

「ぎゃああああー！？」

パタン……

伊澄は障子を閉じた。

「……………治った……？」

「…当然じゃ。」

銀時は奇跡的？に回復したようで、目の前には胸を張る銀華の姿。

……………え？どうやって治ったか？

.....
KUS?
?

第二十一訓 焦ったら負け（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「いや〜、銀さんはやっぱり格好良いな…っー訳で今日は終わりだ…気をつけ〜」

新八

「ちよつと待てえええ！！！何勝手に終わらせてるんですか！？」

銀八

「いやさあ…もうかなり見せ場があつたし、もういいかなつて…」

神楽

「良い訳ないアル！

銀ちゃんばかり格好良いシーンずるいネ！」

新八

「いや、まあそれは仕方ないよ…でもやっぱり銀さん、締める所は格好良いですね。」

神楽

「むしろいつもより優しくて気持ち悪かつたアル！

あんな銀ちゃんは銀ちゃんじゃ無いネ。ダメダメな銀ちゃんらしさが微塵も見えなかつたアル！」

銀八

「ちよつと神楽ちゃん？それはないんじゃないの？」

ヒナギク

「先生…早く始めないと…」

銀八

「ハイ、そうでした。」

『銀時とハヤテに質問。伊澄の家族をどう思うっ？』という質問です。
「

ハヤテ

「どうって…やっぱり遣伝子レベルまで親子って感じですかね。」

銀八

「もう人目みて、伊澄の家族だって分かるよな…」

ハヤテ

「あ、そうですね。」

銀八

「あの対応のしにくさは、ある意味才能だな…」

伊澄

「……………」

ハヤテ

「ボケの中でも、群を抜いてますからね…」

銀八

「まあ、伊澄がしっかり者の家計だからなあ……………」

ハヤテ

「でも大おばあさまはポケでは無いですね。」

銀八

「ババアはババアである種のポケだろ……とにかくこのままでは、鷺ノ宮家はポケが飽和してツツコミがなくなってしまつかも知れない！」

ハヤテ

「ええ……！？そんな事になったら……」

銀八

「飽和しきれなくなったポケが日本各地に広がって、世の中伊澄だらけになる……」

ハヤテ「そんな！？じゃあ世界はどうすれば!？」

伊澄

「……………」

銀八

「オーイ、伊澄？何で札をこっちに向けてるの？」

ハヤテ

「……………伊澄さん？」

伊澄

「……………建御雷神……」

ぎゃあああああああ！？

ヒナギク

「……続いている質問は…今ハヤテ君も先生も動けそうに無いので、次回にしますね。」

では、また次回」

第二十二訓

SAGINO MIYA SOLID3 SUBSISTEN

クラウドの

前書きの館！

クラウド

「皆こんにちは、クラウドの館のお時間です……」

ハヤテ

「クラウドさん……これコーナーにしたいんですか……？」

クラウド

「読者様からも私に出番をあげてやってくれとの応援メッセージも頂いております。」

新八

「それ応援と言つより同情じゃないですか……」

クラウド

「では今回は……タイトル通りですな。」

ついに物語も中盤戦に突入して行きます。いよいよ物語の中心に入つていく訳ですな。

そして、いよいよ……」

銀時

「だあああああ！？ふざけんな！絶対俺はやりません！！」

銀華

「くおらあああああ！！！！大人しくしてろ！！」

ドタバタ……

クラウド

「……………コホン、そして……………」

初穂

「まあ……………伊澄ちゃん。ここは何処かしら？」

伊澄

「前書きです……………お母様。」

初穂

「なるほど……………セリフの上に名前が出ているからと言う推理ね。流石だわ、伊澄ちゃん。」

伊澄

「違います……………常識です、お母様。」

クラウド

「……………始まりますぞ！」

ハヤテ

「……………？」

↳ 鷺ノ宮家

「んで？一体これからどーすんだ？」

銀時は伊澄に尋ねる。

「ええ…大おばあさまの話によれば、妖魔が姿を現せるのは日没後人間に取り込まれた妖魔は、例え人間自体を倒しても意味がありません。

妖魔自体を叩かなくては。」

「んじゃ、夜に澳門家に突っ込むのか？」

バコン！

「痛っ!？」

銀華が銀時の頭を叩いた。

「馬鹿もの。夜は更に警戒が強まるに決まっておるだろ…」

「ええ…なので、今の内に澳門に潜入します。」

「潜入？」

「ハイ…そして日没までに真司様と会えれば…」
なるほどなと銀時は頷いた。

「けどよお、奴等が今すぐに真司を襲わないのは何でだ？」

「真司様は澳門…いえ、鷺ノ宮を合わせても最強と言われています。澳門の者が何人束になろうと、それが奇襲だとしても恐らく敵わないでしょう。」

「だからこそ、あの馬鹿は妖魔なんぞの力に手をだしたのじゃろこの。」

「そこで、潜入です…」

すると伊澄は何かを取り出した。

「お前…これ…」

「ステ ス迷彩とフェイスペイントです…」

「…何でステ ス迷彩があんの？どうやって作ったんだよ…」

「鷺ノ宮家の力ですわ！」
キラーンと伊澄の目が光った。

「よし……お前は家の残れ。もしくは帰れ、故郷に。」

「……！！！」

無視して行こうとする銀時にパタパタと叩いて抗議する伊澄。

「はあ……タイトルからして、まさかとは思ったが……」

「隠蔽用の装備だけではありません。M172や、AK47、閃光手榴弾、それから……」

スパーン！

「お前ははす向かいに戦争しに行く気か……！

ここはアメリカじゃねーし、

はす向かいはソ連でもありません。

っー訳で、全部置いてけ。」

「……うう。銀時様も何ですかその袋は？」

伊澄は頭を押さえながら指差す銀時の腰にはチョコやらなんやらのお菓子が沢山入った袋。

「古くから、お出掛けにはお菓子が必要だっけ決めてんだよ。

かのナポレオンもアルプス越えの時にお菓子を沢山持ってたから、あんな事が成し遂げられたんだよ？」我輩の辞書では外出にはお菓子は300円までだ」

っけ言ってたんだよ。」

「そんなに沢山で300円のはずがありません……！！」

「違いますう。半分は家から持って来たんですう。カウントには入りませーん。」

パタパタ…パタパタ…

伊澄は何か言い返そうと、言葉を探す。

「…とにかく、んなものは置いてけ。」

「……………」
伊澄は名残惜しそうに武器等を見つめていた。

「最低限の準備だけをするのじゃ。出来るだけ軽い格好でな…」

「……………あ！」

銀華は銀時のお菓子の袋を取り上げる。

「日没まではあと二時間弱。それまでにこちらが少しでも有利な状況にする事が最優先じゃ。」

「分かりました、大おばあさま…」
銀華の言葉に頷く伊澄。

「オイ、因みにその携帯電話は何だ？」

「GPS用発信器です。無いと迷子になりますので……」

「……お前、やっぱ残れ……」

銀時は頭を抱えた。

こうして、澳門家潜入ミッションが始まった。

ミッション01 澳門家潜入 真司の部屋にノーアラートで辿り着け！

「……と、言う訳で澳門家にやって来ました……」
銀時と伊澄は澳門家の庭の一番端の方にある木々の中に身を潜めていた。

……どうやって入ったかはご想像にお任せで。

幸いまだ周りには人が全く居ないが……

「もうこのまま屋敷に全力疾走すりゃ、中に入れんじゃね？」

「銀時様……今ここで焦ってはなりません。私達は潜入をしているのですよ？もしこんな所で見つかりでもしたらどうするんですか……」

くくく

「ーん!？」

鳴っているのは携帯の着メロのよう……

「まあ、お母様からだわ……」

「お前がどうするんだアアアア!!!」

スパーン

「何で潜入に携帯持って来てんだよ!？」

「…もし重要な情報が来た時にすぐ対応するためです。潜入ですから。」

そう言つて伊澄は携帯を開けると、

『伊澄ちゃん、シャーマ キングの17巻は何処にあったかしら?』

「どーでも良いメールじゃねーかあああ!」

「居間の棚の上です……、

シャーマ キング17巻は面白いですよ?恐山ウオー に入る前の

……」

「そういう問題じゃねーだろ!」
ポコッと頭を叩く。

「……………?」

「だったらせめて、サイレントにしておけよ!」

「……………サイレントの仕方が分かりません……」

キラーン

「オメーに潜入を語る資格はねええええ!!!!」

「…? 誰か居るのか!?!」

屋敷の奥から声と共に足音が近づいて来る。

「やべっ!!」

銀時と伊澄は木々に潜り込んだ。

……

「気のせいか……」

足音は遠退いて行った。

「はぁ………何てこった。」

伊澄との潜入はエクストリームのノーアラート並みだった…

しかし、銀時が想像した以上に潜入は大変なものだった…

進む度に迷子に消えたかと思えば、まったく訳の分からない場所に現れる。

何とか見つからずに伊澄を連れ戻して、大人しくしているかと思うとまた消えている。

その繰り返しだった……

「……俺の認識が甘かった……」

「……？」銀時達は何とか、奇跡とっていい程の死闘を繰り広

げ、屋敷内に潜入を成功した。

「…もう頼むから何もしないでくれ……」

「私…何もしてません。」

銀時達は静かに進んで行く。

「この屋敷には来た事はあるのか？」

「はい…何度か。」

「真司の部屋は何処か分かるか？」

「任せて下さい。真司様の御部屋はこつちです…！」
銀時は伊澄に連れられて、真司の部屋に向かった…

～真司の部屋～

真つ暗で埃っぽい部屋に書物が乱雑に散らばっている。

「全然違えじゃねーか!!!何処ここ!?!」

「……………?」

伊澄は首を傾げる。

く暗い部屋く

「書物庫でしょうか?随分古いようですが…」

「……………本当に古い本^{もの}みてえだな。何が書いてあるかさっぱりだペラペラと書物を捲る銀時。」

「何か妖魔に関わる書物があるかも知れません。」

「お前…読めるのか?」

「……………はい、一応。」

興味本位もあり、暫く二人は書物庫を物色していた。

「アラ…？銀時達、それは…？」

「……ん？」

伊澄は銀時が手に持っていた書物に反応した。

「……これを、何処で？」

「？……その棚の隅に挟まっていた。知ってるのか？」

「その表紙……恐らく、鷺ノ宮と澳門の昔の記録だと思います……」

銀時は伊澄に手渡した。

「私も大おばあさまから話でしか聞いたことがなかったのですが、
遙か昔、鷺ノ宮と澳門は一つだったと聞きます。」

「一つだった？」

「……ええ。ですが、ある事件を境に二つに分かれたと言われていま
したが……」

伊澄がボロボロになった表紙をじっと見る。

「……恐らくこれは、昔に焚書されたはずのものですね…
何故ここに今有るのは分かりませんが…」

鷺ノ宮が一つから二つに分裂した時の記録が載っているものだ……」

「そりゃ、大発見じゃねーか。」

「本物ならば恐らく……」

伊澄は書物をゆっくりと開い……

ゴオオオオオオオオ！！！！

「な！？」

書物が強い光と共に、風を起こした。

「こりゃ……一体……」

書物は更に光を強めたかと思うと……

グワッ！

「のわっ！？」

「きゃ！？」

……書物の光は消えて、何事も無かったように部屋が静まりかえる。

銀時と伊澄の姿はそこには無かった……

第二十二訓

SAGINO MIYA SOLID3 SUBSYSTEM

祝！約60000PV！！！！

銀時

「えー、この度PVが大体60000くらいになったと言う事で、感謝と共にご挨拶を申し上げます…」

新八

「でも、本当にありがたいですね。こうして読んで頂いて。」

神楽

「っーかもう洞爺湖設定とか忘れられてるアルな。」

新八

「ちよつと、神楽ちゃん？そこまだ作者が悩んでる所なんだから…？」

作者

「いや、実は大体考えてあるんですよ…かなり大きな伏線になるはずですよ。一応。」

新八

「あ、そうなんですか。それは楽しみですね。」

ナギ

「まあ、大きな伏線なら当分先の話だろうがな…」

ハヤテ

「まあ、気長に待ちましょう。」

マリア

「それはそうと、大体60000PVって実際はどのくらい何ですか？」

銀時

「え〜と、どうなんだ神楽？」

神楽

「そのまま新八。」

新八

「え！？僕？え〜と、ヒナギクさんで。」

ヒナギク

「…と言う訳でハヤテ君！」

ハヤテ

「え！？じゃあ、マリアさん…。」

マリア

「ナギ、お願いします。」

ナギ

「…と、見せかけて伊澄！」

伊澄

「……………」

作者

「57800くらいだったかな…?」

一同

「全然違うじゃん!?!?!」

作者

「まあ、PVの事はいいとして、これからこの小説を…」

一同

「よろしくお願いします?」

第二十三訓 昔話は眠くなる(前書き)

次回からクラウスの館は少しお休み致します。

理由は、後書きの事情なのですが、まあ今回の後書きと次回の前書きを見て貰えば分かりますので。

では、第二十三訓です。

どうぞー！

第二十三訓 昔話は眠くなる

昔々…

まだ鷺ノ宮一族が一つだった頃…

この日、鷺ノ宮一族は二人の子供を授かる事になる。

〵 鷺ノ宮屋敷 門前〵

門には見張りの男が二人立っている。

「……………」

「…なあ、もうお生まれになられたかな？」

「まだだろう…今、祈祷師様が祈られておいでになっている。」

この日は鷺ノ宮一族当主の鷺ノ宮頼綱の妻の出産日であった。

「しかし……何の因果か。まさかお二人同時にご出産とは。」

「まったくだ…偶然過ぎて逆に不安だな…」

頼綱の妻は二人いるのだが、二人同時に出産を迎える日となったのである。

西の方には、妻の一人、

鷺ノ宮楓が。

東の方は、もう一方の妻、
鷺ノ宮弥生が住んでいる。

「…男の子でも女の子でも、ゆくゆくはこの鷺ノ宮の当主のなる身だ。お二人の内のどちらかがな…」

「…複雑だろう。腹違いとは言え、ご兄弟（姉妹）になられる訳だからな。」

「ああ……」

門で二人が話込んでると…

おぎゃあああああ！！！！

東西から元気の良い赤ん坊の泣き声が響き渡った。

「おお！どちらもお生まれになったようだぞ？」

「まあ、これで暫くは鷺ノ宮も安泰だな……」

後に、鷺ノ宮を二分する事になる鷺ノ宮久慈無と鷺ノ宮茉莉の誕生日である……

五年後……

く鷺ノ宮家く

鷺ノ宮久慈無、茉梨　　五歳の春。

この日、久慈無と茉梨が初めて対面する事になる。

「ほら、この娘が茉梨ちゃんよ……」

楓が久慈無の背中を押す。

「……よろしくね？茉梨ちゃん」

「ほら茉梨、久慈無ちゃんよ。
挨拶しなさい？」

「……よろしく……」

茉梨は弥生の後ろに隠れて、ひょっこりと顔を覗かせる。

楓の娘の久慈無は明るく、積極的なタイプに対して、弥生の娘の茉梨はまったくの正反対。内気で人見知りな激しいタイプ。

そんな二人が仲良くなるのに、時間はかからなかった。

久慈無、茉莉、八歳の夏…

「うーん、じゃあこんなのはどう？」
久慈無が札を投げると、小さな竜巻が起こった。

「わあ…凄いや！久慈無！」

「まだ小さいけどね…」

「ううん！私なんてまだ風も起こせないもの。やっぱり久慈無は凄いな！」

「茉梨だって、私より水を綺麗に操れるじゃない。」

興奮気味に語る茉梨にニツコリと微笑んで久慈無が言った。

「凄いのには久慈無の方よ。」

「茉梨よ。」

そしてお互い顔を見合い笑い合う。

「じゃあ、どちらも凄いと云う事で。」

「そうだね！」

この頃から二人には式術師としての才能が芽生え始める。

鷺ノ宮一族は性別では無く、能力の高さを第一に当主を決定してきた。

頼綱には他にもいくらか子供は居たが、この二人はその中でも飛び抜けた能力を持っていたのである。

二人はその能力の高さ故、お互いを励まし合い、式術師として精進していく。

しかし皮肉な事に、それが惨劇へと繋がってゆくのだった…

銀時

「……………何、コレ？」

伊澄

「どつやら私達は過去の世界を見ているようですね…」

銀時

「まさか…タイムスリップって奴…」

伊澄

「…と言つよりも過去の出来事を回想させられているようです。実際に私達は実体がありません。」

銀時

「あ、なるほど……………ってオイイイイイ！？マジかよ！？どーすんの！どつすれば帰れるんだ！？」

伊澄

「ハ…ポッターと秘密の 屋でも出来事が終われば元に戻りまし

た。きつとこれも……」

銀時

「……お前の案内はもう絶対信じねえからな……」

伊澄

「……………?」

時は流れて……

久慈無、茉莉　18歳の春……

数日前に当主であつた頼綱が病で急死。

次いで、その翌日。その妻であり、茉莉の母である弥生が亡くなつたのだ。

「……………」

「茉莉……………」

茉莉は弥生の棺の傍らに座っている。

もう数時間前に通夜は終わっていた…

「……………」

「…もう寝ないと。明日も早いから。」

「……………」

久慈無の声が届いて居ないかの、ただ棺を見つめる茉莉。

「…………茉莉」

「…………ねえ……………」

「…………ん？」

茉莉が久慈無の方に振り返る。

「…………お父様も、お母様も居なくなつた…………私……………」

「…………大丈夫。私が居る。私が茉梨を守るから…………」

「…………う…………」

じわりと目に涙が浮かぶ。

「大丈夫だから…………」

「う…………う…………」

久慈無は茉梨を抱きしめた…

それから数カ月後…………

次期当主を決める投票日であった。

代々この鷹ノ宮家は当主を投票で決めると言うこの時代としては変わった方法をとっており、だからこそ繁栄していたのであった。

次期当主候補は久慈無と茉梨である。

勿論、久慈無方の人間、茉梨方の人間は居るがそれは極一部。
鷺ノ宮のほとんどの人間が、中立の立場となるので、本当に鷺ノ宮
を任せられる人間を選んでくれたのである。

……そしてその日、鷺ノ宮家次期当主として、鷺ノ宮久慈無が任命
された。

翌日

「……おめでとう久慈無。悔しいけど、貴方なら安心してついで行ける。」

「ありがとう。出来る限り頑張ってみるわ。」

茉莉の気持ちは複雑だった。

と言うのも当主とは一族の誇りである。茉莉は母を失った時に、亡き母に顔向けできるように当主を目指すようになった。

しかし、明るく人当たりも良く、何よりいつも自分を引っ張ってくれた親友である久慈無だから、と思い直す事にしたのだった…

しかし、どのの時代にも反対勢力はいるもの。

～東側～

無事に就任式も終わった夜。

茉莉は自分の部屋で物思いに耽っていた。

「茉莉様……」

部屋に入って来たのは茉莉側の宰相である、鷺ノ宮慶蔵。
茉莉を当主にと持ち上げる勢力、いわゆる反久慈無派である。

「どうしたの、慶蔵？」

「……お耳に入れておきたい事が……」

「……何かしら？」

「今回の当主決めでは不正が行われています……」

「慶蔵：私は負けたの……久慈無が選ばれたのよ？」

茉莉は顔を曇らせる。

「それにあの投票の仕方ですら不正なんか……」

「……久慈無様方の人間達が買収をかけていました。」

「何を馬鹿な……」

茉莉は軽くあしらうが……

「証人がおります。」

慶蔵の後ろから二人の男が現れる。

「二人は久慈無様側の人間です。……二人の証言によれば、久慈無様

を中心に鷲ノ宮の人間に買収をかけていたと言つ事になります。」

「そんな馬鹿な！？久慈無がそんな事…」

「……本当です…」

「私達も加わっていました…」

二人の男は伏し目がちに言う。

「嘘……嘘よ…そんな事!？」

「残念ですが…真実です…」

崩れ落ちる茉莉…

嘘…そんな…

久慈無が……どうして…

ずっと親友だったのに…

ずっと……なのに…

裏切られた……

裏切られた!!!

裏切られた……………？

親友……………？

最初から全部嘘だった……………？

久慈無は……………そんな事思ってなかった……………？

ああ、そうか……思ってたのは……………

ハジメカラワタシダケ……………

「茉莉様……奴等をこのままにしているいいのですか!？」

「……………でもどうすねば？」

「……報復です……我々をこんな目に遭わせた奴等を見返してやりましょ。」「

「……………エエ……ソウネ……………」

一方……

（西側）

久慈無の周りでは母楓を始め、少数の人間が忙しなく動いていた……

明日から久慈無が当主となるので、その準備である。

久慈無本人は前当主であり、父である頼綱の残した日記を読んでいる。

言わば当主の心得のような物だ。

「頑張らないと……」

決意を新たにするのであった。

深夜……

（西側）

ガタ…

「……うん？」

久慈無は妙な物音に目を覚ました。

「……喉渴いた…」

久慈無は井戸で汲んだ水を飲む為に、塗籠に向かった…

「……アレ？」

塗籠に向かう途中、母屋の戸の隙間から明かりがこぼれているのに気付いた。

「……お母様？起きてらっしゃるのですか？」

久慈無は戸を引いた。

居間一面には血、血、血……

久慈無の方の家臣達が、数人死体となって転がっている。

そして……

「お母様!?!」

楓も倒れていた……

「お母様!?!お母様!?!」

久慈無は楓に駆け寄る。

「お母……」

意識は無いものの、まだ息はあるようだった。

「……何で……一体どうして、こんな!?!」

「……うっ……」

「!?!」後ろから呻き声が聞こえる。

家臣の一人だ……

「大丈夫!?!しっかりなさい!?!」

「……久慈無様…茉梨様の手下が…いきなり押し入って来て…」

「どういう事!?!」

久慈無は男を揺する。

「……茉梨様の命で動いていると………」

「……嘘………」

久慈無は呆然と座り込む。

「……お気をつけ下さい……奴等は………」

「……!?!?しっかり!?!」

しかし、男は息絶えた。

「……茉梨が……?」

どうして……こんな……

間違いよ……何かの間違いに決まってる……

茉梨に会わないと……!

久慈無は楓の元に戻ると、手を取る。
その目からは涙が零れ落ちた。

「今、人を呼んで来ます。……お母様……」

久慈無は西側、中央の人達に知らせると、急いで東側に向かった…

茉莉の部屋に向かう途中、慶蔵に出くわした。

「慶蔵……」

「ああ！久慈無様！

茉莉様が…茉莉様の様がおかしいのです！部屋に籠ったきり返事もされずに…

もう大殿籠なされたようですが。」

「……そうなの……」

この慶蔵と言う男は周りからの信頼の厚い人であった。
外面がとにかく良いのである。
勿論、久慈無も慶蔵を信頼している。

「久慈無様…？どうかなされたのですか？」

「……………」

久慈無は先ほどの出来事を慶蔵に打ち明けた。

*

「そんな馬鹿な！？何かの間違いに決まっています！」

「…………私だって信じないわ、このような事。…だから早く茉莉に会わないと……………」

「当然です！茉莉様は久慈無様の親友でございますぞ。そのような真似が出来るはずなど……………」

慶蔵が心底驚いたように話していると……………」

「ここにおられましたか！久慈無様！」

家臣が二人やって来た。

「…………何か分かったの？」

「…………襲撃をしたと思われる人間を一名、捕らえました。」

「それで!?!」
久慈無が詰め寄る。

「……………それが、茉莉様が命じたと……………」
「嘘……………」

裏切られた……………
裏切り……………?

親友だった……………

本当にそう?

ハジメカラナントモオモツテイナカタノデハ……………?

「久慈無様!!」
崩れ落ちそうになった久慈無を慶蔵が支える。

「茉莉様に何があったのかは分かりません。しかしまだ証拠もありませんし、今は一旦お戻りになられた方が良いでしょう……………」

「ええ……………」
久慈無はフラフラと部屋に戻って行った。

「……ご苦労だったな、二人共。」慶蔵は今の二人に耳打ちする。

「……いえ……」

実はこの二人は茉莉に証言したあの二人だったのだ。

「クククッ……」

慶蔵は卑しく笑った……

久慈無達は亡くなった六人の家臣達を弔うために、祈禱を行っていた。

楓は何とか助かったものの、まだ意識は戻ってはいなかった。

久慈無は今までの感謝と哀悼の意を込めて、彼等を祈った。

祈禱が終わると、この事件が茉梨の指示のもと行われた事が明白となる。

茉梨側の人間数人が自白しにやって来たのだ。

これで茉梨はもう言い逃れ出来ぬ状況となった…

～東側～

西側での今の状況を知らない茉莉は、昨日の事についてずっと悩み葛藤していた。

昨日、慶蔵が提案したのは、東側を襲うと言うものであった。しかし、あくまで警告程度、死者は出さないと言う事だった…

「私は……」

いくら警告とは言え、これは立派な反乱と見られてもおかしくは無い。

トントント

「……はい？」

「……………失礼します。」

「貴方達は……………！」

部屋に入って来たのは昨日、茉莉に証言した二人だった。

「申し訳ございません！」

「……………え？」

「私達は大変な過ちを犯しました。……………あの久慈無様の話は嘘なのです、全て！」

「!?!？」

茉莉の中で何が壊れる音がする。

「……………そんな…じゃあ……………私は……………」

「私達二人の勝手な行動です！」二人は土下座を更に深めた。

「……………どうして……………」

茉莉の声は震えている。

「話は聞かせて頂きました。」

「慶蔵……………」

二人の後ろから慶蔵が姿を現した。

「茉梨様。事は一刻を争います。至急、久慈無様に面会をすべきです……」

「でもどうすれば……」

「私が久慈無様に文を送ります。ご安心下さい……今回の主犯は私です。それも含めて、久慈無様にお伝え致します。ですので、茉梨様は夜、久慈無様の部屋で面会出来るように取り計らいましょう。それと、こやつら二人の処分は私にお任せ下さい……」

「慶蔵……」

分かったと言うように頷く茉梨。

「では、」

慶蔵は二人を連行して行った。

「私は……久慈無の事を少しでも疑った……」

「ごめんなさい……」

「ごめんなさい……」

茉梨は涙を流し続けた……

「慶蔵様……？アレでよろしかったのですか？」

慶蔵に連行されていた二人が尋ねる。

「上出来だ……」

「しかし、わざわざ白状するような真似を……」

「まあ、見ておれ。今に分かる。」

慶蔵は茉莉の部屋に向かって、ほくそ笑んだ。

～西側～

タタタタタ…

廊下を忙しなく歩く音だけが響き渡る中、久慈無は頭を抱えて黙り込んでいた。

茉莉の指示だと言うことが分かってても、西側の証言が得られない限り事態はまったく進まないのだ。
楓が目覚ませば良いのだが、まだ目を覚まさない。

「久慈無様！！」

「どうした？」

家臣の一人が広間に走って来た。

「慶蔵様から文が届けられました。」

久慈無は差し出された手紙を広げた。

「久慈無様

突然の便、ご無礼をお許し下さい。無闇な混乱を避けるため、こつこつして文を送らせて頂きました。

茉莉様が久慈無様と二人で話をしたいと言っております。
今日の日没、久慈無様の御部屋でとの事です…

ですが、お気をつけ下さい。

暗殺を目論んでいる可能性があります。故、御部屋に何人か忍ばせておく必要があるかと思えます。

何事も無い事を祈りますが、万が一があります。
十分お気をつけ下さい。

慶蔵

「……至急、皆をここに集めなさい。」

「…分かりました。」

家臣は広間を出て行った。

「……………」

久慈無は哀しげな目を空に向けた。

夜……

茉莉は久慈無の部屋の前にいた。
戸を叩こうとすると、

スツと戸が開いた……

そこには厳しい顔した久慈無が座っていた。

「久慈無……」

「入りなさい……」

茉莉は部屋に入る。

「久慈無……」

「一つ聞かせて……あれは貴方の指示なの？」
久慈無は厳しい表情を変えない。

「……ごめんなさい……私……」

「……」

崩れ落ちる茉梨。

「……連れていきなさい。」

「え……?」

茉梨の後ろから久慈無の家臣が彼女を捕まえる。

「久慈無……違うの!私……」

「貴方の……貴方のせいで六人も亡くなったのよ!!お母様も意識がまだ……」

「え……そんな……嘘……」

茉梨は目を見開く。

死者が出るなんて聞いて無い……

「……聞いて無い!私はそんな事……!」

しかし、久慈無が茉梨に向けた目には少しも光が灯っていなかった。

「……親友だと思っていたのは、私だけだったのね……」

「違う！違うの！久慈無…」

「連れていきなさい…」

そう言うと久慈無は背を向けた。

「久慈無！久慈無ああ！！！！」

悲痛な叫びを残して、茉梨は連行された。

その日、茉梨は処刑された

茉莉が処刑されてから、慶蔵は茉莉の罪の代償として、東側が鷺ノ宮家を出る事を提唱する。

そして、鷺ノ宮はこれを決定する。

そして……

せめてもの手向けとして、茉莉の葬儀が行われた。

久慈無はやりきれない表情。

慶蔵も表面は悲しそうに俯いているが……

(クククッ…アツハハハハ！)

心の中は、愉快の一言であった。

(ここまで上手く事が運ぶとはな…)

そうなのである。

全ては慶蔵の策略であつたのだ。

久慈無が当主になつた時、茉梨の僅かな嫉妬心に上手くつけ入り、茉梨に西側を攻撃を唆せる。

また、久慈無にも茉梨に対する疑心暗鬼を増幅させて、お互いを仲違いさせる。

あの西側の人間二人は慶蔵が買収していたのだつた。

そして、茉梨を過ちに気づかせ、謝らせる為に、西側に赴かせるように仕向、同時に久慈無にも警告しておく。

そして、茉梨を亡きものに、

慶蔵が東側のトップとして鷺ノ宮を離脱しようと思論んだのだつた。

そして事はその通り運んだ…

失意の中で死んでいった茉莉の怨みは計り知れない。

葬儀も中盤に差し掛かった頃……突然地震が起こった。

茉莉の棺から物凄い憎悪の音と共に、黒い気が溢れ始めたのである。

みるみるうちに黒い気は形を作ってゆき……

巨大な化物となって、久慈無達の前に現れたのだ。

「何だ！？アレは!?!？」

化物は煌々と赤い眼を人々に向け、

「うわあああああ!?!?!」

化物が周りの人間を次々と喰ってゆく。

「皆！あの化物は私が食い止めます！その間に残りの全ての人間は封印の印を！」

久慈無は化物の前に立ち塞がる。

「皆！久慈無様のおっしゃる通り、印を刻むぞ！」

「ハイ！」

久慈無の後ろでは、慶蔵を中心に鷲ノ宮一族総出で印を刻み始めた。

久慈無は札を取り出す。

「古より従属せし風の神よ…」

我に力を貸したまえ。

……鎌鼬！窮寄！」

久慈無の前に、両手が鎌の鼬と身体中が針鼠のような牛がつむじ風と共に現れた。

「アレを止めなさい！」

化物に鎌鼬と窮寄が向かっていく。

ドオオオオン！

「おお、流石久慈無様！風神の中でも高位な妖魔を二体同時に召喚するとは…！」

「そこ！印を休めるな！」
慶蔵達は尚も印を結ぶ。

「ガアアアアア！！！」
化物は二体を吹き飛ばす！

「くっ…！二体ではもたないか…！」
久慈無は更に札を取り出す。

「大いなる風神よ…我に力を与えたまえ…！」
ゴオオオオオオオ！！

「おお！あれは、久慈無様の最強の妖魔だ！」

大きな雲に乗り布を纏った、女性が現れた。

「風神……あの化物を止めて！」

風神はニツコリと微笑むと化物に向かってゆく。

ドオオオオオオオオオオ！！！！！！

三体が化物と均衡する。

「……………久慈無様！準備が整いましたぞ！」

慶蔵達は封印の準備を整えた…

「……………引きなさい！」

久慈無は妖魔を下がらせる。

「……………今だ！」

慶蔵達は印を化物に向ける。

「ギヤアアアアア！！！！」

……みるみると印が化物を縛ってゆく。

そして、化物は鷺ノ宮一族総出で退治され、丘に封印されたのだ
た。

この騒動での死傷者は120人にも登ったと言う。

予告通り慶蔵は東側のトップとして新たに澳門家と言う家をたてる。

澳門は鷺ノ宮に対立を表明。
鷺ノ宮も同じく対立。

こうして、長い間一つだった鷺ノ宮は二つに分かれ、その後千年以

上たった現在でもその対立は続くようになったのだった…

「…………戻った？」

気が付くと、銀時達は薄暗い部屋に戻されていた。

「銀時様…これは…」

「過去の鷲ノ宮の話みてえだな。お前は…知らなかったのか？」

銀時は伊澄に尋ねる。

「こんな過去があったとは…知りませんでした。」

二人は何とも言えない表情で向かい合う。

「……あの丘の化物って……」

「…そうじゃ。茉莉様の怨念の塊と言えるの。」

「……!?!」

後ろから銀華が現れた。

「大おばあさま!?! 一体何処から?」

「ババア…」

銀華は銀時達の方に向かって来る。

「やはり伊澄が心配になつての。その銀パーはどつでもいいがな。」

「…オイ。銀パーって酷くない? 略さなくてもいいんじゃない?」

「大おばあさま…さっきの話。」

大おばあさまは知っていたのですか?」

「オ、イ、聞いている?」

「うむ。久慈無様と茉莉様の話は私が幼い頃から聞かされてたからの。
あの丘に眠っているのは、久慈無様達が封印された化物…つまり茉莉様の意思そのもの。」

銀華は二人の前に向き直る。

「っー事は、昌蔵が解いたあの化物は……」

「……………」

黙り込む三人。

「……………そういえば、大おばあさま、今の時間は!?!」
伊澄は銀華に尋ねる。

「……………もう日没寸前だの。」

「……………!?!」

「……………銀時様!真司様の元に急がなければ!」

三人は薄暗い部屋を出る。

「っーかアイツの部屋なんて知らねえぞ？」

「私に任せ……」

「もうお前は宛に出来ねーよ！俺が探した方がまだ。」

「……！！」

抗議しようとする伊澄を遮るよつに銀華が口を開く。

「この角の突き当たりを右じゃ。」

「正しいんだろうな？」

「当然じゃ。伊澄の方向感覚と一緒にするな。」

「……！！」

銀時達は突き当たりまで走って行くと、

「何者だ！？貴様ら！」

「チツ！」

銀時達の前に澳門の式術師達が何人も立ち塞がった。

「……お前ら先に行け。」

「大おばあさま!?!」

銀華が銀時達の前に立つ。

「もう時間が無いやも知れん。

ここはこのオババが引き受ける。」

「でも…大おばあさま…」

躊躇する伊澄だが、

「よろしく頼んだ、ババア!」

「くおらあああ!!クソ天パ!もっと他に言うこと無いのか!」

銀時は溜め息を吐く…

「まあ生い先短いだろうが、こんな所でくたばるなよ…」

「ガキが無用な心配じゃ。当たり前じゃ、早く行け。」

「いや、何か言えって言ったのお前だからね?」

「分かりました、大おばあさまもお気をつけ下さい。」

伊澄と銀時は銀華を残して、真司の部屋へ向かった。

「……さてと、暫く童おまえらの遊びに付き合ってやろうかの。
銀華はお面をつけると、両手にクナイを構える。」

「この鷲ノ宮銀華、簡単に抜けると思うなよ……」

銀時達は部屋の前に到着した。

「……着いた。ここだ！」
ガラッ

銀時は真司の部屋の戸を引いたが……

「…居ませんね……」

「こんな時に……一体何処にいやがんだ？アイツは……」

周りを見渡すが何処にも真司の姿は見られない。

「……！？」

「どうした？」

「外で、あの気配を感じます！」伊澄がその方向を指差す。

「オイオイ……そりゃやべーんじゃねーのか？」

「行きましようー！」

「迷子になるなよ……」

気配のする方向へ向かう伊澄の後を不安そうについて行く銀時だった……

第二十四訓 一寸先は全て闇

「……………とうとう牙を剥いたか…昌蔵。」

銀時達がタイムスリップ？をしている時、真司は外の池の前にいた。

真司の周りには昌蔵を始め、ほとんどの澳門の式術師が札を構えて真司を睨んでいる。

「とうとう…ですか。やはり最初から気付いておられたか。」

「当然じゃ。我を誰だと思っている。」

「ククク…真司様も人が悪い。
貴方だったらもっと前から私達を潰すことなど容易なはず。」

昌蔵は扇子で顔を半分隠す。

「我はお前らと戦うつもりなど最初から無い。
ただこうしてはつきりと立場を分ければ、本音を言い合つ事も出来
よう。」

「…なるほど、話し合いですか。貴方らしい。」

昌蔵も札を構えて真司を見据える。

「しかし、そんな悠長な事をしている場合でもないんですよ…我々は。」

「……戦って本音を吐き出し合うと言う方法もあるがな。」
真司も札を構える。

「つくづく救えぬお人だ…」
お人好しも度が過ぎると笑えますな…」

互いの間の緊張感は最高潮に……

コン！

――！！！！

「火は……水は……」

昌蔵は男達に命令する。

「……開け、我が使役する妖魔が通ずる門よ……鬼門！」

ギイイイイ……

扉が重たそうに開かれる。

「出でよ……我が鬼門の妖魔、

【羅刹】、【夜叉】……」

扉から出て来たのは、両手に剣を持った全身が赤い美しい女性の鬼（羅刹）と、棍棒を担いだ全身が黒い荒々しい男の鬼（夜叉）だった……

夜叉の背丈は2メートル弱。

羅刹は1メートルと60センチ程度だ。

「皆！式術を！」男達は一斉に詠唱を始める。

「……オイ、シンジ。アイツラコロシテイイノカ？」

夜叉は真司に目を向ける。

「あれでも我の大切な家臣なのでな。殺してはならぬ。」

「ツマランナ……」

「夜叉…貴方はいつも殺し（それ）ばかりね。もう少し大人しく出来ないの？」

「フン……」

羅刹は夜叉を諭すように語りかける。

「取り敢えず数が多いわね……真司様？」

「なんだ？」

「失神程度なら大丈夫よね？」

「ああ、頼むぞ。」

「昌蔵様！お下がり下さい！ここは我々が！」

「ふむ……」

昌蔵は男達の遙か後ろに下がる。

「出でよー！」

男達はそれぞれ妖魔を召喚した。

「ゴチャゴチャト……」

「殺っちゃダメよ？」

夜叉と羅刹は妖魔達に突っ込んで行く！

「あの二体を止めよ！」

男達の妖魔も対抗しようと向かう。

が……

「フン！」

「うわあああああ！？」

「ぎゃあああああ！？」

夜叉は圧倒的な力で棍棒で式術師諸共吹き飛ばし、

「……………」

「ガアアアアア！！！」

「グオオオオオオ！！！」

羅刹は目にも止まらぬ速さで次々と妖魔を切り裂いてゆく。

あっという間に、式術師のほとんどが戦闘不能になっていた…

「殺っちゃダメって言ったでしょ？」

「モンダイナイ、ウゴケナイヨウニシタダケダ。」

「……………」

二体は真司の扉から帰って行った。

「…昌蔵、これ以上の戦いは無駄じゃ。」

「ククク…アツハハハハ！」

「何がおかしい？」

「いえ…あまりにも予定通りなんでね…」

昌蔵は一頻り笑い終わると、顔を空に向ける。

「もう日没ですな…」

「……そうだな。」

「ククク……これをお見せしたくてね…」

「昌蔵？貴様！？」

昌蔵の身体中に刺青が這うように現れる。

「生憎、こいつは日がある内は出て来たがらないので……こやつらは良い時間稼ぎになりました。」

昌蔵は倒れている家臣達を見渡す。

「昌蔵……貴様……」

「そんな怖い顔をなされるな…」

「やっぱり望んでこうなったのですぞ？」

「……………」

昌蔵を睨んで離さない真司。

「ククク……………クククククク……………」

昌蔵の身体にびっしりと刺青で埋まる。

「……………お前……………一体何を……………」

「分かりませぬか？この呪いが……………」

「……………!？」

真司がはっと目を見開く。

「まさか……………お前……………その呪印は……………!？」

「ククク……………フハハハハハハ！」

「丘の封印を解いたのか!？」

昌蔵の身体が黒いものに包まれて行く。

「何て事を……」
愕然としている真司の前には…

黒い巨体に長く大きな手がダラリと垂れた化物に変わり果てた昌蔵が立っていた。

赤い眼が真司を捕らえる。

「チツ！……裏鬼門！」
真司は距離を取ると、詠唱と共に、真司の前に扉が現れる。

先程とは違う、禍々しい模様が施された扉。

「……【乾闥婆】、【阿修羅】！！」

ギイイイイイ……

ゆっくりと扉が開かれ…

「ガアアアアア！！！！」

「何！？」

化物が扉に腕を叩きつける。

そのまま、化物は扉に巻き付いていく。

「何を……！？」

「グオオオオオ……」

化物は扉を取り込んでいく。

「…馬鹿な！？飲み込んだだと！？」

扉は完全に化物に取り込まれた。

「そんな馬鹿な事が！？……裏鬼門！」

……しかし、扉は現れない。

「ガアアアアア！！！！」

化物は真司に手を伸ばす。

「くっ!?!」

化物は鞭のように腕をしならせて、真司に襲いかかる!

「ぐはっ!?!?!」

真司は体力は並み。

化物に成す術も無く吹き飛ばされた。

「……昌蔵……大義を忘れたか……」

真司は苦しそくに立ち上がる。

「モウフルイデスヨ……ソナタイギナンテワスレマシタ。」

「貴様……」

化物は赤い眼を真司に向ける。

「デハ……」

化物は真司の前までノソノソと歩いて来る。

(クソ!動け、動け!)

真司は吹き飛ばされた時の痛みで上手く動けない。

「……トウシュハコレデジュンシヨクダ……」

化物は腕を振り上げる。

(これまでか……)

真司は目を閉じた……

「ガアアアアア……!!」

化物は腕を振り下ろした!

ドオオオオオオオ!!!!!!

.....

(.....ん?)

まったく来ない痛みに不思議に思った真司は目を開けた。

そこには.....

「オイオイ.....どんな状況なんだコレは？」

銀時が化物の一撃を木刀で防いでいた。

「お主.....」

「真司様！ご無事ですか！？」

伊澄が真司に駆け寄る。

「伊澄か……？どうしてこんな所に？」

「話は後です！」

伊澄は真司を支える。

「……おおおおお！！！！」

「グア！？」

銀時は腕を弾き返した！

「お主……！？」

「伊澄！取り敢えず真司連れて後ろに下がってる！」

「銀時様！？それは……」

伊澄は首を横に振ろうとするが、

「分あってるよ……お前らは後方から攻撃を頼む。前線は俺が食い止める……！」

「分かりました。…真司様！」

伊澄は安心したように頷くと、真司と共に後ろに下がり、化物と距離を取る。

化物と銀時が対峙する形になった……

「…オマエ、アノトキノニンゲンカ……」

「こないだの礼はしっかりさせて貰うぜ？」
銀時は洞爺湖を振り構える。

「ガアアアアア……！」

化物の左腕を鞭のようにしならせて銀時に突っ込んで来る！

「……！」

銀時は身体を瞬間的に右に押しやり避けると、そのまま化物に直線に向かう。

しかし、続いて第二波の右腕……！

「ガアアアアア……！」

「はあああああ！！！」

銀時の木刀とぶつかり合う。

「……あの男、銀時は一体何者なんじゃ？」
真司は化物と渡り合っている銀時に驚愕を通り越して、見惚れていた。

「希望でしょうか……」

伊澄は銀時を見つめる。

「そうか……」

「真司様？お怪我は……」

「無用な心配じゃ。それより銀時を援護するぞ。」

真司は札を構える。

「あの化物に私の術はあまり効果がありません。」

「神門を使う。時間が掛かる故、銀時と時間を稼いでくれ。」

「分かりました。」

伊澄も御札を取り出した。

「ガアアアアア！！」

「チツ！！」

絶え間無く続く化物の攻撃を木刀で叩き返していた。

鞭の腕と木刀が何度もぶつかり合う！

その度に空気が悲鳴をあげるかのように鈍く風が唸った。

一旦距離をとる両者。

「ったく、とんでもねえな……」 銀時は伊澄達の所に戻り前で木刀を構えて化物を睨む。

「銀時様、アレを倒すには真司様の術が必要です。」

「しかし我の術には発動してからの時間が掛かる上に、発動しても奴はそれを無効化しようとするからの。」

「……つまり、お前の術が完成するまでの時間稼ぎをすれば良いのか？」

「加えて化物をなるべく遠ざけて欲しい。」

「私も援護します。どこまで効くかは分かりませんが……」

伊澄は化物を睨む。

「まあ……やってみるか……」

銀時は頭を掻くと、木刀を振りかぶる。

「頼むぞ……」

真司は直ぐに詠唱に入った。

「つー訳だ、化物。」

銀時は化物に突っ込んで行く！

「ガアアアアア！！！！」

鋭く腕を放つ化物……

「!?!」

銀時の姿はそこには無く……

「術式・八葉……建御雷神！」

「ガアアアアア!?!」

地面から大量の雷が化物の動きを縛る。

「キカ又トイウノガワカランカ……」

「確かに物理的に打撃は与えられないかも知れませんが……しかし、」

「動きを止められりゃ十分なんだよ！」

「!?!」

銀時が化物のすぐ横に現れる！

「おおおおおお！！！！」

銀時の木刀は唸りをあげ、風を巻き込み…

「ガアアアアア！？」

化物を地面諸共吹き飛ばした。

「流石です、銀時様。」

銀時に向けて頷く伊澄。

「……出でよ！」

そして、後方では真司が詠唱を終る。

「神門！」

「…………アレハ!?!」

真司の前には、光輝く白い門が立ち塞がった。

「古なる神々よ…我に力を与えたまへ!」

【伊邪那岐】!?!」

ゴオオオオオオオ……

もの凄い風を引き起こしながら、扉は開けてゆく…

「サセヌハ!?!」

化物の手が扉に伸びて行く!

「大人しくしてやがれ!?!」

銀時がその腕を弾き返す！

「銀時様！前です！」

「ー！？」

化物の突進と共に、もう一つの腕がうねりをあげて銀時に迫る……

「メザワリダ…ニンゲンフゼイガ！…！」

「がはっ！？」

「銀時様！…！」

銀時は諸に直撃をくらい吹き飛ば……

「……！？」

ギシギシ……

銀時は腕を受け止めていた！
口からは血が伝う。

「悪いいな…デカブツ…！」

ギシギシ……

足が地面に罅を入れていく。

「ーキサマ!?!」

「こんなもんじゃ…俺は…」

銀時は木刀を振り上げる…

「倒れねえよオオオオ!!!」

「ゴアア……………!?!」

渾身の一太刀が化物を地に沈めた!

「……………オノレ……………」

「銀時!退け!」

真司の叫びで銀時は直ぐ様後ろに飛び退いた。

化物の頭上には無数の光の剣…

「頼むぞ…伊邪那岐！」

真司の前には、何枚もの艶やかな衣に身を包んだ巨大な女性が悠然と浮いている……

伊邪那岐が手を振り上げると、空の無数の剣が光を増す。

「これで終いじゃ…昌蔵…」

真司の呟きと共に、伊邪那岐は手を振り下ろし…

無数の剣は物凄い速度で……

「ギヤアアアアアアアアアア！」

化物に突き刺さっていった…

砂煙が舞い上がる中……

「ぐっ……」

真司は方膝をつく。

伊邪那岐は扉に戻ると、扉は消えていった……

「真司様！？大丈夫ですか？」

伊澄達は真司に駆け寄る。

「問題ない……この力は体力を使うのでな……」

「オイオイ……一回だけでそんなに体力使うのかよ……」

「馬鹿か……そんな訳ないだろう。」

「私の体力が無いだだけだ。」

「そっちかよ!？」

「……………!？」

「どうした、伊澄？」

「まだ…気配が……………」

伊澄は砂塵の舞う方向を見つめる。

「……………？」

昌蔵が倒れている周りに家臣が集まってくる。

「情けねー奴等だな…今更になって……………」

真司は立ち上がり、前に出る。

「お主ら！まだやるのか？」

真司は残っている家臣を見渡す。

家臣はオロオロとし始める…

……ニクイ

「ん？伊澄、何か言ったか？」

「何も言ってますんよ？」

………ニクイ……

「肉？肉が食べたいのか？」

「だから何も言ってますん！…！」

刹那……

ゴオオオオオオオオ!!!

「な!? 何だ!?」

「昌蔵様!?」

地響きと共に、昌蔵の身体から黒いものが吹き出した。そしてみるみる内に昌蔵を覆い、円形の塊となった。

「何だ!? 一体どうした!」

「……あれは、もしかして……」

「どうしたのだ? 思い当たる節があるのか!?」
真司は伊澄に尋ねる。

「あの化物は……ご先祖様が封印された妖魔。そして、その妖魔は……」

「……まさか!」

真司は黒い塊を睨む。

「……つまりどういう訳？」

「銀時様、私達が回想した時の妖魔がまた出て来た、と言う事です
……」

「……それって、」

「……かなりマズイの。」

三人は黒い塊と睨み合う……

一方……

「大分静かになったの……」

銀華は式術師の妖魔数十体と尚も戦っていた。

「…しまっ!？」

「ギヤアア！」

外を見た隙に後ろを取られた!

(油断した!!)

銀華は目を咄嗟に閉じた…

「はあああ!!!!」

「ほわっちやアア!!」

「でやあああ!!」

「…ん？」

目を開けると、見知らぬ二人が妖魔を尻ぎ払っていて、

「お主…」

「大丈夫ですか…」

目の前にはハヤテがいた。

外では黒い塊が不気味に佇んでいる。

「昌蔵様！」

「馬鹿者！無闇に近づいては成らん！」
真司が叫ぶも、男達は黒い塊に近づいて行く。

するじ、

「ぎゃあああああ!?!」

「うわあああああ!?!」

次々と家臣達を取り込んでいったのだ!

「な!?!」

絶え間なく男達を取り込んでいく黒い塊はだんだんと、膨らんで形を成してゆく…

「……………」

啞然と見つめる三人の前で、

凡そ妖魔と呼ぶにもあまりにも禍々しい巨大な悪魔が鮮やかな赤い眼を煌々と光らせながら三人を見下ろしていた。

「本当の化物だな……」

三人を視界に捕らえると、

「オオオオオオオオオオ！！！！」

銀時達に手を振り下ろして来た！

「くっ！」

伊澄は三人の周りに円形状のバリアーを張った。

「セウル？」

「馬鹿者、ふざけている場合か！」

ピシッ…ピシッ…

バリアに罅が入ってゆく。

「…そんな！？この結界が破れるなんて…」

「オオオオオオオオ！！！」

声に成らない咆哮と共に、バリアが破られた。

「きゃ！？」

「伊澄！」

吹き飛んだ伊澄を何とか銀時が受け止める。

「ありがとうございます／＼／＼」

「また来るぞ！銀時！」

「――！？」

更に腕を振り上げ、銀時達に迫る！

「――くそ！逃げろ、二人共！！」真司は札を取り出すも…

（間に合わない…！！！！）

「オオオオオオオオ！！！！」

唸りと共に腕が迫り……

トスッ!

突然…

銀時達の前で眩い光が弾けた。

「…」

顔を隠しながら後ろに後退する化物。

「銀時!伊澄!無事か!?!」

真司は二人に駆け寄る。

「ああ…、けど何なんだ?一体?」

銀時は伊澄を降ろして、目の前の光を見る。

「これは…正宗?」

光を放つ先には一本の木刀が刺さっていた。

「正宗って…お前ん所の家宝とか言ってたやつか?」

「ハイ…でも、どうして…」

「銀時！伊澄！また来るぞ！」

「オオオオ！！！」

化物はもう一度腕を振り上げる。

その時、

正宗が銀時に向かって飛んでいき…

「な！？」

「正宗！？」

そして自らその手に収まったのだ！

「何でって…場合じゃねえ！」

「オオオオオオオ！！！」

「はあああああ！！！！！」

振り下ろされた手を、銀時が弾き返した！

「何と！まさか……」

「凄いです……」

伊澄と真司は目を見張った。

あの巨大な化物の一撃を返したのだ。

いくら正宗でも驚くべき強さだった……

「！？」

化物はバランスを崩して、後ろに倒れた。

「よく分からねえけど……力を貸してくれるのか？」

正宗に目を向けるとそれに応えるように薄く光った。

「……んじゃ、やるか。千年たったお嬢様を救いにな……」

銀時は洞爺湖と正宗の二刀を手に持ち……

正面から化物に対峙する………

第二十四訓 一寸先は全て闇（後書き）

〜何か後書きっぽいもの〜

作者

「今回は質問も無かったし、銀さん達連行されたので、この訓の話でも適当にして下さい。」

ナギ

「…と言っても、私達は完全に放置されっぱなしだがな…」

マリア

「まあまあ…今回は伊澄さんがメインの話ですから。」

ナギ

「だったら親友である私を何故出さないのか!？」

ヒナギク

「普段はいつも出てるんだから贅沢言わないの…」

ナギ

「む…それはそうだが…」

マリア

「それにクラウドさんなんて、まだ一度も出番が無いんですよ?」

クラウド

「……………前書きまで削られた……………」
クラウドは隅っこで憔悴しきっていた。

神楽

「まあまあ……………」

神楽はクラウドの肩を叩いている…

ナギ

「私が悪かった……………」

歩

「……………でも、銀時さんは強いね……。何処かで剣道でも習ってたのかな？」

ナギ

「ハムスター！？いつの間に居たのだ？」

歩

「最初から居ただけ……………」

神楽

「ハムスターアルか。久しぶリアルな。」

歩

「神楽ちゃんまで!？」

ハムスターは酷いんじゃないかな!？」

ナギ

「いや神楽、コイツはハムスターで十分だ。」

ハムスター

「ナギちゃん!っていつの間にか上がハムスターになってる!？」

マリア

「…でも西沢さんの言う通り強いですね、銀さん。」

伊澄

「あの正宗が自分から持ち主を選ぶなんて、会長さん以来ですからね…」

ナギ

「と言う事はフラれたのか、ヒナギクは。」

ヒナギク

「ちょっと、ナギ!別に正宗はそついう訳じゃ…」

マリア

「気を落とさないで下さいね?」

神楽

「明けない夜は無いアル。」

歩

「ドンマイ……」

ヒナギク

「何だろっこの敗北感……分かってても何か悲しい……」

伊澄

「大丈夫です……正宗はヒナギクさんが気に入っているようですし……直ぐにまた戻りますよ。」

ナギ

「いや……それもどうなんだ……」

「そもそも正宗は鷲ノ宮家の家宝だろ？」

伊澄

「……………」
「がくりと落ち込む伊澄。」

歩

「……で、でも正宗抜きにしても木刀一本で渡り合っなんてすごいよね？」

ヒナギク

「そうね。一度戦ってみたい気がするけど……」

ナギ

「流石、戦闘民族だな……」

ヒナギク

「誰が戦闘民族よ！」

マリア

「そういえば新八君が居ませんか？」

神楽

「あのメガネなら前回から動かないネ。まったく最近のガキはひ弱アルな。」

ナギ

「いや…やったのお前だからな…」

マリア

「でも長かった長編も終わりが見えてきましたね…」

ナギ

「うむ！次の長編の時は私の……………」

クラウド

「…………… \$ ……………… £ ………………」

ナギ

「……………取り敢えず、クラウドを出してやってくれ……………」

マリア

「……………」

ヒナギク

「ではまた次回をよろしくお願いします！」

第二十五訓 百花繚乱

「…………正宗が、自分の意思で…………？」

伊澄は驚愕の色を隠せない。

（使う人間を選ぶ刀と言っても…………まさか自分の意思で動くなんて…………）

「それだけ奴には、正宗アレが惹かれる何かがあるのだろつ。」

「何か…………」

「それはお主とて同じ事。

奴の何かに魅せられて、ここに来たのであるろつ？」

「…………はい」

頷く伊澄を見て、小さく笑みを浮かべる真司。

「我も同じだ……」

「……真司様、銀時様の援護は大丈夫ですか？」

「かなり根気のいる相手だがの……」

「大丈夫です……一人ではありませんもの。
……でしょう？銀時様。」

伊澄は前にいる銀時に目を向ける。

「つたりめーだ……」

明日ジャンプの発売日だし、こんな所で死ぬるか……」

銀時は二刀を構えて化物を睨む。

「ウウウウウウ……」

キラキラと赤い眼を光らせて三人を睨む化物。

「ニクイ……ニクイ……」

その声はこの世のものとは思えない程怨めしそくに響き渡る。

「さっきの声はこいつの声だった訳か……」

「貴方のお気持ちを想うととても胸が痛みます……
ですが、その怨みを現実こゝろにぶつけるのは間違まちがっていますわ。」

「そういう訳じゃ……」

悪いがその怒り、鎮めさせて貰もらうぞ……」

二人は御札を構えた……

「鷺ノ宮家」

ピシッ……

「まあ……湯呑みに罫が……」

初穂は居間で九重とくつろいでいた。

「不吉ねえ……そういえば初穂？伊澄が見当たらないけど……」

「そういえばそうねえ……」

……

「……良い天気ねえ……」

「まあ本当に……」

〈澳門家〉

「銀時様、術をあまり無駄にも出来ません。ですから、敵に隙を作
つて下さい。」

「つまり？」

「妖魔と言えど、人間と同じ。手や足を狙うのでは無く、直接本体
の中心を狙いたいと言う事じゃ：簡単に言えば、腹部だの。」

要するに二人の式術はあの化物には効きにくく、少しでも効き目が
ありそうな腹部に術を叩き込みたいとの事だった。

「オオオオオオオオ!!!」

「……あんまし待ってくれねえみたいだぜ？」

銀時は木刀を二刀構える。

そんな銀時を思わず伊澄が引き留めた。

「銀時様……」

「分ーってるよ……お前も無茶はすんなよ？何かあったらナギに殺されるからな。」

「……ハイ！」

先に均衡を破ったのは化物だった！

「……!!!」

化物の左腕が風を引き裂いて振り下ろされる。

「おおおおおお!!!」

銀時は洞爺湖で受け止めた。

(何っー重いー撃だ…少しでも力を緩めれば、一瞬で潰される…)

メキ……メキ……

「……………」

「おおおおおお……！」

化物と銀時は鏝迫り合いを続けるも、

「はああああアア……！」

銀時はもう一方の正宗を振り払った！

「オオオオオ！？」

「……………」

銀時はそのまま化物の足元まで距離を縮める。

「ルオオオオオオオ……！」

化物は銀時に向かって拳を構えるが、

「っ……！」

「オオオオ！？」

銀時は木刀で地面を叩き砂塵を巻き上げた。

行き場を失った拳は無惨に空を切る。

その隙に銀時は化物の真下に、
化物の足を振り払う。

「オオオオ！？」

「銀時様！避けて下さい！」
化物が崩れ落ちると共に、伊澄が札を構える。

「術式八葉上巻……神代七夜！」

伊澄の周囲の札から、
とてつもなく大きな光の龍が現れた。

そのまま光の龍は化物の懐に突進して行く！

「バウ・ケルガじゃね？アレ……」

「馬鹿者！ふざけている場合か……よく見ると、バウと違って牙

が伸びていない。似ているが違っぞ。」

「へえー、金色のガツ ユ・ベル知ってるんだ…」

「何を言っている！？我は澳門家当主だぞ。確かに存在は知っているが別に見てなどおらん。」

「カードとかはまったく持って無いし、魔本だって集めていないぞ…？」

「オーイ…ボロボロ個人情報漏れてるぞ。」

「オオオオオオオオン！！！！」

光の龍は化物の腹部に唸りを上げて叩き込まれた。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ゴオオオオオオオオオ……

耳をつんざく悲鳴は大地をも揺らした。

「やったか！？」

砂煙が大量に巻き起こる中……

……コノカハ……

「……………!?!」

砂塵が巻き上がる中から聞こえる酷く低い声。

……コノカ……鷲ノ宮……

……鷲ノ宮ダ……鷲ノ宮……

……憎イ……憎イ……憎イイイイイイイ……!!!!

ゴオオオオオオオオ……

鉛のような風が吹き荒れ、砂煙がかき消された。

「アレは…!？」

銀時達の前には先程より更に大きく、醜く歪んだ黒い化物だった…

背中からは肋骨のように無数の手のようなものが生えていて、禍々しい黒い身体からは人間の顔がいくつも飛び出していた。

両方の大きな腕からはいくつも、触角のように何かが飛び出して…

「足じゃ!!何故あんな所に足が……」

「オイオイ…もしかして、あのたくさんいる足って……」

そう。家臣達の足だった…

「……何という事を……」

真司の声は震えている。

飲み込まれた家臣達はバラバラとなって怪物の至るところに浮き出ている。

怪物を伝う血は彼らのものだ…

もはや形を成していない。

「才前ダナ……」

怪物は伊澄に目を向ける。

(何ておぞましい殺気……)

「才前カラ鷺ノ宮ノ氣ヲ感シル……」

「いかん！逃げろ、伊澄！」

真司が札を構える。

「憎イ……憎イイイイイイ……！」

怪物の背中から無数の手が針となる。

「……!?」

轟音をあげて伊澄に無数の針が襲いかかる！

「逃げるんじゃ！伊澄！」

「――!!」

しかし、伊澄は先程の術の反動で動きが鈍い…

(ダメ、間に合わない!)

ドン!

「――!?」

銀時が伊澄を突飛ばし…

「がはっ!!」

銀時の身体を無数の針が容赦なく貫いた。

「銀時様!!」

「失せ口、人間風情…」

そのまま怪物は銀時に剛腕を振り払う。

銀時は成す術なく屋敷内に吹き飛ばされた!

「そんな…、銀時様!!」

壁や戸が破れる音がけたたましく屋敷内に響き渡る。

「……!!」

伊澄が銀時が吹き飛ばされた方に駆け寄ろうと…

「伊澄!前じゃ!」

「……!」

尚も怪物は伊澄に向かって腕を振り上げる。

「くそつ、間に合え!……神門!」

伊澄の前に大きな扉が現れ、怪物の拳を防ぐ。

「忌々しい……」

「出でよ！北の方の守護神！【玄武】」

ゴオオオオオオオオ...

脚の長い大きな甲羅に蛇が巻き付いている亀が出て来た。

「ガアアアアアアア！！！」

怪物は伊澄に向かって拳を振るう！

「玄武の盾！」

「ー！？」

玄武は大きな盾に変化し、怪物の攻撃を防いだ。

「この盾は最高クラスの防御力を誇る...
ちよとや、そつとじゃ抜けんぞ？」

真司は屋敷に向き直る。

「伊澄！今のうちに銀時を...」

「はい...」

ピシッ……

「何！？盾が！」

ピシッ…ピシッ…

盾に亀裂が入っていき……

「目障りだ……」

怪物は数回で盾を破壊したのだった。

「馬鹿な！？」

「鷲ノ宮アアアアアア！！！」

怪物は背中から無数の突起を繰り出す。

「マズい！！」

「ー！？」

無数の針が五月雨のごとく降り刺さった。

「伊澄！！！」

しかし、伊澄の姿はそこに無く……

「…無事ですか？伊澄さん！」

「……ハヤテ様！？」

ハヤテが伊澄を抱き抱え、間一髪攻撃を逃れた。

「あの化物は…何て聞いている暇は無さそうで…っ！」
怪物はハヤテを狙って腕を振る。

「…二人共！我の側に！」

ハヤテは振り払われる腕を避けながら、真司の側に戻る。

「五行結界！」

真司は三人の周り赤い結界を何重にも張り巡らした。

「ここの中なら暫くは…いや我の体力だとそう長くは無いが、少なくとも少しは時間稼ぎになる。」

「…オノレ…五行術トハ…忌々シイ……」

怪物は少し大人しくなり、三人に対峙する。

「これは…？」

「結界が続いてる限り、この中に入れば奴は手出し出来ない。」

奴は触れる事が出来ないのじゃ。まあ…こちらは何も出来ないがの。」

「

真司はハヤテに向き直る。

「…お主は？」

「綾崎ハヤテです。三千院家で執事をやっています。」

「そうか…あの家の。」

ハヤテは伊澄を降ろす。

「伊澄さん、お怪我はありませんか？」

「大丈夫です…それより銀時様が！」

「銀さん？そついえば姿が……」

ハヤテは周りを素早く確認する。

「私を庇って……」

伊澄は屋敷の中を一心に見つめる。

「気持ちは分かる…だが、今は危険じゃ。」

「一でも!!」

「奴を倒す事が第一じゃ。」

我の体力がもつ間、少しでも今出来る事を考える。それしか無い……」

「……………」

俯いて押し黙る伊澄。

「大丈夫です、伊澄さん。」

銀さんはこんな事でやられる人じゃありませんよ!」

「…ハヤテ様……………」

伊澄は自分を無理矢理安心させるように頷いた。

「何でこんな事になってるのは分かりませんが…取り敢えず今やるべき事は分かります。」

ハヤテは怪物を睨んで拳を握る。

「真司さん、僕があゝの怪物を引き付ければ隙を作りますよ
ね?」

「ハヤテ様!?それは危険過ぎます!」

「いえ、それが今僕に出来る事です。ここでじっとしていても始まりません。」

「……………分かった。」

だが、くれぐれも無理はするな。危険になったら直ぐに戻れ。」

「了解です。」

ハヤテは結界から出て、怪物と対峙する。

(……何て化物だよ。見てるだけで吐き気がする……)

「……憎イ……憎イ……憎イ……」

怪物はハヤテを憎々しいように見下ろすと……

「オオオオオオオオ!!!」

「っ!!」

振り払われた腕を避けるハヤテ。

「……さっきはあんな事言っただけど……これは中々死の予感が……」

「オオオオオオオオ!!!」

「!!!」

次々と唸りをあげて迫りくる腕を避けては屋敷から離れていく。

(少しでも二人から注意を逸らさないと……)

「ガアアアアア!!!」

怪物は背中から突起物を繰り出し…

「!?!?」

ハヤテに無数の針が立て続けに迫る!

「ハヤテ様!?!」

「いや!?!居ない!」

「はあああああ!!!」

ハヤテは怪物の懐に一瞬で飛び込み、

「グオオオ!?!」

渾身の蹴りを食らわした!
懐に大きな衝撃……しかし、

「人間風情ガアアアアア！！！！」

「がはっ！？」

怪物はハヤテを振り払い、壁に叩きつけた。

「ハヤテ様！！！！」

(……何で一撃……たった一振り、それだけで……
気力そのものが剥ぎ取られるようだ……)

ハヤテは何とか立ち上がる……

(身体のありとあらゆる神経が逃げると警告している……)

「ウウウウウウウ……」

ハヤテを見下ろす怪物からは悲鳴にも似た殺気が漂う。

「うっ！？」

あまりにも重たい殺気に方膝を着くハヤテ。

(重い……何なんだ……この重圧感は……?)

「ハヤテ様！！前！」

「ー！？」

迫りくるは怪物の拳。

重い空気は一気に張り詰めた緊張感で充滿する！

ドオオオオオオオオ...

「ーっ！」

横に転がりながら回避するも、
強い風圧に吹き飛ばされた。

そのまま地面に投げ出される。

「本当にマズいな...コレ。」

「ウウウウウウウウ...」

ハヤテは立ち上がると、薄く赤に輝く日本刀を背中から取り出した。

「ハヤテ様！？それは...」

「大おばあさまからお借りした刀、【血桜】です。ハヤテは血桜を怪物に向かって構える。」

「……血桜つてT Fに出て無かったか？」

「……違いますわ。それは【ちざくら】です。あれは【血桜】。」

「……大丈夫なのか？色々、著作権的に……」

「別物です。」

キラーン……

「まあ……いいか。」

「こっちだ！化物！」

「ウウウウ……」

怪物は刀を振るハヤテを捕らえる。

「ルオオオオオオオオ!!!」

「はあああああ!」

鞭のようにしなり迫る怪物の腕。それを弾き返そうとするハヤテだが、

「づあ!?!」

圧倒的な力の差でハヤテは押し戻される…

「オオオオオオオオ!!!」

「!!!」

間髪入れずに次の攻撃がハヤテに襲いかかる。

怪物の絶え間無い攻撃を何とかハヤテが防いでゆく。端から見ればハヤテの防戦一方であるが、確実に伊澄から怪物の注意を逸らしていた。

血桜としなる腕が幾度となくぶつかり合う。

しかし、ハヤテはその度に少しずつだが押されている。

目立ってはいないが明らかに状況はハヤテの劣勢であった…

(くっ！このままじゃ……！?)

何度目かのぶつかり合いでハヤテの血桜が手を滑り落ちた！

「しまっ！？」

「オオオオオオオオ！！！！」

その隙を見逃さず、怪物はハヤテに腕を振り下ろした！

「ハヤテ様！？」

「くそっ！」

ゴオオオオオオオオ……

大きな砂塵が巻き起こる……

「立場ヲワキマエロ…人間…？」

怪物の腕の先…

「うがアアアアア！！！！」

「くおおおおお！！！！」

二人の人影が拳を受け止めていた！

「新八君！？神楽さん！？」

ハヤテは目の前の二人に唾然として呼びかける。

「おおおおオオオオオ！！！！」

「馬鹿ナ……グオオ！？」

二人は拳を突飛ばし、怪物は後ろに体勢を崩して倒れこんだ。

「ハヤテええ！！私達を忘れて貰っちゃ困るアル！」

「向こうの妖魔は片付きました。大丈夫ですか？」

新八と神楽がハヤテに手を貸す。

「ありがとうございます。…大おばあさまは……？」

「ここに居るぞ?」

銀華はハヤテ達の向かいの屋根に立っていた。

「銀パーの姿が見当たらんのお……まさか何処かでくたばってるのか?」

神楽達も周りも見渡す。

「くおらあああ!!! 銀髪!!!!」

そんなひ弱に伊澄を頼んだ覚えはないぞ!!!!」

銀華は屋敷に向けて怒鳴る。

「クソ天パアアアア!!!!」

さっさと出て来いやアアアア!!!!」

新八と神楽の怒鳴り声も屋敷に響き渡る。

ガラ……

「まったく、ギャーギャーやかましいんだよ……のんびり昼寝も出来やしねえ……」

「銀時様!!」

皆の前に姿を現したのは、二刀の木刀を持った銀時であった……

だるそうに……それでいてその目はいつものような死んだ魚の目ではなく、強く真っ直ぐな光が宿っていた。

「良かった……ご無事だったんですね……」
思わず涙を浮かべる伊澄。

「まったく人騒がせな奴じやの……」
真司も微笑する。

「天パアアアア!!何で何も言わなかったアルかアアア!!
後でボコボコにするネ!覚悟するヨロシ!」

「本当ですよ!鼻フックデストロイヤー・ハルマゲドンの刑ですね。」

「…ハハハ?」

張り詰めた雰囲気が一気に砕けた。

銀華は屋根から伊澄と真司の側に飛び降りた。

「……あれがご先祖…久慈無様達が封印した妖魔なんだな?」

「ハイ……」

「厄介じゃの…」

「銀華様…すみません。このような事になり…」

真司は結界を張りながら頭を下げる。

「これは澳門だけでは無く、我々鷲ノ宮にも問題があったからの。」

「……まったく情けない限りです。」

「まあ…つもる話は終わってからでもいいんじゃないか…?」

銀時が結界の横を歩いて通り過ぎる。

「伊澄に無駄な心配をかけおって……次くたばったら骨ごと焼いてやるぞ?」

「うるせーよ、ババア。」

ためーらが遅いからうたた寝してただけだ……」

「……………」

怪物は正面に立つ銀時を見据える。

「言ったる?化物。……こんなんじゃ俺は倒れねえよ?」
ニタリと憎たらしい笑みを浮かべる銀時。

「何度モ…何度モ…オオオオオ!!!」

先程の倍以上の針が背中から飛び出す。

轟音と共に風を巻き込み、銀時に伸びてゆく！

「いかん！銀時逃げ……」

「おおおおおお！！！！」

迫りくる無数の突起物。

洞爺湖、正宗をそれ以上の速度で使いこなし弾き返してゆく。

「凄い……」

「……何と……」

真司と伊澄は改めて目を見張る。

目の前の男は目にも止まらぬ速さで二本の木刀を振るい……

「フン、まあでかい口を叩くだけわあるの……」

銀華は腕を組んで銀時に目を向ける。

「ぬおおおおお！！！！」

銀時は攻撃を全て弾き返した。

「小癩ナ……」

怪物は周りの人間を見渡す。

「ウエツ……！コイツ気持ち悪いネ。どんだけグロテスクな姿してるアルか！」

「神楽ちゃん、ダメだよ！今そういう空気じゃ無いよ！？」

「気を抜かないで下さい、二人共。」

ハヤテ達も真司達の周りに集まっていく。

怪物は銀時達を見下だす。

「……何故集マツテ来ル？何故刃向カオウトスル？何故ソナナ目ガ

出来る？」

「何故何故うるせーな…小学生ですか？てめーは。」

「分かんか？貴様ラ屑ガイクラ集マロウト…この絶望ヲ変エル事ナド出来ナイト言ウ事が…」

ゴオオオオオオオオオオ……

「ー！？」

鉛のような風が銀時達を突き抜ける…

「才前ラニ希望ナド無イ……
嘆キ、苦シミ、絶望ノ中デ死ンデユクノダ……」

凍るような声色は、全員の神経を這うようにように突き刺さる。
銀時以外には…

「希望ねえ……」
頭を掻きながら、怪物を見据える銀時。

タタタタッ

真司達の後ろから何十人もの男達が…

「お主ら…!？」

「真司様……」

真司の家臣達であった。

昌蔵派の人間達である。

「何をしているお主ら！早く逃げろ！」

しかし、家臣達は動かない。

「我々は……間違っていました。……この償いは態度で示します！」

「馬鹿者共が……」

かすかに笑みを浮かべる真司。

ザッ！

今度は屋根の上に、

「お母様！？おばあさま！？それに皆さんも……」
鷺ノ宮の人間がずらりと並ぶ。

「伊澄お嬢様！！助太刀に参りました！！！！」
オオオオ！！！！」

「まあ皆さんお揃いで……」
今日は何かのお祭りですか？」

「初穂！今日は伊澄を助けに来たんでしょ？」
「まあ………そうでした。」

「皆………」
伊澄も笑みを浮かべる。

「希望なら咲いてんじゃねえか…そこかしこによお。」

銀時は伊澄達の前に立ち塞がる。

「…………憎イ…………憎イ…………ソノ繋ガリ…………小サイ癖…………憎イ…………」

ゴオオオオオオオオ…………

殺気を渦巻いた毒々しい空気が怪物に取り巻いてゆく。

「確かにちっぽけな灯火かも知れねえ……。だがな、知ってたか？
小さな蕾程、美しい花を咲かせるだよ…………百花繚乱のごとくな…………」

銀時は二刀を構えて怪物を睨みつける…………

「消させやしねえぞ……………」

こいつらの希望、光の蕾はよ…………」

第二十五訓 百花繚乱（後書き）

銀八先生、ハヤテは出張中ってか特訓中…

ナギ

「と言う訳で、質問は私達、メインヒロインズが答えていこう!」

マリア

「最初の質問は…」

『ハヤテに質問。銀サンタとあのサンタみたいなおっさんならどちらがマシ?』

ヒナギク

「困ったわね……ハヤテ君達は今居ないから…」

神楽

「ハヤテが帰って来たら答えさせれば良いネ!」

ナギ

「済まないがもう暫く待って貰おう。」

マリア

「では次の質問。」

『ナギに質問。仙望郷へ行ってみたい?』

ナギ

「そんな恐ろしい所など行くか!」

神楽

「あそこはめっちゃ大変だったアル。結局何が何だか分からなくなつたネ。」

ナギ

「まあ……どうしても行けと言われたら買い取ればいい話だが。」

神楽

「買い取る？」

ナギ

「旅館丸ごと買い取れば良いだろう。10億ちょっとで何とかなるだろう。」

マリア

「でも、10億くらいで買えるんでしょうか？」

神楽

「……………」

ヒナギク

「……………」

ナギ

「まあそついう訳で、【妖魔編】も次回で完結！最後までよろしく頼んだぞ！」

歩

「私もメインヒロインだよね!？」

新八

「僕だって出してくれないんじゃない!？」

神楽

「黙ってるヨロシ、ジミーズ。」

新八・歩

「ちよつとおおおお!？」

第二十六訓 やっぱいつも通りが一番だわ

「真司様…もう大丈夫です。」

「そうか……ぐっ……」

真司は結界を解くと方膝を着いた。

「ちよっ！？大丈夫ですか？」

「心配するな……少し体力を使ったのでな。」
新八が真司を支える。

「真司、お前は少し休んでろ。
新八、神楽、真司を化物から守れ。」

「合点アル！」
「分かりました！」

銀時は化物を見据えながら言う。

「…伊澄。お前あとでかい術どのくらい使える？」

「良くて……二回くらいです……」

「そうか……ハヤテ、お前は化物から伊澄を守れ。」

「ハイ！」

ハヤテは伊澄の側に寄っていく。

「銀時様…？」

「別に逃げる訳じゃ無いですよ…伊澄さん達の仕事は後方支援ですから。」

「……ですよね、銀さん？」

「ま、そういう訳だ。」

銀時は二刀を振り払い周りに風を巻き起こす。

「行くぜ…てめーら…」

銀時を前に、鷲ノ宮側、澳門側の人間を含め全員が戦闘体勢に入っ
た。

「解センナ…虫ケラ共ガ…」

「……………出でよ！光龍！」

澳門の人間が一斉に龍を怪物に放つと同時に、口火を切った！

「オオオオオオオオオオ！！！！」

怪物が腕を振り払うとあっという間に龍は消え失せる。

「はあああああ！！！！」下では鷲ノ宮の執事達が日本刀で怪物に向かってゆく。

「ガアアアアア！！！！」

何人も簡単に吹き飛ばされた。

……しかし、全員が立ち上がる。

「出でよ！光龍！」

澳門側もまた龍を怪物に向かって飛ばす。

「……！！？」

直撃するもまったく効いていない様子。

「はあああああ！！！！」

「オオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

鷲ノ宮側はまた吹き飛ばされる。

しかし、また立ち上がった。

怪物は周りを見渡す。

「何故ダ……？何ナンド貴様ラハ……何故立ち上がる？何故諦ラメナイ？」

「言つたる？化物。このくらいじゃコイツらの火は消えねえんだよ……」

「…ソノ目。ソノ目ハ……久慈無……………」

「……………」

怪物はワナワナと震え始め、腕を振り上げる。

「止メロ……ソノ目……止メロオオオオオオオオ！！！！」

「！？」

振り降ろされた腕を正宗で受け止める。

「何故皆私ニソノ目ヲ向ケル！！」

「止メロ、ソノ目エエエエエ！」

「ぐっ！？」

メキメキと怪物の腕が銀時を押し沈めてゆく。

「憎イ……ソノ目ガ憎イイイイイイイアアアア！！！！」

「おおおおお！！！！」

足元は沈み始め、周りには地割が出来てくる……

「アアアアアアアア！！！！（……………て…）」

「……！！！」

鏝迫り合いの刹那、銀時は表情を驚いたように一変させるよ、

「グヌ！？」

「ぬぐおおおお……………」

怪物の腕をどんだん押し戻してゆく…

（馬鹿ナ！？人間風情ニコレ程ノ力ガ…！？）

銀時はそのまま怪物の腕を弾き返して、

「おおおおオオオオオオオオ！！！！」

洞爺湖を怪物に向かって振り抜いた。

大気を抉るような威力が怪物の腕を一閃する。

「アガアアアアア！？」

鈍い音と共に、怪物の腕は引きちぎられた。

大きな音がして、怪物の腕が地面に落ちる。

「おお！」

澳門、鷺ノ宮双方から歓声があがる。

「……ノレ、オノレエエエエエエエエ！！！！」

怪物は全身から突起物を繰り出した。
全員を串刺しに出来る範囲だ。

「何て数じゃ！？」

「僕達の後ろに！」

「ま、何が来ようと返り討ちネ。」

真司の前で身構える新八と神楽。

「伊澄さんも僕の後ろに！」

ハヤテは伊澄の前で守りに入る。

「オイ、貴様ら！鷺ノ宮の人間なら自分の身は自分で護れよ。」
そう言つて銀華は初穂と九重の前に立つ。

「ハッ！」

鷺ノ宮側は気合いの入った声で日本刀を構える。

「アアアアアアアアアア！！！」

屋敷全体に容赦ない斬撃が降り注いだ。

「……………オノレラ……………」

屋敷の柱、床、地面がズタズタに刻まれる中……………

……………誰一人として傷を負っている人間はいなかった。

銀時が怪物を見上げる。

「…言っただろうっ？消えねーんだよ。コイツらの蓄は……………」

後ろで皆は真っ直ぐに怪物を見据える。

怪物は赤い眼を見開くと、

「グオオオオオオオオオ！？」

ワナワナと震え出した。
心なしか苦しんでいるように見える。

「……何じゃ？どうしたのじゃ？」

「分かりませんが……苦しんでいるのでしょうか？」

真司と伊澄が首を傾げる。

「アアアアアア！？」

怪物のもう片方の腕がもがれるように落ちた。

「な！？」

驚いて目を見開く真司達。

尚も怪物はもがくように苦しんでいる。

「ガアアアアアアア！？」

すると……

(……………けて……)

「――!?」

一瞬だけ…一瞬だけ怪物の顔に茉莉の顔が浮かんだ。

「銀時様!?!」

「銀時!?!これは…!?!」

伊澄と真司は銀時に駆け寄る様子を見て他の人間は首を傾げる。

「……やっぱりな…!?!」

「銀時様?」

「…さっき聞こえたんだよ。僅かにだが、助けを求める声が…!?!」

怪物に目を細める銀時。

「じゃあ…まだ…!?!」

「……残ってるんじゃない。もう一つの茉莉様のご意志が…!?!」

「大おばあさま…!?!」

「ババア…!?!」

銀華が三人の元に降りて来る。

「どつやら…見えているのは我々だけのようじゃがな…」

「もう一つの……ですか？」

「茉莉様は鷺ノ宮をお恨みなさったが、同時にとても愛されたのだ。その気持ちが怨みと葛藤しているのやも知れん。」

怪物は相変わらず唸り苦しんでいる。

「……とにかくお前らは下がってる。化物がいつ封じ込めるか分からねえ……」

「…はい」

「分かった……」

銀時の言う通り、伊澄と真司は奥に戻って行った。

銀時はその姿を見送ると、再度怪物を見上げる。

(……けて、……て……)

「ガアアアアアアアアアア!!」

怪物は空高く咆哮すると、身体中に渦巻いていた毒々しい気が放出され一帯に一気に広がった。

「ぐー!?」

とてつもなく重い気が周りを全て潰さん勢いで銀時達を押し潰してくる。

新八や神楽、ハヤテを始め、周りの人間が力が入らない様子で床にうつ伏せになる。

「最後の最後で……どっかのラスボスカよ……」
銀時も方膝をついて立つことが出来ない。

怪物は両手が無いまま、左右に視線をさ迷わせ伊澄を見下ろす。

「鷲ノ宮……オノレ……」

(くそっ！身体は愚か声すら出ない……)

ハヤテは悔しそうに床から視線を上げ目の前の怪物を睨む。

「鷲ノ宮……憎イ……鷲ノ宮アアアアアアアアアア!!」

「!」

怪物は身体ごとつねらせて獲物を食らうかの勢いで伊澄に伸びてゆく。

(この…動け!動け!)

怪物はぐんぐんと伊澄に伸び、皆は必死に身体を動かそうとしている。

「ガアアアアア!!」

大きな口を開けて伊澄のすぐ側まで迫る!

(……………)

伊澄は覚悟を決めたように目を閉じた…

(……………?)

目を開けると、怪物は伊澄のギリギリで止まっていた。

伊澄の周には光の筒が包んでいる。

「……舐めて貰っては困るな……我は澳門家当主だぞ。」

周りに札を携えた真司立っていた。

「……反！」

「ゲヌウウウウウウ！？」

真司が叫ぶと筒が反射して怪物を弾き飛ばした。

しかし、重圧は相変わらず皆にのしかかる。

712

真司は床に伏している全員を見回して口を開いた。

「皆……よく聞いてくれ。」

立つ事が出来ずとも、話す事が出来ずとも、今出来る事が一つある。

「

全員が精一杯真司の言葉に耳を傾けようとする。

「……………祈れ。」

そう言うと真司は手を合わせる。

「式術とは元を辿れば祈祷術だ。式術に限らず、祈りとは人が本来持っている力の全てじゃ。」

……………だから、祈れ。

今、自分が思う一番の事を、祈るのじゃ。」

怪物はのそりと起き上がると真司達を睨みつける。

「ギ、ギ、ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

狂ったように咆哮しながら真司に向かって飛びかかっていった！

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

しかし、怪物がそれ以上真司に迫る事は無かった。

「ナ……二……？」

真司の後ろから数十の光の糸が怪物に刺さり、その動きを止めていたのだった。

糸の先……

澳門の家臣全員、鷺ノ宮の執事達全員、初穂、九重、銀華からそれは伸びている……

「……もう両家に争いは不要じゃな……」

言葉は無くとも……鷺ノ宮と澳門が一つになったのだ。

「グヌウウウ……止メロ……止……」

更に……

新八、神楽、ハヤテからも光が伸びる。

「グオオオオオ……」

どンドン怪物の動きが鈍り、弱っていく。

「これが祈りじゃ。これこそ本当の力よ……」

「皆さん……」

伊澄は驚いたように光を見つめるが……

光は止まること無く更に増え続ける。

「……これは……？」

「…………む！」

ナギは握っていたPSPを離す。

「…ナギ？」

「何か…………祈らなければいけない気がする。」

「…………」

「違うぞ！？頭がおかしくなったとかそういうのでは…………」

しかしマリアは首を振って答えた。

「私も…………そんな気がしてましたから…………」

「……………そうか…………」

そうして、二人は手を合わせた…………

〜桂家〜

「ん？」

部屋で勉強をしていたヒナギクは顔を上げる。

(……………何だろう、この不安……………
何か……………しなくてはいけない気が……………)

ヒナギクもまた手を合わせて目を閉じた。

〜愛沢家〜

「……………何や、やな予感するな……………巻田！国枝！」

「「どうしました？お嬢様？」」

「お前らも祈るんや。」

「ハイ？それは一体……」
首を傾げる二人だが、

「いいから！とにかく祈る！」

「ハ、ハイ！」

咲夜は手を合わせ、巻田、国枝もそれに合わせた。

「アパート」

「……！」

六畳一間で長谷川が驚いたように起き上がる。

「……………」

暫く神妙な顔続けると、

「…そうだ！明日面接だった。

準備、準備……………」

長谷川も頑張っていた……………」

〃

まだまだ、

地味を取り柄のハムスターも、某レンタルビデオショップも、とんでもなく大きな学校からも……………」

光の糸が澳門家に集中する…

「何ダ……コレハ……！？止め口……止め口オオオオ！！」

何百もの光が怪物の動きを封じてゆく…

伊澄は唾然として光を見つめる。

「これは……」

「皆…お前を思っているのじゃ。ここに居る奴等だけではなくての。」

「……………」

「結構な事じゃねえか……」

「銀時様!？」

銀時は方膝を着いて、声を絞りだす。

「こんなにも美しく咲く花が、そこかしこに気高く咲き誇ってやがる。」

銀時は身体中に力を込めると、

「おおおおおおお!!!!」

のしかかる重圧を押し上げるように身体を起こす……

「……………つ!!」

「銀時様……」

込み上げてくる痛みに耐えながら、銀時は自力で立ち上がったのだ。

「てめーら、しっかり目に焼き付けておけよ……
こんな豪勢な花見はめったにお目にかかれねえぞ……」

二刀を構えて、怪物を見据える。

「ガアアアアア!? オノレ…離レロオオオオオオオオ!!!」

怪物は光を引きちぎろうと何度も何度もがいていた。

「……真司様。私達も……」

「……分かった。」

伊澄と真司は互いに頷き合つと、

「銀時様! 私達の力全てを使って下さい!」

「……!?!」

伊澄から放たれた白い光が正宗に移つた。

正宗は眩い光を帯びて輝き出す。

「我の力も使え!」

今度は真司が洞爺湖に黒い力を移らせる。

洞爺湖は光を微かに帯びながら黒く取り巻かれた。

(金時様……伊澄をお願いしますね……)

(こんな事くらいしか出来ないけどねえ……)

(ふん……さつさと片付けんか。)

初穂、九重、銀華の声が……

(終わったらポコポコにするから覚悟するヨロシ!)

(本当に頼みますよ?)

(銀さん……お願いします!)

神楽、新八、ハヤテの声が……

そして、家臣達の声も、次々と銀時に届いていく……

「今回はお主に華を持たせてやるつかの。」
力を使い果たし、腰を降ろす真司。

「銀時様、私達を…皆をお願いします！」

伊澄も髪が白くなり、その場に座り込んだ。

(……………けて……………)

もがく苦しんでいる怪物から微かに聞こえる声。

「グオオオオオオオオオオ!!!」

「止メロ……………止メロオオオオオオオ!!!」

(……………助けて!!!)

今度こそはつきりと茉莉の声が銀時に届いた。

「お前らの想い……………受け取ったぜ。」

銀時は正宗と洞爺湖を振り払うと、その場の重圧が嘘のように消え

去る。

同時に銀時から最後の光の糸が怪物に突き刺さった。

銀時は二刀を振りかざし、怪物に向かって走ってゆく。

「来ルナアアアア!!!来ルナアアアア!!!」

「おおおおおお!!!」

銀時は怪物の足元まで走りきり、飛び上がった。

「グヌウウウウウウウ……」

怪物は大量の光に阻まれて身動きが取れないまま……
銀時は怪物の頭に飛び乗った。

「オノレエエエエ!!!」

「コイツらのこの想いだけは……」

黒いものが溶けてゆき、中から女性が浮き出てきた。

（茉莉……………）

その頭上から、もう一人の女性が手を伸ばして降りてくる…

（久慈無……………）

二人は涙ながらに互いに見つめ、しっかりと抱きしめ合う。

（「ごめんなさい……………」）

そして、二人は満面の笑みを浮かべて、天高く舞い上がっていった……………

（……………ありがとう……………）

視界から光は消え去り、澳門家の庭が広がった。

「銀時様……今の……」

伊澄が銀時に寄って来る。
銀時は頷くと、

「千年か……随分遠回りになっちまったが、

……ようやく仲直り出来たみてえだな。」

薄明かるい夜の空を見上げる。

そこには、二人を祝福するように満天の星が煌めいていた……

翌日……

澳門家では早朝から屋敷の修築や庭の片付けなどが行われていた。伊澄達を除く鷺ノ宮、澳門の両家の人間が総出で働いているのだ。今まででは考えられない光景だった。

「ふわぁ……………」

銀時は大きな欠伸を一つすると、澳門家の門をくぐる。

「ん？銀時か、どうした？こんな早くに。」

「？」

声が出た方向に振り返ると、真司がこちらにやって来るのが見えた。

「まだ寝ておれ。昨日の今日だ…疲れもかなり溜まっているだろう？」

因みに、銀時達は昨日は鷺ノ宮家に泊めてもらっていた。

「それを言うならオメーもだろ。こんな早くから働いて大丈夫なのかよ？」

「お主に比べれば私の疲労など……………それに、」

真司は懸命に屋敷を修理している両家の人間を見る。

「あれほど仲が悪かった両家が、今同じ道を歩もうとしている。

……………こんな時におちおちと休んでもいられるまい。」

「……………なるほど。」

真司は改めて銀時に向き直る。

「それもこれも、お主のお陰じゃ。お主が我等に希望をくれた。お主が我等に明日を与えてくれたのじゃ。」

「……感謝してもしきれない。」

「別に……俺はパフエが食いたかっただけだ……」

ふつと真司は微笑する。

「これから鷺ノ宮と澳門は変わってゆくだろう。いや、変えてゆかねば成らんの……」

これからが一番大切な時じゃ。」

「喧嘩はくれぐれも大人しくやれよ？お前らが本気になると洒落にならねえから……」

「アツハツハハハ！」

真司は愉快そうに声を上げて笑う。

「……しかし、これだけは言わせてくれ。」

「……ありがとう。」

「~~~~~」

決まりが悪そうに頭を掻くと、銀時は空に目を向けた。

「今日は晴れそうだな……」

「ああ……快晴じゃ。」

綺麗な羊雲が、まだ登って間もない太陽の光を受けながら、青い空に浮かんでいた……

昼になると、澳門家の庭で昌蔵を含め家臣達の葬儀が行われた。

真司曰く、「あれでも、我の大切な仲間かぞくだったからの……」と云う事だった。

澳門家の家臣達は真司の優しさに改めて感服したようで時折涙を見せていた。

鷺ノ宮の人間にもその想いは伝わったようだ……

葬儀の後、鷺ノ宮家と澳門家の代表として伊澄と真司が握手をして、ここに長年に渡る両家の因縁に終止符が打たれたのであった……

そして……

「あんまり構えずに済まない。

屋敷の修築が終わったら改めて来てくれ。その時は盛大にもてなせる準備をしておこうぞ。」

「ま、取り敢えず期待しておくかな。」

銀時と真司は門の前で握手を交わした。

「……皆、本当にありがとう。」

今日何度目かの感謝だろうか。

真司が皆に向かって頭を下げると、家臣達も頭を下げた。

かしまる新八、胸を張る神楽、微笑んで見守るハヤテ、憎まれ口を叩く銀華、相変わらずボーとしている初穂と九重……そして、そんな景色を大切そうに見つめる伊澄。

それぞれが様々な思いを巡らせながら、澳門家を後にしたのだった

……

く 鷺ノ宮家門前く

「金時様、今回は本当にありがとうございました。」

「それはハヤテ様ですよ、お母様。」
初穂はハヤテの手をとっていた。

「なるほど、髪がストレートと言う手がかりからの推理ね。
流石だわ、伊澄ちゃん。」

「違います……」

「…お母さん？さりげなく傷つくからね？ソレ…」

初穂や九重、そして一部の執事達は今度こそ銀時達にお礼をして中に入っていた。

ピリリリリリ……

「ハイ…もしもし。……あ、はい。分かりました。」

ハヤテは携帯を閉じると、

「すみません、お嬢様が今一人でお留守番なさるようなので急いで帰りませんと。」

「ああ…一人だと何かと物騒ですからね。」

「いや……お嬢様が留守番していると……屋敷が大変な事になるんだよ。」

「……大変な事？」

「それは目も背けなくなるような…」

「……僕も手伝うよ。」

新八はハヤテに言った。

「神楽ちゃんも、行くよ？」

「仕方ないアルな。……またナー、伊澄！」

それでは、と新八は神楽と一緒にハヤテを連れて屋敷に戻って行った。

「……さてと、んじゃ俺もジャンプ買ってくるかな。」

ぐっと伸びをする銀時。

「……………」

しかし、伊澄はあまり浮かない顔だった。

「私は本当にたくさん迷惑をかけてしまいました。

散々皆様を巻き込んだのに、お礼の一つも出来ないで……………」

銀時はハアと溜め息をついて、

「前にも言っただろ？巻き込んだ時は最後まで引張れって。

それに、あれだけ皆の想いがお前を助けようと集まってくれた。

見返りなんか求めずに、ただお前の事を思ってたな…

「だったら、その思いに胸張って応えるくらいの気構えでいいんだよ。」

そう言っつて伊澄をポンポンと撫でた。

「そうですね。ありがとうございますノノノ」
「恥ずかしそうに俯く伊澄だったが、先程までの陰りはもう無かった。

「…でもやっぱりお礼はさせて下さい。」

「んな事言われてもなあ…」

「この間銀時様が言っていた『パフェ』と言われるものを見つけて来ました。」

そう言っつて伊澄は札を取り出した。

「…え？何で札を？」

伊澄が札を落とすと…

ボワン……

そこから現れたのは、ピンク色で沢山の足が生えていて、ギョロリとした目。……そう、パンデモニウムであった。

「お、お前コレ……」

「パフェグロニウム……略してパフェです。」

「いやいやいやいや、いやアアアアアアアアアアアア！！！
コレパンデモニウムまんまじゃねーかアアアアア！！」

「パンデモニウムではありません。パフェグロニウムです。」

「変わんねーんだよ、どっちも！ベリベットみたいな顔でこっちをガン見してるもの！」

伊澄はパフェグロニウムに目を向ける。

「パンデモニウムは確かに見た目がアレですけど、パフェグロニウムはピンク色になってますから。それにパフェグロニウムは妖魔のデザートなんです。」

「ただパンデモニウムがピンク色になっただけだろ！
肝心な部分が何も変わってないよ！？」

「何か気に入らなかったのですか？」

「……コレのが気に入ると思！？」

言い終わらないうちに、銀時の身体が浮き上がった。

「オイ、銀パ！。せっかく伊澄が心を込めたお礼をしようと言
うのに、まさか断る訳ではあるまいな？」

「な、ババア！？」

身体中に鎖付きクナイが巻き付いて吊るされていた。

「勿論、受け取るな…？」

「いやいやいやいや！！！！無理無理無理！！！！

コレだけは無理！！！！」

「うるさい！！いいから黙って食べエエエエ！」

「止めるオオオオ！！！！」

銀華はぐるぐる巻きにした銀時をパフェグロニウムに近づけていっ
た……

ギヤアアアアアアアアアア!!

一方……

〜三千院家〜

「紅茶を入れようとしただけなんだ！紅茶を……」

「あ、ハイ……」

ハヤテ達が戻ると、ナギはキッチンに居た。

(手遅れだったか……)

キッチンはとてつもない状況だった。

一言で言うなら大地震の後のような惨状。

鍋はひっくり返し、椅子やテーブルは飛び散っている。
ついでに牛もいた。

「……………」

新八と神楽はただその光景に呆然としている。

(ちとど、どつしめつ？コト……………)

ハヤテはこの後の片付けを考えてただ頂垂れるのだった……

第二十六訓 やっぱいつも通りが一番だわ（後書き）

〜三年Z組の放課後〜

マリア

「まあ、つまり質問コーナーですよね……」

ナギ

「何だかんだでこのコーナーはあと三回続くそうだな……」

ヒナギク

「取り敢えず質問いきましようか。」

質問1

『仙望郷を買うとしてもスタンド居るけど、どうする？』

ナギ

「ふっ！無用な心配だな……」

歩

「……でも幽霊だよ？」

ヒナギク

「ある意味お化け屋敷みたいなものだものね……」

ナギ

「考えてもみる。いくら幽霊スタンドと言えど、所詮元は人間。」

マリア

「……じまじい？」

ナギ

「そこしふじや、買ひ止める。」

一同

(うわぁ……………)

質問2

『ナギに質問。屁怒呂に会ってみたい？』

ナギ

「屁怒呂？誰なのだ、それは？」

神楽

「あゝ、それはアルな……………」

屁怒呂

「初めまして、屁怒呂です。」

一同

「!?!?」

屁怒呂

「本編には出れませんが、後書きにはゲストとして出る事が出来ました。」

一同

「……………」

屁怒呂

「あの？皆さん具合が悪いんですか？顔が真っ青ですよ？」

一同

「いえ！何でもございません！」

屁怒呂

「はぁ……………」

一同

(こ、こ、怖い…………)

ヒナギク

「ナ、ナギ？質問に答えないと……………」

ナギ

「うむ。そ、そうだな……………」

え〜と…………お会い出来てとても嬉しいのだ(涙)

屁怒呂

「いや〜、ありがとうございます。」

ヒナギク

「で、では、質問コーナーはこれでおしまいです。し、質問ありがとうございました。」

し、銀魂で…

ちよこつと反省会

作者

「この度は、妖魔編を最後まで読んで下さってありがとうございます。」

失敗ばかりの長編でしたが、皆様のお陰で何とか完結させる事が出来ました。本当にありがとうございます。」

銀時

「何だかんだで長かったなあ…、この長編も。」

新八

「本当ですね。でもそんなに失敗ばかりだったんですか?」

作者

「本当はもっとやりたい事がいっぱいあったんだよ? 神楽とか新八をもっと活躍させたり、真司をもっと活躍させたりとか……」

新八

「ああ…まあ確かに少し出番が少なかったけど。」

神楽

「本当アル! 銀ちゃんばかりすぎるいネ。今度は私を主役の長編を書けヨ。作者!」

作者

「ちよつと!?! 止めて!?! 掴みかからないで!?!」

新八

「まあまあ…積もる話は次回の閑話休憩編出番沢山やればいいですよ？」

作者

「そうです、そうです！」

次回は久しぶりに閑話休憩って事で色々グダグダやりますんで。

まあ、皆の意見の言い合いとか、これからの方針とか、企画の事とか…」

新八

「そついえば企画とかありましたね……」

作者

「まあ、何だかんだですけど、長編が完結して良かったです。これからも皆様…」

銀時・新八・神楽

「どうぞかよろしく願いします！」

閑話休憩訓

当初は十話ずつ区切る予定だったのに長編とか調子に乗ってたり

完全に力尽きたので、前書きも次回にします。
すみません。

銀八・ハヤテ

(た、助かったあゝ……)

あと、今回の閑話休憩編もグダグダです。その上、無駄に長いです。

閑話休憩訓

当初は十話ずつ区切る予定だったのに長編とか調子に乗ってた

銀時

「第二回！閑話休憩編 『そっいえば企画どうなった？』
始まりませーす。」

ワアアアアアー！！！！

新八

「いや『ワアアアアアー！！』じゃねーだろ！
どうするんですか！？本当に！」

ハヤテ

「前はもう少し登場人物が集まったらと言う事になりましたけど
……」

新八

「……えーと、前回の閑話休憩から数えて、咲夜さんと西沢さんが
登場しましたね。」

銀時

「でもまだ沢山居るんだろ。
そもそも『ハヤテのごとく』ってハヤテがフラグ立てまくる漫画じ

やん？」

新八

「いや…銀さん。それは言わない約束ですよ！」

ハヤテ

「……………」

銀時

「まあ、とにかくこんだけしか居ないんじゃないじゃ企画はまだまだ無理って事で…」

という訳で閑話休憩編はこれにて…

ナギ

「勝手に終わらせるなア！」

ハヤテ

「わ！お嬢様。何処から湧いて出たんですか！？」

ナギ

「人をゴキブリみたいに言うな。…………それより、また引き延ばしとはどついう事なんだ。」

銀時

「だってあれから二人しか出てねえじゃねーか…」

ナギ

「む、それはそうだが…」

銀時

「それに今回のタイトル見たろ？企画はまだ出来る段階じゃないんだよ。」

ヒナギク

「…それより、誰かそのタイトルに突っ込んだら？」

ナギ

「うわ！？ヒナギク！？どっから湧いて出たのだ！」

ヒナギク

「人をゴキブリみたいに言わない！」

銀時

「ああ…このタイトルな。」

これは作者の心境を100字要約してみたタイトルなんだよ。」

新八

「いや、聞いたことねーよ！？
どんなタイトルですか！」

ハヤテ

「目次欄を見ると、三話分くらい場所とってますからね。」

ヒナギク

「……大丈夫なの？この小説……」

ナギ

「……話を戻すが、このまま企画丸投げって言うのもアレじゃないか？散々引っ張っておいて……」

マリア

「……だったら内容を考えるのはどうでしょう？」

マリアが紅茶を淹れてやって来た。

ナギ

「内容か……」

マリア

「ハイ。」

ハヤテ

「確かに、それは今のうちに決めておいた方が良いでしょうね。」

ヒナギク

「でもせっかくの閑話なんだからそれだけだと寂しくないかしら？」

新八

「だったら、この際企画の内容も含めて、この小説で気になっている所とかも話し合いませんか？」

銀時

「んじゃ、今回の閑話休憩編の内容を書き出してみるか。」

1 ・企画の内容

2 ・皆の気になってる事

3 ・長編裏話

銀時

「大まかに分けるとこんな感じだな。」

新八

「皆が気になってる事というのは？」

銀時

「主にこの小説のメンバーが今気になっている事を述べて、それについて皆で考えるって感じだな。」

ナギ

「ほう。作者にしてはまともな事を考えるではないか。」

マリア

「面白そうですね。」

ヒナギク

「それじゃ、始めましょうか。」

1・企画の内容

新八

「そもそも企画って言うのはヒロイン決定戦って事だったよね？」

神楽

「そうアル。この小説における真のヒロインを決定するネ。」

ハヤテ

「その内容をどうするかですけど……」

ナギ

「まあ、やるからには普通じゃない斬新な内容が良いな。」

歩

「斬新かあ……」

……

銀時

「あ、居たんだ。」

ナギ

「相変わらずの地味っぷりだな……まったく気配が無かったぞ……」

歩

「最初からここに居たよ！？何かな、この扱い！？」

ナギ

「最初から居たなら何か意見は無いのか？ハムスター歩もまあ、百歩譲った後に後ろに三歩下がって上から落ちてきた植木鉢に当たるぐらいだけど、一応ヒロインだろ？」

歩

「何か凄く引つかかるけど……まあこの際良いか。」

……内容ねえ。あ！良いこと思い付いた！」

ハヤテ

「どんなのですか？」

歩は自慢気に顔を綻ばせるよ、

歩

「ヒロインキャラでの人気投票とかどうだろう。」

一同

(うわぁ……………、普通だぁ……………)

歩

「アレ？皆どうしたの？」

ナギ

「お前本当に普通の事しか言えないな……………」

神楽

「落ち込むナ…ジミー。信じればいつか願いは叶うアル。」

歩

「え？ええ！？」

銀時

「……………まだ小説始めて少ししか経ってないのに人気投票出来るとでも思ってるのか？」

もう人気小説気取りですか、コノヤロー。」

ハヤテ

「そうですね……まだまだ人気投票なんて出来るレベルじゃないですよ。」

銀時

「アレが出来るのは限られた人気小説のみなんだよ。こんな小説が手を出して良い領域じゃねーんだよ。」

ナギ

「それ以前に意見そのものが普通すぎるからな……」

歩

「う……」

銀時

「取り敢えず却下だ。安易過ぎる……他には？」

ナギ

「やはり真のヒロインに必要なものは何か、を考えないといけないな……」

マリア

「必要なものですか？」

ナギ

「そう……さつき^{ハムスター}歩が言ったように確かに人気も必要だ。しかし、それだけでは真のヒロインとしては不十分。」

ハヤテ

「なるほど。プロのアスリートには体力や技術だけで無く、知力やしつかりとした生活習慣が必要なのと同じように、ヒロインにも人氣以外の事が必要って事ですか。」

新八

「そう聞いてみると、何だかカッコイイですね。」

神楽

「美貌やスタイルは勿論、性格や気配りの良さ、知力、体力、人望、若さといったスキルが必要となってくるネ。」

新八

「いや、項目多過ぎるでしょ。」

そんなに沢山どうやって決めるんだよ……」

ハヤテ

「体力や知力は競技になりますけど……」

咲夜

「容姿やスタイルは競うものやないからなあ。」

ハヤテ

「ハイ、そうですよ……って咲夜さん！？いつの間にか？」

咲夜

「伊澄さんも居るけどな。」

伊澄

「お邪魔してます。」

ハヤテ

「伊澄さんは……迷子ですか？」

伊澄

「先程までお家に居たのですが……」

伊澄は周りを見渡した。

咲夜

「まあ、大体の話は聞かせて貰ったわ。

……しかし、ヒロインなんてわざわざ決定する必要があるんか？」

ナギ

「咲！何を言ってるのだ！称号があると無いとでは今後の扱われ方も違ってくるのだぞ？」

咲夜

「でも一人一人色々な差があるやろ？」

咲夜はそう言ってナギの胸を見た。

咲夜

「はぁ……」

ナギ

「オイ！何で溜め息吐いた、今！？」

伊澄

「個人には様々な差がありますから、それを競うというのはどうなんでしょうか。」

ヒナギク

「確かに、争いようがないわね。」

神楽

「何を言ってるアルか！

そういう運的なものも踏まえてのヒロインアル。真のヒロインとは生まれついでのも物が違うネ。」

新八

「何だか妙に説得力があるのは何故だろう……」

銀時

「よし、分かった。……取り敢えず、それらの基準別に今いるお前らを評価してみる事にしよう。」

場面が一気に変わって……

銀時のヒロインチェック！

銀時

「皆さん、こんにちは。今日も『ヒロインチェック！』のお時間がやって参りました。

実況の坂田銀時です。

……そして、本日の解説は…マダオこと、長谷川さんにお越しただいてます。」

長谷川

「いや、よろしく願いします。」

銀時

「では、時間も押しているので早速参りましょう。」

【エントリーNo.1 三千院ナギ】

美貌

スタイル

性格

気配りの良さ x

知力

体力 0

人望

若さ

銀時

「流星は原作での正規ヒロインと言った所でしようか。 が三つとは凄いですね。しかし、一方で×や も少々目立ちますが……長谷川さん？」

長谷川

「そうですね……確かに美貌は正規ヒロインの成せるものです。性格も今旬のツンデレという男心をくすぐる武器を持ち合わせていますね。

それに余りある知力がまた良いですね。

しかし、一方で気配りの良さは皆無で自己中心的、それ故に人望もそこそこ……と言った感じですね。」

ピキッ……

銀時

「スタイルは以外にも ですが…？」

長谷川

「それは、まあ歳相応と言う事ですよ。 13歳という年齢を考えれば至極当然の事ですね。」

銀時

「……なるほど。ありがとうございます。では次行ってみましょう。」

【エントリーNo.2 鷺ノ宮伊澄】

美貌

スタイル？

性格？

気配りの良さ

知力

体力

人望？

若さ

銀時

「なるほど……不思議キャラだけあって中々謎が多いですね。

さて、長谷川さんの見解は…？」

長谷川

「…そうですね。まず美貌ですが、これはいうまでも無いと思いますね。どちらかと言うと妹にしたいタイプだと思いますよ。」

銀時

「いや、それは遠慮したいですね……」

カチン…

長谷川

「気配りの良さはかなりのものでしょう。」

知力はご存知の通り、鷺ノ宮驚異のメカニズムで群を抜いています。

」

銀時

「性格やスタイルといったものが？ですが？」

長谷川

「スタイルはいつも和服を着ていますから未知数ですね。」

銀時

「一回私服を着た事があったようですが…それについては？」

長谷川

「あの一回だけではなんとも言えませんね……」

あとやはり、迷子。これがやはり一番不思議でしょう。

彼女を見たら不吉と思うのはこの為かと……」

銀時

「関わるな、危険。といった所ですね。ありがとございました。では次行ってみましょう。」

【エントリーNo.3 愛沢咲夜】

美貌

スタイル

性格 鬱々

気配りの良さ

知力

体力 〽
人望
若さ

銀時
「おお、これは凄い！かなり高いステータスなんではないでしょうか。これは一体？」

長谷川
「確かに。まあ正直、もうこの原作の女性キャラは皆美貌ですよ。でないと綾崎君もフラグ立てまくる事が出来ないでしょう？」

銀時
「かなりぶつちやけた意見ですが……まあ、そういう事にしておきましょう。」

長谷川
「スタイルは歳相応なのではないでしょうか。いやなかなかのものです。気配りの良さ、これは以外にも なのです。」
知力は白皇に入れる程ですから言うまでもないでしょう。人望もかなり厚いようです。」

銀時
「……しかし、だとすると性格と体力が気になる所です。」

長谷川
「性格ですが、通常は なのです。」

銀時

「通常？他にあるんですか？」

長谷川

「ツツコミ時ですね。」

ツツコミ時になると、性格もアレになりますし、体力もよく分からない程上がります。

実際にこんな意見がありました。

『咲はツツコミ時の時は絡みづらい』by黄色のツインテール

『やたらにテンションが高くて鬱陶しい』by三千院家のご令嬢

『部屋が散らかる』by我が儘なチビ

……このように、一見かなり高いのですが、ツツコミ時はかなり絡みづらいようですな。」

銀時

「何だか意見者が全員同じようですが……まあ良いか。ハイ、次お願いします。」

【エントリーNo.4 西沢歩】

美貌

スタイル 普

性格 普

気配りの良さ 普

知力 普

体力 普

人望 普

若さ 普

銀時

「これは特に触れなくて良いでしょう。何かありますか？」

長谷川

「いや、これほど普通と言う文字が合う人は他にいませんね。以上。」

銀時

「ハイ、ありがとうございました。では、次お願いします。」

【エントリーNo.5 マリア】

美貌

スタイル

性格 時々burst

気配りの良さ

知力
体力
人望
若さ
恐

銀時

「流石に完璧超人。ほぼパーフェクトです。解説をお願いします。」

長谷川

「これは解説の必要はないでしょう。完璧ですからね。
容姿、スタイルは勿論気配りも完璧。知力、体力も完璧。よって人望も厚い。」

銀時

「長谷川さん……この性格の横はスルーの方向ですか？」

長谷川

「スルーですね……」

銀時

「なるほど……それとこの若さは……」

長谷川

「……暗黙の了解でしょう。」
ピキッ……

銀時

「……………ですね。開けてはならないパンドラの箱といった所でしょう。では……………おっと、次で最後ですか。お願いします。」

【エントリーNo.6 桂ヒナギク】

美貌

スタイル 0

性格

気配りの良さ

知力

体力

人望

若さ

銀時

「こちら流石のほぼパーフェクト。完全無欠の生徒会長ですね。長谷川さん？」

長谷川

「完全無欠の一言でしょう。性格良し、気立て良し、知力体力は群を抜いていますし、容姿端麗。更に一年生で生徒会長と信頼も絶大ですから。」

銀時

「しかしながら、スタイルが0ですか……」

長谷川

「スタイル自体は良いんですよ。ですがやはり……肝心な所が0なんですよね。」

それが良いという人間も沢山居ますが。」

銀時

「ははあ、なるほど……やはり真のヒロインには必要不可欠な要素何ですね……」

長谷川

「まあ、これは一般論からですが、残念ながら0という結界に。」

ピキッ……

銀時

「……以上、銀時の『ヒロインチェック!』でした。」

………つーか長谷川さん？」

長谷川

「ん？」

銀時

「これ大丈夫なの？終わったら俺達ヤバい事になってる気がするってならないんだけど……」

長谷川

「ああ、大丈夫大丈夫！」

俺はこのコーナーだけの登場だから。これ終わったら消えてるから。

」

銀時

「オイ、オイ、オイ！？ちよつと待って！！じゃあ俺だけ戻る事になるのか！？」

長谷川

「ではまた次回お会いしましょう。さよ～なら。」

銀時

「……………」

という訳で場面は屋敷に……

銀時

「……………え」と

銀時の前では七人がそれぞれ黒いオーラを出している。

神楽

「オイ、パーマ。私だけ無視してんじゃねーゾ？」

ナギ

「我が儘でチビで何だった？」

伊澄

「遠慮したいってどういう意味ですか…?」

咲夜

「何かお前らにダメ出しされると腹立つなあ。」

歩

「普通には普通の良さがあるんだよ?」

マリア

「銀さん…? 暗黙の了解って何でしょうか…?」

ヒナギク

「悪かったわねえ……0で……」七人の鬼は銀時を取り囲む。

銀時

「待て待て待て!! 俺は…アレだよ! 台本通り読んだだけで……」

マリア

「アラ? それにしては随分気持ちが悪かったですね?」

銀時

「イヤだなあ……軽い冗談のような……」

ヒナギク

「問答無用ね……」

ナギ

「……だな。」

銀時

「……………」

アアアアアアアアアア！？

ハヤテ

「……………取り敢えず結論から言つともっと登場人物が出てからにしましよう、と言つ事ですね……………」

新八

「銀さんが身体を張ってくれたので、企画についてはもう少し後と言つ事で勘弁して下さい。」

ハヤテ

「それにしても……………凄まじいですね……………」

新八

「…本当に、」

新八・ハヤテ

(僕じゃ無くて良かった……)

2・皆の気になってる事

新八

「ここまで来るのにどんだけ時間かかっているんですか……」

銀時

「細かい事は気にするな。

取り敢えず順々にやってくぞ。」

ハヤテ

「そうですね……って、銀さん！？大丈夫なんですか!？」

銀時

「…何が？」

新八

「いや……あの、本当に大丈夫なんですか？」

銀時

「だから何がだよ？」

本当に不思議そうに首を傾げる銀時。

新八

「……銀さん。さっきまで何してたか覚えてますよね？」

銀時

「……企画の内容をどうしようか？つー話だろう？」

ハヤテ

「もつと後ですよ。その後。」

銀時

「神楽がヒロインに必要な事はどうたらこうたらと言い出して……
……んで、結局もつとキャラが出たらって事に今なつたんじゃねえか。
」

新八

「……銀さん？長谷川さんとのやり取りは覚えて無いんですか？」

銀時

「長谷川さん？今日はまだ会って無いだろ？」

ハヤテ

「……え？……銀さん？」

新八

「……ちょっと待って、ちょっと待って……え？」

新八・ハヤテ

(……記憶が……飛んでる……)

マリア

「……取り敢えず進めましょうか……？」

新八

「イヤイヤ！？皆さん銀さんに何したんですか！？」

マリア

「アラ、ちょっと記憶を抜いただけですわ」

新八・ハヤテ

(……)

ナギ

「取り敢えず進めろぞ。」

『必殺技について』

新八

「いや…何ですか？コレ。」

ハヤテ

「あ、コレは僕の気になってる事ですね。」

咲夜

「何や自分、お笑いという最高の武器があるやないか。」

ナギ

「それはお前の頭にしかない馬鹿の妄想だ。」

咲夜

「笑いを舐めるなよ？笑いで天下が…」

銀時

「だー！！時間無えんだからくだらない所で揉めんな！

……それより、お前には必殺技があるじゃねえか。」

ハヤテ

「いや……もう少し使う側に安全な技が無いかな、と思ひまして。」

ナギ

「まあ、基本自爆技だからな……」

咲夜

「イヤ！あれはツッコミや。玉砕覚悟のツッコミやろっ。」

ナギ

「お前は永遠天下 を求めてさ迷ってる。」

新八

「……取り敢えず新しい必殺技が欲しい、と。」

ハヤテ

「出来れば……」

銀時

「お前贅沢言ってるじゃねーよ。主人公なんて必殺技一つで十分。それを次々と新しい必殺技を求めようとすると、

や

の二の舞になっちまうぞ？」

新八

「なりませんよ！っーか銀さんこそいい加減必殺技の一つくらい習得して下さいよ！バ ダイ・ナ コさんのために！」

ハヤテ

「前から思ってたんですけど……
マリアさんって凄い必殺技を持つてる気がするんですよ。」

銀時

「ああ、螺丸とか、雷とか使えそうだな。」

ハヤテ

「むしろ影分身とか出来そうですね。」

マリア

「人を化物みたいに言わないで下さい？」

新八

「さっきの記憶抜き取りは、十分必殺技なんじゃ……?」

銀時

「……とにかく、今のままで精進しろ。次！」

『私の漫画は一体いつ掲載するのだ!?!』

ナギ

「これは私だな……」

ハヤテ

「……あゝ……」

マリア

「ナギ？それはまた今度に……」

ナギ

「何を言ってるのだ！今回は更に三途の川先輩の親友であり宿敵、冴島先輩が出てくるのだぞ！」

ハヤテ

「ああ、あの人の親友ですか？」

ナギ

「よし！またアレに行くぞ！」

落武者大將軍の危機が地球から去って、一年。

三途の川先輩は元の身体を取り戻し、奥さん達と幸せに暮らしていた。
ブリトニーは内心複雑な思いがありながらも、三途の川先輩の幸せを思っ普通生活を送っていた。

しかしこの時、
地球には侵略の魔の手が刻々と迫っていた。

20XX年、5月。

突如として、第2の地球であるアンドロメダから大軍が地球に押し寄せて来たのだ！

侵略である…

アンドロメダ軍は南アフリカに降り立つと、快進撃でヨーロッパを制圧。

そして、瞬く間に地球はアンドロメダの支配下に置かれることになる。

その影響はブリトニー達にも降りかかってゆく…

ハヤテ

「珍しく深刻な展開ですね…」

銀時

「いや、フーか何コレ？」

アンドロメダ軍は地球ではやりたい放題。
略奪、殺戮、征服。

三途の川先輩の奥さんと子供もアンドロメダ軍に連れ去られてしま
う。

三途の川^{ハヤテ}

「僕は……何も守れ無かった。」

ブリトニー（マリア）

「先輩……」

悲しみに暮れる三途の川先輩を何とか励まそうとするブリトニー。

ハヤテ

「何かまた出て来ましたよ？」

マリア

「絵面は納得出来ませんが……」

ブリトニーと三途の川先輩は、奥さん達を助ける為にアンドロメダ軍に戦いを挑む決意をする。

数に勝るアンドロメダ軍を相手に正面からの戦いは無謀と考えた二人は内部の潜入を試みる。

そこで三途の川先輩は思わぬ人物に遭遇する事になる。

三途の川^{ハヤテ}

「お、お前は……！冴島！？」

冴島（銀時）

「てめえは……」

そう……かつて様々な困難を共に越えてきた……三途の川先輩の唯一無二の親友……

冴島先輩その人である……

銀時

「オーイ……」

ハヤテ

「何か見た事ありますよね……この展開。」

冴島はアンドロメダ軍の第一部隊の隊長であったのだ。

彼は地球人でありながら、幼い頃に両親を失い、アンドロメダ軍の総司令に拾われ育って来た。
学校は地球の方が良いだろうと、日本の学校に通っている時に三途の川先輩と知り合ったのだった。

その後、冴島はアンドロメダに迫る様々な危機を払い退け、
今ではアンドロメダでは知らない人は居ない程有名な英雄であった。

敵同士という形で再会した二人。

三途の川先輩のアンドロメダ軍の行為に耳を疑う冴島先輩。
共にアンドロメダ軍を倒してくれと言う、三途の川先輩とブリトニーの説得に冴島は一人葛藤する。

冴島（銀時）

「まさかアンドロメダがそんな事を……でも、俺を拾ってくれたアンドロメダを裏切る事が出来るのか？」

三途の川 ハヤテ

「冴島……」

ブリトニー（マリア）

「冴島さん……」

冴島は悩んだ末に、結論を下す。

冴島

「……分かった。お前らをしんじよう。」

こうして、三人の静かな戦いが幕を開け……

銀時

「もう良いだろ……っーかどんだけ幅とってんだよ。」

ナギ

「何を言ってるのだ！ここからブリトニーが三途の川先輩と冴島先輩の二人との三角関係に苦しむと言っー一番の見所があるのだぞ！」

マリア

「何でそうなるんですか……！」

ハヤテ

「いや、マリアさん？お嬢様の漫画ですよ……？」

銀時

「いや、お前ら分かってる？」

もう8ページ越えてるんだよ？」

ナギ

「では行ってみよう!」

ブリトニー（マリア）

「ああ……私はどうしたら……」

ずっと三途の川先輩を思ってきたブリトニー。

ブリトニー（マリア）

「三途の川先輩……」

キラキラとハヤテの顔がバツクに浮かぶ。

ブリトニー（マリア）

「でも……」

しかし、冴島先輩も気になって仕方がない様子。

ブリトニー（マリア）

「冴島先輩……」

キラキラと冴島先輩がバツクに変わる。

ブリトニー（マリア）

「ああ……」

そんなブリトニーの気持ちとは裏腹に事態は急激に進んでゆく……

ひよんな事から、ブリトニー達の作戦が上部に漏れ、総司令官に事が伝わってしまう。

しかし、ブリトニー達はこれを機に総司令官に直談判を申し入れる。

???

「冴島……まさか貴様が裏切るとはな……」

冴島（銀時）

「……………」

三途の川

ハヤテ

「もうこんな事は止めさせるんだ！」

ブリトニー（マリア）

「お願いします！争いは悲しみしか生みません！」

???

「言いたい事はそれだけか？」

そう言うと総司令官は刀を抜く。

冴島（銀時）

「もはや、何を言っても通じねえな。……三途の川、ブリトニーを連れてこのエレベーターで地下に行け。そこに恐らく捕虜達が居る。時間は俺が稼ぐ。」

三途の川

ハヤテ

「冴島！？お前何を！？」

冴島（銀時）

「これはアンドロメダの問題だ。それに、今なら警備も手薄だろ。」

ブリトニー

「冴島先輩……最初からそのつもりで……」

冴島（銀時）

「……頼む。捕虜を解放してやってくれ……」

かれら

冴島先輩は二人を無理矢理エレベーターに乗せてる。

三途の川

ハヤテ

「冴島！！」

ブリトニー

「先輩！！」

しかし、二人を乗せたエレベーターは地下に下っていった…

???

「貴様は逃げんのか？」

冴島（銀時）

「アンタは父親同然に俺を育ててくれた。それだけは感謝している。」

???

「……冴島、いや息子よ。国とは…簡単なものではないのだ。」

冴島（銀時）

「……でもやっぱりこんなやり方は間違ってる。……俺はアンタを倒してアンドロメダの目を覚まさせる。」

???

「ククク……アツハツハツハツハ！」

総司令官は高笑いすると、

???

「ならば来い！最後の親子喧嘩といこうではないか！」

冴島（銀時）

「おおおおおおお！！！！」

冴島先輩は総司令官に向かって行く……

そして、総司令官も……

金丸

「ファツキュウウウー！！！」

新八

「何でだアアアアア！？何で金丸君が出てるんだよ！？」

銀時

「ああ……そついや、金丸君そんな事言ってたわ。」

新八

「まったく理解出来ねえよ！金丸はもういいだろ！！！」

ハヤテ

「いや……お嬢様の漫画だと言う事を忘れて思わず見入ってしまいました。」

マリア

「何か釈然としませんけど……」

ナギ

「まあ、この後はまたのお楽しみなのだ！」

銀時

「つーかもう一万字越えてるよ？何してんの、俺達？」

ハヤテ

「ま、まあ次に行きましょう！」

新八

「ああ、これは皆さん気になってるんじゃないですか？」

ハヤテ

「確かにちょっとズレてますからね。」

銀時

「んじゃ、改めてちゃんと整理するか。」

- ・ ハヤテ達はまだ高校一年
- ・ ハヤテが屋敷で働き始めてから少なくとも一年は経ってる事になっている

- ・ 原作の時間的に下田温泉編くらいまでは終わってる感じ
- ・ 一通りのキャラはハヤテと出会ってる
- ・ 一つ一つの話は基本原作には沿わないが、大きな流れは原作沿い・洞爺湖の設定？まあ、一応大きな伏線が…
- ・ 今は一月中頃
- ・ 基本ハヤテのハーレム状態…

ハヤテ

「ちよつとおおお！？何を言ってるんですか！！」

銀時

「何って決まってるんだろ？お前の普段の生活そのものを簡潔に……」

ナギ

「ほう……そうなのか、ハヤテ？」

ハヤテ

「違いますよ！？違いますよお嬢様！？」

女性一同

「……………」

ハヤテ

（ダメだ……コレは何を言っても……）

銀時

「ハイ次」

『銀魂のキャラは出て来れないの？』

神楽

「私の気になつてる事アルな…」

新八

「まあ、設定がアレなんでねえ。」

銀時

「確かになあ。」

作者

「でも今悩んでるんだよ。ずっとは無理だけど、少し出る位なら大丈夫かなって。」

神楽

「少しって何アルか？」

作者

「何らかの時空の歪みとか、魔法とかで一時的に飛ばされたとか…」

銀時

「でも、そいつらが帰る時、俺達も帰れるじゃん。したらこの小説終わるぞ？」

作者

「そつなんだよねえ……」
「まあまだ未定と言う事で。」

銀時

「んじゃ次〜」

『ヅラは今何処に？』

銀時

「俺のか……」

新八

「何だかんだ言ってもやっぱり気になってるんですね。」

神楽

「ツンデレアルな」

銀時

「馬鹿っお前、違えよ？」

ただあのアホの事だから、放っておいたら何するか分かんねーだろ……」

新八

「……………確かに早く見つけた方が良いですね。」

作者

「まあ、一応考えてるから。もう少し待って。」

銀時

「出て来ないに越した事はねえんだけどよ……」

新八

「まあまあ……」

では、今回の気になってる事はこの辺で……

3・長編裏話

新八

「裏話ですか？」

銀時

「アレだよ、お前。今回の長編の裏側の話的な感じだろ？」

真司

「そのようだの……」

……

銀時

「って何でお前が居るんだよ!？」

真司

「まあ今回の長編で作者から気に入られたようでのちよくちよく本編に登場する予定じゃ。」

新八

「いや…何の宣伝ですか。」

銀時

「まあ、良いか。」

本当に時間ねえから、裏話行くぞ〜」

新八

「じゃあ最初はこの長編全体について作者に聞いてみましょうか。」

作者

「あ、ハイ。
まあ皆さん分かっていたらっしゃると思いますが、陰陽師編がベースになっていました。
最初の方はかなり被っていましたね。でも、肝心な所は自分なりに考えました。
結構失敗が多かったので上手くまとまるかが心配でしたね。」

新八

「失敗つて言うつとやりたい事が出来なかつた事だつて言つてましたよね？」

作者

「そうですね…
この際なんで一部紹介しますね。」

『新八、神楽、ハヤテの早期介入』

作者

「まずは何と云つてもコレですね…」

新八

「僕は終盤からの出番でしたからね。」

神楽

「そつアル！もう少し早い出番が良かったネ。」

ナギ

「お前らなあ……私達なんかワンシーン毎だぞ？」

マリア

「それに比べて……」

真司

「何だ？どうした、私の顔に何かついてるか？」

じゅ……

新八

「っ、次行きましょうか！」

『最終奥義』

真司

「私の奥義と伊澄の奥義じゃな。」

伊澄

「大神と大国主ですわね。」

作者

「本当は使わせようと思ったんだけど…」

大神は全くどんなのが分からないから下手に書けないし、だから真司だけ奥義使わせる訳にもいなくてね…」

銀時

「下手に原作捏造なんてしたら打ち切りもんだからなあ。」

作者

「そもそも僕自信、式術師って何って感じで書いてたからね。」

新八

「いや！？何その暴露！？」

作者

「だって陰陽道でもないし、魔法とかでもないし、分かり辛いんだよね。大体妖魔って何だよ？みたいな？」

新八

「何か愚痴になってきてませんか？」

作者

「怪物なの？妖怪なの？つーかどうもうでもいいや……」

それより、何で澳門は式術師が沢山居るのに鷺ノ宮には伊澄達しか居ないんだよ？」

新八

「澳門家の式術師達はアンタが考えたんでしょ！？」

作者

「そうだったっけ……」

新八

「……ダメだ、この人。」

『戦闘シーンの増加』

真司

「まんまじゃな……」

作者

「いやね？考えてた構想をかなり省いて書いたからさ……
ちよつとももの足りなかつたかなって……」

銀時

「お前さあ……本当に計画性ねーよな。」

作者

「もともとギャグ小説だよ？
シリアスパートなんて虫酸が走るわ！くらいの気構えで行かないと

さ！」

新八

「何て事言ってるんですか!?!」

作者

「フー訳でこれからはギャグ七、シリアス三の割合で頑張ります！」

一同

「言ってる事、違くない?」

銀時

「無駄に長くなった上に、何だかよく分からない感じになったな…

…」

新八

「結局何一つ決まってるじゃないですか!?!」

神楽

「まあ、タイトル通りアルな……」

ナギ

「最低だよな、このタイトル。」

ヒナギク

「作者もね……」

マリア

「大丈夫なんでしょうか？この小説……」

真司

「何の山も落ちも無いからな……」

伊澄

「このグダグダ感……」

作者

「だが、それこそが『銀ごと』クオリティー！」

一同

「なるかアアアア！……！」

……いや、本当にすみませんでした。

次回から本編ですので、よろしくお願いします。

閑話休憩訓

当初は十話ずつ区切る予定だったのに長編とか調子に乗ってた

息切れしたので、質問コーナーは次回にします！

新八

「威張って言うなアアアアア！！！！」

第二十七訓 予防接種は早めに受ける

『続いてのニュースです。新型インフルエンザの患者30人が神奈川県で集団感染していた事が発覚しました。これで既に今年の感染者は250人を超え…』

「まあ…大変ですね。まだ年が明けて間もないのに」

「去年から今年にかけてのインフルエンザは特に質が悪いですからね。僕達も気をつけないと。」

テレビを前にハヤテとマリア、新八、神楽が集まっている。

「新型って何アルか？普通のインフルエンザとどう違うアルか？」

「ああ、何でも今までのインフルエンザと違って、元々免疫が無い菌らしいから、かかると中々治らないみたいだよ？」

神楽の質問に答える新八。

「お二人は予防接種はもう受けられたんですか？」

「ええ、大晦日前に行っておきました。」

「風邪が来ようと準備に抜かりは無いアル。」

「銀さんは…受けてなさそうですね…」

「多分受けて無いですね…」
「マリアに答える新八。」

「まさか銀時の奴、注射が怖いんじゃないだろうな」

「うわ！何処から出たんですか、お嬢様！」
「マリアの後ろからすつと姿を現したナギ。」

「人をゴキブリみたいに言うな。」

「でも注射が怖いならナギだって…」

「な！？何を言ってるのだ！マリア！」

「あゝ、お嬢様に注射を射たせるのは大変でしたっけ。」

「ハヤテまで！？別にあんなもの怖くなんて無いぞ？」

「……………」

「本当だぞ！？何だその目はー！」

ガチャリ

「ふわぁゝ、おはよう。」

銀時が大欠伸をしながらやって来た。

「あら銀さん。丁度良い所に。」マリアが銀時に近づいていく。

「ん？どうかしたのか？」

「銀さん、予防接種は受けました？」

「…あゝ、すっかり忘れてたな…悪い悪い？でも忘れてたからもう無理…」

「…ハイ」

「んで…？なんですか、コレは？」

「だから診察券ですよ？」

診察券を不思議そうに眺める銀時にニッコリと微笑むマリア。

「いや…だから何の？」

「予防接種ですよ」

「……………」

三千院クリニック

「はあ、マジかよ……」
ベンチの上で診察券を片手に溜め息の銀時。

結局、マリアに半ば強引に行かされた銀時だった。
因みに今回銀時は大分予防接種が遅かったので、特別予防接種というものを受ける事になった。

「しかし……三千院家の病院って聞いたが……周りを見れば金持ちばっかだな……」

心無しか銀時の足は震えてるように見えるっーか震えている。

「帰らせて……激しく帰らせて……」

実際、マリアに予防接種を持ち掛けられてからと言うものの、何とかその話題を避けて来た。

しかし…今日また診察券を渡された。

「(このまま帰れる訳ねえし、でもこんな所からは一刻も早く立ち去りたい!」

大体注射なんてよく考えれば体に針を刺すんだぜ? ヤベーよ…もし注射してる時に動いちゃったら死ぬのかな…

もし注射してる時にくしゃみしたら針が体内に入るかも知れない…
…嫌だああ!こんな所で死にたくねええ!」

頭を抱えて頂垂れる銀時。

「ええい!もう考えるの止め止め!」

頭を振り切つて立ち上がった。

そのまま雑誌コーナーに向かった。

「…何だ、ジャンプねえのか…」仕方なく銀時はサンデーを手に取りベンチに戻る。

パラパラとサンデーをめくる訳だがほとんど頭に入っていないよう
で…

「……………はあ」

「……………はあ」

自然と溜め息が…

「……………ん?」

銀時が隣を見ると…

「お前…あの時の銀髪じゃねえか。」
赤い髪の男が座っていた。

「お前は……………？」

「オイ？なんで【？マーク】が付くんだよ……………」

「ああ、棚橋君か。悪い今度ちゃんと金返すから。」

「誰が棚橋君だ！？っーか棚橋って誰だ！？」

「え……………ああ、この間のナギを拐おうとしてた奴か。」

「人聞きの悪い事言っな。お連れしようとしたんだ。」

「まあ、っーかお宅も予防接種ですか？」

「……………すっかり忘れていてな。」

二人は無言で座っている。

「（よりによってここで顔見知りになっとはな……………）」

銀時は貧乏揺すりを始める。

「くそっ…何でこんな時に…」霧崎は何度も足を組み換える。

「（平静を装わねば…こんな事知られたら…」

良い年して注射が怖いなんて絶対に知られる訳にはいかねえ！」「

何処かで見た光景なのはスルーの方向で…

チツチツチツチツ……

静かな受け付けに時計の音が響き渡る。

銀時

（この病院特有の緊張感……そして死刑を待つような長い時間……）

霧崎

(独特な薬の香り……それに暖かいはずの室内に流れる冷たい空気
……)

銀時・霧崎

(帰りたい!!!今すぐダッシュで帰りたい!!!)

……

銀時

「……ちょっとさつきからその足の組み換えが鬱陶しいんだけど……
こつちまで何か緊張してくるだろ。
……何?お宅もしかして怖いのか?」

霧崎

「てめえこそ、さつきから貧乏揺すりがイラつくんだよ……
怖がってんのはどっちだ?」

銀時

「は?怖い?何が?
病院って何か怖い事あった?」

霧崎

「の割に声がつわずつてるじゃねーか。」

銀時

「オイオイ、勘弁してくれよ。」

ガキじゃあるまいし。この年になって注射が怖いって、お前……」

霧崎

「と、当然だな……」

二人ともしきりに時計に目を向けては、落ち着きがないように貧乏揺すりをしたり、足を組み直したりする。

……

「……アレ？先輩じゃないですか？……それと、この間の銀髪の旦那。」

「な！？比呂……？」

二人の前には、霧崎と一緒に居た、白井比呂が立っていた。

「お二人共、予防接種ですか？」

「あ、ああ。まあな……お前もだったのか。」

「ハイ、たった今終わりましたが、……そうですか……」

比呂は考え込むように首を傾げる。

「…何だ？どうした？」

「いや、この予防接種は勿論新型用なんですけど遅れた人用の特別予防接種でしょ？普通の注射だと思って受けたんですけど……」

そう言うって注射を射たれた所をさする。

「超痛いっすよ……」

「……………」

「俺意識飛ぶかと思いましたよ……いやあ、ヤバかった……」

「……………」

「それと何かもう三人くらい救急車で運ばれたらしいですよ。まあ、特別予防接種ですから仕方がないと思いますけど。」

そう言うとは比呂は受け付けに行つて、会計をする。

「まあ、そんな訳でお二人共気をつけて下さいよ？
それじゃ、お先です。」

無言の二人に挨拶をすると、病院を後にした。

.....

(えエエエエエエエエエエ！？)

(いやいやいやいや！？)

おかしいだろ！何で病院で病院送りにされるの！？どういつ事！？

貧乏揺すりが激しくなる銀時。

(気をつけるって何を！？俺達にどうしろっていつんだ！)

忙しく足を組み換える霧崎。

((っーか特別予防接種って何だアアアアアアアアアアアア！！！！！))

「 」

お互いに無言で見つめ合う。

「ま、まあ注射なんて痛くてなんぼだしな。」

「ああ、逆に痛くないと本当に効果あるのかって逆に疑わしいよな。」

「ハハハハハハハハハハ！！！！！！」

二人の高笑いは虚しく病院内に響き渡る。

「ぎゃアアアアア！！！！グオオオオオ！！！！！！」

「ああ！大人しくして下さい！！」

「グオオオオオオオアアアア！！！！！！」

奥から聞こえてくる患者、看護師、医師の声。

「……………え？」

「先生！脈が！！」

「心マ用意！」

（オイイイイイ！何か物凄い恐ろしい事になってるよ！？）

（何で注射で脈が止まるんだよ！？何で心臓マッサージが必要な状況なるの！？）

二人はさっきとは違う面持ちで見つめ合う。

「……………オイ、このままじゃ俺達殺されるぞ……………」

「馬鹿言つな……………と言いたいが、今回は同感だ……………」

「だったら話は早え。逃げるぞ。」

「しかし……………」

ここは三千院家専用の病院である。会計を済ませたら最後、診察が

終わるまで逃げることは許さないのだ。

脱獄しようものなら沢山の警備ロボットが患者を病院まで連行するのだ。

未だ逃げ出せたものは一人として居ない。

「ここはインペ ダウン！？病院じゃねーよそんなの……！」

「俺はもう三千院家を止めてーよ………」

「だが、俺達は逃げなければならない………」

「出来るのか……？」

「やるしかねーだろ………」

「分かった………」

二人はすくつと立ち上がると、

「すみませ〜ん………」

「ハイ？なんでしょうか？」

受け付けの前を通り過ぎ、

「早退しまアアアアす!!!」

ドオオオオン!!!

入口をぶち破った!

「おおおおおおお!!!」

二人は全速力で病院から脱出した。

「何イイイイイ!?待ちやがれエエエエエ!」

受け付けの人が脇のスイッチを押す。

「……逃げられると思うなよ」

「「おおおおお!!!」」

二人は全力で病院から離れて行くが……

『脱獄者発見、脱獄者発見！
至急連行致シマス。』

「ちっ！もう来やがったか!？」

二人の後ろには50機はいるであろう、機械の大軍。

「何て数だ……」

「諦めるな…赤毛。俺達はこんな所で殺られる訳にはいかねーだろ。」

「……銀髪の癖に生言いやがるじゃねえか……」

二人は大軍に向かうと銀時は木刀、霧崎は日本刀を取り出した。

『無駄ナ抵抗ハ止メナサイ……』

「うるせーよ、大人しく斬られやがれ。」

『貴方方人間が何ヲシヨウト所詮無駄デス』

「それでもなあ……護りたい世界てめえがあるんだよオオオオ!!!!」

二人は大軍に突っ込んでいった……

〜三千院家〜

「ほオオオオ！！！！」

「ぬおおおお！！！！」

只今神楽とナギ、ハヤテはマリ カートの真っ最中。

「やった！！位だ！！」

「甘いアル！ハヤテ！！」

「ああ！僕のヨツーが！？」

「まだまだあー！！」

……とテレビの前で暴れている二人の後ろでは新八とマリアがテーブルに座っている。

「それにしても、銀さん遅いですね……」

「ええ……もう帰って来ても良い頃ですが……」

ガチャ……

「ただいま……」

「ああ、銀さん。お帰りなさ……」

「……」

「ちょっと！？傷だらけじゃ無いですか!？」

「何があつたんですか!？」

「俺決めたよ……」

銀時は虚ろな目で天井を見上げる。

「これからは、絶対予防接種は早く受ける……」

バタリ……

「ちょっと銀さん!？銀さん!？」

「大丈夫ですか！？銀さん！？」

その後銀時は暫く倒れたままだったという……

ヒナギク

「皆さんも予防接種は早めに受けて下さいね……？」

第二十七訓 予防接種は早めに受ける（後書き）

帰って来たよ！銀八先生

銀八

「いや……本当に帰って来たよ……死ぬかと思った。」

ナギ

「でもまた帰って来るのだから？」

ハヤテ

「う……………」

銀八

「よ、よし！早速質問いってみよう！」

ナギ

「ごまかしたな……………」

銀八

「ハ、ハ、ハ、最初の質問。」

『ハヤテに質問。サンタはサンタでも銀サンタとあの原作のサンタならどっちがまし？』

ハヤテ

「……………サンタ……………」

銀サンタ

「銀サンタです。」

ナギ

「おわ！？何やってるのだ、お前は!？」

銀サンタ

「いや？やっぱりやるからにはちゃんとやらないと。」

ナギ

「……………で？お前は何を配るのだ？」

銀サンタ

「子供に夢を配る代わりに、家に行つてご馳走になる!」

ナギ

「それ、ただのたかりだろつがアアアア!!!」

銀サンタ

「サンタなんて皆そんなもんだよ……………」

ブチッ……………

ハヤテ

「サンタなんてどいつもこいつも大嫌いだアアアアアアアア!!!」

銀サンタ

「ちよつと！？ハヤテ君！？俺そのサンタ違うウウウウ！！！」

ドカツ！バキツ！ベキツ！

ナギ

「ハヤテが壊れた……」

マリア

「本当に不憫ですね……」

銀八

「……ての質問……」

『マリアとヒナギクに質問。屁怒紹さんに会いたい？そして心逝くまで話したい？』

ヒナギク・マリア

「……」

銀八

「オーイ、どうした？」

ヒナギク

「……マリアさんなんか話合いそうじゃないですか？」

マリア

「……いやいや、ヒナギクさんこそ……」

ヒナギク

「マリアさん？そんな遠慮しなくても……」

マリア

「ヒナギクさん？何気に押し付けようとしてません？」

ヒナギク

「あら？それはマリアさんじゃありません？」

マリア

「いやいや……？」

ヒナギク

「いやいや……？」

コトコトコトコト……

ハヤテ

「銀さん……！次の質問いきましよう……！」

銀八

「は、はい。次の質問ね……」

『ハヤテならパフェグロニウムを完食出来る？』

ハヤテ

「パフエグロニウムですか？」

銀八

「伊澄く！！！」

伊澄

「ハイ。」

ボワン……

パフエグロニウム

「キシヤアアアアア！！！」

ハヤテ

「うぐっ!？」

ちょ、ちよっとおおおお!?!何ですか、コレ!?!」

銀八

「パフエグロニウムだけど？」

ハヤテ

「食べ物何ですか!?!」

伊澄

「どうぞ、召し上がって下さい。」

ハヤテ

「無理です!!!これだけは無理イイイイイ!!!!!!」

銀華

「伊澄の親切を断るなアアアア!!!」

いつの間にか後ろにいた銀華がハヤテを縛り上げていた。

ハヤテ

「無理無理無理!!!無理です!勘弁して下さい!」

銀華

「うるさい!いいから食べ!」

ハヤテ

「ぎゃアアアアアアアア!」

銀八

「んじゃ、最後の質問。

『真司について皆はどう思っていますか?』」

真司

「呼ばれたから来てみたが……ここは何処じゃ?」

銀八

「ハイ、ようこそ。ここは三年Z組の教室だ……」

真司

「三年乙組？」

新八

「今日から真司さんも僕らの仲間って事ですよ！」

神楽

「ま、ヨロシクナ！」

ナギ

「澳門家の真司か…私は何回か会った事はあるな。」

マリア

「マリアです。よろしくお願いしますね。」

ヒナギク

「桂ヒナギクよ？私も貴方は知っているわね…確か、一年C組よね？」

咲夜

「愛沢咲夜や。またえらいツツコミ所のありそうな奴やな。」

長谷川

「長谷川って言うんだ。ヨロシクな…」

ハヤテ

「そう言う訳です。これからよろしくお願いしますね？」

真司

「お主ら……」

西沢

「忘れてない！？私の事忘れてない！？西沢歩だよ！よろしくね？」

銀八

「つー訳だ…」

今日からお前は三ノの生徒だから。拒否権ねーから。」

真司

「……………ふん。世話になってやるつかの…」

銀八

「んで質問の答えは……………」

一同

「仲間！……！」

銀八

「そう言う訳だ。それじゃ、また次回な…」

第二十八訓 練馬アンダーグラウンド（前書き）

クラウドの前書きの館

クラウド

「まず最初にお詫びを申し上げなくてはなりません。先日誤って投稿した作品を丸々消してしまいました。作者は当初、シヨックのあまり死を覚悟いたしました。その後気を取り直し、なんとか再作成いたしました。本当に申し訳ございませんでした。」

ハヤテ

「それは大変でしたね……」

クラウド

「……と言う訳で、前回の悪かった所等をしっかりと改良いたしました！今回はかなり意外な展開になります！どうかよろしくお願いいたしますぞ？」

ハヤテ

「では始めます！」

第二十八訓 練馬アンダーグラウンド

ここは誰もがご存知、東京練馬区の某屋敷……

今日も三千院家では平和な時間が流れている。

「……と言つ訳だ。」

「オーイ、支離滅裂だぞ。何？セリフ削減？」

銀時は今、ナギの部屋に呼ばれていた。

銀時は部屋でナギと向かいあっている訳だ。その理由は二時間前に遡る。

ナギは部屋で一人暇を持て余していた。

「……今日はこのガン ムSEEDのDVDをいたずらに全部見ってしまうか。」

そう言ってナギは自分の部屋でテレビを付けると、

『あの　　が帰って来る！』

前回をも凌ぐ迫力のシーンの数々！あの恐怖が、再び……』

「おお、これは……」

ナギが前に見たホラーDVDの続編であった。

前作は大変怖かったのだが、かなり面白かったので、是非続編も見たいと思ったのだ。発売、レンタル日は今日かららしい。

「む、さつそく借りなくては。」

しかし、借りるには問題があった。そのDVDはR18指定だ。その怖さ故に、小さいお子様が見れないようになってる。

「うーむ……」

そこでナギは考えた。

マリアやハヤテは自分にそのような物を見せないようにする側だし、だからと言って一人で行く訳にもいかない。

18歳以上で尚且、自分に同伴してくれる人間が必要。

「…そうだ！」

「なるほどねえ……んで俺を」

「…という訳で私をここに連れて行って欲しい。」

「……レンタルビデオショップ橋？」

ナギは銀時にチラシを渡した。

「そこには一応、知り合いもいるからな。」

「でもよお…なら俺一人で行って来ても良いんじゃないか？」

「場所が分かるのか？」

「……それもそうだな。」

「まあ、私が行きたいのは何もそこに知り合いが居る訳だからじゃない……」

ナギはニヤリと口元を曲げると、

「地下鉄…と呼ばれるものに乗れる良い機会だからな！」

「地下鉄う？」

「ああ！」

銀時は何とも言えない微妙な表情をする。

「何で地下鉄なんかに乗りたいがるんだよ？」

「だって地下を走っている電車だぞ！興味があるではないか！」

ナギは目を爛々とさせて銀時を見る。

「……もしかして、お前地下鉄乗った事ねーのか？」

「心配するな。地下鉄が如何なるものかは把握している。

帝都を守る為に、歌劇団が光武と共に駆けつけた地下。それを運んだ地下鉄。普段一般人は乗れない代物だろ？」

「大正桜に浪漫の嵐ね……」

架空の時代だから、ソレ。」

まあ、取り敢えず二人は未知なる地下鉄とレンタルビデオショップを目指して、出かける事になった。

二人は準備を済ませて、ホールに降りて来ると……

「ナギ？どうしたんですか？」

マリアとハヤテが二人に近づいて来た。

「ああ…ちょっと出掛けて来る。」

「「ええ！？」」

ハヤテとマリアはオロオロと日付を確認する。

「「エイプリルフルはまだ先ですよ？」」

「お前らなあ…？」

ナギは溜め息を吐くと二人に向き直る。

「ちょっと借りたいDVDがあったからビデオ屋に行ってくる。銀時はその同伴だ。」

「まあ、そういう事になってるらしい。」

銀時は他人事のように頭を掻いて返事をした。

「そうですね。でも大丈夫ですか？何ならSPの方々にも同行して貰って……」

マリアは相変わらず不安そうに尋ねる。

「あんな黒服の連中を周りに連れていたら、それこそ誘拐してくれ
と言っているようなものだ。」

「まあ、それはそうですね……」

「だったら、僕も行きましようか？」

ハヤテが横からそう提案するが、

「いや、ハヤテは仕事があるだろ。迷惑はかけられない。」

「「!？」」

刹那……

二人に落雷のような衝撃が走った!

「「ナギ（お嬢様）が……他人を気遣うなんて!？」」

そして、涙ぐむ仕草をする二人。

「お嬢様……僕は、僕は執事をやってきてこれほど嬉しい日はあり
ません!」

「成長したんですね……ナギ……」

「お前らさあ……言葉の暴力って知ってる??」

とまあ一息……

「でも本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だと言っているだろう……まったく心配性だなマリアは。」

「……とか言っつて、ついこの間も誘拐されていたじゃないですか。」

「さて、行くぞ？銀時。」

ナギはスタスタと玄関に向かってしまった。

「まったく……あの娘は……」

「まあ、心配すんな。伊澄じゃねーんだししっかり見てれば迷子になっただりしねえよ。」

【伊澄】

(どういう意味ですか！それは！！)

「すみません。本当にお願いしますね？」

「ああ。」

銀時はぐっと伸びをすると、

「銀時——！！早く行くぞ！」

「へえへえ。んじゃ、行って来るわ。」

ナギの方に向かって歩き出した。

そんな銀時の後ろ姿を見つめる二人。

「本当に大丈夫でしょうか…？」

「まあ、銀さんがついてますから大丈夫ですよ。」

ハヤテはここ数週間、銀時を見てきてその強さを確かに知っていた。

「……………そうですね。」

だったら私達は今の内に夕飯の用意をしちゃいませうか。」

「ハイ！あ、そうだ。良いお醤油が手に入ったんですよ。」

今日も屋敷はそこそこ平和。

〈某 駅改札前〉

「おお！前に来た駅より大きな駅だな。」

「まあ、地下鉄が走ってる駅だからな。」

二人は改札の横にある切符売り場に向かう。

「ここで切符を買うのか…」

「お前本当に何も知らねーんだな…？」

かく言う銀時も最初に電車を利用した時は自分達の世界と手順が違うのか…と思っていたが、その心配は杞憂となった。

まったく同じだったのだ。

切符といい、改札といい、乗車といい……

逆にあまりに同じなので、驚いたものだった。

(よくよく考えてみたら……こつちの世界と文化そのものが似通りに過ぎてるんだよな。まあ、生活に何の不便も無えのはありがたいけどな……)

そんな事をボクと考えながら券売機の前に立つ。

「なあ、銀時？」

「ん〜？」

「何で沢山料金が分かれてるんだ？」

ナギが指を差す先には、画面に沢山分かれて値段表示。

「まあ、簡単に言うとな……

例えば次の駅に行くには180円で良いけど、三つ先に行くためには360円かかるんだよ。

距離がそのまま値段になってるんだ。」

「だったらこの一番最後の値段ならどの距離でも大丈夫なんだろう？」

「……ああ、まあな。」

「なら全部この値段にしてしまえば良いじゃないか。だったら余計な事を考えなくて済むだろ？精算とか。」

「世の中にはなあ…お前の想像もつかないような事情を持った人が沢山いるんだよ。」

ダンボールをマイホームと呼ぶ人然り、雨をシャワー代わりに使う人然り。そういう込み入った事情を含めて、世の中の人間皆が納得のいくような値段に設定されてるんだ…」

そう言いながら銀時は画面を手早く押してゆく。その横でナギが納得したように頷いていた。

「なるほどなあー」

「ア ギス？」

そして二人は改札を通り抜け、地下鉄に繋がる階段の前に来て来た。

「いよいよ、この階段を下れば地下鉄か…」

「お前程地下鉄を楽しみにしている奴は初めて見たよ……」

「だって地下を走ってる電車だぞ？まさかそんなものがこの東京に無数もあるとは…技術の発達は凄いな。」

「お前もつとスゲー技術を沢山目の当たりにしてんだろ？」

爛々と目を輝かせてるナギ。

「別に何もねえぞ？景色も暗いばかりだし……」

「光武とあの先人の歌劇団達を通った道を自分も体感できるというだけで十分だ。」

「いや、無いからそんなん。」

二人は階段を下って行った……

「レンタルビデオショップ 橘」

「ワタル君っていつも不機嫌そうな顔してるけど、今日は特に不機嫌そうだね。」

「……………」

ここはレンタルビデオショップ 橘。そのレンタルビデオ屋のレジの前に立っているのは西沢歩。

んでもって、その歩が話しかけている相手はレジに座っている少年 橘ワタル。

何を隠そうこのレンタルビデオ屋の店長なのだ。

そして、橘グループの一人息子である。

年齢はナギ達と同一年。

そもそもこの店は、橘グループのエンターテイメント部門であり、また壊滅状態の橘グループの最後の砦となっている。

「別にいつも通りだよ……だけどさあ、俺だつて一応レギュラーメンバーな訳。なのに放置される事一ヶ月……散々待たされりや不機嫌にもなるだろ……」

「まあまあ良いじゃない。一応こつして出れたんだから。」

「まあ、別に大して気にはしてねえけどな……」

ワタルはそう言ってレジのDVDを脇の押しやる。

「あ、そついやナギのやろうが来るとか言つてやがったな……」

「ナギちゃんが……?」

「本当か!?ワタル!」

「わ!?一樹?」

ガバツと歩の後ろから姿を現したのは西沢一樹。歩の弟で普通の男の子だ。

因みに、年齢はワタルと同じくらい。

「……ああ、本当だよ……」

「ナギさんが……」

一樹は目を閉じて想いを馳せる。

「……お前いい加減目を覚ませよ。あんな奴の何処が良いんだよ？」

「全部だ！彼女の一拳一動全て！」

「はぁ……」

ワタルは溜め息を吐くと一樹を気の毒そうに見上げた。

「んじゃ、暫く待ってるか？」

「モチのロンさー！」

「……」

「いや、中々面白かったな！地下鉄は。」

「この世にこれほど地下鉄を楽しむ人間が何人いるやらだな。」

ナギと銀時は改札を抜けて、階段を上り外に出て来た。

「しかし、この辺はスゲー都会だな。見渡す限りビルばかりじゃねーか……」

「まあ、ここは東京の中心だからな。一応。」

「はあ……」

銀時は周りを何度も見渡している。

「取り敢えず、向かうぞ？」

「ああ、そうだった。」

二人は目的地に向かって足を進める事にした。

「なあ、銀時？」

「ん、何だ？」

歩きながらナギが銀時に尋ねる。

「前から気になっていたんだが、お前達は東京の外から来たんだろ？ 一体何処から来たのだ？」

「ああ……」

銀時は困ったように頭を掻いた。それもその筈。

銀時達が異世界から来たという事実を知っているのはヒナギクだけなのだ。

だから当然別世界から来たのだとは言えず……

「まあ、強いて言うなら歌舞伎町？」

「思いきり東京ではないか。」

「歌舞伎町ってのはなあ。江戸だの東京だの、そういう鎖には縛られない町なんだよ。あそこは歌舞伎町と言う一つの国なのだ。」

「どんな理屈……？」

〈レンタルビデオショップ橋前〉

「……と言う訳で着いたな。」

「流石に小説だな。あつという間だ。」

「……しかし、随分周りのビル景色からは不釣り合いな場所に立ってんだな。この建物は。」

「まあ、でもこの店主は橋財閥の息子が経営しているビデオ屋だ。小さくはあるがな。」

「……」

銀時は目の前の建物をまじまじと見つめる。

「取り敢えず入るぞ。」

ウィーン……

「あ、いらっしやいま……なんだお前か。」
レジからは不機嫌そうにワタルが顔を覗かせた。

「何だとは何だ。」

「何だとは何だとは何だ!」

「何だとは……」

「ああ!もうきりがいいから!」

二人のコント染みた言い争いを歩が止めた。

「ハムスターも来ていたのか。」

「ナギちゃん……ハムスターは止めよう。ハムスターは……
……て、アレ?ナギちゃん一人?ハヤテ君は?」

歩は周りを見渡すがハヤテの姿は無い。

「今日はハヤテは来てない。」

「え?じゃあ一人で来たのかな?」

「いや。オイ、銀時？」

「ウーイ。わふぁ……」

欠伸を噛みころしながら銀時が入って来た。

「あ、銀さん！」

「ん？よぉ……、ジミー。」

「今名前忘れてましたよね！？完全に忘れてましたよね！？」

「いや忘れてねえよ？……えっと、西沢ジミー歩。」

「惜しい！……って違あう！……何でジミー入れるんですか！？いらないでしょ、明らかに！」

「……えっと、」

ワタルが銀時に目を向けると、ナギが銀時を指して言う。

「こいつは銀時だ。成り行きでウチで護衛をやっている。」

「ああ、噂は聞いてるよ。」

俺は橘ワタルだ。一応この店の店主をやってる。ヨロシク。」

「坂田銀時だ。よろしく頼まあ。」

二人は握手を交わす。

「その年で店持つなんて立派だねえ……ウチの馬鹿共にも見習わせてーな……」

「え？いや、そんな事は／＼／」

ワタルは少し照れたように頬を掻くと、銀時に改めて向き直った。

「……でも、アンタも大変だろう？よりによって主人がアレじゃあさ……」

「オイ？どういう意味だ。」

ワタルはレジの横に立っているナギを指差した。

「まんまの意味だよ。つーか他に意味ねーよ……」

「お前はチビでモテない癖に……！！」

「関係ねーだろ……！！つーかお前みたいな自己中で我が侷な引きこもりに言われたくねーんだよ……！！」

「うっさい！バーカバーカ……！！」

「バカつった方が馬鹿なんだよ！バーカ……！！」

何やかんやで二人の物の投げ合いが始まった。

「黙れチビ！」

「うるせーよ！てめーもチビだろうが！」

うがアアアアア！……！！

「若！ナギお嬢様に何をしてるんですか！」

「サキ……」

ワタルの手を止めていたのはメイドの格好をした女の人だった。

「ナギお嬢様に何かあったら怒られるのは私なんですよ？」

「ハイハイ……」

ワタルは渋々物をレジにおいた。

「アラ？そちらの方は？」

「む？ああ、こいつは坂田銀時だ。成り行きで雇った。」

ナギが銀時を指して説明する。

「まあ、貴方が。」

お噂は予々聞いておりました。

私は貴嶋サキと申します。」

「ああ、よろしく。…っーか噂ってどんな噂になっただよ？」

「えっと、『銀髪で目が死んでいて、基本ちゃらんぼらんで掴みどころの無い男』だと。」

「それ噂って言うより悪口じゃね？」

「というか誰が流しているんだ？そんな噂？」

ナギは呆れたように呟いた。

「それでは私は仕事がありますので…。」

そう言っつてサキはDVDを積み上げて歩き出…

バラバラバラ……

壮大に転けた！

サキは何とか立ち上がるとDVDを積み直して、

バラバラバラ……

また転けた。

「し、失礼します！！！！」

今度こそしっかりとDVDを持ってそくそくと去っていった。

が、その後

ガラガラガラガラ……

「あう！」

奥から何か崩れるような音が聞こえて来た。

「はあ…サキの奴…」

「ハハハ…？サキさんらしいね…」

「あ、居たんだ？」

「ずっと居たでしょ！？」

歩の存在をすっかり忘れていたワタル。

「あ、あの！ナギさん！」

歩の後ろから一樹が恥ずかしそうに顔を出した。

「一樹、お前も来ていたのか。」

二人は何やらアニメの話始めたようだった。

銀時はナギの側から離れると、ワタル達の所に移動する。

「アレ、もしかしてお前の弟？」

「あ、ハイそうですよ。西沢一樹って言うんです。」

「ふーん。」

「いや！？終わりですか！？似てるねとか似てないねとかそういうの無し!?!」

「似てるな……何と言ってもあの地味さが……」

がっくりと隣で項垂れる歩を横目に銀時はワタルに尋ねる。

「ジミー弟、随分上がってんな。」

「まあ、見ての通りあいつはナギが好きなんだ。」

ワタルは一樹に視線をやる。

「青春だねえ……」

「いかんせん、一樹はナギの眼中に無い。」

あいつも分かってはいるんだよ。その好意が誰に向いているかもないかも……」

「……………」

「今に始まった事じゃねーけどな。」

ワタルは銀時に向き直ると肩を竦めてみせた。

「お！あつたあつた、あそこだ。」

談笑も一段落した所で、銀時とナギは例のDVDが置いてあると思われるホラーコーナーの少し前に来ていたのだが……

ゴオオオオ……

前に見えるホラーコーナーは薄暗い不気味な体をなしていた。

因みに人は一人として居ない。

「……いつ見てもこのコーナーは不気味だな。なあ、銀……」

「……………」

「オイ？銀時？」

銀時は既に固まっていた。

心なしか震えてるように見える。

「お前まさか怖……………」

「怖い？誰が？何処が？そして何が？」

「怖いと言っ前に怖いって言ってるという事は自分で怖いと言ってる証拠だろ……………」

「オイオイ、何言ってるのこの娘？勘弁してくれよ。俺もう大人だよ？大の大人がお化けなんか怖がる訳ねーだろ。つーかそんなもの存在しないからね！」

「随分饒舌になってるな……………」

「ああ！分かった。そこまで言うならパツと行ってさっさと出ようぜ？」

そう言っって銀時はホラーコーナーに向かって歩き出し……

「銀時？何だこの手は？」

銀時はしっかりとナギの手を掴んでいた。

「これは……アレだよ。お前が怖がらないように考慮してだな……」

「いや、震えてるし……怖がってるのはお前だろ。」

とにかく二人はホラーコーナーに歩みを進める。

が……

「なあ、銀時？ビデオ屋ってこんなだったけ？」

二人の目の前には、言葉では言い表せないような恐ろしい景色が広がっていた……

ドロドロと黒い空気が渦巻いていて、不気味な音がそこかしこから聞こえてくるようだ……

ガシッ

ナギは怖さのあまり銀時にしがみついていた。

「銀時！急いでDVDを探そう！そして一刻も早くここから出よう」

「！」

「分かってる、落ち着け俺、落ち着け…カームアップ…」

二人はゆっくりと前に進んで行く。

ゴオオオオ……………

「「！？」」

突如二人を生暖かい風が通り抜けた…
そして、

(……………ラ)

「「！？」」

人の声と思わしきものがホラーコーナーに微かに響いた。

「銀時！？」

「お、おおお落ち着け！何にも聞こえねえ！銀さんは何も聞こえてません！」

「でも！？今確かに声が！！」

(……………ラ、……………ラ)

「！？！？」

今度はさっきより室内に響き渡った。

「うう……………」

ナギは目を閉じてギュッと銀時に抱きついたらま……

「ん？いや……………」

しかし、銀時は何かに気付いたようにホラーコーナーの隅に目を向ける。

「……………どうしたのだ？」

「……あれ人じゃねーか？」

銀時の指差す先……

ホラーコーナーの隅にエプロンをかけた人がDVDを整理していた。
どうやら店員のようだ。

「じゃ、じゃあさっきの声はあの店員さんなのか？」

「ああ、多分な。」

「何だ、そうか。」

ナギはホッしたように胸を撫で下ろす。

「取り敢えずあの店員に聞いてみるか。」

二人は店員に向かって歩き出した。

「あ、そういえば……」

「どうしたの？ワタル君？」

レジに座っていたワタルが思い出したように顔を上げた。

「あの二人に新しい入って店員の事言っの忘れてたな。」

「店員？」

「ああ、アルバイトだけだな……」

歩入って不思議そうに首を傾げる。

「つい最近から手伝って貰ってるんですよ。ね、若？」

後ろからサキも現れた。

「まあ、頼まれたんだけどな……」

「そのアルバイトの人に？」

「いや、そいつの主人に……っか拾い主？かな？」

「へえ……。そのアルバイトの人はどんな人なのかな？」

「うーん、変わってるな……かなり。」

「変わってる?」

「ああ…何つーかぶっ飛んできると言うか…」

「ぶっ飛んでる…?」

「まあ二人共、二階にいるみたいだし、もう会ってるんじゃないか?」

そう言ってワタルは天井を見上げた。

一方……

二人は恐る恐る店員に近づいてゆく……

ナギは相変わらず銀時にしがみついた状態。

銀時も周りの酷く毒々しい様子に必死で耐えながら、店員の側まで来た。

そして、

「あの〜すみません、店員さん？
って言うDVDを探しているんですけど……」

銀時が店員の肩に手を乗せて尋ねた。

「店員さんじゃ無い……」

そう言ってエプロンの男は二人へ振り返った。

「桂だ！！！！」

第二十八訓 練馬アンダーグラウンド（後書き）

桂魂 i n ハヤテのごとく！

桂

「ハ〜イ、今回は祝俺初登場！と言う事で後書きを丸々使って桂魂かつたまをお送りしたいと思います。

フハハハハ！いやいや、それにしても長かった……え？何？前置き
は良いから早く始めろ？

ハハハ：まったく仕方ないな。

では桂魂、始ま……」

銀時

「始まるかアアアアア！！！」

桂

「ぐはっ！？」

銀時

「本当にさあ……何なんだよお前。くたばれよ……頼むからくたばって
くれよ。」

桂

「何を言う、銀時！こうして俺達が二人揃ったのだ。この世界にも
革命を起こしてやるつもりではないか！」

銀時

「誰かー！！コイツを埋めるコンクリート持って来てくれ。」

……大体何でかつらたまなんだよ。言いづらいだろ。ツラ魂に変える！」

桂

「ツラじゃ無い、桂だアアアア！」

銀時

「うるせエエエエ！！！」

桂

「ぐぼお！？」

ナギ

「アレもお前達の知り合いなのか？」

新八

「腐れ縁ですよ、どちらかと言えば。」

神楽

「ツラが遂に登場と言う事は、ますますギャグ要素が強まるアルな……」

マリア

「何か電波感がピンピン伝わってきますからね…」

新八

「一応アレでも凄く強いんですよ？剣の腕は一流ですし。」

ヒナギク

「端から見ると、とてもそうは見えないけどね……………」

神楽

「基本馬鹿アルからな……………」

銀時

「……………たく。もうあの馬鹿が出て来たって事は……………あゝ面倒臭え……………」

新八

「あ、銀さん！そついえば聞きました？」

神楽

「どうしたアルか？新八？」

新八

「何でも、この小説が遂に10万PVを越えたらしいんですよ！」

銀時

「はあ、見切り発車で始まったこの小説も苦節二ヶ月…ようやく春到来か？」

ハヤテ

「それだけの人達に読んで頂いてるなんて嬉しい限りですね。」

作者

「ハイ！本当にありがとうございます！」

ナギ

「……何か毎回作者がちよくちよく出て来てるなあ。」

作者

「良いじゃん、別に。」

ヒナギク

「まあ別に悪いとは言って無いけどね。」

作者

「じゃ、最後は主人公二人に締めて貰いましょう！」

ナギ

「いつの間にか仕切ってるし……」

銀時・ハヤテ

「それじゃ、また……」

桂

「次回！俺の活躍を見逃すなよ！？」

銀時・ハヤテ

「どけエエエエエ！！！」

桂

「ぐはぁ！？！？」

第二十九訓　いくつになっても馬鹿をやれる親友を持つ（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「本日、銀魂のコミックス36巻の発売日です！皆さんはもう読みましたか？それともジャンプ派ですか？因みに作者はジャンプ立ち読み+コミックス派だそうです。」

それはさておき。36巻、是非とも買いましょう！」

ハヤテ

「更にハヤテのごとくのコミックスも11月に発売します！お嬢様達との第二幕のスタートです。これもよろしく願います！」

新八

「いや…これ前書きだから…宣伝広場じゃありませんよ……」

第二十九訓　いくつになっても馬鹿をやれる親友を持って

前回のあらすじ…

欲しかったDVDがレンタル開始と知ったナギは銀時と一緒にレンタルビデオショップ橋へと向かった。

その途中でナギは初の地下鉄を体感する。

んで、目的地に到達した二人はDVDを借りるためにホラーコーナーへと足を進めると、そこには怪しげな店員がいて……

「……………あの〜　　って言うDVDは何処にありますか？」

「店員さんじゃ無い……………」

店員は二人に振り返る…………

「桂だ！……！」

ドオオオオオン……！！

銀時は店員が言い終わる寸前に渾身一撃を叩き込む！

店員は通路を吹き飛び隣のコーナーに消えていった……

「オイ！？お前何をして……！」

「……この辺には無いみてーだな。」

啞然とするナギを傍らに銀時は何事も無かったように棚を物色する。

「あっちの棚に新作のホラーが置いてあるんじゃないか？」

「いや……お前、」

「ん？どうした？」

銀時は首を傾げてナギを見る。

「それはこっちのセリフだ？
いきなりどうしたのだ？」

「何が？」

「何がって……いま店員を吹き飛ばしたろ？」

「……店員？何言ってるんだよ？このコーナーには俺達しかいなかったじゃねえか。」

銀時は訳が分からないと言つように肩を竦める。

「いやいや！？だってアレ……」

ナギは店員の吹き飛んだ方を指差す。

「馬鹿言ってるねーで、さっさと借りてここから出るぞっ。」

「あ！オイ！？」

銀時はそくさくと歩き出した。

その後をナギが慌ててついてゆく。

……

「ちょっと待て、貴様アアアア……！」

「……………」

二人の後ろから声が響く。

「貴様！いきなり人を殴り飛ばすとは……………、銀時！？」

「……………」

「銀時！！銀時ではないか！お前一体今まで何処に……………ぐぼッ！？」

ドシヤアアアア！！！！

銀時は振り返りもせず蹴り飛ばした。

「オイ？これじゃねーか？」

「……………まあ、そうなんだが……………」

銀時はDVDを取ってナギに見せる。
ナギはそれを受け取った。

「んじゃ、アイツら達の所に戻るぞ？」

「……………さっきの店員とは知り合いなのか？」

下の階に向かおうとする銀時をナギは止める。

「店員？何処に？」

「……………」
辺りを見回し、首を傾げる銀時。

「でも今名前呼ばれてたじゃん。」

「幻影だ。」

「……………は？」

何の突拍子も無い話にナギは思わず声を上げる。

「ここ、即ちホラーコーナーの幻影だ。だから俺達に出来る事は、
今見た事を全て忘れて下の階に向かうんだ。分かったな？」

「……………」

銀時は半ば無理矢理ナギと下の階に降りて行っ…………

「幻影じゃ無い！桂だアアアア！！！」

「のわっ？」

ナギ達の横からガバツと起き上がった店員。基ッラ。

「……………」

「銀時！貴様いきなり何をするのだ！」

「……………」

「まったくお前は……。ホラ、棚が散らかってしまっただではないか。」

「

「……………」

せつせとDVDを棚に戻す桂。

「……………オイ、何を突っ立っている銀時。お前も手伝わんか。」

……………

「何してんだアアアアア！！！！てめーはアアアアア！！！！」

「ぐはっ！？」

ズサアアアア……………

第二十九訓

いくつになっても馬鹿をやれる親友を持って

「……ん？なんかタイトル表示してるぞ？こんなの今まであったか？」

「気にすんなよ……作者の思いつきだ。それより……」

銀時は一旦下の階に集まった皆を見渡す。

「……お前は何をやってんだよ……？」

銀時は盛大に溜め息を吐くと桂に尋ねた。

「銀時、そんな事よりもっと何かあるだろ。親友同士の再開にはもっと何かこう……」

「いいからとつとと話せ、ツラ。オメーの長い無駄話を聞いている暇も、話してる暇もねーんだよ……」

「ツラじゃ無い、桂だ。」

そんな二人のやり取りを眺めるナギ達。

「なあ……あの長髪は？」

「バイト。つい三日前くらいから働いてるんだけどな。」

「よくバイトなんて雇ったな。」

「いや…俺達が雇ったっーより頼まれたんだよ。」

「頼まれた？誰に？」

「ああ、それは……」

ワタルが言いかけようとするど、

ウィーン……

「お、居た居た！」

「咲？どうしたのだ？」

入って来たのは咲夜だった。

「何や、ナギもおったんか。ウチはアイツを迎えに来たんやけど…」

「アイツ？」

咲夜は周りを見回すと、喧嘩をしている銀時と桂に目を向けた。

「銀時もおるんかいな。」

そのまま二人の方に歩いていく。

「……？」

ナギは訳が分からない様子でワタルを見る。

「だから咲夜がバイトをさせるのを頼んできたんだよ。」

「え？じゃあ……」

「ああ、拾い主つてのは咲夜の事だよ。」

「……」

【銀魂の「とく」】

マリア

「アイキヤチです」

10/4 本日！

銀魂コミックス36巻発売！！

因みに表紙は だ！

皆さん、是非買いましょう！

【銀魂のじとく】

ハヤテ

「10月は昔の暦で神無月ですよ。」

「……なるほどな。つまり小太郎は銀時の幼なじみで友達な訳やな？」

「友達じゃねーよ、こんな電波馬鹿。知り合いつーだけでも恥ずかしくて穴があつたら埋めたいなあ、この馬鹿を。」

「馬鹿じゃ無い、桂だ。」

銀時。俺達は共に幼き時を分かち合った同志……マナカだろ？」

「古いんだよ！流行つてねーよ、今時！」

「何を言う！！ 吾は俺の流行の最先端を行っているのだぞ！」

取り敢えず銀時達は改めて集まり直して、各々の事情を整理していた。

因みに西沢姉弟は地味に帰られたと言う。

「まあ、大体事情は分かった。要するにヅラは咲夜に拾われて、このビデオ屋でバイトをしてんだな……」

「ヅラじゃ……ぶっ!?!?」

言葉を遮るように銀時は桂を黙らせた。

「ああ、そういう事だな。まあバイトといっても毎日じゃ無いけど。」

「そうですね。週に二回くらいだったと思います。」

ワタルとサキは頷いて桂に視線をやった。

「ところで咲。どういう経緯で出会ったのだ？」

ナギはDVDのレンタルを済ませると、咲夜の側に寄って行った。

「せやな……積もる話もあるやろつから……取り敢えずウチに来な。」

「まあ、別に聞かなくてもいいかな。DVDも借りたし、帰るぞ？
銀時。」

「うおい！！人の話聞いてたやろ！？」

「えー……だって咲の家面倒じゃん。」

「面倒ってどういう意味じゃアア！！……とにかく！ウチに行く
で？」

「えー……」

まあ、そんな訳で四人はワタル達と別れ、愛沢家に向かう事になっ
た。

ビルがところ狭しと並び立つ大都会東京を歩いていく四人。

ナギと咲夜が前を歩いていく後ろで銀時と桂が何やら話込んでいる。

「銀時……にわかには信じられんだろう？俺達はずい最近まで江戸にいたというのに。気がつけば別世界に飛ばされ、なのに文化や技術の発達俺達の世界と似たり寄ったりときた。」

「そうさな……っ！かお前はいつからこっちに来てたんだ？」

「詳しくは分からん。自覚出来るのは二週間くらいだな……」

「……やっぱりこっちに来る時間にズレがあるな。」

銀時は考え込むように首を捻る。

「ツラじゃ無い、桂だ。」

「ズレって言うてんだろがアホ。ズレてんだよ、時間が。」

「ではお前はいつこっちへ？」

「三週間くらいだな。長谷川さんは俺より一週間早かったって言うてるしな。」

「長谷川殿も無事だったか。」

新八君やリーダーは？」

「お前と同じように俺と拾われて何とかやってるよ。」

「そうか。」

……しかし、参ったな。いくら新撰組が居ないとはいえ元の世界に帰らなければ攘夷活動に差し障りが。」

「オメーの存在そのものが攘夷活動に差し障りがあると思う。」

「それにエリザベスの事もある！！俺が居なくて寂しがっているに
違いない。」

「アイツただのオッサンだから。一人でもやっていけるだろ。」

「オッサンじゃ無い、エリザベスだ。」

「オーイ、二人共！！何してるん？置いてくで？」

いつの間にか前のナギと咲夜はずっと前方を歩いていた。

「済まぬ、咲夜殿。行くぞ、銀時。」

「ハイハイ。」

まあ、これとって書く事もないので目的地へパツと移動。

「……さ、着いたな。」

咲夜は門を指差している。

「やっぱりでけえな……」

「ま、一応愛沢家のご令嬢だからな、アレでも。」

「アレってどういう意味やねん！」

四人は屋敷に入ってゆく。

「お帰りなさい！咲夜さん。桂さんもお帰りなさい。」

「おう、ハルさん。ただいま。」

「只今戻った、ハル殿。」

最初に出迎えたのは愛沢家のメイドであるハルだった。

彼女には、まあ色々秘密があるのだがそれはまた今度という事で。

「あ、ナギお嬢様！いらっしやいませです……えっと？」

ハルはナギに挨拶をすると隣の銀時に目を向けた。

「ああ、コイツは三千院家の護衛だ。成り行きで雇った。」

「坂田銀時だ。趣味は糖分摂取。将来の夢はストレートヘアだ。」

「後、俺の親友であり、戦友……」

「嫌いなものはヅラだ。」

「ヅラじゃ無い！桂だア！！」

「うるせー！！」

二人は後ろで喧嘩を始めた。

「面白い方ですね……？」

桂さんのお知り合いなんですか。」

「らしいな。幼馴染みらしいで？」

「……と言う事は……この方も？」

「多分そうやろうな……」

ハルは咲夜の側によって尋ねる。

「何をコソコソ話しているのだ？」

「いえ？何でもありませんよ！？
取り敢えず、ご案内いたしますね。」

ハルはそう言うと四人をリビングに案内した。

リビングに着くと、銀時達は大きなソファに腰かけ、咲夜はそれに向かうように腰掛ける。
ハルは紅茶を淹れに出たが、ついでにナギも何故か一緒に連れていかれた。

「……咲夜？一体何処でこの馬鹿を拾ったんだ。」

「馬鹿じゃ無いヅラだ。あ、間違った、桂だ。」

「ナギは……ハルさんが連れていったみたいやな。」

「……アレはな……」

二週間前

「いやあくやっぱり買い物はええな！」

「最近雨が続いていましたからね。こういう時の買い物はストレス解消にもなります」

咲夜とハルはショッピングモール（そんなのあったっけ？）で買物を済まして上機嫌に帰宅していた。

暫く歩いて公園に差し掛かると、

「……………？咲夜さん。」

「どないしたん？ハルさん？」

「アレ……………人じゃないですか？」

ハルが指差す先……………

公園のベンチの下……踞っているような格好で倒れている人が……

「つて、ちょっとハルさん！？人が倒れてるやん！」

「やっぱり……」

二人は倒れている人に駆け寄っていく。

「ちよっ！？お前、大丈夫か？」

「……う……」

咲夜達が駆け寄った人間は、長髪の男だった。顔には数ヶ所の切傷があり、着ている袴は少し破けていた。

「この着物……随分珍しいですけど……」

「せやな……取り敢えず一旦ウチに運ばな。巻田！国枝！」

「ハッ……」

何処からともなく現れた執事二人は長髪を背負った。

「ほな、急いで帰るで！」

咲夜と巻田、国枝は屋敷に向かって走っていった。

「それにしても……一体あの二人は何処から来たんだろう……？」

ハルはいつも疑問に思っている事を空に向かって呟いた。

その後、二時間くらいして、咲夜達によって運ばれた男は目を覚ました。

「……………ん？……………」

「目覚めたみたいやな。」

「……………?」

長髪は目をつつすらと開けるとすぐ隣にいた咲夜に気が付いた。

「……………俺は……………一体……………」

「自分、公園に倒れてたんやで?何にも覚えとらんのか?」

「公園……………?……………」

長髪の男は暫く目を閉じて何かを考えてる様子だったが、急に目を見開くと、

「……………そうだ。俺は……………俺達は……………あの仙人に飛ばされて……………しかし……………」

一人で葛藤を始めた。

「オーイ、聞こえとるか?」

「待てよ?……………あの時仙人は違つと……………じゃあ一体この世界は……………」

「オーイ……………」

「それに他の奴らは!?!一体何処に!?!」

「聞けゆつとんじゃい!?!このロン毛!」

スパーン!

咲夜は長髪の男の頭を叩いた。

「ロン毛じゃ無い、桂だ。」

……あい済まぬ。大分混乱しててな。俺自身今の状況が未だよく呑み込めてないのだ。」

「取り敢えずまず落ち着きな。今ハルさんが紅茶を淹れて来てくれるから、それまでにしっかりと頭の中整理しとき。」

「……………」

長髪の男はまた額に手をあてて思考を凝らし始めた。

暫くしてハルが紅茶を淹れてやって来た。

「ハイ、どうぞ。」

「済まない。」

「あんがとな、ハルさん。」

ハルは二人に紅茶を手渡した。

「……………それじゃ、ベタやけど取り敢えず自己紹介とするか。」

ウチは愛沢咲夜や。好きなものは面白い事と面白い奴や。」

「咲夜さんの所でメイドとして雇われています、ハルです。よろしくお願いします。」

二人はそれぞれ男に挨拶をする。

「俺は桂。下は小太郎。好物は蕎麦だ。」

「何で好物言った？蕎麦出せってか？蕎麦出せってか？」

「通り挨拶も済んだ（？）所で本題に。」

「で？一体自分何者なんや？着ているものを見る限りこの辺に住んでいるようには見えねんけど？」

「……俺も分からん。」

「は!?!？」

「ここが何処で、どんな時代なのか……この世界は一体何なのか。」

「記憶喪失でしょうか？」

ハルが桂に尋ねる。

「……いや、記憶はしっかりとある。ただこの世界の事がさっぱり分からんだ。」

「……？」

二人は訳が分からないといった様子で首を傾げる。

「……正確に言おう。恐らく俺は別の世界から来た。パラレルワールドと言うのか。とにかく俺はこっちの事はまったく分からない。」

「……ハルさん。コイツを精神科に連れて行こう。」

「ええ、急いで手配します！」

「待て待て！！マジだからコレは！！！」

桂は慌てて二人を止める。

「まあ、いきなり信じて貰うなんて期待はしていないが……とにかく俺は怪しい者じゃ無い。」

「いきなり長髪の男が別世界から来たなんて言い出したら普通は警察を呼ぶわ。」

「……取り敢えず話だけでも聞いてくれないか？それでも信じられ無かったら精神科でも何処でも連れて行けば良い。」

桂は咲夜をまつすぐ見据えて真剣な面持ちで言った。

「……」

「咲夜さん。取り敢えず話だけ聞いて見ませんか？この様子だと狂言って訳でも無さそうですし。」

「せやな……分かった。
じゃあ自分、話してみ？」

「助かる。」

こうして桂は二人に洗いざらい打ち明けた。

自分（達）は江戸から来た事。

その江戸には天人という宇宙からの侵略者が台頭している事。

天人の影響で技術、文化が段違いに発達している事。

又、天人の侵略に押されて降伏した幕府に反発し、自分達の国を護ろうと侍達が立ち上がった攘夷戦争なるものがあり、自分もその戦争に出ている事。

戦争の結果、侍達は破れ、廃刀令により衰退の一途を辿っている事。

その戦争に加担していたものは幕府に手配とされ、かく言う自分もまた、新撰組なる武装警察に指名手配とされている事。

そしてこっちの世界に飛ばされた馬鹿らしい経緯。

何も全て話す必要など無いのだが、桂は信じてもらおうと必死だった上に、大変堅物なので一度話し始めたら収集がつかなくなってしまったのだ。

「……………と言う訳なのだ。これで信じて貰えたか？」

……………

「信じられるかアアアアア！！どんだけツツコミ所満載やねん！」

「本当の話なのだ、咲夜殿！俺だってよく分からん。もしかしてここは江戸から離れた同じ世界の場所かも知れないと考えた。しかしあの時の仙人の話が本当だとすると、やはりここは別世界の可能性が高いのだ。」

「……………確かに、桂さんの話が本当ならここは貴方にとって別世界にあたりますね。」

「ハルさん！？」

「……………やはり、そうなのか……………」
桂は険しい顔をしたまま俯いて考え込む。

「咲夜さん……………確かに突拍子も無い話ですが、この方が嘘を言っているようにも見えません。どうでしょう、一つこの話を信じてみる

のは。」

「んなアホな！……って言いたい所やけど、詳しくすぎて逆に現実味を帯びてるからな。」

「……く！このままでは……」

桂は悔しげに拳を震わせる。

そんな様子を咲夜も深刻そうに見守る。

「自分……元気だしや！まだ帰る方法が……」

「このままでは……」

スーパーマリ ブラザーズ2の発売日に間に合わない！！」

「アホかアアアアア！！！」

「ぐぼツ！？」

咲夜のアツパーカットは綺麗に決まった。

「お前、ここまで引つ張っておいてどんな心配やねん！バカか！？バカなのか、自分！？」

「馬鹿じゃ無い、桂だ。」

俺はマリオが大画面で復活すると聞いて、最近はそれを楽しみに攘夷活動に勤しんできたというのに……くっ！その道は閉ざされたか……」

「滅茶苦茶不純な動機やないかい!!!そんなんで活動内容きまるんか!?!」

「無論だ。我々攘夷志士は日々のモチベーションが大切なのだ。それが不滅の秘訣だ。」

「先に己の頭が滅亡しとるわアアアアア!!!」

「がはっ!?!」

今度は右ストレートが決まる。

「まあまあ、咲夜さん?そのくらいで……」
頃合いを見計らってハルが止めに入った。

「まったく……」

しかし、恐ろしい奴やな。」

「ハイ?」

「ウチにこれほどツッコミをさせるとは……ただのボケやない。このロン毛は。」

「……ロン毛じゃ……無い、桂だ。痛つつつ……」

(そうかしら……?)

そんな様子に首を傾げるハル。

「それより自分、異世界から来たちゅー事は宿とかどうするん？」

「……そういえばそうだった。「気が付いたようにハツとする桂。」

「だったら決まりや！家で暫く居候するんや」^{ウチ}

「ええ！？咲夜さん、本気ですか！？」

「ああ、ウチは面白い奴が好きやねん。まあ、ロン毛さえ良ければやけど？」

「ロン毛じゃ無い、桂だ。」

「……良いのか？」

「まあ、居候ちゅーても家の手伝いとかはして貰うで？」

「ああ……濟まない。助かる。」

取り敢えず、そういう訳でこの日から桂は愛沢家で居候する事になった。

「まあ、じゃよろしくな。小太郎。」

「こちらこそよろしく頼む。ブロッサム殿。」

「誰が零号機じゃアアアアア！！！！」

「ぶべらっ！?!?!?!?!」

トドメのツッコミ、ドロップキックが桂にクリーンヒットしていた。

(…この二人、意外と良いコンビになるかも…ですね)

そんな様子を心配半分、微笑ましさ半分で見っていたハルであった。

………

「…とまあ、そんな訳や。」

「………ツラよお…普通全部話すか？」

「ツラじゃ無い桂だ。」

仕方あるまい。そうでもしなければ信じて貰え無かったかも知れないだろ？」

「はあ………」

銀時は参ったように溜め息を吐いた。

「やっぱり本当の本当だったんやな。」

「だから何度も言っていたらどう？」

桂はゆっくりと頷く。

「……銀時？この事、ナギ達は知ってるんか？」

「……いや。詳しい事は何も話してねーよ。」

「ま、普通そつやるな。いきなりこんな話されても信じる方が無理やねん。」

「時期が来たら嫌でも話す時が来る。そんな時に話せば良いんじゃないか？」

「せやな……」

ガチャ……

「紅茶がはいりました。」

ハルとナギが部屋に入って来た。

「んじゃ、取り敢えずブレイクタイムやな。」

*

「実に美味な紅茶だ。蕎麦によくあいそうだな。」

「何、己れはさりげなく蕎麦要求しとんねん！この蕎馬鹿！」

「蕎馬鹿とはどういう意味だ！繋げる事無いだろう。せめて蕎麦馬鹿にしろ！」

「黙ってるカス。」

「カスじゃ無い、桂だアアアア！」

「「うるせエエエエエ！！！」」

「ぐばっ!?!」

銀時と咲夜からのダブルツッコミに吹き飛ばさる桂。

そんな様子を呆れたように眺めるナギとハル。

「この面子は本当に喧しいな…」

「特に咲夜さんと桂さんは会話が毎日漫才ですから？」

「大変だな…」

「本当に……アストレ でフリー ムとジャ ティスに挑むような
ものです。」

「え？」

「い、いえ？何でもありません！ナギお嬢様？紅茶のおかわりは
いますか？」

「あ、ああ……じゃあ頂こうかな。」

愛沢家、午後のお茶会は大変騒がしいのであった。

一方……

（三千院家庭）

「きゃっほオオオオ！！待つアル！タマアアアア！！！！」

「ニヤアアアア！？！？」

神樂が定春に乗りながら何故かタマを追いかけていた。

「ちよつとオオオオ！？神樂ちゃん、ストップストップ！！庭が滅茶苦茶になつてるよ！？」

「うるさいアル、新八。今日はタマと遊ぶネ！待つアル！タマアアアア！！！！」

「ニャアアアアア!?!(殺されるウウウウ!)」

神楽、基定春は木々をなぎ倒しながらタマに突進していった。

「……庭の掃除……どうするんだよ……」

新八は頭を抱えていたとさ……

第二十九訓　いくつになっても馬鹿をやれる親友を持つて（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「んじゃ、始めるぞ〜」

本日最初の質問は『メガネが大好きなお通ちゃんの曲を聞いたらナギとハヤテはどんな反応をするか？』

ナギ

「お通ちゃん？」

ハヤテ

「誰ですか？それ？」

銀八

「こっちで流行ってるアイドル歌手だよ…ぱっつあん、ヨロシク。」

新八

「……………コオオオオオ」

ハヤテ

「な！？新八君の周りからただならぬオーラが！？」

ナギ

「これが本物のA フィールドか!？」

志村隊長

「寺門通親衛隊隊長オオオオ!! 志村新八!

任せて下さい! 二人には本編でお通ちゃんのス晴らしさを持てる力
全てを持って伝えます!」

銀八

「暑苦しいから本編でやって来い。感想は後ほど聞こう。」

志村隊長

「行くぞオオオオ!! 我が同志達よオオオオ!!」

ハヤテ・ナギ

「マジですか!?!」

と言う訳で本編でやらせて頂きます。

ヒナギク・歩

「……誰? アレ?」

神楽

「アイツはアイドルの追っかけネ。ああなると手が付けられないア
ル。」

銀八

「お前が言うな。」

スパーン！

銀八

「続いては……ん？作者に質問か……」銀魂、ハヤテのごとくで好きなキャラクターは？」

作者

「えっと……そうですね。三人くらいずつで良いですか？では一応答えさせて頂きます。」

「ハヤテのごとく」から。

取り敢えず一番好きなのは

『春風千桜』

ですかね。

理由は……メイドの時のギャップが良いと言つのもそうなんですけど、自分はメイドさんのハルさん時より、クールでいて二次好きな千桜の方が好きです。

スキだらけな所も可愛いし、ナギとのやり取りもとても面白いですしね。

正直、自分の中ではダントツです」

神楽

「自分の気持ちさらけ出したヨ、コイツ。キモイアル。」

ナギ

「もともと作者は好きじゃ無かったが…」

ヒナギク

「今ので更に引いたわね…」

作者

「仕方ないだろ！？質問なんだから！」

神楽

「近よんじゃねーヨ！」

作者

「ヒドイっ！？」

銀八

「まあ、いいじゃねーか。続けて続けて…」

作者

「……ハイ。次に好きなのは

『西沢歩』かな。」

歩

「本当に！？……その割には扱いが酷いような…」

ナギ

「何でハムスターなのだ！？」

作者

「いやさあ……地味とか普通とか大好きだから僕。」

歩

「それは喜んでいいのかな？」

銀八

「ま、良いんじゃない？次は？」

歩

「終わり方も普通！？」

作者

「次は……」

『綾崎ハーマイオニー』かな。」

ハヤテ

「ちよつとオオオオ！？何言ってるんですか、アナタは！？」

作者

「俺も初めて見た時はビックリしたよ、本当に。こんなにメイド服が似合う人がいるのか……ってね。」

ナギ

「それは……同感だな／＼」

マリア

「…ですね／＼／」

ヒナギク

「もう本当に女の子よね／＼／」

歩

「でも…有りと言えば有り！／＼／」

作者

「もう性転換しちゃえば？」

ハヤテ

「何を言ってるんだアアアア！…！」

銀八

「時間が無えーからどんどん行くぞ？作者？」

作者

「ハイハイ… 『銀魂』で一番好きなのは

『坂田銀時』です。これは言うまでもないですよね。

普段はグータラだけど締めるところは締める…… そんな銀さんには憧れるものがあります。

攘夷戦争の過去等もぐっとくるものがあるし、何よりその強さ。本当にもうカッコイイの一言です。」

新八

「流石銀さんですね！僕も同感です。」

神楽

「まあ、だからこそちゃんばらんな部分が目立つアルな。」

銀八

「神楽ちゃん？ここは褒める所じゃない？」

神楽

「作者、さつさと行くヨロシ！」

作者

「ハイハイ？……次はやっぱり

『神楽』かな。」

神楽

「当然アルな。銀ちゃんの隣は私に決まってるネ。」

新八

「理由は？」

作者

「いやね？ハヤテのごとくのヒロインと違って神楽は怖いもの無しじゃん。ジャンプヒロイン史上初の暴拳を何度も繰り広げたし。その辺は流石だと思うよ。あと単純に可愛いし。凄いギャップだけど、そこが良い！」

神楽

「さ、作者も見る所はしっかり見てるアルな／＼／」

新八

「神楽ちゃん？最初と態度全然違っけど…もしかして照れてるの？」

神楽

「べ、別にそんな事無いネ／＼早く次行くアル！」

作者

「えっと…次は…」

銀八

「ぱっつぁんは？」

作者

「メガネ。

…で次に好きなのは…」

新八

「ちよつと待てエエエエエ！！何だよ今のやり取り！？何の意味があるの！？」

作者

「えっと…『ツラ』かな。」

桂

「ツラじゃ無い桂だアアアア！！！！」

作者

「この人は本当に面白いから。」

展開に困った時には簡単に出せるし、ギャグも作り易いし……」

新八

「ほとんど制作側の意見じゃねーかアアアアア！……！」

銀八

「もう時間も無いから、この辺で……」

桂

「銀時！今回こそ俺達でこの世界に革命を……」

銀八

「黙ってるカス。」

桂

「カスじゃ無い桂だ。」

銀八

「もう時間無えから、お開きにするぞカスラ。」

桂

「カスラじゃ無い桂だ。」

作者

「あ、それとサディストさんの考えてくれたオリジナルキャラクタークタ
ーは次回から登場しますので。本当にお待たせいたしました。」

ヒナギク

「…と言つ訳で次回もよろしくお願いしますね？」

第三十訓

連休明け学校は辛いものがある(前書き)

くオリジナルキャラクター紹介く

湊川 みなとがわ 姫史 ひめじ

【年齢】

27歳

【誕生日】

5月4日

【血液型】

B型

【身長】

185cm

【体重】

54kg

【好き・得意】

・全ての幼女（16歳まで。ギリギリ18歳まで可能と言えば可能だが……）

・外来語

・頭を使う事

・運動全て

・執事業務全て

・クラウス

・落語

・白皇学園のみんな（先生的な意味でね？）

【嫌い・苦手】

・熟女好きな人

・ギャルとかギャル男とか不真面目な奴

・甘いもの

・椎茸（目にする事も出来ない程）

・マリア（苦手というよりトラウマだそうです）

・女装する事、させられる事

紹介

容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群と最高峰のスキルを持つ天才。
現役白皇学園の外来語教師で雪路達とは同期。

実は白皇学園OBで全盛期にはチョコレートを400個以上貰ったという伝説を持つ。因みに生徒会副会長だった。

反面、重度のロリコンであり、対象年齢は16歳という。三度の飯より幼女が好き。

18歳までは対象内とはしているものの、正直年増だと思っている。ロリコンが全てのスキルを潰している非常に残念な男。と思いきや、生徒からは絶大な人気を誇っている。

男女問わず慕われていて、言わずもがな女子からはラブコール殺到。ロリコンだがそのギャップがまた良いらしい。

男子からも基本慕われている上、一部の男子からは師匠と崇められている。

基本、生徒から『姫ちゃん』、『姫先生』、『湊ちゃん』、『姫史先生』、『湊川先生』、『師匠』、『ロリコン』と呼び方は様々。

同職員からも人気であり、彼を好きな先生も数多くいる。

雪路と京ノ助とは同期という事もありかなり仲が良い。悪友とも言う。

その為か、根本的な部分でマダオだったりする。(ロリコンが主)

また、執事業も兼任(出来るのか?)しており、実は教師よりも先の仕事。幼い頃、クラウドに拾われて彼を師として、彼のような執事を目指して育ってきた。(まだナギが生まれる前の話)

紫子とかなり面識があり尊敬していた。彼女が亡くなってからは屋敷には来なくなったが、クラウドとはよく会っていたようだ。

ナギが12〜13歳の頃からまた屋敷に顔を出すようになった。

ナギとは屋敷で何回も会っている。ナギが面識臭がる人物の一人。だが、根本がとても良い人だし、紫子とも仲が良かったという事もあって憎めない腐れ縁という認識。

姫史自身はナギを最初に見た時から素晴らしいを連発。

『姫』とか『殿下』とか呼んだりする事もある（馬鹿）

マリアに対し、初対面（マリア15歳、姫史24歳）で年増にも似た発言をうっかりしてしまった為に、病院で一週間生死の境をさまよった事もあってトラウマに。

以後は年下だが、『マリアさん』、『マリア様』と必ず敬意を表すのを忘れない。

当時の姫史曰く、「彼女の年齢が私の範囲内と言う事に気がつけ無かったなんて!？」

とそっちに対してもショックを受けていた。

執事としてはクラウドス直伝ということもあり超一流。氷室や野々原も尊敬している。

何処の執事をしているかはまだ秘密。

無論戦闘能力も群を抜いている。噂によると、一人で
の
一
個師団壊滅させる程とかなんとか……

ハヤテとはまだ面識が無いが、それはこれからと言う事で。

銀時とは結構絡む予定。

姫史はあらゆる面で完璧だが根本でマダオだったりするので長谷川

と三人で馬鹿をやりたいと思う。

作者の言い訳

いや、なんかすみません…

まだ本編作成中なのですが、その経過で紹介文を書いていたら先に完成してしまいました…

前書きと連結させるつもりでしたが、前々回のように間違っで消しちゃったりしたら洒落にならるので先に投稿する事にしました。

多少ネタバレが含まれますが、それも敢えて加えてしまいました。

ここまでが本編投稿しなかった謝罪です。

それから、次はオリキャラに関しての反省です。

まず名前ですが、これが本当に悩みまして……

面白い名前にしようとも思ったんですが（二郎三郎みたいな）せっかく考えて貰ったキャラクターに変な名前を付けるのも申し訳ないので。

それでカツコイイ名前にしようと思ったんですが……

色々と考えてみたんですが、どれもダサかったりで……随分悩みま

した。

結果、あの名前になりました。

苗字は……まあ何となくだったので、姫史と言う名前は何か生徒から面白い愛称で呼ばれたいなあと思いついて、姫という文字は絶対にいれたかったのです（笑）

あとロリコンというキャラですが、都合上16歳までが許容範囲という事になっちゃいました。

でも一応限界範囲は18歳までOKということに（笑）

それと一番重要な事は教師という設定です。

えっと……まあロリコンというキャラ上教師にもつかせた方が何かと良いかな、と。

白皇に勤めていると色々と登場する機会が増えやすいので、勝手にすみません。

でも、勿論執事兼任という事になっているので。

サディストさん、キャラクター発案ありがとうございました。

このキャラクターも含めて色々馬鹿やっついていきたいと思うのでよろしくお願ひします。

次回こそは本編なので、ご安心下さい。本当に今回はすみませんでした！

第三十訓 連休明け学校は辛いものがある

お正月も過ぎ去り、一月も中頃に入れば、楽しかった冬休みも終わり社会人には会社が、学生には学校と言う試練が舞い降りてくる。

しかし、私は敢えてこの事態に異議を申し立てたいと思う。

人間とは弱く、ちっぽけなもの。とても繊細で脆く、些細な事でも一瞬で崩れてしまう。

そんな我々に、何故学校は沢山の休みを与えるだけ与えていきなり学校に放り込む等という鬼畜とも言える所業を行えるのか！？
そしてそれを平然と見過ごしている現代社会は一体どうなっているのか！？

「……一通り済んだら支度をして下さいよ？お嬢様。」

「うおい！！！！スルーか！？この現代社会の惨状をハヤテは何とも思わないのか！？」

「初日からサボりなんてマリアさんに怒られますよ。」

「……………」

2010年……………」

この情報化社会において我々は今一度教育の根本を見直すべきではないだろうか？

否、見直さなければならぬ。

この上で特に問題とされるのが……………」

「問題云々じゃ無くて、取り敢えず学校に行きなさい。」

「……………」マリア。」

マリアはふうっと溜め息を吐く。

「今日は始業式だけですぐ終わるでしょう？」

「始業式だけではないぞ！？LHRやその他面倒な取り決め等もあるのだ。」

「……………」

「それに何か…………少し頭も重いし…………風邪っぽいような……………」

ナギは手でこめかみを押さえる仕草をしてみせる。ついでに咳も忘れずに。

「……………ではお嬢様、早く着替えて下さいね？朝御飯出来てますから。」

「オイ！？私が仮病をしていると言ってるのか！？」

「それだけ叫べるなら風邪でも学校に行きなさい。」

「ええ！？？」

第三十訓

連休明けの学校は辛いものがある。

ここはとある学園の職員室。

「あゝ……だるい。」

茹だるような声を上げたのはご存知、桂雪路。

ヒナギクの実の姉であり、現在28歳の独身。世界史の教師であり、前に触れた通り無類の酒好き。大変な浪費家で簡単に言えばマダオである。

「もうナレーションに突っ込むのもだるいわ……
あゝあ……何処に大金転がってないかな？」

「新学期初っぱなから教師にあるまじき発言をするな。」

「ん？？」

雪路の視線の先……… 同い年くらいの男の先生が近づいて来た。

彼の名前は、薫京ノ助。

雪路の同期であり、幼馴染みである。体育が担当でプラモデルが趣味の先生である。暇さえあればガンプラばかり組み立てている。

「アンタみたいにプラモデルばつかに金使ってる暇人と違って私は色々忙しいの。自然と出費も嵩んでくるのよ。」

「お前に言われる程腹立つ事は無いな………」

どうでも良い事だが、薫は雪路の事が好きらしい。

「どうでも良いってどういう意味だよ！？」

「うるさいわね………誰と話してるのよ………」

雪路は頂垂れるように呟いた。

まるで二日酔いのオッサンのように。

「っーか頭ガンガンするからあんまし叫ばないでよね………昨日飲み

過ぎた……」

本当に二日酔いだった！

「教師が二日酔い出勤なんて……世も末だな。」

「失礼ね……ずっと学校で宿直だったわよ。昨日も飲み会開いてたんだから。一人で。」

「それは宿直じゃ無い、寄生だろ。」

「あゝ……だるい。本当にだるいわ……」

何がだるいつてさあ……」

はあ、もうだるい。だるいつて言うのもだるいわ……」

「どんだけだるいだよ……」

二人がそんな不毛なやり取りをしていると……

ガタツ！！！

「何故だアアアア！！！！！」

「！！？」

突然大きな声が職員室に響き渡った。
二人は驚いてその方を振り返ってみると…

「……………何だ湊川先生か。」

薫は安堵半ば呆れたように呟く。

「何だとは何だ……………等と呑気に語らっている事態ではない!!」

拳を突き上げ豪語しているのは、白皇学園の教師の一人、湊川みなとがわ姫史ひめじだった。

* 詳細は前話参照

「どうしたんだよ?いきなり?」

「どうしたもこうしたもあるか!!新学期付で私は……………私は……………高等部に移動になってしまったんだアアアア!!」

「良いことじゃないか。昇格だろ?」

「……………はあ、これだからプラオタは……………」

「……………プラモ関係ないだろ。」

姫史はやれやれと肩を竦めると、二人に向き直る。

「いいかね諸君？中等部と高等部の決定的な違いは何だ？」

「ん〜……給料？」

「お前は本当に金しか見てねえな……年齢層が違っただろ。」

呆れて雪路を見ながら薫が答える。

「その通りだ、ガンプラー！」

「ガンプラっておかしくね！？あだ名じゃねーよ。」

「年齢層だ……中等部では12〜15。それに比べて……高等部は15〜18!!!」

分かるか！？これがいかに大変な事態かが！？」

「「あ〜……」」

雪路と薫は思い出したように頷いた。

「そう言えば湊川先生はロリコンだったな、重度の。」

「黙れ、二次プラー！」

「二次！？もはやそれ二次元のプラモだろ。」

姫史は再三首を振り溜め息をこれみよがしに吐いて見せる。

「…甘い……甘いな!!」

貴様らにロリコン等と言われて私が悦ぶでも思っているのか!？」

「思ってたねーし、そんなつもりで言ってたねーよ。」

「どうせ、年下の娘に言われたいとかそんなんでしょ。」

「ハハハハハハ、愚か者共!!」

私は諸君の想像の更の上に上をゆく!年下と言っても基本、16歳まで。それ以外に蔑まされても何ら興味はないのだ!!!」

高らかにそう宣言し、拳を天高くに突き上げた。

「馬鹿だろアイツ……………」

「ここ一応学校だぞ?」

「…………?つーか姫ちゃんの対象って18歳までじゃ無かったっけ?」

雪路は思い出したように姫史に尋ねる。

「建前だ。一応18歳までとか言っておかないと色々マズイからな。私の中では17歳は年増寸前。21歳に至っては更年期だ。」

「いや、もう手遅れだろ………… 思考とか色々。」

「…とまあそんな事はどうでも良い!今問題なのは、高等部に移動という事だ。」

姫史は二人に背を向けるとふるふる震わせ出す。

「でも確かに変よねこの時期に。」

「そうだな。」

「それだ!!!!」

「「?」」

「この時期に移動だぞ!?!?どう考えても罰としか見れないだろう。しかし私には心当たりが全く無い。」
頭を抱える姫史。
すると、薫が口を開く。

「カリキュラムを守らなかったとか?」

「いや、むしろカリキュラムは進み過ぎていたくらいだ。現に私の教えているクラスは学年平均より20点高い。」

「んじゃ、給料使い果たして生徒からお金を借りたのがばれたとか!」
次は雪路だ。

「お前と一緒にするな………そういえば私が貸した5000円はいつ返してくれるんだ?」

「そうなる可他には何があるのかしら……?」

「……まったく、お前は?」

溜め息をつく姫史を横目に雪路と薫は首を傾げる。

「冬季講習があったよな?」

薫は思い出したように言う。

「ああ……あつたが？それがどうかしたのか？」

「お前の講義を受けた女子生徒に聞いたんだが、『とても面白い講義だったけど最初は男子だけしか授業をしなかった』と言っていたんだが……その最初の授業で何で男子だけに講義したんだ？」

「何だ、そんな事か……」

どうせ進度的に見れば十分に余裕のあるカリキュラムだったんでな。最初の授業はおまけとして、講習を受けたの全男子を集めて、幼女（16、17歳まで）について三時間丸々使って特別講習を行ったんだ。」

「……………」

「まあ、そんな事は今回の移動の件には関係ないだろう。それより、今は……………」

「そのせいに決まってるだろうがあ……！！変態がアアアア……！！」

間

「あ、そつだ。雪路、お前担任復帰らしいぞ？」
薫がそつ言つて名簿を手渡した。

「え？つてマジですか、薫さん!？」

「ああ、何でも牧村先生は暫く私用があるからつて。それにあの人学年主任になるそつだから。」

「つて事は……………給料UPじゃん イヤッタアアアア!!!!」

「お前なあ……………」

まあ、いいや。俺は体育だから先にな。」

「ハイハイ」

薫ははしゃいでいる雪路を置いて体育館に向かった。

「何という事だ……………」

姫史は机に着いて頭を抱えている。

「まさかあの講義が原因だったとは……迂闊だった。大局を見失うとは……情けない。」

「普通に考えりゃ分かんでしょう。……まあ良いじゃない。一応昇格（そうなのか？）なんだし。」

「雪路……お前は分かっていない！この状況がどれほど大変かを！」

姫史は立ち上がるとお得意の持論を展開し始める。

「この状況……例えて言うならば先程までエリアがサンクチュアリだったのが突如としてデスマッチ3に変わってしまったようなもの。いつもは天国だった……」

麗しい姫君達と共に、勉強に勤しむ毎日。彼女らの成長を見届ける事こそが私の生き甲斐だ。

それが……それが……

気付いたらこのような年増寸前の集う廃校にシフトチェンジだ！！！！

いつもは12人の可愛い妹基姫君達に囲まれていたはずなのに、翌朝起きて見れば、12体の老婆に囲まれてしまっている状況そのものだ！！！！

私はシスター・プリンセスをやっていたのだ！エルダリー・プリンセスなどやりたくは無いのだアアアアア！！！！」

姫史、魂の叫びが職員室に木霊する。

ジト目を向ける先生も幾らかいるが、熱い視線を向ける先生も多い。話している内容は最低なのに、まったくの謎である。

「……………気、済んだ？」

「済むかアアアアア！！！」

「まあまあ、落ち着きなさい。取り敢えず今は仕事をするしかないでしょう、ホラ。」

雪路は姫史に生徒名簿云々を手渡した。

「……………仕事って、お前。どこでそんな言葉を覚えたんだ？熱でもあるのか？」

「ぶん殴るわよ、アンタ？」

「冗談だ……………しかし、俺は一体何をすれば良い？あまりのショックに内容を聞かずに現実逃避していたものでな。」

「アンタねえ……………？」

まあいいわ。私のクラスの副担任みたいよ。」

「副担任？お前も副担任じゃ無かったのか？」

「色々あったんでしょ？まあ何にしてもこれで給料UPは間違えなしじゃん」

本当に幸せそうに笑う雪路。
それを見た姫史は……………

「もう三十路か……老婆っがは!?!」

思いつき殴られた。

姫史と雪路は廊下を歩いて行く。雪路は給料UPとあって先程とは違って変わってご機嫌。

「ところで、お前のクラスは何学年なんだ？」

「え?一学年だけど?」

「……という事は……」

15と16歳の少女達が集う教室……

「フッフ……クハハハハハハ!!神はまだ私を見放して無かったようだな。」

「……………」

「何をしている雪路!モタモタするな!?!」

姫史は速足で教室に向かって行ってしまった。

「……………共学だぞ?この学園……………」

「あゝあ……面倒だな、学校。」

「お嬢様？教室の目の前なんですから……」

ハヤテとナギは自分達の教室に足を踏み入れる。

ガラガラ……

「あ、ハヤ太君にナギちゃん！オハヨー？」

教室に入るやいなや、二人に声をかけて来たのは元気の良さそうな紫色の髪の少女だった。

「おはようございます。瀬川さん。」

「ナギちゃんも一緒かあ。うんうん ちゃんと来てくれて委員長ちゃんも嬉しいかぎりだよ。」

彼女は……キャラ説明が面倒なので簡単に済ませます。
瀬川泉。白皇学園生徒会の三人娘の一人でいいんちよさんレッド（笑）の称号を持つ。
家柄は大層な金持ち。大手電気会社のご令嬢である。
後は……コミックス六巻参照。

「ヒドイよオ？何か凄く雑じゃない!？」

「「まつただアアアア!!!」」

「「!？」」

泉の後ろからまた違う声が聞こえてきた。

「随分遅い登場で気が付いてみれば、もう30話中盤……」

「散々放置プレーをされたが、それもここまで!」

「三人揃えばもう安心なのだ？」

いきなり二人の女子生徒が泉の横に現れる……

「みんなのリーダー“いいんちよさんレッド”!」

「クールな参謀、“副委員長ブルー”!」

「敵か味方か!?“風紀委員ブラック”!」

三人あわせて……

「「「THE・生徒会役員!!」」」

特撮映画だったら後ろから爆発でも起こりそうなものだが……

「はあ……おはようございます。花菱さん、朝風さん。」

ハヤテは溜め息を吐いて挨拶した。

「「何で私達だとそんなにテンションが低いんだアアアア!!」」

」

更に増えた二人は同じくハヤテ達のクラスメート。

青い髪の子は花菱美希。

生徒会三人娘のリーダー格で副委員長ブルー。内閣総理大臣経験もある政治家の孫で両親も政治家という大金持ちのお嬢様。

黒いショートカットの少女は朝風理沙。神社の娘、つまり巫女。

風紀委員ブラック。三人娘最後の一人。

もう説明面倒臭い……

コミックス五巻参照。

「「省略すんな!!」」

わかりました。要するにハヤテ達のクラスの三バカです。

「「「まとめんな！！！！」」」

何をしに来たのか、三人は好き勝手に騒ぎ始めた。

ガラガラ……

「ハイ、皆席に着きなさい。ホームルーム始めるわよ。」

雪路が教室に入って来た。

その後ろには姫史の姿。

雪路は教壇に上がってゆく。

「あ、桂ちゃんだ。オハヨー！」

「む？雪路。

牧村先生が居ないが……」

生徒達は徐々に席に着いてゆく。

「その事だけど、朗報があります！」

何と……私が担任に復帰しましたアアアアア！」

(……………朗報?)

一同は首を傾げる。

「えっと……朗報ですか？」
取り敢えず代表してハヤテが尋ねる。

「私への朗報に決まってるでしょ！これで給料UPだアアアアア！
！」

（お前のかよ！？）

雪路は一通り叫び終わると、
コホンと咳払いをする。

「牧村先生は私用で今学期は戻らないので私が担任に戻ったという
訳。んで、取り敢えずHRの前に副担任紹介しておくね。」

雪路の隣の姫史が一步前が出る。

「湊川姫史だ。訳あって高等部の移動になったが…
ともあれこれから三ヶ月弱だがよろしく頼む。」

きりつと爽やかに挨拶をする姫史。バックにはキラキラと光が輝い
ているようだ。

（……………／／／）

女子の八割が彼のルックスに胸をときめかせたのは言うまでもない
だろう。

それもつかの間……

「三度の飯より幼女が好きだ。幼女といっても18歳まで、それ以上の年増にはあまり興味が無い。女としてだがな。

好きな事は年下に蔑まされる事だ。その度に生き甲斐を感じるんだ。ハハハハハハ！！それに……」

「いい加減にしろ、バカ姫。」

雪路は名簿帳で姫史を叩いた。

(え〜……………)

一気にドン引きする教室。

一方、残り二割……

「アイツ……………」

「ご存知なんですか？お嬢様？」
隣のナギにハヤテが尋ねる。

「ハヤテ。人生には様々な汚点がつきものだ。それはあれこれ探るべきものじゃ無いだろ？」

「はあ……でも汚点だったら今の引きこもりだって、」

バコツ！

「何か言ったか？」

「すみません……」

また、エスカレーター式に登って来た三人娘……

「へへ、姫ちゃんが副担任になっただ。」

「ふむ、中等部の頃は何かと世話になっただな……」

「そういえば落第の危機も救って貰ったな。ヒナと散々絞られたのがつい昨日の事のように……」

と、各人が思い思いの思考を巡らす。

「それじゃ、今日の予定を話すから静かにしなさい。
これから……」

教壇に立った雪路が今日の予定を話し始めた。

〽三千院家屋敷〽

「…………アラ？」

「……どつかしたの……ん？」

マリアと銀時は玄関に置いてある重箱を見つけた。

「コレは……ナギに渡したお弁当。」

「…………のようだな。」

マリアは重箱を持ち上げると困ったように考える。

「…………と言つ訳でお願いします 銀さん。」

「まあ、そう来ると思ったんだけどね？もう少し説明とかあった方

が良いじゃない？読者のにも。」

「大丈夫です 皆様にご存知ですからそのくらい。」

「……ま、いいか。んで？どこに届ければ良いんだ？」

「学校……白皇学園っていう大きな学校ですわ。地図はコレです。
マリアは銀時に地図を手渡した。」

「……と言ってもかなり大きな学園ですからすぐに見つかると思います
ます……銀さん？」

マリアの話の最中なのに、銀時は地図に視線を落としままだった。

「……学校、か……」

ミーン、ミーン、ミーン……

サラサラサラ……

ミーン、ミーン、ミーン……

日が一層高く、日光が木々から木漏れる。

五月蠅い程の蝉達の合唱をなだめるように、爽やかな風が木々のせせらぎを奏で出す。

穏やかな夏の日……

そんな美しい自然に囲まれたこの場所にはひっそりと寺子屋がただずんでいる。

「……時、銀時！」

「……ん？んん？」

その寺子屋の中で……

眠りこけている白髪の少年が長髪の少年に起こされていた。

「何時まで寝ているつもりだ、お前は？もう先生の授業は終わったぞ？」

「……あ、ああツラか。ふわあ……わわわ。」

「ツラじゃ無い、桂だ。いい加減そのあだ名は止める。」

「分あったよツラ、高杉は？」

「だからツラじゃ無いつ……はあ。高杉は先生と昼御飯の手伝いをしている。俺は銀時を起こしに行けと頼まれたから。」

「……！……んじゃ、俺らも食べに行くか……」

「食べるのは先生を手伝ってからだぞ？」

「ハイハイ……」

二人の少年は少し広い教室から廊下に出て、調理場に向かったのだ。

*

細長い大きなちゃぶ台を挟んで先生を中心に生徒達が座っている。

「……………では、皆さん？食物の神様に感謝を捧げて下さい。」

「……………」

髪の毛の長い穏やかな先生の一言で皆は手を合わせて黙祷する。因みにここで言う食物の神様とは食べ物を作ってくれている人々全ての事である。

「……………では頂きましょう。」

「」「」「頂きます！」「」「」

子供達の声高らかに、“家族”の食事が始まった。

ガヤガヤ……

子供達は皆楽しそうに団欒をしている。先生と思わしき人物はそんな様子を微笑ましいように眺める。

……と、

「銀時！！それは今俺が食べていたのに！！」

「ケチケチすんなよ…減るもんじゃねーし。」

「減ってるだろ！！どう考えても……ああ、高杉！？お前まで！？」

「ふむ。やっぱり先生の料理はおいしいな。」

桂を挟んで銀時と高杉が桂のお昼御飯をつまんでいた。

「貴様ら、いい加減にしろオオオオ！」

「だアアアア！？髪引つ張るな！？」

ギャーギャー……

桂と銀時、高杉が一段と騒ぎ始めた。
そこへ……

「ホラホラ。食事中なのだから暴れない。」

先生が三人を止めに来た。

「だって先生！！コイツらが俺の御飯を……」
桂は自分のお皿を先生に見せつけた。

「ふむ。……銀時、晋介。人の物を勝手に食べてはダメですよ？」

「ごめんなさい、先生。」

「ハ〜イ……」

畏まって謝る高杉と欠伸混じりに返事をする銀時。

「……よし。なら先生のを分けてあげましょう。」

そう言うと、先生は自分のお皿から三人に料理を分けてあげた。

「これで、仲良く食べなさいね？」

先生は三人の頭を丁寧に撫でていく。三人は満面の笑みで答える。

「ハイ！松陽先生！！」

「……………ちゃん？…銀ちゃん？」

「……………!?!」

銀時は急に我に返って周りを見回した。すると、目の前には不安そうなマリア。

「あの……………大丈夫ですか、銀さん？どうかなされたのですか？」

「あ、いや…。何でもねえよ。」

取り敢えず、この地図にある学校に行けばいいんだろ？」

銀時は何でもないように作り笑いをすると地図を広げた。

「え、ええ……………」

学校の入り口に誰かしら先生がいらっしやると思うので、三千院家の使いだと言って貰えれば。」

「……………!!!」

んじゃ、行って来るわ。」

大きく伸びをすると、銀時は重箱を持つ。

「結構アンバランスだな。慎重に運ばねーと……………」

「あ、中身は固定してあるので大丈夫ですよ。」

ただ落したりしないように気をつけて下さいね？」

「ああ。にしても……………随分高そうな重箱だな。」

銀時は重箱を持ち上げ、周りを見ながら言う。

「いえ、そんな事はないですよ。」

「ふーん……」

銀時は重箱を元の位置に……

「ほんの2千万円程ですから。気にしないで下さい。」

「……………」

何というスペック三千院家。
重箱一つで2千万とは……

「ふう……」

銀時がお弁当を届けに屋敷を出て行った後、マリアはホールを掃除していた。

「それにしても、あの時の……」

マリアの頭にはさっきの銀時の様子がしきりに思い出されていた。

「……………」

何故もこんなに気になるのか、彼女は何となく分かっていた。

あの寂しそうな顔が、昔のナギにそっくりだから……

第三十訓

連休明け学校は辛いものがある（後書き）

最近、ひぐらしと銀魂とハヤテのごとくを混ぜた小説を書きたいなあ、なんて思っている今日この頃。

まあそれはそうと、ようやく学園が始まったのでこれからはもっとキャラをどんどん出せると思うので。

次回もよろしくお願いします。

第三十一訓 学生時代は人生の宝物

「落ち着け……落ち着け、俺。」

ゆっくりと何とも不安定な感じで歩みを進めている銀時。

傍らにはお弁当箱基重箱。

何と2千万する品物でそれ故にこんなに慎重になって歩いているのだが……

「え、この先の角を三つ行ったら、その先を右折で到着、ね……」

この弁当はナギ達が忘れていったもので銀時はそれを届けに白皇学園へと向かっている最中なのだ。が、

「あー！！危ない危ない！どんなに高価な重箱でも当たれば一溜まりも無いブルドーザーが暴走して……！！」

「なあ！？」

銀時に向かってブルドーザーが憤然と突進して来た！

何とかかわすも……

「君イ、危ない！手が滑ってどんな重箱も貫く槍が！！！」

「うお！？」

「危ない、銀さん！！坂道で屋台が止まらない！ぶつかったらどんな重箱も粉々に！！！」

「親父イイイイ！！屋台くらいちゃんと見ておけエエエエ！！」

「ああー！？どんな重箱も一瞬で溶ける溶岩がア！？避けて下さい！！」

「ぎゃアアアアア！？」

数分後……

銀時はボロボロの状態で白皇学園の正門の前に立っていた。

「あり得ねえ……たった500m進んだだけで、50年分の不幸が一気に降りかかって来やがった。
この重箱か？コイツのせいなのか!？」

重箱に傷がついていないのが奇跡のよいなもの。
何はともあれ白皇に無事？に到着したので、辺りを見回す。

「誰も居ねえな……」

門の近くには教師と思わしき人影は無い。

(ま、中で会ったら説明すりゃ良いか)

銀時はそう思い直し、門に手をかけようとして…

「不審者アアアア発見!!!!」

「!?!?」

一際大きな声と共に、突如後ろから殺気。

「はアアアアア!!!!」

「っ!?!」

銀時は咄嗟に木刀を抜き、後ろから振り降ろされた攻撃を弾いた。

「……ほお。私の一撃を防ぐとは大した不審者だな……」

銀時の前に立ち塞がり、魔王みたいなセリフを言っただけなのは、他でもない雪路だった。

「いきなり何しやがんだ、テメー!？」

「黙れ、不審者。不審者は不審者らしく斬られて朽ち果てなさい。」

雪路は何故か右手に持っている西洋刀を銀時に向ける。

「待て待て待て!俺は不審者じゃねーよ。三千院家の使い……」

「嘘つけエエエエ!」

スパーン!

柄で殴られた。

「嘘をつくならもう少しマシな嘘をつきなさい!

そんな死んだ魚みたいな目をした奴が三千院家の関係者な訳あるか!冗談はそのパーマだけにしろ。」

「んだとテメー!!!人を見た目だけで判断すんなって小学校の頃習わなかったか!?!かパーマが冗談ってどついう意味じゃアアアアア!!!」

銀時と雪路は正門の前で対峙する。

「私は白皇この教師としてこの門を見張らなくてはならないのよ。だからここを通す訳にはいかないのよ。」

「何で人に教える立場の教師が刀持ってんだよ。廃刀令無視ですか、コノヤロー。」

「黙れ、白髪パーマ!教師には時として教育的知見からこつしたアグレッシブな行動が求められるのよ!」

「何処の国に刀振り回す教師が居るんだよ!?!アグレッシブ過ぎるわ!」

「とにかく、アナタを通したら私の給料が下がるのよ!給料を守るためなら何でもするわ。」

「世も末だな……」

「ククツ…そうね。」

雪路は刀を銀時に向け、銀時も洞爺湖を構える。

「……やっぱり少年誌と言えばバトル。これが一番手っ取り早いわね。」

「まったく…弁当届けに来ただけだったのに。」

……

「「いざ……参る！」」

二人は地を駆けた……

「おオオオオ！！！」

かと思つたら、銀時は雪路に背を向けて全速力で正門に入っていく。

「何イ！？しまった！いつの間にかたち位置が！！！」

慌てて雪路はその後ろ姿に声を上げる。

「ちよつ、待ちなさい！これで私の給料が減つたらどうしてくれるのよー！！」

「アンタお金貸しなさいよ！貸して下さい！ねえ！」

*

「……ったく、何なんだアレは……」

銀時は雪路を何とか振り切り学園の敷地内を歩いていた。

「そつえばナギ達……何処に行けば会えるんだ？」

とにかく広い白皇学園である。

幼少中高とエスカレーター式で繋がっている為、住所が杉並区ほぼ全てだという。

「……やべーな。何処が何処だか分かんねーぞ。」

取り敢えず弁当を持ち直すと宛もなく歩き続ける事にした。

〽白皇学園高等部中庭〽

「何、弁当を忘れた？」

「すみませんお嬢様！すっかりしていて？」

三時間目の休み時間……

テラスにはハヤテとナギと伊澄の姿。

「本当に申し訳ありません。」

「いや、まあそんなに気にするな。購買で買えば……」

ズリズリズリ……

「…………ん？マリアか…」

ナギは携帯を取り出した。

「もしもし…………あぁ、その事なら…………え？銀時が？」

ナギは携帯を右から左に持ち直す。

「…………そうだな。分かった。」

そう言っつてナギは携帯を畳んだ。

「どうかしたんですか？もしかしてお弁当の事でしょうか？」

「あぁ、その弁当を銀時が届けに来ているらしい。」

「まぁ、銀時様が？」

「うむ。ただ、恐らくこの広い白皇だ。簡単に私達の所に来れるとも思えない。」

「確かに。異様に広いですからね。白皇は。」

ナギはテーブルを立つと時計に目をやる。

「取り敢えずヒナギクにでも協力を頼もう。次の授業はあのバカだつたな…」

「えつとあと15分くらいはありますね。」

「始まるまでにヒナギクを見つけないとな……」

「わかりました。では職員室に行きましょう。」

三人は急ぎ足で職員室に向かって行った。

一方、銀時は歩き続ける内に、中庭のような場所に出ていた。

人気は全く無く、美しい噴水に彩られた中庭に太陽の光が差し込み、何とも幻想的な雰囲気醸し出している。

「……………」

銀時はそれに導かれるように足を進める。

「随分と綺麗な場所だな……………」

思わず声を漏らすと…

「そう、この中庭は学園でも知っている人は少ない『秘境』と呼ばれる場所なのよ。」

上から聞こえてきた声の方向に目を向ける。

一際大きな木の上に、その幻想的な雰囲気似つかわしい、美しい少女が微笑んでいた。

「……………何やってのお前？」

「……………木に登ってるのよ／＼／」

と言つか、ヒナギクだった。

*

「…………つまり、小鳥の雛を巣に戻したは良いが、降りられなくなっ
た、と？」

「簡単に言つとそついう事よ／＼／」

「…………お前つて以外と後先考え無いのな。」

「貴方に言われたくないんだけど…………？」

二人は何とも奇妙な形で会話をしている。
銀時は溜め息を吐くと、

「とにかく、さっさと降りてこい。」

「だから降りられないって……」

「飛び降りろ。受け止めてやるから。」

「いいの？」

ヒナギクは若干涙目になっている。

「んな状態で放っておけるかって……」

「本当に大丈夫？」

「大丈夫だ。早く降りてこい。」

「分かったわ……」

ヒナギクはギョツと目を閉じると、

「ーッ！」

身体を横に寝かせるように飛び降りた。

トサッ……

そのままヒナギクは綺麗に銀時の腕に収まった。

*

「ありがとう……助かったわ／＼」

「っーかそんだけ高い所ダメで、よく登れたな。」

「仕方ないじゃない。親とはぐれている雛を放っておくなんてできないわ。親と子は、いつも一緒に居ないとダメなんだから……」

そう言って少し寂しそうに目を伏る。

「……ともあれ、次から木登りには気をつけるよ？毎回下に銀さんがいる訳でもないからな。」

「フフッ……」

「そうね……考えておくわ。」

ヒナギクは少し元気が出たように微笑んだ。

「……ところで銀時？そのお弁当……もしかして、」

「ああ、そうだった。ハヤテ達に届けに来たんだが、場所が分から

ねえんだ。」

「なるほどね。それなら、助けて貰ったお礼もあるし案内するわ。」

「そいつは助かつ……」

ピンポンパンポン……

『あー、あー……マイクテス、マイクテス。』

間抜けなチャイムに続けて学園全体に放送が響き渡る。

「この声……お姉ちゃん？」

ヒナギクは驚いたように耳を傾ける。

『只今、学園内に白髪の天然パーマの不審者が侵入したわ！

大変由々しき事態、私の給料……じゃ無かった。学園の平和が脅かされている！生徒諸君！皆で一丸となって不審者を捕まえなさい！確保に成功した生徒には……ヒナと一日デートをする事を許可しま

す！
』

「な！？」

「お姉ちゃん！？」

ウオオオオオオオオオオ！！！！！！

キヤアアアアアアアア！！！！！！

銀時とヒナギクが驚く間もなく、各校舎からは地鳴りのような歓声が響いた。
男女問わず……

「オイイイ！？どうすんだ、コレ！！っーか姉ちゃんなの、あの教師！？」

「そうよ……恥ずかしながらね……」

ヒナギクは頭を抱える。

「とにかく隠れるしかないわね。皆が出てこない内に、急ぎましょ

う！」

「ややこしい事になってきたぞ……」

二人は取り敢えず身を隠すのに都合の良い場所を探す事にした。

……と、その時

「ん？銀時ではないか。何をしているんじゃない？こんな所で。」

「お前………真司!？」

ばったり真司に会ったりしていたのだった。

第三十一訓 学生時代は人生の宝物（後書き）

すみません。また分割する事になってしまいました。

これからは出来るだけ一話で完結できるように努力します！

最近、これから銀時を白皇学園とどう絡ませようか悩んでいます……

あくまで参考にしかならないと思いますが、もし何かアイデアがあったら感想に書いて頂けると嬉しいです。

最終的には自分で考えなくてはならないんですが……

よろしくお願いします。

第三十二訓　ギャップってかなり大切（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「突然ですが、皆さん！ギャップ……これをどう思いますか？」

ハヤテ

「ギャップですか……普段とは違った想像出来ないようなものを見た時に見える隔たりだったり、まったく違う二つが合わさったときに感じる差ですね。」

クラウド

「そう。今回のテーマはズバリ、ギャップ！」

ハヤテ

「なるほど。ギャップの特に強い方々が中心となるんですか？」

クラウド

「それもあるが、キャラクターに関してのギャップならば前回の話！今回は小説構成そのものにギャップがあるのだ！」

ハヤテ

「そのものに、ですか！？」

クラウド

「そう。例えばシャーン　グのように展開がいきなり早くなったり、る　う　心みたいにシリアスな戦闘シーンへの突入がかなり突然だったりと、そのようなギャップを作者も今回少し取り入れてみた感じですね。」

ハヤテ

「次からはもっと嚴重に伏せ字をして下さいクラウドさん。ともあれ、作者も何かしらの工夫を考え始めた、という事なら良いことですね!」

ナギ

「……というか、そんな工夫でもしないと読者につまらないと思われるからだろ。そもそもそんな工夫しても作者自体があんなのだから面白い訳がない……」

ハヤテ・クラウド

「ですよね……」

……… 始まりの掛け声くらい誰かかけて下さいよ!?

第三十二訓　ギャップってかなり大切

～高等部一年A組～

「職員室の先生方も知らないようでしたね。」

「次はLHRだから、それが終わったらで良いだろう。30分くらいだし。」

そう話しているのはハヤテとナギ。

ヒナギクを探すため、職員室に寄ったが誰も知らなかったので取り敢えず次の休み時間（放課後）を待つのがだった。因みに伊澄は違うクラス。

ガラガラ……

「オーイ、静かにしろ～。さもないと女子以外の成績1にするぞ。」

教室に入ってきたのは雪路では無く姫史だった。

「アレ？桂先生じゃないですね。何かあったのでしょうか？」

「さあ？ 大方また飲み潰れているんじゃないか？」
ナギとハヤテがひそひそと話している。

「雪路は私用だそうだ。という事でLHRは私が受け持つ。まあ、
する事はほとんど無いが……」

ピンポンパンポン……

『あゝ、あゝ……マイクテス、マイクテス。』

突如学園内全域にゲリラ放送が入った。

「あ、この声は桂ちゃんだ。」

「今度は何をやるうっていうんだ？」

三人娘も耳を傾ける。

『只今、学園内に白髪の天然パーマの不審者が侵入したわ！大変由々しき事態、私の給料が……じゃ無かった。学園の平和が脅かされているの！生徒諸君、今こそ一丸となって不審者を捕まえなさい！確保に成功した生徒には……ヒナと一日デートを許可します！』

一同

「何イイイイイイイイイイ！？」

教室中に歓喜の叫びが響き渡る。

【一般男子諸君】

「会長とデートだとおおお！？」
「捕まえるぞ！！何としても確保するんだアアアア！！！！」

【一般女性淑女】

「キヤアアアア！！！！ヒナギク様とデートですって！絶対捕まえるわよ！！」

【会長親衛隊（あつたっけ？）】

総隊長

「整列！一番隊から十番隊まで、点呼！」

隊一同

「ハッ！」

総隊長

「只今より、白髪の天然パーマの不審者確保作戦を実行する。確実に任務を遂行出来るように各々ベストを尽くせ！」

隊一同

「イエッサー！！！」

ダダダダダダダダー！！！！

そんなわけで一年A組の教室内には………というより校舎内にはほとんど人気が無くなってしまった。

「………凄いですね、皆さん。」

「とっつが絶対怒られるだろ……」

第三十二訓 ギャップってかなり大切

教室内にはハヤテとナギがポツンと座っている。

「やれやれ。これではLHRは出来ないな……」

「……何だ。お前行かんのか、変態なのに。」

「あ、湊川先生。」

二人に近づいて来たのは姫史だった。

「確かにその条件も魅力的だが、私としてはこうして姫と話しているの方が良いからな。」

「止めるその呼び方……」

ナギは溜め息を吐く。

その隣でハヤテが尋ねる。

「そういえば湊川先生はお嬢様とお知り合いなんですか？」

「……ああ。切っても切れない運命的な糸で繋がっていると
も過言ではないな。」

「妙な言い掛かりは止める。腐れ縁だよ……」

「本当に、姫は日に日に見目麗しく成長なさって……もう目に入れ
ても痛くない程に……」

「そうか……そのまま朽ち果ててくれ。一生の頼みだ。」

「フハハハハ！もっと蔑んでくれ！それが私の糧となる。」

「はあ……」

高らかに笑う姫史に頭を抱えるナギ。

「相変わらずだね、姫ちゃん？」

「ん？」

「瀬川さん……」

三人に今度は泉が近づいて来た。

「瀬川……後の二人はどうした？」

「美希ちゃんはヒナちゃんの話聞いて飛んでっちゃったよ。」

「また置いてけぼりか……相変わらずはお前もだな。」

「放っておいてよ／＼もー！！！」

泉は手をバタバタさせて姫史を叩く。

「先生は瀬川さん達ともお知り合いなんですね。」

「中等部の時に担任だったんだが、本当に三人には手を焼いた。進級の危機を何度救ってやった事か……」

「テへ」

「ハハハ……？それは何となく想像出来ますね……」

「どつという意味かな？ハヤ太君？」

まあ、教室では呑気にそんなやり取りがされていた。

一方、校舎外……

「探せエ！必ずこの敷地内に潜んでいる筈だ！」

「命に代えても探し出せ！！！」

学園の生徒（中高等分）の八割が総動員で探索にあたった。

(……オイ、どうすんだ。この調子だと見つかるのも時間の問題だぞ。)

(でも、この人の数だと下手にここから動けないわ。)

(……というか、何で我まで巻き込まれているんじゃない?)

銀時、ヒナギク、真司の三人は草むらの影に身を隠していた。

あの放送の直後、真司に偶然にも遭遇したのは良いが、間もなく生徒が銀時確保のため押し寄せてきて近くの草むらに隠れなければならなかったのだ。

(真司、テメーお得意の式術でどうにか出来ねーか?)

(それは出来ない事も無いが、取り敢えず状況がまったく理解出来ん。何故会長まで居るのだ?)

(斯々然々よ、澳門君。それに貴方も聞いたと思うけど、お姉ちゃんが放送を使って変な事を言うから……)

(なるほど。道理で皆が血走っている訳か。)

真司は納得したように頷いた。

(空飛べるようになる術とか姿消す術とか何でも良い。取り敢えずこの場を凌がねえと。)

(姿を消す術なら無い事もないが……)

(マジでか！？だったら……)

しかし真司は首を横に振る。

(銀時の目的地の高等部校舎は最低でもここから15分はかかる。この術は使えて5分。途中で見つかるのがオチじゃ。)

(……… だったら、生徒会室に向かいましょう。)

(………?)

ヒナギクは手を打って説明を続ける。

(時計台ならここから3分で行けるわ。それに生徒会室なら関係者以外立ち入り禁止、上手く隠れられるでしょう。幸い今日は午前授業だから、放課後になったら生徒会室に来て貰うようナギ達にメールすれば一件落着。)

(確かに、それは良い考えじゃな。)

真司は頷くと札を取り出す。

(我が術を唱えると、周りに円陣ができる。その陣内に居る間は姿が消えて見える。間違っつて外に出ないように気をつけるのじゃ。)

真司は簡単に詠唱を済ませ、札を落とした。

すると、真司の周りに直ぐ様円陣が広がる。

（あまり時間も無い。急いで行くぞ？）

銀時とヒナギクは円陣の中に入り、真司と歩幅をあわせて時計台に向かって進んでいった。

白皇学園の生徒会は天空にある。

学園内何処でも目にする事が出来る時計塔……その最上階に位置するのが生徒会室である。

凡そ天まで届きそうな時計塔の最上階、
そこはまるで天空世界。

日差しが差し込む生徒会室は来た者に一時の安らぎを与えるであ
う。

「……………ふう。」

そんな生徒会室に、静かに読書をする女子生徒が一人。

紅茶をたしなみながら、文学に入り込んでいる様子は、とても絵に
なっている……………

（噂以上に面白かった。ライトノベルも良いが、こういう正統な小
説も良いな。）

ボタンと閉じたその本には『うの城』と書かれていた。

（特に戦の描写や心情が素晴らしかった。彼等の想いがひしひしと
伝わってきた。）

そうして女子生徒はまたゆっくりと紅茶を口に運ぶ。

彼女は春風千桜

はるかぜちはる

この白皇学園生徒会の書記であり、現在高等部一年生。
メガネの似合うクールな女の子である。

「しかし……良い天気だな。」

千桜はぐっと伸びをすると、平和な今日を微笑ましく思った。

しかし……平和とは恐ろしいものでもある。

ガチャ……

「ようやく着いたわね……アラ、ハル子？」

ドアが開くと、ヒナギクが入ってきた。

「ああ、ヒナ。何処に行つて……」

なぜならば、平和とは……

「あゝ……酷え目にあつた。」

「まあ無事に到着したんじゃない。良しとしよじぞ。」

簡単に崩れるからである……

〈高等部一年A組〉

「そういえば、さっきの放送の不審者。アレ三千院の新しく雇った人なのではないか？」

「あ、ハイ。多分そうですね。」

「とうか知っていたのか。」

姫史の言葉に頷く二人。

「まあ、そんな話がちらほら耳に入ってきてな。」

「へー、三千院に新しく人が来たんだ。どんな人？」

瀬川も興味津々といった様子で尋ねる。

「「うーん……」」

暫く考え込むように首を傾げ、

雲みたいいな奴（人）だな（ですね）

↳生徒会室↳

千桜は驚きを隠せなかった。

先程までの優雅なティータイムは一変した。

「あゝ……酷え目にあつた。」
ヒナギクが入ってきたのに続いて生徒会室に入ってきたのは、真司
と他でもない銀時であった。

(な!?!何故彼がここに!?!)

そう。千桜は銀時と面識があるのだ。

しかもつい最近。意外な場所で……

「……………ん?」

(——!?!?)

銀時は千桜の方に顔を向ける。

「アレ……?お前……………」

(しまった…バレたか!?!?)

いや落ち着け……………いくら何でも気づく筈が無い。(

千桜は完璧に冷静を装いつつ銀時を見つめる。

「この間…咲夜の所に居…っんぐ!?!?」

「!?!?!」

千桜は物凄いスピードで銀時の口を塞ぐ。

「会長!少し失礼します!」

「な！？ちょ、お前！？」

「あ、ちょっと！？ハル子？」

ヒナギクが止める間もなく、千桜は銀時を引きずって生徒会室を出ていった。

「春風の奴、随分慌てていたようだの。」

「知り合いみたいだったけど……」

因みに真司と千桜とヒナギクは同じクラスだったりする。

「「うーん……」」

二人は首を傾げていた。

*

「ちょ、ちょっと待て！？」

銀時はズルズルと千桜に引きずられて生徒会室から離れたフロアに連れてこられた。

「オイオイ……一体何だっというんだよ？」

「……取り敢えず聞きますが、私の事が分かるんですね？」
銀時と千桜は向かいあう形になる。

「えっと……ああ。咲夜の所に居たメイドだろ？」

「……やっぱり。」

千桜はしまったと言うように頭を抱えた。

「………？」

「………完結に言つと、私がやっているソレを知られるとマズイんです。」

「ああ、バイト禁止とかか？校則ってやつ？」

「いえ、禁止ではないのですが、その………普段の姿と違い過ぎるから………恥ずかしいというかノノノ」

「………普段？」

「私の名前は春風千桜。白皇学園の生徒会書記をやっていますが、この通り学園では真面目な感じで通っているのに、……ソチラの方に

なると、その…／＼／

「……………」

千桜はコホンと咳払いをして間を戻した。

「…とにかく？銀さ…銀時にはこの事は黙っていて欲しいのですが。」

「まあ、分かったけど……………つーか何で呼び捨て？」

「うーん……………何となくさん付けじゃなくていい気がする。」

「オイ、何で頭見て言ってるんだ？まさかこの頭だからじゃないだろうな？」

「……………戻りましょうか。」

「オiiiiii!!!」

〈高等部一年A組〉

「で、結局どうします？お嬢様？」

「うーん……外寒いからなあ。もう少し教室に居る……」

ナギとハヤテ、姫史はまだ教室に残っている。（本来はまだ授業中）
泉は少し前に美希達を追いかけていった。

ガラッ！

いきなり勢いよくドアが開かれる。

「こんな所に居た！何やってんのよ、アンタ！」

「……？」

入ってきたのは雪路だった。

「どうしたんですか？桂先生？」「騒々しいぞ、雪路。」

「決まってるでしょ！アンタも一緒に不審者を探すのよ！」

「……………」

姫史はあからさまに嫌そうな表情をする。

「何で私が……迷子の幼女探しなら構わないが……」

「拒否したらアンタの担当三年に上げるわよ！」

「んな権限がお前にあるか！大体京ノ介はどうした！？アイツに頼めば……」

「そんな事とつくにやってるわよ！とにかく人出が足りないの。どんな馬鹿でも必要なのよ。」

「お前は頼む気があるのか??」

「シャーラップ。とにかく行くわよ!!」

姫史は首を掴まれると、無理矢理教室を引きずり出されていった。

「……………取り敢えず伊澄の所にも行こうか。」

「そうですね?」

二人以外誰も居なくなったクラスを見渡すと、二人も教室を後にした。

生徒会室

「へえ。二人は知り合いだったのね。」

「随分と意外だのう。」

生徒会室に戻った二人。千桜がアレコレと適当な嘘をついて二人は偶々の知り合いという事で、何とか誤魔化した。

「……それより、会長達は何故こんな所に？」

「ん？春風は先程の放送を聞いておらんかったのか？」

「放送……？ああ、この部屋には放送が入らないようにしていたから。」

千桜は部屋の放送電源を指差した。

「何かあったんですか？」

「ええ、実はね……」

ヒナギクはここまでの馬鹿らしい経緯を簡単に伝えた。

「……なるほど。だから下が騒がしかった訳か…」

「本当にな……」

四人は取り敢えず大テーブルに座った。

「……もう少しで授業も終わるから、そうしたらナギ達にメールをしてここに取りに来て貰いましょう。」

「しかし、ほぼ全校生徒が外に出ているから、授業自体が成り立っていないのでは？」

「……確かにの。」

「……はあ。お姉ちゃん……」

ヒナギクは溜め息を吐くと、食器棚に歩いていく。

「紅茶淹れるね。皆飲むかしら？」

「悪いな。それじゃ戴くわ。」

「ああ、我も戴こうかの。。。」

「あ、ヒナ。私も手伝おう。」

そんな訳で、一日ティータイムという事で。

*

“ 天空世界 ” でのティータイムはその景色にそぐう幻想空間を創り出す。

まして、紅茶が美味しければ尚の事である。

「うむ……とても美味しい。二人とも淹れるのが上手だな。」

「そう、ありがとう。」

「それは良いんですが……
銀時？何をしているんですか？」

千桜は隣に座っている銀時に目を向ける。

「ん？何が？」

「いや、何がって……」

「「「」」」

千桜の行動に、他の二人も銀時の行動に引いている。

銀時は紅茶にガムシロップを入れていた。

しかし、問題なのはその量だ…

銀時の紅茶の周りにはガムシロップの空が10コはあるのだ。

「……………銀時？何じゃそれは？」

「何って……………紅茶だろ？」

……………

「って、違うでしょ！？アナタどれだけシロップ入れてるのよ！」

「見てるだけで胸焼けがしてきそうじゃ……………」

真司は思わず顔を青くして胸を擦った。

「これはアレ…俺甘党だから。」

「甘党ってレベルじゃ無いでしょう。どんな食生活しているんですか……………」

銀時は周りの目も気にせず紅茶を口に運ぶ。

「ん〜…美味しい。やっぱり疲れた時は甘いものだな。」

そんな銀時を見て…

「まったく…お前という奴は本当におかしな奴だの。」

そう言つて真司は紅茶に醤油を注ぎ入れ…

「「おかしいのはお前だアアアア！」」

銀時と干桜のダブルツツコミが決まった。

「澳門君？それはどういう意味かしら？

私の紅茶なんて飲めるか、って事？」

「待て待て待て！？アレじゃ、少し味を足そうと…」

「だからって何で醤油よ！？銀時も十分おかしいけど、まだシロツブだから分かるわ。でも醤油って…」

「分かつたらんな。醤油は万能調味料。万物全てに合うように出来ているのじゃ。」

そう言つと、真司は羽織を広げると、醤油、醤油、醤油…
色々な形の容器やビンに入った醤油が出てきた。

「これはお弁当用…こっちは飲料用…こっちは…」

次々と各醤油について説明してゆく真司。

そう、真司はシヨウラーだったのだ。

「いや、シヨウラーって何だよ！？何その言葉の誕生のさせ方！帝

「王切開!？」

千桜はその様子にこめかみを押さえた。

「一日にこれだけ味覚がおかしい人に会う確率は奇跡に近いな……」

「オイ、それ俺も入ってるの?」

「入ってない訳無いでしょう。銀時も十分異常です。」

「お前甘いものは世界を救うんだよ?きつといつか何処かの遠い星の物語……」

「何で童話になっているんですか……ん?」

千桜はふいに転がってきた醤油のビンを拾う。

「澳門印……って、これまさか……」

「ん?ああ、そうじゃ。この醤油は澳門家が販売している澳門印の醤油。これがかなり売れているんじゃない。」

「私も使ってるわよ……澳門君。」

呆れた様子の子のヒナギクに嬉しそうに真司。

「代々続く式術家が何やってんだよ!？」

「馬鹿もの……近年は妖魔も減少する一方じゃ。妖魔退治だけでは

限界があるからの。」

「知りたく無かったよ、そんな裏事情!!」

そんな銀時と真司を見ながらヒナギクは頭を押さえた。

「はぁ…なんか頭痛くなってきた。」

四人はもう一度テーブルに座り直す。

銀時と真司は各々のカップを口に運ぶと一言。

「「……………美味い。」」

(ダメだ、こいつら……………早く何とかしないと……………)

*

「……………ふう、ご馳走になったの。そろそろ時間になるのじゃないか?」

真司は大きく伸びをして、カップをテーブルに置いた。

「そうね。もうすぐお昼だし、時間帯もちょうど良………」

バン！

「不審者はここかアアアアア！！！！」

「ー！？」

生徒会室の扉が勢いよく開かれた。

「て、テメーは！？」

「お姉ちゃん！？」

扉からは刀を持った雪路とその後ろから姫史が現れた。

「桂先生に……湊川先生も居るな。」

「この学園は暇だのう。」

雪路はビシッと銀時に指を差す。

「やっぱりここに居たわね！不審者！」

「お姉ちゃん！この人は不審者なんかじゃな………」

「黙らっしやい！こんな天パーで見るからに怪しい奴が三千院家に居る訳あつても私は認めないわ！」

「髪型で人を判断すんじゃないわー！！！」

「とにかく大人しく捕まりなさい！姫史。」

雪路が左に退くと、溜め息混じり、竹刀を手に姫史が出てきた。

「済まん。事故に遭つたと思つて諦めてくれ。」

かく言う姫史も半ば脅されている身であるため、渋々ながら竹刀を構える。

「ーったく、厄日だな。今日は特に……」

銀時も木刀を抜いて、姫史と対峙し、その様子を他の四人も固唾をのんで見守る。

緊張感が沈黙となつて室内を支配している……………

二人の視線が僅かに合った瞬間……

「ー！！！！！！」

先に姫史が駆けた！

「はアアアアア！！」

「ッ！？」

姫史から繰り出されるは目にも止まらぬ斬撃。

竹刀という事もあり、木刀よりも素早く銀時を襲う。

(…………コイツ、なんつー速さだ！？反撃が…………出来ねえ……)

姫史の竹刀はまるで生き物のように鋭く、しかしその剣筋は見惚れるほど美しかった。

「湊川先生…………流石ですね。」

「あの人は基本何でも出来るけど、特に剣にかけては天才だからね。一応ウチの顧問だし。」

ヒナギクは姫史を見つめて言った。

「当然。アイツが闘いで負ける訳ないでしょ。」

「……まあ、確かに湊川先生はとてつもなく強いが……
銀時は我々の想像を遥かに超えるぞ。」

「「「………?」「」」

不敵に笑う真司に三人は首を傾げた。

「「はあ!!!」」

が…
姫史の攻撃は更に速度を増し、槍の連撃のように銀時に襲いかかる、

「オオオオ!!」

「何!?!」

負けじと銀時は木刀を横に尻ぎ払った。

姫史は風圧で吹き飛ばされ、銀時と距離が出来る。

「テメー、何者だ?」

「……それは私の台詞でもあるな。私は湊川姫史。白皇の教師をやっている。」

「坂田銀時だ。成り行きで三千院家の護衛をしてる。」

姫史はフツと微笑すると、上段に構える。

「正直、まったくもって面倒だったが……お前に少し興味が沸いた。」

「男に興味なんぞもたれても嬉しかねーよ。」

「フフツ……」

ダッー!!

再び二つの剣がぶつかり合う！

攻勢は圧倒的に姫史が有利。銀時は防戦一方……と思いきや、

(いや！？この男、さっきより速度が……)

「おおおおお！！！」

「くっ！？」

竹刀を凌ぐ速さで、銀時の木刀は振るわれる。

(しかも……太刀筋が……軌道が読めない！？)

銀時は姫史の一撃をかわすと、瞬時に背後に回り込む！

「チツ！？背後に！？」

そのまま木刀を横に倒し、構えをとる。

(甘い！モーションが大きすぎる！これなら防御も……)

銀時は木刀を横に一閃……

「甘いな！それでは私に……、！？」

ゴオオオオオオオ！！！！

一閃だと思われた一撃は一気に突きへと変わる！

「ぐツ！？」

「はあああー！」

姫史の防御はかろうじて追い付くも、その圧倒的な威力に弾き飛ばされた……！

「驚いた……流石は銀時、といったところから。」

「凄い……まさか湊川先生が……」
「嘘ー！？姫ちゃんか負けたよ……」

「やはり奴は予想の上をいくの。」
驚く三人を横目に愉快そうに笑う真司。

「ハイ、終了……」

銀時は姫史の元まで歩いていくと、その手を取って起す。

「……面白い男だな、お前。」

雪路、悪いな。私の完敗だ。この男の言っている事は嘘ではないだろつ。」

（ ）（ ）（ ）まさか！？湊川先生が男に興味を持つなんて！？（ ）（ ）

実はそっちの驚きの方が大きかったりする。

「確かに。アンタが負けたんだし、本当のようね。」

「ま、そうだった。俺は取り敢えずこの…」

「しかし！問題はそこでは終わらないのよ！」

銀時の言葉を遮り雪路は話し続ける。

「ぶつちやけ不審者云々はもうどうでもいいけど、この騒ぎを上手く収めないと、私の給料が！！」

スパーン！

正宗が雪路の頭を直撃する。

「お姉ちゃん……？さっきの放送といい……」

「えっと、ヒナ……？」

ヒナギクの周りにはダー サイドが広がってゆく…

「いやいや？ 落ち着いてヒナギクさん!？」

「どれだけ迷惑かければ気が済むのよ、バカー!?!?!」

「イヤアアアア!?!?!」

「毎回思うが…あれで姉妹とは思えないの。」

「「まったくですね(だな)」」

当然のごとく雪路はこっぴどく叱られたのだった……

*

「……………という訳で、度重なる困難を退けて何とか死守した弁当だ。有り難く戴けよ?」

「どんだけ不幸に苛まれているんだ、お前。」

「でもお弁当も無事のようですし、良かったですね。ありがとうございます。ございました、銀さん。」

ハヤテとナギは生徒会のテーブルに座っている。目の前には綺麗に彩られたお弁当の前身。

「いやいや、流石マリアさんだね。それじゃ戴きましようか、ナギちゃん?」

ガシツ

「お姉ちゃん……?何で人のお弁当にあやかろうとしてるのかしら?」

「あ、痛い…ゴメンなさい、ヒナ…分かったから…」

ぐっと雪路に詰め寄るヒナギク。

「大丈夫ですよ。僕達だけじゃこんなに食べきれませんから…ね、お嬢様?」

「そつだな。」

「ありがとう！綾崎くん！ナギちゃん！」

「お姉ちゃん！！」

直ぐに弁当に飛びつく雪路に呆れた様子のヒナギク。

「ヒナギクさん、千桜さん、真司さんもよろしかったらどうぞ？」

「助かる。ちょうど腹が減っていた。有り難く戴こうかの。」

「ゴメンね？ハヤテ君。……じゃあ、少し戴こうかな？」

雪路とヒナギクがテーブルに着いた。

「……いいのか？」

「まあ、遠慮するな。実際食べきれないからな。」

「それじゃ、お言葉に甘えて。」

そう言ってナギの隣に千桜が座った。

「銀さん、湊川先生もいかがですか？沢山ありますし、どれでも好きなものを……」

「モロモロ……」

銀時は既に食事の最中だった…

「ハハハ……？」

「ありがとう綾崎くん。では、私はナギ嬢を戴こうかな…？」

「黙れ変態。そのまま帰れ。そのまま野垂れ死ね。そして宇宙の塵となってくれ。」

「……………午後も頑張ろう。」

(うわぁ……………)

胸に手を当てて感動している姫史に一同ドン引きしていた。

因みに……………

「何処だア！？不審者は！」

「フツ、我々生徒会役員の目を欺き隠れるとは……………」

「見つからないね」

三人娘は未だに探していた…

「あ！美希ちゃん、あそこに怪しい洞窟があるよ！」

「ム！確かに、見るからに怪しいな……………」

怪しいというより禍々しい洞窟が三人の前に立ちはだかっている。

「突撃だ！」

「我々の前に敵は無い！」

「なのだ」

三人は洞窟に入って行った！！！！

……………その後、彼女らの行方を知るものは誰もいなかった。

「「「勝手に殺すなアアアアア！……」」」

そんな三人娘が才子という事で……

第三十二訓 ギャップってかなり大切(後書き)

教えてー！銀八先生

銀八

「今日は作者が答えるのを忘れていたり、うっかり先伸ばしにした質問をまとめて答えたいと思います。

最初の質問。『銀時ならダー ベーダーに勝てますか？』
って何書いてんだアアアアア！！

これアレお前、前回と同じ流れになっちまうだろうが！答えません！銀さんは絶対に答えません！」

新八

「いや……大丈夫ですよ。実は作者はスター オーズの事がまったく分からないんです。だから答えられないですよ。」

作者

「そついう訳なんです。本当にすみません。」

銀八

「そいつは助かった……んじゃ、続いての質問。『神楽とハヤテが腕相撲したらどっかが勝つ？』」

神楽

「よっしゃ！かかって来るネ、ハヤテ！」

ハヤテ

「いやいや？そんな出来ませんよ？」

神楽

「ならコツチから行くアル！

喰らえエエエエ、アストラル・デストロイヤーアアアア！！！」

ハヤテ

「それは腕相撲って言わないですよ、ちよつとオオオオ！？神楽さんんんん！？」

ドオオオオオオオ！！！！

新八

「ちよつとオオオオ！？神楽ちゃん！何やってんのオオオオ！？」

銀八

「神楽^{バカ}にはスポーツは無理だな。ハイ、次の質問。

『銀時とハヤテが戦ったかどっちが勝つ？』」

新八

「ありましたね、そんな質問。」

銀八

「答えは簡単。ハヤテが勝ちます。」

ヒナギク

「どうしてですか？」

銀八

「……面倒だから。んじゃ次の質問……」

新八

「結局答えになってねえだろうがアアアアア！！！」

銀八

「えっと……タマと定春は喧嘩するの？」

ハイ、ズバリ答えます。今は凄い仲良しです。なんかタマは勝手に舎弟と思い込んでいますが、喧嘩は定春の方が強いです。近々二匹の話やります。」

ナギ・マリア

(そうなんだ……)

銀八

「………つー訳で今日はここまでだ。」

一同

「次回もよろしく願います。」

桂

「ハイ、来週の銀魂のごとくは？」

ゴキブリって1匹いたら30匹いるって言われるけど…それって恐ろしいですよ？

そんなゴキブリにも色々種類があります。チャバネ、ヤマトゴキブリ、クロゴキブリ、ワモンゴキブリ、オオゴキブリ等々……

どれも小さいものですが…

でももし、自分の想像を超えるゴキブリがいたらどうします？

次回

第三十三訓 『僕らはゴキブリと共にある』

桂

「次回もまた見て下さいね？ハイ、じゃ〜んけ〜ん……」

銀時

「させるかアアアア！！」

桂

「ぶっ!？」

銀時

「テメーは何国民的アニメにあやかろうとしてんだ！限界があるわ、ボケ。」

「たたく……んじゃ、本当に終わるぜ？」

ヒナギク

「次回もよろしくお願いします。」

第三十三訓 僕らはゴキブリと共にある（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「え、予告で皆さんもお分かりかと思いますがゴキブリの話の
パロです。無理矢理ですが……そこは目をつむっていただければ幸
いです。」

ハヤテ

「では、始めます！」

第三十三訓 僕らはゴキブリと共にある

ゴキブリ……

ひとえにゴキブリと言っても、その種類は様々である。

よく一般的に見られるのがチャバネゴキブリ。他のゴキブリに比べて大きさが小さい。

次いで、クロゴキブリ。これも関東以南で比較的よく目にするゴキブリだ。体長はチャバネより少し大きい。

大体同じ大きさにヤマトゴキブリがいる。

更に大きさが増すのはワモンゴキブリだ。体長は50程で、雄は一般民家に住まうという。その上非常に攻撃的だそうだ。

オオゴキブリともなると体長は80にも至り、サツマゴキブリは3という体長を誇る。

どちらも見た目はゴツクカブトムシのような格好をしている。

因みにサツマゴキブリは漢方の材料の一つとして重宝されているそうである。

……では、日本最大のゴキブリとは？

その名も、ヤエヤママダラゴキブリ。

名前からして禍々しいこのゴキブリ。

黒い頭に茶色身体。一発でゴキブリと分かる典型的な種類である。

体長は5〜6にも至り、間違えなく日本最大級だ。

とは言え、どれだけ大きいといっても所詮手のひらに乗る程度の大きさ。

しかし、もし想像を絶する大きさのゴキブリが出たならば……

一体どうしますか？

そう……例えば貴方の身長以上の大きさとか……

第三十三訓

僕らはゴキブリと共にある

1月も後半……

締め付けるような寒さが増す一方、気温とは裏腹に空には雲一つない日本晴れ。

「
」

鼻歌混じりに庭を掃除するのはハヤテである。

「この寒さなのに、寒いね……」

「本当だな。やっぱりアレか？借金執事にはこんな寒さの内に入らないのか？」

「……………」

ハヤテの横には新八と…………タマが座っている。

「タマ…………お前普通に人前で喋るなよ。」

「別に良いじゃねえか…………新八と白髪頭にはもう知られているしな。^{コイツ}安心しろ。お嬢や神楽達の前ではただのネコさ。」

「トラだろ…………お前。」

呆れ顔のハヤテを軽くあしらうタマ。

「つかトラというより、最早普通のオッサンだね。寅さんだよ……………」

「黙れ、童貞（新八）。」

ガシッ！

「お前エエエエエ！！今何だった！！何と書いて新八と呼んだアアアアア！？」

「し、新八君？落ち着いて……………」

「30まで童貞を貫いた男はなア　ゴツドハンドと呼ばれ加藤の鷹
という存在に転生できるんだぞオオオオオオオオ!!」

「いや……無理だから？」

新八はタマを掴んでブンブンと振っている、

「コルアアアアアア!!新八イイイイイ」

「ー!？」

定春に乗った神楽が新八の方に走って来……

「タマをいじめてんじゃネエエエエ!!」

「ほべらあ!？」

ドゴオオオオ!!

神楽は新八を吹き飛ばした。

タマは途端に四足歩行に変わって神楽に寄ってゆく。

「ヨシヨシ、タマ。大丈夫アルか？」

「クウーン」

(タマ……お前……)

撫でられているタマを見て溜め息を吐くハヤテ。

ガラッ……

「痛つつつ……ちょっとオオオいきなり何するんだよ神楽ちゃん
!?!」

「動物をいじめるなんて最低アル、新八。^{メガネ}」

「お前は人間虐待してるだろ！この怪力娘！」

「まあまあ、二人とも……」

ハヤテは間に立って二人を宥めた。

「……………それより、ナギと銀ちゃんはどうしたアルか？」

「そういえばそうですね。さっきから姿が見えませんか。」

新八は庭を見渡す。

「ああ、お嬢様は咲夜さんの家に行ってるよ。何か用事があるとか。銀さんは……………」

……………

「アレ？銀さん、早いですね。」

「おお、ハヤテか。いやさあ、目覚しテレビによると今日の俺の運勢は最高。金運がずば抜けて良いです、だって……………今日は今日こそは…勝てる気がする。いや、絶対勝つ！」

「え？は、はあ……………」

「待ってるよ、スーパー 物語IN沖縄 桜バージョン！」

……………

「……とか言って出てっちゃいましたよ。」

「……なるほど」

新八は呆れたように首を振る。

取り敢えず庭の掃除も終わったので……

「そろそろお屋敷に戻ろうか。新八君、神楽さん。」

「そうだね。」

ハヤテ達は屋敷に入って行った。

「お腹減ったアル……」

「神楽ちゃんさつき食べたばかりでしょ？」

「そんな事言っても減ったものは減ったアル」

「だったら僕が何か作りましょうか？」

「マジアルか!？」

「ええ。だったら厨房に向かいましょう。」

屋敷の廊下を三人は厨房に歩いていく事になった。

「ハヤテ君、何かゴメンね？」

「ううん、気にし…」

キヤアアアアア！！！！！

「「「ー！？」「」

突然屋敷内に悲鳴が響き渡った！

「ハヤテ！今のマリアの声ネ！」

「ええ！厨房から聞こえましたね！」

「行ってみよう！」

タタタタツ！

三人は厨房の前まで走って来ると、扉を開けて…

「マリアさん！どっしー」

がばっ！

「！？」

マリアが飛び出してきたかと思うと、ハヤテに抱きついた！

「マ、マリアさん／＼どうしたんですか！？」

「ハ、ハヤテ君！！ゴ…ゴキ…ゴキブリが…」

マリアはハヤテに抱きついたまま厨房の奥を指差す。

「何だ…ゴキブリですか。」

取り敢えず落ち着いて下さい。マリアさん。」

「マリアもゴキブリは苦手アルか…」

「違うんです！！いや違うんですけど…とにかく大きなゴキブリが！？」

「分かりました。ですから取り敢えず落ち着いて…
…神楽さん、マリアさんをお願いします。」

ハヤテはマリアをそっと離して神楽に預ける。

「すぐに捕まえますから、暫く外に居て下さいね。」

新八君も手伝ってくれる？」

「うん。分かったよ。」

二人は厨房に入って行った。

「マリア？大丈夫アルか？」

「はう……」

マリアは涙目になりながら震えている。

ギヤアアアアアアアアアア！？

「ー！？」

厨房から断末魔のような叫び声が響いた！

「ハヤテ！？新八！？」

バン！

厨房から真っ青な顔をした二人が飛び出してきた。

「どうしたアルか！？二人と……」

その後ろから……

ギヤアアアアアアアアアア！？

ウィーン……

自動ドアが開くと出てきたのは死んだような二人の男。

「アレ……アレだな。やっぱりダメだ。テレビの占いアテにするのは……」

「そうだな。前向きに考えれば俺達は運命を変えたんだ。前向きにいこう、前向きに。」

「やっぱりアレか……もっとありのままをさらけ出した方が良いのか？俺べつにどうでも良いですけど、みたいな。んじゃ長谷川さん、全裸になれ。」

「いや、それさらけ出すっていうか……人生さらけ出しちゃってるから。どうでも良すぎて警察行きだ……」

二人は死んだ目で空を見上げる。

「……やべーよ、コレ。どーすんだコレ……」

〜三千院家〜

ギヤアアアアアアアアアア!?

屋敷内には断末魔の叫び声が響き渡っている…

ダダダダダダダダダダ!!!

「新ハイ〜! ハヤテエ〜! 何アルか、アレエエエエエ!？」

「知りませんよ!?!? ゴキブリじゃないですか!?!？」

「いやいやいやいや？デケーだろおおお！僕以上に大きかったよ、アレー！」

「きゅっ……………」

三人は厨房から全力で逃げている。マリアは神楽に背中の上で気絶していた。

先程厨房で二人の後ろから現れたのは新八の身長より大きなゴキブリだったのだ。

三人は辛くも屋敷の厨房から離れた部屋に逃げ込んだ。

「ハア…ハア…、どうなってるんだろっ。アレ…ゴキブリなのか？」

「神楽ちゃん…………アレ…前に見た事あるよね。」

「おぞましい記憶アル。まさかあの化物がゴツチにも居るなんて…」

神楽は身震いをすると、外に耳を澄ます。

「…………え？お二人はアレを知っているんですか！？」

「あ、いや……えっと……」

思わず口ごもる新八。

それはそうである。まだハヤテ達に自分達の世界の事を話していないのだから。

「と、とにかくこのままマリアさんが気絶したままだと大変ですから、ちよつと僕外に行つて殺虫剤を買ってきます。」

「あ！新八君!?!」

新八はさつと隠れている部屋から出ると、屋敷を走り去つていった。

「新八なら心配無いアル。アイツはやれば出来る奴ネ。」

「……わかりました。だつたら僕達も……」

ガサガサ……

「……?」

三人の居る部屋の奥にクローゼットが置いてあるのだが……

ガサガサ……

その中から気味の悪い音が聞こえてくる……

「まさか……」

ガラガラガラ……

大量の巨大ゴキブリがクローゼットから飛び出してきた！

ギヤアアアアアアアアアア！？

〜愛沢家〜

中山

『「現在！東京では、大量の巨大ゴキブリが……巨大ゴキブリが町を襲っています！中継しているここにも……」』

ブチッ……

丸田

『中山さん！？中継先の中山さん！？……すみません。どうやら中継に不具合があるようで……』

「巨大ゴキブリって、何やソレ。今日エイプリルフルヤったかいな？」

「さあな、もうニュースもやってけないんだろ。色々大変だな、テレビも……」

テレビの前にはナギと咲夜。

丸田

『え、ここでゴキブリ生態系に詳しい、国枝・キャリソン・豊万太郎博士（9才）にお越し頂きました。』

国枝

『はい、よろしくお願い致します。』

丸田

『国枝博士は歳はおいくつ何ですか？』

国枝

『九歳です。先日ハーードを卒業しました。』

丸田

『何か喋り方イラツとしますが…博士？今回の巨大ゴキブリは一体どうなっているんですか？』

国枝

『あれは何らかの生態系異常が起こって、それが大増殖したのだと思つのですよ。』

丸田

『キャラ統一しろよ、イラツとする……しかし、博士？一体どんな生態系異常が起こったのでしょうか？』

国枝

『薬か何かでちょうね。恐らく何処かの研究者が作った激物をゴキ』

ブリに使ったのかと思います。あれは恐らく人を食べる人食いゴキブリ。このままでは東京は愚か日本、果ては地球上の人間が食われてしまいますのじゃ。』

丸田

『いちいち喋り方変えないとダメなんですか、コノヤロー死ね。』

博士！何か対策は無いのですか！？』

国枝

『奴等に対をなす普通のサイズのゴキブリがいまちゆが、その中に背中にアムロと書いてあるゴキブリがいるのです。そいつはあの巨大ゴキブリのリーダーでちゆ。捕まえるか、消すと他の巨大ゴキブリも消えますですよ。』

丸田

『本当ですか！？つーか何でそんな事がお分かりになるんですか？』

国枝

『それは僕がああ巨大ゴキブリを作る前に間違えて逃ちちゃったからですよ。だからああ巨大ゴキブリもリーダーを探して街に来た訳で、まったく困ったものですよ。』

丸田

『……………オイ、今なんつった？』

国枝

『……………ヤベッ……………』

プーーーー……………

【しばらくお待ち下さい】

丸田

『良いですか？背中にアムロです！背中にアムロと書かれたゴキブリを見つけたら速急に仕留めて下さい。貴方に東京の命運がかかっています！』

「背中にアムロやって……………」

「無理無理、終わったな地球。」

〽三千院家〽

「ハヤテエ！？無理アル！何処に行ってもでかいゴキブリで一杯ネ
！？」

「神楽さん！マリアさんを抱えて奥の部屋に！ここは僕が食い止めます。」

「……分かったアル！マリアを安全な所に匿ったら、私も助太刀するヨ！」

神楽はマリアを抱えると奥の部屋に走って行った。

「この先は通さない！」

ハヤテは廊下に仁王立ちすると、大量の巨大ゴキブリを次々と蹴散らしてゆく……

「キシヤアアアアア」

「ー！！！」

右へ左へ……

ハヤテは目にも止まらぬ速さで廊下中を飛び回り、ゴキブリを蹴り飛ばす。

「くそっ！キリが無いな。次々と……」

すると、

「……………ん？これは……………」

ハヤテの腕に、普通のゴキブリが飛んで来て止まった。

「……………アムロ？」

背中にはアムロの文字。

何とも奇妙なものだが、ゴキブリを飼っている人もいると聞く。

「普段だったら退治してしまうけど、こんな状況だし。お前運が良
いね。」

ハヤテはゴキブリをヒョイと摘まみ上げると窓に放ってやった。

「ちゃんと恩返ししてよ？」

すると、

「ハヤテ君！まだ大丈夫！？」

新八が大きなボンベを抱えて走ってきた。

「新八君！」

新八はハヤテにボンベを渡すと、自分が背負っているボンベからノズルを取り出し、ゴキブリ達に放射した。

「かなり強力な殺虫剤だから。これでこのゴキブリを追い返せるよ
！」

「ありがとう！新八君！」

ハヤテはボンベを抱えると、ノズルから殺虫剤を噴射してゴキブリ達を追い払う。

「ハヤテ！新八！まだ無事アルか！？」

今度は神楽が傘を振り回し、ハヤテの隣に来る。

「……早くもツキが回ってきたみたいですね。」

三人は次々とゴキブリを撃退してゆくがゴキブリは減る気配は無い。

「新八君、外はどうなっているの！？」

「外も大騒ぎだよ！あちこちに巨大ゴキブリが飛び交って……
それになんかへんな噂まで流れていて……」

「変な噂アルか！？」

「うん！何でも背中にアムロって書かれたゴキブリがこの巨大ゴキブリのリーダーで、それを退治すればこの騒ぎは治まるって。」

「……新八君。もう一回言って。」

「え？だから背中にアムロって書かれたゴキブリを退治しないと、このままじゃ地球は滅亡するとか。何言ってるんだか、笑っちゃうよね。」

新八はハヤテの後ろで苦笑いしながら殺虫剤を撒き続ける。

「アツハハハハ……本当に笑っちゃうね。僕地球を滅ぼした魔王になっちゃいましたよ……ハハハハ。」

「ハハハハ……ってえ、えエエエエ！？」

見たの、アムロってゴキブリ！？ソレ、どうしたの！？」

「逃がしちゃたよ……ハハハハ。あ、そうだ。もうどうせ地球は滅ぶんだから二人に何か料理でも振る舞いますよ？ゴキブリさん達もどうですか？ハハハハ……」

「ハヤテ！しつかりするネ！？」

新八イ、ハヤテが壊れたアル！」

ハヤテは笑いながら厨房へと向かった。

「え？あ、ちよつとハヤテ君！？えつと……えエエエエ！？」

ブーン……

三千院家の庭では三匹のペットがお昼寝中。

定春の上にタマ。更にその上にシラヌイが乗っかっている。

ブーン……

「ワフ……?」

定春が目を開けると、目の前にはゴキブリがいた。

背中にはアム……

プチ!

「フワァァ……」

定春はゴキブリを潰すと、また目を閉じた。

くパチンコ屋く

「」
「」
「」
「」

台をじっと見つめる二人の男…

「お客様、もう閉店時間なのでお帰り下さい。」

「……………」

「あの……帰って下さい。もう閉店時間なので……………」

「……………」

「だから帰れよオオオオ！！閉店って言ってんじゃん！！」

「ヤベーなコレ……………」

白髪頭とグラサンの男は放心したように呟いた……………」

第三十三訓 僕らはゴキブリと共にある（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「早く席に着け〜お前ら。ジャンプの銀魂のページ開いて待ってるよ。」

今日最初の質問は『最近神楽や新八の出番が無いけどいつ活躍するの？』『』

神楽

「本当アル！皆私の活躍を待ち遠しく思っているのに！」

新八

「まあまあ……今回はちゃんと出番あったしこれからも出番はちゃんとあると思うよ？」

神楽

「棒切れは黙ってるヨ。」

新八

「棒切れってどういう意味だアアアア！？役立たずって言いたいのか！？」

銀八

「ハイ、次の質問。『この先に真撰組は出てきますか？』
この質問はアレだな…作者呼ぶか。オーイ！」

作者

「ハイ、どうも。では早速答えたいと思います。
……そうですね。真撰組ですか……いや、キツイですね。」

新八

「キツイって何かですか？」

作者

「教えてしまっていていいのかな？という意味で。
一応出てくる予定はあります。
コレ、バラしていいのかな？
当分先の話ですが、大長編で一旦歌舞伎町にハヤテ達と一緒に戻ると
いうのを考えています。その時には出てくるでしょう。」

銀八

「これ以上先の掘り下げはネタバレなんで次の質問行くぞ〜
『ハヤテのキャラが銀時を好きになる事はある？』
これも作者だな。」

作者

「ズバリ答えます！
ほとんどハヤテ君がハーレム状態なんでねえ……まあ、中にはそ
うなる可能性もなきにしもあらずな人が出てくるとも限らないです
ね。」

新八

「どこがズバリだよ…限りなく曖昧な答えだろ、ソレ。」

作者

「いやね？コレギャグ小説だから一応。ぶっちゃけそんな事考えて無かったんだよ…」

まあ、でも分からないですね。未定です。」

銀八

「それじゃ作者には帰って貰って、次の質問。」

『お妙さんのダークサイトとヒナギクのダークサイトはどちらが恐い？』

新八

「うわ……これ究極に嫌な予感のする質問ですね……」

神楽

「でもどっちが恐いかなんて姉御も居ないのにどうやって決めるアルか？」

ナギ

「大分お困りのようだな！」

ナギが大きな箱を持って現れた。

新八

「何その箱？」

神楽

「食い物アルか！？」

ナギ

「これは三千院家の科学技術部門のプロジェクトチームが開発した、記憶実体再現機』あの思い出をもう一度』だ！」

.....

新八

「何ですか？記憶実体再現機って.....」

ナギ

「その名の通り、かつての記憶をこの機械が本物同然に再現してくれるのだ。」

新八

「なるほど.....それは小説の世界で起こった事？」

ナギ

「いや.....コミックスだ！」

一同

「ええ.....」

ナギ

「ではまず、銀魂から。作者が選んだお妙のダークサイト（暴力とか）シーンを！どうぞ。」

銀魂 コミックス三巻

第十七訓 『酔ってなくても酔ったふりをして上司のツラを取れ』

山崎

「それでは第一回戦！近藤局長対お妙さん」

ここは言わずと知れたお花見場。

新八

「姉上、無理しないで下さい。代わりに僕がいきましょうか？」

妙

「いいえ、新ちゃん。私が行かないと意味が無いの。あの人（近藤）何度叩いてもすぐ立ち上がって来るの……私もう疲れちゃった……全て終わらせてくるね……」

新八

（ヤバい……あの目は……殺る気だ……）

山崎

「では、叩いてかぶってじゃんけん……」

お妙・近藤

「ポン！」

お妙はパー、近藤はグー……

近藤

「おおっと、セーフ！」

咄嗟にヘルメットを被る近藤。

しかし……

新八

「セーフじゃ無い！！逃げる近藤さん！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオ……

お妙

「還來生死輪轉家決以凝情爲所止……」

近藤

「えー!? ちょっとお妙さん!? もつかぶってるからセーフ……」

お妙

「ハアアアアア??」

ドオオオオオオオオオ……

ヘルメットは砕け散り、近藤は吹き飛ばされた。

ルール……関係ねえじゃん

隊士1

「局長オオオオ!!」

隊士2

「この女おま! 局長になに曝してくれとんだ!!」

お妙

「あゝあゝ? やんのかコラ……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

一同

「すみませんでしたアアアアア」

ハヤテのごとく 9巻

第6話 『moment』より……

ハヤテ

「あれ？ヒナギクさんじゃないですかー。」

ヒナギク

「！」

バツ！

ヒナギク

「私の後ろをとるとは……
やるじゃない。」

ハヤテ

「どこのゴルゴですか、それは……」

ヒナギク

「それにしてもあなた達にしては随分遅い帰りね。」

ハヤテ

「ええ、お嬢様が自習室で僕とワタル君の勉強を見てくれていたんですよ。」

ヒナギク

「勉強つて、試験の？」

ハヤテ

「はい。まさかあんなに難しいとは思わなくて……」

ヒナギク

「だったら私のプレゼントなんて買ってないで……
家で勉強しなさいよノノノ
べ…別にどうでもいいんだし……」

無くたって全然構わないのよ……？」

ハヤテ

「でも難しいって知ったの昨日ですし……」

ナギ

「あそこまで出来んとは思わなかったしな。」

ヒナギク

「は？」

ヒナギクは驚いたようにハヤテを見る。

ヒナギク

「昨日って……それ大丈夫なの？
ホントにマズいんじゃない？」

ハヤテ

「えー。本当ですよね〜
全然大丈夫じゃなくて……」

「どーしましょ？」

ヘラと困ったように笑うハヤテ。

ヒナギク

「いや、どーしましょって……」

（何で私、この人の夢を毎晩見てるのかしら。

夢でうなされ気をとられ
頭を悩ませているというのに…

まったくこの男は……)

周りの空気は黒く歪み始める。

(もっ少し……)

シャキッとしないよ。シャキッと……)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ナギ

「まあ、こんな感じなのだ！」

『あの日の思い出をもう一度』終了

銀八

「オイオイ……こんな化物二つ並べて選べたってよお。」

ヒナギク

「誰が化物よ!？」

「というか何でよりによってこの場面!？」

新八

「本当に女の人は恐いですね……」

銀八

「まあ、一応質問だしな。俺の見解だと……」

お妙のダークサイト

ATK60000

DEF1

防御力は皆無に等しい……つーか防御に至る前に敵は塵になるだろう。

ヒナギクのダークサイト

ATK30000 DEF30000

物理的なダメージより精神的に与えるダメージの方が圧倒的に高い（主にハヤテ）何だかんだ言っても後でフォローを入れる。

銀八先生から一言

え〜と…、まあアレだ。物理的に追い詰めるお妙はやっぱり嫌だな。あ、でも精神的に追い詰めるヒナギクも質悪いいな…でも痛いのがヤダから取り敢えずお妙のダークサイトの方が怖い。つても、どっちも怒らせたら化物だな……

銀八

「え〜、次は個人的に受けた質問な。『まだ原作介入していないようですが、いつかしますか?』」

ハイ、ズバリ答えます。え、確かにこの小説は現在原作設定がメタメタになってますが、恐らく早ければ原作の九巻（くらいかな？）遅くともハヤテ達が二年生になる所からは原作介入すると思います。因みに小説の時間軸は原作でいう4〜5巻くらいです。」

ハヤテ

「まだ先は少し長そうですね。」

銀八

「フー訳で長くなったけど今日の授業はここまでだ。」

ハヤテ

「次回もよろしくお願いします」

第三十四訓

液晶テレビを買ったら録画容量が満タンになる前に録画用DVD

クラウドの前書きの館！

クラウド

「もうじきハヤテのごとくの26巻発売です！是非皆さん買って下さい！」

ハヤテ

「つーかクラウドさん、何ですか？このタイトル。」

クラウド

「作者の現状。」

ハヤテ

「……………はあ。」

クラウド

「では、本編どうぞ！」

第三十四訓

液晶テレビを買ったら録画容量が満タンになる前に録画用DVD

「はあ……何かオモロイ事あらへんかな……」

ここ愛沢家でそう呟いたのは咲夜。

「いきなりどうしたんですか？」

「今日は学校休みやん。せつかくの日曜日なのに面白い事なんもないからな」

「まだ11時じゃないですか。日曜日も始まっばかりですよ」

咲夜に話しかけてたのはメイドのハル基千桜。

彼女は一応白皇学園に通う生徒会書記だったりする。

「そっぴや小太郎はどうしたん？」

「桂さんは庭で修練するって言ってましたよ。」

何でも『武士たるものいつ何時も鍛錬を怠る事をしては成らない』とか何とか……」

「鍛錬？鍛錬……、良いこと思いついた！」

咲夜は名案が浮かんだとばかり手を叩いた。

「咲夜さん……？邪魔してはダメですよ？」

「堅い事言いなはんや。それに邪魔するんや無くて、鍛錬は鍛錬でもお笑いの修行するんや。」

(それは邪魔って言うんじゃないかなあ……………)

第三十四訓 液晶テレビを買ったら録画容量が満タンになる前に録画用DVDを買っとけ

愛沢家の庭では桂が鍛錬をしているとい……………

くくZURA!くくZURA!

何故か置いてあるラジオテープから流れているのはアホみたいなラップ。

「やるなら今しかねえZURA!
やるなら今しかねえZURA!
攘夷がJOY!JOYが攘夷!

……ふう、一人で出来るのはここまでか……やはりエリザベスが居ないとな。」

桂はラジオテープを巻き戻しを押すと、もう一度音楽が流れて始める。

「やるなら今しかねえZURA!やるなら今しかねえZ……」

「何処が鍛錬じゃアアドアホオオオオオオ!!!」

「ぐおお!?!」

咲夜の渾身の飛び蹴りが炸裂する。

「ウチにどんだけ突っ込ませれば気がすむんねん、自分!？」

「自分じゃない桂だ。」

これはアレだぞ？ラップで攘夷の布教活動をするための練習だから、マジで。」

「そんなんで布教できる世界が何処の世界にあるんや!？」

「武士たるもの、如何なる時どんな形で何が起こっても対応出来ないといけないのだ。」

「取り敢えずお前は武士失格やな……」

(完全に漫才になってますね)

千桜は二人の様子を苦笑いしながら見ていた。

ピンポン……

「ん？客みたいやな。」

「私が出て来ますね。」

千桜は庭から屋敷に戻ると玄関まで小走りで行く。

ガチャ

「ハイ どちら様ですか？」

千桜は扉を元気よく開ける。

「…………… 本当にオメー大したもんだな。キャラが変幻自在じゃねーか……………」

白と青の着物を着た白髪頭の男が突っ立っていた。

「銀さんですか…何か御用ですか？」

「アレ？何でそんなにトーンが下がるの？何でテンションが下がってるの？」

「わざわざそんな事言つたために来たんですか？」

「そんなあからさまに溜め息つかなくたって良くね？」

「銀さんだって一応傷付くよ?」

「何か御用ですか?」

「……………」

銀時は手荷物を掲げてみせる。

「ご主人様に頼まれたんだよ……咲夜に届ける、とな。」

「あ、そうでしたか。では上がって下さい。ご案内します。」

「……………二重人格」

「何か?」

「いえ……………何も……………」

*

「そっかさっか。そっいやナギに貸したままやったな。わざわざあ
りがとうな、銀時。」

庭では桂と咲夜がテラスで座っていた。

「届け物、確かに渡したからな。」

銀時は咲夜にひらひらと手を振る。

「銀時！今日こそは首を縦に振って貰うぞ。俺と共に江戸の夜明けを……」

バキッ……

「んじゃ、俺はこれで。」

「なんや、せつかく来たのにもう帰るんか？」

「そうだぞ銀時！共に攘夷活動をするというまで帰さんぞ……お！？」

ベキッ……

「いやいや、あんまし長居するのも悪りいから……」

「そんな事あらへんって。今日はウチ暇持て余してたん。

それに、もし帰るんやったら面白い事してからにしてや。」

「面白い事つってもなあ……」

銀時は面倒臭そうに頭を掻きながら言う。

「だったらお前も一緒にラップで攘夷の布教活動を……」

バコッ！

「うるせーよ、さつきから。

何やってんだよ…テメーは…」

「痛つつつ……テメーじゃない桂だ。」

桂は頭を擦りながら立ち上がった。

「日々鍛錬を怠る事なかれ。武士たるや例え異世界に飛ばされようが日課である修練を止める訳にはいかぬのだ。」

「自分ラップやってただけやないか。」

「ラップじゃ無い、カツラップだ！」

「銀時……コイツ殴ってええか？」

「放っとけ。コイツの馬鹿にいちいち突っ込んでたらきりがねえぞ。」

銀時は目の前で手を振ってみせた。

*

四人はテラスに再度腰掛け、千桜が淹れた紅茶を飲んで団欒している。

「ーにしても、小太郎。その攘夷活動ちゅーのは、具体的にどういう活動なん？」

「おお、咲夜殿！攘夷志士に興味があるのか！！」

桂は嬉しそうに目を輝かせると、拳を握ってみせる。

「いや……、まあ多少やけど。」

「ふむ。そうだな……
江戸では……」

ガヤガヤ……

とあるお店の二階。

宴会用となっているその部屋には、数十人の男達が腰を据えて集まっている。

志士 1

「馬鹿者！今こそあの馬鹿な幕府に攻めいるときだ！これ以上奴等の言いなりになるのは我慢ならん！」

志士 2

「愚かなのは貴様だ！今は耐える時だ。まだ我々は動く時ではない！」

志士 1

「そんな弱腰だからあの真撰組（幕府の狗）にも嘗められるのだ！」

ガヤガヤ……

男達は各々国を思う気持ちをこの集会でぶつけ合う。

ガラッ

桂

「皆、最近は幕府の動きが厳しくなっているが無事か？」

一同

「桂さん！」

その集会に入ってきたのは桂小太郎だった。

志士 1

「桂さん！聞いて下さい。もうこれ以上の忍耐は……」

志士 2

「馬鹿！何を言っている。」

桂さん、この馬鹿に何とか言っただけでやっして下さい！今は耐えるべきだと。」

志士 1

「馬鹿とは何だ貴様！？」

志士 2

「何だ！？本当の事を言っただけだか？」

志士 1

「貴様そこに直れ！叩き斬ってやる！」

二人の男は今にも飛びかからん勢だったが、その時……

???

「テメー等静まらねえか!!!」

桂さんの手前だろうがアアアアア!」

もう一人の男が入ってきた。

白髪頭の天然パーマ……

死んだ魚のような目を煌めかせているその男こそ……

坂田銀時であった。

一同

「銀時さん!?!」

銀時は部屋に入ってくると二人の胸ぐらを掴んで引き離す。

銀時

「ギャーギャー喧嘩してんじゃねーよ。発情期ですか?コノヤロー」

志士1

「すみません銀時さん!」

志士2

「申し訳ございません!!!銀時さん!」

銀時はため息を吐くと二人を座らせる。

銀時

「皆静かに聞けよ。桂さんからの報告と方針を聞いてからいくらでも質問しろや。」

そう言うと銀時は横に捌ける。

桂

「ありがとう銀時。」

では報告だが、最近幕府に不穏な動きが絶えなくなっているのは皆重々承知の事と思う。これは天人の影響による動きだが、俺は一月後、幕府の重鎮が開く催しがあると聞いた。」

一同

「催し!?!」

桂

「うむ。表向きは幕府の決起集会だが、実の所は天人との何らかの取引がある。」

銀時

「それも全くもって良い取引じゃねえ。裏金やら麻薬やらそんなもの集まりだ。」

一同

「なんだって!?!」

「幕府の連中め!?!」

桂

「そこで、我々はそのを機として襲撃をかけることにした。奴等の

悪事を明るみに出す絶好の機会だ。

江戸の人々……いや日本中の人々に奴等の本当の姿を知ってもらおうのだ。」

一同

「おおおおお！！！」

集会は一気に盛り上がりを見せる。

桂

「確かに、彼（志士2）の言う通り、今は耐える時だ。不穏な動きを見せるべきではない。だがしかし！来るべきときには我々は幕府の連中に国民の真実を突き付ける事ができる！」

志士1

「ハイ！桂さん！」

志士2

「一生付いていきます！」

男達は雄叫びも高らかに更に士気が高まる。
そして、そのまま宴会へと移行した。

ガヤガヤ……

桂

「済まぬな、銀時。いつもこの連中は血の気が荒くて。」

銀時

「何言ってるんだ、桂さん。確かに血の気は荒いかも知れねえが国を
思う気持ちは皆誰にも負けねーだろ？」

桂

「フツ……そうだな。」

二人はそう言いながら杯を乾杯した。

……

「そして、その一ヶ月後俺達は幕府の集會に襲……………」

「全然違エエエエエ！！何もかもが間違ってるだろ！」

「ぶっ！？」

銀時は桂を吹っ飛ばした。

「何時俺が攘夷志士なんかになったよ。何でテメーを“桂さん”なんて馬鹿みたいに呼んでんだよ、ヅラ。」

「ヅラじゃ無い桂だ！銀時、覚えていぬのか？これは……」

バコツ……

「もういい……オメーの回想は無駄に長えーんだよ。」

銀時はまたテーブルに着いた。

「じゃあ、銀さんは向こうで何をしていたんですか？」

「俺ア万事屋をやってたんだよ。『万事屋銀ちゃん』ってんだけどな。」

「じゃあ神楽やメガネは万事屋のメンバーなん？」

「まあな。基本トリオで回してるからな。」

千桜と咲夜の質問に、銀時は答える。

「へ〜、『万事屋銀ちゃん』なんて、面白くて馬鹿みたい名前ですね。」

「……………あのさ、千桜さん？もしかして、俺なんかした？」

千桜の笑顔に銀時はおずおずと聞いてみる。

「何がですか？」

「いや……何となく怒っているように見えなくもないような……」

「全然そんな事無いですよ。」

「そっか。なら別に、」

「銀さんが来たからテンションが下がったとか、なるべく関わりたい
く無いとか……そんな事全然思ってませんから。」

「……あ、そう……泣いていい？」

「冗談ですよ。」

「……………」

千桜はニツコリと銀時に微笑んだ。

「ハルさん、意外とSなんやな。」

咲夜はそんな二人を見て呟いた。

*

その後、小一時間経って銀時は急に思い付いた事があると帰って行った。

「さてと、それでは俺は散歩に出かけてくるか。」

「あ、本当ですね。もうそんな時間ですか。」

「散歩？」

咲夜は怪訝な顔をして首を傾げる。

「俺はまだまだこの世界の事知らないからな。地の利を掴む事は戦を行う上での基本だ。」

それに攘夷志士たるもの常に周りに気を配る必要がある。今も何処かにテロリストが潜んでいるかも知れん。護衛としてその辺の警備も兼ねる事になっているのだ。」

「戦なんて誰がやるんや…？つかテロリストお前な。」

桂はゆっくりと立ち上がると伸びをする。そして屋敷に入り出口に向かって行った。

「ハルさん……アイツ一人で町に出して大丈夫か？」

「多分……大丈夫じゃ無いかもですね。」

二人は不安100%で桂を見送った。

*

「ふむ……相変わらず賑やかな所だな、ここは。」

桂がふらりとやって着たのは商店街だった。

「アレ？桂さん？」

「あ、本当だ……」

「ん？」

桂が振り返ると、新八、歩、ヒナギク、ハヤテが居た。

「おお、新八君ではないか。」

「銀さんに聞きましたよ。咲夜さんのところに居候してるらしいです
ね。」

「居候じゃ無い桂だ。それはそうと……」

桂は新八と一緒にいる他の三人に顔向ける。

「ああ、ええと左から綾崎ハヤテ君、桂ヒナギクさん、西沢歩さん
です。」

新八が左から紹介してゆく。

「えっと……綾崎ハヤテと言います。三千院家で執事をしています。」

「私は桂ヒナギクです。白皇学園で生徒会長をやっています。」

「西沢歩です……っというか桂さん私と何回か会ってますよね！？
ワタル君のビデオ屋で。」

三人はそれぞれ桂に挨拶をする。

「そうか、三人は新八君の友人か。俺は桂小太郎。国を変える為に日々攘夷活……お!？」

「ちよつ、新八君!？」

挨拶の途中で新八が桂とヒナギクを引つ張ってその場から少し離れる。

「アンタいきなり何口走ってるんですか!？この世界の人間じゃ無いってバレるでしょうが!」

「む!？そうか……てっきり新八君の友人だから知っているのかと。」

桂は頭を擦りながら言った。

「この場で知っているのは彼女…ヒナギクさんだけです。」

新八はそう言ってヒナギクに手を向けた。

「新八君。じゃあこの人は…」

「うん。僕達の世界の人だよ。」

新八は桂を指して言うと、桂は一步前が出る。

「改めて紹介に預かった桂小太郎だ。向こうでは攘夷志士として活動している。」

「攘夷つて……」

ヒナギクが首を傾げると……

「あの〜……」

「『え？…あ、』」

ハヤテがおずおずと三人に話しかけてきた。

（ヒナギクさん、詳しい話はまた今度で）

（ええ、分かったわ。）

三人は取り敢えず元の位置に戻った。

「あい済まなかった。改めて、俺は桂小太郎だ。訳あって愛沢咲夜殿に拾われ愛沢家に居候している。好物は蕎麦だ。」

「そうなんですか。咲夜さんの家に……」

ハヤテは少し驚いたように頷いた。

「新八君達は何をしているのだ？」

「僕はハヤテ君とお使いだったんですけど、偶然ヒナギクさんと歩さんに会って。」

「ほう……。そういえば新八君も同じようにナギ殿の元に居るのだつたな。」

「お嬢様をご存知なんですか？」

「うむ。この前銀時と共にワタル君のビデオ屋で会ってな。その後咲夜殿の家に行って色々と話聞いたのだ。」

ハヤテはなるほどと納得したように頷いた。

「桂さん、銀さんと知り合いなんですか？」

「ああ、俺と銀時はかつて同じ学舎を共にし、攘夷戦争を……ぶっ！？」

新八が目にも止まらぬ速さで桂を妨害した。

（だからバレるつつてんでしょ！？向こうの話はタブーですよ！）

(そうだったな……)

桂はコホンと咳払いをすると改めて言い直す。

「銀時と俺は小さい頃から学舎を共にした幼馴染みだ。まあ親友と
考えてくれて相違ない。」

「いや、まあ腐れ縁とも言えますけど……」

へえと意外そうな顔をする三人。

*

暫く話をした後、もう夕方という事で五人は各々帰路に着くことにな
った。

本来は歩だけが反対方向なのだが、ヒナギクが送っていけとハヤテ
に言ったので、ハヤテも同じく反対方向に向かう事になった。

結果帰り道には新八、ヒナギク、桂となった。

これは向こうの話をする為の口実でもあった訳だが。

「時にヒナギク殿。剣道けんどうをやっているようだが…」

「え、ええ。でもどうして分かったんですか？」

ヒナギクは少し驚いたように桂を見る。

「その手を見れば分かる。見るにかなり扱えるようだな。並の強さではないだろう。」

「いえ？そんな事は…」

「いや、恐らく毎日素振りも欠かさぬのだろう。本当に素晴らしい事だ。武士の鏡だな。」

「いや、武士じゃねーだろ。」

新八が突っ込むも聞こえていないのか尚も桂は話を続ける。

「しかし、うーむ…ヒナギク殿は剣も達者で真面目そうだ。しかも苗字が桂という。これは…これでは……………」

キャラが被…」

「被る訳ねーだろ！アンタみたいな電波バカに被るか！何で真面

目な話題だったのに結局そっちの方に持っていくんだよ!？」

新八は溜め息を吐くと、話を切り替える。

「とにかく、話を戻しましょう。」

二人は頷いて少し歩みを遅める。

「桂さんは銀時達と同じ世界から来たっていう話ですけど…」

「ああ、俺はさっきも少し言ったが攘夷活動をしているのだ。

天人の影響でダメになってしまった国を内側から変える為に日々尽力しているつもりだ。」

「攘夷……、そう。銀時とは幼馴染みって言うていたけど…彼も攘夷志士なんですか？」

ヒナギクは少し考える素振りをしてから尋ねる。

「そうであって欲しいが、奴は違うな。アイツはそう言った事は面倒がってやらんのだ。最も理由は他にあるだろうがな。」

桂は少し口元を緩めると再び表情を引き締めた。

「向こうの世界で“攘夷戦争”というものがあつたというのは聞いています。概要も大体。

桂さんはそれに参加していたのですか？」

「……うむ。確かに参加していた。結局国は天人の台頭を許すという結果に終わったがな。」

「そうなんですか……」

「あまり深くは言えないが、俺と共に銀時も戦争に参加していたのだ。無論、天人から国を護る側でな。」

「え……！？銀時も……」

その言葉は予想外の答えだったのか、驚いて二人を見る。

「そうなんです。銀さんはあまり話してくれませんが……」

「アイツにとって……いや俺達にとって忌まわしい記憶に違いはないからな。」

「……………」

ヒナギクは相変わらず黙り込んだままだった。

〈愛沢家〉

ガチャ…

「あ、お帰りなさい桂さん。随分遅かったですね。」

「済まない。少し知り合いにあったものでな。」
桂はそう言っって屋敷に入っていく。

結局帰り道、ヒナギクは出来るだけ自分達が帰れるように協力すると言っって新八と共に帰路に着いたのだった。

「桂さん！お帰りなれましたか。」

「ああ、巻田殿、国枝殿。」

屋敷内では愛沢家の執事である巻田と国枝が桂に寄っって来た。

「今日も稽古をつけて貰えますか？」

「俺で良かったら喜んで相手になろう。」

「「ありがとうございます！」」

桂に一礼する二人。

「あの二人…いつの間にあんなに小太郎と仲良くなったん？」

そんな様子を半ば呆れたように見ている咲夜。

「やっぱり桂さんは剣が凄いからじゃないからですか？よく稽古もつけて貰ってるらしいですよ？」

「全然そんな風には見えへんけどな……」

それに二人、最初はあるなに反対しとったのになあ。」

「ですねー」

その話はまた今度書くとしよう。

「あ、そういえば……」

「どうしたんですか？」

「銀時に面白い事させるの忘れとった。」

「……………？」

今日も愛沢家はそこそこ平和です…

〱三千院家〱

「万事屋？」

「ええ。そうです、万事屋。」

銀時、新八、神楽が神妙な顔つきでナギ達に向かいあっていた。

「僕達このまま手伝いだけでお屋敷に居るのは悪いと思っんです。だから今まで通り屋敷も手伝い続けますけど、同時に万事屋としても働いて恩返しをしたいんです。」

「恩返しなんて、そんなに気を遣わなくともよろしいんですよ？」

「いや、ナギ達は命の恩人アル。これからも世話なるなら尚更ヨ！」

神楽も決心は堅いようので拳を握りしめて言う。

「ふむ……なるほど。面白そうだな。」

ナギは興味があるように言うと三人に提案する。

「だったらこいついっつのはどうだ？」

……

「なるほど！」

さて、ナギの提案とは？

第三十四訓

液晶テレビを買ったら録画容量が満タンになる前に録画用DVD

教えてー！銀八先生

銀八

「最初の質問、『ハヤテは高天原で働けますか？又はかまっ娘クラブでも働けますか？』
っー訳で、ハイ。」

ボン！

ハヤテ

「って、何ですか？この格好？」

銀八

「高天原のホストの服。んじゃ、適当に『いらっしやいませ』とか
言ってもらっか。はいどーぞ。」

ハヤテ

「あーちよー！？」

「……わかりましたよ？」

「……いらっしやいませ。
キラキラ？？」

女性一同

(ー／／／)

銀八

「ハイ流石にハーレム主人公。あつという間に女子一同のハートをキャッチだな。でも残念ながらこれは本編と関係無いです。」

ハヤテ

「何の話だアアアア！」

銀八

「続けて、ハイ。」

ボン！

ハヤテ

「……………つてちよとおおお！？何なんですか！？この衣装は／／」

銀八

「何っってお前アレだよ。セーラー服だろ。」

ハヤテ

「そうじゃなくて／／なんでこんな格好に！？」

銀八

「いやいや……………まさかここまで似合うとは思わなかったわ。」

「っーかお前マジで男？」

新八

「凄いですね……色んな意味で恐ろしい？」

女子一同

（か、可愛い……／＼／＼）

高天原でもかまっ娘クラブでもバリバリ活躍出来るでしょう。特にかまっ娘クラブならエース級ですね。

ハヤテ

「放っておいて下さい！！！！／＼／」

銀八

「ハイ、またハヤテ君が女子の好感度を上げたところで次の質問。

『アテネは出て来ないの？』

ハイ、ズバリ答えます！

え〜本編の原作介入でミコノス編をやるので、その時に！」

新八

「そもそもこの小説の設定はメチャクチャなのに、今更原作介入なんてあるんですか？」

銀八

「まあそれなんだけど、確かに今は設定がごちゃごちゃだけど、多分ハヤテ達が二年生になるあたりから介入するから。そこまで行けば今の小説の設定になるからね、多分。」

新八

「はあ、なるほど…」

銀八

「では、次の質問」。

『ハヤテのお兄さんは出す気無いの？』

ハイ、ズバリ答えます！

今現在は無理です。なぜなら彼の情報が無すぎて書けません。

多分この小説でミコノス編やる時にはハヤテのお兄さんも今より詳しく分かると思うので。

それでは、また次回！。」

ヒナギク

「次回もよろしくお願いします。」

第三十五訓

文武両道は学生の理想（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「え〜皆様。今回もオリキャラの登場です。

またかよ！？とか早く原作進めろ！と思う方、誠に申し訳ございません。でも中々面白いキャラだと思つのでどうかお願いします！」

真田 幸久

【年齢】

17歳

【誕生日】

8月23日

【血液型】

B型

【家族構成】

???

【身長】

178

【体重】

60

【好き・得意】

武術・学問・熱い事全般・

【嫌い・苦手】

女性・中途半端な事・恋愛・女装させる人(事)・椎茸

茶色のざんばらヘッドに淡い黒の澄んだ瞳、顔立ちは美しく女装させると本当に女にみえる。

良く言えば真つ直ぐで、悪く言えば馬鹿正直な奴。

かなり猪突猛進で、頑固なため一度決めた事は是が非でもやり通そうとする。

自称戦国時代の武将の末裔であるらしい。棍術を極めており、『棍術で右に出るものはいない』と称されるほどらしい。
美しい容姿なので当然女子からは人気も高い。

生徒会メンバー(特に愛歌さん)に何かしらの弱味を握られているらしく、彼女らには頭が上がらない。

クラウド

「これは月光閃火が投稿して下さったオリキャラです。ありがとうございます。」

今回幸久はあまり熱血漢といった感じではありませんがそれはまた話が進むに連れて、という事で。

因みに、この三十五〜三十七訓まではギャグ主体ではなくちよつといい話を書いていきたいと作者が言っています。」

ハヤテ

「ちよつといい話ですか…」

クラウド

「まあ、これは基本的にギャグ主体なのでたまにはこういうのも有りかな、という事で。」

ハヤテ

「作者にいい話を書けるんですか？」

クラウド

「……………では始まります！」

ハヤテ

「いや！？ちよつと！？」

第三十五訓

文武両道は学生の理想

「うーん……ちょっと早すぎたかな？」

午前7時。

僕こと、綾崎ハヤテは白皇学園の正門の前に立っていた。

隣に居るはずの人が居ない？

そう。お嬢様が居ないのには理由があった。

それは昨日の話……

銀さん達三人がナギ達に話があると話題を持ちかけて来たのだ。その話とは『万事屋』として活動したいというものだった。

銀さん達は行く宛が無くなるまえは三人で万屋として働いていたらしい。

屋敷の手伝いだけで居候するのは悪いから万事屋としても活動して恩返しも兼ねてという事だった。

お嬢様は二つ返事で承諾したが条件を出した。
それは、屋敷内（敷地内）で活動することだ。やはり何だかんだ言っても、居なくなってしまうのは淋しいのだろう。口では言っていないが。

次に、万事屋をどう活動していくかという問題に移る。
それは、お嬢様が提案したのは屋敷の敷地内に『万事屋』を作る事だった。

新八君達は当初お金もかかるだろうから悪いと言っていたが、お嬢様はお金は三千院家の大工達を呼ぶからかからないし、『万事屋』を見てみたいからという理由もあってそういう事になった。

新八君に三人が使ってた万事屋の絵（外、中）を描いて貰って、三千院家最強の大工陣が屋敷のすぐ隣に建てているのだ。

…という訳で、お嬢様は色々あるからと言って学校をサボ……休み。
なので今日は僕が一人、学校に来たわけだ。

しかし、先程も言った通り今は午前7時。

授業まではまだ二時間はある。

「早く目覚めたのは良いけど……どうするかな？」

僕は正門の前で思考を巡らしていると……

「アレ？ハヤテ君？」

聞き慣れた声がしたので振り返った。

「ヒナギクさん！おはようございます。」

「おはよう、ハヤテ君。随分早いよね。」

声の主はヒナギクさんだった。

彼女はジャージ姿で少し息を切らしていた。

「ヒナギクさん、ランニングですか？」

「ええ。剣道の朝練の前にね。」

これから道場に行くんだけど。」

やっぱりヒナギクさんは凄い。文武両道で男女問わず人気は絶大。まさしく学生の鏡だ。

「ハヤテ君も暇だったら道場来る？」

「良いんですか？」

「うん。朝練って言っても私しか居ないだろうからね。」

「では、お言葉に甘えて。」

僕は特にする事も無いのでヒナギクさんと道場に行くことにした。

「そういえばナギは？もしかして休み……？」

「ああ、実はですね……」

取り敢えず昨日の出来事をかいつまんで話した。

「そうだったの……」

ヒナギクさんは何か考えるように仕草をして黙り込んでいる。

「ヒナギクさん？」

「……へ！？」

ああ、何でもないわよ？」「

そうこうしている内に僕達は道場に到着した。

ガラッ……

ヒナギクさんが道場の扉を開けると……

シュッ……、シュッ……

道場にはどうやら先客がいたらしかった。
どうやら青年のようだ。

「何だ、真田君。来てたの？」

「……ん？」

真田と呼ばれた青年が振り返った。

茶色の髪にどちらかと言えば美しく凛々し顔立ち。
それでいて体格はがっしりしていて頼もしい。

「ああ、桂か。済まない、勝手に使わせて貰っていたぞ。」

彼は手に持っていた長棍を畳に置くところらにやって来た。

「あの……？」

「あ、彼は真田幸久君。ハヤテ君と同じクラスよ。」

……おや？こんな人は居たっけ？僕が知る限り見たことが無いのだが……

「真田君は学校に来る事が少なかったからね。
こっちは綾崎ハヤテ君。」

「綾崎ハヤテです。えっと……真田さん？」

ヒナギクの紹介に預かったので彼に挨拶をする。

「俺は真田幸久だ。幸久でいいぞ？よろしくなハヤテ。」

「ハイ、よろしくお願ひします幸久君。」

握手を交わすと、彼の手は僕よりひとまわり大きかった。

「じゃ、私は着替えて来るから。ハヤテ君も竹刀振るかしら？」

「あ、ハイ。では少し」

ヒナギクさんは僕に竹刀を手渡すと、更衣室に入っていった。

「そついえば幸久君は剣道なんですか？」

「いや、俺は帰宅部だよ。ただ俺の家は武家なんだ。だから何かしらの武術をたしなまなくてはならなくてな。」

幸久君は長棍を拾って僕の前に見せる。

「俺は棍術を極めているんだ。」

「こ白皇の剣道部は朝練が無いから、たまに使わせて貰っているんだよ。」

「へえ、武家なんですか。」

流石白皇。本当に様々なお金持ちや名家が集まるんだなあ。

「それもかなり有名な家柄らしいわよ。真田君の家系は代々戦国大名お抱えの武将だったとか…」

「あ、ヒナギクさん。」

いつの間にか、幸久君の後ろからヒナギクさんが補足してくれた。

第三十五訓

文武両道は学生の理想

「でも驚きましたよ？そんなに重症だなんて。」

「医者が言うには昔のトラウマどうこうって話だが、いかんせん俺には全く心当たりが無くてな。」

僕と幸久君は一年A組に向かっていている途中だ。
ヒナギクさんは生徒会の仕事で時計塔にいる。

「でも理由が分からないのでは直しようが分かりませんよね。」

「まあ最も、日常でそんなに不便があるわけじゃ無いからな。」

幸久君はこう言っているが、彼の恐怖症具合は異常だった。
触るのは勿論ダメ。下手をしたらそれだけで失神する事もあるらしい。

触る事は愚か、先程のように後ろに立たれる事すらままならないと

いう。

「もしかして、学校にあまり来ない理由って、それが原因なんですか？」

「いや、まあそれもあるけど……」

何だか歯切れが悪い。

「もしやイジメ！？……は無いだろう。彼をイジメられる生徒がいるなら逆に見てみたいものだ。だとしたら……？」

そうこう思案していると、僕の耳に周りの囁き声が聞こえてきた。

（ちょっと、A子！？真田先輩がきてるわよ！）

（ホント！？ああ……いつ見ても素敵……）

（アレ！真田君よね！？……格好良いなあ……）

（本当に……見とれちゃう……）

（ねえ！綾崎君も一緒じゃない！？）

（二人とも素敵ねえ……可愛い／＼／）

一年、二年、三年の女子の皆さんがいつの間にか僕達の周りに増え

ていた。

「……………」

「なるほど？」

幸久君の真つ青な顔を見て、学校に来たくない理由が代々分かった。彼はかなり格好良いので女子も自然と寄ってくる。しかし恐怖症の彼にとって、それは地獄と大差ないのだろう。（因みにハヤテは自分の噂には気づいていません。）

「ハヤテ……早く教室に入ろう。もう限界……」

「みたいですね？」

僕達はかなりの速足で一年A組に入って行った。

*

「あ オハヨー！ハヤ太君。」

「おはようございます。瀬川さん。」

教室に入ると瀬川さんが元気よく挨拶してくれた。

「真田君、久しぶりだね。おはよー!」

「ああ、おはよう。」

瀬川さんは幸久君に近づいて挨拶するが、彼は思いっきり距離をとって返した。

「ハハハ……相変わらずだね?」

「おや?ハヤ太君に……真田君では無いか。」

「随分奇妙な組み合わせだな。」

「花菱さん、朝風さん。おはようございます。」

瀬川さんの後ろから二人がやって来た。

「いや、しかし珍しいな。」

「ふむ。全く全く。」

「何がですか?」

「ハヤ太君が男友達という事がだよ。」

「……………」

……………うん。今は凄く効いた。なんだろう……………何か涙出てきそう。

「……………」

「そんなにハヤテは女子と接する機会が多いのか？」

「そりゃ、もう。大変な数さ。」

「次から次へと、女をとつかえひつかえ。泣かされた女子は数知れず。」

「ちょ！？いい加減な事言わないで下さい！」

「花菱さんも朝風さんも放っておくと何を言い出すか分かったもんじゃない。」

「かくいう泉もその一人だ。」

「ふえ！？何言ってるの二人とも／＼」

「そんな様子を見て幸久君が一言。」

「ハヤテ……お前凄いな。」

「感心するところじゃ無いだろオオオオ！第一、そんな事はありませんから！」

ガラッ…

「ハイハイ！席に着きなさい！HR始めるわよ！」

桂先生と湊川先生が入ってきて、皆が席につき始める。

因みに幸久君は僕の一つ前の席だった。

*

まだ幸久君と知り合って間もないが、今日1日で色々と分かった。

例えば彼は物凄い勉強が出来る。ノートを見せて貰ったがとても綺麗に整頓されていた。

それに加えて毎日欠かさずに鍛錬しているというのだから、大変な努力家なのだろう。

お昼は一緒に学食^{テラス}で食べた。そこで彼の家の話を色々聞いた。僕の今の話もした。

途中、初等科の小さな女の子達が僕達に話しかけてきた。流石にこの歳なら大丈夫だろうと思っただが全くダメで、女の子に服を掴まれた時はカレーうどんをひっくり返していた。

男友達とこうして話し込んだり笑ったりしたのは久しぶりで、とても新鮮だった。

ついでに、椎茸が大嫌いらしい。

放課後……

「ハヤテ、そのまま三千院家に行くのか？」

「ええ。というより住み込みで執事をやっているのです。」

「そうか。それじゃ、一緒に帰ろう。俺の家も三千院の方向だから。」

「ハイ。」

という訳で、僕達は一緒に帰れる事になった。

暫く僕達は歩きながら話をしていると、

「あ、二人とも、今帰り？」

ヒナギクさん、愛歌さん、千桜さんの三人に会った。

「ハイ。ヒナギクさん達は、生徒会の仕事ですか？」

「ええ。まだまだやる事が沢山あるからね？」

大変だなあ。この学園をまとめるのは並の事では無いだろう。
なんせ初等科、高等部までがある学園だ。

だから三人とも凄い、本当に。

「アラ？真田君じゃありませんか。」

「ああ…愛歌さん。こんにちは…？」

気のせいかな幸久君から冷や汗が出ているような…

「相変わらず、女性恐怖症は治ってないんですね。」

「いやいや、何とか順調のようなそうでなくもない事もないような

…」

「アラ だったらまた“アレ”やってみます？」

「……………」

愛歌さんの目がSモードに入ると、幸久君は真っ白な顔でろれつも回っていない様子。

「コラ、あんまり困らせない。」

「残念ですわね。」

ヒナギクさんは呆れながら愛歌さんを止める。

「それじゃ、二人とも。また明日ね。」

「ごきげんよう。」

「失礼します。」

三人は時計塔に向かって行った。

「幸久君……？大丈夫ですか？」

「人は空を飛べない………」

虚ろな目で空を見上げると笑ってみせた。

絶対に大丈夫じゃない、コレ…

一体何があっただんだ！？

～三千院家前～

「それじゃ、僕はここで。」

三千院家の前に到着したので幸久君とはここで別れる事になる。

「ああ。あ、そうだ。」

「……………」

「いや、まあその……………なんていうか、敬語外してくれて構わないぞ？」

「え？でも……………」

「いや？嫌なら良いけど……………外した方が……………友達らしいかな、というか……………」

「あ……………」

友達……………」

まだ会って1日しか経っていないけれど、そんな風に思ってくれていることがとても嬉しかった。

「じゃあ、これからよろしく。幸久君！」

「おお！こちらこそよろしくな、ハヤテ！」

僕は握手を改めて交わす。

そして僕はお屋敷へ、彼はその先へと帰って行った……………」

「
　　」

敷地内を歩く僕の足取りは上機嫌。鼻唄まじりに軽やかな歩調。

同級生の同性の友達が出来た事がそうさせているのだろう。

これからはもっと学園生活が楽しくなりそうだな

作者

（つーかどんだけ男友達がいなかったかかっていう話だよね？）

*

「へえー、もうこんなに来上がったんですね。」

「ふむ。当然だな！三千院家最強の大工陣を集めたんだ。あと3日もあれば完成だろう。」

目の前には何故かスナックと書かれた看板と中身もバーのような空間だった。

でもこれは一階でどうやら万事屋自体は二階にあるらしい。

「いや〜、凄いですね！銀さん、まんまお登瀬さんのスナックじゃないですか。」

新八君はその様子に感心しきっている。

一方、銀さん達は……

「お！ババアが隠してたへそくりまであんど！？ラッキー」

「あー！？こんなところに酢昆布ネ！」

「つーかどんだけ再現率高えーんだよ！？ありえないでしょ！？」
まだ工事中なのに中に普通に入った？

万事屋完成まで後3日！

第三十五訓 文武両道は学生の理想（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「糖分が足りねエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！」

ハヤテ

「どうしたんですか！？いきなり。」

新八

「気にしない方がよいよ。銀さんは定期的に甘いもの摂らないとイライラするんだよ……」

ハヤテ

「なるほど……」

銀八

「あゝ……何か面倒臭えゝ…もうダメだ。ハヤテ代わりに頼む。」

ハヤテ

「ええ！？ちよつと先生！？」

銀八

「返事が無い……ただの屍のようだ（銀八裏声）」

ハヤテ

「……分かりました。では質問です。『この小説に葛葉キリカ（字合ってる？）は出てくる？』
では、ズバリ答えましょう！
……葛葉キリカって誰？」

ナギ

「何でも理事長代理らしいぞ？」

ハヤテ

「居ましたっけ？そんな人？」

マリア

「実はアニメのみの登場らしいですよ。」

ハヤテ

「そうだったんですか!？」

……実は作者はアニメは全く見てないんです？銀魂は毎日漫画もアニメも見ているんですが……
なので、作者がアニメを見て、そのキャラについて分かったら登場させると思います。」

新八

「聞くところによると相当な甘党らしいですよ。」

ハヤテ

「だったら先生と気が合いそうですね？」

銀八

「返事が無い……ただの屍のようだ（銀八裏声）」

ハヤテ

「……………」

「で、ではまた次回！」

第三十六訓 どんな事でも腐らない根を持って（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「ワンピースの最新巻が発売しましたね…なんかジャンプでも新展開が始まりましたし、ますます熱いですよ！」

ハヤテ

「クラウドさん……」

クラウド

「では、始めます！」

第三十六訓 どんな事でも腐らない根を持って

人生墮ちるところまで墮ちれば、後は上がるだけ…

なんて言うが、どん底つてのが何処にあるのか分からない。

とにかく思い出すなは悪い事ばかりだった。

度重なる不運の連続。それに伴いバイトもクビの連続。

それでも何とか立ち上がってやってこれたのは、アパートを紹介してくれたハヤテ君、家賃延長しても何とか待ってくれる大家さんへの感謝だった。

しかし、神様も悪魔じゃ無い…

毎日そんな想いを胸に戦ってきた俺に、神様は“就職”と言うプレゼントを与えてくれたのだ。

他人からしてみれば、何大した事ない小さな仕事。

でも、これで俺は変わる気がする。

否！変わるんだ！マダオは“まるでダメなおっさん”じゃない“舞

“い戻るダンディな男”
それがマダオだ！”

まだ人も居ない早朝の浜辺で一人、俺は空に煙を吐いた。

第三十六訓

どんな事にも腐らない根っこを持って

2月も一週目に入ると、1月程では無いが無いがやはり寒さは身に染みる。

とりわけこの時期には何かと移動手段にタクシーが多くなる。普段自転車、電車で行く距離もタクシーで行く人が多い。

そう。俺の仕事とは……タクシーの運転手。人を運ぶ仕事だった。

前のようにグラスンはダメ、今回もグラスンを外してメガネでの労働だ。

しかし、昔のようにグラスンに対する執着心は無くなっていた。環境が変わり、俺の心境にも変化が起こったのか……

そんな自分を見つめ直すと、少し寂しくもあった……

*

タクシー運転手としてのここ二日間は存外有意義な時間だった。
何も江戸の時と変わらねえ…

愚痴を溢す客、夫婦仲むつまじい客、挙動不審な客、短気な客、礼儀正しい客もいれば手に負えない酔っ払いまで。

この仕事は目的地の決まった色んな人と接する。

やっぱり目的地が決まっているのは良い事だと思う。

俺もこの仕事で何か目的地を見つける事が出来るのだろうか。

そんな想いを胸に今日も俺はタクシーを走らせるのだ。

ブロロロロロ……

ガチャ…

俺はいつも通りタクシーの扉を開ける。

「お客さん、どちらまで？」

お客はタクシーに乗り込むと、

桂

「お客さんじゃない桂だ。」

「……ってズラツち！？久しぶりだな！」

桂

「ズラツちじゃない桂だ。長谷川殿ではないか。」

お客はなんとズラツちだった。

「銀さんに聞いてたけど、元気にしてたかい？」

桂

「ああ。長谷川殿も仕事が決まったのだな。グラスが無いから分
からなかったぞ。」

「仕事の為だよ。それで、ズラッチは何処まで行くんだい？」

桂

「そつだな…では日本の夜明けまで頼もうか。」

咲夜

「目的地言わんかい、アホオオオオ!!」

バキッ!

桂

「ぐぼあ!?!」

突如後ろからズラッチにツツコミが入った。

咲夜

「つたく、お前は…」

ん?自分…マダオやないか。」

「ああ、嬢ちゃん。……マダオって名前じゃ無いからね?」

そついえばズラッチはこの嬢ちゃんの所に住んでいると銀さんも言
つてたな。

咲夜

「なんや自分、タクシーの運転手やってるんか。」

「ああ、そうだよ。それでお客さん？目的地は？」

桂

「日本の夜明けま……」

咲夜

「ちやうわ！日本橋まで頼むわ。」

「ハイよ。」

ボタン…

扉を閉めて車を出した…

「ところで、嬢ちゃんは金持ちなんだろう？何でまたこんなタクシ
ーなんかに？」

咲夜

「ウチのリムジンだとでかくて邪魔になるからな。」

「ハハハ……なるほどなあ……」

流石お金持ちといったところだなあ。

*

「ハイ、到着だよ。」

咲夜

「おおきにな。」

自分、交通事故には遭わんように気を付けや」

桂

「せっかく見つけた仕事だ。大切にするんだぞ？」

「ああ、分かってるさ」

ボタン……

こうして、また次の発車を待つ。

すると、また人が近づいて来た。

ガチャ…

「お啓さん、どちらまで？」

ヒナギク

「すみません、白皇学園までお願い出来ますか？」

「…………お、ヒナちゃんじゃないか。」

ヒナギク

「アレ？…………長谷川さん！？どうしたんですか？」

「いや、ようやく仕事が決まってね。それがタクシー運転手だったんだ。」

ヒナギク

「そうなんですか。おめでとつございます。」

「ハハハ…………、でどちらまで？」

ヒナギク

「あ、ちょっと待って下さい。もう一人来ますから」

ヒナちゃんは後ろを振り返ると、近くの角から袋を一杯に抱えたもう一人がやって来た。
かなり重そうだ…………

?????

「…………重え…………」

ヨタヨタと歩いてこちらにくる。

ヒナギク

「ほら、もうタクシーだから。」

先に入って。」

????

「うゝ……」

タクシーまで来ると、一杯の荷物を後ろの席に置いた。

………というか、

「銀さん!？」

荷物を全て置いた人間は坂田銀時であった。

銀時

「ふう……。お？長谷川さんじゃねーか。何やってんの?」

いや……。それ俺のセリフだから?

ヒナギク

「じゃ、私は助手席に…大丈夫ですか?」

「ああ。」

俺は助手席の扉を開けてやる。

ヒナちゃんも持っていた荷物を置いて助手席に座った。

銀さんもそのまま後部座席に座る。

ブロロロ…

取り敢えず車を発進させた。

銀時

「あゝ……肩痛え。つーかお前人使い荒いのな。」

ヒナギク

「仕方ないじゃない？学園で必要なものがこんなにあるなんて。」

銀時

「いやいや、お前なら一人でいけたって。」

バコツ…

ヒナギク

「どついつ意味かしら？」

銀時

「スミマセン…」

銀さんは頭を擦りながら、隣の大荷物を改めて見ている。

銀時

「つーかどんだけ必要なものあるの？お前らの学園。」

ヒナギク

「皆お金持ちの生徒が多い上に、初等科から高等部まであるからね。」

「

銀時

「にしても……疲れた。」

ヒナギク

「今更文句言わない。それに貴方暇だったでしょ？」

銀時

「暇じゃないからね？今日も銀さんは労働者を苦しめる悪しき台を倒す為にパチンコ屋に……」

ヒナギク

「それを暇って言うんでしょ！！」

なるほど。つまりこつという事だった。

今日、ヒナちゃんもは学舎の生徒代表で様々な行事に必要なものを買うために買い物に行った…

しかし、一人じゃとても持てない量でどうしようかと思ってたところ
にブラブラと暇そうだった銀さんに会って、パフェを奢るとい
う約束で付き合っただけで貰ったらしい。

しかし……本当に凄い荷物量だ……

銀時

「オメー本当に奢ってくれよ？」

ヒナギク

「分かってるわよ。」

「ハハハハ……」

*

「到着だ。」

白皇学園前に到着した。

ヒナギク

「ありがとうございます、長谷川さん。お仕事頑張ってくださいね。」

銀時

「また張り切り過ぎてへマすんなよ？」

「ああ、ありがとうございます。二人とも。」

銀さんは大量の荷物を抱えてタクシーを降りる。

銀時

「……………で？何処に持っていけば良いんだ？」

ヒナギク

「時計塔までお願い。」

銀時

「……………遠くね？」

銀さんはあからさまに面倒臭そうな顔を見せた。

まあ、あれだけの荷物ならねえ…

ヒナギク

「アラ残念 好きなケーキもご馳走しようと思ったんだけど？」

銀時

「ほらモタモタするな！さっさと行くぞ。」

メチャクチャ簡単に落ちていた！

ガチャ…

また次のお客だ…

「ハイ、お客さん。どちらまで？」

幸久

「目的地？そっだな……あの夕日の向こうまでかな。」

真司

「どの夕日じゃ……済まぬ、練馬区の三丁目まで頼む。」

この学園の生徒と思われる男の子が二人乗ってきた。

幸久

「真司……お前は分かってない！青春の夕日とは目に見えない所にあるんだ！」

真司

「女性恐怖症の奴に青春云々言われたくないんだけど！？」

俺は扉を閉じようとするど、

美希

「ちょっと待った！我々も乗せて貰おう。」

理沙

「目的地は彼等と同じだからな」

泉

「大丈夫かな？澳門君？真田君？」

三人の女子生徒が走ってやって来た。

「お客さん？どうします？」

真司

「我々は一向に構わんどぞ？」

幸久

「……………え！？」

美希・理沙・泉

「ありがとう！」

真司

「では我は助手席に行こうかの。」

着物の学生はそう言って、後部座席から助手席に移ろうとする。

幸久

「いやいやいやいや！？真司、待て！待ってくれ！」

真司

「青春の夕日に向かって走るんじゃろ？」

ニヤリツと笑って着物の学生は助手席に座った。

幸久

「真司イイイイイイ！貴様アアアア！」

美希・理沙・泉

「お邪魔します」

幸久

「ギヤアアアアアアアアアア！」

江戸でもどこでも、この賑やかさは変わらないな…

それじゃ、出発するか…

ブロロロ…

そんな訳で五人を運んだ…

*

ガチャ…

また、お次のお客さんだ…

「お客さん、どちらまで？」

姫史

「そうだな…幼女達の永遠の愛を探しにな…」

バコッ！

薫

「違うだろ馬鹿。すみません、秋葉原までお願いします。」

姫史

「フツ…素直じゃないな、お前は。」

薫

「何がだよ…？」

「んじゃ、出発しますよ。」

ブロロロロロ…

本当に、この仕事は本当に色々な客と接する事が出来る。

マリア

「二つ先の商店街までお願いします」

それは確かに有意義な事だし、時間であった。

比呂

「すみません、仕事サボりたいんで人目の付かない所に。」

それは、他人を見るだけでなく、自分自身を見つめる事にも繋がっているようにもかんじた。

サキ

「えっと…レンタルビデオショップ橋までお願いします。」

ワタル

「悪いな、お願いします。」

しかし、何か心が引つかかっている。

それが何かは分からない。

ただ……

霧崎

「さつき髪が茶色い奴乗ったろ？そいつに乗車料全部付けていてくれ。」

やっぱりグラスアンが無いとどうもしっくり来ない……

*

もう今日の俺の仕事の時間は終わりだ…

だから次の客が今日最後の客になるだろう。

ガチャ…

「お客さん、どちらまで？」

ハヤテ

「あれ？長谷川さんじゃないですか！？」

「おお！ハヤテ君か。」

今日最後の客はハヤテ君だった。

ハヤテ

「おめでとございます！仕事決まったんですね。」

「ああ、お陰様で。こうして頑張れたのもハヤテ君のおかげだよ。」

ハヤテ

「いえ……、僕はそんな。」

では、三千院家のお屋敷までお願いします。」

「ハイよ。」

バタン…

*

三千院家の屋敷まではかなり距離があったので、ハヤテ君は助手席に座って暫く話し込んでいた。

聞けば彼も相当不幸体質らしく、共感するところも多かった。

「……………ん？」

信号待ちをしていると、やたら偉そうな二人組がこちらに近づいて来た。

ドンドン！

「……………何でしょうか？」

窓を叩かれたので、取り敢えず開けて尋ねる。

?????

「こちらは国会議員の長田村さんだ。急用でこのタクシーを使用した
い」

秘書と思わしき男がずけずけとやってくる。

「いや……今は客を乗せていて……」

長田村

「君……誰に向かって言っているか分かってるのか？」

「いや……あの……」

すると、

ハヤテ

「長谷川さん。僕は急いでいないので大丈夫ですよ」

ハヤテ君はそう言って俺に微笑む。

長田村

「ふん。そういう事だ。早く出したまえ。中村！」

中村

「ハイ……」

中村と呼ばれた秘書は勝手にタクシーの扉を開けると、太った国会議員を中に入れて自分も入る。

「……………わかりました」

唇を噛みしめて、扉を閉めようと……

ドンドン！

???

「助けて下さい！」

「!?!」

また急に窓が叩かれる。

目をやると、青い顔をした青年が一人。

「何だ!?!どうした?」

青年

「運転手さん!あっちにいる俺の彼女が!?!急に苦しみ出して!」

俺は彼が指差す方を見ると、歩道で倒れて苦しんでいる女性が一人。
ハヤテ君が飛び出して彼女の元に行くと、少し様子を見ると直ぐに
戻ってくる。

ハヤテ

「長谷川さん!!大変です!彼女、破水してます!」

「……………!?!」

オイオイオイ!?!どうする?どうする?もしこのままデブ国会議員
達を降ろしたらクビにされるかもしれない。

それだけじゃ無い、もしかしたらもう二度と仕事につけないかもし

れない。
そんな事は……

目に苦しんでいる彼女が入ってくる。

俺は……俺は……

「ハヤテ君、産婦人科はこの辺にあるか？」

ハヤテ

「戻らないとないですね。」

「分かった。戻ろう。」

中村

「何を言ってるんだ！？君は！先生の方が先の客だぞ？」

長田村

「君は私よりそいつらを優先するのか？」

デブともやしが反論し始めた。

「……すみませんねえ。でもこのままあの女性を放っておいたら大変ですから、すみませんが降りて他のタクシーを拾ってもらえませんか？」

長田村

「中村！」

中村

「ハイ！」

もやしの秘書がアタツシユケースから大量の金をみせる。

長田村

「貴様ら愚民どもにはもつたいない程の金をやる。ついでにそのカップルにもな。だから早く出せ。急用なんだよ、こっちは。」

ピキッ…

ハヤテ

「貴方達は……今の状況が分かっているんですか？彼女は今にも産まれそうな危険な容態何です！このままだと命も危ない！」

長田村

「だから今金を渡しただろう。」

そもそも私は国を背負っている国会議員だ。そんな愚民一人の出産程度の事より大切な用があるんだよ。分かっただらとつと出せ。」

ハヤテ

「…………お前等!？」

俺はハヤテ君が振りだそうとした拳を止めていた…

ハヤテ

「長谷川さん!？」

「止めとけ。国会議員様になんて事するんだ。」

長田村

「ほう。運転手の方は教養があるようだな。」

「いえいえ、そういう事では無くてですな……………」

俺は大きく溜め息を吐くと、

「テメーらなんざこの俺の拳で十分つてんだよオオオオオオオオオオ!
……………」

デブ国会議員に向かって拳を振り抜いた!

長田村

「ぐはっ!？」

デブ国会議員は後部座席から道路に吹き飛んだ!!

中村

「先生エエエエエ!!! き、貴様アアアア!!! 何をしたか分かって……」

「……っせーよ」

中村

「……?」

「うるせーっつてんだよ、このもやしがアアアア!!!」

今度のもやし秘書に向かってアッパークット!
もやしも道路に吹き飛んだ。

ハヤテ

「!?!」

「オイ! 坊主。」

俺はメガネを投げ捨てると、ポケットからグラスンを取り出してかけた。

「彼女連れて早く乗れ。時間ねーだろ」

ハヤテ

「長谷川さん……」

青年

「ハイ！ありがとうございます！」

ハヤテ

「……………やっぱりグラスンが似合いますね。長谷川さん」

「そうらしいな…」

ハヤテ君は案内頼む。」

ハヤテ

「ハイ！」

*

キキーツ!!!!

タクシーは煙をたてて、産婦人科に滑り込む。

「早く行け!.....頑張れよ。」

青年

「ありがとう運転手さん!

千代、もう大丈夫だ!頑張れ!」

青年は彼女を支えながら産婦人科に入って行った。

ハヤテ

「すみません、長谷川さん。僕のせいで.....こんな事に.....」

「馬鹿野郎.....俺一人でも同じ事をしたさ.....」

俺はそういつと助手席の扉を開ける。

「さて、屋敷に帰るんだろ?」

「.....ハイ」

ボタン……

人生において、どんな事でも腐らせてはいけない根っこがある。
しかし、多くの人間がそれを腐らせても構わないと思っている。
貫く人間は大抵痛い目を見る事になるからだ。

確かにそれは堅実な生き方なのだろう。

ただ……

どんなに痛い目に遭っても、それを貫き通し、何回も潰される。
それでも、また立ち上がって笑っていられば中々の人生だ。

俺はそう思っている。

マダオのマは舞い戻るマジやねえ……

真っ直ぐのマ……

真っ直ぐ生きてダメでも良い男……
それがマダオだ……

真っ直ぐ伸びるたった一つの根よ……
たまたま

そうして俺は今日も、空に向かって煙を吐き出す……

第三十六訓 どんな事でも腐らない根を持って（後書き）

あとがき

新八

「因みに、あの後長谷川さんはどうなっただんですか？」

銀時

「ん……？ああ、普通にクビになっただらしいぞ」

新八・ハヤテ

「えエエエエエエエエエ！？」

神楽

「まあ、世の中そんなに甘くないって事アル」

長谷川

「……ハハハハ……」

新八

「応援しますから、頑張りましょう！」

ハヤテ

「僕も出来る限り協力しますから！元気だして下さい！」

神楽

「やっぱりマダオは就職したらマダオじゃないアル」

長谷川

「ちよつとオオオオオオオ！？」

銀時

「ま、次回もよろしくな。」

第三十七訓 時にはちよつと兩宿り(前書き)

クラウドの前書きの館！

クラウド

「いや、この小説も読了時間が400分を超えました。飽きつぱい作者がここまで続ける事が出来たのも、一重にこれを読んでくれる皆さんのおかげです。本当にありがとうございます！」

ハヤテ

「本当に……よくここまで出来ましたね。そしてこれからもよろしく願いますね」

クラウド

「そろそろ私の出番が……」

神楽

「今回は遂に万事屋完成アル！」

新八

「こつちでも稼ぎが悪いようにならないように気をつけようね？」

神楽

「これで万事屋トリオ再開アル！」

クラウド

「……………」

ハヤテ

「で、では本編です？」

第三十七訓

時にはちよつと雨宿り

ザアアアアア……………

「……………ふう」

パタンと本を閉じて、千桜は窓の外に目を向ける。

生憎の雨模様。

ここ数日、ずっと晴れていた事もあってその反動のように本日は今年一番の大雨らしい。

ザアアアアア……………

放課後、ひっそりとした生徒会室に強い雨音が響いている……………

ヒナギクも含め、他の生徒会役員は既に帰っている。
千桜も本来なら雨が降る前に帰る筈だったが、諸事情によりこっし
て雨宿りしているのだった。

ザアアアアア……………

雨は一向に止む気配は無い

第三十八訓 時にはちよっと雨宿り

二時間前……

放課後の生徒会の仕事を終えたヒナギク、千桜、愛歌は帰宅へと校門に向かって進んでいた。

土曜日は午前授業なので、放課後といってもまだ13時を少し過ぎたところ。

……しかしその空は不吉なほど灰色に覆われている。

「もう今にも降ってきそうな感じね」

「そうですね。早く帰……」

言い終わる前に千桜は立ち止まった。

「……千桜？」

「どうかしたの？千桜さん？」

「いえ……」

千桜の目に入ってきたのは、遠くの時計塔の近くにある見慣れない段ボールだった。

二人はまったく気がついていない様子。

「……………」

千桜は暫く黙って何やら思考を巡らせると、

「二人は先に帰っていて下さい」

「……………え？」

「学校に大切な用事があったのを忘れていました。少し時間がかかるから、先に」

「あ、ちよつと!？」

千桜はそう言うと、くるりと二人に背を向けて時計塔の方へ戻って行った。

「何だろう?大切な用事って……」

「学校の売却に関する書類とかかしら?今なら良い値が……」

「それは絶対違うわね?」

「ともあれ。もう雨が降ってきてそうですから、私達は先に帰りましょう。千桜さんもすぐに帰宅すると思っわ」

「……………そうね。でも本当に、」

ヒナギクは空を見上げる。

「嫌な天気ね……………」

*

「……………やっぱり」

千桜は時計塔の近くまで来ると、溜め息を吐いた。

彼女の前には薄汚れた段ボールがぽつんと一つ。

その中に……………

「ワン！」

小さな犬がいた。

毛並はかなり乱れていて灰色に近い色になっていたが、所々の綺麗な部分から察するに、もとは綺麗な銀がかった白い毛だったのだろう。

「一体誰が……………」

段ボールの正面には『拾ってやって下さい』と雑な文字で書かれていた。

(……ひどい話だな。動物側の気持ちを考えた事があるのだろうか?)

千桜は仔犬を見つめる。

(本当は……時計塔の中に入れてあげられれば良いのだけれど……)

基本的にはペット類禁止。

先生達に見つかりと色々と面倒なのだ。

ポツ……ポツ……ポツ……

空からは疎らに雫が落ちてきた。

「降ってきたか……」

ポツ…ポツ、ポツ、ポツ、パラパラパラ…

雨足はドンドン早くなってきた。

千桜はもう一度仔犬を見つめると、時計塔の入口に向かって歩き出
した。

(傘……忘れちゃったな……)

………という訳で、現在に至るのだが。

ザアアアアア………

一向に雨は止む気配が無い。むしろだんだん強まってゆく……

「……………はあ」

千桜はどうしたものかと溜め息をすると、テーブルに…

「いやあ、ますます強まってくみてえだな。どうするかなコレ。今のウチに帰った方が良いのかコレ？」

「……………」

ダルそうな声に、死んだ魚のような目をした白髪天然パーマの男…

「何やってるんですか、銀時？」

坂田銀時であった。

「何って……………見て分からねえのか？」

「分からないから聞いてるんですけど……………」

銀時の手には生クリームチューブ。目の前にはホールの形をしたスポンジケーキが置いてあった。

「何で生徒会室でケーキなんて作ってるんですか……………えらく本格的だし」

「俺定期的に甘いもの摂らないとダメなんだよ」

銀時はホールのケーキに苺をトッピングする作業にうつる。

「だったらもっとお手軽なものにすれば……
そもそもどうしてここに居るんですか？」

「そりゃ、アレだよ……適当に宛もなく歩いてたらこの学校に着いてて、取り敢えず甘いものを摂れる場所を探してここに来たようなそうでないような……」

「要するに何となく来た訳ですね」

千桜はケーキを口に運ぶ銀時を見て言った。

「まあ、そんな感じだ。つっても雨止む気配ねーからそろそろ帰ろうと思ってた所だけだな……」

窓の外に目を向けると先程より雨足は更に強まっていた。

「つーかお前は帰らないのか？」

「私は……色々あつてそうこうしているうちに雨が降ってきたので……雨宿りも兼ねてここに居るんですが」

待っても待っても雨は止まない事は言うまでもなかった。

「なら、送って行ってやるつか？」

「え？……でも、」

「雨は暫く止まねえだろうし、早く帰らねーと家の人も心配するんだ。傘一つしかねえからそれでも良かったら話だけだな」
銀時はケーキを口に運びながら言った。

「……じゃあ、お願いします」

「了解」

最後の一切れを食べると、銀時は立ち上がって出口に向かう。千桜も荷物をまとめるとそれに続いた。

時計塔の出口まで向かうと、銀時は傘を取り出した。
花柄模様の綺麗な傘だった。

「随分可愛いらしい傘ですね」

「いや違うから。コレは俺の趣味とかじゃ無いからね？屋敷にあったのがコレ一本で……」

真偽のほどは定かではないが、慌てて説明している銀時がおかしく
て千桜は少し微笑むと、時計塔を出る。

「早く行きましょう。もっと雨が強まってきましたよ」

「あ、オイ！？聞け！」

銀時も続いて時計塔を出る。

「……………？どうした？」

「いえ……………」

千桜は先程移動させた段ボールを見て止まっていた。

即興で作った屋根や千桜が入れてあげたスカーフはそのままだったが、

犬が居なかった。

もぬけの殻となった段ボールからは何とも寂しそうな雰囲気漂う。

（まさか……………）

千桜は辺りを見回すが、雨に打たれる地面と、木々が打たれる様子
しか見当たらず無かった。

（しまった……………禁止とか関係なく時計塔に入れてあげるべきだった

……)

悔しそうに唇を噛むと、

「すみません。銀時は先に帰って下さい」

「……………?」

「急な用事を思い出したので。すみません、では」
「な、オイ!？」

銀時が止める間もなく、千桜は走って行ってしまった。

「どろしたって……………ん?」

銀時は先程まで千桜が見ていた段ボールに気がついた。

「……………コイツは……………」

銀時はそっと溜め息を吐くと、傘を一振りして雨露を振り払った。

馬鹿だった……

校則云々より、仔犬を中に入れてあげるべきだった……

まだあんなに小さいのに……

千桜は手当たり次第校内を回っていた。

いくらなんでも校舎内に入ったとは考えにくい。

高等部の校舎の周り、中等部の校舎の周り、小学校の周り……

雨に濡れようがまったく気にならなかった。

知らず知らずの焦りから、濡れている事すら気がつかなかった。

中庭、テラス（1F）、ガーデン……

ああ、もう！何て無駄に広いんだ、この学校は！

しかし……

何処を探しても、あの白い仔犬は見つからなかった。

あの時、私が塔に入れてあげれば……

千桜は沈んだ心を引きずりながら、時計塔に足を進めていた。

少し歩を進めるだけで風が見にしみるように身体を突き抜ける。
そこで千桜は如何に自分が濡れているかに気が付いた。

雨は相変わらず振り続けている……

*

千桜は段ボールの前まで来た。

もしかすると戻っているかもしれない……
そんな期待はすぐに破られた。

空っぽの段ボールにはスカーフも見当たらない……

誰かが取って行ってしまったのだろうか？

千桜は疲れたように段ボールの前に座りこんだ。

他人に話せばそんな事くらいで、と一笑されるかもしれない。

けれど……

何時だって気づいた時には遅いものだ。後悔先に立たずとはまさに
この事だ。

冷たい1月の雨は、無情にも彼女を打ちつける。

寒いな……………

どのくらい経ったのだろうか……………

一分くらいかもしれないし、一時間以上かもしれない。

不思議な事に、私の頭上には冷たい雫は落ちて来ていない……………

雨は止んだのだろうか？

でも雨音は激しく聞こえる。

上を見上げると、

一面が綺麗な花模様……………

「よお……………探しものはコイツかい？お嬢さん」

聞き慣れた声…

振り返ると、

見慣れた白髪頭に白と青の着物……
それを見ると千桜は小さく溜め息をついた。

「……………何してるんですか、銀時……………」

銀時の手には、スカーフにくるまれたあの白い仔犬がいた。

「取り敢えず立て。この体勢だと俺が風邪引いちゃうから」

銀時は千桜に傘をさしているの、彼自身が傘に入っておらず雨に濡れる形となっていた。

「……………」

千桜はゆっくりと立ち上がると、銀時は仔犬を彼女に預ける。

千桜は仔犬を見て呟いた。

「一体何処に……………？」

「時計塔の周りに居たんだよ。何度も周りを回ってな」

時計塔……

そういえば探していなかった。というよりそこには居ないと思っていたのだ。

「何故……そんな所に……」

「コイツをずっとくわえてやがったぜ。」

銀時は千桜に何かを手渡した。

「コレは……?」

綺麗な色をしたビー玉が彼女の手の内で輝いていた。

「この犬を助けてやったんだろ、お前。雨風凌げるようにしてやったり、寒くないようにスカーフ巻いてやったり」

「……………」

「ビー玉はコイツの大切なものなんじゃねーか?」

仔犬は手の平に乗ったビー玉を見て、嬉しそうに見つめる。

「コレを……私に届ける為に?」

「ワン！」

仔犬は当然とばかりに吠えてみせた。

「随分律義な犬だなあオイ。今のご時世並の人間でも、んな真似出来やしねえ奴の方が多いつてのに」

銀時はニヤリと笑うと仔犬を撫でて言った。

「受け取ってやれよ。ソイツの気持ち」

千桜は暫く仔犬をじっと見つめると、

「……………ありがとう、大切にする」

ビー玉をしっかりと握りしめて言った。

「んじゃ、コイツをどうするか、だな」

「本当は拾ってあげたいけど……………家は両親がアレルギーでペットがダメなんです……」

沈んだ様子で俯く千桜。だが、

「ならもう一つのお前の“家”に聞いてみれば良いじゃねーか」

「え？」

「普段あれだけ働いてんだ。ご主人様に一つくらいお願いしてもバチは当たらないと思うぜ？」

「……………あ、」

千桜は何かに気付いたように顔をあげる。先程の暗い表情はそこには無かった。

「そうですね」

「そうと決まりや、早いとこ行くぞ。これ以上濡れると風邪引くぞ、お前」

銀時はさしている傘を振ってみせる。

「そう言う銀時もずぶ濡れですね……………」
「違いーよ、お前コレさっきトイレ行った時洗面所の蛇口が破裂して……………」

「分かりました。そういう事にしておきます」

「……………はあ、」

銀時は面倒臭そうに頭を掻くと、すたすたと先に歩いていった。

「何突つ立ってんだ？置いてくぞ？」

千桜は一瞬微笑むと、すぐにいつもの表情に戻して銀時の後を追っていった。

「随分天気とは不釣り合いな傘ですね」

「だから俺の趣味じゃねーんだよ……」

数日後……………

～愛沢家～

咲夜は庭にあるテラスで座って読書（お笑いの本）をしている。と

……

「よお」

銀時が近づいて来た。

「お、銀時やん。どうしたん自分。何か用でもナギに頼まれたん？」

「いや…………別にコレといって用はねーけど……

ワンコロ元気か？」

「ああ、ギンか。元気やで。

正直、可愛くて仕方ないねん。ウチはお笑いと可愛いものには弱いんや」

「そいつぁ、良かったな。つーか何でよりによってギンなんて名前なんだよ？」

銀時はテラスの柱に寄り掛かって咲夜と話していた。

「ハルさんも小太郎もそれが良いっていうもんやから。提案したんはハルさんやけどな」

「どっかの馬鹿ネコじゃあるめえし……」

「そっぴや、ヅラも確か相当なペット好きだったな」

「せやな。毎日ギンをもふもふしたりとかしてるな」

「ま、上手くやってんなら何より。そんだけだ……」

ガチャ……

「アラ？銀さん、いらっしやいませ」

「ワン！」

千桜基ハルとギンが出てきた。

「オメーホントにキャラ多彩だな……どっちが本当の……いいだだだだだ！？」

「それは言わない約束ですよ？」

笑顔で思いつきり足を踏まれていた。

ギンは銀時に擦り寄ってくる。

「ワン！ワン！」

「よお、随分と元気そうじゃねーか」

ギンはヒョイと抱き上げられる。

(いい顔してやがんな……)

銀時にフツと短く微笑んだ。

「ワン！」

「な、オイ！？」ギンは手からスルリと抜けると銀時の頭の上に乗った。

「バツ、オイ何やってんだ！降りろ！？」

「ワフツ……」

「テメツ！そこで和んでんじゃねー！！」

「フーか痛い！？爪当たって痛い！！」

止めて！？これ以上銀さんの髪をイジメないであげてエエエエエエ！
「！」

ギンはコロコロ頭で転がっている。

「アレやな。ギンにとって銀時の頭が同類に見えたのかも分からん

な
」

「知らねーよ！何の解説!？」

「つかお前ら早くコイツを降ろしてくれ!…このままじゃ俺の繊細な髪がアアア!？」

銀時は尚も頭と格闘している。

「あれ？ハルさん、そんなペンダントしとった？」

「オイ聞けエエエエ!!！」

千桜の首をかがっていたのは綺麗な宝石のような玉だった。

「コレですか？コレは………」

大切な友達からの贈り物です

第三十七訓 時にはちよつと雨宿り(後書き)

教えて!! 銀八先生

銀八

「早く席に着けよ、テメーら。

今日の質問」

『姫史と神楽はいつ出会う』

ズバリ答えます!

次の質問『姫史とクラウドスの再会はいつ?』の答えと同時期でしょう。いつかは分かりません!」

ハヤテ

「それがクラウドスさんの初登場になるかもしれないですね」

銀八

「ま、そうだった。続いて一仔犬のプロフィールです」

ギン

【年齢】

生後半年〜一歳

【誕生日】

2月4日(拾われた日)

【血液型】

？

【家族構成】

????

【体長】

26センチ

【体重】

1.5キロ

【好き・得意】

走る事・散歩・運動・千桜・咲夜・銀時の頭の上

【嫌い・苦手】

段ボール・雨の日・狭い所

千桜が拾ってきたとにかく元気な仔犬。生後半年〜一歳くらいの柴犬。

綺麗な白い銀がかった毛並は庭を走り回ると美しく光る。

千桜や咲夜には特になついている。ツラはまあまあ。

何故か銀時の頭の上がお気に入り。

どっかで見たことある名前なのは突っ込まないという事で（笑）

銀八

「フー訳で仔犬の紹介でした〜」

新八

「ホントどっかで見たことある名前ですね」

銀八

「いいんだよ。作者が良い名前思い付かなかったんだから」

ハヤテ

「まあ、作者の理由は良いとしても、小説の中での名前の由来はどうなんだろうかね？」

銀八

「ああ、それはまた今度本編でやんじゃね？」

新八

「んなアバウトな……」

銀八

「んじゃ、また次回」

第三十八訓　　なんとと言っても住み慣れた我が家（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「万事屋も遂に始動ですな」

ハヤテ

「まあ、僕達もできる事があればお手伝いしたいですね。万事屋って結構危険な仕事も多いみたいですし」

クラウド

「これは私の出番を増やすいい機会かもしれませんな」

ハヤテ

「でもクラウドさん。今回出番少しあるみたいですよ？」

クラウド

「な、何だとオオオオ！？」

ハヤテ

「まあ、取り敢えず万事屋の皆さん！お願いします」

「猫探しから浮気調査、大工に店番、お使い、除霊、祭準備に護衛まで。」

神楽

「頼まれればどんな事でも引き受けるアルよ」

銀時

「つー訳で、『万事屋銀ちゃん三千院支店』遂に開店だよ」

万事屋

「どうかよろしくお願いします!」

クラウド

「では、本編です」

第三十八訓　　なんと書いても住み慣れた我が家

「「おお〜!!!!」」

「どうだ?」

「完璧ですよ!まさしくそのまま。まごう事なくそのままです!」

「看板の汚れ具合、欠け具合、階段の感じもそのままアル!」

「ま、当然ですな。三千院家最強の大工達ですから」

.....

「居たのか、クラウド...」

「ずっと居たでしょ!?初登場でこの扱いですか、お嬢様アアアアア
ア!?!」

日も少しずつ傾いてきた頃...

新八と神楽は目の前の建物にひたすら感動していた。

「……………それにしても、ここにお前達は住んでいたのか」

「下の階はスナック…上の階は万事屋…随分不思議な建物ですわね。」

「でも、何だか温かさが感じられますね」

ハヤテ達二人も不思議そうに建物を見上げている。

多少日程が遅れはしたものの……………

三千院家驚異のスペックにより遂に完全再現！

……………そう。万事屋が完成したのである。

「いや、でもこれで万事屋再開だね。神楽ちゃん。」

「そついえば銀ちゃんはどうしたアルか？」

神楽は周りを見回す。

「銀さんならお使いから帰った後、また用事があるって出て行っちゃいましたよ」

「用事アルか？」

「なんか、『男には負けられない戦いがある』とか言っていましたけど……」

神楽にハヤテは首を傾げて答える。

「ああ……放つといていいよ。当分帰って来ないから……」

「え？」

新八は溜め息を吐いた。

「あんなマダオの事は放っておいて早く中に入るネ！」

「まあまあ……それはお祝いの時の楽しみにとっておこうよ。」
中に入るうとする神楽を引き止める新八。

お祝いとは、万事屋完成のお祝いである。
皆でお祝いしようと、ハヤテが提案したのだった。

ヒナギクや歩、ワタルや咲夜、伊澄達も呼ばうとハヤテが先程学園で声をかけていたのだ。

そうして今に至る。

「では、私達はお祝い用の夕飯を用意してきますね」

「あ、僕も手伝いますよ」

新八もマリア達と一緒に屋敷に準備しに行った。

「よし、神楽！我々も仕事だ！

今日はSEEDのPHASE12と16を見てしまっぞー！」

「合点アル！」

ナギと神楽も屋敷に戻った。

第三十八訓 なんと行って住み慣れた我が家

「……………」

「……………」
パチンコ屋の前に無言で立ち尽くす男が二人。
言うまでもないだれうマダオ（まるでダメな大人）である。

しかし二人の顔に絶望の色は微塵もない。

「……………くっくっくっ……………」

長谷川さんよお……………」

「……………クククツ、銀さん……………」
不敵に笑う二人の男は天を扇ぎ見る。

そして……………」

「ああ、きつと今までの敗戦が積もりに積もった反動だよ。こんな
に勝てたのは」

二人はカウンターの席に着く。

「そいつぁ、おめでとう。んじゃ、今日は一杯サービスしてやるか」

「トーン……」

「済まねえな、親父」

「んじゃま、ちと早えが……」

「乾杯……!!!!」

（三千院家）

『次回、機動 土ガン ムSEED
PHASE17 カリ再び……』

プツン…

ナギはリモコンでテレビを消す。

「あの女腹立つアル！キをいいように弄んで！」

「まあ、それより見所は最初の地上戦だろ。キの初覚醒とOSの書き換えのやり取りはカッコイイからな。
因みにこの初地上戦の覚醒時に流れたの戦闘BGMはサントラ未収録でな！私はこれが是非欲しいんだが…」

ハイ、私も本当に欲しいです。

あのキが始めてバクウ達と戦って勝った時のBGM…

コンコン…

「お嬢様？そろそろ時間ですよ」

「む？もうそんな時間か…」

ナギはカーテンを開けると日も暮れて暗くなりかけていた。

「よっしゃ、万事屋でパーティーアル！」

ナギと神楽は部屋を出てハヤテと共に万事屋に向かった。

*

ガラッ……

「うおー!!」

屋敷の隣の新拠点、万事屋の扉を開いた神楽達。

新八は下のスナックでご馳走の用意を、マリアはまだ食事の仕上げをしている。

「へえ、ここに銀さん達は住んでいたんですか……」

「ふーん…随分変わった部屋だな」

二人は不思議そうに室内を見回す。

「久しぶリアル！この感じ、この空気!!」

ガラッ

「ここが銀ちゃんの部屋アル。それで、向こうの部屋の押し入れが私の寝床ネ!!」

神楽は部屋を開けて嬉しそうに説明してゆく。

「……ん？何だアレ？」

「糖……って書いてありますね」

二人は上にかけてある『糖』の文字を注視する。

「ああ、銀ちゃんのスローガンアル。」

「糖一文字って！？どんなスローガン！？」

「よくわかんないけど、取り敢えず銀ちゃんは甘いものが無いと生きていけないネ」

「ホント糖尿病になりますよ……」

神楽はまた中央に戻ってくる。

「普段はここで依頼を受けるアル。といっても滅多に仕事無いからグータラするだけだけどナ……」

「何かその様子は容易に想像出来るな……」

「ハハ？お嬢様、そんな……」

*

「あ、神楽ちゃん。どうだった、万事屋は？」

下のスナックに入ると新八とクラウドが三人に寄ってきた。

「そのままだったネ。至る所もまったく同じだったアル」

「ちょっと似すぎていて恐いくらいだよね…」

新八は上を見上げると苦笑してみせる。

「そういえば、三人は何処に住んでいたんだ？」

「「え`!?!」」

ナギは前から疑問に思っていた事を二人に尋ねた。

「そもそも、どうして三人は住む所が無くなったんだ？」

これはクラウドの質問。

「あ、あゝ!!それはですね、実は隣の建物の出火が原因で全焼しちゃって…」

「そ、それでなんやかんやで三人離れて離れになってここに流れ着

いたアル。」

完全にでっち上げの薄い嘘をつく二人。

「ふーん……」

「それは大変だったね……」

ナギは取り敢えず納得したらしかった。

ガラッ……

「お！おつたおつた！」

「よお……呼ばれたから一応来たぞ」

「こんばんわ……」

引き戸が開いて、咲夜達が入ってきた。

「咲夜さん、ワタル君、伊澄さん！こんばんわ」

「ああ、咲達か」

「にしても、銀時達が住んでいた所が出来たと聞いて来てみたけど……スナックやないか、ココ」

咲達もキョロキョロと室内を見回す。

「ああ、ココは確かにスナックですけど……
二階に万事屋があるですよ。銀さんはスナックの店主さんに家賃を
払って上で万事屋を営んでいたんです。僕と神楽ちゃんも万事屋の
従業員なんです」

「万事屋って……そんな仕事で生計立てられてたのか？」

ワタルは怪訝な顔で二人を見る。

「ハハハ……？」

まったく立てられて無かったですね……」

「だから年中金欠で家計も厳しかったんだヨ！」

「いや……威張って言うなよ？」

ナギは呆れた様子で突っ込んだ

「……………？」

銀時様が見当たりませんが……」

「せやな。何やってるんあのちゃんぼらん？」

「あのちゃんぼらんの事アル。きつとどっかで飲んでるネ」

二人に答える神楽。

「……………本当マダオだな？」

全員が呆れたように入口を見つめた……………

「いや、でも本当にツイてたな今日は」

「アレだな、まさしく無双の如しだったな。もう負ける気しねーよ」
居酒屋では相変わらず銀時と長谷川が飲んでいる。

「これは脱マダオスパイラルの予兆だよ！きつと今日をもって俺は

変わるのかもしれない！」

「良かったじゃねーか。これで逃げた奥さんも帰って来てくれるぜ、きつと」

「おうよ！」

二人はまだあまり酔ってはいないが気持ち良さそうに語り合う。

「今日は二人とも本当に美味そうに酒を飲むね」

「ハッハッハ！」

ガラッ…

「いらっしやい！」

また客が入ってきたようである。カウンターに向かって歩いてくる。

「アレー？アンタ…この間の天パーじゃない」

「ん？」

銀時達に近づいて来たのは、なんと雪路であった。

「な！？テメーはあの時の馬鹿教師！
つーか止めてくんない？その呼び方」

「馬鹿つてどういう意味じゃー!!先生だぞー!!」

……とまあそれはおいといて、随分嬉しそうじゃない?」

「いやもうアレだよ。フィーバーしまくりというかね?勝ちまくったんだよ、今日は」

銀時は心地よさそうに酒を口に運んだ。

「本当に!?じゃ、奢って!」

「ハイ!?何故!?!」

「じゃ、私は焼酎水割りで」

「オイ!?人の話聞けエエエ!?!」

雪路は注文を始めた。

「ま、良いじゃねーか銀さん。今日はもうパーとやるっ」

「そうそう!大丈夫よ私も手持ちいくらがあるし」

「オメーらどんだけ速攻で意気投合してんの……」

ま、いつか今日は……」

銀時は仕方ないと溜め息を吐くと……

ガラッ……

「ん？何だ先に来てたのか雪路……………」

「っーかもう飲んでるよアイツ……………」

薫と姫史が入ってきた。

「あ！こっちこっちー！！」

雪路が二人に向かって手を振る。

「お前……………坂田銀時ではないか」

「……………？誰だっけお前……………」

二人は銀時達の席に近づくと、姫史が銀時の前に出た。

「何だもう忘れたのか？」

「……………ああ、ハイハイ。あのロリコン教師ね……………」

「男に蔑まされても何ら嬉しくわないわアアアア！！！！」

バコッ

「いいから、取り敢えず座れ」

薫は雪路の隣に、姫史はそのまた隣に座った。

「……で？何でお前はこの二人と？」

「斯々然々よ」

「書き物つて便利だよな……」 姫史と薫は溜め息をついた。

「じゃ、私が担任復帰したのと彼等二人の勝利を祝って、パーとやるぞオオオオ！！！！」

そんなこんなでよく分からない飲み会が始まった……

く三千院家万事屋く

ガラッ

「こんばんわ……」

「お邪魔しま……」

「あ！ヒナギクさん、西沢さん。来てくれたんですね」

万事屋に入ってきたのはヒナギクと歩だった。

「へえ、ここが銀さん達が住んでいた所なんだ」

「不思議な感じの建物ね」

二人は物珍しそうに視線をさまよわせる。

「あ！西沢さん、ちょうど良い所に！」

新八が二人に向かって手招きをする。

「アレ…どうしたの、新八君？」

「いや、実は…ここでカラオケをしようって話になったんですが、
そう言っつて新八はスナックのコーナーを指差す。

「その前に僕の大ファンの歌手の曲も入ってたので是非皆さんに聞いて貰いたくて、」

「うん、良いよ。どんな曲なの？」

「いや、そうじゃなくて、西沢さんに歌ってもらいたいんですよ」

「へ！？何で私？」

歩はあっけらかんとした表情で新八を見る。

「僕の聞く限り…その歌手の声と西沢さんの声は瓜二つなんです！だから是非！」

「え、えっと……」

歩がどうしようかと迷っている...

「新八、止めておいた方が良いぞ？ソイツ、歌下手だから」とナギが一言。

「な!？」

.....わ、分かったよ!見てなさいナギちゃん!今日こそ私の本当の実力を見せてあげるわ!」

「ふん!ハムスターなど返り討ちにしてくれる」

歩が歌う記念すべき一曲目は.....

新八の大ファンの歌手の曲、
もうお分かりだろう。お通ちゃんの曲『放送コードがなんぼのもん
じゃい』である。
何故向こうの世界の曲がこちらにあるのか。それは三千院家最強の
大工達だったから.....

「恐くなんか〜無いもん〜」

こうして万事屋ではカラオケ大会が始まった.....

*

「皆！道ずれネクロマンサー！！！」

ワアアアアアアー！！！！

歩が歌い終わった。
意外と上手かったようである。

新八は周りを見回した。

「どうでしたか？お通ちゃんの曲は……」

「「どんな曲だアアアアア！！」」

「ほべっ！？」

ナギと咲夜のダブルドロップキックがヒットする。

「た、確かに！確かにオモロかったけど、こんなピーだらけの曲があるかア！」

「曲じゃ無いだろ！？危ない箇所がそこかしこに仕掛けられてるだろ！」

「もうその馬鹿は放っておいて次、いくアル！」

神楽が簡単にまとめて、次へ。

「じゃあ次は私の番だな！S e e I S Wの『あんな 一緒だったのに』だ！」

ナギはマイクを手に取り歌い始める。

メチャクチャ上手かった！

「それじゃ、次はウチと伊澄さんのデュエットや。」

「ー！？」

ブンブンと首を振る伊澄。

「ほな、行くでー！！！」

「ー！！！！！」

かなり息ピッタリだった。

「それじゃ！次はヒナギクで『残酷な天のテーゼ』」

「え！？私！？」

ナギがヒナギクに振る。

「大丈夫だ。本編で歌ってるじゃないか。CDも出してるんだし」

「身も蓋もない事言わないの！！」

ヒナギクもマイクを取り歌い始めた。

相変わらずつる覚えなのに熱唱していた。

「今度は私のナギのデュエットアル！」

「よし！いいだろう！」

「空港ヨロシ！」

「「「古いだろオオオオ！つーかお前何歳！？」「」」

一同のツッコミもスルーし、神楽とナギは歌い始めた。

メチャクチャ上手かった！

「じゃ、次はワタルと伊澄さんのデュエットや！」

「はあ！？咲夜お前…！？（なんて嬉しい事を…！）」

「またですか…／＼／」

ワタルは完全に固まっていてダメダメだった…

（へタレだな……………）

そう思う一同であった。

「次はマリア！『鳥の詩』」

「へ！？私ですか！？」

「勿論！」

マリアもかなり上手かった。練習でもしているのか！？

「続いては、この私！クラウスが歌う『雪』です！」

「ああ……居たのか、クラウス……」

「ずっと居ましたぞ！？お嬢様アアアア！？」

普通に上手かったです。流石三千院家執事長！

「次は……」

「当然俺！桂小太郎の最新曲、『カツラップ2』！
ミュージックスタート！」

「「「……………」」」

……………

「何でおのれが居るんじゃアアアアアア！！！」

「ぐおッ！？」

咲夜渾身の飛び蹴りが桂をぶつ飛ばした。

「どっから湧いて出たんや、自分！？」

「湧いてない桂だ。」

何、銀時達の万事屋が再開したというのでな」

「いや、アンタホントに何処から入って来たんですか」

新八もようやく復活したようだった。

「それじゃ、咲と小太郎のデュエット、何か適当に」

「じゃあ、銀座の恋の にしておいたアル」

「「「だからお前は何歳だアアアアアアアアアア！！！」」」

因みに二人は途中から漫才になっていた。

「では、続きまして！生徒会三人娘で『チエー！』！」

「歓声ヨロシク」

「なのだ〜」

突然後ろから三人娘が登場。

更に真司と幸久の姿もあつた。

「美希！いつの間に!?!」

「気にしない気にしない！」

三人はそう言って歌い始めた。

因みに幸久は恐らく三人のせいだろう。気絶していた。

「あの…真司さん。幸久君大丈夫なんですか？」

「まあ、心配いらんだろ。その内元に戻るさ」

二人は情けなく伸びている幸久に目をやる。

「これが無ければコイツは本当にスゴイ男なのにな…」

「では、次はハヤ太君、真司君、幸久君に歌ってもらいましょう！」

美希は今度は三人に振った。

「え？僕ですか！？」

「いや、我は……」

「……………」

二人は躊躇いがちな表情を見せ、一人はまだ伸びている。

「いやいや、ただ歌ってくれとは言わないさ……勿論、女装でだ！」

「……………」

キラーンと全員（新八と桂を除く）の目が光る。

「まあ、そういう事なら仕方ないな。マリア！」

「ハイ」

マリアは一体何処からもってきたのか、女の子用のクローゼットを取り出した。

「いやいや、いやいやいやいや！？おかしいですよ、お二人とも！ちよっ、ヒナギクさんも西沢さんも何とか言っして下さい……………」

「この方がハヤテ君には似合うわよ」

「いやいや、こっちの方が似合いますよ」

「……………」

この場に救いの神はいなかった…

女性一同

「じゃあ、ハヤテ君に澳門君……着替えましょうか……？」

「ハハハハ……」

「……むにゃ？」

そして幸久はようやくお目覚め。

「む？……いつの間にか？」

しかし幸久がそれ以上思考を巡らせる事は無かった……

女性一同

「真田君はこのお洋服ね」

「ハイ……？」

「いやいや、何だ！？……ねえ、ちょっと待って！？待てエエエエエ
エ！？」

「だ〜から、結局世の中金よオ！お金が全てよ！」

「ああ！その通りだア！何をするにも金があるもんなア！」

「アンタも苦労してるのねエ！」

居酒屋では五人が飲みまくっていた。

雪路と長谷川なんて金の愚痴ですっかり意気投合していたし、

「俺だつてさあ、大人になれば恋人の一人でも自然に出来ると思つてたさ！でも現実全然違つんだアアアアア！俺にはもうガンブラしかねえのかア！？」

「気にする事アねーよ。人間何かしら打ち込めるもんがありやそいつは中々良い人生にならあ。」

そしたらいつかちゃんとテメーを見てくれる人が現れるさ」

「ぎ、銀さん！！そんな事言ってくれるのはアンタだけだよ！」

薫と銀時と姫史もバカみたいに盛り上がっていた。

「京ノ介！！モテたいならまず幼女を愛せ！全てはそこから始まるんだよオ！」

「ハイ馬鹿ですかテメーはア。付き合うならガキより大人の女に決まってるだろア！！」

「何だ銀時〜貴様完璧を求めているのか？それはまったくの間違いだというのが分からんかア！！」

「いやいや、完璧なんて求めてねーよ？俺ア。それよりどつか欠けてる方がそそられるものがあるしよお。ま、でもガキは興味外だな…」

「分かったアアア！！貴様のいう女性と私が論ずる女性、どちらが良いか白黒ハッキリさせようではないか！」

「面白えじゃねーかア……」

銀時はそう言っただち上がる。

「まあ、取り敢えず二軒目だ。二軒目行くぞオ！」

「よっしゃ、今日は朝まで飲むぞオオオオ！！！」
雪路も立ち上がって高らかに叫んだ。

「オオオオオ！！！！」

ガラッ…

「んじゃ、親父イ。ご馳走様アア〜」

「あいよ！また来てくんない」

銀時達は五人肩を組んで、フラフラと店を出る。

「まったく……本当賑やかな方達だなあ」

そしてマダオ（まるでダメな大人達）はまた次の店を求め夜の町に消えて行った……

因みに、万事屋では女装させられた三人は色々歌わされて盛り上がったそうだが……

三人ともかなり似合っていて、女にしか見えなかった上にとんでもなく美人（幸久なんて本当に……）なため、女性一同は少し複雑だったそうなの……

第三十八訓　　なんと書いても住み慣れた我が家（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「今回は質問も無かったんで気になるであろう万事屋についてお答えします」

Q1・三千院家の中にあるのにどうやって客に存在を示すの？

銀八

「ハイ、ズバリ答えます！

三千院家の驚異の情報伝達システムで一応全国に宣伝しています！」

神楽

「ま、それで仕事がくるかって言ったら話は別アル」

銀八

「ぐっ……っ、続いては、」

Q2・何か目印となる看板とがありますか？

銀八

「ハイ、これは三千院家の正門の所にちよこんと立て札があるのと、練馬区に2、3枚地味な看板があるらしいです」

新八

「ますます閑古鳥が鳴きそうですね……」

銀八

「………続いては、」

Q3 . なんでお登瀬さんのへそくりがあったり、お通ちゃんの曲が入ったカラオケがあるの？

銀八

「知るかアアアア！！俺が聞きたいわ！」

Q4 . この練馬区は超お金持ちがたくさんですが、どう思いますか？

銀八

「ハイ、ズバリかなり良い環境でしょう！」

Q5 . 本当はもっと凄い建物の方が良かったのでは？ビルとか

銀八

「……………ビルも良いな」

新八

「オイイイイ！？」

神楽

「ダメアル！万事屋はあの建物じゃないと万事屋じゃ無いネ！」

銀八

「へえへえ……………」

分かってるよ、んな事ア。

んじゃ、次回もヨロシク」

第三十九訓 世の中なんて理不尽だらけ（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「今日！ハヤテのごとく26巻が発売です！いよいよ始まるナギお嬢様と綾崎ハヤテの新生活。住居人も次第に決まってゆきます。是非皆さん、買いましょう！」

ハヤテ

「ナギお嬢様の漫画話もあるそうですから、楽しみです！」

クラウド

「お値段400円に税込20円です！500円玉を持って書店に行きましょう！」

新八

「だから宣伝広場じゃねえって言ってんだろオオオオオオオオ！！！」

第三十九訓 世の中なんて理不尽だらけ

ピンポーン……

「すみませーん。三千院家の使いのものですぐ」

大きな鷲ノ宮家の門の前に立っているのは坂田銀時である。

何故彼がここにいるのか、簡単に言えば伊澄を迎えに来たのだ。

三千院家に遊びに来るので、一人で来させるのは危険だという理由からである。

ピンポーン……

「すみませーん」

ガラッ

「ああ！坂田殿。何かご用意でございましょうか？」

執事と思わしき男が一人出てきた。少し慌てている様にも見える。

「三千院家の使いで伊澄……お嬢様を迎えに来たんですけど……」

「そつでしたか！」

男は頷くと、銀時に耳を貸して下さいと合図する。

「……………？」

（実は……先程伊澄お嬢様が居なくなられてもうナギお嬢様の元へ向かったという書き置きが見つかったのですが…）

その書き置きには

『ナギの家に行つてきます。今日は携帯電話があるので大丈夫です。』

伊澄』

「携帯電話ア？」

「ハイ、つい先日購入されたんですが……………」

男は参つたように頂垂れる。

「マズいです…………伊澄お嬢様が未だかつて迷わずに一人で目的地に辿り着いた事は無いんです…」

また迷子になられて誘拐でもされたら……………」

「ったく、いきなり面倒な事になってやがんな…」

銀時はダルそうに頭を掻くと、

「取り敢えず俺も向こうの方探してみっから、もし先に見つかったらナギん家に案内しといてくれ」

そう言っつてナギの家とは反対方向に走っつていった。

*

まず銀時は反対方向と思われる場所を探した。

伊澄の事だ。

おそらくナギの家に向かったのだとすると、まず方向を間違えるだろつと踏んだのだが……

「マジで居たよ……」

伊澄はまったく反対方向に向かつて進んでいた。

しかし、その手には見慣れないものが……

「すっかり迷ってしまいました……でも、今日は大丈夫」

伊澄はそれをかざして見せる。

「なぜなら“携帯電話”を持っているから!!」

どおくん!!

(これを使えばここがどこでどう行けばなど……)

「……………」

番号を押す所が無いなあと思っている。

「……………」

そういえばなにが開いていたなあと思っている。

「!?!?!」

伊澄は何か気付いたように顔を上げると、

「このケータイは壊れている」

「壊れてんのはオメーの頭！……！」

スパーン！

銀時は伊澄の頭を軽く叩いた。

「……………あ、銀時様……」

「あ、じゃねーよ。」

何でだよ？何でケータイ一つ開けられねえんだよ！？

……っ！か前にもあったよな、こんなん。」

銀時は溜め息をつく、伊澄に手を出す。

「ほら……」

「……………？」

「連れて行ってやつから……取り敢えず立て」

「ありがとうございます……」

伊澄は銀時に起こされると、そのまま手を繋いで目的地に向か……

「あの……何で手を繋いだままなんでしょうか／＼／」

「お前はワンカット目を離したら迷子になるから」

「……でも、その……／／／」

「……？いいから行くぞ？」

恥ずかしがる伊澄の手を引きナギの家に向かった。

第三十九訓 世の中なんて理不尽だらけ

「ホントに方向感覚ゼロだよな、オメーは……」

「そんな事ありません！」

伊澄はパタパタと抗議してみせる。

「アレ？銀さん？」

「ん？新八か…」

「こんにちは、新八様…」

二人に近づいて来たのは新八だった。

「……仲良く手なんか繋いでどうしたんですか……？」

「そんな事ないです！！／＼／＼」

若干ジト目の新八に伊澄はブンブンと首を振る。

「銀さん……まさか…」

「オイ…何だよその目は？」

「いや……、元々見損なっていましたけど……」

まさかそんな子供にまで手を出すなんて…」

新八は完全に軽蔑の眼差しを向ける。

「いやいや！？違うからね？これはこの子が迷子にならないように

…」

「ダメですよ？こんな大人について行ったら。人生棒にふることに
なりますから」

「……？」

「オイ聞けエエエエ!!」

新八は伊澄に注意を促していた。

〜三千院家〜

「ーむ、そうか。分かった」

ナギは携帯の通話ボタンを切った。

「伊澄さんは見つかったんですか？」

「ああ、銀時達が保護しているらしい。今こっちに向かっているとわ」

ハヤテに少し安心したようにナギは答える。

「あの僕、すごい疑問なんです……」

「何がだ？」

「毎回あれだけ迷子になると分かっているながら、どうして一人で出かけるんでしょうか？」

「ま、本人はしっかり者のつもりだからな。次は大丈夫と思っているんだよ？」

ナギは腕を組むと少し困ったように言う。

「確かにあの家族ならそう思うのも無理はないでしょうけど、結局何回も迷子になるなら……」

「いやいや、伊澄はアレで相当頑固だからな……」

ナギはそう言うと、また窓の外を眺めた。

「なるほど…伊澄ちゃんは三千院家に行こうとしてたんですね」

「だからそうだって言ってるんだろ……」

銀時は肩を竦める。

「でも伊澄ちゃん？ケータイなんかより家の人に送って貰う事は出来なかったの？」

新八は普通の疑問を口にする。

「……………」

「……………えっと？」

「逆転の発想……………」

「いや、どこも逆転して無いけど……」

伊澄はまさかそんな方法があるとは、と衝撃を受けていた。

「もうコイツの迷子癖は治んねーよ。根本的解決策を提示するだけ無駄だな」

「どつという意味ですか！」

三人は何事も無く負け犬公園まで辿り着く。

「もう少しで到着で、」

「助けて下さい！」

「「「？」」「」」

突然聞こえた声に振り返る三人。
そこにいたのは、

着物を着て二足歩行している鯉だった……

「どうか我々を……！！」

助けて下………」

「どおおおお！！！」

銀時は鯉を蹴り飛ばした。

「……え？つていうか、え？鯉？」

「……今見た事は忘れる」

「……いや、でも何ですかアレ？天人！？」

「俺達は何事も無く三千院家に帰るんだよ？俺達は何も見えてねーし、聞いてもいねえ。ただ三千院家に向かうだけだ。行くぞ？」

「……分かりました」

銀時はスタスタと歩いてゆく。

その後を新八も追おうとするが、

「助けて下さいイイイイイイ!!!!!!!!」

「……………」

またしても鯉に行く手を阻まれた。

～三千院家～

「しかし…………相変わらず遅いな伊澄は」

ナギは窓から空を見上げている。

「あの…僕ちょっと探してきましたよか？」

「ん？いや…銀時が居るし大丈夫だとは思うが…」

伊澄はか弱いから、変なのに絡まれてないか心配だ」

ナギはそう言って窓を開けた……

「銀さん……随分変なのに絡まれましたね」

「っーか鯉なのかアレ？」

三人は鯉の案内で見知らぬ神社に来ていた。

伊澄の話では、この鯉は土地神の一種らしい。どうやらこの土地神を困らせている悪い妖怪がいて、それを退治して欲しいという依頼だった。

「もしかしていつも迷子になるのって、いつもこんな妖怪に絡まれるからですか？」

「そうですね…年に2、3回は絡まれますね」

「じゃあ違うのかよ…」

「でも彼は妖怪ではありません。」

伊澄は鯉を指して言う。

「あれは土地神。自然が生んだ、いわば妖精…」

「妖精！？あんなのが!？」

「ええ、彼らは私達を常に見守っている妖精なんです」

「見なきゃ良かったよ…」

「つーか何で鯉？」

新八と銀時は実のところあまり驚いていなかった。というのも、あの程度の姿なら江戸に天人として沢山いるからである。

まあ、天人がここにいたら大変な事だが…

「んで？その妖精を困らせてるつー妖怪は何なんだ？」

「ハイ……いくらこんなに貧弱そうでも一応神様ですから。多分そこそこ手強い相手かと」

「貧弱そうって！？何か傷つきますが……」

鯉は勝手に一人で落ち込んでいる。

「恐らく……鬼の類でしょう。彼らは好んで他の土地を奪う習性がありますから……」

そう言つて伊澄は仕事モードの顔になる。

「鬼って……あの鬼ですか？角が生えていて二足歩行する強面の巨人的な……」

「いえ、土地を荒らす鬼は大体が一般に言われる鬼と違います。地喰鬼と言われる、名の通り土地を喰らう鬼です」

「地喰鬼……ですか…何だか恐ろしい名前ですね？」

新八は頬をひきつらせる。

「ええ……大変危険な鬼です。ですからお二人とも……」

「まさか帰れ、なんて言わないですよね？そこまで聞いたら引き下がれませんか……」

新八が察したように尋ねるが、

「いえ…私一人では骨が折れるので。お二人にも協力して頂きますよ?」

「……アレ?」

新八の意外そうな顔を見て伊澄はニツコリと微笑む。

「前に『一人で抱え込むな』と大切な事を教えてくれた方がいますから」

「そうなんですか」

新八は納得したように頷く。

銀時はそんな伊澄を見てフツと笑うと、

「んじゃ、節分にはちと遅えーが…鬼退治といくか」

三人と一匹は神社の裏庭に向かって歩を速めた。

*

「……ですー！」

「「！？」」

伊澄は何かを感じとったのか広い裏庭の真ん中で立ち止まる。

「では土地神さん……お願いします」

「……分かりました」

鯉は覚悟を決めたように頷くと、

「土地神が来たぞオオオオ！出て来オオオい！」
思いきりそう叫んだ。

「……………？何も起こりませんよ？」

「うせ……！？」

「……………」

「!?!」

突如地面が揺れたかと思うと、徐々に地割が始まってゆく…

「銀時様、新八様、私の側に!」

銀時達が伊澄の言う通り側によると三人の周辺に円が描かれて、そのまま宙に浮いた。

「う、浮いたア!? 浮きましたよ銀さん!」

「うお!?! この浮遊感… 頭と腹に響くウウウウ!! 無理無理! 吐きそうコレ!」

先程まで三人がいた所は勿論、その周辺もあっという間に地中に吞まれていく……

その地中からまず出てきたのは大きな腕? のようなもの。それが二本、三本と這い出してくる。

「……………」

伊澄達はそこに近い地面のある場所に着地する。

「う……」

あゝ、気持ち悪かった……
危うく吐きそうだったぜ……」

銀時は地面に四つん這いになって頭を振る。

「ぎ……銀さん……」

「う……、んだよ？新八。オメーも吐きそうになったのか？」

「いや……」

どうも歯切れの悪いのを見上げると、新八は顔中に冷や汗をかいている。

「オイ……どうしたんだよ？」

「銀さん……アレ……」

「あん？」

新八が尋常じゃない様子で指差す先……

銀時もようやく立ち上がりその方向に顔を向ける……

そこには、大きなモノが銀時達を見下ろしていた。

ソレは四足歩行は蜘蛛のような出で立ちで、前に出ている顔は恐らく屁怒呂の三倍は凶悪でおぞましいだろうと思われる。まさに鬼の形相…

その口からは仕切りに黒い気体が漏れている…

「「……………ハハハ…」」

「気を引き締めて下さい…………アレが地喰鬼。恐らくその親王です…」

伊澄は札を構えて鬼と対峙する。

「「メツチャ怖エエエエエエエエエエ！…！」」

（三千院家）

「行きますよ、神楽さん！」

「了解、いつでも来いヨ！」

屋敷の庭でハヤテと神楽が対峙している。

ダッ！！！

「ハアアアアア！！！！」

ハヤテは手の筭を庭の地面に叩きつけると、物凄いスピードで掃いてゆく。

それはまるで竜巻のようになって落ち葉やゴミが舞い上がる！

「ほわッチャアアアアア！！！！」

神楽はゴミ袋でソレをとんでもない力で受け止めては、満タンにする。

ハヤテはドンドン竜巻を作りだし、神楽は満タンにしては次のゴミ袋で受け止める！

*

たった3分間で屋敷周りの掃き掃除が終了してしまった。

「ふう……、凄いですよ、神楽さん！たったこれだけの時間で掃除出来るなんて」

「私がついていれば当然アル！」

神楽はエツヘンと胸を張ってみせる。

「本当に助かりました。ありがとうございます、神楽さん」

「ま、また言ってくればいつでも手伝うネ／＼」

「本当ですか！ありがとうございます！」

面と向かってお礼を言われて照れる神楽。

「でもハヤテは本当に女の子みたいアルな……」

「え……！？」

神楽は今の天使のような笑顔を思い返して言う。

「いやいや？またそんな事お二人に聞かれたら…」

「なんだハヤテ、女装がしたいのなら言ってくれば良いのに。
……………マリア！」

「ハイ」

「って、お二人とも居たんですか！？」

マリアはまた何処からともなくクローゼットを出してきた。

「え……………まさかここで？」

キラーンと三人の目が光る。

「無難にセーラー服はいかがですか？」

「いやいや、エプロンドレスも捨てがたいな…」

「今回はチャイナドレスなんかどうアルか？」

神楽はきらびやかな赤いチャイナドレスを引っ張り出した。

「「良いな（ですね）！！」」

そうして三人はハヤテを囲む。

「なまじい〜？ 誰か〜！〜？」

「「「あああ〜」「」」」

「「「あああああああああ！〜！！」

「「「ギヤアアアアアアアアア！〜？」「」

「ドオオオオオオオオオオ〜……」

地喰鬼が繰り出す一撃は地面を容易く裂いて三人を襲う。

「銀時様！アレを倒すには大きな術が必要です。とにかく時間を稼いで下さい！十分……いえ、五分で構いません」

伊澄は素早く後ろに退く。

「新八！あの化物を伊澄に近づけんなよ……」

「ハイ！」

二人は地喰鬼の目に付くように周りながら近づいてゆく……

「ウウウウウ………」

「!?!」

地喰鬼は大きく飛び上がると、銀時達に向かって降下する！

そのまま足の一本が銀時達の前に叩き込まれる!!

「ヲオオオオオオオオ!!!!」

「「ぶ」ごオオ!?!」

二人の前の地面は無惨にも粉々に陥没し、そこから黒い煙が立ち込める。

「無理無理無理イイ!!」

こんなモン五分どころか十秒もつかアアア!!」

「言ってる場合じゃねえ!!」

更にそこから地喰鬼の足が二人に向かって払われる。

「「がはっ!?!」」

二人は堪らず吹き飛ばされた!

「銀時様!新八様!」

「…っ構うな!オメーは術に集中しろ!」

銀時は素早く受け身をとって立ち直すが、新八はそのまま地面に叩きつけられる。

「新八イイ!!!」

銀時は新八に駆け寄り、助け起こす。

「良かった…無事みてえだな…」
「そう言っつてメガネを拾い…」

「だからソレ新八じゃねえつつてんだろオオオオ!!新八君後ろオオオオ!!」

新八は思いきり突っ込んだ。

銀時はメガネを持ったまま転ける。

「アンタ僕に何回同じツツコミさせるんですか!?!」

「新八の…95%は…」

「ソレ前にも聞いたわ!?!つかこんな事してる場合じゃ…」

「ヲオオオオオオオ!!!!」

地喰鬼はまた飛び上がると、二人に突っ込んでくる!

「うわアアア!?!」

「っ!?!」

地喰鬼は二人を引き離すように新八の真上に着地する。

「新八イイ!?!」

銀時は着地の風圧で吹き飛ばされてしまった!!

「キシヤアアアア!!!!」

地喰鬼は新八を見下ろし狙いを定める。

「でやアアアア!!」

しかし新八は地喰鬼の足を木刀を振り払った。

「グオオオツ……」

「っ!!」

地喰鬼はバランスを崩してのけ反る。

その隙に新八は地喰鬼から離れようとするが、

「ヲオオオオオオオ!!」

「!?!」

地喰鬼の口から黒い舌のようなものが新八に伸びてゆく!

「くツ!?!新八!!」

「ヲオオオオオオオ!!!!」

「!?!?!」

新八はもうダメかと目を閉じ……

「……アレ?」

新八の周りには円形のバリアが張っている。

「新八様！ご無事ですか？」

それは伊澄が唱えたもの。

地喰鬼の攻撃はこれによって防がれていたのだ…

「ウウウウウ…！！！」

「ー！？」

しかし、地喰鬼は新八を飛び越え直接伊澄に向かっていく！

「ダメだ！逃げて伊澄ちゃん！」

「！？」

あっという間に地喰鬼は伊澄との距離を詰めると、

そのまま両前足を伊澄に振り上げ…

「ヲオオオオオオオオ！！！！！」

振り下ろした…

………

「ぐおおおお………」

「銀時様！？」

「銀さん！」

振り下ろされた二本の足を銀時が木刀一本で受け止めていた。

両足が徐々に沈んでゆく……

「ぐ……、」

伊澄？あと何分……だっけか……？」

「カツキリ五分ですわ……」

伊澄は微笑むと札を構える。

「術式八葉 上巻

神世七代！！！」

伊澄の頭上から地喰鬼の二倍以上はある龍が現れる。

「ゴオオオオオオオオ！！！！」

神世七代は周りを巻き込みながら地喰鬼に叩き込まれた！

「ウウウウウ……………」

「しぶといですね……………」

砂塵が舞い上がる中、まだ地喰鬼はヨロヨロと立っていた…

「んじゃ、締めといくかね」

銀時は洞爺湖を構えると地面を駆ける！

「新八！！」

「ハイハイ！！」

銀時は助走の勢いで新八の背中に飛び乗り、
新八は思いきり背中を押し上げる。

「鬼はアアアア外オオオオオオオオ！！！！！！」

そのまま地喰鬼の正面から叩き斬った！！

*

伊澄が地喰鬼を札らしきもので浄化すると、粉々に砕けていた地面などが不思議と直っていった…

「本当にありがとうございます。銀時様、新八様」

「いやいや、それより伊澄ちゃん。いつもあんな恐ろしい妖怪と戦ってるんですか？」

新八はまだひきつった顔のまま伊澄に尋ねる。

「いえ…、今回の鬼は予想以上でした。アレ程の妖怪はそうそう居ませんわ…」

「……………ですよね？」

新八は少し安心したように言う。

「いやあ、でも今回は中々の死闘でしたね。私の中でもベスト3には入りますね……」

「「「……………」」」

……………

「まあ、土地神さん……………」

あの土地神の鯉が三人の横に立っていた。

「オメーは今まで何処いつてた！？逃げてたのか！？逃げてたのか！？」

「何一仕事終えたみたいな感じで会話に入ってたんだ、テメーは！！」

「ぎゃあ！？止めて！だって怖かったんです……………くぼっ！？」

「怖かったんですじゃねーよテメエエエ！！鍋にしてやろうか！」「ノヤロー！」

「鯉鍋じゃアアアアア！！！」

バキッ！ドカッ！

散々二人に締められた土地神さんでした。

〽三千院家〽

「おお！伊澄。予想より早かったな！」

「どづいう意味よー!!」

「まあまあ…、今日はブリトニーの新たな展開を考えるぞ!」

ナギと伊澄は屋敷に入って行った。

新八はというと、あの騒ぎで買い物をおぼれていたのて商店街に戻ったぞうだ。

「……で、何故銀さんはそんなに傷だらけなんですか…?」

呆れたように銀時を見るマリア。

「これはアレだよ…節分?」

「いや…意味が分かりません?

大体もう節分は終わりましたよ…」

「あ……………」

銀時は何かに気付いたように声を上げる。

「どづかしたんですか?」

「福は内つて言うの忘れた……………」

「……………は?」

銀時は参ったように空を見上げた…

因みにハヤテはこの日人前に入る事は無かったそうなの……？

第三十九訓

世の中なんて理不尽だらけ（後書き）

くお詫びと理由く

どうも。伽藍です…

タイトル通りお詫びです…

聖なる焰さんの提案して下さったオリキャラの件ですが、色々考えましてやはり春日兄妹も出せないという結論に至りました。

聖なる焰さん、並びにこのオリキャラに期待した読者の皆様、大変申し訳ございません！

それもこれもこの私の技量の無さ、不足の致すところであります。

次に理由ですが、まあ言い訳と捉えて下さっても構いません。

まず、数が多いって事ですな。

私の場合、一人でも結構大変なんで三人、四人となると……

次に、オリキャラは大変良く出来ていて素晴らしいと思いました。

ですが、設定が完成され過ぎていて、いじる余地が無いと言いますか……

結構複雑な上に、出来事まで詳細に出来上がっている感じで、自分の書くものじゃ無い感じがするんです。

書くのでは無く、書かされている感じとでも言いましょうか。

私は書く事を楽しみながら今までこの小説を執筆してきました。自分であれこれ話を作って想像して楽しんでいました。

オリキャラ自体は大変嬉しいんです。こんな小説にも投稿してくれる人がいるのだと思うと。

それに皆様素晴らしいオリキャラばかりで大変嬉しかったです。

しかし、ここまで話が出来上がっているものを私がそのまま文章にしても、自分では納得がいかないのです。もう誰の小説か分からなくなるような…

オリキャラにしても出来るだけ設定は大雑把でないと、自分としても書きにくいしですね。

長々と書きましたが、結論としてはやはりオリキャラは出来れば一つにして貰いたいという事です。

せっかくあんなに素晴らしいキャラを考えて下さったのに申し訳ございません。

出るのを楽しみにしてくれた読者の皆様にももう一度謝ります。
本当にごめんなさい。

その代わりに、聖なる焰さんの最初に投稿して下さったロアルは責
任をもって登場させますんで。

少し……いや銀魂風にぶっ壊すかもしれませんが（笑）

以上、お詫びと理由でした。

第四十訓

天災は忘れた頃にやってくる

／／

天災は何度だってやってくる

実は先日、アニメ『ハヤテのごとく』を見る機会があったのですが……伊澄のCVがイメージと違いましたね。自分はもっと低い声を想像してたんですが……

他は大体イメージ通りでした。

歩はまんまお通ちゃんでしたね。アレで語尾にお通語つけて喋ってもらいたい（笑）

……と、まあくだらん前置きは置いておいて、

クラウドの前書きの館！

クラウド

「今回は二本立てです。最初の話が重要な話で、二つ目はオマケです。まあオマケの方が長いのですが？」

ハヤテ

「何でも後半の話はそのままなんだとか……
どういう事ですか？クラウドさん？」

クラウド

「まあ、それは見てもらえば分かると思います。久々にあの方が登場です」

ハヤテ

「では………始まります！」

第四十訓

天災は忘れた頃によってくる

／／

天災は何度だつてやってくる

目覚めよ……

受け継がれしその力、解き放つ時がきたのだ……

「 「 「 Z Z Z …… 「 「 「

目覚めよ……

「 「 「 Z Z Z …… 「 「 「

目覚め……

「 オイオイ…誰だよ？今日は日曜日だぜ。もう少し寝かしてくれよ
…」

「 さっきからうるさいアル、新八。朝御飯ならまだアルよ…」

「いや…僕何も言っていないですよ…」

三人はうつすら目を開け、また閉じた。

「「「ZZZ……」「」」

いや…あの…

すいませんちよっと…

聞いてますか……？

「ギリギリ……」

「神楽ちゃん歯ぎしりしてるぞい！」

あの…目覚めッ……

「「「ZZZ……」「」」

すみません目覚めて下さい

すみませーん！
聞いて下さーい、皆さーん！！

あああああ！！

「目覚めろつつつてんだろオオオオがアアアア！！！
いい加減にしるオオオオ！！！！」

真つ暗な空間に現れたのはご存知洞爺湖仙人だったか：

ガバツ！

「な！？」

銀時と新八は瞬間的に飛び上がると、仙人の後ろをとり羽交い締めにする。

「テメーよくのうのうと顔出せたもんだなア、オイ」

「今度何しに来たんですか？」

「フツ、仙人である私の後ろをとるとはやるではないか。だがお前達はまだまだ強くなれる……」

羽交い締めにされた状態で仙人は不敵に笑う。

「強く……なりたいか、ぐぶっ!？」

「オイテメーら、コイツ締めて洗いざらい吐かせるぞ」

神楽と新八は頷くと仙人に近づいてくる。

「待て待て待てエエエエエ!? 違うんだ! 今日大切な事を伝える為に来たのだ!」

「……あん?」

「大切な事……?」

第四十訓

天災は忘れた頃に戻ってくる

三人と仙人は取り敢えず向かい合う。
異空間で……

「……で？何なんだよ大切な事って。」

「ふむ。実はな……」

仙人は立ち上がり真剣な顔で三人をそれぞれ見る。

「……」

三人も息を飲んで仙人の出方を見守る……

「仕事……クビになっちゃった……」

「「「……………」」」

……………

「知るかアアアアア！！テメーの一進一退なんざどうでもいいんだよ！」

「お前そんな事言いに来たアルか！」

「それがどうでも良くないのだ！」

仙人は拳を上空に突き上げる。

「お前達をこの世界に飛ばした力……その力はいわば編集長の力なのだ。」

「……………は？」

「ジャンプ編集長と話し合ってサンデー編集長と提携して、お前達をこの世界に飛ばした。まあ手違いはあったが。その時の力は私が編集長だからこそ出来たのだ……」

しかし……クビになってしまった以上、私が今後この力を使う事は出来ない……………」

「「「……………え？」」」

「つまり私がお前達をこの世界から帰す事は出来んのだ！」

「「「いやいやいや……………」」」

三人は首を振る。

「あ……………これはアレだな。夢だ夢」

「そ、そうですね。あり得ないですもんね」

「まったく質の悪い夢アルな……………」

「んじゃ、解散……………」

目覚めましたらもつかいミーティングな」

「「「うース」」」

そう言つて三人はまた横になつて目を閉じた。

「残念ながら……………真実だ……………」

「「「ふざけんなアアアアア……………」」」

ガバツと起き上がると叫ぶ三人。

「どうするんですか！？僕らどうなるんですか！？？」

「オiiiiiiiiiiiiiiii！！異世界にトリップさせられてそのままって

「！」

「まあ落ち着け……
方法が無いわけではない」

仙人は落ち着き払って三人を宥める。

「どういうことだ？」

「ふむ。そもそもお前達がこの世界に飛んだ事自体イレギュラーなのだ。」

お前達は私がコ　ンの世界に飛ばそうとした事は覚えてるな？」

「そういえばそうでしたね……」

「私コ　ンの世界に飛ばしたつもりだった……しかし結果はこの世界。お前達にこの意味が分かるか？」

「「「……………？」「」」

三人は首を傾げてみせる。

「この世界がお前達を必要としている理由があるという事だ。それがどんな理由でどの程度のものなのかは私にも分からん。ただその何かを変えればお前達は帰れるやもしれん……」

「理由……そんな漠然とした事言われてもどうすれば！？」

新八は仙人に尋ねる。

「それも分からん。それが一ヶ月後に訪れるのか、一年後に起こるものなのか…」

「一年！？そんな経つたらかぶき町での私達はどうなるアルか？」

「安心しろ………こういう事態の場合、向こうの時間は止まっているとか、お前達が戻る時に時間が元に戻るとかそんな処置が取られるであろう」

「何の話だアアアア！？ゲームや漫画じゃねーんだよ！」

新八はそう叫んで頭を抱える。
神楽も不安そうな顔色を隠せない。

しかし銀時はそんな二人の肩を軽く叩いた。

「ま、ごちゃごちゃ考えても仕方ねえよ……」

「銀さん……」

「銀ちゃん……」

「何、俺達はこれまで通り向こうで普通に過ごせば良いんだ。確かにどれくらい時間がかかるかは分からねえ………
けど幸い俺達には沢山の仲間がいるじゃねーか……」

銀時はゆっくり立ち上がる。

「かぶき町かぶきだろうが練馬区ねりまだろうが、俺達がやるべき事は変わらねーよ……」

「そうですね……考えても仕方ありませんもんね！」

「そうアルな！なんなら練馬区の女王になってからかぶき町の女王になってやるヨ！」

二人は急に元気になると、銀時に続いて立ち上がる。

「フッ……」

その様子だと、お前達はもう大丈夫だな……」

仙人はうつすらと笑みを浮かべる。

「ならばお前達に新たな必殺技を授けてやろう。

この世界で生き抜く為に必ずや必要となる必殺技だ……ありがたく受け取るが……ごぶっ!？」

「何がありがたく受けとれだア！誰のせいでこんな事になったと思っただ、コノヤロー！」

「オラアアア！出せるだけださんかいイイイイイ！」

ドカツ！バキッ！バキッ！

三人は仙人をボコボコに総攻撃した。

ようやくフルボッコタイムが終わる…

「ぐ……、フフツ……よくぞ習得したな……」

それがお前達の新しい必殺技……万事屋・トリニティだ……」

「……いるかアアアアア！……」

バキッ……

〜銀魂のじゅ〜

第四十訓 天災は何度だってやってくる

目覚めよ…

秘めし内なる力
解放する時がついに来たのだ
そつと開くのだ、その眼を
その閉じられた限界の扉を…

目覚めよ…

「アレ？どことだ…」

見渡す限り真っ暗な空間で綾崎ハヤテは目を覚ました。

「停電かな……。真っ暗じゃないか」

ハヤテは周りをもう一度見回す。

「ハヤテ君……?」

「え?」

後ろから聞こえてきた声にハヤテは振り返る。

「マリアさん!?!……それにお嬢様も……」

声の主はマリアだったようだ。

隣にはナギもいるがまだ眠っている。

「ハヤテ君…コレは一体?」

「というかここは?」

「さあ?僕にもさっぱり……起きたらこんな所に」

ハヤテとマリアはわけが分からないとばかりに顔を見合わせる。

「何や、ハヤテにマリアさんやないか!」

「ハヤテ様?」

「え!?!」

今度はマリアの後ろから聞き慣れた声がしたと思ったら、

「咲夜さん！伊澄さん！」

咲夜と伊澄も居たのだ。

「アレ…？何で伊澄さんも居るんや？」

「そういう咲夜こそ。」

……それよりここは何処でしょう？」

二人も困ったように周りを見ると、取り敢えずハヤテの方にやって来る。

「なあ、何なんや？ここ…」

「さあ…僕も起きたらこんな場所にいたので…」

ハヤテは首を傾げてみせる。
すると、

「「アレ、ハヤテ君？」」

ハヤテの両サイドからハモった声が聞こえてきた。

「「え？」」

両サイドの声は驚いたように声をあげると、ハヤテ達のところに歩いてくる。

「ヒナギクさん！……西沢さんまで！」

右側からヒナギクが…、左側からは歩が現れた。

「歩！それに皆も……」

「一体何がどうしたの？」

「それがさっぱり……気がついたらこんな所に……」

ヒナギクの問いに皆が一様に肩を竦める。

「……むにゃ？」

「あ、ナギ。ようやく起きましたか」

「ん……？マリア？」

ナギはむっくりと体を起こして周りを見る。

「ハヤテ？咲に伊澄……ハムスターにヒナギクまで……何で皆集まってるんだ？っていうか……」

ナギは真っ暗な空間を見渡すと、

ガバッ

「ナギ？」

マリアに抱きついた。

「な、何なのだ！？ここは……何でこんなに暗いのだ！？」

暗いのが本当にダメなナギはマリアにしがみついたまま皆に尋ねるが、誰一人として知っている者はいない。

すると、七人の前から突如光が現れる……

『ようやく集まったか……』

ようこそ我が世界へ……』

「光が喋った！？」

光はみるみる人の形を形成してゆく……

そして、ハヤテ達の前に現れたのは……

「あ、誰ですか！？アナタは……」

「我は常に汝らの事を見てきた……」

「え！？一体……」

ハヤテは目の前の人物に首を傾げる。

「恐らく分からぬだろうな……」

しかし綾崎ハヤテ。

我は常に汝の側にあり……汝の強さ、我が主と共にしかと見てきた」

そう言つとその人物の髪が揺れ、額から『洞』の文字が顔を覗かせる。

「我が名は……洞爺湖！」

そう。ハヤテ達の前に現れたのは……洞爺湖仙人であつた。

「洞爺湖？えつと……」

ハヤテは困つたように皆を見回す。
しかし皆知らないようだ。

「我は常に主と共にあり……
幾多の苦難を振り払ってきた刃……」

仙人の後ろから皆が見慣れた木刀が浮かび上がってくる……

「アレ……銀さんの使つてる木刀……え？じゃあまさか……」

「そう……我が『洞爺湖仙人』だ。我が主、銀時に仕えし刃。その仙人だ……」

「仙人んんんんん！？」

七人は目の前の光景に目を疑つたのだつた。

*

仙人と七人は改めて向かい合った。

「それで……その仙人はわざわざ僕達に何の御用があつて？」

「ふむ。簡単な事だ……」

お前達は強い……だからこそ、これからも我が主達を助けて欲しい。

なので今日はお前達に必殺技を授けにきたのだ！」

「必殺技！？」

「そうだ……」

それに、お前達に我が主達が何かと世話になっているからな。そしてこれからも世話になるやもしれん。

そのお礼も兼ねてだ」

仙人はニヤリと笑うと全員を見渡す。

「さあ！言ってみる！お前達はどんな必殺技が欲しい！？」

「いやそんなお礼なんて？僕達だって助けられてる訳ですし……」

ハヤテは両手を前に出して遠慮する仕草をするが、

「いや、ハヤテ。ここで彼の想いを無下にするのは失礼だろう」

「お、お嬢様？」

いつの間に立ち直ったのか、ナギがハヤテの前に立った。

「仙人とやら！まず私の必殺技から頼もう！」

「ほう……中々話分かるな。流石は我が主達の仕える主。よかるう！して、お前の望む必殺技とは何だ？」

「ちよつとナギ！？本気なの？」

「危険かもしれないですよ！？お嬢様！」

ハヤテやヒナギクも不安そうに声をかけるも、ナギは頑として言い放つ。

「ここで頼まずしていつ頼む？」

私はこの時を待っていたのだ！」

（何と向上心を持った娘だ…あの馬鹿共（銀時達）とは大違いだな

……)
そんなナギを見て洞爺湖は感動する。

「さあ！お前の求める必殺技とは！」

「……長を、」

「……ん？」

「……身長を、伸ばしてくれ！」

……

(必殺技でも何でも無エエエエエエエエエエエエ！！！)

皆転けた！がナギはまったく気にせず堂々としている。

「いや、そういうんじゃない無くて……あのもっとこう……カメ メ波と
か影分身とか……」

「マリア、お前はどつする？」

ナギは仙人の話は耳に入っていないのか、マリアに話を振った。

「そうですわね……引きこもりの子を毎日学校に行かせる必殺技が欲しいですね」

「う………そんなのは必殺技じゃ無いだろう！無しだ無し！！
咲と伊澄は……？」

（ナギのも必殺技じゃ無いでしょう……？）

「いや……あのそんなんじゃ無くて……ねえ……」

ナギは仙人を無視して、隣の咲夜と伊澄に聞いた。

「ウチはどんな状況でもたちどころに笑いに変えられる必殺技が欲しいな」

「ある意味最強の必殺技だな……それ？」

「私は特には……」

「伊澄さんは方向オンチが治る必殺技なや」

伊澄が言いかけるが咲夜に拾われる。

「私は別に方向オンチなんかじゃー」

「そうだな。じゃ伊澄はソレで」

パタパタ……

伊澄の抗議も空しくナギはスルー。

「だから…必殺技というのは……」
仙人の声はもはや届いていないよう。

「ヒナギクは……？」

「……高所恐怖症を治したいわ……」

「だろうな？」

ヒナギクはぞつとするような高い光景を脳裏に思い浮かべる。

「……………」

「ちょっとマリアさん、歩！？どうしてここを見てるんですか!？」

マリアと歩はヒナギクのある部分を見ていた。

「い、いえ！別に何でもありませんよ!？」

「そろそろ！大きい小さいなんて気にしない方が良いでしょう。」

「どういう意味ですか!？私何にも言っていないでしょ!／＼」

ヒナギクは真っ赤になって否定する。

「じゃ、ヒナギクは『胸を大きくして欲しい』だな。
で次はハムスターだが……」

「ナギ／＼／／」

怒ったヒナギクもかわしてナギは歩に向かい合う。

「頭が良くなりたいとかどうせそんなだろ……ハイ終了」

「ちゃんと聞いてエエエエ！？」

「んで、ハヤテは女になる必殺技か……」

「いやいやいや！？何でもう決まってるんですか！！」

「あのっ……必殺……」

急に振られたのに驚いて振り向くハヤテ。

「んゝ、じゃあ一瞬で女装出来る必殺技とか？」

「そこから離れて下さいよ／＼」

「話聞けよオオオオオオオオ！！！！」

「あ……」

皆はそこでようやく洞爺湖に気付いた。

「何で仙人前にして勝手に話進めてんの!？」

大体お前らのソレ必殺技じゃないだろオ!ただの願望だろうがアアア!」

「……何だ、出来ないのか？」

「出来るかアアアアア!」

ナギはそれを聞くと興奮ざめしたように溜め息をつく。

「お前達はまったく分かっていない。必殺技とは己の欲の為に使うもねでは無い。何かを護る為に使うのだ!」

(何処のバトル漫画だよ…?)

「お前達にはそれが分かるまで、永久にこの空間から出さない!」

仙人は七人に指を突きつけて言い放った。

*

「この部屋汚いですし、掃除しちゃいましょう」

「あ、私も手伝うよハヤテ君」

「え？いやあのちょっと……」

仙人の止めるのも聞かず、ハヤテと歩はほこりっばい真つ暗な空間を掃除し始める。

「お、テレビあるやん。お笑いのDVDは無いんか？」

「まあ……」

咲夜と伊澄は液晶テレビを見つけた。

「あ！ちよつとあんまりリビング散らかさないで……」

「仙人さん、台所使わせてもよろしいですか？もう朝御飯の時間ですから」

「え？ああ…ハイ。じゃ無くて！！」

「マリアさん、私も手伝いますよ。」

マリアとヒナギクは台所で調理を始める。

「いや……だからお前ら……」

ガサゴソ……

「……ハハハハ！」

「お、ナギ！何やソレ？」

ナギが何か見て笑い出した。咲夜もそれに気付いて近づいてくる。

「咲！コレコレ……」

「ん〜？」

ナギが差し出したのは『仙人高等学校卒業アルバム』と書かれたアルバムだった。

『出席番号26番 洞爺湖』

「ダハハハハハハハ！！」

「アハハハハハハ！！」

そしてコレを見て大爆笑……

「！？」

「何や自分！！何処で買ったん、そのグラスン」

「アツハツハツハハハハ！」

グラサンを指して大爆笑…

………

「帰れエエエエエ！！」

もう帰れエエエ！！お前らアアアアア！！」

「〜何だ？永久に出られないんじゃないか？」

「いや もう帰って下さい！！」

もう必殺技とかそんないいんで帰って下さい！！」

仙人は七人に背を向ける。

「こっちは親切で必殺技教えてやるって言うてるのに！
そんなんメチャクチャするなら帰って下さい、もう！」

何処からか現れた扉を開いて出ていこうとする。

「私はもう知りません！！」

どこでのたれ死のうが、もう私は知らないんで！！
もう帰ってくだ………」

「アンタ 何勝手な事言ってるのオオオオオオオオ!!」

「ごばアツ!？」

突如扉の外から入ってきた人物が仙人にドロップキックを食らわせてた!!!

ズサアアアアア!!!!

「洞爺湖仙人!!!」

「勝手にお友達 家に呼んどいて帰ってどういう事なのオ!!」

「か、母ちゃん……」

「アンタそんなだからこの間も仕事クビになっただよ!!」

仙人の母は仙人に説教を始めた。

「……何かお母さん出てきたんですけど、仙人の」

「何で母ちゃんにヒゲ生えてんのや……」

ハヤテと咲夜は目の前の光景を眺める。

「母ちゃんに関係ねーだろ！首突っ込んでくるなよ。
大体俺がクビになったのは父ちゃんの転勤の問題で……」

「そうやって何でも転勤のせいにするんじゃないの！！お父さんだ
って仕事の都合があるんだからね！！」

仙人の母は洞爺湖を一通り叱ると、ハヤテ達の所にやって来る。

「すみませんね〜皆さん。」

この子 あの、転校が多くて友達の作り方も知らないものだから〜
嫌いにならないであげてね。根はイイ子なんで」

「いえいえ、いいですよ。気にしないで下さい」

お母さんはハヤテ達に近づくと声をひそめる。

「あの…悪いんだけど、あの子から必殺技……習って貰える?」

ハヤテ達は頷くと、

「オイイイ洞爺湖！！こつちへ来いよ〜！！」

「僕達にも必殺技教えて下さいよ〜！！」

「ホラッアンタ！みんな必殺技習ってくれるって」

しかし洞爺湖は背を向けたまま…

「何やってんの洞爺湖！！早く来なさいホラッ」

「いや もういいーって！！マジで…」

「いって何なの！！アンタが必殺技教えるって皆呼んだんでしようが！」

一向に振り返らない洞爺湖にお母さんは近づいていく。

「ホラ、何やってんの」

パシッ

「いってもオオ！！」

洞爺湖はお母さんの手を払い除けると振り返る。

「こんなんっ……」

必殺技教えるとかアそんなレベルじゃないじゃん！！」

洞爺湖は涙目になって鼻も出ていた…

「なんかアスゲー俺カッコ悪いしィ！！」

「何言ってるのオ！！」

洞くんはカツコイイよ！母さんの目から見てもカツコイイよ！」

「なんかア！アイツらホントは必殺技なんて習いたくないのうっすら見えるしィ！！」

もういいよホントツ！！」

「なに言つての洞くん！！」

あんなゆ一生懸命必殺技考えてたじゃない！母さん知ってるよ！洞くんの頑張り！！」

「いや、もういいって！！うっとしー！！」

そんな親子ケンカの様子を黙視している七人。

「うっとしーって何なの！！」

ホラ！お母さんに放ってみなさい必殺技！！みんなに見てもらおう！！」

「いや いいつて！！アイツら見てるしィ

もう恥ずかしいからうっとしー」

「だから、うっとしーって何なのオオオオ！！！！」

「だーから」

お母さんは煮えを切らしたように洞爺湖に掴みかかるが、

「お前がうっとしーんジャンボリックマグナム！！！！」

ゴオオオオオオオオオ!!!

「あ、お母さんに必殺技うつちやいましたよ」

洞爺湖が拳を突き上げると周りから竜巻が巻き起こる。
お母さんはそのまま上空に吹き飛ばされた!

「はっ!? 母ちゃああああん!」

(そ………それでいいのよ、洞く………)

バタリと床に落ちるお母さん。

「母ちゃアアアアアん!」

洞爺湖はお母さんに駆け寄った。
その時……

ガチャ

「今帰ったよオウイ?」

扉から酔っ払ったおじさんが入ってきた。

洞爺湖が倒れたお母さんを抱き起こした所…

「と……父ちゃん…」

「お…お前…母ちゃんを…」

持っていた弁当が落ちた瞬間…

「母ちゃんをどうしたんジャクニコル砲!!」

お父さんのバーコードヘッドから波動弾のようなビームが繰り出される!!

ドオオオオオオオオオ……

「うわアアアア!!」

洞爺湖はお母さんを抱き抱えたままジャクニコル砲を何とか避ける。

「と、洞くん……今こそ…転勤という呪縛から解放される時……」

そう言ってお母さんは洞爺湖を見上げる。

「倒すのよ お父さんを」

洞爺湖はお母さんを置くと、お父さんの方へ走ってゆく。

「うわアアアアア!!!」

ジャンボリックウウウ!!!」

「ジャクニコルウウウ!!!」

お父さんもそれを迎え打とうとする。

「いけないわ!このままじゃ家族崩壊に!ハヤテ君!」

「ハイ!」

ハヤテとヒナギクは飛びかかってゆく二人に向かっていく!

「ハアアアアア!!!」

パァン!!!!!!

ハヤテの振るった足がお父さんのももに…
ヒナギクが払った正宗が洞爺湖のももに…

「痛アアアアアアアアアア！！！！」

二人は転げ回った……

「う……う」

フフツ……お前達も完璧にマスターしたようだな」

洞爺湖は七人を見上げて言葉を絞りだす。

「それがお前達の必殺技……」

『ももパンツ』だ……」

ブチッ！

一同

「いるかアアアアアアアア！！！！！！」

ガバツ!!!

三千院家屋敷のハヤテの部屋で……

綾崎ハヤテはベッドから飛び起きた。

「え？夢……？」

でも何故かハヤテは執事服だった……

第四十訓

天災は忘れた頃によってくる

／／

天災は何度だってやってくる

教えてー！銀八先生

作者

「……のはずですが、先生は飲みに行っていて不在なので残ったメ
ンバーでヨロシク！」

新八

「いや、ヨロシクって！？何ですかソレは！職務怠慢じゃないです
か！」

神楽

「仕方ないネ。あの馬鹿は放っておいて私達だけで進めるアル」

ハヤテ

「桂先生も長谷川さんも湊川先生も居ないのはその為ですか……」

ヒナギク

「まったくダメな大人達ね……」

ワタル

「略してマダオだな……」

ナギ

「うむ！では最初の質問いってみよう。マリアー！」

マリア

「『神楽とナギは〇〇は見た事あるの？一期、二期、劇場どれでも良いから感想を』との事ですわ」

ナギ

「これなア……私達が見る見ない以前に……作者が〇〇を知らないんだよ」

神楽

「よつて答える事が出来ないネ。馬鹿な作者の為にこんな事になって本当に申し訳ないアル！後で締めておくヨ……」

ナギ

「では気を取り直して次の質問……」

マリア

「『銀さんに質問。こちらの世界で好みの女性に会えた？』という事です……」

ワタル

「銀さん居ないじゃん」

新八

「じゃあ次回聞きましょう。何かこんなんばっかだな」

神楽

「作者が質問を忘れないかが心配ネ」

ナギ

「それでは続いて、」

マリア

「『前話で銀さんが伊澄を迎えに行ったのは善意？それとも万事屋の仕事？』ですね」

新八

「ズバリ答えると、それはどちらでもありません。三千院家としての仕事です。居候させて頂いてるので三千院家の護衛兼用事は基本的に三千院家の仕事として捉えて下さい」

神楽

「まだまだヨ！きっとこれから万事屋の仕事いっぱいアル！」

ナギ

「では最後は…この質問か」

マリア

「『銀魂のごとくのキャラに対するハヤテのごとくの好感度を教えて下さい。特に伊澄はどの程度銀さんを意識しているのか』アラアラ……これはまた？」

ナギ

「まあ、一人一人言っただら日がくれるからな。今回は伊澄がどうなのかを聞いてみよう！」

ヒナギク

「ノリノリね…？」

ナギ

「って事で、どうなんだ伊澄！」

伊澄

「ハイ？」

一同

(話聞いて無エエエエ！！)

ナギ

「伊澄が銀時をどう思ってるかだよ……」

伊澄

「えっと……銀時様にはとてもお世話になりました。剣の強さは勿論、なにものにも折れないその心は……」

ナギ

「だー！！そうじゃ無くて！伊澄が銀時を好きなのか、どうなのかって事だ！」

一同

(直球過ぎだアアアア！！)

伊澄

「ええええええ！？／／／／

……そんな、好きかなんて／／／

色々お世話になっていますが好きとかそういうのは……でも、あの、その……／／／／

一同

(ま、まさか…？この反応は…)

ナギ

「勿論人間としてな」

伊澄

「え！？／／／」

一同

(結局お前が一番鈍感かアアアア)

一同は一斉に転ける。

ナギ

「…………え？まさか…伊澄お前…それ以上の感情を！？」

伊澄

「ち、違います／／人間として尊敬していますし、好きです！」

ナギ

「だよな。あゝ驚いた…まさか伊澄が男を好きになるなんてあり得ないもんな…」

ガタツ！

ワタル

「うおおおお！青春のバカヤロおお！」

サキ

「若!?!」

ワタルは教室を飛び出ると、そのまま走り去ってしまった。

一同

(オチ古いな……)

ヒナギク

「ま、まあそんな訳で次回もよろしくお願いします?」

第四十一訓　　まず隗より始めよ（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「今回から遂に【マラソン大会篇】が始まります！」

ハヤテ

「原作介入ですか？」

クラウド

「……確かに原作介入ではあるが、色々と前提が違うからな……」

ハヤテ

「そうですね…お嬢様と千桜さんが既に知り合いだったり、鷺ノ宮家の諸事情が明らかだったり、他にも色々と違いますからね」

クラウド

「まあ、なので前提違いの原作介入だと思って頂ければ……」

ここからは一気に【マラソン大会篇】　【〳〳篇】と続けて長編になるので、あしからず」

ハヤテ

「では、始まります！」

第四十一訓　　まず隗より始めよ

魔羅損大会……

それは例年白皇学園で行われる苦行。

その余りの過酷且つ残虐さから毎年生徒の三割以上が身体的、精神的異常をきたすとされている。

別名『死の宴』と称されるこの苦行は、生徒から最も恐れられている催しの一つである。

来るべきこの死の宴を前にし、生徒達は恐れおののき、自らの運命を呪い、失意の中で沈んでゆくのである……

「……という訳でこのマラソン大会の日は学校は休みだ」

「……………」

固い決意を胸に三千院ナギはそう宣言する。

「何を朝っぱらから固い決意で墮落してるんですか……」マリアはナギの持っていたマラソン大会のプリントを奪った。

「今のモノローグを見て無かったのかマリア!

お前…こんな死人が出るデスマーチに参加しろって言うのか!？」

「また大袈裟な……?」

マリアは溜め息を吐くと、プリントを二人のか前に見せる。

「参加する距離は自由に選べるんですから、必ずどれか一つには出て下さいね」

「ハヤテ、頭は大丈夫か？」

「え?……大丈夫ですけど？」

「聞きなさい？」

ハヤテは困ったように二人を交互に見る。

「でもお嬢様、運動も大事ですから…ちゃんとマラソン大会に出ないとダメですよ?」

「ハヤテまでそんな!? 死の宴に参加しろだなんて……」

絶望したアアアアア!!!」

ナギはそう叫んで屋敷から飛び出していった。

「「……………」」

ハヤテとマリアは顔を見合わせる。

「困りましたね……」

「……………取り敢えずお嬢様を追いかけてきますよ？」

ハヤテもナギを追って屋敷を出た。

*

「きつと……………いや、確実にここだろうな？」

ハヤテは万事屋の前までやって来ていた。

屋敷を飛び出していったナギが駆け込む場所はここしかないだろうと踏んだのだ。

コツコツ……………

階段を登ってゆくと、新八が玄関から出てきた。

「あ、ハヤテ君。」

「新八君、おはよう。お嬢様はいるかな？」

「うん。さっき飛び込んできて、今は神楽ちゃんと一緒にいるけど……何かあったの？」

新八は万事屋の中を指差しながらハヤテに尋ねる。

「ハハハ……実はね……」

第四十一訓 まず隗より始めよ

「なるほど……マラソン大会か」

新八は万事屋に入ってハヤテから話を聞いた。

「うん。それをお嬢様が出るか出ないかっていう話なんだけど……」
ハヤテは困ったように隣にいるナギを見る。

「出ないっいたら出ないぞ！」

「さっきからこの調子で……？」

ナギは断固拒否だ、とばかりにプイツと顔を背ける。

「確かにマラソン大会なんて面倒だよな。僕の寺子屋にもそういうのあったけど、毎年嫌だったなあ」

「おお！そうか。やっぱりマラソン大会は……」

ナギは懐かしそうに呟く新八に期待の目を向ける。

「でも、マリアさんもハヤテ君もナギちゃんを苦しめたいから参加しるって言ってる訳じゃ無いんですよ？全部ナギちゃんの為を思っ
て言ってるんじゃない？」

「う……それは、」

新八の言葉を聞いて決まりが悪そうな表情になる。

「あんまりナギをいじめたら可哀想アル！人間には得意や不得意があるってパピ―も言ってたヨ」

「神楽ア〜!!」

ナギは神楽に抱きついた。

「安心するネ。私は男共と違ってナギの味方アル」

「神楽……」

神楽はナギにぐっと拳を握ってみせる。

「頑張つて、マラソン大会優勝するネ！」

「ああ！………つてええ!？」

「私はナギを精一杯応援するヨ！」

「味方つてそういう意味かよ!？」

ナギは飛び退くと、玄関まで走つてゆく。

「とにかく！絶対に出ないからな！絶対！」

「あ、お嬢様！」

ナギはそう言い残して走り去ってしまった…

「困ったね、ハヤテ君」

「そうだね…いつもの事なんだけど？
まあ、取り敢えず朝御飯にしようか」

「お腹ぺこぺこアル！」

「ハイ 分かりました」

ハヤテは笑顔で返すと、銀時の部屋を見る。

「銀さんは……」

「ああ…いいよいよ。今日はまだ寝てると思うから」

「早く朝御飯ネ！」

三人は万事屋を出て、屋敷に向かった。

*

「あの子の運動嫌いにも困ったものですね……」

「そうですね…何とか出て欲しいんですが」

マリアを始め、ハヤテ、新八、神楽の四人でテーブルを囲んでの朝御飯。

ナギは自分の部屋に籠っているらしい。

「でもどうしてマラソン大会をあんなに拒むんですか？距離も自由みたいだし適当に流せば……」

それとも、やっぱり家に居たいから？」

「まあそれもありますが…あの子は本当に運動が苦手ですからね…」

だからどんどん嫌いになっていくんでしょっつ？」

マリアは新八に答える。

「なるほど……あ、でもそこまで嫌い意識があるって事は逆にそれを逆手にとれるかもしれませんよ？」

「「？」」

「つまり、嫌いや苦手意識が先行し過ぎている分、少し運動してみれば案外いけるなって感じるかもしれないって事ですよ。そうしたら後は勢いに乗せて練習していけば……」

「なるほど！」

新八の説明に勢いよく立ち上がるハヤテ。

「マリアさん！任せて下さい！僕が必ずやお嬢様をマラソン大会に参加させてみせます！」

「あ、ちよとハヤテ君！？何処へ？」

「そうと決まれば特訓です！」

ハヤテは食事を終えると、素早くナギの部屋へ向かって行った。

「……行っちゃいましたね」

「ハヤテ大丈夫アルか？」

三人は顔を見合わせる。

「……そうですわね」

するとマリアは少し考えた後、思い付いたように二人を見る。

「では万事屋さんに依頼です

ハヤテ君とナギの練習に力を貸してあげてくれませんか？」

「……」

二人は顔を見合わせたかと思うと、途端にパアッと顔を輝かせる。

「ハイ!!!」

「分かったアル！」

「お願いしますわね」

こうして、記念すべき万事屋の初依頼が始まった……

*

「で？大会に備えて練習というわけか？」

何故か屋敷の敷地内にある競技場でナギは体操服を着て出ていた。

「いきなり走るのには体に悪いですからね」

「私はこのクソ寒い中、半袖姿な事のほうが体に悪い気がするがな」
2月も中頃。まだまだ気温が冷えこむ季節である……

「大体何で二人もいるのだ？」

ナギは後ろにいた新八と神楽に視線を移す。

「マリアさんに頼まれたからね。万事屋として」

「私達万事屋の初仕事アル！頑張ってナギを特訓するヨ！」

新八と神楽は拳を握りしめてナギを見る。

「まあ、いつも世話になっているからつきあってはやるが……大会は出ないぞー！」

「はい。わかっていますよ」

ハヤテは笑顔で答える。

そんなハヤテを訝しげに見つめるナギ。

（大丈夫！！この練習中にスポーツの楽しさに目覚めれば……
お嬢様だっってきたと……大会に出たくなるはず！！）

ハヤテと新八は目で合図を送り合う。

「それじゃあ練習始めますよー！！」

五分後

「ハア……ハア……ハア……」

「……………」

ナギは疲れ果てたように倒れている。

目の前の光景にハヤテはただ愕然とする…

「あの……お嬢様？」

「……………」

これ以上は……もう……………」

「いや……ナギちゃん、まだ始まったばかり……………」

まだスタート地点から50mしか離れていないのだ。

これには流石の新八と神楽も啞然である。

「あの、もしかして体の具合でもよろしくないんじゃない……………」

「そんな訳あるか！」

ナギはビシッとハヤテに指を突きつける。

「よく聞け！人間はチーターと違うのだ！走るようになど出来ないのだ！」

なのにいきなりこんな長距離を走るなんて……死んでしまうではないか！！」

（ ）（ 50 mが長距離……！！ ）（ ）

「とにかく……！！今日はもう終わりだ！！」

こういう努力だの根性だのといったものはヒナギクみたいな得意な奴がやればよいのだ！」

「お嬢様！」

「ナギちゃん！？」

ナギは競技場からそくそくと退場しようとする。

「やれやれ……」

少年よ。相変わらずの執事っぷりじゃのう」

「！！？」

突如後ろ現れたのは…

「じじい……」

「帝おじいさま！！？」

三千院帝とクラウドであった。

「何でここにいるんだよ……」

「何を言う！可愛い孫娘の成長をしかと見届けよう」と……」

「そうか。よく分かった。分かったからもう帰ってくれ。ついでに暫くその顔も見せるな」

ナギは物凄く面倒そうな顔を帝に向ける。

「……まったく、随分な挨拶じゃのう。」

ん？その二人がナギが新しく雇ったという者達か？」

「……え？あ、ハイ」

急に話が振られて慌てる新八。

「こちらは三千院帝様だ。ナギお嬢様の祖父にあたるお方」

クラウドが二人に帝を紹介する。

「そうかそうか。孫娘が随分世話になってるようじゃな。こんな奴だが、これからもよろしく頼むぞ？」

「いえいえ！とんでもございません！こちらこそお世話になりっぱなしで……！」

「お世話になってやってるヨ……」

「神楽ちゃん！？なに言ってるの！！！」

新八は無理矢理神楽の頭も下げさせた。

「ハツハツハ、面白い者達だな…まあ、それはそうと、」

「？」

帝は再びナギの方に顔を向ける。

「何でもマラソン大会の練習をしているそうじゃないか」

「それがどうした。それに今から止める所だが？」

「……………」

帝はやれやれと肩を竦める。

「少年よ、主を導くのが執事の役目だというのに……
君はナギを導くどころか、墮落させる一方だな！」

バコッ！！

「誰が墮落する一方だった？」

「ツツコミがキツイぞ…孫娘よ……」

帝は頭を擦りながら立ち上がる。

「ハヤテは執事としてよくやっている！いつも私を守ってくれている！余計な口を出すな！！」

「守るだけならSPにも出来るぞ？主を良い方向に導く事が出来ないなら一流の執事とは言えないのう……」

祖父と孫娘の言い争いが始まった。その様子を何とも言えない表情で眺める四人。

「ならばハヤテが一流であるという証拠に、今度のマラソン大会……私是一位をとる……！！」

「ええ！？」

一同騒然である……

「ちょ……お嬢様！？」

「ナギ、本気アルか！？」

ハヤテ、神楽がナギに聞くがどうやら本気のようにだ。

「良かろう。その代わりにもしダメだったら少年には執事を辞めてもらおう」

「帝様！？何もそこまでせずとも……」

「クラウドス！これは決定事項じゃ……」

帝は愉快そうに口元を曲げると、ナギ達に背を向ける。

「それじゃ、大会の結果を楽しみに待つとするかの」

「あ、帝様!？」

クラウドが止めるのも聞かず、帝は競技場を出て行った。

「なあ、ハヤテ……」

「……何ですか？」

「ドーピングコンソメスープって作れるかな？」

「作れても飲まないで下さい？」

ハヤテ達は途方に競技場の出口を見つめている……

「仕方ありませんな……」

「クラウドさん？」

クラウドが溜め息をつくとき、競技場の出口に向かってゆく。

「こうなった以上、私も協力させて頂きます。今綾崎ハヤテに辞められるのは困るので……」

「クラウドさん……」

「取り敢えず頼りになる助っ人を用意しましょう」

クラウドはそう言って競技場を出ていった。

「クラウドス……あんなキャラだっけ？」

「……………また、お嬢様？」

ハヤテは苦笑するとナギに向き直る。

「でもお嬢様……一年女子の中で一位を取るって事は……………」

「分かっている。アレに勝たなければならぬって事だ」

ナギの顔も若干ひきつっている。

「ナギちゃん……アレって？」

「白皇の女子の中でもダントツで飛び抜けているアレだ……………」

「ダントツで飛び抜けている……………それって……………」

ナギは新八の言葉が終わる前に頷くと、二人を振り返る。

「ああ、完全無欠の生徒会長様だよ……………」

第四十一訓　　まず隗より始めよ（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「今日最初の質問は、『天使（原作でハヤテにBeeダツシュなんちやらを教えた）と仙人ならどちらが強い？』」

ハイ、ズバリ答えます。これは仙人が勝ちます。詳しくは本編で明らかになります。いずれ……」

ハヤテ

「天使……原作に居ましたねそんなの。何の役にもたたなかつたけど……」

銀八

「続いての質問」

『眼鏡が本体なら、個人的に眼鏡の鼻をかけるあの曲線あたりに脳が入っているのかなと思う新八君に質問です。もし、万が一にハヤテのごとくの女の子と付き合えるのであれば、誰とがいいですか？（まあそんなことは億に一もないと思うがな（馬）（）』でした。でどうなんだ……メガネ掛け機」

新八

「誰がメガネ掛け機だー！っーか酷くないですか！？作者も質問まんま載せないで、もう少し柔らかくして載せるくらいしても良いんじゃないですか！？」

銀八

「うるせーよ…さつさと答える。時間押してんだよコノヤロー」

新八

「彼女なんているかアアアアア！僕にはお通ちゃんがいるしね！別に出来ない訳じゃないから。やろうとしないでただだから僕の場合は！お通ちゃんしか見てないからね、僕は！！」

銀八

「ハイ、という訳で童貞どうせいの目は曇こもっていて何も見えませんでした。以上！」

新八

「うおおおおおおおおお！！青春のバカヤロオオオオ！！！！」

神楽

「次回もヨロシクアル！」

第四十二訓 我らが闘争 in 三千院家（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「さてはて、一体お嬢様はマラソン大会で優勝出来るのか？
そして私の呼んだ助っ人とは？」

ハヤテ

「僕のクビがかかったマラソン大会ですからね。是非お嬢様には頑
張って貰いたいです」

クラウド

「では、本編です。どうぞ！」

第四十二訓 我らが闘争 in 三千院家

前話回想（初期のワンース風に）

「ならばハヤテが一流である証拠に、今度のマラソン大会…私は一位を取る！」

「良かろう。しかしもしダメだったら少年には執事を辞めてもらおう」

きっかけは些細な喧嘩から……

――

「お嬢様…一年女子の中で一位を取るって事は…」

「分かっている。アレに勝たなければならぬって事だ…」

こうして借金執事の首を賭けたマラソン大会篇が幕を開けた…

第四十二訓 我らが闘争 in 三千院家

（ 白皇学園生徒会室 ）

「 ころら。ここは生徒会のメンバーしか入れないって言ったでしょ？ 」

“ アレ ” こと完全無欠の生徒会長桂ヒナギクである。

「 いやあ、今日は土曜日で休みだからいいかな？ っつて… 」

「 いいわけないでしょ？ 」

ま、せつかく来たんだからお茶でも飲む？ 」

「 あ、ハイ… ではお言葉に甘えて 」

ハヤテは今、白皇学園生徒会室でヒナギクを訪ねていた。

「でもヒナギクさん、休みの日も学校来てるんですね」

「意外と忙しいのよ。マラソン大会も近いし」

何故彼が生徒会室を訪ねたのか？理由は至って簡単である。

ナギ

（とにかく……ヒナギクの出るコースは勝ち目がない。だからまずヒナギクが出ないコースをリサーチするのだ！さりげなく！）

……という訳で、ハヤテは生徒会室に来ているのだ。

「そういえば、そのマラソン大会って何でも色々コースがあるらしいですね？」

「そうね。6コースくらいあるかしら？」

ハヤテはなるべくさりげなさを意識しつつ会話を進める。

「そうなんですか……あ、因みにヒナギクさんはどのコースに出るんですか？」

「全部出るわよ」

「……………あゝ……そんなんですか。でも大変じゃないですか？全部出るなんて……………」

「そんな事ないわよ。マラソンとか言いながら500mのコースもあるし、全部出る子も少なくないし……」

「で……ですが全部勝ちちゃうのもなんなので……手を抜くコースもあつたりして、なんて……」

何とかそんな事があつて欲しいとハヤテは必死に尋ねる。

「あつはつは

ハヤテ君つたら……」

ヒナギクは紅茶を淹れ終わると、ハヤテに振り返る。

「私が……そんな事する人に見える？」

ニツコリと。

「いや、困つた事に……まったく見えませんね……」

一筋の光は敢えなく消え去つた……

「でもそんな事をわざわざ聞くって事は、私の出ないコースをリサーチして……どうしても勝たせいつて事よね？」

「う……!! な……なぜそれを!？」

「私に分からないと思つて?」

ヒナギクには完全に意図が読まれていたようだ。

「でもナギが自分からこういうイベントに参加するなんて…
随分変わってきたわね、あの子も……」

ヒナギクは何かのプリントを取り出すと、ハヤテに渡した。

「これは？」

「他の生徒との平等を期するために、私も詳細は知らないんだけど
6つ目のコースで……」

理事長の意向で今年、久しぶりに開催される事になった、『白皇学
園五つの伝統行事』の一つ……

『マラソン自由型』よー！

「マラソン……自由型？」

ハヤテは真剣な面持ちでプリントを見つめる。

「何ですか？自由型って……」

「さあ？私に聞かれても……」

あ、因みにこの五つの伝統行事は優勝するとそれぞれ賞金が出るら
しくて……」

ヒナギクは肩を竦めてみせるが、思い出したように付け加える。

「賞金総額は……『一億五千万円』だそうよ？」

「一億……！？」

ハヤテがハッした表情をしたのもつかの間、

「なんだってエエエエ！！！」

「！！？」

突如雪路が生徒会室に乗り込んできた。
そして真っ先にヒナギクに詰め寄る。

「ねえねえそれ先生も出られるの！？先生も！！一億五千万も本当に貰えるの！？」

「うんうん……二人一組で参加は学園関係者なら自由よ？一応……」

雪路はパツと離れると、目を輝かせて天を仰ぎみる。

「そっか………それだけあれば……」

お酒飲み放題じゃん」

（我が姉ながら……最低ね……？）

↳数時間後↳

ハヤテの足は屋敷の競技場へと向かっていた…

（マラソン自由型か…：賞金は一億五千万！！）

…：まあ賞金の事は置いといて、とにかく二人一組ならば何かとお嬢様をサポート出来る！僕が頑張って二人で優勝し、あわよくば賞金もゲット！！ 借金返済へ！！）

自分自身に激励をしつつ、競技場へと入ってゆく。

（よし…：頑張る…：）

ぐた〜

目の前には伸びているナギと後方には困り果てている新八、神楽。

「あの……お嬢様？」

「……………」

(返事がない……ただの屍のようだ……)

目の前の屍はピクリとも動かない。当たり前である。屍なのだから

……………

「……じゃなくて大丈夫ですかお嬢様！？お嬢様ー！？」

*

「それにしても……本当に体力の無い子ですね〜」

特訓も一旦休憩、マリアが飲み物を差し入れてくれに来てくれた。

「そんな事はない。神楽の特訓がハード過ぎるのだ！」

「アレ……ナギちゃん？僕もいたよね？」

「2、300m走っただけネ……」

「それでもハードなの！」

やれやれと肩を竦める神楽にナギは抗議する。

「でもナギがマラソン大会で一位を取らないと、ハヤテ君がクビっ
ていう賭けをおじいさまとしているそうじゃないですか」

マリアの言葉にギクリとするナギ。

「ハヤテ君もいいんですか？そんな約束……」

「大丈夫ですよ……」

それでもお嬢様は一位を取ってくれと、僕は信じていますから！」

「……」

何処からくるのかナギが優勝する事にまったくの疑いも持っていないハヤテ。

「大丈夫ですよ〜お嬢様？」

「お？おお……」

反面、ナギの顔はひきつっている。

「……では、私は屋敷に戻ってますね？」

「ハイ、ありがとうございます。マリアさん」

マリアは一旦屋敷に戻っていった。

「そついえば、銀さんどうしたんでしょう？もう一時過ぎですが……」

「……もうとっくに起きているとは思いますが……」

因みに今朝からナギの特訓の為に誰一人万事屋に戻っていない。

「ま、あんなちゃんぼらんは放っておけば良いアル」

「良い訳ねーだろがアアアアー!!」

「?!?」

全員が驚いて振り返ると、銀時が不機嫌そうに立っていた。

「あ、銀さん。今まで何処にいたんスか……」

「んな事より、馬鹿作者！聞こえてるかコノヤロー」

銀時はカメラ目線で話し始める。

「俺、この小説の主役だから……」

銀魂のごとくだからハヤテとのダブル主人公って事になってるけど
銀さん主人公な訳だから……」
銀時はどどんカメラに近づいていく。

「いや、カメラって何だよ!？」

「なのは何!? この扱い! 今回も半分まで出てこないし、前話なんか寝てる描写すら書いて無かったからね? コレ銀魂だから!
俺主演だからアアア…ぶ!？」

「やかましいわアアア!!」

ナギが後ろから思いきり蹴りを入れた!

「何なのだお前は… 一体何がしたいのだ……?」

「ぐっ……、やるじゃねーかなギ… お前はただのチビじゃ無……」

「誰がチビだアアア!! このクルクルパーマア!」

「アサ トバスターア!？」

ナギは銀時の（ピー……）を蹴りあげた!

「……!!!」

断末魔の悲鳴と共にのたうち回る銀時。

「……本当に何しに来たアルか、銀ちゃん?」

「つーかこんな時間まで寝てたんですか？」

新八と神楽は呆れてその光景眺めている。

「……………ぐっ…ち、違えーよオメー」

銀時は痛みを堪えながら覚束無い足で何とか立ち上がる。

「執事長の頼みで迎えに行ってたんだよ……………」

「え？誰をですか？」

「私だよ……………」

銀時の後ろから現れたのは他でもない。湊川姫史であった。隣にはクラウドもいた。

「湊川先生！？どうしてこんな所に…………？」

ハヤテは驚いたように尋ねる。

新八と神楽は誰？と首を傾げている。

「話は大体聞いた。姫がマラソン自由型で一位を取らないと綾崎がクビになるそうだな……………」

「もしかして、クラウドさんの言っていた助っ人って……………」

「何、他でもないクラウドさんの頼みだ。それに麗しの姫君が困っているのに助けられない理由がないだろう」

フツと姫史が微笑すると、周りはキラキラと光って見えた。

「それで……君達も銀時同様、ナギ嬢に新しく雇われた二人だね？」

姫史は新八と神楽に振り返る。

「あ、ハイ。志村新八と言います」

「神楽アル。ヨロシク……？」

挨拶が終わらないうちに姫史は神楽に近づいて膝まづく。

「何と麗しい姫君か……」

例えるならまるで荒地に咲く一輪の花……」

「……………」

「私は湊川姫史と申します。どうかその美しい瞳に御記憶下さい」

「……………」

一同啞然とする中、姫史は挨拶を済ませてクラウドの隣に戻る。

「ハヤテ君……？あの人は？」

「僕達の学園の先生で湊川先生って言うんだけど……」

ハヤテは少し変わっててね、と付け足した。

「…という訳で私も特訓に協力する事になった」

「でも先生がそんな事しても大丈夫なんですか？学園の行事なのに…」

「まあ今回は場合が場合だ。負ければクビなんだろ、綾崎。」

「は、ハイ。でもありがとうございます！先生がいてくれればとても心強いですよ！良かったですね、お嬢様！」

「……………帰る」

「ちょっと！？お嬢様！？」

ナギはスタスタと屋敷の方に戻って行こうとする。

「あんな変態の塊に教わる事など無い！」

「ハッハッハ。まったく姫君は素直じゃないな。そんなに照れなくとも…」

「ハヤテ、今すぐデスノートを持ってきてくれ」

「いやはや、ツンデレというのも中々難しいな」

「誰がデレるかアアアアア！！」

そんなこんなで姫史指導のもと、午後の特訓が始まった。

*

特訓はハヤテの想像以上に続いた。

特に姫史の指導による所が大きかった。息の使い方、手の振り方、足の使い方、目線の使い方等々…

基本的なマラソンの指導を一から丁寧に教えていった。ナギは渋々だが、姫史の指導力を認めているのでそれに従った。

加えてハヤテの完璧なフオーローや新八や神楽の応援、銀時のからかいもあり何とか特訓は続いたのだ。

休憩時間：

神楽はナギは姫史と格闘(?)したり、それを止めようとする新八に「うるさい！ダメガネ！」とか叫んで新八に追いかけられたりしていた。

ハヤテは「結局休憩時間も走り回ってますね？」と苦笑していた。

そして……

「やりましたよお嬢様！500m完走ですよ！」

「ハア……ハア……そうか……」

なんとナギは息も絶え絶えだが500mを完走したのだった。最初に比べて驚くべき成果だったのは言うまでもないだろう。

*

夕方

ナギは木陰で神楽と休憩している。

そんな様子をハヤテと銀時は眺めている。

「しかし、オメーも随分な博打を打ったもんだな。アイツがマラソン大会で優勝ついたら相当なもんだぜ？」

「確かにそうですね。でもお嬢様は必ず優勝出来ると信じていますから！」

「……………そうか」

ハヤテの言葉に銀時は頷く。

「今日のお嬢様はなんだかんだで随分楽しそうでした。このままスポーツの楽しみに目覚めてくれれば……」

ハヤテはナギを見つめるが……

「だアアアアア！もう足が動かない！もう明日は寝る！もう明日は絶対一日中寝るぞ！」

「まあまあ、後二日しか無いんだからね？」

「もう運動なんて金輪際ゴメンなのだ！」

「無理そうだな……」

「八八八……？」

*

「じゃあ、私はこれで……後は綾崎に任せるぞ」

「ハイ。ありがとうございました。湊川先生」

「……まあ、一応感謝はしている。千歩譲ってくらいだがな」

姫史の帰宅を見送るハヤテとナギ。

彼は教えられるのは今日の一日だけという事なので、明日はハヤテ達だけで練習する事になるのだ。

「まあ他にも無い、姫とクラウドさんの頼みだからな」

「湊川先生はクラウドさんとお知り合いなんですな」

「何せ私の師匠だからな」

姫史はフツと笑うとハヤテに言う。

「師匠……ですか…？」

「ああ、私は幼い頃にクラウドさんに拾われてな。この屋敷に住んでいた事もあるんだよ」

「ええ！？そうだったんですか！」

ハヤテは驚いたように姫史とナギを交互に見る。

「らしいな…私はかなり小さかったから聞いたただけだが」

ナギはそう言っただけで肩を竦めた。

「はあ……でも師匠って何の師匠何ですか？」

「勿論執事のだ」

「執事……？湊川先生、執事だったんですか！？」

「そうだな…実際には教師より執事業の方が長いな」

「そうだったんですか…」

つまりはハヤテの先輩に当たる訳である。

「まあそんなつまらん話は置いておいて。明後日のマラソン大会頑

張ってくれ」

「ハイ!!」

ハヤテが力強く頷くのを見ると、姫史は屋敷を出ていった。

「本当に素晴らしい人ですね、湊川先生」

「変態だけどな…」

「まあ…？」

ともあれ、頑張りましょう！マラソン大会」

「当日雨降らないかな…」

「お嬢様〜!!」

「分かった分かった！今回だけだからな」

そして、ついにマラソン大会当日がやって来る……

第四十二訓 我らが闘争 in 三千院家（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八先生

「んじゃ、質問いくか」

『作者とナギに質問。リリカルなのは好きなキャラは誰？』

新八

「……え？これ銀魂とハヤテのごとくですよ？」

銀八

「良いんだよ……」

「ー訳で、どうだ？作者、ナギ？」

作者

「僕は……シグナムかな？カッコイイし。結構タイプですね」

神楽

「マジキモいアル。暫く私に話かけないで……」

作者

「なんでだよ！？」

銀八

「オーイ、ナギ。お前は？」

ナギ

「うーん……ヴィータかな？」

新八

「どうしてですか？」

ナギ

「フェイト達は……胸がでかいから……」

一同

（あ、なるほど……）

銀八

「んじゃ、また次回な！」

第四十三訓 　　どんな大会でも直前になると大抵緊張する（前書き）

クラウスの前書きの館！

クラウス

「遂に始めるマラソン大会！

果たして姫史君の特訓の成果は功をそうすのか？また銀時達はどう絡んでいくのか？」

ハヤテ

「そして、ハチャメチャで自由なマラソン自由型フリーダム、始まります！」

クラウス

「では、始まります！」

第四十三訓

どんな大会でも直前になると大抵緊張する

雲一つない晴れやかな青空には鳥の群れが飛び交う

そんな朝……

「いやー散々引つ張って…雨で中止というオチもあるかと思っただが……」

ナギは恨めしそうに空を見上げる。

「晴れたなあ……」

「はは、そんなお嬢様ったら……」

昨日も沢山練習したんですから。銀さん達も協力してくれましたし」

ハヤテは苦笑しながらナギに言う。

「でも本当にナギが500m完走出るなんて思いませんでしたね」

「一昨日の湊川先生のおかげですよ。ね、お嬢様？」

「認めたく無いが……そうだな」

「まあ、湊川先生がですか」

マリアはそう言ってニッコリと微笑んだ。

「取り敢えず最終コースのマラソン自由型は二人一組ですし…何とかなりますよ、なんとか」

「え？」

二人ともマラソン自由型に出るんですか？」

「え？そのつもりですけど…」

マリアさんこの競技、知ってるんですか？」

「ええ……多少は」

マリアは思案するように手を口元にやり続ける。

「白皇学園の五つの伝統行事は、どれも危険なので…長い間封印されてきたんです」

特にマラソン自由型は自由フリーダムの名の元にゴールにたどり着く為ならどんな手段を使ってもいいという……

参加者の大半がリタイアし、ゴールする事さえ難しいという過酷な競技です。」

「……………」

ハヤテはぐつと息を呑んだ。
しかし、ナギは不敵に笑う。

「でも、だったら好都合ではないか。
ゴールする事が難しいなら……リタイアさえしなければ、ヒナギク
に勝つチャンスもあるというもの」

「よつするにそれって正攻法ではヒナギクさんに勝ち目がないって
事ですよね?」

「まあどちらにしても勝ち目は薄いですけど」

……とハヤテとマリア。

ピキッ……

「うるさい!…うるさい!…うるさい!…とにかく行くぞハヤテ!
!」

「は…はい!」

ハヤテは慌ててナギを追いかけた。

(うーん……やはり心配ですね。ここは銀さん達に頼みましょうか
……)

そんな様子をマリアは不安気に見送るのだった……

～白皇学園～

「勝つぞオオオオオオオオ!!!」

「何なのアレ？」

「桂ちゃんは今日も絶好調だね」

天に向かって叫ぶ雪路を傍目で見ている美希と泉。

「しかし賞金が出るかどうか知らないけどマラソンなんてよくやるわね」

「あは、私一応500mに出たよ　でも美希ちゃん運動キライだ

もんね」

「マラソンなんて適当に棄権しとけばいいのに…特に自由型なんて出る人の気が…」

「あ、いたいた。おーい美希ー」

美希の言葉を遮って向こう側から声が聞こえてくる。

「お、これはこれは一年女子のコース全勝された生徒会長さまじゃありませんか」

「ヒナちゃんおめでとー」

「あら、ありがと」

二人に話しかけて来たのはヒナギクだった。横には千桜、愛歌、理沙もいた。

「これでラストのマラソン自由型も制すれば全種目制覇ね。ま、頑張って下さいな」

「何言ってるの？アナタも出るのよ？」

「……………は!?!?」

「大丈夫。もうエントリーしてきたから」

「いやいや!?!?」

「だって生徒会の人でアナタだけ何も出てないじゃない。だから最後くらい出なさいね。私が必ず完走させてみせるから」

「は!?!」

美希は気付いたように理沙と泉をみる。

この二人はソレを見越して500mに出たのである。

「で、でも千桜や愛歌さんも……」

「私は2kmに出たからな」

「私は体力的に無理だから?」

「……………」

美希は絶望したように膝まずく。

「随分賑やかな様子じゃな?」

「あ、澳門君、真田君!」

泉が振り返った方向からは真司と幸久がやって来た。

「そうか…真田君も一年男子のコースで全勝だったな」

「当然。こんな事で遅れはとらんからな」

千桜の言葉に幸久は自信を持って答える。

「なるほどね……でも自由型は混合だからね。悪いけど手加減しないわよ?」

「おう、望むところだ!」

ヒナギクと幸久は握手をして……

「ぐおっ……謀ったな……か……桂……」

「あ……?」

「だアアア! 何をやっているのだ! 試合開始前に力尽きてどうする!?」

幸久は気絶してしまった為、
真司は溜め息をつく、彼を背負う。

「まったく……取り敢えず会長。我々もやる以上は手を抜かんからな。お互い良い勝負をしよう」

そのまま幸久を連れて行った。

「おお……流石ヒナ、敵を開始前に叩き潰すとは」

「な、人聞きの悪い事言わないでよ!」

理沙は感心したように頷くと、美希の方を見る。

「まあ美希、ともあれ白皇の敷地内一周はかなり長いが…」

「挫けず頑張れよ?」

「いやアアアアアアア!!」

第四十三訓 どんな大会でも直前になると大抵緊張する

「いやゝ、しかしお嬢様。思った以上に参加者が居ますねゝ」

ハヤテとナギはマラソン自由型の集合場所に集まっていたが、

予想以上に参加者が居たのに驚いていた。

「お嬢様？」

しかし、ナギはそんな事は目に入っていない様子。

(これでもし一位になれなかったらハヤテはクビ…私のせいで…
一位にならないと…)

大会を前にして完全に緊張していた。

『それでは参加者はスタートラインについて下さい』

「お嬢様」

「…？」

ハヤテは緊張で固くなっているナギの肩に手を置く。

「短い間でしたが、お嬢様は頑張って練習しましたよ。だから僕の事は気にせず、頑張って練習の成果を発揮しましょうよ」

「ハヤテ…」

「大丈夫。二人一組ですから」

僕も精一杯お嬢様をフォローします…必ず二人一緒にゴールしましょう！」

「ハヤテ……」

ハヤテの言葉にナギは完全に緊張がとけたようだったが…

「あのーすみません。もうレース始まってますよ？」

「「!?!」」

既にスタート地点にはハヤテとナギしかなかった。

「ああ!?!いつの間に……」

「とにかく急ぐぞ、ハヤテ！」

こうして二人のマラソン自由型が幕を開けた……

*

『さあ始まりました！マラソン自由型。伝統のコースを制して賞金を手にするのは誰か！？』

「なお、ここからは各所に点在するモニターを元に、生徒会放送局がゲストと共に解説を行っていきます。解説は私、瀬川泉です」
実行委員会のテントから泉が解説をしている。

「では最初のゲストは我らが先生こと湊川姫史先生です」

「よろしく頼む」

「ではここでマラソン自由型のルールを改めて確認したいと思います」

このマラソン自由型は白皇学園の敷地一周分とかなり長いです。杉並区を一周するのと同じですね。途中途中にある中継所で確認をとればいいので、それさえ守ればあとはショートカットしようが、^{フリーダム}自由型です。文字通り、自由型です。相手を妨害しようが何でもあり。

さらにコースの途中には方向を覚えてくれる作業員さんもいますから、迷ったりしたら彼等の指示に従って下さい」

フリーダム
「自由か…実にいい響きだな」

「では、これからもちよくちよく解説をいれていきます。皆さん頑張ってください？」

ボード状況

雪路組（一位）	組	一般生徒	組	一般生徒	組	組
ハヤテ組（最下位）						

1400

（先頭集団）

生徒1

「にしても、だるいよねー」

生徒2

「でも頑張ろう。せつかくのマラソン大会なんだし……あ、係の人だ」

二人組の生徒の前に係の服装をした人が二人いる。
一人は白髪、もう一人はメガネである。

生徒1

「すみません、方向はこっちですか？」

「ハイ。こちらですよ」

白髪の係員は大きな矢印のついた看板を見せる。

生徒2

「よし！頑張ろう！」

二人の生徒は矢印通りに林に向かって右折する。それを見て後ろの集団も次々と右折していく。
そして……

「ぎゃアアアアア！！！」

「うわアアアアアア！！！」

「死ぬウウウウ！？」

生徒達は林に消えていった。

「くつくつく…あめえ、あめえよ。知らない人の言うことは信じたらダメだって、学校で習わなかったのか？小僧ども」

「フツ、ちよろいもんですね」

そう。何を隠そうこの係員二人、誤った方向を教えていたのだ。本当の道は小道に向かって左折である。

そして更に生徒達の集団がやって来る。

生徒 17

「すみません、近道って教えてくれませんか？」

生徒 18

「この中で一番近いの、頼みます！」

すると今度はメガネの係員が前に出る。

「いいんですか？近道は近いけど危険も多いですよ？」

生徒 17

「大丈夫です！危険を怖がって優勝なんて出来ますか！」

生徒 17 の言葉にそのペアの 18、更には後ろの生徒達も頷く。

「なるほど、若いのに大した心がけじゃねーか。もう俺達が教える事はねえ。行きな」

白髪の係員が斜め右方向を指差す。

生徒 17、18

「ありがとうございます！」

生徒17の組みに続いて後ろの組みもどんどん斜め右方向に進んでゆく……

「ぎゃアアアアア!!」

「落ちるウウウウ!？」

「助けてエエエエ!!」

生徒達はあっという間にLostした……

(そのまま行っちまいな………奈落の底になア)

二人の係員はニタリと憎たらしい笑みを浮かべる。

「……もうこれで15組みは消えましたね」

「いや、本当にちよろいな」

「そうですね、銀さん」

そう……お分かりだと思いが二人の係員とは……銀時と新八である。

事はマラソン自由型が始める一時間前に遡る。

……

「マリアさんに頼まれたは良いけど……具体的にどう協力すれば良いんでしょう？」

「参加者を今から潰していけば良いアルか？」

「いやいや、それバレルからさ……」

万事屋一行はマリアにマラソン自由型でハヤテ達を助けて欲しいという依頼を受け、白皇学園に来ていた。

マリアの上手くいった時の報酬を聞いて新八達は遠慮したが、銀時はあっさり飛び付いた。

彼曰く、「人様の好意を無下にするのが一番失礼に値するんだ」
だそうだ……

「うオオオ！！またヒナが優勝アルか！！」

「凄いな……これで僕らが見た限りでも三つ連続で優勝ですよ」

因みに今はマラソン大会を観戦且つ作戦を練っている所である。

「カッコイイアル」

「ホントに流石ですよね」

「まあ、正宗が選んだ人物ですからね……」

「」「」「……」「」「」

「……いや何やってんの、お前？」

銀時の横にいつの間にか伊澄がいた。

「ナギに聞きました。一位になれないとハヤテ様がクビになると……」

「オーイ聞いてる？」

「ですから私も何かお手伝いいたしますわ」

「オメー絶対迷子だろ。迷子中だろ現在進行形で」

「……………」

伊澄は暫く沈黙する。

「取り敢えずハヤテ様達が一位になるには生徒会長さんを何とかしないとイケませんね」

（（誤魔化したな……………）（））

「でも確かに。恐らくヒナギクさんは自由型にも出るでしょうっからね」

「……………このマラソン自由型って白皇の敷地一周分だよな？」

「ハイ。そうですけど……」

銀時の問いに伊澄が答える。

「なら別にコースに一人二人増えた所で誰も気にしねえだろ」

「いえ、参加者は最初にチェックされますし、各所の通過地点でも胸の薔薇でチェックされますよ？」

「ああ、参加者としてコースにいる分には、だろ？」

「銀さん、まさか……」

新八は何かを悟ったように銀時を見る。

「なぐに……俺達の十八番じゃねーか」

銀時は不敵に笑うと三人に説明を始めた。

.....

という訳で現在に至る。

「……もう良いだろ。そろそろ次のポイントに移動するか」

「まだまだ先頭には沢山いますからね」

「プランAはこの辺が潮時だな……」

銀時と新八は看板を捨てると現在地を離れる。

「神楽ちゃん達は大丈夫でしょうか？」

「まあハヤテ達を見失わなけりゃいいんだし、大丈夫だろ……」

神楽と伊澄は銀時達と違って隠れやすいのでハヤテ達の様子を見守り、何かあったら直接助ける役についている。

銀時達はこの通り係員に変装しているのである。

「でも銀さん…伊澄ちゃんが居るんですよ」

「……………大丈夫だろ、多分」

〈最後尾〉

「うーん、先頭からだいぶ離されましたねえ」

ハヤテはモニターを見ながら言う。

「どうですかお嬢様…まだ走れますか？」

「……………筋肉痛」

ナギは木の枝を杖にしている。

だがまだ体力は余っているようだ。

「……………分かりました」

ハヤテはコースマップを開くと、

「ではそろそろ……………作戦開始といきますか」

「作戦？」

「このレースは各所のチェックポイントをクリアしてゴールするみたいなんです、このチェックポイントさえ通過すればコースに従う必要はなく、むしろそのショートカットがこのマラソンの醍醐味

らしいんですよ」

「なるほど……」

ハヤテはコースマップをしまう。

「ですから、ここからはお嬢様を抱えてチェックポイントをショートカットで通過していいこうかと」

「え？」

「やっ！馬鹿！！ちょっと待て！！」

「ああ、確かにメインコース以外の道は勇気ある者だけが行けと書いてありますが……」

「いや！そうでは無くて……」

ナギは恥ずかしそうに俯く。

「抱えていくつてお前……今体操服だし……それに走ったから私……いっぱい汗かいてるし……だから……その……」

「大丈夫ですよ。僕そういうの全然気にしませんから」

「私はきにするの……」

しかし、そういうナギをヒョイと抱える。

「そんなの気にしてたら優勝出来ませんよ」

「うわあああばかああ／＼／」

そのままハヤテはショートカットを突き進んでいった。

その後ろの茂みで……

「ハヤテ、大胆アルな。ナギ真つ赤だったアル」

「それより、早く追わないと見失っちゃいます……」

「了解！伊澄、乗るネ！！」

「……ぎゃ！？」

神楽は伊澄を背負うとハヤテの後を追っていった。

ボード状況

雪路組（一位）
最下位）
組
組
一般生徒
組
組
八ヤテ組（

第四十三訓 　　どんな大会でも直前になると大抵緊張する（後書き）

伽藍

「皆さん、ありがとございます！」

新八

「な、何ですか！？いきなり……」

伽藍

「この小説もPVが遂に20万を超えました。更に感想も150件になって……本当に嬉しい限りです！」

銀時

「はあ、見切り発車もここまで来たか」

神楽

「これもこの小説における私達ヒロインのおかげネ！」

新八

「そっいえば、企画どうするんですか？」

伽藍

「……それなんだけど、企画の前に試験的に人気投票なんかをやりたいなあと思ってるんだけど」

銀時

「馬鹿つオメー、止めとけて。票が集まらないオチが見えてんだろ？」

伽藍

「あ、うん。それは分かっているんです。人気投票自体が目的では無く、人気投票をしてその様子を見て企画の方向を決めようと思っ
つて」

新八

「じゃあ、ある程度票が集まれば？」

伽藍

「企画も投票形式の戦い＋本編での決定戦にしようかな、と」

神楽

「票が集まらない場合は？」

伽藍

「本編での決定戦のみで行こうかな、と」

銀時

「つまり、人気投票の結果次第で企画の方針を決めたいと？」

伽藍

「ハイ……」

新八

「でもやって、あんまりにも票が集まらないのも悲しいですから、
取り敢えず皆さんに聞いておきませか？」

伽藍

「そうだね。」

……と言う事で読書の皆様、人気投票（試験的にですが）やった方が良いですか？それともまだ早いですか？気が向いたらお願いします」

銀時

「つーかいちいち他人に聞くか……？」

本当に一人だと何も出来ねーよな、お前」

伽藍

「……すみません？

もしやる事になったら次訓の前書きでやり方を発表しますので」

神楽

「本当に申し訳ないアルが、こんなダメ作者の為に答えてくれると嬉しいアル」

一同

「どづかよろしく願いします！」

教えて！！銀八先生

銀八

「ハイ、最初の質問『ナギのモンハンの装備は？』

「オーイ、ゲーム馬鹿。どうなんだ？」

ナギ

「誰がゲーム馬鹿だ！」

銀八

「因みに2GPの装備だそうだ。」

ナギ

「防具は銀リオシリーズだ。武器は太刀なら白猿薙、大剣ならキリサキだ……」

銀八

「次の質問は『ハヤテキャラの女性陣に質問。記憶喪失の銀さんを見たらどう思う？』」

「ハイ、ズバリ答えます！本編でやる予定でした……コレ。なのでその時をお楽しみに（いつになるか分らんが）」

銀八

「んじゃ、ラストだな。『神楽に質問。姫史と会ってどうだった？』だとよ、神楽……」

神楽

「初めて本物のロリコンに会ったネ。逆に新鮮だったアル。恐らくこの小説屈指のギャップの持ち主ネ」

新八

「だって凄いやね……あんなにカッコイイのに一気にぶっ壊れるもんね」

神楽

「誉められたのは嬉しいけど何か素直に喜べないヨ……」

新八

「あの神楽ちゃんを当惑させる程の実力の持ち主なんだね」

神楽

「でも良い人だと思うアル。変態だけど。ナギへの特訓は流石だったネ。変態だけど」

新八

「ハハハ……？」

ヒナギク

「では、次回もよろしくお願いします」

第四十四訓 万事斜めから見る視点を持つべし（前書き）

くお知らせ

伽藍

「前回の後書きで人気投票をやっても良いかと聞いたところ、皆さんの『やった方が良くぞ、コノヤロー』と言う声を頂きましたのでやらせて頂きます。」

・方法

偉大な先生方の人気投票を色々参考にさせて頂きました。

まず、好きなキャラクターに五票まで振り分けて感想及びメールに書いて下さい。

例

? 銀時

? ハヤテ

? ナギ

? 神楽

? 新八

また、五票全て好きなキャラクターにするのもOKです

例

? 銀時
? 銀時
? 銀時
? 銀時
? 銀時

五票までなら好きな振り分け方でも構いません

例

? 銀時
? 銀時
? ハヤテ
? ナギ
? ナギ

五票までなので、五個も書くのが面倒だという方は、一票でも二票でも構いません

例

? 銀時

? ハヤテ

o r

? 銀時

? 銀時

o r

? 銀時

まあつまり五票分の投票という事です。

因みに何度でも投票OKです。

例えば10人に投票したい方は、

例

一回目の感想

? 銀時

? ハヤテ

? ナギ

? 神楽

? マリア

二回目の感想

? ヒナギク

? 新八

? 千桜

? クラウス

? タマ

かなり面倒な方法かもしれませんがこんな感じでやりたいと思います。

何か不備の場合はその都度、感想がメッセージにお書き下さい。

）

銀時

「本当に大丈夫なのか？」

神楽

「票が集まらなかったら、もの凄い悲惨な事になるアルよ?」

伽藍

「うん。分かってます。ですので皆様！どうかご協力をお願いします！

また『感想を書くのダリー』という方も一言に票だけでも良いので是非投票して下さい！感想がヤダという方はメッセージを送ってくれるので大丈夫です」

銀時

「必死だな……作者の奴？」

神楽

「どうかこの哀れな作者の為にも、投票だけでもお願いするアル」

一同

「どうか、よろしくお願い致します……！」

投票は予定では、マラソン大会篇の後の長編が終わるまでを目処にしています。

多分、五十五訓くらいかなと思います。

詳しくはまた暫くしたら……です

第四十四訓 万事斜めから見る視点を持つべし

〔本部テント〕

「さて、早くも波乱が起こっているようです。参加者が次々とリタイアしていつていますが、これについて姫史先生？どう思われますか？」

「ふむ。まあ白皇だからな、体力が無い奴等の集まり……むっ！今日の前を通った娘！82点……いや85点だな……」

「いやあの先生……解説を……」

「はっ！？私とした事が何という失態！彼女の名前も知らん！」

「これ……マイク入ってるんですが……」

「ちょっと行って来る！ゲストは他の奴を見繕え。さらば！」

姫史はあっという間にテントから飛び出して行った。

「えー……では引き続きレースをどうぞ」

くチェックポイント(？)く

生徒30

「お、最初のチェックポイントらしいぞ！」

生徒31

「あれ？こんな所にあつたっけ？」

真ん中の生徒集団が最初のチェックポイントと思わしき場所にたどり着いた。

そこには……案の定二人の係員の姿。一人は白髪、もう一人はメガネである。

生徒30

「すみません。チェックお願いします！」

生徒組は次々と胸の薔薇を係員に見せる。

「ハイ。確認終わりました。」

「皆、お疲れさん。これはチエックポイントでの支給だよ」
メガネの係員が何やら紙にメモをすると、白髪の係員が飲み物を取り出した。

生徒30

「助かった！ちょうど喉渴いてたんだ」

生徒31

「毎回チエックポイントにあるなら何とかかなりそうだね……」

生徒達は一斉に飲み物を飲み干す。

「ゴミはここに捨てていって下さい」

紙コップをビニールに捨てると、

生徒30

「よし、頑張るぞオオ！」

生徒一同

「おオオオオオ……！」

そう叫んでチエックポイントを後にし………

バタバタバタバタ………

皆倒れ、眠ってしまった。

「悪いな…小僧ども。こつちもハヤテのクビ（報酬）がかかってるんでなア」

「知らない人からの貰い物は気をつけないと、ですね」

言うまでもないだろうが、こんな事をするのはこの二人、銀時と新八である。

「しかし面白くらいに引つかかるな…偽物のテント張っただけで」

「あと六組らしいですから…これで大体参加者の七割はリタイアです」

「んじゃ、後は神楽達と合流すつか」

銀時はテントを畳むと、新八と共にコースから外れた。

第四十四訓 万事斜めから見る視点を持つべし

「まあ、確かにあの長いコースを地味に走る気はないけど……

「ここ、学校の敷地内よね？」

「本当、凄い所よね」

「一方こちらはヒナギクと美希の組。

「二人が歩いている周りはまるでアマゾンのジャングルのようだった。

「ていうか本当に大丈夫なのかここは!？」

「大丈夫なんじゃない？一応学校内だし」

「大体……何で二人一組なのよ、このマラソン」

「ああ、それ？」

「ヒナギクは周りの木々を見回しながら……

「一人が遭難しても、もう一人が助けを呼びに行けるようになって……」

「メチャメチャ危険じゃないかアアアア!!」

マラソン大会運営委員会のアバウトさがよく現れていた。

「大体ヒナは勝手だ！自分が出来る事を人も出来ると思ってる!!」

いつも私の意見は聞かないし！何でも一人で決めるし！」

(アアアア…?)

美希はヒナギクに不満を並べる。

「これでも私は結構か弱いんだ！何かがあるか知らないけど、もし何か危ない事があつたらー」

「大丈夫よ」

ヒナギクは美希に振り返る。

「その時は、私があなただを守るから？」

「……………//」

そう言つて美希にウィンクする。美希は赤くなって顔を逸らした。

(……………ズルい奴め//)

「あ、さっそくーっ目のチェックポイントよ」

ヒナギクは最初のチェックポイント（本物）を見つけて駆け寄り、係員に話しかける。

「お疲れさま。今、何位ですか？」

「そうですね〜三十組くらいがリタイヤしましたから……」

「え！？もうですか？」

「ええ、まあ白皇ですからね。」

…それで五組ほど抜けていきましたから〜六位……最下位ですね」

「最下位！？」

ヒナギクは驚いたように声を上げる。一位では無くとも二位くらいかと思っていたのでかなり予想外だったようだ。

「急ぎましょう美希！グズグズしてられないわ！最下位なんて……」

「！！」

「あ………はい！！」

二人は先頭を目指して走り出した！！

ボード状況

雪路組 組 組 組 ハヤテ組 ヒナギク組

「いや、しかし一気に五位ですよ。僕の作戦大成功ですね」

「いつそ殺して…／＼／」

ハヤテに抱えられて真っ赤になっているナギ。

「このまま一気に優勝出来ますよ」

「それはどうかな？」

「!?!」

ハヤテの頭上から突如声が出たかと思うと、次の瞬間!!

ドドドドドドドドドド!!

「わっ!?!」

無数の薔薇がハヤテ達に振りかかってきた！
それを何とか避けるハヤテ。

「これは……薔薇の花!？」

「そう簡単に優勝はさせないよ」

「!?!」

ハヤテ達の後方の木の上に、冴木氷室と大河が居た。氷室は隣にいる大河という小さな男の子の執事である。美しく黒い髪に色黒な肌、かなりの美形である。

「あなたも……このマラソンに……?」

「ああ。優勝しなくてはいけないんだよ。どうしても」

ハヤテの問いに答える氷室。

「どうしてもって……何故ですか?」

「それはね、僕が一流の執事だからだよ。そして……」

僕はお金が、大好きだからね」

「……………」

キラキラと桜がバツクに散るほど爽やかな顔で言いきった。

「爽やかな顔で随分世俗にまみれた事を言いますね…………?」

「純粹なんだよ僕は。純粹が故に……」

バツ！

氷室は再度薔薇を構えると一気にハヤテ達との間合いを詰める。

「一番効率の良い勝ち方を選ぶのさ。一番優勝に近い君を叩く事をね！」

「!?!」

氷室が放つ薔薇を寸での所で回避するハヤテ。しかし、徐々に逃げ道は塞がれてゆく。

「動きが鈍いね……何処か痛めているのかい？」

「く……!!」

完全に追い詰められてしまったハヤテ。

「まあ、何にしても……これで終わりだ……」

(ここまでか……!?!?)

氷室がトドメの攻撃を……

「お待ちなさい……」

「!?!」

ハヤテ達の前に突如二人のメイドが現れた。

「弱きを助け、強きを挫く。我ら正義の味方!!
メイドブラックマックスハート!!」

「お…同じくメイドホワイトマックスハート…」

キラーン?

「二人はキュアキュア!」

メイド服の二人の女性は完全にポーズを決める。

「……………」

絶句のハヤテ。

それもその筈…だって二人の女性は…

(マ…マリアさん!?!これは…その…)

(だって時間がなくて…クラウドさんがこれでいけって…!!)

そう。マリアとサキだった。

グラサンをかけて下にカーテン(?)を羽織っただけ姿のためかなり恥ずかしい二人である。

(あ…あれ、マリアさんとサキさん…？だよな。
な…なんだろう…突っ込んだらダメなのかな)

ハヤテは呆然とその光景を見つめるが意を決したように、

「あ…あの…」

「マックスハートです！！／＼／」

「二人でキュアキュアなんです！／＼／」

ツッコミはやはりダメだった。

(しかし…あの格好は…)

「かつこいい…」

「ええ！？」

ナギはマックスハートに見惚れたようだった。

「とにかくここは私達…マックスハートに任せて…
あなた方は先へ！！」

「ハイ！ありがとうございますマックスハートさん！」

「……………」

あ…本当に行っていないんですか？」

ハヤテはおずおずと二人に尋ねる。

「行って下さい！」

むしろ出来るだけ早く行って見なかった事にして下さい！／＼／

「じゃ…じゃあお言葉に甘えて、行きましようかお嬢様…」

「うん？」

ハヤテとナギはマックスハート(?)に任せて先に進む事にした。

「なるほど…身代わりとはね…」

しかしあなた方で、僕を倒せるのかな？」

「さあそれは………」

「やってみないとわかりませんわ？」

氷室とマックスハートは対峙する……

一方……

「銀さん……あの二人……」

「何も言つな……俺達は何も見えてねえよ」

「銀ちゃん。ハヤテが行つちゃうヨ……」

「やべっ！！オイ急げ！」

「ハイ！神楽ちゃん、追うよ！」

「伊澄！しっかり捕まってるアル！」

「はわわわわ？」

神楽は伊澄を背負ってハヤテを追う。その後を銀時達も慌てて追った。

『さあいよいよレースも中盤です！現在六組が熾烈な争いを繰り広げております！』

（本部テント）

「因みにレースをコース通り走っている生徒はほとんどリタイアしていますか…この状況をどう思われますか？ゲストのワタル君？」

「ちょっと早すぎますね。」

「そういえば一部の生徒から『嵌められた』とか『不審者にやられた。白皇のセキュリティはどうなってるんだ』などの苦情が来ますが…」

「名門ですからね。とにかく広いですからね。杉並区一つ分はありますからね」

「一方ショートカットコースをひた走るチームも……」

雪路は崖から落下した！！

「このようなトラップで自滅したりしているのですか、大丈夫なん

でしょうかこの学校は」

「名門ですからね。安全対策は万全です、多分…」

「では、引き続きレースをどうぞ」

レース状況

雪路組 組 組 ハヤテ組 氷室組 ヒナギク組

*

(マリアさん達……大丈夫かな……)

ハヤテはナギを抱えて次のチェックポイントを目指している。

「カッコ良かったなあ、マックスハートさん……」

「いや、まあ……」

「しまったハヤテ！サインを貰うのを忘れた！」

「後で貰えますよ……」

正体を知っているハヤテは困ったように答える。

「とにかく今は四位です。テラスを通れば次のチェックポイントまでもう少しですからー!？」

その目の前のテラスには二人の男が立っていた。

ハヤテは急ブレーキをかけてストップする。

「お久しぶりですね、綾崎君」

「野々原さん……あなたもこのマラソンに？」

「ええ、私は賞金には興味ありませんが……若に厳しい試練を乗り越えて、立派な紳士になって貰いたいと思っていますのです」

そう言うのは野々原楓。彼は宮康家に仕える執事である。細目に少

し長めの髪をした美形である。戦闘力は相当なもので、ハヤテさえ上回るほど。一流の執事の一人

隣にいるのは“若”こと東宮康太郎である。誰もがしるヘタレ。

「……………ですので本気でいかせてもらいますよ」

野々原は竹刀を構えてハヤテ達の前に立ち塞がる。

(……………こんな所で野々原さんと戦っていれば先頭に追いつける可能性は低い……………)

第一今の僕では勝てるかどうかも危うい……………どうする……………)

ハヤテは必死に思考を巡らせるが野々原は待つてはくれない。

「では、いざ尋常に勝負……………」

「くっ……………!!」

ハヤテも諦めたように箒を構えるが……………

「その勝負、ちよと待ちや!」

対峙する二人の頭上から声が出たかと思うと、ハヤテの前に何かが飛び降りてきた。

ハヤテとナギは驚いて声を上げる。

「……………咲夜さん!それに……………桂さん!」

「咲!？」

飛び降りてきたのは咲夜と桂であった。

「ナギ、ハヤテ。ウチらが来たからにはもう安心やで」

「どうしてこんな所に!？」

「水臭いではないか、ナギ殿、ハヤテ君。マリア殿から話は聞いた。あとはこの俺に任せる……」

「お前達……」

「桂さん、咲夜さん……」

ハヤテとナギは少し躊躇うように二人を見る。

「早く行け。そして二人で優勝して来い」

「そうやで。じいちゃんに自分が一流の執事だっで見せつけてやり」

「ハイ!ありがとうございます!行きましょう、お嬢様!」

「うむ!」

ハヤテは再びナギを抱えるとチェックポイントへと走って行った。

野々原と桂は対峙する。

咲夜と東宮は取り敢えず横に移動した。

「悪いがこの勝負、この俺が引き継がせて貰おう」

「……良いでしょう。アナタを倒してから彼等を追うとしましょう」

野々原は竹刀を構える。

対する桂も竹刀で居合いの構えをする。

「私の名前は野々原楓です。どうぞお見知りおきを……」

「俺は桂小太郎。好物はそばだ……」

*

「ありました！チェックポイントです！」

ハヤテはチェックポイントのテントを見つけたので、コースに戻っていく。

「すみません！今何位ですか？」

「ええと一組抜けて行きましたから、二位ですよ」

係員は紙を確認して言う。

「分かりました。このペースなら追いつけますね！」

ハヤテ達は次のチェックポイントに向けて走り出す。

*

因みに一位を突っ走るのは……

「オイ真司！もうバテたのか？」

「ぜえ…ぜえ…」

幸久と真司のペアである。

たった今最後から二番目のチェックポイントに到着した所だった。

「だらしない。それでもお前は澳門家当主か？」

「お前のような…体力馬鹿と…一緒にするな…どれだけの…距離を走ったと…思っているのだ…」

大分息が上がっている真司。

対して幸久はピンピンしている。

「この調子だと、ハヤテ達が追いついてくるな……」

幸久はモニターを見ながら言う。

「どつするんじゃ……これ以上は……」

「分かった。ならばこのチェックポイントで奴等を待ち伏せるか」

「奇襲か？」

パコッ

「阿呆か……正々堂々正面からだ！」

幸久は一人で頷くと、

「行くぞ、真司。ハヤテ達が来るまでに体力を回復しておけ」

「……ハア」

真司は溜め息をつくとき、その場に座り込んだ。

*

一方ハヤテ達…

「お嬢様、この先のチェックポイントを通れば最後のチェックポイントまでもう直ぐですよ！」

「そうか／＼／」

ハヤテはナギを抱えてままチェックポイントに向かってコースに戻った。

「あ、ありました！すいまー……幸久君、真司君！？」

ハヤテが係員に話しかけようとして、幸久達に気付いた。

「ようやく来たか……」

「まだ体力は本調子じゃないがの……」

二人はハヤテ達に対峙する。

「二人もこのマラソンに出てたんですか…」

「当然だ。この自由型で勝って全種目制覇を目指しているからな！」

そう言うと幸久は長棍を構え、真司は札を構える。

「お前達をここを通す訳には行かないんだ」

「済まぬな…まあそう言う事じゃ」

ハヤテはナギを降ろすと二人に対峙する。

「お嬢様、さがっていて下さい。」

「ハヤテ!?!」

ナギを前にハヤテは二人を見据える。

「ここは僕がいきます!」

「面白い!行くぞハヤテ!」

箒を構えるハヤテに向かってゆく幸久!

ドオオオオオン!!!

「!?!?!」

突如、ハヤテと幸久の間に何かがあつ込んで来た！
爆発したように砂塵を巻き上げる……

「何だ！？一体……」

幸久は咄嗟に引いて距離をとる。

すると、突っ込んで来た場所から……

「ハヤテエエエエ！！無事アルかアアアア！！」

「え！？神楽さん！？」

何と神楽の声が聞こえてきたのだ。

そして……砂煙が消え去るとそこから神楽と背負われた伊澄が目を
回して現れた。

「神楽！？伊澄！？」

「どうしてここに！？」

ナギとハヤテは神楽が降ってきた場所を驚いてみる。
それは幸久達も同じである。

「ハヤテ、ここは私達に任せるネ！その代わりナギと一緒に絶対優
勝してくるアル！」

「はわわわわ…」

「……いや、っていうか伊澄さん大丈夫なんですか!？」

伊澄は神楽の背中であまだ目を回してる…

「早く行こうハヤテ。伊澄の犠牲を無駄にしないように!」

「は、はあ……」

分かりました。神楽さん、伊澄さんお願いします!」

ハヤテはナギを抱えると、ショートカットをする為、林の中に飛び込んで行った。

「俺達もうかうかしていられんな。優勝は渡さないぞ……」

「我は別にどうでもいいんじゃないが……ここまで来たし、付き合っ
てやるっかの」

幸久、真司は各々が臨戦体制に入った。

「伊澄、起きるアル」

「ふえ………?」

神楽は伊澄を降ろした。

伊澄はようやく正気に戻ったようだった。

「これは……一体？」

「伊澄はシンちゃんを頼むネ。

私はユツキーの相手をするアル」

神楽はそう言っつて傘を構えた。

く本部テントく

「さあさあ、このマラソン自由型もクライマックスに入ってきました。各所で熾烈な争いが繰り広げられています。どうですか、ワタル君？」

「くねぐねも怪我をしないようにして欲しいですね。つーかもつま
ラソソじゃないですよね」

「さあ、優勝の座に辿り着くのは一体どのペアなのか!？
肝心な所で、次回に続きます」

ボード状況

ハヤテ・ナギ（一位）

幸久・真司 VS 神楽・伊澄

野々原・東宮 VS 桂・咲夜

ヒナギク・美希

氷室・大河 VS マックスハート

雪路・薫（Lost?）

第四十四訓 万事斜めから見る視点を持つべし（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「本日最初の質問は、『万事屋三人に質問。ハヤテキャラの中で誰が一番まともだと思う？』」

あゝ……まともねえ。俺アハヤテだと思っぞ。それがワタル」

新八

「僕達の世界に比べたら皆まともに見えますよね…」

僕は西沢さんかクラウスさんですか」

銀八

「あゝなるほど。俺らの世界で新八が一番まともというなら、そうかもな」

新八・西沢・クラウス

「それ地味って言うてんのかアアアア！！」

神楽

「そうアルな、ヒナが一番しっかりしてると思っネ！」

銀八

「『一訳でほとんどツツコミ役でした。ハイ次の質問。』真司と辛久に質問。お互いどう思ってる？』だよ」

真司

「腐れ縁じゃ、腐れ縁」

幸久

「何故！？長い付き合いをそれでまとめるのか貴様は！？」

真司

「長いって……中等部の二年間と高等部の一年じゃろ」

幸久

「三年も親交があるだろう！」

真司

「だ、もう喧しいわ熱血馬鹿」

幸久

「馬鹿とは何だ！？この醤油馬鹿！」

真司

「醤油をバカにするなアアア！主らが普段美味しく食事出来ているのは醤油があるからだ！！そんな事も分らんか、この女性恐怖症のヘタレが！」

幸久

「貴様アアア表に出るオオオ！！今日こそ白黒ハッキリさせてやる。術が無いと何も出来んヘタレは貴様の方だ！！」

真司

「言つたなアアア！！よし分かった！決着をつけてやる！」

二人は教室をもの凄い勢いで出て行った。

銀八

「喧嘩するほど仲が良いね…まあ作者は出会いのエピソードでもい
つかやると思うんで。」

ドオオオオオン！！！！

幸久

「効かんわアアアア！！へタレがア」

真司

「己はアアアア！！」

ドオオオオオオオオン！！

銀八

「ハイ次の質問」『作者とナギ達に質問。ゼロの使い魔とFate
でどのキャラクターが一番好き？』
「じゃあまず作者」

伽藍

「ええと……ゼロ魔だとカトレアです！優しいし綺麗だしスタイル

も良いしお姉様だし……

おおっとイカン！Fateだとセイバーですね。特にリリイはかなりきました！あのポニーテールが堪らな……ぐはっ！！」

新八

「先生、作者が貧血で気絶しました」

銀八

「放っておけ……」

「んじゃ、次はナギ？」

ナギ

「ゼロ魔だと当然ルイズだ！！声以外でも共感する所があるしな！」

伽藍

「ほとんど胸だろ……」

バキッ！ベキッ！ドカッ……

ナギ

「Fateなら……イリヤかな」

伽藍

「ぐっ……背と……胸だな……」

メキッ！ザクッ！ゴスッ……

銀八

「ハヤテは？」

ハヤテ

「いやちよつとゼロ魔は分かりませんが、Fateならアサシンがカッコイイと思いますね」

銀八

「マリアやヒナギクは知らないだろうから……そうだ、千桜は？」

千桜

「ゼロ魔は断然ルイズですね！やはりヒロインの可愛さが重要ですから！Fateは……」

ナギ

「ちよつと待て！！確かにゼロ魔のヒロインには萌えるが、大切なのは使い魔同士のバトルだろ！ヒロインの可愛さなど二の次だ」

千桜

「いいや！重要なのはルイズの可愛さだ！作品の本質はそこにある」！

ナギ

「まったくお前は分かっていない！全然違アアアう！」

ギャーギャー……

銀八

「……で最後の質問『銀さんはおしとやかな女性が好みだと言っていました、伊澄ちゃんを十年後にしたらどうですか？十年バズーカとともに送りますので、検証してみてください』と言う星空の侍さんからなんだが」

新八

「どうしたんですか？」

銀八

「作者、お前から言え」

伽藍

「ハイ。この質問なのですが、かなり面白かったので後書きでやるには勿体無いと思ひまして、本編でやりたいんですが、星空の侍さん！大丈夫ですか？

もし大丈夫なら十年バズーカと質問を万事屋三千院家支店に送って下さい！お願いします（笑）」

銀八

「んじゃ、今日はこの辺で〜」

新八

「気をつけー！礼！」

一同

「銀魂〜！」

第四十五訓 勝てば官軍（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「人気投票、沢山の方に投票して頂いてます。皆様本当に投票ありがとうございます！」

伽藍

「沢山の感想での投票、そして5通もメッセージ投票を頂きました。嬉しい限りです！」

ハヤテ

「まだ投票は続きます。感想投票、メッセージ投票、これからもお願いします」

クラウド・ハヤテ・伽藍

「では、始まります！」

第四十五訓 勝てば官軍

『さあ！いよいよこのマラソン自由型も佳境に入ってまいりました！
一体この戦いは戦士達にどういった結末を与えるのでしょうか…！
』？

第四十五訓 勝てば官軍

（本部テント）

「ええ、『最早マラソンじゃねーじゃん』とか『あんな化物どもに
勝てるか』等々様々な意見も多数来っていますが……どう思われます
か？ワタル君？」

「そうですね、そう言うのは作者に苦情を言った方が良いと思いま

す

「……………そういえば前回の感想でワタル君はマラソン自由型に出ないのか?という意見がありましたか?」

「自分は既に500mに出てるんで」

「なるほど では各所で繰り広げられている戦いを見てください。解説は相変わらず瀬川泉でした?」

ボード状況

ハヤテ・ナギ(一位)

幸久・真司VS神楽・伊澄

野々原・東宮VS桂・咲夜

ヒナギク・美希

氷室・大河VSマックスハート

*雪路・薫(Lost?)

↳第二チエックポイント前↳

氷室とマックスハートは向かい合っている。

「倒す……？」

「一流の執事であるこの僕を……君達に倒せるのかい？」

「ええ……というか、

倒せますよね？クラウドさん」

「勿論」

マリアが振り返ると、木の木陰からクラウドが現れた。

「これはこれは……誉れ高い三千院家の執事長ではありませんか」

「ほほう。よくご存知で」

氷室とクラウドは対峙する。

「その御老体で私に勝てるか？」

「心配には及びません……」

クラウドは姿勢を低くして、氷室を見据えると……

「老人には老人の…戦い方がある！」

バツ！

「これで勘弁して下さい！」

クラウドはお札が詰まったスーツケースをお辞儀しながら手渡していた！

「……あの、お金で解決しようとしてますけど……」

「クラウドさんを信じた私がバカでした……」

無論その光景に呆れ顔のサキとマリア。

「フツ………呆れたものです。三千院家の執事長がこのような戦い方とは………」

氷室は肩を竦める仕草をすると、

「………まったく恐れ入りました」

（（ええー………！？））

氷室が深々とクラウドにお辞儀を返し、決着が着いてしまった！

「……一流の執事はアレでいいんですか？マリアさん」

「まあ……一流の執事は他にもいますから」

氷室・大河（Loss）vs マックス・ハート＋クラウド（Win）

〈本部テント〉

「いやー……何というか、一流の執事も色々と言つことが分かりましたね

尚、ここからは三人目のゲストに春風千桜さんにお越しいただいてまーす？」

「よろしくお願いします」

「では、次の場所へいってみましょう」

「テラス」

既に何度目かの打ち合いを経て、尚も二つの竹刀はぶつかり合っていた。

左から野々原が立て続けに打ち込み、向かいの桂はそれを受け止めている。

桂の防戦一方のようにも見えるが、野々原は打ちが嵩む度に太刀筋が乱雑になっていき、息づかいも荒くなってゆくのに対し、桂は息も切らしていない。

そこには明らかな剣術の腕の差が見てとれた。

一旦距離を取る両者。

「……何者なんです？アナタは。かなりの剣の腕とお見受けします
が……」

「大した者じゃない。剣は昔少し習った程度だ」

野々原は確信していた。この男は只者ではないと。

竹刀を横に寝かせ姿勢を低く保つ“居合い”の構えからは微塵の隙も窺うことが出来ない。

その姿は……………まるで侍。

彼の放つ“気”には僅かな躊躇いさえ許されないようだ。

「仕方ありませんね…必殺技これは使いたく無かったのですが……………」

ふいに野々原の竹刀が炎に包まれる…

刹那…

「超爆裂炎冥斬セーフティシャッター!!!」

「な!？」

野々原は竹刀から竜のような炎を放ちながら桂に突っ込んだ!

ゴオオオオオオ!!!

「ーっ!!」

桂は辛うじて回避するも着物の裾が少し焼け焦げる。

「な、何やアレ!?人が燃えたで!?!」

咲夜と東宮はテラスの横にあるテーブルでいつの間にか観戦していた。

「アレは野々原の必殺技、超爆裂炎冥斬だ。龍炎を竹刀に纏って相手に攻撃するんだ」

「いや……何で炎が出るん?コレバトル小説と違うで。」

「でも……執事だしさ」

「……………せやな。執事やからな」

「超爆裂炎冥斬!!!」

「ぐっ!!」

一方桂と野々原の立場は完全に逆転していた。

炎を纏った野々原に迂闊に近づけ無いが故に、桂は次第に追い詰められてゆく…

ガタッ

「！！？」

桂は大きな大樹に逃げ道を塞がれてしまった！

「詰みましたね…超爆裂炎冥斬！！！！」

ゴオオオオ！！！！

大樹に鈍い音を立てて竹刀が突き刺さり、周りに煙が充満した。

（決まりましたか……）

野々原はフツと身体の力を抜いて、煙が引くのを待つ。

「一つだけ忠告しておこう」

「！！？」

突如頭上から桂の声が響いたかと思うと、桂は野々原の後方へと飛

び降りた。

(馬鹿な！？確かに手応えは…)

竹刀が突き刺さっていたのは僅かに盛り上がった木の面に、桂の上衣だけであった。

「武人たるや、己の過信のみで気を抜かない事だ……」

(あの一瞬で……木の面と上衣だけで身代わりを……！?)

野々原は愕然と目の前の焼け焦げた光景を見つめる。

「自分の視界をも霞める大きな炎が仇となったな……」

「……………」

桂は竹刀をコテンと野々原の頭に置く。彼は諦めたようにフツと笑うと、突き刺さった竹刀を手放した。

「おお！やるやないか自分！」

「そんな、野々原が負けた!?!」

東宮は驚いたように二人を交互に見つめる。

野々原は振り返って桂に手を差し出す。

「参りました。桂小太郎さん、また手合わせをしたいですね」

「いや、こちらこそ。またいつか会う機会があれば是非、野々原殿」

二人は互いに握手し合うと、野々原は胸の薔薇を散らした。

野々原・東宮（Loss）vs 桂・咲夜（Win）

（本部テント）

「いやー、凄い戦いでしたね

あの野々原さんが敗れるとは…

どうですか？ちーちゃん」

「普段はあんなにボケているのに…凄いギャップですね」

「アレ？ちーちゃん、桂さんの事知ってるの？」

「……………次いつてみましょう」

〈第9チエツクポイント〉

「ほわちやアアアア」

ドオオオオオオオオオオ！！！！

「ぐっ…！！」

第9チエツクポイントでは、神楽組と幸久組が戦いを繰り広げていた。

「オラアアアア！！」

「ぬおおおお!?」

ドオオオオオ...

幸久と神楽はまさしく肉弾戦を展開している。

「ユツキー逃げてばかりアル。正面からかかってくるヨロシ!!」

「阿呆か!死ぬわ!」

幸久は神楽が叩き割った地面を見て叫ぶ。

(人間の出せる力じゃないぞ...まして女が...)

啞然としている幸久をよそに、神楽は尚も接近を試みる。

幸久は長棍を使って何とか距離を取っている状況だった。

(本気を出さんとヤバイか...)

幸久は武器を持ち方を変えて、姿勢を低く保ち神楽の突進を待ち構える。

「やっと勝負する気になったアルな!」

「出来れば御免被りたいがな!」

神楽の直接的な打撃を幸久は流れるような動作で打ち流してゆく。

逆に幸久の隙を突こうとする反撃は神楽の力に塞がれる。

まさに力と技の勝負であった。

一方、伊澄と真司というと…

「いや、空が青いのう…」

「ですわね」

チェックポイントでお茶を飲んでいた。

「でも我らは戦わなくても良いのか？」

「疲れますからね」

「そうじゃの……」。

「ま、第一戦っても我が勝つと結果は見えてるしな」

カチン！

「……………試してみますか？」

「は？」

伊澄は札を取り出すと、周りが光に包まれる。

「待て待て伊澄！洒落じゃ！洒落！」

しかし、伊澄からは雷が放たれ、真っ直ぐに真司に突進していった！

ゴオオオオオ……………！！

砂塵が舞い上がり真司のいた所は地面ごと削りとられる……………

真司は黒い光の壁で何とか防いでいた。

「フツ……………なるほど。……………ここで白黒ハッキリさせておいた方が良さそうじゃの？」

「……………」

二人は札を構えて睨み合つと……………

ドゴオオオオオオオオオ！！！！

術の撃ち合いが始まった。

「はあアアアア!!」

「でやアアアア!!」

幸久と神楽の近距離戦はもはや常人の目では追いつかない程であった。

神楽が回し蹴りを繰り出すと、幸久は飛び上がり回避しつつ長棍を地面に突き刺し神楽の背後へ回り込む。

そのまま長棍を突き出すも、神楽は咄嗟に地面を蹴りあげ距離を取る。

このやり取りが僅か一秒。

それが何回も繰り返しているのだ。

もはやギャグコメディではない。

しかし、速さで勝る幸久に神楽は守りがちの姿勢へと移ってゆく。

(ヲツキーの動きが読めないネ…マズイ…このままだと…)

単に速いだけで無く、幸久の長棍を使った特殊な動きに次第に追い込まれる神楽。

「貰った！」

「しまっ…!？」

僅かな隙を突いて幸久が開いた真横のスペースを取り、そのまま神楽を蹴りあげた！

神楽は吹き飛び地面に叩きつけられる。

（油断したネ!!）

連撃を予想した神楽は顔を素早く幸久の方向へ向けると……

「む…無念…」

幸久は気絶してしまった。

「だアアアアア!!あの馬鹿は!恐怖症のくせに何をやっとなるんじやア!!」

真司は幸久がダウンしたのを見て、詠唱を止めて駆け寄った。

伊澄も札をしまつと、神樂の元に行く。

「伊澄！無事だったアルか！？」

「ええ、私は……少々熱くなつてしまいましたノノノ」

伊澄は冷静になると恥ずかしそうに言った。

因みに先程まで真司と伊澄が術を撃ち合つた場所を見れば、少々どころの話ではない事は明白だった。

地面はありとあらゆる所まで沈み、抉れている……

「神樂ちゃんは大丈夫ですか？」

「ユツキーが勝手に気絶したアル」

二人は幸久の方に目を向ける。

真司が幸久を背負い起こしていた。

「……こやつが動けん以上、我らの負けじゃな。流石に我一人でお主ら二人では勝ち目が無いからのっ」

真司はそう言つて自分の胸の薔薇を散らせた。

「伊澄、この勝負は次回に引き延ばさせて貰うぞ」

フツと笑つと、そのまま幸久を背負つてチェックポイントを離れていった。

「敗けたのに勝ったアル」

「結果良ければ全てよし、ですよ」

「後はハヤテ達が頑張るだけアルな！」

「ハイ……」

二人は遙かゴールの方向を眺めた。

真司・幸久（Loss）vs伊澄・神楽（Win）

（本部テント）

「いやー、何の小説か分からなくなるような勝負でしたねー」

「そうですね……というか、あの散乱した庭はどつするのでしょうか？」

「うーん……教職員のお給料が減らされるんじゃないかな？」

色んな場所で一斉に教師が咳き込んだ。

「まあ、そうすると現在の状況は……」

ボード状況

ヒナギク・美希

ハヤテ・ナギ

雪路・薫（Lost?）

「おろ？ヒナちゃん達がハヤ太君を追い抜いているよ？」

「かなり難度の高いショートカットでも使ったんじゃないですか？」

「なるほど」

「お嬢様！最後のチェックポイントも通過しましたし、後はゴールだけですよ！」

「そうか」

ハヤテはナギを抱えてゴールを目指して突き進んでいた。

「このまま一気に優勝ですよ！」

「そうはいかないわよ！」

「！？」

突如ハヤテ達の目の前にヒナギクと美希のペアが現れた。

「ヒナギクさん……いつの間に……」

「かなり難度の高いコースを通過して来たからね」

「ヒ……ヒナ……もう……もう無理」

「あ……ハイ、水ね？」

ヒナギクは後ろでへばっている美希に飲み物を渡す。

「……という事でこの先に進ませる訳にはいかないの／＼／」

（人選ミスじゃないかなあ……）

ハヤテ達とヒナギク達は正面で対峙し合う。

「ところでハヤテ君、あなたこのマラソン……ずっとナギを抱えて走っているの？」

「え？はあ……大体そうですけど……」

ハヤテはそう言ってナギを降ろす。

「でもハヤテ君が全部抱えて走ったら、ナギは何のために参加したのかしら……」

「……」

ハヤテはハツとした顔になる。

（お嬢様のため……？）

そうだ……元々これはお嬢様の運動嫌いを少しでもなくすために……）

「だ、だが！！走れないものは走れないのだ！！
皆がヒナギクのように完璧には出来ないのだ！！」

「……………それでも

苦しくて、辛くて、死んでしまいそうな想いのその先に……
なにものにも換え難い本当の喜びがあったりするのよ……」

「……………」

ナギはヒナギクの言葉に感嘆したような表情をする。

「若いのに素晴らしい考えだな……なあ、新八君」

「そうですね、おじさん」

ガサツ……

「!?!?」

ハヤテ達が対峙する横の林から二人の男、銀時と新八が現れた。

銀時は付け髭をつけて自転車を持っていた。

後ろ新八は何やら大きな長方形の紙を数枚抱えていた。

「銀時!?!?」

「銀さん!?!?」

驚いている三人をよそに、銀時達はハヤテ達とヒナギク達の間に入っていく。

銀時は自転車を真ん中に止めると、新八は持っていた紙を額縁にセツトして、自転車の荷台に乗せる。

「……え？何々？」

「銀時？」

銀時は全員を見てニヤリと笑う。

「さあ〜て、紙芝居屋銀ちゃん、開店だよ〜」

第四十五訓 勝てば官軍（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「最初の質問だ。『作者とナギに質問。ジャンプで好きな作品とキヤラは何ですか？』だよ。どうなんだ？」

作者

「僕はダントツで銀魂ですね。好きなキャラクターは勿論銀時です」

ナギ

「作品はバクマンかな。最近熱いし……好きなキャラクターは沢山いるが……うん、色々だ」

銀八

「んじゃ次の質問。『クラウドに質問。新八は執事だったらどのくらいのレベル？』」
「執事長ー！どうすつか？」

クラウド

「ふむ。まあ家庭的な所は中々向いていると思いますな。聞けば家事は勿論気配りも出来るそうですね。鍛えれば優秀な執事になるやもしれませんな」

新八

「あ、ありがとうございます！意外に好評価！」

銀八

「んじゃ最後の質問ねー。『ナギに質問。二年後の神楽を見てどう思う？』」

ナギ

「二年後？」

銀八

「神楽ー！二年後のアレやれ！」

神楽

「了解ネー！！」

神楽は突如光に包まれると、あの二年後の姿になった。

一同

「おおー！！」

神楽は身長は高くなり、バストもかなり大きくなっていた。洋服は露出の高い衣装に美しい顔立ちはさらにきらびやかに輝いている…

神楽（二年後）

「皆こんにちわ。神楽ヨ？」

ナギ

「これが、神楽の二年後…」

ヒナギク

「スタイルもモデル並ね……」

ハヤテ

「凄い……綺麗ですね／＼」

ナギ

「何顔を赤くしてるのだハヤテ!!」

ハヤテ

「へ!?!いやいや、そんな事ないですよ／＼」

ナギ

「ありまくりだろうがアア!!」

ハヤテ

「ぐはっ!?!」

ナギのドロップキックでハヤテは吹き飛んだ。

ナギ

「二年後になれば……あんな風に……」

銀八

「まあ、つー訳で今回はここまでだ。因みに地味ランキングの質問は人気投票のおまけとしてやるからそのつもりで」

神楽（二年後）

「それじゃ、また次回をよろしくアル?」

第四十六訓 負ければ賊軍（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「銀魂37巻本日発売ですぞー!!」

ハヤテ

「皆さん是非ご購入くださいね」

神楽（二年後）

「あの二年後ネタも収録されてるアル？」

新八

「神楽ちゃんいつまでその格好でいるの？」

クラウド

「そして、今回でマラソン大会篇完結ですー!!」

ハヤテ

「僕達の運命やいかにー!!」

神楽（二年後）

「では、どうぞアル？」

第四十六訓 負ければ賊軍

〔本部テント〕

「ヒナちゃん達の前に突如現れた謎の二人組の紙芝居屋。彼等は一体何者なんでしょうか!？」

(……………アレ、銀時だ……………)

「どう思われますか?ちーちゃん?」

「何で紙芝居屋というチョイスなんでしょう?」

「……………たあ?」

くつり橋前

「銀さん!？」

「銀時!？」

三人は驚いたように声を上げる。美希は木の幹で休んでいる。

「……………」

銀時はハヤテとナギに背を向けて、ヒナギクの正面に立つ。

(……………ん?)

ハヤテは銀時が自転車に積まれた長方形の紙を指差しているのに気付いた。

『早くゴールへ走れ』

そう書いてあった。

新八は後ろでコッソリ親指を立てる。

(……………銀さん、新八君)

ハヤテは二人を交互に見て頷くと、ナギを抱えて背を向け走り出した。

「な!？」

ヒナギクは意表を疲れたようにハヤテ達を見るが目の前には紙芝居屋が立ち塞がる。

「なるほど……どうあっても邪魔をするのね」

ヒナギクは正宗を構える。

しかし銀時は落ち着いて言う。

「まあまあお嬢さん。そうカツカせずとも、三分だけ私達の紙芝居をみていかないかね?なあ、新太郎君」

「新八です、おじさん」

*

「降ろしてくれ」

後はゴールだけを目指すハヤテ達。しかしナギの意外な一言でハヤテは急ブレーキをかけた。

「お嬢様？」

「ここからは二人で一緒に走ろう。ヒナギクの言う通り、全てハヤテに抱えて貰っては意味がない」

「でも、まだゴールまで距離がありますよ…？」

「最初に言っただろ？二人で一緒にゴールしようって」

「お嬢様……」

ハヤテは頷くと、ナギを降ろす。

「もう一頑張りです！絶対優勝しましょうお嬢様！皆の為に」

「ああ！」

二人は並んで走り始めたのだった。

*

「紙芝居？一体何のために…」

「いいからいいから…取り敢えずこの話を聞いてみなさい」

銀時が新八に目配せすると、新八は自転車の荷台の額縁に紙をセツトし始める。

その光景に終始困惑顔のヒナギクと美希。

「では、紙芝居屋銀ちゃんの『三分で泣ける話』始まり始まり」

.....

* 銀魂本編の『寝る子は育つ』での引用。結末を一部変更しました。

【ごめんね、ジェリー】

私に始めて友達が出来たのは、忘れもしない10年前の夏でした。

引っ込み思案でいつも一人で遊んでいた私を気遣い、父が連れてきてくれた友達。

それが、ジェリー（犬）だった…

私とジェリーはいつも一緒。

何処へ行くにも一緒。

何をするにも一緒。

まるで……本当の友達のようにだった。

色々な芸も教えた。

ジェリーの十八番は『待て』

どんなご馳走を前にしても一度待てと言えば、いつまでも待っていた。

ジェリー以外の友達なんていない。当時、そんな事を思っていた私だったが、そんな想いとは裏腹にジェリーに興味を持った子供達が私の周りに増え始め……

いつの間にか…

私にはジェリー以外の友達が沢山出来た。

それから私の興味がジェリーから他に移るのに、そう時間がかからなかった。

以前のように私と一緒に遊び行きたがるジェリー…
ワンワンと吠えるジェリー…

そんな時は、彼の十八番が役に立った。

私はジェリーに一言、「待て」

ジェリーはいつも私が帰るまで、玄関そとで待っていた…

一歩も動かず、ただジッと私の帰りを待っていた…

そんな折、父の会社が倒産し、裕福だった私の家は没落。

私達は借金取りに追われ、気のみ気のまま逃げ出す事になった。

自分達の生活もままならない状況の中、真っ先に切り捨てるべき対象は子供の私にも理解できた。

自分の運命を察したのか、ジェリーは手足が千切れんばかりに追い
縋ってきた。

「待て」

私は、いつもの一言を冷徹に浴びせた。

「待て」

私は一度も振り返る事も無く、
ジェリーの前を去った……

それから数カ月……

私の足は自然と“あの場所”に向かって行った。

既に遠い町に引越していた私だったが、どうしてもジェリーの事が
頭から離れなかった……

ジェリーならきつと大丈夫。

きつと誰かが拾ってくれている筈。

今思えば、私は早く安心したかったのだ。
私に罪は無い事を…

ジェリーが生きている事で、それを早く確認したかったのだ。

「!?!」

ジェリーは誰かのものにも、亡骸にもなっていなかった…

ジェリーは、いつものようにそこで待っていた。
一歩も動かずに、私の帰りを待っていた。

「……あ……ああ……」

「酷いもんじゃろ……」

私の後ろから初老の男の人が現れた。

「暫く前に、そこに捨てられておっつな。親切な人が連れて行くことしたり、エサをやるうことしたり、色々しとつたんだが…
こやつ、どついう訳か頑としてここから一歩も動かなくてな…」

「…あ…あ…」

「そのうち、誰も相手にしなくなつてもうた。
まさか、主人が戻つてくるとでも思つてたのかのう…」

「……………あう……」

「いずれにしても……哀れな話じゃ」

「……………」

そつと手を伸ばし、頭を撫でると、微かに開いた虚ろな目で私を見る。

ジェリーは、僅かに尻尾を振る仕草を見せると、それっきり動かなくなつた。

私は泣いた……
ただただ泣いた……
ひたすらジェリーを抱き締めて泣いた……

その後、私が目を覚ましたのは自分の部屋だつた。
親が心配そうに私を覗き込んでいる。

話を聞くと、あの初老の男性が家まで運んでくれたらしい。
勿論ジェリーの事は両親は聞いていなかったようだし、私も話す事が出来なかつた。

涙は留まる事を知らず、枕を濡らした……

泣かないで……

私の前には真っ白い景色が広がっている。
それが夢だと気付くまでにそんなに時間はかからなかった。

泣かないで……

「!？」

誰の声かは分からない。
でも私の頭には咄嗟にジェリーが横切った。

泣かないで……ご主人様……

「ジェリー！ジェリーなのね！」
私は必死に、声の出る限り叫んだ。

「私……ごめんなさい！ごめんなさいジェリー！」

謝らないで……私は幸せだったから……ご主人様と一緒に居られた
時間……

「ジェリーイイイイ！」

ご主人様はいつまでも笑っていて欲しいから……
だから泣かないで……

「ジ、ジェ……」

最後に来てくれて……嬉しかった……

ありがとう……

そうして、声は聞こえなくなりました。

ジェリー……ありがとう……ごめんなさい……ごめんなさい……

数年後……

私は毎年、欠かさずにジェリーのお墓参りに来ている。

ジェリーを捨てた公園に、一時間黙禱を捧げる事になっている。

私に大切な事を教えてくれた親友に……

なにもものにも換えがたい日々をくれた私の宝物……

今、私は犬を飼っている……

勿論、名前はジェリー。

ジェリーは今日も私の傍で、元気に吠えている。

……

「…………おしまい」

銀時が紙芝居を表紙に戻す。

「…………グスツ」

「……………」

ヒナギクも美希も目に涙を浮かべていた。

「人間の心の弱さを…動物を飼う事の大切さ…………それを教えてくれる話だったなあ、新五郎君」

「…………グスツ…新八です。おじさん」

新八も目頭を押さえて俯いていた。

「グスツ…ジエリー…ずっとご主人様の約束を守るなんて…」

「うん……………」

特にヒナギクはジエリーの心境が他人事に思えないのだろう。何度も涙を拭っている…

そう…………銀時達の作戦とはまさしくコレであった。

かなり長い時間足止め出来ると踏んだのである。

「でも……」

そう言うとヒナギクは赤らんだ頬のまま、銀時達の前に出る。

「そんな話を聞いたら尚更、この大会に優勝しなければいけない気がしてきたわ」

「は？」

予想外の答えに声を上げる銀時と新八。

「悪いけど、そこをどいてもらえるかしら？」

(ヤベーな……逆効果だったか?)

銀時は付け髭とエプロンなどを脱ぎ捨てた。

「新八、コレ脇にやってる」

「銀さん？」

自転車や紙芝居を新八に預けてる。

「悪いなヒナギク。オメーをここから先は通す訳にはいかねえ」

「……むしろ貴方なら大会に出場するって言うと思ったのだけれど」

「優勝して500万獲得ってか？」

銀時は不敵に笑うと木刀を構える。

「んな金に興味はねーよ……」

アイツらの優勝の方が、もっと大きくて、ずっと尊いもんだからな」

「なるほど……」

ヒナギクも正宗を中段から横に構えて銀時と対峙する。

「だったら、グズグズしてられないわね」

銀時の構えは居合……

抜刀術とも呼ばれる日本独特なその構えはまさしく侍の象徴といつても過言ではあるまい。

銀時の構えから感じられるのは極めて異質な雰囲気。

静けさを保つ美しく澄んだ水面のような静でありながら、同時に敵を捉えて離さない鷹が如し覇気とも言うべきか……

「……………」

それはヒナギクの闘志を駆り立てるのに十分だった。

どれくらい時間が経ったか……

今日何度目かの風が二人の間をすり抜ける。

外野にいる新八も美希もその光景に息を呑むのみで動く事さえ許されなかった。

刹那……！！！！

それは瞬きさえ許さぬ一瞬の事だった……

新八も美希も何が起こったのか分からない様子だった。

目の前には相変わらず銀時とヒナギクがいる。

しかし、二人の立ち位置が変わっていたのだ。

そう。もう勝負は決していたのだ……

あまりの速さに美希は勿論、新八も開いた口が塞がらなかった。

更に驚くべきは、銀時の居合の速度にヒナギクが少なからずあわせることが出来た事だった……

銀時もヒナギクも全く微動だにしない。

まるで二人の時間だけが止まったかのように。

パサッ……

薔薇の花が風に乗って美しく散ってゆく。

「完敗ね……ま、当然か」

ヒナギクが散ってゆく薔薇を見つめながら呟いた。

彼女の胸からは薔薇の花が無くなっていた……

ここで新八達はやっと理解した。この勝負の結末を。

銀時 (Win) vs ヒナギク (Loss)

*

「負けたっていうのに、随分ご機嫌みたいね」

「アラ、そうかしら」

美希は晴れやかな表情のヒナギクに不思議そうに尋ねた。

「ヒナは相当な負けず嫌いだからな」

「な！？別にそんな事ないわよ／＼／」

「でも凄いですよヒナギクさん！銀さんの居合に反応出来るだけでも凄いの」

新八は尊敬の眼差しを送る。

「別にそんな事ないわよ？

でも…銀時があんなにナギ達を想ってるなんてね」

そう言っつて銀時に悪戯っぽく微笑んだ。

「当たり前めえだろ。俺は依頼と報酬の事は片時も頭から離れた事はねーよ」

.....

「.....え？」

依頼...？報酬...？」

ヒナギクは訳が分からないという表情。

「ああ、僕らはクラウドさんに依頼を受けました。ハヤテ君達に協力してやっつくわって」

新八はクラウドがマリア経由で銀時達に依頼した事を話した。勿論マラソン自由型の賞金より高い報酬の話も。

「フツ、友（報酬）の為に当然の事をしたまでさ」

「すみません銀さん。爽やかな顔で凄く最低な事言ってます」

完全に呆れ顔の三人。

「じゃあ.....さっきも」

ヒナギクは先程の光景を思い返してみる。

（Reply）

「んな金に興味ねーよ……」
アイツらの優勝（報酬）の方が、
もっと大きくて（金額が）、ずっと尊い（価値が）もんだからな」

～回想終了～

「最低だわ……」
「最低ね……」

さっきの感心した表情は何処へやら、ヒナギクも美希も完全に軽蔑の表情になっていた。

しかし銀時はどこ吹く風といったように欠伸をする。
新八は気まずそうに笑っている。

「そういえば銀さん」

「ん？」

「よくヒナギクさんの薔薇だけを器用に散らせましたね」

「あ、それ私も思ったな」

新八と美希が銀時に尋ねると、銀時は二人を引き寄せた。

「ああ、ヒナギク（アイツ）胸が全然ねーだろ？だから木刀も通り易かったんだなコレが……ん？」

ゴゴゴゴゴゴ……

突如後ろからダークサイドが広がってゆく。

「あ、オイ！？お前ら……」

新八と美希は真っ青な顔を見ると、そくさくとその場を離れてゆく。

ゴゴゴゴゴゴ……

「……………」

とてつもなく嫌な予感を感じた銀時はゆっくりと振り返ると……

正宗を構えたヒナギクがいた。

「地獄に……………」

「待て待て待て！？アレだよ、冗談！冗談だ……」

銀時の声は届く筈もなく……

「墮ちろオオオオオオオオ！！！」

「ギヤアアアアアアアアアア！！！」

〈競技場〉

ワアアアアアア！！！！

『さア！いよいよトップがゴールに来ました！
トップはなんと三千院ナギ・綾崎ハヤテのペア！
ゴールまであと500mです！』

「もう少しです！お嬢様！」

「うむ！」

ハヤテとナギは手を繋ぎながら競技場に入ってきた。

頑張れ！頑張れ！

『お聞きください、この頑張れコール。今、会場がこのペアと一つになっていきます！ゴールまであと200mです！
ああと！？後ろから桂先生、薫先生ペア（気絶状態）が迫ってきます！』

ハヤテとナギの300m後ろから雪路ペアがやって来たのだ！！

頑張れ！頑張れ！頑張れ！

『三千院ペア、ゴールまで残り50m！』

頑張れ！頑張れ！

『しかし先生ペアも迫る！』

頑張れ！頑張れ！

『さあ！ラスト10mウウウウ！』

そして…

『ゴオオオオール！！』

伝統あるマラソンコースを走り抜き、この激戦を制したのは……

三千院ナギ・綾崎ハヤテペアアアアア！！！！』

ワアアアアアアアア！！！！

僅かな差でハヤテ達が逃げ切ったのだ。

「やった！！やりましたよお嬢様アアアア！！」

「わぁ！？バカノノ！！こんな所で抱きつくくなアノノ」

ハヤテは感極まってナギを抱き上げる。

「ま、負けたぁ……」

がっくりと崩れる雪路と始めから気絶している薫。

ここに、マラソン大会篇堂々完結！！

……………する筈だった。

『では、優勝したお二人は最後に審査員に胸の薔薇をお見せ下さい
』！

「アレ！？」

「どうしました？お嬢様？」

「薔薇が……………無い……………」

そう。実はレース中にナギの胸の薔薇は知らず知らずのうちに散っていたのだ……

つまり……

「はっ！！という事はナギちゃん達は失格！だから繰り上げ優勝で私達が優勝ね！」

マラソン自由型のルールブックにはこのような記述がある。

25・優勝ペアの胸の薔薇が二人とも揃っていない場合及び不正をして優勝した場合は失格とし、優勝は繰り上げとする。

つまり、ハヤテ達は失格。優勝は繰り上げとなるのである。

『……………』

……………

実況も観客も呆然である……

そして繰り上げ優勝は…

「うおおおお！勝ったどオオオオオオオオ！」

静まり返った会場に雪路の叫び声だけが木霊した。

こうして、マラソン大会は、
借金執事のクビという形で幕を降ろしたのだった……

第四十六訓 負ければ賊軍（後書き）

くお詫び

この流れだとお気付きたと思いますが執事クエストに移行します。

実は、二十訓の後書きでダンジョンはとっくに終わっていて、神父とは会っていると言いましたが、それは全くの嘘です。

本当にごめんなさい！

それで、ハヤテは原作の流れで行きますが次訓以降は銀時中心にして、万事屋の話をします。

その間にハヤテは虎の穴へ行っているといった感じですよ。

三訓くらいやったら、【執事クエスト篇】に突入です。

どうかお楽しみに！

教えて！！銀八先生

銀八

「最初の質問」新八は前回の質問でお通ちゃん以外の女性とは付き

合わないと言っていました。原作ではネコミミの女の子とデートしてましたよね…どうなんですか?』だとさ」

新八

「ネコミミなんて、クソ喰らえじゃアアアアア!」

神楽

「男の風上にも置けないアル。糸屑アルな」

新八

「黒歴史だから!触れないであげてエエエエエエエエエ」

銀八

「次の質問」『ヒナギクに質問。銀時とツラと本気で勝負してみた?』「オーイ、ヒナギク?」

ヒナギク

「銀時とは今回少し手合わせしたから……桂さんにも剣を教える欲しいかな?」

桂

「なるほど!?!では」

バキツ…

銀八

「次の質問な」『ハヤテ、マリア、ヒナギクに質問。二年後の銀時を見てどう思う?』
「つー訳で……」

ピカッ!!

銀時（二年後）

「よお、テメーら……相変わらず変わんねえな」

一同（新八、神楽を除く）

「……………いや、誰エエエエ!?」

銀時（二年後）

「俺だよ、俺。銀さんだよ」

一同

「えエエエエエエエ!?」

銀時（二年後）

「久しぶりだな、オメーら」

ハヤテ

「いやいやいや!? どんだけですか!?! 髪もとんでもなく伸びてるし、それに頬のその傷……………」

銀八

「取り敢えず早く質問の答えを」

ハヤテ

「いや……………どう思っつて……ヤ チヤ……………」

銀時（二年後）

「何言ってるんだ、ハヤテ。銀さんはいつもの銀さんだぜ！」

ハヤテ

「……………」

銀八

「次、マリアは？」

マリア

「凄くやる気があるように気がしますね……………？別人みたいです」

銀時（二年後）

「マリアは相変わらず若いな。まだ17才だもんな」

マリア

「アラ、ありがとうございます」

銀八

「何か気味悪いやり取りしてんだけど……………まあいいや。ラスト、ヒナギクな」

ヒナギク

「え？え〜と…二年でこんなに変わるの？」

銀時（二年後）

「二年つてのは随分変わるもんだよ。ヒナギクも二年経てばかなりスタイルも良くなるぜ、きつと」

ヒナギク

「な！？／＼／＼どういう意味よ／＼／」

銀八

「ハイハイ終了〜！コイツはもう銀さんじゃありません！
もうグダって来たから終わりな〜」

新八

「ハハハ……？」

伽藍

「何か変な感じだけど、次回もよろしくお願いします」

第四十七訓　どんな親でも子供には必要（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「突然ですが、感想の投票は12月の10日で締め切ります!!
その後の投票はメッセーじでお願いします」

ハヤテ

「皆さん沢山の投票本当にありがとうございます!!」

クラウド

「今回からは銀時殿のオリジナル話が少し続きます」

ハヤテ

「僕はその間に虎の穴で修行しているって事になっているそうです」

クラウド

「それでその後、執事クエスト篇という感じですか」

ハヤテ

「次の篇のタイトルは執事クエスト篇なんですか？」

伽藍

「そうです！ズバリ【執事クエスト篇】侍とか執事とかその他色々
と呪われし姫君」です！」

ハヤテ

「何ですか…このまんまパクったようなタイトルは…」

伽藍

「一応長編なんで、クエストの中身は変えるつもりです。更に内容も大幅に増やそうと思います」

ハヤテ

「いや、だからタイトル…」

クラウド・伽藍

「では、始まります!!」

第四十七訓 どんな親でも子供には必要

（三千院家）

「どーしてハヤテがクビなのだアア!!」

屋敷中にナギの声が響き渡る。

「あのマラソン大会で、私は失格とはいえ一着だったんだぞ!最初にゴール出来たのだ!」

リビングにはナギ、マリア、クラウド、新八、神楽が集まっていた。そしてナギが叫んでいる目の前には巨大なモニター。

「これもハヤテ達の特訓のおかげだ!!ハヤテは十分役目を果たした筈だ!!」

『まあ確かにお前の成長ぶりはかなりの評価に値するがのう…』

モニター画面には三千院帝の姿。

「だったらー!!」

『じゃが、一位をとれなかったらクビという約束だったしの』

「……………」

シレッツと言つてのける帝を睨み付けるナギ。

『……孫娘よ、そんな怖い顔をするでない。まあ、確かに一着は一着。とはいえ失格も失格。』

そこで、あの少年にチャンスをやろう！』

「チャンス？」

『取り敢えず少年を呼んで来い』

「で、では私が呼んで来ますね」

帝の言葉通り、マリアはハヤテを呼びに行った。

*

一方、万事屋では…

「……………痛つつ…痛つつ」

銀時が丁寧に肩の包帯を取るといってもいいような作業をしていた。

肩の怪我というより、上半身の怪我と言った方が正しい。

上半身が包帯だらけなのである。

「もうほとんど痛みもねーな…」

二三次肩や首を回して確かめる銀時。

「ったくよお……………何で俺だけ前話の怪我引きずってんだよ。

普通漫画でも小説でも次回になったらすっかり元気になってるもんだろ…」

因みにこの怪我は前訓で地獄に墮とされた時のである。

「あ……………暇だな……………」

起きたら新八達居ねーし。何か怪我引きずってるし」

銀時は着物を気直すと、椅子に腰掛ける。

ピンポーン……

「ん？客……はねーよなア。

でもアイツらはチャイムなんか鳴らさねーからな……」

銀時は首を傾げると玄関に歩いて行く。

ガラッ……

引き戸を開けると、10代前半くらいの男の子が立っていた。

（子供^{ガキ}じゃねーか……）

「あの……ここは何でも屋なんですよね？」

子供は銀時を見上げると、伏し目がちに聞いてきた。

「ああ、まあな……

どうしたんだ？オメーみたいな子供」

「お願いします。どうか……どうか僕の両親を探しすのを手伝って下さい」

少年は小さく頭を下げた。

*

「……取り敢えず座れ」

「……」

銀時は少年を居間まで連れて来ると、少年を座らせる。
銀時はその向かい側に座った。

「オメー、名前は…？」

「広平って言います……」

「んで？両親探せたアどういうこった？」

「……………」広平は緊張した面持ちで周りをキョロキョロした後、遠慮がちに口を開いた。

……………

……僕は両親に捨てられたんです。まだ僕が四歳くらいの事だったらしいんです。

よくは覚えてないけど……

そんな僕を拾ってくれたのは、僕の両親の友達だったっていうおじさんでした。

僕はそれから九年間、おじさんに育てて貰いました。

でも、おじさんは一切両親の話をしてくれませんでした。

おじさんと僕は仕事の都合上色々な場所を転々としてきました。

僕はその都度おじさんに黙って両親の事を聞いて回ってたんです。

一年くらい前、両親の名前を聞いたってという話を耳にしました。それが……東京だったんです。

東京に越して来て、僕はおじさんの目を盗んでは両親の名前を聞いて回りました。

そして昨日、一人の男の人が練馬区でそんな名前を聞いたと教えてくれたんです。

.....

「.....なるほどなア。この練馬区付近に両親がねえ.....」

「.....ハイ」

銀時は足を組み直すと、広平を見つめる。

「ここに来るのをおじさんに行ったのか？」

「今回は一応言っております。意外と遠出だったので.....」

広平は電車の切符を銀時に見せた。

「許してくれたのか？」

「ハイ。今回の一回だけだ、と言われましたけど.....」

「それにしたって、探すつってもなア.....」

「お金ならあります!!」

ドサッ.....

広平はテーブルの上に袋を置く。中身はお札やら小銭やらが入って

いた。といつても所詮は子供の集めた額ではあるが。

「お前」レ……」

「おじさんの仕事を手伝って貰ったお金やこつそりバイトで貯めた全財産です……これで、何とかありませんか？」

「いや……そういう事じゃ無くてだな……」

銀時は困ったように広平を見る。そもそも銀時はまだこの辺に詳しいとはいえないのだ。

「ダメですか……？」

「……」

……

「……ハア。分アったよ」

「本当ですか……？」

「その代わり、報酬はしっかり戴くぜ？」

「……ハイ！」

銀時の後に続いて広平は玄関に向かう。

「俺ア坂田銀時ってんだ。好きに呼んでくれて構わねーよ」

「ハイ、よろしく願いします銀さん！ー！」

*

「あの……？呼ばれて来ましたが……皆さんお集まりで一体？」

「お、ハヤテ」

ハヤテとマリアがナギ達のいる部屋に入ってきた。

『来たか少年』

「あ、おじいさま。……クビの話なら僕の覚悟はー」

『まあ、待て。そう早まるな少年。結果はともかく、一着は一着だ。なのでチャンスをやろう……』

「チャンス……ですか？」

『そう。少年には執事としての修行を積む為にある場所に行って貰う。』

「ある場所ですか？」

グツと息を呑むハヤテ。

『クラウドス、説明を』

「は、はあ……」

クラウドスはモニターの前に来る。

「執事に必要な何たるかを再教育する場所……執事虎の穴です！」

*

「執事虎の穴って……同人誌とかいっぱい売っているんでしょうか？ 執事が」

「またお前は、伝わりにくいボケを……」

ハヤテは屋敷の外で、その執事虎の穴とやらに向かおうとしていた。ナギとマリアはそのお見送り。

神楽と新八は銀時を呼びに行った。

「まあ、例えどんな試練が立ち塞がるうとも、僕は必ずやお嬢様の元に帰って参ります！」

「お、おお／＼／」

ハヤテはナギの手を握る。

「その為に、同人誌を売って売って売りまくります!!」

「いやだからもう少しわかりやすいボケを……?」

「オーイ、ナギ〜!」

ナギが呆れていると、新八と神楽が走ってきた。

「ん?どうしたのだ?銀時は?」

「それが……さっき僕達が屋敷にいる時に依頼があったみたいで、銀さん出ちゃってました」

新八は銀時が書いたと思われる書き置きを見せた。

『依頼があつたからちよつと出てくる。そつちの事は任せた』

「まあ、お客さんなんていつの間に……」

「大方SPが通したんだろ」

ナギは一人で納得したように頷くと、ハヤテを見る。

「必ず帰って来いよハヤテ」

「ハイ!勿論です!」

こうして、ハヤテは執事虎の穴へと旅立ったのだった……

（愛沢家）

「なるほどな……つまり東京のこの地域に、ご両親が居るかも分からんちゅー訳か」

「まあそうなんだけだよオ……」

「ん？何や銀時？」

「まずコレ、何とかしろ」

銀時が指差すのは自分の頭。
その頭の上には子犬の姿。

「ええやん、そこはギンも気に入ってるみたいやし」

「良い訳ねーだろ！俺の頭は繊細なんだよ。超ナイーブなんだよ。反抗期の高校生の心並みに脆いの！

っ！かお前飼い主ならしっかりしっけしとけ！」

「ギン、転がるや」

「ワン！」

「だあアアアアア！！止めてエエエエエ！？銀さんのガラス細工並みに繊細な頭がアアアアア！」

ギンは銀時の頭の上を転がり始めた。

「……………クスッ」

そんな様子を見て広平は可笑しそうに顔を緩めた。

*

「ご両親の名前はウチは聞いた事無いな。まあ分かった。家の連中にも調べさせてみるわ」

「ああ、悪いな。」

「ナギ達には聞いてみんの？」

「アイツらは今それどころじゃねーだろうからな」
銀時はハヤテの置かれている状況を説明した。

「そうか……まあそれはそうやな」

咲夜も納得したように頷く。

「んじゃ、何か分かったら頼むな」

「あの…よろしく願います」

「任せとき。自分、ご両親見つかるよええな」

頭を下げる広平に咲夜は優しく声をかけたのであった。

〈商店街〉

「アレ？銀さん」

「あ、本当だ！！」

「ん？よオ、ジミー姉弟」

「「ジミーじゃありません！！」」

商店街で聴き込みをしていると歩と一樹が話しかけてきた。

「どうしたんだオメーら？日頃のストレスからこの商店街に爆弾でも仕掛けに来たのか？」

「私達はどこそその爆弾マニアじゃありませんよ…っっていうか何のストレスですか…」

「世間一般から地味と言われ続けるストレス……おお、地味レスなんてどうだよ？」

「「良い訳あるかアアアアア！！」」

「まあ、それは置いておいて……」

銀時は歩達にも広平の両親の事を事情もろとも尋ねた。

「そうだったんですか……私は残念ながら聞いた事はありませんね……」

「僕も無いですね……」

「そうですか……」

広平は残念そうに肩を落とした。

「分かった。時間取らせて悪かったな……もし何か聞いたら教えてください」

二人は頷くと、広平を見る。

「大丈夫だよ！諦めないで探していればきっと見つかるから」

「僕達も色々聞いてみるから。元気出して！」

「ハイ！ありがとうございます！」

広平は大きく頭を下げた。

「んじゃ、ストレス発散もほどにしるよ〜」

「「違うつつてんだろオオオオ！！」」

〈レンタルビデオショップ橋〉

「フー訳だ……コイツの両親の名前とか聞いた事ねーか？」

銀時はビデオの整理をしていたワタルとサキに事情を話していた。

「……聞いた事無いな。サキは？」

「……すみません。思い当たる節がちょっとありませんね…」

二人とも首を傾げる。

「そうか……」

「つかさつきから気になってたんだけど…レジにヅラがなかったか？」

「ああ、ビデオの整理（自分専用）をやるから少し替わって貰ったんだ」

「やっぱり気のせいじゃ無かったのか……レジに変な奴が居ると思ったら……」

銀時は棚からレジの様子を覗いてみた。

「すみません店員さん。これ借りたいんですが……」

「店員さんじゃない桂だ。分かった、貸してみる」

レジにいる桂はお客からDVDを受け取り……

「な、何だコレは!？」

「へ!？」

桂はお客のDVDを見て絶句する。

『ハルの憂鬱』とDVDにあった。

「大の大人でありながらこんな軟弱なアニメを見るとは、貴様それでも侍かアアアア！」

「武人ならばこの『七人の侍』を見る！三船敏郎のあの迫真のアクションシーンに息を呑み、練りに練られたシナリオに感涙するのだ。それが出来んと言うならば貴様にこのDVDを借りる資格は無い！！！！」

「テメーが侍を語る資格も無エエエエ！！！！」

銀時は桂をレジから吹き飛ばした！！

「すみませんお客さん。コイツ頭の病気なもんで……あ、こちらレンタルですね？一週間のレンタルになります……ハイ分かりました」

銀時は何故か手際良くレジをこなす。

「ありがとうございます。一週間後となりますのでお忘れなく」
ペコリとお辞儀をして接客終了。

「意外にそつなくこなしてますね……」

「っーかサキより上手だな」

「な！？」

そんな様子を呆れ半分驚き半分で見ている二人であった。

*

「なるほど……そういう事であったか。俺はテッキリ銀時の隠し子かと思っただぞ」

「オーイ、誰かコンクリートねーか？コイツ埋められるドラム缶も欲しいんだけど……」
すると、ワタルがレジから戻って来た。

「ダメだった…会員の中にも名前は無かったよ」

銀時は溜め息をつくと、広平を見る。
案の定肩を落としていた。

「まだまだ諦めんのは早えよ…東京たつてとんでもなく広いんだ」

「そうだ……銀時の言う通りだ。真の侍になりたければこの程度で諦めない事だ」

「黙ってるツラ」

「ツラじゃない桂だ！」

「……クスッ」

銀時達のやり取りを見て広平は少し申し訳なさそうに笑った。

「……まだ笑える元気があんなら大丈夫だな」

「銀さん……」

ポンポンと広平の肩を叩く銀時。

「心配するな。俺も町で出来るだけ気にかけてみよう」

「橘グループにも聞いてみるよ。サキ、後で」

「ハイ、分かりました若」

「本当に……ありがとうございます……」

広平はもう一度皆に頭を深々と下げた。

〈商店街〉

一旦商店街に戻って来た二人。
もう午後三時を回っていた。

「これ以上遅くなると、オメーのおじさんも心配するだろ。取り敢えずお前は家に戻ってる。俺アもう少し宛てを回ってみっから」

「でも……」

「報告は今日オメーの家に行ってしてやるから。後は家で待ってるな？」

「分かりました」

広平は頷くと、持っていた紙に簡単に地図と住所を書いて銀時に渡した。

「じゃあ、また」

「気いつけて帰れよ」

「ハイ！」

広平は駅がある方向に向かって走って行った。

銀時は広平を見送ると、商店街を後にした。

く白皇学園正門前く

「ちとど……」

正門前には白衣を着た男が一人。メガネを掛けていて、ペロペロキヤンディーを口にくわえている、白髪頭の男。

「やっぱり聴き込みは人が集まる場所が一番だろ」

白衣の男はそう呟くと、当たり前のように正門をくぐって行く。

「む？誰だ貴様は？」

当然SPと思われる男がその男に近づいてきた。

白衣の男はペロペロキャンディーを口から取り出す。

「俺っスか？」

俺ア新任で来ました。白皇学園教師、坂田銀八です」

第四十七訓 どんな親でも子供には必要（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「え、何と今回本編でも銀八先生が登場しました。いやー良かったね。めでたしめでたし……
んじゃ、今日の授業はここまで。気をつけー」

新八

「先生！質問が来てるんだからしっかり答えして下さい！」

銀八

「分アったよ……んじゃ最初の質問な。『姫史に質問。あの後あの子の名前聞けた？』
だってよ、どうなんだロリコン？」

姫史

「残念ながら聞くことは出来なかった……いや実に惜しかった。果ては90点をも超える逸材だったやも知れぬのに……」

瀬川

「アレ、中等部の水瀬さんっていうらしいよ？」

姫史

「何イイイイイ！？瀬川、お前何処でそれを！？」

瀬川

「この間偶々会ったから名前を……」

姫史

「おオオオオ！！でかした瀬川！お前は英語で絶対に赤点を付けないと約束しよう。では、ちよつと行って来る！」

瀬川

「行ってらっしゃーい？」

ハヤテ

「つていつか裏工作ですよね？今の……」

瀬川

「細かい事は気にしない事だよ、ハヤ太君」

ナギ

「いつそクビにしたらどうだ？あの馬鹿……」

銀八

「続いての質問。『幸久に質問です。神楽ともう一度戦ってみたい？』」

幸久

「みたい訳あるかアアアアア！！
そもそも神楽は人間なのか！？」

新八

「夜兎つて言つてね……そもそも地球人じゃないんだよ……」

銀八

「飯は大量に食うわ、やたら馬鹿力だし……」

神楽

「失礼アルな！それでも女の子らしい所もあるヨ……！」

銀八・新八

「ナイナイ……」

銀八

「んで？質問の答えは？」

幸久

「いや、いくら強い奴と戦いたいと言っても神楽はちゃんとした女だから無理だア……！」

神楽

「ユツキー！お前良い奴アル……！」

幸久

「寄るなアアア……！頼むからアアア……！」

神楽

「良いではないか、良いではないか……！」

幸久

「アーレエエエエ……！」

気絶

銀八

「更に幸久に質問。『九兵衛と戦っても気絶するの?』」

伽藍

「これは僕から答えます。幸久の女性恐怖症は過去のトラウマという事になってるんです。ですから体質じゃないので、自分が女と思い込んだものに拒絶反応を起こすんです。だから九兵衛を女と知らないならば普通に接する事も可能です。逆に綾崎ハーマイオニミみたいに女と思い込んだら男でも気絶します。」

新八

「大変ですね…本当に」

銀八

「次の質問な〜」ぱっつぁんに質問。ナギとお妙の料理はどっちがヤバい?』だよ」

ナギ

「何だこの質問は!?!どどういう意味だアアアア!?!」

新八

「そんなもの姉上に決まってるじゃないですか!ナギちゃんの料理はわかりませんが、姉上のは原型が無いどころか暗黒物質になるんですよ!?!食べたなら死にます!」

ハヤテ

「あ、暗黒物質…:…なんか凄く怖い絵面が浮かびますね…:」

ナギ

「だから、この質問はどういう意味―」

銀八

「続いての質問な。『銀さんの子供の頃の夢は何ですか？』
ハイズバリ答えます！！そりゃとんでもなくでけえ夢よ！当然パフ
エ1000個食べることだアアアアア！！」

一同

(小つちゃ……………)

銀八

「次の質問。『ヅラに質問。野々原ともう一度戦ってみたい？』だ
とよヅラ」

桂

「ヅラじゃないキャプテンカッターだ」

銀八

「……………続いての質問。『もしー』」

キャプテンカッター

「待て先生！俺への質問はどうなった！？」

銀八

「……………お前さあ、頼むからくたばってくれよ。一生涯の頼みだよ本
当。
つーか何でそんな格好してんの？遂に頭だけじゃ飽きたららず全身が
おかしくなったのか？」

キャプテンカッーラ

「いつもの通り、健康そのものだ。それで質問の答えだが、野々原殿とは勿論戦ってみたいな。今度は本気でやりあってみたいものだ……」

銀八

「ハア……馬鹿しか居ねーよこのクラス。ま、今更か……最後の質問だな。『この世界で洞爺湖折れたらどうするの？ 正宗をヒナギクと使う？』」

ハイ、ズバリ答えます！！多分この世界でも洞爺湖売ってます。北海道の洞爺湖に……それが大人の事情で折れてもまた銀さんの所に来るでしょう。仙人が何とかしてくれるさ、多分……」

新八

「折らないように気をつけて下さいね……」

銀八

「それじゃ、今日はここまで。」

ヒナギク

「次回もよろしく願います」

第四十八訓 血の繋がりがだけが家族じゃない(前書き)

クラウドの前書きの館！

クラウド

「いや、アニメ銀魂二期、来春スタート。ますます銀魂絶好調ですな」

ハヤテ

「そうですね。そういえばハヤテのごとくはいつアニメ二期がスタートするんでしょう？」

クラウド

「まあ、それはいずれわかる時がきますよ」

伽藍

「ですね。因みに今回の銀八先生はちよつとしたネタでの登場です。でもいずれちゃんとした出番がある予定です。教師として」

クラウド・ハヤテ・伽藍

「では、始まります！！」

第四十八訓 血の繋がりだけが家族じゃない

（白皇学園正門前）

「新任の教師……？そんな情報聞いていないが……」

「いやいや、アレだよアレ……臨時新任ってやつ？」

「何で？マークが付くんだ？」

SPは訝しげに銀八基銀時を眺める。

「……取り敢えず生徒会の方々に来て貰おう。臨時とはいえ連絡は
いつている筈だろう」

「ああ、そうしてくれ。その方が手っ取り早えな」

無論銀時にとっては生徒会のメンバーが来てくれた方が助かる。

*

「一体何でしょうね。臨時新任なんて話聞いて無かったけれど…」

「もしかしたらヒナが聞いていたのかもしれませんが？」

S Pの連絡を受けて正門に向かっているのは霞愛歌と春風千桜。会長であるヒナギクは用事で不在なので代わりに二人が承ったのである。

そうこうする内に、二人は正門に着いた。

「会長が不在なので代理で連絡を受けて来ましたわ」

「ああ、これはこれは。霞お嬢様、春風お嬢様」

愛歌はS Pに話しかけてた。

「それで、新任の方というのは？」

「ええ、こちらの男なのですが……」

二人の前に出てきたのは、だらしなく白衣を身につけ、口にはキャンデー、メガネをかけ、死んだ魚のような目をした白髪頭の男だった。

「な!？」

「どうかしたの？千桜さん」

「いえ、別に……」

千桜はこの男が坂田銀時である事に勿論気付いた。
すかさずアイコンタクトを試みる。

（何やってるんですか！？銀時）

（訳は後で話すから取り敢えず話合わせて校内に入れてくれ）

（……分かりました）

そんな感じの目と目の会話を済ませると、千桜は愛歌に何やら耳打ちする。

（すみません愛歌さん。実は彼は……）

（まあ、そうだったの……）

愛歌は千桜の話を聞いて頷くと、SPに再び向き直る。

「……確かにそうだった連絡は受けてました」

「ええ！？本当ですか！？こんな天然パーマで死んだ魚のような目の男が教師！？しかもこの白皇の！？」

SPは更に訝しげな視線を銀時に送る。

「ええ。間違いありません」

「まあ、お嬢様方がそうおっしゃるなら…」

ニッコリと微笑む愛歌にSPは渋々銀時の前を開けた。

*

銀時は愛歌達の計らいで何とか校内に入る事が出来た。

「一旦職員室に用事がありますので、先に生徒会室に行つて下さ
い。私は後から行きますから…」

「ん、ああ…」

「ええ、分かったわ」

千桜はそう言つて二人と別れて職員室に向かつて行った。

「話合せて貰つて悪かつたな、助かつた」

「いえ、とんでもありません。

三千院家の新しい護衛の方ですよね？」

「ん？あゝ、俺ア坂田銀時っつーんだ。まあ、今は銀八先生だけどね」

「私は霞愛歌といます。お噂は重ね重ね聞いておりますわ」

「……あんまし良い噂じゃなさそうだけどな」

「そんな事ありませんよ」

愛歌はクスリと笑うと続ける。

「あの鷺ノ宮家と澳門家の仲を取り持たせた程ですもの。素晴らしい方だと聞いていますよ」

「……んな大層な人間じゃねーよ俺ア」

「そういう謙遜される所も、ですよ」

気恥ずかしそうに頭を掻く銀時に愛歌は少し悪戯っぽく微笑みかけた。

恐らくハヤテやヒナギク達と同じくらいの歳であろうに、物腰や態度が柔らかかどこか大人びた気品を持っており、それでいて気取らない雰囲気。愛歌に銀時は内心感心していた。

かなりのお金持ちのご令嬢である事は想像に容易いが、彼女に対して堅苦しい印象は無かった。

それらも含めて良く出来た人間なんだなと二度感心して、一人頷い

ている銀時。

「でも、本当に聞いた通りの方なんですネ」

「聞いた通り？」

「若白髪の天然パーマに死んだ魚のような目をした、万年金欠のダメなお侍さん（略してマダオ）が特徴という噂でしたから」

「そりゃ噂つーか悪口じゃね？」

「そもそも誰がそんな酷い噂流してんの？」

「ピッタリですね」

「……………笑顔でそんな事言われても……………褒めてくれてるの？ソレ」

「勿論」

この時、銀時は一瞬愛歌の目がどこかで見た事のある目付きに変わったように見えたが、

（いや……………気のせいだな）

直ぐに考えを振り払うと、生徒会室のある時計塔に向かった。

*

（白皇学園生徒会室）

銀時は愛歌と少し遅れて入ってきた千桜に、諸事情を大まかに話した。

「まあ、そうだったのですか……」

「確かに。この学園は人が沢山居ますからね」

二人とも納得した上で更に協力すると言ってくれた。

「銀時、貴方の事はやはり学園側には黙っておいた方が良いですか？」

「出来れば……な」

千桜は愛歌にどうしようかと目線を送る。

「まあ、今回は場合が場合ですから。あのSPさんには私から言うておきますね」

「そうですね」

二人の返事に感謝の念を抱く銀時。

「済まねーな、助か……」

すると、愛歌は何やらノートを取り出すと、

「私達もこの事は見なかった事として忘れましょう」

ノートに書きながらそう言った。

(全然忘れる気ねエエエエ!!)()

銀時と千桜は互いを見合う。

(ねえ、何なのあの娘!? 全然忘れようとしてないんだけど!?)

(アレは愛歌さんの武器……ジャプニカ弱点帳です……)

(何、弱点帳って!?!? どんな文房具!?)

(あの弱点帳に各人の弱点を書き留め、相手を困らせるという……)

「どうかしましたか? 二人共」

「「いえ……」」

この時、銀時はようやく理解した。さっきの愛歌の目。そして今の

目。

どこかで見た事があると思ったあの目は沖田と同じ……Sの目であった。

そう。彼女はサディストだったので…

「「どんな話!?!」」

銀時は生徒会室を後にすると、
銀八として校舎内に入り込み聴き込みを開始した。

*

「……………手掛かりゼロか」

数時間聴き込みを終えた銀時だったが、広平の両親の手掛かりは皆無に等しかった。

（こんだけの数が居ても…名前だけじゃな…）

銀時は肩を叩きながら首を回すと、出口に向かった。

（これ以上は同じだろうな…）

想像以上に依頼は難航の色を示す事になりそうだと上を見上げる。

鮮やかな夕焼けが銀時を嘲笑うかのように、空に広がっていた。

広平の家は、高尾山の近くにあった。

地図にあった駅は都心から電車で少し行った所だったが、家はかなり距離があり、尚且つ人目の少ない山奥だということで到着するのにかかなりの時間を要した。

地図通りに林を抜けるとひっそりとしたボロ屋が一軒立っていた。

周りは木々に囲まれていて、都心にもこんな場所に住んでいる人がいるのかと銀時は驚いていた。

（仕事って……こんな場所で一体何をしてるっていうんだ…？）

銀時は取り敢えずそのボロ屋に近づいてゆく。

コンコン…

「すみませーん、万事屋ですがー」

ボロ屋の引き戸をノックすると、奥から足音が近づいてきた。

ガラガラ…

「ああ、貴方が。」

「……………待っていました。私が広平の保護者の沼木慶次です」

40代前半くらいの男性が引き戸を開けて現れた。
穏やかで優しそうな雰囲気だ。

「ああ、立ち話もなんですから」

そう言つて、慶次は銀時を家の中に招き入れた。

「あ、銀さん！」

家に入ると広平が駆け寄ってきた。

「あの……………何か分かりましたか？」

「有力な手掛かりは何も無かったな。ま、まだ明日があらア」

遠慮がちに聞いてくる広平の肩に手を乗せる。

「そうですね……………」

「ほら、広平。先に作業場に行つてなさい」

「うん！分かったよおじさん」

慶次は広平の頭に撫でると照れ臭そうに笑つと奥の部屋に駆けて行った。

「……なるほど」

この家は外側よりも内装は更にみすばらしく、酷く寂れていたが、銀時にはどこか温かかく感じられた。その理由がこの二人のいるところだと理解したのだった。

「作業場つーのは？」

「こんな場所に住んでいる手前、出来る仕事も限られてきますからね。私はこの家でこの山の木を使った小物等を作って下町に出て売っているんですよ」

「そりゃ随分昔の生活みたいだな」

「ハハハ……そうですね」

銀時も慶次の案内で作業場に足を進める。

作業場（と言っても他より少し広い部屋だが）では広平が品物を並べていた。

「おじさん。この小物入れはこっちに置いておくよ」

「ああ、ありがとう広平」

「うんー！」

広平の手の中には綺麗な小物入れが数個抱えていた。

かなり丈夫な木を使っているのだろう。作りもしっかりしているよ
うだ。

「ほ、これ全部二人が作ったのか？」

「ハイ！僕はまだまだ手伝いですけど、おじさんは木を使った道具
作りがとても上手なんだ。下町の人にも人気があるんですよ」

小物入れだけじゃ無い、周りにはスリッパや小さな棚、クロス等他
にも色々な物が出来上がっていた。

（本当に良く出来てんな）

銀時は慶次と広平の仕事ぶりに感心していた。

*

作業場で数十分くらい経った頃…

「銀時さん、少しお話しを宜しいですか？」

「ん？ああ……」

慶次が真剣な面持ちで銀時に話しかけてきた。

「広平。少し銀時さんとお話があるから、暫くお留守番してくれないか」

「……………うん。分かったよ」

二人は家の外に出る。

「こちらに……………」

「？」

そして、慶次の案内のままに少し入り組んだ林の中に入って行った。

「ここなら聞かれる心配も無いでしょうね」

「……………」

慶次のただならぬ様子は銀時にも伝わった。

「簡潔に言います……………」

今回の依頼、手を退いて下さい」

「……………どういうこと？」

「広平に両親は見つからなかったと……………多分これ以上探しても無駄

だと、そう言って貰いたいです」

慶次は右手に持っていた袋を銀時に開けてみせる。
そこにはお金が少なからず入っていたのだ。

「お金ならあります。これで、どうか今の話を承諾して頂いてもらえますか？」

「オメー……一体。広平の両親を探すと何か不都合でもあるっつかよ」

慶次はやりきれないような表情で唇を噛むと、銀時に背を向ける。

「死んでいるんです……」

「あ？」

二人の間を冷たい風が通り抜ける……

「広平の両親は……」

「私が殺したんです」

第四十八訓 血の繋がりがだけが家族じゃない（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「最初の質問な〜」新八に質問。もしマリアさんが新八を好きで告白してきたらどうする？やっぱお通ちゃん一筋つて事で断る？』
つて何だこの質問？まあいいや、ズバリ答えます！
え〜、まずいくら考えてもやはりそんな状況は起こりえせんね。
100%無いとかじゃ無くて、10000%あり得ません！つー訳で次の質問は…」

新八

「ちよつとオオオオ！？僕に答えさせて下さいよ！？」

銀八

「馬鹿オメー、んな事あり得ないんだから答えても虚しくなるだけだろ？だから俺が答えてやったんじゃねーか」

新八

「いや……まあ確かにそうなんですけど……」

銀八

「そついやお前結構人気あるみてーじゃねえか。最近の投票や質問でもオメーの事が多いぜ？良し悪しに関わらずだけど」

新八

「本当にビックリですよ。皆さんありがとうございました！」

銀八

「んじゃ、次の質問『ナギに質問。新八にアダ名を付けるとしたら？』」

ナギ

「メガネだろ？」

神楽

「いや、ダメガネアル」

銀八

「んじゃ、次な」

新八

「オiiiiiiiiii!?!? 僕のコメント無しかア!?!」

銀八

「『ツラに質問。今も爆弾とか持ってるの?』」

桂

「ツラじゃ無い桂だ。それは当然だな。武人たる者、何時どんな事にでも対応出来るよう、それなりの準備はしておくもの…」

咲夜

「今すぐ全部捨てんかいiiiiiiii!?!?!」

桂

「ぐおおおお!?!」

銀八

「更に質問な〜」咲夜と千桜に質問。二年後のヅラを見てどう思う？
『』

咲夜

「また二年後とかいうやつか？」

銀八

「ハイ、それじゃドン！」

桂が急に光に包まれる。

そして……

ヅラ子

「まあ、こつこついう訳よ」

咲夜・千桜

「どんな訳だアアアア！！！！」

二人はヅラ子に再度ドロップキック。

咲夜

「何やねん、一体。自分らの二年後はどうなってるんや!?!」

千桜

「ボケのレベルを越えていますよ……」

ヅラ子

「何……ちよつとしたバベルの塔除去作業を…」

咲夜・千桜

「言わせるかアアアアア!!」

銀八

「んじゃ、最後の質問な。『ワタルに質問。銀時と伊澄のやり取りを見てどう思う?』」

ワタル

「つつても本編じゃまだ知らないからな…」

ナギ

「まあ、このコーナーでも良いんじゃないかね?」

銀八

「やり取りって何だ?」

伊澄

「さあ?私にもよく…」

ワタル

「何だやっぱり普通じゃないか」

ナギ

「いや…」

銀八

「つーか前から思ってたんだけどよぉ…

オメー本当に髪キレイだよな」

伊澄

「え？あ、ありがとうございます／＼」

銀八は伊澄の髪に触って言う。

銀八

「何でこんなに真っ直ぐなんだ？そして何故俺の頭はこんなにひねくれているんだ！？何でこんなにも世の中は理不尽なんだアアアアア！！」

伊澄

「あう…／＼／」

途中から銀八のはただの愚痴になっていたが、伊澄は真っ赤になっ
ているので聞こえていない様子…

ワタル

「……フツ。ま、まあ後書きだしな。本編なら…」

新八

「本編も似たような感じでしたよ、伊澄ちゃん」

ワタル

「で、でも……」

ナギ

「諦めるワタル。どちらにせよお前に望みは無い」

ワタル

「うるせー、バカヤロオオオ（涙）」

ヒナギク

「では、オチも付いたところで今回はこの辺で。
次回もお願いします」

第四十九訓 想いの形は十人十色（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「今回でようやく依頼も完結です！次回は人気投票結果発表なので是非、お楽しみに！」

ハヤテ

「人気投票凄いなってますからね〜」

伽藍

「では、どうぞー！」

第四十九訓 想いの形は十人十色

山奥に吹く風は一層寒く、まだまだ冬の健在を思わせた。

林に佇む銀時と慶次の間にも冷えきった空気が漂っている…

「……………殺した？」

「オイ、アンタ何言ってるやがんだ？」

「……………」

慶次は銀時に背を向けたまま暫く沈黙を続ける。

「広平の両親は私が殺したようなものなんです……………」

「どうして……………」

「……………少し昔話に付き合ってくれませんか」

慶次は哀しげな目で空を見上げると、か細く語り始めた。

.....

私は元々孤児でした。

生まれた場所は勿論、両親の顔も知りません。

孤児院での記憶はほとんどありません。恐らくずっと一人だったの
でしょうね……

そして私が10歳の時、ある場所に引き取られました。

それは今で言う闇社会の根源という奴ですね。ヤクザなんて可愛い
ものです。

引き取られたというより、身売りされたんですね……

今思えば、あの時点で私の運命は狂い始めていたのかもしれない。

私はその組織で15年間……成されるがままに生きてきました。

取り立てや抗争他にも非道な事続けてきた。

毎日が死にたくなるような連続……それでも一日を乗りきれてこれ
たのは同じ想いの人間が一人では無かったからだと思います。

私の同期に木田純平という男がいました。

そう……広平の父親です。純平は私と同じく無理矢理この組織に入
れられた身で、直ぐに仲良くなりました。

よく仕事の愚痴を言い合っていましたね。

そんなある日、木田が組織から抜きたいと言ってきたのです。

「……俺、組織を抜きたいんだ」

「オイオイ、急にどうしたっていうんだ？」

「慶次……実は俺の彼女が妊娠したんだ……」

「本当か！？おめでとうー！！」

木田の彼女は麗子さんと言って、美しくおしとやかでしつかりとした方でした。木田には勿体無いとよくからかったものです。

「だから……俺はもう……こんな組織にはいれない。こんな事はもう出来ない。俺は俺なりの……けじめをつけたいんだ」

「……………分かった」

私は勿論賛成しました。木田のまっとうに生きたいと想いが本物だと分かったからです。

それから直ぐに、木田が組織から抜けられるようにコツソリと協力しました。

一度足を踏み入れたら二度と抜ける事は許されないのが掟です。

今と違って、組織そのものに強い束縛があった時代でした。

万が一ばれてしまえば容赦なく消される事は必至でした。

間もなく、木田は組織から脱出。私の手助けも何とか功を奏して、組織に捕らえる事なく逃げ切る事が出来たのです。

組織は木田を血眼になって搜索しましたが、私が一切黙っていた事もあり、結局は見つかりませんでした。

私は当時木田達の連絡先を知っていましたが、会う隙が無く何処か

で無事に生きていると信じる事しか出来ませんでした。

それから三年の月日が流れ…

ある日の朝、私の家に手紙が入っていました。

『今日会いたい。前に言った場所に来てくれ 木田』

と乱雑な字で書いてあり、当然私は直ぐに支度をし、木田の居る場所に向かう事にしました。

その日はたまたま、暇を貰っていたので、コッソリと私は出掛ける事が出来たのです。

それが悲劇の始まりとは露知らず……

私が彼らの家に向かうと、木田は驚いた素振りをすると、直ぐに嬉しそくに声を上げました。

「慶次！？久しぶりだな！」

「木田……元気そうだな」

「ああ、お陰様でな……本当に感謝している」

そして周りには組織の人間がズラリ…

一瞬で悟りましたよ……
嵌められたってね。

木田を探す為に組織は私に偽物の手紙を送ったんです。
私と木田が仲良かった事を何処かで掴んでいたのでしょうか。
暇を与えたのも、私に木田の居場所を案内させる為……

私が殺したんだ……

私は暫く愕然とその炎を見ていました。幾度となく頬を伝う涙を拭く事も無く……

組織はこのままだと私は勿論、広平も消しかねない。
そう考えた私は……逃げました。ひたすらに……

それからと言うもの……組織から逃げ切る為に色々な県を転々として来た。

そうして……二年前に、この山奥のボロ屋を借りて、住む事にしたんです。

ここはかなり人目につきにくいので……、ね

広平は最初私を本当の父親だと思っていたようです。ですが、私には広平に父親等と呼ばれる資格はない……広平の両親は私が殺したのも同じですから……

だから本当の両親が居る事だけを話しました。そして私には『おじさん』と呼べと……

これが……真実です……

……

「あの子がこんな事を知ったら……ですからどうか、お願い出来ませんか？」

「……………」

銀時は何とも言えぬ表情を星空に向ける。

「いくらか言いてえ事はあるけどよお……それより気になる事がある。何で広平の両親を練馬区で聞いたなんて情報が流れたんだ？」

「え？」

慶次は意味不明だという表情。

「広平が俺を尋ねて来たのも、それが原因だっつー話だ」

「……………」

穏やかな慶次の表情がみるみると強張ってゆく。

「銀時さん！私はちよつと失礼します！」

「な！？あ、オイ！」

慶次は中年とは思えない速度で、自分の家に戻っていった。

「何なんだよ……………つたく！」

銀時もその後を遅ればせながらついていった。

*

「広平！広平！」

慶次は家中を探し回っていた。

作業場は灯かりがついたまま、広平の靴もある。しかし何処にも居ない。

とてつもなく嫌な予感がした。

そしてそれは間もなく的中する事になった。

居間には一枚の紙が置いてあった。

『ガキは預かった。返して欲しかったら下記の場所まで来い』

「……………くっ！」

慶次は唇を噛みしめ、拳を握りしめた。

(……………やはり、広平に両親の名前を練馬区で聞いたと教えたのは……………組織の連中か！)

そう。慶次の居場所を組織に突き止められてしまったのであった。

*

慶次は家の外に出ると、銀時がようやく追いついたようにやって来た。

「オイ……一体何があったんだ!？」

すると慶次は作り笑いを浮かべる。

「何でもありませんでした。ハハハお恥ずかしい。私の危惧でしたよ……広平はもう寝ていたので、銀時さん、今日の所はお引き取り下さい。また明日、私の家に来て下さい」

慶次は出来るだけ焦りを隠して言う。

「……………アンタは何処へ行くんだ？」

「小物よつの竹が必要になりましたね。その下調べです」

「……………」

「では、私はこれで！明日またお願いします」

「まあ、そついう事なら……」

慶次は早足で銀時から離れて行った。それを見送る銀時。

パサリ……

「？」

銀時は慶次のポケットから何かの紙が落ちたのに気付いた。

「じいっア……………」

銀時の目はみるみる見開かれていった。

〈工場裏地〉

慶次は約束通り、一人で工場の裏地にやってきた。

「ようやく来たか……………探したぜえ沼木慶次さんよお……………」

かなり柄が悪そうな金髪の男を筆頭に凡そ40人は居るであろう組織の連中に取り囲まれる慶次。

「おじさん！」

「広平！？」

広平は連中の中の二人の男に取り押さえられていた。

金髪が一步前に出て慶次を睨み付ける。

「アンタには俺達の指示に従って貰う。さもなければガキは殺る」

「！？」

金髪は広平に銃を突きつける。

「分かった！だからソレを降ろせ！」

金髪はニタリと笑うとゆっくり銃をおろした。

「こちらの要求は簡単だ…沼木慶次を組織に監禁する事だ。変な真似をせず言う通りにすればガキは逃してやる」

「……………」

慶次はグツと目を瞑り堪えるように沈黙すると、

「……………分かった」

「!?!」

広平は信じられないというように目を見開く。
監禁＝死である事が少なからず伝わったようだ。

「その代わりに、広平には一切手を出さないで下さい」

「おじさん！なんで!?!何で!?!…こんな奴等の言う事なんて聞くだよ!?!」

「こんな奴等ねえ!?!…言ってくれるじゃねーかガキ。そのこんな奴等から生まれたテメーだろうがよ!?!」

「え!?!」

「!?!…オイオイアンタ、このガキに何も教えてなかったのかよ!?!」

金髪の男は卑しく笑うと広平を見下ろす。

「テメーの親父はな!?!」

「止める!?!」

ドン!

「ぐあつ!?!?」

大柄な男の一人が慶次の足を撃ち抜いた。

「テメーの親父は俺達と同じ組織……人殺しの組織だったんだよ」

「……………!?!」

「そこにいるテメーのおじさんもそうだ。この二人は組織を抜けようとしやがった。だから俺達がテメー諸とも両親を殺そうとしたのさ。だが、この沼木慶次はお前を連れて逃げ出したんだよ……」

「嘘だ……………」

「薄情な奴だなあオイ。親友の家が燃えてるのを見て、逃げ出したんだからよお……………」

「嘘だ！両親は生きてるってー」

広平は必死に否定しようとするがそれを嘲笑うかのように金髪は続ける。

「まだ分からねえのか？俺達は沼木慶次の居場所を炙り出す為に、テメーに嘘をつけて尾行してたんだ。テメーの両親なんざとっくに死んでるんだよ……!」

「……………」

「それなのにご苦勞なこった。

逃げ出した卑怯者と一緒にずっとこのうとうと暮らしてきたんだからなア……………」

「嘘だ……………嘘……………」

広平はヨレヨレと後退していく。

「……………騒がれると面倒だ。ガキを消せ」

金髪の男が命じると、大柄な男の一人が広平に銃を向ける。

「な！？何を…広平には手を出すなと…」

慶次は必死で金髪の男に叫ぶが、

「元々ガキも消すつもりだったんだ……予定は狂うが構いやしねえ」

「……………」

広平は銃口に怯え声も出せずに後退する。

「殺れ……………」

「くそっ！」

ダッ！

大柄な男が引金を引いた。

ドン！

「……………」

広平は目を閉じて蹲ったが……痛みはこない。
不信に思つて目を開けると……

「ぐおおお……」

「……あ……ああ……」

おじさん!!」

慶次が広平に覆い被さるようにして、銃弾を受けていたのだ。
絶え間なく慶次の腹部から血が流れる。

「おじさん……?」

なんで!?!何で……こんな」

「私は……大馬鹿者だ……」

広平を育てる事が……木田達へのせめてもの罪滅ぼしに……そう思っ
ていた……けれど、やはり……広平と一緒に暮らしてはいけなかった。
何処か遠くに預けるべきだった……ごめん……最後の最後で……こんな
私で……」

「おじさん!おじさん!」

広平は慶次に必死に呼びかける。

「随分と美しい親子愛……おっと、義理堅い愛じゃねーか……
しかし残念ながら、テメーの人生に光なんて差しやしねえよ……
一度悪に片足突っ込んで、最期は綺麗に飾れるとも思ってたのか、
この死に損ないが……」

金髪の男は二人を見下ろして、吐き捨てるように言う。

「殺れ……ガキもろとも」

命じられた通りに、大柄の男が二人、慶次達に銃口を向ける。

「良かったなア、ガキ……もうすぐご両親に会えるぜ？」

そう言うと、二人の男は引金を引……

ドオオオオオオオ！！！！

「何だ！？」

金髪の目の前から二人の男が吹き飛んだのだ！

「……………オイ！お前ら……………、！？」

金髪の男が吹き飛んだ二人の方向に目をやると、気絶している二人の頭上の壁に一本の木刀が突き刺さっていた。コンクリートの壁は、たった一本の木刀に貫かれているのだ。

「あれは！？」

広平と慶次の振り返った目に映ったのは、面倒そうに頭を掻きなが

らゆつくりとこちらに歩いてくる……坂田銀時であった。

「銀さん!!」

「……何故……ここに」

驚いて銀時を見る二人。

「何者だ貴様ア!!」

銀時は真つ直ぐ広平達の所に向かつていく。

「済まねえな……アンタに言い忘れた事があってよオ」

銀時は突つ伏している慶次に目を向ける。

「アンタさつき俺に言ったよな……自分は父親と呼ばれる資格は無い、と。そいつア罪滅ぼしの為に血の繋がりが無え広平コイツといたからか？」

「……」

「でも、本当にソレだけの理由でここまでコイツを育ててきたのか？アンタはそんだけの為にコイツとずっと一緒に居たってのか？」

「……」

「……違ーだろ？アンタは広平コイツと一緒に居るのが、一緒にいる時間が……知らず知らずのうちに、何ものにも替え難い大切なもんなってんだ」

「私は……ぐっ!！」

慶次は銀時を見上げ喋ろうとするも吐血する。

「アンタのその目が何よりの証拠だ……」

慶次の真っ直ぐな目を見て銀時はフツと微笑する。

「広平…おじさん連れて早く逃げろ」

「銀さん!？」

広平は困惑した表情で慶次と銀時を交互に見る。

「私の事は……いい……」

銀時さん……広平を連れて逃げと下さい」

慶次は精一杯に声を絞り出す。
しかし、

「悪いがその役目はご免被るぜ……」

「……何故……!？」

慶次は苦しそうに銀時を見る。

「アンタはずっと……父親なら広平の傍にいてやらなきゃならねえ
だろ……」

「違う!私は……!！」

「違わねーよ……」

まだ気付かねえのか、アンタ」

「!?!」

慶次の言葉を制するように銀時は続ける。

「広平はとっくにアンタの事を父親だと思ってんだよ。本物の両親を探そうとしたのだって、アンタを父親と呼ぶために、はつきりとしておきたかった……そうだろ？」

「銀さん……」

広平は一瞬銀時の言葉に驚いたような表情をするが、直ぐに慶次を見て黙り込む。

「こんなに互いの事を想っている奴等を家族と言わずに何て呼ぶよ？不恰好で多少泥に汚れていようが、こんなにも堅い絆に繋がってるんだからよ……」

銀時の言葉を噛み締めるように二人は俯く。

パチパチパチ……

「いや〜素晴らしい。なんて美しい話だな……」

目の前の金髪の方は憎たらしい笑みを浮かべて三人を見据える。

「だが……奴は所詮薄汚れた卑怯者だ。そんな奴が父親の資格だ？笑わせんな……死ぬんだよ今日、裏切り者は」

「ぐあっ!？」

「おじさん!？おじさん!?!」

腹部からの出血は深刻で、更に吐血した慶次は意識を失った。

「…………… 広平、親父背負って……………早く逃げる。テメーの背中で親父を助けてやれ」

「……………」

「早く行け!」

「ハイ!」

広平は慶次を背負うと、頑張って走りだした。

「兄貴!？追いかけないんですか?」

その様子を見て、組織の一人が金髪の男に話しかける。

「焦んじゃねーよ……………あんなガキじゃ、行ける距離なんざたかが知れてら。それに……………一度希望を見せてから殺った方が、面白えじゃねえか」

「……………」

銀時はただ黙り込んで周りを囲む人間を見据える。

「奴は俺達と同じ組織の人間だ……裏切り者にはそついう死に方が一番だろ？」

「流石兄貴だ…質の悪さは日本一!!」

周りの人間は笑いだした。

「一緒にすんじゃねえよ……」

「あ？」

銀時は壁に向かってゆっくり歩いていくと、木刀を引き抜いた。

「てめえらみてーなクズと一緒にしてんじゃねーよ……」

「!?!?」

一瞬……全員が驚いた。

先程まで死んだ魚のような目をしていた男はもうそこには居ない。

「こ、この人数と一人でやろうつてののか？」

周りの人間は一斉に木刀やら鉄パイプを構える。

金髪の男も一瞬銀時の目に怯えたものの、数に勝る自分の優位を確

認し、落ち着いて銀時に銃を向ける。

「奴と俺達の何が違うって？」

「痛みだ……」

「何だと？」

銀時は木刀を右手に持ち直すと、全員を見渡す。

「人つてのはよオ……多かれ少なかれ心に痛みを感じるもんだろ。過去の痛み、後悔、憎しみ、自分への痛み、他人への痛み。

だがてめえらには痛み（それ）が無え……」

「ダツハハハハ！何を言い出すかと思えば……」

ハハハハハ……

一斉に吹き出す組織の人間達。
しかし、銀時は木刀を構える。

「てめえに分かるか……、父親と呼びたくても我慢し続けた広平の痛みが……」

てめえらに分かるか……、ずっと広平の両親を想って“おじ”と呼ばせ続けたアイツの痛みが……」

「ククツ……んなもん知るか……戯言は程々にしろや！」

「そっかよ……」

「!?!」

金髪の男を始め、その場にいる全員が凍りついたように固まる。

先程とは比べものにならない程の殺気。その目は夜叉の如く、その視線は鬼のように全員を縛りあげる……

まるでこの世の恐ろしいものが全てがそこにあるかのように……誰一人として動く事が出来ない。

「今から教えてやるよ……」

アイツらの痛みってやつをよ……」

〈都内の病院〉

「おじさん！」

「広…平……？」

慶次のベッドに駆け寄る広平。

その後、何とか救急車を呼んだ広平は慶次を背負って禁まで降りていった。

慶次は出血が酷かったが、そこまで深刻な状態ではなく、入院もそんなに長引く事は無いそうだった。

「ここは……？」

「病院だよ！」

「そうか……本当にごめんなさい、広平……私は」

「もういい。もう大丈夫だよ、僕は。それよりおじさんが無事で良かった……」

慶次の言葉を汲んで、頷く広平。

「おじさん……お願いがあるんだ……」

「………?」

「“お父さん”って呼んで良いかな?」

「!?!?」

広平は気恥ずかしそうに呟いた。

「……良いんですか?私なんかを……私なんかが……広平の父親で……」

「当たり前だよ……本当の両親は居るかもしれない。でも、僕のお父さんは……ずっと……おじさん一人だから……」

「ううう、……ありがとう……広平」

広平は慶次の手をがっしり握り、慶次もその手を硬く握り返した。

二人の視界は涙で見えなくなっていた。

「………ったく、どうみても親子じゃねーか」

病室の扉に寄っ掛かっていた銀時は、その様子を見て肩を竦めると、そっとその場を離れた。

*

「銀さん！」

「ん？」

病院を出る為、銀時が出口に向かって廊下を歩いていると後ろから広平が走ってきた。

「銀さん……本当に、本当にありがとうございました！」

「別に俺は何にもしてねーよ」

そう言うと銀時は懐から何かを取り出す。

「広平、受けとれ」

「え！？コレ……」

銀時が広平に投げたのは、最初に広平が渡した依頼料が入った巾着

袋だった。

しかも中身は広平が渡した料金よりかなり増えていた。

「ぎ、銀さん！一体コレは…」

「釣りだよ、釣り」

「そんな！？悪いです！それにこんなに…」

「依頼料なら貰ったよ、オメーらから……沢山」

銀時の脳裏に浮かぶのは、慶次と広平の作業場での笑顔、慶次を背負っている広平の姿、病室での笑顔……

「依頼料そいつが持てねえくらい溢れちまってな……巾着袋コイツは邪魔だからオメーが持つてろ」

「ぎ、銀さん……あ、ありがとうございます！」

「それによお、巾着袋コレは釣りだけじゃねーよ」

そう言うと、銀時は更に懐から何かを取り出した。

「……あ！」

それは広平と慶次が作っていたあの小物入れだった。

「俺ア、えらくコイツが気に入っちゃまってな……その金で、売ってや

くれねえか？」

「……ハイ！勿論です！」

広平はとても嬉しそうに銀時を見上げる。

銀時はそんな広平の頭に手を乗つけた。

「じゃあな、親父さんと辛くても頑張ってやっていけよ」

そのまま、銀時は病室の出口に向かって歩いていった。

「銀さん！！今度、今度また僕達の家に来て下さい！もっともっと凄いもの、作りますから！！」

銀時は手をひらひらと振ると、病院を出ていった。

「家族か………」

銀時が見上げる空には、目映いばかりの満天の星が煌めいていた……

第四十九訓 想いの形は十人十色（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「最初の質問だな…『銀八先生の服は元々持っていたの？それとも三千院家から貰ったの？』」
ハイ、ズバリ答えます。

銀さんの白衣は元々持っていたものですが、スペアは三千院家に何枚か貰っています。汚れたりしたら、その都度交換している感じですかね」

銀八

「では、続いての質問。『愛歌さんに質問。今一番サドってみたいのは誰？』」

愛歌

「そうですね、銀さんか綾崎君ですね」

ハヤテ

「いやいや、何ですか！？」

銀八

「ハヤテは分かるけど、俺は弱点なんて……何にも失うもんなんかねーよ？」

愛歌

「そういえば銀さんって幽霊が苦手なんですよね？」

銀八

「!?!」

愛歌

「綾崎君は……チャイナ服に女装した事があるんですね」

ハヤテ

「!?!」

愛歌

「他にも」

銀八・ハヤテ

「すみません、勘弁して下さい!」

愛歌

「アラ、残念?」

銀八

「で、では次の質問な……」ヒナギクに質問。銀さんとハヤテ、どちらが頼りになる?」

ヒナギク

「そうね……銀時は目は死んでるし、面倒屋だし、ダメな大人だけど剣は強いし、いざという時は頼りになるかな。」

ハヤテ君は、顔は女の子みたいだし、すぐ謝るし、優柔不断でデリカシーないけど、何でも出来るし行動力もあるかな……って、どうしたの?二人とも」

銀八・ハヤテ

「……………」

しゃがんで丸くなっている二人。

ナギ

「流石ヒナギクだな。的確に相手の急所を突きまくるとは…」

ヒナギク

「な、私攻撃なんてしてないわよ!？」

ナギ

「ま、全部当たってるんだけどな…」

ヒナギク

「ま、まあ二人とも頼りになるわよ!！」

銀八

「……………では最後の質問な。暁楓さんの小説『リリカルなのはhunters(略)』のレミア・ウェバーさんからの質問。

『早速質問です。新八さんって、自分の存在意義(地味、ツッコミ、メガネ、剣道、etc)をハヤごとキャラに取られちゃったわけですが、自分ではどこに誰にも勝てる存在意義があると思っ
ているんですか?勿論、アイドルオタクなんて言ったら竜撃砲をぶち込ませてもらいますよ』
だだよ。どうだ、ぱつつあん?」

新八

「それは……勿論！お通ちゃんへの愛ー」

ドオオオオオオオン！！！！

ナギ

「何か砲弾が飛んできたぞ！？」

ハヤテ

「新八君んんん！！新八君がアアアアア！？」

神楽

「ま、アイドルオタクしか無いという事アルな」

新八

「ぐっ……フツ、こんなものじゃ、僕へのお通ちゃんへの愛は無くなりませー」

ドオオオオオオオン！！

ハヤテ

「新八君！？」

ナギ

「何故だろう……まったく同情できんな……」

銀八

「つー訳で、今回はここまでな〜！次回、遂に人気投票結果発表だ。よろしくな〜」

特別訓 とかく世の中は番付をしたがるもの(前書き)

クラウドの前書きの館！

クラウド

「第1回銀魂のごとく人気投票ウウウウ！！」

ハヤテ

「いや、沢山投票して頂きましたね…」

伽藍

「本当に、皆様ありがとうございます！因みにこれなら企画も何とかなりそうです。多分またかなり先になるとはおもいますが」

クラウド

「では、人気投票結果発表にー」

クラウド・ハヤテ・伽藍

「カウントダウン？」

特別訓 とかく世の中は番付をしたがるもの

【特別企画】

クラウドス

「第一回銀魂のごとく人気投票結果発表オオオオ!!!」

クラウドス

「ここはとあるパーティー会場……
とんでもなく広い会場から察するに三千院家御用達の会場なのだろう。」

クラウドス

「投票総数328票！感想投票並びにメッセージ投票も沢山頂きました！皆様投票誠にありがとうございました！」

「ただっ広い会場に響き渡るクラウドスの声と疎らな拍手。」

クラウドス

「では、早速発表して行きましょうか！各キャラの原作の名言と共に紹介していきます！」

「因みに同票数のキャラは独断と偏見で順位付けしました。
では、まずは第25位です！」

『この世はさ……一番欲しいものが手に入らないように出来てんのよ』

第25位【桂雪路】 1票

雪路

「キヤホオオオオ！！パーティー会場じゃん！ご馳走だ！酒だアアアア！！」

雪路は現れたかと思うと、パーティー会場の食べ物やら飲み物をがつつき始めた。

クラウド

「え、桂先生から一つコメントを頂きたいと思ったのですが……全く興味が無いようですね？」

雪路

「ドンペリは！？ドンペリは無いの！？」

クラウド

「あ、こちらに……」

雪路

「ドンペリイイイイイ」

雪路はドンペリの方に向かって行った。

クラウド

「……では、気を取り直して第24位、いってみましょう！」

『男なら適わない相手でも取り敢えず当たれ』

第24位【野々原楓】 1票

野々原

「ご紹介に預かりました。野々原楓と申します」

東宮

「な、何で野々原に票が入っていて僕に投票がされていないんだ！？」

野々原の後ろから東宮もひょっこり顔を出す。

クラウド

「まあまあ、それでは野々原殿。何か一言お願いします」

野々原

「私なんか票を入れて下さりありがとうございます。これからも坊っちゃんが強い男になる為に精進してゆくのでもよろしく願います」

東宮

「それ僕がよろしくみたいになってない!?!」

クラウド

「さあさあ、どんどんいきましよう!第23位は…!?!」

『今にみてる!!オレがこの店をでかくして、三千院なんか目じゃねえ財産を作つてやる!!』

第23位【橘ワタル】 1票

ワタル

「い、一票……………」

ガクリと膝をつくワタル。

サキ

「若、票を入れて下さるといふ事は、例え一票でも若に期待をしてくれる人がいるという事です！感謝こそすれ、落ち込む事は無いですよ！」

サキ

「サキ……」

サキ

「それに、もつと出番があれば若にもきつと沢山票が入ると思いますよ！」

ワタル

「そうか……そうだよな！よし、頑張るぞオオオオ！！」

拳を突き上げるワタル。

クラウス

「では、ワタル君に一言コメントを貰いましょう」

ワタル

「え、これからもレンタルビデオショップ橋を頑張って経営していきます！是非ご来店を！」

クラウス

「では人も集まってきた所で、続いては第22位です！」

『ワン！（痛ってーな。動物愛護団体に訴えるぞ）』

第22位【定春】 1票

定春

「ワン！」

クラウド

「という事で、22位は定春です。相変わらず大きいですな。では一言お願いします」

定春

「ワン！」

ガブリ……

クラウド

「ぬお！？ま、前が見えないですぞ！？
…ですが、次に行きましようか！第21位です！」

『特に無し』

第21位【パイナップル】2票

ワタル

「何だよ、パイナップルって!?!キャラじゃねえだろ!」

クラウド

「これは……アレですな。式術五行篇の伊澄お嬢様の式神ですな」

ワタル

「ですな、じゃねーだろ!え、もしかして俺はパイナップル以下なのか!?!」

クラウド

「では、続いて第21位です」

『キシヤアアアア』

第20位【ゴキブリ】 2票

クラウス

「という訳で20位は宇宙怪獣ゴキブリでー」

ワタル

「納得出来るかアアアアア！！ゴキブリ以下って事か！？ゴキブリ以下なのか俺は！？」

クラウス

「ゴキブリです」

ワタル

「一緒だアアアアアアアアア！！！！」

クラウス

「さて、今度は第19位になります！どうぞ！」

『笑いをなめんな笑いを！！一つボケる度に命がけで突っ込め！！』

第19位【愛沢咲夜】 2票

咲夜

「納得出来るかアアアアア!!」

クラウド

「20位は咲夜お嬢様ですな」

咲夜

「って何サラツと進行してんねん! 票数は別に気にしない、順位が別にどうでもええ。けどゴキブリと同列つてのは納得いかへんわ!」

ワタル

「俺なんかゴキブリ以下だぞ! 余計納得出来るか!!」

という訳でひと悶着が暫く続いた……

クラウド

「では咲夜お嬢様に一言お願いしましょう」

咲夜

「せやな……投票してくれてありがとな。これからも世の中のボケに対して突っ込んでいくさかい、よろしく頼むわ」

クラウドス

「さて果て、続いては第18位です！」

『女は知らず知らずの内に傷ついているものなのよ…？』

第18位【霞愛歌】 4票

クラウドス

「18位は霞お嬢様ですな。では一言コメントをどうぞ」

愛歌

「まあ……四票も入れてくださるなんて。嬉しいですわ お礼に弱点帳の一部を見せてー」

ワタル

「いやいやいやー！それはマズいだろ！ダメだよダメ！」

愛歌

「あら残念……ワタル君の事も書いてあるのだけれど……」

愛歌の目がSモードに入る。

ワタル

「……クラウドさん！次にいって下さい！早く！」

愛歌

「12月14日、ワタル君が白皇のテラスで呟いた一言『あ……』」

ワタル

「あー！！あー！！ああああー！！」

クラウド

「………では、続きまして第17位の発表です！」

『心配には及びません。老人には老人の………戦い方がある！』

第17位【クラウド】 5票

ワタル・咲夜

「だから何でだアアアア!！」

クラウド

「いや、まさかこのような結果になるとは。皆様、本当にありがとうございます。不肖このクラウド、これからも精進していきます。故よろしくお願い致します」

ワタル

「何で!? 何でクラウドさんにこんなに票が入ってんの!？」

咲夜

「何かものっそい納得いかへんわ!」

クラウド

「ハッハッハ。では続いて第16位です!どうぞ!」

『俺の後ろに立つなアアアアア!!!』

第16位【真田幸久】 6票

幸久

「む？これは一体何の集まりだ？誕生日会？」

クラウス

「第16位は真田家のご子息、真田幸久殿ですな」

幸久

「16……？ああ、そうか人気投票か」

幸久は周りを見回して気付いたように呟いた。

クラウス

「では、一言頂きましょう」

幸久

「俺への投票をしてくれるとは……感謝する」

愛歌

「でしたら16位の記念に女装しませんか？」

幸久

「!？」

咲夜

「お、ええやん。自分女顔やし、絶対可愛くなるで！巻田、国枝！」

巻田・国枝

「かしこまりました」

幸久

「や、止める！？触れるな、あ、ちよつと！？オイイイイイイ！？」

幸久は二人に連行された。咲夜と愛歌も面白半分で行った。

クラウド

「気を取り直して次に行きましょうか！続きまして第15位！」

『……だから祈れ。今自分が思う一番の事を祈るのじゃ』

第15位【澳門真司】 6票

クラウド

「15位には澳門家当主、澳門真司殿が入りました」

真司

「我に5票も入れてくれるなんて、ありがたい事じゃの」

クラウド

「……………何ですか？コレは？」真司

「何、新しい醤油じゃ。会場全ての料理、飲み物に加えられるように大量に持ってきた」

ワタル

「いや死ぬから！普通の人間は醤油沢山摂りすぎると死ぬんだよ！」

真司

「心配いらぬ。この新澳門印の醤油は前作より更に塩分控えめじゃ」

一同

「そういう問題！？」

クラウド

「ではここからは所謂上位陣を含めた発表となりまー」

SP12

「クラウド殿！」

クラウド

「ん？どうしたのかね？」

SP12

「それが、14位からの方々が皆、いらっしやらないのです！」

クラウド

「何ですって？」

咲夜

「〜何や？どうかしたんか？」

ワタル

「アレ？咲夜向こうに行つてなかったっけ？」

咲夜

「いや、こっちで何やら面白そうな匂いがしたからな」

ワタル

「探偵か、お前は……」

呑気に話している二人の周りは案外慌ただしい。

クラウス

「ナギお嬢様達が居ない！？しかし私はここを離れる訳には……」

咲夜

「だったら、ウチ達が探して来ようか？」

ワタル

「ウチ達！？」

クラウス

「しかしお客様に……」

咲夜

「ええって。こっちの方はウチラに任せとき」

クラウドス

「……そうですか。助かります。是非ともお嬢様達をお願いします」

咲夜

「しかし上位陣が揃いも揃って遅刻とは……これは何かあるな」

ワタル

「楽しそうだな……」

定春

「ワン！」

咲夜

「何や、定も一緒に行きたいんか？」

定春

「……………」

コクコクと首を縦に振る定春。

咲夜

「分かったで」

そう言っていると咲夜は定春の上に乗った。

咲夜

「じゃ、検索開始や！」

ワタル

「ハア……………」

こうしてワタルと咲夜は会場を後にした。

*

ワタル

「なァ……探すつっても宛はあるのかよ？」

咲夜

「まあ……何とかなるやろ」

ワタル

「策一つ無しかよ!？」

定春に乗った二人はぶらぶらと練馬区を探して回っている。

咲夜

「しかし、変やな……町に人氣がほとんど無いで？」

ワタル

「……確かに、まだ昼前なのに随分静かだな……」

ガサツ！

ワタル・咲夜

「!？」

突如数人の一般人がワタル達の前に現れた。

しかしその様子が普通ではない。両手はぶらりと垂れ下がり、猫背でワタル達を睨み付けてくる。

一般人A

「ヴ……」

一般人B

「ウウウウ……」

咲夜

「な、何やコイツら!？」

定春

「グルルル……」

定春は危険を悟り一般人達に唸り声をあげる。

ワタル

「何か分かんねーけど……ヤバそうだぞ……」

一般人A B

「ウウウウ……」

徐々に一般人は二人に近づいてくる。

咲夜

「ワタル！アイツらー」

ワタル

「言ってる場合じゃねえ！逃げるぞ定春！」

定春

「ワン！」

定春は二人を乗せると、立ち塞がる一般人達を飛び越え逃げ出した。

一般人A B

「ガアアアア……」

咲夜

「追ってきたよつた！？しかも早っ……」

全力で逃げる定春に負けじと一般人達も追ってくる。しかも常人のスピードを超える速度で……

咲夜

「な！？また増えたで！？」

ワタル

「またどころじゃねえ！どんどん増えてやがるぞ！」

一般人達は様々な場所から飛び出して来ては合流しながらワタル達を追いかけてくる。

ワタル

「なあ、もしかしてナギ達が遅れている理由ってもしかして……」

咲夜

「恐らくそうやるな……もし町中こんな奴がおるんやったら……」

二人は顔を見合わせて青ざめる。

ワタル

「でも何でこんな事に！？」

咲夜

「理由は分からんけど……奴らの額を見てみ」

ワタルが一般人の一人の額をみると、『NNN』という文字が浮かんでいた。一人ではない。追いかけてくる一般人全員の額にあるのだ。

ワタル

「何だつてんだよ！？NNNウ！？」

咲夜

「あかん！定、この先は行き止まりや！」

定春が逃げ込んだ先は行き止まりの通路だった。

ワタル

「ヤバい！？来たアアアアア！」

一般人達は次々に通路を塞ぐと、二人と一匹に迫ってくる……！！

咲夜

「もうこれまでか……！？」

二人は観念したように目をつむると……

????

「三人とも、こっちです！横に飛んで下さい！」

????

「急いで！早く！」

突如、横の建物から声が聞こえてきた。

ワタル・咲夜

「!?!」

定春

「ワン！」

ワタル達が何か考える間もなく、定春は声のした方向に飛んだ！

ガタン！

ワタル

「痛ててて……」

咲夜

「何なんや……」

ワタル達は辛くも追撃を振り切り、建物の中に避難した。

ハヤテ

「大丈夫ですか？ワタル君、咲夜さん、定春」

ワタル

「ハヤテ！？何でお前がここに……」

咲夜

「それに……生徒会長さんも一緒やないか」

ワタル達の目の前にはハヤテとヒナギクの姿があった。

ヒナギク

「良かった。その様子だと……無事みたいね」

咲夜

「ハヤテ、会長さん、これは一体……？ナギ達は……」

ハヤテ

「お嬢様達も皆この建物にいますよ」

ワタル

「そっか……」

ハヤテの言葉に安堵の表情を浮かべるワタル達。

ヒナギク

「招待状に書いてあったパーティー会場に歩と行く途中を襲われてね……逃げてる時にハヤテ君達と合流したのよ」

ハヤテ

「ハイ……町中の皆さんがあんな風になってしまっていて。原因は全く不明なのですが……」

ハヤテは困ったように首を振ると

ハヤテ

「取り敢えず、お嬢様達の所に行きましょうか」

ワタル

「え？あ、ああ……っかこの建物は？」

ヒナギク

「よく分からないけど……研究所らしいわよ？」

ハヤテの案内で、ワタル達はナギ達がいるという地下に降りていっ

た。

*

ナギ

「何を言っているのだ……
ハムスターとハヤテが1 - 2フィニッシュ？寝言は寝て言うものだぞ？」

歩

「そ、そんなの見てみないと分からないよ！もしかしたらー」

ナギ

「ナイナイ……」

歩

「そ、そう言うナギちゃんこそ！原作でも一位なんて取れないのに、

「こっちで一位なんてとれるのかな!？」

ナギ

「ぬはっ!言ったなハムスター!」

歩

「何よ〜!」

ギヤーギヤー……

ハヤテ

「あの〜、皆さん?」

新八

「あ、戻ってきたんだね。ハヤテ君」

上の階から降りてきたハヤテに新八が話しかけてきた。

ハヤテ

「うん。ワタル君達がパーティー会場から探しに来てくれたらしいんだけど」

ワタル

「まさか皆がこんな場所にいたなんてな」

新八

「そうだったんだ」

神楽

「ハア……せつかくご馳走食べ放題で人気投票の結果発表もあるパーティーに行く途中だったのに、お腹減ったアル」

マリア

「本当に困りましたわね」

伊澄

「ここは……どこ？」

新八の後ろからは神楽、マリア、伊澄が姿を現した。

咲夜

「ちょっと待ちや。自分らまだ人気投票の結果知らんのか？」

新八

「ハイ、全く……」

ワタル

「なら取り敢えず皆集まって発表しちまおうぜ。結果は俺達が発表していくから」

ワタルは結果の紙らしきものを取り出して言う。

ハヤテ

「そうですね、分かりました。皆さまん！」

*

ワタル、咲夜の前に皆が集まった。

ヒナギク

「アレ、銀時達は……さっきまでいたわよね？」

泉

「向こうのテーブルに座ってるよ」

泉が指差す先には……

銀時

「……………」

桂

「……………」

長谷川

「……………」

姫史

「……………」

テーブルを囲むように四人が神妙な面持ちで座っていた。

ハヤテ

「何やってるんでしょうか…」

千桜

「事の重大さを話し合っているのでは？」

新八

「いや……でも何か変ですよ」

四人を不思議そうに見つめる一同。
一体銀時達は何を……

銀時

「……よしっ！んじゃ、ヅラ」

桂

「ヅラじゃない桂だ」

銀時は姫史からカードのようなものを取ったかと思うと、自分の手札のソレをテーブルに捨て、そのまま桂に向ける。

銀時

「さっさと取れよ」

桂

「何イ！？こゝ、これは…」

銀時の手札の真ん中の一枚が飛び出していた。

桂

「真ん中の飛び出し（センターオブマインドコントロール）だとお！？」

桂の動きが急に鈍くなる。

桂

（わざと真ん中のカードを飛び出させることにより、否応なしに注意を真ん中に駆り立てる。真ん中にババはあるまいと頭で印象付けさせ、更には端っこのカード二枚に意識がいつてしまう。そう、まるで真ん中と端っこ二枚の計三枚しかないような錯覚を覚える。そして地味となった真ん中と端をつなぐカードは真ん中の飛び出しの影に隠れさせる。気付けばコレが一番安全に見える……だが、）

銀時と桂の沈黙の対峙は続く。

桂

（だが甘い！正解はその隠れさせたカードと見せかけて飛び出している真ん中のカードだ！）

桂は銀時の手札の真ん中のカードを引き抜いた。

桂

「残念だったな銀時！貴様の策など俺には……なア！？」

銀時

「ハッ……」

桂の引いたカードは何とババ！
そんな桂を銀時は嘲笑うかのような視線を送る。

桂

（バカなアアアア！まさか最初から何の気なしに真ん中に！？
純粹な悪戯心が生んだとでも……………
いや、違う！奴は最初から俺の考えを読んでいたんだ！裏の裏の裏
まで見据えていたのか！）

銀時

（フツ、馬鹿め……………テメーが考える事なんざアお見通しなんだよ。
しかし今のリアクションでヅラにババがいった事は他の二人にも明
白……………）

桂

「……………では、長谷川殿」
桂は手札をしっかりとシャッフルして、長谷川に手札を向けた。

長谷川

（悪いなヅラっち！シャッフルの後、チラッと端っこが見えてしま
ったぜ。端っこのカードは俺のカードの数字と一致している。
……………これは貰ったア！）

桂

「!？」

長谷川は端っこのカードを勢い良く取ると、手札を捨てに……………

長谷川

「何だとオ!?」

何と長谷川が引いたカードはババだった。

長谷川

(どついつ事だ!?俺は確かに今ダイヤの9を……………ハッ!?)

桂の手札を見ると、長谷川が引いた筈の端っこにカードがあった。

長谷川

(カード二枚重ね(トランプオブダブルフェイント)だとオオオオ!
!?)

長谷川が引いた場所にはカードが二枚重ねてあったのだ。

桂

(フツ…………甘いぞ。俺が何の策無しにカードチラ見させたとも思
つたか!伊達に幾度の死地を乗り越えて来た訳では無い)

長谷川を天井を見上げる。

長谷川

「ククツ…………このくらいで挫けるような人生送ってきてねえさ!勝
負はこれからだ!」

姫史

「フン…………当然だ。こんな事で諦めて貰っては困る」

桂

「良いだろう。貴様らの力という奴が俺に届くか!？」

銀時

「上等だア！！テメーら全員に地獄を見せてやらア！」

馬鹿四人

「俺達の勝負はこれからだアアアアアアアアアア！！！」

咲夜・新八

「アホかアアアアアアアアアア！！！」

ドカツ！

新八はテーブルをひっくり返し、咲夜は四人全員にハリセンを叩き込んだ！

新八

「アンタらはこの状況で何ババ抜きやってんだ！！学校の修学旅行じゃねーんだよ！！！」

咲夜

「ったく……たまには真面目な顔してると思ったら……どんだけ馬鹿やれば気が済むん自分ら。」

……もう何も喋らんでええから、取り敢えず皆の所に集まりや」

馬鹿四人

「へーい……」

新八と咲夜に引きづられてゆく四人。

*

咲夜

「まあ、そんな訳で人気投票の結果発表14位からいくで」

銀時

「つーかそれこそそんな事してる場合じゃ無くね？」

咲夜

「うっさい天パー！これは制作事情や！」

ワタル

「んじゃ、まずは第14位からだ！」

『殺せよオオオオ!!俺の事が気に入くわないんだろ神様!俺もお前なんか大嫌いだ、バーカ!!』

『人生はギャンブルみたいなもんだ。人は皆ギャンブラーさ』

第14位【長谷川泰三】 6票

咲夜

「何と第14位はまるでダメなおっさんコト、マダオや!」

ワタル

「んじゃ、一言コメントをどうぞ!」

長谷川

「いや、やっぱり長い事生きて!」

神楽

「それじゃ、次に行くアル!」

長谷川

「ちよつとオオオオ!?まだ言い終わって無いんだけど!」

咲夜

「続いて第13位の発表や！」

長谷川

「投票ありがとうございます！」

ワタル

「それでは、どうぞ！」

『君達に敢えて言うておこう！私は三度の飯より幼女が好きだ！』

『済まん、事故にあったものと思って諦めてくれ…』

第13位【湊川姫史】 7票

ワタル

「第13位は我らが先生、湊川姫史先生でした。」

姫史

「投票感謝しよう……これからも幼女と遠泳の愛を求め、歩き続けていくとしよう。」

姫史のバックがキラキラと輝きだす。

ナギ

「もう十分歩いたろ。そろそろくたばったらどうだ？っていうかくたばってくれ、頼むから。」

咲夜

「何とまあ残念な男前やなあ……」

泉

「相変わらずだねー姫ちゃんは？」

千桜

「本当に何故教師になれたのか不思議ですね……」

姫史

「そのくらいの罵倒で私が満たされると思ってたか！姫君達よ！もっと私をー」

ワタル

「じゃ、馬鹿は置いといて第12位の発表だ！」

咲夜

「12位はこの人や！」

『ハハーン！それは恋だね？』

『傷ついたり、傷ついたり……』

誰かを好きになるって事は…そういう事なんじゃないかな？』

第12位【西沢歩】 8票

咲夜

「12位は我らがジミーの西沢歩さんでした！」

歩

「ジミー！？もうそれがこの世界共通なの！？」

新八

「でもこの面々で12位なんて凄くないですか！8票も！」

歩

「そうか！そうだよね！皆さん投票本当にありがとう！これからも頑張っていくのでよろしくお願いします！」

ナギ

「コメントも普通だな」

歩

「うるさい！」

咲夜

「では、次は第11位の発表や！」

ワタル

「張り切ってどうぞ！」

『いいんちゃんさんに逆らうと……大変な事になってしまうのですよ
く？』

『私もほら……なんというかいじめられるのかスキだし……!!』

第11位【瀬川泉】10票

咲夜

「11位は白皇学園生徒会役員兼いいんちよさんレッドの瀬川泉さんや！」

泉

「ハイハイ いいんちよさんレッドです？」

ワタル

「では、読者に一言お願いします！」

泉

「え〜と、投票してくれてありがとうございます！これからもレッドとして白皇の治安を守って、役員の仕事も適度にサボってヒナちゃんにお世話になりまーす」

ハヤテ

「いや……ちゃんと仕事しないとダメですよ？」

ナギ

「ま、ヒナギクが大変なのはいつも通りだけどな」

ワタル

「つー訳で、ここからいよいよベスト10の発表だ！」

咲夜

「まずは栄光ある第10位や！」

咲夜・ワタル

「では、どうぞー！」

『片腕では荷物など持てまいよ……今から俺がお前の左腕だ』

『いつから違った……俺達の道は』

第10位【桂小太郎】 11票

咲夜

「何でやアアアアア！！何でコイツが10位やねん！ただボケてただけやる！コイツ！」

ワタル

「っーかセリフが二つともカッコイイんだけど……」

桂

「ハハハハハハ！！投票、皆ありがとう！感謝する！」

咲夜

「何や腹立つけど……一応体裁で聞いてやるか。小太郎、何か一言」

桂

「これからは更に俺の活躍があると期待しー！？」

咲夜

「やっぱ何かムカつくウウウウ！！！」

桂

「ぐおオオオオ！？」

桂は咲夜のドロップキックで吹き飛んだ。

ワタル

「……………えゝ、では次は第9位の発表だ！どうぞ！！！」

『働いたら負けかなと思っている!?!』

『そんなしょそこののニートや引きこもりと同じと侮って賣っては困る!?!』

第9位【三千院ナギ】 11票

ナギ

「9位……だと……!?!」

ガクリと膝をつくナギ。

ハヤテ

「いや、お嬢様! 凄いいじゃないですか! これだけのキャラクターがいて9番ですよ!」

ナギ

「……………メインヒロイン」

マリア

「そうですねナギ。皆様がせっかく投票して下さいです。それだけナギに期待してるって事ですよ」

ナギ

「マリア……そうだな。皆、投票ありがとう！次回こそ順位を上げるのだ！」

ハヤテ

「その意気ですよ、お嬢様！」

咲夜

「……では落ち込んだり張り切ったりしているメインヒロインは置いといて、第8位やで！」

ワタル

「8位は、この人だア！」

『私はもう……友達を傷つけたりしたくはないの』

『通りすがりの……ゴーストスイーパーです』

第8位【鷲ノ宮伊澄】 13票

咲夜

「何か伊澄さんがメツチャ好順位におるやん！」

ナギ

「ま、まさかこれは……親友がライバルフラグ!？」

ワタル

「凄いな!さ、流石伊澄だノノノ」

伊澄

「まあこんなに沢山の票を……ありがとうございますノノノ」

神楽

「流石伊澄アルな!私とペアを組んだだけはあるネ!」

新八

「いや、徐々に人気投票も上位にきましたね!」

咲夜

「では、伊澄さんにも一言貰うか……」

伊澄

「これからも頑張っていきたいのでよろしく願いします。もし周

りに悪霊がいると思ったら鷺ノ宮家に連絡下さいね」

ナギ

「オ、イ、ワタル？顔が真っ赤だぞ」

神楽

「本当アルな……リンゴみたいネ」

ナギや神楽達はニヤニヤとワタルを見る。

ワタル

「うるせー／＼と、とにかく次の発表に行くぞ！」

咲夜

「それじゃ、第7位や！」

ナギ

「どっぞー！」

咲夜

「取られた！？」

『「こちとら根っからのシティー派ネ」』

『女心と木村カエラの髪型言うアル。移り変わりが激しいネ』』

第7位【神楽】 15票

神楽

「キヤホオオオオ!!!7位アルウウウ!」

ナギ

「な、またしても友がライバルフラグ!？」

ハヤテ

「凄いじゃないですか、神楽さん!」

マリア

「まあ、おめでとつございます」

神楽

「ま、日頃の私の活躍を考えれば当然アルな!」

新八

「神楽ちゃんおめでとつ!(でもこのままじゃ多分僕ランク外……)」

咲夜

「何かメガネの気持ちがひしひしと伝わってくるんやけど……神楽に一言やな」

神楽

「沢山の応援ありがとうアル！これからもこの小説共々よろしくお願いネ」

ワタル

「続きまして、第6位の発表です！」

ナギ

「人気投票もここからが波乱万丈な佳境なのだ！」

咲夜

「では、どうぞー！」

『私、まだまだピチピチの17歳ですよ？』

『年上のお姉さんの威厳を見せつけてあげます！』

第6位【マリア】 17票

マリア
「え？私が…ですか？」

咲夜

「せや、6位は三千院家の完璧メイド、マリアさんや！」

マリア

「えっと…組織票とか裏の投票とかでは無くて？」

ワタル

「純然たる投票での順位だな…」

マリア

「あゝ…まあ…こういう事も…ね？ナギ？」

ナギ

「もう何も信用出来るかアアアア！！！」

ハヤテ

「お嬢様！落ち着いて下さい！」

ナギを何とか慰めようと必死のハヤテ。

ワタル

「では、マリアさんにも一言頂きましょう」

マリア

「沢山票を入れてくれてありがとうございます。三千院家のメイドとして、17歳として頑張っていくのでよろしくお願いしますわ」

咲夜

「17の部分にやたら力が入っていたな……まあ、ともかく残す所あと五人や！」

ワタル

「さあて、一体第5位は？」

マリア

「どうぞ」

「一体護ると決めたものは何がなんでも護り通す、それが侍だアアアア！！！」

「男ならメールなんて軟弱なもん使わずに体で愛を伝えるオオオオ！！！」

第5位【志村新八】 18票

新八

「つて嘘オオオオオオ!? 5位? 僕が5位だつてエエエ!?!」

ナギ・咲夜・神楽

「ふざけんなアアアアアアアアアアアアアア!?!」

怒涛の叫び声を上げる三人。

咲夜

「メガネが5位つてどういう事やねん!」

ナギ

「こればかりはいくら何でも納得出来ないのだ!」

神楽

「何で私より順位上アルか!?

これは陰謀ネ! 謀略ネ!」

新八

「僕だつて信じられないけど……でも皆さんありがとございます!
! 不肖この志村新八、これからも頑張つていきたいのでよろしくお
願いしまーぶあ!?!」

神楽

「オラアアアア！取り敢えず5位になったお祝いアル！！」

咲夜

「5位おめでとう！このメガネエエエエ！」

ナギ

「もう何も言つまい！」

新八

「ちよっ！？いやちよつとま……ギヤアアアアアアアア！！！」

新八は瞬間に三人にふくろにされた。

ワタル

「上位は上位で大変なんだな……」

ハヤテ

「新八君……せめて生きて帰って来てくれ……」

ワタル達は新八の身を案じ、その光景に恐怖した。

マリア

「で、では続いて第4位ですね！」

ワタル

「では、どつぞー！」

『せっかく来たお客様を、がっかりさせる訳にはいかないからな
』
『メイドにとって特に大切なのは……作り笑顔ですね』

第4位【春風千桜】 21票

ワタル

「第4位は生徒会書記兼実はいメイドの春風千桜さんです！」

ハヤテ

「あれ……？千桜さん見当たりませんが……」

ハヤテはキョロキョロと辺りを見回す。

泉

「ちーちゃんなら、ヒナちゃんと今回の騒ぎについて牧村先生の話
を聞いてくるって、出ていったよ？」

そう。何を隠そうこの建物は牧村先生の研究所なのである。

ワタル

「いや……よく考えたら銀さん達も居ねーじゃん」

銀時、桂、長谷川、姫史の姿も無い。

咲夜

「もうあんなアホ共は放っておこう」

ワタル

「うわ！いつの間に……あ、」

ワタルの目線の先には新八の屍が一つ。

新八

「って勝手に殺すなアアアア！酷いですよ、ナギちゃんも咲夜さんも神楽ちゃんも！」

神楽

「当然の仕打ちネ」

新八

「何でだよ!？」

千桜

「相変わらず賑やかだな……」

ヒナギク

「本当ね……」

そうこうして、二人が帰って来た。

ハヤテ

「あ、千桜さん！おめでとございます！第4位ですよ」

千桜

「え？私が？」

ヒナギク

「凄いじゃないハル子！おめでと」

ワタル

「ま、では書記さんからも読者に一言お願いします」

千桜

「えっと……投票ありがとうございます。これからもこの小説をよろしくお願いします」

ナギ

「甘アアアアい！そんな凡コメントで読者が納得するか！」

千桜

「な、誰が凡コメントだ！誰が！」

咲夜

「だったらハルさんになったらええんちゃう？」

千桜

「え？」

咲夜

「ハイ、せーの！」

咲夜が指を鳴らすと、何故かあっという間に千桜はメイドの姿、ハルになっていた。

咲夜

「では、読者に一言お願いしましょう！」

ハル

「皆様、投票して下さいありがとうございます？
こんなに沢山の票を頂いて嬉しい限りです
こ・れ・か・ら・も、どうか応援して下さいね？」

一同

(……………凄っ?)

ワタル

「で、ではここからは遂にベスト3の発表だ！」

咲夜

「人気投票結果発表も遂にクライマックスや！」

ナギ

「刮目するのだ！」

『大丈夫！！過去でも未来でも、
僕が君を守るから！！』

『守りたいんだ…誰よりも速く君の元へ駆けつけて！！』

『文字通り……疾風のごとく！！！！』

第3位【綾崎ハヤテ】 24票

ワタル

「ってな訳で、第3位は我らがハヤテのごとくの主人公、綾崎ハヤテだ！」

咲夜

「流石やな！自分。おめでと！」

ハヤテ

「僕が3位ですか！？ありがとうございます！皆さんにこんなに投票して頂いて嬉しいです」

ナギ

「ま、私の執事なら当然だな……」

マリア

「流石ですわね、ハヤテ君」

ハル

「やっぱり可愛い顔がポイントでしたね」

ヒナギク

「確かにね」

ハヤテ

「いや……あの、まあありがとうございます？」

ワタル

「さあ、そして遂に第2位だ！」

咲夜

「この激戦をくぐり抜けてきたのは、この人や！」

ナギ

「しかとその目に焼き付けるのだ！」

『目の前で困ってる生徒を助けられない訳にはいかないの』

『私は……決着をつけなくてはいけないから』

『通りすがりの……正義の味方？』

第2位【桂ヒナギク】 46票

一同

(46票……………!!!)

ワタル

「え、え〜とそんな訳で第2位は白皇が誇る完全無欠の生徒会長！
桂ヒナギクさんだ！」

ヒナギク

「……………って私!？」

暫くして気付いたように声をあげるヒナギク。

ハヤテ

「流石ですねヒナギクさん!おめでとつございます!」

ナギ

「3位との差が約2倍とは……………」

マリア

「おめでとつございます ヒナギクさん」

伊澄

「流石は会長さん。それでこそ正宗が選んだ使い手ですね」

千桜

「ま、ウチの会長なら当然ですね……………」

咲夜

「ハルさん……………いつの間に戻ったん?」

ワタル

「んじゃ、会長に読者へ向けて一言とつござ!」

ヒナギク

「あ、ハイ。」

皆さん、投票してくれてありがとうございます。

この小説は何かと色々あると思いますけど、よろしくお願いしますね?」

ワタル

「ではでは、遂に1位の発表だ！」

ナギ

「よつやく一位か……一体誰がこの小説の頂点に立つのか……」

ハヤテ

「緊張の一瞬ですね！」

マリア

「ヒナギクさんを上回る票数を獲得したって事ですよね」

咲夜

「そんじゃ、銀魂のごとく人気投票第1位や！」

ヒナギク

「では、どつぞ」

『ここで立ち止まったら、そいつが折れちまうのさ。
魂が折れちまうんだよ……』

『俺のこの剣、コイツが届く範囲は……俺の国だ』

『俺ア上でも下でも、てめーのルールで生きてんだ』

『美しく最期を飾りつける暇があるなら……最後まで美しく生きようじゃねーか』

『今も昔も、俺の守るもんは何一つ……
変わっちゃいなエエエエエエエエ!!!!!!』

? 第1位【坂田銀時】 91票?

ワタル

「圧巻の1位は勿論我らが主人公、坂田銀時!!!!!!」

ハヤテ

「91票!!! 凄い……ヒナギクさんの更に2倍なんて……」

ナギ

「まさかここまでとはな…」

マリア

「肝心のその銀さんは何処に？」

咲夜

「そついや、さっきから見当たらん…」

一同はキョロキョロと辺りを見回す。
すると……

銀時

「あつ！テメーこれは八切りだろ…」

長谷川

「八切りなんてルール知らないぞ！お前今作つたろ」

銀時

「あゝあ、これだからバブル世代は……八切りなんて俺らの世代には常識なんだよ。な、ツラ？」

桂

「ツラじゃ無い桂だ…」

勿論だとも。他にもイレブンバックやスペードの3の効果、七渡し、革命返しなど…」

姫史

「ちよつと待て。何だ七渡しとは？知らんぞ、そんなルール」

銀時

「オメーは田舎出身だからじゃねーの？都会ではこんなもん主流だよ？」

姫史

「誰が田舎出身だ！んな設定勝手に創るな！」

桂

「まったく、なっておらん長谷川殿も姫史殿も。武人たるものに新しい事を取り入れていく覚悟を持たねばなるまい」

長谷川

「いや…武人関係ねーだろ！」

四人はますますヒートアップしていく。

姫史

「面白い！貴様のそのルール、正しいというなら実力で証明してみせよ！」

銀時

「上等じゃねーか…ならこころ八切り、イレブンバック、革命のみを組み込んだルールで勝負だな」

桂

「都会vs田舎vsバブル世代だな」

長谷川

「だから八切り分かんねーって言ってんじゃん！！」

馬鹿四人

「行くぜエエエエ！」

咲夜・新八

「中学生の休み時間かアアアア！！！！」

「またも新八はテーブルをひっくり返し、咲夜はハリセンを叩き込んだ！」

咲夜

「もうお前らはホンマに何やねん！何で大富豪！？しかも一々喋りがイラツとくる！」

新八

「行きますよ！」

馬鹿四人

「へーい……！」

また新八達に引きづられて、皆の所に戻っていった。

*

ナギ

「何か激しく不服だ……こんなマダオが一位とは」

咲夜

「まったくや。ちょっと目を離すとコレやからな……」

銀時

「つーかい加減話進めねーとヤバくね？もう13ページ来てるんだよ？」

千桜

「あ、それなら先程牧村先生から話を聞いてきました」

千桜はヒナギクと頷き合っていると、話し始めた。

千桜

「皆さんも彼等の額にあるNNNという文字を見たと思います。あれは感染病らしいんです」

一同

「感染病!？」

ヒナギク

「名前を【人気投票なんて無くなれ病】略してNNN病だそうよ」

新八

「どんな病気だよ!?!ソレ完全に八つ当たりみたいなものじゃない」

ですか！」

千桜

「触れるだけでたちまち人気投票結果を狂わそうと狂人化するらしい。狂人化すると身体能力が飛躍的に上がり、自我を失うと…」

咲夜

「そんなら、一体ウチらはどうしたらええの？」

すると千桜は何やらバズーカのようなものを取り出した。

千桜

「牧村先生から貰ったこの浄化剤用バズーカを空に打ち上げれば、全て騒ぎは治まるらしい」

銀時

「んじゃ、とつととー」

ドオオオオン！！！！

一同

「!?!」

突如壁をぶち破ってきたのは…

ハヤテ

「幸久君!?!」

幸久だったが……その額には『NNN』とある。

新八

「しまった！？彼もNNN病にかかっている！！」

咲夜

「つまり会場も襲われたちゅー訳か！？」

ワタル

「マズイ！！サキ達が居るのに……！！」

すると、幸久の後ろから続々と仲間達が建物に侵入してきた。

野々原、真司、クラウド……

ハヤテ

「なんて事だ！よりによってこの面子とは……」

長谷川

「狂人化してるんだろ！更にやべーじゃん！！」

千桜

「な！？愛歌さん！」

その横から愛歌が現れた。

愛歌

「まあ、皆さんお揃いで。こんな所にいらしてたんですか」

ナギ

「アレ？愛歌さんは狂人化してないぞ？NNN病にかかってないのか？」

愛歌はいつも通りにニッコリと笑っている。

千桜

「いや、違う！？ノートです！ノートを見て下さい！」

千桜の指差す先には愛歌のノート『ジャプニカ弱点帳』が……

ハヤテ

「ハッ！？表紙にNNNの文字が！」

しかもよく見ると、ノートのタイトルが『ジャプニカ弱点帳』ではなく、『ジャプニカ復讐帳』となっていた。

ナギ

「まさか……ノートが狂人化だと！？」

新八

「いや知らねーよ！！どんなボケ！？」

続いてサキも現れた。

サキ

「アレ？若？」

ワタル

「サキ！何ともないのか？」

サキ

「ええ、皆さんと若達を探しに行こうということですね、こうして来たんですよ?」

ワタル

「……………なるほど、超ド級の天然には感染しないのか」

とにかく狂人化した面々がどんどん迫ってきている。

新八

「銀さん!屋上に行ってください!ここは僕達が食い止めます」

銀時

「新八!?!」

ハヤテ

「この狂人化した面々だとそう長くは持ちません。ですから早く!」

ナギ

「さっさと終わらせて屋敷に帰るぞ銀時」

マリア

「今日のお夕飯の支度もあるので、お願いしますね」

伊澄

「銀時様、ナギ達は私が護りますから大丈夫です」

咲夜

「早く終わらせてな」

神楽

「急ぐアル天パー！」

長谷川

「とびきりデカイの撃ってきな」

姫史

「幼女達の未来は託したぞ」

桂

「俺達に構わずさっさと行け、銀時」

西沢

「何か今まで忘れられてなかった!？」

泉

「上に同じ!」

サキ

「良くわかりませんが頑張ってください!」

千桜

「早くしないと復讐帳に書かれてしまいますよ」

ワタル

「やっぱり締めは銀さんじゃねーとや!」

ヒナギク

「たまには、主役らしい所見せなさいよね」

銀時

「ったく……面倒事押し付けてるだけじゃねーか」

銀時はフツと笑うと、

銀時

「定春！！」

定春

「ワン！」

定春に飛び乗り、一直線に屋上に登っていった。

*

屋上に到達した銀時。

もう周りはNNN病人だらけである。

狂人たちは銀時に触れようとして……

銀時

「沢山の投票ありがとうございましたアアア。まだまだこれからも銀魂のごとくを……」

銀時は引金に手をかける。

銀時

「よろしくお願いしまアアアアアアアアアアす……!!」

ドン!

銀時

「テメーらアアアアア!!目エ覚ましやがれエエエエ!!」

銀時の放った弾は空高く撃ち上がった。

ドオオオオオオオオン!!!!!!

こうして、NNN病の危機は去った。

その日、町中の人間がまったく記憶の無い所にいるという事態が
あちこちで生じたという。

因みに、銀時達はパーティー会場には戻らず、それぞれがいつも通
り過ごしたそうなの……

めでたしめでたし……ってアレ？昔話？

〈結果発表まとめ〉

1位・銀時？	91票
2位・ヒナギク？	46票
3位・ハヤテ？	24票
4位・千桜？	21票
5位・新八？	18票
6位・マリア？	17票
7位・神楽？	15票
8位・伊澄？	13票

9位	・ナギ?	1票
10位	・ヅラ?	1票
11位	・泉	10票
12位	・歩	8票
13位	・姫史	7票
14位	・マダオ	6票
15位	・真司	6票
16位	・幸久	6票
17位	・クラウス	5票
18位	・愛歌	4票
19位	・咲夜	2票
20位	・パイナップル	2票
21位	・ゴキブリ	2票
22位	・定春	1票
23位	・ウタル	1票
24位	・野々原	1票
25位	・雪路	1票

本当に沢山の投票ありがとうございました！
 いずれ第二回人気投票も開催したいと思います。

では、特別訓はこの辺でお開きという事で……

特別訓 とかく世の中は番付をしたがるもの(後書き)

伽藍

「第1回キャラクター地味ランキングウウウウ!!!」

銀時

「は？なに言ってるの？お前」

伽藍

「前に感想にあったでしょ？地味ランキングをやったらどうなる？
って」

銀時

「ああ、あつたなあそんな質問」

伽藍

「という事で地味ランキングを私の独断と偏見のみで作ってみまし
た。1位〜10位まであります」

銀時

「つーか何においての地味？出番とかそついう問題？」

伽藍

「まあ、でも出番存在だからね……」

銀時

「よく分かんねーけど、取り敢えず見てみっか」

伽藍

「では、どうぞー！」

1位・ジャスタウェイ工場の工場長

2位・一般生徒1〜30

3位・西沢一樹

4位・三千院家SP

5位・西沢歩

6位・志村新八

7位・ゴキブリー

8位・パイナップル

9位・居酒屋の親父

10位・鷺ノ宮家SP

伽藍

「こんな感じでーす」

新八

「ってオイイイイイイ！何だコレ、完全におかしいだろコレ！」

歩

「私達以外名前も無い人達じゃない！しかも順位だけリアルだし！」

一樹

「完全に嫌がらせでしょ！そんなに僕達は地味かアアアアア！！」

銀時

「いやいや、これは納得の順位だ……よく出来てるなアオイ」

伽藍

「という訳で第一回キャラクター地味ランキングはこんな感じでした」

新八・歩・一樹

「ちよつと待てエエエエ！」

銀時

「んじゃ、次回は【執事クエスト】篇だ」

伽藍

「よろしくお願いします！」

新八・歩・一樹

「いやだから」

プツン……

第五十訓 パーティー編成は冒険の要（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「執事クエスト篇が遂に始まります！」

伽藍

「内容は一新していますので、原作より長く、またメンバーも大分違ってくると思います！」

クエスト自体もかなり変えているので、オリジナルとってくれた方が良くもありませんが、ご了承下さい！」

ハヤテ

「では、始まります！」

第五十訓 パーティー編成は冒険の要

灰色……

薄暗く不気味で虚無感しか生むことは無いだろう灰色が、空一面を覆っている……

その空の下……

荒れ果ては地には……

至るところに死体の山……

数えきれない程の無惨な屍が無造作に転がっている……

首がひしゃげ、手足が吹き飛び、血が大地に散乱している。

その地面に突き刺さるのは屍の数以上に刀……血塗られた刀……

まさしくそこには戦場という地獄が広がっていた……

そんな地獄の中で、背中合わせに膝をついている男が二人。

一人は深緑の着物に胸当てをした長髪の男。

もう一人はいくらか返り血を浴びた白い着物を羽織った銀髪の男。

そんな二人の周りを圧倒的な数の異様な集団が囲んでいる。牛のような頭をしているモノ、虎のような頭をしているモノ……

人間ではない化物らは二人の仲間では無い事は明白。明らかに二人が敵として囲まれている。

絶対絶命の状況である……

「……これまでか」

長髪の男は諦めたように肩を落とす。

「敵の手にかかるより、最期は武士らしく、潔く腹を斬ろう」

長髪の男は刀を横に寝かせようとするが、

「馬鹿言っでんじゃねーよ、立て」

それを遮るように、銀髪の男が立ち上がる。

「美しく最期を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか」

長髪の男は銀髪の男の背中を驚いたように見ると、微笑して立ち上がった。

二人は背中合わせのまま、刀を構えて周りに対峙する……

「行くぜ……ツラ」

「ツラじゃない……桂だ!!」

ダッ!

「おオオオオオオオオ!!」

二人は地面を蹴り、敵に飛びかかってゆく!

銀髪の男……

次々に襲いかかる化物達の攻撃を弾き返しては、凧ぎ払い、叩き斬る!

その強さは夜叉おにの如く……

銀色の髪に血を浴び、真っ白な羽織で戦場を刈る……

その姿は、例えて言うならば……

“ 白夜叉 ”

.....

「.....!!」

深い眠りから綾崎ハヤテは目を覚ました。

「.....夢、か.....」

ハヤテの脳裏によぎるのは先程の夢の光景。

(あの二人.....銀さんと桂さん.....なのかな.....でも.....アレは.....あの光景は.....)

ハヤテは少し震えた指先で頭を押さえると.....

「.....あ、お嬢様?」

今置かれた状況に気が付いた。

隣には何故か真っ赤になって椅子に座るナギの姿。

前には二人を見ているシスターの姿。

そう。ここはアレキサンマルコ教会である。

執事虎の穴も一応やっているこの教会で、ハヤテは三千院家執事の
仕事に復帰するべく再教育を受けている訳だ。

前に立っているのがシスター・フォルテシアというこの教会のシス
ターらしい女性である。

「どうかしたんですか？お嬢様？」

「な…、何でもない／＼／」

まあ、詳しい虎の穴の試練内容はコミックスの6巻参照。

「それより、執事虎の穴の試練はどうしたのだ！あんな執事実習な
どいくらやっても仕方あるまい！／＼／」

「確かに…：…では、最終試練『執事クエスト』に挑戦して貰いまし
ようか！」

「し、執事クエスト…：…？」

シスターの言葉に息を呑むハヤテ。

アレキサンマルコ教会の最終試練『執事クエスト』とは！？

RPGゲームが好きなアレキサンマルコ教会の神父が世界各国を回って、何処からか“魔法の鏡”を貰ってきて、その魔法の鏡に毎日ドラクエやウィザー リーのような冒険がしたいと祈り続けた結果、鏡が何処かの異世界に通ずるようになってしまった。その後神父は行方不明。

その鏡の中の世界を舞台に拐われたお姫様を魔王から救い出すという試練……それが執事クエストである！！

「これはもしかして……パーティーを編成して、様々な苦難を乗り越え、魔王の城を目指して冒険するという例の……」

「素晴らしい理解力です」

ハヤテの言葉にシスターは頷く。

「いや……つーかまずその魔法の鏡の存在を突っ込めよ？」

「原作より何か色々サプライズがあった方が良いでしょう？」

ナギは呆れ半分に言うナギに冷静に答えるシスター。

「しかしなるほど……大胆不敵、電光石火……勝利は私のためにある大冒険か……」

「お嬢様？」

「なんだかよく分からねえが……
オラアワクワクしてきたぞー」

「つて、お嬢様も行く気ですか!？」

ナギの目は好奇心と期待で爛々と輝いている。

「無論、冒険と聞いてはこのドラゴンスレイヤー……三千院ナギが
いかない訳にはいかんだろう!」

「はぁ……」

【三千院ナギ】

クラス：ポンコツ剣士

HP：3

MP：0

知力：254

腕力：1

守備力：1

敏捷性：1

GOLD：

ニート：

武器 財力

「ほほう……そうかそうか、私はスペンカー並か？段差から落ちただけで死ぬとでも言いたいのか、お前は？」

「ぼ……僕は別に何も……」

ナギに迫られてたじろぐハヤテ。

「まあいい！！とにかく私以外の勇者を早く見つけ、囚われの姫を救い出すぞ！！」

「いや……まあ、ハイ」

ハヤテとナギはパーティー編成の為に、教会を後にした。

「……………!!」

静かな生徒会室で、ヒナギクは驚いたように目を覚ました。
最近マラソン大会の運営の仕事も忙しく、ソファで少しうたた寝を
していたのだった。

「……………夢、か……」
ヒナギクもまた、ハヤテと同じように“あの光景”を夢に見ていた
のだ。

(アレ……………銀時よね……もう一人は桂さんみたいだったけれど……………今
の、ただの夢なのかしら)

ゆっくりと体を起こして、座り直す。

(あの光景……アレがもしかして、桂さんが言っていた攘夷戦争……?)

脳裏に浮かぶのはおぞましい戦場の様子。

(もし、そうだとしたら……)

銀時はあんな景色をずっと……見てきたって事……?

あんなに辛い景色を……ずっと……)

ボタン……

「!?!」

急に開かれた扉の音にヒナギクは驚いて振り返る。

「ヒナ、理事長代理が呼んでいましたよ?」

「ああ……ハル子か」

「……?」

理由もなく安堵すると、立ち上がって自分のデスクに移動する。

「……ゴメン、もう一回。なんだったっけ?」

「理事長代理がヒナを呼んでました。理由はよくわかりませんが……」

「理事長代理、ね……」

ヒナギクはため息をつくど、机の上に置かれた書類を脇に寄せて席を立つ。

「じゃあ、ちょっと私行ってくるから、その間お願いね？」

「了解」

ヒナギクはそのまま生徒会室を出ていった。

「ヒナ………どうかしたのかな………？」

少し様子が変わったヒナギクに疑問を抱く千桜であった。

*

「……で、どんな人を仲間にしましょうか？」

「そりゃ、強い奴だろ」

ハヤテとナギは宛もなく商店街に来ていた。

無論、パーティー編成の為である。

「うーん……銀さんは昨日から帰ってないそうですし、新八君達も万事屋にいませんでしたからね……」

「ふむ……取り敢えずハヤテと私で前衛が固まったからな。後方支援の役が必要だな」

（確かにお嬢様はパーティーとしては役に立たない……ここは誰が頼りになる人に仲間になってもらわなくては……！！）
ナギの能天気な意見にハヤテは苦惱していると、

「あれ？ハヤテ君、ナギちゃん？」

「あ、西沢さん」

歩がちよつと直ぐ向かいの店から出てきた。

「ナギちゃんも外にいるなんて珍しいね」

「人を引きこもりみたいに言っな！」

「……違つたんですか？」

苦笑しながらナギを見るハヤテ。

「でも、どうかしたの？」

「え〜と……実は、ですね〜」

ハヤテは少し迷つたが、結局話してしまう事にした。

「……という訳で、今頼りになる仲間を探しているんですよ」

「な、なるほど……」

にわかには信じられない話だったが、基本的にこの小説は何でもありなので納得する事にした歩。

「それで西沢さん、誰か頼りになる人紹介〜」

（ん？待てよ……）

ふと歩は思考を始める。

（ハヤテ君と冒険 危険を伴う 「キヤー」とかいつて抱き付いたりしてもOK！ 仲が深まるチャンス！！ もしやそこで愛が芽生える！？）

ここまでの考察が凡そ0.1秒：

「ーって、あの〜西沢さん？」

「ハヤテ君！」

「は、ハイ！？」

歩はハヤテにグツと身を乗り出す。

「私って意外と頼りになるような気がするかもしれないかな！？」

「はい？」

「……………」

歩の言葉に首を傾げる。

「私頼りになるような気がしないかな！？かな！？」

「……………」

「じ〜……………」

「……………」

半ば呆れた顔を見合わせるハヤテとナギ。

「え、え〜と……では仲間になってもらえますか？（棒読み）」

「まあ、ハヤテ君が困っているなら喜んで協力するよ！」ガッツポーズを決める歩。

「お前……足を引っ張るだけになるぞ？」

（いや……お嬢様ですよ……）

二人にかなり困ったようなハヤテ。

「私は練馬のソルジャークラス1stって呼ばれているのよ。大丈夫大丈夫！！」

「誰が呼んでいるのだ……？」

まあ、取り敢えず一人目が仲間になった。

【西沢歩】

クラス：練馬のソルジャークラス1st

HP：13

MP：3

知力：32

腕力：15

守備力：15

敏捷性：55

地味力：254

武器 特に無し

〔白皇学園〕

(マズイ……マズイぞ……)

白皇学園に赴いたハヤテは困っていた。

(お嬢様も西沢さんもクエストとしてはハッキリ言って役に立たない……こんなパーティーではアリアンから出ても即全滅は必至……とにかく一人くらいは頼りになる人が必要だ)

ハヤテは一頻り考えをまとめると足を止める。

「お嬢様達はここで待っていて下さい」

「あ、うん……」

ナギと歩を置いて、ハヤテは生徒会室のある時計塔ガーデニングタワーに向かっていった。

僅かな希望を胸に……

*

「ヒナなら、今留守にしているよ?」

「グハツ……!!」

冒険者の僅かな希望は潰えた!

生徒会室に入ると、千桜が一人で読者をしている所であった。

「急ぎの用件なら私から伝えておこうか?」

「あ、でしたら……」

ハヤテはメモを取り出すと、簡単にペンを走らせた。

内容はアレキサンマルコ教会のクエストに出来たら協力してほしい、以下略。

そのメモを千桜に渡すと、ハヤテは生徒会室を後にした。

*

「さて……どうしましょうか……」

「「うーん……」」

ハヤテ一行は白皇学園を出て、仲間探しを続行していた。

「やっぱり、力の強い人が良いんじゃないかな？」

「うむ。でもパーティーを組む以上は多少なりとも気心の知れた奴が良いな」

「確かにそうですね……」

そんな話をしながらフラフラと歩いてゆく。

しかし、角を曲がると聞き慣れた声が聞こえてきた。

「本当に銀ちゃん何処に行ったアルか」

「銀さんの事だから、何処かで飲み潰れているんじゃない？」

神楽と新八が向かいから歩いてきたのだ。

「あ、ハヤテアル」

「あれ？本当だ……ナギちゃん達まで……どうかしたんですか？」

・二人とも取り敢えず強い

・気心もしている

・常識もある？

（ようやく来たアアアア！！この二人なら！！）

ハヤテは心の中でガッツポーズを作ると、早速二人に事情を話した。

「……そうだったんだ。虎の穴の試練がそんな凄まじい状況になっていたなんて……」

話を聞いた新八は中々笑えない状況に同情する。

「それなら任せるヨロシ！」

冒険ならこの閃光の騎士カグーラ「ジャスアントがお供するアル！」

「本当ですか!？」

「そうだね。困った時はお互い様だから。僕も協力するよ」

自信満々に胸を叩く神楽と頷く新八がどんなに頼もしく今のハヤテに見えた事か…

「よし！これで選ばれし勇者は揃ったな」

「ハイ、ではアレキサンマルコ協会に向かいきましょうか」

一行はまだ見ぬ冒険に向けて、足を進めた。

【神楽】

クラス：スーパーモンク

HP：630

MP：1200

腕力：999

知力：3

守備力：150

敏捷性：160

破壊度：254

武器 傘（チャージショット可）

【志村新八】

クラス：ダメガネ

HP：250

MP：知らねーよ

腕力：100

知力：90

守備力：70

敏捷性：80

地味力：252

メガネ：254

武器 普通の竹刀

メガネ（本体）

【綾崎ハヤテ】

クラス：借金野郎

HP：480

MP：150

腕力：150

知力：120

守備力：254

敏捷性：254

不幸：9999

借金：1億5000万

武器 身体能力

「アレキサンマルコ教会」

ハヤテ一行は教会に到着すると、シスターに地下に案内された。

「ーでは、この鏡に入れて下さい」

五人の目の前には大きな鏡。

「……え？あの……本当に入るんですか？」

「っーか入れるのか？」

やっぱりあり得ない状況なだけに、不安を隠せないハヤテ達。

「大丈夫です。私がいうのですからご安心下さい」

「だからこそ不安なんです……」

渋々ハヤテは鏡に触れると、

「うわっ！？手が……」

ハヤテの手がなんと鏡に入りこんでしまったのだ！

「嘘オオオオ！？だ、大丈夫なのハヤテ君！？」

「うおおおお！！凄いアルハヤテ！」

ハヤテは勿論周りも驚いている事は言うまでもない。

「キヤツホオオオオ！！私も入るネ！」

神楽は鏡に向かって突っ込んでいくと……

「つて、神楽さん！？」

「神楽ア！！」

「本当に入っちゃった！？」

「あわわわわ？」

神楽が丸々鏡の中に消えていった……

「……………取り敢えず、行きましょー!」

ハヤテの言葉に三人も頷くと、一斉に鏡に飛び込んでいった。

「……………フフツ、地獄へと誘われる勇者達にせめてもの手向けを」

シスターは怪しく笑うと、彼女も鏡の中に入った。

〈鷲ノ宮家〉

「教会の悪霊ですか?」

「はい……………地下の魔法の鏡に引き寄せられているので、上の教会も使用出来ず……………」

鷺ノ宮伊澄は悪霊を退散して欲しいという依頼を受けていた。

伊澄の真向かいに座っているのはシスターの格好をしたおばあさん。

「まあ、どの程度お力になれるかわかりませんが、やってみましよう」

「おお…！ありがたい…！」

シスターのおばあさんは伊澄の返事に感激したように声をあげる。

「いえ……礼には及びませんよ…シスター・フォルテシア」

*

「イチゴ大福だア？大福は古来から餅と餡子だけと決まっている！
！イチゴなどは邪道じゃ！」

「そうやって何でもかんでも昔ありきになる考えはもう古いんだよ…
…本当に大福の事を想ってんなら、新しい風にも乗れなきゃダメだ。
時代は移り変わるんだよ、ババア」

「お主のようにフラフラと生きてるダメ人間に言われとうないわ。
頭までクルクルのくせして！」

「オイ、それどういう意味だア！！オメーに天然パーマの苦しみが分かるのかコノヤローオ！！」

縁側では銀時と銀華が大福を片手にしょうもない争いを繰り広げていた。

ガラ…

「ん？」

二人が取っ組み合いを始めようとした時、伊澄が部屋から出てきた。

「伊澄、依頼はどうだった？」

「ハイ、一応お請けしました」

無論、教会の悪霊の件である。

「そうか。じゃあ銀パー、伊澄の事を頼んだぞ？」

「了解しましたよ、っと…」

銀時は縁側から立ち上がった。

実は彼は銀華から伊澄に協力してやってくれという依頼を受けていた。

それは、今から三時間くらい前に遡る……

.....

銀時は広平達の依頼が終わって、練馬区に戻る頃には朝になっていた。

何か屋敷に帰るのもアレなんでどうしようかと考えていたら、絶賛迷子中の伊澄を見つけたので、鷺ノ宮家に届けた時、ちょうど依頼が入っているらしいという事だったのだ。

「という訳で伊澄に協力してやってくれ」

「ん？誰だっけお宅？」

「殺すぞ若白髪……」

鷺ノ宮家のある縁側で銀時がのんびりしていると、銀華が話しかけてきた。

伊澄は依頼主と電話をしている。

「別にそれは構わねえけどよオ……アイツ結構頑固だからなア」

「報酬は弾むがな……」

銀華はそう言うと、一個の発泡スチロールを銀時の前に置いた。

「おま、これは……!?!」

「この前のお礼に貰ってな……」

中身は蟹だった。しかも超高級の毛ガニである。

「仕方ねえな……まあそこまで伊澄が心配なら引き受けてやるよ」

……

とまあ、こんな感じである。

「もう……大おば様は心配し過ぎです」

「お前が今まで目的地にしっかりと辿り着いた事があったか?」

伊澄を見てため息をつく銀華。

「……では、行きましようか銀時様」

((誤魔化したな……))

伊澄はコホンと咳払いをする。

「で……？今回は一体どんな依頼なんだ？」

「教会にある魔法の鏡を破壊するのですが……」

「は？」

伊澄の言葉に意味不明だという表情をする銀時。

「教会に行く前に、集めなければいけません。選ばれし勇者達を……」

「は……？」

まあ、そんな訳で、

虎の穴最終試練『執事クエスト』が始まった……

第五十訓 パーティー編成は冒険の要（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「え〜と、最初の質問な。『あの後組織はどうなった？』

ハイ、ズバリ答えます！

小説の設定では、実は組織自体は慶次達をそんなに捜している訳では無いんです。あの金髪の野郎（部下40数人）が個人的な私怨も絡んで、独断で捜し回ってたという事になってます。まあ、一応生きてるんじゃないですかね。もう関わってくる事も無いと思います
が……」

銀八

「じゃあ、続いての質問。『ハヤテ並びにハヤテのごとく男性陣に質問。屁怒紹ファミリーと銭湯で一緒になったら何分いられる？』」

ハヤテ

「屁怒紹さんファミリーですか？」

銀八

「まあ、こんな感じだ」

銀八は先々週号のジャンプを男性陣に見せた。

ハヤテ

「1秒でお願いします！」

ワタル

「俺も1秒で……」

東宮

「……………（ 気絶 ）」

野々原

「これはまた……………ですが坊っちゃんの修行の為なら何分でも……………いや時間は無理です？」

氷室

「お金さえ貰えれば何時間でも」

大河

「無理だよ……………」

薫

「別に俺は平気だぞ？」

姫史

「男等とは入りたくもないな…幼女なら大歓迎だ」

真司

「我も別に平気じゃ。妖魔にもっと恐ろしいものが沢山いるしの」

幸久

「……………修行なら……………我慢しよう」

銀八

「続いての質問な。『ハヤテ組に質問。誰か宇治銀時井食べられる？』」

「そついやこつち来てから食ってねーな、宇治銀時井。久しぶりに食べるか」

すると、銀八の前に宇治銀時井が現れた。

後書きの都合上、何故現れたからスルーで。

ナギ

「……先生、何だそれは？」

銀八

「宇治銀時井だ。食うか？」

ナギ

「食べ物じゃないだろ……」

ヒナギク

「見ているだけで、気分が悪くなるわね」

ハヤテ

「遠慮します……」

銀八

「オメーら……これはなア、昔ご飯とデザートを別々に食べるのが面倒だったサンドウィッチ將軍が作った由緒ある食べ物なんだよ」
マリア

「居ませんよ……そんな將軍」

銀八

「次の質問だな。『リリカルなのはhunters（略）』のフアラク・レアスさんからの質問。広平から小物入れを買わせてもらった銀時。あれに何をいれるんだ？カロリー イトか？ポ キーか？それとも新八（本体のメガネ）・・・いや、ないか。何入れる？」

あと広平、銀時が買った小物入れはいくらだ？
ハイ、ズバリ答えましょう！

銀さんは小物入れ（あれ）にはヘソク……ごほん！お菓子とか大切なものをいれています。因みに値段は……」

広平

「サイズは三種類ありますが、小は500円、中は700円、大は1000円です。質は保証するので是非皆さん買って下さい！小物入れの他にも色々作ってますよ。」

銀八

「…だそうだ。では次の質問な。『幻想郷の星空』の主人公、大和将君からの質問。銀さんに質問。もし天パーが治る薬があったらいくら出す？」

ハイ、ズバリ答えます！

いくらでも出すに決まってるだろオオオオオオオオ！何なら新八の命と引き替えでも問題無い！」

新八

「あるに決まってるでしょ！何で僕が銀さんの頭の為に死なないといけないんですか！？」

銀八

「ハイ、続いての質問な。『ワタルに質問。銀さんの事をどう思う?』」

ワタル

「普段はギターラだけど、締める時は締める、男の中の男だな。俺もあのくらい強くなりたいと思う」

神楽

「買いかぶり過ぎアルよ。銀ちゃんはダメダメなプー太郎ネ」

ナギ

「ま、ワタルはもっとヘタレだけどな」

ワタル

「お前に言われたくねーよ、引きこもり」

ナギ

「何だとオオオオ!?!」

銀八

「んじゃ、最後の質問な。『銀さんと新八に質問。ぶっちゃんけマリアさんは何歳に見える?』」

……オイ、作者。お前これ伏せ字にしるよ?」

伽藍

「了解」

銀八

「まあ、歳だな。新八は?」

新八

「あ、僕も確かにそのくらいですか……!?!?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

銀八

「オイ、新八。お前なに言っただよ……マリアは17歳に決まっ
てんだろ？」

新八

「ハハハハハ!で、ですよね」

しかし、無常にも二人の肩に手が置かれる。

マリア

「先生?新八君?少しお話ししませんか……?」

銀八・新八

「ハハ、ハハハハハ……」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

マリア

「それで、質問の答えですが……」

銀八・新八

「17歳です!!断固17歳です!!」

ハヤテ

「……………という事らしいですね?」

ナギ

「では、また次回なのだ!」

第五十一訓

冒険って聞くと無性にワクワクしていた少年時代を思い出す(前)

クラウドの前書きの館！

クラウド

「今日は特にありませんな」

ハヤテ

「上に同じです」

伽藍

「更に上に同じです」

クラウド・ハヤテ・伽藍

「では、始まります！」

第五十一訓 冒険って聞くと無性にワクワクしていた少年時代を思い出す

「集めなければいけません。選ばれし勇者達を……」

「は……？」

「私達が今から行く場所は大変危険な場所になるでしょう。ですから……最初のパーティー編成がこの依頼の要となります」

「……………」

鷲ノ宮家歴代最強の巫女、鷲ノ宮伊澄と毛ガニを獲得すべく立ち上がった侍、坂田銀時の冒険はこうして幕を開けた。

第五十一訓 冒険って聞くと無性にワクワクしていた少年時代を
思い出す

「つまり……その“なんちゃらの鏡”の中に入って、中に潜む妖魔の根源を無くすって事だな」

「簡潔に言つとそうなります」

銀時と伊澄は鷲ノ宮家を出発し、パーティー編成の為に選ばれし勇者を探そうとしていた。

「んじゃ、俺ア帰るわ……後は頑張れ。あ、ハリーポッターに会ったらサイン貰つといて」

銀時はヒラヒラと手を振ると屋敷の方向に歩きだした。

ガシッ…

「？」

しかし、服の袖を伊澄に掴まれる。

「信じられない話かもしれませんが…私も少なからずその気配を感じていますから」

「分かってるって、信じてる信じてる……でも俺この後アレ、重要な用事のアレがあるような無いような感じだから……」

じ
……

「……」

伊澄は真っ直ぐ銀時を見上げてくる。

じ
……

「……」

じ
……

「……」

ただ真っ直ぐに銀時を見つめてくる。曇りなき眼で……

「……分アったよ、上等だア。」

鏡の中でもクエストでも何でもしてやらア……」

銀時はため息をつく、伊澄に向かい合う。

「んで……？具体的にどうすんだよ」

「パーティー編成には何よりバランスが大切です」

「バランスねえ……」

銀時は腕を組んで考える。

「まあ、そうだな……俺とオメーのバランスから考えて……」

「……？」

「……そうだ。取り敢えず一人は決まったな」

銀時は思いついたように手をポンと叩く。

「銀時様……？」

「ま、取り敢えず任せときな。

長年RPGをやってきた俺にかかればパーティー編成なんてお手のもんだ」

二人はそう言って歩きだした。

【坂田銀時】

クラス：ダメ侍

HP：高いじゃね？

MP：あれば魔法とか使えんの？腕力：大人になってから握力測っ

てねーや

知力：人生色々あんだよコノヤロー

守備力：驚異的な回復力

敏捷性：明日へ羽ばたく翼が欲しい

甘党：9999

血糖値：ドクターストップ

武器 洞爺湖

【鷺ノ宮伊澄】

クラス：巫女

HP：100

MP：600

腕力：40

知力：250

守備力：50

敏捷性：40

天然：254

迷子：9999

武器 式術符

〈澳門家〉

「……で？何故我の所に来たんじゃ？」

銀時と伊澄は他でも無い澳門家にやって来ていた。
無論、仲間集めの為である。

「……っーか、何やってんの？お前の家来達？」

「何って……醤油作りに決まっておろう。ここは他でも無い、澳門
印の醤油の製造場じゃ」

銀時達の視線の先にはせつせと働く真司の家臣達。その目は輝きに
満ちていて、とても楽しそうに醤油作りに勤しんでいる。

「オメーらそっち本業にしたら？」

「まあ、それは良いとして、今日はどんな用件じゃ？」

「ああ……伊澄、頼む」

伊澄は頷くと、真司に事情を話した。

「……なるほどな。事情は大体分かったが……何故我なんじゃ？」
真司は不思議そうに首を傾げる。

「何言ってるんだオメー、RPGにおいてパーティーメンバーのバランスは必須だろ？」

「いや……RPGじゃ無いだろう」

「んで、ベストメンバーだったら前衛二人、後衛二人。これが古来より幾度と無く勇者一行を救ってきた黄金比なんだよ」

「まあ、言わんとする事は分かるがの……」

真司は扇子を広げて顔を半分隠す。

「しかしなあ……澳門家の当主がそう易々と家を開ける訳にも
……」

真司は当主不在の澳門家が心配だと渋っている。

「そうか。まあ、それだったら仕方ねえな。ただよオ、こんな話知
つてつか？」

「……？」

「アレクサン何とか教会の鏡の中世界には“伝説の醤油”ツーのが

存在するらしい」

「な、何!？」

「ぎ、銀時様…?」

真司も伊澄も驚いたように銀時を見る。

「アレだ…世界の全てを手に入れた魔王の城にあるって噂だよ、何か…」

「……伝説の醤油」

真司は動揺を隠せず視線を宙にさまよわせる。

「……分かった」

「真司様？」

「二人も困っているのじゃろう。協力はしよう」

真司はフツと微笑すると、立ち上がる。

「準備をしてくる。外で待っておれ」

そう言って、部屋を出ていった。

(銀時様……大丈夫なんですか?)

(ま、何とかなんだろ…)

(……………)

一抹の不安を覚える伊澄であった。

【澳門真司】

クラス：式術師

HP：120

MP：580

腕力：70

知力：190

守備力：50

敏捷性：50

詠唱力：250

シヨウラー：9999

武器 式術符

式神符

*

「待たせたの……」

銀時と伊澄が門の外で待っていると、真司がやって来た。

「よし、これで三人は集まったな」

「しかし、お主の話だとあと一人は必要になるんじゃない？」

「ああ、戦いの為に生まれてきたような前衛が必要だな」

「宛てでもあるのですか？」

二人は銀時を見る。

「ま、そのアレクサン何とか教会に向かいながら考えるところか」

（行き当たりばったりだ……）

更に不安になる一行であった。

「鏡の世界？」

「……………ん？」

ハヤテはうつすらと目を開ける。

「ここは……、!?」

周りに広がるのは煉瓦作りの建物。オランダの町並みを思わせる建築物の中には『INN』と書いてある建物や刀と盾のマークの書いている建物などもある。

「……………え？嘘……………え？これが鏡の世界？」

ハヤテはゆっくりと起き上がると足元には神楽達も寝転がっていた。

「み、皆さん……………起きて下さい！大変ですよ！」

「う、うーん……………」

神楽達も次々と目を覚まして起き上がる。

「……………アレ？私達寝てたアルか？」

「みたいだな……………ふわぁ〜」

「私達道で寝てたんだ……………」

「何でこんな所に……………っていつか……………」

「……………ここ何処だアアアアアアアアアアアア!?」

一同の叫びは町に響き渡った……………

*

「……つまり、ここはあの鏡の中なのかな？」

「みたいですね……少なくとも練馬区にこんな場所はありませんから」

五人はただ驚いたように町の様子をただ見渡す。

町は活気があり様々な人が行き交っている。

「いや…町って…？」

「つか何で鏡の中に武器屋があるの！？何で宿屋があるの！？何でこんなに人がいるの!？」

新八達は最早混乱状態である。

「アレ、何アルか？」

「え？」

神楽が指差す先には、大きな広場に大きな噴水。噴水の前には木で出来た看板が立ててある。

ハヤテ達はその噴水に近づいていく。

看板には『リベアリア』と書いてあった。

「リベアリア……この町の名前でしょうか」

「だとしたら……この広場が町の中心か」

ハヤテとナギは考え込むように腕を組む。

一方神楽と歩は町の様子を興味深く見回している。気のせいかその目は輝いている。

「うおおおお！！凄いアル！

RPGの世界に入ったみたいネ！」

「本当だ〜！！何か海外旅行に来たみたいだね〜」

「いや……二人ともそんな場合じゃ無いでしょ」

能天気な二人に呆れたように新八が突っ込む。

すると、ハヤテが声を上げた。

「……皆さん！ちょっと来て下さいー！」

一同はハヤテの元に集まってくる。

「どうしたのハヤテ君？」

「この看板によると、どうやらこの町は『リベアリア』という城下町だそうですね」

「城下町……って事は、お城があるの？」

新八はハヤテに尋ねる。

「うん、どうやらこの広場から北に真っ直ぐ行くと“リベアリア城”というお城があるみたいだね」

ハヤテの指差す先には僅かながら城の先端が見える。

「そういえば、お姫様を救うのがクエストの内容だったアルな」

「うむ、だったらまずその城に行ってみるのだ！」

「そうですね、お嬢様！」

「行こう、ナギちゃん」

「って事は王様に会うのか……」

張り切って宣言するナギに神楽、ハヤテ、歩も続く。新八は王様謁見に緊張する。

こうして、まず最初にハヤテ一行はリベアリア城に向かう事になった。

「……………その前に、町を見て回らないか？」

「お城に行った後ですよ、お嬢様」

*

くリベアリア城く

ハヤテ一行の事は城の人間伝わっているらしく、直ぐに王様の謁見を許された。
どうやらハヤテ一行は勇者達として、王様に呼ばれているという設定らしかった。

「おお、そなた方が勇者一行であるか。わざわざこの城に来てくれた事に感謝しよう」

リベアリア王の姿は、赤いマントに金色の王冠、立派な髭と絵にかいたような王様だった。

「王様、僕達がここに呼ばれた理由を教えてくださいませんか？」

一行を代表してハヤテが王様に尋ねる。

「うむ。我がリベアリアを含め周りの国は平和を尊重する国々であるが故に長い事争いも無く平和であった。

しかし、近年太古の昔に封印されたとされる魔王が復活したのじゃ。悲しき事に長きに渡る平和が逆に国力を弱らせたのか、リベアリアの周りの国々はことごとく破り去り滅亡……

果てはこのリベアリアにまで攻めてきて、我が娘が連れ拐われた。

彼女は我が娘としては勿論だが、このリベアリアを支える聖女なのじゃ。彼女がこの国を支えてきたと言っても良い。

だからそなた達には我が娘を救い出して欲しい」

「なるほど……その姫様は一体何処に？」

「このリベアリアを出て北西に大きな黒い城がある。それが魔王城じゃ。そこに囚われている」

王様はそこまで言い終えると、フツと息をつく。

「分かりました。では……」

「しかし、魔王城に行くには盗賊が潜むという洞窟を抜けなくてはならん。この洞窟は非常に危険とされ、我が軍ではもうどうにもならんのだ」

王様の言葉に息を呑むハヤテ達。特にハヤテと新八はアイコンタクトで会話をする。

(非常に危険な場所…このパーティーで抜ける事が出来るのかな?)

(うーん……確かに。ナギちゃんや西沢さんは戦う事が出来ないからね……)

不安な二人の様子を拭つかのような言葉を王様は口にする。

「そなた達のせめてもの旅の助けに、我が国最強の兵士を一人同行させよう」

「ほ、本当ですか!?!」

「うむ……入って参れ」

王様が扉を見ると、ゆっくりと扉が開かれて一人の男が入ってきた。

「リベアリア最強の男……“マダオ”こと長谷川泰三じゃ」

「……え?」

ダンボールを身に纏った長谷川が現れた。

……

「って長谷川さんんん!?!」

「アンタ何やってんのオオオオオオオ!?!」

ハヤテと新八は勿論、ナギ達も啞然の表情である。

「彼はリベアリアで“毎日ダンボールの男”略してマダオと呼ばれる男。彼の前には人も避ける程の実力の持ち主じゃ」

「それただ嫌がれてるだけだろオオオオ！！コレのどこがリベアリア最強の男なんだよ！？

「…か何でこんな所に居るんですか！？」

新八は猛然と突っ込むが長谷川はダンボールに入ったままずっと虚空を見つめている。

その長谷川の後ろの柱には冠を被った男が泣いている…

「何で長谷川さんの後ろで王子らしき人物が泣いているんだよ！？

コレ、長谷川さん王子に拾われてんじゃん！！

お前完全に王子が拾ってきた不審者を押し付けようとしているだろ
うがー！！」

「最低アル！お前それでも王様アルか！？」

しかし王様は聞こえないのか、真っ直ぐ前しか見ていない。

「では、彼を連れてゆくが良い」

「ダメだよ…この王様完全に押し付ける気だよ。ゲームみたいにテキスト通りに棒読みしてやがるよ…」

「では、勇者一行よ、幸運を祈るぞ」

「……………」

一同は完全に呆れかえって無言のまま城を出る事になった。

「何てこつた……………もうメチャクチャだ……………」

「ハハハ……………」

「ま、まあ安心しろ！このドラゴンスレイヤーナギと」

「閃光の騎士カグーラ」ジャスアントがいれば百人力ネ！」

呆然とするハヤテと新八を余所にナギ達は意外と樂觀的だった。

ハヤテ一行はこの先どうなってしまうのか……………

【長谷川泰三】

クラス：マダオ

HP：知らねーよ

MP：欲しいよ……………

腕力：あるかな？

知力：生きる術

守備力：打たれ強い

敏捷性：翼の折れたおっさん

マダオ：9999

武器 宿用ダンボール

くアレキサンマルコ教会前く

「結局このまま教会に来ちゃいましたね…」

「全くダメじゃな…」

「オイ、何だその目は……」

仕方ねーだろ？世の中なんてなア、上手くない事だらけなんだよ」

二人の視線に頭を掻きながら答える銀時。

「しかし……どうするんじゃ？このままで挑むのか？」

「つつてもなア……」

三人は困ったように顔を見合わせる。

「アレ、銀時……？」

「ん？」

銀時が振り返ると、そこにはヒナギクが立っていた。

「おお！ちょうど良いじゃねーか」

銀時は手をポンと叩くと、ヒナギクを指差しながら伊澄達を見る。

「戦いの為に生まれてきたようなとにかく強い戦闘民族だ。これで最後の仲間はで決まり……」

「ベキッ……」

ヒナギクはその人差し指を上折り曲げた。

「ギヤアアアア!? 折れたアアアア!? オメー何してくれとんだアー!」

「鷺ノ宮さんと澳門君まで……
一体どうしたの?」

そんな銀時を通り過ぎて、ヒナギクは伊澄に近づいていく。

「会長さんこそ……どうしてこんな所に?」

「私は……」

伊澄が尋ねると、ヒナギクはハヤテから千桜経由で受け取った手紙の内容を見てここに來た事を話した。

「……ハヤテ様達が!」

「ええ、ナギも一緒にいるらしいわ」

ヒナギクの話に驚きを隠せない伊澄。

「実は私達はその鏡を破壊する為に來たのです」

「え? そうなの?」

「ですが、今は説明している暇は無いようです。会長さん、私達に

協力していただけませんか？」

「アナタ達もそのクエストとやらに挑むんでしょ？ だったら目的は同じね。勿論協力するわ」

伊澄の申し出に頷くヒナギク。

「決まりじゃな。ほら銀時、お主いつまで痛がっておる。人差し指くらいで大袈裟な」

「あんだと！！オメーの人差し指もへし折ってやろうか！」

銀時もようやく立ち上がると、四人は一斉に教会を見据える。

「んじゃ行くか……冒険の旅って奴に」

【桂ヒナギク】

クラス：生徒会長

HP：440

MP：350

腕力：握力オバケ

知力：254

守備力：180

敏捷性：200

常識・良識：254

洞察力：254

胸：0……嘘です！！スミマセン！

武器 正宗

遂にパーティーも出来上がり、
伊澄一行も、アレキサンマルコ教会に入ってしまったのだった。

第五十一訓

冒険って聞くと無性にワクワクしていた少年時代を思い出す（後

教えて！！銀八先生

銀八

「本日最初の質問な。『ハヤテ女性陣に質問。屁怒紹さんファミリ
ーと銭湯に入るならどのくらいいられる？』」

ハイ、ズバリ答えます！っーか屁怒紹様は一応性別は なんて入る
事はありません、多分」

銀八

「次の質問な。『幸久に質問。オカマなら触っても平気？』
ハイ、ズバリ答えましょう！これは前にも答えました。詳しくは第
四十七訓の後書きを見て下さい」

1756

銀八

「んじゃ、続いている質問。『新八に質問。この世界で趣味見つけた
？』だとさ。まあ、普通ならもう一つくらい見つけられんだろ。な、
ぱっつあん」

新八

「……………放っておいて下さい」

銀八

「……………まあ、まだまだアレだよ…時間はある。続いている質問。『ヒ
ナギクに質問。銀さんが父親だったらどうですか？』」

そりゃ勿論！」

ヒナギク

「家出するかも…」

銀八

「オイ、何で頭見て言っただア！？まさかこの頭が原因じゃ無いだろうな！？」

ヒナギク

「髪型が変わりそうだし、遠慮します」

銀八

「サラサラヘアの連中に俺達の苦しみが分かるかアアアア！！」

神楽

「先生、早く次の質問にいくアル！」

銀八

「つつたく……んじゃ次の質問。『リリカルハンター（略）』の主人公フアラクさんからの質問。銀さんと作者に質問。作品中で誰が髪型を変えた時一番似合うと思う』『」

伽藍

「これはどんな髪型か言っただけだと答えようがありませんね。どんな髪型か言っただけならば答えられますので、すみません」

銀八

「続いての質問な。『真司の撮取している醤油の量を皆が摂ったらどうなりますか？』」

ハイ、ズバリ答えましょう！
普通は死にますね。まあ真司は大丈夫です…何故かって？一応ギャグ小説なんで…ギャグなんで」

銀八

「最後の質問だな。お、もしもシリーズか…『もし、銀さんがナギの執事だったらどうなってる？』
んじゃ、ちよっくらやってみっか！」

……
もし銀時がナギの執事になるとしたら

雪の降る寒い日……

三千院ナギは気まぐれに実の母である三千院紫子の墓参りをしに来た。

SPの目を盗んでコッソリ一人でやって来ていたのだ。
手にはお供え物のお饅頭を持っていた。

墓につくと、石墓に柄杓で水をかけて、お供え物を置く。
すると……

「オイ、ガキ……」

「？」

墓の裏側から男の声が聞こえてきた。

「饅頭食っていい？腹減って死にそうなんだ……」

「これは母にあげたものだ。欲しかったら母に聞け」

「あ、そう……」

私が裏側に向かってそう言うと、男は私の前に出てきてお供え物の饅頭を食べ始めた。

白髪頭の変な奴だった……

「何て言ってた？私の母は……」

「……」

男は一頻り饅頭をたいらげると、振り返って言った。

「死人が口なんて聞くかよ……」

「……そりゃそうだな」

当たり前前の回答に少しがっかりした気持ちになった。どんな返事を期待していたのだろうか……私は……

しかし、男は立ち上がると私の前に向かい合わせになった。

「どうしたんだ？」

「この恩は忘れねえ……
ガキ、この先長い事色々あんだろっが……ここから先は、何があっても俺がお前を護ってやるよ……」

そう言っつて男は真っ直ぐ私を見つめてきた。

「守る……お前が、私を？」

私はいつの間にか口元が緩んでいた。

「お前、名前は……？」

「坂田銀時……」

「なら銀時……私の執事をやらないか？」

.....

新八

「って、何ですかコレ!？」

銀八

「何って……もしもシリーズだったから再現してみただけだろ」

新八

「いや……大丈夫なんですか?こんな事して……」

銀八

「大丈夫大丈夫……いざとなったら適当に誤魔化せば平気だって。ま、そういうわけで今日はここまで」

新八

「次回もよろしくお願いします!」

第五十二訓

Let's playing Quest of Butlers

クラウドの前書きの館！

クラウド

「遂に伊澄お嬢様一行もクエストに参戦致します！！」

ハヤテ

「というか……本当に僕のパーティー大丈夫なんですか？不安で仕方ないんですが……」

伽藍

「……………では、本編をどうぞ！」

ハヤテ

「え？ちよつと……何で目を反らすんですか！？ちよつとオオオオ
！！！」

第五十二訓

Let's playing Quest of Butler

「アレキサンマルコ教会」

「オイオイ……誰も居ねーぞ、この教会」

「そうじゃな……誰も居ないどころか……教会らしい物がほとんど無いな」

銀時達は教会の中に入って、地下にある鏡を探していた。

「つーか本当にそんな鏡あんのか？どーも胡散臭えな……その執事虎の穴つてのは……」

「世の中なんて理不尽だらけじゃ……どんな不可解な事も絶対無いなんて言いきれんだろう？」

銀時と真司は教会の南側を片っ端から調べていく。

「二人とも！こっちに来て。地下への階段が見つかったわ」

反対側からヒナギクの声が聞こえてきた。

「む？本当か……！？」

銀時達はヒナギク達の所に向かうと、そこには柵の後ろに隠された螺旋階段が下に繋がっていた。

「この階段降りると地下なんじゃない？」

「みたいね……」

「……事はこの下にパーの鏡？それがあんのか？」

「魔法の鏡です銀時様。」

「……恐らく、そうだと思います」

四人は恐る恐る階段を下っていった……

*

階段の先は案の定地下に繋がっていた。

薄暗く厳かな雰囲気醸し出している地下の広場の中心には大きな鏡が立っている。

まるで俺がこの地下を支配しているんだとでも言いたげなように、凜と立ちほだかっている。

「これが“魔法の鏡”？」

「ハイ。この鏡からは異様な気配を感じます」

ヒナギクの言葉に頷くと、伊澄は鏡に近づいていく。

「皆さん……ここからは更に危険ですから慎重にー」

「コッッ……」

伊澄は途中の地面で躓いたかと思うと、

「あうー！ー！」

鏡に向かって前のめりで倒れ込み、そのまま鏡の中に入ってしまった。

「……つて、鷺ノ宮さん！？」

嘘……鏡に吸い込まれた！？」

「お前が一番不注意ではないかアアアアア！！！」

「言ってる場合じゃねえ！」

銀時は、驚愕するヒナギクと真司をおいて鏡に走っていくと中に飛び込んでいった！

「な、お主！？」

「私達も行きましょう、澳門君!!」
ヒナギクと真司も慌ててその後を追うのであった……

第五十二訓 L e t ' s p l a y i n g Q u e s t o f B
u t l e r s

くリベアリア 中央広場く

ハヤテ達は城を出ると、一旦広場に集まっていた。

「つまり、長谷川さんは清掃のバイトで教会に来ていて、地下の鏡を掃除しようとしたが足を滑らせ落下し、この世界に来たと……」

「まあ……簡潔にまとめるとそうなるな」

新八の言葉に気恥ずかしそうに頷く長谷川。

「どれだけ不幸に苛まれているのだ……」

「大変だったんですね……」

一同の顔にも同情の色が露になる。

「っていつか長谷川さん、何でダンボール身につけたままなんですか？」

「いや……剥がしたいんだけど剥がせないんだよ、コレ」

体にすっぽりハマったダンボールを見て困ったように言う。

「ああ、マダオはダンボールが武器だから外すには武器屋に行つて武器を取り替える必要があるネ」

「いやいやいや！？おかしいだろ！何だよ武器ダンボールって！？」

何の役に立つんだよ！ただの厚紙じゃん」

「マダオは基本無職アルからな。宿としても使える一石二鳥の武器アルよ」

「何それ！？褒めてんの！？それともぶっ飛ばされたいの！？」

長谷川はダンボールを再度掴んでその場に崩れおちる。

「何てこつたアアアア！！」

俺はこの世界でまんまダンボールなおっさん、マダオだって言うのかアアアア！！」

「まあまあ！！神楽ちゃんの言う通り武器屋に行けば取り替える事が出来るかもしれませんよ」

新八は長谷川を何とかなだめようとする。
すると、ハヤテが皆を見渡すと口を開いた。

「でしたら、ここで30分各自の行動にしませんか？各々準備を整えて、30分後に洞窟の方向のある北東の出口に集合という事で」

「うむ、そうだな。そうと決めれば行くぞ、神楽！この町を探検なのだ！」

「合点アル！」

ナギと神楽はそう言って、町の教会等が並ぶ方向に走っていった。

「だったら僕と長谷川さんは武器屋に行ってますよ」

「そうだな。何かもつとマシな武器を探してこよう」

新八と長谷川は武器屋の方に歩きだした。

そして残ったのは歩とハヤテ。

「では、僕達もこの町のお店とか見て回りましょうか」

「え？あ、うん！」

二人も賑やかな商店街に足を進めた。

〈武器屋〉

「いらっしやいませ！」

新八達が武器屋に入ると、例のごとく様々な武器が置いてあった。

「すみません、武器を買いに来たんですが……」

新八が店主と思われる人物に声をかけた。

「ハイ、分かりました。この武器屋は各パーティーの装備に合わせて武器を売っております。例えば剣士の方でしたら……」

購入

木刀	50G
ショートソード	100G
ロングソード	150G
レイピア	150G
サーベル	200G
グレートソード	1000G

「このようになりますね」

「なるほど……」

店主の説明に頷く二人。

「それで、武器を購入される方は……?」

「あ、この人です」

新八は隣の長谷川に手を向ける。

「分かりました。では…」

購入

ダンボール	1 G
Zダンボール	1 5 0 0 G
ZZダンボール	2 0 0 0 G
Uダンボール	2 5 0 0 G
Xダンボール	2 5 0 0 G
Sダンボール	3 0 0 0 G
Fダンボール	5 0 0 0 G
ダンボール	5 0 0 0 G

「このような感じにー」

「ちょっと待てエエエエエー!!」

店主の言葉を遮って長谷川が突っ込む。

「何でダンボール!? 何処の世界にダンボールを売る武器屋があるんだよ!!! つーかこの世界は俺を何だと思ってるの!?!」

「このF^{フリーダム}ダンボールなんてオススメですよ。」

これはかの有名なヤキン・ウー工攻防戦でザト軍と連軍の戦争を休戦に持ち込んだモビスーツのパイロットと同じ苗字の人が可燃ゴミの日に捨てたダンボールなんです」

「果てしなくただのダンボールだろうがアアアアア！！」

長谷川は溜め息をつくくと、新八を振り返る。

「新八君：ダメだ、帰ろう。ダンボールしかないよこの店」

「いやでも、このままでもダンボールですよ……このまま魔王城に行つて大丈夫なんですか？」

二人は困つたように顔を見合わせると、

「二人とも、もしかして魔王城に姫様を救いに行くんですか？」

「ええ、一応そついう事になってますけど……」

「そつでしたか……！！ちよつとお待ち下さい！」

店主はそう言つと店の奥から一つのダンボールを取り出してきた。

「これをお受け取り下さい。お代は結構です」

「え？一体どうして……」

新八は驚いて店主を見る。

「姫様は我々リベアリアの希望の光なのです。ですからこのダンボ

ールを使って下さい」

「いや……使つて下さいってコレ……ただのダンボールだよな？ただの厚紙だよな？」

店主に渡されたダンボールを見て困惑しきつた表情の長谷川。

「いえ……それはただのダンボールではありません。それはSFストライクフリーダムダンボールです。これは……いや、使つて試してみてください」

店主は長谷川と新人を交互に見ると頭を下げた。

「どうか姫様をよろしくお願いします」

「いや……だからこれダンボール……」

長谷川の武器を宿無しダンボールからSFダンボールに装備した。

*

「リベアリア教会」

「うおおおお！ここが教会アルか！！」

「なるほど……」ここでセーブや復活の呪文が……」

神楽とナギは教会に入っていた。神聖な雰囲気漂うこの教会の祭壇には、司祭と思わしき老人が立っている。

「ようこそ。ここはリベアリア教会です。何か御用ですか？」

司祭は二人に気がつくのと、話しかけてきた。

「この教会はどんな事をしてくれるんだ？」

「セーブ、蘇生、寄付、薬の販売等しております」

「薬……？道具屋に売っているのとは違うのか？」

ナギは怪訝そうな表情を向けると司祭は「ご明察とばかりに頷いてみせる。」

「一般的な薬も置いてありますが、特に蘇生用の薬草が購入できるのは教会のみですね」

「ふむ。神楽、魔王城に赴くものだから一つくらい買っていくか」

「え？お二方は魔王城に行かれるのですか！？」

「そうアル！お姫様を助けに行くネ！」

ナギと神楽は司祭の言葉に頷く。すると司祭は何やら道具を取り出した。

「でしたら、この復活の薬×3と気絶回復薬×3と毒消し草をお持ち下さい」

「む？いいのか？」

「ええ、勇者様達が魔王を倒せる唯一の希望なのです。ですからどうかよろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる司祭。

「任せるネ！……モグモグ」

きつと私達がこの国に平和を取り戻してみせるアル！…モグモグ」

「って何早速食ってるのだ！！毒の時に使えエエエエエ！！」

*

〔商店街〕

一方のハヤテ達はまだ少なからず活気がある商店街を散歩していた。

「いや、何だか外国に来たみたいですね」

「あ、うん。そうだね／＼」

「どうかしましたか？」

少し様子が変わったハヤテが話しかけた。

（こ……これは……デ、デート!?!）

いやいやいや、偶然の流れとはいえ……まさかこんな事になるとは

「あ、西沢さん？」

「でも、こんな良い事続くわけないとは思っているのよ!?!
きつとすぐ、大爆笑のオチがつくのはわかってるんだから!?!」

「は?」

訳の分からない事を言い出す歩に戸惑うハヤテ。

(そ…そうよ歩!?!うかれちゃいけないわ!?!こんな幸せが長続きするわけない!?!

…きつと何かオチがつくのよ!?!ここはそついう流れ!?)

そしてカツと目を見開く歩。

「さあ!?!もう十分幸せな目にはあつたわ!?!

どうなる私!?!どんなオチがつくのかな!?!かな!?!」

「あ、ソフトクリーム食べます?」

(ほら、やっぱりオチがー!?!
つてあれ!?!普通だ!?)

よく分からない西沢歩であった。

「どついう意味かな!?!」

「では、そろそろ僕達も集合場所に向かいますしょうか?」

「う、うん！（いいのかな？このままオチも無くデートを楽しんで
もいいのかな！？どうなの神様！？）」

*

（北東出口）

まあ、そんな訳で各々が集合場所に集まった。

「あの……長谷川さん？武器買いにいったんですよね？」

「何も聞かないであげて……」

膝を抱えて体育座りをしている長谷川を見てハヤテは首を傾げる。

「アレ？ナギちゃんどうしたの？その薬」

「魔王城に行くと行ったら教会の司祭さんがくれたのだ」

「おお！」

一同は最後の確認をすると、大きな出口を見据える。

「では、皆さん行きましょうか」

一同

「おー！！！」

こうして、勇者ハヤテ一行は魔王城に向かう為、盗賊の潜む洞窟へと旅立つのだった……

ハヤテ達が出口に集合している頃……

くリベアリア中央広場く

「……………本当に鏡の中の世界があるなんて」

「というか何処のRPGの世界じゃ、これは……」

ヒナギク達も、ハヤテ達同様に周りの光景に驚愕していた。

「恐らくこの鏡を買ってきた神父の趣味でしょう。初代ドラエダワイードリー世代の方なのでしょうね」

「いや……………そんな事言われても」

ヒナギクと真司は呆れたように伊澄を見る。

「っーか……………」

「「「「？」「「「」

「オメーらいつまで人の上に乗ってんだアアアア!!」

突如、地面から銀時の叫び声が聞こえてきた。

「あ、銀時様」

「そんな所にいたの？」

「お主…何処かに遊びに行ったのかと思ったぞ」

三人が立っていたのはうつ伏せに倒れている銀時の上だった。

「お前ら何で当たり前のように人の上で会話してんの!？」

「気がつかなかったから……」

「いいからどけ!早く!!重いから……」

「……」

「……ったく……」

三人が銀時の上から降りると、
体を叩きながら起き上がる。

「……んで?これからどうすんだ?」

「そうですね……」

この町に飛ばされた以上、この町から冒険が始まる筈だと思います
が……」

「いや……何冒険って？何を冒険するんだよ？」

伊澄が周りをキョロキョロと見回している。

「だったら、このリベアリア城っていうお城に行ってみない？」

「「？」」

ヒナギクが中央広場に立ててある地図を指して言う。

「リベアリア城？なんだそれ？」

「どつやらここは“リベアリア”という城下町らしいわ。ここから北に真っ直ぐ行くとお城に着くみたい」

「なるほど……RPGの始まりは城というのが相場だからの。城に行けば何か分かるやもしれん」

真司の言葉に一同も納得したように頷く。

「では、そのお城に行ってみましょう」

という訳で、伊澄一行は城に向かう事になった。

「鷲ノ宮さん？そっち反対方向よ？」

「……………」

「「……………」」

*

くリベアリア城く

「ほう……そなた達は勇者一行であると言っのか」

ハヤテ達同様、王様への謁見を許された銀時達は王様から今の国の状況や拐われた姫の事を聞いた。更に自分達の前に同じように魔王城に向かった一行がいる事も。

「一体その魔王城は何処にあるのですか？」

一同を代表して伊澄が尋ねる。

「ふむ……ここから北東に盗賊が潜む洞窟がある。そこを抜けて更に北に進めば魔王城じゃ。前の一行もそこに向かったのだ」

「なるほど……」

「もつと近い道はねえのか？」

不意に銀時が口を開いた。

「ちよつと銀時!？」

「いや、今からハヤテ達追っても追いつけるとも限らねーしな。もし近道があんなら、先に行って待ってた方が良いだろ」

銀時はそう言うと再び王様を見る。

「近道か……あるにはあるが」

「?」

王様は苦い顔を作ると、咳払いをして話し始める。

「アルム街道という道がある。

その街道は古くから我が国の数少ない商業交易を繋ぐ道でもあり国を支える基盤の一つなのだ。

それは現在魔王城がある位置にちよつと真つ直ぐ延びているのだが……」

「？」

「今のアルム街道には魔王が放ったとても凶悪なドラゴンが住みついておるのじゃ。ドラゴンを退治しようとした者は次々と帰らぬ人となった。」

それでもお主達は行くと言うのか？」

王様は一同を見渡す。

「いや、だったらいいや。普通に洞窟から魔王城行くわ」

・アルム街道へ向かいますか？

はい

いいえ

「アルム街道という道がある。」

その街道は古くから我が国の数少ない商業交易を繋ぐ道でもあり国を支える基盤の一つなのだ。

それは現在魔王城がある位置にちょうど真っ直ぐ延びているのだが

…」

「あ？オイ…」

「今のアルム街道には魔王が放ったとても凶悪なドラゴンが住みついておるのじゃ。ドラゴンを退治しようとした者は次々と帰らぬ人となった。」

それでもお主達は行くと言うのか？」

「いやだから洞窟にするって言うてんだろーが」

・アルム街道へ向かいますか？

はい

いいえ

「アルム街道という道がある。」

その街道は古くから我が国の数少ない商業交易を繋ぐ道でもあり国を支える基盤の一つなのだ。

それは現在魔王城がある位置にちょうど真っ直ぐ延びているのだが…（空気読めよマジで…ここは行ってくて言えよ…）

「いい加減にしるオオオオ！！行けっか！？行けっか！？っーかうっすら本音出てんぞ！！」

「今のアルム街道には魔王が放ったとても凶悪なドラゴンが住みついておるのじゃ。ドラゴンを退治しようとした者は次々と帰らぬ人となった。それでもお主達は行くと言うのか？（あの道使えねーと俺の生活も困るんだよ…国民とかどうでもいいけど、俺の生活かかってんだよ…）」

「オイ最低だよコイツ…自分の事しか考えてねーよ。国民の事なんて微塵も考えてねーよ…」

銀時を始め、伊澄達も完全に呆れている。

・アルム街道へ向かいますか？

はい

いいえ

「もういいわ…話が進まないし、アルム街道に行きましょう」

ヒナギクが溜め息をついて“はい”を選択した。

「おお！行ってくれるか！！何とありがたい事か。姫だけで無く、この国の経済も救ってくれるというのだから」

王様は玉座に座りながら一同をもう一度見渡す。

「さりげなく国を救えって言ってますわ…」

「白々しいわね…」

伊澄もヒナギクもジト目で王様を見る。

「大変危険なアルム街道に向かうそなたらにせめてもの手向けとし

てこれをやるっ」

銀時達は2500Gを手にいれた。

「あん？こんなもんで姫が救えると思ってるのか？

分かったらさっさと敗残兵全部よこせ。あと宝物庫の宝も全て軍資金として献上しろ」

「勇者どころか盗賊じゃな、お主……」

呆れたように銀時を見る真司。

「流石私の見込んだ者達だ。そなた達こそまさしく勇者……」

「オイ！何勝手に話進めてんだ……」

王様は玉座から立ち上がると……

「では、そなた達にこの国経済を……ついでに姫も頼んだぞ……！」

「ついで！？今こやつ、ついでって言いおつたぞ！？」

「この王様からどうにかした方が良くないかしら……」

こうして、銀時達はアルム街道の竜退治リットンに向かう事になったのだ
た……

第五十二訓

Let's playing Quest of Butler

教えて！！銀八先生

銀八

「最初の質問な。『ハヤテ女性組に質問。もし混浴で屁怒紹ファミリィと一緒にになったらどのくらい居られる？』」

伊澄

「そのくらいなら、私は別に大丈夫です」

残り

「1秒で！」

銀八

「続いての質問。『生徒会三人娘に質問。万事屋をどう思う？』
ハイ、これはですね…ぶっちゃけまだほとんど面識が無い事になっ
てるんで、本編がもう少し進んでから回答します！」

銀八

「次の質問な。『ナギに質問。この世からアニメや漫画が無くなっ
たらどうする？』だだよ、どうなんだ？」

ナギ

「世界規模でアニメ会社等を買収した上で、政界に圧迫をかけ、全ての経営を三千院家で執り行う！！この世からアニメやゲームを無くそうとする奴等がいるなら、世界規模で消すな……」

新八

「リアルに出来そうで笑えないですね……」

銀八

「続いての質問。『真司に質問。一週間醤油搦らなかつたらどうなる？』」

澳門家の家来1

「禁断症状が現れますね。二日で性格キャラが変わる程荒み、四日で発狂、一週間で経てば………です……」

銀八

「ハイ、禁止ワードな。では次の質問。『銀時とハヤテに質問。ヒナギクの髪型で何が一番似合うと思う？』
別に何でも良いんじゃないかね？」

新八

「そんな事言わずに……例えばポニーテールとかどうですか？」

銀八

「ポニーテールねえ……つか髪型なんて宛にしちゃいけないよ。女の髪型は詐欺みたいなもんだよ。付き合ってる時は熱心に手入れしてるけど、いざ結婚したら録に手入れしなくて、化粧もガサ

ツに 後悔みたいな流れになるからな」

新八

「髪型で何か嫌な思い出でもあるんですか…?」

ハヤテ

「僕はどんな髪型でも似合うと思いますよ」

新八

「巻きロールとかは?」

ハヤテ

「巻き…:…ロール?」

新八

「つて、ええ!? ハヤテ君!？」

急にハヤテは暗い表情になったかと思うと体育座りをしてしまった。

銀八

「何かトラウマでもあんだろ。次の質問な。『咲夜に質問。新八のツッコミは何点くらい?』ハイ、ズバリ答えます!これは本編十二訓を見て下さい!評価からダメ出しまでしていると思います」

銀八

「んで、最後の質問な。『もしも、ハヤテが万事屋のオーナーなら?』んじゃ、今日もやってみっか!」

.....

もしハヤテが万事屋オーナーなら

侍の国……僕らの世界がそう呼ばれていたのは、今は昔の話……
二十年前に、突如飛来した天人によって、侍は衰退の一途をたどっていた……

歌舞伎町の一角に、金さえ払えば何でもやる万屋があるのをご存知だろうか？

『万事屋』

と言う特殊な読み方をするその店で物語は始まる……

「くおらアアアアア！ハヤテエエエエエ！！」

朝の歌舞伎町に一際大きな怒鳴り声が響き渡る。

「うだうだ言っただけで耳揃えて家賃払えって言っただらうがアアアア！！」

タバコ片手にそう怒鳴るのはお登瀨。本名を寺田綾乃。

この万事屋の下の階にある『スナックお登瀨』のママである。

「この間、アレ…ビデオ直してあげたじゃかな無いですか。アレでチャラでいいでしょう！！」

そう怒鳴り返すのは綾崎ハヤテ。この『万事屋』のオーナーである。彼はお登瀨に家賃を払う事で、上の階に住んでいるのである。金を稼ぐ手段として、『万事屋』を営んでいるのである。

「良い訳ねえだろ！5ヶ月分の家賃だぞ！大体あのビデオ、また壊れて鬼平コンプリート失敗しちまったわい！」

「諦めないで下さい！きつとまた再放送しますよ！！」

ガシッ！！

お登瀬がハヤテに掴みかかみ、後ろから首を絞める。

「んな事ア良いから家貸よこせっつーんだよ！！この女顔！」

「何ですか！アナタに女顔の苦しみが分かりますか！！」

「知るかアアアアア！！ボケエエエエエ」

そんな争いが行われる中、階段を登ってくる一人の男の子。

「ハア……またやってんのか」

彼の名前は志村新八。面倒だから以下略。

「ちよつとオオオオオ！？」

新八はそのまま階段を登ってゆく。

「ちよつとあんたら、いい加減ー」

新八が言い終わらないうちに、

お登瀬がハヤテを持ち上げて階段に投げ飛ばした！！

「わああああアアア!!」

ガラガラガツガツシャーン!!!!

「ひい、ふう、みい……まだ二ヶ月分にしかならないけど、今日はこれで勘弁してやるよ」

「あ……」

お登瀬はそう言って、ハヤテ達から給料を取ると、下へ降りていった。

「ハア……」

「これでまた……豆パンの生活ですね……」

ハヤテと新八は渋々万事屋の中に入っていく。

「神楽さーん！起きて下さい！朝御飯の時間ですよー」

「いや……もう昼だから」

ドカアアアアアン!!

突如押し入れを蹴り飛ばして神楽が起きて来た。

「マジでか!?!今日はどんな朝御飯アルか!?!」

「豆パンですよー」

「グスン……今日も豆パン……」

神楽は急にテンションガタ落ちして俯く。

「食べ物があるだけありがたいと思わないとダメですよ!?!世の中にはダンボールをマイハウスと呼んで、草を食べる人もいるんですから」

「そつだよ、神楽ちゃん。皆辛いけど我慢しよう」

新八は少しでも和ませようと、明るく振る舞う。

「うるせーよダメガネ。本当に普通の事しか言えないアルな」

「全く……だから君は新八君なんですよ……」

「何でだよオオオオオ!?!つかアンタも同じ事言ってたでしょオオオオ!?!」

.....

銀八

「長くなりそうなので、この辺で終了」

新八

「いやー、でも何か新鮮でしたね。これから『疾魂』とかにしてもいけるんじゃないですか？」

銀八

「何！？まさかの主役降板の危機！？」

神楽

「それじゃ、また次回アル！！」

銀八

「ちよつと待ってエエエエエ！？」

第五十三訓

最初の試練は盗賊退治くらいがちょうどいい(前書き)

ふっかつのじゅもんを いらしてください

むかきくけこ	らりるれろ	もどるさしすせそ	や	ゆ	よ	けず
るたちつてと	わ	を	ん			
なにぬねの		だくてんはひふへほ				

あいうえお まみむめも すす

ハヤテ

「あの……なんですかコレ？」

ナギ

「何って、復活の呪文だ。」

前回の続きを読むのだろうか？当然必要ではないか」

新八

「何でだよ！？何で小説読むのに復活の呪文が必要なんですか！？
今時こんな前時代のパスワード形式無いだろ！つーか前回一言も呪
文出てなかったでしょ！？」

神楽

「何だ新八、メモ取って無かったアルか？」

新八

「無エエエよ！！！」

ナギ

「全く……これだからメガネは使えないな」

神楽

「本当アルな……だからお前は新八ネ」

新八

「んだとオオオオ！！！」

ハヤテ

「では、悪ふざけもこの辺にして、早く本編に進みましょうか」

長谷川

「え？悪ふざけだったのコレ？」

ハヤテ

「勿論ですよ」

長谷川

「それじゃ、本編にいこう」

ハヤテ

「では、始めます！」

西沢

「アレ……私忘れられてない？」

第五十三訓

最初の試練は盗賊退治くらいがちょうどいい

「ビストウナ平原」

「うぬ……ハヤテ」

「どうかしましたか？お嬢様」

「盗賊の洞窟はまだなのか」

「え……まだもう少し距離がありますね」

「う……」

ハヤテ一行はリベアリアを出て、北東にある洞窟を目指していた。リベアリアの外には、ビストウナ平原という大きな平原が広がっている。

かれこれ、もう二時間は平原を歩き続けているのである。

「そろそろ休まないか？」

ナギはかなり疲れている様子であった。

「そうですね……この先に泉がある場所があるみたいですから、そこで休憩しましょうか」

「私もうお腹ペコペコアル！」

「そうだね。ついでにご飯にしちやわないかな？」

神楽や歩も賛成だというように頷く。

「でも……食料なんてあつたっけ？」

「それなら、休憩場所に着いてから食料を探してみましょう」

長谷川の疑問にハヤテがニツコリと笑って提案する。

「何だかキャンプみたいアルな！」

「そうだね」

ハヤテ一行は泉に向けてもう一踏ん張りと進んでいった。

くつある群

「へえー！綺麗な畔だね！」

「木々も沢山あるし、休憩にはもってこいですね」

綺麗に澄んだ泉の周りの所々を囲むように木々が木陰をつくっている。

時折吹く風は葉を揺らし、爽やかな空気と美しい木漏れ日を水面に彩らせる。

「はあ、疲れたのだ…」

「私も結構疲れたかも…」

自称ドラゴンスレイヤーと練馬のソルジャークラス1stは早くもバテていた。

「お腹減ったアル」

「そうですね……では、僕達はこの畔で何か食料を探しましょう。お嬢様達は休んでいて下さい」

「済まんなくハヤテ……よろしく頼む」

「ええ、お任せ下さいー！」

ナギはそう言うとゴロンと横になった。

「ん……ごうして草木に囲まれて横になるのも良いものだな」

「風も爽やかだし、日の光が気持ちいいね」

歩もそれに続いて横になる。

二人はのほほんと日向ごっこを始めた。

「では、僕達も行きましょうか」

「でも、本当に食料なんてあるのか？」

「大丈夫ですよ！RPGにはどんな所にだって食料は落ちてますから」

「いや、そういう問題!？」

ナギと歩を除いた一行は食料を探す事になった。

*

「神楽さん！見て下さい、美味しそうな木の実がありましたよ」

ハヤテは樹の上から神楽に木の実を掲げてみせる。

赤い林檎のような形の木の実であった。

「おー！美味しそうアルな……モグモグ……」

「つて、ちよつと神楽さん！？何食べてるんですか！？」

慌ててハヤテが樹から降りてくる。

「キノコネ！樹の下に生えてたアル」

「ダメですよ！？そんな勝手に食べたら…毒キノコだったらー」

「大丈夫アル。何とも無い…グツ！？」

急に神楽が座り込むってしまった。

「神楽さん！？どうしたんですか！？」

「ぬおオオオオ！？やられたぜチクシヨオオオオ！！お腹が…お腹が急降下アルウウウ…」

「えエエエエエ！？」

神楽はお腹を押さえてのたうち回る！

「あわわわ！！確か薬は…お嬢様が持ってたから…」

「ぐぬおオオオオ！！なんじゃこりゃアアアアアア！？」

「神楽さん！今薬の所に行きますから、それまで頑張つて下さい！」
ハヤテは神楽を背負うとナギ達の場所に走り出した。

一方、新八と長谷川…

「お、コイツは良いキノコだな…」

「長谷川さん、こっちのキノコはどうですか？」

「いや…それはダメだな。嵩の光沢が無い上に白い斑点がうつすらとある。あと嵩の端が柔らか過ぎる…毒キノコだ」

長谷川は新八の持っているキノコの要所要所を指摘して、そう結論付けた。

「へえ、凄いですね！長谷川さん。そういうの詳しいんですか？」

「いや、まあ生きていく上で自然に身に付いたというか…宿無しの時は生えてたキノコばかり食べたりしてたからな」

「あ…」

少し尊敬の心が崩れた新八であった。

「ま、ともかく食料はこのくらいでいいですかね。キノコ以外にも植物も採れましたし…」

「そうだな。ハヤテ君達ももう戻ってるかもしれない」

新八達もナギ達の所へ引き返す事にした。

*

「 Pasta刑事……俺アもうダメだ……後の事は、頼んだぞ…

「諦めないで下さい、神楽さん！もうお嬢様達の所に着きますから！」

ハヤテは神楽を背負ったまま、何とかナギ達のいた畔に走り込んできた。しかし…

「ようやく着いた……アレ、お嬢様？西沢さん？」

畔には人の気配すら無かった。

「お嬢様～！？西沢さん～！？」

ハヤテは大きな声で二人を呼ぶも返事は無い。

「アレ？ハヤテ君…？」

「新八君！！」

後ろから新八と長谷川が食料を抱えてやって来た。

「どうしたの……、ナギちゃん達は？っていつか神楽ちゃんどうしたの？」

「あ、それが神楽さん、毒キノコを食べちゃったみたいで！」

「ええ！？」

ハヤテは背負ってた神楽を横に降ろす。

神楽はムシクの“叫び”のような顔でお腹を押さえて呻き声を上げている。

「ちよつとオオオオ！？大丈夫なの、神楽ちゃん！？」

「これが……大丈夫に見えるか pasta 刑事アアア！？」

「山さんんんん！！！！気を確かに持ってエエ！！！！」

新八と長谷川も驚いて神楽に駆け寄る。

「薬はお嬢様が持ってた筈なんだけど……」

ハヤテはキョロキョロと周りを見回すが、ナギ達はやはり何処にも居ない。

「お嬢様〜!!西沢さん〜!!」

やはり返事は無い……

「一体何処に……」

「うぬおオオオオ!!お腹の急降下アアアア!!」

グキユルルル〜!!

「ハヤテ君!!早くしないと神楽ちゃんがヒロイン史上最低の暴拳に!!」

足をばたつかせ叫び声をあげる神楽を見て大慌ての新八。

長谷川は神楽の隣に方膝を着いて座る。

「落ち着くんだ。いいか、俺の呼吸に合わせるんだ。

ヒツヒツフー、ヒツヒツフー」

「ダメエエエエ!!それ出る方のやつウウウウ!!」

最早極限の状況である。

(くっ!?!どうすれば……このままじゃ神楽さんが……、!?!?)

ハヤテは何回か辺りを見回すと、少し離れた所から何やら馬車のよ
うなものを引いた男がやって来るのが目に入った。

(あ、あれは……まさかお店!?)

そう。RPGにおいて必ずと言って良い程ある、移動式のお店であ
る。彼らはフィールドの各一定のポイントに存在し、旅に疲れた冒
険者達に回復の薬草や武器、防具は勿論、仮眠を提供してくれるも
のさえある。

困った時のお助けポイントなのである。

「あの、すみません!?!」

ハヤテは馬車に走って近づいていく。

「ハイ、いらっしやいませ」

「あそこに毒キノコを食べてしまった女の子がいるんです!?!それ
で回復薬が欲しいのですが…」

「わかりました!?!」

馬車の男は急いで神楽達の元へ向かう。
そして馬から降りて、神楽の側によると…

「これは……ハイドロダケを食べてしまったみたいだね」

そう言って、荷台から何やら薬を取り出した。

「これを飲みなさい……」

「うっ………」

薬を飲まされた神楽が酷く顔をしかめる様子からすると、よほど苦い薬なのだろう。

しかしそれもつかの間、神楽はみるみる顔色も良くなり、お腹の痛みも消えたようだった。

「よし、これで大丈夫。もう楽になつたろ？」

「……本当ネ！もう全然苦しく無いアル！」

神楽は立ち上がって飛び上がってみせた。

「「おお〜！」「」

新八も長谷川もその様子に感嘆の声をあげる。

「すみません……ありがとうございました」

「いやいや……昔少し医学をかじっていてね。その知識が役に立って良かったよ」

「薬のお金は払いー」

ハヤテが懐からお金を取り出すとすると、男はそれを制した。

「大丈夫。このくらいは気にしないでくれ。困った時はお互いさまだからね」

男は朗らかに笑うと、再び馬に飛び乗った。

「本当にありがとうございました!」

「ありがとうネ!助かったアル」

ハヤテの隣に神楽も来てお礼を言う。

「元気なら何よりだよ。じゃあ僕は仕事があるから……
あ、そうだ……」

「?」

「君達も早くこの畔から出た方が良い。さっきこの周辺に盗賊が出て人が拐われたとかいう話を聞いたから」

男は思い出したようにハヤテ達に注意を呼びかける。

「誘拐……もしかして……」

先程ナギ達がいなかった事がハヤテの頭を過った。

「あ、誘拐されたのって……」

「うん。話によると二人の女の子らしい。さっき仲間の商人とすれ

違った時に言つてたよ。彼は盗賊の洞窟の方から来たつて言つてたからーつて、君達!？」

男の話が終わらないうちにハヤテ達は急いで荷物をまとめ始めた。

「助けて下つて本当にありがとうございます!では、僕達はこれで!」

「すみません!失礼します!」

言つが早いかハヤテ達は北東…つまり洞窟の方角にむけて走り出した。

「変わった子達だな……」

男はその様子を啞然と見送つた。

*

「まさかこんな形で盗賊の洞窟に行く事になるなんて!」

「僕のせいだ……お嬢様の執事でありながら、お嬢様の元から離れるなんて……」

走りながらそう言うハヤテの表情には焦りと後悔の色が露になっている。

「しっかりするんだ！ハヤテ君。君が嬢ちゃん達を信じてあげなくてどうするんだ。」

「そうだよ！ナギちゃん達ならきっと大丈夫だから！信じよう！」

「寝込みを襲う盗賊なんて、どうせ小心者アル！絶対大丈夫ネ！」

「皆さん……」

三人はハヤテに絶対大丈夫だと頷いてくれた。
ハヤテは一回深呼吸をすると、

「ハイ！絶対に助けましょう！」

大きく頷き返した。

く盗賊の洞窟く

ハヤテ達の予想以上に洞窟の入口には沢山の盗賊がいた。
入口付近だけでも100人はくだらない。

「……まさかこんなに人数がいるなんて」

「完全に予想外だったね。どれだけ大きな盗賊なんだか……」

岩影に隠れているハヤテ達は圧倒的な数の差に困惑していた。

「どうするアルか？この人数じゃ隠れて侵入するのは無理アルよ……」

ハヤテは出来るだけ見つからないように洞窟に入りたかった。

勿論バシテナギ達に危険が及ぶのを避けたいからであるが、それとここで体力を使い果たしてしまえば、当初の目的である魔王を倒す事が出来なくなるかも知れないからだ。

（一体どうすれば……）

ハヤテが唇を噛みしめ、苦心していると、突如ハヤテの視界に洞窟に向かつて歩いていく一人の男が映った。

「敵は俺が引き付ける。ハヤテ君達は隙を見て洞窟に潜り込むんだ」

それは長谷川泰三、その人であった。

「な、長谷川さん!？」

「心配するな……後から俺も追っさ」

「でも……!？」

ハヤテが止めようとするのを右腕を上げて制する。

「マダオの意味を知ってるか……?それは……」

長谷川はタバコをふかしてくわえる。

「それは……負けないダンディな男だアアアア!！」

「「長谷川さん!！」」

「おオオオオ!！」」

長谷川は盗賊に一人で突っ込んでいく!

「何だ!？」

「敵襲だ!」

「敵だア!」

50人の睨みが一斉に長谷川を捉える。

「無茶だ！長谷川さん一人である人数は！」

ハヤテも新八も長谷川を助けにいこうと飛び出そうとした時だった。

ピッ！

長谷川が装備していたダンボールの表面体のスイッチを押した。

「あ、あれは！？」

ガシーン！ガシーン！

長谷川の右腕が…左腕が…ダンボールに包まれてゆく。

右足、左足、そして全身がダンボールで包まれ、白と青のコーティングが施されていく。

関節の節々は金色に色を変える。

さらに頭にはダイヤのような装飾が浮かび上がりそこから左右に突起が飛び出す。

背中からは翼のようにダンボールが飛び出し青く色を成す。

その姿は……まるで……

ストライクフリーダム長谷川!!!

(((えエエエエエエエエエ!?))))

ハヤテ達三人はもう何が起こったのか理解出来ない。

「な、何だあの野郎!?!」

「なにもんだアアアア!?!」

「が、ガ　　!?!」

岩影のハヤテ達は勿論、盗賊達も愕然としている。

「うおおおお!!!」

翼からブースターが噴射し、長谷川は盗賊達に突進する!

「うわアアアア!?!」

「ギアアアアア!?!」

その威力にまず数人が気絶してしまう。

「はあアアアア!?!」

更に長谷川は何処からかビーライフルを二つ取り出すと、2丁拳銃のように盗賊達に向けて乱射する!

「ぐわアアアア!？」
「がはアアアア!？」

更に十数人がやられる。

「ひるむなアアアア! 敵は一人だアアアア!！」

「おオオオオ!！」

今度は数十人が一斉に長谷川に飛びかかってゆく。

しかし……

ゴオオオオオ!！」

長谷川は空高く飛び上がりそれを回避した!!

「と、飛んだアアアア!？長谷川さんが飛んだアアアア!！」

長谷川は空を自在に旋回すると、下の数十人の盗賊に向けて、

「当たれエエエエエエエエ!！」

そう叫ぶと、長谷川の翼から幾つものダンボールが分離、降下し、数十人の盗賊達に次々とビームを放っていく。

「づあアアアアア!!」

「ほぶばアアアアア!!」

「うぬらアアアアア!!」

次々と盗賊達は戦闘不能となっていく。

「あ、あれが……ド グーンシステム……」

「フーかストレスだよコレ……大丈夫なの!？」

ハヤテ達も見るに圧巻の戦闘。

もう既に半分の盗賊は戦闘不能になっているのだから……

「これで……」

長谷川は更に上昇していき、

ピッ、ピッ……ピッピッ……

モニターで残りの盗賊達全員をロックオンする。

「終了だアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして、あの有名な一斉射撃!!

*

洞窟内は外とは反対に、全く人がいなかった。加えて一本道という至ってシンプルな構造。

ハヤテ達はとにかく真っ直ぐ進んでいった。

「ぬわアアアア!!」

「悲鳴アルか!?!」

「お嬢様だ!」

突如奥の方からナギの叫び声が聞こえてきた。

「急ぎましょう!」

四人は頷くと、更にスピードを上げて奥に進んでいく。

そして、ようやく声のした場所に到着……

「お嬢様！！大丈夫ー」

「馬鹿ものオオオオ！！」

バキッ！

ナギが一人の盗賊をバインダーで叩いていた。

「こんなありきたりな展開で読者が納得してくれるとでも思ってるのか！貴様らの頭は小学生か！？」

「すみませんでした！先生！！」

叩かれた盗賊並びに周りの盗賊も一斉に頭を下げる。

「……………へ？」

ハヤテはその光景に目が点である。

「良いか！？漫画というのはインパクトだ！ただでさえお前達の作るキャラクターは地味だというのに、その上ストーリーまでこんなありきたりでどうするのだ！！」

「ハイ！」

ナギの言葉に全員が返事をする。端っこで歩がその様子を見て苦笑していた。

「あの〜、お嬢様？」

「む？おお、ハヤテか。思ったより早かったな」

「いや……早かったなでは無くて……これは一体」

ハヤテは改めて周りを見ると、机が縦に三列並んでいて、盗賊達が紙になにやら書きこんでいる。
しかも列事に作業が違つようである……

「つーかコレどう見ても漫画の作業場にしか見えないんですけど……」

「うむ。そうだが……？」

新八の問いに然も当たり前のように答えるナギ。

「いやいやいや……」

*

とどのつまり、こつこついう事だった。

彼ら盗賊はそもそも盗賊では無かったらしい。

元々は漫画家である首領に付き従って子分達だったそうなのだ。

しかし、漫画は全く売れず、稼ぐ事が出来ずに盗賊になって強盗を繰り返しては資金を集めて費用にしてたそうなのだ。

それで、ナギと歩を誘拐して身代金でも要求しようと考えたそうなのだが……彼らのその漫画の酷さに激怒し、いつの間にかナギによる漫画指導になっていたようなのだ。

「なるほど……全く理解出来ませんが取り敢えず納得しておきます」

「よく分からないけど……取り敢えず無事で良かったですね」

ナギの説明に完全に呆れ顔の四人。

「アハハハ……まあ、拐われた時はビックリしたけどね」

「ふん。私は終始冷静だったかな」

ナギの態度に流石に歩も戸惑っている。

ガタツ……

「お疲れさまです！！首領！」

周りの男達が一斉に敬礼すると、隣から首領と呼ばれる人物が出てきた。

かなりの大柄で、大きなバンダナをまいている。

「首領……？アレが……」

「確かに……いかにもボスっぽいね」

首領はハヤテ達の前まで来ると、全員を見下ろす。

(……………)

かなりの迫力にハヤテ達は息を呑む。

しかし、視線は徐々に下に下がり……

「嬢ちゃん……読ませて貰ったぜ、嬢ちゃんの漫画」

((((ええ！？))))

「そうか。それで？」

ナギが首領を見上げて言う。

ドン！

首領は大きく足踏みすると、

「感動したア！！」

涙を流していた。

（（（（えエエエエ！？））））

最早話についていけない五人。

しかし、そんな事はお構い無しに首領は話を続ける。

「嬢ちゃんの漫画には、魂が込もっている！俺はこんな生きた漫画は読んだ事がねえ！」

「……………そうか」

ナギはその評価に満足そうに頷いた。

今度は首領は四人を見渡す。

「オメー達、嬢ちゃん達の仲間かい？」

「ええ……まあ」

「そうか……………大変申し訳なかったアアアアア！！！」

何と首領が頭を下げたのだ。

「いや……………そんな」

「俺達が間違っていた！漫画の為に盗賊をやるなんて本末転倒だ！盗賊やっていて生きた漫画なんて描ける訳ねえ！」

「……………はあ」

「これからは俺達はもう盗賊はやらねえ！漫画一筋でやっていく！」
首領は目を輝かせてそう叫ぶ。

「嬢ちゃん……ありがとうな。おかげで目が覚めたぜ……」

「フツ……これから頑張るのだぞ」

ナギと首領は堅い握手を交わした。

「こんな事になっちまったお詫びに、何か俺達に手伝える事はねえかい？」

首領はハヤテ達全員を見回して言う。

「そんな……大丈夫ですよ？」

「それじゃ俺達の気がすまねえ！」

遠慮するハヤテに頑として引かない首領。

「………だったら、魔王城に連れて行って貰うのはどうアルか？」

「何！？オメー達、魔王城に行こうってのか！？」

「うむ、私達はその為にこの洞窟を目指してたのだ」

ナギの言葉に感銘を受けたように後ずさる首領。

「何てこつたい……流石は生きた漫画を書く嬢ちゃんとその一味だ……」

そして首領は子分の男達を振り返る。

「聞こえていたなア！？野郎共！

俺達の誠意の見せ場だ！命に代えても嬢ちゃん達を魔王城にお連れしろオオオオ！！分かったかア！？」

「オオオオオ！！！」

こうして、ハヤテ一行は盗賊達の助けを借りて魔王城に向かうのであった。

「アレ……ハヤテ君、盗賊仲間にしてない？僕ら……」

「まあ……良いんじゃない？」

第五十三訓

最初の試練は盗賊退治くらいがちょうどいい(後書き)

教えてー！銀八先生

銀八

「では早速最初の質問なー」新八に質問。ハヤテの女性キャラで一番怖かったのは誰？」

オイ、何でこんなヤベー質問が来てるんだよ。まあ、いつか。んで？どうなんだ新八？」

新八

「あんたさりげなく自分を質問から消してますよね！？この質問先生も聞かれてたでしょ！？」

銀八

「バツカ、オメー。こんな事普通に言ったらオチ見えてんだろ？」

新八

「だったら読者にしか聞こえないくらいのボリュームで会話しましょう」

銀八

(……………まあ、俺はアレだな。

か だな……………新八は？)

新八

(いやいや！？答えて無いでしょ！？まあ、僕は……………

さんで

すかね？)

銀八

「……………ハイ、続いての質問。『ワタルに質問。新八の事どう思う？』」

ワタル

「え？うーん……………メー」

新八

「メガネ！？どうあってもメガネなの！？」

ワタル

「メガネ掛け機だ」

新八

「んな器物無えよオオオオ！！」

銀八

「次の質問な。『咲夜に質問。シリアスなカツコイイツラと電波なボケのツラ。どちらが良い？』」

咲夜

「中々難しい質問やな。確かにシリアスな小太郎もええけど、今一つおもろくないしな……………やっぱり電波な方がー」

マリア

「まあハヤテ君はいざというときに優柔不断だったりしますからね。銀さんの方が頼りになる時もあると思いますよ。と言っても普段はアレですけど」

銀八・ハヤテ

「……………何か怒ってます?」

マリア

「いえ 別に原作同様に執事クエストとかでもおいてきぼりだったり、これからも絶対出番無いだろうとか関係ありませんわ?」

銀八・ハヤテ

「……………」

銀八

「じゃ、今回はこの辺で……………」

ハヤテ

「じ、次回もよろしくお願いしますね……………」

第五十四訓 近道に危険は付き物（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「遂に銀時殿一行も動き出します。街道を塞ぐドラゴンとは一体？
そして彼らの運命や如何に！？」

伽藍

「後書きには下手ですが、一応ドラゴンのイメージの絵も載せました。良かったら見て下さい」

ナギ

「本当に下手だったけどな……」

神楽

「小学生の方がもっとマシに描けるアルな……」

伽藍

「……………うん。まあ否定出来ないんだけど……」

ハヤテ

「で、では始まります！」

第五十四訓 近道に危険は付き物

くリベアリアく

「うーむ……ドラゴン退治と言ってもな」

「一体どんな竜なんでしょうか……」

中央広場で首を捻る三人。

半ば無理矢理王様に依頼を押し付けられてどうしようか考えているのである。

「しかし序盤からドラゴン退治とは……かなりの血道になりそうですわね」

「それ以上に王様に問題があるの……」

伊澄も真司もお城を見て溜め息をつく。

「でも国の交易路を塞いでいるのだから、ここの人達も困っているって事よね」

「む、まあ……そうじゃな」

ヒナギクの言葉に頷く真司。

「だったら行かないと。」

私、生徒会長だから…目の前に困っている人がいたら助けられない訳にはいかないわ」

「流石、会長さんですね」

「……まったく。だったら我らも待つてる訳にはいかんの」

そう言いきったヒナギクを見て微笑して溜め息をつく二人。

「ところで……銀時は？」

「ああ、奴ならさつき、『かなり緊急な用事がある』と、何処かに行ってしまったぞ……」

「……緊急？」

実は銀時はお城から出て直ぐに、別行動をとっていたのだ。彼は真司に一言残して姿を消していた。

「直ぐに戻るから先に街道の入口に行っていてくれ、と言っていたかの……」

「そう……じゃあ、取り敢えず先に行ってみようか」

ヒナギクは少し疑問に思ったが言う通り三人で入口に向かう事にした。

*

三人がリベアリアの北にある出口……つまり街道の入口に到着して更に30分程経った頃。

「……………遅いわね」

「そうなの……」

三人はまだ姿を見せない銀時を待っていた。

「何かあったのでしょうか……」

伊澄も心配そうに街路に目を向けた時、
建物の角から見慣れた白髪頭が……

「ようやく来たか……」

「悪い悪い……………遅くなった」

無論、銀時であった。

彼は頭を掻きながらゆっくりと三人の所へ歩いてくる。

「一体どこに行ってたの？」

「ああ……えっと、つまりだな……」

どうも歯切れの悪い銀時を不思議そうに見るヒナギク。

「ん？……お主、何故頬にクリームが付いているのじゃ？」

「ばっ!？」

真司の言う通り、銀時の頬には生クリームが付いていた。

銀時は慌てて頬を拭うも、

ヒナギクは何かに気付いたようにそれを見る。笑顔で……

「………銀時？一体何処に行ってたのかしら？」

「………いや、まあこれはアレだ……情報の聴き込みを兼ねた糖分摂取を……」

「簡潔に言つと……？」

「………パフェ食べてました」

笑顔のヒナギクの圧力に銀時は成す術なく口を割ってしまった。パフェ代は勿論パーティーのお金である。

「そ・れ・のどこが緊急な用事なのよ!!」
ヒナギクは銀時に詰め寄る。

「待て待て待て!!ちゃんと情報も持ってきたから…取り敢えず落ち着けて」

銀時は急いで懐から紙切れを取り出すと、三人に見せる。

「何じゃ?この紙は?」

「その街道にいる化物の情報…つーより依頼の貼り紙だ」

銀時がヒラヒラと見せた紙にはこうあった。

討伐依頼 n o . 5 9 『アルム街道の竜^{ドラゴン}を退治してくれ!』

・難易度

・依頼者・リベアリア商工業組合一同

「リベアリアを支えていると言ってもいい唯一の交易路が凶悪なドラゴンによって塞がれちまっている。これじゃ商売あがったりだ!何とかしてくれ!!」

〈内容〉

【古竜】

太古の昔に封印されたとされる伝説の地竜。

魔王により復活し支配下におかれ、現在はアルム街道に放たれている。

〈見聞による特徴〉

・黒と灰色に染まった巨大な竜 ・四足歩行で翼はあるが錆びて飛べないらしい

・かなりの硬度を誇る皮膚と長くゴツゴツとした尾が特徴
・その他は謎……

〈条件〉

交易路の安全確保

黒竜の討伐又はアルム街道からの追い払い。

「これって……」

「ホラ、よくあんだろ？RPGのギルドとかでクエストが受けられるやつ。それぞれ」まじまじと紙を見る三人に事なしげにいう銀時。

「それぞれって……」

「こついうのはなア、えてして討伐依頼とかになってるもんなんだよ。エルミ ジュ然り、F 12然り」

「じゃあコレを探してお店に？」

「まあ、そんな所だな」

そう言つてヒナギクに答える銀時。

「確かに、その仮定でパフェを食べざるを得なかったのは事実……しかし、情報を得る為には時としてそれなりの代償を払わなくてはならねえ。それがRPGのモットーだ」

「いや、単にお主がパフェ食べたかっただけだろ。代償になつたらんだろ」

呆れたように銀時を見る真司。

「でも有力な情報が手に入ったのも事実ですから。良しとしませんか？」

「まあ、そうですね。敵がどんなものかも分かったし」

「確かにの……」

伊澄の言葉に納得したように答えるヒナギク。
真司もそれには同調した。

「んじゃ、行くか」

（（（……………）））

色々とありはしたが取り敢えず、一行はアルム街道へと歩を進める事になったのだった。

くアルム街道く

国の商工業の基盤となっているこの街道は最近まで使われていたにも関わらず荒れ果てていた。石で舗装された道は陥没が多々見られ、道の両脇に立つ壁は損傷が激しく半分以上崩れているものもあった。

1843

「これが最近まで使われていたなんて信じられないわね……」

「そうですね…長年放置されていたとしても、ここまでにはならないと思いますか……」

ヒナギクも伊澄も街道の荒廃具合に驚きながら足を進めていた。

「うー……」

「あー……」

しかし、そんな深刻な雰囲気似つかわしく無い声をあげる後ろの男二人。

「塩分が…醤油が摂りたい…」

「糖分が…パフエが食いたい…」

「銀時はさつき食べたでしょ？」

ヒナギクは呆れて振り返る。

「お前、あんな一杯じゃ一日どころか一時間しか持たねえって。

あの酒場の店長、グラスの底上げて沢山入ってるように見せてやがった…」

「……………よくあるの。他にもコーヒーとか頼むとやたら氷を沢山入れて量をごまかす喫茶店とかもあるな」

「ああ、そりゃダメだな。俺の知り合いの喫茶店の店長も『氷と飲料の割合を7：3にしたらよくな？黒字じゃねコレ？』とか言ったら店潰れたから」

「……………」

しょうもない会話に華を咲かせている二人に先行きの不安を募らせる伊澄とヒナギクだった。

「それにしても、一体どこまで続いているのかしら？この街道」

「確かに……………やたらと長い。っというかそもそもその竜とやらは何処に出没するんじゃ？」

立ち止まった四人の前には真っ直ぐ伸びる街道しか映らない。

「…この先に広い場所があるみたいですよ。もしかしたらそこで待ち構えてるのかもしれないですね…」

伊澄の開いた地図によると、暫く街道を真っ直ぐ進んだ先に高い崖に囲まれ、広く円状に開けた場所が描いてあった。

「なるほど……化物が暴れまわるには格好の場所って訳だ」

銀時は地図を見て溜め息を一つ。

「……例え現実世界で無くとも、負ければ次はありません。

もしここでやられれば永遠に外には出る事はないでしょう……」

いつになく真剣な面持ちの伊澄の言葉に周りが緊張感につつまれる。

「「……………」」

ヒナギクも真司も改めて事の大きさを認識したのか表情が堅くなる。

「ですが……………」

伊澄は振り返って三人を見る。

「私達なら絶対に大丈夫です。

この四人で越えられない壁ならば他の誰にも越える事は出来ません」

「……………鷺ノ宮さん」

「確かに……言い得て妙じゃな」

ニッコリと微笑んで言いきった伊澄に二人もすっかりと頷き返した。

そんな様子を見て銀時はフツと口元を緩めると、

「ったりめえだ……さっさと済ましてカニを持って帰らねーとな」

銀時が頭を掻きながら歩き出し、三人もそれに続く。

気を引き締め直した一行は、古竜戦に向けて街道を進んでいくのだ
った。

しかし、待ち受けているものの強大さを一行はまだ知らない……

*

一行が更に真っ直ぐ続いた街道を歩き続けると、開けた場所が見えてきた。

「霧……？」

「随分と見晴らしが悪い悪いのう……」

地図にあった崖に囲まれた広場には深い霧が立ち込めていた。重々しい空気に、歩く足音さえも周りに響き渡るほど静寂に包まれている。

その薄気味悪く、しかしどこか神聖な雰囲気になんとも言えない表情の一行。

「何処に敵が潜んでいるかわかりません……皆さん、十分に気を付けて下さい……」

「何かワ　ダと巨像みてーな雰囲気……つかワ　じゃねコレ？」

「1151…」

能天気な声をあげる銀時にヒナギクが呆れたようにたしなめた。

更に奥に進んでいくと、小さいが確かにドンという地鳴りが聞こえてきた。

「……………来るぞ」

「ええ……………」

突然の地鳴りに、真司と伊澄が前方の霧を睨み付ける。
ヒナギクも銀時もすぐに気付いたように目付きを変えた。

徐々に大きくなる地鳴り……………

霧が少しずつ左右にはけていく……………

そしてのっそりと……………

霧の中から竜の顔が浮かび上がってくる。二本の角らしきものに……………
赤い眼が銀時達を覗く……………

「!?!?」

かと思うと、巨大な体半分がゆっくりと飛び出してきた。
鋭い牙には霧がまとわりつき、前足には恐らく引きちぎられたであろう鎖を引きずっている。

「アレが……古竜……」

「いかにもRPGに出てきそうだな…オイ」

古竜はズンスンと前に進んでゆき……遂に銀時達の前に立ちはだかつた。

おぞましい紅眼が四人を見下ろす。

「つたく……^{やっし}奴さん、完全に待ちくたびれてるみてえだぜ……」

「そうみたいね……」

「これは……中々だのう」

「ですね……」

四人もあまりの威圧感に顔をひきつらせる。

「ウウウウ……」

古竜は大地の奥底を震わせるような唸りをあげる。

「……気張れよテメーら。こっから出るまで死ぬんじゃねーぞ……」

「オメーら、来るぞ!!!」

気付くと古竜は前足を振り上げている。

「!?!?!」

前足は唸りをあげて四人に振り下ろされた!!

ヒナギクは伊澄を、銀時は真司の腕を掴み後方へ飛び何とか直撃を避ける。

「オイオイ……コイツアヤベーな……」

「当たつたらまず生きてないでしょうね……」

古竜が振り下ろした前足を見て息を呑む銀時とヒナギク。

堅い筈の地面は無惨にも抉りとられ、周りにも長くひびが走ってしまっている。

「また来るわ!!!」

「ッち!!!」

更に今度は左前足を横に凧ぎ払ってくる。
大地が揺れ、轟音と共に砂塵が巻き上がる！

銀時はいち早くそれに対応し、真司と伊澄を掴んで後ろに追いやる。
ヒナギクも辛うじて回避するも、あまりの風圧に体制を崩してしま
う。

古竜はその隙を見逃さなかった。

「会長さん！危ない！！」

「！？」

突然、舞い上がる砂煙の中から、長くゴツゴツとした尾が唸りをあ
げてヒナギクに迫ってきた。

（しまった……！！）

ヒナギクは素早く立ち上がるも、とてつもないスピードで尾は目前
である！！

（くッ……！！間に合わない！！）

彼女は目を閉じて……

ドンー！

(え……?)

しかし、きた衝撃は全く別のものだった。

ヒナギクは大きく横に突き飛ばされたのだ。

(ぎ、銀時!?)

咄嗟に横を見ると、そこには銀時の姿。

そう。彼はヒナギクを庇うために突飛ばしたのであった。

が、次の瞬間…

轟音をあげて振るわれた尾が銀時に直撃した!

「がはッ…!?!」

銀時は成す術なく吹き飛ばされ、遙か後方の崖に叩きつけられる!

「銀時!?!」

ヒナギクは急いで銀時の元へ駆け寄り寄りとするも…

「桂!前じゃ!」

「!?!」

第五十四訓 近道に危険は付き物（後書き）

因みに、ドラゴンのイメージはこんな感じです。

> i 1 5 6 2 9 — 2 1 5 9 <

下手ですみません。

モデルはFF12のリンドヴルムっていうモブです。

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ、本日最初の質問。『作者が出した霧崎と白井っていうオリキャラがいましたが、まったく出番がありません。どうなんですか？』」

伽藍

「ハイ。え〜とですね…彼らは三千院本家のSPの中の二人という事になってます。仕事柄普段は練馬区は愚か物語の舞台にはほとんど姿を現しません。

まあ、ハヤテのごとくでいうところのヤクザ達並のポジションと違って、構いません。本家の話があれば出ると思います。多分正直、作者の失敗の一つです。本当にすみません？」

銀八

「という訳で、心のなかにしまっておいてやって下さい。

続いての質問。『新八に質問。マダオの活躍を見て自分にも光の翼があれば、と思った？』

だとよ、新八」

新八

「いやいや、別に悔しくも何ともないですけどね！？やろうと思えばいつでも出来るし……やらないだけだから、僕の場合」

銀八

「次の質問な。『銀さんとハヤテに質問。好きな恋愛アニメキャラは？』

え、俺はこついつの見ないから知らねーな」

ハヤテ

「え、えくと僕もちよつと分かり兼ねますね……」

伽藍

「すみません。そういう訳です？」

銀八

「んじゃ、次の質問。『歩に質問。ずっと活躍出来て無いけど悔しい？』」

歩

「そつだよ！何でか私忘れられてない！？」

「ハイ、今日はこれまで。もしもシリーズは次回やるから。そういう事で」

新八

「気をつけー、礼！」

伽藍

「そんな感じで、次回もよろしくお願いします」

第五十五訓 どんな時でも心だけは真っ直ぐに（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「対古竜戦も今回で決着です！
しかも今回はアレの意外な力が発動します！」

伽藍

「因みにその力は小説の完全捏造の設定なので、原作には一切ありません。勝手に作ってしまいました…」

ハヤテ

「まあ、二次小説によくある感じですね。オリジナルの追加設定は…」

クラウド

「何の力なのかは、本編を見てのお楽しみですよ？」

伽藍

「取り敢えず、第五十五訓始まります！」

ハヤテ

「では、どつぞー！」

第五十五訓

どんな時でも心だけは真っ直ぐに

「ウウウウ……」

憤然と立ちはだかる古竜と対峙するヒナギク達三人。

吹き飛ばされた銀時の位置から大きく離されてしまっている。
ヒナギクは直ぐに彼の元に向かおうとするが、

「……………!?!」

「待て桂。一人で向こうまで突っ込むのは危険じゃ」

ヒナギクの腕を掴んだのは真司であった。

「澳門君……………」

「心配するな。奴があの程度でくたばる玉か。なあ、伊澄？」

「ええ……………勿論ですわ」

伊澄も確信を持って頷いた。

「そうね……………分かったわ。だったら今はあの竜を銀時から引き離さないよね」

「……………?」

「私が竜の注意を引くわ。その間に二人は後方から術で攻撃をお願い」

「会長さん、それはー」

「大丈夫。そう簡単に捕まりはしないわ」

ヒナギクは自分を安心させるように言うと、二人を交互に見る。

「わかりました。ですが気をつけて」

「我らも最大級の援護をする。何とか頑張ってくれ」

「ええ！」

そう言うと、伊澄と真司は更に後方に下がり、左右に分かれる。そしてヒナギクは古竜の目の前を敢えて横切ってゆく。

「……ウウウガア！」

古竜は目の前の獲物を逃そうとする筈もなく、右前足をヒナギクに向けて振るつ。

「……！！！」

ヒナギクは難なくそれをかわし、尚も古竜の前に飛ぶ。

「ガアアアア！！！」

今度は左前足が尻ぎ払われるが、ヒナギクは飛び上がってそれを避

ける。

そのままの勢いで右側の方に回り込んだ。

「はぁ！」

バランスを崩そうと正宗を右前足に振るったが、

「な！？……堅い……」

岩のような皮膚にくるまれた足は正宗を簡単に弾いてしまう。

（どこかに弱点は……）

「グオオオオオオオ！！！」

「っ……！！」

古竜は自分の右懐のヒナギクに向かって左前足を払う。

ヒナギクは横に飛んで回避し、反対側の懐の下に着地する。

（あれは……！？！）

「ガアアアアアア！！！」

ヒナギクが何かに気付いたように古竜を見上げた。直ぐに古竜は尚もヒナギクに前足を振り上げる。

ドドーン！

「グオ!?!」

しかし突如古竜の顔に何かが突っ込んできた!古竜の攻撃は不発に終わる。

「助かったわ、澳門君」

「フン、礼を言ってる場合では無かるう」

真司が式術を放ったのであった。更に真司は古竜に向けて黒い塊を放つ!

ドドン!ドドン!

「ゲルウウウ……」

古竜は顔を庇おうと体を曲げたので、懐ががら空気になる。

ダッ!

その隙にヒナギクは古竜の腹の内側に走り込んだ。

(やっぱり!ここだけ防御は薄い!)

「はああああ!」

「ゴオウウウ!?!」

ヒナギクは腹部に正宗を斬りつけると、古竜は呻き声を上げて横に崩れてゆく！

「効いた！」

後方の二人も驚いたように声をあげる。
しかし、古竜もそんなに甘くは無かった。

ブン！

古竜は崩れていく体制を勢いに換えて、ヒナギクに向けて尾を振り払った！

「会長さん！動かないで！」

「!?!」

尾は轟音をあげてヒナギクに迫ったが、突然彼女の周りには球体状のバリアが張り巡らされた！

ドオオオオン！！

振り払われた尾は何とか防がれた。
しかしバリアには輝が瞬く間に入ってゆく。

「まさか、破られる!？」

「ガアアアアア!！」

古竜が更に力を込めると脆くもバリアは粉々に破壊されてしまう！
そのまま地面に叩きつけられた尾は地割と共に大量の砂塵を巻き上げる。

「会長さん!!」

伊澄はヒナギクに向かって叫ぶが…

「大丈夫じゃ。我もいるのを忘れたか？」

「真司様!？」

砂煙が引き始めると、ヒナギクの前には大きな盾が尾を防いでいた。

そう。真司は伊澄の術が破られる前に玄武の盾を発動していたのだ。
った。

「ウウウウ……」

古竜は諦めたように尾を戻すと、体制を立て直す。

しかし、直ぐにヒナギクから目を離すと、真司を睨み付ける。

「ガアアアアア!！」

「真司様(君)!!」

古竜は翼を広げると真司に向かって突進して来た！！

(……………まずい！ターゲットを真司様に…)

伊澄もヒナギクも真司から距離が離れている。

伊澄は札を構えるが古竜は真司の目前まで接近していた！！

「ガアアアアアア！！」

(く……………！！この速度では逃げ切れん…)

真司は覚悟を決めようとした時……………

ドガッ！！

「ゲアア！？」

横から物凄い速度で岩の塊が古竜の頭部に激突した！

古竜は堪らず突進を止める。

「一体……………！？」

真司が岩の飛んできた方向を向くと、

「うらアア！！」

砂塵の中から、銀時が飛び出してきた！！

第五十五訓

どんな時でも心だけは真っ直ぐに

「うひゃあアア!!」

「銀時!!」

「銀時様!!」

砂塵を吹き飛ばし、古竜に突っ込んでいく銀時！！

対する古竜も銀時に向かって前足を振り降ろす！

「グオオオオオ！！」

「ーッ！！」

しかし銀時はその攻撃を避けると、その前足に飛び乗り、そのまま前足から肩の方に駆けていく！！

「速い！！」

驚いて銀時見上げている真司と伊澄をよそに、銀時は肩まで一瞬で登り詰めると、古竜の顔に向かって跳んだ！

「おおおおおお！！！！」

洞爺湖に渾身の力を込めて、古竜の顔面に叩きつけた！

「ギヤアアアアアア！！！！」

その威力は鬼神の如し…！！

洞爺湖は古竜の顔面のまわりを覆っていた厚い皮膚を砕き散らす！！

古竜は体制を崩してよろめいた。

「今です！真司様！」

「ああ！」

左右に分かれている伊澄と真司が札を構える。

「開け、我が使役する式神が通ずる門【鬼門】よ！」

真司の前には大きな扉が立ちはだかった。

「術式八葉……建御雷神！」

伊澄の周りが光に包まれ、大きな雷が幾重も現れる。

「グギイイアアアア！」

空気を裂くような雷鳴を轟かせ、無数の雷が古竜に直撃した！

「銀時！」

「ああ！」

雷を浴び続け全く身動きの出来ない古竜を見て、ヒナギクと銀時が古竜の懐へ駆ける！

「グウウウウウウウ！」

二人は胴体の内側まで走り込むと、

「はあああ！！！」

「おオオオオ！！！」

腹部に向かつて銀時は縦に、ヒナギクは横にそれぞれ木刀を叩きつけた！！

「ゴアアアアアアアアアア！！」

その威力に屈して後ろに崩れ落ちる古竜。

「銀時に桂、よけている！」

真司は言うのが早いか詠唱を終え鬼門を開く。

二人は言う通りに古竜から離れた。

「出でい！^{スサノオ}守炙乗雄！！」

重々しい扉が開かれると、眩い光と共に巨大な刀を持った大男が現れた。

「古に伝えられし英雄スサノオよ。我に力を貸したまえ！」

大男は頷いたような素振りをみせると、刀を構えて崩れている古竜に突っ込んでいく！

「断ち斬れエエエエエ！！」

真司の叫びと共に、大きな刀が古竜に振り下ろされた！！！！

銀時達は顔をひきつらせて古竜を見据える。

「困りました……………、？」

伊澄は何かの変化に気付いたように周りを見回す。

（この気は……………正宗？）

伊澄はその変化がヒナギクの持っている正宗から来ている事を感じとった。

正宗は僅かだが、見た事の無いような気を出していた。

周りは勿論ヒナギクも気付いていない様子だが、明らかに今までの正宗とは違う。

（まさか……………これは…）

「ガアアアアアア！！！！」

「！！！！」

古竜は翼を広げ四人に突っ込んでくる！！

ドオオオオオオオオ！！

四人は避けるも、先程より凄まじい風圧に体制を崩されてしまう。

「あのヤロ、だいぶご立腹みてーだぜ」

「一体どうすれば……」

銀時達は古竜の勢いに顔をしかめている。
すると、伊澄が古竜を見据えて口を開いた。

「危険ですが……考えがあります」

「え？」

「会長さん、正宗に何らか変化が現れています。少し前に差し出して頂けませんか？」

ヒナギクは言われた通り正宗を前に差し出すと、

「な！？これは……!?!」

「やはり……」

正宗には先程より明らかに変化が見られた。

正宗の周りには美しい紫色の気がまとわりついていた。

ヒナギクも驚いて正宗を見る。

「伊澄……これは一体？」

「正宗に眠っていた力の一部が解放されようとしています。
恐らく会長さんの気持ちに呼応したのでしょう……」

聞いた事しか無いので、私もこんな正宗は見た事ありませんが……」

「……眠っていた力？」

ヒナギクは改めて不思議そうに正宗を見る。

「ウウウウウウ……」

そうこうしているうちに古竜は四人に向き直っていた。

「奴もあんまし時間はくれねえみてーだ。伊澄、オメーの作戦つてのは？」

「私も聞いた事しかありませんが……正宗の力が本物ならば恐らくあの竜も倒す事が出来るかもしれません。会長さんがあの竜の弱点に正宗の力をぶつける事が出来れば……危険な上に確証もありませんが……」

伊澄は曖昧な表情をしてみせる。

「でもやるしかないわね。良く分からないけど、それに賭けてみましょう」

「しかし……桂もどうすれば正宗の力を出せるのか分からないのだから？危険すぎやしないか？」

「ええ……でも私は生徒会長、ここで逃げる訳にはいかないわ」

「そうか……」

こんな状況でも笑顔をみせられるヒナギクに真司は驚いたが、納得したように頷いた。

「だったら……化物の引き付け役は俺だな。オメーらはヒナギクが化物に気付かれねーように援護を頼む」

銀時は洞爺湖を構えて古竜を見据える。

「ハイ」

「分かった」

二人も頷いて銀時を見る。

「んじゃ、狩りの時間だ。

行くぜテメーらア!!」

ダツ!!

「でえあアアアア!!」

銀時が一直線に古竜に向かって突っ込んでいく!

「グオオオオオ!!」

「うア!!」

しかし古竜は空高く咆哮をあげると、周りの雷を振り払ったのだ！

「いけない……銀時様……！」

「ガアアアアアアアアアア……！」

古竜は姿勢を低くすると、物凄い勢いで体を捻らせる。

ゴオオオオオオオオオオ……！！

目にも止まらぬ勢いで尾が銀時に迫る！大気を押し退け、風が悲鳴をあげるほど……

「ちッ……！」

古竜の尾は更に勢いを増し、銀時に直撃した……！！

「がはっ……！」

「銀時（様）……！！……！」

あまりに圧倒的な威力に銀時は………

「ぬぐおオオオオオオ………」

「……？」

古竜は驚いて尾の方向を見る。
それもその筈……

なんと銀時は古竜の尾を受け止めていたのだ！

それもたった一本の木刀で……

「おおおおおお……」

古竜には理解出来ない。こんな小さな人間一人に自分の渾身の一撃を受け止められている事が……

「悪いなデカブツ……」

銀時は歯を食い縛りながら古竜を見上げる。

「俺（私）達の勝ちだ（ね）」

古竜の胴体の裏側……腹部には正宗を構えてヒナギクの姿！
正宗の紫色の光は澄んだ桃色の光に変わった！

「!?!」

「はアアアアアアアアアア……」

ヒナギクは腹部に向かって思いきり光輝く正宗を振るう。

「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアア」

正宗から飛び出した桃色の光は大きな光の剣となって、古竜を貫いた！！！！

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
……………」

眩い光を放つ桃色の剣の柱は、古竜を突き刺したまま悠然と立ちただかっている。
まるでヒナギク達の勝利を祝福するかのよう……………

「アレが正宗の力が……………」

「ええ、私も初めてみました…でも流石会長さんですね。まさかあれほどまで正宗が呼応するなんて」

真司も伊澄も光の柱に吸い寄せられるように見惚れていた。

「勝ったんじゃない……………」

「ええ……………」

桃色の光が正宗から消えると同時に、古竜も姿を消していった……

「……………」

その様子を驚いたように見上げるヒナギク。

「勝ったのよね……………」

ドサッ……………」

「ぎ、銀時!?!」

一方、木刀一本で尾を受け止めていた銀時は仰向けに倒れこんでしまった。

「ちょっと、大丈夫!?!」

ヒナギクは慌てて銀時に駆け寄る。

「あゝ……………、流石に銀さんも疲れたわ。こりゃ、ババアから依頼料ふんだくるしかねーな……………」

「……………ええ、そうね」

無事だった事に安心してホッと息をつくとき、ヒナギクは銀時の隣に座った。

「ねえ、銀時…………?」

「あん？」

「これって、コメディ小説だったわよね？確か……」

「……………確かな」

巨大な光の剣は、綺麗な軌跡を描きながら空に消えていったのだ
た……

*

こうして、一行はアルム街道の竜を何とか倒す事に成功。

そして街道をドンドンと進んでいき、遂に街道の出口の前までたどり着いた。

「この街道を抜ければ、魔王城は直ぐだそうです」

「よく考えたらここからが本番なのよね。気を引き締め直して行かないとね」

「ええ、その通りです」

ヒナギクと伊澄はそう言っつて後ろを振り返るが…

「塩分……醤油をくれエ」

「糖分……パフエをくれエ」

やる気0以下の二人。

古竜戦の時の姿はどこへやら…

「ハア……」

これから先の不安に頭を抱えるヒナギクであった。

第五十五訓

どんな時でも心だけは真っ直ぐに（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八先生

「つー訳で本日最初の質問。ヒナギクさんに質問。今回を含め、色々銀時に助けてもらっています。正直キユンときたシーンはなんですか？」
『
そりゃ勿論ー』

ヒナギク

「ありません」

銀八

「ちよつ、オメーそんなバツサリ言わなくても良くないですか？もう少し考えてくれても良いんじゃないですか？」

ヒナギク

「こんな大人にキユンとくる事なんてありません」

銀八

「まあ、まな板娘の話は置いておー」

【しばらくお待ち下さい】

プイーーーーー

銀八

「……次の質問にいかせて頂きます」

新八

「先生……大丈夫ですか？」

銀八

「前が全く見えねえよ……まあとにかく次の質問『銀八に質問。現在出番のないツラやマリア達は何してるんですかね？』」

ハイ、ズバリ答えます！

マリアは原作通り屋敷で一人カラオケとかやってるんじゃないですか？」

マリア

「そんな事やってません！／＼／」

銀八

「ツラは〜……」

桂

「ツラじゃない桂だ」

銀八

「オメー、うぜーから一々出てくんないよ……」

桂

「ふむ。俺は基本的に朝起きてギンをモフモフして、昼御飯を食べてギンをモフモフして、晩御飯を食べてギンをモフモフして……」

咲夜

「仕事しろオオオオ！このダメ侍イイイイイ！」

桂

「悪いが咲夜殿！ギンのモフモフだけは譲れんぞ！」

咲夜

「そんな事はどうでもええねん！」

銀八

「ハイハイ、勝手にやってる。」

続いている質問。『ヒナギクに質問。今回の銀時の行動をどう思った？（助けられてた事と、聞き込みの時のアレね）』

ヒナギク

「先生……甘いもの摂り過ぎると本当に病気になるますよ？」

銀八

「その前に俺はオメーに病院送りにされそつで怖えよ」

ヒナギク

「どつという意味かしら？」

銀八

「……続いている質問『ハヤテ陣に質問です。皆さんがパー子とスラ子を見たら？』」

ハイ、ズバリ答えます！これはいずれ本編でやるので楽しみに。

え、更に質問。『マリアさんに質問。RPGゲームになりたい職業は？』」

マリア

「そうですね。…まあウィザードリーでもメイドがありましたからメイドでしょうか？」

ハヤテ

「マリアさん一応17歳ですよね？」

ナギ

「本当にな…」

銀八

「んでこの前いったももしもシリーズだけど…作者」

伽藍

「ハイ、すみません。このもしもシリーズの答えですが、すみません。出来ませんでした？」

【銀風】さんの『混沌学院』や『銀魂×ハヤテ！3年Z組雪路先生？』そんでもって銀さんが白皇学院へ？混沌の学校生活開始』という作品がハヤテ×銀魂の学園ものになっております。

それが今回のもしもシリーズに近い答えになっていると思います。

【銀風】さんなんか勝手に宣伝みたいな事してすみません！でも、とても面白いので是非読んでみて下さい」

銀八

「んじや、今日はいいまでー」

伽藍

「次回もよろしく願いします」

第五十六訓 時には寄り道も悪くない(前書き)

クラウドの後書きの館！

クラウド

「今回は少し遅れましたな…」

伽藍

「すみませんでした？実は学校である成績が1ついたんで、今年大
学受験をする事が出来ずに来年浪人する事が決定しまして……
シヨックで寝込んでいました」

ハヤテ

「浪人って……それ来年小説書いて大丈夫なんですか？」

伽藍

「大丈夫です！むしろ勉強のストレスを解消する為に積極的に執筆
したいと思います！」

クラウド

「まあ、作者が書きたいとおっしゃるなら……」

伽藍

「勿論……今の自分にはこの小説が生き甲斐みたいなものですから
！」

ハヤテ

「なるほど……」

クラウド

「まあ、そういう事ならこれからも頑張っていきましょう」

伽藍

「ハイ！では本編、始まります！」

第五十六訓 時には寄り道も悪くない

くビストウナ平原く

ガタツ……ガタツ……

「いや、何かよく分からない事になってきちゃいましたね……」

「まあ、良いんじゃないかな？仲間が多いに越したことは無いし」

ハヤテ一行は只今、馬車に揺れられて移動中であつた。

盗賊達の馬車で魔王城まで連れて行って貰っているのである。

「それもこれもナギのおかげアルな！」

「私は何もしてない……」

漫画を描く者なら誰しも通ずるものがあるのさ……」

（（（（………？））））

ナギの言葉に神楽以外が首を傾げる。

「それより、あとのくらいで魔王城に着くんだ？」

長谷川が馬車の窓から景色を覗く。

「確かに、結構時間経っているな」

「僕ちよつと聞いてみますね」

ナギの言葉にハヤテは馬車の窓から顔を出す。

「すみません、あとのくらいで着くんでしょうか？」

「おう、あんちゃん！あと10分くれえだな」

馬に乗っていた首領が振り返って答える。

「あ、ありがとうございます」

「ああ、もうちよい待ってな！」

因みに馬車を牽いているの馬には首領と部下が二人。
そして脇から後ろにかけて馬に乗っている部下が数十人ついてきている。

「あと10分くらいですって」

「そっか。もうすぐだね…」

「何だか緊張するな。魔王城ついたらラスダンだろ？」

歩と長谷川は緊張した面持ちでハヤテに頷き返す。

「そうですね…何かあるかわかりませんが、気を引き締めて行きましょう」

新八の言葉に一同は真剣に頷き…

「キツホオオオオオ！」

お城って事は食べ物沢山あるか！？お宝沢山あるか！？」

「フツ……まあこの私にかかればどんなダンジョンもお手のものだ」

「楽しみアルなー」

(((((……………))))))

そんな感じで馬車は刻々と魔王城に近づいて行くのであった。

第五十六訓 人生には多少なりとも寄り道は必要

くアルム街道く

「やべっ!」

「どうしたの?」

もうすぐ街道を抜ける辺りで銀時が思い出したように声をあげた。
「すっかり忘れてたな……」

「「「…?」「」」

銀時は懐から何やら紙を取り出した。
そして暫くそれを見ると…

「オメーら先に行ってる。後からすぐに追うから」

「は？」

「んじゃ、そういう事で…」

そう言っつて銀時は街道を戻り始め……

ガシッ!

「ちよつと待った!」

「う…!?!?」

ヒナギクに簡単に首裾を掴まれる銀時。

「戻るっつてどついう事ですか?」「何か忘れものでもあつたのか?」

伊澄も真司も怪訝そつな顔をする。

「違えつて…コレだよ、コレ」

銀時が三人に見せた紙は古竜の討伐依頼書だつた。

「あの時の紙ね…これがどつかしたの？」

「一番下…良く見る」

【古竜】

太古の昔に封印されたとされる伝説の地竜。
魔王により復活し支配下におかれ、現在はアルム街道に放たれている。

〈見聞による特徴〉

- ・ 黒と灰色に染まった巨大な竜
- ・ 四足歩行で翼はあるが錆びて飛べないらしい
- ・ かなりの硬度を誇る皮膚と長くゴツゴツとした尾が特徴
- ・ その他は謎……

〈条件〉

交易路の安全確保

古竜の討伐又はアルム街道からの追い払い。

王への報告

依頼完了!!!

「つー訳で俺は一回戻るわ」

「何もこんな時に……」

「馬ッ鹿オメー……あの街道が使えるって国民達に知らせないといけねーだろ？」

「まあ……それは確かに……」

「だから、オメーらは先にハヤテ達と合流してる。報告だけしたらすぐに戻る」

三人は暫く顔を見合わせると、納得したように頷いた。

「……わかりました。ですが銀時様、くれぐれもお気をつけて」

銀時は手をヒラヒラと振って来た道を戻り始めた。

「……………大丈夫かしら」

そんな後ろ姿を不安100%で見つめるヒナギク。

「ほお……………気になるのか？」

「じー……………」

真司はニンマリと伊澄をじ〜とヒナギクに顔を向ける。

「な、違つわよー!!誰が……………!!」

そうじゃ無くて…向こうで遊んでくるんじゃないかっていう「

「あぁ……………」

「なるほど……………」

ヒナギクの言葉に二人も不安気に顔を曇らせて銀時を見送った。

*

ガタン……ガタツ!!

「オーイ嬢ちゃん達、着いたぜ。アレが魔王城だ」
ハヤテ一行を乗せた馬車は揺れながら停車した。

ガチャ…

「あ、到着ですか」

「遂に着いたアルか!!」

「ん〜……長いこと座ってたから背中が……」

馬車からハヤテ達が次々と降りてくる。

「おお!?アレが魔王城か……?」

「え?」

長谷川の言葉に一同が振り返る。

彼の指差す先には、壮大な高さの城が立ちはだかっていた。

全体に真っ黒な装飾が施され、正面にある尖塔アーチにはカラスが何羽をとまっております、不気味さを醸し出している。

「なんと言うか……まさしく魔王城って感じですね?」

「まあ、魔王城だしな……」

しかし城の周りには沢山の魔王の部下と思われる兵士達がうようよといる。

「うわぁ……何か沢山敵がいるね……」

「かなりの数ですよ、コレ」

岩影から遠目に魔王城の周辺を覗く歩とハヤテ。

「まあ、ここは魔王の支配下。一般人は滅多に近寄らないからな」

「あ、首領さん……」

すると馬車から降りた首領並びに部下達がハヤテ達に近づいて来た。

「安心しな。俺達がついてんだ。責任を持って嬢ちゃん達をー」

「いや、この先は私達だけで大丈夫だ」

しかし、首領の言葉をナギは遮った。

「な！？オイ嬢ちゃん本気か！？」

「お前達には漫画を描くという使命があるだろう？これ以上付き合
わせる訳にはいかんからな」

「何言っただ！俺達は嬢ちゃん達のおかげでー」

「だからこそだ！」

「！？」

ビシッと首領に指を突きつける。

「せっかく皆で漫画一筋と決めたのだ。だったら今やる事は決まっているだろう！」

「ハッ!？」

「……だから私達の事は構わずに、自分達のすべき事をするのだ。投稿×切日までもう時間も無いだろう？」

「う……」

ナギの厳しい言葉に首領、部下達はぐっと思いを呑み込んだ。

「だが……」

一転してナギに微笑みかける。

「ここまで送ってくれて本当にありがとう。お前達の漫画、楽しみにさせて貰うぞ」

その言葉に盗賊達はパアツと顔を輝かせた。

「ああ任せてくれ！」

まあ、そんな訳で盗賊達はナギ達と別れる事になった。

*

盗賊達は馬車や馬にまたがり洞窟への道に帰る支度を済ませた。

そして、ナギ達に向き直る。

「本当にありがとうございました、嬢ちゃん！特に嬢ちゃんのおかげで俺達は本当の自分達を見つけたことが出来た」

「ありがとうございました、先生！！」

首領が頭を下げると、子分達も一斉に頭を下げる。

「ああ……精進するのだぞ」

ナギは腕を組んで微笑する。

「魔王城はかなり危険な場所だ。くれぐれも気を引き締めて行くんだぞ？」

「えっと……ハイ。ありがとうございました」

ハヤテ達も一応お礼を言った。

そんな様子に首領は満足そうに頷くと、馬車を少しずつ走らせる。

「嬢……いや、せんせい師匠！またいつか会える日が来る事を祈っているぞ
オオオオ！！！！」

「ナギお嬢様アアアア！！またいつかアアアア！！」

「うむ！元気でやれよ！」

手を振りながら帰路に着いていく盗賊達に手を振り返すナギ。

（（（いや……何コレ？）））

そんな様子に終始ハテナマークのハヤテ一行であった。

くリベアリア城く

「なんと！！わざわざ街道のドラゴンを退治してくれと申すのか！」

「白々しんだよ、カーネ ジジイ。テメーが無理矢理送らせたんだろっが」

銀時は取り敢えず王様に古竜戦の事を報告した。

「流石は勇者一行だ。なんとありがたい事か…感謝してもしきれないぞ…これで我が国の希望の道が開けたというもの。街道だけに」

「うるせーよ。全然上手くねーんだよ腹立つ。

それよりアレだ。感謝してるっーなら報酬として取り敢えず宝物庫にある宝全部俺によこしな」

王様は銀時と目をあわせずに祈りのポーズをする。

「本当に感謝している…そなた達に神の導きがあらんことを」

「オイ、聞いてんのかカーネ ? 報酬ー」

「では、魔王との対決も頑張ってくれ。姫をよろしく頼むぞ?」

「オイ聞けエエエエエ!!!」

*

〜リベアリア中央広場〜

「あのヤロ〜……城ごと魔王城にワープさせてやるっか……」

銀時は頭を掻きながら中央広場に戻って来た。

「……ハア。とつとと戻るか」

溜め息を一つ、アルム街道の入口に向かおうと―

ワアアアアアア!!!!

「あ?」

いきなり広場に大量の人が集まってきた。

あっという間に銀時は囲まれてしまった。

「アンタか!街道の化物を退治してくれた勇者様ってのは!……!」

「ありがたい！私達の国にもようやく光が！！」

「ありがたやゝありがたやゝ」

集まったあらゆる人々が銀時に感謝し、讃える。

「オイオイ……んな大袈裟なもんじゃー」

しかし、銀時の言葉は周りには届いていない。

「是非ウチの店に寄ってくれ！どんな商品でもサービスするよ！！」

「いや、是非ウチに！！話を聞かせて下さい！！」

「いゝや、ウチの店に！！一体どうやって倒したんですか！？」

お構い無しの勧誘、質問責めに銀時は困り果てたような表情をする
がー

「うちの店はスイーツ食べ放題！是非来てくれないかい！？」

「お、マジで！？……いやいや、でも早く戻らねーと……」

「ちょうど新作の苺たっぷりのパフェが出来たんだ。勿論何杯でも
どんなスイーツでも奢りだ！」

「仕方ねーなア……」

結局ヒナギクの予想通り、銀時はあっさりと甘味処に向かう事にな

ってしまった。

〔魔王城前〕

「……で、どうします?」

岩影から城を覗くハヤテ達。
相変わらず魔王城の周りには数多くの兵士が目を光らせている。

「この数の中、突破して入城するのはかなり難しいですね…」

「奴等に見つかったら城の門が閉められてしまうアルな…」

「でも見つからずにあそこまで行くのは厳しいよ?」

ハヤテ達は城に入る方法を何とか模索しようとしている。

「いや… 敢えて正面から突っ込もう」

「お嬢様?」

ナギが唐突に口を開いた。

「私に考えがある。皆、耳を貸してくれ……」

一同はナギの話に耳を傾けた…

*

「いや、大魔王様がこの世界に君臨なさって三ヶ月。瞬く間に各国を征服して… もう世界征服も目前だな」

「そうだな。これから我々の時代が始まる」

魔王城の前で二人の兵士A、Bが呑気に談笑している。

すると、

「敵襲だアア！」

「「!?!」」

そんな大声が聞こえてきたと思ったたら…

「ぐああアアアア!!」

「ぎゃアアアア!!」

「ぐえエエエエ!!」

次々と前方から叫び声が響いてくる!

「一体何事だ!」

「とにかく俺達も行ってみよう!」

二人の兵士A、Bも騒ぎが起きていると思われる場所に走ってゆく。

「な!?!アレは…!!」

二人の目に入ってきたのは…

「ほわちやアアアア!!」

「はあアアアア!!」

大量の兵士達を吹き飛ばしている赤いチャイナ娘と執事服の少年。

「でやアアアア!!」

それにメガネの少年とダンボールを被った変なグラサン。

「な、何なんだ!?!この集団!?!」

これがとんでもなく強い。

兵士は百数人いるというのに、たった四人で渡りあっているのだ。

「くそオオオ!!何だコイツら!恐ろしく強えぞオ!!」

「一人一人が一個師団並だアアアア!!」

四人は兵士の数を瞬く間に減らしてゆく!

「くツ!!このままじゃ入城されるぞ!!」

「門だアアアア!!門を閉めろオオオ!!」

兵士Aが門に向かって叫ぶが門は一向に動かない。

「くそ!?!何故門が閉まらないんだ!?!」

兵士Aは門の所に走っていくが…

「残念だったね！門の開閉レバーなら壊させて貰ったよ！！」

「何イ！？」

門の内部から何と歩が出てきたのだ！

「馬鹿な！？いつの間に！？」

「フツ…、門の周りの兵士は皆前方の騒ぎに惹き付けられていたからな…」

「！？」

更に後ろからナギが歩いてきた。

「だからと言って、門の開閉レバーはさっきまで私達が見張っていた場所だぞ！？侵入者なんか…」

「甘いな兵士A。お前はこのハムスター気配に気づけていなかったのや」

「何？」

ナギはフツと微笑すると、兵士Aにビシッと指を突きつける。

「先程お前らが呑気に談笑している時には、もうハムスターはお前

の真横にいたんだよ！」

「何だとオオオオ!!！」

兵士Aはまったく気づけ無かった事にショックを受けて膝まづく。

快進の一撃!

兵士Aに999のダメージ!!

「思い知ったか!ハムスターの空気のような影の薄さに気づけ無かったお前の負けだ!」

「放つといてくれないかなアアアア!?!」

ナギの言葉に歩も堪らず叫ぶ。

「く……だが、これで勝ったと思うなよ。城の中にはまだまだ沢山の兵士、魔物がいる。貴様らの本当の試練はここからだ……くっ!」

そう言っつて兵士Aは光の粒となって消えてしまった。

「お嬢様!ご無事ですか!?!」

すぐにハヤテ達もナギの元に走ってきた。

他の兵士達はあの短時間で全で一掃したのだった。

「うむ。どうやら私の作戦『インビジブルハムスター』は完璧だったようだな」

「ええ！そうですね……………アレ？どうしたんですか？西沢さん？」

「ううん……………別に」

歩はまだ門の隅で膝を抱えて体育座りをしていた。

「ともあれ、これで城に入れる事が出来ますね！」

「よし！早速突入アル」

神楽ははしゃいで跳び跳ねると、城に向かって走って行った。

「ちよつと！先走ったら危ないよ、神楽ちゃん！」

新八も慌ててそのを追う。

「僕達も行きましょうか」

「うむ！」

「何か複雑……………」

ハヤテとナギ、歩も城に向かって走って行った。

「俺も行くー」

『モバイルダンボールの充電が切れました。充電して下さい』

「え？」

長谷川の装着しているダンボールから変な音声が流れた。

「長谷川さん！どうかしたんでしか〜？」

ハヤテが前方から長谷川に尋ねてくる。

「い、いや……何でもねーよ」

長谷川は首を傾げながらも、慌ててハヤテ達を追って行った。

こうして、ハヤテ一行は遂に魔王城突入に成功した。

一方……

〜とある甘味処〜

「ハイ！トロピカルベリーパフェ、お待ちどう様！」

「何か悪いなア！こんなに沢山パフェ奢って貰って」

銀時のテーブルの前には食べ終えたパフェのグラスが三つも置いてある。

「いやいや！国を救ってくれた英雄ですから！このくらいの事は当然です！」

「『『そうだア！勇者様、万歳！万歳ー！！』』」

店に押し掛けた他の人々も銀時を讃えて祝いの飲み会を始めていた。

「いや、また何か困った事があつたらいつでも呼んでくれ。」

銀さん飛んでくるから！アツハツハツハ！」

美味しいパフェを沢山食べる事が出来て、完全に舞い上がっている銀時。

「……………！？」

しかし銀時の表情を異変が…

「どうかしたんですか？」

「いや、悪いんだけど厠貸してくれねーか？ちよつと食い過ぎたかも……………」

「ええ、その角を曲がった先に離れがありますので……」

最後まで話を聞かずに、銀時は急ぎ足で廁のある離れに走って行った。

25分後……

「はあ……やっぱ調子に乗って食い過ぎるもんじゃねーな。

四杯はキツかったわ……久々の激闘だったよ、コレ……」

個室で激闘を何とかぐり抜けた銀時は溜め息をついて、愚痴を溢す。

「ヤベーな……これ以上遅れたらヒナギク達にどやされそうだし……
…廁出たらさっさと店出るかア」

そう言ってトイレトペーパーを掴んで……

カラン……

「え……？アレ？」

銀時の手には紙の端っこだけ……後は芯が虚しくも一つあるのみである。

「え？嘘……紙が無え……？」

さてはて、一体これから物語はどう進んでいくのか？

「いやいや……いやいやいや、いよいよいよいよアアアアアアアアアア……！」

カラン……

第五十六訓

時には寄り道も悪くない（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「んじゃ今日もテキストにいくかア……最初の質問『作者、銀時、ハヤテに質問。ひぐらして好きなキャラは？』」

新八

「いやだから……これ銀魂とハヤテのごとくでしょ！？」

銀八

「まあ良いんじゃないかね？つー訳でズバリ答えます！

俺は……そうさなア。エンジェルモートのスイーツ券が欲しいな。あの店のスイーツはめっちゃ美味いらしいぜ？」

新八

「いや…好きなキャラって言うてるでしょ！」

ハヤテ

「え〜と……やっぱり圭一君でしょうか。あの運命に立ち向かう姿勢は尊敬しますね！」

伽藍

「僕はやっぱり梨花ちゃんですね！黒梨花が特に大好きです！あのギャップが良いですよね」

ナギ

「要するにロリコンって事だな……」

神楽

「マジキモイアル。こっち見んじゃねーよ……」

伽藍

「違うからね!?!」

銀八

「んじゃ、次の質問『咲夜に質問。ツラとの漫才は楽しい?』」

桂

「ツラじゃ無い桂だアアアア!」

銀八

「うるせーよ。のっけから出てくんじゃねえよ面倒臭え……」

咲夜

「もう慣れたわ……もう会話全てが漫才になってる気がするけどな

……」

桂

「まあ、俺から見たらまだまだだな。これから精進すべきー」

銀八・咲夜

「テメー（お前）が言うなアアアアアアアア!!!」

桂

「オメガガウエポン!？」

桂は吹き飛んだ!

銀八

「ハア………続いての質問な。『ナギに質問。二年後の薬があったら飲んでみたい?』」

ナギ

「に、二年後………ど、どうなるのだ?」

銀八

「え、驚異的な発育が見込まれるんじゃない?」

ナギ

「驚異的な発育………だと!？」

新八

「何テキトーな事言ってるんですか!？ダメですよ、ナギちゃん!こんなデタラメ信じたら………」

ナギ

「二年後………発育………」

銀八

「ハイ、次の質問。『銀さんに質問。こっちの世界で見つけた意外な事は?』」

ズバリ答えましょう!

やっぱり俺達の世界と違ってちゃんと時間が流れる事か？

銀魂はサザエさん方式で年をとらねー事になってるからなア…何っ
ーか、新鮮だな」

新八

「いや…そういうメタ発言は後書きでも止めて下さい」

銀八

「んで、もしもシリーズだけど、まだ完成してねえから、悪いけど
次回に回させてもらっわ」

ハヤテ

「それでは、また次回もよろしくお願いします」

第五十七訓

ICCO〜借金野郎と魔王の城〜（前書き）

クラウドの前書き館！

伽藍

「何かもう自分でも何がしたいのか分からなくなってきました」

クラウド

「…………ふむ。そこはおいておいて、今回は遂にあの人登場します！」

ハヤテ

「早いですね…………もう出て来るんですか」

伽藍

「では、始まります！」

クラウド

「どつぞー！」

第五十七訓

IC〇〇借金野郎と魔王の城

この城を乗り越えて！

魔王を倒し、お姫様を助けだせれば……………僕は再び三千院気の執事に復帰出来る！

これは僕にとって勝たなくてはいけない戦い！！！！

心をつないだ仲間と共に必ず勝利を手にしなければならぬ戦い！！！！

では、ご紹介しよう！！

彼ら五人こそ！

志を共にする、僕の心強い勇者達だ！！

勇者その1

【西沢歩】

職業：学生

特性：ハムスター

必殺技：とにかく地味

勇者その2

【三千院ナギ】

職業：引きこもり

特性：不登校

必殺技：働いたら負けかなと思っっている!!

勇者その3

【長谷川泰三】

職業：無職

特性：マダオ

必殺技：マダオスパイラル

「うわあ〜！凄い！！テレビで見る外国のお城みたいだね〜」

「何だ……魔王城と言っても所詮この程度の広さか…そ、それにしても…暗いな…」

「おお！1000円見つけ！」

……あれ？人選ミスった？

と思うはずだ、原作だったら……

否！！これは原作とは違うのだ！

勇者その4

【志村新八】

職業：アイドルオタク

特性：ダメガネ

必殺技：ツッコミ

勇者その5

【神楽】

職業：夜兔

特性：大食い馬鹿力娘

必殺技：覚醒

「神楽ちゃん何持ってるの？」

「食料に決まってるアル！魔王に戦いを挑むならしっかりと準備しないとな」

「いや食料って……お菓子じゃない、ソレ」

「ちゃんと3000円以内になってるアル！でもポカリはお菓子に入らないネ」

「遠足気分か、オメー……」

……うん。多分大丈夫……何やかんやで……きっと上手くいー

勇者その6

【綾崎ハヤテ】

職業：借金野郎

特性：不幸

必殺技：超不幸

……あ、マズい。

……………帰りたい。

「しかし、魔王って一体どこにいるんでしょう?」

「う…うむ。お、恐らく最上階ではないか?」

「あの…お嬢様?」

ナギは周りの暗さに怖がっているのかハヤテの腕にしがみついている。

「ど、どうした?」

「あの…大丈夫ですか?お嬢様は暗い所苦手ですから」

「馬鹿をいうな!私に苦手なものなどない!」

「……………」

ナギを見てハヤテは困ったように苦笑する。

「まだ下の階だから暗いけど、上の階に行けば明るくなるかもしれないですよ」

「そうアル！！安心するネ、ナギ」

「だ〜か〜ら〜／＼／」

ナギは顔を真っ赤にして叫ぶが一同は上の階に向けて進んでいく事にして歩き出した。

『充電して下さい』

「いやいや……何充電って？ダンボールをどうやって充電すんの？」

長谷川はまだ首を傾げていた…

（魔王城前）

「……何も無いのう」

「そうですね。こつというのは周りに沢山敵がいるものですが……」

伊澄達はようやく街道を抜けて、魔王城が目の前に見えてきたのだが……周りに敵の姿が全く居なかった。

「ハヤテ君達が私達より先に到着したんじゃないかしら？」

「なるほど確かに……だとしたら急がないといけませんね」

伊澄が札を構えて魔王城を睨み付ける。

「あの城には色々と危険な気配がしますから……」

「……」

三人は恐る恐る城に向かって進んで行った。

*

「ある〜日〜！城の中〜！魔王に〜！出会った〜！」

「神楽ちゃん静かにしないと。叫んでると敵が出て来るかもよ」

「アレ……？もうコレただのダンボールじゃね？」

神楽は傘を振り回しながら先頭を進んでいく。
その後ろに新八、長谷川が続く。

「お二人共……大丈夫ですか？」

「む、無論だ！！何の問題も無い……」

「うーん。私はちょっと恐いかな」

最後尾にはハヤテにしがみつくなぎと歩。

何とも滑稽な勇者一行である。

「とうかハムスター！！お前さつきからハヤテにくっつき過ぎだ
！離れる！ハヤテが動きにくいではないか！」

「そついうなぎちゃんだって！恐く無いんだつたらしがみつかなか
てもいいんじゃないかな？」

「……………ハハハ」

ハヤテを挟んでにらみ合う二人。全くハーレム野郎にも困ったものである。

「……………何か棘のあるナレーションが聞こえてきた気が…」

「とにかく！この私達二人の試練、ハヤテと共に必ず勝利を手に入れるのだ！例え怪物やお化けが出てこようがー」

グルルルル……………

「……………！」

ナギとハヤテは途端にひきつった顔を歩に向ける。

「……………え？どうしたの、二人とも？」

「に、西沢さん……………後ろ、後ろ！！」

「……………へ？」

歩はゆっくりと後ろを振り返る。

グルルルル……………

『…………返事が無い。ただの屍のようだ（ダンボール裏声）』

「いやダンボール裏声って何だよ！」

「うわぁ！？来たぞ！」

「ガアアアアアア！！！！」

怪物は新八達の目前に迫って来る！

「マズい、長谷川さん！新八君！」

前方にいるハヤテ達は間に合いそうにない。

しかし、その脇から飛び出していく神楽。

「新八、マダオ！伏せるアル！」

「え？……ぐ！？」

神楽は二人踏み台にすると怪物に正面から飛びかかる！

「うらアアアアアアアア！！」

「グオ！？」

番傘を大きく横に凧ぎ払うと、怪物は敢えなくひっくり返える。

更に神楽はその尻尾を掴むと、

*

ハヤテ一行は尚も順調(?)に城を進んで行く。

「にしても静かな城アルな……」

「そうだね…何か気味悪ね」

先程の怪物以来何も変化が無い状況に神楽と新八は顔をしかめる。

「ああ、そういえばシスターが言ってたんですが……」

「ーですが、十分に注意して下さい」

「はい?」

シスターの言葉に聞き返すハヤテ。

「この鏡の世界は教会の神父の趣味で作った世界。一般のRPG然り、どんなトラップや魔物が出てくるかわかりません…特に洞窟や城と言ったダンジョンには沢山のトラップが仕掛けてあるやもしれ

ませんよ……」

「……は、はあ」

「……という事らしいので皆さん、十分に気をつけて下さい」

「トラップ!? 一体どんなトラップアルか!! ボタン押したら酔昆布とか落ちてくるアルか!？」

「トラップじゃねーよ、ソレ」

ナギが呆れた様子で神楽にツッコミを―

カチッ!

「へ?」

ビュン!!

突然飛び出して来た槍がナギを襲う!

「お嬢様、危ない!!」

「ハヤテ!!」

ハヤテは咄嗟にナギの前に出て彼女を庇ったが、

ドッ!!!

「ぐっ……!!?」

その左肩を槍がかすった！
思わず膝をつくハヤテ。

一同は慌てて彼に駆け寄る。

「ハヤテ、大丈夫アルか!?!」

「しっかりしろ!大丈夫かハヤテ!!」

神楽はハヤテの傷の様子を、ナギは心配そうにかがんで視線をあわせる。

「ええ……でも気をつけて。これ、なんか毒が塗ってあるみたいで……」

「「「毒!?!」」」

新八達も驚いて声をあげる。

「でも大した毒じゃーないみたいで全然平気ですよー。アレ?どうしましたお嬢様、何か固いですね……」

虚ろな瞳でハヤテは石像をぺたぺたと触る。

((ああ！ハヤテが何か壊れてきてる！！))

やはり毒が強いのかハヤテは目を回して相変わらず石像を触っている。

「大変だ！パナーアボトルを！！状態異常を回復するあのボトルをこのダス城で探さないと」

「落ち着いて……ここはダス城じゃ無いというか、そもそもテイズじゃ無いから！」

「そつだ。まずは落ち着きたまえ」

新八はナギをなだめようとすると不意に後ろから声が聞こえてきた。

「「え？」」

一同が振り返ると、そこには黒い服にロザリオをかけた若い男が立っていた。

額には十字傷が目立っている。

「お前は……？」

「この教会の神父。リン・レジオスターです」

ナギの問いに神父は自己紹介をする。

「リイン・レジオスター？」

「呼びにくいなら“秋葉のロード・ブリティッシュ”とでも呼んで下さい」

（（絶対嫌だ……！！））

「それより……」

神父は膝をついてるハヤテに目を向ける。

「その毒は弱いが、あまり動かさない方がいい。一歩動けばHPは少しずつ減っていく」

「だからテイズかよ」

「パナーアボトルはこの階の一番奥にある部屋です」

「「本当にあるの!?!」」

新八と歩がすかさず突っ込む。

「何にしても、私が仕掛けた毒で少年が死ぬのは忍びないので……
急いで取ってきた方がいい」

ゴン……!

「ああ、そうさせてもらおう。お前は責任を取ってハヤテを看病しろ。」

ハヤテに何かあったら殺すからな!!」

「ひ……引き受けた……」

ナギは神父に制裁を加えると、奥に向かって歩き出そうとする。

「だ、だめですよお嬢様!!お嬢様をそんな危険な目に遭わすわけには――」

「心配するなハヤテ。主には、仕えてくれる者を守る義務があるからな」

「そうアル!私もナギについていくから安心するネ!」

ナギの言葉に神楽も拳をつくって頷く。

「ですが、お嬢様……」

「こつちだよ」

ハヤテは尚も石像をナギと勘違い。

「とにかく急ぐぞ!パナーアボトルを取りに行くのだ!ハムスタ
ーとマダオは神父と一緒にハヤテを頼む!」

「分かったよ!」

「マダオじゃ無いからね!?!」

神楽、新八、ナギはそう言って奥に走っていく。
歩達は頷いて走っていくナギを見送った。

「くっ……」

「ダメだよハヤテ君！安静にしてなくちゃ」

「そつだ。あまり無理をしない方がいい。その毒は一応猛毒だ」

神父は無理矢理動こうとするハヤテに忠告をする。

「私も一度くらっってしまったね…君達のように周りに助けてくれる人が居ないから困り果てたよ」

「……え？でもそれならどうやって助かったんだよ？」

「ああ、だから……」

長谷川の問いに神父は自分の立っていたすぐ隣を指差す。

「私は死んだ……」

「「「ええ！？死んだの！？」「」」

額に十字傷のある神父服を着た骸骨が横たわっていた。

「だがそれ以来、この教会には悪霊や怪物が出るようになってね」

「「「いやいや！アナタが悪霊なんじゃないですか！？」「」」

ハヤテと歩は神父に突っ込む。

「違う。悪霊は……」

ドロドロ……

「あいつらね」

「「「!?!?!」」」

神父が振り返った奥からは水 しげるが描きそうな妖怪が沢山姿を現した！

「正直マズいが……逃げられそうか？」

「待って下さいー！じゃあお嬢様達にも悪霊が……!?!」

ハヤテは慌ててナギ達の方に目を向ける。

「いや……悪霊はあいつらだけだが……」

「そうですね……」

神父の言葉に安心したようにー

「城の奥には私が配備した全身3mのアイ 型の殺人ゴーレムが……」

「「「先に言えエエエエー!?!」」」

「て言うか来たぞ」

妖怪達は三人の目前に迫って来た!!

*

『SONYの技術は世界一イイイイイ!!』

「うわア!?!」

ナギ達三人は後ろから迫り来る巨大なアイ に追われていた。

「何んですか、アレエエエ!?!」

「きつと鎌倉大仏の首を折ってリコールされたアレアル」

「どう見てもカラクリ家政婦じゃねーだろオオオオ!!」
後ろからズンスンと迫ってくる殺人ゴーレム。

ガッ!!

「あー!!」

「ナギイイイ!!」

「ナギちゃん!」

ナギはうっかり躓いてしまった。

『そこにしびれる憧れるウウウウウウ!!』

ゴーレムはナギに向かって思いきり拳を振り下ろす!!

「ナギ、逃げるアル!」

「マズい!間に合わない!」

新八も神楽もナギに叫ぶが、ナギは倒れてしまって身動きがとれない。

『月に変わってエエエエエ!!』

「ぐ……」

ナギは覚悟を決めたように目を……

カツ!!!

「え……?」

ゆっくりとナギは振り返ると、ゴーレムの腕が一刀両断されていた。

「お、お前は……」

一方、ハヤテの目の前から妖怪達はことごとく消滅していた。

「あ……あなた達は?」

「何、大したものではない……」

「通りすがりの……」

そうやって札を構えていたのは、真司と伊澄。

そしてナギ達の前には…

「正義の味方」

正宗を構えてヒナギクが立っていた。

とある厠

(…………… まずは落ち着け。こういう時ほど精神を高潔に保て……………)

銀時は個室から天井を見上げる。

(まずこの厠は離れ……………)

店はある通りどんちゃん騒ぎだ。ここから助けの叫びが届くとは到底思えねえ……………)

個室からでも店の騒ぎようは聞こえてくる。

(自力で何とかしなきゃならねー訳だ……………)

カラン……………

(とにかく策を考える……………)

プランA：このままの状態に直接助けを求めに行く：いや……………これはヤベーよ。いくら小説だと言っても流石に銀さん、そこまでする勇気は持ってねーよ……………)

カラン…

(プランB…このまま時が過ぎるのを待ち、トイレに来た客に助けを求める…)

いや……望み薄だ。そもそもこれ以上遅れるとアイツらにどやされそうだからな…)

カラン…

(プランC…とにかく今持つてる物で何かねーか……ん?)

銀時は懐に入っていた財布に気が付いた。

中には千円札が一枚…

(いやいや……これはヤベーだろ。これはアレだよ…日本の偉人に対する最大級の暴挙だよ。英 もこんな事される為にお札になったんじゃないよ……?)

銀時は虚ろな目で英 とにらみ合いを続ける。

(オイ…英。俺はどうすれば良いんだ……何とか言ってくれ、英……。テメー無視してんじゃねーぞ、オイ。俺ア知ってんだぞ、オメー現役時代はかなり荒んでたらしいじゃん。メチャメチャ金にがめついで奴だったらしいじゃん。人を助けるための研究じゃ無くてノー ル賞取るだけのために研究続けてたんだろコノヤロー……)

銀時と英 の無言のにらみ合いは暫く続いたのであった……

第五十七訓

IC〇〇借金野郎と魔王の城（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八先生

「んじゃ今日もテキトーにいくかア。最初の質問な。『伊澄に質問。銀さんが他の女性とイチャイチャしてたら嫉妬する？』」

伊澄

「しません！！／／そもそも私は何ともー」

咲夜

「へえ〜……でも伊澄さん顔が赤いなあ」

伊澄

「だから私は別に銀時様の事は何とも思っていないません！！／／／」

咲夜

「んん〜？ウチがいつ銀時って言ったんや〜？」

伊澄

「むー！！／／／」

咲夜

「アハハハハハ！」

伊澄は札を構えて咲夜と鬼ごっこを始めた。

神楽

「まあ、銀ちゃんがそんな状況になることなんてあり得ないアル」

銀八

「そつだよ？何か一部で銀さんロリコンじゃね？とか言ってたけど俺は違うから。他の俺はどうか知らねーけど、この小説の銀さんはガキには興味無いからね？」

新八

「まあ、これからどうなるかわかりませんが……」

銀八

「どうもなんねーよ……まあいいか、次の質問な。『ハヤテ達に質問。はちきれピーチ三太夫を見たら？』」

新八

「……え？アレをやるの？」

神楽

「合点承知アル！」

銀八

「まあ、つー訳で……」

カッ！！

パー子

「パー子です」

パチ恵

「パチ恵でエース」

グラ子

「グラ子です？」

パー子・パチ恵・グラ子

「三人あわせて……はちきれピーチ三太夫!!」

一同

「……………」

ハヤテ

「……………はぁ」

ヒナギク

「えっと……突っ込んだら負けなのかしら？」

マリア

「その衣装やら道具は一体何処から？」

まあ、それは各自のご想像にお任せします（笑）

ナギ

「というか先生の顔がカシにしか見えないのだが…」

ハヤテ

「お嬢様……違う漫画です」

パー子

「まあこんな感じだ。続いての質問な。『今回の歩の力は弟も使えるの?』」

ハイ、ズバリ答えましょう。インビジブルはジミー弟にも使えます。基本この能力は影の薄さからきていますが、ジミー姉弟の他にも使えるかといったら難しいかもしれませんがねえ……」

歩

「アレ?読んだかな?かな?」

銀八

「ハイ次イ。『ハヤテのキャラで将来マダオになりそうなのは?』」

┌

長谷川

「うーん……やっぱりいないかな?」

銀八

「まあ確かにな。ナギは引きこもりで軟弱で漫画馬鹿だが金はあるしなア……」

ナギ

「誰が引きこもりで軟弱で漫画馬鹿だアア!!!!!!」

銀八

「ハヤテは負けず劣らず不幸だが、それ以外は完璧だしな。ああ！そついや三馬鹿娘がいやがったな」

三馬鹿

「誰が三バカだアアアア！！」

銀八

「オメーら以外に誰がいるんだよ？」

美希

「侮って貰っては困るな先生！私達は確かにすべからく頭が悪いが

……」

理沙

「お嬢様だという事を忘れて貰っては困るな！」

泉

「なのだ〜」

銀八

「そついやそつだったなア……」

長谷川

「という訳で今のところいないな……っっていうかマダオはー」

銀八

「んじゃ、続いで質問。『ナギに質問。あの盗賊達は今後ヒットを出せると思っつ〜』」

ナギ

「フツ……一心不乱に突っ走って行けば、必ず夢は掴めるはずだ。漫画は魂だ！！走り書きに、Gペンに、コンテに、一瞬一瞬に魂を吹き込め！さすれば道は開かれん」

銀八

「誰に言ってるんのオメー……」

伽藍

「もう一つの質問は返信で答えてると思うので、今日はここまで」

銀八

「んじゃ、また次回もよろしく頼まア……」

第五十八訓 丸く収めたけりや三秒ルール（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「突然ですが、次回でクエスト編が完結です！」

ハヤテ

「本当に急ですね!？」

クラウド

「果たしてハヤテは三千院家執事に復帰する事が出来るのか!？」

伽藍

「今回は前回の二倍程長いです」

ハヤテ

「で、では始まります!！」

第五十八訓 丸く収めたけりや三秒ルール

ドオオオオン!!!

ナギ達の目の前でゴーレムは真つ二つにされ、地に崩れて落ちる。

「ふう………」

「お前………」

ナギはゴーレムを叩き斬った人物を見る。

「三人ともケガは無い？」

「ヒナア!!!」

「ヒナギクさん!!」

神楽も新八も驚いて声をあげる。そしてナギもゆっくり立ち上がった。

「ヒナギク…お前どうしてここに……?」

「どうしてって…あなた達が頼んできたんじゃない」

ナギは少し首を傾げるが、暫くして納得したように頷いた。

(そついえばそうだったな…)

「ところであなた達…こんな所で何をしてるの？」

「あ！そうだ！！ハヤテの…ハヤテの解毒剤を取りに行かなきゃ…
…！！！」

「あ、ちよつと！？」

ナギは思い出したように奥に向かって走り出した。

*

スウ……

「……………！！！」

「これで少しは動けるはずですよ。でも毒が消えた訳では無いので、ムリはいけませんよ？」

伊澄はハヤテの額に何やらまじないをかけたようだ。

「あ……！！ありがとうございます！」

ハヤテはゆっくりと立ち上がって伊澄に礼を言う。

「しかし少年、気を抜いてはいかんど。悪霊はまだ沢山いるからな」

「「あなたが悪霊だろ（でしょ）！！」」

取り敢えず突っ込んでおく長谷川と歩。

「ま、他の悪霊達は我らに任せておけ」

「ハヤテ様達はナギを……」

真司と伊澄は札を構えて暗がりを見据える。

「でもお二人は……」

「私達なら平気です」

伊澄はハヤテに背を向けたまま続ける。

「ハヤテ様……私、ナギやワタル君の言うマンガやアニメはよく分らないのですが……変身ヒーローだけは好きなんですよ？」

「へ？」

「ヒロインがピンチになったら現れて……必ずその子を助けてくれる……そんなヒロインが好きなんです」

そして伊澄はハヤテを振り返る。

「ハヤテ様はナギのヒーローだから……ナギの所に行って下さい」

「そういつことじゃ」

「伊澄さん、真司さん……」

ハヤテは伊澄と真司を交互に見る。

「といつても、お主毒をくらったばかりじゃろ。

羅刹、コヤツらを三千院の所まで送ってやれ」

「御意」

真司の後ろから赤い女性の鬼が姿を現した。

「わっ!?!」

そしてハヤテ達三人をなんと片手で持ち上げる。

「なるべく早く戻りますので、真司様もどうかお気をつけて」

「ああ、頼んだぞ」

言うのが早いか、物凄い速度でその場から姿を消した。

「「「「ああああああああああああ!?!?!?!」」」」

三人の悲鳴だけが無惨にも遠退いていった……

「さて…早目に終わらせましょう…」

「そつだの…」

伊澄と真司はまだ見ぬ妖怪達に向けて、札を構えた。

第五十八訓 丸く収めたけりや三秒ルール

「へえ……執事虎の穴ねえ…」

ヒナギクはナギから概ねの事情を聞かされた。

「あのマラソン大会から随分と深刻な状況になったのねえ……」

「ああ。でも今はそんな事どうでもいいんだ！！ハヤテが毒にやられて……！！一刻も早くパナーアボトルを手に入れないと……」

ナギは焦って周りを見回す。

「ボトルがあるはずなんだ！！解毒剤のパナーアボトルが！！ヒナギクも一緒に探してくれ！でないとハヤテが……」

「ナギ！見つけたアル！」

「本当か！？」

神楽が突然手を上げてナギに声をかける。

ナギは急いで神楽と新八の元に駆け寄った。

「いや……見つかったんだけど……」

新八は曖昧な表情で言葉を濁す。

「けど？」

ナギが新八の指差す場所にあったボトルに目を向けると……

埃まみれになったパナーアボトルがぽつんと一つ。
しかも側にある看板には

『賞味期限：2005年10月15日』

と書いてあった。

「そ…そんな…」

ナギはガクリとその場に膝をつく。

「期限切れでも効くアルか？」

「さあ…私に聞かれても…」

そもそもパナ　ーアボトルって何？」

神楽の言葉にヒナギクは首を傾げてみせる。

「リタイアしよう」

「え？」

「リタイアしてハヤテを病院に連れていく…！」

ナギは立ち上がると大きな声をあげた。

「え…… だけどリタイアしたらハヤテ君の執事復帰は」

「いい…！」

新八の声を遮ってナギは振り返る。

「ハヤテが無事なら…私はそれでいい…！」

「ナギ……」
「ナギちゃん……」

新八達は何とも言えない顔でナギを見る。

「でも、それでは僕が困ってしまいます」

「!?!」

突然後ろから声が聞こえてきた。

「僕はお嬢様の側以外に……帰る場所ないですから」

「……ハヤテ」

ハヤテがニッコリと笑ってナギの元に歩いてきた。

「ハア……死ぬかと思った」

「目が回るウウウウ……」

その後から長谷川と歩が羅刹に掴まれてやって来た。

「では、私は真司様の所に戻らせて頂きます。あなた達もどうかお気をつけて」

「ハイ、ありがとうございました」

羅刹は二人を降ろすと、また一瞬でその場から姿を消した。

「ハヤテ、お前らどうして!?
ていうか毒は!?!」

「へ!?あ…いやそれは…!」

ここでハヤテの脳裏に浮かんだのは伊澄の事。

彼女曰く、ナギに式術が使える事は伏せてあるのでハヤテは無闇に口には出来ないのである。

「え〜と…ぐ、偶然薬が落ちていたので、それを拾って…?」

「ええ!?落ちてたものを拾って食べちゃったのか!?!」

驚いてナギはハヤテを見る。

「ダメだぞハヤテ、落ちてたものなんか口に入れて…!」

「え…?ええ…?」

「人としてのプライドに関わる問題だぞ」

不安100%な様子でたしなめるナギにハヤテは何も言い返せないように頷く。

「大丈夫なのハヤテ君?こんな所に落ちてたもの食べて…!」

「ああ、オレに三秒ルールなんていらぬ。偉い人にはそれが分からないのですよとパクパクと…!」

「いやっーかアナタ誰!？」

新八は隣の神父に驚いて飛び退く。

「私はこの教会の神父をしているリン・レジオスターだ」

「神父!? 神父ってアレアルか!？」

古より伝えられし七つの玉を探しもとめた伝説の勇気の一人……」

「違っわよ……?」

興奮気味に話す神楽に呆れて突っ込むヒナギク。

「ていうかヒナギクさん、来てくれたんですか!」

「ええ、色々と成り行きも相まってだけど。一応鷲ノ宮さん達と一緒にね」

そう言っつてヒナギクは周りを見回す。

「達っつて、他にも誰かいるアルか……?」

「ええ、伊澄さん、澳門君、それと銀時も居ただけど……」

「「銀さん(ちゃん)も来てるんです(アル)か!？」」

新八と神楽は同時に声をあげる。

「まあ………だけど、」

ヒナギクは簡単に自分達の城までの経緯を話した。

「ああ…それはダメアルな。きつとカジノか喫茶店でパフェ食べまくってるネ」

「あのちゃらんぼらんの事ですからね……」

神楽も新八も肩を竦めて溜め息をつく。

「やっぱり……?」

ヒナギクも容易にその様子が想像できたようだった。

「まあ…何にしても。この上の階が最上階だ」

神父が一同の前にヌツと飛び出した。

「恐らくそこが最後のイベントフィールドになるだろう」

「そのネタは古過ぎますよ…?」

ハヤテは呆れたように神父を見る。

「まあとにかく!早くこんな茶番を終わらせて屋敷に帰るぞ!」

「……まあ、ハイ。そうですね」「遂に最終決戦アルか!」「目が回るウ……」

ナギの言葉に一同は登りの階段を目指して進む事になった。

*

結局、ハヤテ一方は何やかんやで最上階の広場にたどり着く事が出来た。

「どんだけはしよる気ですか……」

「まあ、いいではないか。読者のにもそろそろこの長編終わってくれというのが心情だろう」

「お嬢様……そういう発言は本編でしないで下さい？」

広場の奥には真っ白なレースのベッドがぼつんと一つ。
更にその後ろに段差を挟んで、恐らく魔王が座るであろう長椅子が
おいてある。

しかし、長椅子には誰も座っていない。

「魔王……いませんね」

「きつと急用か何かで留守にしてるアル」

「いや…魔王が留守ってどんな状況だよ!？」

一行は白いベッドに向かって歩いていく。

「……あのベッドにお姫様がいるアルか？」

「そうなんじゃない？」

神楽の問いにヒナギクも頷いた。

「あゝ……」

ハヤテは恐る恐るベッドに近づいてレースを慎重に引くと……

「お待ちしていましたよ……」

「し、シスター!?!？」

ベッドから出てきたのは、なんとシスターであった。

「一体…何故ここに？」

「それは勿論、ここまでたどり着いた皆様を祝福するためですわ」

シスターはゆっくりとハヤテの横を通り過ぎ、皆の前に立つ。

「おめでとございます。これで執事クエストは見事合格です」

「本当か!？」

「ええ」

ナギの問いにニツコリと頷くシスター。

「やったなハヤテ!！」

「ええ!これでようやくー」

「誰だ？」

しかしハヤテの言葉は神父の一言に遮られた。

「お前は誰だ?何故フォルテシアの名前を語っている」

「一体何を……」

「とぼけるな」

神父はシスターを見据えて言い放つ。

「本物のシスター・フォルテシアは60を越えたばあさんだ。しかもばあさんの癖に興味がジャーズの追っかけという年甲斐のないばあさんだ。」

しかも最近はおトベさまにまで手を出して、テニリミュージカルにまで出かける神の使いぶりなんだぞ!!」

()(そんなプライベートまでばらしてやるなよ……)()

シスターは暫く俯いていたが、突然クスクスと笑い出した。

「全くつまらない言いがかりをつける人ですねえ……」

「え？シスター？」

「そんなつまらない言いがかりをつけなければ、痛い目にあわずに済んだのに……」

突然、シスターの後ろから槍を構えた兵士が数十人が出てきた。

「シスター、これは一体!？」

「一体って…私はこの教会の本当のシスターじゃないって事ですよ。綾崎ハヤテ君」

シスターはそう言って微笑むと、長椅子の前まで歩いていく。

「私の一番の目的は、三千院家の復讐です」

一斉に兵士達が攻撃の構えをする。

「全く甘いですね…ワナとも知らずこんな所へノコノコと出てきて」

「でもあなたは虎の穴の教官では!？」

「勉強不足ですわね、綾崎ハヤテ君 執事虎の穴なんて、とうの昔になくなっていきますよ」

「な、一体何で!？」

「何でってそれは……」

ハヤテの問いにシスターは…

「執事とかあんま居ないのに、やっていけるかア!?!?!」

() () (納得の理由だアアアア!?!?!) () ()

*

「ふう……こんなものかの。羅刹、戻って良いぞ」

「御意」

真司は周りに沢山いた妖怪達を一通り倒したようだった。
羅刹は鬼門へと戻ってゆく。

「伊澄…我らも三千院達の元へ急ごう」

そう言つて真司は振り返るが…

「……………」

すぐ後ろにいたはずの伊澄が居ない。たったの三分前には居たといふのに……

「……………またかあの方向音痴は」

溜め息を一つ、真司は伊澄の消えたと思われる場所を探し始めた。

*

「では、そろそろ皆様まとめてあの世に逝ってもらいましょうか」

シスターは何処からかトンファーを持ち出し、兵士達は槍を中段に構える。

「あわわわ!? 囲まれたぞオイ!?」「どうするんですか!? この状況…」

長谷川は慌てて、新八も周りの兵士達を見て唇を噛み締める。

「待って下さい! 一体何故三千院家に復讐を!?!」

「いいでしょう……冥土の土産に話してあげましょう」

シスターはそう言って城の天井を見上げた。

私の家は代々シチリアでマフィアを営む家系だった……
だが父にマフィアの才能はなく、せいぜいアイスの当たり棒偽造が
精一杯の子悪党。

しかし、そんなある日……

父

「聞いてくれソニア！！私に暗殺の仕事が入ったぞ！」

ソニア

「わー、凄いお父さん！！」

父

「成功すれば私も立派なマフィアだぞー！！」

父に与えられた任務はミコノス島で三千院ナギを暗殺する事。
父はゴミ箱に隠れチャンスを待った。

しかし……（詳しくはコミックス三巻参照）

「父は破れた……三千院家の執事と思われる人物に……」

「なるほど……その時の恨みという訳ですね……」

「違う！！肝心なのはここから先！！」

「え？」

任務を失敗に終えた父は…

父

「やっぱりマフィアは良くないから、父さん日本で板前になるよ」

ソニア

「ええ！？お父さん！？」

そして日本で魚にあたって……

父

「うっ……まさかフグに毒があるとは……」

ソニア

「お父さん！……」

父は死んだ……

――――

(泣けば良いのか笑えばいいのか……)

一同は途方に暮れてソニアの話を聞いている。

「あの時…敗れて改心しなければ父は……死なずに済んだはず」

「は、はぁ……」

ダッ!!!

「だから私は父に誓った！絶対に三千院家に復讐すると!!」

ソニアはトンファーを構えて猛然とハヤテにダツシユする！

「え！？ちょ…待って下さい！！僕はシスターと戦いたくなんか…」

ガクン!!

(え?)

避けようとしたハヤテだが、膝が言うことを聞かず、一瞬その場から動けなくなる。

その隙をソニアを見逃すはずも無く…

「スキありー!!!!」

「がは!?!」

思いきりトンファーで叩きつけられ、ハヤテは後方に吹き飛ばされる!!

「ハヤテ!!」

しかしソニアは更にトンファーを振りかぶる!

「さあ父の仇!!今こそまとめて」

ガッ!!

「まったく……いつもとんだゴタゴタに巻き込まれるわね。ハヤテ君は……」

「な!?!」

「ヒナギク!!」

ソニアのトンファーはヒナギクの正宗によって受け止められていた。

「大体動きが鈍いわよハヤテ君。毒でももられた？」

「はは……そう言えばまだ消えてませんでした」

ヒナギクの言葉に苦笑するハヤテ。

「くー！あなたは？」

「桂ヒナギク。白皇学院の生徒会長よ」

トンファーに力を加えるソニアにニッコリと笑って応えるヒナギク。

「学生風情がなめないで下さい……私の狙いは……！」

「な！？」

そう言うとソニアはヒナギクを抜けて一瞬で横っ飛びする！
そして……

「しまった！！お嬢様逃げて下さい！！」

「嬢ちゃん！！」

「ナギイイ！！」

ハヤテはトンファーをくらって身動きがとれない。

反対側にいる神楽、長谷川、歩はその様子を見て声をあげる事しか

出来ず…

「お前だアアアアア！！！！」

ソニアは空中からナギに向かって数発クナイを放った！！！！

「な！？」

「ナギちゃん！！」

驚いて動けないナギを新八が庇うように飛び込んでいく。
しかし…このままでは二人とも串刺しになる事は必須！

「お嬢様アアア！！」

「ナギ！！」

ハヤテとヒナギクの叫びも虚しくクナイの勢いは止まらない！

「「……………！！！！」」

二人は思わず目を閉じて…………

ザザア！！

「……………え？」

放たれたクナイはナギ達に刺さる事は無かった。

カラン…カラン…

クナイが地面に落ちる音が広場に響く。

「よオ……………」

そして気だるそうな聞き慣れた声。

「ぎ……………」

新八は勿論、ハヤテやヒナギク達も確信を持ってその人物を見

「待たせちまったな……………」

「……………」

その人物…………坂田銀時の額にはグツサリと、
一本のクナイが突き刺さっていた…………

「…………あの、あの、

すみません銀さん…………

あの、さ…………刺さってます…………」

「え？何が？…………」

ズボツ

新八の言葉に銀時はサツと左手を後ろに隠す。

「いや……今完全にに刺さってましたよね、ソレ。大丈夫ですか？」

「え？何言ってるの？刺さってねーよ、何も。ホラ」

「いやあの…血だらけだし、無理しないで下さい。大丈夫ですかホント」

「だから刺さってないって言うてんじゃん。これはアレだよ、ちょっとかすって血出たみたいな。断じて刺さってないからね」

二人のやり取りに周りの空気は完全に緩んでしまった。

ハヤテもヒナギクもジト目になって銀時を見ている。

ソニアでさえ、その様子を呆れたように見ている。

「いやっ…でも」

「刺さってねーって言うてんだろーがアア！！」

そんなにお前は俺を刺したいか！！あー分かった！！じゃあ刺さった事にしといてやるよ、刺さってないけどねホントは」

「いや完全に刺さってましたよね…」

「いい加減にしるよお前エエ！！」

刺さってないって刺さった本人が言うてんだから刺さってねー事でもいいだろーが！！」

「今認めましたよね……」

銀時は新八と一緒に後ろを向かせて顔を近づける。

「あのさア、お前さア、本当にさア……空気読めよ。

ここは流せよ。ここは刺さってないカンジにしとこうよ。

俺メツチャカツコ悪いじゃん。

完全に全部打ち落とした顔してたじゃん。メツチャ恥ずかしいじゃん！」

二人は後ろを向いたまま……

「ヤベーよ……」

俺ちよつと恥ずかしくて振り向けねーよ……

笑ってない？皆笑ってない？大丈夫？」

「……大丈夫です」

新八は後ろを向いて確認する。

無論周りの空気は呆れているだけだが……

「私の攻撃を全て打ち落とすとは……アナタ何者ですか？」

「氣い使ってくれてる！！全部打ち落とした事にしてくれてる。

いい娘だよ、あの娘いい娘だよ」

銀時は振り返って何事も無かったようにソニアの前に立つ。

「攻撃？そいつア悪かった。」

俺アクナイがのんびり散歩してんのかと思ったよ。

どうだいねーちゃん、こんな物騒なモンより俺ともっとイイもん刺し…」

上げた銀時の左手の甲にはクナイがグツサリと…

「ヤベーよ、腕にも刺さってた。見られた！今の完全に見られた！」

「アンタ結局全然打ち落とせてねーじゃん！あちこち刺されまくりじゃん」

また後ろを向いた銀時の腰にもクナイがぶつ刺さっている。

「ヤバい、どうしよう。笑ってるだろ？アイツら笑ってるだろ？」

もう無理だ、帰るわ俺。病院行くわ」

「落ち着いて下さい。打ち落としたカンジにするから恥ずかしいんですよ。身を挺してナギちゃん庇ったことにしましょ」

コソコソと後ろを向きながら話す二人。

「身を挺して子供を庇うとは大した方ですね…何者ですかアナタ？」

「聞いてくれた。計画聞いてくれた！いい娘だよ！！あの娘やっぱりいい娘だよ」

銀時はまた振り返ると、息を切らして腕を押さえる。

「うぐっ……なんて攻撃だ。盾になるのが精一杯だったぜ。
……おい、大丈夫かナギ」

銀時は一通り演技を終えるとナギの安否を……

ざっくり……

ナギはうつ伏せに倒れていて、頭には一本のクナイが思いきりぶつ
刺さっていた……

「な……ナ……ギ……ちゃ……ん？」

「……ウソ？」

……え？ウソ？」

「な……ナギイイイイイ！！」

「お嬢様アアアア！！」

「ナギ！！」

「ナギちゃんんんん！！」

「オイオイ！！マジか！！」

神楽を始め皆が倒れているナギの所に走ってくる。

「銀さんんん！！コレエエエ！！
ちよっ、コレエエエエ！！」

新八も真つ青な顔でナギの様子を目にする。

「刺さってますよオ!!完全に

さっそうと助けにきて結局おもつきしブツ刺さってますよオ!!
何しに来たんですかア!!アンタ!?!」

広場には新八の叫び声がこだまする。

「……ら」

銀時は静かにソニア達の方に振り返る。

「てめーらアアアア!!」

死ぬ覚悟はできてんだろーなア!!」

「ごまかしたア!!怒って結局全部他人のせいにしたア!!」

ジャキ!!」

銀時の怒号(?)に周りの兵士達は一斉に槍を構える。

「あのオ……すみません」

すると兵士の中から一つの手が上がった。

「自分見ちゃったんですけど……あのさっき……あの人が助けに入
った時に、弾いたクナイの一本が……刺さってました」

「……あの、俺も見た」

「自分も」

「私も見たな……」

「アレ弾がなかったら刺さって無かったよな？」

「え？じゃああの人が殺したようなもんじゃ……」

兵士達は口々に意見を言い合う。

そんな兵士達に背を向けると銀時はさっきと同じように一同の場所に戻る。

「え？銀さん？ちよつと銀さん!？」

「……………ら」

そして兵士達に向かって振り返る。

「てめーらアアアアア!!」

死ぬ覚悟はできてんだろーなアア!!」

「無かった事にしてる!!前のやり取り丸々無かった事にして再編集しようとしてる!!」

睨みをきかせる銀時の顔は冷や汗でいっぱいである。

すると、ソニアが口を開いた。

「アナタも私が殺した三千院ナギの所に今スグ連れて行ってあげましょう」

「超気イ遣ってくれてるよ!!」

くどい位自分がやった事にしてくれてるよ!!いい人だ!!あの人

やっぱりいい人だ!!」

銀時は改めてソニアに向き直る。

「……ちよつと、もうそれ以上気イ遣わないで。優しくされると泣きそうになるから」

「何メンドくせー事言ってるんだ!!」

銀時はソニアに向かって手を出してストップの仕草をする。

「気など遣っていません。私がクナイを投げなければこつはならなかった。過程はどうあれ、原因を作ったのは私です。私が殺した」

「止めてホント。お前の気持ちは分かったから……俺がやったんだ」

「何このやり取り!?!アンタら敵同士だよね!!」

新八が二人に突っ込んでいると、

「……う、む?」

「お嬢様!?!」

「ナギ!?!」

なんとナギがむっくりと起き上がった。

「ちよつ、大丈夫何ですか!?!ナギちゃん!」

「いや……死んだと思ったんだが……」

そう言うとナギは頭に刺さっていたクナイを抜いた。

「これ……プラスチックじゃん」

「……え？」「……」

ナギはクナイを呆れて見つめている。

「よく見たら……落ちてるクナイ……半分以上がプラスチックよ？
コレ……」

ヒナギクが床に散らばったクナイを見て言った。

「な……シスター！？何故こんなややこしい事を？」

ハヤテは柱にもたれ掛かったままソニアに尋ねる。

「何故って……あんまりお金ないのにそんなに武器なんて買えるか
……！」

（ ）（ ）（納得の理由だ……）（ ）（ ）

一同は呆れたようにソニアを見た。

「まあ、そんな事はおいといてー」

ダッ！！

「はああああアア！！！！」

「ッ！？」

ソニアはダッシュで銀時の所まで距離を詰めると、勢いよくトンフアーを振り下ろした！

「んな！？」

寸での所でソレをかわす銀時。

トンフアーは無惨にもタイルの地面を叩き割った。

(避けられた……………?)

「何しやがんだテメエエエ！！

殺す気かアアアアア！？」

「殺す気でいきましたが……………何か？」

ソニアは銀時に向けてトンフアーを構えて直す。

「オイオイねーちゃんよオ……………」

年頃の娘がんな物騒なもん振り回したら危ねーだろ」

「クスッ……………どうぞお構い無く。それより……………あなたは一体何者ですか？」

「人に名前を聞く時は自分から名乗るもんだぜ……学校で習わなかったのか？」

銀時は頭を掻きながらソニアを見据える。

「ソニア・シャフルナース。まあこれから死にゆく人には教えても意味は無いと思われませんが……」

「俺ア坂田銀時つーもんだ」

「……ではあなたが…あの澳門家の惨事を治めたといわれる三千院家の侍……」

「オイオイ……どんな噂になってんだよ…何か根も葉もねえ尾ひれがついてそつで恐えな……」

そんな様子を見てソニアは不敵に笑う。

「ご安心を……私がこれから殺し差し上げますので。変な噂もつかないと思われませよ」

「過分な心遣い痛み入るが、生憎そいつアありがた迷惑だ。俺アマまだ現世とおさらばするつもりはねーよ……」

銀時はそう言つて木刀に手を置いた。

(来るか……)

ソニアもトンファーを掴む手に力を込める。

「その前に一つ頼まれちゃくれねーか？」

「……………」

突然銀時が口を開いた。

「こんなんでも一応三千院家の護衛なんでな……………もし俺が殺られたらコイツらには手出ししねえでやってくれ」

「銀さん!？」

「お前……………」

一同は驚いて銀時を見上げる。

「私がそんな約束を守る保証でもあると……………」

「オメーは三千院家への復讐と遺産が目当てなんだろう？
だったら話はこうだ。もしナギを殺れば遺産の話はチャラになる。
遺産の相続条件は継承者の生存が第一だからなア……………」

「……………」

「大方、後ろの兵士共も金で雇ったんだろ？
だったらオメーは最低でも莫大な遺産が手に入るこのチャンスに逃す手はねえ訳だ……………」

「く……………」

どうやら銀時の言葉は正しかったようだ。
ソニアの唇を噛む仕草が何よりの証拠だ。

「んでもう一つ。遺産の相続条件にハヤテを倒す事ってなってるらしいが……今のコイツはただの一般人だ。三千院家をクビにされてるからな。つまりその相続条件は必然的に他人に移るって話だ……」

「オイ銀時！お前……」

ナギは気づいたように声をあげる。ハヤテとヒナギクもすぐに気づいたようだった。

「……つまりアナタがその条件を負うと？」

「平たく言やアそういうことな……」

「なるほど……確かにそれならば私は彼らに手出しが出来ない。しかし良いのですか…随分とアナタが埃を被るようですが……」

ソニアは不敵な笑みを崩さずに銀時を見る。

「だから言ってるんだろ？万が一の話だ。俺はまだこの世に沢山未練があるんでね。死ぬ気なんてさらさらねーよ」

対する銀時もニタリと笑うと、木刀を抜く。

「銀さん！ダメですよ、そんな危険な事ー」

ハヤテが銀時を止めようと声をかけるが、新八がそれを制した。

「大丈夫だよ。あのちゃんばらんなら」

「新八君……！」

新八はハヤテを安心させるように頷く。

ハヤテは渋ったが、暫くして分かったと頷いた。

そう。皆は知っている。この男が簡単に殺られる訳がない事を。

ソニアは更にトンファーに握力を込める。

「……………そうですか。ならばー」

ダッ……！！

「命の取り合いといきましょうかアアア……！！」

一瞬で銀時との距離が詰まる……！！

「はああアアアア……！！」

ソニアは右手のトンファーを最高速度で振り下ろす！

（とった……！！）

ソニアは確かな手応えを感じ、勝利を確信し……

(な!?)

だが銀時の姿はそこには無く…

(そんな…!?)

ソニアのすぐ横に現れた!

(かわされた…!?)

やられる…!!!(?)

ソニアはぐつと目を閉じた。

(……………?)

しかし、木刀の衝撃はソニアには来ず……代わり手に持っていたト
ンファーが弾き飛ばされた。

ガン!! ガラン!!!

飛んでいったトンファーは虚しい金属音をたてて床に落ちた。

「ハイ、終了オ……」

銀時は木刀を腰にしまうと、一同のところに戻ろうとする。

「待ちなさい!!」

「ん？」

ソニアは悔しそうに唇を噛むと銀時を引き止めた。

「情けでもかけたつもりですか……!?!?」

「情けだア?んなもんオメーにかけるくらいなら、ご飯にかけるわ」

銀時は一つ溜め息をつく。

「喧嘩つてのはよオ……何か護るためにやるもんだろが。

オメーが親父さんの想いを護ろうとしたようによオ……」

「護るって……アナタは一体何を護ったというのですか？」

ソニアは振り返った銀時の答えを待つ……

すると、銀時が口を開いた。

「俺の武士道だ……」

「……………」

ガサツ……………」

糸が切れたようにソニアはその場に崩れ落ちた。

「私は父の為に……なのにこんな所で……」

地面を睨み悔しそうに呟くソニア。

「ハア……………」

銀時はゆっくりとソニアに近づいて来た。

「ねーちゃんよオ……………月並みの事言わせて貰うが、復讐なんて誰も面白くなんかねーよ?」

「うるさい!! アナタに何が分かる!! 私の父は……………父は……」

ソニアは銀時を見上げてキッと睨む。

「子を思わねー親が何処にいるよ……………」

「……………!?!」

「オメーはどう思ってるか知らねーが……………親父の仇打ちなんつーのは親孝行には、ちと辛すぎらァ」

銀時は面倒くさそうに頭を掻きながら続ける。

「復讐なんてしたとしても……………親父さんの想いを報いる事にはなんねえよ……………」

「……………」

「んな大それた事しなくても……ただ笑ってるだけで……いつも笑顔でいてくれるだけで……親にとってはこの上ない孝行になるんじゃないか？」

「笑顔……」

ソニアは若干の抵抗は残っているものの、銀時の言葉を一言一言噛み締めるように聞いている。

「そいつア一番楽だが、時にはとんでもなく辛くなる事もあるだろう……けどよオ、そいつを越られる事が出来りゃ……また新しい道が見えてくらア」

銀時はそう言うのと背を向けてゆっくりと歩き始める。

「俺は子供なんて持った事ねーから親側の気持ちなんて知ったことちやねーがな……」

ま、後はテメーの魂なかの自分の顔を突き合わせて話し合いな。話はそこからなんじゃねーのか」

「……………」

ソニアは遠ざかっていく銀時の背中を悔しそうに、しかしどこか清々しいように見つめる。

(……………父さん、すみません。悔しいですが、私の完敗のようです)

「んじゃ、帰るかア……」

銀時はいつも通りダルそうな表情で一同の所に戻ってきた。

「そうですね」

「銀ちゃんにしては格好つけ過ぎアル。銀ちゃんは最後までダメにならないと……」

「神楽ちゃん、……ここはそう言うセリフを言うところじゃないから！」

「今更だけど、銀さんも来てたんだな」

新八と神楽、長谷川は微笑しながら銀時の側に寄る。

「ハヤテ、大丈夫か？」

「立てる？ハヤテ君」

「ハイ、銀さんのおかげで大分休めましたから」

ナギと歩の心配に立ち上がって笑顔で応えるハヤテ。

「そういえば、この試練ってこれに合格した事になるのかしら？」

「言われみればそうだな……」

ヒナギクの言葉に思い出したように考え込むナギ。

「……」

「!？」

「何だア？地震？」

突然城が揺れ動きだした!!

一同は驚いて周りを見回す。

「来ましたね……」

「って、伊澄!? オメーいつの間……」

いつの間にか銀時の隣には伊澄と真司が立っていた。

「鷲ノ宮さん、来るって一体？」

「恐らくこの城の主……魔王でしょう」

「()(魔王? ……あ、()(」

そういえばそんな事を王様が言ってたなあ。つーかそもそもこゝ魔王城だったと思い出した一同。

.....

そして地響きの共に、一同の最後の試練が幕を開けるのであった……

第五十八訓 丸く収めたけりや三秒ルール（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「最初の質問だア。『マダオに質問。ベストプレイスは何処？』
ハイ、ズバリ答えましょうー！！
それはダンボールですー！」

長谷川

「違うからねエエエエエ！？ダンボールな訳が無いじゃん！俺はア
レだよ……ハツと同居してまた一緒の生活に……ハハハ！」

銀八

「まあ、今のコイツには無理だな。んじゃ次の質問。『ハヤテに質
問。今のパーティーで一番役に立たないのは誰？』」

ハヤテ

「そんな……！？皆さんとても凄いですよ！役に立たないなんてそ
んな……」

銀八

「っー訳で新八だそうだ」

新八

「何でだよ！？今一言も話に出てきてないだろ！？」

銀八

「続いてこんな質問。『新八に質問。歩の活躍を見てどう？悔しい？』」

新八

「全然…！？そんな事ないよ！？別にやろつと思えばいつでも出来るし…：…やらないだけだし、僕の場合！」

銀八

「んじやの最後の質問。『この小説のOPとEDは何ですか？』」

伽藍

「まあそうですね…：…OPは『遠い匂い』か『七転八倒至上主義』ですかね。EDは『SANAGI』ですね。

因みに最終回のEDだけはずっと決まっているんですよ。ペルソナ3のEDで『キミの記憶』と言う曲です。とても素晴らしい曲なんで皆様も良かったら聞いてみて下さい」

銀八

「んじや、まあ次回よろしく頼まア」

第五十九訓　そして伝説に……なるのか？（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「執事クエスト編も遂にクライマックスです！！」

伽藍

「今回は特に魔王を頑張ってみた所、当初予定してた文字数が1・5倍になりました！」

ハヤテ

「果たして僕は執事復帰なるのか！？」

クラウド・ハヤテ・伽藍

「では、始まります！」

第五十九訓　そして伝説に……なるのか？

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！！！！

魔王城は大きな地響きをたてて揺れ動く。

城だけでは無い……周辺も地震が起こっていた。

「首領！！この地震は……！？」

「まさか……魔王が目覚めたのでは……！？」

元盗賊の洞窟でも、この揺れは騒ぎになっていた。

「ああ……嬢ちゃん達がたどり着いたんだろう」

首領はGペンを机に置くと、腕を組んで魔王城の方向を見る。

バタン！！

「首領オオオ！！大変です、あらゆる所から魔物が続々と集まって来ているようです！」

「何イ!？」

首領は作業机から立ち上がる。

「恐らく、魔王の復活により各地の魔物が城に集結しようとしているのかと……」

「そうか……」

首領は立ち上がったまま作業場を見渡す。

「テメーら……今新しくやるべき事が出来たな……」

「……」

アシスタント兼子分達はぐっと首領を見つめる。

「嬢ちゃん達のピンチだ……」

「ここで動かにや盗賊の名折れよオ!!」

「……おオオオオ!!」「……」

子分達の返事を満足そうに聞くと首領は大きく息を吸い込む。

「行くぞオオオオ!!野郎どもオオオオオオオ!!!!」

目的地は魔王城だアアアアアアア!!!!」

「……おオオオオオオ!!!!」「……」

「恐らくこの城に棲まう魔の主だ……先程の騒ぎで目を覚ましたのだらう……」

「つーか誰オメー？」

銀時はいつの間にか隣にいた神父を見る。

「この教会の神父、リン・レジオスターだ」

「あ、そうなんすか……どうも」

神父が幽霊だという事は気付いていないようである。

スウ……

暫くすると、銀時達の前に黒い光が集まってくる。
次第に黒い光は塊を形成してゆき……

「フハハハハ……！！」

「！？」

塊から男の笑い声が広場に響き渡った。

「ようこそ……我が魔王城へ。
地獄へと繋がる鬼門の前へ……」

そして、塊は一気に膨れあがり……

「我が作りし死の螺旋……
貴様らも奈落に叩き落としてやるっ」

「!？」

その瞬間、塊は一気に爆発して煙が巻き起こる。
その煙の中から、一つ影が又うと出てきた。

「我が魔王だ……」

全身真っ黒に染まった身体に長いマント。
額にも『魔王』と書いてある。

「「「……」」」

一同は取り敢えず魔王を見ると、お互い顔を見合わせる。

（オイ……何だよアレ。魔王なのアレ？本当に魔王なの？）

（古過ぎるアルな……あんなのじゃ小学生でも騙されないネ）

（仕方ないだろう……このダンジョンは初代ドラクエ仕様だからな……）

（初代だってもう少しマシだったろうよ……だってアレ額に魔王って書いてあるよ？キ 肉マンの落書き並のスペックじゃん）

（ちょっと……魔王こっちガン見してますよ！？聞こえてるんじゃないですか？）

新八の言葉に一同は魔王に顔を戻す。

「……別れの挨拶は済んだか貴様ら？そう焦らずともすぐに皆一緒になれるぞ／＼」

「照れてるよ！ちょっと顔赤くなってるよ！聞こえたんだ、今のやり取り聞きこえてたんだ！！」

また一同は顔を見合わせる。

（どーすんだオイ、何か全然やる気起きねーんだけど…）

（何かもうこのまま帰っても良いんじゃないですか？）

（そうアルな…何か戦闘意欲起きないヨ）

（魔王っていう割には全然オーラが無いわね…）

（魔王こっち見てるよ……聞こえてるんじゃない？）

一同は魔王に顔を戻した。

「我に刃向かったのが貴様らの……その…運の尽き…だ／＼」

「物凄い照れてるよ！メチャメチャ恥ずかしがってるよ！目そらしてるよ！」

「黙れエエエエエ！！」

新八の言葉に遂に魔王は叫び声を上げた。

「お前ら空気読めよオオオオ!!」

魔王登場なんだから、ここは全員息を呑むシーンだろオ!? 皆武器を構えるシーンだろオ!?

魔王は尚も怒鳴り声を撒き散らす。

「そもそもさア、普通魔王の部屋に来たら真っ先に魔王が出てくるだろオオオオ!?

何でテメーら勝手に違っバトルしてんだよ!?

俺がどんなに出ていくタイミング考えてたと思ってんだアアアア
!?!」

一同は勿論、周りの兵士、壁に寄り掛かっているソニアも呆れたように魔王を見ている。

「もう頭来たわ! 本当は良いカンジのバトルになってきたらにしようと思っただけど、やっちゃうから! ！もう頭来たから俺! いきなり第二形態にいつちやうからアアアア!」

そう言っつと魔王の周りに黒い光がみるみる集まってくる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……!?!

「ヤベーぞ、何か魔王怒らせちまったみてーだぞ!?

「ちょっと、どうすんですかコレ!?

「ハアアアアアアアアア！」

魔王は光を吸収しながらどんどん大きくなっていき…

ピリリリリ……

突然携帯の着信音のような音が聞こえてきた。

「「「ん？」「「「

一同は何事かと周りを見回すと……

ピッ……

「ハイもしもし……魔王ですが」

「「え……？」「「

何と魔王が懐から携帯を取り出して電話に出ていたのだ！

『ちよつとまー君！！アンタ今何処にいるのよ！？』

「か……母ちゃん……」

魔王はかなりうろたえた様に声を出す。

「……何か魔王の母親みたいなんですけど」

「っーかプツシュホン押してるよな…アレ」

一同は取り敢えず魔王の電話のやり取りを見守る事にした。

「何処って学校だよ！もう授業始まるから切るぞ！」

『アンタ何言つてのオ！！さっき学校に連絡したらまだ来てないって先生が言ってたわよ！！』

何処ほっつき歩いてんの！！』

「な………何勝手に学校に電話してんだよババア！恥ずかしいだろ止めろよオオオオ！！」

『もうパソコン使うの禁止だから。それと今日事お父さんにも話すからね！！』

「父ちゃんには関係ねーだろオ！！ふざけんなよクソババア！」

『お小遣いも当分無しだからね！とにかく今から早く学校に行きなバカ息子！！』

「うるせエエエエエ！！テメーに俺の何が分かんだよ！！」

ああもついいよ！そんな事言っんなら俺もう学校行かねーからア！」

魔王は携帯に向かって思いきり叫び声をあげる。

「何かもう全然魔王じゃ無いんですけどあの人……その辺にいるただの高校生なんですけど」

「そもそも学校って何よ……」

「アレだよ……魔王を育成する為の教育機関だよ、きつと……」

目の前の光景にただ呆れる一同。

「もう分かったよ！テメーとは一生口きかねえから……」

『ちよつと待ちなさい、まーK』

ブツン……

魔王は勢いに任せて携帯の電源を切った。
そしてハヤテ達に向き直る。

「フフフ……残念だったな。たった今部下から大量の援軍がこちらへ向かっているとの連絡が入った。貴様らの命運もここまでだな……」

「いや聞こえてましたから。全部聞こえてましたよ、やり取り丸々……」

「……………」

「……………」

互いに無言で向かい合う事数秒……

「……………貴様らに見せてやる。第二形態の恐ろしさを／＼／」

「無理矢理戦闘に移行したよ！！」

さっきのやり取り丸々無かった事にしてるよ！

しかもメチャメチャ照れて俯いてるし！！」

「黙れエエエエエ！！ウチには出来の良い兄貴がいるんだよ！！」

魔王第一大学の首席で世界征服の経験もある兄貴がよオオオオ！！
だから両親は必要以上に俺に期待してくるんだ！俺にはもう耐えられねーんだよ、チクシヨオオオオ！！」

ゴゴゴゴゴゴゴ……！！

天井に向かって咆哮をあげると、先程とは比べものにならない程の闇が魔王に集まってくる！

「知るかアアアア！！完全に八つ当たりじゃねーか！！」

「つーか魔王第一大学ってどこだよ！？」

あまりの震度に城が少しずつ崩れて始める。

「マズいぞ！皆天井が崩れてきている…皆気をつける！」

「！！？」

長谷川の言葉通り、天井が徐々に落ち始めていく。

「オオオオオオオオオオオオオオ！！！」

魔王は周りの地面を破壊しながら巨大化してゆき…

「フハハハハハハ！！！！本物の魔王の力、貴様らにとくと教えてくれるわアアアアア！！！」

先程より三倍以上の背丈に、周りが闇のオーラで覆われた魔王が君臨した。

「アレが……魔王の最終形態……」

「あんな巨大な……」

先程とは雲泥の差のオーラを放つ闇の魔王が一同を見下ろしている。その迫力に息を呑むハヤテ達…

そして次の瞬間……！！

「なア！？」

魔王の巨大な右手が物凄い速度でナギに伸びていき、ナギを掴んだ！

「お嬢様！！！」

「ナギ！！！」

ハヤテとヒナギクは魔王の右手に駆け寄ろうとするが、

「無駄だアアアア！！！」

魔王は勢いよく腕を引っ込める！その風圧で二人は敢えなく押し戻されてしまった。

「は、ハヤテエエエエ！！！」

「お嬢様アアアア！！！」

ナギはハヤテに向かって手を伸ばすもその距離は遙か遠く。魔王はナギを掴んだ右手を大きく掲げると一同を改めて見下ろした。

「クハハハハハ！！ここからが本当の最終決戦だ。

この娘を取り返したくば、奥の部屋に來い！！そこで全ての決着をつけようぞ！！！」

「待て！！！」

ハヤテが叫ぶも魔王はナギを掴んだまま、壁を破壊して広場から奥に下がっていつてしまった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！！

今度は先程とは違う揺れが起こる。

「何だ！？」

「城というより地面全体が揺れているような気が……」

ヒナギクが地面に方膝をついて冷静にいう。

「恐らく……この世界が拒絶反応を起こしているのでしょう」

「拒絶反応？」

後ろまでやって来たソニアが口を開いた。

「元々この世界は私達の世界とはどうあっても繋がりが得ない場所。それを魔法の鏡で無理矢理繋いでいる。この世界がそれに耐えられなくなったのだと……」

「つまり早く元の世界に戻って鏡を破壊しなければ、我々は皆この世界で朽ち果てるという事だ」

ソニアの話を神父が継いだ。

「この揺れだと……そう長くは持たないだろう……」

「そんな…」

神父の言葉に焦りの色を隠せない一同。
すると…

「皆さんは急いでこの城から出て下さい」

不意にハヤテが口を開いた。

「ハヤテ君？」

「魔王の所には僕一人で行きます。皆さんは一刻も早くこの世界から脱出して下さい」

ハヤテは一同を振り返るときっぱりと言い切った。

「何言ってるアルかハヤテ！一人なんて危険ネ！」

「そうよハヤテ君！いくらなんでもー」

ハヤテは右手を上げてその言葉を制す。

「このまま全員残っても帰りの危険が増すだけです。

それに今回の件は僕が皆さんを巻き込みましたから……皆さんをこれ以上危険に晒す訳にはいきません！」

「……」

「真司さん、皆さん全員運べる式神は出せますか？」

「勿論じゃ。我を誰だと思っておる？」

「では、お願いします」

「綾崎……お主」

真司は不安そうにハヤテを見るが、ハヤテは大丈夫だと頷く。そしてもう一度一同を見渡す。

「皆さん、勝手に言ってますみません。ですが、ここは僕のけじめをとらせて下さい」

「ハヤテ君……」

すると、銀時がハヤテの横に並んだ。

「そういうこつた……」

新八、神楽、オメーらはコイツらの事をしっかり守れよ」

「銀さん!？」

ハヤテは驚いて銀時を見上げる。

「いくらレベルが高くてモナー、魔王相手に一人は足元を掬われかねねーぞ。」

「せめてもう一人は必要だろ？」

銀時はそう言って微笑してみせた。

「でも……」

「安心しな。俺ア巻き込まれた訳じゃねーよ。それにオメー一人行かせて何かあったら、マリア達にどやされるからな」

「銀さん……わかりました」

ハヤテは銀時を見て頷くと、今度はソニアに目を向けた。

「シスター、暗殺されそうになってこんな事を頼むのはナンですが……この世界の出口に皆さんを案内してくれませんか？」

「……………わかりました」

「な、あなた!？」

ソニアは少し躊躇いの表情を見せたが、そう答えた。その返事に驚いたヒナギクはソニアを見る。

「父に受けた借りは必ず返すように教わってきました。今回はその銀髪に借りがありますから……」

ソニアはそう言って銀時に目を向ける。

「そうかい……んじゃ精々しっかり案内してやってくれよ」

「しかし……」

そう言ってソニアは銀時を見据える。

「貴方に敗けた借りも必ず返します故……覚悟しておいて下さい!」

「時間がありません。皆さん、行って下さい」

一同の後ろではいつの間にか、真司は大きな式神を召喚していた。皆は各々式神に乗ってゆく。

「銀時様、ハヤテ様…これを」

伊澄は式神の上から銀時とハヤテの木刀に何やら術をかけた。

二人の木刀は白い美しい光を帯びる。

「あの魔力相手にはこれでも少ないくらいですが…」

「いえ、ありがとうございます！伊澄さん達もお気をつけて」

ハヤテは正宗をぐっと握るとそう答えた。

「では行くぞ皆、しっかり掴まっておれ」

真司の言葉に皆は式神にしがみついた。

「二人とも、気をつけてね」

「銀ちゃん、私帰ったら寿司食べたいアル」

「僕はすき焼きで良いですよ」

「ナギをお願いします」

「何かまた影が薄くなってるけど……二人とも頑張って！」

「坂田銀時……敗けは必ず返させてもらいます」

各々が二人に声をかける。

「では頼むぞ、スサノオ。
二人とも、武運を祈る」

スサノオと呼ばれた式神は頷くと、城の外に向かって跳躍して行った。

「いや、俺のコメントはアアアアア!?」

長谷川の叫び声が響き渡るなかで、銀時とハヤテは魔王の下がっていった方向に身体を向ける。

「んじゃ行くか……ご主人様を助けにな」

「ハイ！」

*

「な！？何だこの魔物の数は…！？」

スサノオに乗って一同が城から出ると、城の周りを魔物の大軍が囲んでいた。

「こんな数…：抜けられるんですか！？」

新八達は焦りに加えて困惑で表情を曇らせる。

「くッ…：こんな時に…：」

「俺達に任せな…」

「！？」

真司達が後ろを振り返ると、元盗賊達が一斉に並んでいた。

「あ、アナタ達は…：！！」

「お前ら…：どうしたアルか！？」

新八と神楽は驚いて声をあげる。すると、首領が一步前に出た。

「嬢ちゃん達が危険だという勘がしたからな…：この様子だと当たってみたいだな」

首領は腕を組んで新八達の前に出る。

「事情はまったく分からねえ……あの嬢ちゃんも居ねえようだしな。だが……今俺達がやるべき事はオメーさん達の行動を助ける事だ」

「首領さん……」

新八の言葉に首領は何も言わずと右手を出す。

「野郎どもオオオオオ！何としても嬢ちゃん達に魔物を近づけるんじゃないぞオオオオ！」

俺達の底力、見せてやれエエエエエエエエエエ！！」

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』」

そう叫ぶが早いか、子分達は一斉に魔物に飛びかかっていった！

「嬢ちゃん達、早く行きな！」

「首領さん、ありがとうございます！」

「済まぬ、助かる！」

一同は首領に頭を下げると、式神に掴まり直して……

「小僧！！」

「はい？」

「あの嬢ちゃんに伝えておいてくれ……必ず賞を取ってみせるってな……」

ぐつと親指をたてると、首領は魔物の軍勢に突っ込んでいった！

「は……ハードボイルドオオオオ……！」

真司と新八はそんな首領の背中を見てそう叫んだ。

そして、スサノオはソニアの案内でこの世界の出口に向かって走り出した。

*

一番奥の広場には巨大化した魔王とその右手に掴まれたナギが居る

……

「お前……ここでこんな事をしていいのか？学校は……？」

「我は魔王だ……怖いものなど何も無い」

魔王はゆっくりとナギを見下ろす。

「それにしても……奴等は来ないようだな。どうやら貴様は見捨てられたらしいな……」

「来るさ……必ず、ハヤテなら……」

ナギは魔王を睨んではっきりと言い切った。

「フハハハハハ！何とも美しい絆だ……しかしー」

魔王がそこまで言った時……

「お嬢様アアアア！……ご無事ですか!？」

「な!？」

壁の穴から、二人の男が歩いてきた。

「ハヤテ!!」

「オ、イ俺もいるんですけど……」

ナギはハヤテに向かって笑顔を見せた。

対する魔王は二人を睨みつける。

「愚かな……たった二人で我に挑もうというのか？」

「うるせーよ、今時古い格好しか出来ねえテーマなんぞ」

「僕達二人で十分です」

銀時とハヤテはニヤリと笑って魔王を見上げる。

「貴様らたあの勇者では無いな……一体何者だ？」

「別に、名乗るほどのものではありませんよ。ただの執事と……」

「侍だ」

ハヤテと銀時は同時に木刀を構えた。

「小賢しい……虫けらどもが……」

魔王は左手を二人に向かって差し出す。

すると、そこにはみるみると闇のエネルギーが溜まっていく……

「奈落の底に堕ちるかいイ!!」

くらえエエエエ!!」

魔王からとてつもない闇エネルギーが一気に放出された！

「いくぞオオオオ！！！！」

ハヤテと銀時も木刀を振り上げて、闇エネルギーに向かって振り下ろす！

二人からは光のエネルギーが一気に放出された！

ドオオオオオン！！！！

闇と光の波動がぶつかりあう！

「何イ！？ 我の波動を止めただと！？」

「おオオオオ！！！！」

光と闇は押しも押されぬつばぜり合いを繰り広げる。

「我と張り合おうというのかアアアアア！！ 虫けらがアアアアアアアアア！！！！」

「ハヤテ！！」

魔王は更に闇エネルギーを増幅させる。
徐々に光は押されてゆく…

「ぬぐおオオオオ!!」

「何て力……このままでは…」

二人は踏ん張り、何とか目の前で闇エネルギーを抑えている。
しかし、誰がどう見ても圧倒的に魔王の波動が優先である。

「フハハハハハ!!止められぬ、誰にも我は止められぬわアアア
アア!!」

「銀さん……このままじゃ」

ハヤテがそう言って銀時を見ようとした時、

「……行け」

「!?!」

銀時が一言そう言った。

「ここは俺が抑えてる。オメーはさっさとナギを助けに行け」

「何を言って……るんですか!

ぐ……二人がかりでもやっとなのに…」

「オメーはナギの執事だろーが。アイツの事を一番に考えてねーで
どうするよ」

「でも……」

何か言おうとしたハヤテを銀時は目で遮る。

「心配すんな……あんな魔王バカにやられる訳ねーだろ。
俺ア大丈夫だ。

一刻も早く行ってやんな、執事ヒローを待ってる主ヒロインのもとに……」

「……………パフエ、おごります！」

そう言うと、ハヤテは横に飛び出して魔王に向かって走っていく。

「愚策中の愚策だ！ たった一人で残るとはなア！」

「おオオオオ……………」

銀時に襲いかかる闇エネルギーは更に力を増してゆく……

足がめり込み……………身体中の筋肉が悲鳴をあげる。

「フハハハハハハ！ 先ずは貴様からだ！ 死ねエエエエエ！！」

「銀時！」

闇エネルギーは一気に銀時を包みこ……………まなかつた。

「何だと！？」

「おおおおおおお！！！！」

銀時は全身全霊をかけて、魔王の波動を持ちこたえているのだ！

「馬鹿な！？たった一人の人間に……我が波動が止められただとオオオオ！？一体何処にそんな力が……！？」

「力ならまだ沢山あるさ……俺のとおきちかひの魂がな……」

銀時は更に洞爺湖に力を込める。

「ほざけエエエエエ！！脆弱な人間がアアアア！！」

「おおおおおおお！！！！」

押されては押し返す！押されては押し返す！その繰り返しである。

ハヤテは魔王のすぐ下までたどり着いていた。

（お嬢様！いますぐに助けないと……もう銀さんも限界だ……早く早くしないと……）

（ならばイメージするんだ）

不意にハヤテの隣に神父が現れた。

（イメージ？）

（君の心が主を護る力になるから……あとはイメージだけ。それを具現化する力を君はすでに持っているだろ？）

（僕の心……）

ハヤテの足は高速に床を蹴り始める。

（護りたいんだ…誰よりも速く…誰より速く…君の元に駆けつけて！！）

「行けエエエエエ！！ハヤテエエエエエエエ！！」

文字通り……疾風のごとく……！！

銀時と叫びが響き渡った瞬間……！音速と化したハヤテが魔王の右手に突っ込んだ！！

「なア！？」

魔王はバランスを失い、横に崩れる。

その隙にハヤテはナギを抱き抱え、その場から一瞬で離れた。

「おのれエエエエエエ……！！貴様らアアアアア……！！」

魔王はすぐに体制を立て直して、左腕を振り上げる……!!

「ハヤテく？昼間から学校サボってる奴が子供ならどうするよ？」

「そうですねえ……まあそういう時は一言……」

「き……貴様らア！？」

魔王のすぐ目の前に現れたのは、木刀を構えてニタリと笑う侍と執事の姿。

「さつさと学校行けエエエエ！！このドラ息子オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「グオオオオオオオオアアアアアアアアアアアア……」

二人の突きが最大級の光の波動となり、魔王の身体を跡形も無く貫いた！！

*

「な…何だ！？魔物達が消えてゆくぞ…？」

「本当だ…！」

元盗賊達の周りから、どんどん魔物達が姿を消していった。

「首領オ！！見て下さい！魔王城が……」

首領が魔王城に目をやると、魔王城が光の粒子となって空に消え始めていた。

（嬢ちゃん達……遂にやったな……）

首領は消え始めている城を見て、フツと微笑すると、子分達を見渡す。

「帰るぞテメーらー」

「首領オ！！」

「今度はどうした！！」

首領が子分の方を向くと、子分の一人がドレスを着た女性を抱えていた。

「コイツア……リベアリアの姫様じゃねーか……」

「城の側に倒れてましたが……どうします？」

子分は不思議そうに首領を見る。

「決まってるだろ……もう俺達は賊じゃねーんだ。届けに行くぞ」

「……ハイ！」「」

子分達は姫を場所に乗せて、出発の準備をする。

（嬢ちゃん……達者でな）

首領は消えゆく城に向かって敬礼をしたのだった……

くアレキサンマルコ教会く

「おおおお!?」

「うわアアアア!?」

「ぬわアアアア!?」

いきなり鏡から放り出された銀時達三人。

「銀さん!」

「銀ちゃん、やったアルな!」

「ハヤテ君、無事だったんだね!」

心配そうに鏡を見ていた一同は、ホットした様子で、三人の元に集まってきた。

「オメーらも無事に出られたんだな」

銀時は腰を押さえながら立ち上げると、周りを見回した。

一同は各々今回の件を笑ったり、驚いたりしながら話していた。

まあ、そんな感じで一件落着…

「オイ銀時…」

「ん？どした…？」

真司が銀時に話しかけて来た。

「お主…伝説の醤油の話はどうなった？」

「……ああアレ？まあアレだよ……平たく言うと嘘だな、うん。

帰りにスーパーで何かテキトーに醤油買ってやるからそれでいいだろ？オメーは塩分とれりゃ満足なんだろ、な？」

「貴様……謀ったな……伝説の醤油があるというからこんなに一生懸命頑張った…」

真司は額に青筋をたてて言葉を絞り出す。

「バカヤロー、今回の経験はオメーを一步も二歩も強くさせたんだ。無駄なんてことは一つも無い……ん？」

真司はいつの間にも鬼門を開いていた。

「ちょっと……真司君？いやいや、ちょっと待ー」

「羅刹、この銀髪を斬れ」

「御意」

鬼門から赤い女性の鬼が二刀を構えて現れた。

「待て待て待てエエエエエ！ー一旦落ち着こう！？ー一旦座って落ち着こう！？」

「羅刹……」

「御意！」

羅刹は飛び上がって銀時に刀を振りかざす！
目がマジで殺る目であった…

「だあアアアア！？無理無理怖エエエエ！ー」

「待ちなさい！ー」

たちまち銀時と羅刹による鬼ごっこが始まる。

「ちょっと！？大丈夫なのかな、ヒナさんアレ止めないと…」

「放っておきなさい…自業自得よ」

慌てる歩に溜め息をつくヒナギク。

「くおらアアア！！
待てエエエエエ天パアアアア！！」

いつの間にか鬼ごっこに参加している神楽。

「つーか長谷川さん、いつまでダンボールしてるんですか？」

「いや……何故か脱げないだよ、コレ」

隅っこで新八と長谷川が壁に寄っ掛かっている。

「坂田銀時……この借りは必ず、必ず返します！！
そして三千院家の遺産を……」

やっぱり懲りていないソニア。

「鏡……鏡……」

鏡を封印しようとしている伊澄。

「お嬢様……何か身体中の骨がガクガクします……」

「まあアレ……基本自爆技だからな……」

「今後も修行が必要だな」

身体中の痛みを訴えるハヤテと呆れ半分心配半分で様子を見ている

ナギと神父。

「悪かったって悪かった！！後で一本醤油買ってやるからアアアアアア！？」

「そういう問題じゃないわ戯けエエエエエ！！」

まあ、こんな感じで……ハヤテは三千院家の執事復帰も無事に……
……アレ？コレって合格なのか？

第五十九訓　そして伝説に……なるのか？（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「ようやく長編も終わって一段落だな。まあ後書きは関係ねーか。つー訳で最初の質問。『作者に質問。オリキャラのイメージC.Vは？』」

伽藍

「えーと、あくまで自分視点ですが、真司は緑川さんですかね。銀魂で晴明の声をやっている人。

姫史はコードギアスのルルーシュの声の人ですね。

幸久は言わずと知れた幸村の声のまんまです。

因みにもう少ししたら、また新しく投稿して下さいましたオリキャラが登場します。どうぞお楽しみに」

銀八

「続いての質問。『伊澄に質問。銀時とヒナギクってよく一緒にいるけどどう思うっ？』」

伊澄

「どっつて……別にどうも思いませんが／＼」

ヒナギク

「何か語弊のある質問ね…私は別に好きで一緒にいる訳じゃないですから！ー！」

銀八

「そつだよ？俺だってどうせならガキじゃなくてもっところスタイルが良くて胸も大きい……」

ガチャ……

銀八

「……次の質問いきまーす。『ヒナギクに質問。今回のクエストで一番役に立たなかったのは？』」

ヒナギク

「え？……そんな、皆頑張ったし、役に立たない人なんていないわ。今回は誰一人欠けても今回のクエストは成功しなかったと思うから」

新八・歩

「ヒナギクさん……あなた……（感）」

銀八（裏声）

「まあ強いて言えば新八君かしら？」

新八

「どうしてもアムタはいつもいつも水をさすような事ばかりするんですかアアアアア……！」

銀八

「『つー訳で今回の『使えなかったで賞』は新八が受賞だ。おめでとう新八』」

新八

「めでたくねエエエエエエエエエエエ！……！」

銀八

「んじゃ、ラストな。『ナギに質問。今回の銀さんのクナイの件についてどう思う?』」

ナギ

「刺さってたな」

銀八

「刺さってねーよ」

ナギ

「まあ、アレだけシリアスな雰囲気を一気にぶっ壊すあたりは流石だと思っぞ」

銀八

「オメーらも原作じゃそうだから。むしろハヤテのごとくの方がそういうの多いからねコレ…」

ナギ

「刺さってたな…」

銀八

「刺さってねーよ」

伽藍

「ま、また次回よろしくお願いします」

特別訓 人生山ありや谷もある(前書き)

クラウドの前書きの館!

クラウド

「今回は特別企画と題しまして前回質問にあった十年バズーカの話をやりたいと思います」

ハヤテ

「星空の侍さんの許可をいただきました、コラボ企画となっています!」

伽藍

「星空の侍さん、ご協力誠にありがとうございました!」

クラウド・ハヤテ・伽藍

「では、始まります!」

特別訓 人生山ありや谷もある

それは何気ない質問から始まった……

『銀さんに質問です。』

銀さんの好みの女性は積極的じゃないおしとやかなタイプと聞きま
した。・・・という事は成長した大人の伊澄ちゃんなんてモロストラ
イクなんじゃないんですか？

この質問と共に十年バズーカを送ります！是非、検証を・・・！』

星空の侍さんから送られてきたこの質問に、作者伽藍礮臣という馬
鹿者が「その案頂き！」という事で本編にそのまま使ってしまった
のである。

これは、作者の悪戯で始まったちよつとしたコラボ話……………

のはずだった……………

〱万事屋三千院支店〱

ピンポン……

「新ハイ、客アル」

「いや！？神楽ちゃんの方が近いでしょ！たまには神楽ちゃんが出てよ」

「何言つてアルか、どうせ新人なんて客を迎えるくらいしか役に立たないネ」

「いや、それ大分役に立つだろ！！」

ピンポン……

「ぱつつあん、お客さんがお待ちかねみてえだぞ」

銀時はソファに寝転がりながら言う。

「銀さんの方が近いじゃないですか！僕今掃除しているんですから、どっちか二人が出て下さいよ……」

「あゝ痛たたた…この間の古傷が…」

「何か急にお腹の調子が悪くなったネ…悪い病気かもしれないアル」

「アンタらは小学生か!！」

ピンポンピンポン…

「ハイハイ!今出ます!まったく…」

新八は文句を言いながら玄関に向かって行く。

ガラツ…

「ちわーっす!運び屋シヨウ・チャンです!」

「……あ、どうも。宅配便ですか」

「これ、お荷物です!」

新八はシヨウ・チャンと呼ばれた少年から荷物を受け取る。

「いや!?何ですかコレ?かなり大きくないですか!?!」

新八はダンボールの大きさに驚いて声を上げた。

「新八、どうしたアルか?」「んだよ……死神でも訪ねて来た

のか？」

神楽と銀時もノロノロと後ろからやって来る。

「うお！？何だこの荷物…」

「食い物アルか！？」

二人は驚いたようにダンボールを見る。

「こんな荷物…一体誰から…？」

「星空の侍さんからだそうです。」

「え……………？」

新八は首を傾げて運び屋を見る。

「うおわ！？何だコレエエ！？」

「バズーカアル！大変ヨ！万事屋にテロが仕掛けられたアル！」

ダンボールを開けると奇妙な形をしたバズーカが飛び出してきた。

「バ、バズーカ！？何で！？つか何がどうなってるの！？」

「では、自分はこれで！失礼しましたー！」

運び屋シヨウ・チャンは万事屋から出ようと…

「「「待てコラアアアアア！！！」「」

「ゴブウ！？」

特別訓 人生山ありや谷もある

「オメー名前は？」

「……大和将って言います」

「歳は？」

「……高校生です。ハイ」

運び屋基大和将という青年は銀時達にボコボコにされ簀巻き状態で居間にいた。

「職業は？お前ホントに運び屋なの？」

「いや……あの、探偵事務所をやっておりまして……色んな世界で星の危機を救ったり……
あ、今はとある小説で幻入りさせて貰ったりしています」

「神楽」

「うっす！」

神楽は簀巻きを持ち上げてぐるぐると回し始める。

「ギヤアアアアア！！！！止めてホント！マジだから！これマジだから！大和さん嘔吐かないからアアアアア！！！！」

パサッ……

「アレ……？何だコレ？」

神楽がぐるぐると回している簀巻きから何やら手紙が落ちてきた。

「何々……」

――――
拜啓 万事屋へ

星空の侍さんから頂きましたご質問が面白かったので本編でやろう
という事になりました。

質問の内容は下記の通りです。

『質問です。』（以下略）質問と共に十年バズーカを送ります！
是非、検証を……！』

……という訳で、後はテキストにヨロシク

敬具 伽藍礮臣

――――
「オーイ、神楽！取り敢えず降ろしてやれ」

「分かったヨ」

ドス……！

「ぐえっ!?!」

神楽は簀巻きの大和青年を放った。

*

「……………つまり、オメーさんはこの質問にあるバズーカを届けにここに来たんだな？」

「……………まあ、そんな感じで」

銀時達は将をソファに座らせて、向かい合わせになって話を聞いていた。

「まあいつか…………俺ア坂田銀時。この『万事屋銀ちゃん』のオーナーをやってるもんだ」

「私は神楽アル！ヨロシクな将！」

「僕は志村新八です。よろしくお願いします将君」

三人は将に向かって挨拶をする。

「あ、ああ…よろしく。え〜と銀さん、神楽、新八」

将は三人を交互に見て挨拶を返す。

「つーかよオ、コレマジで十年後になんの？」

銀時達はテーブルに置かれた変な形のバズーカを見る。

「俺も詳しくは知らないけど……多分大丈夫だ！」

「えらく根拠の無い話の割には自信満々ですね？」

グツと親指を立てる将に呆れる新八。

「なら試してみるアルよ！将、私に向かって撃ってみるヨロシ！」

「ちよつと、神楽ちゃん！そんな危ないって！」

新八はいきなり立ち上がった神楽を止めようとするが、

「まあ、でももし危ねえ代物だったらそれこそ伊澄に向けるわけにもいかなーよ。安全確認は必要だ。それに神楽なら多少バズーカ受けたって平気だろ」

「そういう事アル！」

「……確かにそうですね」

銀時の言葉に納得する新八。

その隣で将はバズーカを構えて神楽に狙いを定める。

「んじゃ行くぞ〜」

ドン！

バズーカから弾が発射され、神楽に直撃した！

「神楽ちゃん！？」

「……………」

新八と銀時は煙が舞い上がるなか、神楽の方に目を向ける。

「銀ちゃん…新八…どうアルか？何か変わった？」

煙の中から神楽と思わしき、しかしどこか大人びた声と共に、影がゆっくりとひいてゆく。

「……………な！？」

「神楽ちゃ…いや、神楽さんんんん！？」

三人の前に現れたのは背丈も伸びて、胸も大きくなった大人の女性となった神楽が立っていた。

(アニメ銀魂の金魂に出てくるオーナー神楽の姿と同じ)

「おお！メチャメチャ大人になってるネ！」

神楽(十年後)は自分の身体を見て驚きの声をあげる。

「まあこんな感じになるみてーだな」

「オイオイ…マジで十年後になんのかよ…」

将の言葉に半信半疑だった銀時は感嘆な声を漏らした。

「まあそういう訳だから、後はアンタ達に任せるぜ。俺はこれで帰ーぶっ!？」

「待てコラ……オメーこんな厄介事押し付けて勝手に帰るつもりか？」

将の首根っこを掴む銀時。

「いや……けどコレ他の小説だし…」

「良いんだよ…オメーん所の作者から自由に使ってやってくれとの後達しだ」

「あのヤロオオオオ!!」

銀時がもう一度紙を見てそう言うと、将は天井に向かって恨めしそ

うに叫んだ。

「まあ依頼料はテーマン所の作者からふんだくるとして、どつやつて伊澄にコイツを当てるかだな……」

「銀ちゃん……私お腹減ったネ」

「確かに、もうお昼ですよね……」

神楽と新八は窓の外から空を眺めて言う。

「んじゃ…飯くいなながら作戦会議とすつかア……」

「そうですね」

「分かったアル」

二人は頷くと、玄関から万事屋の外に出ていった。

「取り敢えず…オメーも来るか？」

「え……何処に？」

そんな訳で、銀時達はお屋敷に向かう事になった。

*

「はあ……なるほど。つまり彼はこの紙の依頼者なんですか」

「まあ、そういう感じだ……」

朝食の席で銀時は大体の事情をハヤテに話した。

「僕はこの三千院家の執事をしている綾崎ハヤテと言います。よろしくお願ひしますね」

「ああ…俺は大和将だ。よろしくハヤテ」

ハヤテと将は簡単に握手を交わした。

「それにしても……でかいなア、この屋敷」

将は周りを見て驚きから口を開きっぱなしになっている。

「マリアさんはどうしたんですか？」

「お嬢様を呼びに行ってますよ」

新八の問いにハヤテはご飯の盛り付けを整えながら答える。

「つーか今日オメーら学校なんじゃねーの？」

「何か今日は休みらしいですよ…理事長代理が面倒くさいから今日休みにするとかで…」

「どんだけテキトーな代理だよ…代理になってねーじゃんソレ」

「もつともですね…？」

ハヤテは困ったように笑ってみせる。

その理事長代理と銀時が会う事になるのはまだ遠い先の話…

すると扉が開く音が聞こえてきた。どうやらマリアとナギがやって来たようだ。

「あ、マリアさん。準備出来てますよ」

「ハイ？」

そう返事をしたマリアの周りにはキラキラとまばゆいばかりの光が輝きを放つ。

「……………」

「あ、あの……どうしたんですか？」

銀時達はその様子に唾然としているので、ハヤテが尋ねる。

「十話以上出番がありませんと……」

「なるほど……ストレスですね？」

ハヤテは納得したように頷く。

「ところで……そちらの方は？」

「ああ……実は」

不思議そうに将をみるマリアとナギに新八は手紙の件を話した。

「はあ……つまりその質問の依頼人さんが彼だと……」

「まあ、そんなところです」

マリアとナギは概ねの事情を取り敢えず理解したようであった。

「えーと、某小説の主人公をさせて貰っている大和将だ。こんな形で突然押しかけて申し訳ない」

「まあ依頼なら仕方ないな。私は三千院ナギだ」

「三千院家でメイドをしています、マリアです」

将に向かって二人は簡単に挨拶を済ませます。

「三千院！？つー事はこのちっさいのがこの屋敷の主人なのか？」

「誰がちっさいだアアア！お前初対面なのに無礼にも程があるぞ！私はれっきとしたこの屋敷の主だ！」

「マジでか！？こんなにちっさいのに主なの！？」

「貴様ア馬鹿にして！！ハヤテ、ハヤテー！！」

ナギは腕をバタつかせてキッチンにいるハヤテの名前を叫ぶ。

「どうかしましたか、お嬢様？」

「コイツに私がいかに凄いかを教えてやれ！」

「えっと……凄いかですか？」

「特技とか色々！！」

ハヤテはふむと頷くと、将に顔を向ける。

「お嬢様はとても頭が良いんですよ。外来語も八ヶ国は完璧ですし……」

「八ヶ国！？」

将は驚いてナギを見る。

ナギはそうそうと得意そうに相づちをうつている。

「それに読書量も凄いですよ。ありとあらゆる漫画は読んでいますし、それにゲームやネットの話では詰まるところを知りません」

「でも漫画を読んだ後はすぐに影響を受けるんですよ……そのくせ飽きっばいですし」

ハヤテの言葉にマリアは溜め息を一つ。

だんだん話がズレ始めてゆく……

「そうですね……毎朝ちゃんと起きてくれませんし、学校も毎回のようにサボるし……」

「たまに朝早く起きたかと思うと、新作のゲームに没頭しますからねー」

「それ誉めてないだろー!!」

いつの間にかナギの問題話にシフトしていた。

「困ったものですね」

「まじめなア……」

そのナギの様子を呆れたように眺めている将達。

「……要するに引きこもり？」

「違アアアアうー!!」

叫び声は屋敷中に響き渡った。

「まあまあ……取り敢えず話を戻しましょう?」

「あ、そうですね」

「むむ……」

新八の言葉にナギ達は渋々席に着くことにした。

「まあ、大体の内容は分かったが……なあ?」

「「そうですね」」

ナギが何とも言えない表情でハヤテとマリアを見ると、二人も苦笑してみた。

「今日はエイプリルフルじゃ無いぞ?」

「ハハハ……いきなりそんな話をして、信じられませんよね」

新八は困ったように笑いながら言う。

「でも、コイツを見りゃあ話は別だ。神楽、もう良いぞ。入って来い」

「ようやくアルか」

実は銀時達は話を円滑に進ませるべく、神楽をもう一方の外に待機させていたのだった。

そして…

「か、神楽さんんんん！？」

「ええ！？一体どうしたんですか！？」

「か、神楽アアアア！？」

入って来た神楽を見て驚愕する三人。

それもそのはず。普段の神楽より身長が高く、スタイルも抜群。大人びた色っぽさを漂わせている。

「ハイ、これが証拠だ」

「「「……………」」」

呆然とする三人の前で、銀時は神楽に手を向ける。

「いやいやいや！！誰ですかこの方！？」

「だから、バズーカをくらった神楽だよ」

「ハハハ……………」

新八神楽を見て苦笑いをしてみせる。

（ ）（ ）本当の話だったの……！？（ ）（ ）

*

「まあそんな訳で、万事屋対策会議を始めます」

食事の席で依頼遂行への対策会議が始まった。

「ハイ！」

「はい、神楽」

まず手を挙げたのは神楽。

十年後の様子に似合わない元気さである。

「ハヤテとマリアのご飯はとっても美味しいと思います」

「思いますじゃねーよ。今はそういう事を聞いているんじゃない無くて…
…」

「いや！ホントに美味しい！こんな美味しい料理食べた事ねえ！」

銀時の言葉を遮って将が感嘆の声をあげる。

「まあ、ありがとうございます」

「当然だ。ハヤテとマリアの料理に敵うものなどないからな」

ナギは何故か得意そうに微笑している。

「いや、だから…依頼の話をだな……」

「ハイ！」

「はい、新八君」

今度は新八が手を挙げた。

「やっぱり正面から、ちゃんと事情を話していくのが良いんじゃないですか？」

「ハイ却下。伊澄はメチャメチャ金持ちのお嬢様だよ？」

それをオメー、いきなりバズーカで打たせるなんて下手したら切腹もんだよ、切腹もん」

銀時は手を振って新八の案を却下する。

「そもそも伊澄だったら恥ずかしくて首を縦に振らんだろうな」

「確かに……」

ナギとハヤテも同意見のようである。

「んじゃ、他に意見はあるかー？」

「む！」

「ハイ、ナギ」

意外にもナギが手を挙げた。

「私にも…その十年バズーカとやらを試してくれ！」

「いや、だから人の話聞いてんの？」

「伊澄にいきなりそんな危ないものは向けられん。私も被験者になつてやるう」

「オメーただ十年後になりてーだけだろ」

「さあ、ドンと来い！」

銀時のツツコミを完全にスルーのナギ。

「ちょっとお嬢様!？」

「心配するなハヤテ。この小説はギャグ小説だ。間違っても危ない目には遭わないさ」

「いや…そんな身も蓋もない……」

ナギはきっぱりと言い切ると、将を見る。

「さあ来いマダオ。十年バズーカの威力、私がとくと見定めてやる」
「う」

「誰がマダオだアア！つーかどかの超人だよオメーは！！」

そう言っつて将はバズーカを構える。

「んじゃ行くぞ〜」

ドン！

将からバズーカが発射され、弾はナギに直撃した！

そして煙が巻き起こる…

「お嬢様！大丈夫ですか！？」

「ケホッケホッ！！」

ナギが咳をしながら、煙の中から現れ……

「っつてえエエエエ！？おおお嬢様アアアア！？」

「ナギ!？」

ハヤテとマリアの視線の先には、背が高くなり、胸も大きくなった大人のナギが立っていた。

かなりの美人で髪を長く伸ばしているその姿は紫子さんを彷彿とさせるものがある…

「こ…これが十年後…なのか」

当のナギは自分の姿を見て一人感動している。

「……………」

最早言葉が出ないハヤテとマリア。

「どうだ!見たかお前ら!コレが私の十年後だ」

「へえ、とても綺麗ですよ」

「人間、十年も経つと分からねえもんだなアオイ」

銀時達もかなり驚いてナギを見ていた。

「ナギー とっても可愛いアル!」

「わっバカ!!抱きつくなノノ」

神楽はギュッとナギを抱きしめる。二人の美女が戯れている姿は何

とも艶やかである。

「何かいやに熱の入ったナレーションじゃないですか？」

「この作者はどうしようもないバカだからなア……」

「銀さんところも作者で苦労してんだな……」

そんな将達の会話はさておき。

「フー訳で対策会議続けー」

「マリアも試しに受けてみるアルか？」

「オイオメーわざとやってんの？そんなに銀さんの話の邪魔したいの？」

神楽は突然マリアに話を振る。

「ええ！？いいですいいです！！」

私は恐いんで…遠慮しますわ？」

「そうアルか……勿体無いアルな」

「チツチツチ、なってねーな神楽は」

神楽の行動に将が溜め息をついて言った。

「ん？どういふ事アルか？」

「このくらいの年上の女性には少し若く扱うのが常識。十年後なんでもっての他だろ」

「「「!?!?!」」」

将は終始鈍感で通っているが、それくらいの事はわきまえているつもりだった。

しかし彼は知らなかった。自らが墓穴を掘っている事に…

「ん？アレ…俺なんか変な事言った？」

えらく周りの空気が凍りついている…

「ち、因みにオメーは何歳なんだ？」

「え？17だけど…」

その瞬間、ハヤテ達はテーブルから一斉にはけた。

残されたのは不思議そうに首を傾げている将と真ん中にいた為には逃げる事が出来なかった銀時のみ。

「年上…ですか。私はこれでもまだピチピチの17歳なんですけど…
そうですか、そんなに年上に見えましたか」

ゴゴゴゴゴゴゴ…!!

「はッ!?!」

幾多の死地を乗り越えて来た将だから分かる。

この気はヤバい…覇気並みにヤバい……
これは……

「ちょっと外でお話ししましょうね？」

「あのッ！？いやこれには……」

有無を言わず将の裾を掴むと、もう片方の手で銀時の裾も掴む。

「へ？」

「…あの実は一」

何故自分なのか全く訳が分からない様子の銀時と何とか逃れようとする将。

「では、行きましょうか」

「「「……………」」」

とびきりの笑顔（黒い）に成す術なく、二人は引きずられて行った

……………

「「「……………」」」

青い顔でそれを見送る四人。

「ぎゃああああああああ！すみませんすみませんすみませ
んんんんん！……」

「何で俺までエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！？」

「アーマン……」

響き渡る断末魔の叫び声に、ただ手を併せて無事を祈る事しか出来なかつた……

「銀さん……俺もう絶対女性に年齢の話しないよ」

「その通りだ……百害あって一利なしだよ。煙草と一緒に」

道路を歩いていく銀時一行。

将はまだトラウマになっているのか震えている。

結局、対策会議では何の成果も得られずに、銀時達は取り敢えず伊澄が居そうな場所をあたる事になったのであった。

「それで？何か死はあるんですか？」

新八は当たり前前の事を尋ねる。

「うむ……まあ咲の家に行ってみるのがいいかもな」

「あ、そうか。その可能性はありますね、ナギちゃ…ナギさん」

因みに、何故ナギがついてきているのかというと…

『こんな姿、人に見せないのは勿体無いでは無いか！（特に咲やヒナギクに！！）』

との事である。

「咲アイツ夜ん家か……あのバカがいるんだよなア……」

「まあ、取り敢えず行ってみましようよ。居なくても何か良い方法を教えてくれるかもしれませんし……」

「……まあな」

そんな訳で愛沢家に向かう事になった。

〜愛沢家〜

リンドーン……

「でか!?!ここもお屋敷かよ!?!」

「つかこの町どんだけお屋敷あんの!?!」

「何かもう慣れてましたけど……改めて考えると凄いですよね」

将の驚愕する様子を見て、新八も感慨深いように頷いた。

「いらっしやませー」

すると、扉が開いて愛沢家のメイドであるハルが出てきた。

「オメーは相変わらずだな。ギャップ娘」

「銀さんも相変わらず焼け野原みたいな方ですね」

「オイ! どういう意味だソレエ。まさか俺の頭の事を言ってるんじゃないだろうな!」

「皆さん、咲夜さんのお友達なんですか?」

銀時をスルーしてハルは後ろの四人に目を向ける。

「ああ、僕は志村新八です。銀さんと一緒に万事屋をやっています」

「同じく神楽アル。万事屋で天パとダメガネの面倒をみてるアルよ」

「では、アナタ達が万事屋さんの従業員でしたか。お話しは兼ね聞いていますよ。」

愛沢家のメイドのハルと申します。よろしくお願いします」

ニコツと笑って挨拶をする。

因みにハルは神楽とは初対面であるので、変化には気付かない。

「俺は大和将だ。え〜と訳あって何故かこの小説に飛ばされて来た」

「ハイ、よろしくお願ひします ……でそちらの綺麗な方は?」

ハルは将の隣のナギ（十年後）に目を向ける。

「フッフ……何を隠そう、私が三千院ナギだ!」

「……………」

ハルは目を疑ったが、確かによくよく見れば容姿は大人っぽくなっ

てはいるがナギであるし、声もナギのものである。
しかし、背丈といい胸の膨らみといい自分の知っているナギとは似ても似つかない。

「ええ！？三千院ナギさん！？本当に！？」

「うむ 本当だとも」

「一体どうして…何があったんですか！？」

「この事情も含めて今から話があるような感じだな」

銀時は頭を掻きながら、そう言った。

「わかりました……取り敢えずどうぞ……」

「……お邪魔します」「……」

一同は愛沢家に入っていった。

*

「な……！？何やて、お前がナギ！？」

「フフン……その通りなのだ。」

「これが十年後の私らしい」

「……………マジ？」

咲夜はナギの姿を何度も見ても見ても信じられないように目を見張っていた。

「それに神楽までその格好……一体なにがあつたん！？」

「そこで話が戻る訳だ」

銀時は要点だけすくって、咲夜とハルに簡単にあらましを話した。

「普通ならツツコミを入れるところやけど……ナギ達のおんな姿み
らなあ……」

「そんなドラ もんみたいな道具が本当にあるんですねー」

ナギ達の姿を見た為に、二人は話を何とか理解してくれた。

「んで、伊澄さんにそのバズーカを使うのが、今回の依頼なんやな
？」

「ハイそうですね。それでまあ、どうやって実行するかを考えてる
んですが……」

「確かになあ…伊澄さんなら恥ずかしがって了承なさそうやしな」
咲夜はうんうんと頷く。

「やっぱり奇襲やな。気付かれないように射ちにいくんや」

「でもそれって端から見たら暗殺してるみたいですよね…やる前にバレたら僕ら打ち首ですよ」

「そこは仕方ないやろ。笑いはいつも死と隣り合わせなんや」

「いや、聞いた事ねーよそんな格言」

「まあ、そうと決まれば鷲ノ宮家に侵入やな」

咲夜は周りを見回して作戦を話し始めてた。

作戦は至ってシンプルなものだった。

まず咲夜とナギが鷲ノ宮家に行く。理由はナギのこの姿を直して欲しいとか何とかテキストな理由をつけて。

一方の四人は鷲ノ宮家に侵入し、ソリツ スークもビックリな潜入で、伊澄を狙い撃つという事だった。

それで新八が一言。

「完全に暗殺計画じゃん…」

まあそんな感じで一同は鷲ノ宮家に向かおうとしたのだが、

「なあ、ちょっとその十年バズーカで頼みがあるんやけど」

「頼み？」

銀時が尋ねると、咲夜はこくりと頷いて続けた。

「小太郎を撃つてみてへんけど」

「お、それ面白そうアルな！」

「ツラア？いいって…せつかく今日はあのバカが出て来なくて平和に終わるうとしてんのによオ……………って聞いてんの？人の話」

しかし、咲夜は銀時の言葉には耳を貸さず神楽達と盛り上がったいる。

「確かに…桂さんの十年後ってちょっと気になりますよね」

「あの電波が少しでもマシになってるといいアルな」

「せやろ？んな訳でちよつと試しにな」

面白そうな事に目がない咲夜の提案に二人もノリノリである。

「いやだから、もう9ページ目にきてるんだよ？んな事してる場合じゃー」

「将、このバズーカって弾数はどのくらいなん？」

「多分まだまだ大丈夫だと思うぜ。なんせウチの作者が頑張ってる買

「った高級品だからな」

「さよか。んなら早速小太郎に試しにいこうか」

「「「おー!!」「」」

「話を聞けエエエエエエエエエエ!!」

銀時の叫びも虚しく、また寄り道をする事になった。

*

「ほ〜ら高い高い!!」

「ワン」

庭では桂とギンが戯れていた。

「そうかそうか、嬉しいか。お前は実に素直だな。その調子なら攘夷志士も夢では無いぞ」

「ワン」

「ハッハッハ!!よせよせ、そんなに舐めるでない」

そんなバカ丸出しの様子を茂みから除き見る一同。

「オイ……何だアレ。気持ち悪いんだけど……」

「小太郎の日課や。毎日必ずギンと遊ぶ時間を作ってるからな」

「いやあのさア……あの犬の名前変えてくんない？何かスゲー嫌なんだけど。アレ見てると……」

銀時は溜め息をついて言う。

「まあまあ、桂さんもきつと寂しいんですよ。エリザベスがいないから……」

「そうアルな……やっぱり可愛がってたペットと離ればなれになるのは辛いネ……」

新八と神楽はそんな事を言っって桂を見ていた。

「ま、とにかく今は目の前のオモシロに専念やな」

将からバズーカを受け取り、咲夜は桂に向かって狙いを定める。

「行くで！」

ドン！

あっという間に桂は煙に包まれた。

「一体……十年後の桂さんは」

「どうなってるアルか……」

一同が目を凝らして煙の中を見つめていると……
二人の男の影が映った……

「全く……また高杉さんちの子供が花火をしているのかのう……」

「いえ、桂の旦那。この煙はここだけのようですね」

長髪の老人と白い短髪の男が立っていた。

「何でだアアアア!?!」

一同はすぐに二人に駆け寄っていく。

「なんじゃ騒々しいのう。おや、咲夜ちゃんとそのお友達かい。
大きくなったのう。ホレ50円をやるう」

「咲夜の姉貴、お久しぶりです。元気にされてましたか?」

長髪の老人は紛れもなく桂であり、白髪頭は……誰?

「何でやねん!!何で小太郎がこんなジジイになってんのや!」

「コレって十年後の姿にさせるんじゃないんですか!？」

「うーん……たまに出るバグだと思うな。時々理解不能な事が起るんだよ」

咲夜と新八に首ひねって答える将。

「なんじゃあ、ジジイと思って嘗めたらいかんぞお。わしはこれでも昔アレだったんじゃ。だからアレじゃ……アレ……なんじゃったか…… おお新太郎君じゃないか、大きくなったのう。50円をやるう」

「うざ!!ジジイになって余計面倒になったわこのアホ!」

「竜宮編の時と何ら大差無いアルな……」

呆れたように老人を見る神楽と咲夜。

「それからコイツ!この白髪は誰やねん!」

「姉貴……お忘れですか？」

まあ無理もない。あつしは結構変わりましたからね。

……ギンです。服役から戻りました」

「だから何でやアアアアア!」

「何で人間になってんだよ!何で頬に十字傷がついてるんだよ!最早十年後とかいうレベルじゃねーだろ!」

咲夜と新八のツツコミが庭に響く。

「ちょっとどうすんですかコレ……元に戻るんですか!？」

「バグとはいえ本来のバズーカの効果と同じだから多分大丈夫だ」

「いや多分って……!本当に大丈夫なんですか!？」

新八は改めて変わり果てた二人を見る。

「もう良くね?別に前と変わんねーじゃん」

「変わるだろオオオオ!犬に至っては人間になってんですよ!?輪廻転生どころの騒ぎじゃありませんよ!」

「もう良いじゃん。元々ツラなんてこれくらい使えねー奴だったし。犬だってアレだよ?もしかして悪い魔法使いにあんな姿にされてい……実はこっちが正体かもよ?」

「そうアルな。むしろこっちの方がしっくりくるアル」

「オメーら考えるのが面倒なだけだろ!……!」

無責任100%の二人に突っ込む新八。

「まあでも、ボケとしてはそこそこおもしろかったし、ページも押し来てることやし、伊澄さんの家に向かおうか」

「え!?!この二人放置したままでですか!?!」

「……………大丈夫や！ハルさんが付いておるから」

「ええ！？私ですか！？」

ハルは困ったように老人と白髪のやーさんを見る。

「あの……………せめてもう一人」

そう言って振り返ると……………もう誰もいなかった。

(逃げられた！！ってか消えるの速ッ！？)

「おおハルさんかえ？随分大きくなったのう。ホレ1000円をあげよう…」

「姉御、世話になりやす！」

「……………」

一刻も早く元に戻れと願うハルであった。

「悪い事しましたね…完全に押しつける形で…」

鷺ノ宮家に向かう道中、新八が口を開いた。

「良いんだよ。若いうちの苦労はいつか実を結ぶから」

「そうだな。人生において無駄な事なんて一つもないのさ…」

「そうネ。きつと十年後になったら笑い話になってるヨ」

「アンタら責任って言葉知ってる？」

無責任の代名詞ともいうべき三人に呆れる新八。

「まあ後でウチが埋め合わせしとくわ。それよりもう少しで伊澄さんの家や。作戦大丈夫やな？」

「まあ、あんただでかい屋敷なら何とかかなんだろ」

「屋敷！？また屋敷なのか!？」

「ただだけお金持ちが集まってんの、この地域」

面白半分……いや、面白全部の咲夜は全員に改めて作戦を確認した。

そして、遂に作戦が開始される……その名も……!!

すみません、やっぱり今の無しで……

（鷺ノ宮家）

「なるほど……では、朝起きたらいきなりそのような姿になっていたのね？」

「まあ、そんなところかな……」

ナギを見て言う伊澄に咲夜が答える。

「でも……とても綺麗だし、元に戻るのも勿体無いわね」

「私もむしろずっとこのままでも良いな……／＼／＼」

「そしたらここに来た意味がないやろ……！」

咲夜はいつも通りボケボケの会話に突っ込む。

その様子を隠れて見ている銀時達。

右側に神楽。左側に新八。

正面の茂みに銀時と将が潜んでいる。

「あー…あー…こちら銀時。応答願います、どうぞ?。」

『こちら神楽アル、どうぞ』

『こちら新八です、どうぞ』

銀時の持っているトランシーバーからは二人の音がそれぞれ聞こえてきた。

「只今より、万事屋＋大和隊員による『地球を救え！十年バズーカ作戦』を実行します、どうぞ」

『銀さん、元ネタ古すぎますどうぞ』

『銀ちゃん私お腹すいたネ、どうぞアル』

「今は我慢しろ。今撃てばバズーカの大きさから気付かれる恐れがある。伊澄は一応式術師だ。気を引き締めて隙を伺え、どうぞ」

『『ラジャー』』

二人の声を聞いて銀時はトランシーバーを離す。

「いや……銀さん、何それ?」

「何って見りゃ分かんたら？トランシーバーだよ」

「いや……なんでトランシーバー？つーかなんで三人とも黒服にグラサンまで？」

そう。何故か三人はSPの格好にグラサンまでしていたのだ。

「決まってるだろ、雰囲気だ」

「まあ、戻す方法は調べてみないとわからないけれど、取り敢えずせつかく来たのだから例の漫画の続きを考えないかしら？」

キラーンと伊澄の目が光る。

「おお！それはナイスアイデアだぞ伊澄」

「ええ、ではお茶菓子を用意するわね」

「伊澄お邪魔、お茶菓子は我々がご用意します」

伊澄が席を立とうとすると、執事達がそれを引き止めた。何故なら彼女は家の中でも迷子になるからである。

「まあ、ではお願いします」

「ハッ！」「」

執事達は部屋を出ていった。

「よし、ではこの間のムカデ仙人との対決からだな！」

「ええムカデ仙人を何とかして倒さ無くては！」

「アカン……こうなったら誰にも止められへんわ」

本来の目的を完全に忘れたナギ。二人の様子を見て溜め息をつく咲夜。

「銀さん……何かアイツら目的忘れてないか？」

「まあ落ち着け。何らかの隙は必ずできる。幸い見つかったゃいなーんだ、辛抱強く待とうや」

銀時達が覗く屋敷内では既にナギと伊澄によるバクンが始まっていた。

次いで、美味しそうなお菓子も運ばれて来た。

「何か腹立つな……俺達とあの二人の立ち位置の差はなんだ……」

「新八一、神楽ー、辛抱しろよ。どうぞ？」

将の言葉をきいて銀時はトランシーバーで二人に呼びかける。

『ハイ、大丈夫です。どうぞ』

『このお菓子はメチャメチャ美味いであります、どうぞアル』

新八と神楽からは大丈夫だと言う返答が…

「は？お菓子？」

銀時と将が屋敷に目を戻すと、

咲夜の隣で普通にお菓子を食べながらトランシーバーで返答をしているチャイナ娘が一人。

「……って何してんだオメーはアアアアア！！！！」

バツ！！

銀時達は一斉に茂みから飛び出して来てしまった！

「アホオオオオ！！自分ら何してんのやアアアアア！！」

「銀時様？どうしてこんな所に？」

伊澄は驚いたように銀時達を見る。

「ヤバい！バレたら切腹だろ？銀さんどうすんだ！？」

「仕方ねえ！」

銀時は十年バズーカを伊澄に構える。

「ハイ？」

「悪いな伊澄。何も言わずにこのバズーカを受けてー」

「させるかアアアアア！！！」

「「！？」」

突然横から叫び声と共に、無数の鎖付きのクナイが飛んできた！

咄嗟に避ける銀時と将。

銀時達の前に立ち塞がったのは銀華であった。

「ッ！ババア……」

「貴様ア！！伊澄に何をしようというのか！」

「別に大した事じゃねーよ。

アレだよアレ……バズーカをだなア」

「暗殺かア！！！」

「んな訳ねーだろ。つまりだな……まあいいや。取り敢えずコレを見

てからにしろや!!」

銀時は銀華を抜いて、伊澄に狙いを定める。

「させるかアアアア!!」

「んな!?!」

銀時の足に鎖を絡めて躓かせる。銀時は十年バズーカを滑らせてしまった!

「とりゃあアアアア!!」

「おオオオオ!?!」

「ちよつとオオオオ!?!」

そのまま銀時を投げ飛ばす!
飛ばされた銀時は将に突っ込んでいき、二人とも池に落っこちた!

「銀さんん!! 将君!!」

新八は銀時達の所に急いで向かったが…

「まだまだアアアア!!」

銀華も池に向かって走ってきた。

ザバツ!

「逃げるぞテーマー！」

「ええ！？ちよつとオオ！？」

池から飛び出してきた銀時は将と新人を引っ張って、逃げ出した。

「待てエエエエエ！！この銀パーアアアアア！！」

銀華はクナイやら猫やらを銀時達に一斉射撃する！

「ぎゃあアアアアア！！だから僕は正面から頼もつって言ったんですよオオオオ！！」

「男はなア16過ぎたら自分の行動に責任持てエエエエエ！！」

「ただの運び屋……質問を運ぶ為に来ただけなのに……
何でこんな事になるんだアアアアア！！」

三人は口々に叫び合いながら、屋敷の周囲をぐるぐると逃げ回っている！

「死ねエエエエエ！！」

「……だアアアアア！？」「」「」

「……………」

そんな様子を見ても、未だに状況が掴めない伊澄。

「アホだな（やな）…」

勿論呆れながら傍観しているナギと咲夜。

「美味しいアル」

神楽は十年後の美しさとは対象的にお菓子を食べまくっている。

「ん？コレは……………」

すると咲夜が、足元にさつき銀時の手から飛んでいったと思われるバズーカが落ちているのに気がついた。

咲夜はそれを拾って、何となく伊澄に狙いを定めて…

ドン！

何となく撃ってみた。

「！？」

突然煙に包まれて驚く伊澄。

そして、煙が引いていき…

「「「おお〜！」「」」

十年後になつた伊澄を見て、ナギ達は感嘆の声をあげた。

黒く美しい髪に、身長も今のナギと同じくらい伸びて、まだ少し幼さが残る愛らしい容姿はそれでいて何処か大人びた雰囲気もある。胸も膨らみ、ますます美人となつて、着物がまた彼女の美しさを際立たせていた。

「こ…これは…一体／＼／」

「はあ、伊澄さんメツチャ美人やなア。これはワタルが見たら失神するだろうな」

真っ赤になつて恥ずかしがる伊澄（十年後）に咲夜が面白そうに言う。

「おお！凄いいではないか伊澄！」

「伊澄、凄い美人アル！！これなら銀ちゃんも一発で一目惚れネ！」

「はう……／＼／」

ナギ達も口々に誉めるが、伊澄は座りこんでしまった。

「せつかくの十年後や。銀時達に見せにいこうや」

「……………」

ブンブンと真つ赤になりながら首を振る伊澄。

「いやいや、でもそれだと依頼が成立しないではないか」

「そうアルよ。依頼の為ネ。それに私達はもうお披露目したアル」

そんな伊澄を見て、ニヤニヤとこの状況を楽しむナギと神楽。
まだ二人とも十年後の姿である。

「せやから、見せにいこうな」

「んー！！／／／」

それだけ恥ずかしいのであろう、頑として首を縦に振らない伊澄。

因みに銀時達は今それどころでは無い……

「待てエエエエエ！！貴様らアアアアア！！」

「銀さんんん！！何とかして下さいよアレエ！！」

「オメー銀さんが何でも出来ると思うなよ！銀さんだって逃げるし
かねー時もあんだよ！」

現在三人は全力で逃げ回っている。

「将、オメーアレだろう！幻 殺し使えんだろ！？ちょっと行ってあのババアの幻 ぶち壊して来い！」

「出来るかアアアアア！二重の意味で危ねーからソレエ！！」

銀時の発言に走りながら突っ込む将。

「逃がすかアアアアア！！」

「来たぞオオイ！！」

銀華は三人の寸前まで迫って…

カチッ！

「「「へ？」「」」

ドオオオオン！！

突然地面が爆発して四人はそれぞれ吹っ飛ばされた。何と運悪く地面に埋まっていた地雷を踏んでしまったようである。

吹き飛ばされ、薄れゆく意識の中で将は思った……

（今日で分かった事……それは女性に年齢の話をしない事と……もう下手に他人の小説に入り込むのは止めよう……

「つーか何で地面に地雷なんてあんの？何なのこの世界……あ、ヤベ……帰ってえ」

結局、伊澄達の変化はその直後に解けて伊澄の十年後の依頼は事情上失敗に終わったと言える。

そして、銀時達三人は病院に入院する事になった……

〈某練馬の病院〉

三つ仲良く並んだベッドで三人が天井を見上げている。

「将一……依頼料には病院代もつけとくからなコノヤロー」

「銀さん……依頼成功してねーじゃん。アンタ結局見てねーじゃん」

「バカヤロー、心の目で見たんだよ。銀さん実は心眼使えるんだよ」

「本当ですか？じゃあどうだったんですか？十年後の伊澄ちゃん」

三人はコルセットで首を固定させられているので上しか向けないのである。

「まあ……アレだよ。」

やっぱり結野アナが一番だよ」

「「見てねーじゃん！……！」」

普段は治りが早い銀時と将も、今回ばかりは何故か長い入院となつたと言つ。

因みに将は無事に元の世界に戻る事が出来たのかは、また別の話である……

特別訓 人生山ありゃ谷もある(後書き)

後書きコーナー

伽藍

「今回は銀八先生のコーナーはお休みです」

銀時

「フー訳で今回はコラボ企画に協力してくれた将に来て貰ってるぜ」

将

「どうもどうも……大和将です」

伽藍

「まず最初にお礼から。今回は本当にありがとうございました！」

将

「いやいや、こちらこそ。アンタらの世界も賑やかでとても楽しかったよ」

神楽

「かなり銀ちゃん達と息が合ってたアルな」

新八

「そうだね。なんかどことなく似てるよね二人とも」

伽藍

「マダオの所とか？」

銀時・将

「誰がマダオだアアアア!!」

伽藍

「まあ積もる話はさておき、ここからは宣伝タイムです!」

将

「宣伝タイム？」

伽藍

「今回出演してくれたお礼に将君の小説の宣伝タイムをとろうと思
いまして…」

新八

「ここはバラエティ番組かなんかですか…？」

銀時

「ま、堅い事言いつこなしだ。

せつかく出て貰ったんだからこのくらいの事はして当然だろ？」

新八

「確かにそうですね。では、張り切ってお願ひします!」

神楽

「熱湯に浸かっていたれた時間だけ宣伝タイムがとれるアル」

新八

「だからバラエティじゃねーつつてんだろオオ!？」

将

「え〜と、今俺が出ている小説は『幻想郷の星空』と言って、まあ何やかんやで幻想入りした俺がバトルやらコメディやらを色々とする小説だ。暇があつたら読んでみてくれ」

銀時

「オメーもう少しインパクトのある宣伝出来ねーのか？」

例えばカメ メ波だせますとか、腕がゴムのように伸びますとか…」

将

「んな危ねー特技は持ってねエエエエエ!！」

伽藍

「『幻想郷の星空』は僕が今更新が楽しみの小説の一つです。とても面白いと思ってます。笑いあり涙ありの作品となっていますので是非皆さんも読んで見てください!！」

銀時

「んじゃ、次回は聖なる焰さんが考案してくれたオリキャラの登場だ!！」

神楽

「次回もよろしく願いますアル」

第六十訓

人は皆幸せを求め走り続けるシークレットポリス（前書き）

クラウドの前書きな館！

作者

「読者の皆様、本当にどうもすみませんでした！深刻なスランプも相まって更新が大分遅れた事をお詫びします」

クラウド

「しっかりしなされ。これからは更新出来そうですかな？」

作者

「実はもう一つの小説の方に今は重点を置いてまして、これからも更新はかなり遅くなると思います。本当にすみません。何卒、ご理解の程をお願いします」

ハヤテ

「今回はオリジナルキャラクターの登場ですね」

作者

「そのオリキャラは白皇のSPという事で、白皇のSP自体全く原作にありません。ですので今回は大分オリキャラが増えてしまいました。SPの設定も勝手に作ってしまいました」

ハヤテ

「まあ、それは仕方ないですよ。設定がSP長にしろとの事ですからね」

作者

「なのでオリジナル展開が嫌いな方には本当にすみませんが、どうか付き合っていたいただけると嬉しいです」

クラウド

「では、始めますぞ！」

第六十訓

人は皆幸せを求め走り続けるシークレットポリス

ここは日本のどこかにある超でかいお城のようなお屋敷。
最大級の財力を誇る三千院本家である……

その三千院本家の主、三千院帝の部屋から物語は始まる……

〈帝の部屋〉

「一体どうしたんすか……この間の件の後始末で俺達今忙しいんだ
けど……」

「本当ですよ……首も回らないくらい大忙しです」

「テメーはさっきまで体よくサボってたろうがア!!」

帝の部屋に呼ばれたのは、三千院本家SPである霧崎と白井。
出番が無さすぎて作者も忘れていた程である。

「そりゃすまんの……まあそうイライラせずに聞け」

「イライラつかアンタのせいで大忙しになってんだからな!？」

霧崎が言うこの間の件とは、ハヤテ達が色々とやらかした執事クエ
ストの件である。

帝の無責任なハヤテへの試練が結果アレキサンマルコ教会倒壊並び
に魔法の鏡の流失という事態に繋がったのである。

実は伊澄が封印した後、今回の件で存在が漏洩したのか、何者かに
よって持ち出されてしまったのである。

封印はされているので心配はないというが万が一という場合がある。
そこで霧崎達はその行方を追っているのであった。

加えて教会の修理と関係者への色々。まさしく大忙しである。

「まあそう怒るな。鏡の方の目星はついたのか？」

「それが全く。普通こういう場合は何らかの手がかりがあるんです
けどね……」

白井は肩を竦めてみせる。

「そうか……まあもう良い。どのみちあの鏡はもう使えはせんから
の」

「しかし……」

「他のSP達にも伝えておけ。通常の業務に戻るように」

「……………分アったよ」

霧崎は何か腑に落ちないように渋っていたが、一応主の命なので渋々了解した。

「そこで話が戻る訳じゃ。

お主ら二人に伝え無ければいけない事がある」

「……………」

急に真剣な表情になった帝に緊張の面持ちで返す二人。

「今日から暫く……………白皇のSPになれ」

……………

「「は？」

「だから、お主ら二人は今日、三千院家のSPから白皇のSPにシフトじゃ」

「「えエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！？」

第六十訓

人は皆幸せを求め走り続けるシークレットポリス

〔万事屋〕

「最近の秋葉原はなっていない……」

「……………」

銀時はジャンプから顔をあげると横に座っている神父に目を向ける。

「確かに最近はバラエティ番組等にも取り上げられて今や日本の観光スポットになっていると言っている……」

「……………人ん家で何やってんの、アンタ？」

「しかし、秋葉原はなア！！買い物をする所だアア！！カップルが動物園感覚でデートする所ではなアアい！！」

「知るかアアアア！！人の話を聞けエエエ！！」

天井に向かって叫ぶ神父に銀時はジャンプを机に放って突っ込む。

ガラ……

「どうしたんですか、そんな大きな声出して……あ、神父さんじゃないですか。いらっしやい」

「ああ」

新八が居間に入ってきて、神父に気付いて挨拶した。

「いらっしやいじゃねーだろ。何普通に挨拶してんのオメー。いきなり現れたのに何で驚かないの？」

「いや…別に幽霊ですから別に驚きませんよ」

「……は？」

銀時は新八の言葉に意味がわからないと首を傾げる。

「だから幽霊ですから」

「……誰が？」

「この神父さんですよ」

新八は然も当たり前のように神父に手を向ける。

「いやいやいやいや……何言ってるんの新八君!？」

「本当ですよ……ねえ神父さん？」

「まあな」

神父は頷くと、万事屋の壁に向かって行く。

そして、証明するかのように壁をすり抜けてみせた。

「どうだ？これで分かったか……？」

神父はまた万事屋の中に戻ってくると銀時の方に顔を向け――

ガタガタ……！！

「……………」

銀時は地震が起きた時のように机の下に潜っていた。

「何やってんですか、銀さん……」

「馬ツ鹿オメー違いよ？」

勿論銀さんはそのくらい知ってたよ。これはアレだよアレ……ムー
大陸の入口がだな……」

銀時は机の下からひよっこり顔を出した。

「キミはもしかして……幽霊が怖いのか？」

「んな訳ないじゃん！そもそも幽霊じゃ無え、スタンドだ！！
いいか、オメーは幽霊じゃ無い。今からスタンドだ！！分かったか
！？OK？」

「まあ……何でも良いが」

神父はため息をつくと、ソファーに腰を降ろした。

「つーか何でスタンドのお前がこんな所にいんだよ？教会に戻らなくて良いのか？」

「問題ない。私は既に死んでいるからな……それに」

神父は銀時を真っ直ぐ見据えた。

「私はこう見えても、お前とあの執事君にとり憑いてる悪霊だからな」

「……………」

銀時は再びジャンプを持ち上げ……

「はああああああアアアア！！！！？」

銀時の叫び声は屋敷内まで響き渡ったそう……

（白皇学院前）

「ハア……」

正門の前で肩を落とす霧崎。

その隣で肩を竦めてみせる白井。

「仕方ありませんよ先輩。あの人の決定じゃ逆らえない……」

「くそ、あのジジイ……覚えてるよ？」

霧崎の頭に浮かぶのは、つい一時間前の帝の自分勝手過ぎる決定である。

「いやいやいや！？何だそれは！？
移動ってどういう事だよ！？」

「また随分急な話ですねー」

「呑気そうに言ってる場合か！！」

他人事のような態度の白井の頭を霧崎は叩く。

「それよりジジイ！！一体どういう事だよ。何で俺達が学校の警備員をしなくちゃならねえんだ！？」

「達……？え、自分もですか？」

「何自分だけ逃げようとしてるんだオメーは！！」

「冗談ですよ、冗談。」

まあそれより、自分も理由は聞きたいですね」

白井は両手を手前に振ってみせると、帝に目を向けた。

「いや、実はな……白皇SPの第一班の人数が足りなくなっただろうでな。そこでワシの所に腕のいいSPはいないか、という話が来たんじゃ……」

帝の話によると、

白皇のSPは第一班から第七班まで分類される。

広大な土地なので、各範囲を分けて警備しているのである。

その中の第一班がどうやら人数不足らしく、大量のSPをもつ三入院家にSPを貸してくれと頼まれたのだそうだった。

「そついう訳じゃ。って事で頼んだぞ」

「いや待て!!そんなDVDの貸し借り感覚で言われても」

「いや、本くらいじゃな」

「否定しろよ!?第一こつちでの仕事はどつするんだ?」

霧崎は身振り手振りで必須さを現す。

「仕事は心配するな。三年前ならまだしも、最近は大した事件は無いんじゃない」

「それは……確かにそうだが」

三年前という言葉に顔をしかめる霧崎と白井。

「それに、給料は変わらないそうだ。向こうが出してくれる」

「いや、そついう問題じゃなくて……」

「ま、もう決定事項だから」

「「……………」」

「んじゃ、頑張つての。お土産は気にせんで良いから」

「……………」

――

「何が土産だアアアア！！ぶっ潰すぞクソジジイイイイイ！！」

「叫ぶのは心の中だけにして下さいよ。頭おかしい人に見られるじゃないですか」

地面に向かって足を踏みつける霧崎を見て溜め息をつく白井。

「とにかくもう決まっちゃったモンは仕方ないですし、その白皇のSPの所に行きましょう」

「……………そうだな」

そんな訳で二人は白皇の敷地内に足を踏み入れて行った。

（白皇学院）

「確か……白皇のSPは1〜7班に分かれるとかいう話ですよね」

「らしいな。俺達ア第一班に行くとか何とか」

「何でまたわざわざ班なんて作ってるんでしょうね？」

白井が疑問に思うのは最もだった。三千院本家のSPは確かに分かれてはいるが、基本はローテーション形式で一応全ての仕事が回ってくるようになってる。

「さあな。こっちにはこっちの事情があんだろ……」

霧崎は地図を片手に肩を竦めてみせた。

しかし、白井はまだ腑に落ちない表情を変えないでいる。

「……どうした？何か引つかかる事でもあんのか？」

「お土産何にしようか……はとサブレ？」

「お前一回で良いから記憶喪失になってくんない？はとサブレでも何でもやるからホント」

「……ザラキ」

「ザラキだった！！？今ためーザラキだったろ！！！」

「馬鹿やってないで急ぎますよ」

二人は急ぎ足で敷地の奥へと足を進めて行った。

↳15分後

二人の目の前には広い建物が建っていた。

ログハウスのような作りで別荘とかそういう感じの雰囲気である。

「……オイ、比呂。地図間違っんぞコレ。何処にもSP施設なんてねーぞ？」

「そうですね……おかしいなあ、この地図によると第一班の施設は……」

白井は地図から目を離して、目の前のログハウスを見ると、表札の所に『白皇学院SP第一班』と達筆な字でそう書かれていた。

「……」

二人は暫しその表札を眺めると、くるりと180度向きを変えた。

「帰るか……」

「異議無し」

そう言つて来た道を戻ろうと……

ガチャ…

「この白皇学院SP第一班に何か用か？」

「「？」」

二人が振り返ると、凜とした顔立ちにすらりと背の高い男性が扉から出てきていた。何故か手には麻婆豆腐の皿を持っている。年齢は20代前半くらいか。

「あ、ああ…俺達は三千院家のSPなんだが…」

「おお、お前達がか！！話は聞いているぞ。取り敢えず入った入った」

男は納得したように頷くと、建物の中に手招きをした。

「いやあの……アンタは？」

「流石は三千院本家のSP。鋭く的確な指摘だ。

紹介が遅れたな。俺はこの第一班のSP長のロアル川秋だ」

（（SP長……！？この麻婆豆腐持った男が！？つか……）（

二人は顔を見合わせると、ロアルに向き直った。

「……俺は霧崎。霧崎^{みかぎ}弥鈎だ」

「自分は白井比呂です。ところで……この建物は……」

「この建物？ああ、無論ここが第一班の施設だ。表札にもあるだろ
うっ。」

（「やっぱり施設なのココ！？っーか何で表札！？」）

ロアルはさも当然のように答え、同時に顔をひきつらせる二人。

「とにかく入りたまえ。今日からこの第一班がお前達ホーム！！
つまり俺達は今日から家族だ。よろしく弥鈎、比呂」

（「何でエエエエエ！？」）

「それじゃ中に入れ。他の奴らも紹介しよう」

ロアルは啞然とする霧崎達をお構い無しにログハウスの中に連れて
行った。

*

ログハウスの中は中々広く快適そうで、施設というより最早家という方が正しかった。

普通SPの施設と言えば監視モニター部屋やパソコンが大量に並んだ部屋など、機械的な空間を想像するが、ここには一切そういうものが無い。

木々の香りが漂う廊下にそこそこ広い部屋がいくつも分かれていて、浴場も大きなモノが二つ。

「何っーか……」

「施設らしく無い？」

「まあ……」

ロアルは肩を竦めてみせると霧崎達は言葉を濁す。

「ここの班のモットーだ。俺は機械的な雰囲気や空間が苦手だな。確かに黙々と働く事も時に大切だ。ただ俺はそれ以上に仲間達とは少しでも信頼や絆を確かなものになりたいと思ってる。SPの仕事は命を任せ合うものだからな。だからこんな仕様になっているのさ」

「凄く良いこと言ってますけど……取り敢えずその麻婆豆腐を置いた方が良いのでは？」

「やられたよ……流石は三千院本家のSP。見事な意見だ」

「いや、SP関係ねーだろ」

ロアルは麻婆豆腐を持ったまま廊下を先導していく。

「まあともかく、挨拶が先だな。さあ、ここがリビングだ」

「……………」

ロアルが扉を開けると、広いリビングが広がっていた。

大きな長いテーブルが真ん中に置いてあり、左には木で出来たバー付きのキッチン。

棚には様々な本が並んでいた。

テーブルにはパソコンを開いている青年と項垂れて伸びている男性がいた。

本棚には黙々と読書をする少女もいる。

「皆の衆、今日から新たに第一班に入る仲間だ!!」

ロアルはリビングに入ると、手をパンパンと鳴らしながら言った。すると、テーブルの二人が顔を上げる。本棚の少女も顔だけは向けた。

更にキッチンからもエプロンをかけた女性が顔を覗かせた。

続いてリビングに掃除用具を持った男性が入って来る。

「よし、皆揃ったな」

「ジイさんが居ないっスよ？」

テーブルに突っ伏していた男が周りを見回して言った。

「まだ部屋に籠ってるわよ。」

納得いく作品が出来ないって」

今度はキッチンから出てきた女性が言った。

「そうか。では、このメンバーだけで一旦挨拶をしまおうか」

ロアルはもう一度全員を見回すと、霧崎達の所に戻る。

「お前達から、挨拶をよろしく」

「あ、ああ……三千院本家から来た霧崎弥鈎だ」

「自分は白井比呂です。どうかよろしくお願いします」

二人は周りを見渡して挨拶をした。

一同は各々よろしくと返した。

「それじゃ、俺達の挨拶といくか。まずは……」

ロアルはパソコンを開いていた青年に手を向ける。

「彼は東昌吉だ」

「……………」

昌吉は立ち上がって霧崎達に頭を下げた。顔には何処か幼さが残る小さめの青年だった。年齢は17〜18くらいだろうか。

「彼は未成年だが訳あってここで働いているんだ。生まれつき口がきけなくてコミュニケーションは字を書くことでとるようにしている。だがとても優れたハッカーだ。この白皇のネットセキュリティも彼が作ったんだ」

昌吉は目の前で手を振って謙遜していた。

「次は、コイツだな」

「うっすー!!」

ロアルは同じくテーブルに伸びていた男に手を移す。

「篝優斗っすー!!よろしくお願いしますー!!」

優斗は霧崎達に手を差し出した。二人は優斗と握手を交わす。

ガタイの良い身体に、短く切った髪、高い身長といかにもスポーツマンという感じの男である。

「彼は元アスリートだ。陸上競技の100mでインターハイ出場経験もある。基本は前衛の正面から護るタイプだな」

ロアルはそう言って優斗の肩を叩くと、今度は本棚の少女に顔を向けた。

「彼女は九条憂奈だ」

「……………よろしく」

憂奈は本から顔を上げてポツリと呟いた。

茶髪の髪は肩までには届かないくらいの長さで瞳は綺麗な琥珀色をしている。整った顔立ちで無表情だがかなりの美人である。背丈は小さく少女のようであるが…

「ま、この通り愛想は無いが良い奴だ。彼女は頭が飛び抜けていて良くてな。主に行動分析や心理分析が専門だな。あ、一応これでも成人だぞ」

「一言余計」

憂奈はパタリと本を閉じると、ロアルを睨んだ。

「……………次に行くか」

ロアルは憂奈の視線から目を反らすと、先程キッチンから出てきた女性に手を向けた。

「翠季莎喇よ。」

特技は暗殺かしら」

「あ、暗さ……？」

莎喇はエプロンをとると、霧崎達に挨拶をする。

澄んだ声に綺麗な黒い髪は肩まで降りていて、細身でスタイルもかなりのもの。年齢は20代後半のようだが美しく整った容姿からは10代と言っても何ら違和感はない。

「彼女は昔ロシアのある秘密組織に務めていたんだ。狙撃の腕では右に出るものはいないとか何とか……『黒瓢』だっけか？」

「昔の話よ」

「そんなに凄かったのに、何で止めちゃったんですか？」

白井は最もな疑問を口にした。

莎喇はうっすらと口元を緩めると一言。

「勿論……殺り足り無かったからよ？」

「……………」

「冗談よ冗談 元々短期の契約だったからね。契約が切れて帰って来ただけの事」

莎喇は陽気に微笑んでみせたが、霧崎達はまだ若干固まっていた。

「ま、最後が彼だ」

ロアルは清掃道具を持った青年の肩を叩いた。

「あ、えっと……木塚直きづかなおです！よ、よろしく願いします！！」

直は緊張でめちゃくちゃ固くなっていた。

気の弱そうな青年だった。色白で目の下には隈が出来ている。身体も細く、何だか倒したら簡単に骨が折れそうなまさしくひ弱なタイプである。

「彼はまだ入って来て一ヶ月の新米だ。特徴は……まあ、見ての通りだな」

ロアルは直の肩をもう一度叩くと、リビングの中心に移動した。

「そんな訳で挨拶は以上だ。

それでは新メンバーも増えた事だし、早速……」

「班長」

ロアルの話は憂奈の言葉で遮られた。

「何だ憂奈？どうした？」

「もうすぐ14時……」

「何だと!？」

ロアルは慌てて腕時計を見ると、そのまま顔を霧崎達に向ける。

「弥鉤、比呂、初任務だ」

「へ?任務?」

「ああ、行くぞ」

訳がわからないという表情の霧崎達の腕をとると、ロアルはリビングを出ようとする。

「ちよつ、ちよつと待て!何の任務だよ!？」

「来れば分かる。まずは行動だ」

「いや行動つーか話を…」

「諦めましょう先輩。もう自分らはここの住人ですよ…」

白井は溜め息をついて、霧崎に言った。

「班長!!俺らはいつも通りっスか？」

「ああ。料理当番と清掃当番以外は午後のパトロールに回れ」

優斗の質問にロアルは指を差しながら答える。
すると憂奈が立ち上がった。

「まだ本が読み途中」

「だったら読みながらで良いから回って来い。転ぶなよ?」

「分かった」

憂奈が本を閉じて抱えると、今度は優斗が手をあげた。

「何だ優斗?」

「ハードル練しながらでも良いっすか!？」

「あー、良いよ!その代わり生徒に迷惑はかけるな」

「うっす!」

優斗も意気揚々とリビングを出て行った。

「私は料理当番ね」

「僕は掃除をします!」

莎凧はそのままキッチンに戻り、直は清掃道具を持ってリビングを出て行った。

「昌吉はいつも通りパソコンからセキュリティ確認を頼むな」

「……………」

昌吉は頷いて、キーボードを打ち始めた。

「なあ、比呂……大丈夫なのかコレ……」

「何とかありますよ……多分」

お互い顔を見合わせて呆然とするしかない二人。

「では、俺達も行くか」

「……」

こうして、霧崎達の新たな生活が始まったのであった。

「何勝手にまとめてんだコラア！！終わらせんな！！！！」

面白そうなので次回に続く

「オiiiiiiiiiiii!!!!!!」

第六十訓 人は皆幸せを求め走り続けるシークレットポリス（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「本当に久々だな、このコーナー。んじゃ最初の質問『魔王はあの後学校行くようになった？』」

ハイズバリ答えます！

魔王はあの後両親と色々揉めましたけど何とか登校するようになったそうです。

┌

新八

「なつたのかよ…」

銀八

「続いて魔王に質問『出席日数は足りてる？』ハイズバリ答えましょう！かなりヤバイですね。

体育と家庭科はあと数回欠席すると留年です！」

ハヤテ

「留年！？何ですか留年って！？」

そもそも何で魔王の学校に家庭科があるんですか！？」

銀八

「また魔王への質問『あの後魔王は死んだの？』」

死んでません。復活して普通の生活に戻っています。

続けて『リベアリアの姫の性格は？』……………さあ？ご想像にお任せします。

更に『銀さんとハヤテに質問。fateのキャラで好きなキャラは

？』前にも言った感じがします。コレ銀魂なんで……こういう質問は答えにくいですホント。ま、そういう訳で無し」

新八

「ちよつと先生、いい加減になってますよ！」

銀八

「良いんだよこんな感じで。

次の質問な『真司に質問。銀時を羅刹に絞めさせた後、伝説の醤油を探させた？』」

真司

「いや、あの後市販の醤油を10種類買わせたな。後ウチの醤油作りを手伝わせた」

銀八

「お陰で醤油は暫く見たくねえよ……次の質問な『ヒナギクに質問。銀時のマダオは治ると思う？』」

ヒナギク

「無理ね。彼はもう大人だから」

銀八

「……………あのさア、もう少し言い方ってものがあると思うよ銀さんは。例えば」

ヒナギク

「では、次の質問です」

銀八

「……………」新八に質問。今回のクエスト活躍出来た場面はあった？
ハイズバリ答えましょう！
……………」新八居たっけ？」

神楽

「居ないアル。新八は今回お留守番だったヨ。後ハムスターもいなかったネ」

銀八

「だよな」

新八・歩

「ちよつと待てエエエエエ！！！！！！」

銀八

「続けて質問な」ハヤテに質問。クエストで一番頼りになった人は？」

「

ハヤテ

「勿論皆さんです！誰一人欠けてもクエストは成功しませんでした。皆さんには本当に助けていただきましたから」

歩

「ハヤテ君……………」

新八

「あんたって人は……………」

銀八

「続けて質問な」マリアに質問。クエストの間何やってた？」

ハイズバリ答えましょう！コミックス6巻の巻末参照」

マリア

「アラ先生？後書きでも私の出番を削るんですか」

銀八

「次行ってみよう。『ヒナギクに質問。十年バズーカ使ってみたか
つた？』」

ヒナギク

「……………少しだけ／＼／」

銀八

「先に言っておくが無駄だと思っぞ」

ヒナギク

「先生 何かかしら？」

銀八

「次の質問な『咲夜に質問。十年後になったツラとギンを見てどう
思った？』」

咲夜

「手に負えんわ。二人とも島流しやな」

銀八

「気持ちは痛いほど分かる。ツラは普段でも追放したいからな。
んじゃ、次の質問『作者に質問ワタルが出なかったことによりシス
ターの恋路は？ワタルのポジションをまさか銀さんがいただいでし
まうとか？』」

作者

「シスターにとって銀時はリベンジ相手でしかありません。加えて遺産を狙うための敵ですね。度々リベンジして来るでしょうね」

銀八

「面倒事は勘弁して欲しいな。んじゃ最後の質問。『神楽に質問愛歌さんと沖田どっちがサディステイクだと思う？』つかぶっちゃけ沖田とケンカできなくて寂しい？いやもうほんとぶっちゃけて」

神楽

「愛歌さん？誰アルかそれ？」

作者

「まだ出会ってませんね。この質問はまた今度で」

銀八

「んじゃ次回もよろしく頼まア」

第六十一訓 価値観は千差万別だからこそ面白い（前書き）

くお詫び

前回、こちらの小説は遅れると言いましたが、あの後色々とメッセー지를頂きまして、自分がいかに間違っていたかに気付かされました。

どちらの小説もメインにするべきだったんですね。

こんな小説でも読んでくれる読者様達がいるのに……自分はどうかしてました。本当にすみませんでした！

これからは交互に小説を更新していく事にします。

頑張っていきたいのでどうかこれからもよろしくお願いします

第六十一訓 価値観は千差万別だからこそ面白い

〈商店街〉

「なあ、いい加減何の任務なのか教えてくれないか？」

「ふむ。そつだな……」

霧崎達は半ば無理矢理商店街に連れて来られていた。

「今から“ある人物”を護衛する。その人物に一切の危険が及ばぬように、最大の注意を払え」

「護衛か……ようやくSPらしい仕事になってきたな」

ロアルの真剣な面持ちにつられて表情を堅くする霧崎。

「いや、つーか何で商店街なんですか？」

「さあな。買い物中とかなんじゃねーか？」

まあ、護衛つーからには重要人物に違いないだろうがな」

腑に落ちない様子の白井に表情を崩さずに答える霧崎。

この二人は三千院家でもかなり優秀なSPである故に殊更に護衛に
関しては絶大な信頼を置かれていた。

つまり護衛は得意中の得意なのである。

「出て来るぞ。お前ら気を引き締める」

「……!」「」

ロアルの言葉に緊張感が走る。

と同時に、あるお店のドアが開いた。

出てきてのはメイド服を着た綺麗な女性……。つかマリアだった。

「……ん？比呂、アレって……」

「ええ、確か三千院家のメイドさんじゃ無かったですか？」

てんで予想外の人物の登場にきよとんとする二人。

「ふむ、時間通りだ。ではこれから任務を始めー」

「ちよつ、ちよつと待て！護衛ってあの人をか!？」

「そつだ。至るところに神経を張り巡らし、万全を期して彼女が屋敷に無事にたどり着けるようにサポートしろ」

ロアルはさも当然とばかりに頷いてみせた。

「いやいや!？何でだよ!？白皇のSPと何の関係も無いじゃねーか!……!」

「何だそんな事が。決まっているだろう。無論俺が惚れているからだ。さあお前達、護衛を開始するぞ」

「「……………」」

自分達の行く先への不安が確かなものに変わった事を改めて知らされた二人だった…

第六十一訓 価値観は千差万別だからこそ面白い

2141

(……………何処をどう間違えたらこんな事になるってんだ?)

(先輩が仕事の手抜きで済ますから三千院家から弾かれてこんな事になってるんですよ)

(サボってたのはテメーだろうがア!!)

(あまり大きな声をたてるな。気付かれるぞ)

只今、ロアル達は物陰からマリアを護衛中(??)である。

(うむ。きっかり14時25分に角を通過。大体いつも通りだな)

(……ってちょっと待て！いつもの通りって、アンタいつもこんな事やってるのか!?)

霧崎は驚いてロアルに尋ねる。

(いや、毎日では無い。俺にも白皇内での仕事がある。概ねこの時間帯が空いている時だ。この時間はある種の自由時間だからな)

(その自由時間をストーカーに使ってんのか!?アンタは)

(ストーカー?ハハハハハ!面白い冗談を言うなお前は)

ロアルは本当に可笑しそうに笑うと話を続ける。

(ストーカーとはそもそも自分の存在を陰湿に知らしめて恐怖を与える事だ。俺は彼女に気付かれる所か姿さえ現した事は無い。彼女に危険が降りかからないように尽力しているだけだ)

(それは質の悪いストーカーだアアアア!!)

(それを言うのならSPとてストーカーに相違無いだろう)

(今さらつとんでもない事言いましたよ。SP長がとんでもない失言しましたよ…)

至つて冷静なロアルに二人は呆れて者も言えない様子。
すると、ロアルが突然目を細めた。

(む！弥鉤、比呂！！あのトラックを見る…)

(……へ?)

指差す先には普通に路駐してあるただのトラックが一つ。

(あのトラックがどうかしたのか?)

(……わからないのか？アレは殺し屋だ)

(……いや、違つと思つ)

霧崎はジト目でロアルの事を見るが、彼は全く気にせず続ける。

(あのトラックの位置……駐車角……そして運転席の男の一見寝ているような素振り……全てが殺し屋に通ずる)

(オーイ、ダメだよコイツ。一旦病院に連れて行かねーと)

(いや、秋川さんの言う通りですね。アレは殺し屋だ)

(オメーも煽るな!!)

霧崎は白井の頭を叩いた。

（なるほど……比呂も同意見だな。んじゃ多数決で殺し屋決定だ）

（はア！？オイちよつと……）

ロアルはいきなり携帯電話を取り出すと、番号を押し始めた。

《もしもし……ああ俺だ。至急たのむ。ST：DI32だ。よろしく》

（いや…アンタ何を…）

「行くぞ」

ロアルは電話を切ると、マリアを追って行った。

（つてオイ！！）

慌てて霧崎達もその後を追って行く。

因みにその10分後…

トラックの運転手はいきなり現れた黒服の集団に訳もわからないままトラックごと連行され、誤解が解けたのはその三時間後だったという……

*

(オイ、一体いつまで続ける気だ……?)

(まあ待て。もう少しで屋敷だ…彼女が屋敷に入れば任務は―)

「アラ、銀さん」

「よオ、買い物か？」

ロアルがそう言いかけたとき、角から銀時が歩いてきてマリアとばつたりと会った。

「ええ。銀さんは依頼ですか？」

「まあ、そんな所だな。重そうだな、荷物持とうかい？」

「え？でも仕事があるのに悪いですよ」

「別に急いじやいねーから気にすんな。それに屋敷はもうすぐだろ」

「では、お言葉に甘えますね」

銀時はマリアから荷物を受け持つと、二人は屋敷に歩き出した。

その様子を見送ったロアル達。

（さて、任務（休み時間）は終了だ、秋川さん。さっさと白皇に帰
ー）

（あの男は何者だ？）

（……………は？）

ロアルは目を細めて銀時の後ろ姿を見つめる。

（彼女と親しげに話していた男は一体何者だ？）

“親しげ”という部分を強調して尋ねるロアル。

（アイツは……………新しく三千院家の護衛になったヤロ だったな）

（護衛…？）

（ええ、あの白髪頭は坂田銀時という方でしてね。三千院屋敷で万
事屋を開いてるとか……………他にも二人ほど従業員がいるようです。詳
しくはこれを……………）

比呂はいつの間にか用意していた資料をロアルに渡して説明してい
った。

（……………なるほど。）

(…………?)

一瞬で資料を速読すると、ロアルは資料を返して呟いた。

(任務変更だ。これより我々は第一級任務を実行する)

((第一級任務?))

(あの男…坂田銀時の暗殺だ)

(……………は!?)

ロアルの言葉に耳を疑う霧崎。
しかし構わずに続ける。

(ふむ。この任務はお前達入隊試練も兼ねる事にしよう)

(いやいやいや! ?何言ってるんだアンタ!! SPは人を護るのが仕事だろ! ?何で暗殺しようとしてんの! ?)

(今はSPじゃ無い…………殺し屋ロアル13と呼べ)

ロアルは何処から取り出したのか、重火器を整備し始める。

すると、屋敷から戻って来たのか銀時が欠伸をしながら角を曲がってきた。

(来たぞ。 ミッションスタート 任務開始だ)

(あ、オイちよつと!!!)

ロアルは霧崎の話も聞かずに走って行った。

(何だかメンドーな事になってきやがったな…比呂、俺達であの人の暴走を止め……って何やってんだオメーはア!!!)

白井も何処からかライフルを取り出していた。

(あつしは比呂じゃ無い……殺し屋とローラーと呼んで下せえ)

(馬鹿かお前は!!!っーか何だその口調!?)

(面白そうなんで行ってきまーす!)

(オiiiiiiii!!!)

白井もライフルを構えたまま、ロアルを追って行った。

(…………ハア。どいつもこいつも…………)

霧崎は額を押さえると、急いで二人の後を追うことにしたのだった。

*

「ども、依頼を受けた者ですが」

「ああ、万事屋さんか！待ってたよ」

銀時は商店街から少し離れた着物屋に来ていた。
手には日曜大工の道具箱。

「それじゃ、早速屋根の修理をお願いするよ」

「うゝス」

銀時は道具箱を掲げてみせると、着物屋の中に入って行った。

離れた所からその様子を伺う三人の男。

（奴め……我々の存在に気付いて身を隠したな）

(単に依頼だから入っただけだろ)

(いや、もしかや自分達を返り討ちにする為抗戦の用意をしてるのか
もしれません)

(だから煽るなアホ!!)

(とにかく我々も屋根の上から隙を伺うぞ)

ロアルの言葉により、三人は距離のある建物の屋上に登る事にした。

(つーかコレは不法侵入になるんじゃない?)

*

カンカンカン……

屋根の上で銀時は釘を打っていた。その様子を離れたの建物から伺
うロアル達。

「あの音は暗号かも知れんな。もしかや仲間を……?」

「違いありませんね。どうしますロアル13?」

「まずその物騒なモノしまえ!!」

ロアルと白井はうつ伏せでライフル構えていた。ちょうど銀時からは陰になって姿は見えない。代わりに僅な銃口とスコープが覗く。

「何をしている。早く屈めミカギ13。奴に見つかったらどうする？」

「誰が13だ！！馬鹿もいい加減にしてとっとと帰らねーと」

霧崎はロアルの腕を掴もうとするが、白井に止められた。

「しゃがんで下さい13先輩。面白そうだしこのままにしましょうよ」

「だから誰が……ったく」

霧崎は渋々身体を屈めてロアル達に並んだ。

「……………む！？」

「どうしたんだ？」

ロアルはいきなりスコープに近づけていた目を見開いた。

「見ている……………奴がこちらを見ている……………」

「まさか。あの建物から50mは離れてるし、俺達は陰で見えない筈だぜ？」

「いや……しかし見ている。真っ直ぐな目で……こちらを見ている」
ロアルの言う通り、銀時は彼らのいる建物の屋上付近を真っ直ぐ見据えていた。

しかし、銀時が見ていたのは屋上では無く、すぐ下の階の窓であった。その窓はカーテンが開かれ、若い女性が着替えをしていたのだ。

(……真面目に働いてたから神様がくれたプレゼントって奴か?)

銀時は勿論ジッと建物を見つめる。
すると、女性は下着姿になろうとスカートに手をかけた。

(おっ!!マジで……!?)

銀時は屋根から立ち上がって身を乗り出す。

「な!?野郎……笑ってやがる!!」

「なんて人だ……この状況で」

霧崎達は銀時の様子に驚きを隠せなかった。

「フツ……どうやら我々は宣戦布告をされたようだな。お前達、準備は良いか？」

「イエッサー、BOSS!!」

「いや違えだろオ!?!」

ロアルと白井はライフルを銀時に向けて……

ガチャ……!!

「「「……!!?!?!?!」」」

突然三人の後ろから銃のリロード音がした。

「随分と楽しそうねえ」

「一体どんな仕事なのかしら?是非お話を伺いたいわ?」

莎唎が、ニツコリと微笑んで三人の頭に銃を突き付けていた。

「……………弥鉤、比呂」

「何だ?」

「仕事をサボるところなる。よく覚えておくと良い」

「「……………了解」」

パンパンパン！！！！！！

「ん！？何の音だ？銃声、いや……………まさかなア」

銀時は音に気付いたように離れた建物の屋上を見上げる。

「あ！！閉まっちまったよ……………
勿体ねーな……………」

音に驚いたのか、窓のカーテンは閉められてしまった。

「まあいいや。仕事仕事……………」

銀時は金づちを持って、釘を叩き始めた。

*

「あ……………空が真っ赤だ。綺麗な夕焼けだ……………」

「真っ赤なのは空じゃねーよ。俺達の眼球だ…頭全体だ……」

「ホント先輩といるとロクな事無いっすね……」

穴だらけの三人は莎唎に引きずられて、白皇に連行されて行った……

↓ 第一班ログハウス ↓

リビングのテーブルには色とりどりの料理が並べられている。

「アレ…？あの二人の歓迎会なのに、居ないっすね？あと班長も…」

…

「三人なら木に吊るしてあるわよ」

優斗の疑問に淡々と答える莎唎。

「へ？何でまたそんな事に？」

「自業自得……」

憂奈がパタリと本を閉じてテーブルに着いた。

「ま、本人達は居ないけど楽しくやりました。」

「そうつすね！」

莎唎や優斗も席に着いて、全員（三人以外）がテーブルを囲んだ。

「あの！！まだ京治さんが……」

「あの人は今日はお出で来ないわ。納得いく作品が出来ないから今日はもう寝るって」

直が周りを見渡して口を開いたが莎唎はサツと返した。

「まあ、なら本人達が居ない謎の歓迎会って事で……乾杯〜！！」

「乾杯！！」

（……………コクコク！）

（本当に謎……………）

優斗の間抜けな掛け声で、謎の歓迎会は賑やかに始まったのであった。

く白皇の森く

木に吊るされた奇妙な三つの影

「……………辛い」

「皆同じだ。このくらいの事は耐えてみせる弥鉤」

「そうですね、ザラキ先輩……………」

「上等だア比呂テーマーエエエ！！
表に出るコラア！！」

「もう出てますよ……………」

結局、三人がログハウスに戻ったのは翌日の明け方であった。

霧崎と白井の白皇でのSP初日はこんな形で幕を閉じた……………
先行きが大変困難なものになる事は言うまでもないだろう……………

第六十一訓 価値観は千差万別だからこそ面白い（後書き）

教えて！銀八先生

銀八

「んじゃ、今日も質問な。銀さんはポニーテールとツインテールのどちらがタイプですか？」

ハイスバリ答えます！

俺はやっぱポニーテールだなア。つーか男は大抵ポニーテールが好きなものだ」

ナギ

「それは、ハヤテもか!？」

銀八

「多分な」

ナギ

（ポニーテール……）

銀八

「続いている質問。『マリアさんに質問。十年後の自分を見てみたい？』オメーなんて危険な質問を…」

マリアがアレを使ったら歳が…」

マリア

「歳がなんでしょうか、先生？」

銀八

「……次の質問いきましようか。『新八に質問。ヤンデレとクーデレとツンデレだったらどれが好き?』
ハイ、ズバリ答えましょう。新八は多分デレデレが好きです。だって新八だから。以上」

新八

「何でいつも先生が答えー」

銀八

「次の質問。『皆さんに質問。デビルマンのことはどう思いますか?』」

ハイ、ズバリ答えましょう。一同を代表して俺から。

いつも感想ありがとうございます!これからも応援お願いします」

一同

「ありがとうございます!」

銀八

「続いての質問『今後の流れは?』」

ハイ、ズバリ答えましょう!

原作の話はやりませんが、原作とは全く異なった内容になると思いますが。

んじゃ、ラストだ。『高杉や神威などは出てきますか?』

すみません。これは答えられません。どうなるかは続きをお楽しみに」

作者

「では次回からはちょっとした中編です！この間のジャンプの銀魂の話に影響されて考えてみました！」

〈次回予告〉

チュンチュン……

いつも通りの朝……

銀時は部屋で目を覚まして、欠伸をしながら布団から出ようと……

ヒナギク

「あ、おはよ 銀時」

ヒナギクが隣で添い寝！！！？

銀時

「なななな、何やってんだオメーはアアアア！！！？」

ヒナギク

「恋人どうしなんだから一緒に寝るくらい良いじゃない？」

「……ヒナギクが！？」

伊澄

「すみませんが会長さん。私と銀時様は将来の契りを交わした仲ですわ／＼／」

銀時

「俺がいつそんな約束交わしたよ！！？」

「……………伊澄が！？」

マリア

「今日も銀さんだけの為に頑張って朝御飯を作りました愛情をたっぷり込めて？」

銀時

「オiiiiiiiiiiii！？おかしい！！絶対おかしい！！」

「……………マリアが！？」

千桜

「銀時、今日も二人きりで学校へ送ってくれませんか／＼／」

銀時

「今まで送った事なんてねーだろ！？」

「……………千桜が！？」

何故か女性達が銀時の恋人になっている！？
しかし事態は予想外に深刻な…

ハヤテ

「銀さん？会いたかった、今日もずっと一緒にいてくれますか？」

銀時

「ハヤテ君んんんん！！？」

ハーマイオニー

「ハヤテは私の過去…今の私は綾崎ハーマイオニーですよ？」

銀時

「工事されてるうううう！！！」

絶対越えてはいけない境界線を突破してしまっているうううう！！？」

……ハヤテが！！？

ツラ子

「銀時！？今日も会えて嬉しいわ。待っている時間が永遠にも感じられた…」

銀時

「オメーもかいいいいいい！！！」

いい加減にしるよオオオオ（泣）」

「……ッラが……!!?」

ありとあらゆる異変が銀時を襲う!

銀時

「誰かアアアア!! 助けてくれエエエエ!!!!」

一体何が起こっているのか!?

神父

「これは恐らく、バレンタインという恋愛イベントを抜かした読者の怒りだ!」

銀時

「読者の怒り……?」

神父

「ここはパラレルワールドなのだ……」

謎のパラレルワールド……

姫史

「速急に手を打たねば、二度とお前は元の世界には戻れないぞ。
一生このままハーレムな世界を生きなければならぬ」

銀時

「どござりゃいいんだよ!？」

姫史

「読者^{かみ}を満足させる事だ…お前自身の手でな！」

銀時に託された試練とは!？

次回、【ハーレム妬羅舞流篇】始動!!

第六十二訓 重要な分岐点を引き延ばすと大変悲惨な事になる（前書き）

クラウスの前書きの館！！

伽藍

「おえエエエエ！！」

ハヤテ

「ちよつとオオオオ！？のっけから何してるんですか！？」

伽藍

「ぐっ……いやさあ、今回銀時のハーレムを書いてたんだけど……書いてて吐き気が……」

クラウス

「どれだけ作者がハーレムを嫌いかがよくわかりますな……」

伽藍

「女性陣のキャラ崩壊が物凄いです。それでも大丈夫な方は……ぐぼろしゃアアアア！！」

ハヤテ

「だから吐くなアアアア！！」

クラウス

「では、始まりますぞ！」

第六十二訓

重要な分岐点を引き延ばすと大変悲惨な事になる

一面真っ暗な空間……

どこまで行っても一切の光のすら無い……

《ああ……楽しみにしていたのに……期待していたのに……》

なんとも表現しにくい歪んだ声が空間に響き渡る。

《無いのなら思いしらせてやる……どんな形がいいか……》

《形がいいか……》

《いいか……》

探るような声は二人、三人と重なってゆく……

《ああ……こんなのはどうだろう……こんな世界は……》

闇は徐々に光に塗り替えられてゆく……

《クハハハ……！！面白い事になりそうだ……然と見届けさせて貰うぞ……！！クハハハハハハハハハ！！》

そして一面は真っ白になってしまった……！！

〈万事屋〉

チュンチュン……

まだ朝も早い時間帯、銀時はいつも通り部屋で熟睡中……

「……………誰が焼け野原だコラァ!!」

いきなりガハツと掛布団を裏返して起き上がった。

「……………んだ夢か。つたく質の悪い夢見させやがって……………」

銀時は額を押さえると時計に目をやり、隣で寝ているヒナギクに目を向けた。

「まだまだ寝られんな……………コイツも寝てる事……………」

そのまましばし思考停止……

「……………いやいや、無いな。これは無い。何だこれも夢か……………
寝よ寝よ……………」

銀時は頭を振ると、掛布団を戻して再び横になった。

スウ……スウ……

ガバツ!!

寢息が聞こえてきたので、銀時は飛び起きて隣を凝視する。

「無い無い無い!!これは無いって、あり得ない!!だってアレだもの!!昨日は出歩いても居ないし、コレはあり得ないもの!!」

もう一度横になる銀時。

スヤスヤ……

ガバツ!!

「だから無いってこれは!!だってコレギャグ小説だし!!あり得ないし!!夢だよ、絶対夢だ!!」

何度も頭を振ると、銀時は無理矢理布団を被って横になった。

「寝れば元に戻る。自分を信じろビリーブ……」

そう自分に言い聞かせるように呟くと、銀時の意識はまたまどろみ
の中に落ちていった……

トントントン……

頬を軽く叩かれる感触……

「……………ん？」

銀時はうつすらと目を開けて、叩かれた方に振り返ると……

「あ、起きた おはよ、銀時？」

「……………」

パジャマ姿のヒナギクがこちらに微笑みかけていた。

……………

「ななななな、何やってんだオメーはアアアアア！！！！？」

銀時は飛び起きると、物凄い速度で後方に飛び退いた。

「お邪魔してます、マリアさん」
「アラ、ヒナギクさん……」

ヒナギクはニツコリと挨拶して、マリアも少し驚いたように返した。

「いや、違えよ！？これは俺じゃなくてコイツが勝手に俺の部屋に
ー」

「それより銀さん、朝御飯にしませんか？」

「はア！？」

弁解しようとした銀時の言葉はいきなり抱きついてきたマリアによつて遮られた。

「ちよっ！？お前何やってー」

「ここで食べますか？それとも屋敷で食べますか？」

お構い無しにマリアは腕に抱きついて銀時に尋ねる。

「いや、っーかオメー……」

「……？」

「………屋敷で」

銀時は混乱する思考を何とかしようと思死である。

「では屋敷で」

ヒナギクさんも一緒にいかがですか？」

「じゃあお言葉に甘えて。

でも皆の分を作るのは大変でしょう？銀時かれの分は私が作りますよ？」

ヒナギクは作り笑いをマリアに向けると、もう片方の銀時の腕に抱きついた。

「いえいえ、お客様にそんな事させられませんわ」

マリアも作り笑いをヒナギクに返した。

「そんなご遠慮なさらずに」

「遠慮なんてしてませんよ？」

二人は銀時に抱きついたまま微笑み合っ……というより表情には出ていないが睨み合っているようである……

(……何処だ……?)

銀時はようやくこの世界が自分の知っている世界では無い事に気が付き始めたのだった。

第六十二訓

重要な分岐点を引き延ばすと大変悲惨な事になる

く屋敷く

テーブルには色とりどりの豪華な食事が並べてあった。
とても朝食の量では無い。

「どうですか？お口に合うと良いのですけれど…」

「ああ、勿論どれも美味えけど…」

「良かった 銀さんの為に頑張って作りました。愛情をたっぷり込めて？／＼／」

顔を真っ赤にして銀時の隣に座るマリア。

(ちよつとオオオオ！！何これ誰これ！！？キャラ完全に変わってんじゃねーかアアアアア！！)

「だったら私が食べさせてあげるね ハイ、銀時。アーン／／／顔をひきつらせまくっている銀時の口に箸を近づけてるヒナギク。

「銀さん、こつちもいかがですか？アーン？」

負けじとマリアも箸を銀時に近づける。

「ちよつ、ちよつと待てオメーら！！取り敢えず箸を置け！！」

「………？」

二人は一旦箸を戻した。

「おかしい！！絶対にコレはおかしい！！ドッキリなんだろコレ！？人を騙すのは良く無いと銀さん思うよ？
そもそもナギや神楽達の姿が見えねーじゃねーか」

ギィ…

銀時の言葉と同時に扉が開いた。

「ああ、おはよう！マリア、銀さん、ヒナギク！」

「おはようナギ。朝御飯出来てますよ」

「おはようナギ！お邪魔してるね」

扉から出てきてのは他でも無いナギであった。

ナギは制服姿で鞆を抱えて、健康そうな笑顔を浮かべてテーブルに着いたが…

「お前、誰…？」

銀時の知っているナギのは180度違っていた。全然眠そうじゃ無いし、不機嫌そうじゃ無いし、ゲームも持っていない。

第一普段のナギならばまだ起きている時間では無い。

「誰って…おかしな事を言うな銀さん。私は三千院ナギに決まっているだろ」

「いやいや、おかしくね？だってオメーまだ朝それも早い時間帯に…」

ナギは肩を竦めてみせると、食事をたいらげていく。

「あ、そうだマリア。今日は部活で帰りが遅くなるから」

「ハイ、わかりました」

マリアは少し名残惜しそうに銀時から離れると、ナギの食べ終えたお皿を片付けるためキッチンに向かった。

「ぶ、部活ううう！？オメー何言つてんだ！？」

「部活は部活さ。運動部や芸術をする活動団体だろ？」

「いや、そついう意味じゃねーだろつよ！！」

すると隣でヒナギクが口を開いた。

「ナギは剣道部に所属しているの。一年女子の期待の星よ」

「よしてくれ／＼／私はまだまだ精進の身だ」

「いゝいゝつ！？」

ナギのあり得ない発言に思わず息を噛み殺す銀時。

「それに今ナギは生徒会にも入ってるから。まさに文武両道、学生の鏡ね」

「そんなつもりで入ったんじゃないさ。ただ私は少しでも学院の皆の役に立ちたかっただけだ」

ガシツ！

「いい加減にしるオオオオ！！？」

お前はナギだろ！？年中不機嫌そつな顔をした自己中な引きこもりお嬢様だろ！？

もつと墮落しろナギ！！お願い、3000円あげるから！！！」

「ハハハ。相変わらず面白いな、銀さんは。あっと、ちこそさま」

ナギは食事を終えると、立ち上がって鞆を持つ。

「では、伊澄を待たせているから先に行くな」

「ええ、私も後から銀時と一緒に武道場に行くから」

「ハア！？お前何勝手に…」

ガチャ…

すると、再び扉が開いた。

「おはようナギ」

「おお！伊澄。今から行く所だったのだ」

扉から入って来たのは伊澄であった。

「ええ、その前にご挨拶しようと思って」

「ああ、では私は下で待っているよ」

ナギは伊澄に手を振ると扉から出ていく。

伊澄はそのまま銀時に向かって歩いてきた。

「銀時様……おはようございます／＼」

「あ、ああ……（良かった。伊澄はまともに……）」

伊澄は挨拶したかと思うと、真っ赤になりながら銀時の腕に身体を寄せた。

「今日も私の家に来てくださいね？待ってますから／＼／」

（やっぱ全然まともじゃ無かったアアアア！ねえ、何コレ！？俺がおかしいの！？俺が間違ってるの！？俺が悪いのオ！？）

すると、反対側からヒナギクが顔を出した。

笑顔だが後ろに僅かに黒いオーラが見えるのは気のせいだろうか…

「あ、おはよう。鷺ノ宮さん」

「まあ、おはようございます。会長さん…」

伊澄も笑顔で会釈を返したが、心なしな表情がひきつっている。彼女にしては珍しい。

「会長さんは何故こんな時間にこんな所に（ゴゴゴゴゴ……）」

「お互い大切な人どうしだから……何も不自然な事なんて無いんじゃない？

それより鷺ノ宮さんはどうして銀時に抱きついていいのかしら？（ゴゴゴゴゴゴ……）」

二人の後ろからは確かに黒いオーラが今にもぶつかりそうな勢いでいがみ合っているようだ。

「すみませんが会長さん。私と銀時様は将来の契りを交わした仲ですわ／＼／」

「俺がいつそんな約束したよ！！？」

伊澄は更に赤くなって銀時の腕を抱きしめる。

「アラ、だったら私だって約束したわ／＼／」

「してねえだろオ！？オメーまで何言っただアアアア！！」

ヒナギクもギョツと銀時の腕にしがみつく。

そして、二人は互いに笑い（睨み）合う。

「フッフフ……（黒）」

ガチャ…

「まあ、伊澄さんも来ていらしてたんですか。いらっしやい

そこに、マリアがキッチンから戻ってきた。

しかし三人の様子を見ると、ピタリと笑顔も止んでしまう。

「まあ皆さん、随分と楽しそうですね（ゴトゴトゴト……）」

マリアの後ろからもより強力なオーラが溢れた。

三人がそれぞれ黒い何かと取り繕った笑顔を向け合う。

まさに死のトライアングル…

その中心には冷や汗だらだらで苦笑すら出来ない銀時の姿。

(ヤバい……とにかくヤバい……ここにいたら殺される……!!!)

ガタツ!!

「「「!?!?!」」」

銀時はほんの僅かな隙にテーブルから抜け出すと、リビングを飛び出していった!

「冗談じゃねえ!!こんなにくつつあっても身がもたねエエエ!!」

そのまま玄関に走っていき、扉から外に出る。

「おお!?!?どうしたんだ銀さん?

そんなに慌てて

「どうしたもこうしたあるか…

何なんだよ一体、どうなってんだよ…」

入口の横に立っていたナギが驚いたように銀時を見た。

「なあ、偽ナギ。一つ聞いても良いか？」

「偽……何を言っているんだ？」

まあ良いが……」

「神楽と新八は何処だ？」

銀時は先程から気になっていた事を尋ねた。そう、新八達が全く見当たらないのである。

「神楽達……？何言ってるんだ銀さん。二人なら一ヶ月前にハネムーンに行っただじゃないか」

「……………は、はねむーん？」

「銀さんだつて出席したじゃないか。二人の結婚式。仲人務めただろ？」

「……………え？ちょっと待って……………ちょっと待って……………ナギちゃんも一回言っ……」

「だから二人は結婚して今はハネムーン中だつて……………銀さん今日は本当にどうしたんだ？」

「……………ぐばっ！！」

銀時は突然口から血を吹き出して膝まづいた。

「銀さんんん！？ちよつと大丈夫か！？」

「けけけけ結婚？結婚ってあの結婚！？お互いに愛を誓い合うアレ
エエエエエ！？」

「あ、ああ…勿論そうだが。コレ、写真だよ」

ナギは懐から写真を取り出して銀時に見せた。

写真にはウエディングドレスを着て嬉しそうに笑う神楽。その手には眼鏡しんぼちが乗っかっている。

「いやいやいやー！確かにコレ…新八だけれども、それはあくまでギャグであって…いや俺も新人は眼鏡しんぱいだと思ってるけど…今はそんな場合じゃねー訳で…んじゃ眼鏡掛け機は何処に！？」

「銀さん…本当にどうしたんだ？」

混乱しまくって写真を眺める銀時を不思議そうに覗き込むナギ。

「あ、ナギ。おはよう」

「ん？千桜か、おはようなのだ！」

ナギは正面に向かって手を振りだした。

「……………ん？」

銀時も振り返ると、千桜が立っていた。

「おはようございます、銀時／＼」

「……………よオ」

「ちょっと、どうしたんですか！？口から血でてますよ……」

千桜は慌てて駆け寄って来ると、銀時に手を貸した。

「いや……………大丈夫だ。悪いな」

「そうですか、良かった／＼」

そう言うと、千桜はそのまま顔を赤らめて銀時に腕を絡めた。

（オメーもかアアアアア！！！！）

「つか千桜さん！？さっきから色々当たって……………でも満更でも無い……………いやいやいや！！マズいだろコレは！！この小説が打ち切り……………」

しかしそんな銀時の心の葛藤虚しく、千桜顔を更に真っ赤にして俯き加減で銀時に寄り添う。

「銀さん……………／＼／＼その……………今日も二人きりで学校まで送ってくれないませんか？／＼／」

「今日も！？今の今まで送った事ねえよ！！」

「こっちは相変わらずだな、銀さん……………」

ナギはその様子を見て呆れていると、銀時が必死のアイコンタクトを試みてきた。

(偽ナギイ!!何とかしろオオオオ!!お願い!!助けてくれエエエ!!!)

(まったく……仕方ないな?)

ナギは溜め息をつくくと、千桜の方に向き直った。

「千桜、屋敷でヒナギクが呼んでいたぞ?早く行った方が良いんじゃないか?」

「む、そうか……」

千桜は残念そうに銀時から離れると、鞆を持ち直した。

「じゃあ銀時、また後でノノノ」

「……………ああ」

まだ顔を少し赤らめて屋敷に入っていく千桜に顔をひきつらせながら送る銀時。

「本当に大変だな……………銀さ…銀さん?」

「……………」

ナギの言葉も届いていないのか、フラフラと屋敷の出口に歩いていく銀時。

(……………ふざけるよオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!)

*

〈負け犬公園〉

人気の一切無い公園のベンチで、一人頂垂れる銀時。

「何なんだよここは、どうなってんだよ、どういつ訳なんだよ……」

何がどうなってるのか誰か30文字以内に説明してホント!!30
0円あげるから!!」

そんな銀時を嘲笑うかのように、空は青く澄渡っている。

「俺が何をしたっていうんだよ……何が目的なんだよ……」

銀時はベンチから立ち上がるとフラフラと砂場の方に歩いていく。

「ドツキリなんだろ!?!どうせオメーら全員でこの公園から飛び出
しているんだろ!?!分かったもうギブアップだ、銀さんの負けで良
いよ!だから早く出てこい!」

シーンと静まりかえった公園からは風に揺られる葉のせせらぎしか
聞こえてこない。

「……出てこよう!?!もう十分びっくりしたよ!?!だからいい加減
に出てこよう!?!」

シーン……

「誰かアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアア!?!?!?!
助けてくれエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエエエエエ!?!?!?!」

とうとう天に向かって叫び声を轟かせる銀時。

「まったく……随分の腑抜けた面をしているな」

「!?!?」

いきなり銀時の後ろから男の声が聞こえてきた。

「オメー……何でここに？」

振り返った先に立っていたのはリンであった。

「安心したまえ。私は君の午前中に起きた事情を大体把握している」

「把握……何で？」

「私は一応幽霊だからな。故に君の事情も大体把握しているのだ。実はずっと君の側にいた」

銀時は立ち上がると、リンの元にやって来た。

「オメーは何ともねえのか？変化はしてねーのか？」

「幽霊だからな。こういう時には耐性がつくようになってるのだ」

リンは肩を竦めて、銀時を見た。

「それにしても……大分参っているようだな」

「起きたらいきなり訳の分からねえ状況で何がなんだか……おまけに全て狂ってやがるときやがらア……」

銀時は疲れきった表情で空を見上げる。
すると、リインが突然口を開いた。

「この事態……恐らく心当たりがある」

「な！？本当か！？」

「ああ。この小説でキミはバレンタインのイベントを見た事があるか？」

「そついや…無えな」

神父の意味不明な執筆だが、表情は真面目なので、真面目に答える銀時。

「そう！この小説は原作の恋愛イベントの要であるバレンタインをすつ飛ばした……つまりこれはそのイベントを楽しみにしていた読者みとその他色々な者達の怒り、最後は何やかんやで今の秋葉原に対する私の怒りだ……！！」

（オメーのもかよ！！）

神父の説明に心の中で突っ込む銀時。

「その怨霊によりキミは飛ばされた……このパラレルワールドにだ」

「パラレルワールドオ！？」

「あくまでも推測の域を脱しないがな……しかし彼女らの変化を見

れば納得するしかあるまい。

今キミはT.O.らぶるで言う主人公のポジションに位置していると言えよう」

「……っ！かなんで俺！？こんなハヤテで良いだろ？アイツ原作でハーレムだろ！？とつかえひつかえだろ！？」

銀時は理不尽すぎる境遇に嘆きだす。

「ハーレムがいかに辛く大変なものか……思い知らせたい歴代モテモテ主人公の怨霊もあるのやも知れんな……」

「知るかアアアア！！どんだけしょうもない理由で飛ばされたんだよ俺は！！」

銀時はがくりと再び膝をつく。

「いつまでもそうしていても仕方ない。とにかく動かなくては」

「動くっ たって……」

「まずこの世界に同じように飛ばされている人間がいるか探してみよう。キミ一人が飛ばされたのかあるいは複数飛ばされたのか、まだ分からないからな」

「……………」

神父の言葉に銀時は何とか立ち上がった。

「……………こんな世界は真っ平ゴメンだ。何が何でも元の世界に帰って

やる!!

まずはハヤテを探すか…」

「立ち直ったのは結構だが…その前に一つ言わせる…」

「？」

「メイドさんとイチヤイチャしやがってエエエエエ!! 死ぬエエエエエエエエエ!!」

神父の叫びは無情にも青い空に消えていった……

第六十二訓 重要な分岐点を引き延ばすと大変悲惨な事になる（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「本編中の俺は大変そうだな……ま、後書きにや関係ねーけど。最初の質問『ナギに質問。原作のメインヒロインなのに出番が少ない事気にしてる？』」

バコツー！

ナギ

「作者ア？そういう事らしいぞ……どうしてくれるのだ？」

作者

「ぐっ……わかりました。もっと出番を……増やします」

ナギ

「出番よりハヤテと私の愛の長編を作ってくれー！」

伽藍

「ぐ……ぐぼろああアアアアー！」

ナギ

「なあ！？何で吐くのだアアアアアー！」

銀八

「んじゃ、最後の質問な。『ハヤテに質問。ハーマイオニーの時に誰かに惚れられたらどうする?』」

ハヤテ

「埋めます」

銀八

「いや…戦つか逃げるかの…」

ハヤテ

「刺します…縛ります…歪めます……生き地獄をみせてやります?」

銀八

「今日はこのあたりで……次回もよろしく頼まア」

〈次回〉

パラレルワールドに飛ばされた銀時の戦いが始まる!!

銀時

「とにかく最初はハヤテを探してみるか…」

しかし事態は銀時の予想を遥かに超えたモノとなっていた!!!!

銀時

「ちよつと待てエエエエ!!!」

そして同じ飛ばされ仲間は見つかるのか!?

???

「情けない……それでも私に勝つた男か？」

銀時

「テメーは……!?!」

真つ暗な闇に希望の光!?

???

「事態が事態だ。今回は協力してやるよ……」

???

「まあ、このままじゃ自分達も帰れなくなりますからね」

???

「しかし少しでも彼女に変な真似をしてみろ……全身に風穴をあけるぞ」

集いせしは逆境を共に戦ってくれる仲間達……

銀時

「上等だ!!!誰だか知らねーが、テメーらの思い通りには事は進ませねえ!!!」

そして銀時に託された試練とは？

次回、第六十三訓 男はつらいよ

第六十三訓 男はつらいよ 華も嵐も銀色の唄 (前書き)

クラウドの前書きの館!!

クラウド

「さあ、大変なモテモテハーレム状態に囲まれている銀時殿」

ハヤテ

「元の世界への手がかりは見つかったんでしょうか？」

伽藍

「因みに、一応オチまで考えて話は出来上がりました」

クラウド・ハヤテ・伽藍

「では、始まります」

第六十三訓

男はつらいよ 華も嵐も銀色の唄

く負け犬公園く

「取り敢えず……ハヤテを探さねえとなア。屋敷に戻るか……？」

「しかし今屋敷に戻るとキミはまた大変な事になるんじゃない……まあ私個人としては面白いが」

「う……………」

神父の言葉に銀時は悪夢のような光景を思い浮かべて身体を強張らせた。

「そうだ！何なら私がお前の身体の中に入ってメイドさんとイチヤイチャしようか」

「なるほど。それなら俺は怖い思いしなくて良いし、アンタは嬉しいと」

「その通りだ。そして主に全年齢対象では出来ない　　や
をー」

バキツ……！！

「辞世の句は詠んどけよバカ神父。もういつぺん死ぬか？ああ？」

「ツッコミがキツイぞ……思わず成仏しかけたよ」

「何でもいいからとっととハヤテ探しに行け！！んで連れて来い！！」

「仕方の無い奴め……」

神父は頭を擦りながら、空に向かって飛んで行った。

（10分後）

「どうだった？居たか？」

「いや……居たにはいたんだか……」

神父は笑いと驚きを混じった表情で銀時を見た。

「会わない方が良いかもしれないぞ？」

「あん？何言ってるんだ？少しでも情報が欲しいんだ」

「良いのか？」

「当たり前だろ」

銀時はそう言うと、神父の後ろから人が飛び出して来た。

「銀さん！」

「よオ、ハヤ……テ君？」

銀時の動きから思考全てが停止した。出てきたのは確かにハヤテではあったが……

「……誰？オメー……」

メイド服にその身を包み、女性のような美しい容姿がニツコリと微笑んでいる。

綺麗な水色の髪は風になびく度にキラキラと光が零れる。

「銀さ〜ん！！会いたかった？／＼／」

ギョツ！！

ハヤテは銀時に思いきり抱きついた。

「いイイイ！？」

「急に居なくなるから……ずっと心配してたんですよ、私／＼／」

銀時は驚いて硬直するが、同時にある違和感に気付いた。

(アレ……？何だコレ……おかしい……明らかにおかしい……あつて

はいけないモノが当たっている……!?)

ハヤテ(?)は真つ赤な顔を銀時の身体に寄せる。

「銀さん……今日もずっと私と居てくれますか?ノノノ」

「あの……お宅、ハヤテ君ですよね本当に?」

銀時は二三回頭を振ると、恐る恐るハヤテ(?)に尋ねる。

「もう銀さんつたら……ハヤテは過去の私……今の私は綾崎ハーマイオニーですよ?」

「工事されてるうううう!!!」

絶対に越えてはいけない境界線を突破してしまっているうううう!?

銀時は物凄い勢いでハヤテから離れると、改めて彼基彼女全身が目に入ってきた。

「オメーは何やってんだアアアア!何をさらしてんだア!?

そこは絶対不可侵領域だろオ!?

絶対に開けてはならないパンドラの箱だろオ!?神のみぞ知るセカイじゃねーか!!!!

真理の扉を開くどころの騒ぎじゃねーよコレエ!!!」

「まあそんなに褒めていただかなくても……ノノノ」

「褒めてねーよ!!!褒めるどころかドン引きモンだよ!!!」

しかし銀時の言葉は全く届いていないのか、ハーマイオニーは頬に手をあてて一人赤くなっていた。

「お前はこの原作の主人公だろ！？戻って来い！！オメーが向かっている世界には地獄しか待ってねーよ！？」

「あ、そうだ 私買い物に行くところだったんです。一緒に行ってくださいませんか？／＼／」

どうやら戻って来る気は微塵も無いようである。

「いや……俺アちよつと用事がな……」

「そうですか……残念」

ハーマイオニーは少し表情をシユンとさせたが、すぐに銀時に笑顔を向けた。

「じゃあまたお屋敷で」

「あ、ああ……」

ハーマイオニーはくるりと向きを変えると、上機嫌に小走りで公園を出て行った。

その様子を呆然と見送る銀時。

「……………オイ、どういう事だアレは……………」

「どづって……………そづいう事だろ？」

神父は肩を竦めてフツと笑ってみせた。

「そういう事って……え？何？どうすんのアレ？どうすれば良いの俺！？」

「男にも女にもモテモテだなキミは……いやはや面白い限りだ。クク……」

先程の光景に思わず吹き出す神父。

「笑ってる場合じゃねーんだよ！！とにかくこれ以上ここに居ても始まらねえ……」

「ふむ、確かにな。」

しかし何処に行く……？宛はあるのか？

「一応な……」

銀時は大きく溜め息をつくとき、空を見上げた……

（愛沢家）

「お、銀時やないか。どうしたん？」

「普通…いつも通りだ!!」

「普段のオメーなんだな!!?」

「お、おお…?」

銀時は感動したように咲夜の手をとった。

「良かったぜ…この世界にも俺の知ってる奴が…」

「ホンマにどうしたや？大丈夫か自分？」

「そつとおいておいてやれ。彼も色々と辛かったのだろう」

不思議そうに見る咲夜に、神父が腕を組んでそう言った。

「さよか。つーか誰なん自分？」

「私の姿が見えるのか…私はアレキサンマルコ教会の神父、リイン・レジオスターだ。“アキバのロード”とでも呼んでくれ」

「絶対嫌やわ…ところで」

咲夜は再び銀時に目を戻す。

「今日は何しにウチに？あ、ひょっとしてハルさんに会いに？」

彼女は銀時にベツタリやもんなア」

「いや違えよ……むしろ遭遇しねえ時間帯を選んできたんだよ」

「ちゅー事は、アイツに会いに来たんか？ツ」

「ああ、そつだ。ツラは居るか？」

「そつかそつか。遂に二人とも……いや、面白くなってきたなア」

何故咲夜がニヤニヤしているのか分からない銀時であったが、取り敢えず桂を咲夜に呼んで貰う事にした。

ガチャ……！！

「銀時！」

「おお、ツラ！！オメーも……」

扉が開いて桂らしき声が聞こえてきたと思つたが、出てきたのはチヤイナ服を着た女性だった。

（二年後のあの姿）

「……あのすみません。ツラ……桂君居ませんか？」

「ツラじゃ無いツラ子よ……」

「お前もかいイイイイイ！！！！
いい加減にしろオ何やってんだこの馬鹿はアアアア！！！！」

ヅラ子は勢いよく銀時の腕に抱きついてきた。

「銀時？今日も会えて嬉しいわ。待っている時間が永遠に感じられ
……」

「触んじゃねエエエエ！！」「ぐばっ！？」

ヅラ子は銀時の蹴りに吹き飛ばされた。

「一体何さらしてんだ腐れ電波バカ！！何なんだよお前、何がした
んだよ！！くたばれよ、頼むからくたばってくれよ！！」

「バカじゃ無いヅラ子よ……」

ヅラ子はゆっくりと立ち上がると銀時に向き直った。

「オイ誰もこの馬鹿止めなかったのかよ……っーか何で一日に二回も
こんな馬鹿共に会わなきゃならねーんだよ。帰りによ、激しく帰
りてエエエ！！」

「お、やっとるなあ……」

銀時が頭を押さえていると、玄関から咲夜も出てきた。

「咲夜よオ……この馬鹿どうにかしてくれ」

「何や自分、ヅラ子に会いに来たんじゃないのか？」

「やっぱオメーもかよオオオオオオオ!?」

普通にツラ子と呼んだ咲夜に叫び声をあげる銀時。

「銀時〜!!今日は一緒に!」

「うるせエ!!喋んじゃねエエエエ!!」

「銀時イイイイイ……」

銀時はさっきより強烈な蹴りをツラ子にいれた!

彼女(?)は叫び声をあげながら屋敷の遙か後方に吹き飛んでいった!!

「お〜……よく飛んでったなあ」

咲夜は手をあててその様子を見上げる。

「騒がせたな。んじゃ……」

「もう帰るんか?」

「ああ、もうこの世界は終わりだっつー事が良く分かったからな」

銀時は手をヒラヒラと振りながら、愛沢家を後にした。

〈負け犬公園〉

「事態は思ったより深刻なようだな……」

「思ったよりっつーか……」

銀時達は再び公園に戻ってきていた。

「どうすんだアアア!! オイ!!?」

これ以上はもうツツコミ切れねーよ!! 新ハイイイ帰って来オオオオオい!!」

「ま、私は見ていて割りと楽しいが…しかし元の世界に帰れんのは困るな」

「一体どうすりゃ帰れんだよ!？」

唯一一緒なのは相変わらず全員がどうしようもないバカ共っー事だ
け……」

銀時は深く頂垂れてベンチに腰を降ろす。

「このまま一生こんな世界に閉じ込められたら……」

「随分と情けない面だな……」

「「!?!?」」

突然銀時達の後ろから声が聞こえてきた。

ガサツ……!!

「て、テメーは……」

「全く……それでも私に勝った男か、貴様は？」

後ろの林から傷だらけの姫史が二人の前に現れた。

「いや……オメーの方がヤベーだろ。何だその成りは？」

「フツ……奴らに手酷くやられてしまっただけ……私も焼が回ったんだろっ」

「奴等？オイ、一体どういう事だ!?!」

姫史は微笑すると、深呼吸をして空を仰いだ。

く?????

姫史

「…………こちら5番。応答願います、どうぞ」
真つ暗な空間で姫史が何やら話していた。

男子A

「こちら28番。視界良好。角度良好。問題ありません」

男子B

「こちら12番。こちら大丈夫です」

姫史

「よし。これより作戦を開始する。教室で待っている男子諸君の為にも、絶対に成功させ……」

ギィ……

真つ暗な空間が一気に明るくなったかと思うと、姫史の前には体操服を着た女子が数十人……
表情は様々。驚愕している娘、額に青筋を浮かべている娘、呆れている娘……

そう、ここは女子更衣室だったのだ。そして彼がいるのはロッカーである。

女子A

「……………何やってるんですか？先生？」

姫史

「いや違うぞ……………これはアレだ。バードウォッチングをだな……………」

姫史は手に持っていたハンディカムを掲げてみせた。

女子B

「いくら先生でもやって良い事と悪い事がありますわ？」

女子C

「やっちまつか……………？」

女子達は姫史を一斉に囲む。

姫史

「作戦失敗だ！！逃げるぞお前達！！！」

男子A・B

「えエエエ！？」

二人の男子もロッカーから飛び出して来た。

女子一同

「させるかアアアアアアアアアア！！！！！」

「……！！！！」

—————

「……と言つ訳だ。全く酷い目にーぐう!?」

「それただの覗きだろーがアアアアア！！」

姫史は銀時に蹴られ後方に吹っ飛んだ。

「ぐふつ……落ち着け。おかしいとは思わんか？私に対する態度が怒っている娘の方が多いなど……」

「おかしいのはテメーの馬鹿さ加減だろ！！無駄に空気重たくさせやがってよオ！！何で世界が変わってもバカだけは変わんねーんだよ……」

銀時は大袈裟にため息をつくど、ベンチに座り直す。

「やはり……ここは別世界なのか。学校の私に対する態度がおかしいと思つたんだ」

「……事はオメーも俺と同じなんだな」

姫史は銀時の隣に腰を降ろすと、息をついた。

「この異様な事態……お前達は何か知っているのか？」

「達……？キミには私が見えるのか？」

リインは少し驚いたように姫史を見た。

「見える……？ああ、勿論だ。何故そんな事を聞く？」

「ふむ。私は幽霊だからな。見える人物は限られてくる筈なのだがな」

「幽霊か……それは意外だな」

姫史は全然驚いた表情をしないで頷いた。

「……それより、今回のこの騒動について何を知っている？」

「俺ア何にも知らねーよ。むしろどうすれば良いのか頼むから教えて欲しいぐれえだ」

「まあ、まだ推測の域を脱しないが……」

リインは姫史を見ながら前回の様子、そして考えを説明をした。

「……なるほど。そう考えると、私は完全に巻き込まれたという訳か……お前に」

「何で俺エ！！？俺だって完全に巻き込まれてんだろ！？被害者だ

る!？」

「黙れ天然パーマがアアア!!!」

銀時にビシツと指を突き付け怒鳴る姫史。

「貴様……貴様そのハーレム状況……万死に値する!!今すぐここで死ねエエエエエ!!!」

「おおおお!？」

姫史は何処からか竹刀を取り出して、銀時に降り下ろした! 何とか避けるも、姫史は連続で竹刀を叩き込む!

「何で……何で貴様がそんなに美味しい思いをオオオオ!!許せん許せんぞオオオオ!!!」

「知るかアアア!!俺に言うんじゃねエエエエエ!!!」

「おのれエエエエエ!!!いっぺん殺す!!!」

ドン!!!

「ぬおおおお!？」

姫史が飛びかかるとした時、足元に銃声が轟いた。銀時が思わず飛び退くと、地面から煙が立ち上っていた…

「な、ななな……!？」

「湊川先生の言う通りだ……貴様の蛮行は許しがたし……」

声の方向に銀時が振り返ると、ライフルを構えたロアルがこちらに歩いてきていた。

「オイ、秋川さん！落ち着け!!！」

「そうですね……今はこの状況を打開する事を考えないと……」

そして、ロアルの後ろから霧崎と白井が走って来ていた。

「いきなりなにしゃがるテーマーエエ!?何者だ!？」

「ロアル秋川……白皇学院のSP長だ」

銀時にライフルを向けながらロアルはそう言った。

「ちよっ、ちよっと待て!!ロアル……だっけ?何でそんな物騒なモノ俺に向けてんの!？」

「フツ………決まっているだろう」

ロアルは微笑すると、カツと目を見開いた。

「貴様の普段の行いだ!!！」

「はアア!？」

ロアルは引き金を引こうとするが霧崎が何とか引き留める。

「落ち着けて、今はとにかく事情を聞かねーと!!」

「……………っ!!確かに。些か熱くなりすぎたようだな……」

ロアルは深く深呼吸してライフルをしまった。

霧崎はロアルを落ち着かせた後、銀時に顔を向けた。

「よオ、万事屋。久しぶりだな」

「オメー……………三千院家の。何でこんな所に？」

「まあ、積もる話は一旦落ち着いてからにしませんか？」

白井の言葉で一同は公園のベンチに腰を降ろして落ち着くと、互いに今の状況を話し合う事になった。

*

「するってーとアレですか？ここはパラレルワールドで、自分達だけじゃ無くて三人も飛ばされた、と……………」

「ああ……どうやらそう言う事らしいな」

「なるほど……だから彼女はあんな態度だったのか」

神父の答えに一人納得したように頷いているロアル。

「まったく冗談じゃねーよ。朝起きたらパラレルワールドってよオ……」

銀時は頭を掻くと、ため息をついた。

「と言うか、キミ達にも私の姿が見えるのか」

「いや、パラレルワールドだからじゃねーのか？都合良く出来てるんじゃない？」

銀時はグツと伸びをすると、欠伸を噛み殺した。

「坂田銀時と言ったな……先程はすまなかった。つい熱くなってしまったな」

「……ついでライフル持ち出すってどんだけだよ」

「まあ、この人にも色々理由があるんだよ？」

霧崎はため息混じりに言うと、煙草に火をつける。

すると、姫史が立ち上って口を開いた。

「まあ、大体の事情は分かった。結論から言うに、今回のこの世界

を何とかする鍵を握っているのは……お前だ」

「なるほど……って俺エ!?!」

銀時は適当に聞き流そうとしていたが、耳を疑うように姫史に振り返った。

「考えてもみる……このパラレルワールドが読者の恋愛イベントすっ飛ばしへの怒りから出来たとして、貴様のハーレム状況……この二つに何の因果関係も無い訳が無いだろう」

姫史の言葉に銀時以外の全員が頷いた。

「いや……ちよつと待て。仮に関係があるとして……それがどうしたって言うんだ?」

「簡単な話だ。要するにこの世界で読者を満足させればいい」

「満足させる?」

銀時は怪訝そうに姫史を見上げた。

「そつだ。キミはこの世界では……物凄い癪だが……六人の女性と恋人という設定らしい」

「やりますね〜 さぞかし辛いでしょう」

「罪作りの男だなキミは」

「恋人……だと?」

ガチャ…!!

「だから落ち着けて!!」

姫史の言葉を聞いて茶化す白井とリィン。対するは反射的にライフを構えるロアルとそれを止める霧崎。

「つまり?」

「恋愛イベントを見たいと思っているのならば……見せてやればいい!お前が読者かみを満足させてやれば良いのだ!……」

ドーン!!

後ろで爆発の効果音でも鳴りそうなシーンである。

「俺が?」

「ああ、そつだ。お前がこの運命に立ち向かう為に戦つんだ!」

姫史はもう一度銀時に指を突き付けてそう宣言した。すると、銀時はニヤリと笑って立ち上がった。

「上等だ。何処の誰だか知らねーが、好きには事は運ばせねえ!!全部打ち碎いてやらア!!」

白井はまだ腑に落ちない表情で姫史に尋ねる。

「それで自分達は元の世界に戻れるんですか？」

「分からん……だが、この方法が今考えられる中では一番だと思う」

しかし、白井の問いに姫史は自信を持ったように答えた。

「フン……今回は場合が場合だ。協力してやるか」

「そうですね。自分達も元の世界に戻れないと困りますからね」

「……しかし彼女に変な真似を試みる。全身に風穴を開けてやるぞ」

「これも運命か……」

そうして一同は決戦に向かうが如く……

「……ちょっと待て。つーか具体的に何すれば良いんだ？」

ズサアアア……

皆いっぺんに転けた！

「テメーさっきあれだけカッコつけといて何言ってるんだ!？」

「いやさあ、皆が『行くぞー!!』的なノリだったから…テキストに乗ったんだよ」

間の抜けた言葉にため息が漏れるが、代表して姫史が銀時に向き直った。

「つまり、お前が彼女ら六人を満足させる事が必要なんだ」

「……………は？」

「だからこれより、お前は六人全員とデートをしる!!!」

「……………
……………はああああアア!!??」

こうして、元の世界に戻る為の重要な鍵は、銀時に託されたのであった……………!!

第六十三訓 男はつらいよ 華も嵐も銀色の唄 (後書き)

教えてー！銀八先生

銀八

「本日最初の質問。『作者に質問。銀魂とハヤテのごとくで好きなカップリングはありますか?』」

作者

「そうですね……まあ基本銀時は誰ともくっつかないのが良いですね。銀×無しが一番好きです。

だから……うーん、無いです。

ハヤテは……ハヤテ×マリアか

ハヤテ×アテネですかね。他はダメです」

銀八

「続いての質問『ハヤテ組に質問。銀さんの強さの秘密は知りたくないですか?』」

ハイズバリお答えしましょう。

この質問の答えは本編でいずれやります。お楽しみに」

ハヤテ

「確かに気になりますよ。だってとんでもなく強いから……」

銀八

「んじゃ、次の質問『リンに質問。メイドは好きだろうけど家政婦はどう?』」

リン

「確かに意味は同じだし、仕事は似ているかもしれない。しかしメイドと家政婦には、言葉に、姿に、衣装に、笑顔に、オーラにおいて全てにおいて違うんだアアアア！やはりメイドはメイドだからメイドなんだ！」

意味は一緒でもモチベーションが違ってくるのだよ！」

銀八

「続いての質問『ロアルに質問。マリアさんの何処を好きになったの？』」

ロアル

「これは本編中でいつか語られる日があるだろう。またいずれだ」

銀八

「んじゃ最後の質問『リンに質問。マリア、サキ、ハルはメイドとして何点？』」

リン

「マリア：9点…年齢が!？」

サキ：7点…ドジな所に敢えて ハル：10点…完璧！」

銀八

「つーか最後の千桜は作者が好きだからじゃねーのか？」

作者

「……否定出来ない？」

銀八

「つたく……また次回な」

第六十四訓 デートは男と女の闘いである(前書き)

クラウドの前書きの館!!

クラウド

「更新が大分遅れましたな」

伽藍

「すみません。実は携帯を落としてしまって……ようやく昨日見つけたのです」

ハヤテ

「次からは気をつけて下さいね?」

伽藍

「ハイ、気をつけます」

クラウド

「では、第六十四訓が始まりますぞ!!!!」

第六十四訓

デートは男と女の闘いである

第六十四訓 デートは男と女の闘いである

白皇学院にはお金持ち学校よろしく様々な施設が存在する。

壮大なグラウンド、広大なテラス、カフェテリア、学食、アリーナ、

ドーム、展示場 e t c ……

しかし、そこらへんの私立学校とは比べものにならない程の敷地を有するが故に窮屈に思える事が一切無いのである。

2225

そんな中でも、目立つ事のない木々に囲まれた静かな所に位置する建物…

く武道場く

「面!!」

パーン!!

「胴オオオオ!!」

スパーン!!

乾いた竹刀の音が響き渡るのは武道場。人数はそう多くは無いが、畳の上で真面目に練習に励んでいる剣道部の姿がそこにはあった。

そして、畳の端には胴着姿のヒナギクの銀時がいた。

ヒナギクは顔を赤らめながら銀時に寄り添い皆の練習を見ている。

銀時はその光景に再三疲れたような表情の一方、練習しながら部員(男)が放つどす黒いオーラに溜め息をついていた。

「面!! (おのれエエエエあの白髪頭アアアア!!)」

「まだまだア!! (殺す!! あの白髪絶対殺す!!)」

「小手!! (あの桂さんにイイイイ!!)」

(((許すまじ……!!))))

一体何故こんな事になっているのか。

それはかれこれ二時間前に遡る……

〈負け犬公園〉

「はあ！？デートオ！？」

「うむ。デートだ」

銀時の問いに平然と姫史は頷いてみせた。

「先程も言ったように、読者は全てが上手くいく事……
即ち六人全員を満足させる事だ。だからお前にはこれから全員とデ
ートをし、全て丸く収めるといふ使命を果たさねばならん」

「……………」

「まあ、これもハーレムを満喫した羨ましすぎる貴様の義務だ。
出来ないとは言わせん。我々の人生もかかっているのだからな」

あからさまに面倒臭そうな顔をする銀時に釘を刺す姫史。

「まあ事情は分かったけどよオ……………」

「……………」

しかし、銀時は溜め息をついて四人を見渡した。

「残念ながらそいつは出来ねーな」

「どづいう事だ？」

「それじゃあ奴等の思いつばじゃねーか。俺達があたふたすんのを何処からか高みの見物決め込んでんだろーよ……」
オメーらは良いのか？

このまま奴等の手の平で躍らされて……」

「……………」

グツと黙り込む一同。

「だったら奴等に一泡吹かせてやりゃいい。思い通りになんてさせなきゃいい……だろうよ？」

「……確かにな。しかしどーすんだ万事屋？ 奴等を一泡吹かせるっ たって……方法は？」

銀時の言葉に霧崎が腕を組んだまま尋ねる。

「なあに、要はハッピーエンドにしなきゃ良いんだろ？ なら話は早え」

「まさか……！！！」

「そう。ぶっ壊すのさ。デートも雰囲気も相手の幻想もな」

銀時はニタリと憎たらしい笑みを浮かべて言った。

「六人全員に振られれば……読者の望んだ結果と正反対になる訳か

……………」

「良いじゃないですか？奴等の驚愕の表情が目には浮かびますねえ」

「テメーにしては考えるじゃねーか…」

一同はなるほど納得したように頷いていた。しかしロアルだけは腑に落ちない表情。

「フー訳で破壊役は俺らしいから、オメーらは後ろから指示を頼まあ。大人五人が集まりゃなんとかなんだろ」

「フツ……任せておけ。デートの…いや女性（幼女）の心理なら私には手にとるように分かる。タイミングやパターンも熟知している。サポートは万全だな」

姫史は高らかに笑いながら銀時に向かって言った。

「こちらも任せて下さい。（先輩を）壊すのや（先輩を）邪魔をすんのは自分達も得意ですよ」

「ボソツと何言ってやがんだコラア！！」

白井と霧崎も協力に異論は無いようだ。

「まあ、コイツの場合は面白半分だろうがな」

「失礼な、面白全部ですよ」

「失礼なのはテメーだアアアア！！」

白井はヒヨイと霧崎を交わすと、銀時の前にやって来た。

「万事屋さん、コレを付けていて下さい」

「……イヤホン？」

「ええ、普段自分達が使ってる連絡タイプの超小型イヤホンです。コレで色々と自分らがサポートしますんで。」

「コードが無いんでまずバレないと思います」銀時は言われた通り、超小型イヤホンを耳に付けた。

なるほど、近くから見てもイヤホンが付いているとは気づかないくらい小さい。

「それでは、『デート大作戦』改め、『デートぶっ壊し大作戦』の開始だな」

「取り敢えず万事屋、今から六人全員に電話をかけて予定を組め。」

「一日で全部終わる（二重の意味）ようにな」

銀時は面倒臭そうに頭を掻きながら、公衆電話に向か…

「一つ質問があるんだが…」

「どうしたんですか？秋川さん」

今まで考え込んでいたロアルがようやく手をあげていた。

「何だ？何か不備でもあったのか？」

姫史の問いに、ロアルは周りを見回して、口を開いた。

「……………奴等って、誰？」

「「「「……………知らね」「」「」

—————

そんな訳で、今はヒナギクとのデートをしている。
デートと言っても、実質剣道部の練習に付き合うという事だが…

パーン！！

最後の打ち込みの音が響き渡ると、ヒナギクが皆の一步前に出た。

「打ち込み終わりね、お疲れさま。じゃあ、10分休憩」

「「「ハイ！」「」「」

部員達は武道場の端に座り込み、各々休憩を取り始めた。
ヒナギクも元の位置に戻ると銀時に振り返った。

「銀時も次の練習に出てみる？次は試合だけど…」

「ん？ああ…そうだな」

銀時はそう言うと、さりげなく右耳イヤホンに手をあてる。

(姫史)

『よし……ここから作戦開始だ』

イヤホンからは姫史の声が聞こえてきた。

(姫史)

『恋愛…それも学生恋愛というものは一旦熱くなれば止まらないが、その分一旦冷めてしまえばあとは一気に下り坂だ。それはもうゲレンデを滑走するスノーボードの如く……男がいくら引き留めても全く意味が無い物なのだ……』

(霧崎)

『オメー何か嫌な思い出でもあんのか??』

(姫史)

『ともかく、彼のカツコ悪い所を見れば女は一気に冷める。つまり……』

(試合でボロボロに負けりゃ良い訳だな)

銀時は姫史の言葉を受けて密かに頷く。

(姫史)

『そついう事だ。出来るか?』

(ガキ相手の騙し合いなんざ朝飯前よ……)

銀時は欠伸を一つ、耳から手を離した。

ヒナギクは立ち上がると、武道場を見渡した。

「じゃあ、最後は試合でしめましようか。次は彼も入るから、よろしくね」

「会長の彼氏ですかー!!」

「もう！今はそんな事いいでしょ／＼」

「あ、赤くなってる」

「会長可愛い」

「や〜ん！私達の会長がとられちゃったー!!」

女子部員の盛り上がり顔に顔を赤くするヒナギク。
しかし……

（おのれ桂さんを…おのれ桂さんを…おのれ桂さんを…）

（許せん許せん許せん許せん許せん許せん）

（殺る殺る殺る殺る殺る殺る）男子部員からは負のオーラが充満しまくっていた。

「じゃあ、彼の試合相手をしてくれる人は…」

バツ!!

一斉に男子部員全員の手が高々と上がった。

「えっと……？」

「桂さん！！彼の相手は是非俺に！！（桂さんにカッコイイ所を見せるんだ！）」

「いや、あの人の相手は僕がしましょう！！（メタメタにして奴を桂さんから引き離してやる！！）」

「いや自分が！！」

「なんの私めが！」

男子達は有無を言わずに声を上げ続ける。

「どつする？銀時？」

「……ん？」

銀時はイヤホンから聞こえてきた声に気が付いた。

（白井）

『万事屋さん、ここは全員まとめてかかって来いと啖呵をきつて、最弱の奴にボロ負けするってのが最高にカッコ悪いですよ。先輩みたいに』

（霧崎）

『オイコラ、誰がいつ負けたんだ？』

（姫史）

『ふむ。これで冷めない女子高生はいまいな。名付けて【彼女は見た！！見栄と真実の愛憎模様】作戦だ』

(ロアル)

『長い上に要点がよく分からん作戦名だな……………』

(姫史)

『行け、そして華麗に散ってこい(笑)』

(霧崎)

『何で(笑)なんだよ！？』

銀時は仕方ねえなと肩を竦めると、ゆっくり立ち上がって部員達を見渡した。

「おう、誰でも良いからテキトーにかかって来な」

「……………だったら、僕が行こう！」

部員の中から一人の男子部員が立ち上がった。

「おお！？あの東宮が出るぞ！！！」

「我が剣道部最弱で最もヘタレの東宮が勝負を挑んだ！！！」

どよめく武道場……………

「うるさい！！誰がヘタレだアアアア！！！」

東宮はそう叫ぶと、銀時にピシッと指を突き付けた。

「オイ！！この僕、東宮康太郎が相手だ！正々堂々と勝負しろ！！」

「……………そうか。んじゃ始めようぜ」

「な、何だそのさして興味がないような返事は！？」

銀時は取り敢えずテキトーに頷くと、竹刀を手に取った。

「ふ、ふん！余裕ぶつていられるのも今の内だ！！この二週間僕は野々原に修行させられていたんだ！今までの僕と違って侮るなよ！！」

「今までも何も…………俺はオメーとは初対面だろ」

「今回は僕は誰の力も借りない！！僕一人の力で勝利を掴んでみせる！！」

「いや、人の話聞いてんの？」

東宮は勝手に拳を高々と掲げて叫んでいた。

（坊っちゃん！！その意気です！！！！）

天井裏からは野々原が感涙していた事は知るよしも無い事…

銀時は仕方なく、竹刀を片手に立ち位置に歩いていく。

東宮も竹刀を構えて位置に着く。

（見ていて下さい、桂さん！！必ずやこの男を倒し、あなたを振り向かせてみせます！！！！）

東宮はチラツとヒナギクの方に目をやる。
そんな様子を見て銀時は一人納得した。

(なるほど…)

「では、試合始め！」

「でやアアアアア！！」

号令と共に、東宮は竹刀を大きく振り下ろした。

「……………」

当然銀時はそれを受け止める。

そして、顔を東宮に近づけると、

(俺が横に大きく振るから、オメーは後ろに回り込んで面をとれ)

(…………へ！？)

(いいから、ここでカツコイイ所みせときな)

(あ、あんた…！！)

銀時は言葉通り竹刀を横に大きく(ゆっくり)振ったが、東宮が咄
嗟に(予測済み)後ろに回り込んだ。

「おお！？東宮が後ろをとった！！」
「まさか…！？」

そして……

パン！！！！

「面——！！！！」

東宮の竹刀が見事に銀時の頭に直撃した！！

「『『『おオオオオ！！！！』』』」

武道場が揺れた！！

*

〽一時間後〽

ガヤガヤ……

「予想以上に疲れんなコレ……」

武道場から部員が帰っていく中、銀時は壁に寄り掛かっていた。

東宮にわざと負けた後、男子部員と立て続けに試合を行い、同じわざと負けていったのだが……
それがかなり疲れたらしい。

いくらわざと負けようとしても、洗練された本能が身体に勝手に反応して相手を負かそうとしてしまうのである。それを何とか抑えて、試合を行っていたのだ。
並みの精神力では適わない。

(姫史)

『大分疲れているようだな……だが、これで彼女も……』

(霧崎)

『まあ、だろうなア……』

すると、ヒナギクが銀時に近づいて来た。

「お疲れさま。大丈夫？」

「いや足がよオ……」

銀時は更に足が疲れて動かないという仕草を試みせる。

(姫史)

『上手いな……弱い所を見せた拳句、体力が無い所をさりげなく折り込むとは』

(ロアル)

『なるほど。これは呆れるに違いない!!』

一同も決まったと確信を持って見守る中……

「もう、本当にだらしないわね　ちょっとジツとしてて。マッサージしてあげるからノノノ」

「は?」

ヒナギクは少し困ったように微笑みながら銀時の横に座った。

(オイイイイイイ!!?!?全然冷めて無いんだけど!!?!むしろ嬉しそうだけど、どういう事だ!?)

(姫史)

『……そうか!!私は完全に見誤っていた』

(霧崎)

『どづいつ事だ?』

(姫史)

『桂は誰もが認める完璧超人。』

完璧な女性というのは男性の世話を焼きたがるものが多い……特に自分が頼られる事が好きというものがな。

そして、彼女は典型的な【私がないと何も出来ないの?仕方ないわね】タイプだったんだ!!』

(一同)

『【私がないと何も出来ないの？仕方ないわね】タイプ!?!』

(姫史)

『男性のだらしない所やカッコ悪い所を可愛くさえ思えてしまうタイプだ。自分が守ってあげるんだという意識を持っている女性等にもこのタイプは多いな』

(くだらねえ解説してねーでこの状況を打破する方法を考えるオオオオ!!!)

(姫史)

『落ち着け。この場はテキトーに切り抜ける。今回は我らの敗戦だ。後日日を改めリベンジするでしょう。次のデートまでもう時間が無いぞ』

(分アったよ……)

銀時は溜め息をつくくと、ゆっくりと立ち上がった。

「銀時？足は大丈夫なの？」

「いや、もう治った。もう大丈夫だから？悪かったな心配かけて」

マッサージしようとしたヒナギクを慌てて交わし、銀時は横に移動した。

「じゃ、この後俺ちょっと用事があるから」

「あ、待って銀時！」

「ん？」

出口に行こうとした銀時の裾を掴んだヒナギク。

「今日はありがとう／＼／＼それから……えっと、その……この話
なんだけど……明日、この場所でする事になったから／＼／」

「……え？この間？この場所？」

ヒナギクは真っ赤になりながら銀時に地図のようなものを手渡した。

「そ、それじゃ……また明日ね／＼／」

「え？明日？ちよっ……」

銀時が止める間もなく、ヒナギクは慌てて武道場を出ていった。

「オイオイ……何なんだ？」

（姫史）

『まあ、とにかく今は次のデートに移行しろ。次はマリアさんと屋敷の前で待ち合わせだろ』

「……予想以上に疲れんだけど、コレ」

銀時は肩を落として息をつく。

（ロアル）

『仕方ない。だったら私が変わるっ』

(霧崎)

『それじゃ意味がねーだろ』

(白井)

『急いの方が良いですよ。後15分しかありませんぜ』

(姫史)

『とにかく我々の未来はお前にかかっている。頼んだぞ』

「ったく……仕方ねえ」

銀時は頭を掻きながら、武道場を後にした。

「　　」

「……………ハア？」

武道場を出て30分、商店街を歩いているのは銀時とマリアであった。

屋敷前で待ち合わせをして一緒に買い物をする事になったのである。

マリアは嬉しそうに銀時に腕を絡めている。

一方銀時は終始疲れた表情で視線をさ迷わせていた。
それもその筈……

ゴゴゴゴゴゴゴ……！！

学生A

（何だあのイチャイチャカップルはアアアアア！！！）

オタクA

（あんな可愛いメイドさんに腕を組まれてエエエエエ！！！）

社会人A

（男の敵じゃアアアアア！！）

周りの男達から放たれるただならぬオーラのプレッシャーのせいである。

そして銀時達を後ろから尾行している五人からも同じようなオーラ

が…

「おのれエエエエ！異世界とはいえメイドさんとあんな事をオオオオ！！」

「射殺する！！」

思いきり地面を踏みつけるリンとライフルを取り出すロアル。

「待て待て待て！！落ち着け、ここは俺達の知ってる世界じゃねーだろ」

「ぐっ……」

霧崎は慌ててロアルを取り押さえながら続ける。

「とにかく、今は万事屋の野郎をサポートする事だけを考えるぞ……」

「ふむ……では、こんなのはどうだ？」

「「「「「？」「「「」

姫史は四人を集め、作戦を説明し出した。

*

サポート四人組がなにやら相談している間、二人はスーパーに入っていた。

「銀さん、今日のご飯は何が良いですか？」

「いや、何でも良いぞ??？」

銀時はしきりに周りを気にしながらテキトーに答える。
しかし、そんなテキトーな答えさえ今のマリアには…

(お前の作ってくれるものなら何でも美味しいさ?)
…と、こんな返事に聞こえているのである。

「まあ、そんなノノじゃあ、今日も頑張って作りますわ」

マリアは材料を順々に買ってゆく。

「椎茸は大丈夫ですか？」

「ああ、食えるぞ」

「そうですか、良かった」

マリアは嬉しそうに腕を組ながら銀時に尋ねては回っていた。

バイトA

(何だアアアアア!!そのアツアツ新婚カップルのような会話はア

アアアア!!!)

バイトB

(どちくしょオオオオ!!!俺なんて29年間彼女いねーってのにイイイ!!!)

取り敢えず暇なバイトA(19才)とバイトB(29才)に突っ込んで貰いました…

そんな感じでスーパーから出てきて銀時達と同時に銀時のイヤホンに声が…

(姫史)

『オイ、聞こえてるか?どーぞ』

(遅せーよ。何か思いついたのか、どーぞ)

(姫史)

『良いか?今から我々が当たり屋になってお前達の所に向かう』

(霧崎)

『そこでお前は咄嗟に土下座、財布を渡して見逃して貰うという訳だ』

(姫史)

『そんな姿を見て冷めない女性はいまいよ』

(ロアル)

『そういう事ならば非協力しよう』

(白井)

『つー事でよろしくお願いしますわ、万事屋さん』

(仕方ねえか……)

彼らの言葉に渋々と頭を掻きながら了解する銀時。

「んじゃ、帰るか」

「そうですね」

二人が屋敷に向かおうとすると、前方から四人のマフィアっぽい格好をした男達と宙に浮いてるリインが歩いてきた。

(オイイイイイ!!変装ってグラスンかけただけじゃねーかアアアアア!!)

(仕方ねえだろオ!時間が無かったんじゃアアアア!!)

銀時と四人はアイコンタクトで会話をし合う。

そしてすれ違おうとした時、

トン!!

グラスン１（姫史）の肩がマリアの肩にぶつかった。

「あ、すみませ……」

「ぐああアアアア……！」

グラスン１は叫び声をあげて倒れ込んだ。

「ちょっと兄貴！大丈夫つすか！？」

「いけねえ……こりゃ腕が逝っちまってるな」

グラスン２（白井）とグラスン３（霧崎）はグラスン１に駆け寄ってわざとらしく言った。

「まあ、それは大変。大丈夫ですか？」

銀時とマリアもグラスン達の所に寄る。
すると今度はグラスン４（ロアル）が近づいて来た。

「大丈夫で済んだら警察はいらん。悪いが我々と一緒に来て貰おうか。」

そしてクルーザーの上で二人シャンパンを交わしながら将来について話を……」

バシッ！！

「違えだろ……！」

グラスン４の話をグラスン３が止めた。

「とにかく自分達と一緒に来て下さい。責任をとってもらいますぜー（棒読み）」

グラサン2が MARIA にそう言った瞬間、MARIA 以外の全員の目が光った。因みにリインはずっと面白そうに見ている。

（今だ！！行くなら今しか無いぞ！！）（このタイミングだ！行け万事屋！）

（ふむ。中々面白い心理戦だ）

銀時は頷くと、懐から財布を取り出し…

「すみませんが、後四方。我々と一緒に来てもらえますかな？」

「お話したい事がございます故」

「「「「へ？」「」「」

姫史達の後ろには物凄いゴツイグラサンの黒服達が数十人立っていた。

他でも無い……三千院家SPである。

「いや、ちょっと待ー」

「俺達は実はー」

ガシッ！

「さあ、こちらへ……」

有無を言わずに三千院家SPは四人を掴んで連れていった。

「……………」

「一件落着ですね？」

マリアは銀時にニッコリと微笑む。

「あ、そつだ銀さん。その…あの…明日…お願いしますね／＼／」

「へ？明日？」

マリアは頬を赤らめて、銀時に地図を渡した。

「ハイ 帰りましょうか」

マリアに連れられ、銀時は呆然と屋敷に戻っていった……

*

〈負け犬公園〉

「連敗か……」

「まさかな……我々のデータが通じないとはな。恐るべき女性達だ」
「だから女は嫌いなんだ……」

ボロ雑巾のようになってる姫史、霧崎、ロアル。

「いやあ、本当に大変な目にありましたね」

「」「野郎……?」「」

白井は体よく逃げ出したらしかった。
ベンチで三人を面白そうに眺めている。

「諦めるのはまだ早い。まだ四人もいるのだぞ」

「……そうだな。オイ万事屋、次は誰だ?」

霧崎はヨロヨロと立ち上がると銀時を見る。

「……………ツラだな。この馬鹿は俺に任せておけ」

銀時の言葉に、一同は負け犬公園から次の戦場に向かった。

くサファリパークく

「銀時！待っていたわ！」

「ああそうかい。分かったから近づくなツラ」

「ツラじゃ無いツラ子よ！！」

やって来たのはサファリパーク。そう。ツラ子とのデートはサファリパークだったのである。

ツラ子は入口前で自転車片手に待っていた。
この位置からはサファリの南側……猛獣エリアは上から見える。

(霧崎)

『いやいや!!何でサファリパーク!?つーかなんでアイツは自転車持ってんの!?!』

(白井)

『何か……バリバリ電波っぽいですね』

(姫史)

『こつこつタイプは中々難しいぞ……』

(馬鹿はテキトーにやるさ)

銀時は欠伸をすると、ツラ子の所に歩いていった。

「待たせて悪かったな。さっそく入るか」

「ええ!じゃあ銀時は私の後ろに乗って」

「おう」

ツラ子は入口前で自転車にまたがると、
銀時はツラ子の後ろに大きな岩を載せた。

「じゃあ、未知なる肉球の旅に出かけるわよ!」

「ああ、一生帰ってくんないな」

バコッ

銀時はそのままツラ子の自転車を蹴り飛ばした。

「なあ！？」

ツラ子は脇の坂を一直線に下って行く！

そのまま自転車は猛獣のエリアに突っ込んでいってしまった！！

「ぬおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「あばよツラ。短い付き合いだったぜ」

銀時は大きく伸びを一つ。

（霧崎）

『容赦ねーな………』

（姫史）

『つーか死んだんじゃないか？アレ……』

ツラ子の断末魔を聞きながら、銀時は四人の所に戻って行った。

）一時間半後

「さて、次は誰だ？」

「……………ハヤテだな」

銀時は顔をしかめてみせる。

「何！？あの可憐な少女か！…！実に羨ましい……………私と替われ！」

「いや……………アイツ男だぞ？」

叫ぶ姫史に突っ込む霧崎。

「まあ、とにかくサファリ（ニコ）から出るか……………」

ガサツ！…！！

「待てエエエエエ！…！」

「な！？」

一同がサファリを出ようとしたら、茂みからいきなりツラ子が飛び出して来た。全身血だらけである。

「オメーは……………一体」

「フツ……なめて貰っては困るわ。私達はあの攘夷戦争を共に戦ったナマカじゃない。これしきの事で切れる絆じゃないわ」

「ああ、今は激しくその記憶を消してえよ……何なんだお前」

銀時は頭を押さえて溜め息をつく。

「今日はこの辺にしておいてあげるわ……明日は大切な日よ。明日の朝、この場所に忘れずに来なさい。それじゃ……！」

「オイ、ちよつと待てクサレ電波馬鹿……！」

「アツハツハツハツハ……さくらば……！」

ツラ子は血だらけのまま自転車に乗って去っていった。

その様子を見送る六人であった……

「オイ、どーすんだコレ」

「……知らね……」「……」

第六十四訓　デートは男と女の闘いである（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ行くか」。最初の質問「ハヤテに質問。パラレルでハーマイオニーになった感想は？」

ハヤテ

「うわアアアア！！作者のバカヤロオオオ！！！」

ナギ

「は、ハヤテが壊れた！！」

マリア

「今はそっとしておいてあげましょう？」

銀八

「続いてな」『ハーマイオニーに質問。過去の自分について一言』

ハーマイオニー

「そうですわね……確かに他の人の目は気になりますが、今の私はとっても充実していますわ？」

ハヤテ

「するかアアアア！！消えるオオオオ！！！」

銀八

「んじゃ、次な。『銀さんに質問。今の心境は？』

……聞いてくれるな。

次の質問行くぞ。『作者に質問。ハヤテとツラの性別は？』」

伽藍

「完全なる です。残念ながら……」

銀八

「続いている質問『銀さんに質問。ハーマイオニーとツラ子と長谷川さんならだれが良い？』

……死んでいい？

んじゃ最後の質問『ナギとワタルに質問。最近出番ないけどそんな時元気になる一言は？』」

ワタル・ナギ

「作者殺す!!」

伽藍

「……え？ちよつと、え？ええええええええええ!!」

グサツ!!

銀八

「んじゃ、次回もよろしく頼まア」

桂・ツラ子

「次回、俺（私）達の活躍を見逃すな!!」

銀八

「出て来んな、うぜえエエエエ!!」

桂・ツラ子

「ぬおオオオオ!?!」

第六十五訓 例外ほど怖いものは無い(前書き)

クラウドの前書きの館!!

クラウド

「タイトルを変えようと思っています」

ハヤテ

「ええ!?!小説ですか?」

クラウド

「いやいや、このコーナーのだ」

ハヤテ

「ああ、なるほど」

伽藍

「むしろ前書きのコーナー自体変えようかなとも思っているけどね」

クラウド

「な!?!そんな話は聞いていませんぞ!?!」

伽藍

「まだ考え中だから...」

クラウド

「いやいや!?!このコーナーを削られたら私の出番は...」

伽藍

「次回で妬羅舞流篇は完結です」

クラウス

「ちょっと待って下さい!？」

ハヤテ

「…では始まります?」

第六十五訓 例外ほど怖いものは無い

ここまでの戦績

対ヒナギク

敗因：恋は盲目？

対マリア

敗因：三千院家SP

対ヅラ子

敗因：サファリに呑み込まれる

「……………と言う訳だ。ここまで三連敗という結果だ。何とかしなくてはなるまい……」

姫史達は次の戦場に向かう途中で状況を整理していた。

「もうこのまま全部成功させちゃった方が早いんじゃないですか？」

「いや、その読者^{かみ}とやらの思惑通りにした所で、元に戻るつー保証は無えんだ。だったら俺達のやり方で流れを変えた方が後悔も無くて良いだろ」

白井は欠伸をして空を見上げ、霧崎は煙草をくわえた。

「確かにな……………言う通りにして裏切られたら……………」

「ふむ。やはりやるからには自分の道を進むべきだろうな」

リンとロアルも自分を納得させるように相づちを打つ。

「いや、そういうのもういいから……つか、次なんかやな予感しかしねーんだけど……」

「次は……そうか。“彼”か……」

銀時は先の事を思い浮かべて大きく溜め息をついた。

「元は男とは言え今は心まで完全なる女だ。他の女性と同じように接すればいいのではないか？」

「接するったって男だもの。何をどうしたって男だもの」

ロアルはそう言うが銀時はうんざりしたように首を振るばかり……

「まあ、とにかく行ってみてからだな。話は」

「……………マジで行くの？」

一同は恐らく一番の苦難を極めるであろう戦いに向けて進んで行った。

第六十五訓 例外ほど怖いものはない

〔某駅前〕

「あ、来た来た 銀さん？」

「……………」

駅前の広場ではハヤ：ハーマイオニーが手を振っていた。
メイド服では無く水色のシャツにピンク色のカーディガンを羽織っ
て青いミニスカート。
最早完全に手遅れである…

銀時は顔をひきつらせて近づいていく。

ギョッ！！

「銀さん、今日は来てくれてありがとう？」

「ああ、出来れば今すぐ帰らせてえよ。ダッシュで帰らせてえ…」

ハーマイオニーは銀時の腕に抱きつくと、広場の視線が一気に集中する。

学生B

（おのれエエエエ！！何だアイツはア！！羨まし過ぎるぞオオオオオ！！）

一般人B

（あんな美少女とラブラブしやがってエエエエエ！！！！）

オタクB

（何だあの娘は！！？か、か、可愛い過ぎるウウウウ！！あんな可憐な少女は見たことが無い！！）

黒いオーラは銀時に次々と突き刺さる！

（ちよつと待てテメーらアアアアア！！コイツ男オオオオ！！）

「銀さん、行きましようか？」

（嫌だアアアアア！！行きたくねエエエエエ！！）

そんな銀時の嘆きも虚しく、ハーマイオニーは銀時を連れて歩き出した。

「何と恐ろしい……世の中にはこんな所が存在するのか」

「オイ、ヤベーぞ？アイツ入っちゃまったぞ、どーすんだ？」

姫史達は後方から様子を伺っていた。

誰一人として笑っているものはいない。一同真っ青な顔である。

「俺はあんな所に入るのはご免だぞ？」

「私も同意見だ……」

「まあ私は実体が無いから良いがな」

ロアルの言葉に姫史とリインが続く。

「提案なんですけど……ここは作戦Bはどうでしょう？」

「……作戦B？」

「ええ。作戦Aは自分達が連絡を取り合いながらサポートに対し、作戦Bは万事屋さんに全権を任せるんですよ」

白井はすらすらと四人に説明してみせる。

「なるほど……確かにリスクは高いが……」

「今はそれしか無いか…」

一同も納得したように頷いてゆく。

「決まりですね」

白井はそう言うと、トランシーバーを取り出した。

こちら場面変わってバーの中。

「ここは私が昔お世話になったお店なんですよ」

「お前何してんのオオオオ!？」

お世話になるって…サファリパークだからココ!! ツラん時とは違うけど…顔面サファリパークだからココオ!! 至るところ珍獣だらけだよ!？」

「フフフ、相変わらず銀さんは面白いわ?」

ハーマイオニーは銀時を引っ張って一緒に席に着いた。すると、イヤホンから声が聞こえてくる。

(白井)

『っー訳ですから、後はご自分でよろしく頼みます』

(ちょっと待てエエエエ!!)

よろしくって何!?この野獣共の中に俺一人置いて逃げる気か!?)

(白井)

『自分達は万事屋さんを信じてるんですよ』

(姫史)

『そうだ。私達の未来はお前に託す……お前を信頼しているからこそ出来るんだ』

(ふざけるよオオオオ!!テメーら入りたくねーだけだろ!!)

ブツン……!!

(オイイイイイ!!)

イヤホンから音は途絶えた…

「やだ〜 こちらがハーマイオニーちゃんの彼氏？」

「もう 隅に置けないんだから〜」

「うっ!？」

二人の席に化物が二匹……店員が二人寄ってきた。

「そんな大きな声で、止めて下さいよう／＼／」

ハーマイオニーは顔を真っ赤にして俯く。

「照れちゃって可愛い〜」

「え！？ハーマイオニーちゃんの！？ウソウソ！？」

みるみる店員達はけものは二人の所に集まってくる。

「こない男掴まえて、この幸せもの！〜」

「もう、からかわないで下さい / / /」

愕然としている銀時の前で恐ろしいコミュニケーションは続けられる。

「あーん、私達にも幸せをお裾分けして〜？」

ガバツ！！

いきなり一人の店員はけものが銀時に抱きついた！

「あ、ずるーい！私もー」

「私もー？」

「きゃー、私も混ぜて」

「だアアアア！〜止める化物どもオオオオ！〜」

銀時はそう叫ぶが次々と遅いかかる獣達に成す術なし。

「ダメ！！銀さんは私のものです！！ / / /」

「いいから助けるオオオオ！！〜」

「気にするな弥鉤」

「そうだ。大切なのは心意気だ」

ロアルとリンも腕を組ながら相づちを打っている。

「……………ま、いつか」

霧崎は空に向かって煙を吹き上げた……

*

〳一時間後〵

ガラ……………

「「「「「ありがとうとづいぞいしました〜?」「「「「

銀時達は何とかお店を出てきたが……

「……………」

「皆さん、また今度」

銀時は顔が真っ青になっていて、顔中に真っ赤な唇の跡。対してハーマイオニーはとても嬉しそうに手を振っている。

「本当に優しい方達ですね」

「……………へえ」

暫く歩いていくと、ハーマイオニーは銀時に振り返った。

「今日は楽しかったです、ありがとうございました銀さん？」

「……………あ、そう」

銀時はキスマークだらけの顔をひきつらせる。

「あの……………明日は、その……………／／／お願いします……………／／／」

「……………あ、そう」

ハーマイオニーは真っ赤になりながら銀時に地図を渡した。

「それじゃ！！／／／」

「……………あ、そう」

そのままハーマイオニーは帰り道に向かって走って行ってしまった。

銀時は振り返ると、後ろから五人がゆっくりと現れた。

「……………大丈夫か？その顔……」

「……………」

虚ろな瞳が何が起きたかを悟るのには十分であった。

（負け犬公園）

「もう勘弁してくれよ……………」

俺が何したっつーんだよ……………」

もう全部終わりにしてくれエエエエエ！！！！」

「……………まあ、落ち着け」

霧崎は気の毒そうに手を置いた。

「落ち着けじゃねーよオメーらよオオオオ！！散々まくし立てて逃げやがって！！こっちは生死の境をさ迷ったつてのに、一足早い地獄旅行にゲートインだよ！？」

「まあまあ……次まで時間が無いっすよ」

「そつだ。次は……春風じゃないか」

白井と姫史はなだめるように声をかける。

「もう四の五の言ってる暇はありませんよ。あと二人なんだし、最後まで突っ走りましょう」

「ちょっと白井君！？突っ走っちゃうの！？ぶっ壊すんじゃないの！？」

「確かに……この際、グダグダ考え無いでそのまま突っ込んだ方が壊せるかもしれねーな」

白井の言葉に頷く霧崎。

「ま、考えるより行動すべきだ。行ってくるんだ」

「簡単にまとめやがって。

……分アったよ。もうヤケだ、やってやらア！！」

リンがそう言つと、銀時は頭を掻きながら立ち上がった。

〈商店街〉

「あ、銀時／＼／」

「よオ……………」

銀時が商店街に入ると、喫茶店の前に私服姿の千桜がほんのりと顔を赤らめて立っていた。

「では、行きましょうか／＼／」

「んだな」

流石に商店街という人目の多い場所……………まだ恥じらいがあるのか、千桜は銀時に並んで歩き出す。

「取り敢えず……………飯にしねえか？俺ア朝から何も食ってねーんだ」

「そうですね。だったら……………」

「ふむ……喫茶店か。度定番故にリスクも少ない。壊すのは難しいぞ」

「まあ、奴にも考えがあんだろ」

尾行五人組は銀時達の様子をこっそりと伺っている。

二人は喫茶店の前までたどり着いたようだ。

「しかし参りましたね。喫茶店に入られたら尾行がバレちまいますよ」

霧崎の言葉に白井が顔をしかめてみせる。

「俺も腹減ったな……」

「私も同意見だ」

「いやアンタ幽霊だろ……」

ロアルとリンが不意にそんな事を呟いた。

「仕方ねえ、俺達も腹ごしらえするか……」

「あ、んじゃ自分中華がいいです。先輩の奢りで」

「さりげにたかるんじゃねえ!!」

一同は喫茶店の近くの中華レストランに目を向ける。

「んじゃ、俺は麻婆豆腐よろしく」

「焦がし醤油炒飯、ラー油和えで頼む」

「味噌ラーメン、替え玉有りで」

「だから何で俺が奢る事になってんの!!? ちよつ、待てオメーらア!!」

霧崎の言葉を聞かずに、五人は中華レストランに入って行った。

カラン……

「こぼしちゃう」

銀時達が扉を押すと、男性（にしては高いが）の声が聞こえてきた。

「あら、ハルちゃんじゃない!!」

「こんばんわ、マスター」

現れたのは人の良さそうな男性であった。口調は何故か女言葉で額には十字傷が入っている。

「あら、そちらの方は……もしかしてハルちゃんの恋人かしら？」

「え、いや、その……」

“恋人”という言葉に千桜は真つ赤になって俯いてしまった。

「もう、ハルちゃんも隅に置けないわね

私はこの店の店主をやってる加賀北斗よ。えっと……？」

「あ、ああ俺ア坂田銀時つてんだ」

加賀の差しのべられた手を若干警戒するように握り返した。それもその筈、先程あんな目にあっているのだから。

「そう。ハルちゃんの彼氏の銀さんね。ま、座って座って」

「う……」

加賀は近くのテーブルに二人を案内した。

「それじゃ、メニューを承りましょうか？」

「私はアールグレイとサンドイッチを……」

「俺はパフェで」

銀時はメニューを開いて即答した。

「また……もう少し糖分を抑えるように医者にも言われてたじゃ無いですか」

「良いんだよ。俺アだから長生きするより短くても好きな事をして生きるって決めたからなア。」

人間、生きてるうちに出来る事なんて限られてますからね。そんな中でもやりたい事を精一杯できたらそれは上々の人生……僕はそう思います」

「どこのプロフェッショナルですか？」

「……でもダメですよ／＼」

千桜はそう言つとそつと銀時の手の上に自分の手をおいた。

「はい？」

「銀時がいなくなつたら……私が困りますから／＼」

千桜は赤くなりながらも真つ直ぐ銀時を見つめた。

「ラブラブね？もう妬けちやいそう」

「なっ！？／＼／」

ヒヨイと後ろから加賀が顔を覗かせる。

千桜は慌てて手を離れた。

「はい、パフェおまちどおさま。ハルちゃんは紅茶とサンドイッチね」

((早……?))

二人のテーブルにはいちごのパフェとサンドイッチが置かれた。

銀時は若干顔をひきつらせて耳に手をやる。

(オイ、テメーら！！何か知らねーけどヤベー雰囲気だから何とか…)

(白井)

『 いやアここの味噌ラーメンは中々ですね、どーぞ 』

(どーぞじゃねエエエ！！テメー何やってんだ！！)

(姫史)

『 お、その麻婆少し分けてくれ 』

(ロアル)

『 ああ、ならその炒飯も分けてくれよ 』

(姫史)

『OK。麻婆炒飯か、中々美味そうだな』

(オイ、中華か？中華レストランですか？コノヤロー)

(白井)

『食べ終えたらまたですよ。店内は任せます。んじゃ……』

(あ、オイ!!)

イヤホンはプツンと切れてしまった……

「銀時？どうかしたんですか？」

「いや……何でもねえ」

銀時はそう言ってパフェをつつきだした。
千桜も紅茶を啜った。

「そつえばこの間……」

*

カラン……

「「ごちそうさまでした」

「「ごちそうさん」

「じゃあねハルちゃん、銀さん。また来てね」

銀時と千桜は加賀に挨拶を済まして喫茶店を後にすると、再び商店街に出た。

(姫史)

『もしもし、聞こえてるか?』

(ああ、聞こえてらァ)

(霧崎)

『オイ、これからどうするつもりだ? 壊す方法はあんのか?』

(白井)

『喫茶店でも良い雰囲気でしたし……大変ですねえ (笑)』

(白井君? 楽しんでるだろ、お前絶対楽しんでるだろ)

(ロアル)

『まあまあ……とにかくどうにかしないと』

(そうさなァ……ん?)

銀時は千桜と歩きながら商店街を見回すとふとあるものが目に入っ

てきた。

(コイツだ……!!)

「銀時？」

「ゲーセンに行くか」

不思議そうに覗き込む千桜に銀時が言った。

(リイン)

『なるほど……!!その手があったか!!』

(霧崎)

『あん？どういつこった？』

(ロアル)

『分からないか？ゲーセンだぞ？』

(そう。デートでゲーセンに誘うような男は最低だ。
一般的に男はゲームが好きだが、女は大抵興味が無い。つまり……)

(リイン)

『男性がゲームにハマリ、女性はおいてきぼりになる現象が生じる。
最低のデートだ』

(霧崎)

『なるほど……それはキツイな』

(ロアル)

『しかも、最初に喫茶店という無難なスポットに入っただけにこの落差は強い……考えたな』

(姫史)

『いや、確か彼女は……』

しかし、姫史の言葉が伝わる事は無かった。なぜならその前に千桜が口を開いたからである。

「是非行きましょう」

「……あ？」

「この奥にオススメの……」

(アレエエエエエ!!?)

千桜はギュツと銀時の腕を掴むと、ズンズンとゲームセンターの中に引きずって行ってしまった。

(霧崎)

『……… オイ、何だアレは?』

(姫史)

『春風はゲームとかが得意な奴だからな……この作戦は裏目に出てしまったな』

*

「一通り（筐体は）回りましたね」

「オメーよくもつなア……最近のガキつてのは皆こつなのか？」

ゲームセンターの中では楽しそうな千桜と疲れた様子の銀時が出口に向かって歩いている。

「銀時もそういう世代ですよね？」

「俺達の時代はな、『ゲームは一日一時間』っていう暗黙の了解みたいなルールがあつてだな……」

そんな他愛も無い話をしながらゲームセンターを出ると、外はもうすっかり暗くなっていた。

「今日はありがとうございました。楽しかったです／＼」

「そうかい、そりゃ良かった……」

銀時はそこまで言って止めると、思い出したように額を押さえた。

(良くねえ……目的すっかり忘れてた)

やはりゲームセンターという場所は色々な意味でミスチヨイスだったようである。

「あの……明日はよろしくお願いします／＼」

「ああ……ミスったな。やっぱりアレだよ、ゲームは一日一時間だよ……」

千桜は独り言を呟く銀時に地図を手渡した。

「では、今日はこれで……／＼」

「って待て!!明日って何……」

銀時に礼をすると、真っ赤になりながら行ってしまった。

(悪い。完全に失敗し……)

(白井)

『あ、先輩あと一機しかありませんよ』

(霧崎)

『バカヤロー、一機あればこのステージは余裕だア!』

(姫史)

『あゝ、もうちょい右だ、右』

(ロアル)

『この辺か?』

(リイン)

『ふむ、縦はOKだ。後は横だな』

(ロアル)

『これ以上の金はかけられんからな。このクレーンで決めるぞ!』

ガヤガヤと聞こえてくる賑やかな声とゲームの音楽…

(楽しそうだな、オメーらよオ……………)

〈墓地〉

「では、行きましようか。銀時様／＼」

「待て待て待てエエエ!!何でいきなりこんな展開!?!いきなり場面をすっ飛ばしてんじゃねえ!!」

「……………」

日も完全に暮れた夜……

銀時は伊澄と一緒にいきなり墓地に来ていた。

(白井)

『何故かじゃ無いですよ万事屋さん。最後のデート場所は夜中の墓地じゃないですか……』

(いや何で墓地！？これもうデートでも何でもねえだろ！！)

銀時は周りを見回して顔をひきつらせる。

「銀時様、今日は付き合っていたありがとうございますノ
ノ今回は墓場の霊を鎮める単純な仕事です……」

「霊！？……ちょっと伊澄ちゃん？嘘だよ？冗談だよ？

アレだろ、本当はお墓じゃなくて反対側の商店街に行くんでしょ？」

「しかし、質の悪い霊もおります……気を引き締めて下さいね？」

伊澄は御札を数枚構えると、真剣な表情で墓地を見つめる。

「オイ……嘘だろ？ドツキりなんだよね？コレ！？」

「行きましようかノノノ」

「おかしくね？ちよっ、おかしくね！？」

伊澄は無言を言わず銀時の腕に抱きつくくと、引っ張って墓地の中

に入っていった……

*

「……銀時様？もしかしてこういう所は苦手ですか？」

「え？苦手？何が？意味が分からない」

「でも手が……」

銀時はしっかりと何かを掴んでいた。

「これは違えよ？お前が怖がらないように……」

「私の事を考えてくれるなんて……嬉しいですノノノノでも、その……銀時様が握っているのは私では無くて……」

「……………」

伊澄の言葉に銀時が恐る恐る横を見ると……

ドロドロ……

「……………おおおああ」

白い服を着て足が無い女性の手を握っていた。

「あゝあゝあゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝ！！！」

「……………！！！」

伊澄がすぐに懐から御札を取り出して、白い女性に放った。

女性はみるみる形が崩れていき、フツと消えてしまった……

「一体目完了ですね。流石は銀時様、霊を掴まえるなんて／＼／」

「霊じゃ無えスタンドだ！！」

……伊澄ちゃん？もう帰らない？いや別にビビってるとかじゃ無いよ？ただもうこんな時間だし家の人も心配してるんじゃない……」

「大丈夫です…その、銀時様となら一晩でも／＼／」

伊澄は顔を赤らめて再び身体を寄せてきた。

（オイイイイイ！！今回はかりは助けるオオオオ！！！！）

（白井）

『いやあ、ちよっと今こっちも大変で………』

(姫史)

『 貴様アアア！！姫になんて事をオオオオ！！！！』

(霧崎)

『 落ち着け！！ここは別世界だろ！？いいからその物騒なモノしまえ！！』

(姫史)

『 うぐおオオオオ……………』

(霧崎)

『 ったく……………アンタも何とか言ってくれよ』

(ロアル)

『 オイ、弥鉤……………誰に向かって話してるんだ？』

(霧崎)

『 誰って秋川さんに……………アレ？』

……………

(霧崎・ロアル・姫史)

『 ぎゃアアアアアアアア！！』

(白井)

『 おゝ、出た出た』

(リイン)

『 やれやれ……………』

「目の前に…」

「だあアアアアア！！！」

*

「大体終わりましたね…」

「……………あ、そう」

40分くらい経って、二人は墓地から出てきた。

「やはり銀時様は霊を引き付けやすいみたいですね。いつもより遙かに早く終わりました」

「そいつア良かったな…何よりだわ」

ぐったりと銀時は虚ろな瞳を空に向ける。

「今日は本当にありがとうございました／＼／＼銀時様と一緒にいられて…嬉しかったです／＼／」

「……………？」

伊澄は赤くなりながら銀時に近づいていくと、

「……………／／／」

背伸びをして頬にキスをしたのだ。

「な！？……………ん？アレ？身体が軽く……………」

「……………お礼です／／／」

銀時の身体が薄い光に包まれた。みるみる銀時は疲れが抜けていったようだった。

「で、では、明日……………お願いします！！／／／」

「明日……………って待て！！明日って何だ！？」

銀時が尋ねようとするが、伊澄は火がでそうなくらい赤くなってしまっただけで去っていく。

しかもいつの間にか銀時の手には地図が……………

「つーかオメーの家反対だろ！？

どこ行くんだ、オイ！！」

しかし、もうその姿は見えなくなっていた。

ガラ……………

「貴様ア……………」

「あん？」

後ろからボロボロになっている姫史が現れた。

「貴様アアアア！！なんて羨ましい事を！！私にも分ける、その幸せを！！！！」

「知るかアアアア！！」

姫史が銀時の首根っこを掴むと、ブンブンと揺すった。

「……………結局全部失敗したようだな」

「^{かみ}読者の思惑通りに運んだ訳か……」

続いて、ロアルと霧崎もボロボロになって出てきた。

「しかし、我々に全く変化が無いな……」

「皆さんが万事屋さんと約束した“明日”に関係あるんじゃないですか？」

最後に無傷のラインと白井がのんびり歩いてきた。

「そうだな……………オイ万事屋、明日って何だ？」

「俺が……………知るか！！」

「っ！かい加減どけ！！」

銀時は掴みかかっている姫史を払いのける。

「女性達から地図みたいなものを買っただろう？」

「ああ、言われてみりゃ……」

ロアルの言葉に銀時は先程買った地図を開いてみた。

パラ……

「……………」

出てきたのは何かのパンフレットと赤丸がついた地図。

そのパンフレットには大きくこう書いてあった……

『将来を誓い合う大切な時を……三千院ウェディング』

第六十五訓 例外ほど怖いものは無い（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「本日最初の質問『白井に質問。Sですか？』」

白井

「いや、特にSでは無いですよ。楽観主義というか、面白ければ何でも良いです。まあ結果的にそういう風になる時もありますけれども……」

銀八

「んじゃ、次な。『作者に質問。銀魂では何の長編が好き？』」

作者

「四天王篇ですね。一番好きです」

銀八

「続いての質問『サポート五人組に質問。もし銀さんの役回りが新八でも手伝ってた？』」

霧崎

「あのメガネか？」

まあ……俺達が巻き込まれてんならな」

ロアル

「射殺する」

霧崎

「何でだよ!？」

姫史

「生き埋めにする」

霧崎

「だから何で!？」

白井

「先輩は赤土じゃないとダメだそうですよー」

霧崎

「何俺にしようとしてんの!？違えに決まってんだろ!！」

リン

「秋葉はなあ……買い物をする所だアアアア!！」

霧崎

「質問に答えるオオオオ!！」

銀八

「忙しい奴等……ハイ次く」白井に質問。いつも霧崎をどんな風に邪魔したりしてんの?」

白井

「失敬な。先輩はとても尊敬できる方です(笑)

邪魔なんてとんでもない(笑)

いつも足を引つ張らないように精一杯頑張ってます(爆笑)」

霧崎

「……せめて（笑）を隠せ？」

銀八

「最後の質問な『銀さんに質問。サポート五人組は役に立ってる？』

……本編を見りゃ分かんたろ？」

「訳で、また次回」

第六十六訓 肝心なのは最初と最後（前書き）

クラウドの前書きの館！！

クラウド

「今回は妬羅舞流篇は完結ですな」

ハヤテ

「ようやくあの苦痛から解放されるんですね……」

伽藍

「次回からはいい加減に原作を進めないとなあ……」

クラウド

「では、始まりますぞ！」

第六十六訓 肝心なのは最初と最後

三千院ウエディングとは……

文字通り三千院家が受け持つ結婚式の事である。

式場から御客人のもてなしまで全て三千院が一流手配するという最高級の挙式……

ここで将来を誓い合えば、その幸せは遠泳のものとなるだろう……

「……だそうだ」

パタリとパンフレットを畳むと、姫史はベンチに座っている銀時を見る。

日付は既に翌日に……朝の9時になっていた。

「おかしい、おかしいコレは……だってまだ小説始まって一年も経って無えよ？なのに結婚って……」

「いや、かなり面白い展開になってきましたね」

「オメーだけな……？」

銀時は額に青筋を浮かべて深く溜め息をついた。

「全くだな……」

「ああ、腹立たしい事この上ない……」

ロアルと姫史も腕を組んで仁王立ちしている。

「全く理解出来ん……何故コイツが伊澄嬢と……」

「この際射殺しておくか……」

「オイ、落ち着け……ここは別世界だろ」

霧崎は溜め息をつきながら二人を制する。

「そうだな……恐らくこれに全てがかかっているのだろう。我々が元の世界に戻る方法が」

「またぶっ壊せってーのか？」

リンの言葉にうんざりしたように銀時は顔をあげた。

「いや、もう流れに任せるのが良いだろう。

成るようになると……」

「下手に動いて失敗つーのが今までの件だからな」

「いや、オメーら何にもしてなくね？」

リンと霧崎が勝手に頷いているのに銀時は呟いた。

「とにかく……式は6時からだ。二時間前には到着しとかねーとな」

「そうですね。正装は用意してありますんで……これに着替えて下さい」

白井は何処から持ってきたのか、スーツケースから紋付袴を取り出した。

「……………本当に行くのか？」

「覚悟をきめろ。大変不本意だが、ここまで来たらもう行くしかあるまい」

姫史もようやく落ち着いたらかと思うと口を開いた。

ポン……

「まあ、そういう事なんで」

「……………？」

最後に白井が銀時の肩に手を置いてニタリと言った。

第六十六訓 肝心なのは最初と最後

く三千院大聖堂く

デデーン!!!

という効果音が今にも飛び出してくるのではないか、
神聖で広大な聖堂が夕焼けの中に堂々と胸を張っているようだ。

その様子はあのキリスト教の総本山、^{サン}聖^ンピエトロ大聖堂を思わせる程である。

時刻は午後4時……

大聖堂前の広場には美しい夕日が射し込んでいる。
そこには大聖堂を呆れ半分で見上げる霧崎達。

「何度見ても金持ちの思考は理解出来ねーな…」

「全くですね。こんなもの造る暇があるなら自分達の給料を上げて欲しいですよね」

「サボリ常習犯のお前が言うな？」

そう言って霧崎は白井の頭を叩く。

すると、隣にいた姫史が大聖堂から目を離して口を開いた。

「早いとこ、新郎の待機室に行つた方が良いぞ」

「？」

「考えてもみる、今ここで彼女達が鉢合わせでもしたらー」

しかし、その言葉が最後まで続く事は無かった。
なぜならば……

「「銀時／＼／＼」

「「銀さん／＼／＼」

「銀時様／＼／＼」

「はッ!？」

六人の女性が聖堂から飛び出してきてしまったからだ。

「んじゃ万事屋さん、先に自分ら待機室に行ってますね」

「オイ待てエエ！！俺一人置いて逃げるつもりか！！あの地獄のよ
うな空気に一人放り込ませるつもりか！！」

「これもお前の蒔いた結果だ。精々死なぬようにな」

「オiiiiiiii！！！！」

姫史達はそう言って手をあげると、そくさくと建物の中に逃げて行
ってしまった。

ガバツ！！

そして六人が一斉に銀時に飛びついて来た。

「だああああアア！！？」

銀時は彼女達の波に無惨にも吞まれて沈んでいく……

「アラ、皆さん 今日は何の御用で？」

まずマリアが五人に先制を仕掛けた。ニッコリと微笑んで周りを見
る。

「私は結婚式に…… / / /

マリアさんは参列か何かですか？」

すかさずヒナギクが反撃に出る。

「いえいえ、私は結婚を……／＼勿論銀さんですわ」

「クラウドさんとの間違いじゃないですか？マリアさん」

今度はハーマイオニーが攻撃に出た。

「どういう意味かしら、ハヤテ君？（ゴゴゴゴゴゴ……）」

「ハーマイオニーですわ（ゴゴゴゴゴゴ……）」

二人は笑ってこそいるが背景のオーラがぶつかり合う。

「二人とも……見苦しいわ。銀時は私のものよ」

「桂さんにはもっとふさわしい人がいるのでは？」

グサツ！！

マリアとハーマイオニーの間に入っていったツラ子に千桜からの攻撃が炸裂する！

「銀時様は普段だらしがありませんからしっかり支えてあげられる方が一緒にないと……／＼／」

そう言って伊澄は赤くなりながら一歩前に出た。

「同感ですわ　しっかりと支えられないと」

続いてマリア達も前が出る。

六人は円上に向かい合う形となった。

暫しにらみ合いが続いたが、その沈黙を最初に破ったのはヅラ子であった。

「あらかじめ言うておくけど、銀時と結婚するのは私よ」

「残念ですが、銀時にプロポーズを受けたのは私です／＼
今日の結婚式は私と銀時のです！！」

ヒナギクも負けじと言い返す。

「他はどうか知りませんが、最初に銀さんにプロポーズを受けたのは私です！！／＼」

「あらハヤテ君？私はアナタより前にプロポーズを受けてますわ／＼」

「だからハーマイオニーですわ、マリアさん。歳を取ると物忘れも激しいんですか？（黒笑）」

「フッフ……（黒笑）」

ハーマイオニーとマリアは再度にらみ合う。

「醜い争いをこんな場所まで持ち込むなんて……銀時もそんな事は望んでいないはずですよ」

「御自覚が無いようで……その争いにはアナタも参加していますよ？」

千桜の言葉に伊澄もすかさず切り返した。

「……………」

ピリピリとした場の空気が一気に凍りつく。

六人の表情は先程とは異なって真剣なものになっていた。
そして誰ともなしに、皆が武器を取り出す。

ヒナギクは正宗、マリアは薙刀、ハーマイオニーは箒、千桜は鎖鎌、
ヅラ子は刀、伊澄は御札……………」

「銀時と結婚するのは私よ!！」

「残念ながら私ですわ」

「私が銀さんと一緒に新しい一歩を踏み出します!！」

「銀時は誰にも渡しません」

「私が銀時様を守ります……」

ここに、六人の対戦が勃発した!!

*

（待合室）

ガラ…

扉が開いたかと思うと、ボロ雑巾のような姿の銀時がヨレヨレと入ってきた。

「おお、意外に早かったな。外はどうなってる？」

「化物どもが暴れてら……」

銀時は六人の下敷きになって、散々踏みつけられた挙句、そこで喧嘩など始めたものだからもうボロボロであった。何とか隙をついて抜け出してきたが、この始末である。

「まあとにかく無事に出てこられたんだ。結婚式の流れを神父に説明して貰おう」

姫史が手招きすると、後ろから神父と思われる人が出てきた。

「いや神父っーか……それただの長谷川さんじゃね？」

「彼はこの三千院大聖堂の神父を勤めている長谷川泰三さんだ」

何と出てきたのは神父の格好をした長谷川であった。

「やあ銀さん。とうとう結婚か、おめでとつ」

「いやアンタ何やってんの？仕事は？ついこの間までダンボールと友達だったろ？」

銀時は長谷川に近づいていくと、呆れたように話しかける。

「ダンボール？ああ……そんな時期もあったな……」

「そんな時つてついこの間だからね？」

「マダオはもう昔の話さ……」

今は聖職者として日時精進してるんだ。この通り、カトリックに改宗したしね」

長谷川は誇らしげに胸を張ってみせた。

「しかも著作まであるんだ。ホラ……」

更に長谷川は手元から本を取り出して銀時の目の前に掲げてみせる。

『どん底からのキリスト教』人は必ず救われる』

という題名であった。

「……………」

「では、始めよう」

長谷川はそう言って、銀時に手招きしながら奥に歩いていく。

そして、姫史達も集めると長谷川は口を開き始めた。

「今日の結婚式の流れだけ…」

*

「はああああアア!!」

「くっ!!」

一方外では、ツラ子とヒナギクがつばぜり合いを繰り広げていた。

降り下ろされた刀は正宗に受け止められるが、元“狂乱の貴公子”の名は伊達ではない。

徐々にヒナギクが押されていく…

「ヒナギク殿……前々から思っていたがアナタとはキャラが被る。

剣が達者で堅物真面目、あまつさえ苗字まで同じ……！！

堅物キヤラは私一人で十分よ！！今すぐヤンデレキヤラに変えなさい！そして叶わない恋を嘆き、暴走して読者にドン引きされなさい！！」

「お断りします！！桂さんこそ滝にうたれて流転でもして、そのまま悠久の時を男でも女でも無い存在として一生生きて下さい！！」
今度はヒナギクが正宗で押し返す。

「……どうあっても私達は分かり合えないようね」

「そうですね……」

二人は一旦離れると、一瞬にらみ合い……

「銀時は私のものよ！！！！」

互いに飛びかかっていった！！

「はあ！！」

「っ！！」

こちらはマリアとハーマイオニー、千桜、伊澄の乱闘が激化していた。

「ハヤテ君、いい加減に諦めたらどうかしら？」

「ハーマイオニーですわ！マリアさん！！」

マリアが薙刀を振ると、ハーマイオニーは飛び上がったそれを避ける。

そのままハーマイオニーが箒を振り払う！

「相変わらず物忘れですかマリアさん！！銀さんと結婚するにはもう歳が召していらっしやるんじゃないですか？」

「まだピチピチの17歳ですわ！！」

しかしその箒をマリアは薙刀で切り返す。

「こちらも忘れて貰っては困ります！！」

「っ！？」

ハーマイオニーに向かって分銅が飛んできた。

何とか避けるもコンクリートの地面は無惨にも碎け散った！！

「千桜さん……！！」

「フフ……今はハルですよ」

ハーマイオニーが振り返ると、いつの間にかメイド姿となったハルが鎌を持って立っていた。にこやかに笑いながら鎖鎌を構えるその姿はホラーそのものである。

(くっ……挟まれた!!)

「ハルさん、ハヤテ君を倒すまでは一時休戦しませんか？」

「なるほど……良いでしょう」

二人のメイドはジリジリとハーマイオニーに歩み寄る。

「二対一とは……卑怯では無いですか？」

ハーマイオニーはグッと唇を噛みしめる。

「アラ、ハヤテ君ったら

恋の勝負に……」

「卑怯も何も無いですよ!!」

マリアが薙刀を振りかざし、千桜が分銅を降り投げた。

(ぐっ……!!)

万事休す……

かと思いきや、ハーマイオニーの周りは一気に光のドームに包まれた!!

「……!?」

マリアは押し戻され、千桜の分銅は弾かれた。

「伊澄さん……」

「鷺ノ宮さん……」

伊澄が御札を構え三人に向かってゆっくり歩いてくる。

「皆様……今ここで争っていても仕方ありません。もうすぐ式が始まります」

「「「!?!?!?!」」」

三人が時計を確認すると、時刻は午後5時を既に回っていた。

「どうでしょう？ 決着は式場で行けるといふのは……最後の決戦を……」

皆は黙って頷くと、武器を地面に降ろした。

*

「さあ、新郎は先に式場に……」

「ちよつ待てよ……え、マジで行くの？つーか何処で終了なのこの世界？」

廊下を長谷川に続いて歩いていく銀時達。

「もう諦める。ここまで来たらもう避ける道は無い」

「ま、ここはもう会場に繋がる廊下だからな」

姫史とリインは腕を組ながら他人事のように呟く。

そうこうする内に七人は大きな扉の前までたどり着いた。

「んじゃ俺らは会場の席で座ってらァ」

「後は頑張つて下さい、万事屋さん。成るようになりますよ多分」

霧崎達は銀時の肩にそれぞれ手を置くと、客席の方向に曲がって行つてしまった。

「成るようになるたつてよオ……」

「まあまあ銀さん、落ち着いて。一生の事だから緊張するのは分かるけどな……」

長谷川は苦笑しながら溜め息をついている銀時に振り返った。

「一生の事じゃなーよ……」
「瞬の出来事であって欲しい、いや一瞬のはずだ。自分を信じる、
ビリーブ」

「どうしたんだ銀さん？」

独り言のように呟く銀時に不信そうに尋ねる長谷川。

「ダンボールから聖職者って笑えねえ話だよなって思ってな」

「ほっといてくんない!？」

*

〈大広間〉

三千院大聖堂の広場は100m×100mというとても広い広さ

であつた。
しかも満席という状況……

「……………」

この光景に驚きを通り越して呆れ返っていた。

「やあ銀さん。遂に結婚式だな、幸せ絶頂か？」

「……結婚おめでとございます、銀さん」

最前列のナギが銀時に近づいて来た。
隣にはワタルとサキもいる。

「何が遂に幸せだよ。地獄への入口の間違えだろ」

「ハハハ……」

苦笑混じりのナギとサキ。
すると今度はワタルが一步前に出てきた。

「おお、ワタルじゃねえか……」

（現実時間でいうと）久しぶり……」

「銀さん……」

ワタルはグッと銀時を見据えると……

「未永くお幸せに！！チクシヨオオオオオオオ！！！！」

「あ、若！！」

ワタルは叫びながら出口に走って行って、サキも慌ててその後を追って行ってしまった。

「どうしたんだアイツ…？」

「哀れワタル……」

ナギは憐れみの目を出口に向けた。

「もう始まるみたいだな。

じゃあ、頑張つて銀さん」

「何を…？」

ナギはそう言って片手をあげると、席に戻っていった。

（10分後）

「そろそろ新婦の入場です。皆さん拍手でお迎え下さい」

司会のクラウスの言葉に客席からは割れんばかりの拍手が広間いっぱいに鳴り響く。

ギィ……

「んな!？」

ゆっくりと扉が開くと、ウェディングドレスを着た女性四人と元男性二人の計六人が姿を現した。

(アイツらいつぺんに来やがったアアアアアアアアアアアアアアアア!!！)

銀時は驚愕して思わず後退りするが後ろの壁にぶつかってしまふ。

「では、新婦は前に……」

「何で普通に神父してんの!？」

「つか何で周りの奴等も普通に拍手してんだよ!？」

銀時のツツコミも盛大な拍手の音にかき消されてしまふ。

そして、六人は遂に銀時の前までたどり着いた。

六人は横一列に並ぶとハーマイオニーが代表して一步前に出た。

「銀さん。私達、皆で話し合って平和的にいこうって決めました」

「そ、そうだよな。平和が一番大切だと俺も思うよ?」

「ええ、だから銀さんは一人のものにしないで……私達皆のものに
しす事にします」

ハーマイオニーはニツコリと笑ってそう言った。

「……あのハヤテ君？皆のものとかそういう意味じゃー」

「銀さんを皆で平等なものに。良い考えでしょう？」

今度はマリアが手を合わせて言った。

「いやでも身体は一つしか無いし、そういうのは無理なんじゃ無いかな？」

「大丈夫、皆で分けてチャエバ良インデスヨ」

「……………え？」

ハーマイオニーの口から聞き取れない……………いや聞き取ってはならない言葉が発せられた。

「だ・か・ら……………」

そう言うと六人は一斉に“何か”を後ろから取り出す。

「均等に銀さんを分割すれば、皆幸せになれるって事ですよ？」

「……………」

銀色の刃、ギザギザと尖った突起、歯痒い摩擦音……………それは紛れもなくチエーンソーであった。

「いやいやいやいやいやいやい、イイイイイイや、アアアアアアア

アアア！！

待て、ちよつと待てエエエエ！！」

チエーンソーを構える六人に手を思いきり振りながら叫ぶ銀時。

「おかしい！！いくらなんでもおかしくなってるよ君達は！！

それは解決策じゃねーだろオ！？

大体ここ結婚式場だよ！？人々を幸せにする場所だよ！？そんな神聖なる場所で…」

「皆幸せになれますね？」

全く躊躇いの無い笑顔を向ける六人。

「オイイイイイ！！助けー、！？」

銀時は姫史達に助けを求めようと振り返ったが、なんと五人はただその光景を眺めてニタリと口元を歪めていた。

「…………ま、まさかオメーら…………」

「ようやく気付いたか」

姫史は嘲笑うかのように微笑すると、続けた。

「そうだ。我々は最初から貴様の味方でも何でも無かったんだよ。なぜなら我々は…………」

他の四人もニヤリと笑って…

「『『『『異世界こしちの人間だからだ……！！』』』』」

その発言に銀時は頭上に雷が落ちたような衝撃を覚えた。

「ハメやがったなアアア！！！」

銀時は周りの客席を見渡した。

すると、会場の拍手が再び鳴り響き始めた。

（ああそうか……もうこの世界に味方なんて一人もいないのか。
この世界全てが俺の敵……）

「冥土の土産に教えてやろう」

愕然と立ち尽くす銀時に追い討ちをかけるように姫史が口を開いた。

「読者かみの願いはハッピーエンド等では無い。

ハーレムの悲惨な末路さ……」

そう。全ては彼らの策略。

完全に銀時はこの五人の手の平で踊らされていたのである。

ガクリと膝をつく銀時。

そして六人はチェーンソーを持ったまま銀時にゆっくりと寄ってくる……

「いかなる時も彼を愛し生涯を共にする事を誓いますか？」

「『『『『誓います？』』』』」

「……………」

目を見開いて周りを見回す。

そこはいつもの見慣れた自分の部屋……万事屋である。

「ゆ、ゆ、夢か……………」

とんでもねえもん見せやがって……………いやあ、別にビビってねーけど
ね？」

冷や汗を拭くと、ゆっくりと立ち上がって引き戸を開けた。
勿論そこは見慣れた万事屋の広間である。

ピンポーン……………」

「ん、客か？神楽アー、新ハイー！！客だぞ」

しかし返事は無い……………」

「んだよ、アイツら出掛けてんのか？」

銀時が時計に目をやると、時刻はもう正午であった。

ピンポーン……………」

「へーい、今出ます」

銀時は玄関まで歩いていくと、扉に手をかけた。

ガラ……

しかし……

彼の目に飛び込んできたのは、ギザギザの突起がついた銀色の刃が六つ……

そして六つのとびきりの笑顔……

「もう、目を覚ましたらバラバラに出来ないじゃない？」

「何でー」

銀時の言葉が最後まで続く事は無かった。
なぜなら、かき消されてしまったからだ……

六つのチェーンソーの音に……

今度八逃ゲチヤダメダヨ？
ア・ナ・タ？

第六十六訓 肝心なのは最初と最後（後書き）

銀時

「ぎゃああああああアアアア！」

銀時は小説の下書きを蹴り飛ばした。

伽藍

「わあ！？いきなり何するんですか銀さん！！」

銀時

「オメーは何つーもん書いてんだア！！何で最終的にホラーになつてんだよ！？これから苦情の感想殺到してくるよコレエ！！！」

伽藍

「いやあ、やっぱオチは銀魂らしくってね？」

銀時

「どこがらしくだよバカヤロー！！訳分からねーラストにしゃがって……」

伽藍

「いやいや、実はこの妬羅舞流篇。このタイトルに物語りのヒントが隠されていたんですよ」

妬……嫉妬

羅………修羅場

舞……乱舞
流……流刑

伽藍

「ほらね？」

銀時

「知らねーよ！！んな設定！！
つーかあの後銀さんはどうなったんだよ！？」

伽藍

「質問コーナー行きまーす」

銀時

「オiiiiiiiiiiii！！！！」

教えて！！銀八先生

銀八

「つてやってる場合じゃねエエエエエ！！銀さんはどうなったんだ
ア！？？」

新八

第六十七訓 経験は良くも悪くも成長の糧（前書き）

クラウドの前書きの館！！

クラウド

「前回のラストは色々と反響が大きかったですな」

ハヤテ

「不快だとかいう意見もありましたよね」

伽藍

「良いんだよ。ほとんどの方が良かったって言って下さったから。そういう人には言わせておけば良いの」

クラウド

「まあ、一々反応していたらきりが無いからな」

ハヤテ

「で、今回はどんな話ですか？」

伽藍

「原作の話ですね！ここから原作をちよくちよく進めたいと思います。無論出来ない話の方が多いけど…」

クラウド

「確かに、ナギお嬢様と一樹殿の話ももう知り合っているから出来ないし、ハヤテが桂お嬢様の所に泊まる話も出来ませんからね」

伽藍

「あの超フラグイベントがね。

まあ、他の巻からも話をいれて

ヒナ祭篇に繋いで行きたいとは思いますが。なのでヒナ祭篇は恋愛とかそういうのは皆無になると思います。

しかし、あの人が遂に登場します！！乞うご期待下さい！！」

クラウド

「あの人はですか……遂に物語が動き出しますな……」

ハヤテ

「因みにヒナ祭篇はいつからですか？」

伽藍

「もう少し先の予定」

クラウド

「では、今回の話をどうぞ……！！」

第六十七訓

経験は良くも悪くも成長の糧

少女は知っている……

ナギは漫画雑誌を手にとると、目を閉じる。

世の中にはお金で買えないものがあるという事を！

バツ！！

そして思いきり開くと……

「ぬああああああ！！！！」

ナギの叫び声は屋敷中に響き渡る。

ガチャ！！

「お嬢様！？一体何が……！！」

「ナギちゃん！？大丈夫！？」

叫び声を聞きつけ、ハヤテと新八がナギの部屋に飛び込んできた。

「「うわ！？」「」

すると、無惨にも破り捨てられた漫画が部屋中に舞っていた。

「お嬢様、これは……漫画誌？」

「人生経験が足りないからだそうだ……」

ナギは二人に背を向けたまま口を開く。

「……………ん？」

新八が一つの紙切れを拾うと、そこには「やはり面白いマンガを描くには豊かな人生経験が必要！！」と書かれていた。

「まんがで何の賞もとれないのは……人生経験が足りないからなんだそうだ！！」

そんな漠然としたアドバイスで、新人が育つかアアアア！！！！」

「そんな事僕らに言われても……？」

ナギの言葉に二人は苦笑しながら顔を見合わせた。

第六十七訓

経験は良くも悪くも成長の糧

「ま、アレはいつもの病気みたいなものですから。気にしないで下さい」

「はあ……」

「何ヶ月に一本マンガを描いて投稿してるんですけど、全然かすりもしなくて……」

昼御飯の席でマリア達が先程の事について話し合っていた。

「マンガ投稿してるアルか！！
凄いアルな〜」

「でも何だか不憫ですね…ナギちゃん」

神楽と新八も各々な反応を見せる。

「それでも無いですよ。お金ではどうにも出来ない事があるという事を学べるので…私は良いことだと思っていますよ」

「なるほど……確かにそうですね」

マリアの意見に感心したように頷くハヤテ。

「ところで……銀さんはどうされたんですか？」

「ああ、今は依頼の方が挨拶と報酬を払いに来てて…」

「まあそうですね。どんな依頼だったんですか？」

「いやあ、それはまあ……」

あ、この料理特に美味しいですね！」

新八はバツの悪そうな表情をすると、お茶を濁した。

「聞かない方が良いアル。男なんて皆最低ネ」

「……?」「」

マリアとハヤテは首を傾げて顔を見合わせた。

*

「……………」

一方ここはナギの部屋。

ナギは黙ってベッドに横になっている……

（確かに……人生経験は足りない気がする。友達は少ないし、学校もあまり行かないし、スポーツもしない。かといって生活には困らないし、毎日ダラダラしていても何とかかなるといふ……）

ダメ人間街道まっしぐらである。

（……………ぐっ!!）

ナレーションに思わず身を固めるナギ。

（こうなったら……同じようなダメ人間に話を聞いてみよう!）

ナギはガバツと起き上がると、部屋を飛び出して行った。

「万事屋」

「いやあ、この度は本当にありがとうございます」

「いやいや、大変だったねえお宅も……」

玄関を挟んで銀時とスーツの男が話し合っている。

「もう二度と浮気なんてしませんよ……寿命が縮むかと思いました」

「ま、浮気は男の甲斐性なんて言うが嫁さんにバレちゃシメーだぜ？」

銀時は欠伸を噛み殺して男に言った。

「本当に、本当にありがとうございます」

「へえへえ、次も万事屋をよろしく」

「勘弁して下さいよ？」

男は困ったように笑いながらそう言うと、階段を降りていった。

「……………」

銀時は見送ると、室内に戻って椅子に座った。

そして懐から依頼料と思われる包みを取り出す。
厚さからみるに中々の額である事が伺える。

「ひい、ふう、みい……………ヒヤッホウ。流石は一流IT会社の社員だ。
浮気揉み消しただけでこの分厚さだ」

「浮気揉み消しとは……………万事屋ではそんな事までするのか、銀時」

「!?!?」

前の引き戸にいつの間にかナギが立っていた。

「んだナギか……………驚かすんじゃないよ。

万事つーからな……………頼まれりゃ何でもやるさ」

「まあそんな事は良い。それより今日は聞きたい事がある」

「あん？」

ナギは腕を組んで寄っ掛かりながら銀時を見上げる。

「万年金欠で死んだ魚のような目のダメ人間代表である銀時に聞きたいんだが……………」

「本人の前で言うんだソレ」

「豊かな人生経験ってどうすれば培われるんだ!？」

ナギはグツと身を乗り出して銀時に尋ねた。

「……………何言ってるのお前」

「今の私にはそれが必要なのだ!! 早急に手を打たねば……………」

そのままソファに座ると、右手を握りしめた。

「だから何なんだよ?」

「何と云うか人生を振り返ったときに、あまりに人生経験が無いアしだろ。そこで、ろくな人生を送って無いであろう銀時に色々なエピソードを聞きたいと思ってな」

「お前さあ、人を傷つけて楽しい? 銀さんのハートはガラス細工のように繊細だからね。触れれば散ってしまいそうな儂さを兼ね備えて……………」

「で、何か普通の人が体験した事がないような経験は?」

「話を聞けエエエエエ!!!」

ナギには全く話が通じていないようである。

「とにかく今は何かの体験談が必要なのだ。豊富な人生経験を培うために」

かい合った。

「感心したぞ流石はナギ殿。己の人生を振り返り成長の為に人生経験を積もうとは……
それでこそ侍だ」

「侍じゃねーよ」

「人は過去を見つめ直す事は中々出来ねものだ。そこから過ちを見出す事は尚更だ。しかし、そういう道を通ってこそ夢にたどり着けるというもの……
人生経験を積むことは遠回りしているようで実はもっとも近道だったりするのだ。」

武士たるものそれを常に肝に命じていねばならん」

「いや武士でもねーから」

ナギの声は全く届いていないのか、桂は腕を組んで続ける。

「曲がらない一本の信念を伸ばし続けるのも良いが、それを助ける数本の芯があれば人間はより高みを目指す事が出来る。それが総じて人生の糧となる。土道も然りだ」

「他の数本の芯……?」

ナギは桂の言葉を口に出して反芻すると首を傾げてみせた。

「珍しくまともな事言っじゃねーかツラ」

「ツラじゃ無い、桂だ」

桂は咳払いすると再びナギを見る。

「要するに普段して無い事をやってみる事だ。人間は出来る事が限られているからな。悩むより行動した方が得られる経験は大きい」

「普段していない事……？」

「何、簡単だ。どんな事でも良い。物事を違う観点から見ることが大切なのだ」

桂は一人でうんうんと頷いている。
するとナギがスクツと立ち上がった。

「違う観点か……なるほど。」

ならば私は早速人生経験を積もうと思う!!」

「……………何をすんだ？」

銀時は少し訝しげにナギを見上げる。

「今から二人に料理を作ってやろう!!」

「!?!」

「ほう……………」

ナギの言葉に二人は全く反対の反応をした。

銀時はひきつった表情、桂は感心したように頷く。

「ナギ殿は料理が出来るのか。その年にして大したものだ」

「フツ、私に不可能は無い」

ナギはキッチンに向かって歩き出した。

「ちよつ待て、早まるな!!」

んなもんオメー爆発オチが目に見えてんじゃねーかア!!」

「誰が爆発オチだア!!私がそんなハマするか!!
見ている味皇さまの生まれ変わりである我が実力を」

銀時の静止も聞かずナギはキッチンに入っていく。

「オメーは余計な事を……」

「む?どうしたのいのだ銀時?」

「良いから止めんどぞ」

銀時は桂を掴むとキッチンへ追って行ったが……

……

ドオオオオオオオオオン!!

時既に遅し……

「どうしたんですか！？今とんでもない音が……！？」

大きな爆発音が響いたすぐ後に、ハヤテが万事屋に上がって来た。

「これは……一体！？」

万事屋からはもの凄い黒煙が立ち上ぼり、大きな穴が空いていた。

「あ、ハヤテ……ケホツケホツ！！」

「お嬢様！？」

玄関から咳をしながら出てきたのはナギだった。

「どうしてお嬢様が！？大丈夫ですか！？」

「ハヤテ……」

「はい？」

ナギはキッチンの方向を見ながら呟いた。

「料理は……危険だ」

「……………料理したんですか？」

その後……

万事屋のキッチンで丸焦げになって倒れている二人が発見されたそのうな。

*

「なるほど……それで料理を？」

「うむ。普段やらない事やって人生経験の経験値を稼ぐのだ！」

ナギとハヤテは取り敢えず屋敷の前までやって来た。

「でもお嬢様だって、人生経験は豊富だと思いますよ。13歳なのに飛び級で高校生をやっていたり、こんな大きな屋敷に住んでいた……こんな経験中々出来るものではありませんよ？」

「そ、そうか？」

「ええ！」

ナギは少し嬉しそうにハヤテに尋ねるとハヤテはしっかりと頷いた。

「因みにハヤテは13歳の頃何をやってたんだ？」

「そうですね……麻雀の代打ちとかまんが賞をとって賞金稼いでいたりしてましたよ」

「……………！！！」

ナギはピシッと動きを止めると、ワナワナと震え始めた。

「あの……お嬢様？」

「やはり経験の差が戦力の決定的な差か！！！」

ナギはそう叫ぶと、グッと拳を握りしめた。

「更に普段やらない事をして……経験値を上げてみせる！！！」

「なら毎日学校に通ってみるといのはどうでしょう！？」

「却下だ！！！」

ハヤテの提案はもの一秒足らずで却下された。

「な、なぜ……？」

「そんなスライムレベルの経験値ではたかが知れている。私の望みははぐれメタ 級の経験値だ！」

「はぐれメタ 級の経験値ですか……………？」

「うむ！だから私は普段一番やらない事として、マリアのお手伝いをする！……！」

ドーン……！

（屋敷）

「え……お手伝いですか……？」

「へえ、偉いですねナギちゃん」

そんな訳でナギ達は屋敷の広間にやって来ていた。

マリアは明らかに結果が見えているだろうという表情をしている。

「うむ、任せる。だから何でも言ってみてくれ！」

「え……」

「ハハハ……？」

（どうしたんですか？ナギちゃんが進んでお手伝いするなんて良い事じゃ無いですか）

困ったような二人の様子に新八がコソコソ話で尋ねる。

（いや……まあ、その……お嬢様は）

「では、早速屋敷の掃除を手伝うぞ!!」

ハヤテが言い終わらない内に、ナギは箒を片手にそう宣言した。

「あ、ちょっとナギ!!」

「たあ!!」

ガシャーン!!

早速立て掛けてあった高そうな皿がナギの箒にぶつかり、棚の上から落下し砕けた。

「う……うむ、ちょっと失敗。

でも次は何とか……」

ナギは再び箒を持ち直すと…

「たあ!!」

パリーン!!

「とお!!」

ガシャーン!!

「てや!!」

バリバリ!!

「せやー!!」

ガラガラガツシャーン!!!

状況は効果音から想像して下さい。

「ハヤテくん……」

「わああああ!? ナギちゃんストップストップ!!」

「お嬢様!! 止まって下さい!!」

涙目になっているマリアの言葉に二人は何とかナギの暴走を止めた。

「ハヤテ……やはり経験しないと分からない事があるな」

「……何がですか?」

ナギはメチャクチャになった部屋を見渡した。

「掃除は散らかる」

「貴重な体験ですね?」

*

「うむ。しかしこれで掃除はマスターしたし…次は定春の世話だな」

「……………定春の世話ですか？」

「定春とはあまり遊ばないからな。これを機会にもっと仲良くなる
うと思つて」

「なるほど……」

あ、定春……と神楽さん」

庭に出ると、定春が二人の前に寄つて来た。
上には神楽が乗っかっている。

「どうしたアルか？その格好」

「ああ、実は……………」

ナギのメイド姿を見て不思議そうな顔をした神楽にハヤテはいきさ
つを説明した。

「そうだったアルか」

「うむ。で、定春の世話をしたいんだが……………なついてくれるかな？」

「大丈夫アル。私とナギはCVも同じだから直ぐに仲良くなれるヨ」

「神楽さん、そういう発言は後書きにして下さい?」

ナギは恐る恐る定春に近づいていくと、ゆっくり触れた。

「クウン」

「あ、定春も嬉しがってるみたいヨ」

「そうか!よしよし…」

ナギが撫でてあげると定春は気持ち良さそうに鳴いた。

「お嬢様凄いいじゃないですか!!
流石ペットの扱いは上手ですね」

「まあな」

タマとシラヌイを育ててきただけあって、動物には好かれ易いよう
だ。

「だったら今度はコレアル!」

「……?」

神楽が取り出したのはfrisbeeであった。

「よし、行くアルよ定春!!」

「ワン!」

神楽が思いきりfrisbeeを投げると、定春がソレを追って走りだ

した。

「ワフー!!」

そして、飛び上がると空中で見事フリスビーをキャッチした。

「「おお〜!!」」

「ワン!!」

定春はフリスビーをくわえたまま、神楽達の所に走ってきた。

「よしよし、良い子だよ定春」

「クウン」

神楽は優しく定春を撫でてフリスビーを手にとった。

「ナギもやってみるネ!」

「うむ! そうだな」

ナギは神楽からフリスビーを受け取ると、定春を見て言った。

「よし、いくぞ定春!」

「ワン!!」

「てや!!」

ナギが思いきりフリスビーを放ると、定春が先程と同じように追いかけていった。
しかし……

「あれ？お嬢様、フリスビーが変な方向に……」

「どンドン曲がってくアルな」

ナギの投げたフリスビーは真っ直ぐ飛ばずにどンドン流されて行き、当然追っている定春も……

「って、アレ屋敷の方向ですよ!？」

ガラガラガツシャーン!!!

ハヤテが気付いたように言った瞬間、窓が粉々になるような音が響いた……

定春が屋敷に突っ込んでしまったのである。

「……ハヤテ」

「は、はい？」

「フリスビーは意外と危険だ」

「勉強になりましたね？」

ハヤテはこれを見た時のマリアを想像して頭を抱えた。

*

「よし、次は洗濯だな」

「はあ……洗濯ですか」

「うむ。洗濯といえばこんなトリビアを聞いた事がある」

「トリビア？」

↳洗濯場↳

「猫は洗濯機で洗え」

違います。

二人目の前には大きな洗濯機。そしてその中にはタマが入れられていた。

「スイッチを入れると小説が終わってしまうような絵づらだ……」

「分かっているならやらないで下さい!!」

「よ……よし!! 気をとり直して次は皿洗いだ!」

「ま、まだやるんですか?」

「ううして……」

「キヤー!!」

「ガシャーン!!」

「ぬはー!!」

「ドカーン!!」

三千院家に悲鳴と破壊音がこだまし続け……

それが収まった頃……少女はふと気がついた。

「うむう……」

ナギはズタズタになった大きな花壇を見ながら呟く。

「もしかして私は役に立っていないのでは……」

(ようやく気付いてくれましたか……)

ハヤテは苦笑いをしてナギを見た。

「ま、人には向き不向きがありますし……何でも上手く出来る訳ではありませんよ」

「それはつまり……」

ハヤテの言葉にナギは苦虫を噛み潰したような表情をする。

「私には…マンガを描く才能が無いかもって事か？」

「え？いやそんな…」

「考え無かったわけではない!!」

ナギはギュツと拳を握りしめる。

「もしかしたら…もしかしたら…もしかしたら万が一、億が一、あり得ない事だが地球が爆発すふ可能性くらい無い事として!!」

「……………?」

「賞がとれないのは……私に才能が無いからなのかもって…」

「お嬢様……………」

目にいつぱいの涙を溜めてそう呟くナギ。

するとハヤテがゆっくりと肩に手を置いた。

「大丈夫。見て下さい」

ハヤテの手につられてナギも顔をあげると、そこには銀時、桂、マリア、新八、タマの姿。

「お嬢様が手伝ってくれたおかげで、皆さんあんなに満足気な表情に……」

「目が死んでないか？」

ナギの言う通り全員が目の中の惨事にただ呆然としていた。

「せつかくの依頼料が……万事屋の修理代に……」

「情けない。それくらいでへこたれるな銀時」

「死ねツラ」

「ツラじゃ無い桂だ」

包みを見て頂垂れる銀時と隣で腕を組んでいる桂。

「^{これ}屋敷、どうしましょう……」

「今から片付けたら……ハハハ」

屋敷とその周辺を見て最早どうすれば良いのか困り果てているマリ
アと新八。

「久々の出番だったのに……」

夕焼けを寂しそうに見つめるタマ。

「……………」

ハヤテは言った事を失敗したなと暫く黙りを決めようとしたが、ふと気付いたようにナギを振り返った。

「いや、お嬢様のマンガはもしかしたらレベルが高すぎなのかもしれないよ!?!」

「レベルが高すぎ!?!」

「そ、そうですね!?!お嬢様は実は経験が豊富すぎて、その面白さが伝わりにくいというか……」

「な、なるほど!?!」

ハヤテの考え（苦し紛れ）に嬉しそうに反応するナギ。

「ではレベルを少し抑えれば……」

「そ、そうですね!?!今度こそ賞がとれますとも!?!」

「よーし!?!ならもう一度頑張ってみるか!?!」

「その意気ですお嬢様!?!」

がぶっ!

「アレ？周りが真っ暗に……
あ、痛い……って定春噛んでる噛んでる……」

急にハヤテの視界が真っ暗になったかと思うと、定春がハヤテの上
半身を包んでいた。

「どうしたアルか？嬉しそうアルな」

「見ている神楽！今に平成の手塚先生が誕生するぞ！」

ナギはそう言って腕を空高く振り上げた。

*

「どづだー!？」

「……………」

「メツチャ面白いアル！」

ナギが描いた漫画を見るハヤテと神楽。

「そうだろそうだろ」

神楽はキラキラした目でソレを読んでいるが、ハヤテは……

(相変わらず……レベル高エエエエエ！！！)

「これで次の新人賞は貰ったな！！」

「え、え」と……」

執事の苦悩は続くばかりであった……

因みに、屋敷とその周辺のメチャクチャはマリアを始め銀時、新八、桂（無理矢理銀時が手伝わせた）によって何とか片付けられたという……

無論、銀時と新八は翌日動けなかったそうだ……

第六十七訓 経験は良くも悪くも成長の糧（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「いや、無事に銀さんが生き返って良かったな」

新八

「そもそもあの妬羅舞流篇ってなんだったんですか？」

神楽

「作者の悪ふざけアルな」

銀八

「まあギャグなんてそんなもんだろ。つー訳で最初の質問『銀さんに質問。バレンタインにチョコ貰えた？』」

………うるせエエエエ！！！」

銀八は質問の紙をビリビリに破り捨てた。

神楽

「銀ちゃんみたいになちゃらんばらんが貰える訳無いネ。勿論ダメガネは言うまでもないアル」

新八

「うるせえんだよオオオオオオオオ（泣）」

銀八

「テメーは黙って向こうで白米でも食ってるクソガキ」

ナギ

「荒んでるなあ……」

ハヤテ

「まあまあ……喧嘩皆さんしないで……」

銀八

「オメーは黙って他のフラグでも立ててろ」

新八

「ハヤテ君に僕達の気持ちはわかりませんよ……」

ハヤテ

「誰がハーレムですか！？誤解を生む発言は止めて下さい？」

銀八

「次の質問『姫史とロアルに質問。前回のラストをみてどう思った？』」

姫史

「ハーレムがいかに恐ろしいか良く分かった。ああはなるまい」

ロアル

「歴代のモテ主人公達も裏では相当な苦勞をしていたんだろうな。まあ、同情は出来ないが……」

銀八

「だってよハヤテ」

ハヤテ

「何故僕に言うんですか!?!」

銀八

「続いている質問『マリアとナギに質問。ハーマイオニーは目の保養になった?』」

ナギ

「似合ってたからな」

マリア

「似合っていましたからね」

ハヤテ

「いや質問がおかしいでしょ!?!」

ナギ

「私は元の世界でもアレで良いぞ?」

マリア

「まあ、趣味は人それぞれですから?」

ハヤテ

「趣味じゃ無いですから!?!作者の悪ふざけですよ明らかに!?!」

銀八

「次な」『銀さんに質問。妬羅舞流篇の女性六人の中で一番怖かったのは?』

……………ハヤテ」

ハヤテ

「何ですか!?!」

銀八

「地獄に出入りしているから」

ハヤテ

「それは向こうの世界の話ですよ!?!」

銀八

「ハイ次々『銀さんに質問。あの六人の中で一番まともだったのは?』」

……逆に聞こう。まともな奴がいたか?

んじゃ、最後の『作者に質問。銀魂とハヤテのごとくの中で好きなキャラを三人教えて』」

伽藍

「前回も同じような質問がありました。実はあれから随分考えが変わっています。三人はズバリ……」

1・坂田銀時

2・春風千桜

3・神楽

伽藍

「以上です!?!」

ナギ

「全然変わって無いではないかアアアア!?!」

伽藍

「ぐばぐばっ!?!?」

銀八

「つー訳で、今日はここのまで」

新八

「次回もよろしく願います!?!?」

第六十八訓

しつこい奴ほど邪険にすると後が怖いノノ最近は成人式に行か

クラウドの前書きの館!!

クラウド

「今回は二本立てですな」

伽藍

「いやあ、最初の話ではどうしてもやっておきたいイベントがあったので。後の話は最近出番が無かったキャラをこの辺で出しておきたかったもので……そんな感じで二本立てになっちゃいました」

ハヤテ

「では、始めます!」

第六十八訓

しつこい奴ほど邪険にすると後が怖い／＼最近は成人式に行か

ゝ万事屋ゝ

「お嬢様アゝ！！今日は何がなんでも学校に行ってもらいますうう
う！！」

「いゝやくだアアア！！」

万事屋では只今、ハヤテとナギの鬪いが繰り広げられていた。
ギョツと広間の柱にしがみつクナギを何とか玄関に連れ出そうとするハヤテ。

「今日休んだら今週一回も体育に出なかった事になりますよ！！」

「そんなの知るか！！」

私は今日天 鳳の魂を手に入れるのだ。父の亡き魂を越えなくては
ならないのだゝ！！」

「ダメです！！フュージョンよりもまず体育です！！」

「ぬああああ！！」

ナギは尚も柱から離れまいと必死に抵抗を試みる。

「……………つーかよオ。オメーらここで何やってんだ。喧嘩なら屋敷
でやってこい」

その様子を椅子に座って眺めていた銀時がようやく口を開いた。

「喧嘩じゃありませんよ！！銀さんも手伝って下さい。お嬢様を学校に行かせないと……！！！」

「銀時！ダメ人間のお前ならサボりたい気持ちがあるだろ？」

私は一刻も早く天 凰とフュージョンしなくてはいけないのだ。

父の想いを継ぎしフュージョン……これ以上大切な事があるか！」

「朝っぱらからギャーギャー騒ぐなガキ共。アレだろ…オメーらがフュージョンすりゃ万事解決だ。分かったらさっさと合体して外に行け」

「止めてくれませんか！？その卑猥な表現止めてくれませんか！？」

「ハヤテと……合体！？／／／」

ナギは途端に真っ赤になって柱から手を離した。

その隙をハヤテが見逃す筈も無く……

ガバツ！！

「なあ！？／／／」

「じゃあ、お嬢様！！！」

ハヤテはナギをお姫様抱っこの要領で抱えると、二つの鞆を持って玄関に歩いていった。

「は、ハヤテ！！／／／お前こんな大胆な……！！／／／」

「大胆でも何でも、今日は学校に行ってもらいますからね？」

「いや！？その格好が…／／／」

しかし天然ジゴロのハヤテにはナギの考えは何の事かさっぱりである。

「まだ間に合います。このまま登校しますよ！！」

「うわあああ！！／／／ハヤテのバカー／／／」

そのまま二人は万事屋から消えていった。

「……………はあ。アイツらのせいで完全に目が覚めちゃった。

「っ風呂浴びてくつかア……………」

銀時は大きく伸びをすると、着替えを持って風呂場に歩いていく。

「……………ん？」

すると、風呂場の前に何やらDVDのケースとROMが落ちていた。どうやら先程の騒ぎでナギが落としていったようだ。

「何だア……………『練馬沈没』？」

「どんだけピンポイントなもん見てるんだよ……………」

銀時が蓋を開けると、中からハラリと紙が一枚落っこちた。

「……………レシートか。」

……つーか、これ返却日今日じゃねーか」

捨ったレシートの返却日の所に今日の日付が書いてある。

「……………つたく、仕方ねー」

外に行くついでに返して来てやるか」

銀時は面倒臭そうに頭を搔くと、風呂場に入ってしまった。

第六十八訓

しつこい奴ほど邪険にすると後が怖い

く 駅周辺く

「にしても……この辺はビルばっかだな」

銀時はワタルに借りたDVDを返すために、地下鉄で六本木の方に来ていた。

「でもこの辺金持ちが多いらしいからな……ひよっとしたら割りのいい仕事が一」

トスツ！！

「あん？」

銀時の目の前に小刀が突き刺さった。
刃の銀色がキラキラと妖しい光を放っている。

「あ、危ねーな……一体何処から……」

ガシャン！！

今度は銀時のすぐ後ろに植木バチが落下してきた。

「……………え？いやちよつ、は！？」

何事かと上を見上げると、空に長方形の物体が舞っていた。

というか……

「おおおお！?!？」

ガラガラガツシャーン!!!

大量の鉄骨が落下してきた。

銀時は寸での所で回避するも地面は粉々に砕けた。

「ちよっ、ちよっと待て……いやいや……何だコレは……」

銀時は愕然としながら避けた鉄骨を見つめる。

「狙われてる？

いや……ナイナイナイナイ。これはアレだろ……偶然だよ偶然。漫画
じゃあるまいしんなバカな事……」

コロコロ……

更に銀時の目の前に緑色の何かが転がってきた。

「……これって」

その深緑色のラグビーボールのような形は言つまでもない……
手榴弾（笑）

ドオオオオオオオオン！！

「だああアアアア！！！！？」

(笑) じゃねエ！！何だコレはア！？
狙われてんの！？俺狙われてんの！？」

爆風の中からダツシユで飛び出してくる銀時。

「オイオイオイイイイ！！

おかしい、おかしいよコレエ！！

人の恨みなんざア買った覚えは……まあ色々あるが、殺される事まではしてねーぞオオオオ！！」

ワタルのビデオ屋の方向に全力で走っていくが……

それを阻もうとコンパスが、

「ぬおオ！？」

ボウリングの球が、

「いゝイイイイイ！！？」

エクスカリバーが、

「何でエエエエエ！！？」

グングニルが、

「原作違エエエエ!!」

ゲイボルクが

「ラ サアアアアア!？」

盥（8時だよ全員集合で使われた）までもが上空から次々と落ちてくる!

「どうなってんだアアアア!!」

どうという原理で落ちてくんだよ!?小説だからって何やっても許されると思うなよオオイ!!」

まだまだ様々なものが落ちてきたがこれ以上やると色々と怒られそうなので、以下略って事で……

*

〈レンタルビデオショップ橋〉

「せ〜、せ〜……」

色んな意味で息も絶え絶えな銀時は、何とかワタルの店の前までたどり着く事が出来た。
しかし全身ボロボロである。

「おかしい……俺はビデオ返しにきただけなんだよ。なのに何でこんな目に……」

ウーン……

「アレ、銀さん？」

「ん？おお……」

ビデオ屋の入口が開くとワタルが出てきた。

「こんな所でどうしたんですか？つーか大丈夫ですか？ボロボロじゃないですか」

「いやよオ……ナギが借りたDVDを返しに来たんだが……」

銀時は懐からDVDケースを取り出し…

「貰ったアアアアア！！」

「！？」

突如銀時の上空からいきなり女性の声が響く。

銀時は咄嗟に後ろに飛ぶと、同時に地面に何かが見つ込んできた。

「なななな何だア!?!」

「……………!?!?」

二人の間の砂煙が徐々にひいていくと、そこに現れたのは……………

「フッフ……………流石は三千院の護衛ですね」

トンプアーを構えてソニアであった。

「テメーは……………教会の時の」

「まあ覚えていただけた良かったですか 坂田銀時さん」

ソニアは頬に手を当てながら不敵に笑う。

「しかし中々しぶといですね……………アレだけの攻撃の中で無事では
とは……………」

「さっきの(二重の意味で)危ねえ攻撃は……………テメーの仕業か。
俺に何か恨みでもあんのかア?」

銀時は木刀に手をおいてソニアと対峙する。

「無論、三千院家遺産を頂戴しにね……………」

「オイオイ……………んな物騒なもん持って笑っていられたア…
オメーろくな人生送ってねーだろ」

「ククク……大きなお世話です」

二人の周りはジリジリとしたジャンプ漫画のようなバトル的な雰囲気
に包まれる。

ワタルは完全においてきぼりになっていたので、取り敢えず前にい
るソニアに声をかけようと近づいていく。

「あの〜……」

ジリジリ……

「すみません〜……」

ジリジリ……

「あの〜……」

「何ですか！？今良いところですから話は後にー」

ソニアは怒ったように振り返ったが、そこで動きが止まった。
そして彼女の顔が一気に赤くなる。

「えっと……？」

「……………は！？／／／」

暫くワタルを見つめていたソニアだったが、顔を赤らめたまま我に
返った。

「私はソニアといいます／＼
その……アナタの名前は？」

「え、ああ橘ワタル。こここのビデオ屋の店主をやってる。
えっと、それより……」

ワタルが尋ねようとソニアを見上げたが、彼女は銀時に顔を戻して
いた。

「坂田銀時……今回は命拾いましたね。しかし次は無いと思いな
さい……」

「いや…次とかそういう問題じゃ……」

「では……さらば……」

チラツとワタルを見ると、ソニアは駆けて行ってしまった。

「……………」

残された二人は啞然としながら暫くそれを見ていた。

「取り敢えず……中入ります？」

「……………だな」

ワタルは自分の知らない所でフラグを立ててしまったらしい事は知
るよしも無かったという……

因みに……

「延滞金が32万8500円になってるんですが……」

「32万!? 何それ!？」

「いや、このDVD、返却日が三年前の今日になってます?」

「……………マジ?」

料金は後日ナギが払ったそうです。

「銀魂のごとく」

お忘れかもしれませんが今は2月の下旬です。

くレンタルビデオショップ橘く

「はぁ……………」

「……………何だよサキ。溜め息なんかついて……………」

ワタルとサキは朝御飯を食べながら向かい合っていた。

「いえ…若、別に何も」

「ふーん」

ワタルはさほど興味の無さそうに味噌汁を啜った。

「ま、どーせ悩んだってサキにはろくな解決法なんて思いつかねーんだから……………悩むだけムダだぞ」

ピキッ!..!

「どーして若は朝からそんな事しか言えないんですかアアア!..!

「わアアア!..?味噌汁が溢れる!..!

味噌汁がアアアア!..!..!」

第六十八訓 最近は成人式に行かない若者が増えてるらしい

〔三千院屋敷〕

「え？サキさんの様子がおかしい？」

「ああ、最近溜め息ばかりついててさ…。」

ワタルは屋敷の庭でハヤテ達と話していた。

「サキさんってワタル君のビデオ屋にいるメイドさんですよね？」

「ええ。お二人で経営なさっているんですよ。」

新八の問いにマリアが箒を持ったまま答える。

「溜め息ですか……何か悩み事でもあるんですかね？」

「溜め息だけじゃ無い。人の話もずっと上の空、それに砂糖と塩を間違えないし、皿も割らない、掃除をしても物を壊さない、お客のお釣りもぶちまけない……
絶対なんか変だ!!」

「はぁ……（それは良い事なんじゃないかなあ〜）」

ハヤテは話を聞きながら苦笑いをする。

「ったく……自分が20歳になったからって……13歳の俺じゃ頼りにならねーとでも言いたいのかよ」

グツと唇を噛むワタルをみて微笑するハヤテ。

「あれ……でも20歳って事は今年成人式だったって事ですよね？」

「あ？成人式？」

気付いたように言う新八にワタルが首を傾げる。

「あ、確かにそうですね。って事はサキさん成人式出たんでしょうか？」

「成人式……」

ハヤテの言葉にワタルはある事を思い出した。

1月初旬

「へへ、サキ今年成人式なんだ」

「はい。せっかくなんで振袖とか着ていこうかなと思ひまして」

ワタルとサキは炬燵に入りながらテレビを見ていた。

「普段メイド服ばかりだから……よし、何ならその振袖俺が買ってやるつか？」

「え？本当ですか若！！」

「ああ、最近ビデオ屋も好調だし、あんま高いのは無理だが何とか……」

「……………」

「な、何だよ？いらなのかよ」

サキは少し驚いたようにワタルを見ていたが、すぐに微笑んで口を開いた。

「ではあまり期待せず、楽しみにしておきますね若……？」

「……………？」

すっかり忘れていたワタル君。

（まさか俺が成人式の事忘れてたからそれで落ち込んで？

いやでも、もう2月の下旬だぞ？今更そんな……まあ忘れてたのは悪かったけど……けど成人式なんてそんな大したイベントじゃ……）

「成人式って一生に一度の事なんですよね」

ピキッ！！

ハヤテの言葉にワタルは思わず動きを止めてしまう。

「年々荒れてやらない所も増えてるらしいんですけど、やっぱり生涯で一度きりの大事な日ですから……」

「一生の思い出になるんだろうね」

新八も頷いてハヤテに答える。

「なあメガネ…成人式って意外と大事なのか？」

「そりゃ大事なんじゃない？後新八だからね？」

新八は再三相づちを打ってワタルに言った。

「因みにマリアさんの成人式はどんなだったんですか？」

「あ、僕も気になりますね」

ピキッ！！

「は？」

ハヤテと新八の言葉を聞いてマリアの顔には？マークが浮かぶ。

「え？あ…そうか、マリアさんまだ17歳だから…」

「成人式はまだ……」

「そうですよ？私ピチピチの17歳ですよ??」

マリアはニツコリと笑って二人に近づいていく。
しかし目は全く笑っていない。

「なのに二人とも……」

何で私が成人式を終えた人って思ったのかしら……?」

「いえ！！そ…そんな、決してマリアさんの事老けて見えるとかでは無くてですね！！」

「そうですよ！！これは冗談というか、そのあの……」

コトコトコトコト……！！

「「うう、ごめんなさい……！」」

「二人とも……許しませんよ……」

そんな地獄絵図が展開される横でワタルはまだ首を捻っていた。

（まだ根に持っているとは考えにくいけど……とにかく直接聞いてみるか）

↳レンタルビデオショップ橋

「そういえば成人式……誰も祝ってくれませんでしたね」

「……………」

サキは食器を洗いながらボソリと呟いた。少年の心に重い鉄槌が降り下ろされる……！

「上野の両親もおばちゃんも電話一本くれなないし、誰も祝ってくれないし……結局成人式も行かなかったし……」

「……………」

「別に良いんですけどね……」

誕生日もいつもそんな感じですから成人式なんて……
年々荒れてやらない所も増えてるらしいですから……」

「……………」

（三千院屋敷）

「失った時間は取り戻せなくても、信頼は取り戻す事が出来ると思
うんだ！……！」

「はあ……だから私に何の用だ？」

「プレゼントがしたい」

力説するワタルの前には本を読むナギと隣で絵を描いている神楽の
姿。

「プレゼントアルか？」

「お前からのプレゼントなどいらん」

「誰がお前なんぞにプレゼントをくれてやるかアアアアア！……！」

バキッ！！

「人に物を頼む時は口のきき方にきをつける！」

「イエッサー……」

バラバラになった椅子とつつ伏せに倒れているワタル。

「で、プレゼントって何アルか？」

「いや、実はある人に振袖をプレゼントしたいんだけどどういづのがいいかわからなくて……」

「ほお、振袖のプレゼントねえ……なるほどお前もいよいよ……」

ナギは不敵に笑うと、紙切れを取り出した。

「じゃあこの店に行け。結構安くて彼女の気に入りそうな振袖が揃っている」

「ほ、本当か！！恩にきるゼナギ！！じゃあ早速行ってみる！！」

「あんま安物は買つなよ」

ワタルは紙を受け取ると部屋を飛び出していった。

「彼女って誰アルか？」

「そりゃ、伊澄だろ」

そんな訳で店についたワタル。

「おお！コレなんか良い感じの…」

「合計で3千8百万円になります？」

「買えるかアアアア！！！」

勿論屋敷に戻ってきたワタル。

「なんで服一着がフェラーリより高えんだよ！！庶民の金銭感覚なめんじゃねーぞ！！」

「うるさい奴だな……」

3千8百万なんて、さっきお前を殴った椅子の方が高いではないか」

(これだから金持ちは……！！！)

すると、絵に夢中になっていた神楽がスツと立ち上がった。

「お前は女性にプレゼントをすると決めたアル！！」

一度男が言った約束は絶対ネ！

値段は何がなんでも出すのが男アル!!」

悪ノリ

「神楽の言う通りだ。男ならこの程度の金額、出して当然!! 出せんでどーする!!」

悪ノリ

「!!!!」

ワタルはグツと胸を押さえつけられたように固まる。

「た…確かにそうかもしれないけど……3千8百万なんて、そんな金どこから」

ドサツ!!

ナギはワタルの目の前にスーツケースから出した大量の諭吉を落としました。

「え?」

「名ばかりとはいえ許嫁のよしみだ。無利子の出世払い3千8百万

……

なあ、どうする……?」

くレンタルビデオショップ橋く

ドン！！

ワタルの目の前には綺麗な振袖が掛けてある。

「よし……これでサキの機嫌も……」

「まあ、ステキな振袖……」

「！！！」

突然聞こえてきた声に振り返るとそこには伊澄が立っていた。

「うお！！伊澄！？」

「ふぁ！！！」

二人は同時にのけ反って、伊澄はしりもちをついてしまう。

「あ……ごめん……」

でも、何でここに？」

「えっと……ナギがワタル君から大事な話と、ステキなプレゼントがあるから……今すぐワタル君の家に行けって……」

(うゝ……可愛い／＼)

そんな伊澄を見て思わず赤くなるワタル。

「もしかしてプレゼントって……それ？」

「え!?!」

伊澄の目線の先には当然振袖に向く。

「大事なお話って……何？」

「……!!／＼／」

ズイと伊澄はワタルの顔を覗いた。

(ナギの奴余計な事を……でもこれは…千載一遇のチャンス!!
伊澄にこれをプレゼントして……俺の想いを…想いを…)

しかしワタルの脳裏にサキの後ろ姿が浮かぶ…

「伊澄!?!」

「はい?／＼／」

ワタルは伊澄の肩を掴むと、全く別場所から四角い箱を取り出した。

「シヤン リオンのDVD-BOX、二個手に入ったから一個やる
」

「まあ……」

それはアニメのDVD-BOXだった。

「それで大事なお話というのは……」

「主役のハギノさんの演技についてだ。龍のアサクラとは違う明るい演技が見ものだぜ!!
じゃ!! 帰ってゆつくり観るよ!!」

「はい。ありがとうワタル君」

ワタルは伊澄を外の手まで送っていった。

「若!!」

「ん?」

すると、後ろからサキが歩いて来ていた。

「何やってんですか?こんな所で……そんなとこいなくて部屋に入りましょうよ」

「ん……ああ」

サキが部屋に入ると、何かに気付いたように声をあげた。

「あら？これは……」

「いやその……忘れてたのは悪かったと思ってその……」

ワタルは少し気恥ずかしそうに頬を掻きながら言う。

「この部屋、私のじゃない女性の匂いがします……」

「は？」

「まさか私のいない間に女性を連れ込んで……えええHな事を……」

「だアアアアア！！違う！！」

お前にプレゼント！！これ、振袖！！」

「へ？」

ワタルはサキの言葉を遮って振袖を指差した。

「何でプレゼントなんか……」

「だからその……せっかくの成人式にプレゼントするって言って忘れてたから……それでこの所ずっと元気が無いのかと思って……」

ワタルはまだ恥ずかしそいに目を反らしている。

「あ……悩んでたのは新しい携帯の色、何にしようか悩んでたんです
が……」

「はあ！？」

二人は暫く各々の沈黙を保っていたが…
ワタルは糸が切れたようにサキに寄っ掛かった。

「ま……いいや」

「……………」

サキはクスリと笑うと、

「ありがとうございます、若？」

〈三千院屋敷〉

「結局三千八百万貸したんですか？」

マリアが紅茶を淹れながらナギに尋ねた。

「んにゃ。自腹じゃないと意味ないって、安いの買ったみたいだよ、
20万くらいの」

「安くねーヨ」

神楽は呆れる程の金銭感覚であった……

第六十八訓

しつこい奴ほど邪険にすると後が怖い／／最近は成人式に行か

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ、今日最初の質問『ナギに質問。今回のことで家事ができないことに女の子として、一応自称ハヤテの彼女？として危機感と
かってわきました？』」

ナギ

「自称では無い！！私とハヤテは互いを……その……愛し……／／／」

銀八

「いや聞いてねーから。質問に答える」

ナギ

「フツ……だから家事なんて出来なくても、ハヤテと私は愛し……／
／／」

銀八

「あー、ハイハイ。分かった分かった……次の質問『ツラに質問。
どうやって万事屋に入ってきた？』」

桂

「ツラじゃ無い桂だ。フツ、攘夷志士には神出鬼没のライセンスが
デフォルトに備わっているからな」

銀八

「これからは正面から来てくんない？ だったらいつでも閉め出せるから」

桂

「連れないでは無いか銀時。俺達はー」

銀八

「もういいうぜー。最後の質問『作者に質問。万事屋の中で一番漫画が上手いのは？』」

伽藍

「そうですね〜そつなくこなすのは新八でしょうかね。神楽は可愛らしい感じですかね。銀さんは乱雑そうだな……っー訳で新八で」

銀八

「今回はここまで〜」

新八

「次回もよろしくお願いします」

第六十九訓　ああ素晴らしきこの世界（笑）（前書き）

クラウドの前書きの館！！

クラウド

「一日で二つ投稿とは……頑張りましたな」

伽藍

「ええ、本当に。でも次からはもう一方の小説を更新していきたい
と思いますので、暫く間が空くと思います」

ハヤテ

「では、始まります！」

第六十九訓　ああ素晴らしきこの世界（笑）

（白皇学院　動画研究部）

「という訳で泣ける動画を撮りたいと思う！」

「いや……」

動画研究部室には美希とハヤテが二人きりで向かい合っていた。

「ん？どうしたんだハヤ太君？」

「何でいきなりこんな事になっているんですか？」

ハヤテは呆れながら首を傾げる。

「今日は学校は午前授業なのだが、君のご主人様は飛び級生徒の補習で午後まで学院に。」

そして理沙と泉はこの前のテストで赤点をとり午後まで居残り補習。反面、私は大変賢いので補習は楽々パス……」

「花菱美希…… 36点。赤点と1点しか変わらないじゃ無いですか」

「返せ！！！！」

いつの間にかハヤテは美希の答案を持っていた。
美希はハヤテから答案を奪い返す。

「とにかくそういう事で、動画研究部ではハヤ太君と私の二人きり

という訳だ」

「僕がいつ部活に入ったんですか……」

「よって今から私達は泣ける動画を撮るといふ任務を遂行したいと思っ」

ハヤテのツツコミを完全にスルーしていく美希。

「はあ……大体泣ける動画って、そんな身近に感動なんて転がっていませんよ？」

「ほお、今回は意外と早く観念するんだな」

意外そうに顔を上げる美希にハヤテは続ける。

「……まあ確かにお嬢様を待つまでの間は暇ですから。それに、花菱さんを一人にしてまたとんでもないモノ撮られたら堪りませんか
らね」

「とんでもないモノとは失礼な！コレは我が動画研究部の永久保存版だぞ！」

ピッ！《再生》

ハヤテ（女装）

「ちょっと止めて下さいよ／＼／」

理沙

「良いでは無いか良いでは無いか」

泉

「ハヤ太君可愛いー？」

美希

「うむ！いいアングルだぞハヤ太君」

ハヤテ（女装）

「やあ！／＼／ちょっとスカートめくらしないで…／＼／」

――――

「ぬおオオオオオオオ！…！」

バキッ！！

いきなり大画面テレビに映った悲惨な動画。
ハヤテはそのDVDを真つ二つに割った！

「あー、せつかくのDVDが…！」

「せつかくじゃ無いですよ…！」

何でこんなものが…！！！」

「まあそんな訳で泣ける動画を撮りにいこうか」

「話が全く読めないんですが…」

ハヤテは取り敢えず美希に続いて研究部室を後にした。

第六十九訓

ああ素晴らしきこの世界（笑）

ハヤテと美希は白皇学院のとある場所にある茂みにソッドスー
クよろしく潜んでいた。

「ハヤ太君、別に泣ける動画とは感動的なもので無くとも良い」

「どうして…？」

「例えばアレだ……」

美希がハンディカムを向けた先には、ベンチに座って何やら本を食い入るように読んでいる薫の姿。

その本には『1日30分今日から君もモテ男になれる!!』と書かれていた。

「切ないだろう?」

「確かに切ないですけど」

茂みから呆れた視線を送る二人。

「猫を飼ってる女性は寂しがり屋か……」

本を読みながらボソリと呟く薫。

「泣けるだろ?」

「確かに号泣ものですけど……」

美希はハンディキャップをしまつとハヤテに向き直った。

「まあこのような、生活に少し潤いを与える、切なくて感動的な動画を撮ろうというのが今回の主旨だ」

「今の動画の何処に潤いがあるんですか?」

「それを外に探しに行くのだよ」

美希はグッと伸びをすると正門に目を向けた。

「え？外に出るんですか？」

「まあ、白皇（じやく）にはあまり切なさが足りないような気がするからな」

「切なさが足りないって………？」

「まあとにかく行ってみよう！」

明らかに行き当たりばったりな二人は正門から外に繰り出した。

*

〈商店街〉

「いや、やっぱりお昼前は人が多いですね」

「ふむ。これだけいれば何らかの絵が撮れそうだな」

二人がやって来た商店街は買い物客でそこそこ人混みが出来ていた。

「でも、何でまた泣ける動画を撮ろうと思ったんですか？」

「ん？ああ、面白系は結構撮ったからな。たまには……ん？」

「どうかしましたか？」

美希は何か気付いたように言葉を止めた。

ハヤテは不思議そうに美希を覗き込む。

「アレ…マリアさんじゃないか？」

「え…？」

美希の目線の先には買い物袋を持ちながら立ち止まっているマリアの姿。

「本当ですね。買い物に来たん……」

しかしよく見ると、マリアはショーウィンドの前で止まって何かを熱っぽく見上げている。

美希は取り敢えずハンディカムをマリアに向けてみた。

「何かを見ているのかな？」

「洋服とかでしょうかね？」

二人がショーウィンドをよくよく見ると、そこにはセーラー服が掛

かっていた。

「……………」

美希は黙ってパタリとハンディカムを閉じた。

「見なかった事にしようか……」

「そうですね……」

「泣けるな」

「ええ、本当に」

二人はひっそりとその場所を後にした。

*

〈負け犬公園〉

「結局公園まで来てしまったな……」

「流石にここには何も無いのでは？」

2月の寒い風が吹く公園は人気が無く閑散としている。

「いや、こういう一見何も無さそうな所からネタを引っ張りだすのがジャーナリストというものだろう!」

「いつ僕らジャーナリストになりましたっけ?」

美希は右手で拳をつくり高らかに宣言する。

「ハッハッハッハ!!」

「?」

すると、砂場のほうから笑い声が聞こえてきた。二人はこっそり顔を覗かせると、

「アレって……最近愛沢家に拾われたっていう人だろ?」

「ええ。桂さんですね……何やってるんでしょう、こんな所で」

桂が愉快そうに笑っていたのだった。

取り敢えずハンディカムを向ける美希。

「よしよし、お前は中々賢いな。無闇に餌にありつかず安全かどうか調べるなんて……立派な土道だ。

それにしても素晴らしい肉球だな……ちょっと触らせて貰っても良いですか?」

「……………」

野良猫と戯れていた……
桂は猫の右足の裏を慎重に触っていく。

「おお！このプニプニ感、そしてこのこうばしい香り……
武士道とは肉球とともにある事と見つけたり！！
ハハハハハハハハ！！！」

「切ないな……」

「ええ、物凄く切ないですね」

二人はジト目でその様子を眺めている。

「すみません。お腹をモフモフさせて貰ってよろしいですか？」

「ニヤア」

「ああ……今日は良い日だ」

桂は顔を猫のお腹に埋めると幸せそうに呟く。

「泣けるな……」

「全米が涙しますね……」

ハヤテは堪らずに頭を押さえて言った。

「ふむ。中々切ない絵が撮れたな。では次に行こうか」

「まだやるんですか…？」

幸せそうな桂を置いて、二人は公園を後にした。

*

（駅前通り）

「特にめぼしいものは無いと思いますけど…」

「いや……ジャーナリストの勘が何かが起こると囁いている」

「だからジャーナリストじゃ無いですよね？」

二人は駅前通りを宛もなく歩いている。

暫く歩くと昼間なのにやたら賑やかな場所に到着した。

「この辺はゲーセンやパチンコ屋が多いですね」

「パチンコか……切なくなる要素が満載だな」

「いやいや……?」

ハヤテが美希に言葉を返そうとすると、前方の二つ向かい合ったパチンコ屋の自動ドアが開いた。

ウィーン……

「ん?」

向かいどうしから出てきたのは、憔悴しきった白髪の天然パーマとグラサンをかけた二人の男。

「アレは……三千院家の護衛の人だな」

「銀さんに……長谷川さんも」

二人は取り敢えず声をかけずにその様子を見守る事にした。美希は無論ハンディカムを二人に向ける。

「ん?……よ、よオ長谷川さん。来てたのか……」

「あ、ああ……銀さんもパチンコに?」

二人はぱったりと鉢合わせになった。

「ま、まあな……どした?なんかスゲー汗だぜ?

………負けたのか?」

「暑いな今日は！！2月だったのに8月並の猛暑だな！！
それより銀さんこそ汗だくじゃないか……負けたのか？」

「暑い！！今日は暑いなアオイ！！
太陽有給とれやコノヤロー！！」

二人とも“負けた”という言葉を聞くと肩を震わせ、仕切りに暑いと叫んでいた。

「何だそうなのか……俺アてつきり冷や汗かと……」

「冷や汗？何でそんなもの……」

キラーン！！

「！！！！」

すると、近くに銀色の光を放つ百円玉が落っこちているのに気付いた。

「おオオオオオオオ！！！！」

二人はプロ野球選手も顔負けのヘッドスライディングでそれに飛び付いた。

「テメー、これは俺が最初に見つけたんだよ！！諦めるバカヤロー！！！！」

「何言つてんだ！！俺なんかパチンコ屋から出たときに気づいてたもんね！！」

「俺アパチンコ屋入る前から気づいてたんだよ！！離せコノヤロ！！！！」

「何をオオオオ！！」

地面でジタバタと暴れているいい歳した大人が二人。

「切ないな……」

「まあ胸が締め付けられますけど……」

ハンディカムを持ったまま呟く美希と胸に手を当てるハヤテ。

「分アった！！じゃあじゃんけんで決めよう」

「いや、それより50円ずつ分け合わないか銀さん！！」

銀時の腕を掴むと長谷川はそう提案した。

「ふざけんな！！」

未来も何もねーアンタより俺に使われた方がこの100円も幸せな筈だ！！」

「何処がだよオ！！万年金欠のオメーより俺の方がお金のありがたみを知ってるだろ！！」

「マダオのテーマに言われたかねえんだよ!!」

尚も地面にうつ伏せになって揉めている大の大人が二人。

「本当に泣ける絵だな」

「あ、何だか僕……目が霞んで……」

ハヤテは目頭を押さえると、心底切なそうに呟いた。

*

（白皇学院）

「いやあ、外には切なさが溢れていたな……」

「まさか短時間であれほど知り合いに会うとは思いませんでしたよ

……」

二人は取り敢えず白皇学院に戻って来ていた。

「しかし、まだ補習終了までは少し時間があるな」

「いや、もう良いんじゃないですか？あとはー」

ハヤテがそう言いかけたとき、二人の前をある人が横切った。

「あれは……牧村先生。帰ってたんですね」

「どうかしたのかな？」

しかし彼女は溜め息をついてただならぬ様子。しかも……

「「!!」」

瞳に涙がうつすらと浮かび上がった。

「何やら切なげな匂いがするぞハヤ太君」

「ええ、確かにいつもとは違う雰囲気ですけど……牧村先生ってあまり目立ちませんが実はトップクラスにアレな人ですよ」

「ああ、分かっているよハヤ太君。どうせつまらないオチが待っているだろうが、そこを敢えて我々は追求してみよう！」

美希とハヤテはこっそりと牧村先生の後をつけていく事にした。

「先生……」

「冬原君……」

牧村先生が校舎裏に歩いていくと、金髪で目が隠れている男子が立っていた。

「僕の手紙……読んでくれましたか？」

「え、ええ／＼」

牧村先生は赤くなりながら俯いてしまう。

「何だアイツは……」

「さあ？でも何か見たことある人ですけどね……ゲームのパッケージとかで？」

「し、しかしこの小説はコメディーだ。どうせつまらないオチに違いないだろ」

ハヤテ達は啞然とその様子を見守る。

「僕は先生の事が好きだアアアア！……」

（（面舵一杯急カーブうう！！？）（））

展開は予想外の方向に突き進んでゆく……

「そんな……ダメよ冬原君。そんな事言って……」

「け、けど……!!」

「第一そんなのズルいわ。」

先生が先日彼氏と別れたばかりだって知っててそんな……/ / /」

(何ですとオオオオオオ!!?)

「いかんぞハヤ太君……展開がマジだ!」

「そ、そうですね……」

因みに牧村先生の彼氏は言わずと知れた某スクラップロボットである。

「切ないとか泣ける動画とか言いながら最後はいつものようにふざける予定だったのに……」

「やっぱりそういつつもりだったんですね……?」

「なのでハヤ太君!ここはいち早く介入してこの状況を面白に変えるんだ!!」

「いやいや、無茶言わないで下さい!!」

ハヤテは手を前でブンブンと振って抗議する。

「じゃあこの後どうするっていうのだハヤ太君!!」

「だから別に介入せずとも、素直に見守っておきましょう！そうすれば……」

「そうすれば……キスとかしちやったりなんかして……」

美希とハヤテの間にいい知れぬ空気が流れる。

「いや、花菱さん……いくら何でもそれは……」

「しかし、分からんじゃないか」

「そんな……だって先生と生徒なんて禁断の愛でー」

「それがどおした!!」

美希は顔を赤くしながらハヤテの言葉を遮った。

「例え禁断の愛でも……スキという気持ちには変わらないのだから……!!!!」

「……花菱さん」

そして二人の前で繰り広げられている闘いもクライマックスを迎えていた。

「先生!! 僕は……!!」

冬原と呼ばれた男子生徒は牧村先生の肩を掴んで迫ったが、その顔に手紙が突き付けられた。

「だめ……その気持ちは受け取れないわ」

「そんな……！！何ですか先生!？」

すると、牧村先生はフツと微笑むと言った。

「それは私が…そのアナタの先生だから」

「……………」

「だから…また教室でね冬原君」

「先生……………」

そうして、牧村先生は彼の前から去って行った。

「凄いものを見たな……………」

「そうですね……………」

ところで、花菱さんにはいないんですか？告白したい人が」

ハヤテはさっきの美希の様子で気になっていた事を尋ねてみた。

「私か？」

んゝそうだな……………」

美希は暫く上を見上げる。

「さっきの奴みたいにフラれるにしても付き合うにしても、想いを

伝えるという行為が、勇気のあるなしの問題だけなら良かったんだが……言ったところで絶対に受け入れて貰えないと知っているから……見上げてるだけさ」

美希は時計塔を寂しそうに見上げてそう言った。

(もしかして……花菱さんって)

「終わったアー!!」

「ん?」

解放感いっぱい叫び声と共に、横から泉と理沙が歩いてきた。

「はー……つまらん授業だった」

「あ、お嬢様。お疲れ様です」

ナギもヨロヨロとその後ろからやって来た。

「まさか桂ちゃんだけじゃ無く、ヒナちゃんまでいるとは」

「本当にな」

「何言ってるの。私だっけじゃなくてやってる訳じゃないわよ」

泉と理沙の後ろから溜め息と共にヒナギクが現れた。

「む、補習はヒナが教えていたのか……」

「お姉ちゃんだけだと遊びになるからって理事長がね……」

美希はヒナギクの横に並んで歩き出す。

「ふーん………だったら赤点とっても良かったかな……」

「止めてよね、これ以上手間かけさせないで……」

ハヤテはそんな二人の後ろ姿を見つめていた……

「ハヤテ?どうしたのだ?」

「いえ、切ない動画を撮るのは大変だなあって……」

〈三千院屋敷〉

「最近出番無いなあ……」

(……クラウドさん)

窓の外を見つめながら呟く執事長クラウドの姿が一番泣けると思うハヤテであった。

第六十九訓　ああ素晴らしきこの世界（笑）（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ、本日最初の質問『新八に質問。いつもの事だけど年下にメガネ呼ばわりされるのはどんな気分？』」

新八

「いつもの事ながらってどういう意味ですか？」

銀八

「仕方ねーだろ？お前は平面にメガネだけ転がってるような人間なんだからよ。それにある意味メガネはお前のキーポイントになる訳だ。ジミー姉を見てみる。何の特徴も無いからアイツ」

歩

「ジミー姉って私の事！？私の事を言ってるの！？」

新八

「フオローになってないような気が……」

銀八

「うるせーな……次行くぞ。『銀さんに質問。敵が十数人やって来たとき、洞爺湖と拳銃どちらを使う？』」

拳銃使うとあの辰馬の馬鹿みたいになるから嫌だ……後集団戦に銃は向かねーだろ。洞爺湖で。」

「ハイ続いては最後の質問『ナギに質問。練馬沈没ってどんな内容？』」

ナギ

「練馬沈没？何だそれは？」

銀八

「え、要するに、ナギは面白かったから三年間借りていたのではなく、単につまらなくて返し忘れていたつー訳だ。

んじゃ、今日はここまで」

ヒナギク

「次回もよろしくお願いします」

第七十訓 忘れた頃にやって来るアイツ（前書き）

クラウドの前書きの館！！

クラウド

「今回は意外な展開です！」

ハヤテ

「あのキャラが意外にも参戦です！」

伽藍

「もう誰が分かりますか？」

クラウド・ハヤテ・伽藍

「では、始めます！」

すみません。全然間空かなかった（笑）

第七十訓 忘れた頃にやって来るアイツ

ブロロロロ……！！

昼間の商店街を走り抜けてゆく一台のバイク。

その原付に乗っているのは二人の男。

運転しているのはお馴染み坂田銀時。そして後ろにまたがっているのは志村新八。

「つーか銀さん。いつの間にかこっちで免許取ってたんですか？」

「そりゃアレだよお前。そろそろ徒歩以外の移動手段も必要だろ。だからこの際、今までコツコツ教習を受けてた事にしようっつー話だ」

「どんだけいい加減な設定ですか……」

二人を乗せた原付は商店街を抜けてそのまま駅前通りに入っていく。

「……ん？」

暫く走行すると、

帰る途中にキャバクラの前を通り過ぎたのだが……

新八はそこで客寄せをしている“モノ”に気が付いた。

「どした〜、新ハイ？買い忘れてもあつたかア？」

「ちよつ、ちよつと銀さん。止まって下さい！！」

銀時は新八の驚いたような言葉にブレーキをかけてバイクを止めた。

「んだよ…あ、ジャンプ買い忘れた？」

「ぎ、銀さん……あの店の前にいる客寄せ……アレって……」

「あん？客寄せだア？」

銀時が新八と同じように顔をキャバクラに向けると、そこには…

真っ白な身体にペンギンのような出で立ち、そして文字の書いてある看板を掲げている生き物が立っていた。

「客寄せっーか……アレ……」

二人はダラダラと冷や汗を流しながら顔を見合わせた。

「「エリザベスうううううううううう！！？」」「」

第七十訓 忘れた頃にやって来るアイツ

〔愛沢家〕

「何、エリザベスを見かけたか？」

「ええ、恐らく。大体あんなの見間違う訳も無いですから」

銀時と新八はそのまま屋敷に戻らず咲夜の家に向かっていた。
無論桂に先程の事を伝えた二人だったが……

「ハハハハハ！銀時、新八君、中々洒落たアメリカンジョークではないか！」

「誰もジョーク言ってるよ！！
つか一体どの辺がアメリカンなんだよ！！」

桂は愉快そうに笑うと二人を交互に見てまた笑った。

「異世界にエリザベスが居る訳も無かるう。我々が飛ばされた時、

エリザベスは志士達との会合の場に居たのだから」

「いや、でも確かにエリザベスさんだったんですよ!!」

全く信じる様子の無い桂に新八は必死に訴える。

「なあハルさん。エリザベスって誰や？」

「……………さあ？桂さんの恋人か何かでしょうか？」

咲夜とハルはその様子を不思議そうに眺めていた。
一方新八は更に桂に迫る。

「桂さん、本当なんです!!」

白い身体にペンギンみたいなフォルム、それに看板！これがエリザベスじゃ無くてなんだって言うんですか!」

「そうだよ？あんなもん一度見たらすぐ分かるだろ」

「あんなもんじゃ無いエリザベスだ」

桂はピシヤリと返すと深々と座り直す。

「……………エリザベス、どんな奴やねん」

「少なくとも恋人じゃ無いみたいですね？」

咲夜達は未知なる“エリザベス”という生き物について考えを巡らしていた。

「銀時、新八君。二人がエリザベスを恋しがっているのは分かる」

「恋しがってねーよ」

「だが現実はいしつかりと受け入れなくてはならない。エリザベスは今は江戸にいるのだ。悲しい事だが元の世界に帰れるまでは感動の再会はお預けだ」

桂はポンポンと二人の肩を叩くと、ギンとの戯れがあるからと広間から出ていってしまった。

「……………銀さん、信じるどころか一点の疑いも持ってないんですけど」

「まあ別にヅラとエリザベスがどうなるうが知ったこっちゃねーけどよオ……………」

銀時は手を口に当てて欠伸混じりに桂を見送る。

「何言ってるんですか！！僕達エリザベスさんに何度も助けて貰ったんですよ！？」

「いつも無駄に男前だからなア」

「絶対に桂さんとエリザベスさんを会わせるべきです。エリザベスさんだって桂さんを探してるかもしれないですよ？」

「会わせるつってもよオ……………」

銀時は面倒臭そうに頭を掻くと、咲夜達が二人に近づいてきた。

「なあ、そのエリザベスちゅーのは何なんや？人間なんか？」

「話を聞いていた限りだとそんな風には聞こえませんでしたけれど……」

二人とも興味半分怖さ半分な様子で銀時達に尋ねた。

「いや……人間と言えば人間……いやエリザベスさんですね。エリザベスさんはエリザベスさん以外の何者でもないんです」

「「？」」

意味不明な返答に思わず顔を見合わせる咲夜とハル。

「口で説明するより実際に見た方が早えな。……来るか？」

「「……………」」

*

（駅前通り）

「ほら、アレですよ……あのキャバクラの前で客の呼び込みやっている……」

「どれどれ……」

結局咲夜は銀時達と一緒にエリザベス（？）を見に来た。ハルは仕事があるので屋敷に残っている。

「……………え？」

咲夜は新八の指差す先を見ると、ピタリと動きを止めた。

「メガネ……………何やアレ？」

「だからエリザベスですよ」

「いや……………エリザベスですよって……………」

咲夜はに前方の謎の生物に理解不能の表情を露にする。

「まあ、簡単に言やアツラのペットだな」

「ペットオオオ!?アレが!?

あんなの得体の知れないただの着ぐるみやる!!

「まあヅラにとってはペットだからな。ペットって事にしといてやれ……」

「さ、さよか……」

銀時は肩を竦めてみせると、咲夜を見てそう言った。

「銀さん、アレはどう見てもエリザベスさんですよ。何でこんな所にいるのかわからないですけど……」

やっぱり合わせた方が良かったですよ桂さんに」

「せやなあ……よう分からんけど、アレが自分らと同じように向こうの世界から来たんなら、何か知ってるんと違つか?」

新八の意見に咲夜もまだ首を捻りながらも銀時に言った。

「まあ、そうだなあ……」

仕方ねえ。俺ア今からヅラ連れて来っから、オメーらはここからエリザベス見てる」

「え?連れて来るって……」

新八は後ろを振り返るが、銀時は既にバイクにまたがっていた。

「んじゃ見失うなよ」

「あ、ちょっと銀さん――！」

ブローブローブ……！！

銀時は片手を上げると、そのまま走り去っていった。

「なあメガネ……」

「ハイ？……つい新八って呼んでくれませんか？」

「自分らの世界……中々賑やかそうでお面白そうやなあ　うちも行つてみたいわ」

咲夜は、道行く人に宣伝を看板にしているエリザベスを見ながら楽しんでに言った。

「賑やかかもしれないですけど

……大変ですよ？」

「さやか？楽しそうやけどなあ」

「歌舞伎町には変な人多いから」

新八はそう言って笑うと、視線をエリザベスに戻した。

*

く愛沢家く

ガチャ……

「ふむ。今日はいい空だな」

屋敷の扉が開くと、桂が嬉しそうに空を見上げて出てきた。

「しかし、エリザベスの奴……
元気にやっているか…真撰組に捕まってはいるか…」

桂は外に出て、先程銀時達が言っていた事でエリザベスの事を思い出しながら歩いていた。

「エリザベスの為に俺も元の世界に帰れる方法を探ってみるか……」

「アレ、桂さん？」

「ん？」

桂が振り返ると同じ苗字であるヒナギクが歩いて来た。

「おおヒナギク殿。もしかして貴殿も肉球の香りに誘われてここに？」

「いえ……単に生徒会の用事の帰り道です？」

桂さんはどうして？」

ヒナギクが尋ねると桂は少し寂しそうに空を見上げた。

「何、少し歌舞伎町まじゅうに置いてきたペットの事を思い出していな」

「へえ……ペット飼っていらしたんですか」

「うむ。名をエリザベスと言ってたな。俺達は片時も離れる事が無いくらい互いを信頼し合っていたのだ。無論今もな」

桂は腕を組んでウンウンと頷いてみせる。

「そうなんですか。だったらきつと彼女も不安がってるでしょうね」

「彼女じゃ無いエリザベスだ」

「え……エリザベスって雌の名前じゃないんですか？雄なんですか

「？」

「雄じゃ無いエリザベスだ」

「……………えつと??？」

ヒナギクが桂の意味不明な発見に首を傾げていると、何処から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「ヅラ、危ねえぞ……………」

ドン！！！！

「ぐぼおっ!?!」

かと思うと、いきなり桂は吹き飛ばされ、バイクに乗った銀時が入れ替わりになった。

「か、桂さんんん!!!?」

「おゝ飛んだ飛んだ」

簡単に言えば銀時が桂にバイクで突っ込んだのである。

「ちょっと銀時!?!あなた何やって……………」

「あん?何でオメーがこんな所いんだ?」

「それはこっちのセリフよ!!!」

あなた今、桂さん轢いて……!!
今の当たりだと下手したら……」

ヒナギクは慌てて桂に駆け寄ろうとするが、銀時はやる気の無さそうに口を開く。

「あゝ大丈夫大丈夫。アイツあのくらいじゃ死なねーから。
な、ツラ？」

「づ……ツラじゃ無い……桂だ……」

銀時が声をかけると、前方のツラが生まれたての子馬のように何とか立ち上がった。

「ちよつ、桂さん！？大丈夫なんですか!？」

「フツ……武士たる者、この程度の事で……根をあげる訳にはいか
んのだ……」

「いや、この程度って……?」

ヒナギクは驚きを通り越して呆れていた。

「んじゃ、行くぞツラ」

「ちよ、何をする銀……痛たたた、痛い痛い!？」

すると銀時は桂の後ろ髪を掴んで、そのままバイク走らせた。

「ちよつと銀時!？」

「じゃあなヒナギク。交通事故に気をつけるよ」

「あなたが言う資格無いわ!!」

銀時は桂を引きずって走り去って行った。

*

く 駅前通り

「しかし、どうしてエリザベスさんがこの世界に居るんだろう?」

「そういえば自分ら、どうやってここに飛ばされて来たん?」

咲夜は前から疑問に持っていた事新八に尋ねた。

「えっと……何て言うか」

ブロロロ……！！

「あ、銀さん！」

バイクの音に新八が振り返る。

若干返事を誤魔化すような形となったが。

「よオ、待たせたなばつつあん」

「痛たたたた！！痛い痛い！！いい加減にしる貴様ア！！」

桂を掴んだまま銀時がバイクから降りてやって来た。

桂は堪らずに銀時の手を退かすと、新八や咲夜に気が付いた。

「新八君に咲夜殿まで……！！一体何事だ？」

「もう説明面倒だからそのまま行きましよう！」

新八は桂の背中を押しながらキャバクラの前まで歩いていく。
その後ろから銀時と咲夜も続く。

「だから一体何だというのだ……！ちょっと、あまり押すー」

「エリザベス！！」

新八は桂の後ろから叫ぶと、客の呼び込みをしていた生物が振り返った。

そして桂と目が合う。

「エ、エ、エリザベス……！！」

「か、か、桂さん……！！」

互いに物凄い動揺をみせる。

エリザベスの看板も見て分かるほど震えている。

「エリザベスううう！！」

「桂さんー！！」

そして二人はガツチリとバグし合った。

その様子を微笑ましそうに見つめる新八と咲夜。銀時まあ良かったなと息をついた。

*

（愛沢家）

暫くの感動の再会を終えた後、一向は咲夜の家に戻って来た。

勿論エリザベスに話を聞く為である。

「一体どうしてエリザベスさんは異世界いしよにいるんですか？」

「そうだエリザベス。お前は確かあの日、志士達の会合に先に出ていた筈だろ？」

早速新八と桂が尋ねると、エリザベスは看板を取り出して語りだした……

『ええ、実はあの日……』

（志士会合）

ガヤガヤ……

二十畳分の広さの和室には現状を話し合う攘夷志士達の姿。

そして一番前にはエリザベスが正座(?)をして桂を待っていた。

ガラツ……!!

「大変です!! エリザベスさん!」

『どうした?』

飛び込んできたのは一人の攘夷志士だった。

「先程桂さんを見かけたのですが、何やら血だらけで走っておられました!! 何者かに襲われたのかも……!!」

『桂さんは自分が見てくる。皆はここに残ってて』

「……………わかりました!!」

そんな訳で会合を途中で抜けたエリザベスは真っ先に思い付いた場所に向かう事にした。

無論、万事屋だ。

そして万事屋にたどり着いたエリザベスは、光輝いている二階に気が付いた。

急いで二階の万事屋に上がっていくエリザベス。

ガラッ…!!

『……………!?!』

引き戸を開けると、万事屋の広間から強烈な光の球が浮かんでいた。

『桂さん……………!!』

エリザベスは第六感からその球体に飛び込んでいったのだった…

—————

『そして気が付いたらこんな世界に……………そして今まで色々なお店でバイトをしてきたという訳で…』

「そうか。そんな事が……………」

桂達は納得したように何度も頷いていた。

「でも良かったですよ!! こうしてまた会えたんだから。ですよ、エリザベスさん!」

新八がそう言って後ろからエリザベスの肩(?)を叩こうとすると、

バツ！！

「ぎゃあアアアア！！」

エリザベスはいきなり日本刀を後ろに振り抜いた。

「ちよつとオオオオ！？何するんですかアアア！！」

『オレの後ろに立つな』

「うるさいよ！！前だか後ろだか分かんない身体してる癖に！！」

えらくダンディーな表情になっているエリザベス。

そんな様子を見て咲夜は声をあげて大笑いしていた。

「アツハツハツハツハ！！」

ホンマに面白いな、自分らの世界の連中は」

「いや、笑い事じゃねー時も多々あるけどな」

銀時は頭を掻きながら溜め息混じりに言う。

しかし咲夜はそんな事はお構い無しだとエリザベスに目を向けた。

「自分、行く宛て無いならウチに居候するか？」

「ほ、本当か咲夜殿！？」

『良いんですか？』

桂とエリザベスは驚いて咲夜に振り返る。
勿論、銀時達もである。

「ウチは面白い事や奴が大好きやねん！！何か自分は面白い匂いにするんや！」

「んなテキトーな理由だけで…大丈夫なのか？」

銀時も気だるそうに頬杖をつきながら尋ねるが、咲夜は何の躊躇いも無く頷いてみせた。

「ウチは思ったらすぐ行動する性格やからな。それに小太郎の友達なら側にいとつた方が良いやろ？」

「……………ありがとう咲夜殿！！」

『ありがとうございます！！』

桂とエリザベスは咲夜に深々と頭を下げる。
そして桂はエリザベスに振り返った。

「エリザベス、改めて紹介しよう。俺が世話になっている愛沢咲夜殿だ。本当に色々世話になっているんだ」

『咲夜さん、これからお世話になります』

「ん。よろしくな、エリザベス」

咲夜とエリザベスは握手を交わした。

こうして、またこの世界に新たな（？）仲間が加わったのであった。

「つーか銀さん。エリザベスさんの話だと、まだこっちの世界に飛ばされている人がいるんじゃない……」

「いや、もういいだろ……」

恐らくいないと思われま……

第七十訓 忘れた頃にやって来るアイツ（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「オイオイ…まさかのエリザベスまで参入かア？まだ増えるなんてことはねーよなア？」

新八

「恐らく無いと思いますよ。」

作者もエリザベスはツラのポケを引き立たせるには不可欠だっと思っただけ投入したのであって……まあ、話に不可欠な存在があるなら別だと思えますけど」

銀八

「作者は何考えてるか分かんねーな……まあいいや。最初の質問『美希とハヤテに質問。一番切なかった動画は？』」

美希

「薫先生のやつだな。頑張ってるな〜って感じが」

ハヤテ

「僕は銀さんと長谷川さんです……他人事に思えない所が、特に……」

銀八

「続いての質問『霧崎と白井に質問。好きな女性のタイプは？』」

白井

「自分は幾つかの顔を持つてるような人が良いですね。仮面ばかりで本当の素顔は分からないような……」

霧崎

「俺アうるさくない奴だ」

白井

「先輩、まだあの事引きずってるんですか？いい加減忘れましょうよ」

霧崎

「何テキトーな事言ってるんだテーマは！！ナイナイ、何もねーからな！？」

銀八

「んじゃラスト。『作者に質問。恋愛ものは好きですか？嫌いですか？』」

伽藍

「恋愛ものは普通に好きですよ。よく読みますから」

銀八

「んじゃ、今日はこの辺で終了」

マリア

「次回もよろしくお願いしますわね」

第七十一訓 些細な変化にも気付くのが執事

〔白皇学院〕

「……………はあ」

溜め息をつきながら白皇の門をくぐったのは、ハヤテである。

隣には……………案の定ナギの姿は無い

「結局お嬢様は欠席……………何だかんだで甘やかしてしまっただよな……………今朝もマリアさんに怒られてしまったし……………よし、もう少し厳しくいかないか!」

ハヤテはグツと拳を作ってやる気を出した。

タタタタッ!!

「ん?」

すると、後ろから走ってくる音。ハヤテが振り返ると……………

「ヒナギクさん!」

「……………え?」

ヒナギクがハヤテの前を通り過ぎようとして、気付いたように足を止めた。

「あ、ああハヤテ君。おはよう」

「おはようございます。珍しいですね、こんな時間に。もうすぐホームルームですよ」

そう。普段のヒナギクならば生徒会の仕事やら剣道部の朝練やらで早い時間に登校する事が多い。でなくとも、こんなギリギリの時間に登校してくる事はまず無い。

「え、えっと、ちょっと寝坊しちゃってね？じゃ、私は生徒会があるから！」

「あ、待って下さいヒナギクさん!？」

ヒナギクがそう言って、また走っていつてしまいそうになるのをハヤテは止めた。

「時計塔、反対方向ですよ？」

「え？あ……そうだったわね？私とした事が」

ヒナギクは慌てて顔の前で手を振ると、

「じゃ、またねハヤテ君！」

「あ、ちょっと!！」

今度は反対側の時計塔の方向に走って行ってしまった。

明らかに挙動不審である……

「……………」

ハヤテはその様子を咄然と見送るが、ふと気付いたように口に手を当てて考え込んだ。

(あの手……何であんなに傷だらけに……?)

ヒナギクの両手は絆創膏やテープリングが沢山貼ってあったのだ。

ハヤテが先程一瞬見ただけで、指は勿論、手の平から手の甲まで至るところに。

(遅刻ギリギリに来るなんてヒナギクさんじゃあり得ないし、時計塔の方向を間違えるなんて尚更……どうかしたのかな?)

キンコンカンコン……

「あ、マズイ!僕も急がないと!」

ハヤテは考えるのを中断すると、校舎に向かって走り出した。

第七十一訓

些細な変化にも気付くのが執事

〈食堂〉

「何？桂の様子が変？」

「うん。朝は寝坊したとかで遅刻ギリギリに登校してたし、何だか挙動不審でおまけに手も傷だらけだったんだ…」

お昼時の食堂は小中高と様々な生徒で溢れかえっている。そんな中、隅のテーブルにはハヤテ、幸久、真司が座って昼食をとっていた。

「寝坊に傷だらけの手ねえ……
もしかして夜な夜な町を徘徊して、ストリートファイトに明け暮れ
……」

バコッ！！

「そんな訳があるか戯け。大体何じゃ夜な夜なストリートファイト
つて……」

真司は扇子で幸久を叩いて突っ込む。

「つつつつ……まあストリートファイトというのは比喻だが、」

「「どんな比喻だよ……」」

「とにかく俺が言いたいのはアレだ……」

幸久は手を宙にさまよわせて、言葉を探す。

「よくあるだろ。ズボンをダブダブに着て襟足伸ばしまくったり、
スカジャン着て髪型を何か物凄い事にしたたり、タバコとか吸って町
に迷惑をかける……何だっけ

やゝやゝヤ チャー！！」

「ヤンキーじゃ。つーか何でそんな単語も出てこんのじゃお前は……」

真司は呆れてそう言うと、お茶を啜った。

「そうそう。そのヤンキーになっちまったとかじゃないか」

「ヒナギクさんが？不良に？
そんな事あるわけ無いじゃないですか」

ハヤテはナイナイと手を振って笑ってみせる。

「いやいや、分からんよ？」

真面目な奴ほどそういう道に走りやすいっていうだろ。傷だらけの
手の甲も喧嘩の跡かも……………」

「だからってそんな……………」

「まあ人間というのはそう簡単には変わるものではないが、些細な
きっかけで変化してしまう事もあるからな……………もう一度話してみ
たらどうじゃ？」

再三あり得ないと首を振るハヤテに真司がそう提案した。

「そうですね……………放課後に生徒会室に寄ってみますよ。では二人と
も、お先に」

「おう、頑張れよ」

ハヤテは一足先に食事を終わると、食器を片付けにカウンターに向
かった。

*

生徒会室

「うむ……おかしいですね」

「確かに変よね」

生徒会のテーブルには読書ラノベをしている千桜と紅茶を飲んでる愛歌が向かい合っていた。

何やら考え事をしているようだ…

ガチャ…

「あの、すみません…」

「「？」」

生徒会室の入口が遠慮がちに開くと八ヤテが顔を覗かせた。

「ヒナギクさんいらっしゃいますか？」

「ああ、綾崎君か。ヒナならたった今帰ったよ」

千桜は本を閉じると、生徒会長の机を指して言った。
机にはやり残したらしき資料と空の椅子……

「ええ！？帰ったって……もうですか!？」

「ええ。最近……と言ってもここ3日の話ですけど、会長は顔を出したかと思うとすぐ帰ってしまうのよ。仕事は来週までだから何とかなるだろうけど……」

愛歌はそう言って紅茶を啜ると、クルリとハヤテに振り返った。

「綾崎君……何かした？」

「ええ!？」

彼女の目をSモードにしながらゆっくりとハヤテに近づいていく。

「してませんよ!？僕は何も……」

「本当に? (黒笑)」

「あう……多分」

ハヤテは小さく丸くなりながら何とか答える。
反面愛歌は楽しそうである。

「まあまあ愛歌さん。今はイジメてる場合じゃ……」

「そうねえ」

少し残念そうに愛歌はハヤテから離れると、またテーブルに座った。

「でも綾崎君から見て、何か気になった事はありません？」

「え、気になる事ですか？そうですね……手が傷だらけだったんですよ」

「手が……？」

ハヤテの言葉に千桜と愛歌が顔を見合わせる。

「まさか……度重なる綾崎君のデリカシーの無い態度に……遂に暴力を……」

「いやいやいや！？何故そうなるんですか愛歌さん！！」

ハヤテは慌てて首を振ると、愛歌の言葉を否定した。

「まあそれは冗談としても……」

何か深刻な悩みがあるのかも……」

「悩み……」

暫く口に手を当てて考えた後、ハヤテはもう一度愛歌と千桜に目を向けた。

「あの、ヒナギクさんが帰られたのってたった今ですよね？」

「ああ、綾崎君が来る五分位前だよ」

「だったら、僕は今からヒナギクさんを探して来ます！」

ハヤテがそう言うと、愛歌はティーカップを置いてクルリと椅子を回して背を向けた。

「女性は些細な事でも傷つきやすい生き物だから、気をつけなさい……健闘を祈るわ」

「ハイ、ありがとうございます愛……いえ、ラヴ師匠!!」

フツと微笑する愛歌に一礼すると、ハヤテは生徒会室から走って出ていった。

「……………良いんですか？あんなテキトーな事言って……………」

「だって……………そっちの方が面白そうじゃない？」

（相変わらず……………さだなあ……………？）

千桜はため息をつくとき、また読書ラノベをし始めた。

*

時計塔をでて長く広い敷地を駆けてゆくハヤテ。

回りの木々を揺らしながら、最短距離で正門までたどり着くと、ちよつど前方に見慣れた桃色の髪が見えた。

（あれは……ヒナギクさん）

ヒナギクはハヤテには気付かず正門を出ていく。

（少し気が引けるけど……追ってみよう）

ハヤテはヒナギクの後をつけていく事にした。
が………

ヒナギクが一つ道を曲がる

（アレ？）

ヒナギクがまた道の角を曲がる

(え……?アレ……?)

ヒナギクが歩いて行く度にハヤテは疑問を覚える。

(ヒナギクさん……家と反対方向に行ってる……)

いつの間にか周りは住宅街が少ない地域になっていた。

(部活も行かず、生徒会にも行かず、家にも帰らず……ヒナギクさん、まさか本当に不良に!!?)

ハヤテの脳裏には白ランを着て暴走族をまとめるヒナギクの姿が浮かんでくる。

(……!!)

暫くすると、前方には川原が広がってきた。川の前には小さい林が広がっている。

ヒナギクは砂場に降りると、川を目指しているのか林に入っていく。

(川原に入っていく……ここが不良のたまり場!? 真実を確かめないと……)

ハヤテもグツと息を呑むと林に入ってしまった……

……

「フウ……フウ……」

「大丈夫？おろすよ？

せいの……」

ドン……！！

ヒナギクと見知らぬ少年が大きな岩を川の前の地面におろした。二人で何処からか運んできたのだろう、二人とも手が傷だらけである。

「やった！これでお父さんが出来るぜ！」

「ええ、この石が一番下にくれば大きいのが出来るわね。

さあ、もう一息よ」

「うん！」

少年は嬉しそうにヒナギクに頷いた。

その様子を後ろの林から覗いて驚いたように目を見開いて立ちすくむハヤテ。

なぜなら、二人の目の前にはヒナギクより高い石が数段積み重ねられた像が二つ立っていたからだ。

高い方の像には女性の顔が、隣の小さい方の像には少年の顔が書いてあった。

(1)……これは!?)

「明日には見せられそうね」

「うん、これだけ大きいの作ったんだ!お父さんもお母さんも仲良くなってくれるよ」

二人は像をそれぞれ見ながら顔を見合わせた。

更に地面に置かれた石には男性の顔が書いてある。

「ありがとう。お姉ちゃんが手伝ってくれなかったらこんな大きな無理だったよ」

「どういたしまして。でも面白いおまじないね。ユウ太君のお父さんが教えてくれたの?」

ヒナギクがそう尋ねるとユウ太と呼ばれた少年は大きく頷いて口を開いた。

「俺ん家さ……よくこの川原でキャンプしてたんだ。キャンプやるときはいつも楽しくてさ。」

その時にお父さんが教えてくれたんだ……こうやって石を積んで願い事をすれば必ず叶うって」

ヒナギクは話を聞きながら、ユウ太は思い出を話しながら、二人は石を持ち上げて積んでいく。

「実際、俺の願い叶ったんだぜ!欲しかったサッカーシューズ買っ

て貰ったんだ。
だから……だからよ……」

二人は頑張つて真ん中の高さまで石を積もつとする。

「今度は、俺のお父さんとお母さんが……また仲良く一緒に暮らせるように願ひ事をするんだ。
今は……別々の家に住んで離ればなれだけど……この石にお願いすればきつと叶うんだ」

何とか石を真ん中の高さまで積むことが出来ると、ヒナギクはユウ太の肩に手を置いて……

「大丈夫。ユウ太君が一生懸命作つたんだから絶対に叶うよ。

……私が、保証する」

そう言つてニッコリと微笑んで見せた。

「さあ、もう一頑張りよ！」

「うん！」

ハヤテのゆっくりと安堵したように二人を見つめていた。

（何だ。何にも変わつて無かつた……）

あの子の事が気になつて他の事が目に入らなくなつてたんだ……）

二人は最後の顔が書いてある石を持ち上げて、積み重ねた石達の最上

段に乗せようとしている。

（多分最近出会った子なんだ……やっぱり、ヒナギクさんはヒナギクさんだった。）

困った人を放って置けない、いつものヒナギクさんだ）

そしてついに石が上手く積みまれて一番高い像が出来上がると、二人は手を合わせて喜んだ。

夕日を背景に、お父さんの像、ユウ太の像、お母さんの像が三人仲良く並んでいる。

まるで、願いが叶う事を約束してくれたように、夕日が川に反射して綺麗な光が喜ぶ二人を照らしていた。

2日後……

（白皇学院正門）

「うっ……学校やだ」

「お嬢様……昨日もサボったんですから今日は絶対行きますよ」

正門前で足が止まっているナギにハヤテが首を振って答えていた。

タタタタッ！！

「おはよっ！！ハヤテ君、ナギ！！」

「む、ヒナギク……」

「あ、おはようございますヒナギクさん！」

すると、後ろからヒナギクが元気にこちらに走ってきた。

「ナギ、もう正門前なんだから観念して学校に入りなさい」

「うっ……分かってるのだ」

ナギは流石に観念したのか、ゆったりだが歩きだした。

「じゃ、私は生徒会があるから先に行くね！」

ヒナギクはそう言って正門をくぐるうっ……

「上手く、いったんですか？

ヒナギクさん」

「！」

ハヤテの言葉にヒナギクは振り返った。それは……

「うん！あの子の家族、また三人で暮らすんだって！」

満面の笑顔だった。

「それは良かった！では、僕達もこれで……」

ハヤテは満足そうに頷くと、渋るナギを引いて正門をくぐって行った。

「って……アレ？何で私……」

いきなりハヤテ君に言っても分からない筈なのに……」

残されたヒナギクはオヤ？と首を傾げるが……

「ま、いつか。放課後にでも聞いて貰おう」

そう言うと、彼女も正門をくぐって行った。

その日は一日中、雲一つない綺麗に澄みきった青空であった……

第七十一訓 些細な変化にも気付くのが執事（後書き）

銀八

「フー訳で今回は『金色のガッシュ！！』の第七巻、58話『スズメの異変』フー話のパロでした。
スズメの役をヒナギクにして、清麿の役をハヤテにしたわけだ」

新八

「ちよつと大丈夫なんですか？勝手にこんな事やって」

銀時

「たまには良いんじゃないの？
作者の好きな話らしいしさ」

神楽

「私も活躍させて欲しいアル！！」

銀時

「その点も心配ねーよ。ヒナ祭り祭までは色んなキャラに視点を当てて話をやるらしいから。」

初回がナギ、その次がワタル、
次がエリザベスとツラ、そして今回がヒナギク、んで次回はお前らしいよ」

神楽

「マジでか！！キャッホオオオ！！嬉しいネ！！ありがと銀ちゃん！！」

銀時

「俺に言つな」

新八

「ちよつと待って下さい!？」

それって僕も入ってますよね!？」

銀時

「……………」

新八

「アレ?何で黙るの?何で目を合わせてくれないんですか?」

銀時

「……………質問コーナー行くか」

新八

「オiiiiiiiiiiii!」

教えて!!銀八先生

銀八

「んじゃ、最初の質問『作者に質問。高杉と神威は好きですか?』」

伽藍

「別に普通です。ただ二人の順位はおかしいですね。高杉が4位なんてもろ女子ランキングでしょ、あんなの……………」

銀八

「オーイ、高杉ファンに殺されるぞ。んじゃ次の質問『エリザベスに質問。バイトでどれくらい儲かった』」

エリザベス

『あんまり……』

桂

「気にするなエリザベス。これからは俺もついているんだ。共に頑張っ行ってこうではないか！」

エリザベス

『コクコク！』

銀八

「続いての質問『作者に質問。今後銀魂キャラが出る？』」

伽藍

「重要な人物としてヒナ祭篇から登場するキャラはいます。真撰組は続編でハヤテ達と絡ませる予定なので、この小説には出ません。他のキャラについては未定です。どうしても出して欲しいという意見が幾つかあれば考えてみるかもしれませんが。が基本的にはありません」

銀八

「次はこんなんだな。『咲夜と千桜に質問。エリザベスを見てどう思った？』」

咲夜

「着ぐるみやな……」

ハル

「着ぐるみですね」

桂

「着ぐるみじゃ無い、エリザベスだ」

咲夜

「目覚ましや小太郎。どう見ても着ぐるみや」

桂

「着ぐるみじゃ無いエリザベスだ!! エリザベスはエリザベス以外の何者でも無いエリザベスなんだ!」

ハル

「……………そもそもエリザベスって何なんですか?」

銀八

「んじゃ、本日はこの辺で」

神楽

「次回もよろしくアル!!」

エリザベス

『チエケラー!』

第七十二訓

桃栗三年柿八年

それは一人の少女の発言から始まった。

〈三千院屋敷〉

「なあ、柿食いたくね？」

「カキアルか？」

「……………」

日もまだ高い昼間、広間のカーペットでダラダラしながら三千院ナギはそんな事を呟いた。隣には神楽が特にする事も無く座っている。

「えっと…………カキというと貝類の……………」

「そうじゃ無くて木に成ってるヤツだよ」

マリアは困ったようにナギを見た。

「えっと…柿は冬の季節の食べ物ですよ？今はちよつと…」

「知ってるけどそこを敢えて？みたいな？12月1月の柿を敢えて

遅れたこの時期に食べる。

なんと言うか、神をも恐れぬ恐るべき所業だと思わないか？」

「思いません、そんな禁忌の錬金術じゃあるまいし……？」

グツと拳を作って見せるナギにマリアは呆れながら言った。

「いやいや、そこを更に敢えて、みたいな？」

「確かに逆にこの時期にカキは逆に風情があるアルな」

「逆について二回言って元に戻ってますよ？」

神楽も賛成だと立ち上がってナギを見た。

「おお！分かってくれるか神楽！」

「勿論ネ！！今の時代はカキアルな！」

勝手に盛り上がっている二人。

すると、マリアが何かを思い出したように口を開く。

「そつえば、三千院家の庭には年中美味しい柿が食べられる……
伝説の柿の木があるらしいんです」

「伝説の柿の木？」

「ええ、そのようなものがあると、以前聞いた事が……」

マリアは頬に手を当てて思い出すように話す。

「で…伝説の柿の木って……
もしかしてそれは、その木の下で告白とかすると恋が実る的な伝説もついでにあるタイプの木なのか!?!」

「いや……そういう何かからもインスパイアされてないオリジナリティー溢れる設定があるかどうかはわかりませんが……」

マリアはナギを見ると苦笑しながら言った。

「ただその柿の実を手に入れるには……とほうもない困難を乗り越えなくてはならないらしいんですよ」

「分かったアル!!」

急に神楽が立ち上がって拳を突き出した。

「「え……?」」

「その伝説の柿の実とやら、私が取って来るネ!!!」

高らかにそう宣言した神楽であった。

第七十二訓

桃栗三年柿八年

屋敷の前の庭ではハヤテが箒を片手に掃除をしていた。

「ふんぶん」

ビュン！！

「！！！？」

鼻歌混じりに箒を動かしていると、ハヤテの横を何かが物凄い速さで横切って行った。

「……神楽さん！？」

「！！！」

神楽は急ブレーキをかけると、ハヤテに気付いたのか振り返った。

「どうしたんですか？そんなに急いで……」

「伝説の柿の木から柿を取りに行くアル 柿を食べるネ！」

「え……柿？」

ハヤテは意味が分からないと首を傾げるが、そんな事はお構い無しと神楽はハヤテに背を向ける。

「んじゃ、私は行くヨ！」

「あ、ちよつと!？」

しかし、神楽は猛ダッシュで駆けて行った……

「伝説の柿の木アルか〜！
楽しみアルな！」

神楽はダッシュしながらそう呟いた。

マリアの話では柿の木は庭の一番東にあるらしい。
神楽は東に向かって全力で駆けていつてるのだ。

大きな林を越えて……
長い川を越えて……
軽い山を越えて……

たどり着いたのは、何故か更地と化した寂れた場所であった。
木々は枯れ果て、地面は悲しい音をたてて風に砂を巻き上げられる。

「おや……？こんな場所にお嬢さんが何の用じゃ？」

「！？」

神楽の後ろから現れたのは全身緑色で頭に触角の生えた老人だった。

「だ、誰アルか！？お前……それドラ　ンボ　ルのピツ　口の……」

「ワシは名も無き老人じゃ。それよりお嬢さんは何をしに？」

老人は神楽の危ない発言を止めると、先を促した。
神楽は取り敢えずここまで来た事情を説明した。

「そうかいそうかい。こんな遠くまで柿を食べに来て下さったとは……しかし残念ながら、この地は庭の西にいる悪の帝王プリーザの手によって焼け野原に変えられてしまいましたね……柿の木は恐らく奴が持っていったのか……もう」

「ぶ、プリーザ？」

「これが最後の一つです。良いですか一つだけで？」

老人は重箱から一つの柿を取り出して神楽に渡そうとする。

ガバツ！

「止めるよじいちゃん！！」

「これっ放しなさいテルテ！！」

いきなり小さな緑色の少年が老人に抱きついてきた。
少年は老人に必死に訴える。

「それは！！父ちゃんがとった最後の柿！！プリーザに殺された父ちゃんの形見じゃないか！！」

「黙らんかテルテ！！柿というのは食べる為に存在するのだ。食べられない柿など柿では無い！！」

しかし、老人は無情にもテルテを振り払う。

「タンスの中でただ腐っていくのと、美味しい食べてもらうのと、アイツはどちらを喜ぶと思う！！」

テルテは暫く俯くと、ゴシゴシと涙を拭って重箱を神楽に差し出した。

「と……父ちゃんの柿……味わって食べて下さい」

「……………」

*

「ふふふん

……ん？」

ハヤテが屋敷前の庭の掃除をしていると、右側から神楽が歩いてくるのに気付いた。

「……アレ？神楽さん？」

えっと、柿の木は見つかったんですか？」

「違いーヨ」

神楽はイライラしたようにそう言った。

「え？じゃあ何処に……」

「プリーザ倒しに行くんだヨ？」

ギンー！と思わず効果音が出そうな勢いでハヤテに振り返った神楽。

「え？プリーザ？え？柿を取りにいったんじゃないんですか？」

「食べるワケねーだろ、あんなモン。プリーザぶっ飛ばしてその後取ってくるんだヨ。アイツ絶対持ってんだヨ。次は絶対に取ってやるよコノヤロー」

神楽はイライラしたように傘をぶん回しながら、さっきと逆方向の西に向かっていった。

広大な林を越えて……

幅の大きな川を越えて……

急な山坂を乗り越えて……

たどり着いたのは、幾つもの崖が立ち並ぶドラールみたいな場所だった。

そして今神楽の前に立ち塞がるのはプリーザというプリーザ様と似た生き物だった。

「クククク……よもやこの私に挑んでこようとは……」

その無謀さだけは評価しよう」

プリーザはオーラを身に纏いながら宙に浮かんでいる。

「しかし私のこのパワーを目の前にしても、そんな態度がとれるでしょうか？」

では、見せて差し上げましょう。この私の……フルパワーを……！！」

そう言つてプリーザは腕を降り下ろすと、周りのオーラが比べものにならない程吹き出した。

「フフフ………どうですか？」

恐怖に声もあげられないようですね………」

神楽は鼻をほじりながらその様子を見ている。

「覚悟はよろしいですね………」

では………行きますよ……！！！！」

プリーザはグツと力を入れると、そのまま神楽に突っ込んで……

カッ……！！

「ぐああああ……！！」

「オラ、さつさと柿の木出すアル。オマエ持つてんだロ？焼け野原にしたんだロ？どこアルかオイ」

プリーザは苦しそくに身体をおこす。

「グツ……このプリーザ様がこんなエテ公にやられるとは……まさか貴様伝説のスーパー地球人」

「うるさいアル。つーかここが地球だよオマエが何者アルか？とにかく早く柿の木を出せヨ。イライラしてんだヨ、腹減って」

「イライラによって目覚めたスーパー地球人……まさか！！あの時たった一人で私に挑んできた地球人の娘……」

プリーザの後ろにはバーコードヘッドでノースリーブの太った親父が浮かんだ。

「いや誰アルかコレ。頭しか似てないアル」

「しかし、まさか貴様も同じものを捜していたとは……まあ良い。宇宙の帝王たる私を倒したことを称えてくれてやるっ」

プリーザは懐から何やらドロドロとしたボールを取り出した。

「ホラ、受け取れ」

「全然違うアル！！何アルかそれエエエエ！！柿よこせて言ったアル！！何でこんな気持ち悪いボールよこすアルか！？」

「それは又チャ又チャボールだ」

プリーザは苦しそうにまた横になると尚も続ける。

「七つ集めると又チャ又チャの龍が現れ何でも欲しいものを又チャ又チャにしてくれる不思議なボールだ」

「何で又チャ又チャなんだヨ。

ほとんど嫌がらせアル……」

「欲しいものがあるなら残り6つの又チャ又チャボールを集めて願いを叶えてもらうんだな。恐らく他のボールは中央の祭壇にいる奴が持っているだろう……」

「……………」

プリーザはそう言ってパタリと倒れて動かなくなった。

「……………柿一つの為にどんだけ面倒な事しなくちゃならないアルか。こんな茶番さつさと……」

神楽がそう呟きかけた時、後ろから何やらすすり泣く声が聞こえてきた。

「モスケエエエエエ！！目を覚ますってばよモスケエエエエエ！！」

「……………」

明らかに見た事があるオレンジ色の服を着たツンツン頭の少年が、意識が無い青い美少年を抱えて叫んでいた。

「一緒に枯ノ葉一の忍びになるって約束したってばよ……！

こんな所でおしまいなのかよ！

くそう、又チャ又チャボールさえあれば……！！！」

「……………」

*

「……………あの、神楽さん？
何やってるんですか？」

ハヤテはまた左側から歩いて来た神楽に半ば呆れながら尋ねる。

「モスケを生き返らせるんだヨ？」

「モスケって誰ですか！？柿取りに行つたんですよね！？
つか隣の誰ですか！？明らかにナル……………」

ハヤテは神楽の隣にいた黄色いツンツン頭を見て叫ぶ。

「よお！俺は田中！ワクワクするってばよー！！」

「田中！？全然ワクワクしませんよ！！そんな名前どこにでもありふれてるから！！」

「つか何で庭に知らない人達がいるの！？」

「うるさいアル女顔！！もしかしたらモスケが柿の木の場所を知ってるかも知れないネ！！」

「次こそ絶対に手に入れるネ！！？」

イライラMAXの神楽に女顔と怒鳴られ、ズーンとしゃがみ込んでしまうハヤテ。

そんな事はお構い無しに神楽達は庭の中央の祭壇に向かった。

蠢く森林を抜け……

雷平原を抜け……

きら きの塔を素通りし……

ようやく祭壇にたどり着いた。

百数段はあるであろう祭壇は、苔の生えた岩が数多くむき出しになっており、メキシコのユカタン半島にある海底洞窟のある遺跡を思わせた。

「フフフフ……」

「「！？」」

すると、上空からマントの男がゆっくりと降りてきた。

「ここまでたどり着いた事は誉めてやるっ……」

「お前は……パオス!!」

田中は上空を見ながらそう叫んだ。

「いや…パオスじゃ無くてダ スだろアレ……」

「違う!アイツはパオス!!」

数多くの星を滅ぼしてきたダ スの格好をした36才男性だ!!あの髪もカツラだ!!」

「ソレただのコスプレ好きのオッサンだろーがアアアアア!!」

パオスは地面に着地すると、手を二人の前にかざして不敵に笑った。

「貴様ら、このパオスレーザーを受けたく無いなら大人しく又チャ

又チャボールを渡せ」

「……………」

「ぐっ……………」

ジト目でパオスを見る神楽と悔しそうに顔を歪める田中。

「その沈黙は拒否と捉えていいのかな?フッフ……仕方ないそんなに死にたいならば望み通り殺してやるっ!!」

「……………」

「くらえ！！パオスレーズ……」

バキツ！！

「ぐおあああああ！！！」

「しつこいアル。もういいネ。

さっさと又チャ又チャボールよこせヨハゲ」

神楽は番傘を肩に担ぐと、パオスを見下ろして言った。

「この私を倒すとは……………まさか貴様、過去で私を瀕死においやり時空に飛ばした、エドワード・D・ゴリスンの子孫……」

「うるせーんだヨ。どうでもいいアル、そんな設定」

神楽は傘でパオスを叩きつけた。

「グフツ……………フフフ、良いだろう。望み通り、ボールはやるっ」

パオスは懐から又チャ又チャボールを6つ取り出した。

「そのボールで龍を呼び出し、私の願いを叶えてくれ……………」

私の願いは……………レイディントマイソジーにプレイヤー側で参加する事……………くぼあ……………」

「何でオマエの願いを叶えるみたいな話になってるアルか!？」

パオスは血を吹いて倒れてしまった。

「まあいいネ……とにかく今は7つ揃った事だし、早く龍を呼び出すヨロシ」

「行くつてばよ!」

神楽と田中は7つの又チャ又チャボールを揃えて、両手を天に掲げた。

「「いでよ、又チャ龍!―我が願いを叶えたまえ!―!」」

シーン……

「あれ?」

しかし何も変化が無い……

「どういう事アルか?ボールは7つ揃えたのに、何にも起こらないアルよ?」

「アリ?よく見たらコレ、又チャ又チャボールじゃねエ!!
他の6つは正真正銘又チャ又チャボールだ。でもこれは……」

田中はボールを持ち上げると目を見開いて叫んだ。

「ネチヨネチヨボールだ!」

「ほとんど同じだろーがアア!!」

神楽は田中にドロップキックをくらわせる。

「又チャ又チャと何が違うアルか!!」

「ネチヨネチヨするってばよ!!」

「オマエの感じ方の問題ネ!!」

ゴゴゴゴゴゴゴ……!!

すると、7つの玉が光を放ち出し中から何か飛び出してきた。

「ホラ、何やかんやでてきたアル。やっぱり全部又チャ又チャボールだったネ」

飛び出して来たのは全身又チャ又チャの巨大な龍であった。龍は二人を見下ろすと口をゆっくりと開いた。

「よくぞギトギトボールを集めた……」

「又チャ又チャでもネチヨネチヨでも無かったネ……もうこの際何でも良いアル、早くモスケを……」

「何だ、又チャ又チャじゃ無いのか。なら俺いいや」

「何でアルかアアアア!!」

「どんだけ又チャ又チャにこたわりがあるアルか!!」

田中はため息をついて残念がっている。

「どんだけモスケを又チャ又チャにしたいアルかオマエ。別にギトギトでも良いダロ、仲間なんでしょ?」

「いや、いや。ギトギトなら俺他のが良い」

「他のって何だヨ」

田中はグツと拳を突き上げると龍を見上げた。

「九楽のラーメンくれってばよ!!」

「オiiiiiiii!!」

ギトギトのラーメンってどんだけ恐ろしいもん注文してリアルか! !仲間見捨てて気持ち悪いラーメン選んでんじゃねーヨ!!」

「無し!!やっぱり今の無しな!!」

田中は慌てて龍にそう叫んだ。

龍は少し苛ついたように二人を見下ろす。

「早くしろ……私のギトギトが乾いてしまっただろうが……」

「ちょっと待つネ!!ギトギトの柿なんて貰っても……だったら何を……!!」

神楽は何かを思いついたように動きを止めると、龍を見上げた。

「最高の果実を手に入れるアル……」

*

ザッ……

「お嬢さん……」

神楽は先程の更地に戻ってくると、老人とテルテが振り返った。

「何故、ここまで来た……？」

「やっぱり、あの最後の柿の実……貰おうと思ってナ」

テルテは何とも言えない表情で俯いてしまう。

「分かってるアル。父ちゃんの大事な形見って事は……でも、形見なんてもう必要無いネ。父ちゃんがいれば」

神楽はそう言って口元を緩めた。

「ま……まさか……」

と、父ち……」

「そう。父ちゃんアル」

神楽の隣には全身ギトギトになった緑色の父ちゃんが……

「どこの父ちゃんだアアアア！何だこの又チャ又チャ！！」

「いや、又チャ又チャじゃなくてギトギトアル」

「死者を冒瀆するにも程があるじやろオオオオ！！」

「いやホントアル。ギトギトだけどコレ本物の……」

「「化物オオオオオオオ！！」」

*

ズーンとまだ落ち込んでいるハヤテの元に、フラフラと神楽が歩いてきた。

その表情はイライラを越えて疲れきっている。

「……あ、神楽さん。柿は手に入ったんですか？またどこか行くんですか？」

「ウン……」

神楽はハヤテの前で止まると、ゆっくりと頷いて口を開いた。

「ちょっとスーパー行って来る」

第七十二訓 桃栗三年柿八年（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ行くぞ〜」いじめられるのが好きな泉に質問。銀さんの世界のDS王子に会ってみたい?」

泉

「私別にいじめられるのが好きなんじゃないよ!?!?!」

銀八

「何言ってるんだオメー。コミックス九巻で自分で言ってるんじゃないか…」

一同

「ええ!?!」

泉

「わわわー!!!/!/違つよ!?!?そういう意味じゃなくて……」

美希

「まさか泉……自分から認めるとは……」

悪ノリ

理沙

「そつだったのか泉……」

悪ノリ

一同

「……………」

泉

「違うよ！？もう！！先生のせいで私皆から変な娘に思われちゃったじゃないですか！！／＼／＼」

銀八

「元々変な奴だからお前。とにかく質問に答えろ」

泉

「えっと、どんな人が興味があります」

一同

「やっぱり……………！！」

泉

「もう、一人の人としてだよ（泣）」

銀八

「次の質問な『姫史から質問。ナギ、神楽、咲夜に質問。前回のパロディは素直に認められるものか？』」

ナギ

「マズイに決まってるだろオオオオ！！バカ作者アアアア！！」

伽藍

「ぎゃあアアアア!!」

ナギ

「ヒナギクじゃ無くて私の出番を増やせ!!」

銀八

「そっちかよ」

神楽

「全くネ!! 雷句先生に土下座して謝れダメ作者アアアア!!」

伽藍

「いやあアアアア!!」

咲夜

「アツハツハツハツハ!!」

ウチはオモロイから有りや!!」

銀八

「次が最後だ」ツラに質問。 エリザベスの事を抜いて向こうの世界で心配な事は?」

桂

「ツラじゃ無い桂だ。

まあそうだな……やはり同志達の事が心配だな」

咲夜

「ああ、同じ攘夷志士の仲間……」

桂

「いや、マリオ達同志が新たなソフトとして勝手に発売されている
いかが心配だー」

バキッ！

銀八・咲夜

「うらあアアアアア！！！！」

桂

「ぐぼお！？」

銀八・咲夜

「たまにはまともな事言えやア！！クサレ電波バカ！！」

バキッ！ドカッ！グシャッ！！

桂

「俺達は…マナ力だ…」

銀八・咲夜

「うぜエエエエエ！！」

ナギ

「次回もよろしく頼むのだ！！」

第七十三訓 人生も紙芝居よろしく起承転結が大切だと思う(前書き)

クラウドの前書きの館！

クラウド

「良かった……久々にこのコーナー復活ですな」

新八

「って事はあの危ない小説は止めたんですね」

ハヤテ

「まあ、流石に……」

伽藍

「後書きの銀八先生のコーナーの後に載せました」

新八・ハヤテ

「載せたんかいイイイイ!!」

伽藍

「いやそれがさあ、結構反響があつてね。面白いつて声や連載しろ
くって声も沢山頂いて、んじゃやるかあ！みたいなね？」

新八

「いや、ね？って言われても……」

クラウド

「取り敢えず、そう言う事で始まります!」

第七十三訓

人生も紙芝居よろしく起承転結が大切だと思う

紙芝居屋……

今時そんな仕事をしているのはワシくらいのもんだろう……

四十年前はざらにあった仕事も、今は過去の遺産と化している。

だが、ワシは今もこうして各地を回り紙芝居屋をやっている。

自転車一つでこの東京を回り、早四十年……

誰がなんと言おうと、ワシはこの仕事に誇りを持っている。

商売の為じゃ無い、子供達が笑う顔が見たい……

ただ、それだけの為に……

そして、ワシがやって来たのは

この練馬区だった。

く負け犬公園く

「ハイハイ、皆！紙芝居屋の楽しい楽しい紙芝居が始まるよー」

老人が自転車を止めて、紙芝居のセットをし出すと、公園にいた子供達は動きを止めた。

「何だよ紙芝居屋って〜」

「ダッセー」

「オイ、向こう行って遊ぼうぜー」

しかし、ほとんどの子供達は老人を見ると笑って去って行ってしまった。

「……………はあ」

老人はそんな様子を悲しげに眺めてため息をつく。

（最近は全く子供が紙芝居に興味を示してくれなくなった……
やれテレビゲームだやれパソコンだと……）

老人が目の前を見ると子供は誰一人いない。

（いつもなら四五人は集まるモンだが……仕方ない、ここから出よう）

残念そうにセットを片付けようとすると、

「あ、終わっちゃっアルか？紙芝居？」

「？」

神楽がワクワクしたように老人に近づいて来た。

「お嬢ちゃん、紙芝居が見たいのか？」

「うん、見たいアル」

（一人でも楽しみにしてくれる子供がいるなら、全力で紙芝居をやるう……それが紙芝居屋よオ）

老人が紙芝居をセットし直すと、神楽は前に座った。

「んじゃ行くよオ、老いばね紙芝居屋の楽しい紙芝居の始まり始まり」

第七十三訓

人生も紙芝居よろしく起承転結が大切だと思う

「めでたしめでたし……」

老人は紙芝居を表紙に戻した。

「どうだった？楽しかったか？」

「うん、メツチャワクワクしたアル」

神楽の目はキラキラと輝いていた。

「そうかそうか。それは何よりだ。こんな時代だからな……お嬢ちゃんみたいなのはどんどん減ってしまった」

「じいちゃんは何で紙芝居屋をやってるアルか？」

「勿論、子供達の笑顔がみたいからさ。四十年前、脱サラしてこの紙芝居屋に転向してからというもの……子供達の笑顔だけが原動力でやってきたからなあ。」

紙芝居を見て笑う、駄菓子を食べる笑う……そんな子供達だね」

老人は何処か寂しそうに空を見上げた。

「じいちゃん明日もここに来るアルか？」

「え？」

「明日は友達連れて来るアル!!」

じいちゃんの紙芝居、もっと沢山の人に知って貰いたいネ!!」

「……………」

老人は暫く驚いたように神楽を見ていたが、すぐにニッコリ笑った。

「ああ、勿論。だったら明日もここに来るかな」

「約束アル!!友達には漫画を描いてる人もいるネ!!どうしたら紙芝居を盛り上げられるかアドバイスをくれるかも知れないヨ」

「ほほお、そいつは楽しみだ。
是非勉強させて貰うか」

老人は愉快そうに笑うと、駄菓子箱から何かを取り出した。

「ハイ、お嬢ちゃんにあげよう」

「わあ、水飴アル!!」

神楽は嬉しそうに割り箸にたっぷりついた水飴を貰うと、頬張り始めた。

「ありがとネ!!また明日アル!!」

「ああ、気をつけて帰んな」

老人は元気良く走ってゆく神楽を見送りながらゆっくりと微笑んだ。

(……好奇心でキラキラしている。今の子供達も皆こうならなあ)

老人は自転車にまたがると、公園を去って行った。

〳翌日〵

「オーイ、連れて来たアル!!」

老人が自転車を止めて紙芝居の支度をしていると、神楽がナギ、伊澄、新八を連れてやって来た。

「珍しいわね。ナギが外に出るなんて……」

「む、神楽に一流の漫画家の力を借りたいと言われたのだ。断る訳にはいくまい」

「へえ、紙芝居屋ですか。懐かしいですね」

三人は神楽に続いて老人に近づいていく。

「君達がお嬢ちゃんの友達か。」

わざわざ来てくれてありがとう」

「いえ。それにしても凄いですね、こんな時代に紙芝居屋なんて」

新八は大変でしょうと労いながらも感心したように言った。

「好きだからな。この仕事が……どうだい？四人とも紙芝居を見て
いってくれないか？」

「うむ」

「ええ、是非」

「よшきた！」

四人は紙芝居の前に座ると、老人は嬉しそうにセツトに手をかけた

……

*

「はあ、流石ですね。まるで聞き手を引き込むような朗読でした」

「話すのがお上手なんですね」

老人の紙芝居を見終わった一同は感嘆の声をあげる。

「ははっ、こつ見えても昔は朗読じゃ右に出る者はいないって言わ
れてたからね……でも、今の子供達にはもう通じないみたいだなあ
……」

「確かに朗読だけじゃこの時代の子供達の心を掴むのは難しいですよ。話はみんな知ってるものですからね」

寂しそうに言う老人に新八は難しそうに頷く。

「何か良い方法は無いアルか？」

「ふむ……簡単な話ではないか」

そう言つてナギは立ち上がつて老人の隣までいくと、一同を見回す。

「皆が知っているからダメならば、知らない話に変えれば良い話！私達で物語を書き換えればいいのだ！！」

ドーン！！と効果音がバツクから響きそうなくらいの勢いだ。

「でも書き換えて具体的にどうするの？」

「心配には及ばんメガネ」

「新八だつてんでしょ」

ナギは微笑して組んでいた腕をほどくと、紙芝居に指を突きつけた。

「それは、繋ぎ紙芝居だ！！」

「「「繋ぎ紙芝居？」」」

「ほお……」

首を傾げる三人と感心したように頷く老人。

繋ぎ紙芝居とは、各々が役割分の紙芝居を作ってそれを他人のと繋げて話を面白くする遊戯である。

例えば、全部で15枚の桃太郎の紙芝居ならば最初の3枚は普通通りだが、後の12枚を何人かで分担して独自の桃太郎の話を書き、順番に繋げていくのである。

この遊びの醍醐味は繋げなくてはいけない部分が意味不明になったり、途中から脱線したり、物語自体が繋がら無くなったりする面白さにある。

「というわけだ。これならば聞き手も面白いだけで無く、子供達も紙芝居に参加出来るというメリットも生じる。延いては子供達が外で遊ぶようになるのだ!！」

「おお！面白そうアル!！」

() (なるほど……引きこもりならではの観点だ(ね)!!!())

神楽は素直に目を輝かせていたが、新八と伊澄は感心しているのか馬鹿にしているのかよくわからない驚き方をしていた。

「いやあ、繋ぎ芝居か……その発想は無かったなあ。

お嬢ちゃんの言う通り、それはとても良い考えだ」

老人は微笑ましいようにその様子を眺めていると、口を開いた。

「早速今から作ってみないかね？お嬢ちゃん達の繋ぎ紙芝居を」

老人はそう言つて無地の紙とクレヨンを渡すと、三人は大きく頷いてそれを受け取った。

「じゃあ、『桃太郎』にしよう。最初の四枚は私が普通のを読むから残りを分けて作つておくれ」

「合点アル!! 私は最後を努めるネ!!」

「ならば私は最初だな」

「じゃあ私はナギと神楽を繋ぎましょう」

三人はそれぞれクレヨンを持って、紙芝居を作り始めた。

「ちょっと待つて!?! え? 僕は?」

「新八は非常口のライトを点滅する係アル」

「何そのどうでも良さそうな係!?! 非常口つて何処だよ!?!」

数十分後、老人と神楽達による、『桃太郎』が出来上がった。

「出来たアル!!」

「我ながら中々の出来だ」

「よし、じゃあちょっとやってみようか」

新八が紙芝居の前に座り、老人と神楽達がスタンバイした。

「それじゃ、『新説桃太郎』の始まり始まり」

【桃太郎】

朗読：老人

1

【昔昔ある所におじいさんておばあさんが住んでいました。ある日、おじいさんは山に芝刈りに……
おばあさんは川に洗濯に行きました】

2

【おばあさんが川で洗濯していると、上流から大きな桃が流れてきました。

どんぶらこ〜どんぶらこ〜

おばあさんは急いで桃を家に持ち帰りました】

3

【家に疲れたおじいさんが帰ってきました。

「婆さんや、喉が渴いた。水を一杯おくれ」

「じいさんや、それよりもっと良いものがありますよ」

おばあさんは大きな桃をおじいさんにみせました】

4

【桃を切ると、中から元気の良い赤ちゃんが出てきました。

「こりゃたまげた！」

「桃から生まれたから桃太郎と名付けましょう」

桃太郎はすくすく育っていきました】

―朗読：ナギ

5

【桃太郎が10歳になったある日、ふらりと東京ビツ サイトに出かけました。】

「…………え？ビツ サイト？え？

桃太郎だよねコレ？」

【立ち並ぶアニメコーナー、ところ狭しと並ぶ同人誌の数々……

桃太郎は将来同人漫画家になることを決意しました】

「何で同人！？どんだけ早くから目覚めてんの!？」

6

【来る日も来る日も同人誌に金をつぎ込む桃太郎を見て、おばあさんは桃太郎を叱りつけました】

「まあ当然だよな。この辺で桃太郎もしっかり……」

【しかし、桃太郎を庇ったおじいさんはおばあさんと大喧嘩を始めました】

「……え？アレ、ちょっと……」

【日頃のストレスも相まってか、二人の口論は止まらなくなりました】

「……もうおじいさん達の事はいいだろ」

【「何よ！！貴方はいつも仕事仕事って家事を私に押し付けるくせに、こんな時だけ口出しして！！」

「黙らんか！！誰のお陰で飯が食えると思ってるんだ！！
そんなに気に入くないのならこの家を出ていけ！！」

遂に二人は離婚しました】

「オイイイイイ！！どんだけ突っ込んでんの！？何か取り返しのつかない事になっちゃったよ！？」

7

【結局、おばあさんの方に親権をもっていかれたおじいさんは山に籠り二度と俗世には出てきませんでした。おばあさんも間もなく病がたかって床に伏す生活が続きました】

8

【数年後、おばあさんに遂にお迎えが来るときがきました。

おばあさんは亡くなる直前に桃太郎に言いました。

「桃太郎や……何だかんだ言っても私はお前の夢を応援する。鬼ヶ島という所にあの伝説の同人漫画家が使ったと言われる幻のGペンがある。それを手に入れなさい」

「え？ばあちゃん何でGペンの事を……漫画は嫌いじゃ無かったの？」

桃太郎がおばあさんの手を握って言うとフツと微笑しておばあさんは床の裏から原稿と下書きを取り出した。

「血は争えないわね……結局お前も漫画家の道に走るとは……」

「これは……初の1億部を突破した伝説の漫画……まさかばあちゃんか……！」

「桃太郎……良い漫画家に……なり……な……」

「ばあちゃアアアアアん……！」

そう言い残しておばあさんは息を引き取りました。

こうして、亡きおばあさんと漫画家になるという夢の為に鬼ヶ島に旅立つことにしました】

「長エエエエエ！無駄に長いんだよ！！いらねいだろこね件丸々……！」

朗読：伊澄

【犬さんのお話……】

犬さんは沢山走りしました。

でもいくら走ってもご主人様の所にはいけません。それでも犬さんは走り続けるのです】

「アレ、ちょっと何これ？」

10

【猿さんのお話……】

猿さんは沢山木登りをします。

どんな高い木もするする登ります。

でもどんなに高い所に登っても、あの青空には届かないのです】

「いや、だからちょっと……」

11

【キジさんのお話……】

キジさんはどんな高い所もスイスイ飛びます。広い青空も自由自在、

広げた翼で縦横無尽……】

でもどんなに高く飛んでも、あの太陽には近づけないのです】

「……………」

12

【こうして、犬猿キジを仲間にした桃太郎は鬼ヶ島へと向かいました】

「どうしてだアアアア!!」

「何で仲間になつてんの!? 何したの桃太郎!? 何もしてないよね!」

【鬼ヶ島に待ち構える鬼さん達はとても恐ろしい形相で迫ってきましたが、桃太郎は犬さん、猿さん、キジさんと協力して何とか退治する事ができました】

「ああ、何とかまとまつたんですね」

―朗読：神楽

13

【あの鬼ヶ島の戦いから十年の月日が流れた：平和だった地球も連合軍とジフト軍との宇宙戦争の戦火に例外なく巻き込まれることになった……】

「宇宙戦争!? たつたの十年で宇宙!？」

【コロニーで平和に漫画を書いていた桃太郎もその戦火の渦に引き込まれ、気が付けば彼は地球連合軍の軍人として、また連合軍のエンジニアパイロットとなっていた】

「桃太郎だよ!? 分かつてるこれ桃太郎なんだよ!？」

14

【戦局は当初ジフト軍の有利に進んでいたが、中間のバルメティアの戦いを機に連合軍が押し返し、今や膠着状態となっていた】

「バルメティアって何だよ!？」

何その厨二臭い設定!!」

15

【エースパイロット桃太郎は地球の隣の舞台デキントウエに向けて最後の決戦に出向く。しかしそこで告げられたのは衝撃の真実……

「久しぶりだな……我が息子よ」

「じ、じいちゃん!？」

何故生きているおじいさん!!

彼により語られる最悪の人類絶滅計画とは……!？」

16

【次回に続く】

「オiiiiiiiiii!!」

新八の突っ込みが合図のように、神楽は紙芝居を表紙に戻した。

「何が次回に続くだ!!紙芝居で何で完結させないんだよ!!丸投げだろソレ!!」

「いや、中々素晴らしい話だった。次回が是非気になるな」

「流石ね神楽」

ナギと伊澄は目をキラキラさせて神楽の朗読に聞き入っていた。

「オメーらはどこに感銘を受けてんだ!!これ最早桃太郎でも何で

も無いからね！？ただの痛い妄想だから！！」

「痛いとは失礼アル！！オマエの存在よりはマシネ」

「オイチャイナアアアア！！」

それどういう意味だアアアア！！」

新八と神楽はたちまち殴り合いを始めたが、一方的に新八が返り討ちにあうだけである。

「アツハツハツハ。いやぁ愉快愉快。やっぱり子供達には驚かされてばかりだ」

「フツ、まあ私にかかれば当然だ……ん？」

神楽達の騒ぎを聞き付けたのか、周りに小さな子供達が十数人集まって来ていた。

「おじちゃん達何やってるの〜？」

「あ、紙芝居だ〜！！」

老人とナギ達は顔を見合わせると、頷き合って子供達に顔を向けた。

「どうだい？面白い紙芝居があるよ、見ていくかい？」

「うん！！！！」

子供達は元気良く頷くと、

神樂が皆の前に出てきて紙芝居を指差した。

「それじゃ、『起動戦士桃太郎』始まりアル〜!〜!」

*

辺りはすっかり夕方になり、公園もすっかり人氣が無くなっていた。

「お嬢ちゃん達のお陰で、久しぶりに子供達を沢山囲んで紙芝居が出来た。ありがとう」

「私達も楽しかったネ!明日もまた来て良いアルか?」

「そうだなあ。本当はもうこの辺を離れるつもりだったけど、明日まで居ようかね」

老人は朗らかにそう言うと、紙芝居を片付けた。

「そういえばまだお名前を伺ってませんでしたよね。僕は新八です」

「私は神楽アル」

「ナギだ」

「伊澄です」

四人は各々自己紹介をすると、老人は向き直った。

「ワシは源次郎だよ。紙芝居屋源ちゃんって昔は呼ばれてたんだ」

源次郎はそう言うと、駄菓子箱から割り箸を四つ分取り出し水飴を四つ作る。

さらにそれに梅肉のペーストを乗せて四人に手渡した。

「今日のお礼だ、本当にありがとうございます」

「わあ、水飴ですか！懐かしいなあ、ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

四人はそれを受け取る。新八は何か思い出があるのか食べずに暫く眺めていた。

「じゃあワシは……ゴホッゴホッ！ゴホッ！！」

「オイ、どうした！？」

「ちよつと、大丈夫ですか！？」

源次郎は突然咳き込んで、胸を押さえた。

「ああ、大丈夫大丈夫。歳が歳だからなあ。少し咳き込んだだけ…」

…ゴホッ」

手を振って大丈夫だと言うと、源次郎は自転車に乗った。

「それじゃ、またね」

「あ、はい……」

新八達は少し心配そうにその様子を見送った。

翌日も神楽達は公園にやって来た。

昨日と同じように源次郎と繋ぎ紙芝居で遊ぶ。

神楽が厨二臭い話をすれば、源次郎が普段の話に戻す。伊澄の意味不明な詩？の紙芝居からナギの電波染みた話で完結。それに絶えず新八がツツコミを入れる。

それを聞きつけて昨日より多くの小さな子供達が集まってくる。そして皆で紙芝居を作って遊ぶ……

何とも微笑ましい光景だった。

「あゝ、気温は暖まりつつあるってのに、懐は寒くなる一方だなオ
イ……」

銀時は死んだ魚のような目でバイクを走らせていた。

「あ、銀ちゃん!!」

「あ?」

公園の横を銀時が通り過ぎようとすると、神楽の声が聞こえてきた。

「……何やってんだオメー。」

あ、新八。オメーこんな所にいやがったのか」

「あ、銀さん」

銀時は原付きから降りると、新八達の元に歩いてくる。

「む、銀時か」

「こんにちは、銀時様」

ナギと伊澄も気付いたように銀時を振り返る。

「何でオメーらまでいんだ? ツーかナギ、オメー外に出ていいんか
?」

「人を引きこもりみたいに言うな!!」

「……ん？」

そこで、銀時は紙芝居の脇にいる源次郎に気が付いた。

「やあ、こんにちは」

「……………ども」

挨拶をした源次郎に銀時は軽く会釈を返した。

*

「はあ、紙芝居屋ねえ……………」

「ああ、今時滅多に見ないだろうな……………」

銀時と源次郎はベンチに座りながら、神楽達の様子を眺めていた。神楽達は各々紙芝居をめくり、新八はツッコミをしては返り討ちに

あっている。

何だかんだ言って楽しそうだ。

「一体どのくらいこの仕事を？」

「かれこれ四十数年になるかね……」

「四十……よくやっていけんな。昔はどうか知らねえが、今は紙芝居屋なんて流行らないんじゃないか？」

銀時は驚いて源次郎を見るが、彼は全く気にしていないように公園を眺める。

「確かに、最近は紙芝居を見る子供は滅法減ったなあ」

「最近のガキはゲームだ何だって外にも出ないのも多いからな」

「ハハハ……全く」

参ったように笑う源次郎に銀時は躊躇いながらも口を開く。

「ジーさん、アンタ何でそんなに長いこと紙芝居を？」

「……ワシは孤児だったんだ」

源次郎は銀時の問いに少し間を開けて細々と答えだした。

「10歳の時、両親に捨てられて……それから暫くはずっと孤児院に引きこもっていたよ……」

そんなある日、孤児院に紙芝居屋のおじさんが来たんだ。

そのおじさんの紙芝居の面白い事と言ったら……それから紙芝居屋が来るのが楽しみになっていてな。いつの間にか外にも出るようになっていたよ」

「……………」

源次郎は懐かしむように空を見上げたまま続ける。

「ワシだけじゃない。他の孤児院の皆も紙芝居の時は笑顔で笑った……それを見て思ったんだ。いつか必ず紙芝居屋になるんだよね……それから四十で脱サラして、紙芝居屋をやり始めたんだ」

源次郎はもう一度目線を神楽達に戻した。

「確かに紙芝居屋なんて全く儲からないし、体力的にも辛いものがある。だが、どんな苦難も紙芝居を見る子供達の笑顔が吹っ飛ばしてくれたんだ。例えそれがたった一人でもね」

「……………なるほど」

心の籠った源次郎の言葉に、銀時は口元を緩めて頷いた。

「オーイー!!」

「「?」「」

すると、神楽達が手を振りながらコチラに声をあげてきた。

「銀ちゃん、源ちゃん!!傑作が出来たアル!!ちよつと見てヨ!!」

「対八ト魔人攻略篇もバツチリ収録なのだ」

「いや、コレ紙芝居でも何でもないからね!？」

銀時達は顔を見合わせると、少し微笑してベンチから立ち上がった。

「んだア?どうせまたオメーらは訳の分からねえ話をおつ始めるんだろ?」

「そうか、是非見せてもら……ゴホツゴホツ!」

しかし、源次郎は立ち上がるとまた咳き込み始めた。

「大丈夫かジーさん?」

「ああ、平気だ。いつもの持病……ゴホツゴホツゴホツ!」

「オイ!!!?」

「ゴホツゴホツ……うつつ」

源次郎はそのまま胸を押さえると、とうとう倒れ込んでしまった。しかも尋常では無いくらい顔が青白い。

「オイ、ジーさん!!しっかりしろ!!」

それを見て慌てて神楽達も駆け寄ってくる。

伊澄は素早く源次郎の頭部に手を置いた。

「……………これは……………」

新八様、救急車を!!」

「あ、ハイ!!」

源次郎はそのまま横向きになって意識を失ったように目を閉じた。

「源ちゃん!!」

「おじいさん、しっかりするのだ!!」

神楽達も不安で顔をいっばいにしながら必死に呼び掛けていた。

〈某病院〉

「もう長く無いって……………どついつ事アルか!?!」

病院の廊下で神楽達が銀時に積みよっていた。
五人のすぐ横には里見源次郎と名前の札が貼ってある扉がある。

「あのジーさん、元々心臓に不治の病を抱えてたらしい。もう何十年も病院に入院するように言われてるそうなんだが……一向に聞かなかったそうだ」

「どうして……」

「休んでる間もねえ、一人でも多くに紙芝居を見て貰いたいって……だが今回は心筋梗塞に肺炎も合併したそうだ。あの歳だからな……峠はいつ来てもおかしいねえ、今日来てもな……」

「……………」

四人は意気消沈したように黙り込んでしまった。

「私が……無理に公園に来させてたから……」

「オメーのせいじゃ無えよ。」

あのジーさんの事だ。無理矢理でも紙芝居してただろうよ。
むしろ人が集まってた分、早く助けられたって考える」

銀時は神楽の頭にポンと手を載せると、ロビーの方向に体を向ける。

「オメーらは病室に挨拶に行つてやれ。屋敷には俺から連絡しといてやるから」

「……………」

手を上げて廊下を歩いていく後ろ姿を何とも言えない表情で見送る四人。

*

（病室）

病室は真っ白なフローリングに窓際に花瓶一つという殺風景な個室であった。

死期も近いという事から相部屋から変更になったようである。

神楽達がゆっくりベッドに近づいていくと、源次郎は横になったまままうっすらと目を開けた。

「……ハハハ、みつともない所を見せてしまったな。迷惑をかけたね……」

弱々しい声でそう言うと、天井にゆっくりと視線を動かす。

「四十年……色々あったが、何とかここまでやって来れた。

まあ、大勢の子供達に紙芝居を見せてやれなかったが……この人生に悔いは無い。起承転結だ」

「……」

「お嬢ちゃん達には最期に色々として貰って……本当に感謝してる

よ。ありがとう」

源次郎が神楽達の方に首を動かすと、神楽が手を彼の手の上に置いた。

「まだ……最期じゃ無いアル」

「……………」

グツと唇を噛み締めて零れそうになる涙を堪えながら……

「まだ…結は来て無いネ。

子供達いっぱい連れて来るアル。病室に溢れるくらいいっぱい……だから、待っててヨ。

絶対に、絶対に連れて来るから……だからそれまで待ってるアル」

「「「……神楽」」」

神楽はそう言うと、病室を後にした。

三人も源次郎に一礼すると、神楽の後を追って廊下に出る。

神楽は三人に背を向けたまま立っていた。

「……………今から、ここに子供達連れてくるネ。だから……………」

しかし、その言葉が続く前に三人は神楽の肩に手を置いた。

「「行こう」」

「行きましよう」

「……………皆」

神楽は急いで目の涙を拭くと、大きく頷く。

そして、

四人は廊下からロビーへと、そして出口へ早歩きで向かって行った。

「……………」

その様子を、銀時がため息をついて見送っていたのだった。

〈負け犬公園〉

四人は三手（伊澄は迷子になるのでナギとセット）に分かれて子供達に片っ端から声をかける事にした。

「ちょっとオマエら、今から病院で紙芝居やるアル！！
見に来て欲しいネ！！」

「え、紙芝居？」

「んなのダッセーよ」

「これから塾あるから……」

先程の小さな子供達はもう家に帰ってしまったのだろう。

この時間帯は少し大きな子供達しかいなかったが、彼等は全く興味を示さなかった。

「ちょっとだけで良いアル。

少しでも良いから……」

「悪いけど……無理です」

「友達とゲームやるから」

「明日の宿題やらないと」

神楽の努力虚しく、子供達は一人も捕まらなかった。

「オーイ神楽！」

「あ、ナギ、伊澄……」

ナギと伊澄が神楽に駆け寄ってきた。

「どうだった？捕まったか？」

「全然ダメアル。一人も捕まらないネ」

「こちらも同じよ……皆紙芝居には興味を示さない歳の子ばかり」

三人は溜め息と共に肩を落とす。

「こうなったらガキ共に一回地獄をみせるしか無いネ。そうしたら……」

「それは恐喝だからな？」

タタタタツ！

「神楽ちゃアアアアん！！」

すると、新八が慌ててコチラに向かって走って来た。その表情からただ事では無い様子が見てとれる。

「大変だ！銀さんから連絡があつて……源次郎さん、容態が急変したつて……！！」

「！！！！」

三人の表情が一気に固まった……

源次郎の病室

ガラッ!

神楽達が勢いよく扉を開けると、医師と看護師がベッドの横に立っていた。

その顔色は険しいもので、苦渋に満ちている。

「源ちゃん!!」

「おじいさん!!」

神楽達は駆け寄ると、医師がいたたまれない表情で口を開いた。

「残念ながら、今日いっぱいが峠になると思います。

……覚悟しておいて下さい」

神楽は弱々しくなった細い手のひらを握って俯いた。

「ゴメン……約束したのに……私……いっぱい子供達連れてくるって……なのに……」

神楽の頬には涙が幾重にも伝う。ナギも悔しそうに目に涙を溜め、伊澄もうつすらと目に涙が浮かんでいた。

新八はゆっくりと神楽の肩に手を置いて俯く。

「最後は……見せるって……約束……うつつ……」

ガラッ!

「紙芝居屋三人娘エエエエ!!」

さあさあ寄ってけガキ共!!

見て笑えガキ共!!

三人娘とツツコミメガネによる楽しい楽しい紙芝居の始まり始まり
」

「!?!」

いきなり扉が開くと、紙芝居のセットを持って叫んでいる銀時と、その後ろには……大勢の子供達が並んでいたのだ!!

病院の子供達や外からやって来たであろう私服の子供達が……それはもう沢山の……

いや、子供達だけでは無い。

看護師や医師達も沢山その後ろにいる……

「ぎ、銀ちゃ……」

「何やってんだオメーら……」

始まりっていつてんだ、さっさと涙拭いて紙芝居読んでやれ。

お客さんがお待ちかねだ」

銀時はそう言うのと紙芝居の枠を神楽達に向けた。

「……うん!!」

四人は大きく頷くと、銀時から紙芝居を貰って、皆の前に立った。

銀時は急いで源次郎のベッドに駆け寄る。
医師は何も言わずに頷くと、銀時から離れてくれた。

ベッドの周りを囲うカーテンを開けて、源次郎から神楽達の様子を
見えるようにした。

「……………見えるか、ジーさん」

「……………」

源次郎は銀時の言葉に反応するかのようにゆっくり瞼を開ける。

「先生！！意識が……！！」

「……………」

慌てて駆け寄ろうとする看護師を医師は黙って引き留める。

「ジーさん、アンタが見たかった景色だ。アイツらが頑張って集め
たんだぜ」

源次郎が首を動かすと、神楽、ナギ、伊澄、新八……………そして紙芝居
を見て笑う大勢の子供達や大人達が目に飛び込んできた。

「ああ……………ああ……………」

源次郎が頷く度に瞳からは涙が沢山零れ落ちていく。

「本当に……………良い景色だ……………」

こんな素晴らしい景色は見た事が無い……
ありがとう……お嬢ちゃん達……」

そして、眠るようにして瞼がゆっくりと閉じられた……

……良い景色だ……

…数日後

〈三千院屋敷〉

リポーター

『ここ最近、東京では繋ぎ紙芝居という遊びが子供達の間でブーム
となっております。』

最近の外で遊ぶ子供達が少しずつ増え、公園で紙芝居をして遊ぶ子
供の姿もよく見受けられます。

この繋ぎ紙芝居という遊びは…』

テレビの前にはハヤテ、マリア、銀時が座っていた。

「へえ、繋ぎ紙芝居ですか。何だか面白そうですね」

「でも不思議ですね、いきなりこんなにブームになるなんて……誰か凄い火付け役でも居たんでしょうか？」

ハヤテの言葉にマリアは首を傾げて見せる。

「さあな……ま、こついうのは意外な近場にいたりするもんだ」

「「？」」

天井を見上げ微笑する銀時の言葉に顔を見合わせる二人。

ガチャ……！！

「皆、とっておきの紙芝居が出来たアル！！」

広間の扉が開くと、神楽、ナギ、伊澄、ついでに新八が顔を覗かせた。

「魔法少女ブリトニーの完全新シナリオに加え、伊澄の対タコ魔術師の攻略法も収録したスーパーDX版なのだ！」

「ダメガネ新八の童貞秘話もあるネ！！」

「ある訳ねーだろ、んなもん!!」

「へえ、紙芝居ですか。」

面白そうですね。今ちようど紙芝居の話題が出てたんですよ」

ハヤテは四人を見るとニッコリ笑ってそう言った。

「見てくれるアルか!？」

「ええ、是非」

マリアも笑うと、紅茶を淹れてテーブルに並べる。

「じゃあどれを見るアルか？」

カグーラ「ジャスアントの愛と感動の復讐劇にするアルか？」

「いや、ここは私と伊澄のブリトニーVSタコ魔術師のストーリーを……ってオイ、ハヤテ!!」

何で苦虫を噛み潰したような表情をするのだ!!マリアも!!」

ナギの言葉に苦笑するハヤテとマリア。

「いや、ここは敢えて今時の若者にありがちな悲劇と絶望を描いた『新八童貞修羅の道』にするアル!!」

「だからそんなもんねーよ!!」

何処が今時なんだよ!？」

ギャーギャーと各々言い争いを始める神楽達。

「ギャーギャーうるせーぞオメーら……発情期かコノヤロー」

銀時が頭を掻きながら、神楽達を一旦止める。

「だったら繋ぎ紙芝居つてのをやってくれねーか？」

最近流行ってるらしいじゃん？」

そう言っつて口元を緩める銀時に、ハヤテも頷いた。

「ああ、良いですね。それなら皆さんの話を聞けますし……」

でもいきなり出来るんでしょうか？ああいつのつて練習しないと……」

……」

「大丈夫ネ！！」

四人は顔を見合わせると、ニツと笑って見せる。

そして神楽は紙芝居用の枠を取り出した。

「まあ、いつの間に紙芝居の道具を……？」

「約束アル」

「約束？」

神楽は古めかしい茶色の枠を見ながら口を開いた。

「一方的な約束ネ。私達から一方的に約束したアル」

「どんな事があっても…」

「いつか必ず………」

「紙芝居を見に行くって………」

四人の言葉にハヤテとマリアは不思議そうに顔を見合わせたか、銀時はフツと笑う。

「んじゃ、見せて貰うかア。

紙芝居………」

神楽は嬉しそうに表紙を取り出して枠にいれた。

「それじゃ、三人娘とダメガネツツコミによる紙芝居アル!!
始まり始まり〜」

第七十四訓 悩んで苦しんで悶々とするのが青春……じゃね？（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「次回から遂に長編です！」

ハヤテ

「あまりいい予感がしない長編なんですが……？」

伽藍

「まあ、ハヤテは色々な面でかなり不遇かもね……原作と違って。つて事で第七十四訓、始まります！」

クラウド

「私にも出番を……！」

第七十四訓 悩んで苦しんで悶々とするのが青春……じゃね？

く潮見沢高校く

ここはどこにでもありふれている普通の高校の普通の教室。

「それじゃ、期末の数学のテストを返すぞー」

「うわー!!」

「ヤベーよ、俺終わった!!」

「出来た？」

「全然……」

どこにでもありふれたテスト返却の光景。

「く。次、西沢」

「あ、ハイ!!」

そして……

(アレ……十の位の数字がおかしいぞ？え？アレ？目の錯覚かな？

えくと……1？

……18点?)

どこにでもありふれたテスト返却後の光景……

(えーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！?)

第七十四訓

悩んで苦しんで悶々とするのが青春……じゃね？

「……………」

ごく普通の学生、西沢歩はテストの用紙を眺めて呆然としていた。

「……………」

空と用紙を交互に見るといふ奇妙で不可解な行動を繰り返している

のである。

(…………ヤバイ)

そしてようやく紙から目を離すと、冷や汗と共に駆け巡る気持ち。

「ヤバイじゃないかなコレ…………この点数。

ヤバイヤバイヤバイよコレ…………

どれくらいヤバイかっていうと、うん、ヤバイ…………アレ？何かヤバいつて言い過ぎて訳が分からなくなってきたよ…………アハハハハ」

目は虚ろになりひたすらヤバいを繰り返して笑う若者。

端から見たら頭のおかしい人である。

「っていつか…………

私は数学が恐ろしく出来ないのでは!!?」

そしてようやくたどり着く真実。

(最近はおだの恋だったので悩んでたけど…いやそれだけじゃない。

出番が少ない事も地味な事も…………何だかんだ言って勉強が手付かずになっていた節はあったけど…………でもこの点数はあんまりなんじゃないかな!?これは酷すぎるんじゃないかな!?)

「お、西沢!」

歩が今までの記憶をプレイバックしていると、後ろから声が聞こえてきた。

「…………あ、宗也君」

「どうした？この世の終わりみたいな顔して……」

話しかけてきたのは歩のクラスメートである南野宗也であった。彼は高校生最速のスイマーであり、歩曰く“魚類”だそうだ。

「いやね……数学の点数がね……」

「低かったのか？そんなもん気にすんなよ！俺なんて全く出来て無
いけど全然気にしてねーよ？」

へラツと笑いながらそう言う宗也。

「全く出来て無い？やっぱり難しかったのかな、今回の数学」

「難しかったっていうか年中難しいけどな。でも今回は特に難し
かったなー」

（そうだよね！やっぱりそうだったんだ！）

宗也の言葉に徐々に生氣を取り戻してゆく歩。

「ち、因みに宗也君は何点だったのかな！？」

（では、この人間とは思えない水泳バカは一体私とどれくらい点数
が違うのか！？っていうか私は勝っているのかな！？）

「俺？いや、低すぎて言えないよ」

「何点だったのかな！？かな！？」

(……やたら食いついてくん？よっぽど自分の点数にショックだったのか？まあいいか……)

宗也は鬼気迫る歩にたじろぎながらも口を開いた。

「30点だよ。ヤベーだろ？」

こんな点数の奴もいるんだからお前も元気出しー」

「さようなら宗也君。魚類は一足早く海に帰りなさい」

「うおおおおい！！……どういう意味だオメーエエエ！！」

ズーンと物凄く暗いオーラを漂わせながら、歩はゆっくりと宗也に背を向けて歩いていってしまった。

「……アイツ、そんなに低かったのか？」

その様子を呆れたように見送る宗也だった……

*

〈商店街〉

(分かってた……薄々は気付いていた……このままではマズイと……)

歩はフラフラと商店街を宛も無く歩いてきた。
一応帰り道は帰り道であるが。

(勉強しなくっちゃいけないけれど……でも一人では限界があるし……だからと言って今更塾とか通えないしな)

悩みながら鞆を抱えて歩いて行くうちに、いつの間にか公園にまでたどり着いていた。

(やはり一人でコツコツやるしか無いのか!)

ああ!!こんなときに私の勉強を応援してくれる人は居ないのか!
(?)

「アラ?西沢さん……?」

「……え?」

公園の自販機を通り過ぎようとすると、買い物袋を持ったマリアが向かいから歩いてきた。

「ああアアア!」

「え?えつと……?」

*

（負け犬公園）

「まあ、勉強が……？」

「ええ……ちよつと数学が……」

自販機のすぐ隣のベンチでマリアは歩の表情の原因を聞いていた。

「因みにこの問題なんかが……」

「ああ、これはー」

歩に見せられた数学の問題をスラスラと説明していくマリア。

「えつと、じゃあこうなるから？」

「ええ、そこをそうしてー」

「な、なるほど……！ー」

歩は問題を見て頷くと、感激したように顔をあげた。

「マリアさん……天才……」

「いえ、別にそんな事は？」

「でも教えるのとてもお上手なんですネ！私なんかが理解出来るなんて……！ー」

歩はまだ感動したように敬意の視線を送っている。

「そんな自分を卑下しなくても？でも、一応私はナギの家庭教師ですから」

「ええ！？そうだったんですか！？」

あんなに頭の良いナギちゃんを教えるなんて………凄いな」

「ええ、ただあの娘あんな性格ですから………最初が大変でしたけど」

「ハハハ………？」

マリアの昔を懐かしむような苦笑混じりの話に歩を容易に想像出来るなど苦笑いで返した。

「ところで、悩みつつ勉強だけなんですか？何だかそれだけでは無いように見えたのですが………」

「いやあ、お見通しですね」

歩は決まりが悪そうに頬を掻くと遠慮がちに口を開く。

「今回の勉強事も、他の事に色々と気を取られてたからかな………」

………恋愛とか出番とか色々………」

「恋愛………あ、ハヤテ君の事ですね」

「あつあつあつー！！／／／／そんなハッキリ言ったらダメなんじゃないですか／／／／」

マリアの言葉を聞いた途端に頬を紅潮させて俯く歩。
そんな様子を可愛いなあと微笑ましそうに見るマリア。

「でも勉強に恋愛なんて……青春って感じですね」

「いやいや／＼／」

「でもハヤテ君は本当に鈍感ですからね……」

「ハイ……本当に……だから余計に難しいってどうか……」

マリアはナギとの様子を思い返して、歩も前の学校や普段の会話を
思い返して溜め息をついた。

「でも、そうやって考えたり悩んだり出来るのは今だけですから……
…その時間を大切にしないといけないと思いますよ？」

「え？それはどういうー」

ガッ！

「痛つゝー!!」

「へ？」

歩の前には顔がガングロの三人の女性が立っていた。真ん中の一人
が踞っている。どうやらたった今歩が上げた足がその女性に当たっ
てしまったようだ。

「痛たたた〜」

「ちよっと!?!これ足折れてるんじゃない?」

「オイ、どうしてくれんだよ!?!」

女性達は歩に向かって思いきり睨み付けて怒鳴った。

(なアアア!?!当たり前だアアアア!?!どうしようどうしよう!?!?)

歩の背後にはいつの間にか震えているハムスターが出てくる。

「オイ、何とか言えよ!?!」

(どうしようどうしよう!?!?)

っていうかなんで私、いつもこんなにピンチになっちゃうのかな!?!
?かな!?!?)

歩が一生懸命思考を巡らせていると、マリアがスツと前に出てきた。

「足、大丈夫ですか?」

「ってメイドさんじゃん!?!?つかマジあり得なくね!?!マジBC
だし!?!」

「本当だ!マジでメイドさんじゃね!?!?こんな所にメイドさんとか
ぶつちやけ無くなかぬ?みたいな?感じじゃね!?!?」

「あゝ痛たた。でもメイドさんだ!どんだけBTだよ」

マリアは女性達の会話を暫く不思議そうに聞いていたが、思いつい

たよつに口を開く。

「すみません…私、ナック星出身じゃないので…ナック語はちよつと…」

「…日本語だアアア!」「…」

三人は息がピッタリに一斉に怒鳴る。

「アラ、足を骨折していたのでは?」

「ちよつとマジでムカつくですけどオ。ぶつかっておいて謝罪も無しイ?」

「あり得なくね?つーか由衣大丈夫?」

「痛たたた…立てないよ」

再び踞つて痛みを訴える女性に二人の女性が困んで歩達を睨んでいる。

(あわわわわ!?!どーしよどーしよ!?!)

「オメーら…こんな所で何やってんだ?」

パニックになっている歩の後ろから聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「ぎ、銀さん…」

「まあ、銀さん……」

欠伸をしながら歩いてきたのは銀時だった。

「何だ？どうかしたのか？」

「このガキがいきなりぶつかってきたのオ。謝罪もしないし、ウチらの事馬鹿にするしィ」

「……………あぁ」

銀時は大体の事情を察したように頷くと、歩とマリアの所に入って
いって手を掴む。

「ワリーな。この二人東京来んの初めてだから、許してやってくれ
……………ほら、さっさと行くぞ」

「でも銀さん、あの方達顔が大変な色になってますよ？もしかした
ら本当に何か病気なのかも…」

マリアは本気で心配しているのか女性達を見て銀時に言う。

「あぁ、アレな。肥溜めから生まれて来たんだアレ」

「それどーいう意味だコルアア！！」

「そーいう意味だ。ちょっ、忙しいから肥溜めに帰れ、な？」

銀時は怒鳴る女性達をシツシツと蠅を払うように手を振ると歩達を
連れていこうとする。

ザッ……

「ちよつとちよつと何イ何イ？」

「葉ちゃん達揉め事オ？」

「修司さん！」

一番左にいた女性が振り返ると、ズボンをダボダボに履いて革ジャンを破いて着ているいかにも悪な男が三人歩いてきた。

（うわアアアア！！また増えたアアアア！！）

歩の後ろのハムスターはみるみる縮みあがる。

修司と呼ばれた男は女性達の肩に手を掛けて銀時達を見据えた。

「修司さん聞いてよ〜」

なんかア〜、コイツらが由衣にぶつかつたのに謝んなくて、オマケにこの天然パーマ何かウチらの事馬鹿にするし〜」

「オイオイ、何だオメーら？」

「何か東京初めてらしいよオ」

男が睨むと右隣の女性が口を尖らせて付け足した。

「あ、そう……」

どこの山奥から来たかは知らねえけど、あんま俺の町なわばりで調子こいて

ると殺すよ、マジで」

完全に困り果ててる歩に対し、マリアは尚も不思議そうに男を見ている。

「ん？何見てんのメイドさん？」

「あ、いえ……大した事では無いんですけど……」

「もしかして惚れちゃった？

いや困ったなア、俺さあー」

「着物、破れてますよ？」

「ファッションじゃアアアア！！」

マリアは男の革ジャンを指差して言うと、男は堪らず足を踏み出して突っ込んだ。

「後、ズボンも引きずって踏んだら危ないですよ？」

「これもファッションだアアアア！！」

男の額には青筋が浮かんでいく。すると銀時が軽く会釈して二人の手を無理矢理引いていく。

「ああ、すみません。実はこの二人、東京どころか地球が初めてな
んで。

こっちの地味な奴はジミー星から来たジミリオン王の御淑女ジミー

姫で、こっちはその乳母でメイドのマリアン又なんです〜
何分勝手がわからないんで、勘弁してやって下さい」

(銀さんん！無理無理無理！！)

(乳母…???)

歩とマリアは各々な感情を抱いて銀時に目を向ける。

「ああなるほど！それなら仕方ないな〜ってなるかアアアアア！
ふざけんのも大概にしるやア！！」

男は怒鳴ると後ろ男と共に走り出して拳をマリアと歩にそれぞれ振り上げる。

(来たアアアアア！?)

「！！！」

男達は二人の目の前まで迫って来た！

「マジなめてっと、姫だろっつがメイドだろっつが容赦しー、！？」

ガッ！！

「……………オイ

忙しいっつたのが聞こえなかったのか坊主ども……………」

「「！！？」」

銀時がマリア達の前に立ち、二人の男のズボンを思いきり持ち上げていた。

あまりの力に二人は身動きが取れない。

「なアオイ、革ジャン破こうがズボンだらそうが結構ですけどね……」

グイグイと二人を持ち上げていく銀時。

「女に手エあげるたアどういう見だイお兄ちゃん達……
衣服はだらしなくてもさア？」

「ヒイ！？」「」

「物事の道理はしつかり守りやがれエエエエ！！！」

「ぎやあアアアアア！？」「」

銀時はそのまま二人を振り上げて地面に叩きつけた！！

後ろの女性達は唖然とその光景を眺めている。

「て、てめえ！！ぶつ殺してやる！！！」

突然最後の男がそう叫ぶとナイフを取り出した、が……

ガシッ！

「な!？」

銀時がその腕を掴んで上に押し上げたのだ。

(は、速……!!)

「オイオイダメだよ？刃物は人に向けるもんじゃねえって小さい頃寺子屋で習わなかったのか？」

「ヒイ!!」

メキメキと音をたてて男の腕は動かなくなっていく。

「刃を向けていいのはテーマにだけだ。人様に向けるもんじゃねえ………覚えとけ」

銀時が更に力を込めるとナイフは音をたてて男の手から滑り落ちた。

「うわアアアア!!」

銀時が手を離すと、男は一目散に逃げていく。

その後を先程叩きつけられた二人もヨロヨロと追っていく。

「待ってよ!!」

「ちよつとヤバくない!？コレってマジでヤバく無くない!？」

「修司さん!？」

女性達も慌てて男達の後を追っていった。

「……………」

歩はそれを見て何かを考え込んでいるようにずっと手を当てていた。

（物事の道理……しつかり……
今だけしか出来ない……）

どうやら先程マリアに言われた事や銀時が男達に向かって言った事を反芻しているようだった。

「大丈夫か、お……」

「そっかあ！……！」

銀時が振り返ると同時に歩が叫び声をあげた。

「マリアさん、銀さん……！」

私わかりました」

歩は突然拳を作ってガッツポーズをしてみせる。

「銀さん、助けに来てくれてありがとうございます……！」

「……………あ、ああ？」

「私はもう大丈夫です。」

マリアさん、相談に乗ってくれてありがとうございます……！」

「そうですか。それは良かったですね」

歩は二人に一礼すると、走って公園を飛び出していく。

（私はこれで良いんだ！

悩んで苦しんでまた悩む！それで良いんだ！だって今しか出来ない事だから！

勿論物事の順番はしっかり守って！！）

歩は走りながらワナワナと拳を震わせる。

「よし！！恋も出番も勉強も、全部頑張ってるぞー！！」

高く高く拳を突き上げると、空には雲一つない青空が広がっていた。

「私の戦いはこれからだアアアアア！！！！」

—————完—————

応援ありがとうございました！伽藍礮臣の次回作にご期待下さい

「連載終わらせんなアアアア！！何終わらせようとしてんのかな！？全然まだ終わってないからね！？本当にこれからだからね！？」

やる気全開の歩は空に向かってツッコミを入れると、家へと走っていった。

因みに……負け犬公園では

「銀さん、乳母ってどういう意味ですか？」

「え、！？」

「西沢さんは16歳ですよね？」

私はまだ17歳なんですけれど……彼女の乳母ってことはつまり……？」

マリアの後ろからただならぬオーラが溢れだす……

「いやあ、それは言葉の綾っていつか……そういう設定の方が読者も納得しやすいというか……」

「へえ………？」

ピキッ！！

「生言っつてすみませんでした！！」

綺麗で無駄のない素早い土下座
結局マリアが一番怖かった……

翌日

潮見沢高校

「今日は理科を返すぞー!!」

どこにでもありふれたテスト返却の光景。

「」。次、西沢！」

「あ、ハイ！」

(どんな点数でもよくよしないで次に……、!?)

歩はテスト用紙を受け取ると思考を硬直させた。
勿論体も石のような固まったまま動かない……

暫く瞬きをすると、虚ろな瞳で教室の天井を見上げた。

(……………勉強、しなくては)

第七十四訓 悩んで苦しんで悶々とするのが青春……じゃね？（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ、本日最初の質問『神楽達に質問。水飴に梅肉ってどんな味？』」

神楽

「甘い水飴に酸っぱい梅肉が絡まってとても美味しかったアル！！」

新八

「ペースト状になっているので絡めて回しているとピンク色の水飴になるんですよ」

銀八

「続いての質問『神楽、伊澄、ナギ、ぱっつぁんに質問。おじいさんの前で最期にやった紙芝居は受けてた？』」

神楽

「最高の舞台だったアル……本当は源ちゃんにもやって貰いたかったネ……」

伊澄

「でも、最期にあの光景をみせてあげる事が出来て、本当に良かったです」

ナギ

「うむ。向こうでも皆を楽しませている事だろう」

新八

「短い間でしたけど、本当に楽しかったです……本当に」

銀八

「……………次の質問だ」新八に質問。紙芝居を作るとしたらどんなのが作りたい？」

新八

「そうですね……………やっぱり勸善懲悪ものですかね。正義を貫く姿勢を描くのは……………」

神楽

「ペッ！」

新八

「オiiiiiiiiiiii!!何で今唾吐いた!?!」

銀八

「続いての質問」タマに質問。エリザベスが出てきてどっ?」

タマ

「ニヤー!!ニヤニヤニヤー!!」

(コイツはヤベーな。一回マスコット評議会を開くか……………)

銀八

「……………次な。『銀さんに質問。神楽とナギが声真似をしたら騙される』」

んな訳ねーだろ。大体ー」

???

「銀ちゃん」

銀八

「んだ神楽。いま話の途中」

ナギ

「違うな、今は私だ!」

銀八

「……………次回もよろしく」

今回は次回予告をするので

銀が如くは無しです。

注) 予告はネタバレも多少あります。次回を一切知りたくない場合はここで戻って下さい!

〈次回予告〉

ハヤテ

「そう言えばもつすぐヒナギクさんの誕生日でしたよね」

ナギ

「そういえばそうだな」

来るは三月！！ヒナ祭り！！

ヒナ祭りと言えばヒナ人形……

伊澄

「特に首を折ってはダメよ。

この辺で一番運の無い人に、

恐ろしい呪いがかかってしまうわ！！」

咲夜

「……………え？」

恐ろしい呪いとは！？

ハヤテ

「じゃあ、掃除に戻りますね」

キラキラキラ……………！！

ナギ・マリア

「え！？／＼／」

ハヤテに……一体何が！？

ナギ

「……どう思うマリア」

マリア

「どうって……ハヤテ君の中で何かが目覚めたとか……」

ナギ

「取り敢えず他に相談出来る相手に聞いてみよう……」

マリア

「え、ええ……」

何かが目覚めた……ハヤテの中で！？

新八

「……人には一つや二つ言いたく無い事はありますからね……」

マリア

「や、やっぱり……？」

神楽

「プププ……それにしても似合ってるアルな」

銀時

「ククク……ああ全くだ」

そして時代は急展開を迎える!?

ナギ

「さっきハヤテの部屋をこっそり調べたら……こんなものが」

『三千院整形外科

〈気軽に性転換〉』

銀時

（もしや……!?!?）

新八

（工事……!?!?）

銀時・新八

（まさか……あのバベルの塔の……撤去作業に移ろうとしているのか
アアアアア!?!?）

バベルの塔撤去計画!?!?

ハヤテ

「ぬおオオオオ!?!?何なんですかコレはアアアアア!?!?」

銀時

「お、落ち着け……多分皆大丈夫だ。ただな、あの、そういうのは本格的にやり過ぎるとアレだから……女装程度に収めておいたほうが……」

ハヤテ

「何の話ですかアアアアア!!!!」

そして語られる真実……（笑）

伊澄

「それは呪いです……」

ハヤテ

「の、呪い!?!」

呪いとは一体!?!

そして解く方法とは!?!

そして三月三日……ヒナギクの誕生日と共にやって来るは賑やかなヒナ祭り!!

しかし……

?????

「やっぱり祭りは派手じゃねえとなア……」

銀時

「何でテメーが異世界（異）にいやがんだ……！！！」

遂にあの男も現れる……！！

銀時

「コイツはテメーの仕業か……？」

???

「オイオイ、俺アこの件には何にも絡んじゃいねーよ……
今回は頼まれて来ただけだからなア」

銀時

「じゃあ何を企んでやがる……」

???

「ククク……ただこの祭りで騒ぎが起こるって聞いてな、野次馬気分で見物に来たのさ。」

ま、それだけじゃねえけどなア」

そして祭りに何かが起こる！？

次回より長編【ヒナ祭り祭り篇】開始！！

第七十五訓

ほんの僅かな見落としが大変な参事を招く事もある(前書き)

クラウドの前書きの館！

クラウド

「今回は随分間が空きましたな」

伽藍

「ちょっとエルミナージュにハマってしまっていて……
PSPだからつついね(笑)」

ハヤテ

「しつかりして下さいよ？」

伽藍

「いやでもさ、結構面白いパーティーなんだよ？
銀魂のごとくの執事クエスト篇みたいに、銀さん、ヒナギク、伊澄
をフェイスロードに読み込んで、パーティーにしたんだ。後ツラと
辰馬もいるよ」

ハヤテ

「いや、全然聞いてませんから！つーかどれだけこの小説に似せて
るんですか!？」

伽藍

「ようやく神女のヒナギクがレベル200になったんだよ。疲れた
ホント……銀さんは侍でレベル180だよ」

ハヤテ

「ちよつと！？完全に前書きから脱線してますよ！？つーか誰も聞いて無いですから！」

伽藍

「でもまだまだだよ……神影どころかライブラリアンにも手も足も出ないからね……よし、頑張るぞー！」

ハヤテ

「執筆を頑張れエエエエー！」

クラウド

「そんな訳で、ヒナ祭り祭り篇、始まりますぞー！」

第七十五訓

ほんの僅かな見落としが大変な参事を招く事もある

ここは日本の何処かにある三千院本家のとんでもない大きさのお屋敷。

（三千院本家）

「……………よし」

広い広い書斎には本棚がズラリとところ狭しに並んでいる。

三千院帝は机に向かい、椅子に腰掛けそう言うと、高々と原稿を掲げてみせた。

「ようやく完成じゃ！！」

メ たんとの夢小説、200ページにも及ぶ超大作！！」

夢小説に現をぬかしていた…

コンコン…！！

「帝様！！ご報告があります！」

「入ってよいぞ」

ドアをノックする音と共に男の声が部屋に響いた。

ガチャ…

「失礼いたします。

例の魔法の鏡の件ですが……」

「おお、所在は分かったか？」

「ええ……それが……」

男は言い難そうに頬をひきつらせると、帝の近くまでよって口を近づける。

「どうやら……天王洲の人間の手に渡ったようです……」

「……本当か」

帝は一気に表情を堅くすると、男に帰ってよいと手を振る仕草をした。

男は一礼して部屋を出ていく…

「……取り敢えず、弥鈎達に連絡しておいた方が良いの」

帝は椅子に座ったまま携帯を取り出すと、番号をプッシュする。

(……………厄介な事にならなければ良いが)

渋い表情を崩さず携帯を耳に近づけると天井を見上げた。

(それにしても……………何を考えているのだ……………アテネよ)

第七十五訓

ほんの僅かな見落としが大変な参事を招く事もある

く三千院屋敷く

「そういえば……もうすぐヒナギクさんの誕生日ですよね」

朝の屋敷の掃除をしながら、ハヤテは思い出したように呟いた。

「む……そうだな」

「へえ、そうなんだ。もうすぐって一体いつなんですか？」

ファミ通を読みながらそう返すナギに対し新八は掃除を手伝いながら二人に尋ねる。

「三月三日……ちょうどヒナ祭りの日だよ」

「ヒナ祭り……何か凄い偶然なんですね」

新八は驚きながらも確かにピッタリだなと思い領いた。

「ハヤテ、まあ不本意だがお前から何かプレゼントしてやれよ。色々と世話になっているようだし……」

「ええ、勿論。お嬢様も何かプレゼントなさるんですか？」

「ま、執事が用意するのに主が用意しない訳にもいかんからな」

素直にプレゼントするとは言えないのがナギらしいと言えばナギらしいのだろう。

新八とハヤテは顔を見合わせて笑ってみせた。

「でも、だったら僕らも何かプレゼントしないと。本当にお世話になったからね」

「まだあと2日あるから後で一緒に商店街にでも探しにいってみる？」

「そうだね。神楽ちゃんや銀さんも連れて行くよ」

「じゃあ、お昼過ぎたら皆で探しにいこうか」

ハヤテがそう言うと新八は了解と頷いて掃除を再開した。

*

く万事屋く

ガラ……

「銀さん。ちょっとこの後……アレ？」

新八が万事屋の居間の引き戸を開けると、ソファに寝そべった神楽と座っているリインが顔をあげた。

「どーしたアルか、新ハイ」

「黒ニーソ五体目……む、早かったな」

「……アレ、銀さんは？」

「……アレ、銀さんは？
っていつか何やってんですか、神父さん」

新八の視線の先には銀時はおらず、座ってフィギュアの仕分けをしているリインの姿があった。

「ん、これか？」

特典フィギュアを分けていてな。同じキャラでもソックスや髪型と違った違いがある。それで……」

「わかりました。もう大丈夫です」

喋りながら袋を開けるリインに手を翳して中断を促す新八。

「おお、ポニーテールか……ソックスは白……」

「それで、どうしたアルか？」

「あ、うん」

勝手に喜んでいるバカ神父はスルーして新八は神楽の近くまで歩いていく。

「実は三月三日はヒナギクさんの誕生日なんだって。それで後で八ヤテ君と僕らでプレゼントを探しに行こうって話になったんだけど……」

「ヒナの誕生日アルか！」

三月三日って事はヒナ祭り……何かピツタリアルな……！」

「そうだね。ところで銀さんは？」

新八が居間を見回すが銀時の姿が見当たらない。するとダラダラしながら神楽が答えた。

「銀ちゃんならまだ寝てるヨ。」

全くもう昼間なのに、困った奴ネ」

「オメーもな」

新八は神楽の横を通り過ぎると、銀時の部屋の前に立った。

「銀さーん、もう昼ですよ！
起きて下さい」

ガラ……

新八が引き戸を開けると、掛布団が盛り上がっていた。どうやらすっぽりと布団の中に潜っているようだ。

新八は呆れたように布団に寄って膝をついた。

「ちょっと銀さん……」

もういい加減に起きて……」

そして掛布団をひっぺがすと……

「なあ!?!」

そこには銀時の姿は無く、ゴザが丸めて置いてあった。

まるで身代わりの為に作られたようなカモフラージュである。

「何で……出かけたのかな……、まさかっ!!」

考え込んでいた新八だが突然何かに気付いたように立ち上がると、急いで部屋から飛び出した。

「どうしたネ新八? 銀ちゃんに何かあったアルか?」

「む……!?!」

白と黒のストライプか……」

神楽とバカ神父の言葉を余所に、新八は銀時の机の横の棚まで寄って一番上の段の引き出しを開けた。

そして新八が取り出したのは、

『緊急時』と書かれた封筒だった。

「……………」

確認するが中身はすっからかん……………つまり空。

「……………」

「新八イ〜?」

空の封筒を見て沈黙している新八を不思議に思った神楽が近づいて来た。

ガタツ!!

「あのヤローオオオオ!!」

非常用予算全部持っていきやがったアアアア!!」

「な又ウウウウ!!?」

新八は叫んで封筒をビリビリに引き裂き、神楽は驚いて両手をばたつかせる。

「やはり重要なのはチラリズムか……………」

リンはまだフィギュアの仕分けを続行していた。

「あの天然パーマアアアアアアアア!!!!」

「全く、君達といると本当に飽きないな……………」

くパチンコ屋く

「……ヘックヨン!!」

「ん？風邪か銀さん？」

二つ隣り合ったパチンコ台には銀時と長谷川が座っていた。

「いや……んな事アねー筈だけど……」

銀時は鼻を噉って隣の長谷川に顔を向ける。

「お、チャンス来たぞ銀さん!!」

「うっしゃ!!今日は必勝の予感すんだよな」

銀時は顔を画面に戻すと、張り切って腕を鳴らした。

（三千院屋敷）

お昼を食べ終えて、新八とハヤテはバルコニーに出ていた。二人の前方には布団を干しているマリアの姿がある。

「あの〜、マリアさん？」

「アラ、二人とも。」

「どうかしましたか？」

ハヤテがマリアに話しかけると、彼女は布団叩きを持って振り返った。

「マリアさんって何を賣うと嬉しいですか？」

「はい？」

突然の質問に首を傾げるマリア。

「なぜ急にそんな事を？」

「いや、ちょっと思っただけです……欲しいものとかあるのかな？
と思いませんか？」

今度は新八が代わりに答えた。

「そうですね」『引きこもり』とか『ニート』の新しいイケてる呼び名でしようか？」

「いや……そういうんじゃない無くて……」

新八とハヤテは思わず苦笑いしてしまう。

「何というか、今時の女の子が欲しがるものというか……その……」

「ははあ……」

ハヤテの言葉にマリアは頬に手を当てて考える。

「でも2月も終わりですし、春服とかは欲しいかもですね」

「えっ！？」

二人は驚いて声をあげるとマリアを見直した。
そしてハヤテが口を開く。

「マリアさんでもそういうのに興味が……？」

「お待ちかねなさいハヤテ君。

『でも』ってなんですか？

『でも』って……」

気のせいかな彼女の頭の上に怒りマークがついている。

「大体なんですかさつきから。

もしかして好きな子でも出来て、気を引きたいって……」

「え！？いや！！そ、そういうのじゃなくて……！！」

「あ！！そうだ、僕達買い物に行かないと！！」

「あ！！コラ二人とも！！」

マリアの引き留めも虚しく二人は慌てて駆けていった。

（もお、私だって……女の子なんですからね）

（パチンコ屋）

「お、必勝来た」

「やべっ、チャンス終わった」

相変わらずパチンコをやっているマダオが二人。

「長谷川さんよオ、真っ昼間からパチンコ屋にいていいのか？」

「それを言っなら銀さんもだろ」

銀時は欠伸を噛み殺して長谷川に向き直る。

「仕事は？」

「後で面接だ。実はかなり難し……」

「あ、またチャンス来た」

「聞いてる！？」

そんなマダオ二人が馬鹿をやっている頃、商店街ではハヤテ達がプレゼント探しをしていた。

〈商店街〉

「うーむ、誕生日プレゼントと言ってもな」

「春服は……高いよね？」

新八は服屋のウィンドに表示された値段を見ては驚き呆れる。

「本当ネ！こんな値段、酢昆布とご飯ですよ幾つ買えると思ってるアルか！」

「いや、もう少し分かり易い例えにしないと神楽ちゃん」

ハヤテ、新八、神楽は宛も無く大通りを物色しながら歩いている。

「だったら貴金属とかは……余計高いですね」

「人形とかぬいぐるみとかは？」

「ちよつと子供っぽ過ぎるんじゃない？」

「ご飯ですよ沢山は絶対に喜ぶアル！！一年分とか！」

「多分神楽ちゃんだけだよ」

三人はあれこれと意見を言い合つが一向に決まらない。
ハヤテはどうしようと思つて溜め息をつこつとすると、

「おや？ハヤ太君」

「あ、本当だー？」

「え？」

後ろから突然聞こえてきた声に振り返ると、三人の女子がこちらに歩いてきた。

「瀬川さん達！！」

「なぜこんな所に！！？」

「女の子向けの店に男の子がいる方が不自然よ、ハヤ太君」

三人とはご存知、生徒会三人娘であった。

「ち、違いますよ！！僕はヒナギクさんの誕生日プレゼントを買いに……！！！」

「ヒナの誕生日プレゼント？」

「ああ、そういえばもうすぐ三月三日か」

理沙の言葉を汲んで泉が納得したように頷いた。

「なるほど……ヒナの誕生日プレゼントか……」

美希はそう言うとスツと左手を自分に向けた。

「因みに私の誕生日は9月9日!」

「6月21日?」

「7月13日だ」

「あ、はい……覚えておきます」

右から順に美希、泉、理沙がそれぞれ答えていくのにハヤテはそう返した。

「ところでハヤ太君。

そっちの二人は……三千院家の護衛になった“万事屋さん”の人達だよな」

「ええ」

ハヤテは三人娘を見ると新八と神楽に手を向けた。

「神楽アル!!」

「僕は……」

「眼鏡アルもしくは眼鏡掛け機アル」

「違うでしょ！？志村新八です
えつと……」

新八が三人に顔を向けるとまずは泉がニツコリ笑って答えた。

「私、ハヤ太君のクラスメートの瀬川泉！よろしくね、神楽ちゃん、
新八君」

「私は花菱美希。よろしく」

「私は朝風理沙だ。神楽君、メガネ君」

「いや、新八です……」

泉に続いて美希と理沙も挨拶をしていく。

「因みに私達は全員ハヤ太君の愛人^{ラマン}で、私が一号」

「じゃあ私は二号か〜／＼／」

「フツ、敵か味方が三号機だ」

三人は並んでいつも通りの悪ノリをし始める。

「おお、ハヤテもスミにおけないアルな。流石フラグ乱立男……」

「どさくさ紛れに何言ってますか神楽さん！？
三人もいい加減な事言わないで下さい？」

「ハハハ……面白い方達ですね」

溜め息をつくハヤテの隣で苦笑している新八。

すると、美希達が店が多い方向に歩き出した。

「よし、そんな訳で行こうか」

「へ？行くって……？」

「そりゃ、みんなでヒナの誕生日プレゼントを買いにだよ」

そんな訳で、ハヤテ達は三人娘を加えてプレゼント探しを続行するのだった。

一方こちらは白皇学院……

〈一年A組〉

「はい、じゃあプリントを集めて。分からなかったところは後で聞きに来て下さいね」

教室の教壇に立っているのはヒナギク。黒板には世界史の単語や地図が書いてあった。

どうやら社会の授業をしていたようだ。

「えっと、これは？」

「ああ、これは……」

ヒナギクが教壇を降りると生徒達がノートを広げて質問しに集まってきた。

それに一つ一つ丁寧に答えていく。

「ありがとうございます！」

そんなやり取りが一通り済むと、黒板の横に座って腕を組んでいた姫史が立ち上がってヒナギクに近づいてきた。

「スマンな、代理に補習して貰って……」

「あ、先生。

いえ、これくらいは……」

「お前の姉貴は行方眩ましてたかと思ったたら二日酔いで今爆睡中だからな……」

「いっそクビにしてはどうですか？一応名門ですよね？」

ヒナギクは呆れたように溜め息をついて額に手を当てる。

「そういえば花菱達も呼んだんだが……」

「あの子達なら開始五分でいなくなりましたよ」

「ったく、アイツらは……」

今度は姫史が溜め息をついて頭を抱える番である。

「じゃあ明日にでも勉強みてやってくれ。落第させる訳にもいかな
からな（私が中等部に戻る為に）」

「そう言われましても……」

ヒナギクは集めたプリントを持って困ったような表情を向けた。

くパチンコ屋

「どうだい長谷川さん……きたか？」

「いやもう少しなんだよな」

「俺ももう少しだな。次はいけるわきつと」

まだしつこくパチンコに食らいつくマダオが二人。

「そういえば銀さん、4月から銀魂のアニメが復活するらしいよ」

「え、そうなの？もう始まるんだ」

「いや、二期では俺の仕事も決まると良いな。あ、でも今の俺には関係無いんだ」

「つーか大丈夫なのか？五年やって原作のストックが僅かだから一旦終了って事にしたのに、一年足らずで再開って、ストック足りんのか？」

「さあねえ……ついでに俺の財布のストックも危なくなりかけてきたな」

長谷川と銀時の椅子の横には空箱が幾つか積み上げられている。

「オイ、一旦台交換しねえ？」

何か俺そっちならいける気がする」

「そうだな。一旦変えてみるか」

二人は席をそれぞれ交換して、椅子に座り直す。

「あ、チャンス来た」

二台の画面が大きく光出して何やら大きな音が出始めた。

「ま、ストック云々は置いておいて、とにかく再開良かったじゃな

いか銀さん。これで俺達が勝てばもつと良かったになるな、うん

「フーか今ここでする話じゃなくね？」

……

「あ、チャンス終わった……」

（商店街）

（〜とは言っても放っておけないし……）

ヒナギクは鞆を持って帰り道の商店街を歩いていた。

「まったく……どこ行ったのかしら？……ん？」

ヒナギクが気付いたように顔を上げると、近くの店からゾロゾロと人が出てくる姿が見えた。

「アレ、ハヤテ君？」

「へ？」

それは何やら難しい表情をしたハヤテ達だった。

「ひ、ヒナギクさん!?!」

「げ、ヒナ!?!」

「な、何よ……というか美希、アナタねえ……」

驚いて飛び退くハヤテ達を見て目を細めるヒナギク。

(ま、マズイぞハヤ太君!?!)

(ええ、やはり今プレゼントの事を知られる訳にはいけませんからね)

(いや、それだけじゃ無い!

私達は補習をこっそり抜け出していたのだ!)

(知るかアアアアア!?!)

ハヤテと美希のアイコンタクトのやり取り。

ここまでで何と0.1秒……

「皆一緒なんて珍しいわね。

それも……こんなお店で」

ヒナギクが見上げたお店は明らかに女の子向けのお店であった。

「え……!? えつと……これは……

(どうしましょう花菱さん!?!)」

(任せるハヤ太君!?!ここは私が完璧なフォローをみせてあげよう)

美希はヒナギクの一步前になると、暫く間を作り口を開いた。

「実は……店はハヤ太君の趣味だ!!」

「え!?!」

「何言ってるんですかアアア!?!」

ハヤテが美希を止めようとするも、彼女は構わず続ける。

「女装がしてみたいというハヤ太君の相談に我々が協力を……」

「全然違いますから!!」

どさくさに紛れて何言ってるんですか!!」

ハヤテは美希を掴むと無理矢理引き戻すが、時既に遅し……

「あ、えっと、大丈夫よ?」

私別にそういう事は気にしないし、人の趣味は色々あるから……」

「いやいや!!全然分かってませんよヒナギクさん!!間違いですよ!?!」

これでもかというくらい必死に否定を繰り返す。

しかしヒナギクは笑顔でそれに返した。

「ええ、大丈夫。誰にも言わないから。私は今からこの子達を補習に連れていくから。また明日ね?」

「いや、ちょっと待っ……!!」

「「「補習!?!」」」

「そうよ。さ、学校に戻るわよ」

ヒナギクは三人を連れて学院の方向に歩いていった。

ポン……

手を伸ばし愕然とするハヤテの肩に手が置かれた。

右は神楽、左は新八。二人はウンウンと頷いている。

「いや、二人は知ってるでしょ? 何秘密を暴露されたのを励ます感じ醸し出しているんですか」

「……………帰りましょうか」

「……………そうアルな」

「だから何で頷いているんですか……………違うって言うてんでしょ」

商店街には日の光が寂しそうに差し込んでいた……………

（白皇学院SP第一班）

ここは学院内にあるSPの施設。

しかし第一班は普通の建物とは違ってログハウスという一風変わった造りである。

しかしログハウスと言えど、中の施設は充実している。

トレーニングルームやダイニング、厨房、大浴場から大規模な監視ルームまで挙げればきりが無いほどだ。

その施設の中の一つに図書室がある。普通の図書館などより遙かに広く、蔵書数は相当な数に及ぶ。

そんな図書室で二人の男が顔を合わせていた。

霧崎弥鈎と白井比呂である。

二人は入口から大分離れた本棚の奥で白井は丸椅子に腰掛け、霧崎は本棚に寄りかかっていた。

「それは……本当の話ですか？」

「ああ、さつき帝のジジイから連絡を受けた。オメーが箒と敷地内を見回りしてる時だ」

霧崎はポケットから携帯を取り出ししてみせた。

「しかし、天王洲ですか……」

あの家って言えば……」

「ああ、厄介な事にならねーといいが……わざわざ持ち出したんだ……そうもいかねーだろうな」

霧崎の言葉に普段楽観的な白井も珍しく表情を堅くする。

「あの魔法の鏡……なんて言いましたっけ……」

「ああ、えっと確か正式名称は……」

白井の質問に霧崎は携帯をしまつて、答えようと……

「廊幻鏡……」

「そうそうそれだ。廊幻鏡つー鏡……つておわ!？」

突然後ろから聞こえてきた声に思わず飛び退く霧崎。

「オメー……九条。こんな所で何してやがんだ？」

「ずっとここにいた。勝手にここに来たのはアナタ達」

霧崎達がいた本棚の更に奥から姿を現したのは九条憂奈だった。手には厚い本が抱えられている。

「そうか……」

聞こえたか、今の話」

霧崎の問いにコクリと頷く憂奈。

「というか、何で魔法の鏡の事を知ってるんで？」

今度は座っていた白井が疑問を投げかけた。

「魔法の鏡の話は私も聞いたことがあるから。特に教会にある廊幻鏡の話は」

「……………」

霧崎と白井は顔を見合わせて、少し考えるように黙り込むが、暫くして口を開いた。

「廊幻鏡って鏡の事、詳しく知ってるのか？」

「そんなに詳しくは無い。でも簡単な事なら……………」

「少し自分達に教えてくれませんか？実は自分ら、その廊幻鏡の行方を追っていましたね。」

悪用される前に回収しなくてはいけない」

白井は憂奈を見た後、再び視線を霧崎に戻した。

「だが、俺達はその鏡の事については詳しくは知らねーんだ。」

外見もどんな事が出来るのかも、ただ大きな鏡としか知らされてねえ……………」

「……………」

白井の言葉を汲んだ霧崎。

すると、憂奈がゆっくりと本を閉じた。

「廊幻鏡は……通ったものを異世界に引き込むと言われてる」

「異世界？」

「そう。どんな世界なのかは分からない。けれど、一度世界が繋がれば、それは往き来できるトンネルの役割になる。」

世界との繋がりを遮断するには特別な力で封印しなければならない」

「……………」

憂奈の話聞きながら、二人はアレキサンマルコ教会で鏡が何者かに封印されたと帝から聞いた事を思い出していた。

その後持ち出されたと……

「ちよつと待ってくれ。」

もし鏡が封印された場合、それはもう使用出来ないんだよね？」

「……………必ずしも不可能じゃ無いと思う」

憂奈はフルフルと首を横に振ると、持っていた本の背表紙を指でなぞった。

「封印した人以上の力を持っている人間ならば……………恐らく」

「……………」

霧崎は白井を見ると、キツく唇を噛む。

「ヤベーな……確か天王洲っていや……」

「相当な力の持ち主がいるって話ですよ……確か……」

図書室の空気か場の緊張感によるものなのか、暫く三人の周りは静寂に包まれた。

そして次に口を開いた時は二人同時だった……

「天王洲アテネ……」

第七十六訓

人と違う事は自分だけの持ち味と前向きに考える（前書き）

クラウドの前書きの館！

クラウド

「ふむ、後書きの銀が如く……中々反響が大きいすな」

伽藍

「いや本当はさあ、完全にネタのつもりだったんですよ。アニメの金魂みたいな感じで……だから三回で終わらせるつもりだったんだけど……いつの間にか連載形式に……」

ハヤテ

「大丈夫なんですか？
負担がかなりキツそうですよ？」

伽藍

「いやそれほどでは無いよ。まあここまで来てしまったらねえ……時々書けない時もありますよ、多分大丈夫だよ」

クラウド

「単品連載したら？との声もありますな」

伽藍

「いやいや、それは無理だよ（笑）まあ、とにかく今回の第七十六訓は例のアレです」

ハヤテ

「え！？アレってなんですか！？」

クラウス

「では、始まりませぞ！」

ハヤテ

「あの、ちょっと!？」

第七十六訓

人と違う事は自分だけの持ち味と前向きに考える

（鷺ノ宮家）

「なんやコレ？」

鷺ノ宮家の屋敷にある蔵に大きな雛壇と雛人形達が置いてある。それを見て咲夜は首を傾げた。

「ふむ、確かに明日がヒナ祭りだから雛人形を飾るのは分かるが、これにはお雛様が二つあるぞ？」

『確かに』

すると、咲夜の後ろから桂とエリザベスが雛壇を覗きこんだ。

「無闇に触ってはいけませんよ、小太郎様、エリザベスさん」

伊澄は蔵の中を見回していたが、三人の動きに気付くとそう釘をさした。

桂と伊澄は実は面識はある。

よく伊澄は咲夜の家に行ったり来たりするので、その時に咲夜が紹介したのだった。

因みにエリザベスは今日が初めてで、第一印象は『ペンギンさん？』と言ったが勿論桂は『ペンギンさんじゃ無いエリザベスだ』と言って自分のペットだと言う事を説明した。

伊澄は終始？マークだったが取り敢えずエリザベスだと頷いたよう

だった。

「それは呪いの雛人形。

下手に触って封印が解けたら大変な事になります」

「呪いの？」

『雛人形？』

後ろを向きながら言う伊澄に桂とエリザベスは頭上に？マークを浮かべる。

「本当は早く処分してしまいたいのだけど……強力な力を持つものだからそれも難しくて……」

「ふーん……」

咲夜は最上段のお雛様をヒョイと持ち上げると、それを眺める。

「呪いの雛人形ねえ……」

ベキッ！！

「……………あれ??？」

「咲夜殿……?」

『く、首が……』

咲夜の左手にはお雛様の身体。
右手には何故かお雛様の顔。

とどのつまり、お雛様の首がもげたのだ。

咲夜は右手と左手を交互に見て顔をひきつらせる。

桂も呆然とし、エリザベスもカタカタと看板を揺らす。

しかしそうとは知らず伊澄は蔵を見回しながら続ける。

「特にあり得ないけど、首をもいではダメよ咲夜。首をもぐと封印が解けて……」

そう言うと、くるりと咲夜を振り返った。

「この辺で一番運の無い人に……恐るべき呪いがかかるから……」

「……………」

咲夜の手には首がもげたお雛様が……

「も……」

「うめーん……」

第七十六訓

人と違う事は自分だけの持ち味と前向きに考える

（三千院屋敷）

ハヤテは広間の棚に置いてある豪華な時計に気が付いた。

「お嬢様、なんですかこの時計は？」

「いや、別にー」

「ヒナギクさんの誕生日プレゼントですよね」

ナギが口ごもるとマリアがさらっと後を汲んだ。

「な、マリア！！？」

「ああ、プレゼントだったんですか」

「べ、別に執事であるお前がプレゼントするのに主の私がしないわけにはいかないからな。それだけなのだ／＼」

素直になれないナギの様子にハヤテとマリアは顔を見合わせて微笑んだ。

「そういうハヤテは何をプレゼントするか決めたのか？」

「ええ、手作りクッキーにしようと思いましたが、あ、それと安物ですが髪留めを」

ハヤテはそう言って三冊ほどのお菓子の本と可愛い袋を取り出してみせた。

「そうか。」

神楽達はどうするんだ？」

「ああ、昨日色々と揉めてましたけど手作りの何かを作るって事で一致したみたいですよ？」

ハヤテは万事屋の方向を向くと、ちょうど新八の悲痛な叫びと共に物が崩れるような音がした。

続いて神楽の音が、殴る蹴るの効果音と銀時の叫び声と同時に響いた。

「……………創造というより破壊してないか??」

「……………」

三人は不安一色で顔を見合わせる。すると突然ハヤテ達の目の前に閃光が走った。

カツ!!!

「……………え？何ですか今の？」

「さあ？いつもの字数稼ぎだろ」

ナギがそう言うとハヤテもそうですねと納得して頷いた。

「じゃ、まあ取り敢えず僕、掃除に戻りますね」

キラキラキラ？

「え！？／＼／＼」

フワリとスカートを翻して、エプロンドレスを着たハヤテは広間を出ていった。

「……………マリア今、何か恐ろしいものが……………」

「えっと……………ちょっと疲れているんでしょうか？」

ナギとマリアは恐る恐るハヤテが向かって行った後を追うことにした。

「　　」

ハヤテは上機嫌に隣の部屋の窓を拭いている。

その様子を後ろから扉に隠れて眺めるナギとマリア。

「……………どう思うマリア」

「どうってそりゃ……………ハヤテ君の中で何かが目覚めたとか…」

二人とも困惑したようにメイド姿のハヤテを見つめている。

「いや待て。もしかしたら我々は万　鏡写　眼の術にかかっているのかもしれない」

「どこの忍の話ですか？」

「とにかく、マリアは銀時達を呼んで来てくれ。私はハヤテの部屋にいつてみる。何かヒントがあるかもしれない」

「ええ。あ、でも勝手に人の部屋に入るのは……………」

「緊急事態だ……………事は一刻を争う」

ナギの言葉にマリアも確かにと頷かざるを得なかった。事実目の前で起こっている事は明らかに異常だからである。

こうして、ナギはハヤテの部屋に、マリアは万事屋に向かった。

〳〵10分後

「……………どう思いますか？」

「どつてオメー……………」

マリアは銀時達を連れて再び部屋の前からハヤテの様子を伺っていた。

「ま、まあ人には言いたくない趣味の一つや二つはありますからね……………」

「や、やっぱり……………」

新八は困惑しきった表情でマリアにそう答えた。
マリアは銀時を見上げて困ったように小首を傾げる。

「銀さん……………どうしましょう？」

「いや、どうしましょうって言われてもなァ……………いくら万事屋つっても目覚めたばかりの少年の心を動かすなんてのは至難の技だぜ？」

「でも、幸い女装だけアル。
まだ間に合うかもしれないネ」

神楽はうゝむと腕を組みながらそう言って銀時を見た。

「これは中々……込み入った話になりそうですね？」

「……ですね？」

マリアと新八は緊張の面持ちで窓を拭くメイドに目を向けた。

「それにしても……プププッ……似合ってるアルな」

「ククク……ああ、全くだ」

神楽と銀時は笑いを堪えられないように思わず吹き出してしまふ。

「皆、ちょっとコレを見てくれ……」

「「？」」

一同が振り返るとナギが青い顔で立っていた。
その手に何かチラシのようなものを持っている。

「先程ハヤテの部屋にこっそり忍び込んだら……机の上にこんなものが……」

『三千院整形外科（気軽に性転換）』

「せ、整形外科!？」

新八はナギの見せたチラシを見て驚きの声を上げると同時に銀時との間に閃光が駆け巡った。

（もしや……！！）

（工事……！？）

二人は意志疎通で互いに考えを読み取る。

（まさか……あのバベルの塔の……撤去作業に移ろうとしているのかアアアアア！？）

ナギと神楽は銀時達の意味は伝わらないものの、考えてる事は分かるのか白い視線を二人に浴びせる。

一方のマリアはその様子を不思議そうに首を傾げたまま。

「コイツアもう笑えるレベルじゃねー……取り敢えずナギと神楽は部屋に戻れ」

「わ、分かった。だが、私的には有りだと伝えておいてくれ」

ナギは頷くと、マリアにそう訴えた。

「ええ、まあ……一応？」

「では行くぞ神楽」

「分かったネ。銀ちゃん、しっかり八ヤテを元の世界に引き戻すヨロシ」

ナギと神楽はナギの部屋に去って行った。
残った三人は頷き合つとハヤテに近づいていく…

「あの、ハヤテ君？」

「はい？」

まずはマリアが話しかける。

「えつと、ハヤテ君は自分が人と違うな〜とか思つた事ありません？例えばその……ご自分の趣味とか……」

「はあ、趣味ですか？

う〜ん、そうですね〜」

僕は至つて普通だと思いますけど」

至つて普通では無い格好をして頬に手を当て答えるハヤテ。

「例え人と違つた趣味でも、自分が好きなら胸を張つてやるべきだと思いますよ？」

（（既にそんな……堅い決意とは……！！！！））

「自分のやっている事に自信を持って堂々と生きるのが良いと思いますが……どうですか？」

（（アナタは堂々とし過ぎでは無いですか！？））

ニッコリと笑うハヤテにどう対応すればいいのか戸惑う三人。

「うーん、遅かったようやな…
(すご…／／／)」

「ですね(わ／／／)」

部屋の扉が開くと咲夜と伊澄が入ってきた。

「アレが呪いか……」

『ガタガタ……』

その後ろには桂とエリザベスもいる。

「咲夜さん、伊澄さん!!
それに桂さんも!!」

*

「はア！？雛人形の呪いイ！？」

庭に出た一同は、伊澄からハヤテの身に起こった事について聞いていた。

雛人形という話に思わず銀時は眉を吊り上げる。

「ええ、間違いありません。

私の家の蔵に呪いの雛人形があったのですが……咲夜が首をもいでしまつて」

「悪かつたつて？」

伊澄はジト目を咲夜に向ける。

「それで、その雛人形にはどんな呪いがかかっていたんですか？」

「これは……、！？」

新八の問いに伊澄が話を本題に乗せようとすると、ヌツと桂が顔を覗かせた。

「伊澄殿、呪いにはこれが使えるぞ！『マリオVSドンキーコング』のカセットだ！！」

「え？えつと…あの…」

「何故コレが呪いを解く事が出来るかつて？フフフフ……教えて上

げよう。実はこれは俺がー」

ドカツ！！バキッ！！ドカツ！！

銀時と咲夜が後ろで桂を散々踏みつけ始めた。

「……すみません、続けて下さい」

「ハイ。その雛人形にはとてつもなく恐ろしい呪いが……」

伊澄の真剣な表情に思わず息を呑むハヤテ達。

「……女装が大好きな引きこもりの青年の呪いがかかっています」

「「っーかどんな呪いイイイイイ!?」」

キラーンと言いきった伊澄に突っ込む銀時と新八。

エリザベスは後ろで倒れている桂の頭を撫でていた。
尚も伊澄は続ける。

「伝説では、江戸時代。

普段から働きもせず女装ばかりしている青年がいたそうです。
ある日母親の宝物である雛人形のお内裏様に十二単を着せてしまっ
て、母親は父親の介護の疲れも相まって流石にキレて青年を刺殺…
……青年は今わの際でお雛様に向けてもっと女装したかったと強く
思った。

以来、運の悪い者を女装させる呪いがかかったのです」

「どんだけ具体的な伝説!？」

介護の疲れとかよくニユースでやってるよね!?!この間もやってたよ、似たようなニユース!?!」

新八が突っ込む隣でハヤテが腑に落ちないように首を傾げた。

「でも何でよりによってメイド服なんですか?」

「それは恐らく……」

その職人の趣味です」

「いや、江戸時代にメイド服なんですか!?!」

自分のエプロンドレスを伊澄に見せて言うハヤテ。

「彼は今も生き霊となって、現世を徘徊しているのでしょう」

ザッ!

伊澄の言葉に思わず銀時は後ろに飛んだ。

「ななな何言ってるんだオメーは!?!霊なんてこの世にいねえ!?!全部スタンドだ!?!」

慌てて伊澄に叫ぶ銀時。

すると、右隣にいたマリアが銀時の方に顔を向けた。

「……銀さん？そういう話苦手なんですか？もしかして幽霊が怖いとか……」

「え？何が？俺が？」

全然だけど。俺は別にそういうとか全然大丈夫だけど」

「でも今驚いて……」

「コレはお前アレだよ……」

オメーらが怖がらないようにわざと大袈裟に驚いてやって周りを安心させてやるうという俺の気遣いが……」

「いや、汗が凄いで？」

無理すんなや銀時」

「ちょっと何言ってるんの咲夜ちゃん？銀さんもう大人だよ。んな訳ねーだろオ？」

左隣でニヤリと言う咲夜に銀時は冷静を装いつつ返す。

そんな様子を横目に、ハヤテは必死に伊澄に目を向ける。

「そんな事より、この姿……どうすれば良いんですか？」

「その呪いは三月三日のヒナ祭りが終わるまでに呪いを解かなくてははいけません。解かないと……」

「と、解けないと？」

……
「一生女装が趣味の男の子になってしまいます!」

「……………」

暫く沈黙するハヤテ達。

「微妙な呪いだね……」

「いや、でも困りますよ!」

呆れたように言う新八と項垂れるハヤテ。
しかし銀時は頭を掻きながら口を開いた。

「別にそのままで良くねエ?」

「良くないですよ! 何他人事だと思つて無責任な事言ってるんですか!? こんな姿になつてるんですよ!」

ハヤテはフリフリのメイド服のスカートを持ち上げて銀時に見せる。

「いやいや、オメー元からこんなだったじゃん。よく女装とかしてたし」

「全然違いますよ!」

「そもそもアレはさせられていたんですよ!」

「大丈夫大丈夫。似合つてっから問題ねーよ。なあ?」

銀時は隣の咲夜に尋ねると、咲夜は確かにと頷いた。

「まあ似合ってるちゃ似合ってるけど、ウチはメイド服よりチャイナ服も似合うと思うわ」

「そういう問題じゃ無いんですよ!! / / /
とにかく!! この呪いを解く方法はないんですか?」

「ええ。それは……」

ハヤテは相変わらず顔を真っ赤にしながら尋ねると、伊澄はゆっくりと頷いた。

「ヒナ段のお雛様……つまりこの辺で一番高い場所の主を……倒す事です」

「この辺で一番高い場所……」

それって、もしかして白皇の時計塔ですか?」

「恐らくそうだと思います」

ハヤテの意見に伊澄は再び頷く。

「時計塔の主っていやア……」

「ええ。生徒会長さんという事になるでしょうね」

伊澄は銀時に顔を向けるとコクリと頷いて答えた。

「オイオイマジかよ……」

「アイツを倒すのか？つーか倒すって何？」

「まあ何らかの形勝負をして、形が分かる勝敗が着けば良いのだと思います」

伊澄は頬に手を当てて考える仕草をしながら言った。

「でも、ヒナギクさんなら話せば分かってくれるんじゃない？」

「うむ。しっかりと事情を説明すれば彼女ならば協力してくれる事だろう」

新八の後ろからいつの間に復活したのか、桂が立っていた。

「何や、知り合いなんか。
なら良かったな」

「確かに。とても良い人なので大丈夫だと思います」

ハヤテは皆の意見を聞いて納得したように頷いた。

「まあでも、この姿で会うのは恥ずかしいですけど？」

他の生徒に見られるのもアレなので、夜にでも生徒会室に来て貰って……」

「ですがハヤテ君」

ハヤテの言葉にマリアがストップをかけるように口を開いた。

「明日の夜は白皇学院五つの伝統行事の内の一つ、『ヒナ祭り祭り』」

があるので夜も人がいっぱいですよ？」

「……………」

ピタリと動きを止めるハヤテ。

隣の新八も意外そうな表情をする。

「へえ、学校の方でそんなお祭りがあるんですか？」

「ええ。白皇の伝統行事なので相当規模の大きなですよ。」

全校生徒に加えてその家族の方や外部の方もいらっしやるので人数も相当な数になりますわ」

マリアの言葉に更に愕然とするハヤテ。

「え？そんなに人が……………いるんですか？」

「はい、かなり。前日も設営の人が一日中いっぱいです」

ハヤテは次に伊澄を見る。

「ヒナ段の上で倒さないと呪いは……………？」

「解けません」

キツパリと……………

「そ、そんなに落ち込まん？」

「ウチに責任があるから、協力するわ！」

「呪いは鷲ノ宮にも責任がありますからお手伝いします」

呆然と立ち尽くすハヤテに慌てて駆け寄る咲夜と伊澄。

「何だか妙な流れになってきたな……」

「ええ、本当に……」

そんな様子を横から眺める銀時とマリア。

「……………何やってんですか、桂さん」

「む？新八君も入るか？」

「いや、何でコタツ？つーかどっから持ってきたんですか？」

何故か桂とエリザベスは庭にコタツを置いてお汁粉を食べていた。

「新八君は餅は何個欲しい？」

「いや、餅いらなから。」

今はそんな場合じゃ無いでしょ。ハヤテ君の状況が詰んでいるんだから作戦を考えないと……！」

呑気にコタツで餅を食べている桂達にそう訴える新八。

「ハツハツハ！！餅だけに詰まるときだ。これは一本取られたな、エリザベス」

『座布団一枚!』

「うるせんだよオメーら!!
そのうざったい長髪コタツで燃やすぞオオオ!!」

翌日に迫りくるヒナヒナ祭り。

そんなこんなでハヤテはかかった呪いは解く事が出来るのか。

因みに……

「私達も庭にいたんだがな……
オチに使われたなあ、タマ」

「ニヤァ? (毎回この扱いだよ……)」

林の隅っこで空を見上げているクラウドとタマでした……

第七十七訓 大切な事はやっぱり言葉でいうべき

（三千院屋敷）

ホールにはナギ、マリア、ハヤテが向かい合って立っていた。

「とまあ、そんな訳なんです」

「……………はあ」

ハヤテが事情を説明すると、ナギは目を細めて相槌をうった。

「つまりこれは、ハヤテ君の趣味ではなく女装したかった人形師の呪いで…三月三日のヒナ祭りが終わるまでにヒナ段の一番上でヒナ段の主を倒す事……………」

つまり白皇の時計塔の一番上でヒナギクさんを倒す…そうしないと一生、女装の呪いが解けないと……………要するにそういう事ですね？」

「ええ、まあ……………」

一言で説明するとそんな感じですか……………？」

一気に捲し立てたマリアに首を傾げながらも頷くハヤテ。

「……………」

しかし困惑したように顔を見合わせるナギとマリア。

「まあ、とにかく事情は把握しましたけど……………」

「けど？」

「そんな非科学的な言い訳考えなくても……女装がしたいならしたいと言ってくれば……／＼／」

「う、うむ。そうだな／＼／」

「……………え？」

二人の様子に思考が停止するハヤテ。

「呪いだのなんだの…そんなわざわざ咲夜さん達と口裏を合わせてまで……………」

「いやいやいや！！」

全然分かって無いですよマリアさん！！」

「ま、疲れてる時は気分転換も……………ね？」

（『ね？』じゃ無くて！！！！）

ニツコリときこちなく笑うマリアにナギもポンと肩に手を置く。

「わ、私的には有りだからな／＼受け止められるから」

「お嬢様まで！！」

ハヤテは完全に誤解している二人を前に、ただ強く願うしか無かった。

(大丈夫!!ちゃんと事情を説明すればヒナギクさんなら分かってくれる筈!!)
頼みますよ!!銀さん達!!)

第七十七訓 大切な事はやっぱり言葉で伝えるべき

一方の万事屋では銀時達がテーブルに向かい合っていた。

「うーん……どんな書き出しにしましょうかね？」

左端の新八はそう言うと、手を顎に当てて考える。

一体何をやっているのかというと、ヒナギクに事情を説明する為に伊澄が手紙を渡す事にしたのだが、その内容が要点がズレていて、これでは勘違いするだろうと判断した新八達が書き直す事にしたのだ。

〈20分前

「では、私は会長さんに事情を説明して来ますね」

「すみません伊澄さん。お願いします」

メイド姿から一刻も早く脱出したいハヤテは懇願するように頭を下げた。

*

「でも伊澄ちゃん、この状況を口頭で上手く説明するのって大変じゃない？」

「つーか今日の前で起こってる俺らにも理解不能だからな」

屋敷から離れて出口の門へ歩いている時、新八は一番大きな不安を伊澄に尋ねた。

銀時は依然呆れたように呟く。

「大丈夫です。要点をまとめた手紙を用意しました」

「手紙？」

二人は伊澄が取り出した手紙を覗き込んだ。

生徒会長さんへ

明日夜九時二人きりで

白皇学院時計塔最上階にて待つ

勝負して下さい(武器持参)

勝つのはハヤテ様

「うまく説明する為に要点を文章にしてみました」

「いや、これじゃ果たし状ですよ……？『勝つのはハヤテ様』なん

て挑発にしか見えないですよ」

新八は伊澄の要点が少しズレていると思いつつ言ったが伊澄はハテナと小首を傾げている。

「確かにそうだな……」

アイツの事だ、こんな果たし状貰ったらむしろ全力でかかってくるんじゃないか？」

「ええ多分……」

「そうなんですか……？」

伊澄は考えるように頬に手を当てている。

「ここは皆で協力して手紙を書きましょう。ここは一番大切な所ですから」

く万事屋く

そんな訳で現在居間のテーブルで銀時、新八、神楽、桂が向かい合って紙を眺めているのである。神楽にはかいつまんで呪いをかけられたハヤテとヒナギクに勝たないと言えないと話をした。

因みに伊澄とエリザベスは桂の持ってきたコタツを隣に置いて、のほほんとお茶を飲んでいる。

「で、どうします？
大切なのは呪いでメイド姿になったって事、わざと負けて欲しいって事ですよ」「

「ようは見易く簡潔に且つ的確に伝える事だな」

「まあそうですね」

腕を頭を掻きながら言う銀時に頷く新八。

「ちよろいな、俺に任せとけ」

銀時はフツと微笑すると、筆を取った。

桂ヒナギクさんへ

投稿者：綾崎ハヤテ
男性

良い点

メイド服を着てみました

悪い点

この装備は呪われています

一言

僕はメイド服で勝負を挑みます。そちらもメイド服を着てみては？
胸が小さくてもメイド服なら隠せると思います（笑）

P・S・わざと負けて下さい

—————

「何の感想だああああア！！！！

コレ、なるうの小説の感想だろコレ！！良い点悪い点ってなんだよ
！！！！つーか最後の一言完全に喧嘩売ってんでしょ！！

（笑）じゃねえんだよ！！

P・S・が上手い具合に挑発になってんだろーが！！

「いや、戦う時はやっぱりお互い正々堂々の方が良いじゃん？

だから相手のボルテージも上げておかないと……F 4でもルビ
ンテが戦う前に全快してくれんじゃん？それと同じだよ」

「これじゃただ怒り煽るだけだろーがああア！！」

新八は紙を銀時から奪うと、乱雑に文を消した。

「無しです！もっとちゃんと状況を伝えましょう」

「ハイ！」

神楽がビシッと手を上げた。

「神楽ちゃん、大丈夫？」

「任せるヨロシ！」

簡単にしか事情を聞いていないから、聞いた事をそのまま書くヨ」

「確かにそうだね。じゃあさっき聞いた事をそのまま書いてね」

神楽にはかいつまんでしか事情を話していない。

だから逆にそれをそのまま書けば簡潔且つ的確にまとまるかもしれないと新八は考えたのだ。

神楽は紙を貰うと勢いよく筆を取る。

桂ヒナギク様へ

【ハヤテ・F・アヤサキ】

通称：殺戮の疾風

裏世界では知らない者はいない伝説のエージェント。
世界中を回って様々な依頼一人でこなす孤高の武人。

戦闘能力は群を抜いているが、

反面感情表現が少なく人間関係も苦手である。

そんなある日、とある任務で呪い雛人形の呪いを受け、悪魔の装備

『冥怒負苦』を装着されてしまう。

そして彼は元の身体を取り戻す為に、白皇帝国に向けて旅を始める。そんな旅の途中で様々な人を仲間にして、彼は徐々に心を開いてゆく……

・必殺技（初期）

魔性疾風弾 A

殺戮風撃 AB

（デストルネード）

P・S・胸の大小はその人の個性だと思った高校の夏

「何処の投稿だああアアアア!!」

オメー、コレただの痛いキャラ設定だろ!!」

真剣に使って下さいって送られてくる中2のハガキだろコレ!!」
何を聞いてたんだお前は!!」

「アレ、こんなんじゃ無かったアルか？」

「オメーの耳には誤解釈のイヤホンでもついてんのか!!」
しかも最後のP・S・いらねーだろ!!」
何でさっきの手紙から繋がってんだよ!!」

新八は神楽から手紙を奪って、乱雑に文章を消してしまった。

「真面目にやって下さい二人共！僕達の手にはヤテ君の命運がかかっているんですよ!？」

「全くだな」

「!!、……桂さん」

紙を掲げて叫ぶ新八の後ろから又ツと顔を出す桂。

「二人とも全く状況が伝えられていない。まず書き出しがなっていない……」

桂は筆を取ると、『拝啓……』と書き始めた。
それを見てなるほどと頷く新八。

「確かにこう丁寧だと真剣な気持ちが伝わりますね」

「まあ見ておけ……」

――
拝啓……

桜の花びらが徐々に散り始め、春の終わりの足音が聞こえ始めてきました。

上京して一年余り。

最初は勝手の違いに驚かされる事ばかりでしたが、今ではもつすつかり慣れてしまった自分を見ては時々苦笑が漏れてしまう次第です。

色々とありますが私は元気にやっています。母さんお体に気をつけて下さい。

また手紙送ります……

人も疎らになつてきた電車の中で私は三年前の手紙を見て思わず顔をしかめてしまった。

この三年前の手紙が母と私を取り合つた最後の連絡であつた。

それ以降、忙しい東京での生活に吞まれ、いやそれは言い訳であるう。

忙しくも連絡をする暇くらいはあつたが、私はそれを怠っていた。

忙しいと自分に言い聞かせ、心配して手紙をよこしてくる母の頼りを封も開けずに無視していた。

そんなある日……母が亡くなったという一報が私の元に入ってきたのだつた。

そして今、私は葬式の帰り道……叔父から渡された自分の手紙を席に座つて眺めていた。

母は最期の瞬間までこの手紙を持っていたとらしい。

それを聞いた時、私の中にどうしようも無い黒いモノが呻きを上げ

て私の内部を掻きむしった。
それが何なのか……その時の私には分からなかった。

ガタン……ガタン……

普段は気にならない音でさえ、胸には大きくのしかかる。
黒い何かは私の心臓を激しく突き刺した。

不意に……
持っている紙に雫が落ちた。

ああ、そうか……
これは……この黒い何かは……

私はようやく理解した。
この気持ちは……罪悪感でも失墜の念でも無かった。

ただ、“ありがとう”と言えなかった後悔だったのだ……

電車の中の私を寂しげな夕日が包み込む。それはまるで、母が抱きしめてくれるような……
そんな温かさが感じられた……

「私は……、ぐぼっ!?!」

「長エエエエエ!?!」

更に筆を進めようとした桂に渾身のドロップキックを決める新八。

「何なんだよコレ!!何で小説になってんだよ!!っーかもっ宛先
ヒナギクさんじゃ無いだろコレエ!!」

「いや、少しでも状況を分かりやすくだな……」

「何一つ説明出来てねーんだよ!!無駄に時間を使っただけでしょ
!?!」

「……分かった。では分かりやすいまとめを付け足そう」
桂は再び筆を取って、紙に何やら書き出した。

――
P・S・でもやっぱり女性ならば胸は小さいより大きい方が良いと
思う

「どこをまとめてんだああアア！！何でP・S・を繋げてんだよ！
完結するべき場所は他にあるでしょ！？」

新八は桂の書いた文章紙をテーブルに置くと、急いで消した。

「もうちゃんとやりましょうよ！！このままだと……」

『拳手！』

「え、エリザベス！？」

いきなりエリザベスが看板を上げて、コタツから出てきた。
因みに伊澄はまだコタツのほほんとしている。

『貸してみな』

「え、えっと……はい」

新八が紙を渡すとエリザベスは筆を振り上げた。

—————

ヒナギクさんへ

厄介な呪いでおかしな姿になってしまいました。
呪いを解く為にアナタと勝負をして私が勝たなくてはいけません。

明日の午後八時。

白皇学院の時計塔の最上階にて待ちます。
武器持参で来て下さい。

どうかご協力お願いします

綾崎ハヤテ

「「「おお〜!!」「」」

エリザベスは書き終わると何処からか葉巻を取り出して、一服し始めた。

「凄いいじゃないですか!!」

分かりやすくしてちゃんとまとまっていますよ!!」

「流石だエリザベス。それでこそ私のペットだな」

新八は紙を見て誉め、桂はウンウンと頷いている。

『至急送りたまえ』

「ありがとうエリザベス!」

新八はエリザベスから手紙を受け取ると、コタツに入っている伊澄の元に向かった。

「伊澄ちゃん！出来ましたよ」

「……………？」

伊澄はコタツでマツタリしている間に眠ってしまったのか、頭をコタツのテーブルに乗せていたが、新八が話しかけるとゆっくりと瞼を開けた。

「……………ふわぁ。すみません、暖かかったので眠ってしまっ……」

「いや、大丈夫ですよ？」

それより手紙出来ました。エリザベスが書いてくれたんですよ」

新八は伊澄に手紙を折り畳んで渡した。

「まあありがとうございます、エリザベスさん、皆様」

手紙を受け取ると立ち上がってペコリとお辞儀をする伊澄。

「別に、俺達はなんにもしてねーよ」

「本当に何もしてないですよね。僕らただ時間を無駄にしていただけですよね」

カッコ良く膝を組んで言う銀時に新八はツッコミを入れる。

「うるせーナ。案すら出せなかったメガネと私達を一緒にしてんじやねーヨ」

「お前のは案じゃ無いだろ！ー！」

そんなこんなで伊澄はヒナギクに手紙を渡す為に万事屋を後にした。

「でも凄いですね！流石エリザベスだ」

「本当いつもいつも無駄に男前だよな。つーかめちゃくちや達筆だったし」

新八は敬意の視線をエリザベスに向けて、銀時も呆れ半分同意半分で頷いた。

「当然だ。これくらいの試練はいくつも修羅場を越えてきた俺達には何の苦にもならん」

ガン！！

「お前はなんにもして無いネ」

得意気に語る桂の頭に手刀を降り下ろす神楽。

『……………あ、』

すると、エリザベスが何かに気付いたように看板を上げる。

「どっしたのエリザベス？」

『……………』

生徒会室

白皇学院の時計塔の最上階。

広い生徒会室にある会長の机ではヒナギクが仕事をしていた。

休日にも関わらず、仕事をしている理由は勿論、明日のヒナ祭り祭りの為である。出し物の最終チェック等の書類に目を通しているのだ。

生徒会室にはヒナギクの他に愛歌とヒナ祭りの役員の生徒が二人ほどいた。

ガチャ

「会長」

「あ、ハル子。どう、確認とれた？」

入口が開いて千桜が入ってきた。

「ええ、それは大丈夫です。
それより……」

「え？」

千桜は持っていた手紙をヒナギクに手渡した。

「鷺ノ宮さんが渡しておいて下さいと……」

綾崎君からだそうです」

「ハヤテ君から？」

千桜の言葉に首を傾げるヒナギクだったが取り敢えず聞いてみる事にした……

く万事屋く

何かに気付いたエリザベスの様子に皆が何事かと注目していた。

『……………消し忘れた』

「え、消し忘れたって……何を？」

『三人が書いたP・Sの所……』

「……え？」

実は銀時達を書いた文を消した新八が乱雑に消した為に、下の部分
が上手く消せないままの状態だったのだ。
しかもエリザベスが書いた文章は三人より上に位置していた。

位置的にいうと、エリザベス 神楽 桂 銀時だった。

なのでエリザベスは書き終わった後で消そうと思っていたが、忘れ
てしまったのだった。

「ちょっと待って下さい……それって……」

『……多分』

「……ヤバくね？」

生徒会室

ヒナギクさんへ

厄介な呪いでおかしな姿になってしまいました。
呪いを解く為にアナタと勝負をして私が勝たなくてはいけません。

明日の午後八時。

白皇学院の時計塔の最上階にて待ちます。

武器持参で来て下さい。

どうかご協力お願いします

綾崎ハヤテ

P・S・胸の大小はその人の個性だと思っ た高校の夏

P・S・でもやっぱり女性ならば胸は小さいより大きい方が良いと
思う

一言

僕はメイド服で勝負を挑みます。そちらもメイド服を着てみては？
胸が小さくてもメイド服なら隠せると思います（笑）

「ヒ、ヒナ……?」

「何のつもりかは知らないけれど……返り討ちにしてあげるわ!!
!ハヤテ君?」

P・S・の部分によほど注目してしまったら。最初の大切な部分にはほとんど目がいつてないのか記憶に残っていないのか……

とにかく、理由が間違っって伝わってしまったのは明らかであった。

「よくわかりませんが、何だか面白い事になってきましたね」

「いや、全然そう見えませんが……」

そう言っって微笑む愛歌に不安の色を隠せない千桜だった。

〈万事屋〉

「俺知らない俺知らない……」

「わ、私も知らないアル！

新八のせいネ！！」

「いやアンタらが変な事書くからでしょ！？」

銀時と神楽の言葉に思いきり突っ込む新八。

「や、やってしまったものは仕方があるまい。ヒナギク殿の事だ、最初の部分で理解してくれるだろう」

『一日千秋の思い』

若干桂も冷や汗をかいているが、皆を納得させるように頷く。
エリザベスは同意するように看板を上げた。

「いや……でも」

新八は顔をひきつらせながら銀時を見る。

「……………ぱつつあんよオ、ちよつと俺ジャンプ買ってくらめ」

「オイイイイイ！！何逃げてんだオメー！！」

銀時は頭を掻きながら玄関に向かっていく。

「私ナギの部屋行ってくるネ！！」

「さて、帰るかエリザベス」

『お邪魔しました』

「ちよつとオオオオ!?」

新八の叫びも虚しくゾロゾロと万事屋から出ていく一同。

「……………」

そして一人残された新八はキョロキョロと室内を見回してみる。

「そ、そうだよ。ヒナギクさんなら大丈夫だよ。最初に呪いって書いてるし……きつと大丈夫だ」

シーン……

「誰も居ないし……お通ちゃんの曲でも歌おう」

新八はそう言ってCDプレーヤーを取り出すと、イヤホンを耳に入れた。

そして明日

遂にヒナ祭りがやって来る……

第七十七訓

大切な事はやっぱり言葉でいうべき(後書き)

教えて！！銀八先生

銀八

「今回は質問が無かったんで、
キャラ紹介をやっておきます。因みに銀が如くは次回で」

ロアル川秋

【年齢】

22歳

【誕生日】

11月4日

【血液型】

B型

【家族構成】

父、母、妹、弟

【身長】

188cm

【体重】

64kg

【好き・得意】

第一班、仲間、マリア、仕事、麻婆豆腐、麻婆炒飯、平和

【嫌い・苦手】

悪、両親、マリアと話す事

外面は真面目でクールだが、反面仲間内では朗らかでユーモアセンスもある白皇学院SP第一班の班長。

昔家族といざこざがあったらしく、妙に仲間同士の絆にこだわる。

建物がログハウスというのも、

“家族”というものにこだわる彼の仕様。

しかし、仲間の誰も彼の家族の事を知らない。

また学生時代、マリアに一目惚れをして、以来ずっと想い続けている。

よくマリアを勝手に護衛するというやややり過ぎな面も伺える。

仲間からはストーカーだと呆れられる事もしばしば。

だが、実際はストーカーでは無く、彼女を心配する本心からの行動で、マリアは気づいてもない。事実何度か危険を救った（気付かれていないが）事もある。

娘を心配する父親の行動……と言った方がしっくりくるかもしれない。

しかし、いざ正面から会話する事は恥ずかしいのか苦手で、意味も無く冷たい態度を取ってしまう。何とかしなくてはと口頃から思っている。

霧崎弥鈎

【年齢】

22歳

【誕生日】

9月16日

【血液型】

???

【家族構成】

父、母、???

【身長】

170cm

【体重】

55kg

【得意】

尾行、近距離射撃、速撃ち、帝にタメ口、職務質問 e t c ……

【嫌い・苦手】

父親、家事全般、目つきの悪さ、歌

三千院本家SPだが現在は白皇学院SPに一時的に移動させられている。

目つきが非常に悪く、学生時代は周りからビビられまくっていた。職務質問には非常に便利で、大抵の奴は睨めば自白する。

本人は結構気にしている

2666

家族関係はまだ書けないが、中々重い過去があるようだ。

三千院本家に連れて来られたのは11歳の時。そこでSPのなんたるかを学んだ。

家事全般が全く出来ない。

特に料理は致命的で白井曰く、

『錬金術師』だそうだ。

白井比呂

【年齢】

19歳

【誕生日】

1月18日

【血液型】

???

【身長】

165cm

【体重】

52kg

【好き・得意】

霧崎をからかう事、サボる事、話術、嘘を見破る事、観察力、料理

【嫌い・苦手】

気分によって

本編のオリキャラ中恐らく最も謎の多い人物。

霧崎の後輩で同じく三千院本家SPで今は白皇学院SP。

家族構成は一切謎で、ふらりと三千院本家にやって来たという。

霧崎の最初の後輩でもある。

普段はサボったりと呑気な性格だが、かなり頭の良い人物である。

観察眼が群を抜いていて、彼を前にして嘘を貫くのは非常に難しい。霧崎とセツトで取り調べをすればまさに鬼に金棒。巧みな話術は主に仕事をサボる為に使われる。

料理は中々得意で霧崎の破滅料理を見ては半分呆れバカにする。

と、こんな感じですよ。

霧崎と白井はこれからも特徴を増やしていくつもりです。二人の話は追々本編でやると思います。

銀八

「んじゃ、次回もよろしく頼まア」

第七十八訓

何歳になっても祭りって聞くとテンションが上がる

く 三千院屋敷く

「じゃあ、ハヤテは夜になるまで屋敷からは出ないのだな？」

「はい……というか、こんな格好人前ではとても……」

リビングではナギがテーブルに座って朝食をとっており、ハヤテはメイド姿のままナギの横に立っている。

「ですから、夜にあまり人目がかないように時計塔に行ってヒナギクさんに勝って呪いを解いてきます。お祭りに参加出来ないのは残念ですけど」

「……ハヤテ君。もしかして本当に呪いなんですか？」

紅茶をプレートにのせてテーブルに置いたマリアはおずおずとハヤテに尋ねる。

「だから本当ですよ!!」

これは呪いなんです！僕は好きでこんな格好をしている訳じゃないんですよ!!／／／

「……………」

半信半疑のマリアとナギは困ったように顔を見合わせる。

「とにかく、銀さん達が上手くヒナギクさんに伝えてくれた筈ですから大丈夫です！今日の夜には元の姿に戻って……そういえば、銀さん達はどうしたんですか？」

ハヤテは気付いたようにリビングを見回した。

普段この時間は三人（よく銀時は寝坊するが……）も朝食に集まる筈なのだが……

「銀さん達なら白皇に行きましたよ」

「え？こんな朝からですか？
まだ始まっていないですよね？」

ヒナ祭り祭りの開始時刻は朝の10時からだが今はまだ8時半なのである。

因みに祭りが一番盛り上がるのは午後からであるが……

「ええ、何でも昨日の夜……」

――
昨晚……

（万事屋）

「え？明日のヒナ祭りに？」

「ええ。どうしてもお願いしたいのです」

万事屋の居間にはソファに座った銀時達三人と向かいに中年の男性がいた。

髪は短くいくつか白髪も目立ち、人の良さそうな表情からは温和な性格が伺える。

実はあの手紙の件の後、日が暮れた頃に万事屋に来客があったのだ。客は商店街にある八百屋の店主だった。

どうやら彼は白皇学院のヒナ祭り祭りでお好み焼きの出店を一家でやる事になっていたらしいのだが、昨日親族の方に不幸があって、急遽一家で地方に戻る事になってしまったそうなのだ。

しかし学校の方が既に準備をしてくれている手前、キャンセルするのは心もとないと言う。

そこで、この万事屋に代わりにお好み焼き屋をやって欲しいと頼みに来た次第だったのだ。

「あゝ……お好み焼き屋ねえ……」

「つても俺らに出来るかどうか……」

「食べるの専門アルからなナ。」

「人にやるには勿体無いネ」

あまり乗り気で無いのか返事が曖昧な銀時。

神楽は食べる事が出来れば何でも良いようだ。

「報酬は売り上げ全てを差し上げます。どうかお願いできませんか」

「？」

キラーン！

男の言葉に銀時と新八の目が鋭く光った。

「……と思ったが、お好み焼きも悪くないな。なあ新八君？」

「そうですね銀さん。」

僕ら万事屋ですから。頼まれれば何でもやりますよ！！」

「おお！」

コロツと態度が変わった二人の返事に嬉しそうに声を上げる。

「では是非お願い致します！！」

時刻は午前10時の開催時から午後3時までです。3時以降はそのスペースに他の出店が入る事になっているので……」

そう言つて男性はパンフレット（外部者用）を銀時に手渡した。

「仕方ないアルな。私達超一流の万事屋が直々にこの依頼を引き受けてやるネ。」

幸いお好み焼きならいくらでもお腹に入るアル！！」

「よし、オメーは客寄せ係決定だ」

「……と言う事らしいですよ。
それで三人とも出店をする為にもう出ていかれました」

「あ、そんな事が……」

マリアが一通り説明すると、ハヤテはなるほど頷いた。

「それとハヤテ君。銀さんが

『本当にすまん。悪気は無かったんだ』ってハヤテ君に伝えてくれ
って言っていましたよ?」

「……………え?」

ハヤテは表情を途端に硬める。

「すまんって……何がですか?」

「さあ……………」

第七十八訓 何歳になってもお祭りって聞くとテンションが上がる

（白皇学院）

「「お好み焼きじゃああああああああ！！！！」」

朝の九時。

白皇学院の敷地内にゾロゾロと出店のテントの屋根が立ち始めている中、大きな叫び声が広場に響き渡る。

声の主はクリーム色のテントを屋根にした模擬店の前に立っていた銀時と神楽であった。

「売って売って売りまくるんじゃああああ！！！！」

「食って食って食いまくるんじゃああああ！！！！」

周りの生徒や屋根を立てている外部の人々は何事かと振り返った。

「ちょっと二人とも！皆見てますから止めて下さいよ！！」

新八は模擬店の中から二人に声をかける。

「何言ってるんだ新八。」

コイツアビジネスだぞビジネス！気にすんのは人目より売り上げだ

「バカヤロー」

「いや、売り上げて言っても始まるのは10時からですよ？
今からそんなに気張り過ぎるのは……ごぶ!？」

言いかけた新八に神楽は拳の鉄槌をくらわした。

「ちよつとオオオ!?!いきなり何すんの神楽ちゃん!！」

「新八二等兵!?!戦いを前にそんな弱気な発言をするなど、貴様それでも軍人かア!！」

大尉!?!コイツを軍法会議にかけ……痛!?!」

銀時は神楽の頭をスパンと叩いて話を止めた。

「とにかく、今回の依頼の報酬は今日の売り上げにかかっていると
言っている。

「テメーら、ガンガン稼ぐぞオ」

「「おお〜!」「」

新八と神楽は右手を上げてやる気をいれた。

「つー訳で神楽。今回の依頼はオメーの働きが重要だ。
客寄せ無くして商売は成り立たねえ」

「私は作る方が良いアル!」

「違えよオメー、客寄せが上手くいけばその金で祭りの食い物沢山
買えるんだよ?お前の大好きな焼きそばもたこ焼きも沢山だ」

銀時の言葉を聞くと途端に神楽は目を輝かせて見上げる。

「本当アルか!! あんず飴も綿菓子も食べられるアルか!!」

「おうよ。俺達……オメーの頑張り次第だ。あ、でも綿菓子見つけたら俺にも教えるよな」

「分かったアル！」

意気込んでガッツポーズをする神楽。

新八も模擬店の前にやって来て二人の中に加わった。

「銀さん、それでどう回します?」

「俺は好み焼きを焼くから、

新八はタネを作ってくれ。

神楽はとにかく客を集めて来るんだな」

銀時は新八と神楽を指しながら説明していく。
すると神楽が手を上げて銀時を見上げた。

「客集めって、どうやるアルか?」

「んなもん簡単だよお前。

いいか、祭りが始まったらテキトーに五六人しばいてここに連れて来い。

んで、そいつらに買わせた後、テキトーに脅して他の客達に宣伝させる。これを繰り返して……」

「それは客寄せって言わねエエエエ!!」

新八は銀時の言葉を遮って突っ込んだ。

「あん？どした新八？」

「どうしたじゃ無いですよ!!
それは恐喝です」

「バカヤロー……」

商売をするって事はなあ、生半可な覚悟じゃいけねーんだよ。
それにこれは恐喝じゃねえ、立派な戦術だ」

「どこが立派だよ……？」

銀時は一人でウンウンと頷くと、神楽に目を向けた。

「つー訳で、頼んだぞ神楽」

「任せるネ!!」

目をキラキラさせてコクコクと頷く覚悟。

「んじゃ、作戦開しー」

バキッ!!

言い終わる前に銀時の頭がグツと下に下がった。

「全く……」

代理の人達ってアナタ達だったのね……」

「ヒナギクさん！」

「ヒナー！！」

銀時の後ろには正宗を右手に持ったヒナギクが呆れたように立っていたのだ。

「痛つつつつ……」

いきなり何しやがんだ……」

「いきなりじゃないでしょ。」

普通に売りなさい普通に」

ヒナギクは溜め息をつく。と銀時達の前までやってきた。

「ヒナ、何でここに居るアルか？」

「開催前最後のチエックにね。」

ハル子達は反対側を見てるから私はここを見回ろうと思って」

そう言ってヒナギクはジト目を銀時に向ける。

「そうしたら早速悪事を働こうとしている人を見つけたって訳よ」

「はあ……分アった分アった。」

普通にやりゃいいんだろ」

「そついつ事よ」

「んじゃその代わりと言っちゃなんだがコレを見てくれ」

銀時は模擬店のテーブルから一枚の紙を取ると、ヒナギクに差し出した。

「これは？」

「品物の値段だ。コレで頼まア」

・銀玉 小 500円
・銀玉 大 1000円
・豚玉 小 450円
・豚玉 大 800円
・宇治銀玉 1500円

「……………この銀玉って何？」

「決まってるだろ。万事屋銀ちゃんが作るから“銀玉”
因みに宇治銀玉は宇治銀時井のお好み焼き版だ」

「……………」

ピリッ…

ヒナギクは無言で紙を真つ二つに破いた。

「オイイイイ!!」

「却下よ。値段が高すぎるわ。
100円と150円に変更ね。」

……そんな顔しない!!」

銀時と神楽はあからさまに不満そうな表情を作るが、
あっさり返すヒナギク。

「それからこの……宇治銀玉?
これ削除ね」

「はあ!? オメー宇治銀玉こそ最高のお好み焼きだろーが。
この祭りの目玉になるからホント」

「生徒会としては食あたりや食中毒を出すわけにはいかないのよ。
だから無し」

それじゃ、私はまだチェックがあるから」

「それどういう意味……あ、オイ!!」

ヒナギクは簡単に銀時をスルーすると、新八と神楽に頑張つてと声をかけて他の出店に歩いていった。

「……はあ、俺の宇治銀玉が」

「そんなモン食べられるの銀ちゃんくらいアル」

「いやいや、オメーらも食ってみりゃ分かるって……
っ！か食中毒は酷くね？」

三人はヒナギクを見送るとお好み焼きの模擬店の中に入って並んだ。

「至って普通の意見だと思いますよ。とにかく早く準備を……、あ」

「ん？」

新八は何かに気付いたように声を上げると銀時と神楽を交互に見た。

「僕らだけでやるんですよね……
でも三人だけだとキツくないですか？」

確かに出店を三人で回すのはかなり厳しいだろう。

最低でも焼く人間があと一人は欲しいところだと新八が付け足すと銀時は首を振って答えた。

「ああ、心配いらねーよ。

ちゃんと助っ人を呼んだから」

「助っ人？」

「頼もう！……」

新八が首を傾げたのとはほぼ同時にテントの前から声が聞こえてきた。

「ツラア！！エリー！！」

「二人とも！！
どうしてこんな所に！？」

神楽達が声を上げた先には、桂とエリザベスが立っていたのだった。

「助っ人だ。まあ二人いりゃ何とかかなんたる」

銀時は頭を掻きながらそう言うと、桂とエリザベスは後ろに回って中に入ってきた。

「ヅラじゃ無い桂だ。」

まあ、たまにはこういうのも悪くないな」

『お好み焼き』

エリザベスはハチマキをして、
ヘラをクルクルと回しみせた。

「おお、なんかエリザベス、プロっぽいですね！！」

『稲村ヶ崎は今日も雨か…』

いきなり渋い表情になるエリザベス。

「んじゃ俺とエリザベスは焼く、ヅラは接客、新八はタネだな。
神楽、オメー序盤は客集め。
後半はこっち手伝え」

『コクリ』

「ツラじゃ無い桂だ」

「わかりました」

「合点アル！」

四人は指示に各々頷いてい返事をする。

「取り敢えずできるだけ今のうちにタネを作っておくか」

「そうですね」

五人はボウルに具材をいれて各々かき回し始めた。

*

〈SP第一班〉

「今回も例年通り、第一班は特にお客様が集まりやすい広場とそれに繋がる出店列を見回る事になっている。

祭りだと浮かれる奴等が多いからな。特に気をつけて見回るように……」

第一班のログハウスの広間ではロアルを始めSPメンバーが集まってダイニングテーブルに座っていた。

そしてテーブル全体が見渡せる、言わば父親の位置に座っている口アルは腕を組ながら本日の仕事を説明している。

「夜は広場で催し物もあるからな。夜は取り分け安全に気を配ってほしい」

周りの六人はコクリと頷いて返事をした。

「それじゃ、時間と持ち場の割り振りだが……」

「霧崎君！」

「ん？」

朝の会議も終わり、各人がそれぞれ持ち場につこうとリビングを出ていくなか、霧崎は莎唎に呼び止められた。

「どうしたんだ？」

「どうしたのって、私達ペアでしょ？一緒に行動しないと」

「え……ああ、そうだったな」

霧崎は若干狼狽えたがすぐに思い出したように頷いた。

ペアというのはSPが二人一組になって見回るものである。因みにペアの組み合わせはこんな風になっている。

- ・ロアル、九条（高等部校舎周り）
- ・霧崎、翠季（正門 出店、広場）
- ・白井、篝（広場 時計塔周辺）
- ・東（監視モニター）

このような割り振りになっている。午前と午後で持ち場を入れ換えて効率を上げるそうだ。

「ずっと違う事考えてたでしょ？」

「いや、そんな事アねーよ。」

ただ正門は午後は見張らなくて良いのかと思ってよ。割り振りを見る限り午後の正門は無えから」

「ええ、午後の正門には他の班のSP達がついてくれる筈よ」

白皇学院のSPは何も第一班に限った事では無い。

他にも沢山の班がいるのである。

「ああ、なるほど。」

言われりゃそうだな」

「疑問も解けたようだから行きましようか」

「おう」

二人は玄関に向かって廊下を歩き始める。

莎唎は口では納得している様子を見せていたがちゃんと気づいていた。霧崎が他の事で考え事をしていた事に。

「霧崎君……」

「ん？」

「……………」

莎唎は霧崎に声をかけたものの、何か思い止まったように動きを止める。

(まあ、無理矢理聞くのは野暮ってものかしらね)

そして、首を振るとそう考え直した。

「オイ、どうした？」

「何でも無いわ。ただ……随分の目つきが悪いなあと思って」

「…………せめて鋭いと言ってくれ」

霧崎はガクリと視線を外してそう言った。

「もしかして……気にしてる？」

「別に、全然してねえけど。」

「……もう行くぞ」

霧崎は拗ねたように背を向けると先に玄関から外に出てしまった。
った。

「あらあら……」

莎喇はその様子をみて口元を緩めると、その後を追った。

*

〈模擬店〉

銀時達がいるお好み焼きの出店ではタネがいくつも出来上がっていた。
た。

鉄板も熱くなり出して、準備は出来ている。

「大体準備は出来ましたね。」

後は沢山売れるかどうかだけ……」

「心配するな新八君。」

武士たる者、本気でぶつかれば皆分かってくれるだろう」

「若干同情気味に聞こえるんですけど？」

新八と桂はタネの入ったボウルを順々に並べると外に目を向けた。

外は出店の準備をする生徒、外部者が慌ただしく駆け回っていたり、校舎に走ってゆく生徒達が嬉しそうに笑っていたり、お祭り一色といった感じだ。

「いやあ、何だかこっちまでワクワクしてきちやいますね！」

『天真爛漫』

エリザベスも看板を上げて新八に同意する。
嬉しそうに見えない事も無いような気がする。

「バカヤロー」

何浮かれてんだテメーら。ここは戦場だ。遊び気分で入るんじゃないやありません!!」

「その通りアル！ここは弱肉強食の世界ヨ。お祭りなんて満喫するのは100年早いネシャバ僧が」

新八達の後ろから銀時と神楽が厳しい言葉をかけ……

「……二人とも。何食べてんですか？」

二人は何かを口に加えて頬張っている。

「あんず飴ヨ！さつきあそこの出店で買ったネ」

「やっぱり祭りは甘いもんに限るな」

「……お前ら鉄板で溶けてしまえ」

キンコーン……

白皇学院に祭り開始の合図である、鐘の音が響き渡った。

「あ、銀さん！始まったみたいですよ！」

新八は素早くボウルを持つと、銀時に顔を向ける。

「うっし、んじゃなるたけ売るぞテーマーらアアア！……！」

「『おー！……』」

こうして、一同の掛け声と共に、ヒナ祭り祭りが開催された。

* AM 9 : 20

開始から少しして、銀時達の前に他校の中学か高校生五人がやって来た。

「あ、お好み焼きあるぜ」

「オイオイ〜お好み焼きなんて……食いづらいし、第一祭りのお好み焼きは不味いって相場が決まってんだよ」

「そうそう。食ってかなくて良くね？たこ焼き食おうぜ」

好き勝手に言っ出て店から離れていこうとする青年達。

お好み焼きを焼きながらその様子を見ていた銀時が一言。

「神楽」

「うっすー!!」

ドカツ!!バキッ!!ズドン!!!!

「どうアルか？」

「出店も大変ダロ？」

「メツチャ大変そうです!!」「」

銀時が焼いている鉄板の横では、青年達が正座していた。顔中ボコボコに腫れているのは突っ込むべきか：

「白々しいアルなガキ共オ」

もつとナチュラルに言えないアルか？オイ!!」

「ひいイイ!!」

申し訳ございません!!」「」

青年達の前には神楽が番傘を担いで睨みをきかせていた。

「あんまり祭りをナメるなヨ。

お前らハナタレ共が出店を語るなんざ10年早いネ」

「おっしやる通りでございます!!」「」

青年達は神楽を見ては真っ青になりガタガタと震えている。

「神楽。その辺にしておいてやれ。ウチのが悪かったな兄ちゃん達」

すると銀時がテントから出てきて青年達の前に立った。

「お詫びといつちゃんだがコイツはサービスだ。代金はいらねえ

よ

「え?」「」

青年達の手には出来立てのお好み焼きが乗せられていく。

「い、良いんですか!?
こんな……」

「俺は売り上げなんてそんな事は微塵も考えちゃいねえ。
ただ客に美味しく食べてもらいたい……それだけだ」

「……………」

銀時の言葉に青年達は心を打たれたように暫く見上げていた。
そしてお好み焼きを一口食べる。

「……………美味しい……………」

全員一致でそう呟いた。

その表情は感動で満ちている。

「お、俺、ちよつと宣伝してきます!こんな素晴らしい人達のこんな美味しいお好み焼き、皆にも食べて貰いたい!
こんな気持ち……ありがとうございます!」

「俺も!」

「僕も!」

青年達は次々と立ち上がると、銀時に礼を言って、人込みに駆けていった。

それを見送ったかと思うと、銀時と神楽はニヤリと悪の笑みを浮か

べる。

「……………フツ、チヨロいな。」

こんなに簡単にアメとムチ作戦に引つかかるたア」

「ま、私にかかれば朝飯前ネ」

「白々しいのはオメーらだよ」

新八は呆れたように二人を見て溜め息をついた。

*AM10:30

「くおオオオオ!!手が、手がつるウウウウ!!」

「情けないアルな新八。」

こんな事くらいで」

新八と神楽は二人並んでそれぞれボウルの中身をかき回してタネを作っている。

しかし、ずっとこの作業を続けてきた新八の腕はいい加減休憩が必要だった。

「そんな事言ったって仕方ないでしょ。ちよっとこれ休憩……………」

しかし新八が外をみると、出店の前は朝にも関わらず客が結構並んでいる。

これがお昼になると大変な行列になることは馬鹿でも分かる話であつて…

「仕方ないアルな!!」

私が二つ分作ってみせるヨ。

新八は休んでるヨロシ!!」

「あ、ちよつと神楽ちゃん!？」

神楽は新八のボウルを奪うと、二ついつぺんに作るうと……

バシヤアアア!!

「神楽アアア!! オメー何やってんだアアア!？」

「あ、ゴメン銀ちゃん」

二つのボウルは銀時の鉄板にひっくり返った。

* P M 1 2 : 4 5

「すみません、店員さん。」

銀玉と豚玉二つずつ」

「店員さんじゃ無い桂だ」

お昼時になるとどここの出店もかなりの列になる。

取り分け銀時達の出店は長蛇の列で、桂が手接客をしていた。

「いやあの…お好み焼きを…」

「お好み焼きじゃ無い桂だ」

桂の言葉にお客は戸惑いを隠せない様子である。

「はあ……桂さん、ですか。」

銀玉と豚玉を二つずつお願いします」

「あい分かった。」

しかし貴殿、そんな事で狼狽えるなどそれでも侍か。
これからの日本の行く末を案じー」

スパーン！！

「接客をしるオオオオ！！」

銀時はへらで桂の頭を叩いて突っ込む。

「オメーちゃんとやってくれよオイ！！ここ一番の稼ぎ時だよ！？
っ！か何でウェイター服着てんだよお前！何料理屋！？」

よく見ると桂の服装はウェイター服だった。

「何を言っている銀時。」

この客の中に攘夷志士にふさわしい人物がいるか見極めるのも俺の仕事だからな。ハツハツハ！」

「オ、イ誰か鉄板持つて来い!!
この馬鹿の顔面丸焼きにするぞ」

* P M 1 3 : 3 5

「く……キツイですね!!
まだまだお客さんが減る気配が一向に無い……」

「う、お腹減ったアル」

「さっきお好み焼き食べたでしょ？」

「あんなんじゃないネ」

新八と神楽はかなり精神的疲労が嵩んできたようだ。

『やる気やる気!!』

あと一時間気力で乗り切ろう!!』

すると二人の前に看板が飛び出してきた。
エリザベスがヘラを片手に、檄を飛ばしていたのだ。

そのままエリザベスはクルクルとヘラを回すとお好み焼きを次々と華麗にひっくり返していく。

「おおー！！凄いネエリー！！」

「エリザベス……よし、僕らも頑張ろう！！」

二人は気合いを入れ直すと、またボウルを手につのだった。

* P M 3 : 1 5

「……はあア……」

一同は模擬店から少し離れた場所にある林で腰を下ろしていた。
時間が来たのでスペースを他の店に譲ったのだ。

まだ列が出来ていた為に、銀時は残念がっていた。

結果、祭りの出店としてはかなりの売り上げを叩き出した。
依頼は大成功といえる出来だ。

「ふう〜。新八、神楽、お疲れさん。ツラ達も助かったぜ」

「ヅラじゃ無い桂だ。

ふむ。しかしあまり良い逸材には出会え無かったな」

「んなモンいる訳ねーだろアホ。まあいいや。これは分け前な」

「ああ、済まぬな」

銀時は売り上げを分けて、桂とエリザベスに渡した。

「あとコレはオメーらな。

給料も入ってるって事で」

「やったアル！これだけあれば食べ物食べ放題ネ」

「うん。大変だったけど、随分稼げたね」

神楽は封筒を抱きしめて飛び上がって喜び、新八も達成感を感じていた。

「銀ちゃん！お祭り回って来ていいアルか!？」

「ああ、あんまはしゃぎ過ぎんなよ。後九時前になったら例の物運ぶから正門前に集合な」

「分かったネ！！行くアルよ新八」

神楽は嬉しそうに頷くと新八を掴んで人込みに走っていった。

「ではエリザベス。咲夜殿が来るまで俺達も回るか」

『コクリ』

「じゃあ銀時。また後でな」

桂とエリザベスも神楽達とは反対の校舎の方に向かって行った。

「……………さてと、俺アどうすっかな……………」

欠伸を一つ、伸びをしながら銀時は宛も無く歩き始めた。

第七十八訓

何歳になっても祭りつて聞くとテンションが上がる（後書き）

大切なことゝ

まず始めに、

3月11日に起きた東日本大地震で亡くなられた方々にご冥福と哀悼の念を捧げたいと思います。

本当に何と申し上げればいいのかわからない程悲しい出来事です。本当に被災者の皆様の一人でも多くのご無事を心より願っております。

私の友人も岩手に住んでおり、一昨日無事だという連絡をうけた時は安堵から力がぬけてしまいました。

連絡を受ける事がこんなにも嬉しい事だと今回初めて痛烈に実感した次第であります。

昨日は大学の先輩達と募金活動の手伝いにいきました。

沢山の方々が協力して活動している姿に胸を締め付けられる思いがしました。

こんな時に私は小説を書いている場合なのかずっと悩んでおりました
たが、

他の先生方から温かい言葉をかけていただき、こんな小説で少しでも笑顔になってくれる人がいるならと、そう思って書くことにしました。

少しでも笑ってくれば、一文字一文字に気持ちを込めて執筆しましたし、これからもそのような気持ちでやっていきたいと思えます。皆様もどうか募金にご協力お願いいたします。

後書きの銀が如くですが、今は事情により暫くお待ち頂きたく事をお願いします。

本当に申し訳ございません。

銀八先生のコーナーは次回にまとめてやりますので。

今回は銀時のお祭り回りの様子を、その次は神楽やその他のキャラのお祭りの様子を書こうと思えます。

少し話が逸れましたが、こんな時だからこそ、一人一人の行動や思いやりが大切になってくるのだと思えます。

ですから皆様、どうか手を取り合って協力していきましょう。

最後にもう一度、被災地の一刻も早い復旧と、原発の被害の最小限、被災者の方々の一人でも多くのご無事を心より願っております。

どうか頑張ってください!!

第七十九訓

ハメを外すなら良識と節度を持って適度に外せ

* P M 3 : 2 5

ガヤガヤ……

白皇学院で開催されているヒナ祭り祭りは例年に増して客の数が多く、賑やかな声があちらこちらに響いていた。

「ふわぁ……随分と賑やかだな、オイ」

そんな中、銀時は欠伸を一つフラフラと宛も無く歩いていた。

「あゝ、特にする事もねーしパチンコでも行くかア。

出店で甘いもん巡りは夜でいいよな……いやでも今のウチにいった方が良いか？」

銀時は独り言をブツブツと呟きながら歩いていくのであった。

第七十九訓

ハメを外すなら良識と節度を持って適度に外せ

〔高等部1学年校舎〕

「……………ん？どこだここ？」

銀時は気が付くと、出店が立ち並ぶ所から随分離れた場所に来ていた。

パチンコに行こうか甘い物を食べようかと迷って歩いている内に知らず知らずと校舎側に足を踏み入っていたようだった。

「オイオイ……………」

「…か無駄に広いんだよなココ。帰り道……………門はどっちだ？」

キヨロキヨロと見回すが随分と離れてしまっただか、入口への記憶は片鱗すら無い……………」

校舎は見上げるほど高くでかいが、様々な声が飛び交い賑わいを見せていた。

どうやら各学年校舎でも生徒達が催し物をしているようだ。

「盛り上がってんな〜」

ま、俺は早く当たる台の方で盛り上がりてえんだけだよ……

アレ、こっちか？いや、反対から来たような気がする……」

「おお、お前」

正門への道をあれこれと思索していると、後ろから声がかかった。

「あん？」

「何してるんだ？迷ったか？」

声をかけてきたのは姫史だった。彼は銀時に気づいて校舎から出てきてようだった。

「そうかオメー……ココの先生だったな」

「ああ、まあな。」

ん？どうして高等部にいるのかって顔だな。知りたいか？
いいだろう、答えてやろう。

午前中から午後2時まででほとんど中等部の方は回ってしまっただな。
まあ一応担当は高等部だからな、本当はもう一度中等部を回りたい
が……あ、オイー！！」

姫史が銀時の方を見ると、手を上げてその場を去っていきこうとして

いた。

「まだ話の途中だろう。
人の話は最後まで聞け」

「もう十分だから。オメーがどうしようもないロリコンって事がよく分かったよ」

「お前に誉められても嬉しくないぞ」

「誉めてねーよ」

銀時は溜め息をつくときつと洩々姫史の方に戻っていく。

「んで？俺に何の用だ先生よ……」

「そうだった。ちょうどいい所にいた。暇ならちょっと付き合ってくれないか？」

「今から人生と懐をかけた決戦に挑むんでな。
悪いが他をあたってくれ」

ヒラヒラと手を振って姫史から去るうと……

「パフェでも何でもおごってやるぞ？」

「決戦延期だな」

そう言って銀時はクルリと180度回って戻ってきた。

*

〈1年C組 教室前〉

二人が二階のとある教室前に着くと、そこには沢山の人が並んでいた。

出店の昼にあつた長蛇の列を軽く超える数である。

「オイオイなんだこの列……」

この中で何が行われてんだよ？

賭博場か何かか？」

「そんな訳があるか。あの看板を見る」

姫史が指差す先には、教室のドア前に立っている看板が一つ。

『Cカフェ？』

綺麗な水色の看板に可愛らしい文字でそう書いてあつた。

「カフェ？」

「ああ。ここならパフェでも奢れるだろう」

「まあそうかも知れねーけど、

何でこんな長い列が出来てんだ？喫茶なら他でもやってんだろ？」

入口からずらりと列が続いていて、恐らく下の階まで繋がっていると思われる。

「まあ、入れば分かるだろう」

「つーかこんな列に並ぶのはゴメンだぜ？」

「心配するな。教職員は並ばずとも入れるチケットを持っているからな」

姫史はそう言って懐から二枚の紙を取り出してニツと笑ってみせた。

ガラ……

「いらっしやませー？」

二人が教室に入ると、店員と思わしき女子が近づいてきた。

「あ、湊川先生！／＼／」

「ああ。随分と繁盛しているようだな」

姫史と女子が他愛も無い会話をしている横で銀時はようやく理解した。

何故ここに特に人が集まっているのかが…

店員は全員可愛い女子。

しかも着ているものは上は白いレースがついた服で肩が露出していて、下はピンクのミニスカートで、メイド服のスカートのように大きなリボンがついているのだ。

(なるほど。よく見りゃ列も男ばつかだな……)

銀時は溜め息をつくとき、姫史が案内を受け席に歩いていこうとする後に続いた。

*

「オメーよオ、何だってこんな所に連れてきたんだ？
普通の店にしるよ」

「何を言う。こんなに美しい姫君達が働いているのだ。我々が協力しない訳にはいかないだろう。」

しかしこの店の制服は実に良いな……」

「いや、勝手に俺入れんな。」

オメーだけで良いから」

席についた二人はメニューを片手に改めて教室、基店内の様子を眺めていた。

白皇学院の教室といった堅苦しい感じは一切無く、オレンジと薄ピンクといった暖色系が壁紙として張られ、椅子やテーブルも白細工の可愛らしいものが使われている。

奥にはどういふ訳か厨房らしきものがあり、そこで料理が作られているようだ。

男子達が頑張っている様子が垣間見える。

客の男性達は女子や衣装目当てのものばかりだが、純粹に休憩やデザートを楽しむ人もいくらかいるようだ。

「しかし、生き返るな……」

まるで混沌の世界に僅かに光を灯すオアシスのようだ」

「さっきまで中等部いたって言って無かったか？」

「ああ、実に素晴らしかった……天国だな、あそこは……」

「楽しそうだなアオイ。」

良いですねえ楽しみが尽きないようで、羨ましいよ」

姫史が中等部での思い出に浸っている様子に鬱陶しそくに手を払う銀時。

「ま、それは良いとして。」

注文するものは決まったか？」

「あ……んじゃ、このストロベリーパフェとチョコレートパフェ、

それからチーズケーキな」

「遠慮つてもものを知らんのかお前は……？」

姫史は仕方ないかと店員を呼ぶ為に手を上げた。

すると、少しして制服を着た女子が二人の元にやって来た。

「すまない。注文を良いかな？」

「ハイ。ご注文承りま……」

女子は二人の見て言葉を止めた。それに気付いたように銀時も顔を上げて止まった。

「おお、桂じゃないか」

「……………何やってんのお前」

「ぎ、銀時！？／／／

それに先生まで……！」

ウェイトレスの女子は他でもない、ヒナギクであった。

彼女は驚きのあまり思わずトレイで顔を半分隠してしまう。

（な、ななな………何でこんな所で二人一緒なの！？

先生だけで無く………

よりもよってこんな格好の時に銀時まで……！！／／／）

この格好は本人にとって相当恥ずかしいのだろう。

ただでさえ抵抗があるのにも関わらず、ましてこのまま知り合いに会うともなると……

どんな思いかは想像に容易い。

「そうか、桂はこのクラスだったな。しかし意外だな。お前が生徒会よりこちらを優先するとは」

「わ、私だって好き好んでやってる訳じゃありません！！／＼／＼ただどうしても人数が足りないらしくて……生徒会は午後はこれといった予定はありませんから……」

この盛況ぶりなら人数はいくらいても忙しくなるだろう事は姫史達にも容易に理解出来た。

「先生達こそ、なんでこんな所に二人で？」

「俺が聞いてえくらいだよ。」

何で俺をここに連れてきたんだ？」

銀時は姫史を見ると、彼は腕を組ながらふむと頷いて口を開く。

「考えてもみる。このような店に男一人で入る絵面を……」

「シュールだろう？」

「……………だな」

銀時はその光景を思い浮かべると同意するように頷く。

「それはおいておいて、注文だったな。私はサンドイッチとブラッ

クで頼む」

「俺アストロベリーパフェとチョココレートパフェ。それからチーズケーキとブラック」

ヒナギクは銀時の注文に呆れたよう表情をしながらも、メモをしていく。

そして逃げるようにその場から離れて厨房の方に行ってしまった。

「ふむ。ああやって恥じらうウエイトレス姿も良いな」

「お前何で教師やれてんの？」

暫くして、二人のテーブルにヒナギクが注文したものを運んで来た。

銀時の前には二つのパフェとケーキが、姫史の前にはカップとサンドイツチが置かれる。

「お前……本当にそれ全部食べるか？」

「良いんだよ。今日は疲れたし糖分摂っておかねーと……」

「では、私はこれで……」

ヒナギクはそう言って、さっさとこの場から離れようとする……

「止めて下さい……」

「「「?」「」」

突然女性の声が銀時達のテーブルの後ろから聞こえてきた。

振り返ると、どうやらウェイトレスと客が揉めている様子だ。

「どうかしましたか?」

ヒナギクはすぐにそのテーブルに駆け寄った。

「どうしたの?」

「あ、会長……」

ウェイトレスの女子に話しかけると彼女は困ったように表情を曇らせる。

お客はいかにも悪そうな男達が四人。

二人はグラサンをかけていて服をだらしなくきている茶髪と金髪頭の男。

もう二人は同じようにだらしなく服を着たロン毛の黒髪と茶髪だ。

「ちょっと、ここで注文したパフェにい、こんなモンが入ってさ

あ………(この娘可愛いなア……)」

グラサンの二人がそれぞれパフェを見せる。

二つのパフェのアイスクリームの上に蠅の死骸が何匹が入っていたのだ。

(ああ、これは……？)

ヒナギクは今時こんなあからさまな当たり屋がいるのかと半分呆れながらも、口を開いた。

「申し訳ございません。すぐに取り替えてきますね」

そう言っつてパフェを取ろうとすると……

ガシッ！

「……………！！」

金髪のグラサンに腕を掴まれてしまった。

「いやいや、俺達もう食べちゃったんだよね
取り替えるじゃ済まなくない？」

「……………」

「そつだねえ。本当は慰謝料を請求したいところだけどお……………」

グラサンの二人は卑しい目付きでヒナギクともう一人の女子を見る。

「無理にとは言わないよお……………」

その代わりのモノで払ってくればチャラにしてあげてもいいけど？」

「!?!」
「……………」

いやらしい笑みを浮かべる男達に女子は怯えたように表情をひきつらせ、ヒナギクは睨み返す。

更に金髪のグラスンはヌツと顔を二人に近づけた。

「そんな怖い顔しなくてもさあ、悪いのはー」

「や、止める!?!」

しかし、金髪の声はそんな叫び声に中断される。

「あん?」

「あ、東宮君?」

叫び声の主は厨房から出てきて東宮康太郎であった。

「お、お前達!?!桂さんから手を離せ!?!」

東宮はぐんぐんとテーブルに近づいていく。

若干額に冷や汗をかいているが…

「あゝ?何だガキイ?」

(ひいイイイ!?)

金髪のグラスンはドスを効かせた声で睨むと東宮は飛び上がりそう

なくらい内心悲鳴をあげる。

(だ、ダメだ！ここで逃げては…桂さんがピンチなんだ！！僕が！)
だが東宮はグツと唇を噛み締めると四人の男を頑張っつて睨む。

「お前ら当たり屋だろう！」

パフエに蠅なんて入れたのは自分でだろ！」

「あゝあゝ！？」

ガキ、てめえ！！！」

「ちよつと表で話すか？うん？」

黒髪のロン毛が怒鳴り茶髪のグラサンは立ち上がった。

(ひいひいひいひい！！！！)

無理！！やっぱり無理だよ野々原アアアア！！！！)

「東宮君！！！」

東宮は近づこうとしている茶髪の男を見て縮み上がってしまつ。

ヒナギクは男を止めようとするが、その手はピタリと止まった。
何故なら……テーブルに歩いてきた男に気づいたからである。

「スィルヴプレお客様ア、どうされました？」

「あん？」

男はコックの格好をしてゆっくりとした歩き方でテーブルに向かってくる。

「何だお前？」

「オウ、ご紹介遅れました。

当店の一流パティシエ、フランス帰りのギンです。アンシャンテ」

(ぎ、銀時！？)

その男とは紛れも無く、坂田銀時その人であった。

銀時は東宮の前まで来ると、彼に顔を向ける。

「どうしたんだ？

何か問題でもあったかい……？

ヒガシミヤ君」

「……アツマミヤです」

「オウシット！失礼

それで東沼君？何か不手際でも？」

「だから東宮ですって……！

(っーかこの人誰！？)「

すると、金髪の男はヒナギクの腕を掴んだままパフェのグラスを銀時に見せつけた。

「オイ！！これを見てみる……
蠅が入ってんだよ！！」

「どれどれ？」

銀時は金髪からグラスを受け取ると中を覗き込んだ。

「これは……シヨウジョウバエ！？アタンスイオン、何てことだアアア！！」

「そうだろ？だから慰謝料を請求しようと思ったが……この娘達がちよつと俺達と付き合ってくれたらチャラに……」

「東里オ！！テメー何度言ったら分かるんだ！？」

お客様にお出するパフェのトッピングはシヨウジョウバエじゃ無くて、ヤマギシモリノキモグリバエに決まってるだろうがアアアアア！！」

「……いや違えだろオオオオオオオ！？」

銀時の怒鳴りに四人がいつぺんに突っ込んだ。

「何でハエがトッピングになつてんだよ！！」

「つかどんだけマニアックなハエ！？」

「すみませんお客様ア。」

コイツまだ新米なもんでえ、ディッシュ用とデザート用のハエの区別もつかないんですよ」

許してやって下さい、スィルヴプレ」

「デザート用のハエって何だよ!? デイツシユもデザートも無いからね!? ハエは食べ物に入れるモンじゃねーだろオ!!!」

東宮を指して言う銀時に思いきり突っ込む金髪のグラサン。

「このパフェのスタンスはウルルン滞在記の気分を味わって貰おうという想いが……」

「どんな滞在記!？」

下さんのナレーションが流れても食えるかこんなモン!!!」

「オウ、失礼。」

私、フランス帰りのパティシエなもんでね、スィルヴプレ」

「『お前はフランスで何を学んで来たんだアアア!!!』」

息ピッタリなツツコミを炸裂させる四人。

そんな様子に啞然としているヒナギク達。

「『つかさつきからそのフランス語ちよいちよい使うの止める!!! イラツとくるから!!!』」

「『そつだ!!! 大体さつきから黙って聞いてりゃ!!! いいか、俺が入れたのはシヨウジョウバエじゃねえ! シュモクバエだ。間違えんじゃねー!!!』」

金髪のグラサンに続いて茶髪のグラサンが叫んだ。

.....

「馬鹿！！お前何言ってるんだ！！」

「あ、ヤベー！！」

ガシッ！

一瞬で銀時は二人のグラスンの頭を強く掴むと、顔を近づけた。

「取り敢えず……とつととその汚ねえ手をコイツらから離しな」

「！！！！」

金髪と茶髪のグラスンは慌ててヒナギクと女子を掴んでいた手を離す。

「オイ、兄ちゃん達よオ……」

世の中にはなア、

食いたくても食い物が無ねえ奴等が沢山いんだよ？

そついう奴等の事少しでも考えた事があんのかい？」

「「ひいイ！？」」

「お祭り気分ではメ外すのも結構だかなア……」

銀時は二人の頭をグツと持ち上げて……

「食い物を……粗末にするんじゃないエエエエエエ！……！！！」

テーブルに思いきり叩きつけた。

ガタッ！

「てめえ！！ダチになにしゃが……！！？」

もう二人の男が慌てて立ち上がろうとするが、銀時はその二人の胸ぐらを掴むと一気に引き上げる。

「店長オ、オーダー二つ追加です」

銀時はギリギリと二人を浮かせるとそう言って振り返る。
その先に立っているのは拳を二つ作った姫史だった。

「Oui」

「マナーの鉄槌二丁オオオオ！！
入りまアアアアアす！！」

銀時はそのまま二人を姫史に向かってぶん投げた。

「Merci de vos achats！！」

姫史はそう言つて飛んできた二人に渾身の拳を降り下ろした！！

「「がはっ……………」」

そして、倒れて気絶した二人の男の襟首を掴むとズルズルと引きずつて銀時達の所に歩いていき、

更にテーブルに突っ伏していた二人の男も掴んで引きずっていく…

ガラ…………

教室の扉を開くと、四人を放り投げた。

そして目の前に立ち塞がり見下ろして口を開く。

「貴様らに言つておく…………

今後ウチの生徒に手を出さないと約束しろ…………さもなれば

二度と地面を歩けなくなると思え…………！！！！」

ぎらりと瞳が紅い光を放つ。

「「ひいイイイ！！」」

そのあまりの気迫に、

二人の男は何か立ち上がると、気絶している男達を背負って慌てて逃げていった。

きゃあアアアア!!

……と教室内では黄色い声上がり、女子は皆姫史により一層熱い視線を送った。

「オーイ、俺もいるんですけど……」

銀時は呆れたようにそう呟くが、女子達には姫史しか見えていないのだろう。

客も皆、姫史を凄いと驚いて見ている。

黄色い声は止むことが無い……

「何か釈然としねえけど、まあいいか」

渋々席に着く銀時を見て、ヒナギクはクスリと笑って声をかけた。

「ありがとう銀時。」

助けてくれて」

「へえへえ、そいつア良かったな」

「もしかして……拗ねてる?」

「まさかア」

ヒナギクの言葉に銀時はそう返すと、パフェをつつついて口に運んだ。

彼女はそれを見てもう一度クスッと笑うと、今後は東宮の方に顔を

向けた。

「東宮君もありがとうね」

「え!?!」

まだ少し状況についていけない彼はヒナギクに声をかけられてようやく我に返った。

「助けてくれて。」

東宮君が最初に来てくれなかったら、どうなってたか分からなかったから」

「い、いえいえ!!当然の事ですよ!!」

「そう?ありがとう」

東宮は心の中で飛び上がって舞い踊るほど喜んで叫ぶ。

(やったアアアアア!!!!)

桂さんにお礼を言われるなんて……野々原、やったぞオオオオ!!!(

「やりましたね!坊っちゃん!」

その東宮の真上の天井裏では、

野々原が感動のあまり涙を流していたという……

そうこうして姫史が銀時のところに戻ってきた。

「よオモテ男、ご苦労さん」

「いや、お前の言葉も中々心に響いたぞ」

「何が嬉しくてオメーの心に響かせんだよ」

二人は軽く微笑するとそつと拳を合わせた。

「お二人とも、皆を助けて頂いてありがとうございます」

隣にいたヒナギクが改めて二人にお礼を言う。

「気にするな……」

私の美しい姫君達が住まう聖地を守っただけだ。我が宿命よ」

「……………はあ？」

どうしてこの男は感謝の気持ちが薄れるような発言をするのだろうか
かとヒナギクは思った。

銀時と言うと甘さが欲しいとパフェに勝手に蜂蜜を足し始めている。

「そういえば桂、お前はいつまでその格好をして手伝いをするんだ
？」

「え、……………はッ！！／／／」

ヒナギクは今の自分の格好に気付いたように急いで自分の服に目を向ける。

そしてワナワナと震えだす…

「ん？どうした？」

不思議そうに首を傾げる姫史。
気にせずパフエをつつつく銀時。

「……………わ…」

「わ？」

「わ……………わ……………」

いつの間にかヒナギクの右手には正宗が現れていた。
それをゆっくりと振り上げる…

「オイイイイ！？」

ちよつと待てお前！！！」

「んだよさつきからうるせー……………うお！？」

ようやく銀時もパフエから目を離して気付いた。

「えエエ！？ちよつと待って！！！」

もしかしてこのパフエが不快だった！？いや違えよコレ！！

あの苺と蜂蜜にはより良い歩み寄りが必要だと思って俺はその架け橋をだな……………！！！」

「教師に手をあげる気か！？
どこで非行に走った！？校内暴力！？」

正宗は紫色の気を帯びて……

「忘れるオオオオオオオ！！！！／／／」

振り払われた！！！！

かいしんのいちげき！
ぎんときに425のダメージ！
ぎんときはたおれた…

かいしんのいちげき！
ひめじに386のダメージ！
ひめじはたおれた…

第七十九訓

ハメを外すなら良識と節度を持って適度に外せ（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ、今日も始めー」

ナギ

「待て！その前に、オイ伽藍！！」

何でヒナギクはかりが出るのだ！私の出番が無いではないか！！」

伽藍

「いやいや……仕方ないじゃん。この長編は元々原作ではヒナギクさんがメインの話だからさ。」

更にこの小説ではその辺思いきり変えちゃうから……配慮というかなんとというか……」

ナギ

「それは確かにそうだが……」

伽藍

「大丈夫。勿論ナギや他のキャラがメインなる話も考えてるから」

ナギ

「おお！本当か！？」

伽藍

「いつかね……」

ナギ

「……………信用ならんな？」

銀八

「まあそんな訳で質問いくか『咲夜と千桜に質問。エリザベスに新しい名前をつけるとしたら？』」

咲夜

「エリザベスはエリザベスやからな」

ハル

「そうですね」。

エリザベスさんはエリザベスさんですからね」

咲夜

「エリザベスやな」

ハル

「ですね」

銀八

「……………次の質問『銀さん達に質問。ハヤテに手紙の内容伝えた？』」

ハヤテ

「ちよつと……………何ですか内容って……………？」

銀八

「謝ったし良しとしよう」

ハヤテ

「え？え？えエ！？」

銀八

「続いてな『エリザベスに質問。何歳ですか？』」

エリザベス

『ちよつとお前便所まで来い』

銀八

「……………次の質問『ハヤテに質問。このまま呪いが解けなかったか？』」

ハヤテ

「解きます！！何が何でも解いてみせます！！」

銀八

「ハヤテ君……………本当すみません。わざとじゃないんだよ。俺達も頑張ってやったんだよ」

神楽

「ごめんアルハヤテ」

新八

「ツツコミに力が入り過ぎて……………本当にゴメンね？」

桂

「まあ、君ならやれるぞ。

ソレでも生きていける」

エリザベス

『あとの祭りかも』

ハヤテ

「……………何で哀れみの視線を向けるんですか？」

銀八

「さて、続きまして『新八に質問。何種類好み焼き作った？』」

新八

「四種類ですな

豚玉大小と銀玉大小」

銀八

「んじゃ最後な。

『桂さんに質問。オススメの好み焼きは？』」

桂

「ほう、俺に聞きたいか。

ならばまずは攘夷志士になることだ！！その後試験で合格してグルメ班に入る事だな」

銀八

「なんだよグルメ班って。

何で攘夷志士にグルメがあんだよ」

桂

「攘夷志士にはいかなる情報も必要なのだ。勿論食べ物の事もだ」

銀八

「いや、何もグルメ班なんて名前にしなくても良いだろうよ。
ま、いいか。んじゃ、また次回な」

第八十訓 楽しみ方は人それぞれ

銀時と姫史がC組の喫茶店で八チャメチャをやっている時、他の皆もそれぞれ祭りを楽しんでいた。

第八十訓 楽しみ方は人それぞれ

【桂とエリザベスの場合】

桂はエリザベスと一緒に人が沢山集まっている広場にいた。

広場には大きな舞台があり、そこで色々な催し物が行われる。

今は生徒達による勧善懲悪ものの短い時代劇が執り行われていた。

二人は広場の端の方のベンチに座って、出店で買ったであろうかけ蕎麦を片手にそれを見ていた。

舞台では侍が悪党四人を次々と斬っていくという立ち回りのちょうど真っ最中。

「ふむ…あの青年の動き、見事なものだ。将来伸びるぞ」

『未来有望』

二人は蕎麦を嚙りながら感心したように呟いた。

桂は普通に蕎麦を食べているが、エリザベスの食べ方は特殊だ。

まず、大きな口にどんぶりごと入れる。そして中で何やら力チャカチャと箸の動くような音がしたかと思うと、大きな口から空になつたどんぶりが出てくるのだ。

実に不思議である……

「是非とも攘夷志士になつてもらいたいものだ。

まあウチの試験は厳しいがな。

ハ―ツハツハツハ―！」

『ごちそうさま』

エリザベスは空になつたどんぶりを脇に置いて、ベンチからゆつくりと立ち上がった。

「む？もうそろそろ時間か？」

『まだ後一時間くらいありますよ』

「そうか。ではもう少し出店を回ってからにするか」

桂も立ち上がると、一旦周りを見回すと頷いた。

二人のいう時間とは咲夜が来る時間の事。

彼女はハヤテ（呪い付き）を連れてくる為に5時頃に白皇学院（裏口）にやって来る予定だ。

ハヤテの決戦は8時だが、色々と不幸もあるだろうし、咲夜もハヤテも少し祭りを見て回りたいとの事なので早めに来るそうだ。

「エリザベス、今度は向こうの方に行ってみるか」

『コクリ』

二人は広場から西側の出店が立ち並ぶ方向に歩いて行った。

【千桜と愛歌の場合】

「まあ、今回は例年以上に賑やかなね」

「そうですね。」

その分、ハメを外し過ぎないと良いのですが……」

千桜と愛歌は高等部の校舎付近を歩いていた。

「そういえば私達のクラスは喫茶店をやってるのよね？」

「ええ、確か？」

「しかもとっても可愛いらしい衣装で」

「……………ええ？」

千桜は考えたく無いのか表情をひきつらせてそう返す。

「……………千桜さんは手伝わなくていいの？」

「う……………」

愛歌の目は条件Sモードになりつつあった。

「そ、それをいうなら愛歌さんだって……………」

「私は今日は予定があるって言うておいたわ」

（いつの間にそんな根回しを！？）

「でもそうよね」

千桜さんはあんな格好したらバレちゃうものね」

愛歌が言うバレるとは、千桜が咲夜の屋敷でメイドをしている事だ。基本白皇はバイトオーケーだが、彼女の普段のイメージとはあまりに違うので知られると恥ずかしいのである。

「いや、別にそんな事は？（あるけど）
第一髪型とか変えなければ……」

「だったら、ちょっと行ってみる？」

「え？」

愛歌の言葉に一時停止する千桜。

「実は少し着てみたいとか思ってたりするんじゃない？」

「……／＼／」

千桜は何か言い返そうとするが、上手く言葉が出てこなかった。

「やっぱり……」

「なら少し覗いてみない？」

「で、でも……！」

「大丈夫、人前には出ないから。ちょっと写真撮らせてくれるだけでいいから？」

愛歌はニッコリ微笑んで鞆からデジカメを取り出した。

「いやいやいや！！全然大丈夫じゃないですよ……！」

「ちよっ、愛歌さん……？」

「良いから良いから」

千桜と愛歌はそんな感じで1年の校舎に入っていった。

*

〈1年C組 教室前〉

「やっぱり止めましょう!!」

その、恥ずかしいですし／＼／

「良いじゃない

せつかくのお祭りなんだから」

C組の教室前で千桜は最後の抵抗をみせていた。

「私なんかに着せても面白くありませんよ／＼／」

「そんな事無いわ。千桜さん可愛いから」

「ヒナとかの方が似合いますよ、絶対!!」

「確かにそれは貴重だけど……」

今は居ないからね?」

(ね?じゃ無くて!!!)

千桜の抵抗は全く愛歌には効いていない。

愛歌はそのまま組のドアを開けた。

ガラ……

「あ、ちょっと!」

「い、いらっしやいませ／＼」

二人がドアを開けるとウェイトレスが近づいて来た。

「「……あ」

「……あ／＼」

二人の前に来たのはカフェの衣装を着たヒナギクだった。
何故か若干頬が赤らんでいるが…

三人の間には暫く沈黙が流れて…

パシャッ!!

「フッフ」

「いやアアアアア!／＼／」

デジカメのシャッター音と愛歌の微笑みの後、ヒナギクのそんな悲鳴が響いたという……

【三人娘の場合】

1年A組 教室前

「ふう〜、疲れたア」

「ホント……こんな重労働は勘弁して欲しいわ」

「ま、意外と楽しかったがな」

三人は教室前の廊下に出ていた。

「そうだね〜、皆びっくりしてくれたし面白かったかな」

三人は1年A組の出し物をしていて今終わった所のようにだった。A組の出し物はお化け屋敷。

なので三人は今お化けの格好をしている。

美希は白い幽霊の衣装で手にはお皿を持っている。

泉は頭に斧が刺さって顔には縫い傷が書いてあるゾンビの格好。理沙は長い牙を生やしてマントを羽織った吸血鬼である。

「何か着替えるもの面倒だし、このまま行く？」

「そうだな。いざゆかん！！
ヒナ祭りへ！！（午前中も遊んでたけど）」

「食べ歩きなのだ」

三人はそんな掛け声と共に、廊下を走っていった。

「まったく、元気だなあアイツら……………」

そんな様子を呆れたように眺めている薫。

ガシッ！

「何グズグズしてんの！！
祭りの時こそ食べ歩きでしょ！！」

「うおわアア！！」

呑気に突っ立っているといきなり雪路に肩を掴まれ引っ張られる。

「行くわよ!..!

食い歩きだアアアア!..! (集りも少々) 「

(コイツは元気過ぎるな.....)

薫は泣く泣く雪路に引きずられて廊下から消えていった.....

【ロアルと憂奈の場合】

「おい

「.....」

「おい

「.....」

白皇の敷地内の比較的端っこの方。祭りの賑わいもあまり受けない静かな森林の中の大きな木の前にロアルは立っていた。

その木の上では枝にもたれ掛かって本を読んでいる憂奈の姿。

さっきからロアルが呼びかけているが一向に返事がない様子。

「おーいつてばー!」

「……………何?」

憂奈は少し目をずらしてロアルを見るとようやくポツリと返事をした。

「何?じゃ無くて…………俺達も祭りに行く」

「私達の見張り場所はこの付近」

「いや、そっただけぞ…………」

「退屈だろ?」

「全然」

そう言つと、憂奈はまた本に目を戻してしまつ。

ロアルはため息をついてその場に腰を降ろした。

「せつかくの祭りだぞ?」

「少しくらい楽しまんぞ損」

「黙つてて。コレ読んでから…………」

ぴしゃりとロアルの言葉を押さえつけるように言い放つ憂奈。

「読んでからつて…………後どのくらいなんだ?」

「400ページ」

それを聞いたロアルはガクツと頂垂れる。

「長いな。」

100ページにしてくれ……」

「なら200ページ」

「じゃあ110ページでどうだ？」

「150ページ……」

「120ページなら!？」

「135」

「……分かったよ、135ページな……」

ため息を吐くと、腰を上げて木に寄りかかる。
憂奈は無表情のまま本のページをめくった。

(相変わらず変な所で強情な奴だ……?)

【白井と篝の場合】

「白井さん、暇っスね」

「さん付けは止めて下さいよ。
篝さんの方が歳上じゃあないですか」

白井と篝は時計塔周辺の警備であり入口に立っているが、今は時計塔内には誰もいない。

因みに篝は24歳でロアルより年長である。

「いえ、年齢は確かにそうかもしれませんが、仕事では白井さんの方が先輩ですから」

「まあいいんですけどね」

篝はSPを始めて一年足らず……
言わば新米なのである。

一方白井はもう七年以上この仕事に携わってる上、あの三千院本家のSPなのだ。

仕事上では確かに白井の方が先輩である。

「しかし、こつも暇だと何だか無性にムズムズするっスね！
あゝ！！体を動かしたい！」

「だったら暫く走ってきてても良いですよ？
どうせこの持ち場も6時で別の班と交代ですし……」

白井は真上の時計塔を指差して言った。

「いや、それは悪いっスよ!!」

白井さん一人に押し付けるなんて真似は……」

「身体も心も万全な状態じゃ無いと、どんなプロでもミスをします。学院の安全の為に、ここはスツキリして来て下さい」

「白井さん……」

ニツコリと微笑んでそう言う白井に篤は尊敬の念を送る。

「流石先輩ともなると考え方が違うんスね!!
改めて尊敬するっス!!」

「いえいえ」

「じゃあちよつと動かしてきます!!」

篤はそう言つと、手を上げて白井の前から走り去っていった。

それを見送ると、白井は空を見上げて呟く。

「……さて、これで自分も心置き無くサボれるな」

両手を思いきり伸ばしてグツと身体に力を入れる。

そして力を抜いた……

(篤さん自身今サボってる訳だ。自分を追及する事は出来ない。万が一先輩達に気付かれても同じくサボってしまった篤さんを使えば何とでも言い訳が出来るし……6時になれば別の班が来る……)

白井はフツと笑うと時計塔をもう一度見上げる。

「さて……サボりますか」

【霧崎と莎唎の場合】

「……っクシヨン!!」

「あら……風邪?」

「いや……」

出店周りを歩いているのは霧崎と莎唎だった。

「どうせまたあの馬鹿が何か考えてやがんだろっな」

「くしゃみだけで分かるの?」

「勘だ、勘」

首を振りながら言う霧崎を見てクスリと笑う莎唎。

そんな感じで暫く歩いていると、不意に霧崎が立ち止まった。

「ん？」

「霧崎君？」

「この匂い……………綿飴！」

「へ？」

鋭い目を見開いてそう叫んだ為、周りの客がビビって一気に距離を取った。

しかし彼はそんな事お構い無しに匂いのする方向に向かって突き進む。

「ちょっと霧崎君！？」

莎喇も慌ててその後を追った。

どうやら霧崎は綿飴の出店に向かったようだ。

霧崎は早足で出店の前まで着くと、既に綿飴は後一つだと紙が貼ってあった。

慌てて霧崎は出店の人に顔を向けて言う。

「「綿飴一つ下さい！！」」

しかしもう一つの声と霧崎の声が重なる。

「「あん？」」

霧崎が声のした方を振り返ると、そこには白髪の天然パーマの男……銀時だった。

「あ、オメー本家の……」

「て、テメーは……！」

霧崎と銀時はお互いに一歩下がって向かい合った。

「霧崎君、急にどうしたの？」

「銀時、一体どうした？」

二人の後か莎唎と姫史もやって来た。

「あら、先生」

「ああ、どうも」

二人はお互いに声を上げると、歩み寄った。

「こんな時もお仕事ですか。大変ですね、ご苦労様です」

「いえいえ。

お祭りも見て回れて、楽しいですわ」

莎唎はニッコリと笑って姫史にそう返した。

「それより……」

「ああ……」

二人は綿飴の出店の方に顔を向けると、テント前で霧崎と銀時が睨み合っていた。

「え？何、綿飴？」

「え、綿飴？」

二人は出店を指しながら互いに確認し合う。

「参ったな、今日の祭りは盛況らしくて皆買ってるみたいですね。俺もう五件くらい回ったんで」

「ああそうなのか。でも俺も10件くらい回ったかな」

「ん？アレ入れたら俺15件超えてるな……」

銀時は思い出すような仕草をしながら呟く。

「いやいやいや、多分俺の方が綿飴を食べたい気持ちは強いな」

「いや、絶対俺の方が強い。」

そして新幹線並みに速い」

霧崎の言葉に銀時は手で新幹線の形を作ってみせる。

「俺はそんなモンじゃねえ。」

旅客機並みに強いそして速い」

「馬鹿、俺は更にその上をいく。ジェット機並みだ」

「アホ、俺のジェット機は速いだけじゃねえ。チケットがお前より安い」

「俺のなんてエコノミークラスが無い！！
エコノミーの値段で全員ビジネスクラスに乗れんだよバーカ！！
更にお前のより移動が速い、飛行時間が短くて快適！！」

「バカはテメーだ！！
飛行時間よりお客様の安全を考慮ろ！！

俺のなんて機内食も豊富だし、全席にテレビモニター付き！！
更に快適を約束する機内防音システムにより離陸や飛行時の音を軽減！！」

そんな様子を完全に呆れたように眺めている莎唎と姫史。

「先生……あの方は？」

「あれは三千院家の一応護衛の坂田銀時という男ですよ。
見ての通り、甘党で子供のような奴です」

「ああ、彼が噂の……
大分イメージと違うわね？」

「全くですね」

姫史は呆れたように同意して頷いた。

「それにしても、霧崎君って甘党だったのね…」

莎喇が二人に視線を戻すと、二人はお互いに掴み合い、ギリギリと顔を近づけて睨み合っていた。

「オイ、いい加減にしろよテメー!!! いい歳して綿飴なんて恥ずかしい奴だなア!!!」

「テメーこそな!!!」

それともアレか？頭がクルクルだと綿飴が食べたくなんのか？綿飴みてえな頭しやがって!!!」

「ああ、コラ!? テメーみてえなサラサラヘアーには天然パーマの苦しみは分かるかよ!!!」

「知るかなモン!!!」

「テメーは自分の頭でも食ってるタコ!!!」

ギシギシと両者の腕は音をたてていく。

「綿飴一つ!!!」

二人は小銭を出店のレジの前に叩きつける。

「いや俺だから!!!」

「いゝや、俺だ!!!」

「あの〜……」

二人の間から遠慮がちな声が聞こえてくる。

「「ああ!?!」「」

「あの〜、さっき綿飴売れちゃいましたよ?」

レジにいた親父は二人の後方に走っていく女の子を指して言った。

「「え……?!」「」

女の子の右手には綿飴がしっかりと握られている。

「「え〜……」「」

互いに親父を見る霧崎と銀時。

「「はあ……」「」

そんな二人の後ろで莎唎と姫史が肩を竦めていた。

【神楽と新八の場合】

「モグモグ……」

こちらも出店を中心に巡っている神楽と新八。

神楽は焼きとうもろこしを、新八はリンゴ飴を食べている。

「いやあ、やっぱりお祭りは楽しいね」

「そうアルな。」

こういふ風景を見てると思わず函館の夜景を思い出すぜとっつあん

……」

「それ誰の真似？」

すると神楽がある出店の前に気付いたように立ち止まった。

「あ、マダオアル」

「お、嬢ちゃんじゃねーか」

射的のテントにいたのは長谷川泰三であった。

「長谷川さんじゃないですか、
久しぶりですね。」

就職先見つかつたんですね、
おめでとうございますー!!」

「アッハッハッハッ、まーね。」

二人はデートかい？」

長谷川は少し照れたように頭を掻きながらそう返す。

「私射的やってみたいアル」

「ああ、やってってやってって！！サービスするよ！！」

長谷川は神楽に銃を渡す。

「当たれば何でもくれるアルか？」

「ああ、あげるよ。」

よく狙ってね」

神楽は銃を構えて品物を狙って……

パリーン！！

長谷川のグラスンの左が粉々に砕けた。

「よこせよグラスン」

神楽は焼きとうもろこしを片手にそう言い放つ。

どうやら神楽が長谷川のグラスンを狙って発射したようだ。

「え？ちよっ、違っ……」

狙うのはあっち……」

パリーン！！

今度は長谷川が指した腕にかかっていた腕時計に何か当たった。

長谷川が振り返ると、団子を片手に銃を構えた幸久が立っていた。

「腕時計ゲット！！」

幸久はニヤリと神楽を見ると、神楽も負けじと見返す。

「ちよつとちよつと！！」

待てつてオイ！！

何でもあげるつつつたつておじさんのは無しだよ！！

ちよつと聞いてー」

パン！！

「ぐぶぶ」

「袴もーらい」

パン！！

「いっえっ」

「上着ゲット〜」

パン！！

「べほっ」

「乳首とったりイ！」

そんな感じで散々色んな所に撃ちまくった二人は再度睨み合う。

「この祭りの女王に挑むとは、
いい度胸アルなユツキー」

「ふん、祭りの女王？
笑わせるな。祭り男はこの俺だ！！」

バチバチと二人の間に火花が散る……

「面白いネ！！だったら次は金魚すくいで勝負アル！」

「上等！！白黒ハッキリさせようじゃないか！！」

二人は銃を捨てると、違う出店の方に走って行ってしまった…

新八は申し訳なさそうに長谷川に近づいていく。

「あの、すみません長谷川さん？」

「いや……もう良いんだけどね」

賑やかな祭りはあれやこれやで過ぎていき、夕暮れも少ししずつ顔を覗かせてきたのだった……

第八十訓 楽しみ方は人それぞれ（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃいきますか」

最初の質問『ヒナギクに質問。あんなチンピラ、ヒナギクさんなら
正宗で簡単に倒せそうだけど？』

ヒナギク

「まあ……でも、無闇に暴力で解決するのは良くないし……そのな
んと言っか……」

伽藍

「まあ言えないよね」

実はあの衣装で激しく動くところ

ヒナギク

「うるさい！！！！」

思いきり正宗を振るわれた！

がらんはたおれた……

がらんに666のダメージ！

伽藍

「……………屍」

銀八

「んじゃ次な『姫史に質問。』

あのカフェの衣装を他の娘に着せるとしたら誰？』」

姫史

「なんだ。そんな質問か」

ドン！！

姫史は教卓の上に物凄く厚い用紙を置いた。

銀八

「……………何これ」

姫史

「あの衣装が似合っと思った娘のリストだ。名前だけで無く、性格、特徴や個人的な感想も入っている」

銀八

「何人くらい？」

姫史

「523人だ。さて、では一人目から始めるか…………」

銀八

「勝手にやってる。んじゃまた次回な」

第八十一訓 運命かどうかなんてその人次第

〔白皇学院 裏口〕

ガヤガヤ……

「これは……物凄い規模ですね……」

祭りの様子を裏口から眺めながらハヤテは呟いた。
その隣には咲夜とワタルも立っている。

「せやな」

何かワクワクするな」

「つーかハヤテ？

お前何だよその格好……」

祭りの様子に目を輝かせている咲夜の横で、ワタルは呆れたようにハヤテを見る。

何故かハヤテのは魔法使いのようなフードを全身に着ている。

「祭りを楽しむにはあの格好じゃいかんからな。

ま、しこんな格好だったら大丈夫やろ」

「まあ、中を見られなきゃ大丈夫ですけど？」

ハヤテは若干不安そうにコートを見直す。

その隣でワタルは不意に口を開いた。

「ところで伊澄は？」

オレ伊澄に呼ばれて来たんだけど……？」

「ああ、一緒に来とつたんやけど……一行も一緒にいる間もなく迷子や」

「記録更新ですね」

咲夜の言葉にハヤテも呆れて呟く。

「しかしこの“ヒナ祭り祭り”って何なんですか？

前の五大会のマラソン大会に比べて随分楽しそうですけど……」

「そりゃ、五大会が全部ヤバい勝負事なわけじゃねーだろ。

バレンタインの逆でさ、男が女を誘って想い出を作る祭りなんだとさ」

ワタルは皆が賑やかに笑い合う様子を見て、そう説明した。

「なるほど。やっぱり夏は盆踊りちゅうわけなや」

「いや、今3月ですけど……」

祭りの賑わい様は活気に溢れて、春とは思えない雰囲気満ち溢れて。

「まあ期末前のお祭りだから……最期の思い出作りという訳さ」

「最期？」

「試験で赤点取って退学になる奴の……」

「地味に嫌な行事ですね……」

ハヤテもワタルも他人事では無いのか、表情を曇らせる。

「ま、まあとにかく!!」

8時前までに時計塔に辿り着かないと……」

「分かってる

まあでも、その前に祭りを楽しもう、な？」

「そ、そうですね……」

「ま、いつか」

ニツコリと微笑む咲夜にハヤテもワタルも躊躇しつつも頷いた。

「お、咲夜殿。到着されたか」

『お疲れさま』

「おお、小太郎にエリザベス」

すると、目の前から呼び声と共に桂にエリザベスがこちらに向かっ

て来た。

「あ、桂さん」

「桂さん達もいらしてたんですね」

ワタルとハヤテも桂達に気付いて挨拶する。

「まあ、主に銀時の手伝いだっただがな。

ところでハヤテ君、来るべき決戦の時刻は何時なんどきか？」

「決戦つて……？」

「そんな大袈裟な……」

「いや、ヒナギク殿は強い。

心してかからんと返り討ちにあつ事も十分にあり得るぞ」

『油断大敵』

「え……でも、わざと負けて貰う訳ですから……」

ハヤテの言葉にギクリと動きを止める桂とエリザベス。

「……え、ちょっと、どうしたんですか？」

「い、いや……そういえばそうであつたな……」

「……もしかして、何かあつたんですか？」

二人の変な様子に一抹の不安を覚えるハヤテは、
ここで何か不手際があつてはならないと、桂に尋ねた。

「そうだな……何と言うべきか…モノを伝えるという事は簡単に見えて実は難しいというか……」

「え、それってつまり……」

「何してるのハヤ太君？」

「……」

しかしハヤテの言葉は突然後ろから聞こえてきた声によって遮られた。

「せ、瀬川さん!？」

「あれ?何そのコート。
何かのコスプレ?」

ハヤテが振り返ると、泉が興味深そうに彼を見ていた。

「な、何でもないですよ!!
隠し事とかは何もないので!!」

「はへ?隠し事?」

(はっ!!しまった!!)

ハヤテが気付いた時には既に遅かった。

泉は好奇心からハヤテにキラキラとした笑顔を向ける。

「ハヤ太君、ダメだよ？
こんな真夏にコートなんか着ちゃ……」

「いや、だから今3月ですって……」

しかし泉は止まらない。

「その下、どうなってるの？
見せてー！ー！？」

「わああアアアア！！
ダメですー！！！」

ハヤテはコートを羽織ったまま逃げ出して、泉もその後を走って追
つていってしまった……

「行ってもうたな」

「アイツもう辿り着けない気がする……」

哀れハヤテ。

登場2ページ目にして、早くも不幸に苛まれていた。

「ところで小太郎。さっきハヤテに何か言おうとしてたな。
何か不手際があったんか？」

「うむ。そうだな……かなりややこしい事情なのでコレを使って説
明しよう」

そう言っって桂が懐から取り出したのは緑色のカエルと白いクマのパ

ペットだった。

恐らく祭りの出店で買ったのだろう。

それを両手にはめて咲夜とワタルに向ける。

「……………」

カエル

「こんにちは。僕は桂君の新しい友達のケロ太郎だよ（桂裏声1）」

クマ

「違うよケロ太郎。今はこんばんわだよ。

僕はジャスミン。よろしくね（桂裏声2）」

「ハツハツハ！！お前達は元気だな。さてはお祭りでテンションが上がっているのdー」

「説明せんかいイイイ！！」

咲夜の飛び蹴りは桂ごとパペットを吹き飛ばした。

第八十一訓 運命かどうかなんてその人次第

日もすっかり暮れて、広場には浴衣姿の男女がポツポツと現れ始めた頃、
少し離れた校舎の自販機の前に二人の青年が立っていた。

一人は黒い執事服の男、もう一人は白い執事服を着た野々原であった。

「まったく……何がヒナ祭りですかくだらない……」

黒い服の青年は愚痴を溢すようにそう呟く。

灰色の髪に整った容姿をしていて、かなりカッコイイ部類に入るだろう。

「そうですか虎鉄君。僕は意外と好きですけど。

ところでそちらの主は？」

「お嬢ならその辺を走り回ってんじゃないですか？ウチはそっちなほど過保護じゃないんで」

虎鉄と呼ばれた黒い服の青年は野々原の質問にサラッと返すと続け

る。

「大体男が女を誘う祭りって何ですか。そんな不純異性交遊を後押しする祭りなんて……
さ、誘いたくても誘う勇気のない“漢”たちは一体どんな夢をみれば……!!」

(不純異性交遊は関係無いですね……?)

野々原はそんな様子に呆れたように苦笑する。

「じゃ、私はそろそろ坊っちゃんを迎えに行かなくてはいけないので……これから坊っちゃんがお誘いをするのでその激励に」

「東宮の坊っちゃんは凄いな……誘いが出来るなんて……」

野々原は片手を上げると、虎鉄の前から去っていった。
残された虎鉄はため息をつくと地面を見つめる。

「ああ……私にもそんな勇気があれば……
どこかに転がっていないのか、運命は!!」

「きゃ!!」

虎鉄が手を上げると同時、誰かが彼にぶつかった。

「え!? あ!! す、すみません!!
大丈夫」

彼が振り返ると、例のごとくメイド服を着たハヤテが顔を赤くして

若干涙目になりつつ倒れていた。

(S、Spring comes!!!)

虎鉄の目はキラーンと光ってハヤテを向けられる。

「おおおお、お名前は何ですかお嬢さん!!!」

「へ？な、名前？（お嬢さん？）」

虎鉄はグツとハヤテに近づいていく。

「な……名前は綾崎ハ……!!!」

ハ……!!あ、いや……」

「綾崎ハ？ハ、何ですか!？」

「だからその……!!!」

あ、えつと………」

ハヤテは苦し紛れにニッコリと微笑んだ。

「綾崎ハーマイオニーです」

「魔法使いみたいな名前ですね」

虎鉄はそう言ってハヤテに手を差し出して、助け起こした。

「すみませんでした。お怪我はありませんか、お嬢さん」

「ええ、大丈夫です?」

MAXで勘違いをしている虎鉄はハヤテに爽やかな笑みで微笑みかける。

「そうですか。お嬢さんに怪我がなくて良かった」

「あ…はあ、そうですか?」

ハヤテの頭を過るのは人が潜在的にもっている危機察知本能。

(いかん…まさかこの姿を人に見られるとは…)

まあ幸い女の子だと思われているのでいいけど…男とバレたら…)

女装して夜な夜な学校に来る変態と認識されて…

(ダメだ!!そんな認識を許す訳にはいかない!!)

ハヤテのごとくの主人公として!!三千院家の執事として!!この難局を乗り切らなくては!!)

ハヤテは虎鉄を振り返るとニコツと作り笑いを浮かべる。

「じゃあちよつと忙しいんで」

「あ!!ま、待って下さい!!」

「……………まだ何か?」

慌ててハヤテを止める虎鉄だったが、振り返ったハヤテを見て恥ずかしがってか押し黙ってしまう。しかし彼は首を振って考え直す。

(いかん!!ここで引き下がったらいつまで経っても……ならば!!)

虎鉄はカツと目を見開いて決意を固めると、ハヤテを見つめる。

「今日はその、お祭りの夜なんです!!」

「ええ。知ってますよ」

「あつちでは皆が盆踊り大会のように楽しく踊ったりしています」

「みたいですね……」

虎鉄が指差す広場ではいつの間にか矢倉が組まれていて、周りには楽しそうに手を取り合う男女が集まり始めていた。舞台にいた人々も降りて各々が矢倉に寄っていく。

「で……ですから、その……」

私と一緒に踊ってくれませんか?」

(絶対嫌です?)

ハヤテは固まった笑みを浮かべると、虎鉄に背を向けた。

「もういかなくってはならないんで、踊るなら他の人とどうぞ」

「ああ!!そんな冷たくあしらわなくても!!
だがそれがいい!!」

「知りませんそんな事?」

しかし虎鉄はハヤテの肩を掴むと無理矢理自分と向き合わせる。

「私は本気なんです!!」

「わ!?!」

「私はあなたの事が好きなんです!!」

.....

「.....へ?」

虎鉄の言葉に固まるハヤテ（女装）

「ちょ!!何言ってるんですか!!」

冗談は止めて下さい!!」

「本気です!!私は!!」

「そ、そんな困りますノノノ」

そ、そんな事急に言われたって.....ノノノ」

ハヤテは逃げるように横に目を背けると、

「ワクワク.....?」

「.....」

泉が興味津々に二人の様子を眺め立っていた。

「瀬川さん!!」

「ん？あれ？お嬢？」

「あはははー？」

ゴメーン邪魔して。

ま、私の事は気にせず続きを……」

虎鉄はではと言ってハヤテをグイッと引き寄せる。

「いやー、でもハヤ太君にそんな趣味があつたなんてね」

「ち、違つんですこれは!!」

ピタリと動きが止まる虎鉄。

「ん？ハヤ太君？」

「その人は綾崎ハヤテ君。

私のクラスメイトで三千院ナギちゃんの執事さん？

正真正銘の男の子だよ」

「何を……まさか」

虎鉄は咄嗟にハヤテの胸に手を押しやった。
しかしそれは真っ平らで……

「ななな何をするんですか!!／／／」

「まさか……本当に？」

ただ呆然と立ち尽くす虎鉄。
何とも哀しい絵面である。

「大体勝手に勘違いしたのはそつちなんですから!!
僕は……」

ガクッ

「……え？」

虎鉄はその場に崩れ落ちた。

「ちよつと大丈夫ですか!?
え? 一体……」

「あらら。トドメ刺されちゃったね虎鉄君」

泉は困ったように笑いながら二人の側まで寄っていく。

「ウチの虎鉄君は全然モテないんだよ?
超強いけど思い込み激しいし、
顔はカツコイイのに、鉄道オタクで時刻表ばかり読んでるから」

グサツグサツグサツ!!

「ちよつと!? 刺さってますよ!?
今の全部刺さってますよ!!」

虎鉄の背中に泉の言葉の矢が次々と刺さってゆく。

そのまま虎鉄は動かなくなった。

「あちゃー？」

ゴメンねハヤ太君。虎鉄君は私がかするから、もう行っていいよ？」

「え？でも……」

「大丈夫大丈夫

何か急ぎの用があるんでしょ？」

「瀬川さん……」

ニツコリと笑ってそう言った泉にハヤテはホッと息をついた。

「他の男の子と違い引きなんだよね 頑張ってるね」

「違アアアアアうー!!」

*

「広場」

人がどんどん集まり始めた広場にはナギとマリアが歩いていた。

「いや〜しかし、これがヒナ祭り祭りなのか〜
中々賑やかではないか」

「ですね〜。それはそうと……」

マリアは周りを見渡す。

「本当に良かったんですか？

SPの方々が一人も……」

「良いんだ。出歩く度にSPが必要などという事は無い」

ナギは屋敷を出る前にSP全員についてきたらクビにすると行って
出てきたのである。

「マリアは白皇通ってたんだろ？なら見慣れたものなんじゃないか
？」

「まあでもお祭りは何度来ても楽しいものですし」

マリアは賑わいを見せている様子を楽しそうに眺めている。

「アレ？ナギちゃん、マリアさんじゃないですか」

「「「？」「」」

二人が振り返ると新八が走ってこちらにやって来た。

「あら新八君」

「新八か。神楽達はどうした？」

「ナギちゃん、僕の名前知ってたんですね……？」

神楽ちゃんは何か勝手に何処かに行っちゃいましたよ？

それよりお二人は？随分と早かったですね」

新八は二人を交互に見て尋ねる。

「うむ。本当は会だけに出ようと思ってたんだがな。

マリアが祭りを見てみたらどうかと言っただな」

「なるほど。やっぱり楽しいですね。こういう賑やかな雰囲気だけでも」

「……そうか？」

ナギはしかめっ面のまま首を傾げた。

すると、今度は前方からロアル、霧崎、莎唎、憂奈の四人が警備をしながら歩いて来た。

「ん？オメー三千院家の嬢ちゃんじゃねえか」

「？」

まず霧崎がナギに声をかけた。

「アンタは……ジジイの所の…
何でこんな所に？」

「今は白皇学院のSPだ……
帝のジジイにいきなり飛ばされたんだよ……」

「何でまた？」

「知るか。俺が聞いてえくらいだよ……？」

霧崎は思い出すと腹が立ってきたのか拳を作ってワナワナと震わせる。

「お互い苦労させられるな……
あのジジイには」

「全くだ」

二人は変な所で共感し合い頷き合っていた。

一方ロアルの方は……

「まあ、ロアルさんじゃありませんか。お久しぶりですね」

「ああ……そうだな」

マリアが話かけるが、ロアルは目を下に背けて冷たく挨拶を返す。
お久しぶりというのはマリアにしてみれば白皇にほとんど用が無い
ので半年ぶりくらいと言える。

「お仕事大変ですね。こんな日は特に」

「どうだかな……悪いがそろそろ行かなくては」

ロアルはサツと片手を上げると、早足でその場から離れていった。

後ろにいた莎唎と憂奈はやれやれと肩を竦めると、マリアに会釈をしてその後を追っていった。

「……あれ？」

「どうしたのだ？」

帝への苦労話で盛り上がっていた霧崎達だったが、その様子には彼はフと首を傾げる。

「いや……何でもねえ。

んじゃ俺も行くが……」

「ああ、せいぜいまたクビにならんようにな」

「クビじゃねえ！……！」

霧崎も急いで三人の後を追っていった。

「マリアさん、さっきの方は？」

「ああ、私が白皇にいた時の同級生です。生徒会の書記をやられて

いて」

「へえ〜……」

新八は頷きながら不思議な疑問が浮かんだ。

マリアの同級生って事はあの人も17歳だろうかという疑問だ。

しかしまた話がややこしくなりそうなので心に留めておく事にするのだった。

ドオオオオオン!!

突然の大音と共に夜空いっぱい大きな花火が広がる。

「わあ、花火ですよ!」

「綺麗ですね〜」

「び、びっくりした……」

一気に広場のテンションも上がってゆく……

一方ナギは突然の音に驚いて若干涙目に……

そして、

興奮したのか、学生五人が広場から舞台上上がり始めた。

*

ドーン！！

「おーおー、また随分と混みやがったなア」

広場から少し離れた出店が立ち並ぶ道では、皆が花火を見ようと集まり道を塞ぐ形となっていた。

銀時も広場に行こうとしていたが、通れない程混んでいるので仕方なくその場で立って花火を眺めていた。

ドーン！！ドドーン！！

大花火がうち上がる度に沸き起こる歓声や笑い声。
銀時もその大きさに目を奪われ…

「やっぱり祭りは派手じゃねえとなア」

「――！！」

ドオオオオオン！！

後ろから聞こえてきた声の後、
特大の花火が打ち上がった……

銀時は咄嗟に腰の木刀に手をかけるがそれより速く、後ろから銀色の刃を突き付けられる。

「動くなよ……」

「……………」

「ククツ……………」

見慣れた白髪頭がいると思ったら……銀時、テメーだとはなア」

「何でテメーが異世界（ここ）にいやがんだ……高杉」

そう。銀時の後ろに刃を突き付けている人物こそ……

銀時達の世界で攘夷浪士の中でも最も過激で最も危険な男……
高杉晋助であった。

「オイオイ……」

そりゃこっちの台詞だぜ、銀時イ。まさかこっちにテメーがいるなんてよオ」

高杉は周りから見えないように刃をたてながら、不敵に笑う。

「今度は何を企んでやがる…!」

「企む? バカ言つな。」

俺はただの客だ……まあ、面白い話は耳にしたがなア」

〜広場〜

広場にナギ達といた新八は何かに気付いた。

舞台上上がった五人の様子がおかしい、と。

何かバツクを持ち出して、五人がズラリと舞台に並んでいた。

不審に思ったロアル達が声をかけようと舞台に近づいた瞬間、

「手を上げるオオオオ!!」

「!?!」

五人全員がなんとライフル銃を取り出して構えたのだ!

(な!?)

(まさか……!!)

ロアル達はこの時ようやく気付いた。
コイツらは生徒では無いと…

「おー！！何だ何だ！？」

「いいぞー！！やれやれ！！」

周りの生徒達はゲリラ劇か何かだと思って盛り上げるが……

パン！！

「！！！！！！」

五人の内一人がライフルを地面に放った。
一瞬で周りは静寂に包まれる…

「もう一度言う……手を上げる」

きゃあアアアアア！！！！

生徒達の悲鳴は広場をあっという間に包み込んだ。

*

きゃあアアアアア!!!

「ー!?!」

出店の所にも、広場の方から多くの悲痛な悲鳴が響き渡った。

ただならぬ様子に銀時も何事かと目を見開くが、後ろの高杉は面白そうに呟いた。

「楽しい祭りになりそうじゃねえか……なア？」

「……………てめえ」

楽しげ賑やかなヒナ祭り祭りに徐々に暗雲が立ち込め始めたのだった。

第八十一訓 運命かどうかなんてその人次第（後書き）

祝 50万PV突破!!!

伽藍

「タイトル通り、この小説のPVが50万を超えていました！
これもひとえに皆様のお陰です。本当にありがとうございます!!」

新八

「やりましたね!!」
50万ですか、ようやく台の片隅に立つことが出来た感じですか
ね」

神楽

「でもまだ片隅アルな。
100万の大台は遙か彼方ネ」

ナギ

「まだまだ先は遠いな…」

ハヤテ

「でも、わざわざこんな事を書くって事は、何か報告があるんじゃないですか？」

伽藍

「その通り！
このヒナ祭り編が終了したら、50万PV突破記念として、コラボ
編第二弾をやりませう！」

銀時

「次は何処とやるんだ？」

伽藍

「漆黒の不死鳥さんの小説『黒と白の物語』です！」

一同

「へえ〜」

伽藍

「そんな訳でこの長編が終わったらそのままコラボ編になりますけど、どうかよろしくお願いします」

銀時

「んじゃ、質問コーナー行くぞ〜」

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ、最初の質問『作者に質問。ヒナギクの正宗の攻撃を受けた二人はどうやって生き返ったんですか？』」

伽藍

「ルシフェルさんからライフボトルを二つ頂いたのでそれで回復させました（笑）」

銀八

「んじゃ次の質問『愛歌に質問。あのヒナギクの写真いくらなら売
つてくれますか?』」

愛歌

「もう沢山コピーがあるので無料でお渡し出来ますよ」

ヒナギク

「何言ってるの!!!」

ダメ!!!絶対にダメ!!!」

愛歌

「良いじゃない

とても可愛かったんだから…」

伽藍

「愛歌様!!!」

是非私めにも一つ分けてkー」

ヒナギク

「消えなさアアアアい!!!」

伽藍

「ぎゃあアアアアア!!!」

9999のダメージ!!!

銀八

「……………あんま教室で暴れんなよオメーら。

えっとルシフェルさん、あの馬鹿がらんのように殺られてしまつかもしれ
ませんが、それでも大丈夫なら差し上げます」

新八

「ヒナ祭り祭り編もいよいよ後半戦突入です!!」

神楽

「次回は私も大活躍アル!!」

銀八

「じゃ、次回もよろしくな」

第八十二訓 二律背反する白と黒

ドオオオオオン！！

何も知らない夜空には大きな大きな花火が力強く咲き誇る。

それは出店周りに留まっている客達を明るく照らしつけるも、聞こえてきた悲鳴に動揺して何事かと狼狽していた。

「てめえ、何しやがった……」

「何の話だ」

その中に白髪頭の男と黒い髪をした男が二人、縦に並んでいた。

前の銀時はただならぬ騒ぎにいち早く気付いたようで、客で埋もれて見えない広場を睨みつける。

後ろの高杉は騒ぎ自体より会話を楽しんでいるようで、不敵な笑みを崩さない。

「広場で何かあったみてえだな……テメーの仕業か？」

「ククク、嬉しいねえ……」

騒ぎの影には必ず俺が噛んでると思っただけやがるんだなア。だが残念ながら今はただの客だ。何も絡んじやいねえよ」

「……… だったら何でこんなタイミングで現れやがる」

銀時は木刀に手を置いたまま語気を強める。

「さつきも言つたるオ……」

ちと面白い話をここで耳にしてなア。

せつかくだからテメーにも教えてやろうと思つたんだよ」

「……………」

銀時は舌打ちをすると、二発同時に上がった花火に目をやった。

第八十二訓 二律背反する白と黒

広場は一瞬悲鳴に包まれたものの、五人の銃口を前に再び静寂に覆われていた。

銃を向けている男達五人は全員黒い覆面をかぶっている。彼らがいるのは後ろが塞がった舞台であるが故に、彼らに死角は無かった。

つまり五人の視界で広場が見渡せる……広場全体が人質にとられているような状況である。

(クツ……まさか生徒に化けているとはな……
入口の警備は何をやっていたんだっ……!!)

舞台から少し左に離れた場所にいるロアルは思わず唇を噛み締めた。入口の警備は他の班の人間。

ロアル達は動きたくとも、客全員に銃口を向けられてるので下手には動けない。しかも広場は視界が良好な為に、不穏な動きをすればすぐに勘づかれてしまうのだ。

(その上無駄に広いときやがる……たく、厄介な場所に陣取られたな……)

霧崎も顔をしかめて舞台を睨みつけた。

舞台では五人がそれぞれの方向に銃を向けて広場を見渡している。

「……まずい事になりましたね」

「まったくだ。白皇のSPは何をやっているんだか……」

ナギ達三人も広場にいた為に思いきり巻き込まれていた。

マリアの不安そうな表情に対してナギは気丈にも五人の男達を睨みつけている。

一方新八は必死に頭を巡らしていた。

(とにかく二人だけでも逃がさないと……でも奴等の視界からは丸見えだ……)

すると、五人の内真ん中の男が新八達の方に顔を向けた。

「そこのガキ、こちらに来い………」

「「!?!」」

男はナギにライフルを向けるとそう言い放つ。

「待て!!」

咄嗟に新八がナギを庇うように前に出た。

しかし……

「大丈夫だ………」

「ナギちゃん!?!」

「ナギ!!」

ナギは新八に下がるように手で仕草を送ると、真ん中の男に向かって歩いていった。

ロアル達も啞然とそれを見送る。

「ほお……気丈なガキだな」

「……………」

ナギは男に腕を掴まされると、後ろを向かされる。

「コイツは人質だ……」

変な動きをしたら殺るからな」

「……………」

SP達はグツと唇を噛み締めて彼らを睨み、客は青い表情で目を背けたり、閉じたりしている。

マリアも新八もどうしようかとそれを見守る事しか出来ない。

しかし、一番危機的状況であるナギは仏頂面のままであった。

「お前達は何なのだ……何が目的だ？」

「……………今の社会は間違ってる。

それを証明しにきたんだ」

「は？」

突然訳の分からない事を言い始める男にナギは呆れたような声を上げた。

しかし男は銃口を客に突きつけたまま続ける。

「俺達は数ヶ月前にリストラされた……何の知らせも理由も無しに突然だ……」

「……………」

「だがそれは間違っている!!
こんなお金をかけている場所があるからいけないんだ!!
こんなボンボン共がいなけりゃ……こんな場所さえ無ければ!!」

「何だ……とどのつまり逆恨みか……」

「黙れ!!」

ナギの頭に銃口が向けられる。
しかしナギの態度は変わらない。

「大体お前達、この先どうするつもりだ。今は花火などで騒ぎが広まっていないようだが、いずれすぐに知れ渡るぞ」

「……………」

「たった五人で何が出来る?
警察やSPにすぐに取り囲まれる。知ってるか?彼らのスナイパーは何百m離れた所からでも正確に射撃できるぞ?
お前達のような三流テロリストだったら五分ももたんな……」

「……………五人だけならな」

「何!？」

ナギに銃を突きつけたまま、真ん中の男は一番左にいる男に目線で合図を送る。

一番左の男は懐から何やらスイッチのようなモノを取り出した。

ピッ!!

スイッチを押した瞬間、何と舞台の裏から次々と何かが飛び出してきた。

「何だアレエ!？」

「ろ、ロボットだ!」

「ひいひい!？」

広場の人々が口々に叫ぶ通り、

現れたのは二メートルはある二足歩行のロボットだった。

しかも外見はエイトそのものである。

「馬鹿な!？アレは白皇の警備用ロボット!？何故奴等が…」

「警備用ロボット!？」

あんな格好悪いのがか!？」

ロアルの言葉とロボットの外見のダサさに色んな意味で驚きを隠せない霧崎。

「ハハハハハ!！」

研究所施設の警備があまりに手薄だったのにな、簡単に拝借させてもらったよ!!」

『対人用兵器エイト360+』だ!!」

((うわぁ……どっかで見たとある……?))

エイト達を呆れたように見るナギとマリア。

しかし、数十体のエイト達はあっという間に客全員を円上に囲んでしまった。

「フッフ、これで広場全員が改めて人質となった。

エイトには我々を乗せる走機能は勿論、

重火器装備も搭載されているぞ?さて、我々は何流かな?」

「……………っ!!」

ナギは広場を見回して舌打ちをした。

*

うわあああああ！！

出店の立ち並ぶ道にもようやく事態が伝わったのか、先程まで広場へ行こうと並んでいた人々は次々と逃げ出していた。

そんな中、銀時と高杉は並んだまま立ち止まっている。

「始まったみたいだなア……」

「……テーマは何を知ってた」

銀時は広場の方向を睨みながら尋ねると、高杉はクククと笑いを噛み殺して空に打ち上げられてる花火を見上げた。

「夕方頃か。でっけえ祭りがあるってんで用の帰り道に寄り道していこうと思ったわけだ。」

するとな……どうにも挙動不審な奴等がいたんだよ……」

「……………」

「でな、面白そうだからソイツらつけていったら、何かデケー騒ぎを起こそうとしてたらしいんだなコレが」

「騒ぎ？」

心底愉快そうに話す高杉に銀時は片方の眉を吊り上げた。

「ここをぶっ潰すのを契機に世の中をひっくり返すってな……」

面白れえよなア。世界は違っても世をひっくり返すなんて言葉を聞けるなんてよオ」

「…………お前」

すると高杉は刃を銀時から離して鞘に収めた。

「？」

「心意気は買ってやってもいいが詰めが甘え……………
後先まったく考えてねーな、ククク」

そのまま高杉は銀時に背を向けてしまう。

「…………何を」

「最期まで見届けても良かったんだが俺にも用事があるんでな。
異世界も興味深いこっちが、
俺アー」

ドオオオオオン！！

特大の花火の音にかき消されたが、どうやら高杉の言葉は銀時には伝わったようだった。

「ククク……………」

「……………」

銀時はようやく振り返るが、高杉は既に歩き出していた。

その後ろ姿を何とも言えない表情で見つめると、

銀時はすぐに逃げている一人の男を掴まえた。

「オイ、広場で何があった？」

「ええ！？あ、ああ！

テロリストが侵入したらしいんだ！！それでどうやら女の子が人質にとられたって……」

「ソイツはどんなガキだ？」

「ええ、よく分からないけど黄色い髪にツインテールの女のkー」

男が言い終わる前に銀時は広場に向かって走り出していた。

（あんの馬鹿アアア！！）

何でいつもいつも誘拐だの人質だのに遭ってんだアアア！！）

銀時が広場まで到達すると、沢山の人々を囲むように変なロボットが立っていた。

（ああ………？

何だアあの変なポンコツ………）

銀時はそっと客の中に忍び込んだ。そして人々の間を縫うように舞台に近づいていく……

(ん？アイツら……………)

すると前方に新八とマリアが視界に映った。

「オイ…………オメーら」

「「ぎ、銀さん!!」」

銀時はそつと話しかけると、二人とも困り果てた表情で振り返った。

「銀さん…………ナギが…」

「分アつてら…………」

マリア、オメーはジツとしてる。ここは俺達が何とかする」

銀時は新八を見ると、新八もわかりましたと頷いた。

舞台では四人がそれぞれライフル銃を構えて、真ん中の男はナギに銃を突きつけている。

エイト達も人々を見下ろすように立ち塞がり、ロアル達は人々の安全を第一に様子を見守っていた。

「お前達…………哀しい奴だな」

「何イ!？」

ナギは銃口を向けられているにも関わらず、彼らを挑発するように続ける。

「自分達は何の努力もしないで……悪い事は全て人のせいか。
哀しい奴らだ……」

「貴様！！言わせておけば！！」

ガチャ！！

「く……」

「ナギ！！」

男は思いきりライフルを突き付けたのでナギはグッと目を閉じた。
マリアもナギに向かって叫ぶ。

「待て待て待てエエイ！！」

「！！？」

すると、いきなり銀時が舞台に飛び乗ってきた。

「何だお前！？」

「銀時！！」

男は驚いて一歩後ろに退がる。

(アイツ……！！)

ロアル達も何事かと目を見開くが銀時は一瞬ロアル達に目を向ける

と、そのまま男に目を戻した。

「何だと言っている貴様!!
変な動きを試してみる、このガキの命は無いぞ!？」

「あゝ……………」

男はナギにライフルを突き付けて脅すが、銀時は頭を掻くと、とんでもない事を口走った。

「だったらよオ、その前に俺を殺してくれねえか？」

「「なあ!？」」「

これには男は勿論、ナギもマリアも愕然とする。

「な、何をー」

「いやよオ、何かもう生きるのが面倒になっとなア…………
パチンコは全然必勝来ないし、仕事もスカンピンだし（今日あったけど）、懐は氷河期が到来するし……………」

銀時は話ながらドンドンと肩の力は抜けて目は重くなっていき、彼の周りの空気はどんよりと重くなっていく…………

「ほら見てみる、この目を…………
死んだ魚みたいな目をしてんだろ…………?」

（確かに…………）

銀時は自分の目を指すと、男はなるほど確かにとおもったのか、小さく頷いた。

「だからよオ、まず俺を頼むわ…一思いにさア」

「貴様、正気か……？」

銀時の言葉に、男は知らず知らずのうちに銃口をナギから僅かにズラしていた。

そして次の瞬間―

ガバツ！！

「貰ったア！！」

「な！？」

新八が後ろからナギを掴むと、素早く抱えて舞台から飛び降りたのだ！！

（（（（（ば、馬鹿な！？

全く気付かなかった！！なんとという影の薄さだアアアア！！（（（（（

五人は雷に打たれたような表情で己の迂闊さを思い知った。

否、本当は新八の影の薄さが九割を占めるのだが…

「」のっ…！」

男は咄嗟にライフル銃を新八に構えようとするが、

「残念だったなあ、これがぱっつあんの能力だ」

ニタリと笑う銀時がすぐ目の前で木刀を振り上げていた。

「くっ……!!」

「もうちつと根張って生きてみやがれ、このタコスケエエエ!!」

銀時は思いきり木刀を降り下ろしすと、男は声を上げる間もなくその場に倒れた。

「「貴様!!」」

すると両隣にいた二人の男も銃を構えて銀時に向けようとする。

「「ぐはっ……」」

しかし、二人の男はすぐに倒れてしまった。

「……?」

銀時が振り返ると、舞台より少し離れた場所に小型で細長い銃を構えた莎唎がいた。

「大丈夫 麻酔銃。」

でも、しばらくは眠ってるわね」

ニッコリとそう言ってウィンクする。

すぐに一番右にいた男がライフル銃を左右に振り回して怒鳴った。

「てめえら!!」

蜂の巣にしてやらア!!」

「だったら蜂蜜はどうでしょう?」

「……え?」

パタリ……

しかし男は倒れ、その後ろには何故か札を構えた伊澄がいた。

「な、伊澄!?!」

「大丈夫? ナギ」

伊澄はゆっくりとナギ達に向かって歩いてきた。

「お前どうして……」

「咲夜達を探していたら、いつの間にかこんな所に……」

伊澄は困ったように首を傾げた。

一方、舞台では四人が倒れて、残りは一人だけとなっている。

「もう観念したらどうだ?」

舞台上上がったロアルがライフルを構えた男に話しかける。

「くそっ……こんな所で終われるか!!」

「!?!」

しかし男はそう叫ぶと、例のスイッチをもう一度押した。

ピカッ!!

『敵影確認・戦闘体勢二入りマス』

広場にいたエイト達の目が光ったかと思うと、人々に向かってそう発した。

「アツハツハツハ!!」

たった今エイト360+の戦闘用スイッチをおした。

放つとけば客を襲うぜ!!止めらるもんなら止めてみやがれ!!」

「ちっ!!」

ロアルは男から視線を外すと、広場にいる第一班及び他のSP達に向かって叫んだ。

「いいか!!」

お客様に傷一つ付けるな!!

弥鉤、莎喇、聞こえてるSPはロボットを止める!!

憂奈は客の脱出口を!!」

霧崎、莎唎はすぐに動き出した。憂奈は人々に手招きをすると、広場から正門に繋がる裏口へと案内していく。

「手伝ってくれ万事屋！！」

「まったく、仕方ねーなア！！」

ロアルと隣にいた銀時も広場に向かって走り出した。

「新八！！オメーは三人を守れよ！！傷つけたらクビだぞ多分！！」

「わかりました！！」

新八は三人を連れて、被害の少ないスペースに向けて走る。

憂奈が確保した裏口は逃げer人でごった返しているのde、ナギ達にとっては逆に危険だと判断したのだ。

「新八！！銀時達はー」

「あの人なら大丈夫ですよ！

殺したつて死にませんから！！」

新八は確信しきつた表情で力強く頷くと、ナギ達もそつだなと微笑して返した。

広場の中心では次々と襲いかかるエイト達を銀時とロアルは木刀と真剣で叩き斬り、霧崎と莎唎は2丁拳銃とショットガンで撃ち壊し

てゆく……

「クソッ！！撃つても撃つても湧いてきやがる！！
何なんだこの不細工なロボットは！！！」

「本当に厄介なもの作るわね……白皇は」

霧崎と莎喇はとにかく頭部を狙って機能を止めていくが、エイトは次々と現れる。

ロアルと銀時もエイト達を斬りまくってはいるものの、やはり数が多いうだ。

すると……

ドオン！！

「ロアルさん！！遅れたっス！！」

「ZZZ……」

エイト二体を足だけで蹴り飛ばして優斗が走ってきた。
そしてその背中で寝ている白井。

「篝、お前何で比呂背負ってた！？」

「あ、いやこれは？」

優斗は慌てて白井を降ろすと、彼はもう到着ですかと目をこすりながら呟いた。

「比呂デメー!!」

またサボってやがったなアアアア!!」

「うおっと!!」

霧崎は白井に斬りかかるが、ひょいと避けられる。

「違いますって……コレはあの、インセプションから会場の警備を」

「ただ寝くさってるだけだろうが!!」

「喧嘩してる場合か!!」

そんな二人にロアルはとにかく今はロボットを全て止める事に専念しろと言つと、気付いたように銀時に振り返った。

「そつえば!!あの最後の一人の男はどうした!？」

「知るか!!今んな事言ってる場合じゃー」

フと横を見ると、こっそりと一人だけ逃げようとしている覆面の男が……

「逃がすかアアアア!!」

銀時は木刀を思いきり男に向かって投げた。

ゴンー!と鈍い音をたてて木刀は男の頭部に直撃し、倒れた。

「オイ、後ろだ!」

「いゝい!?」

振り返ると銀時に腕を振り上げているエイトが一体。しかし銀時は木刀を投げた為に手ぶら状態である。

(ヤベーか!?)

銀時がそう思っつて身構えたが、

ドオオオオオン!!!!

「うおっ!!!!」

数台のエイトが銀時達の前で次々と爆破された。そして……

「祭りを邪魔する悪い子は……………」

「だア〜れエ〜だア〜」

転がった部品の上に足をおくのは、神楽と幸久だった。二人とも尋常ではないほどの紅いオーラを発している。

幸久に至つては何故か赤い八チマキに真つ赤な鎧を着て、
刃の付いた戟のようなモノを構えていた。

「あつ……あれは!!」

妖怪『祭り囃子』!!

祭りを妨害する暴走族などを懲らしめる妖怪だ」

「いや違つたる……」

ロアルは二人を見てそう叫ぶと、刀をまだ十数体ほど残っているエイト達に向けた。

「祭り囃子の援護もあるぞオオオオオオ!!お前達、気張れエエエ
エエエ!!」

暴走した神楽と幸久を加えて、

一同はエイト達を次々と破壊していった……!!

*

「はあ……はあ……」

「ようやく片付いたみたいだな……」

肩で息をしている霧崎とロアル。辺りを見回すて、破壊された残骸のみが転がっているのみであった。

「篝君、白井君……大丈夫？」

「平気っスよ！……このくらいどっつて事無いつス」

「ええ何とか……」

莎唎の質問に優斗は拳を作ってそう答えるが、白井は表情をしかめて舞台を見た。

「しかし酷いですね。」

「こつも簡単に侵入を許すとは……」

「サボつてた白井さんが言う資格無いつスよ？」

「篝さんもね」

「っ……」

憂奈もゆっくりとロアル達に近づいてきた。

「全員無事」

「そうか。よくやってくれた……」

ロアルはそう言うと広場を改めて見回した。

「しかしこれは……」

片づけが大変だな……」

銀時はというと、

端の方に向かって歩いて行く。

そこには新八達が男達を縄でぐるぐる巻きにして捉えていた。

因みに神楽と幸久はまた出店に向かって激走していった……

「ったく、とんだ茶番劇に巻き込まれたな……」

後でギヤラの方は請求しとけよ、新八」

「ハハハ、そうですね」

銀時がだるそうに首を回すと、新八も安心したように頷いた。

「しかし広場はメチャクチャだな……」

「そうですね……」

ナギの言葉にマリアも広場を見て残念そうに呟くが、

「うむ、これならば暫く学校も休学だ！」

「ナギ……？」

先程まで人質に取られていた人物だとは思えないほどだ。

「フッフ……休学どころの騒ぎじゃ無くなるかもな嬢ちゃん」

「「？」」

突然縄で縛られたリーダー格の男が覆面のしたから奇怪な笑い声を発する。

「それはどういう意味ですか？」

「フッフ……さてね」

新八が男を睨んで尋ねると、男は奇怪な笑いを続ける。

「新八」

「ハイ！」

銀時の一言で新八は男を見下ろすと……

ガシッ！

鼻に指をかけて思いきり持ち上げた。

「痛だだだだだだだ！！！
ば、鼻もげるウウウウ！！！」

「おう、さつさと言わねーと新八の鼻フックデストロイヤーが決まるぞ」

ハイ3、2……」

「わがった！！わがったがら！！！」

銀時のカウントに男は堪らずギブアップを申し出た。

新八が降ろすと、男は暫く咳き込んだ後、涙声になりながら口を開いた。

「ゲホツ！！……んだ」

「あん？」

「……爆弾だ。爆弾を仕掛けた」

……

「……何イイイイイ！？」

新八達は驚愕して思わず飛び退いてしまう。

「何処にだ？」

「ゲホッ、あの大きな時計塔だ。8時に爆発するようにセットした……」

男はこの広場からでも見える時計塔を指差して言った。

*現在時刻 19:30

「オイ、今日は時計塔に人は……」

「いえ、お祭りの日は時計塔は使われませんから、多分誰もいないと思います」

マリアは少し昔の事を思い出しながらそう言った。

「だったら、アイツらに言ってさっさと避難させりゃー」

「……銀時様」

銀時は離れた所に腰を降ろしているロアル達に目をやると続けようとするが、

伊澄が気付いたように口を開いた。

「時計塔には……今日8時、ハヤテ様と生徒会長さんが……」

「……………」

そして、運命の時刻は迫り来る

第八十二訓 二律背反する白と黒（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ、最初の質問『ロアルに質問。久しぶりにマリアと話せて
どうだった』」

【マリアが教室にいる場合】

ロアル

「別に……どうという事は無い」

【マリアが教室にいない場合】

ロアル

「あああああ！！！」

またやってしまった……何故俺はアアアアア！！！！」

銀八

「んじゃ次な『霧崎に質問。貴方から見てナギをどう思う？』」

霧崎

「チビ」

ピッ！

ナギ

「ジジイか、私だ。お前の所の霧崎というSPを終身解雇にする。いますぐだ」

霧崎

「何してんだテメエエエエ！！
つーか終身解雇って何！？」

銀八

「続いての質問『咲夜に質問。お笑いの観点からヅラは何点？』」

咲夜

「おもしろい時はいいけどイラッとするときにはアレやからな。
ん……」

ケロ太郎

「あらあら咲夜ちゃん。

そんなに悩んでどうしたの（桂裏声1）」

ジャスミン

「春の〜 うららの〜 隅田川〜 （桂裏声2）」

ドカツ！！バキッ！！

咲夜

「ある意味100点かもな…」

銀八

「次の質問『新八に質問。なんでメガネって呼ばれてんの？』
メガネだからです。」

続いている質問『ハヤテに質問。どうしてそんなに女装が得意なの？
昔何かバイトしていたの？』

ハヤテ

「そんなバイトした事ありません！！！！」

銀八

「表向きにはな」

ハヤテ

「いやいや！？何で！？」

裏でもやってませんよ！！！！」

銀八

「んじゃ次回も頼まア」

ハヤテ

「違いますからね！？」

第八十三訓 違った道同士を交わらせる事は難しい

時刻は少し戻って18時45分。
ちょうど広場が占拠されている時……

「っ!!」

ハヤテは走って時計塔に向かっていた。
虎鉄とのやり取りでいつの間にかコートは無くなりメイド姿が露になっっている。

(こんな姿、これ以上他人に見られるわけにはいかない!!
とにかく人がいない時計塔に先に入ってヒナギクさんを待とう)

ハヤテは一足先に時計塔に入って暫く身を潜める事にした。

そんな訳で今は人目につかない林の中を駆け抜けている。

(とにかく早く時計塔に……!!)

*

一方同じ頃……

（1年C組）

「ふう……」

「お疲れさま」

教室から廊下に出てきたのはヒナギク、愛歌、千桜だった。

クラスの出し物の手伝いを終えて三人は校舎から出ようと、足を下の階に進める。

「それにしても、二人とも似合ってたわね」 あの制服

「ふう……／＼」

千桜とヒナギクは思い出しては恥ずかしそうに俯く。

ヒナギクに加え千桜も結局手伝う事になったのだ。

因みに愛歌はのらりくらりとかわしていたそうで……

「そういえば反対側の広場で盆踊りをやるみたいですね」

「ああ、確か男子が女子を誘うイベントだったわね」

階段を降りながら千桜が思い出したように話を振ると、愛歌もそう言って頷いた。

「どうします？行ってみます？」

「ん」

千桜はそう言って二人に顔を向ける。愛歌は少し考える仕草をする
がヒナギクは前で手を振って答えた。

「私はこの後用事があるから。」

二人で回ってきて

「用事？」

「ええ……」

二人は首を傾げるがヒナギクはしっかりと頷いた。

「決戦よ……！！」

「……」

三人は校舎を出ると、二人に別れを告げそのままヒナギクは時計塔
の方向に歩いていった。

「……ヒナも色々大変そうですね」

「本当ね」

*

パソコン！！

「お！！当たった

当たったで、おっちゃん！！」

「おお、上手じゃないか嬢ちゃん」

射的屋の前には銃を持って喜んでる咲夜。

長谷川はそれを見て誉めている。

因みに先程の神楽達の襲来により長谷川は出店の位置を変えて、広場近くの出店並びから反対側のもう一つ校舎側の出店並びに移動していたのだ。

「やっぱり？ウチ、何やらせてもても天才やねん」

「はは、しっかりと的に当ててくれて助かるよ？

んじゃ、優しい嬢ちゃんにはサービスだ」

「ほんま？ありがとー」

長谷川は何故かあったジャスタウェイのキーホルダーを咲夜に渡してあげた。

「へへ、」

見てみ小太郎、ワタル。

おまけしてもらたで？」

「ほう……」

『流石だね』

咲夜は後ろの三人に嬉しそうに振り返った。

「ウチが可愛いから？」

「ウチが可愛いからおまけ」

「そこを強調すんな？」

「いやしかし確かに腕が良いな。どうだろう咲夜殿、これを機に攘夷志士にならんー」

「スパン！！」

「なるかアホ！！」

咲夜はどこからか出したハリセンで桂の頭をひっ叩いた。

「ところで借金執事は捜さなくていいのかよ？」

「ん〜、巻田と国枝に捜してもらてるけど、ウチ、この学校の事よー分からんしな」

ワタルの言葉にキョロキョロと出店を見回す咲夜。

「でも工工学校やなあ白皇ちゅうのは。おおらかで賑やかで……」

「あ？」

「こんな工工学校って知つとつたらナギらと通うんも……
悪無かつたかもしれんなあ……」

「……………」

祭りの様子を眺めてながらそう呟く咲夜に気まずそうに固まるワタル。なぜなら通えなくなった原因は彼にあると言えるからである。

「さ、咲夜。綿飴食いたくねーか？奢ってやるよ」

「ホンマ！？欲しい欲しい!!」

「後金魚すくいもしたくねーか？あつちでやってる、奢ってやる」

ワタルは金魚すくい屋を指差しながらそう言った。

「何や自分、今日は随分と太っ腹やなあ」

『妙に優しい時は……』

「いや違えよ。いつもの通りだよ?」

エリザベスの看板にワタルは慌てて手を振ってみせる。

「と、とにかく行くこつぜ!」

『コクリ』

「せやな。

……………ん?」

エリザベスに続いて咲夜も頷くがフと気付いたように桂を見る。

「どうした小太郎?

向こうの方眺めて……………」

「……………」

「小太郎?」

「……………ん? ああ、すまない。

何か言ったか?」

桂は気付いたように視線を咲夜に戻す。

咲夜は彼を心配そうに覗き込んでいた。

それもその筈、桂はずっと時計塔の方向を険しい表情で睨んでいたのだから。

「いや、随分と真面目な顔してどうしたのかと思って……………」

「ああいや、賑やかな祭りだと思ってな」

桂は取り繕ったような返事をする、ワタルとエリザベスにも目を向けた。

「すまない咲夜殿、少し用事が出来た。
ワタル君、エリザベス、彼女を頼むぞ」

「へ？」

「ちゃんと戻る。」

三人は構わず祭りを楽しんでくれ」

「あ、小太郎！！」

桂は真剣そのものの表情でそう言うと、片手を上げて時計塔の方向に向かって早足で人混みに消えていってしまった。

「どうしたんだ桂さん？」

『さあ？』

ワタルとエリザベスは不思議そうに首を傾げている。

(……………)

咲夜は何とも言えない嫌な予感を感じたのか、不安そうに人混みを見つめていた……

第八十三訓

違った道同士を交わらせる事は難しい

（時計塔周辺）

「ふう……着いた」

ハヤテは時計塔の前まで辿り着いてた。

まだ時間まではまだ一時間弱あるが、人目につくよりはマシだろう。

ハヤテは早速入口から時計塔に入ろうと―

「ハヤテ君？」

「え？」

横から声がしたので振り返ると、ヒナギクがこちらに歩いて来てい

た。

「ひ、ヒナギクさん。
何故こんなに早く」

спан！！

しかし言い終わる前にヒナギクは正宗をハヤテに降り下ろす。
ハヤテは真剣白刃取りで何とか正宗をくい止める。

「ちよつとヒナギクさん!？」

「私も随分なめられたものね…
そんな姿で勝負を挑まれるなんて」

ギリギリ……

「ちよつ、この姿には事情が……ああ、手紙に書いた事情なんです
よ!!見てくれましたよね」

「ええ……?」

「しっかり読んだわ」

「困みに……」

【ハヤテの言っている内容】

呪いのヒナ人形でメイド姿に変えられてしまった

【ヒナギクの読んだ内容】

メイド姿で勝負します。

そちらもメイド姿にしたらいかがですか？

胸が小さくてもメイド服なら隠せますよ（笑）

ギリギリ……

「あの……ヒナギクさん？」

「何かしら？」

「読んだのならどうして怒りマークがついているんですか??？」

「何で…何ですって…?」

ヒナギクは正宗に込めたの力をフツと抜くと……

「悪かったわねえ!!小さくて!!」

「うわぁ!!」

思いきり横に風ぎ払う。

ハヤテは寸でのところで後ろに下がってそれをかわした。

しかしヒナギクは間を空けずに、攻撃を仕掛ける。

「私だって色々努力したり考えたりしてるのよ、これでも!」

「わあ!」

「でも仕方ないでしょ!」

大きくならないんだもん!!」

「おわ!」

「周りは皆成長してるのに!」

「何の話ですか!」

ヒナギクから繰り出される斬撃を辛うじて避けていくハヤテだったが、遂には時計塔の壁に追い詰められてしまった……

(いかん!!いかんぞ……)

何だか知らないけど……いつの間にかピンチだ……!!
どうすれば……)

ハヤテは万事休すの状況である。

(どうすればヒナギクさんを落ち着かせられるんだ!?)

いや、そもそも何でヒナギクさんは怒ってるんだ!?

どうすれば……ん?)

ハヤテはフと横からくる視線に気が付いた。
そこにはハアハアと息を切らせて宙に浮いているお内裏様が一つ。

バコッ！！

「ななななな、何ですか貴方は！？／＼／」

「ぐふ……この時代の奴は力カト落としを決めてから人に名前をきくのか……」

ハヤテはお内裏様に渾身の力カト落としをくらわせ地面に落としたり。その様子にヒナギクも攻撃の手を休めてハヤテの隣に寄ってきた。

「どうしたの……っていうか、何コレ？」

「いや……僕にも何だか……」

するとお内裏様がムクリと身体を起こした。

「仕方ない、教えてやろう。

辛抱堪らず出てきてもらったが、

ワシこそが！！お前を女装させているヒナ人形の呪い、人形師ゼベつどじゃ……」

ドカツ！！バキッ！！ドカツ！！

「じゃあアナタを粉々にすればこの呪いも解けるんですね…」

「ぐぼっ……も、もうなりかけてる……粉々になりかけてる…」

ハヤテはゼペつどを散々踏みつけた挙句、両手で握りしめて顔を近づけた。

「呪いを解いて楽になると、このまま八つ裂きにされるの……どちらが良いですか？」

「ひいイイイ！……」

「返答が無いって事は八つ裂きを所望ですか。わかりました……では……」

「分かった分かった！！！！？」

元にもどすぞよ！！だから落ち着かれよ！！」

ポン！

「「あ………」」

ハヤテは一瞬煙に包まれたかと思うと、元の執事服に戻った。

「え、ハヤテ君……？」

「戻った……、アレ？」

ハヤテがゼペっどの方に目を向けるが、既にそこには何も無くなっていた。

「いない……」

「えっと……どういう事？」

ヒナギクはハヤテの変化に不思議そうに首を傾げる。

「いや多分呪いが解けてくれたんだと……」

「呪いって……もしかして本当だったの？てつきり好きでそんな格好をしてるんだと……」

「本当ですよ……」

呪いですから！！無理矢理ですからね！？／＼／＼」

ハヤテは必死で女装趣味の疑いを否定する。

「アレ、そういえば……」

何でハヤテ君ここにいるの？」

「へ？どうしたんですか今更」

「だって時計塔に来る途中、最上階に少し明かりがついているのが見えたから……」

ヒナギクは午前中に時計塔の電気はエレベーターフロアも含めて全

て消していた。

祭りの最中は基本的に何も無いので誰も入らないだろうし、入っても生徒会のメンバーにはしっかり電気を消すように言っている。

なのにヒナギクが時計塔を見上げた時は、おそらくエレベーターフロアのだろぅが少し明かりが見えたのだ。

エレベーターフロアの明かりはエレベーターを使えば自動的につくようになってる。

「……という事は時計塔に人がいるって事でしょうか？」

「多分ね。でもこんな時間に一体誰が……」

時計塔自体は生徒会メンバー以外立ち入り禁止だが、それは決まりとして校則にあるだけで、随分とテキトーなものだ。

入口に認証システムがあるわけでも無ければ監視カメラも無い。入ろうと思えば普通に誰だつて入れるのだ。

「もしかして泥棒とか……？」

「まさか……」

でもこんな時に一体誰が……」

ヒナギクは時計塔の最上階を見上げて首を傾げる。

「私、ちょっと見てくるわね」

「あ、僕も一緒に行きますよ」

そう言って時計塔に歩いていくヒナギクにハヤテも後ろからついて行った。

*

〈最上階フロア〉

エレベーターが生徒会室前のフロアに到着すると、前方の生徒会室の扉は閉まっけていてエレベーターホールには明かりがついていた。

二人は生徒会室の扉にゆっくりと近づいてゆく……

ガチャ……

「……………」

しかし生徒会室には明かりがついておらず、薄暗い室内はひっそりとしている。

しかし、ベランダに続く大きな窓が開かれていた。

「……………誰!？」

そのベランダには一人の男が空を見上げて立っている。女性物の着物を着て、右手には煙管をふかしている男が……

「ここは生徒会役員しか立ち入り禁止の筈ですよ……!!」

「……そいつア悪かった」

すると男がゆっくりと二人に振り返った。

「ここなら良い景色が拝めそうだったんでな……」

左目に包帯が巻かれ、黒髪その男は……高杉であった。

「……あなたは一体？」

「何でもねーさ……」

強いて言うなら、綺麗な月に釣られて迷い込んだ魚だなア」

ハヤテの言葉に、高杉はそう言って紫煙を吹くと不敵に笑う。

((……………この人))

ヒナギクとハヤテはどうしてか、不思議な既視感に見舞われた。

何処かで見えた事があるような雰囲気……しかし上手く言葉には出来ない。そんな感じである。

ガチャ……

「やはりお前だったか……」

「「？」」

二人が高杉を見ている後ろから、扉の開く音に続いて聞き慣れた声が聞こえてきた。

「オイオイ……」

どうして今日はこうも、嫌な面に会っただろうなア……」

「それはこちらの台詞だ……」

声の主は扉からゆっくりと二人の前に歩いてきた。

「「桂さん!？」」

二人の前に顔を出したのは、高杉に睨みをきかせる、桂だった。

「高杉……」

何故貴様がここにいる!？」

「ククク……さあな」

桂の睨みにも高杉は煙管をくわえて悠々と答える。

「貴様……何を企んでいる」

「クク、銀時と同じ事言ってやがるな、ツラ」

「銀時しぎにも会ったのか……」

「皮肉なもんだなア。腐れ縁なんぞ、とっくに切ったつもりだった

が……そう簡単にはいかせてくれんらしい」

高杉は桂を見据えると、そう言って煙管を叩いた。

「まさか異世界でまでテメーらの面を見ようとは……」

「テメーじゃ無い、桂だ……」

二人が睨み合っている中で、ハヤテ達は困惑したようにその様子を見つめていた……

*

時刻は前回に戻って広場……

* 19 : 30

「何だと！？塔に爆弾！？」

「ええ！どうやら本当のようです！！」

新八から話を聞いたロアル達は耳を疑った。

「オイ、メガネ。

そいつはいつ爆発するか分かるか！？」

「あの男の話だと8時だそうです！！」

新八は後方で気絶している男を指して言った。

その後新八は結局鼻フックデストロイヤーを食らわせたのだ。

因みに他の四人も縛られてロアル達に捕まっている。

「8時だと！？後30分しか無いな…弥鉤、比呂、優斗！！お前達は生徒、客を絶対に時計塔に近寄らせるな！！
離れた所に避難させる！！」

「分かった！！」

「了解」

三人は頷くとすぐに広場を走って行った。

「莎唎、九条！！」

二人は一班の施設にいる二人と他に連絡を！！」

「ええ！！」

「分かった」

二人も急ぎ足で第一班のログハウスの方向に向かっていった。

「キミも私と一緒に人々の避難を手伝ってくれ!!」

「はい、わかりました!!」

新八はしっかりと頷くと、マリア達を呼びにいこうと一

「ちょっと待て!!」

万事屋の野郎はどうした!？」

「銀さんなら時計塔に向かいました。時計塔にも知り合いがいるよ
うなので、事態を伝えに!!」

「……………そうか!!」

ロアルは一瞬自分も時計塔に向かおうと思ったが、彼ならば大丈夫
だろうと踏んで、大量の人々の避難に集中することにした。

*

「時計塔周辺」

「！！！」

銀時が走っていると、ようやく時計塔が前方に見え始めた。

近道の為に林を突っ切っていた彼は、頬は少し切れて着物もいくらか汚れていた。

塔までの距離はおよそ100mほど。周りには誰一人いないようだった。

「まったく、無駄に広えなこは……！！！」

「同感でござるな」

「！？」

銀時がそう呟いた瞬間、上空から声と共に銀色の光が一瞬煌めく。

銀時が咄嗟に体を転がして避けるのと同時に、地面に鋭い刃が突き刺さった！！

「ぐっ……！！」

続けてその場に、何者かが降りてくる。

「坂田銀時……何故お主がこんな所にいるでござるか？」

「てめえは……！！！」

銀時が見上げると、青い服を着て背中に三味線を背負ったサンゲラ

スの男……

河上万斉が彼を見下ろしていたのだった。

第八十三訓 違った道同士を交わらせる事は難しい(後書き)

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ最初の質問『第一班の強さをランキングで教えて』

伽藍」

伽藍

「ええつとですね……

難しいですね？皆さんそれぞれ分野が違うので……

例えば力だけなら優斗がダントツで強いです。脚力が異常です、彼は。その後にはロアル、霧崎、比呂、莎唎と続いて、憂奈と東が同じくらい力が無いって感じですかね。二人はデスクワーク派なので」

【単純に力】

優斗 脚力ダントツ

ロアル 平均値以上

霧崎 平均値以上

比呂 平均値？

莎唎 平均値(女性)

憂奈・東 かなり低い

伽藍

「ただ、それぞれ得意な分野があるので一概には言えませんね」

銀八

「んじゃ最後の質問『咲夜に質問。桂裏声は腹立つ？』」

咲夜

「せやな。腹立つわな」

銀八

「どのくらいだ？」

咲夜

「借金執事に寒いギャグを言われた時より遥かにイラッとくるわ」

ジャスミン（桂裏声）

「どうしたんだい咲夜殿？

お腹でも減ったのかい？」

スパーン！！

桂

「無念……」

咲夜

「ったく、このアホは……」

新八

「ハハハ……？」

でもお二人とも良いコンビですよね」

神楽

「お似合いアルな」

咲夜

「な、何言ってるんや自分！！！！」

銀八・神楽・新八

「ニヤニヤ……」

咲夜

「な、何やその顔は！！！！」

ケロ太郎（桂裏声）

「どうしたの皆？喧嘩は良くないよ〜」

咲夜

「うっさいわボケエエエ！！！！」

桂

「ぐおお！？」

銀八

「んじゃ、二人の漫才が締めという事で。次回もよろしく頼まア」

第八十四訓 見えないけれど確かに存在するもの

面倒だなどぼやきながらも時計塔に走る銀時。

しかしその時、彼の頭上から物凄い速度の刃が迫った。

寸でのところで身体を捻って横に転がり、それを避けたが……

「てめえ……高杉んトコの野郎だな……」

地面に降り立った人物は紛れも無く鬼兵隊の幹部の一人、河上万斉であった。

時計塔の近くではうつ伏せになった銀時とそれを見下ろす万斉の姿しか無い。

万斉は地面に刺さった刀を抜くと、銀時も肩を押さえて立ち上がる。

「坂田銀時……どうやら晋助の見間違えでは無いようだ……」

「人と話す時はヘッドホン取れつつたろーが。

オイ、聞こえてんのか…オイ!!!

バーカ!!!アホ!!!サボテン頭!!!」

「何故お主がこんな所にいるでござるか……バカ、天然パーマ」

銀時は聞こえてんじゃねーかと肩から手を離すと、万斉を見据える。

「ゾロゾロと揃いも揃って何ですかテメーら？
慰安旅行にでも来たんですか？」

「それを貴様に答える筋合いは無いでござる」

「あアそうかい。」

俺も今はテメーに構ってる暇はねーんだよー!!」

銀時はそう言っつて万斉に背を向けて時計塔の方に走り出す。

「それとこれは話が別だ」

「ーっ!!」

しかし万斉は背後から素早く斬りかかった。

銀時はやむを得ず左に飛ぶと、木刀を構えて万斉を睨んだ。

「今主を塔には行かせる事はいかん」

「んだア？塔に宝物でも隠してあんのか？」

銀時は必死で苛つく気持ちを抑えて平静を装う。

ここで迂闊に爆弾があるなんて言おうものならそれを利用され兼ねないからだ。

「晋助が足止めをしると言った。ならば拙者はここでお主を止める
ほか無いでござるっ」

(あの野郎……爆弾の事を知ってんのか？
どういっつもりだ……)

銀時は一瞬塔の最上階を見上げ、すぐに万斎に視線を戻した。

「それに今は旧友との再会中。
邪魔するのも野暮かも知れんな……」

「旧友……ツラか！？
ツラが塔にいんのか……」

「まさか白夜又だけで無く狂乱の貴公子までいよつとは……
何とも皮肉な話でござるな」

(コイツら……全部知ってやがんな。あわよくばツラを消そうつて腹か……!!！)

銀時と万斎は睨み合つと、獲物を後ろに引く。

「まったく面倒臭え……本当に厄日だぜ今日は!!！」

「フツ!!！」

次の瞬間、二人は地面を駆けた!!！

第八十四訓 見えないけれど確かに存在するもの

生徒会室

時刻は7時40分を回った頃……

桂はベランダの窓に歩いて近づいていく。

「ハヤテ君、ヒナギク殿。

後ろに下がっている……」

「……………」

桂の言葉に二人は躊躇いながらも頷くと、桂の後ろにそつと移動した。

いつもの雰囲気とは違って変わり、目の前の男を険しい表情で睨んでいる。

「高杉……貴様が何故この世界にいる。江戸むいはどうしたのだ……」

「……………」

「この世界でも何かやらかすつもりか……」

高杉はくるりと背を向けると、夜空に紫煙を浮かばせた。

「何を言っただやがる……
てめえも知っただらろう？
俺ア他の世界がどうなるうが知ったこつちやねえ……
俺がぶっ壊したいのは、あの世界だけだ……」

「！っ！！」

そう言っただギロリと目だけを桂に向ける高杉。
後ろのハヤテとヒナギクも本能的に一步後退りをしてしまう。

「ヅラ、テメー以前とはうって変わって、随分と穏健派に成り下がったらしいなア」

「……成り下がった、か……」

桂は高杉の言葉を反芻するように手の平を見て握りしめる。

「俺は……成り下がったとは思っていない。

色々な視点から自分を、江戸を見直し……出した答えだ」

「ククク……そうかい」

高杉はさも可笑しそうに笑うと、煙管を持った手を垂らして桂を見据えた。

「昔からそうだよ……堅物で物事の理解を一番の理想としやがる……」

「ああ、だからお前とは仲が悪かった。今も昔も……」

桂は少し遠い目を見ると、腰にかかった刀の柄に手を置いた。

「……………オイオイ」

「異世界（ちよこ）でお前が何をしようとしているのかは知らぬ。

だが、お前は俺とは相反立場。

ここでそう易々と逃がすと思うか……………」

「……………」

しかし高杉は自分の刀には目もくれず、煙管を肩の高さまで持ち上げるだけ……………」

「高杉、いい加減に目を覚ませ。いくら武力で幕府に、江戸に牙を立てたところで事は何も解決しはしない。幕府を変えるためには―」

「ヅラア、堕ちたあの世界でてめえが何を考えてるかなんぞ、俺には興味がねえよ……………」

高杉はまた桂に背を向けると、そこから広がる美しい景色を見下ろした。

「ただ俺達からあの人を……………先生を奪ったあの国で、てめえらがそれを享受しのおのうと生きてるのだけは我慢ならねえ……………!!」

高杉の語気が低く強まるとまるで空気が低く震えるようにざわめいたよつな心地さえ感じられた。

そこには強い憎悪と怒りしか存在しないような……………」

（先生……………？）

(あの国?)

ある程度事情を知っているヒナギクは“先生”という言葉に、全く知らないハヤテは“あの世界”“あの国”という言葉に反応した。

桂は一瞬悲痛そうな表情をするが、すぐにまっすぐ高杉を見つめる。

「高杉……」

どんなに武力で暴れようが破壊しようが……先生は帰っては来ないんだ。今のお前はその現実から目を反らし、ただ逃げているだけだ……俺達がやるべき事は――」

「……そいつアテメーの事なんじゃねーか、ツラア」

桂の言葉を無理矢理遮るように高杉が振り返る。

「どつという意味だ……?」

「テメーも逃げてるだけなんじゃねえのかつつー意味だ」

「俺は――」

「今のでめえを見ろよ……」

江戸を変えたとぬかしておきながら、ここまで成り下がったでめえ自身を……」

高杉の言葉にグツと奥歯を噛み締める桂。

「銀時のようにフラフラと変節する事も出来ねえ……」

俺達のようにただ国を壊すと決める事さえ出来ねえ……」

てめえは中途半端だ」

「……っ」

「逃げてるんだよてめえは。」

目を向ける事からも目を反らす事からさえもなア……

ただ思想だなんだとぬかして、

思い上がった理想を語る馬鹿どもこのうのと生きていく事しか出来ねえ……」

「…………」

高杉はゆっくりと煙管を口に運ぶと桂を見据えて不敵に笑う。しかし桂もフツと微笑して高杉を見返した。

「確かに……昔の俺が見たら同じ事を思うだろうな……」

「………?」

「だが、俺は後悔もしていなければ間違ったとも思っていない。

江戸は……守るべきモノが沢山ある……」

その瞳には迷いは無くまっすぐと高杉を睨みつけた。

「今の幕府を肯定する気は勿論無いが、貴様のやり方に賛同する気も微塵も持ち合わせてはいない!!」

「ククク……」

高杉は空に紫煙を吹き上げると、口元を歪めた。

「昔銀時に言われた事がある。

“どうせ命を張るなら俺は俺の武士道を貫く。俺の美しいと思った生き方をし、俺の守りたいものを守る”とな……あの時は理解出来なかったが、今なら少しは掴みかけている気がする……」

「……………」

桂はまた手の平を見ると、今度はしっかりと拳をつくった。

*

「おおおお!!」

「はああア!!」

時計塔の付近では銀時と万斎が何度目かの剣を交わらせていた。両者はまったく引かずに、剣と木刀の描く軌跡だけだ無数に舞う。

「どけって、言ってるんだろうがアアアア!!」

「ぬう!!」

銀時の型破りな木刀の振るいも、万斉は受け止めては、素早い反撃を返す。

それをまた避けては、銀時が木刀を振るう……その繰り返しであった。

(くそっ!!キリがねえ……!!)

「どうした白夜叉……」

剣に焦りが出ているようでは「じつな……」

「っるせエエ!!」

銀時は横に木刀を尻ぎ払うが、簡単にかわされてしまう。

万斉も銀時も端から見ればまったくの互角……

しかし精神的に焦っている銀時の木刀は今の万斉には見極めるのは容易いようだ。

「……そろそろ時間か」

「あん?」

万斉がそう呟いた時、上空からバタバタと妙な音が近づいてくるのが聞こえた。

「いささか早い気もするが……」

「なー!?!」

銀時が振り返るって見上げると、なんとヘリコプターが上空から二人に迫ってきていたのだ。

「万斉先輩!?!」

「うーむ。少し早かったですかね」

そのヘリコプターから顔を出したのは鬼兵隊幹部である来島また子と武市变平太であった。

「アイツらは!?!」

「余所見をしている暇があるのでござるか?」

「!?!」

銀時は急いで万斉に視線を戻そうとするも、既に彼は銀時の目の前で刀を構えていた。

「はああああ!?!」

「ぐっ!?!?」

銀時は後ろに吹き飛び倒れた。

反射的に後方に飛んだ為に直撃は避けたようだが、肩を切り抜かれてしまっていた。

「悪いが続きはまた今度にいたそう。次はお互い本気でやり合いたいものでござるな」

「てめ…!…」

万斎は銀時を一瞥すると、ヘリコプターに飛び乗る。

そしてそのままへりは時計塔の最上階に向かって上がっていった。

「ーちツ!…」

銀時は血の出る肩を押さえながら起き上がると、急いで時計塔の入口に走っていった。

*

生徒会室のベランダの方では依然桂と高杉が睨み合ったまま。

桂の後ろには状況を見守るようにハヤテとヒナギクが立っていた。

「さて、俺アそろそろおいとまするかねえ…」

「高杉!!俺は逃がすつもりは無い……お前は何が目的でこの世界にいる!?!」

「……………さあな」

高杉は煙管の煤を払うと、桂から視線を反らした。

「ただ面白え奴には会ってな。

コイツがまた、でけえ闇を抱えてるみてえでなア。面白そうなんで元の世界に帰れるまでちよっと手を貸してんだ…」

「高杉!! 貴様!」

「コイツは立派な契約だ。双方ともに合意の上での話よ……………」

桂は高杉へ一步踏み出そうとするも、留まってしまつ。

「目当ては何だ……………!?!」

「幕府をぶつ潰すにも江戸をぶつ壊すにも金は必要不可欠なんだな……………いや、それだけじゃねえ」

高杉は手の平を目を見開いて見つめる。

「幕府を、江戸もろとも消し去る事も可能な力もあるかも知れねえな……………」

「高杉!!」

バタバタバタバタ……………!!

桂が叫んだ時、高杉の後ろから大きな音と共にヘリコプターが姿を現した。

「奴らはー！！」

桂も驚いて目を向けると、また子が顔を出した。

「晋助様！迎えに来たっス！！」

「……………」

高杉はヘリコプターに飛び乗ると、桂は一瞬唇を噛み締めたが、すぐに高杉を見上げた。

「高杉……もしこの世界に危害を加えるというならば、俺は必ず貴様を斬る……………！！」

「ククク……………」

高杉は桂見下ろしながら不敵に口元を歪めると、視線を奥にいたハヤテに向けた。

「テメー、ハヤテつつたなア」

「！？？」

急に話を振られて驚くハヤテ。

「せいぜい死なねえように気をつけな……………」

「え？」

しかし高杉はそう言って踵を返すと、ヘリコプターは方向転回し、みるみると桂達の前から遠ざかっていった……

「……………」
「……………」

一気に静まり返る生徒会室。

高杉の去った後を見つめる桂と気まずい様子で黙り込むヒナギク。わけが分からず困惑しているハヤテ。

すると、桂がゆっくりと振り返って二人を見た。

「こうなった以上……二人には話さなくてはなるまいな」

「え……………」
「……………」

「俺達はー」

バタン！！

突然扉が再び開かれたので、桂の話は止まってしまった。

「ツラ！！それにオメーらもいやがったか……！！！」

「ツラじゃ無い桂だ」

「銀時！？」

扉から入ってきた人物は肩から血を流した銀時であった。

「銀さん！？血がー」

「どうしたの！？その傷ー」

「んな事アいいんだよ。それより急いで逃げんぞ！！！」

銀時は扉により掛かったまま、三人を見て言った。

「逃げる……えつと？」

「どうしたのだ銀時？」

三人は慌てて銀時に近づいていくが……

「爆弾だ……」

「「「え？」「」」

三人の動きはその一言でピタリと止まってしまった。

「あと数分で爆発する……時限爆発が生徒会室（こい）に仕掛けられてんだ
そうだ……！！！」

「「「……」「」」

時刻は現在7時50分。
爆発まで、後10分である……

第八十四訓 見えないけれど確かに存在するもの（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「今日は質問は一つだけだな。」

『ハヤテに質問。何でヒナギクはあんなに怒ってたと思う？』

ハヤテ

「えっと……やはりまた僕が無神経な事を言ってしまったのでしょうか……」

銀八・新八・神楽・桂

「……………」

ハヤテ

「心当たりが無いですね……………」

新八

「そ、そろそろ質問コーナー終わりですね……！」

神楽

「そつアルな。早く次回にいききたいネ」

桂

「俺達は一体どうなるのか!？」

銀八

「次回もよろしく」

ハヤテ

「……？」

第八十五訓

爆発オチが許されるのはギャグの時だけ

〈生徒会室〉

「ば、爆弾んんん!?」

ハヤテとヒナギクは驚きのあまり声を上げて銀時に聞き返した。

「ああ、詳しい説明は後だ……」

とにかく今は逃げねーと。あと10分でお釈迦だぞ」

「待て」

「「?」」

銀時の言葉を桂が一言で止める。二人も桂に目を向けた。

「その爆弾……どのくらいの規模か分かっているのか?」

「さあな……ツラ、オメーそんな事言ってる場合じゃー」

「ツラじゃ無い桂だ。」

もしそれがこの敷地全体を包む程の威力を持っているとしたらどうする?」

桂の言葉は最もである。

何分爆発の威力が一切分からないので、仮に時計塔から脱出したとしても、残り10分で助かるとは言い切れない。加えて時計塔付近はロアル達が避難させているが、敷地内にはまだ人が大勢残っているのだ。

「確かにそうですね。このまま逃げてモリスクが大きい。せめて爆弾がどの程度のものなのか調べてからでも遅くないと思います」

「思いますってオメー、んなモン何処にあるかも分からねーのに、どうやって探すってんだよ…」

ハヤテが桂の後を汲むように言うと、銀時が無理だと首を振る。しかしハヤテは微笑すると、

「ご心配無く！こんな事もあるつかと爆弾を発見するマシンを持っています！…」

（（どんな事だよ……！！））

懐からダウジングのような機械を取り出したハヤテに呆れたように突っ込む三人。

「これがあればもの一分で見つける事が出来ますよ」

「っーかお前いつもそんなの持ち歩いてんの？」

「流石三千院家の執事ね……？」

ハヤテは素早くダウジングを生徒会室に向けると、ピー、とすぐ様反応があった。

ハヤテがゆっくりと真ん中に歩いていくとますます音は大きくなっ
ていく……

(真ん中……床下か?)

ハヤテが床にマシンを近づけると、ピー音がずっと続いた。
恐らくヒットのようだ。

「ヒナギクさん!!この床って開ける事出来ますか!?!」

「ええ、多分」

ヒナギクは慌ててハヤテの傍に走っていく。

「恐らく爆弾はこの生徒会室の真ん中の床下です!
皆さん、床を開けるのを手伝って下さい!!--」

「ああ!!!--」

「承知した」

銀時も桂もハヤテの所に駆け寄ると床をゆっくりと持ち上げるハヤ
テを手伝った。

「よし、開きましたね」

「後は俺らが持っていくから、オメーは爆弾とやらを見てろ」

四人は慎重に床のタイル幾つかを浮かすと、銀時と桂は離れた場所

まで持っけていき、ゆっくりと降ろした。

一方、ハヤテは床下を覗いている。

「こ、これは……!!」

「ハヤテ君!？」

床下から驚きの声が響いたかと思うと、ハヤテはゆっくりと床から生徒会室に頭を戻してきた。

「どうしたハヤテ君!!」

「ヤベーモンでも見つけたのか?」

桂達も急いでハヤテに駆け寄る。ハヤテはまだ右手を床の下に潜らせていたが、それをゆっくりと上に出してきていた。

「見つけました……」

そして右手と一緒に現れたのは、大きな正方形の白い板のようなモノだった。

正方形の四隅にはまた四角く盛り上がった装置のようなモノがある。さらに正方形の板の真ん中にも四角く盛り上がった装置が置いてあった。

「この四角いのが爆弾か?」

「……………はい」

怪訝そうな銀時の問いにハヤテは短くそう答えた。

「ハヤテ君、どういふものか分かるの？」

「ええ」

ヒナギクが尋ねると、ハヤテは振り返って頷いた。
しかしその表情は気のせいかな青ざめているように見える。

「前に一度、同じ爆弾を見た事があります」

（（どこで！？？という経緯で！？））

突っ込みたい気持ちを抑えて、三人はハヤテの話を黙って聞く。

「これは見ての通り四隅と真ん中の計五つの爆弾が一つに繋がっているタイプです」

「……………威力は？」

桂の問いにハヤテは一旦下を向くと、もう一度顔を上げた。

「最悪……………敷地全て吹き飛びます……………」

「……………」

第八十四訓

爆発オチが許されるのはギャグの時だけ

「あ、定春にエサやるの忘れてた」

「エリザベスに餌をやらなくては」

いきなり銀時と桂が扉に向かって歩きだそうとした。

しかし、桂の手をヒナギクが、銀時の手を捕まった桂が掴んでその動きは止まってしまふ。

「ヅラ、離せてメー!!」

「銀時!! 貴様だけ逃げるつもりか!!」

ギリギリと銀時が扉に向かおうとするのを桂が引っ張って止める。

「オメーも逃げようとしてんだろぅが！！
ちよっヒナギク、ツラを離しなさい、メッ！！」

「そっだヒナギク殿。取り敢えず離なしましょう（桂裏声）」

「何言ってるの二人とも！！」

銀時は助けに来ておいて何でいの一番に逃げようとしてるのよ！？？」

ヒナギクは二人をズルズルと後ろに引つ張っていく。

二人は力を入れていないので簡単に引きずられてしまう。

ハヤテは一心不乱に爆弾を眺めて何かを考えている様子だが…

「アレだよ、オメーらは大丈夫だって。多分爆発オチみたいない感じ
で生き残るから。ギャグで済むから」

「なんの話よ。そもそもアナタは侍でしょ！？？」

「いや俺紛いモンだから。

サムライだから」

しかし銀時の言葉も虚しく、元の場所まで引き戻されてしまう。

「武士たるもの、いついかなる場所でも死ぬる覚悟を持たねばなる
まい。腹をくくれ銀時」

「同じように逃げようとしてた奴に言われたかねーんだよ」

銀時は桂をポカリと叩くと、頭を掻きながらため息をついた。

「……………んな事言ったてどうしろってんだ？」

「……………解除しましょう」

「「「！？」」」

三人は驚いたようにハヤテに目を向ける。

「出来るの！？ハヤテ君」

「この手の爆弾の解除は二回程経験があります」

（（（あるのかよ！！）））

「ですが僕一人では……………」

ハヤテはそう言って時計に目をやる。時刻は7時53分……………

ハヤテはもう一度三人の顔を見回すと、表情を険しくてみせた。

「いいですか、よく聞いて下さい。これには周りの四隅に一つずつ、四つの爆弾と真ん中に一つと計五つの爆弾があります」

「「「……………」」」

「威力はとてつもないですが、

その分構造は簡単なので解除するにはそんなに時間はかかりませんが……………」

これは周りの四つを解除しないと、真ん中の爆弾の取り外しが出来

ないタイプです」

ハヤテは大きな白い板の四隅の指差しながら出来るだけ早口で説明する。

「その口調だと、何か問題があるみてえだな」

「ええ。一つの爆弾を解除するのに大体三分くらい。つまり周りの四つを一つずつ解除していると……」

時間的にタイムアウト……
皆仲良く爆発である……

「しかもそれだけじゃない。仮に周りの爆弾を解除しても真ん中の爆弾は解除出来ない。核ですから。威力は格段に弱まりますがそれでも生徒会室は粉々になるでしょうね……」

「じゃあ、どうすれば……」

しかしハヤテは首を振ると、力強く頷いた。

「大丈夫。まだ、可能性はあります。詳しく話している暇はありません。僕の指示に従って下さい!!」

三人も分かったと頷いた。

「ちょうど僕達は四人。ですから一人一つ爆弾を解除して一気に真ん中の取り外しにかかりましょう」

「オイ、爆弾の処理なんざ俺達に出来んのか？」

「大丈夫です。さつき確認しましたが、周りの四つは全て作りが同じです。同じ方法で必ず解除出来ます」

ハヤテは素早くカッター等の鋭利を四つ取り出すと、三人に渡した。

「手順はやりながら説明していきますから、急いで下さい。時間が全てですよ」

「やるしかねーか」

「そうね」

「分かった」

三人はそれぞれ板の隅の前にある爆弾の前に腰を降ろす。

真ん中の爆弾には画面があり、それは06:00とあった。恐らく残り時間の事をいつているのだろう。

ハヤテは残った最後の隅に向かうと、カッター装置に近づけて口を開く。

「まず装置の表面にある蓋をゆっくり開いて下さい……」

05:45

「それから二つの赤い線を切って下さい」

04:32

「三本あるうちの一番左側にある青い線を…」

03:03

「そのまま、奥にある黒い線を切ってください。あと少しです…」

01:51

「これで最後です。赤い線を切ってください…！」

00:59

四人は同時に赤い線を切ると、周りの装置がフツと音をたてて止まったようだ。

するとハヤテが素早く真ん中に手を向ける。

「銀さん、桂さん…！」

ベランダに行ってください…！」

取り外し作業はギリギリです。

終わったら急いでベランダに投げますから、なるべく遠くに爆弾を飛ばして下さい…！」

「ああ!!」

「承知」

二人は急いで立ち上がると、ベランダに走ってゆく。

「ヒナギクさんは、外したらずぐ渡すのでベランダに投げて下さい
!!」

「ええ!!」

ハヤテは物凄い速度で手を動かしていく。

00:31

(くそっ!!間に合うか……!!?
いや、間に合う!!間に合え!!)

00:15

ガチャ!

「外れた!ヒナギクさん!!」

ハヤテは神がかった速度で爆弾を外すと、素早くヒナギクに手渡すと、急いでベランダに視線を送った。

「二人とも!!」

ヒナギクはそのままベランダにいる銀時達に爆弾を投げた。

00:08

パシッ！

銀時は投げられた四角い爆弾を素手で捕ると、ベランダから頭上に浮かした。

00:04

「飛ばすぞ、ツラア！！」

「ツラじゃ無い……」

二人は木刀と鞘を引いて力を溜めて……

「桂だアアアア！！！！」

「吹き飛べエエエエエ！！」

思いきり上空に向かって振り払った！！！！

爆弾は一瞬で彼方に消えたかと思うと……

.....

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!

時計塔の上空で大爆発の音……

爆風はスレスレ時計塔には当たらずに済んだようだ。

パラパラの灰がベランダに降り注いだ……

「……………やった、やりましたね皆さん……………!!」

「そう………みたいね」

ハヤテとヒナギクは安堵からその場にそつと座りこんだ。

ベランダの二人も空に巻き起こる真っ黒な煙を見ながら肩の力を抜く。

「あゝ、流石に疲れたわ……

つーか前にもこんなんあったよな……」

「フツ、池田屋か？」

「忘れた……」

銀時は面倒臭そうに頭を掻くと、まだ血の出る肩を押さえて生徒会室に入っていく。
その後桂も続く。

「何とかなったみてえだな。

大丈夫かア〜？」

「はい……って、銀さん！！

傷！！傷！！」

ハヤテは血の伝う銀時の肩を見て慌てて立ち上がる。

「あん？これくらい気にすんな。すぐ治ら

「全然そんな風に見えませんか！！ちょっとここに座って下さい」

「いいつて……」

床に座れと促すハヤテに、銀時は大丈夫だと首を振ってみせる。

「これ以上歩いたら床に血がつくでしょ。さっさと座る」

「分アったよ」

ヒナギクは適当な理由を口実に無理矢理銀時をその場に座らせた。
ハヤテはまたどこからか救急箱を持って来ていて、銀時の横に立て膝をついた。

「ハヤテ君……いつの間にそんなモノを」

「ええ、万が一救急箱を使う時の為、生徒会室にスペアを用意してあるんですよ!」

「いつ隠したのソレ……?」

ハヤテは苦笑して答えると、馴れた手つきでせつせと銀時の肩の応急措置をしていく。

「銀時……その傷はどうした?」

「フックに引っ掻けた」

「奴らにやられたのだろう」

銀時は面倒そうに適当な嘘をつくが桂は見透かしたように言う。

「……………ツラ、高杉あいつと会ったのか?」

「ああ……………
相変わらずだ、高杉やつは」

「あの野郎、今度は何をやらかすつもりだ?」

「分からん。ただ一つ……………今奴の目の前にあるのは幕府の……………江戸の破壊のみだろうな」

桂はため息をつくと同時に、ハヤテが肩の包帯を巻き終えた。ハヤテは立ち上がると、少し躊躇いがちに銀時を見て口を開く。

「……これで一応大丈夫です」

「ああ、あんがとな」

銀時も立ち上がると、肩を二三回回して見せた。
止血はしっかりとしてあるようだ。

「……あの、桂さん」

「ああ、分かっている」

ハヤテの言葉に桂は頷くと、銀時に顔を向けた。

「銀時、二人には話しておかねばなるまい」

「……この辺が潮時かもな」

銀時は上着を着直すと、木刀を腰にさして続ける。

「ナギ達にも話した方がいいだろうな……」

「……そうか」

桂が頷くと、銀時は三人から離れて出口の方に歩き出した。

「銀時？」

「銀さん？」

ハヤテとヒナギクは銀時を見るが、背を向けているのでその表情を
読み取れない。

「二人への話は任せたわ。
難しい説明は苦手なんでな」

「……………分かった」

「8時半くらいになったら二人を連れてきてくれ。
ナギ達には向こうで説明すりゃいいからな」

銀時は背を向けたまま手をヒラヒラと振ると、生徒会室を出ていっ
た……

「向こう?」

「ああ、こっちの話だ。それより……………」
桂は首を振ると、ハヤテとヒナギクを交互に見る。

「まずは、ハヤテ君。
貴殿に説明せねばなるまいな……」

桂は少し間を開けると、ハヤテに向けて口を開き始めた……

*

「銀さん!!」

「無事だったアルか！」

銀時が正門の所に歩いていくと、新八と神楽が駆け寄ってくる。その後からナギ達と咲夜達も慌てて寄ってきた。

「銀時!! ハヤテ達は無事なのか!？」

『桂さんは!?!』

「ああ、皆無事だ。

今はちよつと時計塔にいるがすぐに戻ってくる」

銀時の言葉に心から安心したように肩を降ろす一同。

「にしても……少ねえな。

客は皆ここに避難したんじゃないのか？」

「今はもう祭りを再開し始めてるぞ……」

すると後ろからロアルが疲れたような足取りでやってきた。

「比呂が機転をきかしてくれてな。“時計塔では科学班のアトラクションが始まるから今は近寄るな。暫く離れて見ている”

つてな。爆弾の事を伏せて上手く客達を避難させてくれたらしい。

おかげで事態も混乱せずに、客に恐怖心を与えずに済んだ。

それだけじゃない、あの広場の騒ぎも見世物にしちまったんだから

な……大した奴だよ」

白井は霧崎や優斗にそう伝えろと言っていたのだ。
加えてアナウンスにもそう流すように指示をしていたのだ。

一連の締めくくりが見世物になった事から、広場の騒ぎも見世物ということで説明して、客を納得させたのだから相当な機転と根回しの良さである。

「それで8時きっかりにあの爆発だ。完全に見世物と勘違いしたよ
うだったな」

「下手すりゃ死んでたよオメーら全員。
ま、そんな事より今回は大仕事だ。たんまりギャラは請ー」

「結果オーライだ。本当に感謝している」

「あ、そう。感謝はいいけどギャラの方はちゃんと頼むぜ。
この口座にー」

ロアルはそう言ってフツと微笑するて、くるりと背を向けて片手を
上げる。

「仕事があるんでな。

報告書がたんまりだ。流石に上の方には今回の件は報告しないと
な……」

「オィイコラ、報告書も良いけど請求書の方もちゃんと見る。
この口座にー」

「じゃあな」

「オイ待てエエエエエ!」

銀時の叫びも虚しく、ロアルは暗闇に消えていった。

「銀ちゃん、これからどうするアルか？」

「予定通り始めるんですか？」

神楽と新八の声に銀時は思い出したように振り返った。

「美希達三人の姿が見えないネ」

「もういないって事は、多分用意しに行っちゃったんじゃないですか？」

新八達はこの後予定されていた何かについて話し合っているようだ。

「いや、少し予定変更だ。」

新八、神楽

「「?」「」

銀時が二人に耳を貸すように言って、コソコソと話し始める。

「…………え!?!ナギちゃん達に!?!」

「何かあったアルか？」

「まあ……アレだ。」

そろそろ潮時だと思っただけ……」

銀時は神楽達にナギ達に自分達の世界の事を話すただけ話した。しかし鬼兵隊の事については伝えなかつたようだ。今は余計な心配をかけるときでは無いとの判断である。

「……わかりました」

「そうアルな。いつか言わないといけなかつたネ」

二人が不安混じりに頷くと、銀時は顔を上げてナギ達に目をやった。

「ナギ、それにオメーらも……」

「ん？どうしたのだ？」

「少し……話さねーといけねえ事がある」

いつになく真剣な口調に思わずナギ達も顔を見合わせた。

ガヤガヤ……

「その前に……場所を変えませんか？」

「そうアルな」
「だな」

正門前に人が増え始めたので、銀時達は人目の少ない場所に、怪訝
そうなナギ達を連れていくのだった……

第八十五訓 爆発才チが許されるのはギャグの時だけ（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ最初の質問『霧崎と白井に質問。三千院本家SPと白皇学院SP、どちらが印象深い？』」

霧崎

「そりゃ決まってるだろ」

白井

「ですね〜」

霧崎・白井

「三千院本家SP」

銀八

「続いての質問『作者に質問。血まみれの銀さんは好きですか？』」

伽藍

「シリアスなシーンでカッコイイ時は……」

銀八

「次〜『作者に質問。毎回基本どのくらいの字数を書いているんですか？』」

「つー訳で今回は終わりだ。
また次回よろしく頼まア」

第八十六訓

大切なのは立場より気持ち

（生徒会室）

「……………これが俺達の世界。
江戸という所だ。そして俺達は謎の事故に遭いこの世界に飛ばされて来たんだ」

「……………」

開け放たれたベランダから月明かりが射し込む生徒会室では、桂とハヤテ、ヒナギクが向かい合っていた。

桂はちょうど今、最初に咲夜達に話した時のように自分達の世界について、大まかに話終えた所だった。

「……………えっと、本来ならどこのSFですかって突っ込む所ですが……………」

ハヤテは先程目の前で高杉達や桂の言動を聞いている。

あれが嘘だとは到底思えないし、よく考えると異世界から来たとするとなんか辻褄が合うのだ。

「それにしても……………明治の年号なのに江戸があって、攻めてきたのは外国人じゃなくて宇宙人で、

幕府と攘夷思想は対立して、戦争になったけど幕府が勝って、宇宙人に開国を強要されて技術が飛躍的に伸びて……………何だか夢のよう

な話ですね……」

「そもそも急に理解しようというのが無理な話だからな。気に留めといておく位でいい。」

ただ俺達が異世界の人間であるという事は知っていて欲しい」

桂は腕を組ながら、丁寧に説明していった。

「ヒナギクさんは、知っていたんですか？」

「ええ、一応ね。」

最初に銀時と会ったのは私だったの。その時は何でも無かったんだけど、その後に新八が空から落ちてきたのを目撃して……それで二人から事情を聞いたわ」

ハヤテの振りにヒナギクは思い出すように話す。

思えばあの時からもう2ヶ月と半分程経つのだ……

「……確かに信じられない気持ちはあります。だけど心のどこかで納得している自分もいるんです」

「納得？」

「前に夢を見ました。多分桂さんと銀さんの夢です。」

沢山の化物みたいなモノに囲まれている夢を……」

ハヤテの言葉にヒナギクもそんな夢を見たなとハッと思い出す。

「そうか……夢を。」

どういう理由かは分からんが……それは恐らく、戦争の時のものだ

るっ」

「戦争……」

「ヒナギク殿には話したかもしれんが、俺や銀時は攘夷戦争に出ていたのだ」

桂は少し遠い目をしたかと思うと、すぐに視線をハヤテに戻した。

「まあ結果は話した通りだ。

現在の幕府は天人による界限政権と化している」

「そうだったんですか……」

ハヤテは何とか理解しようと必死で頭の中を整理していた。

「そして……先程の男。

奴もまた戦争に参加していた俺達の仲間だった」

「「!!」」

話が高杉の話になると、二人も表情が一層深刻なものになった。

「俺達は三人は……幼き頃から文武を共にした幼馴染なんだ」

第八十六訓

大切なのは立場より気持ち

人目がほとんど無いと思われる時計塔付近に銀時達は歩いてきていた。

先程の騒ぎ後も、一応時計塔には近寄るなど勧告してあったので、付近には銀時達だけしかいなかった。

「オイ、何なのだ？こんな所まで連れてきて」

ナギ達は、状況が未だに理解出来ずに怪訝そうな表情を浮かべている。

「何ってアレだよアレ……」

えっと、新八。頼んだ」

「いや何で僕なんですか？」

「オメーいつもアニメでアバン喋ってんじゃない。それを更に詳しく説明すりゃ良いじゃねーか。

二期が始まるみたいな感じで」

「ちょっとそういう発言は止めて下さいよ!？」
銀時と新八がどうするかと話し合っていると、

「ひょっとして……自分らの世界の事を話すつもりなんか」

咲夜が気付いたように三人に声をかけた。

「」「」……「」「」

「何だ咲、世界って?」

ナギは咲夜の言葉におかしな意味を見つけて尋ねる。
しかしそれに口を開いた銀時達だった。

「いや、実は俺ら……」

「この世界の住人じゃない、とか?」

ナギが冗談混じりにそう言うと、ピタリと三人の動きが止まった。

「馬鹿かお前。何言ってるんだよ」

「ナギ、アニメの見すぎですよ」

「分かっているのだ。冗談だ冗談……、?」

ワタルとマリアがそう言うと、ナギも肩を竦めて銀時達を見るが……

「」「」……「」「」

「……………銀時？」

三人はバツが悪そうに顔を見合わせている。
その様子にマリア達はもしやと銀時達に顔を向ける。

「……………もしかして、本当にですか？」

「……………まあ、一応？」

新八は頬を掻きながら一同を見回して答える。

……………

「……………で、本当の話ってのは何なんだ？」

「……………えっと？」

暫くの沈黙の後、ワタルが口を開くが新八は困ったように笑う。

『本当の話』

「エリザベス……………」

「エリー！」

すると新八の所にエリザベスもペタペタと歩いて出てきた。

「……………」

一同はどう反応しているのか、分りかねている様子。

反対に事情を知っている咲夜は勿論だが、ナギと伊澄も真剣に話を聞いていた。

伊澄は銀時を見るとゆっくりと口を開く。

「銀時様、その異世界の事を話して下さいませんか？」

「ん、ああそうだな……………ぱっつぁん、任せた」

「また僕ですか!？」

「オメーが話した方が一番信憑性があるだろ」

「……………わかりました」

新八は頷くと、皆を見渡して遠慮がちに話始めた。

侍の国……………

僕らの国がそう呼ばれていたのは今は昔の話……………

*

〈生徒会室〉

「幼馴染み……」

「うむ。俺達は同じ学舎で文武を修め、生活を共にし、成長していった……」

生徒会室では先程と変わらずに桂が二人に向かって話をしていた。

「そして色々あって戦争に赴く事になり、それぞれの想いのもとに戦った。」

しかし結果は敗北、仲間も沢山死んだが……俺達は何とか生き残り、今はそれぞれ想いのままに生きている……」

桂は高杉達の去っていった方に顔を向ける。

「高杉は武力で幕府を……江戸を壊そうとする攘夷過激派に……」

俺は内側から江戸を変えようとしている革命家に……」

銀時ぎんときは……何を考えているのか自由気ままにフラフラしているな」

最後に銀時が出ていった生徒会室の入口に目を向けて、肩を竦めてみせる。

「俺や高杉戦争後も幕府に抵抗していた事もあってな、今は幕吏から追われている身だ」

「え？それってつまり……」

「ああ、簡単に言えば指名手配者という所かな」

.....

「ええええええええ!!?」

桂さん手配中なんですか!?!」

「しかもそんなあっさり……」

平然ととんでもない事を暴露した桂に二人は驚いて暫し唾然とする。

「何、国を変える為にはそういった厄介事はつきものだ」

「「いやいや……」」

桂の前向きな考え方はある意味尊敬に値するとハヤテは思った。
革命家は皆こつなのだろうか……

「アレ……って事は、銀さんも手配中になっているんですか?」

「いや、奴が攘夷戦争に参加して事は限られた人物しか知らん。
それに俺達と違って国を変えようとはしないからな……」

ハヤテの疑問に桂は首を振って続ける。

「アイツにはアイツの武士道ブルがあるんだろつ」

「「……………」」

仕方ない奴だが、しかしそれが奴らしいと言って桂は口元を緩めた。

「ともあれ、俺達はそんな世界から飛ばされてきた。そして元の世界に帰る方法を探しているのだ」

「……本当に嘘みたいな話ですね……」

「……………」

「でも、信じます。」

桂さんや銀さんがそう言うなら、僕は信じますよ」

ハヤテは桂をまっすぐ見るとしっかりと頷いた。

「元の世界に戻れるように、出来るだけ協力しますよ……！」

「ええ、私も」

「そうか。二人ともありがとう。だが……」

桂は二人に礼を言うが、顔を曇らせるとそつと呟く。

（こうなった以上、そういう訳にもいかんな……）

「「え？」」

「いや、何でも無い。」

では、そろそろ行こうか……」

桂は生徒会室から出ようとゆっくり歩き出した。

「そつえば、行くってどこに？」

「え、ああ、それは行ってみればわかりますよ」

ハヤテは少し慌てたようにヒナギクに説明して、桂の後に続くのであった。

*

時計塔付近では銀時達とナギ達が黙って向かって合っていた。

「……………えっと、突っ込んだら負けってやつか？」

「ハハハ……………二回目ですね？」

ワタルがジト目でそういうと、新八は困ったように苦笑した。

「まあ、確かに唐突な話ですけど、そう考えると色々納得する部分がありますよね」

「ええ、それにワタル君。

銀時様達が嘘を言っているようには見えないわ」

マリアは頬に手を当ててそう言い、伊澄も三人を見て頷いた。恐らく伊澄は薄々気付いていたのだろう。銀時がこの世界の人間では無いのかもしれない。

「いや…でも江戸ってさ……？」

しかも超近未来なんて……」

ワタルの反応は至極当然。

彼らの知っている江戸は銀時達の言っている江戸とは遙かに違うのだから……」

「ま、ウチも最初は信じられへんかったけどな。でも嘘にしてはいやに具体的やし、何より……」

「何より？」

「そう考えた方が面白いやないか」

「……お前なあ」

笑顔でそう言う咲夜にワタルは呆れたように呟いた。

「……………」

「……………ナギ？どうした？」

「ナギ？」

ワタルの隣でナギは下を向いてワナワナと肩を震わしていた。マリアも不思議に思って尋ねようと…

「本当にパラレルワールドは存在した！！」

「……………は？」

「かつて 川教授の言った事は正しかった！！
やはりこの世には理解不能な超現象が多く存在する！！」

ナギはビシツと空に向かって指を指すと高らかにそう宣言した。

「ナギ、取り敢えず落ち着け」

「馬鹿者！！これがいられるか！！」

パラレルワールドだぞ！？平行世界だぞ！？」

「何が言いたいんだよ……………？」

ワタルが尋ねるとナギはキラーンと目を光らせる。

「浪漫が……………あるじゃないか？」

(((また始まった……？)))

一方新八はナギ達の反応に啞然としていた。普通の反応をしたのはワタルだけ。後は皆すんなり信じてしまったようなのである。

するとナギが三人に顔を向けた。

「なあ銀時、その天人というのはどういうものなのだ？」

「ん？ああ……最初に言えば良かったな」

銀時はそう言うと、神楽を指差した。

「^{コイツ}神楽が天人だ」

「エツヘン！」

神楽は何故か胸を張ってみせた。しかし一同は暫し呆然……

「……………え？」

「だから、神楽は地球人じゃねーんだ。夜兔つー天人だ」

「……………えエエエエエ！？」

これにはナギ達は勿論、伊澄や咲夜も驚きのあまり声をあげる。

「神楽ちゃんはとんでもない力持ちですよ？それが正体なんです
よ」

「そういう事アル」

新八の補足に神楽は傘を回して頷いた。

ナギ達は我が目を疑うかのように神楽を見つめる。
どこをどう見ても人間にしか見えないからである。

「ん？銀時？」

「あ、お嬢様まで……」

一同が衝撃を受けていると、ちょうど時計塔から桂達が出てきた所
だった。

「あ、ツラ。こんな所にいたアルか」

「ツラじゃ無い、桂だ。」

それはこっちの台詞だ。何故このような場所に？向こうに行っただ
のでは……」

そこまで言って、桂はナギ達がいるのに気付いた。

「もしかして……ここで話したのか？俺達の世界の事を」

「一応な」

「そうか……」

桂も銀時達の傍まで行くと、ナギ達に向かい合った。

「桂さん、アナタも銀さん達と同じように異世界から来たんですか？」

「ああ、俺や銀時は一緒に飛ばされたからな」

「……………マジですか？」

ワタルもここまで証人揃ったので異世界の話を信じざるを得なくなつたようだった。

「銀時、新八君、リーダー、エリザベス、ちょっといいか？
今後の事について、話しておきたい事がある」

「あん？」

「どうしたネ」

「はい？」

『……………』

桂は銀時達を集めると、耳打ちを始めた。

「え！？どうしてそんな突然……」

まず新八が声をあげたが、桂が何やら説明をするともつと驚いたように目を見開いた。

「本当アルか！？何でアイツらが……………」

神楽も流石に驚いたように桂の話聞いていた。

どうやら高杉達の一件を今、新八達にも話したようだ。更に桂の話聞くうちに、みるみると神楽や新八の顔を悲しそうなものになっていった。

そして、桂はナギ達に振り返ると、重そうに口を開き始めた。

「皆に聞いて貰いたい事がある……」

「どうしたん？」

「桂さん？」

咲夜やナギ達は怪訝そうな表情で桂の言葉を待つ。

「聞いて貰った通り、俺達は異世界の人間だ。

それを助けてくれた事、そしてこんな訳の分からん事情を信じてくれた事、本当に感謝している」

「「「……………」」」

「だが、今後もしかしたら、俺達の世界の事で貴殿らに迷惑がかかってしまうかもしれない。

それどころか、危険な目に巻き込ませてしまうかもしれない」

桂の後ろでは、新八と神楽も表情を曇らせていた。

銀時は指を折りながら全然違う事を考えているようだ。

「世話になった皆に、そんな目に遭わせては申し訳がたたない。だから今日限り、俺達の事は忘れて欲しい」

「……!?!?」「」「」

桂の言葉にハヤテ達は驚いて銀時達を見た。

新八も神楽も辛そうな表情をしている。

桂の言う事も理解できるが、いきなり別れねばならないというのは悲しいといったところだろう。

一同も突然の事で困惑している。只でさえ異世界から来たという真実で驚いているのに、その上いきなりそんな話を持ち出されたからどう反応していいのか分からないのである。

「……………小太郎」

「本当にすまない咲夜殿。

だが、俺達はこの世界にはいけない存在だ。だから」

しかし、桂の言葉はナギが言った一言に遮られた。

「……………それで?」

「……え?」「」「」

彼女の言葉に新八も神楽も思わず聞き返してしまった。ナギは構わず続ける。

「それで、何なのだ？」

「……………」

「銀時達が異世界から来たというのは理解した。だからどうしたというのだ」

あっけらかんと言うナギに桂は何も言う事が出来ない。

「いや、だからナギちゃん。僕達はー」

「全く……いいかメガネ、よく聞くのだ。

一緒にいると迷惑がかかるかもしれない？危険が伴うかも？それから主を守るのが護衛の仕事だろ」

「う……………それは」

最もなナギの言葉に、新八は返す言葉が見つからない。

「大体そんな簡単に三千院家の護衛を辞めて貰っては困るな。お前達は雇ってやった私の顔に泥を塗るつもりか？」

「ナギ……………でも」

「異世界だろうが何だろうがそんな事は関係ないのだ。雇った時から銀時達は三千院家の護衛だし、神楽は私の親友だ。それが宇宙人だろうが構うものか」

神楽が躊躇うように言いかけるも、ナギはそう言いきった。

「そうですね。ナギの言う通りですよ。
そのくらい私達は全然気にしませんわ
この世界にもツツコミ所なんて沢山ありますから」

「そういう事なのだ」

マリアもナギの様子を微笑ましそうに見ると、同意して頷いた。

ガバツ！

「ナギ〜！！ありがとう！！
大好きアル」

「わ、バカ？／＼／
抱きつくなく〜！！／＼／」

神楽は感謝のあまりナギに飛びついていていた。

「素晴らしいわ、ナギ。
私も同じ気持ちですよ」

「ま、そうだな。
難しい事はよく分かんないけど、大切なのは気持ちだな気持ち」

伊澄はナギに微笑むと、銀時達に向かってそう言ったし、
ワタルもそう言って口元を緩める。

「そうね。」

立場なんか、私達は気にしないから
でもナギがそんな事言うなんてね……変わってきた証拠かしら？」

「な、私は何も変わってなどいないのだ！！／／／」

ヒナギクがニッコリ笑って言うと、ナギは恥ずかしそうにそっぽを
向いた。

「皆さん……」

新八もナギ達の言葉に感動したように呟く。

一方桂はそんな様子に驚いていると、咲夜が彼に寄ってきた。

「そういう訳らしいけど？」

皆、ちよつとやそつとの事じゃ諦めへん頑固者ばかりやで」

「……………咲夜殿。」

しかし俺は、貴殿らに迷惑をかけたくない。

これだけ世話になっておいて、もしもの事があつたら……俺は「

「大丈夫やつて。」

迷惑なら自分のポケで十分かかつてるさかい。

今更そんな事、気にせんよ」

フォローしているのかそうでないのかよく分からない言葉である。

だが、桂はその言葉に思わず口元が緩む…

「それにまだ自分のボケを全てさばききれてないからな。元の世界に帰る時までには、完璧に突っ込んだるわ」

「クク……ハツハツハツハ！」

そして遂には大声で笑いだしてしまった。

「咲夜殿の言う通り、皆一筋縄ではいかないくらい諦めが悪いようだな。ならば、お言葉に甘えてもう暫く世話になるわ」

「せやな。そうしとき」

こうして、時計塔には先程とは違って変わって、和やかなで笑いがある雰囲気ではなくなった。

「では、皆さん！」

そろそろ行きましょうか」

頃合いをみて、ハヤテが皆にそう呼びかけると一同は思い出したように頷いた。

「え？行くって……どこに？」

しかしヒナギクは不思議そうに首を傾げる。

「まあまあ、今にわかりますからとにかく僕達と一緒に行きましょ

う

「？」

ハヤテは曖昧に誤魔化して、時計塔から歩き出そうと……

「おお！！出店の報酬にSP野郎からこんだけ請求すりゃ暫く安泰じゃねーか。

コイツア、意外に悪くねえ祭りだったかもなア」

「「「……………」」」

ずっと黙っていたかと思われた

銀時がここに来て嬉しそうにそんな事を言った。

しかし、そんな言動に新八達がピクリと反応する。

「………… オイ、天然パーマ」

「お前今まで黙ってたと思ったら…………」

「ずっと金の事考えてたアルか？」

「ほんまやなあ」

銀時が気付いて顔をあげると黒いオーラを放つ新八、ナギ、神楽、咲夜が……

「ん？どうしたオメー」

バキッ！！

「ちょっとはシリアスパートに便乗しろオオオオ！！」

「お前は金しかないのか天然パーマアアアア！！」

「お前はホントマダオアルな！！」

侍の風上にもおけないネ！！！！」

「誰の話してると思ってるねんオノレはアアアア！！」

ドカッ！！バキッ！！ドカッ！！

銀時は叫ぶ間もなく、四人の総攻撃に吞まれていった。

ハヤテ達は呆れたようにその様子を眺めていたが、桂が奴らしいなとため息をつくつと、つられて笑いあつた。

*

「えっと……ここって」

ハヤテ達がやって来たのは白皇学院の講堂だった。

一階建てで細長い建物。

ここでは良く催し物やパーティーなどが開かれている。

講堂の入口まで来ると、ハヤテはヒナギクにさっと道を空けた。

「さ、入って下さい」

「え？」

「いいから入るアル」

「ちょっと？」

半ば神楽に押されるようにヒナギクが講堂のドアを開けて入口から中に入ると……

パン！！パンパン！！

「ヒナギク！！」

誕生日、おめでと〜うー！！

「「「おめでと〜うー！！」」」

沢山のクラッカーが弾けて、ヒナギクの周りを彩った。

そして啞然としているヒナギクの元に、美希達三人娘と千桜、愛歌、歩、雪路、薫、姫史、幸久、真司、そして何故か長谷川までいた。

「これは……」

「フフ、驚いてるな。サプライズパーティー成功だ」

美希がそう言っつてヒナギクの前まで来た。

「本当はもつと派手にしようと思ったんだが、仲の良い者同士だけで祝つのもたまには良いかなと思ってな」

「美希……」

「花菱さん達が企画してくれたんですよ。ヒナギクさんの為に」

ハヤテも後ろから講堂に入ってきてヒナギクに話しかける。

「ま、まあいつも世話になってるからな？／＼」

「こんなんで良かったかな？」

「ええ……」

ヒナギクはニツコリと、とびきりの笑顔で一同を見回して言った。

「美希、皆……」

こんな素晴らしい誕生日をありがとう

とっても嬉しい!!」

その言葉に、皆もそれぞれ笑顔で答えた。

「では、場も暖まった所で!

プレゼントタイムと行きましようか!」

理沙のアナウンスでヒナ祭り祭りの後夜祭……ヒナギクの誕生会が始まった……

*

プレゼントタイム

【三千院家の場合】

「私とマリアからはコレだ」

ナギはヒナギクに二つのプレゼントを渡した。

中身は高そうな時計と高級な紅茶の葉っぱだった。

「ナギ、ありがとう
大切にするね」

「ふ、フン。どうせすぐに壊してしまうのだ／＼」

「壊さないわよー!!」

……マリアさん、ありがとうございます」

「ええ、是非飲んで下さいね」

すると今後はハヤテがヒナギクに包みを渡す。

「手作りクッキーと、髪留めです。すみません安物で」

「ううん、ありがとう」

おいしくいただくね」

ヒナギクはプレゼントを大切そうに受け取るとそう言って微笑んだ。

2923

【咲夜、伊澄、ワタルの場合】

「会長さん、ウチからはコレや! 『24時間耐久爆笑厳選ネタ1000DVD』これを見たらもう寝れへんで」

「ありがとう。」

24時間耐久って、何だか凄そうね……」

次はワタルがプレゼントを渡した。

「俺からは日本中が涙したあの名作がハリウッド版になった

『H C H I』だ。リヤード・ギアの演技が素晴らしいんだ」

「あのお話は感動的よね……
でも名前出しているのかしら？」

「大丈夫だ。怒られるのは作者だから問題ない」

ワタルの後は伊澄の番だ。

「私からは、安物ですか振袖を……是非着てみて下さい」

「綺麗な振袖……ありがとう」

それは思わず見惚れてしまうほど美しい桃色の振袖だった。

【幸久、真司、長谷川、姫史、雪路の場合】

「桂！俺からは有名な『戦国BASARA』のアニメDVDを贈ろう」

幸久は皆さんもどこかで見たことのあるDVDを差し出した。

「あら、この赤い人……真田君に似てる」

「残念じゃが、それ以上はアウトじゃ、会長」

今後は真司が出てきてその言葉を止めた。

「我からはこれじゃ」

真司がそう言って指を鳴らすと、ヒナギクの目の前に大きな段ボールが現れた。

「澳門家特製の新作醤油1ダースじゃ。右から塩分濃度が高い順に揃えてあるの」

「ありがとう。ちょうど切れそうだったから助かるわ」

続いて姫史がやって来た。

「ちょうど良かった。実は先程のウェイトレスの制服を貰ったので是非とも」

バキッ！！

「絶対に嫌です」

「ぐふっ……承知した」

姫史は倒れた。

薫が仕方ないなと引きずっていった……

「次は俺だな」

「長谷川さん！」

長谷川がヒナギクに渡したのは一冊の本だった。

「これは俺の失敗談をエッセイ風に綴った本だ」

「……長谷川さん。頑張つて下さい……」

逆に励まされていた……

「誕生日おめでとう、ヒナ」

「お姉ちゃん!?!」

続いて来たのは雪路だった。

「はい、誕生日プレゼント」

「ありがとう!!お姉ちゃんからプレゼントなんて……何かな」

ヒナギクは嬉しそうに包みをあけると……

『肩叩き券 有効期限』

と書かれた紙が数枚束になっていた。

「……………?」

「肩叩きなら任せて!得意だから!」

【三人娘と歩、千桜、愛歌の場合】

「私達からは……ズバリ、ヒナが補習を担当したくていいように、私達が補習をサボってあげよう!!」

「ちゃんと出なさい!!」

「ヒナさん!!」

三人娘の後ろから歩がやって来た。

「歩！ありがとう、来てくれたの!？」

「うん、勿論だよ。」

それで……ハイ」

歩が渡したのは薄い水色のカーディガンだった。

「安物だけど、気に入ってくれるかな、かな」

「勿論

ありがとう、大切にするね？」

ヒナギクはとても嬉しそうに微笑んだ。

そして続いては千桜と愛歌。

「ヒナ、誕生日おめでとう」

「おめでとう」

「二人ともありがとう」

千桜が渡したのは、オススメの本新品三冊だった。因みにライトノベルとかでは無い普通の本である。一方愛歌は…

「はい、コレ。さっき撮ったウエイトレス姿の写真？」

「わああアア！！！！／／／」

慌ててソレを隠した……

【万事屋＋桂、エリザベスの場合】

「私達五人で作った、コレをプレゼントするネ！！」

神楽が何かを引いてヒナギクの所まで来た。

布がかかっているが直径2m程の長さがある。

「これは……」

『じゃんじゃじゃーん！！』

エリザベスが布を引くと、そこから出てきたのは……

「超特大バースデーケーキ！！」
『定春45号ネ！！』」

定春の顔の形をした、特大ケーキが現れた。

「凄い……」

ヒナギクは勿論、周りも驚いてそのケーキを見ている。

しかしその驚きを沈黙と勘違いしたのか、銀時が口を開いた。

「ホラ見る、やっぱりケーキなんてベタなんだよ」

「銀ちゃんの家『特大宇治銀時丼』よりは遥かにマシネ」

「いや、俺の案である『特大んまい棒』の方が良かったろ」

三人は口々に自分の意見を言い始めた。
新八は呆れて止めようとするが、

「ちょっと三人とも、今はー」

「『黙れダメガネ』」

「何でそこだけ息ピッタリなんだよ！？」

するとヒナギクが五人に向かってニッコリと微笑んだ。

「とても美味しそうなケーキ、どうもありがとう」

「どういたしましてアル」

「ま、気に入ったならいいか」

「ふむ。それが一番だな」

三人は各々納得したように頷いた。

「それじゃ、続いてお食事タイム！」

お食事タイム

講堂には美希が用意させた高級料理がズラリと並んだ。

「いよつしゃアアアア!!」

「食うぞテメーらアアア!!」

「キャツホオオオオ!!」

「パーティー最高アルウウウ!!」

「飯だアアアア!!」

「ドンペリイイイイ!!」

早速テーブルに飛びかかる銀時と神楽、長谷川、雪路。

「あゝあもう、そんながつつかなくても…?」

苦笑混じりにその後続く新八。何故かその手にはタッパーが…

「まあ、美味しそうな料理…」

「ああ、そ、そうだね／＼」

伊澄の隣で真っ赤になっているワタル。これでは食事も喉を通らない。

「お、お、お嬢様!!」

この料理、全て最高食材が使われてますよ!？」

「料理見ただけでよく分かるなハヤテ？」

「本当ですね」

数々の料理を見ては驚いて声をあげるハヤテとそれを見て呆れているナギとマリア。

「まあ、このステージなら千桜さんのウェイトレス姿のスライドショーに最適ね」

「愛歌さんんん!!何を考えてるんですか!？」

講堂のステージを見てそう呟く愛歌と慌てて尋ねる千桜。

「うわゝ、凄い広いなゝ
凄いなゝ白皇学院」

単純に講堂の広さに驚いている歩。

「オーイ、大丈夫か？」

「我が人生に……一点の年増無し……」

倒れている姫史を仕方なく介抱している薫。

「オイ、真司醤油かけ過ぎた」

「黙つとれ。これが一番じゃ」

大量の醤油をかける真司を見て吐き気を訴える幸久。

「エリザベス、今日は好きに食べて良いぞ。武士とはいえ、はしや
ぐ時も必要だ」

『モグモグ……』

「つーか、エリザベス明らかに食べ方おかしいやろ」

桂の隣ではエリザベスは料理を盛った皿を丸ごと口に入れてカシヤ

カシャと音を立てている。

咲夜は呆れたようにエリザベスを見ている。

そんな感じで講堂はもう大騒ぎである。

「天パアアアアア！！それは私のエビフライアル！！
返せエエエエエエ！！！！」

「ぐぼおっ！？」

どこもかしこもどんちゃん騒ぎ。そんな様子を見渡すヒナギクと三人娘。

「こんなパーティーもたまには良いだろ？」

「ええ、三人ともありがとう」

ヒナギクに礼を言われると三人は少し照れたように笑うと、

「じゃあ私達もいくかー！！」

「「おー！！」」

騒ぎの中心に走って行った。

「……………」

ヒナギクは微笑ましそくに三人の後ろ姿を見送ると、
皆を一人一人見つめる。

(……………)

天井を見上げると、目を閉じる。

(こうやって皆の笑顔に囲まれて、笑っていられる事って……
本当に、素晴らしい事なんだよね……………)

そしてゆっくり目を開けると、
ヒナギクも銀時達の所に歩いていった。

「ちょっと、騒ぎ過ぎて怪我しないようにね！」

皆……………本当にありがとう
これからもよろしくね

第八十六訓 大切なのは立場より気持ち（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「いや、長かったな今回の長編」

新八

「因みに、このヒナ祭り篇のラストに組み込む筈だった話を、別に今度本編でやるらしいですよ」

神楽

「短編だから二話くらいで終わるけどとても重要な話らしいアル」

銀八

「因みにこの長編が終わったら、次は新八、オメーの中編があるらしいぞ？」

新八

「ま、マジですか!？」

神楽

「ちょっと待つネ!!何で私じゃないアルか!？」

銀八

「たまには新八を活躍させようっていうアレらしいよ。ま、簡単に言つと気晴らしだ」

新八

「僕は気晴らしでしか使われないんですか!？」

銀八

「んじゃ、最初の質問『銀さんに質問。ロアルにいくら請求するつもりだったの?』」

つもりだったのじゃねえ。

これから請求するつもりです!」

神楽

「うおおおお!0がいつぱいアルな!! 沢山酢昆布買えるヨ」

新八

「いやいや、これは元の世界に戻った時の為に貯金しないと」

銀八

「いやいや、ほんの少しは台に消えても……」

神楽・新八

「させるかアアアア!」

銀八

「次だ次々『ヒナギクに質問。ハヤテとの決着はどうつけるつもり

?』」

ヒナギク

「そうね……なんなら今ここで着けましょうか?」

ハヤテ

「いやいや?もう呪いは解けたので勝負は……」

手紙を知らない

ヒナギク

「アナタが良くても……私の気がおさまらないのよ！……！」

手紙を見た

ハヤテ

「わああアアアア！？ちよつと本気でー」

銀八

「教室で暴れんなよ」

続いている質問『咲夜に質問。前々回の後書きで気になったんだけど
ツラの事は気になるの？』

咲夜

「な、んな訳あるかアアアアア！！」

スパン！

銀八

「何で俺！？」

咲夜

「アレは……その、ちよつと不意打ちを受けただけや！！／／／
あんな腐れ電波なんて微塵も……」

銀八

「何言ってるのオメー。」

不意打ちっつー事は要するに本心が現ー」

спан！

咲夜

「不意打ちは不意打ちや！！／／
大体何でウチが小太郎を……」

桂

「ん？呼んだか咲夜殿」

咲夜

「お前は出てくんなアアアア！！」

桂

「ぐおう！？」

ズサアアアア……

銀八

「だ〜か〜ら〜暴れんなテメーらアアア！！」

質問だ質問『ヒナギクに質問。銀さんのカツコイイと思う所は？』

ヒナギク

「特になしで」

銀八

「止めてくんない！？ソレ一番傷つくから！！銀さんガラスのハートだからね！？」

ヒナギク

「次回もよろしくお願いします」

銀八

「おiiiiiiiiiii!」

特別訓 世の中持ちつ持たれつ（前書き）

伽藍

「今回から少しコラボ編です！
予告した通り、闇夜の黒烏さんの小説『黒と白の物語』とのコラボ
です。
これは昨年から企画していたもので、ようやく出来る事が出来まし
た」

クラウドス

「今回のコラボは作者と闇夜の黒烏さんが協力して考えたものです。
ストーリーは闇夜さんの意見等を参考に作者が考えました」

ハヤテ

「闇夜さんが執筆する本編である『黒と白の物語』はとても面白い
オリジナル作品ですので、是非読んでみて下さい！！」

伽藍

「では銀ごと×黒白です！
始まります！！」

特別訓 世の中持ちつつ持たれつ

パラレルワールド……

それは自分達が住んでいる世界とは異なった次元に存在する世界……

平行世界と訳せるように、その世界同士は絶対に交わる事が無い。

しかし、普段は決して交わる事の無い世界同士が何らかの拍子に例外的に繋がる場合がある。

これは、そんな例外の物語……

くとある世界く

薄暗い空間では、六人の子供達と大きなモノが対峙している。

????

「追い詰めたぞー!!」

????

「ぬう!!まだじゃー!!」

???

「きゃっ!?!」

???

「美優!?!」

???

「美優ちゃん!?!」

大きな化物が一人の少女を人質にとった。

???

「っ!?!」

???

「優也!?!」

???

「無茶するな!?!」

優也と呼ばれた少年が長い刀身の刀を振りかざしてモノに向かっていく。

その後を慌てて追う二人の少年と少女。

???

「くそっ、優也達は俺達が連れ戻す。薫達は後方援護を頼む」

薫?

「ええ!分かった」

優也と呼ばれた少年を追う二人のうち、一人の少年が後ろにいた三人の少年少女にそう叫んだ。

一方優也？は大きな化物の目の前まで来ていた。彼の周りから黒いオーラが覆っている……

優也？

「美優を放せ」

美優？

「優也！！」

???

「ぬう、流石は火渡。」

ここまで磨を追い込むとは……」

優也？

「早く美優を放せ！！」

???

「こうなれば……最後の手段を！！」

優也？

「!?!」

化物の身体が光始める……

すると、同時に後ろから優也？を追って二人の少年少女がやって来た。

???

「優也！！大丈夫、って何だこの光！？」

優也

「進、優花！？何でー」

???

「うぬら、余所見をされていていいのかえ？」

化物の身体の光はあつという間に優也？達を包み込んだ。

優也

「ぐっ……！！」

何をするつもりだ！？」

進？

「うお……！！」

ま、眩しい……」

優花？

「目が……！！」

???

「デイメンション・ゲート！！」

これでうぬらをまとめて異次元に飛ばしてくれるわア！！」

そして次の瞬間……

化物と優也？達の姿は跡形も無くその場から消え去った。

特別訓 世の中持ちつ持たれつ

く三千院家 ハヤテの部屋く

「ふう、さて少し暇になったな……どうしようか」

綾崎ハヤテは自室で朝の仕事も昼の支度も終わって少し暇を持て余してベットに腰掛けていた。

「銀さん達の所でも行こうかな……うん」

ハヤテは暫く考えた後、そうしようと言くと、ベットから立ち上が

「きゃっ……」

「わあっ！！」

「へ？」

ハヤテの目の前に何かが落ちてきた。ハヤテは暫し呆然としていたが、慌てて下を見ると……

「痛たたた……」

「うーん……」

二人の少女が床に倒れている。
ハヤテには意味が分からない。

「……いやいや、え？」

「いやいやいや……ええ！？」

「へ？」

「あれ？」

二人の少女達もその声に急いで顔を上げる。

「……」

暫し見つめ合う三人……

「だ、誰ですかアナタ達はアアアアア！！？」

「わあアアアアア！！？」

ハヤテは大声を上げて飛び退き、二人も悲鳴？を上げて後ずさった。

二人の少女は共に同じ年くらいか……片方は黒髪でセミロングの長さに瞳が淡い藍色の所謂美少女というやつだ。服装は黒のニーソックスに、ピンクのミニスカート。白と黒のチェックの長袖に、茶色のカーディガン、その上に白いジャケットを着ている。髪には白いリボンを結んでいた。

もう片方の少女は腰まである長い綺麗な黒髪に整った顔付きで紅い瞳をしたこちらにも美少女というにふさわしい。

服装は白いロングスカート。黒い長袖に、茶色の短めのコート。首にはネックレスをしていた。

ハヤテはいきなり現れた二人の美少女の様子を恐る恐る窺う。二人もハヤテを見て驚きながら様子を窺っている。

ガチャ……!!

「どうしたのだ!？」

「誘拐アルか!？」

「ハヤテ君!?!今悲鳴のようなものが聞こえー」

突然ハヤテの部屋の扉が開いて、ナギと神楽、マリアが飛び込んできた。しかし、二人は目の前の光景を見て、ピタリと動きを止める……

「あ、お嬢様!!!神楽さん!!マリアさん!!
実は……」

「……………ハヤテ？
何なのだその女達は……………」

「え？」

ナギは後ろから怒りのオーラを放ちハヤテを睨む。

それもその筈、この状況はハヤテが連れ込んだとしか見えないからだ。しかも二人とも美少女というから尚更……………」

「……………ハヤテ。まさかお前がそんな奴だとは思わなかったアル」

「え、いやいや!？」

違いますよ神楽さん! !この人達が勝手に僕の部屋に! !」

バコツ! !ドカツ! !」

「うつさい! !ハヤテのバーカバーカ! !」

「痛! ?お、お嬢様! ?」

ハヤテが事情を説明しようとするが、ナギが部屋にあった様々な物をハヤテに投げつけた。

「フンだ! もうお前など知らん! !行くぞ神楽! !」

「あ、ちよつとお嬢様! ?」

ハヤテが呼び止めようとするもナギは大股で部屋から出ていった。

「最低アルな、女の敵ネ。
暫く私に話しかけないで」

「神楽さん！！誤解です誤解！！」

ナギの後に続いて神楽もハヤテを一瞥すると、部屋を出ていった。

「……………」

「あの、ハヤテ君？

何があったのか教えていただけませんか？」

マリアはナギの相手は神楽に任せようと考えたのだろう、ハヤテと二人の美少女に顔を向けて尋ねた。

「いや……………僕も何が何だか。

というか、アナタ達は誰ですか？」

「……………」

ハヤテは困ったように言葉を濁すして二人の美少女に顔を向けると、二人はお互い顔を見合わせた…

〔万事屋〕

ガラ……

「つーかよオ、何で俺らが朝早くから伊澄まいじの搜索をしなくちゃいけねーんだよ。執事達沢山いんだろ？」

「良いじゃないですか、今回も報酬結構貰えましたし。それにもうお昼ですから、全然朝早く無いですからね」

万事屋の玄関から入って来たのはダルそうに頭を掻く銀時と苦笑混じりの新八だった。

どうやら彼らは迷子になった伊澄を探すという依頼をこなしていたらしい。

しかも今回が初めてでは無いようだ……

「それに何だかんだいって一番最初に銀さんが伊澄ちゃんを見つけてるじゃないですか。

だから執事の方々も頼むんじゃないですか？」

「人を迷子探知機みたいに言うんじゃないよ。」

大体お前、今回アイツ海を越えようとしてたからね？
豪華客船で国外逃亡を謀る寸前だからね？
何で家まで歩いて10分の距離から家に帰れねーんだよ」

「ハハハ……遂に国を？」

新八は銀時の話を聞いて顔をひきつらせると、居間の引き戸を開けた。

「……………」

「……………」

すると床に二人の男女が座ってこちらを眺めていた。

「あ、どうも……………」

「……………」

新八は一応会釈すると、二人も慌てて会釈を返した。

「ん？どした新八」

後ろから新八に続いて銀時が入ってきた。

「あん？あ、どうも」

「……………」

銀時は二人の少年少女に気付いて会釈すると、二人はまた慌てて会

釈を返した。

取り敢えず銀時と新八は居間に入ると、ソファに腰掛けて向かい合う。

「……銀さん、あの子達誰ですか？」

「あん？アレだよ…友達だろ？」

「え？銀さんの？」

「いやいや、俺は知らねーよ。

神楽のだろ？」

「あ、なるほど」

銀時の言葉に新八はそっぴやそっぴかと納得して頷いた。

「悪いな坊主共。今^{アイツ}神楽屋敷行ってるみてえだから、多分暫くしたら帰ってくると思っぞ」

「あ、お茶いれるね」

新八は立ち上がって、台所のほうに歩いていった。

暫くしておぼんにお茶の入ったコップを乗せて戻ってきた。

「あ、いいよ座って座って」

「あ、すみません」
「ありがとう」

新八がソファに促すと、二人は申し訳なさそうに礼を言うと、二人並んで座った。

新八は二人の前にコップを置くと、銀時の隣に座って二人に向かい合う。

二人の少年少女はおずおずとお茶を口に運んだ。

少女の方は紙が肩まで届くか届かないかの長さの黒髪に紅い瞳、整った顔でかなりの美少女だ。

服装は藍色のジーンズ黒い長袖、その上に黒いシャツ、黒のロングコート着ている。

一方少年の方は黒髪に黒い瞳と至って普通の容姿である。

服装も茶色のジーンズ、青いシャツを着て、その上から黒いダウンジャケットと、特に目立つものは無い。

新八は何故かこの少年に親近感を覚えた。

「……あの、少し聞きたい事があるんですが……」

「「？」」

少年の方が銀時達に遠慮がちにだが切り出した。

「「じいじは……どこですか？」」

「「……は？」」

＊

〈屋敷　ハヤテの部屋〉

室内ではハヤテとマリア、二人の少女が向かい合っている。

「……えっと、つまりお二人は気が付いたらここにいたと？」

「はい。あ、私は神道美優しんどう みゆです。中学二年生」

「私は天道優花てんどう ゆうかです。突然すみません」

二人の少女、美優と優花はそう言って頭を下げた。

「……………ハヤテ君、どういふ事ですか？」

「いや……………僕もさっぱり。」

ただ部屋を出ようとしたら、お二人が落ちてきたんです」

「ハヤテ君が連れ込んだのでは無くて」

「だから違いますって!!」

マリアはまだハヤテが連れ込んだ女の子達だと思っていたようだ。

ハヤテ達は美優達から『気付いたらこの部屋にいた』とだけしか聞いていない。

なのでマリアが信じられないのも最もな話なのだが。

しかしハヤテは実際に二人が落下してきた所を目撃している。

よって彼女らの話は少なくとも嘘では無い事は分かる。

「まあ、よく事情はわかりませんが……こつという話は銀さん達に頼むのが良いと思いますわ」

「そうですね。では僕は取り敢えずー」

「それと、ハヤテ君も一緒に銀さん達を手伝ってあげて下さい」

マリアはハヤテの言葉を遮ってそう付け加えた。

「え?でも僕はー」

「ナギはあんな調子ですから暫く大丈夫ですよ。神楽さんもいますし。それに……」

マリアはナギ達の方に目を向けると、今度は少し声のトーンを落として言った。

「これはハヤテ君が起こした問題ですから……自分で解決した方が
良いと思いますので／＼／」

「いやいやいや!？」

「ちょっと待って下さい! !僕は全く関係無いですって! !」

「それでは……私はこれで／＼／」

「マリアさん!？」

マリアは一礼すると、サッと部屋から出ていった……

「あの……」

「え?」

何て事だと額を押さえていたハヤテに優花がおずおずと声をかける。

「もしかしたら私達……別の場所から飛ばされたかもしれないんで
す」

「……………へ?」

「それで私達と同じくらいの男の子を見ませんでしたか!？」

「……………」

ハヤテは文字通り目が点になって二人を見つめる。

「…………取り敢えず、一緒に来て下さい？
僕は綾崎ハヤテと言います」

*

〈万事屋〉

「「…………は？」」

銀時達は二人の質問におうむ返しのように声をあげた。

「えっと…………何て言ったらいいの…………僕達、気付いたらここにいたんです」

少年の方が少女を見ながら自信無さげに言った。

「気付いたらここについて…………
じゃあその前は何処にいたの？」

「えっと…………？」

少年は躊躇いがちに少女を見ると、今度は少女が口を開いた。

「ここでは無い場所だ。」

俺達は気が付いたら見た事の無い別の場所にいたんだ……」

「俺達？え……オメー女じゃ無いの？」

銀時は驚いたように少女を見る。すると少女？は心外だとばかりに身を乗り出す。

「男だ！真正正銘の男！！」

……俺は火渡優也ひわたり ゆうやって言う」

何と銀時達が少女だと思っていたのは少年だったようだ。しかし整った美しい容姿と綺麗な黒髪は女と勘違いしてしまう程美しいものだった。

「はあ……女にしか見えなかったけどな」

「本当ですね……」

驚いている二人の横からもう一人の少年が口を開く。

「俺は水野進みずのすすむって言います。突然すみません、別の場所からきたなんて事を……」

「ああ……」

進はいきなり訳の分からない話をし出した事を詫びるが、銀時達も

異世界からきた人物である。
なので、そんな事あり得ないとは言えなかった。

「えつくと、優也に進だっけか？オメーらはアレか？
この世界の人間なのか？」

「「え？」」

「あゝ、気付いたらこの場所にいたんだろ？だから簡単に言やオメーらは別世界から来たんじゃないかねーのか？」

あつさりとそう言つてのける銀時に優也も進も啞然としている。
こんなに簡単に信じて貰えるどころか、更に二人が考えていた可能性までも言い当ててしまったからだ。

「えつと……別世界かどうかはまだ分からないけど、別の場所に飛ばされた事は確かだ」

「そつなんですか……」

優也が万事屋の室内をキョロキョロと見回しながら言つと……

ガラ……

「銀さーん！！ちよつと良いですか？」

「「？」」

万事屋に声が響いたかと思うと、居間の引き戸が開いた。そこにはハヤテと少女が二人…

「ん？ハヤテじゃねー」

「美優！優花！！！」

「二人ともいたのか！！！」

銀時が喋り終わる前に、優也と進がハヤテが引き連れた美優と優花に駆け寄っていった。

二人も驚いてだが嬉しそうに顔をほころばせる。

「優也！！進！！！」

「良かった……二人とも無事だったんだね」

四人はお互いに旧知が再会したように喜び合う。

「あの〜、取り込み中悪いんだけど……」

「……あ……」

新八がその声をかけると、四人は気付いたように振り返った。今度はハヤテが口を開く。

「取り敢えず僕達は、何が何だか分からないので、ちゃんと説明し
てくれませんか？」

「……」

優也達は互いに顔を見合わせて困ったような表情をする。

「あの、取り敢えず座って。
今お茶用意するから」

新八は取り敢えず、四人をソファに促すと台所に歩いていった。

優也達はすみませんと四人一列にソファに座り、ハヤテはそれに向かい合うように反対側のソファ、銀時の隣に座った。

「……………はい、どうぞ」

「、、、、ありがとうございます」

新八はすぐに台所からお茶を持ってくると、美優と優花の前にもコップを置いた。

「んじゃ、取り敢えず洗いざらい話してくれや」

「僕達、大抵の事には驚きませんから」

「……………信じられない話かもしれないが……」

ハヤテはそう言ってニッコリ笑うと、代表して優也がゆっくりと口を開き始めた。

その内容は一般人にとっては信じられない話ばかりだった。

まず優也達が住んでいる世界には様々な種族がいるという。
人間は勿論、妖怪、死神、悪魔、その他諸々……

そして彼らは人間に害を及ぼす妖怪や死神達を倒しているのだという。こんなに小さい13歳の少年少女がである。

そして今回、ある妖怪と戦っている時に、その妖怪の技で四人は別次元に飛ばされてしまったというのだ。

そして気が付いたらここに居たと……

「……………これが、大まかな説明だ。その反応を見ると、やっぱりここは別世界みたいだな……………」

「……………」

新八もハヤテも驚いて優也達を見つめていた。

「何というか……………凄い世界だね？死神に悪魔なんて……………」

「でも優也君達は……………一体どうやってそんな奴らを倒しているんですか？」

優也はコートの後ろからいきなり刀身が黒い日本刀を取り出した。

「……………!?……………」

「これが一番手っ取り早い証明かな」

すると、日本刀に紅い炎が僅か伝った。

「これって……」

「炎？」

新八とハヤテが驚いてその刀身に目を向けると、優也は頷いた。

「俺は特殊な身体で、こっやって炎を操る力があるんだ。

こっやってさ……」

すると今度は刀身に先程より大きい炎がまとった。

「………凄い」

新八とハヤテは思わず身を乗り出していた。

こんなものを見せつけられては信じざるを得ないだろう。

「それで、その………優也さん達はどうすれば元の世界に戻るか分かってるんですか？」

「多分、私達を飛ばした妖怪もこっちの世界に飛ばされていると思うんです。アレは自爆技みたいなものだから」

ハヤテが一番重要な疑問を口にする、優花が分析するように答え

た。

「え！？妖怪が……!？」

この世界に来てるんですか!？」

「多分」

さりげなく優花は言うが、新八達にしてみればかなり驚く事実である。

「その妖怪を倒せば俺達の世界に帰れるんだと思う」

「倒すって……そもそも一体どんな妖怪なんですか？」

優也が自分の拳を握りしめてそう呟くが、ハヤテはまだ驚いているようで、妖怪について尋ねる。

「簡単に言えば……普段は赤いイタチの姿をしてるんだ。」

「「イタチ？」」

「そう。それで、いざって時に何十倍も大きくなった醜い化物になる、そんな妖怪なんだ。」

それに胸には変な鏡がついていて、俺達はそれの効果飛ばされた……」

優也の言葉に何故か美優が俯いてしまった。

「ごめん優也。私のせいで……」

「気にするな、美優のせいじゃ無い」

少し気まずい雰囲気になったので新八が慌てて口を開く。

「だ、だったらそのイタチを捕まえればいいんだね？」

「そうだと思う。」

その妖怪は俺達と戦ってる時にパワーを使い果たしたから暫くはイタチの姿のまま筈……」

要するに今のウチに捕まえられれば万事解決という事である。

ここでようやく状況が整理出来た新八達は机に頬杖をついていた銀時に顔を向けた。

「銀さん……どうします？」

「……あア？」

何かなア……やる気がよオ。

「つか悪と戦う少年達とかどこのジャンプ漫画だよ」

銀時は新八達とは違って面倒臭そうに欠伸をすると続ける。

「大体坊主共、金は持ってんのか？ウチは超一流の万事屋だから値は張るぜ？」

「ちよつと銀さん？」

困ってるんですから協力してあげましょうよ……！！」

「何言ってるんだオメー……」

人にモノ頼む時は出すもの出して貰わねえと。それが社会の厳しさだろーが。

ガキだからって甘やかしてたら、そういうルールを知らねえまま大

人になつていくんだよ……」

「「……………?」「」

物凄いダルそうに言う銀時に呆れて物も言えない新八とハヤテ。

ガキだからって甘やかしてたら、そういうルールを知らねえまま大人になつていくんだよ……」

「「……………?」「」

物凄いダルそうに言う銀時に呆れて物も言えない新八とハヤテ。

「えっと、進は実は大金持ちなんだよ」

キラーン！

美優の言葉に一瞬銀時の目が怪しく光る。

（ちよつ、何言つてんだよ!!）

ウチは全然普通の家だぞ!??）

（大丈夫大丈夫!!）

何とかなるから……………）

進は慌てて美優を見るが、美優は笑って済ました。

「本当にかア？

この地味なガキが？」

「えつと……ハイ？」

銀時は進をマジマジと見るが、進は美優から大丈夫と視線を送られ何とか頷いた。

「ま、なら仕方ねえか。」

「しっかり頼むぜ、ジミー」

「ジミー！？それはもしかして地味からきてるんですか！？」

「そついや挨拶がまだだったな」

突っ込む進をスルーして、銀時は一同を見回した。

「俺ア坂田銀時ってんだ。」

「この万事屋銀ちゃんのオーナーだ」

「「万事屋？」」

聞き慣れない言葉に首を傾げる優也達。

「まあ頼まれば何でもする何でも屋みたいなものだね。」

そして僕は従業員の志村新八」

「僕は隣のお屋敷で執事をやっている綾崎ハヤテです」

新八とハヤテもそれぞれ挨拶していく。

すると今度は優也達が挨拶をする。

「俺は火渡優也。よろしく、銀さん、新八、ハヤテ」

「私は神道美優です。」

よろしくお願いします銀さん、新八君、ハヤテ君」

「天道優花です。」

よろしくお願いしますね

銀時さん、新八さん、ハヤテさん」

「俺は水野Sー」

「よし、んじゃ行くか」

「オイイイイイイ！！！！」

進が挨拶しようとした時、銀時が立ち上がってそのまま玄関に向かっていった。

「良いんだよ、オメーは今日から地味野だ」

「何ですかそれ！？そのとってつけたような名前！？しかもさっきと違うし！！！」

「ジミーだと歩と被^あんだろつが。空気読め地味野」

「いや知らねーし！！あいつって誰ですか！？」

しかし銀時はそのまま居間から出ていってしまっ。

「まあ良いじゃないか地味野」

悪ノリ

「うんうん。先に急ごう地味野君」

悪ノリ

「お前らなあ……………」

美優と優花は面白そうに進の肩に手を置くと、居間を出ていく。

「とにかく協力して貰えるようで良かったな、行くぞ地味野」

「お前まで乗んなくていいから!!」

真面目に言う優也と苦笑いするハヤテも居間から出ていった。

「……………進君、分かるよ。」

辛いよね、地味キヤラは……………」

「し、新八さん!!」

ガシッ!!

言葉にしなくても通じ合うモノがある。

二人には奇妙な絆が芽生えた!

*

〈屋敷〉

「まあ、そうだったんですか……四人はペット探しを……」

取り敢えず銀時達は屋敷のリビングにいた。
マリアには本当の事を伏せて、赤いイタチを探して来た依頼人達だ
という事にしておいたのだ。

「んで悪いんだが、三千院家の協力も少し頼めねーか？
報酬が……いや、健気な子供達の想いが詰まっているからよオ」

「ええ、わかりました。」

なるべく協力を呼びかけてみますね」

マリアはニッコリと笑ってそう答えた。

「そういえば、ナギちゃんはどうしたんですか？」

「あ………？」

ちよっとご機嫌斜めのように……」

キヨロキヨロと辺りを見回す新人にマリアは苦笑すると言葉を濁す。どうやら機嫌は直っておらず、神楽と部屋に籠ったままのようだ。

「と・こ・ろ・で……優也君だったかしら」

「……へ？」

マリアは視線を優也に移すと、興味深かそうに見つめた。

「ちょっと、良いですか？」

「え、何が……」

優也が何かと聞く前に、マリアが何処からクローゼットを出してきた。

ガバツ！

「ちょっと、このメイド服を着ていただけませんか？
絶対似合っと思いますわ」

「……はー？」

「少しだけ……ね？」

「……え、えっと」

ニコニコ顔で期待するようにつめるマリア。

その輝かしい笑顔に嫌だと言いたくても言えない優也。

「ダメですよ！マリアさん！！」

「美優……」

すると隣にいた美優が優也を庇うように前に出る。

優也は彼女の行動に驚きながらも、感謝を―

「優也には、このフリフリのドレスが似合っに決まっているじゃないですか」

「やっぱりかアアア！！！！」

美優がクローゼットに飛び付いた途端、優也の叫びが響く。

女子二人はまるで同級生のように嬉しそうに衣装を選んでいると、今度は優花が前に出てきた。

「ダメだよ！優也が嫌がってるじゃない」

「優花……お前……」

優也は感動した視線を送く―

「やっぱり優也はネコミミだよ、ね、優也？」

「……………」

くるりと振り返って満面の笑みでそう言う優花に無言で崩れ落ちる。優也はある意味最強と化した三人に成す術無く、引き込まれていった……

「優也……お前の死は無駄にはしないぞ」

その様子を見送る進。

「銀さん、何で女性って会って数分なのにあんなに共鳴できるんですかね……」

「知らね……」

男性にとっておぞましい光景に青ざめて言う新八の隣で、銀時は興味無さそうに頭を掻いた。

「さ、ハヤテ君も一緒に？」

「つて、えエエエエ!？」

「何ですか!？僕はあのー」

ハヤテは必死で抵抗しようと言葉を探すが……

「ハヤテさんにはこのピンクのスカートが似合ますね」

「いや優花、ハヤテ君にはこの黒いスカートの方が良いって」

全く聞いていない女性陣。

そのままハヤテの引き込まれてしまっていた……

そして……

「「わアアアアアア！！！／＼／＼」」

屋敷には無惨な悲鳴が響き渡ったという。

こうして、万事屋と異世界の少年少女達の幸先が悪すぎるイタチ探しが始まったのだ……

特別訓 世の中持ちつ持たれつ（後書き）

〽お誕生日 番外編〽

伽藍

「前回ヒナギクの誕生日という訳で、読者の皆様から沢山プレゼントをいただきました！」

・ルシフェル様

【ヴィンのバック】

ヒナギク

「こんな高価なもの……」

ありがとうございます、ルシフェルさん
ところで……写真って何の事ですか（黒）

伽藍

「は、ハイ……次〽」

エターナルさんの小説

『〽とある侍とサーヴァントと魔法少女〽』

・坂田銀時様

【特製ケーキ】

ヒナギク

「ありがとうございます。美味しく頂きますね」

・遠坂凜様

【宝石】

ヒナギク

「ありがとうございます。
大切にしますね」

・御坂美琴様

【金色のゲコ太ストラップ】

ヒナギク

「可愛いストラップありがとうございます。大切にしますね」

・ギルガメッシュ様

【真剣】

ヒナギク

「あ、ありがとうございます？
出来れば使い時が無い事を祈るわ……」

・エターナル様

【ネコミミとメイド服】

ヒナギク

「着るかアアアアア！！／／／」

伽藍

「えっとでは次です？」

・近衛陸様

【銀時特製パフェ】

ヒナギク

「美味しそうですね

ありがとうございます」

伽藍

「これで最後ですね」

デビルマンさんの小説

『けいおん〜恋物語〜』より

・柊裕也様

【イチゴ大福ケーキ】

ヒナギク

「変わってるけどとても美味しそう。ありがとうございますね」

伽藍

「皆様、本当にありがとうございます！」

質問コーナーはコラボ編が終わってからです。

次回もよろしく願います」

特別訓 何事も切り替えが大事（前書き）

伽藍

「今回でいよいよコラボ篇も完結です。

今回の話はギャグも戦闘もイマイチ上手く書けませんでした。

ツッコミ所は多々あると思いますが、

どうか温かい目をお願いします」

クラウド

「闇夜の黒鳥さんの書かれている『黒と白の物語』はこれとは比べものにならないくらい面白いです！作者は下手なので、上手く書けませんでしたが、オリジナルは素晴らしい作品となっておりますので是非読んでみて下さい！」

ハヤテ

「では、始まります！」

特別訓 何事も切り替えが大事

屋敷から響いた二人の悲鳴から30分くらいが経ち……
銀時達は取り敢えず屋敷の外に脱出する事に成功した。

「うわあ、改めて見るととんでもなく大きなお屋敷だね」

「広いなんてもんじゃないよね……」

優花と美優は開いた口が塞がらないとばかりに三千院家を眺めている。

「……………」

その横ではガツクリと肩を落としたハヤテと優也。
二人とも寸での所で男の尊厳を守ろうと心の中で葛藤を繰り広げているのである。

「そっいえばハヤテ君、執事の仕事はいいの？」

「……………あ、ええ。お嬢様があんな調子なのでマリアさんに今日一日暇を貰いましたから」

ぐったりとした様子で答えるハヤテ。

「つー事はオメーは今回神楽の代わりに万事屋のメンバーだな。取り敢えずチャイナ服着ろ」

「着るかアアアアア!!!」

そんな感じで一行は外を歩いてゆく。

先頭に銀時と優也、その後ろに美優と優花、最後尾はハヤテ、新八、進である。

「なあ銀さん、ここはどんな世界なんだ？」

「どんな世界？」

あゝ、そうだなア……」

優也の言葉に銀時は顎に手を当てて考える。

彼らと同じように銀時達もまた、異世界からやって来ているので、答えようが分からないのである。

「まあ、この辺は金持ちが沢山いるな。お屋敷とかも沢山あるし」

「高級住宅街？」

「ま、行きゃ分かんたら」

銀時はそう言って欠伸をすると、目的地の方向に目を向ける。

「銀さん、どこに行くつもりですか？」

すると、最後尾からハヤテの声がかかった。

「あん？アレだよ、人が多くてでかい所」

「ああ、なるほど」

遠くに見える時計塔を指差す銀時に、新八とハヤテは頷いた。

特別訓 何事も切り替えが重要

く 白皇学院正門前く

「うわあー！！」

「何だこゝは……」

「でっかいなー！」

まず最初に、
白皇の門にやって来た銀時達。

優也達は白皇のあまりのやかさに目を見開いていた。

「ここは何なんだ？」

何かの軍事施設とか？」

「いや、学校ですよ？」

「「学校!?!」」

美優と優花は驚いてハヤテを見る。

「ええ、初等科から高等部までが一つになってるんですよ。
基本にお金持ちの方々を通う学院なので、とんでもない施設や敷
地が多々あってこんな大きさになっているんですよね」

「へ〜、凄いな……」

「うちの中学校いくつ分だろうね……」

ハヤテの話を聞いて、また施設を学院に戻す美優と優花。

「ハヤテさんもここに通ってるんですか？」

「ええ、一応。かなり頭の良い学校なので進級すら危ないんですけど?」

ハヤテは思い出したようにハハハと笑えない事実を言ってみせる。

「なるほど。それだけ大きな場所なら目撃情報があるかもしれない
って事ですね」

暫くキョロキョロとしていた進がポンと手を叩くと銀時が頷いた。

「そついう事だ、地味野」

「だから水野ですよ水野！！」

つてかススムで良いじゃないですか！！」

「いや、覚えらんねーからステルスで」

「覚えられないっーか覚える気ないですよね！？」

進は持ち前？のツッコミで銀時に突っ込むが……

「70点」

「何が！？」

簡単にあしらわれてしまった。

そのまま銀時はハヤテに顔を向ける。

「ま、生徒会に行きや白皇の方は何とかしてくれんだろ」

「そうですね。事情を話して協力して貰いましょう」

銀時は軽く頷くと、門に入ろうと足を……

「不審者発見んんん!!」

スパーン!!

「だあ!？」

いきなり銀時の頭が振り下ろされた竹刀で叩かれる。

彼の前にはいつの間にか竹刀を構えた雪路が立っていた。

「桂先生!!」

「アツレー?綾崎君じゃない、それに銀髪君も。こんな所で何やってるのよ?」

「オメーに今叩かれたんだよ俺は……」

銀時は頭を擦りながら頭をゆっくり上げた。

「アツハハハ、ゴメンゴメン?門に大勢いるから不審者かと思っ
てさ。ところで、そんなに大勢で何か用?」

雪路は竹刀を降ろすと、ハヤテ達の周りにいる優也達に気付いて見
回した。

「ええ、ちよつと事情があつて生徒会室に行こうと……」

「もしかして新入生か何か?
それとも白皇（こく）の見学に?」

「えつと……」

優也達は少し困惑顔で雪路を見ると、ハヤテが手を彼女に向けてくれた。

「この人は桂雪路さん。白皇学院の先生です」

「あ、よろしくお願いします」

「どうも」

美優と優花は丁寧に、新八と優也、進は軽く会釈した。

「それで、オメー何でこんな所にいんだ？今日は日曜だろ？」

「いやあ、それがね」

酒飲みまくった為、昨日二日酔いで爆睡しまくってたなら、授業全部すっばかしちゃってさ」

おかげでヒナに大目玉。今日一日働けて、ハハハ」

全く悪びれなくそう言って笑う雪路に一同は呆れを通り越し360度回ってまた呆れていた。

「つー訳で私は見回り続けるから。んじゃね」

雪路はヒラヒラと手を振ってそのまま、白皇の裏門の方に歩いて行ってしまった。

「……ハヤテ、アレ本当に先生なのか？」

「ええ？本当に何でクビにならないのか分からないくらい不思議ですけど……」

優也とハヤテはため息をついて雪路を見送る。

「何か銀さんに似てますね……」

（（確かに……））

新八の些細な呟き声に何となく同意して頷く美優達であった…

*

（生徒会室）

「つー訳なんだ」

「また凄い運び方ね……」

生徒会室、会長専用の机にいるヒナギクの前に銀時達はいた。
途中経過を全てすっ飛ばすという読者に大変不親切な銀時のやり方

に呆れた様子のヒナギク。

「フフ、銀さんらしいですね」

ヒナギクの後ろには愛歌がクスリと微笑んで立っていた。

「ま、まあとにかく大切なペットが逃げて困っているそうなので、協力していただけませんか？」

「ええ、日曜日だからあまり生徒はいないけど、部活の人達とかに聞いてみるわね」

ハヤテが改めて簡単にここに来た意図を説明すると、ヒナギクは任せてとばかりに頷いてみせた。

優也達がありがとうございますと頭を下げると、ヒナギクはニコッと笑って彼らに目を向ける。

「私は桂ヒナギク。」

白皇学院の生徒会長をやっているの。よろしくね」

「私は副会長の霞愛歌ですわ。よろしくお願いしますね」

ヒナギクに続いて愛歌も優也達に微笑んで挨拶した。

「火渡優也です」

「私は神道美優です。ありがとうございます」

「天道優花です。すみません迷惑かけて」

「水野進です」

四人はそれぞれ二人に丁寧に挨拶を返した。

「でも、珍しいですね。赤いイタチなんて可愛いでしょうね（高く売れるかしら？）」

「愛歌さ〜ん？」

「ダブって本音が聞こえてんぞ……」

愛歌の目がSモードになりかけている様子に突っ込むハヤテと銀時。

「あら、でも銀さん。

珍しい動物だったとしても高い額で買い取って下さる方もいらっしやいますよ」

「……………だよなア」

「ちよつと銀さん……」

……………ダメですよ!？」

愛歌の言葉にそついやそつだと納得する銀時にストップをかけようとする新八。

「ああ？大丈夫、分かってら。

ウチは依頼人を優先する一流の万事屋だからな。

ところで優也、その金づるの姿つてのは具体的にどんなのなんだ？」

（（（全然わかってねエエエエエ！！）））

いきなりの金づる発言にズルっと転ける新八達。

ヒナギクは呆れたまま、愛歌は銀時を見て楽しそうクスクスと笑っている。

「そうだな……」

毛が赤いだけのただのイタチだな。あ、でも胸に鏡みたいなものについているんだ」

「「鏡？」」

優也の説明に首を傾げるヒナギクと愛歌。

「オイオイ、何だかますますわけ分かんなくなってきやがったな……」

…」

「えっと、何ていったらいいんだろ……」

優也は視線を宙にさまよわせて言葉を探そうとする。

すると、生徒会室の長テーブルの上にヒョコッと赤いイタチみたいな動物が現れた。

「あ、あんな感じの奴。ほら、ちょうど胸に鏡が……」

……

「……………あ」

「『アレだアアアア！』」

優也と美優達はテーブルに出てきた赤いイタチに向かって叫ぶ。

「オメーら、捕まえるぞ！！」

金のなるイタチだ！」

「いやだから、違っつて言っつてんでしょ！？」

銀時はテーブルに駆け寄っていくが、イタチはするりと床に降りると銀時を抜け、優也の方向に走っていく。

「優也、行つたぞ！！」

「ああ！！」

優也はイタチに手を伸ばすが素早く逃げる。

「美優、そつちだ！！」

「へ！？わわ！！」

美優は慌ててイタチに目を向けようとすも、イタチは美優を抜けて走っていく。

「優花！！お願い！！」

「うん！任せて……………、わ！？」

優花はイタチを掴んだかと思ったが、簡単にイタチはそれから逃れ進の方に飛び上がった。

「進！！キャッチキャッチ！！」

「お、おう！」

飛んできたイタチに向かって進は手を広げるが……

ゲシッ！！

「ぐっ！？」

思いきり顔面を足で踏まれ逃してしまった。

そのままイタチは新八とハヤテの足元をスルスルと抜けて、再び長テーブルの方向に駆けていく。

「くそっ！！逃がすか大金！！」

ここからはイタチと銀時の一対一。素早く動き回るイタチに仕切りに手を伸ばす銀時。

イタチは更に速度を上げると、生徒会室の扉の方に走っていくが、

「甘いわア！！」

ガシッ！！

扉の前で銀時に思いきり掴まれてしまった。

「馬鹿め、動物風情が俺から逃げられるとでも思ったのかア？」

主人公にあるまじき歪んだ笑みを浮かべてジタバタと暴れるイタチを見下ろす銀時。

その姿はさながら動物虐待をしているようにしか見えない。

（（（うわぁ……………）））

当然ヒナギク達も呆れたようにその絵面を眺めている。

愛歌は何を考えているのか分からないがニコニコと微笑んでいた。

ガブッ！！

「ーっ！？」

イタチは渾身の力で銀時の手を噛むと、扉の方にジャンプする。

「あゝ！！待ちやがー」

ガチャ…

銀時が手を伸ばしたのと同時に生徒会室の扉が開いた。

ムニユ…

そして銀時の手は何かを掴む。

「……………アレ？」

ムニユ……………

彼の手には先程のイタチとは違う柔らかな感触……………
嫌な予感がした銀時はそくと顔を上げると……………

「……………//」

「……………」

目の前には真っ赤な顔をした千桜が立っていた。
そして何故か銀時の右手は彼女の胸を掴んでいる……………

ムニユムニユ……………

「ハ、これは……………」

もう一度感触を確かめると、ようやく事態を大体把握して一気に青

ぞめる銀時。

逆に千桜の顔は更に赤らんでいく……

「な……な……／／／」

ワナワナと肩を震わせる千桜。

「……………はっ!!」

「何しとんじゃオノレはアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」
／／」

ドオオオオオオオオオ!!!!

「ぎゃあアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

*

〈商店街〉

「……………」

結局イタチは見失い、
時計塔から白皇の敷地外に逃げたとの目撃証言を便りに、商店街の
方にやって来た銀時達だったが…

「あの、大丈夫か？銀さん」

「あん？大丈夫に見えんなら眼科に行った方が良い……………つーか何処
だ優也？」

銀時の顔は見せられない程酷いためモザイクがかかっており、優也
がいる場所が見えないのか左右に首を振っていた。

「まあ仕方ないですよ……………事故ですから」

「良いよね…胸がある人はそうやって言えて……………」

美優が励まそうとさういうと、優花が落ち込んでしまった。
なぜなら、美優は胸が大きいのが優花はその逆に小さいのである。

「銀さん？とにかく今はイタチ探しに集中しましょう」

「そうそう!」

新八と進の地味コンビは普通のやり方で普通に励ました。

「誰が地味コンビだ!!」

「誰に突っ込んでるんですか」

そんなやりとりをしていると、前方から見知った顔が歩いてきた。

「あ、ハヤテ君!それに新八君!銀さん!」

「あ、西沢さん!こんにちは」

「久しぶり、西沢さん」

何故か焼き芋の袋を片手に歩いてきたのは、歩であった。
ハヤテと新八は挨拶を返す。

「よオ、久しぶりだなジミー」

「ジミーじゃ無くて西沢ですよ!!西沢歩!!」

「いや、覚えらんねーから地味沢で」

「覚えられないっていうか、覚える気ないですよね…」

銀時と歩のそんなやりとりを見て、進はさっきの自分と同じだと思
った。

「ところで、そちらの方達は？」

「ああ、ウチの依頼人な。

えっと左から優也、美優、優花、……………何だっけ」

「アンタ俺で落とさないと気が済まないんですか！？
水野進ですよ！」

「ああそつだ。進だ進」

「…………え、ちょっと。今マジで忘れてませんでした？」

ポンと手を打つ銀時に進は一抹の不安を覚えた。

「んで、コイツがジミーこと西沢歩だ」

「だからジミーじゃ無いから!!」

よろしくお願いしますとお互いに挨拶する歩と優也達。

「……………」
「……………」

しかし進と歩は暫く互いを見つめ合つと…………

ガシッ!!

「「お互い頑張りましょう(ろっね)」」

何故か力強く握手を交わした。

ここにまた、奇妙な絆が生まれたのだった。

「それである西沢さん、ちょっと尋ねたい事があるんですが……」

「ん？」

ハヤテは歩に本題を切り出す為に口を開いた。

「この辺で、赤いイタチみたいな動物を見ませんでしたか？」

「赤いイタチ？」

「ええ、毛が綺麗な赤いイタチです。胸に鏡みたいなモノを付けているんですが……」

「うーん、ちょっと見てないな〜ってか、そんなイタチいるの!？」

歩は暫し首を傾げるような仕草をすると、驚いたようにハヤテに聞き返した。

「そうですか……」

「なら良いんだ。次いくぞハヤテ。じゃあなジミー」

銀時はヒラヒラと歩に手を振ると、商店街の奥に歩き出す。優也達も軽く会釈するとそれに続いた。

「え？あれ、私の出番もうおしまい？せっかくの特別篇なのに半ページも無し!？」

「では西沢さん、また今度」

ハヤテも軽く頭を下げると、後を追っていった。

「なんか扱い酷くないかな？かな？」

歩は仕方なく焼き芋を取り出して、食べ歩くのだった……

*

銀時は暫く歩くと、立ち止まって行き交う人々を見回した。

「さて、んじゃ片っ端から目撃証言をー」

「おお、銀時やないか。どうしたんそないな大勢で」

『こんにちわ』

銀時に話しかけてきたのは咲夜とエリザベスだった。

「ん、オメーらか。何やってー」

「妖怪か!？」

銀時の言葉を遮るように優也が身構えた。彼の視線の先は勿論エリザベス。

すると慌てて新八がエリザベスに手を向けて説明する。

「あゝ、違うよ。彼(?)はエリザベスっていう一応ペットだよ」

「……ペットオ!?」「」「」

四人は新八の言った言葉に目を丸くして聞き返した。

「ペットって……」

「ペンギン……?」

「いや、よく見ると……」

「着ぐるみかー」

『着ぐるみじゃない、坊主共』

キラーン!

刹那、エリザベスの口の中からメガネ的なモノを掛けた眼光が四人を捉えた。

「……!?」「」「」

一瞬の出来事に驚き飛び上がりそうになる優也達。

しかし隣の銀時はまったく気にせず、咲夜に目を向けた。

「んな事より咲夜、オメーこの辺でイタチ見なかったか?」

「イタチ?」

「ああ、珍しいかも知れねーが赤い毛をしたイタチなんだけどよオ
…」

銀時が頭を掻きながらそう言つと、咲夜はああと思ひ出したように
口を開いた。

「それならついさっき見たで。
真っ赤なやつ」

「な、本当か!？」

慌てて尋ねる優也に咲夜は少し面を食らつたように何度か首を縦に
振つた。

「あ、ああ。ついさっきまでエリザベスが抱えてきたんや。

胸の辺りに鏡みたいなモン付けてたから、不思議に思つたんやけど
……」

『コクリ』

銀時達は互いに顔を見合わせて間違いないと、確認し合つと咲夜に
振り返つた。

「ソイツア何処に行ったか分かるか？」

「えつと、公園の所で逃げてしもつたけど」

「銀さん!！」

「ああ、公園だな」

優也の言葉に銀時は頷くと、二人は急いで公園の方向に走って行った。

「な、何なんや一体？」

「すみません咲夜さん。僕達も失礼します」

訳が分からない様子の咲夜にハヤテ達は軽く礼をすると、銀時達の後を追っていった。

「ってか、ウチの出番ここだけかいな……」

『人は皆、出会いと共に別れがやってくる。それが人生……』

「自分何人やねん!!」

*

「負け犬公園」

公園に着くと、この場にいた数名の人が赤いイタチを目撃していたらしく、彼らの話によれば奥の雑木林に駆けていったそうだった。

六人は公園の奥の林に入っていくと……

「」

「@¢」

「」

聞き慣れない言葉のようなものが幾つも聞こえてきた。

どれも低い男の声で何かを宗教的な雰囲気さえ感じられる。

「な、何の声だ…!?!」

「もう少し奥から聞こえてんな……」

怪しげな空気に身構える優也に対して、銀時はどんどん先に進んでいく。

そして少し開けた場所に出ると、ピタリと止まった……

「銀さん? どうしたんですか?」

後ろに続くハヤテ達も、立ち止まっている銀時を不審に思い声をかけて近づいていき銀時に並んだ……

「……………」

目の前に広がっている光景にハヤテと新八も呆然としてしまう。

彼らの前には、

ダンボールを座布団のように敷いて不気味な言葉を発しながら仕切りに何かを拝むように頭を控えている男達が数十人。

その中心には、ダンボールで出来た仏壇のようなモノにあぐらをかいて座っている長谷川がいた。

服装は布一枚を身体に巻いていて、彼の表情はかなり曇れたように憔悴している…

((なんか祟められてる……………!!))

ハヤテと新八は物も言えずにただその光景を眺める。
後ろの四人はまったく理解出来ず、半ば助けを求めるように銀時を見た。

「……………銀さん、何だアレ」

「ああアレな。アレはダンボールの神様だ」

「……………ダンボールの神様!?」

ギョツとして長谷川に目を向ける優也達。

「ああして住処無き人々を集めて生きるの意味を説いて回っているだよ」

（（（何処のお釈迦様！！！？）））

鼻をほじりながら適当な調子で説明する銀時に、最早ついていけない四人。

「ダンボールの上で悟りを開いた者だけが与えられる究極の義務だ」

「開いたの！？開いちゃったの！？

何その世界宗教への挑戦！？

ギネスにも乗らないよ！？」

進は銀時に堪らず突っ込んでしまった。

「面倒臭えから、話しかけんなよ。さっさと通り抜けんぞ」

（（（何なんだこの世界は……）））

さっさとその場を通ろうとする銀時に優也達も早足で続く。

最後にハヤテと新八が長谷川に手を併せると、急いで銀時達をおっていった。

*

雑木林を抜けると、何故か目の前には怪しげな洞窟がひっそりと佇んでいた。

「アレ？こんな洞窟ありましたっけ？」

「ん？そついや、見た事ねえな」

ハヤテと銀時は何度か公園の林を抜けた事はあるが、こんな洞窟は見た事が無かった。

「多分アレは結界の類いだと思う。あの洞窟から……妖気の気配がするから」

「優也、本当？」

「ああ」

美優は首を傾げると、優也は確かに頷いた。

「私も感じるよ」

「へ？優花さんも分かるんですか？」

「はい、私は力は持って無んですけど、妖気は普通より敏感に感じられるんです」ハヤテが驚いて尋ねると、優花はコクリと頷いてみせた。

「とにかくあん中に金……イタチがいんだな」

「ええ……多分」

「だったら、今度こそ捕まえられるように、急ぎましょう」

ハヤテのまた逃げられないようにとの言葉に、皆は緊張気味に頷いて、洞窟に向かっていった。

*

洞窟の内部は狭い通路が真っ直ぐ続いていて、薄暗く、湿った空気がひんやりと漂っていた。

コツコツと優也達が歩く足音だけが不気味に響き渡っている。

「あゝ、雨の日みてえに髪がベタつく……いいよなオメーらサラサラヘアーですよ」

「確かに、湿っぱいのは嫌だな……」

あからさまに嫌そうな表情の銀時に、優也が洞窟の壁を触りながら、こちらも顔しかめてをそう返した。

「何か不気味な寒さだね」

「そうだね。嫌な寒さだよね……」

美優と優花は不安そうにキョロキョロと辺りを見回しながら呟いた。

「そうか？このくらいひんやりしてる方が気持ちいいと思うけど」

「うん。僕も嫌いじゃないけど……」

進と新八はそんなに嫌いというわけでは無さそうだ。

「地味だから？」

「「違えーよ!!!」

何でそこはハモるんだよ!!!」

問いかけは銀時と優也が綺麗にハモリ、返しは新八と進が綺麗にハモる。

そうこうしてるうちに一行は狭い通路を抜けて開けた場所に出た。
そして……

「あ、優也！アレ!!!」

「!!!」

優花の指差す先にはちょこつと赤いイタチが座っていた。
その後ろには逃げ場は一切無い。

しかしイタチは威嚇する訳でも無く、怯える訳でも無く、ただジッと優也達を見つめてくる。

「ようやく追い詰めたみてえだな……手間かけさせやがって」

「……!!!」

銀時が首を回しながらイタチに近づこうとしたが、優也は何かに気付いたように目を見開いた。

その瞬間、ボンと大きな音がして大量の煙がイタチを包み込んだ。

「「「「？」」」」」

銀時達は訳が分からず怪訝な表情をするが優也達は心当たりがあるらしく表情をしかめた。

「……………遅かった」

「？」

ハヤテが優也の粒いた意味を尋ねるようとしたが、それは煙の中から聞こえてきた声に遮られた。

『フォーフォツフォツフォ！！！』

磨の力は戻られたりや！！！！』

「「「「！！？」」」」

図太く鈍い低音の声…………

煙が引いていくとそこに現れたのは…………

「出たか…………紅融」

「紅融？」

体長は3mを超えるであろう真っ赤なイタチ。

しかしその姿は異様なものであった……

金色の桜模様の着物を着ているがその巨大なお腹周りは隠しきれずにでっぷりとはみだしていて、頭には赤い烏帽子が乗っかっている。胸に先程より少し大きくなった鏡がついている。

また、腰には1mほどの徳利がぶら下がっている。

下には幾重にも積み重なった座布団が浮いており、イタチはその上にあぐらをかいて座っていた。

簡単に言えば殿様のような肥満なイタチである。

「アレは妖怪“紅魺”

体格はアレだが色々（性格とか）面倒な敵だ………」

「……何か段々おかしな方向に進んでないコレ？」

銀時は紅魺を眺めて呆れたように呟く。

優也は一步前に出ると、コートから日本刀を取り出した。

「とにかく、ここは俺が何とかするから、美優達は下がってるんだ」

「うん！」

「優也、気をつけてね」

美優と優花は頷くと、後ろに下がると……

「させぬわ!!」

「きゃあ!?!」

「わあ!?!」

しかし次の瞬間、美優と優花は宙に浮いた。正確に言うならば、突然伸びてきた何かに捕まり、空中に浮かされてしまったのだ。

「な!?!美優!!優花!!」

そのあまりの速さに新八達は呆気にとられ、優也は慌てて紅魼に顔を向けた。

何と伸びてきたのは紅魼の舌だった。紅魼は二人を舌にくるんで、腰にさがった徳利に入れてしまった。

「っ!!」

『フオッフオッフオ……』

これで無闇に刃向かえなくなったのう……』

紅魼は何とも気持ち悪い笑みを浮かべて優也を見る。

「え!?!なんであんな徳利の中に二人が!?!」

『コレはただの徳利じゃないのじゃ。』

見かけは1mくらいしか無いが……この中は無限に広がる空間があると云われる妖気の徳利でな。

人間などいくらでも収納できるわ』

進は目を白黒させて叫ぶと紅黽は不気味に笑って答える。

「くっ…！！（これでは奴を無闇に攻撃出来ない…）」

優也は舌打ちすると、進達を振り返った。

「ここは俺が。進は銀さん達を安全な所に」

「わ、分かった」

進は慌てて頷くと、銀時達を連れて……

「何言つてやがんだオメーは」

「そうですよ」

しかし、銀時とハヤテはそれに従うことなく優也の前に出た。

「な、銀さん！？ハヤテ！？」

「ここまで来て逃げろはねーだろ。ウチは一流の万事屋、依頼を途中で放る事ア出来ねえんでな」

「三千院家の執事として、お客様を置いて逃げる事は許されませんから」

銀時は木刀を構えて、ハヤテは白い執事用の手袋をはめながら……

「ま、そういうわけだから」

驚いている優也と進に肩を竦める仕草をしてみせる新八。

「……………でも、一般人を巻き込む訳には」

「テメーはあのガキ助ける事だけ考えてろ。

それにコイツらただの一般人じゃねーからよ」

「？」

「まあ見てろ。すぐに分かる」

優也にニタリと怪しげな笑みを浮かべる銀時。

それに負けたのか、優也はフツと微笑すると、進に顔を向けた。

「二人はあの徳利を何とか俺に持ってきてくれ。アレを壊すには特殊な力があるから。」

銀さん達は進達が気付かれないように、紅融を引き付けてくれ」

四人は優也の指示に頷くと、早速行動を開始する。

銀時とハヤテは紅融の前に出ていき、進と新八はさりげなく横に走り出した。

『又ウ？火渡は動かぬか』

「アナタの相手は僕達二人で十分です」

優也は後方に下がっていつでも動けるように全員の状態見ていた。

『ほう……人間風情に曆が止められるかえ?』

「来いよ。頭叩き割ってやらア」

『又ウン!!』

紅黽が手を振るうと、座っていた座布団が一枚、高速回転しながら二人に迫った。

キラッ!!

そして回転の途中に何やら刃物のような光を放ちだす。

「ぶごぉ!!」

「くっ!!?」

高速回転する座布団は二人の間を裂くように洞窟の地面をガリガリと削った。

どうやら座布団の四隅に仕込みの刃がついているようだ。

しかも、座布団は地面を削って止まったかと思うと、また回転を始めた。

「な!?!」

そして地面を回転しながら銀時に迫ってきたのである!!

『フォッフォッフォ!!』

油断したの、この座布団には追尾能力があるのじゃア!!」

「ぬおオオオオ!!」

「銀さん！」

銀時は説明を聞きながら必死に座布団の魔の手から逃げる為にダツシユする。

すると、彼の前に二人……新八と進の後ろ姿が見えてきた。

「おオオオオ!?!」

「つて銀さん!?!」

銀時は何と二人に追いついてしまった。

「アンタ散々カツコつけといてもう逃げ出してますかアアア!?!」

「いやキツかったんだ!!」

予想以上にキツかった!!」

進が銀時の行動にある意味驚愕して突っ込む。

しかし銀時が二人に加わった事により、紅舂は気付いたように顔を向けてきた。

『貴様ら、そんな所にいたとはなア!!』

((バレたアアアア!!))

新八と進は絶句する。

『小癩な真似を!!!』

紅黼はもう一度手を振るうと、二枚目の座布団が三人の前に飛び出してきた。

そのまま座布団は回転して前から迫ってくる。

後ろからは銀時を追いかけてもう一枚の座布団が回転してきている。

「ちよつとオオオオ!!」

挟まれましたよ銀さんんん!!」

二枚の座布団は三人の挟み撃ちにするかのように直前に迫ってきた
!!

「こっつ!!」

もうダメかと二人は目を閉じるが……

「っ、ハヤテエエエエ!!」

銀時が叫ぶやいなや、新八と進はフワリと宙に浮いた。
浮くというより掴まれているといった感じに近い……

「大丈夫ですか二人とも!!」

「?!?」

上を見ると、そこにはハヤテが二人を掴んで跳んでいた。

「ハヤテ君！？あ、銀さん！！」

新八はハヤテを驚いて見るが、慌てて先程いた位置に目を向ける。しかし座布団二枚目は衝突して無惨にも地面を抉っていた。

「そんな……銀さん！！」

「銀さん！！」

新八と進は悲痛な叫びを上げるが……

「あゝ、面倒臭え……」

銀時は何とか座布団を避けたようで、頭を掻きながら座り込んでいた。

「新八君、進君！！」

落ちないようにして下さい！！」

「「へ！？」」

ハヤテはぐつと二人を掴む力を込めると、そのままフツと消えた。

『又ウ……』

チヨロチヨロと小賢しい……』

「……あん？」

座り込む銀時を忌々しそうに睨みつける紅鮠。

『磨の邪魔するでないわ……醜いだけの存在……』

「いや、お前に言われたくねえんだけど」

紅鮠はブヨブヨに太った身体を重たそうに叩くと、その顔を醜く歪める。

その様子に銀時は眉を吊り上げると、隣にハヤテがすっと現れた。

「銀さん、大丈夫ですか！」

「ん？オメー何処に……」

銀時が尋ねようと話しかけたが、ハヤテは大丈夫と自分の唇に人差し指を当てて微笑んだ。

『又ウン！！』

「「っ！！」」

紅鮠はまた手を振るうと、座布団が二人に向かって縦に回転を始める。

「二人とも、こっちに！！」

「「！！！」」

二人は言葉通り、優也の後ろまで下がった。
座布団は刃を突き上げ、優也めがけて突進してくる！！

しかし、優也は動かさず黒い日本刀をゆっくりと振り上げる。

ザシユ！！

そして座布団を一刀両断した！

「おーおー、凄えなオイ」

「凄い……」

優也の後ろでは銀時とハヤテが感嘆の声を上げる。

『グヌヌ……』

しかし磨にはまだ人質が……、
ああ！？』

ガチャ……

「へへっ！！悪いな」

「進君！！急ごう！！」

紅鮎の腰には、本当にいつの間にか進と新八がいた。

二人は腰から徳利を抜きとると、慌てて抱えてその場から逃げ出すとす。

『貴様らアアアアア!!』

「「のわアアアア!?!」」

紅魷は腕を二人に伸ばすが二人はちょこまか腰周りを素早く動き回り何とか避けてゆく。

そして、浮いた座布団から地面に飛び降りた。しかし結構な高さなので尻餅をついてしまう。

『貰ったアアアアア!!』

「「来たアアアアア!?!」」

その隙を見逃さずに紅魷は腕を二人に伸ばしてきた。

ドオオオオン!!

紅魷の腕は二人を呑み込んだ……

「ふう……危な」

「進君!!」

かと思われたが、何とか進が寸での所で新八を掴んでその攻撃を避けていた。

だが新八の眼鏡は無惨にも紅魷の餌食となってしまう……

「新八イイイイイ！！！」

「そんな……！！新八君！！！」

銀時とハヤテの悲痛（？）な叫び声が洞窟に響く。

『フオーツフオーツフオー！！』

お前達の仲間は一足早くあの世にいったようじゃな』

「テメエエエエエ！！！」

絶対許さねえ！！！！」

「よくも新八君を……！！！」

「新八君こつちイイイイイ！！！！こんな時までテメーらしい加減にしろオオオオ！！！」

新八（眼鏡無し）は叫んで飛び上がった。

「あ、生きてたんだ新八」

「あ、本当ですね」

「分かるだろオオオオ！！！」

「つか何でハヤテ君までノッてるの！？」

新八は突っ込むと同時に進に徳利を渡して背中を押した。

「もう下らないボケは放っておこう。進君！！優也君の所へ！！！」

「ハイ!!」

進は徳利を背負うと、全力で優也の元へ駆ける。
勿論紅鮠はそれを止めようと手を伸ばすが

「させるかア!!」

『又ウ!?!』

新八がそれを竹刀で思いきり弾いて邪魔をする。

『退けい!地味な奴が曆の邪魔をするでない!!』

「誰が地味だコルアアアア!!」

地味と言われて戦闘力が1・12倍にパワーアップした新八が…

「いや全然パワーアップしてねーだろ!?!」

『1・12倍だとオ!?!』

又ウ……シヤ 専用かえ!?!』

「違えーよ!!」

三倍だろうがアホ鮠!!」

そんなやりとりをしている間に進はもう優也の元にたどり着いていた。

「優也!!」

「ああ、下がってる！」

進が離れると、優也は徳利に向けて日本刀を軽く振るった。

パリンッ！！

「わ、眩しい！！」

「優也！」

徳利が割れると、中から美優と優花が出てきた。

「二人とも大丈夫か！？」

「うん！」

「ありがとう」

優花が尋ねると二人は何ともないと頷いてみせた。

ホッと安心したように息をつくと、優也は紅黚に顔を向ける。

「よし。そろそろ決める…！！」

そう言うつと優也の身体の周りに真紅の炎が纏い始めた。

「銀さん、ハヤテ！！」

俺を思いきり吹き飛ばしてくれ！」

「はいよ」

アアアアアアアア！！！！！

ゴウゴウと燃え上がる真紅の炎はまさしく火炎地獄。

紅鮎の叫びと炎の音だけが洞窟に響き渡った……

*

「本当に色々と世話になった。
ありがとう」

銀時達は公園の林の中で向かい合っていた。

洞窟は跡形も無く消え去り、人目に付かないように林の中に入ってきたのだ。

優也は手の平ほどの鏡を持っており、これで元の世界に帰れるのだという。

しかし優也曰く、帰るまでにはほとんど時間が無いらしい。

「本当にお世話になりました」

「ありがとうございます」

美優と優花も丁寧に頭を下げてお礼をいった。

「ああ、気にすんな」

「良かった。」

これで元の世界に帰れますね」

銀時は頭を掻きながらとハヤテはニッコリと笑って答えた。

「新八さん!!」

「進君!!」

ガシッ!!

「お互い頑張ろうね(ましようね)!!」

新八と進は固く握手を交わす。

二人にも思うところがあるのだろう。

すると優也達の周りを白い光が包み込んでいく……

「銀さん、少しの間だけど楽しかった。ありがとう」

「おう、氣イつけてな」

優也と銀時はそう言っつて拳を併せると、フツと微笑し合った。

そして……

光が完全に四人を包んで、ゆっくり空に昇っていく……

その様子を見上げて息をつく三人。

「行っちゃいましたね……」

「んだなア……」

「ハハハ、何だかまだ夢みたいな気分ですけど？」

光は三人の頭上の空にキラキラと目映く散っていった……

「……………あ」

「銀さん？」

「どうしたんですか？」

何かに気付いたように声を上げる銀時。

「……………報酬貰ってねえ」

「「……………あ」

「とある世界」

「???

「皆！無事だったのね！」

「???

「まったく、心配かけやがって……………」

「???

「大丈夫ですか？」

薄暗い工場のような広場に優也達が現れると、仲間であろう人物達が駆け寄ってくる。

美優

「ごめんね皆、心配かけて」

優花

「もう大丈夫だよ」

美優と優花は皆に微笑みかける。

進

「しかしとんだ体験をしたもんだよな……異世界に飛ばされるなんてさ……」

????

「異世界?どんな世界だったのか興味があるな」

????

「可愛い娘はいました?」

????

「ハイハイ、その話は帰ってからにしましょうね」

その言葉に周りの人はそうだなと頷く。

そして優也が立ち上がり、皆を見回した。

優也

「帰るか」

美優・優花

「うん!」

進

「だな！」

優也の言葉に美優達はしつかりと頷くと、はその場から歩き始める。

???

「で、どんな所だったんだ？」

美優

「それがね……」

こうして……

彼らはまたいつも通り、この世界で生きてゆくのだ……

これから優也達の身にどんな事が起こるのか……
それはまた、別の話……

特別訓 何事も切り替えが大事（後書き）

（後書き）

伽藍

「今回は宣伝コーナーです！
ということ、『黒と白の物語』から、代表して優也君どうぞ」

神楽

「待てバカ作者アアアアア！」

伽藍

「ぶべらあ!？」

神楽

「何でほとんど私の出番が無いアルか!？覚悟するヨロシ」

伽藍

「待って!？ちよつと待！」

ぎゃあアアアアア!!

優也

「あ、ああ……何なんだこゝは？」

銀時

「後書きだ。まあコラボ篇の恒例として、ここで自分の作品の宣伝をしてくれや」

優也

「よく分からないが、取り敢えず紹介をすればいいんだな？」

銀時

「そゆこと」

優也

「えっと、俺達が住む世界には色々な種族がいる。人間は勿論、妖怪や死神、悪魔といった表には姿を表さない存在。

ソイツらと闘う中学生達の笑いあり涙あり学園物ありの小説だ。暇があつたら是非読んでみてくれ」

新八

「はい、ありがとうございます！」

銀八

「オイ読者達、『黒と白の物語』絶対読めよ。読まなかった奴は廊下に立たせるぞ」

新八

「いやいや！？いつの間に先生！？」

伽藍

「次回……も……よろしく……お……」

神楽

「うおらアアアアア！！」

歯ア食いしばれエエエエ！！」

優也

「……………」

新八

「……………ハハハ？」

銀八

「んじゃ、次回もよろしく頼まア」

第八十七訓 金が欲しけりや働くべし

月曜のクラス会……

という名の飲み会 1万2千円

火曜の親睦会……

という名の飲み会 2万4千円

水曜の教師悩み相談会……

という名の飲み会 3万1千円

そして、月曜から日曜までの付き合い酒、宴会、愚痴を肴に屋台で
やけ酒、麻雀、二次会、三次会……

ブライストレス!!

学院までの通学路をため息混じりに歩くのは桂雪路。

白皇学院の教師にして、学院の生徒会長のヒナギクの姉である。

彼女の手の平には小銭が三つ……十円玉が一枚と一円玉が二枚。
計12円……

彼女はその手の平を見つめながらまたため息を一つ。

「お金つてなんで無くなるのかしら」

注（使うからです

「まずい！！まずいわ！！」

給料日まであと10日もあるっていうのに！！12円じゃ、もやし一本買えやしないわ！！

いや、一本は買えるかもしれないけど、お腹が全く膨らむ予感がない！！」

雪路はギュツと手を握りしめると、天を見上げる。

「お腹いっぱいもやしを食べられない私……なんて不幸」

注（自業自得と言います

（生徒会室）

「という訳でもやしをお腹いっぱい食べたいので、お金を貸して下さい」

「……………」

雪路は生徒会室の会長の机の前でそう切り出した。彼女の前には笑顔に怒りマークをつけたヒナギク。

ドカツ!!!

「もやしなんて知らないわよバカー!!!」雪路はあっという間に生徒会室を追い出される。

「ええ!?!」

もやし知らないの!?!

こつ大豆とかから芽が出たやつで……」

「そういう意味じゃ無くて、お金なんか貸さないって意味よ!?!」ヒナギクは生徒会室の前にあるエレベーターホールまで雪路を押しやった。

「ええ!?!貸してくれないの!?!」

たった一人のお姉ちゃんなのに!?!」

「当たり前じゃない!?!」

もう五万円も貸してるのよ!?!」

大体いつもいっつも……12も年の離れた妹からお金借りるなんておかしいと思わないの!?!」

「思わない……」

「思いなさい!?!」

オロオロとしながら言う雪路にキレ気味に突っ込むヒナギク。

「あ、分かった。お姉ちゃんの言い方が悪かったのね。

言い直すわ。お金下さい」

「より悪くなってるわ!!!!」

雪路の全外的外れな発言にヒナギクは呆れたように叫ぶ。

「じゃあどうしても貸してくれないの?」

「貸しません!!」

「……え!? 五千円ならいい!?!」

「言っていないわよ!!」

「だったらしょうがないわね。

こうなったらどっかのローン会社でお金借りてー」

「ビュッ!!」

言い終わらないうちに雪路の目の前には正宗が突きつけられる。

そしてソレを向けているヒナギクからは物凄いオーラが……

「私達の本当のお父さんやお母さんが、何で私達をおいて逃げる事になったか覚えてる?」

「えっと……ローン会社や街金から八千万円ほど、借りちゃったせい……だったかな？」

雪路は出来るだけヒナギクを刺激しないように答える。

「そうよ。おかげで住む所もなくなって、冬の街を二人でさまよい歩く事になったんじゃないか？ たっけ？ 帰る場所が無いから公園で寝泊まりして危うく凍死しかけたりしたんじゃないか？ たっけ？」

「ヒナったら6歳の頃の事よく覚えてるわね」

雪路は作り笑いで何とか誤魔化そうとするが、ヒナギクに襟首を掴まれて引き寄せられる。

「だから街金なんかでお金借りたりしたら……絶っつ対許さないわよ……！」

「うん、分かった……わかりました。すみませんホント」

何とか手を離して貰うと雪路は一旦俯くと、再びヒナギクを見上げた。

「ごめんなさいヒナ。お姉ちゃんが間違ってたわ」

「お姉ちゃん、良かー」

「今から三千院家に行くわー!!」

ガシッ！！

「お姉ちゃん？まさか…お金借りようとかじゃ無いわよねえ？」

「（ギクッ！）」

「……………お姉ちゃん」

「違うわ！！違うの誤解よ！！」

「ただちよつと割の良いバイトは無いか相談に……………」

ギシギシと詰め寄るヒナギクだったがそれを聞いてまた力を緩めた。
しかしまだ疑わしいような視線を向ける。

「……………」

「本当よホント！！」

「はあ……………」

「だったら私もついて行くわ」

ヒナギクは頭を抱えてため息をついた。

「ええ！？でもヒナ、仕事は……………」

「もう済むから大丈夫。」

「それにお姉ちゃんが変な事をしないようにする方が大切よ」

「う……………」

これではどちらが年上か分かったものではないのだが……

そんな訳で、問題児と保護者は生徒会室を後にするのだった。

第八十七訓 金が欲しけりゃ働くべし

く三千院屋敷く

「……………はい？」

「だから、割の良い仕事は無いのかって話よ」「

屋敷のリビングには困惑顔のハヤテ、面倒臭そうなナギに向かい合っている雪路。

その横ではため息をつくヒナギクと紅茶の用意をしているマリアがいた。

「えっと……何を突進？」

「だから簡単に大金が手に入らないのかっていう話よ……！」

ハヤテは今一度首を傾げると雪路が叫びだした。

「ぶっちゃけたぞハヤテ」

「教師にあるまじき発言ですね……というか白皇の教師より割の良い仕事ってあるんですか？」

「仕事じゃないバイトよ……！」

「……どつちでも良いわ」

無茶苦茶すぎる雪路に呆れたように突っ込むハヤテとナギ。

「良いこと三千院ちゃん、綾崎君！？このままでは私は給料日までもやしすら食べられないのよ……！」

このままでは……餓死してしまう……！」

「すみませんマリアさん。いきなり押し掛けたりして……」

「いえいえ……」

一人熱弁する雪路を置いてヒナギクは申し訳無さそうにマリアに謝っていた。

「とにかく！何か短期で割の良いバイトを紹介して欲しいの！」

「いやいや、そんな事言われても……」

「酷い綾崎君！！先生がどうなってもいいっていつの！？」

ナギは最早会話に関わるのが面倒になったのか雑誌を読んでハヤテに全て任せていた。

しかしハヤテも困ったようにどうしようかとあれこれ視線を迷わせている。

「あ、だったら良い考えが」

「「？」」

マリアは紅茶を淹れると、雪路の前に置いてニッコリと笑った。

〈万事屋〉

「……………」

「……………」

「……………」

万事屋の居間は神妙な雰囲気です沈黙している。

新八はソファに座ってお茶を啜っていて、神楽は新聞を読み、銀時は机で二人に顔を向けている。

すると、銀時がおもむろに口を開いた。

「昨日机に入れておいたチョコが姿を消した。食べた奴は正直に名乗り出る。」

「今なら9と4分の3殺して勘弁してやる」

「何処の魔法の世界のホームですか。9回死んでるじゃないですか……………」

「立て続けに小学校で空き巣……………全く警察は何やってるアルか」

新八はお茶を啜りながら突っ込み、神楽は新聞の記事を読み上げた。彼女の鼻からは血のようなものが……………」

「大体医者から止められてるんですから、加減して下さいよ」

「疑われるセキュリティ……………」

「悲しい現状アルな」

「ツーと相変わらず神楽は鼻血を流している。」

.....

「だからア、勝手に開けるなっつってんだろオメーは!!!」

「何だヨ!!! 良い匂いに釣られただけアル!!!
美味しかったネ!!!」

「聞いてねーよ!!! オメーの感想は!!!」

ガラガラ……

「銀さん、ちょっとお願いが」

銀時が神楽と取っ組み合いを始めた時、ちよつど引き戸が開く。

そこにはハヤテ達が立っていた。後ろには雪路とため息顔のヒナギクもいる。

「あ、ハヤテ君。どうしたの？」

「うん。ちょっと皆さんに相談があるんだけど……」

ハヤテはそう言って銀時達に顔を向けるが、

「うらアアアアア!!!」

「ぶべらっ!?!」

銀時は神楽に吹き飛ばされ、ハヤテの前に落下してきた。

「…………あの、銀さん？」

「痛つつつつ…………、ん？」

ハヤテはいつもの事なので、取り敢えず話かけると、銀時は頬を擦りながら立ち上がった。

「ハヤテか、どうしたア？」

依頼でも持ってきてくれたのか？」

「いえ、実は…………」

ハヤテは横に一步避けると、雪路が困ったように笑いながら現れた。

*

「はあ? 今日一日バイト？」

「ええ。一日だけでいいんです」

銀時は怪訝そうな表情をハヤテに向ける。

ハヤテの話はこうだった。

雪路にお金のありがたみを知って貰うために今日一日万事屋でバイトさせて欲しいという。

マリアの提案らしく、銀時達も無下に断るわけにもいかない。

「大丈夫！私に任せておけばどんな依頼も朝飯前よ！！」

「……………」

銀時は面倒臭そうに頭を掻きながら雪路を見て、新八に視線を送った。

「僕達は構いませんけど、バイトといっても今日はまだ何も依頼入って無いですよね。」

「そもそも入るかも分かりませんし…………この仕事」

「そうアルよ。向こうにいた時なんてずっと閑古鳥が鳴いてたアル」
視線を送られた新八はそう言って肩を竦め、神楽もやれやれと首を振ってみせた。

「大体オメー、白皇の教師やってんだろ？
給料高いだろ、アレ」

「いやあ、何かね」
いつの間にか無くなっちゃうっていうかー、痛！？」

悪びれなく笑う雪路にヒナギクが呆れて手刀をおろした。

銀時はもう一度息をつくど、雪路に視線を戻す。

「金つてのはな、一生懸命働いて始めて貰うもんに価値に気付くんだよ。そういう自覚がねえといくら貰っても結局すぐ無くなるだろうな。オメーはまずその浪費癖を直す所から始める」

「オメーにだけは言われたくねーよ」

すかさず突っ込む新八と神楽。

銀時の発言はまんま本人に当てはまるからだ。

「とにかく、ソイツを直さねー事にはどうにも。それに今日は依頼が入ってねーって言っただろ？」

ピンポーン……

「！！！」

とんだナイスタイミングで室内に響くチャイム。

「依頼じゃないですか！！旦那！！！」

「何で急に敬語になってんだよ。まだ分からねーって、宅配便かもな。神楽、ちよつと頼まア」

いきなり下手に出てきた雪路をなだめると、頼まれた神楽は取り敢えず玄関に向かった。

そして暫くして居間に戻って来ると、神楽は少し声のトーンを落として口を開いた。

「銀ちゃん、依頼アルよ。」

落とし物を捜して欲しいって…」

「落とし物？どんな？」

銀時が尋ねると神楽はさあと言って首を傾げた。

「どうするアルか？」

「でも探し物依頼ならちようど良いし、バイトに手伝って貰っても良いんじゃないですか？」

新八は銀時に向かってそう言った。

「流石メガネ君！！」

君のいう通りよ！！探し物なら人手は多い筈でしょ、銀髪君！！」

「あゝ、でも何か……今日はあんまし動く気がしねえんだよな……」

しかし銀時はあまり乗り気ではないようだ。

色々あって疲れ溜まっているのもあるのだろう。

因みにヒナギクとハヤテは横で何度目か、ため息をついていた。

ガラガラ…

すると、神樂が引き戸を開けながら依頼人を招き入れようとしている。

「どうぞアル」

「あ、すみません」

しかし扉が開くと……

「……………」

全員が固まった。

先程までグターとしていた銀時までもが引き戸を凝視している。

そこにはとんでもない美人が立っていたのだ。

いや、簡単に美人で済ましてしまう事は許さないだろう。

長く青みがかった綺麗な黒髪。

美しく整った小顔に綺麗で大きな瞳。

白く透き通るかと思うほどの肌。

服装は一見質素だが、白く上品なワンピースに青い羽織りを着けて、薄い水色のロングスカートが下全体に広がっている。

この世にこれほど美しく人が何人いるだろう。

間違いなくテレビに出ている女優の誰よりも格段に綺麗で美人だと誰もが思った。

ハヤテや新八は勿論、銀時まで一瞬見惚れしまっていたのだ……

そんな空気に、居間に通された女性は小首を傾げて口を開いた。

「あの……」

「せっかく来て貰って申し訳ないけど、今日は銀ちゃんが乗り気じや無いか」

スパーン！！

「バツカ野郎オオオオ！！」

お客様に何言つてんだオメーは！！」

音速……とも言えるスピードで神楽の頭を叩いて言葉を止める。

「痛つたいナ！！」

銀ちゃん今日は乗り気しないって言うてたアル！！」

「銀ちゃん？誰ソレ？」

アイツならもう死んだって言うてんだろ、アイツの事はいい加減忘れろ！！茶でも淹れてこいバカヤロー」

『んだよ』と神楽はブツブツ文句をいいながら台所に向かっていってしまつた。

「すみませんお嬢さん、お見苦しい所をおみせしまして。

あ、どうぞ掛けて下さい」

銀時が真面目な表情で謝ると、サッとソファに手を向ける。

「どうぞお客様！お座り下さい！！」

すると雪路がソファをピカピカにしている、女性にそう言って頭を下げた。

もういつの間にか万事屋のバイトを始めているようである。

「ありがとうございます」

「いえいえ」

ニッコリとお礼を言う女性に銀時はサッと向かいのソファに座って足を組んだ。

雪路はその右隣に、新八は左隣に座っている。

新八は未だに自分の目が信じられないように女性を見つめていた。

「何かすみませんね、こんな散らかっています。

本当は彼らの他に二十数名従業員がいるんですが、皆銀座にある本店の方に出払ってまして。

今は、使えない奴しか残ってないんですよ」

「へえ凄いわね銀時。そんな大型店だとは知らなかったわ」

「銀時は死んだっつってんだろーが！！社長と呼べ社長と！！」

ジト目でヒナギクはそう話しかけた。何故か彼女に若干怒りマークがついていたような気がしたが銀時は気付かずに女性に顔を向ける。

「それで？」

「ご依頼とは一体？」

「あの、よろしいんですか？」

「そんなお忙しい時に」

雪路が身を乗り出すように尋ねると、女性は申し訳無さそうに銀時を見るが、

「まったく問題ありませんよ。」

「ウチはお客様第一がモットーの万事屋なんで」

そう言つて愉快そうに笑う銀時にハヤテも苦笑いしてしまう。

「さっきまでとは完全に別人ですね……」

「ま、確かにアレは銀ちゃんの好みのタイプにドンピシャルかな」

ハヤテの言葉に神楽がお盆に飲み物を乗せながら答える。
すると銀時がパンパンと手を鳴らした。

「オーイ、カ格蘭ヌー!!」

「茶は………ワインはまだか？四十年ものが蔵にあったら？」

「どござ」

神楽は女性の前にコップを置いた。しかしコップの中にはお茶では無く、何かベージュ色の液体。

「何だコレ？」

取り敢えず銀時は中身について尋ねる。

「マミール」

「何でマミーだア！？」

同級生遊びに来てるんじゃないよーんだよー！！」

「マミーは美味しさと栄養カルシウムを兼ね備えた飲み物ある。大人にも子供にも飲んで欲しい一品ネ」

「オメーの感想は聞いてねーよー！！」

女性はそんな様子にクスリと笑うと、コップを口に運んだ。

「ありがとうございます。
美味しいですね」

「ですよねー！！マミー最高ですよねー！！
すみません年代物のマミー用意しようと思ったんですけど」

完全に舞い上がっている銀時の後ろでハヤテ達は各々呆れていた。

「あの……ヒナギクさん？

何か怒ってます？」

「別に？」

でも何故かしら……何だか見ているイラッとするのは「

ヒナギクは呆れ半分イライラ半分といった感じだ。

「でも本当に綺麗な方ですね、痛たたた!？」

ハヤテが女性を見てそう言つと、思いきり神楽に足を踏まれてしまった。

「何するんですか!? 神楽さん」

「何かイラツとしたアル」

神楽は男性陣の様子を見て、呆れたように呟く。

「ま、そんな訳でお嬢さん。

心配なさらずに話して下さい」

「まあお嬢さんなんてお上手ですね 私は今年でもう29になるんですよ」

クスッと微笑む女性だったが流石にそれは一同驚きだった。

大体20前、少なくとも20くらいだろうかと思っていたのだがもうじき30になるといふのだ……

ガラガラ……

銀時達が驚いていると、突然引き戸が開いて見知った顔が姿を現し

た。

「ああ、もう着いていたのですか」

「あら、姫君」

やって来たのはなんと姫史だった。しかも女性は姫史の事を知っているようだ。

「オメー、何でこんな所に？」

「ん？ああ、ちょっとクラウスさんに会っていたからな」

姫史は簡単に答えると、女性の傍によっていく。

「いやそうじゃ無くて、何で姫ちゃんがこんな所にいるのよ!？」

「ん、雪路か。」

何でって……それは私が彼女の執事だからに決まっているだろう」

雪路の問いに姫史はさらっと答えた。

「「えエエエエエ!？」」

驚いたのは雪路。

ヒナギクもビックリしているようである。

「先生って、執事だったんですか!？」

「ウッソ、ビックリだねこりゃ」

驚きを隠せない雪路達。

しかし姫史は何を今更といったように肩を竦めてみせた。

「本職は執事だ。だが、彼女の計らいで教師という職業を優先させて貰っているんだ。

話して無かったか？」

「姫君は小さい女の子が大好きですからね」

女性は姫史を見ると、そう言って微笑んだ。

因みにハヤテ達はマラソン大会の時に話を聞いていたのでなるほどと言った感じで納得していた。

しかし、女性の次の言葉で全員は驚く事になった。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は湊川みなとがわ蒼妃あおいといいます」

「……湊川？」

どこかで聞いた事がある苗字に一同は首を傾げる。

暫くして、ハツと思い出したように姫史をみる銀時達。

「もしかして……」

「ええ。姫君……湊川姫史の実の姉ですよ」

•
•
•
•

「姊工工工工工工工工工工工工工工工工工! ?」

第八十七訓 金が欲しけりや働くべし(後書き)

まず最初にヒナ祭り篇では明かされ無かった(書き忘れた)の誕生会の事件をご覧下さい。

〈講堂〉

・事件1 『モンスター新八』

美希

「それでは、会場も暖まってきたところで」

理沙

「カラオケ大会といきたいと思いまーす!」

ワアアアアアア!!

そんな訳でカラオケ大会が始まったわけだが……

泉

「次は、新八君です」

美希

「歌は……『チヨメ公なんてくそ食らえ』……何だこりゃ？」

しかしBGMが流れ始めて……

新八

「チヨメチヨメエエエエエエ！！！！チヨメチヨメエエエエエエ！！！！」

ぎゃあアアアアアア！！！！

会場が断末魔に揺れた……！！

・事件2 『新たな一歩？』

ガバツ！！

皆が楽しく食事をしていると、いきなり扉が開いた。
何事かと目を向けると……

ハヤテ

「アナタは……！！！」

泉

「虎鉄君!!」

そう。虎鉄であった。

彼は早足でハヤテの方に向かっていく。

ハヤテ

「な、何ですか!？」

虎鉄

「綾崎……………」

しかし彼は意外な行為にでた。

何と頭を下げたのだ。

虎鉄

「すまなかった!!」

ハヤテ

「……………は?」

虎鉄

「男と分かった途端、突き放すように勝手に落ち込んでいて……………俺が間違っていた。許して欲しい」

ハヤテ

「虎鉄さん……………」

ハヤテは微笑もつと……………

ハヤテは渾身の力で虎鉄をしばき始めた！！

・事件3 『それが世界のお約束』

テンションも上がって酔っている銀時達も話に華を咲かせ盛り上がっていた。

銀時

「いや、一時はどうなるかと思ったな。流石に銀さんあの時は今までの思い出が走馬灯のように駆け巡ったわ／＼」

桂

「まあ、俺がついていれば問題ないとう事だ／＼」

二人は酔っていて若干顔が赤い。

ハヤテ

「桂さん逃げようとしてましたよね？」

神楽

「危ないと言えば手紙の件も危なかったアルな」

新八

「ですね」

????

「手紙って？」

銀時

「アレだよ、ハヤテの代わりに俺達がヒナギクに送ったヤツ。色々やってたらとんでもない内容になったけどな、ハハハ／＼／」

???

「へえ……………」

銀時

「アハハハハハ……………ハ……………ハ……………」

銀時は声の主を振り返ると、酔いが冷めたのか真っ青になる。後ろにはニッコリ笑うヒナギクがいた。

サツと神楽達は一瞬でその場から退却する。

ヒナギク

「銀時は私になんて書いたのかしらねえ？一字一句言ってみてくれる？」

銀時

「ちよつ、待て待て待て！！！！」

「アレお前、俺だけじゃ無くてだなー」

しかしテーブルにはもう誰もいない……………

ヒナギク

「何か？」

銀時

「……………」

ザシユ!!

その後、暫く銀時は目を覚まさなかったという……

—————

教えて!! 銀八先生

銀八先生

「んじゃ行くか。『ハヤテメンバーに質問。長谷川さんも異世界からの人ですが』」
「ハヤテメンバー」
「あ、そうなんだ……………」

銀八

「んじゃ次」

長谷川

「どんだけテキトー!?!?
どんだけ興味ゼロなの!?!」

銀八

「一気にいくぞ。『銀さんに質問。特大宇治銀時井は普通のに比べ

「何倍？」

『ツラに質問。特大んまい棒は何味？』

『真司に質問。醤油以外の調味料は何が好き？』

「ハイズバリ答えます。」

「大体10倍くらいだな」

桂

「無論、サラミ味だ」

真司

「うーむ、やはり醤油じゃな」

銀八

「んじゃ次な『ハヤテに質問。』

フラグ全然立ってないけど……どう？』」

ハヤテ

「え？何の話ですか？」

銀八

「……ダメだこりゃ。」

次の質問『ナギに質問。ハヤテとの仲は進んでんの？』」

ナギ

「無論だ！ハヤテと私は一心同体……いつもラブラブに決まってるだろう／＼／＼」

「な、なあハヤテ？／＼／」

ハヤテ

「……え？あ、すみません。」

ちよつと聞いてませんでした。
どうかしましたか?」

バキッ!!

ナギ

「ふんだ!!」

ハヤテのバーカバーカ!!」

ハヤテ

「お、お嬢様!?!」

銀八

「んじゃ、今日はこの辺で。

因みにコラボ篇への質問には答えられねーんで、その辺もよろしく」

姫史

「次回、遂に私の秘密が一部語られるか!?!」

蒼妃

「よろしくお願いしますね」

第八十八訓 男ならば仕方ない(前書き)

伽藍

「えっとすみません、今日は思いつかなかったので一曲は次回に持ち越しです」

クラウス

「いやいや、それにしても羨ましいですな、銀時殿達は」

ハヤテ

「銀さん完全に結野アナの時みたいになっちゃってますね」

伽藍

「でも大丈夫です。どう転んでも誰かに恋したりはしないんで銀さんは……ギャグなんで(笑)」

クラウス

「憧れ……ですかな？」

伽藍

「ま、そんな感じかな？」

ハヤテ

「では、始まります！」

第八十八訓 男ならば仕方ない

雪路をバイトさせるか否か、話し合っていると、ちよつど依頼がや
つて来た。

その依頼人は、誰もが目を奪われる程の美人であつた。

して、その正体とは……

「私は湊川みなとがわあおい蒼妃と言います。

湊川姫史の実の姉ですよ」

「姉エエエエエエ！！？」

第八十八訓 男ならば仕方ない

一同の衝撃の事実^{じじつ}に万事屋に驚きの叫び声^{さけびこゑ}が木霊した。

「るええ！？ 姫ちゃんお姉さんがいたの！？」

「しかもこんな美人な……」

「ああ、履歴書にも書いてあるぞ」

姫史は当たり前のように頷いてみせる。

しかし考えてみればなるほど納得できる。

姫史自身物凄い美形なので、彼の身内ならば相当な美男美女であることは容易に想像出来る。

この姫史（ひめいし）にして、この蒼妃（あおね）ありという所だろう。しかし彼女は美しさが特に際立っているように思える。

二人を交互に見比べて、確かに似てるかもしれないと内心、一同が暫く黙っていると、蒼妃が小首を傾げて口を開く。

「えっと、皆さんは姫君とお知り合いですか？」

「ああ、そうでしたね」

姫史は思い出したように蒼妃を見ると、一同にそれぞれ手を向けていく。

「彼女は桂雪路。私の白皇の同僚です。世界史担当」

「どうも、姫ちゃんには迷惑かけてまーす。ハハハ」

まず姫史は雪路に手を向けると、雪路は頭を下げ困ったように笑った。

すると蒼妃は微笑んで綺麗に会釈を返す。

「まあ、そうですか。」

姫君がお世話になっていきます。

よろしくお願いいたしますね、雪路さん」

姫史は続いてヒナギクとハヤテに手を向ける。

「彼女は桂ヒナギク。雪路の妹で白皇の生徒会長をやっています。彼は綾崎ハヤテ。私の教え子ですね」

「桂ヒナギクです。」

先生にはうちのお姉ちゃんがお世話になっていきます、すみません」

「え、あ、綾崎ハヤテです。」

よろしく申し上げます」

「生徒会長を……それは素晴らしいわね。よろしく申し上げます、ヒナギクちゃん。ハヤテ君も姫君の事をよろしく申し上げますね」

蒼妃はニツコリと笑って二人に挨拶する。

「それで彼らは万事屋。」

色々縁があつて知り合いです。彼が志村新八君、そしてあの麗しい姫が神楽嬢です」

「あ、新八です、よろしく申し上げます」

「神楽ネ！！よろしくアル」

姫史の説明に新八は頭を下げ、神楽は何故か胸を張って挨拶する。

「新八君に神楽ちゃん、よろしくお願いしますね。
神楽ちゃんみたいな可愛い娘は特に姫君には気をつけないとね」

「あ、うん……／＼／」

彼女の慈愛に満ちた優しい笑みに神楽まで思わず照れて顔を赤くしてしまった。

姫史は『失敬な』と言いながら最後に銀時に手を向ける。

「それで彼がこの万事屋のオーナーの、」

バツ！！

「名乗る程の者ではありませんが、坂田銀時ツ一者です。
弟さんとはそりゃもう仲良くさせて貰っていますね」

（（名乗ってんじゃん！！！！））

姫史が言い終わらないうちに、銀時がサツと立ち上がって無駄な動作で蒼妃を見つめて挨拶をする。

「まあ、そうなんですか
安心しました。姫君にも仲の良いお友達がいるみたいで」

蒼妃は銀時と姫史を交互に見て嬉しそうに微笑む。

「いやいや、友達というかももう親友みたいな、むしろ兄弟みたいな

ものと言っても過言はないですねほとんど」

「ほとんど嘘だろーが!!」

誰が貴様と義兄弟の契りを交わすか!!

違いますよ姉さん!? コイツとはただの腐れ縁で……

ちよつと、聞いていますか!??」

姫史は銀時を振りほどくとそう訴えるが、蒼妃は口元を緩めて頷くだけだった。

「変わった弟ですが、これからもよろしくお願いしますね。

えつと、銀時さん……坂田さんの方がよろしいかしら」

「ええ、もう任せて下さい。

何でも結構ですよ。銀さんでも銀ちゃんでもお好きなように」

『誰が貴様になど任せられるか』と叫ぶ姫史をスルーし、銀時は蒼妃の前に一歩出て手を差し出す。

「フフ、ありがとうございますね銀さん。私の事も蒼妃でいいですよ」

「ああ、よろしく蒼妃さん」

蒼妃はそう言って微笑むと、銀時と握手を交わす。

フワリと心地よい爽やかな花の香りが僅かに銀時をくすぐった。

握手が済むと、お互いにソファに座る。銀時に隣の新八が耳打ちし

た。

（銀さん……何だか虚しくて泣けてきたんですけど）

（耐える新八。俺らの世界の事は今は忘れろ）

新八は今まで見たことが無いような彼女のおしとやかな雰囲気に、自分達の世界の美人だが恐ろしい女性達を思い返し、自分達の今までの境遇に虚しさを隠せない。

新八の姉、志村妙は美人で一見おしとやかだが実は恐ろしい本性を
持っている。

猿飛あやめも美人ではあるがとんでもないマゾツ娘で銀時のストーリーである。

他にも美少女だが心は男の子の柳生九兵衛だったり、美人だがカラクリのタマだったり、猫耳なのに台無しのキャサリンだったり、昔は美人だったババアだったり……

勿論皆となると楽しい。

だが一癖も二癖もある連中ばかりである。

そんな境遇に新八は一抹の虚しさを感じてしまっているのだ。

一方銀時にしていても同じ事である。新八同様、向こうの世界は滅茶苦茶な奴らばかりで女性と見るには結野アナくらいしかいなかった。こっちの世界でも、基本的に子供ばかりで銀時のタイプの女性などいなかった。

元々彼はおしとやかな大人な女性がタイプで、子供には一切興味が無いからだ。

それに怖い人や乱暴な人（銀時に非がある場合が多い）、大人にしても雪路のような滅茶苦茶な連中ばかりでおしとよかの欠片も見出

す事は出来なかった。

そんな時に現れたのが湊川蒼妃である。

美人で言葉遣いも丁寧、優しい雰囲気、優雅な佇まい。

綺麗な青みがかかった黒髪に仄かなに漂う花の香り

華奢な身体に豊かな胸……

絵にかいたようなおしとやかさと大人な女性に、銀時が打たれるのも納得のいくところであろう。

まさしく理想のタイプを目の当たりにして、浮き足立つのも無理はないか……

「それで、蒼妃さん。依頼というのは？」

「ええ、実は大切な物を落としてしまって……」

先程近くに交番も無いものですから、どうしようかと思っていたら……」

「私がここに依頼する事を提案したのだ。
渋々ながらな」

蒼妃の言葉を汲んで姫史が肩を竦めながら言った。

「大切な物？」

「ハイ、大切なペンダントなんです。とても大切な……」

どこか寂しそうに目を伏せる蒼妃。

「なるほど、そのペンダントを探し出すのが依頼ですね、姫ちゃんのお姉様!」

「ま、そついう事だな」

雪路は蒼妃の話聞いてやる気まんまんといった感じである。姫史はやれやれとそれに答えた。

「ヒナのお姉ちゃん……完全に万事屋になってるアルな」

「ええ、お姉ちゃんの目が輝いてるからね……違つ意味で」

雪路の様子に苦笑する神楽と呆れ半分のヒナギク。

「あれ、でも湊川先生つて白皇の教師ですよね？
執事をやる暇があるんですか？」

「ああ、普通は無理だが……
ウチには少し特別な理由がある。いや……かなり、かな」

ハヤテの問いに姫史はフムと顎に手を当てると口を開いた。

「簡単に言えば湊川の姓をもつ人間は私と姉しかいない。
両親は他界し、我々は幼い時に別の家に引きとられた身だからな。
まあ私はよく抜け出してはクラウスさんの所に逃げていたが……
だから今は違う姓の家に住んでいるのだ」

「違う家に？」

「ああ、『白鐘家』と言えば知っているかな」

姫史がそう言うと、雪路は驚いたように立ち上がった。

「るええええ！？し、白鐘家って、あの超大金持ちの白鐘家！？」

「ああ、多分そうだ」

雪路だけではない、ヒナギクも声には出さないが驚きを隠せない様子だ。

「あの、ヒナギクさん？

白鐘家って？」

「三千院家ほどでは無いけど、とても財力のある家柄よ。

それに有名なはその財力以上に学会の業績の方ね」

ハヤテの問いにヒナギクは思い出しながら答える。

「学会？」

「白鐘家はね、元々生物工学、遺伝子工学が専門に突出したの家柄なのよ。

第二次対戦時は軍事機関で研究を任されていたとか……

遺伝子組み換えやクローン技術、細胞融合等のバイオテクノロジーの研究は最先端をいくそうよ。

加えて昔白鐘家の当主と結婚した家柄がとてもお金持ちで白鐘家は余りある財力も手にいれた……

今や遺伝子工学の最先端、莫大な財力を誇る名門家ね。よく雑誌にも取り上げられているわよ」

ヒナギクはそう言うがハヤテには難しくよく分からなかった。だが取り敢えず凄い家柄なのは理解した。

ヒナギクの話聞いていた新八達も頷いてみせた。

「へえ、凄いんですね……」

「いや、どうだろうな……」

しかし、姫史は言葉を濁す。

蒼妃も何故か悲しそうな表情をしていた。

「確かに桂の言う通り名門家だが、何かと黒い噂も絶えんからな……
白鐘家は。」

不老不死の研究が行われているとかな……」

「「不老不死!?!?!」」

「いや、あくまで噂だ。」

私も姉も白鐘家の事は詳しくは知らん」

驚いて目を見開く一同に姫史首を振っていった。

「でも先生、それは心無い誹謗中傷だと……」

「確かにそうだ。」

白鐘家は名門な為に敵も多い。だから根も葉も無い中傷が多いのも

事実だ。実際にこの噂も中傷の類いだろうな」

「「「……へ？」「」」

「フフフ、だから冗談だよ。
今の話は」

ヒナギクがそう言うと姫史は
『驚いたか？』とばかりに笑ってみせた。
どうやら彼なりのジョークだったようだ……

何だと安心して肩を落とす一同。

「話はそれだが、俺と姉はその白鐘家に世話になっている。
だから姉には執事も沢山いる。
そんな訳で私は好きなように教師を出来るわけさ、無論姉の計らい
でだがな」

「そうね。姫君はこんなお年寄りの執事より子供達といった方が輝い
ているものね」

「姉さんには悪いが、その通りだな」

「もう……」

姫史が頷くと、蒼妃は少し頬を膨らむ仕草をした後、クスリと微笑
んだ。

「あ、えっと、とにかくそのペンダントを探せばいいんですよね？」

「ハイ、お願いできますでしょうか」

新八がそう言うと、蒼妃が丁寧にお辞儀をする。

「任せて下さいお姉様!!」

私達全員が絶対に見つけてみせます!!」

「え!?!」

「……………お姉ちゃん」

雪路は思いきり立ち上がると、ハヤテとヒナギクに向き直る。その瞳はお金のマークで輝いていた。ヒナギクはやっぱりかと呆れ、ハヤテは自分もかと驚く。

「困った依頼人を放っておく訳にはいかないわ!!
早速行くわよ姉ちゃん!!」

ガシッ!!

「……………は!?!ちよっオイ!?!」

「モタモタしない!!」

雪路は姫史の襟首をひっ掴むと、そのまま万事屋から飛び出して行った。

「まったく……………」

「ハハハ……………桂先生らしいですけど」

そんな様子を見届けるとため息の二人。
すると蒼妃は申し訳無さそうに口を開いた。

「本当にごめんなさい。」

大した依頼で無いのに忙しいお時間を取らせてしまって……」

「いえいえ」

蒼妃の言葉に銀時は立ち上がると、机の窓の方に歩いていく。

「蒼妃さん……確かに依頼には大小あります。お金も大事です。
ですが今はそれより大切な事がある……」

銀時は窓に近づくと、背を向けてクイツと手を向ける。

シャツ……

「それはアナタが笑顔になる事です」

「すみません社長、ブランド無いです」

「社長、キャラがおかしいです」

どうやらどこかの刑事よろしくブランドがあるつもりでカッコをつけているようだ。

ハヤテと新八はすかさずツッコミを入れる。

しかし銀時はお構い無しにくるりと蒼妃に顔を戻す。

「だから顔を上げて下さい。
アナタには笑顔の方が似合いますよ」

フツと机に寄つ掛かり決め台詞を言い終えた銀時。
しかし、これには新八、ハヤテ、ヒナギク、神楽も
『そうだ』と同意した。

「では……お言葉に甘えさせてもらいますね」

「お任せ下さい、ウチは超一流の万事屋ですから。
あ、他にも支店が新宿や六本木に……」

蒼妃はそう言つて微笑むと、浮かれてそんな事をしようもなく口走
し始める銀時。

「男つて馬鹿アルな……」

「まったくね……」

ヒナギクと神楽はジト目で銀時を見ていてがこればかりは仕方がな
い。だって仕方がないから仕方がない。男ですから……

そんな訳で、銀時達は依頼を開始すべく、先に出ていった雪路を追
うのであった。

第八十八訓 男ならば仕方ない（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「いいよな。本編の俺はよオ。
俺も本編いきてえよ……」

神楽

「残念アルな。ここの銀ちゃんの仕事は質問だけアル」

銀八

「あゝあ、仕方ねえ。『ハヤテに質問。一方通行に勝てますか？』」

ハヤテ

「いやいやいや！？無理に決まってるじゃ無いですか！！
何で一方通行さん！？」

銀八

「オメーも幻想殺しつけりゃいいじゃん」

ハヤテ

「出来るわけないでしょ！？」

銀八

「いやいくね？』とある執事の幻想殺し』とかいってさあ」

ハヤテ

「やりませんよ!!!」

銀八

「次な」 『姫史に質問。執事と教師の仕事はどちらが大変?』 「

姫史

「うーむ、執事は楽な方だ。

ああ見えて姉さんは何でも自分で出来るからな。ほとんど執事が手を貸さなくてもいいんだ……
しかし教師は大変だ……
問題児が多いからな」

雪路

「誰が!!!」

美希・理沙・泉

「問題児だアアアア!!!」

姫史

「自覚があるなら出てくるな」

銀八

「んじゃ次」 『作者に質問。銀八先生リターンズは読んだ?』 「

伽藍

「金が……金が無いんだ……」

銀八

「んじゃ最後の、『ヒナギクに質問。イライラしてたのはやきもち？それとも何？』」

ヒナギク

「そ、そんな訳でないでしょ!!」

アレは、あの、アレよ!!」

そうやってすぐにだらしなくなるのは、生徒会長として良くないと思うというか…」

伽藍【HP50】

「いやいやいや、生徒会長関係無くな？本当は—」

ザシュ!!」

伽藍【HP0】

「……………(屍)」

ヒナギク

「とにかく、全然関係ないし何とも思っていないわ!!
変な誤解しないで下さいね?」

銀八

「いいな〜オイ、俺も本編行ってーよ。ぱっつあん、俺と替われ」

新八

「いや、無理無理?」

ヒナギク

「……………」

神楽

「何か今回の話長引いて申し訳ないアル。一応次回で終わりヨ」

ハヤテ

「じ、次回もよろしくお願いしますね？」

第八十九訓

幸せとお金は必ずしも比例しない

姫史の姉、蒼妃のペンダントを探す依頼を受けた銀時一行。

蒼妃曰く、ペンダントの形容は青い翡翠が埋め込まれたかなり古い物とのこと。

そんな訳で三千院屋敷前には銀時達とヒナギクに捕まった雪路がいた。

「まったく……少しは落ち着きなさい、お姉ちゃん」

「何言ってるのヒナ!!」

困っている方がいるのよ、放っておく訳にはいかないわ!!」

「目がお金で輝いている人が言う資格無いわよ」

完全にお金マークの目をした不純な動機の雪路にヒナギクはため息をついていう。

「まあ、雪路さんは優しい方なんですわね」

「いや全然違いますよ蒼妃さん!?お姉ちゃんは一」

ザッ！

しかしヒナギクの言葉を遮るように雪路が蒼妃の前に出て立て膝になる。

「姫史さんのお姉様がお困りなんです。姫史さんの義妹的なポジションの私が協力しない訳にはいきませう」

「誰が妹！？んな訳あるか！！」

お前のような妹などいるかつ、妹にするならば神楽嬢やナギ姫のようなー」

「照れなさんな義兄様（お金）」

「（お金）！？」

「どんだけ歪んだ読み方！？」

「っ！か止めるその呼び方……虫酸が走る……！！」

目もお金、発言もお金の侵略者ゆきてを何とか阻もうとする姫史。すると銀時が頭を掻きながら口を開いた。

「まあまあ落ち着けよ義弟。

「蒼妃さんの前で何やってんだ」

「貴様が何を言ってるんだ！！
誰が弟だ」

「堅い事言うんじゃないよ。

「どうせ近い将来そういつ関係になるんだから」

「なる訳あるか
死んでも願ひ下げた貴様の義弟など。
つーかさつきからどんだけ親族に食い込もうとしてるんだ、お前ら
は!!」

「「落ち着け義弟（お兄様）」」

「おのれら……!!」

銀時と雪路にそう叫ぶと疲れたのか肩で息をする姫史。

そんな様子を微笑ましそうに笑う蒼妃と苦笑顔のハヤテと新八、ジ
ト目のヒナギクと神楽が見ている。

「まああの馬鹿共は放っておいて、ペンダントを探すアル。
あおねえ蒼妃はどこで無い事に気付いたアルか？」

「えっと、商店街からこの辺に来た時には無かったかしら。
でも公園の辺りまではあることを確認してたから、多分それ以降だ
とは思うのだけれど」

神楽が尋ねると蒼妃は頬に手を当てて思い出すように答えた。

「だったら蒼妃さんの来た道を辿って行けばきっと見つかりますね。
この人数なら」

「そうアルな。蒼姉、大丈夫アルよ。あの銀髪バカはともかく、ウ
チは超一流の万事屋に違いないネ。だから安心するヨロシ」

「フフ、ありがとうヒナギクちゃん、神楽ちゃん」

ヒナギクと神楽の言葉にニツコリと笑顔で返す蒼妃。

後ろの新八達も三人の様子を見てうんうんと頷いている。

「いやあ、何だか美人三人だと絵になるねハヤテ君」

「そうだね。でも三人と言えば……」

ハヤテが反対側を振り返ると、

「堅い事言いなさんな義兄………お金様」

「その呼び方だけは止めろ……」

「そだよ、そういう考えの奴は我が家の敷居を跨ぐ事は許しません」

「だから貴様もだ!!!」

いつからウチの家族になったのだ!!!」

「連れねーな義弟」

「誰が弟だ」

新八とハヤテは銀時達三人の様子も見て呆れ半分で頷く。

「あつちもある意味絵になりますよね……」

「銀魂的にはね……」

第八十九訓

幸せとお金は必ずしも比例しない

〔商店街前〕

「つー訳で、ここからは万事屋きつての精鋭メンバーでペンダント探しを実行したいと思いまーす」

「とんだ精鋭ですね…」

ハヤテは先程の状況から見て呆れたように突っ込む。
とは言っても一人一人の能力は群を抜いているのだが。

「とにかくく！…！片っ端からこの商店街を探せば見つかるわ…！
いくわよ…！…」

ガシッ！！

「だから何で俺だ！？

待て、せめて神楽嬢と一緒に行動させー」

雪路は有無を言わず姫史の襟首を掴むと金と叫びながら猛然の走ってゆく。

「しまったお姉ちゃんの暴走が……！！姉は私が追いますから！！」

ヒナギクは『そっちは任せます』というと、早速始まった雪路の暴走を止めるべく、後を追っていった。

「……早速精鋭部隊が崩壊しましたよ銀さん」

「……あの三人ならこの商店街は問題無いな。作戦通りだ」

「「嘘つけエエエー！！」」

ヒナギク達を見送ると銀時はよしと頷いて歩き出した。

*

商店街の奥まで来た一行だったが突然神楽がピタリと止まった。

「ん？どうしたの神楽ちゃん？」

「このメロディは……!!」

チャンチャンチャンチャン

チャンチャンチャンチャン〜チャン、チャーラララ〜チャーラララ
〜ラ〜 (渡鬼的なテーマ)

神楽達とは反対側のお店から聞こえてくるなんか馴染みのあるテーマ曲……

それは毎週木曜日、どっかの和書屋の店主とその娘達が繰り広げる誰もが知っているドラマだったり無かったり……

「渡る世間は鬼しかいねーよコノヤローアル!!」

しまったネ、この時間は第五期の再放送の時間だったヨ」

「いや神楽ちゃん、今は仕事中だからね」

神楽があちゃーと頭を手で押さえるのを見て新八が釘をさす。

「心配いらねーよ神楽、ウチのブルーレイには自動録画になってから」

「何テキトーな事言ってんですか!!ウチにブルーレイなんてねーよ!」

しかし神楽は二人の事はまったく耳に入らないのか、一人で悩んでいる様子。

「今回は第五期スタートの再放送だから二時間スペシャルネ。」

恒例の 倉に娘達が全員集合する話からドロドロの嫁姑劇が始まる

アル」

「ちよつと神楽ちゃん？」

「銀ちゃん！！」

神楽は暫し考えた後、ビシッと手を上げて銀時を見た。

「私はあの奥の電気屋が怪しいと思うアル！！」

「ただ渡鬼見てえだけだろ！！」

何が怪しんだよ！？」

すかさず突っ込む新八だったが、ハヤテがそれに首を振って答えた。

「いや、僕も神楽さんと同意見です。

ピ 子さんの演技が……じゃなくて僕の経験上貴金属は得てしてあ
あいう場所の付近に落ちている事が多い」

「オメーも結局渡鬼見たいんかいイイイイ！！！！」

銀時と新八のツッコミが見事にハモリ響く。

「オメーそんなキャラだっけ！？

何か最近ボケの回数増えてね！？」

「何を言ってるんですか。

第五期と言えば、初めてハイビジョンになったシリーズですよ！」

「本 家の跡継ぎ問題の葛藤も一番過激だったネ！あの争いもポイ

ント高いアル」

「知らねーんだよオメーらの感想なんて!!
跡継ぎ問題より依頼を解決させるべきでしょ!!」

新八はそう叫んで二人を引き戻そうと……

『吉は……（石坂浩 的なナレーション）』

「は、始まった!!」

石坂浩 的なナレーションが流れ始めるのが聞こえると、二人はハッとして顔を見合せて頷き合う。

「見……探しに行つてきます!!（くるアル!!）」

「オイイイ!!仕事放つぽって何やってんだアア!!」

銀時が叫ぶが二人は例の電気屋に走って行ってしまふ。

「銀さん、二人は僕が何とかしますから……公園の方をお願いします」

銀時が『頼む』と頷くと、新八は慌てて二人を追っていった。そんな様子を見ていた蒼妃に急いで振り返る銀時。

「すみません。ホント馬鹿な奴らで……」

「いえ、本当に賑やかで楽しいですね。銀さんの周りは」

神楽達の消えていった方向を見てクスリと手を当てて笑う蒼妃。

「そんな事無いですから。」

あの従業員達は変な奴等でまったく……」

「フフ、皆笑顔に溢れているもの。羨ましいわ」

微笑んでそう言われてしまっは銀時も無下に返す事も出来ない。

「あゝ、んじゃ公園の方に行きましょうか」

「ええ。あ、銀さん」

蒼妃は先に行こうとした銀時の袖を引いて止めた。

「なんです?」

「敬語では無くて普通に話してくれて構いませんよ?」

私とあまり年は離れていないでしょ?」

「えつと……」

銀時が躊躇うように言葉を濁すと彼女は口に手を当てて拗ねた仕草をしてみせる。

「まあ、それとも私ってそんなにオバサンに見えるかしら?」

「は!?! いやいや、んなまさか……!!」

「じゃあ、お願いできますよね？」

そう言っつて少し悪戯っぽく笑う蒼妃に銀時はため息をついて頷いた。

「……………分アった。んじゃ敬語抜きでよろしくな、蒼妃さん」

「ええ、ありがとうございますね銀さん」

そんな訳であつという間に空中分解した万事屋精鋭部隊だったが、結果的に手分けして搜索するという形になったのだった。

*

〈商店街〉

「よし！今から商店街にこの立て札をたてましょう」

雪路が取り出したのは『青い翡翠のペンダント知りませんか？』という立て札だった。

「確かに、一日だけなら周りのお店に許可がとれるかもね」

「ふむ、お前にしてはちゃんとした考えだな」

二人もこの立て札を置く事に賛成のようだ。
早速作業を始めよう」と

「いや、まだよ。更にこの立て札とセットでコレを置くのよ!」

「「そ、それは……!」」

雪路が更に取り出したのは小さな箱だった。

箱の上の面には四角い穴が空いていて貯金箱のような箱になっている。

そして前面にはこう書いてあった。

『白皇の生徒専用。』

桂先生がお腹いっぱいになるように皆協力しよう!

一口 100円から』

ガシツ!!

「お姉ちゃん……?」

そんな物置いたら……本気で殴るわよ?」

「うん、冗談です……調子に乗りました、ホントすみません」

ヒナギクは雪路の襟首を掴んで締め上げると雪路は慌てて謝った。
がしかし、本当に冗談だったかどうかは定かでは無い。

「……やれやれだな」

*

『ーじゃない!!』

『それは違うよ!!』

電気屋の前にはテレビにジッと見入っている変な三人組がいた。しかも何故か神楽は涙を流しテツシユで度々鼻をかんでいて、ハヤテも時おりうんうんと頷いている。新八は困惑顔でその様子を眺めている。

「ねえ二人とも、そろそろ依頼を……」

「グスン、黙ってるヨロシ!!」

「ここからが良い所ですから、もう少し!」

二人には新八の言葉は届いていないようだ。

「いや、何で感動してるの神楽ちゃん?これそついでドラマじゃないでしょ!?!」

「グスツ……」

「何でだよ！？何処に感動する要素があるの！？」

行き交う人々は突っ込む新八に不審な目を向けていた。

*

商店街メンバーが的外れな行動をしている一方、銀時と蒼妃は談笑しながら公園に向かっていた。

「フフ、でも本当に姫君の言う通りの方ですね」

「え？」

「ええ、姫君が色々とアナタの事を話をしましたわ。『変だけど興味深い男がいた』って面白そうに。素直じゃないから決して認めようとはしないけれど」

蒼妃が会話を思い出すように銀時を見た。

「男に噂されてもなア……」

「つか変な余計な」

「姫君がそんな事言うなんて珍しいですから、私もどんな人なんだろうって気になって……それで今日来てみたんですよ」

「はあ」

銀時はよく分からないが取り敢えず相槌をうつておいた。

「そうしたらやっぱり……」

私にも少し分かった気がします。姫君が何で銀さんの事を面白そうに話すのか」

「誉められてるって受け取っていいのかい？」

「ええ、勿論」

蒼妃は銀時に向けてそう微笑むとまた歩き始める。

「私やあの人達とは違って……」

真っ直ぐですものね……」

「……？」

その時、蒼妃が消え入りそうな声呟いたのに気付いた。

銀時はその酷く悲しそうな表情が引つかかったが、敢えて聞かない事にした。

ドン！

「あ！」

「！……」

すると突然、蒼妃に小さな男の子がぶつかってしまった。

「あ、大丈夫？」

「ごめんなさいー!!」

少年はペコリと素早く謝ると、彼女から急いで去っていきつとー

「ちょっと待った」

「!?!」

銀時が少年の右手を掴むとグイと上に上げた。

男の子の右手から小さな財布が出てきた。

「まあ、それは私の……」

「やっぱりか……」

それは蒼妃の羽織りのポケットに入っていた彼女の財布であった。

そう、少年はスリだったのだ。

「はいよ、財布」

「あ……」

銀時は少年から財布を取り返すと、蒼妃に返した。
そして腕を掴んだまま少年を見下ろす。

「くっ！ー！離せよ、離せ！ー！」

「何言ってるんだオメー、人様の財布スっておいて」

「うるさい！ー！離せよ！ー！」

銀時が少年を持ち上げると、ジタバタと暴れ始めた。

「オイ……お前何でこんな事してんだ？」

「うるさい！ー！金が無いと、俺のばあちゃんが……！！
ばあちゃんが死んじゃうんだよ！ー！」

「……あん？」

「え？」

少年は涙声になりながらそう叫んだ。思わぬ発言に銀時と蒼妃は呆気にとられたように少年を見る。

「銀さん、少し話を聞いてみましょう」

「ああ」

銀時はゆっくりと少年を下ろすと、彼は少し落ち着いたのか暴れな
くないで息を切らしている。

「ねえ、どうしたのか私達に教えてくれないかしら？」

「……………」

優しく微笑みかける蒼妃に少年は俯きながらも頷いた。
どうやら警戒心を緩めてくれた様だ。

「ばあちゃんを助けてよ!!」

*

二人はここからすぐ近くの少年の家に急いで案内された。

家はこの近辺には似つかわしくないほどボロい一軒家。

玄関から家の脇に回ると、

網戸が無く、木製の雨戸がそのまま窓替わりになっていた。

そこから家の中に案内されると、すぐに居間に敷かれた布団に真っ青な顔の表情の老女が寝込んでいるのが目に入ってきた。

少年はすぐさま布団に駆け寄る。銀時と蒼妃もそれに続いた。

「僕のばあちゃん、病気なんだ。昨日から急に発熱して………どんどん悪くなってるみたいで……」

病院にいきたいけど、ウチはばあちゃんと二人暮らしだから、そんなお金が無くて……」

その時、何を思ったのか蒼妃は布団に寄ると、老女の腕を取って暫

く考えるように目を閉じた。

銀時も少年も何事かとその様子を見守っていると、彼女は目を開いて言った。

「銀さん、お椀と何かかき混ぜる物を持ってきて下さい」

「あ、ああ」

「アナタは水を汲んできて。少しでいいから」

「え、あ、うん！」

銀時も少年も何の事が分からなかったが、真剣な様子に頷かざるを得なかった。

数分後、彼女の前にはお椀とスプーン、水の入ったお椀が置かれる。すると、彼女は財布中から粉末の入った小さな袋を3個取り出した。

（何する気だ……？）

銀時達はその様子を見守るなか、蒼妃はその3種類の粉末をお椀にそれぞれ入れると、適量の水と共にかき混ぜる……

そしてそのお椀を少年に手渡した。

「……………これをおばあさんに飲ませてあげて」

「え？」

「薬だから」

「あ、うん！」

少年はお椀を受け取ると、うなされている老婆に近づいて話しかける。

「ばあちゃん、口を開けて！！」

「……………」

少年は何とか老婆にお椀の中身を飲ませてあげる。

「……………」

すると、みるみると老婆の血の気が戻っていき顔は青から肌色になつてゆく。

更に苦しそうにうなされていた症状は無くなり、安らかな表情で寝息をたて始めた。

「ばあちゃん！！」

少年は安堵と喜びから思わずそう叫び声をあげる。

「これで、大丈夫よ。後は暫く安静にする事」

「あ、うん！ありがとうございます！！」

蒼妃も安心したように微笑むと少年は頭を下げた。

「それより……」

「?」

彼女は少年の手を取ると、顔を上げさせた。

「もうこんな事をしてはダメよ。どんな理由があっても、その綺麗な手を悪い事に使ってしまったてはいけないわ……」

「ごめんなさい……」

蒼妃はしょんぼりと俯く少年の頭を優しく撫でた。

「辛かったら一人で抱え込まないで、周りの人に助けを求めて助けてくれる人は必ずいるからね?」

「……うん」

少年に諭す様子はまるで母のようにだと銀時は何となくそう思った。

少年を老女の傍にいてやるように言って、銀時と蒼妃が縁側から帰るつとすると……

「あの一!」

「？」

「これ、お金はないけど……」

少年が蒼妃に手渡したのは、青い翡翠のペンダントであった。

「まあ、これは……」

「さつき拾ったんだ。」

本当は貰っちゃおうと思ったんだけど……やっぱり持ち主の人が悲しむだろうから代わりに交番に届けて欲しいんだ」

先程彼女が言った事が少年にこういう善意を駆り立てたのだろう。

「ありがとう、探していたのよ」

「え？お姉さんのだったの！？」

「ええ」

そう、これは紛れも無く蒼妃のペンダントであった。思わぬ所で依頼が達成されたのだ。

「あ、あのごめんなさい。」

勝手に拾ったりして……」

「いいえ、ありがとう。」

アナタみたいな優しい子に拾われていて良かったわ」

そんな笑顔に照れたのか、少年は顔を赤くして笑うと、もう一度深々と頭を下げて二人にお礼をいった。

そして少年は家の中に戻っていき、二人はその場から歩き始める。

「大事で無くて良かったですね」

「んだな」

銀時はそう言うと蒼妃に目を向ける。

「しかし驚いたな……」

「アンタもしかして医者か何かか？」

「いえ、そんな大層な者ではありませんよ」

彼女は手を振ると、困ったように微笑んだ。

「んじゃ薬師とか？」

「フフフ、どうでしょうね」

銀時の言葉に曖昧に答えると、蒼妃は商店街の方に目を向けた。

*

〈商店街〉

「皆さん、本当に迷惑おかけしました」
「手伝ってくれて感謝する」

商店街の入口には銀時達の他に雪路達、神楽達も集まっていた。
蒼妃と姫史がそれぞれに頭を下げてお礼を言う。
因みにペンダントが見つかった事しか言っておらず、他の事は一同には報告していなかった。

「いえ、見つけて良かったですね。どっかの誰かさんは暴走し過ぎただけだね」

「アハハハハ……」

ヒナギクが呆れたように雪路に目を向けると雪路はゴメンゴメンと困ったように笑った。

一方……

「グスン……」

「グスツ……」

「……ズズ」

電気屋にいたと思わしき三人は目頭を押さえていた。

「……………オイ、オメーら何で泣いてんの？ずっと渡鬼見てたのか？
つーかアレ感動するドラマじゃ無くね？」

「違うアル。電気屋の家の人のテレビを覗いてたら『幸せの見
方』やってたアルよ……………グスン
それで思わず見入っちゃったアル…グスン」

「オメー何さりげに人様の家に侵入してんだ！！」

銀時はそう叫ぶと神楽を叩くが、隣の新八とハヤテが口を開く。

「二人は最後に幸せを見つけたんだよ……………グスッ」

「そうですね。僕達もあんな風に見つける事が出来るかな…グスン」
「きつと出来るよ。僕達はまだ歩き始めたばかりなんだから、人生
という名の長い坂道を……………」

「オイ、メンドくせーよコイツら。何でペンダント探しの依頼で幸
せの見つけ方を探してくんだよ」

空を見上げる二人にはそんな銀時の言葉は聞こえていないようであ
る。

「あ、それより蒼姉、大丈夫アルか？二人きりのところを銀ちゃん
に襲われたりしなかったアルか？」

「心配してくれてありがとう、」

大丈夫よ」

蒼妃がクスリと笑ったのと同時に、『アホか』と神楽の頭を叩いた銀時。

後ろからの白い視線が送られている事は気付いていない様子。

そんな感じでペンダント探しの依頼は無事に終了した。

*

湊川姉弟はもう一度皆にお礼を言つと、商店街から自分達の家に戻つていった。

報酬は姫史が去り際に銀時手渡していた。

「んじゃ、今回は折半だな。」

半分は万事屋の分で、半分はオメーら姉妹の分な」

そう言つて報酬の半分を渡す銀時。すると慌ててヒナギクが手を前で振つた。

「え？私はいいわよ。」

「そんなつもりじゃー」

「大丈夫アルよ。協力して貰つたらちゃんと半分コアル」

「そついうこつた」

銀時はそう言うと、姉妹の分の報酬を雪路とヒナギクにそれぞれ渡した。

雪路は感動したように報酬を掴むと、叫びだした。

「これでご飯がお腹いっぱい食べられるわ〜！！良かった〜！！」

「お姉ちゃん……これでもう少しお金を大切に使ってよ？」

「うん勿論！！大切にするわ！！」

雪路のそんな様子を見て、ヒナギクは安心したように口元を緩め―

「あ、桂先生！！」

「雪路か」

「あー、こんな所にいた！！」

「へ？」

後ろから声が聞こえてきたので、振り返るとそこには薫先生を始めその他数人の白皇先生が歩いてきていた。

「アッレー？皆どうしたの？」

「どうしたのじゃねーよ。」

この間貸した金、今日までに返してくれるって言ったじゃないか」

薫がそう言うと、雪路がゲツと思い出したように顔をひきつらせる。

「私にもそう言いましたよね!」「私も!」

「僕も!」

「自分も!」

続けて先生達は雪路にそう迫る。つまり彼らはその為に雪路を探していたのだそうだ。

というか彼女はどれだけ借りているのだろう……

「あゝ、えっと……うん、返すわ。ちょうどお金入ったし……」

ガヤガヤ……

「それじゃ先生、また」

暫くすると、先生達は確認してぞろぞろと帰っていった。残ったのは呆然としている雪路一人。

「……」

そんな一部始終の様子を見て、ただ呆れているハヤテ達。

それでも雪路は冷や汗を流しながら、笑顔を作ってヒナギクに顔を向けた。

「あの〜、ヒナ……いやヒナギクさん」

「……」

「お金……貸して下さい……」

その後、木刀を持って怒る妹に正座をしてひたすら謝る姉の姿が商店街で見受けられたという……

第八十九訓 幸せとお金は必ずしも比例しない（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「じゃねエエエエエ！！」

伽藍

「ぶべらっ！？」

銀八

「オメーこれ何の小説だ！！」

ギャグはどうしたギャグは！！」

伽藍

「グフっ……すみません……次回からはちゃんとギャグに戻しますから……」

銀八

「ったくよオ、俺も本編で会わせてくれエエエエエ！！」

一同

（そっちか本音は！！！！）

銀八

「……んじゃ最初の質問な『銀さんに質問。どんな人がタイプですか？結野アナみたいなの？』
ハイスバリ答えましょう。」

勿論です。結野アナや蒼妃さんのようなタイプですねえ。まあ雰囲気

気で言えば分かると思います」

新八

「はあ……」

銀八

「続いている質問」ヒナギクに質問。銀さんとハヤテのどちらに妬いてたの？」

ヒナギク

「だから妬いてません!!」

どちらとかそういうのもありません!!」

銀八

「いや、俺に言われても？」

ハヤテ

「焼く？何をですか？」

銀八

「続いている質問」ハヤテに質問。とあるキャラで誰までになら勝てますか？」

質問がおかしくね？」

ハヤテ

「いや……どうでしょう？」

皆さんは超能力者ですから……」

伽藍

「ま、大体レベル3くらいなら何とかなると思っていますよ」

ハヤテ

「いやいや!？」

銀八

「んじゃ次の質問『姫史のロリコンな性格を見てどう思いますか?』

」

蒼妃

「そうですね……周りの皆さんにご迷惑をかけないのであれば……後は姫君の趣味ですから……」

銀八

「いやはや流石。出来たお考えだ」

ナギ

「いや、私は迷惑しー」

スパーン!!

ナギ

「何をするのだ!？」

銀八

「バカヤロー、授業中の私語は慎め。蒼妃さんが話されている途中

だろうが!!」

ナギ

「何だこの扱いの差は!!」

銀八

「次の質問『蒼妃さんに質問。銀さんの第一印象は?』」

蒼妃

「姫君が言っていた通り、面白い方だと思いますよ」

神楽

「それだけアルか?」

蒼妃

「ええ」

一刀両断!!!

神楽

「残念アルな銀ちゃん(笑)」

銀八

「……………次は最後の『蒼妃さんに質問。大企業万事屋についてどう思う?』」

蒼妃

「凄いですね。銀さんお一人でそんなに大きくされたんですか？」

銀八

「そりゃ勿論社長ですから。」

「いや、実は日本だけでは飽きたらず、海外支店の話も着々と進んで
いますよー」

神楽

「これ以上見苦しくなるまえに終わらせるアル」

新八

「そうだね？」

「それでは、また次回！！」

第九十訓 好きこそ物の上手なれ（前書き）

短編色々 【下田温泉篇】 短編色々 【新八の中編】 短編色々

【例の短編】 短編色々

【蒼妃達の長篇】

クラウドス

「とまあ、大体こんな感じの流れを予定しているそうです。あくまで予定ですから変わる事は多々ありますが」

ハヤテ

「何かと誤解も多いので、一応載せておきました」

クラウドス

「では、始めますぞ！」

第九十訓 好きこそ物の上手なれ

空一面を覆う灰色の雲…

荒れ狂う波は無差別に海岸に打ち寄せる…

そこに立ち荒れる海を見つめるのは立派な体格に厳つい顔の……

あっしの名前はブリトニー

見ての通りごく普通のお花屋さんだ。

今日もお花の香りに誘われて、

日本海まで来ちまった。

荒々しい波の雄叫びを聞いていると故郷である魔法王国“東中野三丁目”の事を思い出す。

おっと、うつかり秘密を喋っちまったがべらんめい。

お気付きかと思うがこの通り、

あっしの正体は……

見ての通りの魔法少女さ!!!

く世紀末伝説く

【マジカル デストロイ】

作：三千院ナギ

「ど、どうかな？」

いつも分かりにくいと言われるのでわかりやすくしてみたんだけど

……」

「……………えーと……………」

そ……………そうですね……………」

ナギの自室ではナギとハヤテが向かい合っている。

ハヤテはノートを見て呆然としており、ナギは何やら反応を待っていた。

「こういう不条理ギャグ漫画もたまにはありかなと……………」

「誰が不条理ギャグ漫画だ!!」

「まあ、確かに色々世紀末な感じはしますよ。これで雑魚敵を全員モヒカンにすれば何とかー」

「そういう意味の世紀末ではなアアアアアい!!」

ナギはドンと机を叩いてハヤテに訴えるがハヤテは困ったように笑うしかない。

「お前には、この壮大感が伝わらんというのか!？」

「いや、ある意味 you are shock なんですけど……………」

「よいか！？この日本海の荒々しさの中に今から始まるつとする戦いの猛々しさが表現されているではないか！！それくらいは分かるだろ！！？」

――――

???

「フハハハハ！！！」

ようやく見つけたぞブリトニー！！！」

ブリトニー

「む！！その声は……誰だ！？」

???

「オレはお前を倒す為、遙々日本海までやって来た……敵だ！！！！」

ブリトニーの前に何か黒い猫みたいな奴が現れた。

ブリトニー

「くそー！！敵か！！」

ならば戦うしかあるまい！！！」

敵

「そつだ！戦うしかないぞー！！！」

ブリトニー

「しかし敵というからにはお前、強いんだろうな!？」

敵

「いいえスミマセン!!」

あんまり強くはないです!!

序盤の敵なので」

「.....」

「.....ワクワク」

ハヤテの次はマリアが困ったようにノートを見るいた。
神楽も同じように座ってノートを読んでいる。

暫くしてマリアが口を開いた。

「あ...突っ込んだら負けって遊びですか？」

「どづいう意味だそれは!！」

ナギは自分の作品の良さを伝えようと身振り手振りでハヤテとマリアに訴える。

「3P目にして早くも敵が登場!!ハラハラドキドキの展開では無いか!！」

(だけど自分で強くないって言ってますし!!)

(そもそも何の旅なんですか! ?
何の! !)

「何故二人とも苦虫を噛み潰したような顔をしているのだ! !」

若干涙目になってナギが突っ込むと神楽がノートをパタリと閉じた。

「ナギ、面白いアル! !」

((ええ! ?))

「おお、流石は神楽だ! !」

驚く二人に気付かず神楽はナギにキラキラした目を向ける。

「だから私も続きを考えて見たヨ」

((なんですとー! !))

【聖女の槍】
クラウン・ランス

・トランプ、装備

相手プレイヤーが攻撃宣言をした時に発動。

自分のモンスター一体に装備する事が出来る。

相手モンスターがこのカードが装備されたモンスターと戦闘する場合、相手モンスターは全てカード表記の攻撃力、守備力での戦闘となる。

「……………」

ハヤテとマリアはエンジンが切れたように煙をあげて壁に頭から寄りかかる。

「おお！！凄いぞ神楽！！」

この感じが欲しかったのだ！」

「勿論アル」

一方何故かナギはソレを褒め、神楽はエツヘンと胸を張る。

「凄いですね…………二人とも」

「ええ最早会話が異次元過ぎてついていけません…………」

ハヤテとマリアはあの漫画を理解し合う二人をある意味恐ろしく思うのだった。

第九十訓　好きこそ物の上手なれ

く万事屋く

『さあ、今日もいってみましょう！！男性力クイズ

“女性の気持ち3”！！』

14インチのテレビから番組の音が閑散とした室内に響いている。

銀時はだるそうに椅子に寄り掛かり机に足を出してテレビに顔を向けていて、新八はソファに座ったままテレビを見ていた。

『はい、始めましたく

毎度お馴染みですが……

このコーナーは、ゲストに3の質問をして、その答えと解答者の男性陣の答えがどれだけ一致するかを競うクイズです。

試聴者の皆さんもご自分の乙女心への理解、男性力を確かめてみては？』

別に二人はこのコーナーを意識して見ている訳では無い。やることもやる気も無く、何となくグテーとテレビを付けているだけである。

『今日のゲストは今話題の、

×××さんです。

では、早速第一問行きましょう』

テレビは司会から選択肢の画面に移り変わる。

『Q1・アナタ（女性）は悲しくて泣いています。

好きな男性にしてもらいたい行為は次のうちどれ？

- 1・黙って手を握られる
- 2・そつと抱き締められる
- 3・一緒に泣かれる』

「……………2だろ」

「…1ですね」

何となく付けているだけだが、何となく答えてしまふ二人。

二人は答えの違いに互いを見合った。

「いや、2は行き過ぎでしょ。

こういう時は1が良いですよ」

「馬つ鹿オメー、女心が分かってねーな。悲しんでる時つてのは男が全部包んでやるくらい心安が必要だろ。だからオメーはこっちは来てからも彼女が出来ねーんだよ」

「彼女は関係ないだろ！！
大体銀さんだつてそんな人いないでしょ！？」

銀時の言葉に新八は焦りを誤魔化すように叫んだ。

「いやいや、俺には蒼妃さんという天女のような存在がいるからね」

「アンタ出会つてまだ一日しか経つたらんでしょ。
全然そんな関係じゃ無かつたでしょ！？」

「ったくオメー……」

大人同士の付き合いつてのはガキ同士の恋愛とは違えんだよ。
出会つてすぐに話が合うから付き合つとか、何も無いからおしまい
みたいな学生恋愛とは」

銀時は口に手を当てて欠伸をすると、顔を天井に向ける。

「長い目で色々考えんの。
色々と複雑な事情があんだよ、大人同士には」

「いや、長い目も何も……
昨日出会つたばかりでしょうが」

「それはアレだよ、運命だな。
間違いねーよ、うん」

新八の呆れたような言葉に銀時は勝手にうんうんと頷いた。

するとテレビから解答が……

『正解は……3です』

「いや、3はねーだろ」「

（屋敷）

「そういえばお嬢様のこの漫画ってそもそも最初はどんな感じなん
でしょうか」

「ああ、確かに主人公が日本に来てから始まってますものね」

ハヤテとマリアが何気ない疑問を口にすると、ナギがサツと近づい
て来た。

「何だ二人とも。何だかんだ言っても気になるのだな。
仕方ない、だったら私がわかりやすく説明してやるっ」

「え、いや別にー」

「うむ。ではまずブリトニーの旅立ちからだな」

遠慮しようとする二人だったがナギはお構い無しに口を開いた。

注)わかりやすく理解する為に登場人物をこちらのキャラクターに当てはめています。
なお、これは妄想です

魔法王国“東中野三丁目”
ここは色々な魔法がありふれた世界です。

そんな国に住むごくごく普通の女の子ブリトニー。
しかし彼女には夢があった。
それは……

〜ブリトニーの家〜

ブリトニー(マリア)

「お父さん、お母さん!!」

私、綺麗な香りのするお花達がいる地球に行ってみたいの!!」

そう。地球に行って生活する事であった。

しかしブリトニーは両親にとっては大切な愛娘。
当然簡単に許される訳にはいかず……

母(新八)

「ええ！？何を言ってるのブリトニーちゃん！！そんな事……ねえ、お父さん？」

父（銀時）

「ふーん、行けばいいじゃん。頑張ってね」

ブリトニー（マリア）

「……………え？」

母（新八）

「ちよつと銀さん！？台本と全然違いますよ！！ここは

『何イ！？そんなこの馬の骨とも知れん連中がいる世界になど行かせるかア』でしょ！？」

父（銀時）

「ああ？別に良いんだろこんな感じで。物語の前半部分の会話なんて話が進めば大体読者は忘れんだだよ」

母（新八）

「いや、何の話してんですか」

父（銀時）

「大体な、物語の冒頭で色々伏線張りすぎると後々回収するのを読者は勿論作者まで忘れて、思い出した頃にはもう取り返しがつかない感じで、何かグダグダのまんま打ち切りなんて事態を招きかねーだろ？」

母（新八）

「だから何の話ですか！！」

これわかりやすく説明するためのアレですよ！？ちゃんと台本通りにならないとー」

父（銀時）

「前半部分の台本なんて返ってテキストだったりする方が良いんだよ。例えるならこれ以降の台詞は全部『そーですね（いいとも風）』くらいだな」

母（新八）

「どんな漫画だアアア！！」

そんな訳で

両親にはキツく反対されたけど、ブリトニーは二人を何とか説得して地球に旅立つのであった。

お花の香りに誘われて……

そして彼女はお花屋さんでアルバイトを始めます。

大好きなお花に囲まれ毎日がハッピーなブリトニーちゃん。

しかし……そんな平和も長くは続きません。

なんとブリトニーの住む町に、突如現れた12次元獣達が襲いかかってきたのです！！

大好きなお花畑を荒らす怪物達を倒す為、ブリトニーは魔法少女として立ち上がるのでした。

「と、ここまでが第一話だ!!」

「……………」

自信満々に語るナギを取り敢えず黙ってみる二人と目を輝かせている神楽。

「どうだ?」

「どうだって……ツッコミ所がありすぎて何と言っているのか」

「というか何ですかあの絵面は。何で私なんですか」

二人は各々反応に困っているが、ナギはお構い無しに勝手に頷くと、手を広げてみせる。

「では、次にいくか!」

(ええ!?まだ!?)

楽しそうに語り始めるナギに二人は顔を見合わせた。

〈万事屋〉

相変わらずテレビからはテンションの高い司会の声が鳴っている。

『では次行ってみましょう!!』

Q2・好きな彼と初めてのデートです。アナタは何処に誘われたら嬉しいですか？

- 1・まずは無難に 喫茶店
- 2・太古を感じる！化石博物館
- 3・敢えて変化球！？鉄道歴史館

「「1だろ(でしょ)」」

二人は画面を見ると即答した。

「つてか銀さん」

「あん？」

新八はテレビから視線を銀時に向けると口を開いた。

「さっきの運命とか言っていましたけど……
蒼妃さんと会った時にビビったときたんですか？」

「いやいや、ビビったところかもつ落雷に打たれる感じ……
いや、もうアルテマくらった感じだな」

銀時は思い出すように頷いている。

「アルテマって……
どんな運命ですか。崩壊……?」

「人の事より、オメーは自分の事を何とかしろ」

「アンタはお父さんか!!」

「つか放つといてくんない!?!」

するとまたテレビから解答の音が鳴り始めた。

『正解は2でした』

「え……マジ?」

〈屋敷〉

相も変わらずナギは身振り手振りで自分の作品のストーリーを二人に語っている。

「それでだな、ブリトニーが砂糖不足により八次元への旅を決意する頃、地球の石油資源を狙って

M2983星雲からカマキリ星人が攻めてきて、太古の地底アラスカ人と戦争になりー」

「えっと、ストップですナギ」

「むぐっ！ー！」

暴走して話しているナギの口をマリアは手で止めた。

「何故止めるのだ！？せつかく良いところだったのにー！」

「どこがですか？」

「このあと、ようやくブリトニーが想いを寄せる三途ノ川先輩が出てくるのに……」

「ああ、あの星みたいな奴ですか？」

――

先輩の事をいつも遠くから眺めるブリトニー（マリア）

マリア

（……また私ですか？）

ブリトニー（マリア）

「あの先輩、お弁当作ってきたんですけど……一緒に食べませんか？」

三途ノ川 ハヤテ

「ああ、いいね。食べようか」

ハヤテ

(アレ、僕出てますよ?)

マリア

(だから何なんですかこの絵面は……)

先輩の事が好きで好きでたまらないブリトニー。
しかしその想いは伝えられない。魔法少女だから……という訳では
ない。なぜなら先輩には…先輩には……

既に妻と子供がいたのだ……!!

ハヤテ
三途ノ川

妻

子供1 (神楽)

子供2 (馬鹿神父)

ハヤテ

(い…意外と本当に衝撃の展開ですね)

マリア

(絵面は納得出来ませんけど)

しかし悪い魔女の力でなんと!!
先輩は星の姿に!!

これにより妻は病に……

妻^{ナギ}

「うーん……」

子供達は不良に……

子供1（神楽）

「うおりゃアアアアア!!」

子供1は夜な夜な町を徘徊し、ストリートファイトを繰り広げ……

子供2（馬鹿神父）

「ちっ!!リセット……と」

子供2は引きこもりに。

ネットの対戦ゲームに負けそうになったら回線切断だぜ!!

ハヤテ

（おお……!!）

マリア

（い、意外と緊迫してきましたよ?）

ブリトニーは先輩の妻と親友だった為先輩を元に戻す決意をする！
しかし元に戻ったところで先輩は妻の所に帰るだけ……
ブリトニーと結ばれる事は決して無い！！

でもこのまま旅を続ければ先輩と一緒にいられる。
星の姿だけど……

さあどうするブリトニー！！！！
その時、ブリトニーの決断は………！！

【悪夢の牢獄】

ナイトメア・プリズム

・速攻魔法

このカードを発動してから3ターンの間は全てのトラップ、魔法、
モンスター効果は発動出来ない。

「「……………」」

またも二人は煙をあげて壁に倒れ込んでしまう。

「神楽は天才だな……………」

「当然アルな」

しかしナギと神楽は何故か理解し合って頷いている。

「い、意外と本気で続きが気になったのに……」

「ナギの漫画だということを忘れてましたわ……」

ハヤテとマリアはよく分からない気持ちのまま暫く壁に寄りかかっていた。

（万事屋）

『ではでは、最後の問題です。Q3・アナタ（女性）は好きな男性の意外な特技を見てしまいました。一体それはなんですか？』

- 1・腕が伸びる
- 2・幽霊を刀に合体させられる
- 3・地球割りが出来る

ブツン……

銀時は机に置いてあったリモコンの電源ボタンを押してテレビを消した。

「ふあゝあ、くだらねー番組だなあオイ」

「あ、銀さん。今日の深夜、

“一昨日のショー”やるらしいですよ」

「マジでか」

新八は新聞のテレビ欄を見ながらそう言った。
そんな感じで万事屋は今日も平和です……

*

夜もふけて、暗くなったナギの部屋ではマリアがノート冊子に書かれた漫画を捲っていた。
ナギは寝室で爆睡中……

すると扉が開き……

「あれ？マリアさんも？」

「あ、ハヤテ君……」

やって来たのはハヤテだった。
執事服のままマリアに近づいてくる。

「『マリアさんも』って事は、ハヤテ君ももしかして……」

「ええ、お嬢様の漫画をもう一度読んでみようかと……」

ハヤテはそう言うと、机の上にあったノートを一冊手にした。

「せっかくあの子が一生懸命描いたものですからね」

「そうですね。もっと理解してあげないと……」

マリアの言葉にハヤテは頷くと、ノートを開いた。

「あとブリトニーちゃんと先輩の続きが意外と気になって」

「あはは。私も少し……」

マリアはハヤテに振り返ると悪戯っぽく微笑んだ。

「でもハヤテ君」

「なんです？」

「結局ブリトニーちゃんはどこかを選ぶんでしょう？」

「一緒にいる事を望むか、想いが届かないと知って正義のようなものを貰くか……」

少し表情を真面目にしてノートを進めるマリア。

「あ、ナギったらこの先、描いていませんわ」

「はは、じゃあ結局お嬢様も決めかねてるんですかね、この恋の結末は？」

「そうですね……たった二つなのに……選ぶのは大変なんですね」

するとマリアはノートを閉じてハヤテに目を向けた。

「ハヤテ君はしっかりと選ばないとダメですよ？」

「え？」

ハヤテは唐突な言葉に思わず首を傾げるが、マリアは微笑むだけだった。

「じゃあ、そろそろ私は休みますね」

「あ、はい……そうですね」

二人はノートを元の場所にしまうと、ナギの部屋を後にするのだった……

ハヤテにも、いつか大切な何かを選ばなければいけない時がくるのかも知れない。

その時、きつと今の言葉は自分に決断する一步を与えてくれる気がする……と彼はフと思うのだった……

因みに……

〈万事屋〉

『バギッツ!!!』

「『ああ!!!』」

テレビの画面ではショーが思いきりアップラーを食らった瞬間、銀時達三人は顔をしかめる。

そして三人は思わず画面に向かって叫んだ。

「『『立てエエエ!!!』」

立つんだシヨオオオオオオオオオオオオオオ!!!』」

翌日三人が寝不足になったのは言うまでもないだろう。

第九十訓 好きこそ物の上手なれ（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「最初の質問『ハヤテに質問。神楽達と一緒にポケに回った感想は？』」

ハヤテ

「やっぱり難しく思いました。でもポケてるつもりは……本当に見たかっただけなんで」

銀八

「天然ポケだなコイツは。んじゃ最後の質問『咲夜と千桜に質問。二年後のヅラはある男との間に子供を作る関係だったけど……どう？』」

咲夜

「ポケも度が過ぎたらアカンな。最早手のつけられようがない事態になってるやん。まあ突っ込める範囲なら……」

千桜

「いや最早ポケのレベルじゃ無いですよ。キャパシティ超えちゃってますよね……」
「突っ込む突っ込まないの問題では無いかと……」

銀八

「んじゃ今日はここまでだ。
また次回もよろしく頼まア」

第九十一訓 仕事とプライベートはキッチリ分ける

「ハヤテ、もう仕事はしなくていいぞ」

「……………え？」

とある日の三千院屋敷……………

楽しそうに掃除に勤しむハヤテに突然ナギがそう声をかけた。

「そ…それはその……………クビって事ですか？」

「は？いやいやそうじゃ無くて……………執事の仕事をしながら試験勉強は大変だろ？だからさ……………」

ナギは椅子に座り直すと、ハヤテに顔を向ける。

「試験終了までは……………執事の仕事は休みで良いつて事だよ」

「え、ええ！？何をおっしゃいますかお嬢様！！
で、出来ますよそれくらい！！
そんな気を遣われなくても！！」

ハヤテは慌てて両手を大きく振ってみせる。

「ぼ、僕にかかれば勉強と仕事の両立なんて……………
コーデイーターが量産型モビルスーツを扱うくらい楽勝で……………」

「ならまた成績が悪かったらクビって事にするか？」

「……………」

「どうなんだ？ん？んん？」

ナギの言葉に胸を押さえて何も言い返せないハヤテ。

「ま、そういう訳だからしっかりと勉強しろ。せつかくの主の好意は素直に受け取っておけ」

「お、お嬢様……………」

「その代わり！！」

ビシッとハヤテに指を差してナギは顔を近づけた。

「テストが終わったらしっかりと遊んで貰うから覚悟しておけ！！
よいな！！」

「あ、はい……………わかりました」

こうして、ハヤテは暫く執事を休む事になったのだった。

第九十一訓

仕事とプライベートはキッチリ分ける

「しかし…」

おつきの執事がいないというのはちょっと不安ですね…」

「いやいや、何を言ってるのだマリア。

私だって子供じゃ無いのだ!!」

別におつきの執事が常についていなくても日常生活など……
それに神楽達もいるではないか」

「まあそれはそうですが…」

マリアは考えるように頬に手を当てると、いきなり後ろの大型テレビが付いた。

『こんな事もあるつかと!!』

「「!!」」

いきなりテレビに映ったのはクラウドだったが、

しかし次の瞬間、ナギは椅子をテレビに叩きつけて粉々にした。

「何だクラウス……」

テレビが勿体無いじゃないか……」

『い、いえ……』

すると今度はナギの座っていたテーブルの小型テレビからクラウスが映った。

『こんな事もあるつかと、手配しておきました』

「手配？」

『ええ。臨時の……新しい執事です』

*

ハヤテは自室で机に向かっていている。その後ろには教科書を片手に、掛ける咲夜の姿。

「しかし本当に良いんでしょうか？仕事休んで勉強なんて……」

「まあええんちゃうの？」

「主の心意気は素直に受け取っとけばええねん」

どうやらハヤテの勉強を咲夜が見てあげているようだ。
ご存知の通り、咲夜も白皇に飛び級出来る程頭が良い。

「でも、お嬢様危なかつしいから……僕がついていなくて大丈夫何
でしょうか」

「ああ、それも心配いらんみたいやで〜
なんか新しい執事が来るみたいやし」

「!?!」

咲夜の思わぬ言葉にピタリと固まるハヤテ。
心なしか肩が震えているようだ。

「え……新しい……執事？

え？僕以外の……？」

「おー、らしいで〜」

「へーそうなんだ〜

へーへー。それは初耳ですね〜」

ハヤテは視線を危なかつしくさ迷わせて机から反らしてゆく。

「何や？動揺しとんのか？」

「べ、別に動揺なんてしてないですよ!？」

あー!新しい執事さんが臨時で来るなんて良いんじゃないですか!?
ほら、お嬢様危なかつしいし!!

まあ人見知りの激しいお嬢様の相手は僕以外じゃ大変ですけど!!

「まあでも、自分が来る前も別の執事がいたわけやし……」

「そ、そうですねよ！！だから良いんじゃないですか！！
ま！！相性つてものがあるでしょうけど！！」

誰の目にも明らかな程動揺しているハヤテ。
しかし彼は頭を二三回振ると、机に向かう。

「そんな事より勉強ですよ！！」

勉強！！せっかくのお嬢様のご好意を無駄にしない為に！！」

「でも、そうしてる間にナギと新しい執事が仲良くなって……」

「はは、別に仲良くなるのは良い事じゃ無いですか。
そんな事より勉強ですよ！！勉強！！」

ハヤテはペンを取ると、ノートに向けて走らせる。

「新しい執事」 A n e w b u t l e r

A n e w b u t l e r c o m e s ……

A n e w b u t l e r c o m e s s o o n ……

A n e w b u t l e r c o m e s s o o n d e a d ……」

「いやいや、不吉な言葉をそつと英語に混ぜるなや……」

咲夜はパタリと教科書を閉じると立ち上がって扉に歩いていく。

「え？咲夜さん？」

「屋敷だと気になって集中出来へんやろ？
だから移動や。そのついでにどんな奴か見といたらえつやん」

「は、はあ……」

ハヤテは言われるがまま、参考書やノートを持って、それに続くことにした。

*

「新しい執事なんぞいらん！！」

ハヤテ以外の執事など私は決して認めやせんぞ！！」

『し、しかし今回は非常に素晴らしく……！！』

「関係ない！！」

ハヤテ以外の執事など、同じ空気も吸いたくない！！
大体私は……」

『ご心配無く……』

ナギがテレビに向かって何かを叫ぼうとすると、横から声が聞こえてきた。

『ナギお嬢様はきつと私を気に入りますから……』

「え？」

「な……お前！！」

マリアとナギが振り返るとそこには……

『はじめまして。』

メカ執事13号です』

「「……………」」

ハヤテの恰好をした執事ロボットがたっていた。

「よし、では牧村先生の所に送り返せ!!」

「もう爆発オチなのは見えましたからね」

『おや?』

二人は呆れたように13号に背を向けるとテレビに向かってそう言った。

そんな様子を扉の向こうからひっそりと覗いていたハヤテ達は……

「はは……なんだ。」

結局こんなのだったんですね」

「何やつまらん……」

ちよつと期待しとつたのに。

これなら小太郎を行かせた方が面白かったわ」

「いやいや、それはそれで大変ですから」

ハヤテは安心したように笑うと、扉から離れる。
二人は勉強を再開するために、移動した。

*

〔万事屋〕

「ちゅー訳で、今日夜までハヤテに一部屋貸したってくれ」

そんな二人が向かった先は屋敷に隣接する万事屋である。
いくら執事がアレでもやはり屋敷にいと仕事が気になって仕方ないので、少し離れた場所に身を置こうというのが咲夜の意見だった。

「ええ、勿論構いませんよ。」

ハヤテ君は銀さんの部屋使って貰えれば」

「すみません、こんな突然」

「いやいや、普段は僕らがお世話になってるんだから」

新八は大袈裟に手を振ると、銀時の部屋に案内する。
因みに机や椅子は咲夜の計らいで執事達が簡単な物を運んで来ていた。

「んじゃ俺達は邪魔にならないように屋敷にいくか」

「そうですね」

銀時は机から立ち上がると、大きく伸びをして歩きだそうと、

ドン！！

「ん？」

いきなり神楽が居間のテーブルを叩いた。

何事かと四人は目を向けると、神楽が

「ハヤテ以外の執事……それは大変ネ！！もしかしたらソイツ、三千院屋敷に乗つとるつもりかもしれないアル！！」

「アホかお前。明後日の試験が終わるまでのただの代理だろ」

「でも銀ちゃん！！」

代理で来た奴がヒロインをさらっていく話、よくあるヨ！！ソイツももしかしたら……」

神楽の言葉に銀時は呆れたようにため息をつく。

「昼ドラの見すぎなんだよお前は。んな事あるわけねーだろ」

「でも用心するに越した事は無いアル！！ナギの執事は絶対ハヤテヨ！！」

「神楽さん……」

神楽を感激したように見つめるハヤテ。

「そんなパツと出の奴に奪われちゃダメアル!!
ナギの執事はハヤテだけネ!!」

・人物名鑑

【クラウス】

三千院家執事

「そうだね。じゃあ僕達が屋敷でナギちゃん達の様子を見てきましようか」

「当然アル」

新八が人差し指を立ててそう提案すると、神楽は大きく頷いた。
まるで今から追い出さんばかりの勢いだ。

「まったく仕方ねーな……」

銀時は面倒臭そうに頭を搔くと、ハヤテに目を向けた。

「んじゃ、ちよっくら行ってくっから……オメーは自分のやるべき事をやってる」

「皆さん……」

ええ、わかりました」

「ま、これで大丈夫やな自分」

ハヤテは嬉しそうに頷くと、咲夜がポンポンと肩を叩いて笑った。

そんな訳で銀時達は万事屋を後にして屋敷に向かって…

「つても、あんな口ボなら速攻でナギに愛想尽かされてるやるうけどな」

「ハハハ……」

残った二人は苦笑すると、万事屋で勉強を再開する訳だが……

これがハヤテの油断であった!!

〈屋敷〉

『おや？』

これはもしかしてナギお嬢様のお描きになった漫画ですか？』

「わー!! 何勝手に見てんだよお前エエエエエエ!!」

ナギの室では13号がパラパラとナギのノートを捲っていた。ナギは慌ててそれを奪いとる。

「ていうかさっさと帰れよバカー!！」

『ハハハ。別に帰るのはいいんですけど……
下手くそな漫画ですね〜』

「な!!!なんだとオオオオ!!!」

13号のストレートな言葉にナギは怒りのあまり身を震わせる。

「きつ!!きつ!!貴様……!!」

お前みたいな口ボに私の漫画がー」

『でもキャラクターのインパクトはありますよね』

「……ん?」

ナギが13号を指差し怒鳴ろうとするが思わぬコメントにそれは遮りられた。

「構図の取り方や、セリフもセンスを感じますし、絵も悪くありません。

ただ展開が急すぎて、せつかくの良い部分を殺しています。もっと読者の事を考えないと……」

13号はナギのノートを開いて、彼女の目線と同じくらいの高さに屈んで説明していく。

「そ、そうなのか……?」

『はい。お嬢様は頭が良いので理解力が人よりも高いのです。』

ですが読者は初見ですし、そうはいきません』

13号は立ち上がると、漫画が沢山入った棚の一番上を指差す。

『こちらの漫画、読んだ事ありますか?』

「いや…手が届かないから読んでいない」

『では参考になるのでお読み下さい』

「あ、うむ…」

ナギの机に幾つかの漫画を積むと、ナギは言われた通り机に座って漫画に手を伸ばそうとする。

「え?」

すると、彼女の目の前に紅茶の入ったカップが現れた。

『ローズティーです。』

心が落ち着いてゆっくり読めますよ』

「え!?!?ていうかお前、いつの間に……」

『はは…メカ執事ですから…』

天道の道を知り、クロックアップで人より素早く動けるんですよ?』

「……はは、そうか」

13号の言葉にナギは思わず頬を緩めてしまう。

その様子を後ろから見ていてマリアは驚きを隠せない。
すると彼女の肩をトントンと何かが叩いた。

「まあ、銀さん」

「……よオ」

彼女が振り返ると、扉の所に銀時、新八、神楽が立っていた。
マリアが三人に近づいてくると、新八が『ハヤテの代わりにナギの
様子を見に来た』と説明した。

しかし、三人はナギ達の様子を見て首を傾げる。

「オイオイ、ありやどういこうった？」

「何か凄い仲良くなってますね」

楽しそうに談笑するナギと13号の様子を見ると、先程ハヤテ達に
聞いた話と明らかに違うのである。

「きっとナギに催眠術をかけたに違いないネ。
私、ガツンと言ってくるヨ!!!」

「あ、それはー」

マリアが先程の経緯を話そうとするが、神楽は13号の所にズンズ
ンと歩いて行ってしまふ。

「オイお前!!」

『おや?』

神楽は13号の所まで行くどビシッと指を突き付けて叫ぶ。

13号は振り返って八テナと首を傾げた。

『こちらの方は?』

「おお、神楽ではないか。

13号、私の親友の神楽だ。

神楽、コイツは13号だ」

『ああ、噂の三千院家の護衛の神楽さんですね』

ナギは神楽と13号を交互に指差しながら紹介をする。

「ム」

『おや?何か怒っておられます?』

神楽が自分の事を睨んでいる事に気付いた13号は尋ねた。

「当然アル!!」

お前一体何を」

13号はスツと人差し指を神楽の口の前に出すと話を止めた。

『そんなに怒られるとせつかくの可愛いお顔が勿体無いです。

笑顔の方が綺麗ですよ』

「ふん。私はそんな見え透いたお世辞で落とせると女じゃ無いネ」

13号の言葉に神楽は顔色一つ変えずに見返した。

「おお、流石神楽ちゃん。

紳士的な態度にもものともしませんね」

「アイツはな」

扉の方にいる銀時達もその光景を見て頷いている。

しかし13号は暫く神楽を見ると、ふむふむと首を縦に振った。

「うーむ、なるほど。どうやらお腹が減ってイライラされているようです。では、これを食べて笑顔になって下さい」

「な!?!」

13号はいきなり神楽の前に出来たての炒飯を出した。

「え!?!」

「そんな、一体……!?!」

そのあまりの早業に新八達も訳がわからずにただ驚く。

一方神楽は……

「モグモグ……流石は私が認めた執事だけはあるネ。

私の目に狂いは無かったアル」

少テーブルに座って炒飯を食べてい。

『いえ、お誉めに預かり光荣です』

ナギは『凄いな』と13号を褒め、神楽も『美味しいネ！』と炒飯を絶賛していた。

「……………銀さん。」

やられてんですけど……………

会って一分もしないウチに撃墜されてんですけど……………」

「神楽を倒すたア……………中々侮れねーなああのロボ執事」

「いや、単に食べ物に釣られただけなんですけど……………」

すると銀時が頭を掻きながら、一歩前に出た。

「仕方ねえ、今度は俺が行くか……………」

「大丈夫ですか銀さん？」

「任せとけばつつぁん。」

さりげない会話からで相手の手のウチを見破ってやるよ」

銀時はニタリと笑うと、

そのままのんびり三人の所に歩いていく。

「よオ、楽しそうだなオメーら」

「む、銀時まで。どうしたのだ一体？」

「ん、ちつとな…」

それより……」

銀時は13号に目を向けると、13号がペコリとお辞儀をしてみせた。

「うむ、今日来た代理の執事13号なのだ。13号、コイツは銀時だ」

『はじめまして。メカ執事13号です銀時さん』

ナギが13号を指して言うと、銀時はまじまじと彼を眺める。

「はあ、スゲーなオイ。

顔以外はほとんど執事そのものじゃねーか」

『ありがとうございます。』

それより……』

サツと13号が小テーブル、神楽の反対側の席に銀時を座らせた。

「おお？」

『見た所銀時さんは血糖値が高いです。ですが甘い物が大好きなようですね』

「あん？」

座らされた銀時は13号の的確な推理に思わず眉を潜める。
何故パツと見て解るのだろうか？

『僕の目には赤外線レーダーがついています。たった今銀時さんの体内をスキャンさせて頂きましたのです』

「……………」

考えてる事まで見破られてしまった。テレパシーも使えるのだろうか。

『このまま甘い物を摂りすぎるのは危ないですよ』

「いやいや、俺はもうそんなん気にしねーから。」

食べたいモン食べてそれで死ねるなら本物な訳でー」

『コレをどうぞ』

しかし13号は銀時の言葉を遮り、彼の前にパフエを出した。
綺麗に彩られたパフエはとても美味しそうに輝いている。

「……………パフエ？」

『ただのパフエではありません。従来のお店で販売しているパフエに比べ、糖分80%カット、脂質69%カット、カロリー72%カットされたパフエです』

「何イイ!？」

銀時は様々な角度からそのパフェを眺めてみる。何ら意味は無いが「嘘だろオイ、大体80%カットってオメーほとんど味ねえんじや?」

『ご安心を。一口召し上がって下さい』

言われた通り、銀時は一口パフェのクリームとアイスの部分を口に運んだ。

「あ、甘え!！」

「ええ、糖分は大幅カットですが甘さは本来のものと大して変わりません。これならば仮に毎日一つ召し上がったとしても、本来のパフェを二週間に一回食べるのと全く分らない計算になります。糖尿対策にはバッチリですね。しかもちゃんと甘さも摂れます」

13号のはスラスラと流暢にパフェについて説明してゆく。

「んな夢のような事が、本当におこりえるのか……」

「僕はメカ執事……」

不可能を可能にする執事ですから……」

「13号オオオ!!」

何か無駄にカツコイイんだけどお前エエエ!!」

銀時が叫んでいる様子を見て新八は頭を押さえていた。

「ダメだ……」

二人とも食べ物で簡単に撃墜されていつている」

「でも、凄いですね……」

マリアは呆れ半分だが13号の高性能ぶりにまだ驚いていた。

「仕方ない、僕が行きましょう」

新八はため息をつくと、しっかりとした足取りで銀時達の所に歩いていく。

「ちょっと二人とも!!」

僕ら何しに来たんですか。
食べ物くらいでそんな……」

新八は小テーブルに向けてそう口を開くが、

「何言っつてんだ新八。オメーも少しはこの執事13号見習え」

「そうアルよ。13号みたいな一流の執事くらい使える奴になれヨ
ダメガネ」

「アンタら本当何しに来たか覚えてますか!!?」

二人は本来の目的はどこへやら。いつの間にか13号を褒める側に

なついた。

『アナタは新八さんですね』

「!?!」

不意に13号に名前を呼ばれたので、新八は驚いて振り返る。

するとふむふむと13号は彼を見て頷くと、新八の眼鏡をいきなり外した。

「え、あ、ちよつと!?!」

『やっぱり……』

「へ?」

勝手に納得している13号に新八は首を傾げる。

『眼鏡をかけていると分かりにくいですが……取れば凜々しい顔立ちをしておられますね』

「あああああ!?!」

新八は突然ボディブローをくらったように胸を押さえる。

『このままコンタクトにして髪型を少しいじればイケメンキャラ間違い無しですよ……』

「いじらぬ……!」

さらにアップパーをくらったかのように顔を振り、方膝をついてしま
う。

『しかし新八さんは敢えて眼鏡をかけたまま普通の髪型にしている。
……いやはや素晴らしい。

今時の青年には珍しい見た目には一切こだわらない精神をお持ちと
は……まさしく侍魂ですね』

「13号先輩イイイイイイ!!!!!!」

新八はそう叫ぶと同時にきっかり90度、頭を下げた。

それは一流ホテルマンもびっくりする程、美しいお辞儀だったとい
う。

かくして、僅か10分足らずで13号はあつという間にナギ達に馴
染んでしまった。

*

『では、お嬢様が読書、皆さんが休憩なされている間に僕は屋敷を
掃除しておきますか』

13号はナギ達との談笑も一区切りついた所で、そう言って扉に向
かおうとした。

「あ、では案内をー」

それに慌ててマリアが付いていこうとすると、13号はサッと彼女
の前に人差し指を出してそれを止めた。

『「心配無く。全て一人で出来ますから。マリアさんは休んでいて下さい』』

「いえ、そんな訳には…」

『僕はメカ執事ですから。

疲れも感じませんし、体力も無尽蔵です。知識は全てデータベースに入っていますから一人の方が効率がいいんですよ』

「でも………」

『全く強情なお人ですね……』

実は可愛い女の子にそんな事をさせたく無い男のプライドだ……なんて本音を言わせるつもりですか、僕の口から』

ガタツ！！

((13号オオオオオオ!!!!))

人差し指を自分の口に当てる13号を見て後ろのテーブルに座っていた銀時と新八が思わず内心で叫んでしまった。

「オイどんだけ男前なんだよアイツ。何で言葉の一つ一つがあんなに渋いんだよ」

「もう何か最初とキャラ違ってきてるけど、でも良いですよ13号先輩……!!」

一方マリアは少し困ったように微笑むと『ではお願いします』と13号に頼んだ。

『その方が助かりますよ。』

マリアさんの大切な時間を僕のようなロボに割くような真似は、僕がゆるしませんから……』

「ヤベーよ。サバサバしてる癖に何処か紳士的だよアイツ!」

『メカニツクな執事だけに……ですね』

「上手い!!小洒落たジョークもハイスペックだよ!」

『では、ごゆっくり』

銀時と新八の言葉を背で聞きながら13号は部屋を後にする。因みに二人はナギに『読書中にするさい!!』と漫画で殴りつけられた。

*

夕方になった頃……

ハヤテは部屋に置いてきてしまっていた参考書を取りに一旦屋敷に戻ってきていた。

「あ、そういえばお嬢様はどうしてるだろう。」

あのロボは帰ったかな？」

そんな事を思いながらナギの部屋を通りすぎようと――

「おお！！我々が一番だぞ13号！！」

『ええ！！僕とお嬢様は無敵のペアですね！！』

(…………え?)

部屋からやたら賑やかな声が聞こえてきたので、ハヤテはそっと覗くと……

六人が仲むつまじく人生ゲームのボードを囲んでいた。

「オーイ、ぱつつあん……」

オメー現実より地味じゃねーか。こんなんじゃ勝てないよ俺ら」

「アンタが借金まみれなのが一番の敗因でしょーが！！」

欠伸混じりの銀時に指差して叫ぶ新八。

「マリア、このままじゃナギ達が一位アル。何としてでもくい止めるネー……」

「ええ、そうですね」

手をバタバタさせる神楽にニツコリと微笑むマリア。

「フツ、このまま一位は頂きなのだ、なあ13号!!」

『勿論ですお嬢様』

ナギに対してグツと親指を立てる13号。

どうやら一同はペアで競う人生ゲームをやっているようだ。

それにしても13号はまるで本当の執事のように皆に馴染んでいる。

(こ、これは……一体……)

ハヤテはそんな様子を驚いて眺めている。

(何だか……すっかり馴染んで……アレ、神楽さん……さっきと
言ってる事が……)

すると、ハヤテの隣にスウツとリインが現れた。

「昔、ドラ もんで自分の影が自分と入れ替わるという話があつて
……」

「不吉な事を言うなアアア!!!」

本物の三千院家執事、
綾崎ハヤテの運命やいかに……!!!!

第九十一訓 仕事とプライベートはキッチリ分ける（後書き）

伽藍

「前回の感想でナギの漫画『マジカル デストロイ』が読みたいというところでもない人が現れたので、ゲストとして呼んでみました」

ナギ

「とんでもないとはどういう意味だ!!」

伽藍

「サディストさんのトコのオリキャラ、【睦月】さんと案内役の【姫史】さんです」

睦月

「本当に着いたぞ」

姫史

「うむ、無事に到着したか」

伽藍

「で、この『マジカル デストロイ』が読みたいといい猛者は？」

睦月

「あ、私だ！」

ナギ

「あの、そんなに面白かったか？私の漫画」

睦月

「ああ！！最高にテンションが上がった！！」

一同

（どこが！？）

ナギ

「そ、そうか！！」

だったらこっちに取り敢えずアニメイクル分はある内容のノートがあるぞ！！是非読んでみてくれ」

睦月

「ホントか！！読む読む」

姫史

「私も姫の作品に目を通させてもらおうか」

（30分後）

ナギ

「どうだった！？」

睦月

「最高だった！！第二章も物凄い楽しみだ」

一同

（ええええええ！？）

ナギ

「そうか!!」

なら一応全てコピーしておいた。是非貰ってくれ睦月!!」

睦月

「ありがとうナギ!!」

大切にするぞ!!」

姫史

「良かったな姫、ムッキー」

伽藍

「はい、フー訳で全く意味不明の会話でしたが……」

お二人ともわざわざお越し頂きありがとうございます。

【睦月】さんと【姫史】さんでした」

睦月

「それじゃあな、ナギ!!」

ナギ

「うむ、また是非会おう!!」

姫史

「では、さらば……」

こうして二人は帰って行った…

伽藍

「んじゃ、質問コーナーです」

教えて！！銀八先生

銀八

「んじゃ最初の質問『ナギに質問。マジカル デストロイは何巻まで書くつもり？』」

ナギ

「無論、一兆部売れるまでだ！！」

銀八

「……永遠に未完だな。続いての質問『ナギに質問。どうしてあんなアイデアが浮かぶの？』」

ナギ

「フツ……才能だな」

銀八

「……次の質問『銀さんと新八に質問。マジカル デストロイを読んだ感想は？』」

新八

「なあにこれえ（遊戯風）」

銀八

「ホント何だコレ……」

ナギ

「……………」

銀八

「次の質問『姫史に質問。もし蒼妃さんが銀さんを好きになったらどうする?』」

姫史

「激しく不服だが、姉さんが本気で惚れた男なら私は口出しはしないさ」

新八

「身内が姉で無く13歳くらい妹だったら?」

姫史

「相手の男を抹殺する……………!!」

銀八

「続いてなー『銀さんに質問。』

結野アナと蒼妃さん。嫁に貰うならどっち?』

……………」

神楽

「オイ、早く答えるヨ天パ」

銀八

「……………神楽ちゃん、もし崖から落ちそうになってる新八と定晴がい

るとして、どちらか一方しか助けられないと言われたら即答できる
k」

神楽

「定晴」

銀八

「分かった！！銀さんの聞き方が悪かった！！
じゃあお腹ペコペコの時に寿司と天ぷらどちらを食べるって言われ
たらー」

神楽

「両方食べるネー！！」

銀八

「いやだからー」

ナギ

「食べ物だから両方ありだな。だか人間はそうはいかな（笑）」

新八

「銀さん、時間押してますよ（笑）」

ヒナギク

「まったく……」

ハヤテ

「ハハハ……？」

銀八

「……………」
時間ねーな、また次回」

一同

（逃げた……………）

第九十二訓 人間って色々複雑（前書き）

活動報告にも書きましたが、

諸事情により銀が如くを削除させて頂きました。

勝手に始めておいて削除して申し訳ありません。

どうか

ご理解のほどお願いいたします

第九十二訓 人間って色々複雑

〽万事屋〽

銀時の部屋ではハヤテが集中してペンを走らせていた。
その後ろでは咲夜が勉強をみるのを手伝っている訳だが……

「なんや？さつきより随分気合いの入った顔で勉強しとるな」

「ええ、そりゃそうですよ。」

お嬢様がせっかく下さったお時間……無駄には出来ません」

「ま、ナギ達のトコに変なメカ執事も来とるしな」

咲夜の言葉にビクツと肩を震わせて動きを止めた。

「え……ええ。」

まあでも関係無いですよ……

中々優秀なみたいですけど……」

「らしいな」

初めはそんな思わなかったんやけど……

こら自分、立場危ういで」

ガシャン！！

「……………あれ？」

咲夜が目を向けると、ハヤテは音を立てて机に突っ伏してしまっていた。

「じ、自分どうしたん!？」

なあ!! 凄いへこんどるけど、なあ!？」

「べ!! 別にへこんで無いですよ!! へこんで無いですよ!! 僕をへこませたら大したもんです!!」

しかしどう見てもハヤテは机に項垂れて落ち込んでいる様子。咲夜が慌てて駆け寄ろうとすると―

「だったら、俺が慰めてやろうか…………？」

「……………」

覆い被さるように虎鉄がハヤテの肩を抱いていた……

「どっから湧いてでたんだオノレはアアアアアアアア!!!!!!」

「ああ!! 綾崎そんな!!」

ハヤテは虎鉄を背負い投げると、そのまま踏みつけ始めた。

「俺は綾崎のいる所、たとえ槍が降ろうと駆け付ける!!」

愛の証さ……」

「いるかアアアアア！！！」

咲夜は肩を竦めると、そつと万事屋を後にした……

第九十二訓 人間って色々複雑

（屋敷）

「なに？」

「ハヤテがジェラシーを感じている？」

白と黒のチエク柄の床に、ワインやら絵画などが並んだバーのような部屋。

その部屋の真ん中でナギは卓球のラケットを持ったままそう口に出して聞き返した。

反対側には同じくラケットを持ったマリア。審判の位置にはスコア版を持った新八。

そしてそれを眺める13号とその隣に何故かご飯ですよのかかった

どんぶりをがつつく神楽。

おそらく13号に出して貰ったのだろつ。
そして咲夜がその場にやって来ていた。

「ああ、なんやその執事ロボと自分らが思いのほか仲良くなつてんのが辛かったみたいや。

まあ主従やら兄弟やらにはよくあるこつちや」

「ふーん」

ナギはサーブをしようとラケットを振るが見事にスカリ、ピンポン球は台を跳ねて落下した。

「そついや銀時はどうしたん？」

「ああ、銀さんなら屋敷の大浴場にいつてますよ」

新八はの下の階を指差して咲夜に顔を向ける。

〈大浴場〉

大浴場の真ん中にある風呂には銀時とクラウドが浸かっていた。

「あ……」

やっぱ風呂はデケエ方が良いっすねえ。ウチの風呂は狭すぎんな」

「いや、まったくですな。

風呂に入っている時だけが出番の無い状況を忘れさせてくれる」

「なんか大変ですねぇ……
どうっすか後で一杯。」

「愚痴とかも相当溜まってるでしょ？」

銀時が酒を飲む仕草を見ると、
クラウドはふむと頷いた。

「それは良いですな。」

「今日は思いきりいきますか」

「ああ、もうパーっといきましょう。パーっと」

大浴場には二人の愉快そうな笑い声が響いていた。

（屋敷）

「しかし執事ロボとは三千院の技術は凄いな」

『お誉めに預かり光栄です』

ナギ達がいる部屋では咲夜がまじまじと13号を見つめていた。

「それで自分、どれくらい優秀なん？」

『誰か教えてたげて』

「お前に聞いとんじやい！ー！ー！」

『はう!!』

咲夜はすかさず13号にツッコミの攻撃をくらわす。
しかし13号はすぐに立ち上がると咲夜に向かいあった。

『流石咲夜お嬢様……』

小さなボケも逃しませんね……』

「まつ!!まさかわざと!?!」

咲夜は一步仰け反ると、13号に驚愕の視線を向ける。

「優秀や!!」

恐るべき優秀さやでえ!!執事ロボオオオオオオ!!」

そんな咲夜を横目に、ナギはふむふむと頷いて口を開く。

「しかしハヤテが嫉妬とはな」

「意外に乙女チックな一面もあるアルな」

「まあ、あの調子で随分と13号君と仲良くなりましたからね」

神楽もマリアも確かにと同意するように頷く。

「寂しくなつてハヤテが嫉妬……嫉妬かあ……」

ナギは一人で呟きながら後ろを振り返る。

「まったくハヤテの奴め……困った奴だなあ……」

「……」

そして勝手にモジモジと始めた。

『あの……お嬢様が何だか嬉しそうですねですけど』

「そりゃ嫉妬なんてされる方は嬉しいものですから……」

13号がナギの様子を尋ねると、マリアは呆れたように答えた。

『はあなるほど……』

そういう事ですか……』

13号は納得したのかよく分からないように頷くと、ナギが不意に振り返った。

「しょうがないな……」

ハヤテもそろそろ疲れてきた頃だろうから……

ちよつと茶でも淹れてやるか……！

行くぞ神楽、13号……！

「分かったネ」

『はい、お嬢様』

そんな訳で一同は万事屋に向かう事になった。

く大浴場く

「うっ……」

やっぱり暑いサウナは後の一杯の為にあるってモンだな」

「日頃の苦勞も然りですな」

銀時とクラウドは風呂から上がった後にサウナルームに籠っていた。最新式のミストサウナでは無く、石焼きの木製で出来た古風なサウナである。

「ニヤ、ニヤ」(あゝ、この我慢が堪らないな)

しかもいつの間にかタマまで二人に混じって唸っていた。

「タマ公よオ、サウナってオメー本当に猫かア？」

「ニヤ」

銀時がそう言っただけを撫でると、タマは気持ち良さそうゴロゴロ口と喉を鳴らしてた。

「ハハハ、タマも色々と疲れているのでしょーな」

ガブッ

そう笑うクラウドの顔をいきなり何か包みこんだ。

「アレ？いきなり真っ暗に……」

「ワン!!」

定春がクラウスを丸飲んでいたので。
そしてドロドロと血が……

「あ………何だか意識が………」

「ワン!!」

そんな感じのサウナルームだった。

〈万事屋〉

万事屋ではハヤテが懸命に机に向かっていた。
ハヤテはノートに赤いペンでクルリと丸を描く。

「よし………これも正解つと………」

椅子を傾けて天井を見上げると、一息吐いた。

（なんか少しへこんでいるくらいの方が集中力が上がるな……
人間って不思議なものだ……

なんだかちょっと寂しい気持ちになったりするけど………今はとにかく
明日の試験の事だけ考えよう………）

そしてまたペンを上げると続きを始めた。

そんな姿を後ろからそっと覗くのはナギ達。

「うーん、確かに背中がすすけているな。あれがジェラシーというヤツか……」

ナギはふむふむと頷くと、後ろにいる13号に振り返った。

「よし、では早速慰めて……」

『お待ち下さいお嬢様』

「ん？」

『寂しがっているのをお嬢様がすぐ慰めたのでは相手の思うツボです』

「な、なるほど。」

大人の駆け引きか……やるな13号」

「いや、思うツボってなんですか……」

隣の新八のツツコミをスルーすると、13号はコクリと考えがあると頷いて、隣にいたマリアと神楽を指差した。

『まず……マリアさまと神楽さんに行ってもらいましょう……』

「「へ？」

*

コンコンと引き戸が遠慮がちに叩かれたので、ハヤテが振り返ると

……

「あ、あの…ハヤテ君…」

「お茶、淹れてアル……」

何処か恥ずかしそうなマリアと神楽の声が聞こえてきた。

「あ、はい。どうぞ。」

ていうかスミマセン、わざわざお茶なんてー」

「い、いえいえ／＼」

「気にしないでニヤンアル」

「……………」

頭に猫耳と鈴を付けたマリアと、同じく猫耳付けて髪をポニーテールにしたメイド姿の神楽が入ってきた。

マリアもそうだが、神楽は普段より更に可愛くなっていて一目だと誰だか分からない程だ。

勿論ハヤテは啞然である。

取り敢えずマリアが恥ずかしそうにトレイをハヤテの机の上に置く。

「べ…勉強ははかどってますかニヤン？／／／」

「え、ええ…」

ハヤテが答えると、今度は神楽がぎこちなく口を開く。

「えっと、あれアル…」

頑張るヨロシ…じゃ無くて頑張れニヤン／／／」

「あ、ありがとうございます。
ですがその…」

ハヤテは神楽とマリアに遠慮がちに顔を向けた。

「お二人は…大丈夫ですか？」

ガタツ！！

「てんめエエエエエ！！！！」

誰の為にこんな格好してやってると思ってるアルかアアアアアアア
！！／／／」

「神楽ちゃんん！！！！」

落ち着いてエエエエ！！！！」

ハヤテの言葉に神楽が拳を振り上げるが、慌てて扉から飛び出して

きた新八がソレを何とか止めにかかった。

マリアは真っ赤になって『ちょっとお暇を頂クニヤン』とか言っ
て万事屋を飛び出して行ってしまった。

「取り敢えず落ち着いて!!」

「一旦ここを出よう!!ね!」

「むー!!!／／／」

暴れる神楽を新八は何とか部屋の外に引っ張ってゆく。

「じゃ、ハヤテ君!!勉強頑張つてね!!」

「え、あ……!!」

新八は何とかそう言って、部屋を後にした。

*

「何かムカついたアル……」

「ちょっと屋敷にいつてくるネ」

「あ、神楽ちゃん」

神楽はムーとしてドタバタ万事屋を後にしてしまった。

「あまり効果は無かったみたいだぞ13号」

「うーむ、猫耳メイド戦法は失敗ですか…」

恥ずかしかったマリアと怒った神楽が出ていった玄関を見つめるナギと13号。

『やはり少し方向性が違っていたのかもしれない。勉強に励む人を元気づけるには……コレが一番ですね』

13号が手を向けたのは台所だった。いつの間にか幾つかの食材が並んでいる。

「え？まさか……」

「なるほど！！お夜食だな！！」

咲夜が言い終わらぬうちにナギが包丁を構えてニヤリと笑った。

「よっしゃ、それは却下や13号」「……ハハハ」

しかしスッパリと両断する咲夜と苦笑いの新八。

『なぜですか？』

「そつだ！！そつだ！！」

せっかく私が腕によりをかけた料理を作ろうと張り切っているのに……！！」

ナギは当然不服だと抗議の声を上げるが、

「だからやんけえ!!」
反対するに決まっつとるやる!!」

「爆発オチなのは見えてますからね……」

「なんだとオオオオ!!」

ナギは咲夜と新八を交互に指差して叫んだ。

「た、確かに私はちよつと料理が苦手かもしれんが!!
お前らはどうなのだ!!特に新八!!」

.....

数十分後、テーブルには咲夜と新八が即席で作った料理が並べられていた。即席と言うわりには出来栄はかなりのもので、

ささ身と貝割れ菜のすまし汁（咲夜）

綺麗なおむすび（咲夜）

油揚げとワカメの和え物（新八）あんかけ豆腐（新八）

と、中々彩り豊かにテーブルを飾っている。

「即席なんで簡単なものになったやけど……」

「夜食にはこのくらいが丁度良いですよ」

淡々とそう言い合う二人を見て啞然のナギ。

咲夜はともかく男である新八にまで負けた事は結構響いたようだ。

それもその筈、新八は姉であるお妙が暗黒物質しか生み出さないの
で家の料理は大抵新八がやらなくてはならない。
それに万事屋でもよく神楽がサボったりしていたので新八と銀時に
料理当番が多く回っていた。

だから新八は自然と料理が上手くなっていつているのである。
因みに銀時も上手であるが面倒がっている。

そんな訳で咲夜と新八はお夜食を持って引き戸を開けた。

「よ、勉強はかどつとるか？」

「あ、咲夜さん。新八君」

咲夜はハヤテの机に夜食のお盆を置いた。

「わ、スゴい。夜食作ってくれたんですか」

「せや。ウチとメガネが作ったん。簡単なものしかないけどな」

「これ食べて頑張って」

夜食を見て驚くハヤテに二人はニッコリ笑って言った。

「ありがとうございます。」

咲夜さん、新八君。お料理上手なんですね」

「おー、こんなん作ったウチに入らんけどな」

そんな様子を引き戸の隙間から覗くナギと13号。

「な、何を励まされてるのだハヤテは……!!
まったく!!ハヤテはまったく!!」

『……………』

ナギはすっかりご立腹のようで文句を並べている。

『ハヤテさんというのは咲夜お嬢様と仲が良いんですね』

「ば!!バカを言うな!!
ハヤテは……ハヤテは私の……!!」

ナギがそう言いかけると、部屋の中ではハヤテがニッコリ笑って料理を口に運んでいた。

「いやー、でも咲夜さん達の手料理は和みますね」

「……!!」

突然引き戸が開かれて、

「和んでる場合か!!!!」

「ぶっ!!!!?」

ナギの飛び蹴りがハヤテの顔面に思いきり命中した。

「ええ！？お嬢様！？」

「まったく！！ハヤテはまったく！！咲夜も、もお帰れよー！！！！」

「な、なんやなんや」

ナギは咲夜を半ば無理矢理部屋の外に出した。

13号と新八も咲夜の後に続いて一旦外に出る。

『人には色々なジェラシーがあるので今日の所は……』

表に車を用意してありますから』

「なんや随分子供なやつぢやな。ま、小太郎達も待つてるしそろそろ退散させて貰うわ」

咲夜は呆れたように笑って、玄関に向かう。

「あ、門まで送りますよ」

「お、気がきくやんメガネ」

「新八です」

新八も咲夜を送るために後に続いて居間を後にした。

一方部屋では何故かナギに怒鳴られているハヤテの姿。

「で、猫耳や夜食に現をぬかして勉強は進んでいるのか！！勉強は！！！！」

「ええ、まあ……そこそこ」

ハヤテがノートを見せると、ナギはむうとそれを眺める。

「確かに……結構出来てるな」

「ええ、これもマリアさんや咲夜さんに教えて貰ったおかげです」

ハヤテの言葉にナギはムカツと視線を細める。
すると後ろから13号がスツと顔を覗かせた。

『しかし……』

三千院家の執事は随分と頭が悪いですね〜』

「え？13号？」

するといきなり13号はナギの背中に手を回してグツと引き寄せた。

『これなら今後もお嬢様の執事は僕で良いんじゃないですか？』

「お……おいコラ／＼／」

『良いじゃないですか。僕は彼より優秀ですよ』

「しっ！ー！しかし……！ー！」

ナギは13号の言葉に躊躇うようにハヤテを振り返る。

『いや既に落ち込んでますし』

「ああ！！ハヤテええ！！」

13号の言う通りハヤテは背を向けてがっくりと肩を落としてしまっていた。

「確かにお嬢様の為を思えば僕なんかより……彼のような優秀な口ポの方が良いのかもしれませんが……僕なんか……」

「は、ハヤテ……そんな」

ハヤテがそう呟くとナギは悲しそうな表情を作る。
すると13号がソツとナギの耳に顔を近づけた。

『……良いんですか？』

「え？」

『もし彼がお嬢様の本当の執事ならば、主として何か言うべき言葉があるのでは？』

落ち込んでいる執事のケアは、主の仕事かと思いますがね……』

「13号……」

13号は顔を離すと、ポンと肩に手を置いてそのままハヤテの前にトント押した。

ナギは13号の言葉に頷くと、後ろを向いているハヤテを思いきり振り向かせた。

「ハヤテー!!」

「え？は、はい……」

そしてギュツと手を握ると、ハヤテを見上げる。

「私の執事はお前だ!!」

お前しかない!!

………ちよつとくらい優秀じゃ無い方が…私には合っている」

「………お嬢様」

ハヤテは不意打ちをくらったような表情でナギを見た。

「それって誉めてるんですか？」

「う………まあそれはその……」

ナギは狼狽えたように視線をさ迷わせるとノートをハヤテの前に突きつけた。

「とにかく!!今は勉強を頑張れ!!」

「はい、ありがとうございます」

ナギの激励にニツコリと笑ってハヤテは答えた。

「アレ、そういえば執事ロボさんは……?」

「む、どこにいったのだ?」

13号は既に万事屋を出て屋敷の方に向かって歩いていった。

『やれやれ……人間というのは複雑ですね……
さてと、あともう一つ』

*

（屋敷）

コツコツと廊下を歩いているマリア。心なしかまだ恥ずかしいのか頬が赤い。

（はー。何だか私……着るもので散々な目に遭いがちですわ）

『マリア様』

そんな事を思いながら進んでいると、後ろから13号が声をかけてきた。

「13号君」

『どうでしたか？』

『さっきのネ』

「どうもごうもありません！！／／あんな恥ずかしい格好……もう……／／／」

13号の言葉に顔を真っ赤にして首を振るマリア。

『えゝそれは残念です。』

せつかくマリアさまに似合いそうな春服を色々とご用意したのに『

「え………？」

『あつちで着てみて下さいよ。』

ネコミミがダメならもっと人間のファッションについて勉強したいので『

「えゝ……」

うーん、しょうがないですねゝ……」

13号の押しに渋々了解したマリアだが、実は本人も春服が着てみたいという気持ちがあった事は秘密である。

一方……

「本日は言わせて貰いますぞー！！」

まったく、もうやっつてられませんか……

出番は少ないし、キャラは渋い執事キャラから変態になりつつある

始末……」

「お、そうそう。」

もう今日は悩み全部かましたれ」

三千院屋敷にあるバーのような部屋。その部屋のカウンターではクラウスがグラスを傾けては愚痴を溢していた。それに相づちをうっては酒を飲む銀時。

「ワン!!」

「俺達も不遇だよな」

二人の後ろでは定春がお椀に入った餌を食べていて、その背中をポンポンと叩いて愚痴を溢すタマ。

それはなんともシユールな絵面であった。

「ああ、悩みといえれば最近……」

「あん？」

クラウスはグラスを一旦置くと天井を見上げると呟いた。

「メイドさんが……」

怖いですな……」

「ああ……」

二人の遠くをみる視線は天井を越えてある女性に向けられている事
は言つまでもないであろう……

第九十二訓 人間って色々複雑（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「んじゃ最初の質問『ハヤテに質問。今回の件で主役から降格されたら？』」

ハヤテ

「いやいや、大丈夫ですよー！」

伽藍

「……………」

ハヤテ

「…………え、ちよつと？え？」

銀八

「続いての質問『マリアに質問。マジカル デストロイが大ヒットしたら？』」

マリア

「えつと…………さあ、どうでしょうっ？」

ナギ

「うおおおおいー！何でそんな顔をしているのだー！」

銀八

「次な『作者に質問。 ページってあれ何?』」

伽藍

「それは携帯版での閲覧のときにでるページ数の事です。パソコンだと一括ですかはわかりませんよね……」

銀八

「んじゃ最後の『万事屋に質問。 13号とハヤテ、どっちが便利?』
13……ハヤテに決まってるだろ」

神楽

「13……ハヤテアルよ!!」

新八

「えっとうん、勿論ハヤテ君だよ」

ハヤテ

「皆さんわざとやってませんか?」

銀八

「つー訳で今回はここまで。
また次回な」

第九十三訓　　なんだかんだ言ってもやっぱり試験は大事（前書き）

新八

「いや、なんだかんだでこの小説も遂に100部到達ですね」

銀時

「到達つっーよりなんかダラダラやってたらここまで来ちまったって感じじゃねーか…」

神楽

「そつネ。もう皆いい加減飽きてきてるアル。100部云々言っ
無いでさっさと進めるヨ」

新八

「ちよつと二人！？せつかくの100部突入なんだからもつと盛り
上がっていきましようよ！！
こつちが沈んでどうすんですか！！」

銀時

「だつてよオ、いま原作のどの辺にいるか知つてつか？
10巻だよ、10巻。1000分やってまだ10巻で止まってんだ
よ。」

「一旦いつまで続くんだよコレ」

神楽

「あんまりダラダラやってると最後まで続かなくなるのがオチアル」

銀時

「そうそう。無駄に長くやれば良いってもんじゃねーんだよ。もっとテンポ良くいかねーと」

新八

「いや……だからこんな愚痴わざわざ100部目で言うことないでしょ……」

銀時

「さつきからオメー100部100部って言うけどよオ、だったら100部記念で何か考えてるわけ？」

新八

「え？」

銀時

「知らねーの？」

新八

「いや、それは……あの」

神楽

「んだヨ新八。お前ただ100部言いたいだけアルか。ただ騒ぎたかつただけアルか」

新八

「別にそついう訳じゃ……」

そもそもそれはこの小説の作者に聞かないと……
もしかしたら何か考えてるかもしれないよ？」

銀時

「ホントかア？」

神楽

「オイ、どうアルかバカ」

伽藍

「……………えっと、じゃあアレ。

第二回人気投票をやりましょう」

銀時・新八

「今思い付いたろお前エエエエエエ!!!」

伽藍

「えっと……………では、下田温泉篇が始まる次の次の回から募集を開始
します多分。

今回は前回の反省も踏まえて、投票形式を変更しますので。
詳しくはその時の前書きで……………」

新八

「しかもやるのいつか決まって無かったよ。グダグダだよホント」

神楽

「ハア……………ダメアルなこの小説」

銀時

「こりゃ票も集まんねーな」

伽藍

「……では始まります？」

第九十三訓　　なんだかんだ言ってもやっぱり試験は大事

キーンコーン……

「はい、じゃあ後ろから集めて」

チャイムが鳴り終わると同時に、先生の声が教室に響き渡った。机に座った生徒達が用紙を前の席に回していく。

「どうだった？」

「何とか……」

「ヤベーよ赤点かも……」

教室内には生徒達の安堵や悲痛といった様々な声が飛び交っている。

ここ白皇学院ではたった今、

学年最後であり生徒達最大の鬼門、期末テストが終了した。

「ふう……」

「どうだったハヤテ？」

「あ、お嬢様。ええ多分大丈夫かと」

高等部一年A組の教室。

ハヤテがようやく終わった解放感と安堵感に息をつくと、ナギがハヤテの席に近づいてきた。

「そうか。まあハヤテなら当然だな」

「ハハハ、一時はどうなるかと思いましたが……
いや、そもそもまだ結果はわかりませんけど」

ナギは確信したように頷くと、
ハヤテは困ったように笑うと頭を掻いた。

「お主、今からそんな事で大丈夫か？進級すればもっと難しくなるぞ」

「あ、真司君」

「む、澳門か」

すると後ろからゆっくりと真司が歩いてきた。
ふうとため息を吐いている所を見るとかなりお疲れのようだ。

「真司君はテスト、どうでした？」

「む、まあ半分いってれば御の字じゃな」

真司も勉強はそれほど得意では無く学年でも平均辺りだ。
まあ白皇で平均ならば中々凄いなと思うのだが。

「僕も取り敢えず進級出来れば……」

「右に同じじゃ」

「やれやれ……」

二人の弱気な発言にナギが呆れたようにため息をつく。

「どいつもこいつも騒がしいな……」

「「「ん？」」」

「まったく……テストくらいで無駄に一喜一憂してからに……」

今度は後ろから幸久が首を回して歩いてきた。

「あ、幸久君」

「なんじゃ余裕そうなの……」

「まあな」

二人の言葉に幸久はニカツと笑うと、手に持っていた問題用紙をヒラヒラと振ってみせた。

「幸久君は頭が良いんですね。僕なんか危うくて危うくて……」

「まあ、幼き頃から無駄に色々と詰め込まれたからな。

……………それにしても嘆かわしいもんだ」

幸久は肩を竦めると阿鼻叫喚している生徒達で揺れている教室を見回してため息をついた。

「テスト一つで飛び上がったたり死ぬほど落ち込んだり……
目先の事より視線をもっと遠く据えてだな……」

「オイ、真田」

熱く持論を展開し始めようとする幸久をナギが遮って声をかけた。

「どうした三千院？」

「……」

ナギは幸久が手に持っていた問題用紙を指差していた。

そこには彼が自己採点用に書いたと思われる答えが乱雑に書いてあったが……

「お前この問い間違ってるぞ」

「ぬわんだとオオオオオオオオ！？」

幸久は慌てて問題用紙を顔の位置まで持ち上げて凝視した。
しかしすぐに首を振る。

「何を言ってるんだ。ここは……で……だから……じゃないか」

「アホかお前。ここは……で……だから……だろ」

ナギがスラスラと説明すると、幸久は顔をひきつらせて用紙を持つ手を震わせる。

「ぬぬ……しかしこの文章ではこのように捉えてしまっても致し方ない筈……」

「まあ、確かにな。でも普通は違うからな」

「否アアアアア！！！」

これは悪文だ！！ちよつと抗議に行ってくる！！！！」

言うが早い。幸久は教室から物凄い勢いで飛び出していった。

「…………馬鹿だな」

「ハハハ…………」

そんな様子を見送るナギとハヤテは、続いて疲れて虚脱状態の美希と泉の姿を見つけた。

「ふう〜、終わったね〜」

「ミキちゃんどうだった？」

「どうって…………とにかく赤点さえとってなきゃいいのよ！！
そうすれば無事に二年生になれるんだから…………」

泉は困ったようにそんな様子を見ていると……

「なんだなんだ二人とも。
随分と消沈しているな」

「あ、リサちゃん」

「む」

二人の後ろから理沙が片手を上げて歩いてきた。

「ま、少しくらいバカな方がモテるらしいから……あまり深刻にならないでおきたまえ」

美希と泉にコン君よろしくピキーンと光が走る。

「何か随分上からの物言い……」「ま……まさかりサちゃん」

「フツ！！バレてしまつては仕方がない！！」

理沙は一瞬顔を背けてニヤリと口元を緩める。

「そうとも！！昨日一晩考えた結果！！ジタバタ考えても無駄、という結論に達し、答えは全て3と記入してやったわ！！！」

「！！！！」

「ククク……おかげでテストは5分で終了。残り時間は爆睡していたので目覚めもスッキリ。

しかも四択ならこれで25点は頂いた計算。まさに完璧！！完璧な解答！！」

「革命……革命だね。テストの革命が起こったわ……」

「まさにゼレクイエムのだね、ミキちゃん！！」

理沙の言葉にワナワナと震え始める美希と泉。

「いや、このテストマークじゃ無いですよね」
「つーか赤点は35以下なんだが……」
「終わったの……」

理沙達の様子にハヤテは用紙を確認すると、ナギはそう付け足す。
真司は呆れ半分同情半分で呟いた。

*

ハヤテとナギは教室を出ると、真司と別れてテラスに移動した。
伊澄が先に座っていたのを見つけたからである。

ナギは暫く伊澄と談笑すると、今日はこのまま伊澄の家に行くことに決まった。

無論マンガの制作だかなんだかそんなやつである。

「アレ、ハヤテじゃねーか。
それにナギ、伊澄も」

「あ、ワタル君」
「む、お前か」
「まあ、ワタル君」

ナギ達の談笑する横に立っていたハヤテに話しかけてきたのはワタルだった。

三人はそれぞれワタルに声をかけた。

「……どうだったよテスト」

「……多分、進級は出来るかと」

「うん、俺もそんな感じ」

ワタルがハヤテに尋ねると笑えないような答えが返ってきた。
ワタルも頷いてそれに答える。

「あ、そういえば！

お嬢様が借りていらしたDVD今日返しに行くんです」

「ん、そうだったのか？」

ハヤテはワタルを見て思い出したのが、鞆からDVDを取り出した。
どうやらアニメのDVDのようだ。

「なら、このままウチに来るか？」

「えっと…」

ワタルの言葉にハヤテは躊躇うようにナギを見るが、

「ああ、私はこのまま伊澄の家に行くから大丈夫だ」

「ウチの執事さん達がいますからご心配しないでですよ」

「いや、一番心配なのは伊澄自身だけだな」

ニツコリと笑う伊澄にすかさずツッコミを入れるナギ。

とまあそんな訳だったので、ハヤテは『わかりました』と頷いて、そのままワタルの家……レンタルビデオ屋に寄る事にしたのだった。

第九十三訓　　なんだかんだ言ってもやっぱり試験は大事

くレンタルビデオ屋く

「ただいまー」

ワタルとハヤテはビデオショップの自動ドアをくぐって店内に足を踏み入れた。

「おお、帰られたかワタル君。
ハヤテ君も一緒か」

「あ、桂さん」

二人が店内に入ってレジに歩いていくと、桂が奥の棚から顔を出した。

「アレ、サキは？」

「サキ殿なら先程買い物にいかれた。なんでもこの時間はほとんど客が来ないそうだと」

桂はDVDを棚に戻すと、ハヤテ達の所に近づいてきた。

「そっか……まあ今日くらい俺もゆっくりしたいな」

「そうですね。試験も多分無事に終わりましたし」

ワタルが両手をグツと上げて伸びをすると、ハヤテは苦笑混じりに頷いた。

「試験？」

「えっと、僕達が通っている学校での学術試験ですよ。
ここで失敗すると色々とマズくて……」

「ほう、寺子屋の試験か。

確かに、男子たるもの武術だけで無く学術も持ち合わせてなくてはならんからな」

桂は腕を組ながらうんうんと頷いてみせた。

「まったく最近の浪士達には武術だけ極めれば天下を変えられると思っっている輩が多い…」

しかし、本来攘夷浪士は學術もしっかりと身につけなければならぬ。だからこそ良識が備わっているかを選別するための試験を―」

「……え？ちよつと待って下さい？」

ハヤテは疑問を感じたのか首を傾げて桂の言葉を止めた。

「ん、どうした？」

「いやあの……試験……攘夷志士に試験なんてあるんですか？」

「うむ。先程も言ったように我々攘夷志士には武術だけでは無く良識も必要だからな。

無論試験の前には一次面接、二次面接、時にはディベート形式の面接も」

「「面接！？攘夷浪士に面接！？」」

桂の言葉に二人は声を揃えて聞き返した。しかし桂は至極当然とばかりに頷く。

「密偵、スパイへの警戒も兼ねてだ。素性も知れぬ輩に背中を預ける訳にはいかんからな」

「いやいやいや！！」

え、だって面接って……それに試験まで……」

「ほとんど一般企業と変わんねーだろ」

淡々と語る桂にどう反応を返して良いものかとハヤテとワタルは互いに顔を見合わせた。

「なんだ攘夷志士に興味があるのか？フッフ、ならば仕方ない。今回は特別に攘夷志士試験の一部を見せてあげよう」

「え、いや……」

*

「それでは、只今から攘夷志士選抜模擬試験を開始する」

「アレエエ!?!」

二人はビデオ屋のレジから奥の居間にいつの間にか移動していた。そして二人の前には数枚の用紙が置かれ、丸テーブルを挟んで桂が立っていた。

「え、いつの間にも移動!?!」

「テイ、ズよろしくパツと移動かよ」

すると桂が二人の前にボードのようなものを出してみせた。

「では、今から俺がこのボードに問題を書いて二人に見せる。
二人はその解答を目の前の用紙に書いてくれ。
その後、その場で解答を発表しよう」

「いや、あの……店の営業を」

「それでは第一問……!」

ワタルが言いかけた言葉は届かずに、桂は掛け声と共にボードを二人の前に上げた。

『次の読みを答えなさい』

1・真撰組

一般攘夷志士正解率 95%』

((…… あれ?))

二人はボードを見たときに首を傾げた。それもその筈、二人の世界では新撰組だからだ。

((ああ、桂さん達の世界ではそういう字なのかな))

しかし二人そう納得して取り敢えず解答を書いた。

ハヤテ

『しんせんぐみ』

ワタル

ハヤテ

『棒のお菓子』

ワタル

『チヨコステイク』

桂は二人が書き終わったのを見計らい、解答を出した。

「正解は“長瀬 也”だ」

「「TOPPOじゃねエエエエエ!!」」

二人は思わず立ち上がった。桂のボードを指差した。

「他にも“やっぱこれだね”

“ロールケーキ味はちよつと微妙だった”等も特別と正解とする」

「最後のはアンタの感想だろ!!

つか日本語読みになってないからね!？」

「ダメだ……80%が理解している理由が分からない……」

桂はコホンと咳払いをすると、続けてボードを掲げた。

「では第三問だ。

『ABCの三人の人がいます。

実は“神”“人間”“魔王”が一人ずついます。

“神”は必ず本当の事を言います。“魔王”は必ず嘘をつきます

“人間”はわかりません

Aは“私は神では無い”

Bは“私は人間では無い”

Cは“私は魔王では無い”

と口にしました。では……………」

(ああ、これは有名なパズル問題だ)

(えっと……………ABCが…)

二人は桂の言葉を聞きながら用紙にペンを走らせようと…

「『では、6月26日は何の日でしょう?』

一般攘夷志士正解率 78%』」

「『オイイイイイイイ!!』」

二人は用紙を叩きつけて叫んだ。

「何で!？」

何でではで繋がるんだよ!？」

つーか前の件丸々いらないうぢゃん!!」

「最早攘夷どころか学術にすらなつて無いですよ!!」

桂はふむと頷くと解答のボードを二人の前に出した。

「答えは“俺の誕生日”だ」

「『知るかアアアア!!』」

「そうか。二人とも論理問題は得意では無かったか」

「論理じゃねーよこんなん!!
時間の無駄以外の何物でもないよ!!」

二人が同時に突っ込むと、桂が壁に掛かっていた時計に目をやった。

「む、残念ながらここまでだよだな。そろそろサキ殿もかえられるし、客足も増えるだろう」

「……って、もうこんな時間か」

桂に言われて二人は時計を見ると、随分と時間が経っていた。

「しかしこれで、二人にも我々攘夷志士がなんたるかがおおよそ分かって貰えただろう」

(バカという事以外わからなかったんですけど…)

「まあ今回はどれも基本問題ばかりだったから簡単だったかもしれんがな」

二人は桂の言葉に呆れたように首を振った。

「二人ならばいつでも志士に歓迎しよう。ただし試験に受かったらだがな、ハッハッハッハッハッハッ!!」

「……………」

レンタルビデオショップには桂の軽快な笑い声が暫く響いていた……

*

（屋敷）

「銀さん……」

「あん？」

「攘夷志士って……何ですか？」

その日の夕食の席でハヤテは銀時に尋ねると……

「あゝ、バカの集まり」

とあっさりのだが、色んな意味での射た答えが返ってきたという。

第九十三訓　　なんだかんだ言ってもやっぱり試験は大事（後書き）

教えてー！銀八先生

銀八

「んじゃ最初の質問『クラウドに質問。久しぶりの出番どうだった？』」

クラウド

「あれは出番とこののですか!？」

銀八

「ま、文字に出れば出番じゃね?」

クラウド

「いや、出来ればもっと本編に絡むような感じで……!」

ナギ

「お前は無理だ。諦めろ」

クラウド

「お嬢様!ーそんなアアア!ー!」

銀八

「続いての質問『銀さんに質問。クラウドさんと飲んでどうだった?』」

「なんだア……相当愚痴が溜まってたな。もっと使ってやれよ」

伽藍

「善処します」

銀八

「次な『タマに質問。今後出番があるとすればどんなのがいい?』」

タマ

「ニヤー!…ニヤー!…(何でもいいから出番くれ!…)」

伽藍

「いやさア、タマって使い所が無くて…」

タマ

「テメエエエエエ!…!」

銀八

「続いてな『ハヤテとヒナギクに質問。今週のアニメみたいに高杉から手紙がきたらどうする?』(ギャグ的な)』」

ハヤテ

「……え?そういうタイプの人だったんですか?」

ヒナギク

「ちょっとびっくりね…」

伽藍

「いや違うんだけどね。正確に言えば年賀状をよこしたのは高杉さん以外の鬼兵隊幹部であって、高杉さん自身は手紙出してないんだ」

けど、もし来たら？って質問ですよ」

銀八

「意識どうもな」

ハヤテ

「やっぱり驚くんじゃないでしょうか……」

ヒナギク

「でも年賀状とかは送ったりするんじゃないかしら」

銀八

「んじゃ、これで最後だ」ナギと歩に質問。ハヤテがもしクレオパトラ戦術をした娘と付き合つと言ったらどうする？。『』

ハヤテ

「言つかアアアアアアアア！！！！」

ナギ・歩

「く、クレオパトラ戦術……／＼／」

ハヤテ

「ちよつと二人とも！？違いますよ！？これは単なる質問でー」

ナギ・歩

「（ハヤテく人間の尊厳く恥ずかしさ）クレオパトラ戦術：／＼／」

銀八

「……………ま、取り敢えずまた次回な」

九十四訓 生徒会長の大変な一日(前書き)

伽藍

「今回は短い上にさして面白くもない話です。ネタ詰まり中でしたので…」

クラウド

「次回からは下田温泉篇、人気投票が始まりますぞ！」

ハヤテ

「皆様、どうかよろしくお願いします！」

クラウド

「では、始まります！」

九十四訓 生徒会長の大変な一日

とある日の桂家のリビング……

お風呂上がりなのかTシャツの上から半纏を羽織ったヒナギクが真剣な表情でパツク牛乳を飲んでいた。

「……………」

そしてパツクの中身を飲み干すと暫く下を向いて考えるように黙り込む。

「……………一年前よりは、成長したわよね……………」

彼女が言う成長とは、言わずと知れたバストの事である。

洋服越しなので詳しくは分からないであろうが、彼女は自分を納得させるように頷いている。

「いや、全然変わってねーだろ」

「!?!?」

急に後ろから聞こえてきた声にヒナギクは驚いて振り返ると、そこには白髪の天然パーマの男が立っていた。

「ぎ、銀時！？何でここに！？」

「細けえ事はギャグ小説で気にしなら負けだぞ」

「気にするわよ！！」

ヒナギクは二三歩下がって銀時に向かって叫ぶ。
しかし銀時は面倒臭そうに頭を掻いていた。

「っていつか……全然変わらないってどついう意味？」

「あん？そういう意味だろ」

まったく成長が見られねーまな板のまんまつー事」

銀時の言葉にピキツと彼女の額に青筋が走るが構わず銀時は話を続ける。

「自分で納得する成長と傍目からでも分かる成長は全然違うからな」

「ひ、人の良さはそんな事くらいでは決まらないと思っわ……」

「確かに魅力つてのは胸だけじゃねーが……やっぱり普通はあった方が
良いだろ。中には無い方が良いつて奴もいるけどな」

ひきつった笑みのヒナギクの前で銀時は欠伸混じりに続ける。

「ま、少なくとも俺アそれは御免だわ。そもそもガキに興味もねー」

けど」

「な……………!!」

好き放題言う銀時ヒナギクは怒りマークを増やしていく。しかし、銀時は平然と片手を上げて背を向けた。

「んじゃそついう訳だから。
俺は行くわ」

「は……………!?!」

呼び止めようとするが彼はヒラヒラと手を振ってヒナギクの前から去っていきつする。

「ちよつとどついつ訳!?!」

「いや、これ夢だから」

銀時の言葉と同時に、途端に彼女の前は真っ暗になった……………

……………

「……………!!」

ヒナギクが顔を上げると目の前には見慣れた生徒会室が広がってきた。

「む、目を覚ましたかヒナ」

「ハル子……」

長テーブルに座っていた千桜が声をかけてきた。
向かいには愛歌も座っている。

（何だ夢ね……それにしても、
まったく……何て悪質な夢かしら……）

ヒナギクは瞼を少し擦ると、青筋を浮かべて手の平を強く握りしめた。

（ああ今物凄く……あの銀髪バカをぶっ飛ばしたい……！！）

注）銀時は何も悪くありません

「愛歌さん……ヒナ、どうしたんでしょう？」

「さあ？」

何故か殺意を放っているヒナギクを見て千桜は尋ねるが、愛歌はすまし顔でお茶をすすっていた。

するとヒナギクは暫く周りを見回して気付いたように口を開いた。

「あれ、美希達は？」

「ああ、あの三人なら……」

――

「うーむ、仕事だるいな」

「まったく……何故我々がこんな事を……」

「疲れたね」

生徒会室で伸びているのは美希と理沙、泉だ。
そんな様子を見て千桜は呆れたように口を開く。

「それは三人とも生徒会役員だからだろ」

「「私達にちゃんと仕事なんて出来るとでも思っているのかアアアアアアアア！」」

「威張ってゆーな」

三人はテーブルを立つと、生徒会室の出口に目を向ける。

「そういえばまだ教室にはハヤ太君が残っていたな。掃除当番で……」

「確か今日はナギちゃんが休みだったな……」

三人は顔を見合わせると、頷き合った。

「面白そうだから遊びにいこう!」「」
「だね」

「ちよつと三人とも!」

出口に向かおうとする三人を千桜は止めよつとするが…

「ヒナは見ての通り眠っているからな」

「大丈夫だ、問題ない」

「そういう問題かアアア!」

理沙がイー ツク風に答えたかと思うと、三人は生徒会室から去っていった……

「……という訳で」

「はあ……」

ヒナギクはやれやれと額に手を当てると、ゆっくりと机から立ち上がった。

「ヒナ?」

「いつも逃げられてるから……」

今日はちゃんと仕事させないと」

ヒナギクは一応会長としての今日の仕事は全て終わっているが、サボる生徒会娘達に仕事をさせるのもまた、彼女の役目である。

そんな訳でヒナギクはグツと伸びをして生徒会室を後にした。

「……大変ですね、ヒナは」

「ホントね」

第九十四訓

生徒会長の大変な一日

一年A組

「ちよつと皆さん!!」

せつかく掃除したんですから散らかさないで下さいよ!？」

「堅い事を言うなハヤ太君。

せつかく我々が手伝ってあげているというのに」

「そつだぞハヤ太君」

美希達三人は掃除をしているハヤテと一緒にA組の教室にいた。

「いや手伝いつていうか……」

もともと花菱さん達も掃除当番でしょ!！」

「「まあまあ」

「にはは〜」

ハヤテは箒を床に置いて呆れたように叫ぶが三人はまったく悪びれなく笑ってみせると、そのまま何やらし始めた。

「よし、私の魔球を捉えられるかト ヤ!！」

「フツ、かかつて来いゴ ー君」

美希は雑巾を丸めてそう叫ぶと、理沙は箒をバットのようにつく構えてそれを見返す。泉は理沙の後ろで審判の立ち位置。ようは野球である。

「いくぞー!!ギブ　ンも三振に打ち取ったこのジャイロボールの力を見よ!!!」

「返り討ちにしてくれるわ!!!」

「だあアアア!!!」

「散らかるから止めて下さい!!!」

そんなハヤテの叫びも虚しく、美希は振りかぶって、理沙はグッと箸を握りしめた。

「でりやアアア!!!」

次の瞬間、美希が雑巾をバッターのストライクゾーンに向かって投げた。

「貰ったアアア!!!」

「何イ!?!」

理沙は箸を思いきり振るうと、雑巾を見事に捉え……そのまま雑巾を弾き返した!!!

「よし!!一二遊間を見事に破るヒットだ!!!」

「くっ…私の魔球が!!!」

美希が悔しい素振りを雑巾を目で追う。

それは教室の前の戸に向かって飛んでいく。

このままいけば扉にぶつかる筈だった。だが……

ガラ……

「三人ともいるんでしょ？今日はで生徒会にー」

「……！？」

いきなり扉が開いてヒナギクが姿を表した。

かと思つた瞬間、飛んできた雑巾が彼女の顔に直撃した。

べちゃつと水の弾ける音だけが教室に響き渡る……

「……………」

真っ青な顔の四人の前で動きを止めているヒナギク。

彼女はゆっくりとした動作で雑巾を取ると、微笑みを崩さずに四人を見回して口を開いた。

「で、一体これを投げたのは誰？」

ただし微笑みは暗黒と化していることは言うまでもないだろう。

「ちちち違つぞヒナ！！これは理沙が打つた雑巾でー」

「あー！！ズルいぞ！！」

お前だつてノリノリでー」

二人の弁解は虚しくも黒い笑みの前に散る…

「と見せかけて、実は泉だ！」

「ふえええええ！？私！？」

美希と理沙は同時に泉を指差して訴えた。
しかしヒナギクは怒りマークをつけたまま三人を見る。

「取り敢えず……三人とも生徒会室に来なさい」

「……」

美希達は顔を見合わせると、小さく頷きあつて…

「逃げる……」

「あつ……」

三人は一目散に扉から飛び出していった。

「ちよつ、待ちなさアアアい……」

「わ……」

ヒナギクも直ぐに教室から飛び出して三人を追っていった。

「……ヒナギクさん、大変だなあ」

ハヤテはそう呟くと、箒を持ち直して床を掃き始めた。

*

「……………まったく、あの娘達は」

十数分後……………

ヒナギクはため息をつきながら住宅街を歩いていた。

結局三人娘は上手いこと逃げたようで、ヒナギクは生徒会の用事で商店街に向かっていたのだ。
無論、三人娘の役割分である。

(はぁ……………あの夢を見てからやけに疲れる気が……………)

「あ、ヒナギクさん」

そんな事を思いながら歩いていると後ろから聞き慣れた声と共に、バイク音が彼女の側に止まった。

「こんにちは」

「よオ」

「……………あ」

話しかけてきたのは原チャリに乗った銀時と新八だった。

「あれ、何か浮かない顔色ですね。なんかあつたんですか？」

「え？」

新八はヒナギクの表情に気付いたように心配そうに声をかけた。
流石気遣いキャラ代表である。

「あゝ、新八よオ。

学生は沢山悩んでなんぼ。色々悩んで成長していくんだよ、だから
悩ませといてやれ」

「……………いや、アンタは先生ですか」

すかさず新八は目の前の背中に突っ込んだ。

(……………)

一方ヒナギクはそんな欠伸混じりに言う銀時に目を向けている訳だ
が……………

(ああ……………あの表情を見ていると何だか軽く殺意が湧いてくる
わ……………)

彼女の周りをフツフツと黒い……………いや紫色のオーラが纏い始める。

(アレは夢……………それは分かっているのだけれども……………)

「……………オイ？」

銀時は能天気そうな表情のまま黙っているヒナギクを不思議に思い声をかけると…

ゴゴゴゴゴゴ……………！！！！

(何処かの銀髪バカの夢せいでこんなにイライラしているというのに……………この男は！！！！)

「！！？」

二人の目の前には絶界とも言つべきオーラを放つヒナギクの姿が現れた。

(銀さんんんん！？アンタヒナギクさんに何やらかしたんですか！?)

(知らねえよ！！銀さんは何にもしてません！！)

(ヒナギクさんを怒らせるのはアンタの専売特許でしょうが！)

(んなモン持った覚えねーよ！！)

注) 銀時は一切悪くありません

(いやでも明らかに何かヤバいですよアレは!!人間の出せる怒りの良識を逸脱してます銀さん!!)

新八と銀時は心で会話を交わしながら目の前の光景に恐れおのっている。

「えっと…」

「悪かったわね全然で!!」

ヒナギクは思わず銀時に詰め寄ってそう叫んだ。

「は!?!」

「御免で結構よ!!これでも少しずつ成長してるんだから!!」

注) 銀時は何も知りません

「ちよっ、落ち着け!!」

何があつたか知らねーけどカルシウム摂れ。カルシウムを摂れば全て上手くいくから!!」

カルシウム≡牛乳 逆効果

「うるさいバカーーーーーっ!!」

住宅街には理不尽な怒りから、そんな叫びが木霊した。

*

（負け犬公園）

「あはははは!!！」

「ちよつ、そんなに笑わないでよ。悪かったと思ってるんだから……」

ヒナギクはあの後、商店街で用事を済ませて帰ろうとした時、バツタリと歩に出会ったのだ。

歩はヒナギクの表情を見て話をしようと公園まで連れてきた。

そして今朝から先程までの事情を聞いたわけだが……

「うんゴメンゴメン……」

でも確かに、銀さんそういう事いいそうだね」

歩は笑いを止めると目を拭ってそう言った。

「まあ、夢だから流石に少し悪い事したなどは……」

「別に良いんじゃないかな？」

銀さんだし」

少し申し訳なさそうにいうヒナギクにケロツと答える歩。

「きつとあの人にはそんな事、日常茶飯事だよ」

「……そうかもね、銀時だし」

「そうそう、銀さんだから放っておいても平気だって」

銀時って一体……

その後、

歩はヒナギクの今日一日の出来事を聞いてしみじみと『生徒会長って大変だね』呟いた。

……と言ってもほとんどがサボる三人娘の話なのだが。

そんな感じで暫くヒナギクと歩は他愛ない話を交わした。

学校の事、勉強の事（歩熱弁）、恋愛の事（歩熱弁）等々……

「ありがとう、話をしたら大分元気になったわ」

「うん、私もだよ」

ヒナギクはそろそろ学院に戻らなくてはいけないので歩と一緒に公園で別れる事になった。

「とにかく、まずあの三人を捕まえないと」

「あはは、そっだね」

そんな言葉を交わしながら、歩は自宅に、ヒナギクは白皇に向かっていった。

*

〈生徒会室〉

――――
【報告書】

・クラス報告書 担当：瀬川泉

『今日は、ミキちゃんとりさちゃんと遊んですごーい楽しかった？』

P・S・ゴメンヒナちゃん。後は任せた！！』

――――

「……………」

ヒナギクは取り敢えずパタリと報告書を閉じると、温めてあったティーカップに紅茶を淹れる。
そしてカップを机に運ぶと一口すすって大きく息をついて椅子に座った……

「これは報告書じゃなくて……!!」
日記だアアア!!」

生徒会長の一日はまだまだ終わらないのであった……

因みに屋敷では……

「ナギ、今日は学校行かなくて良かったアルか？」

「良いのだ。たまに行くからこそ有り難みを痛感するというもの。
だから私は日々学校に行ける喜びを感じる為にたまにしか学校には
いかない事になっている」

などと訳の分からない事を言っている、今日もある意味元気なナギ
お嬢様の姿があった。

九十四訓 生徒会長の大変な一日（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「まず最初の質問『歩に質問。エターナルさんの小説で新八以外に自分と同じくらい地味だと思うのは？』」

歩

「それどんな質問!?!」

銀八

「新八以外か……厳しいな」

新八

「どつという意味ですか!?!」

歩

「えっと、エターナルさんのキャラクター達は皆さんインパクトが強いので……多分ないかと」

ナギ

「ホント普通回答しか言えないなお前」

歩

「アナタは……!!我が恋敵と書いてライバルと読む三千院ナギちゃん!?!」

ナギ

「つままない上に面倒なリアクションだな」

銀八

「んじゃ次な『ヅラに質問。ハヤテとワタルは攘夷志士に向いてる？』」

桂

「ヅラじゃ無い桂だ。」

「そうだな……俺的には是非歓迎したいがあの試験に合格しないと。本番の試験はあの数倍は難しいからな」

ハヤテ・ワタル

「す、数倍!？」

銀八

「続いての質問『咲夜と千桜に質問。攘夷志士選抜試験を受けたい』」

咲夜

「愚問やな。試験やないわあんなん」

千桜

「でもTOPPOの回答は面白かったです」

咲夜

「そついう問題かい!?!」

銀八

「……んじゃ次い『真司と幸久に質問。最近出番が少ないけど、出番が無い時は何してるの?』」

真司

「醤油作りと醤油の選別と醤油……」

幸久

「全部醤油だろうが……」

俺は日々の鍛錬だな」

伽藍

「基本的にオリキャラは出番が少ないのであしからず」

銀八

「んじゃ最後な『ハヤテに質問。万事屋三人が白皇のテストを受けたら順位は?』」

ハヤテ

「うーん、そうですね…」

1・新八君

2・銀さん

3・神楽さん

ですかね?」

神楽

「うおおおおい!!!何で私が一番下アルか!!!」

銀八・新八

「妥当な線だろ」

ハヤテ

「ま、まあ理由は

新八：すっかり勉強しそう

銀さん：勉強はしないけどなんか勘でいきそう

神楽さん：……………」

神楽

「待つアルハヤテ！！

何で私の所だけ意見がないアルかアアアア！！」

銀八・新八

「パーだからな」

伽藍

「リクエストは出来たらやるかもです。そんな訳で次回もよろしく
お願いします」

第九十五訓

日本で旅行と言えはまずは温泉旅行（前書き）

くお知らせ

伽藍

「今回から第二回人気投票をやらせと頂きます。前回の反省を踏まえて投票形式を変更したいと思います」

・方法

まず、好きなキャラクターに5票まで振り分けて感想及びメールに書いて下さい。

例

? 銀時
? ハヤテ
? ナギ
? 神楽
? 新八

ただし今回は、5票全て好きなキャラクターにするのは無しにします。

一度の投票で同じキャラに投票出るのは3票までとします。
残りは他のキャラに振り分けて下さい。

例

? 銀時
? 銀時
? 銀時
? ハヤテ
? ヒナギク

5票までで同じキャラ3票までなら、好きな振り分け方でも構いません

例

? 銀時
? 銀時
? ハヤテ
? ナギ
? ナギ
? ハヤテ

? ハヤテ
? 銀時
? 新八
? 新八

5票までなので、5個も書くのが面倒だという方は、1票でも2票でも構いません

例

? 銀時
? ハヤテ

o r

? 銀時
? 銀時

o r

? 銀時

まあつまり5票分の投票という事です。

因みに何度でも投票OKです。

例えば10人に投票したい方は、

例

一回目の感想

? 銀時

? ハヤテ

? ナギ

? 神楽

? マリア

二回目の感想

? ヒナギク

? 新八

? 千桜

? クラウス

? タマ

更に前回は同じキャラに10票まででしたが、今回は取り敢えず制限を無しにしたいと思います。

一回の投票で同じキャラは3票までを守って頂ければ構いません。

何か不備の場合はその都度、感想がメッセージにお書き下さい。

)

伽藍

「ホントすみません。思いつきでこんな事をして」

ナギ

「前回がかなり票が集まったから、今回は逆に悲惨な事になりそうだな」

伽藍

「……………」

神楽

「どうかこの馬鹿で哀れな伽藍の為に投票だけでもお願いしたいアル」

伽藍

「ち、因みに一応締め切りは様子を見てですが長編終了くらいにしたいと思っています。
どうかよろしく願います」

ナギ

「うむ、よろしくなのだ！」

神楽

「よろしくアル」

第九十五訓

日本で旅行と言えばまずは温泉旅行

〔鷺ノ宮家〕

リンドーン……

「すみませーん……」

依頼を受けてきた万事屋のモンなんですが」

鷺ノ宮家の門の横には原チャリが止めてあり、前には頭を掻きながら声をあげる銀時と隣には新八がいた。

「いやあ、改めて見るとでかいですねー伊澄ちゃんの家」

「つーかどんだけ金持ちが密集してんだろっな」

新八は久しぶりにみる鷺ノ宮屋敷に改めて驚きの声をあげていた。銀時も欠伸混じりに返事をしていると…

「あら、まあ金時様」

「……………お、久しぶりだな」

門が開いて初穂がひょっこりと顔を覗かせた。

「わざわざいらして頂いたんですね、ありがとうございます金時様」

「ああ、まーな」

初穂はゆっくりと扉から出てくると二人の前までやって来た。

「えっと…」

「あゝ、コイツはウチの従業員の新八だ」

初穂は新八を見て首を傾げたので、銀時は軽く紹介した。
すると初穂はポンと手を合わせて思い出したように頷いた。

「そういえば……あの節は鷺ノ宮家共々お世話になりましたわ」

「ああ、いえ」

あの節とは勿論、鷺ノ宮家と澳門家の確執から生まれた抗争の事である。

あの時は銀時に加えてハヤテ、新八、神楽の協力もあって両家は互いに手を取り合う関係にまで修復したのだ。

この出来事はかなり注目を集め（特にお金持ち間で）彼らは一躍有名にしたのである……

「私は鷺ノ宮初穂です。」

伊澄ちゃんがお世話になっていきますね金時様」

「いや、僕は新八ですよ」

初穂は新八に頭を下げるがまったく挨拶は間違っている。

「お母様!」

「あら伊澄ちゃん」

すると今度は伊澄が慌てたように門から顔を出してきた。

「すみません銀時様、新八様!

母が何か迷惑をおかけしましたか?」

「んにゃ、大丈夫だ」

銀時達の前まで来てペコリと頭を下げる伊澄に銀時はそう答えて彼女の頭にポンポンと手を乗せた。すると伊澄はあたふたと恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「と、取り敢えずお二人とも中にいらして下さい／＼」

「はいよ」

「わかりました」

そんな様子をクスリと笑って見ている初穂に気付かずに、二人は伊澄に連れられて、鷺ノ宮家の門をくぐって行った……

「まあまあ、お久しぶり万事屋さん。すっかりお変わりになって…
…初穂そっくりだわ」

「それは初穂お母様ですよ、おばあさま」

家に入ると早速伊澄の祖母である九重が初穂の手を握って挨拶をした。勿論伊澄は突っ込むが…

「まあ、私が万事屋さんだったなんて……」

「何言ってるの。初穂は初穂じゃない」

初穂は驚いたように頬に手を当てる。しかし九重は首を振ってそれに返した。

「すみません、ウチの人は皆ポーとした人ばかりで……」

「ホント、相変わらずだなオメーんとコは」

伊澄と銀時が困ったように初穂達の様子を見てみると、新八がこっそり話しかけてきた。

（前にナギちゃんから伊澄ちゃんは自分ではしっかり者だと思っ
ているって聞いたんですけど……
なるほど……この家族なら、無理はないですね）

（時間の流れが長え……）

二人は暫く呆れたように二人のポケボケトークを聞いていた。

*

「んで、今日はまた何の依頼なんだ？迷子……じゃねーよな」

「えつとあの……実は……」

伊澄が銀時に目を向けて話をしようとするど、

『キシヤアアアア！！』

「「！？」」

伊澄の頭に一つ目玉の小さな妖怪がぴよこんと飛び乗ってきた。
そしてポコポコと彼女の頭を叩き始める。

「「……このようにですね……」

『ピキイイ！！』

ポコポコと頭を叩く一つ目玉。

「ち…力が……」

『ピキイイ！！』

ポカポカ……

「もー！ー！つ！！」

伊澄はお札を取り出すと、一目散に逃げていく一つ目玉を追いかけていってしまった。

「つーか前にもこんなあったよな」

「ええ、でも今回は単にあの子の問題なんですよ」

銀時が思い返して呟くと、後ろからゆっくりと初穂がやって来た。

「あの子は若いのでまだ力にムラがあるんです。それでも私やおばあさまより何倍も強いですけど……」

「それは、どうすれば元に戻るんですか？」

新八が初穂にそう尋ねた時、銀時は『また背骨とか言わないよな』と恐る恐る呟いた。

「それはこのオババが教えてやるつかの」

「「？」」

初穂が答える前に、上空から声と共に銀華が飛び降りてきた。

「まあ、おばあさま」

「フェフェフェ、久しぶりじゃな銀髪。相変わらず無気力そうな男よのう」

銀華は銀時達の所に跳ねて近づいてきた。

「……………えっと、どちらさんで？もしかして食堂のオバチャンのな感じの方ですか？」

「殺すぞ若白髪。その焼け野原を砂漠化させてやるつか」

白々しく話しかける銀時に銀華はキラリと袖から鋭利な刃を数枚を覗かせる。

「つとまあ、そんな事はどうでも良い。今日お前らを呼んだのは他でも無い伊澄の事なんじゃが」

「……………」

銀華が刃をしまいながら伊澄に目を向けるとつられて銀時達も目を向ける。

伊澄は怒って一つ目玉の妖怪を追いかけているが、妖怪は何だか楽

しそつに逃げ回っていた。

「ちとこちらに来て欲しい」

「「？」」

銀華はひよいひよいと手招きをしたので、銀時達は取り敢えず彼女についていく事にした。

初穂は伊澄の様子を縁側に座つてのんびりと眺めている事にしたようだった。

彼女について行くと、たどり着いたのは何の変鉄も無いただの和室であった。

小さなテレビがちょこんと壁際に置いてある以外は特に目立つものは無い。

銀華がリモコンを取つてテレビを付けて事前に録画してあったのであろう番組を再生し始めた。

「お前達に頼みたい事はコレじゃ」

すると、テレビには女性のレポーターらしき人物が映った。

リポーター

『はい、こちらでは隕石の影響か下田付近の温泉に、特殊な効能が現れている模様です。』

『あ、この付近の方ですか？』

地元の人

『ええ、そうですよ』

リポーター

『一体どんな効能があるのでしょうか？』

地元の人

『ん、そうですねー』

まあご老人の方は元気はつらつになりますね。

それから女性の方は胸が大きくなります。

勉強で悩んでる方は頭が良くなって、主に理数系の成績がアップします。

また、何かの事情で神秘の力が使えなくなった人はその力が回復したり……他にも様々な効能がありますよ』

リポーター

『はい、ありがとうございました』

プツン……

そこで銀華はテレビを切った。

そして銀時達を見上げる。

「分かったじゃろ？下田の温泉の効能じゃ」

「はあ、スゲーなあ」

銀時はどうでもよさそうなチケットな返事を返す。

「ちと用事があって行きは一緒には行けんのでな。お前らに初穂と伊澄を連れて行って貰いたいのじゃ。初穂の占術で回復の温泉を探し出して伊澄をそこにつれていってくれれば良いだけじゃ。」

後はチケットに自由に観光して構わんぞ。

旅費等は鷲ノ宮が負担するからの。オババも用が済んだら後から行くから帰りは大丈夫じゃ」

「あー？でも執事達がいんだろ？俺達と一緒に行く必要が？」

「執事共は私がちと使うのでな…それに、初穂は伊澄以上にアレな奴じゃ。二人まとめて放っておいたらどうなるか……」

銀華の言葉にそりゃそうかと納得する銀時。

更に銀華はだめ押しのようにまたテレビを付けた。

リポーター

『……………更に効能の中には目が良くなるもや、天然パーマでお悩みの方はサラサラヘアーになれる効能もあるとの情報もあり、今下田温泉は注目のー』

ガタツ！

「乗った！！」

「フェフェフェ、そう言うと思ったわ」

銀時と新八は勢い良く、銀華に向かって即決して頷いた。

「温泉か、仕事は仕事だけどのんびり温泉に浸かるのも良いですね。」

新八はこの依頼には大賛成のようだ。

何せ依頼は伊澄達を無事に送り届けるだけ、後は自由に温泉やら観光やらを楽しめるといふのだ。

断る理由も無いだろう。

「ま、まあ効能とやらはきな臭えから半信半疑だが、温泉旅行も悪くねーかもな新八君」

銀時も一人でそう頷いているが、一刻も早くその効能を試してみたいと顔に書いてあるも同然だった。

「ま、それなら交渉成立じゃな。それじゃ明日の朝9時、鷲ノ宮の屋敷に來い。今回は電車で行かせるからの」

「へーい」

「わかりました」

二人は気楽に返事を返して、この依頼は成立した訳だが……

この時まだ銀時達は知らなかった。この依頼の難易度がとんでもなく高くなる事に……

*

（三千院屋敷）

「あ、銀ちゃん！！」

「ん？」

銀時達が屋敷のリビングに入ると、神楽が嬉しそうに二人の元に駆け寄ってきた。

「明日ナギ達が旅行に連れてってくれるアル！！」

「は？旅行？」

すつとんきょうな声を上げる銀時にマリアが続いて近づいてきた。

「ええ、ちよつとした旅行なんですけど、銀さん達も一緒にどうかしらと思って」

「あ、明日ですか」

新八は先程銀華と交わした約束を思い出して言葉を詰まらせる。

「もしかして、何か御用事が？」

「あゝ、悪い……」

実はちょうど明日依頼が入ってな……ちつと遠出をしなくちゃなら

なくな

「まあそうですね。それは残念ですわ」

ばつの悪そうに返事をする銀時に残念そうな表情で頷くマリア。神楽も心底悲しそうに肩を落とした。

「マジアルか銀ちゃん!？」

せつかくナギ達と下田温泉の旅行に行けるチャンスなのに…!!」

「下田……温泉……?」

銀時と新八は神楽の言葉にピタリと表情を止めて聞き返した。

「ええ、ナギにとっては特別な場所で……銀さん?」

「いや、俺達の依頼の場所も下田の温泉付近らしいんだが…」

「まあ!それは偶然」

マリアは予想外の言葉に口に手を当てて驚いた。

「本当アルか!？だったら私達も旅行行けるアルか!？」

「うん。依頼は依頼主を送り届けるだけだから、後は自由だよ」

新八はそう言うと神楽は先程から一転してとても嬉しそうに跳び跳ねだした。

「でしたら、依頼が済んだらナギ達と合流すれば良いですね」

向こうにも別荘がありますから」

（向こうにも!?!）

さらっと言つてのけるマリアに銀時と新八は改めて三千院家の財力を思い知らされた。

ガチャ……

「む、おお二人とも帰っていたのか」

「ナギ」

すると扉が開いて、のっそりとナギがリビングに入ってきた。

「ナギ!!! 私達も旅行に行けるアルよ!!!」

「そうか!良かったのだ!!!」

神楽が手を取ると、ナギも嬉しそうに笑って言った。

「まあ、行きは別々らしいアル」

「ぬ?」

神楽が依頼の事情を説明すると、ナギはなるほどと理解したように頷いた。

「後はハヤテ君に話すだけですな」

「うむ、まあハヤテなら大丈夫だ。夜にでも話そう。それより明日に向けて用意をするのだ」

ナギは神楽達も一緒に行けると聞いて明日を楽しみにしているようだ。

「そうですね。私も来ていく服を選ばないと」

「ん？オメー、メイド服着ていくんじゃねーのか？」

「銀さん？どついう意味かしら？」

ナギが止めようと声をかける前に、マリアがニッコリと笑顔を彼に向けた。

「え、あゝ、俺達も準備しねーとな。んじゃ！」

「私もいっぱい準備するネ！」

「あ、二人とも！！」

身の危険を感じた銀時はさっさとその場から撤退していった。その後を慌てて新八と神楽が追っていく。

「もう……」

「そ、それじゃ色々準備をするか」

腰に手を当ててため息をつくマリアにナギが急いでそう促した。

*

そして夜……

「ええ！？明日から旅行！？」

「うむ。ちよつと伊豆半島の下田にな」

ハヤテはいきなりのナギの発言に予想通りのリアクションをした。

「えつと伊豆半島ですか？」

「うむ、スーパービュー踊り子号に乗ってな」

スーパービュー踊り子号

東京から伊豆半島へ向かうリゾート特許列車で全席指定。
先頭車両は前後ともダブルデッキ構造になっている観光車両である。その名の通り、列車からは伊豆の綺麗な海を一望出来る。

「しかし何故踊り子号なんですか？」

「実は、昼間ハヤテが買い物に行っている時に虎鉄って奴が屋敷に来てな」

「ああ、あの変態ですか」

ハヤテのさらっとキツイ言葉にナギは暫く言葉を止める。

「ま、まあとにかくソイツに伊豆に行くと話したらスーパービュー踊り子号に乗るのが良いって…」

「ダメですよお嬢様。あんな変態の言う事を聞いちゃ…」

「アイツに対して随分冷たいなハヤテは」

ナギはハヤテの様子を見て困ったようにそう言った。

「しかし何故伊豆に…?」

ハヤテが尋ねようとした時、ちょうど後ろのテレビから鷺ノ宮家で銀時達が見たのと同じようなニュースが流れ始めた。

リポーター

『下田付近の温泉の効能はどんどんと広まっているようです。』

あ、あちらにも地元の方が…

こんにちは〜』

地元の人

『こんにちは〜』

リポーター

『この付近の温泉についてですが、素晴らしい効果があるとか』

地元の人

『そうですね、ある噂ない噂色々あるようですが、とにかく成長が促進されます。』

まず女性は胸が大きくなります。また、頭が良くなって、主に理数系の成績がアップします……』

因みに同時刻、ヒナギクと歩はたまたまテレビを見ていた。二人とも暫くテレビを見つめていたそうだ……

リポーター

『……見てください。彼女、こう見えてもまだ六歳なんですよー』

六歳の人

『シヨウガクセイニナツタラー、トモダチヒヤクニンデキルカナー』

ナイスバディな高身長女性がリポーターにインタビューを受けている……

リポーター

『その他にも様々なビックリ効能がー』

ハヤテは呆然とその映像を眺めている。

「ち、違つぞハヤテ！…これは全然関係ないというか…」

「……………」

「ちよつ、何とか言えハヤテー…っ！！」

屋敷にそんな叫び声が響き渡っている頃…………

〈桂家〉

「まあ、良いわね！伊豆半島に温泉旅行なんて！…お父さんも喜ぶわ！でもヒナちゃん、どうしたの突然？」

「えっと、うん…………まあちよつとね」

母が不思議そうに尋ねると、決まりが悪そうに微笑むヒナギクの姿が桂家にあり…

〈西沢家〉

「明日から、ちよつと自転車で伊豆に行ってくるから！！」

「「はあ！？」」

「大丈夫、早朝に出れば昼過ぎには着くから」

「歩！？」

「本気かよ姉ちゃん！？」

何か決意を新たに家族に宣言する歩の姿が西沢家にあった。

更に……

く???く???

リポーター

『その他にも様々なビックリ効能が……』

「まあ、そんな不思議な温泉があるのね」

「なんなら行ってみますか？」

「ちょうど向こうの方々も暫く帰って来ないようですし……」

どこかのお屋敷で言葉を交わしているのは蒼妃と姫史であった。

「フフフ、そうね。」

温泉でゆっくり過ごしても良いかもしれないわね」

「ええ。それに温泉には幼女との出会いがあるかもしれない……！」

いや、むしろ幼女と出会える効能があるかも知れん……！」

「出会っても手を出したらダメよ姫君」

無駄な野望に拳を握りしめ胸を踊らせる姫史を見てクスリと微笑む

蒼妃の姿もあった。

〈万事屋〉

「いやあ、しかし温泉ですか
良いですね。露天風呂とか…」

「ま、たまにはゆったり観光旅行つてのも悪くねーかもな
(サラサラヘアーの效能……何が何でも見つけてやらア)」

「温泉饅頭に温泉卵に温泉街の食べ歩き……キャツホオオオオ!!
メツチャ楽しみアル」

そして万事屋では各々の想いの元に、下田温泉への準備をしていた
のだった……

第九十五訓 日本で旅行と言えばまずは温泉旅行（後書き）

教えて！！湊川先生（代理）

姫史

「という訳で下田温泉篇は原作とは違った視点でやるらしいぞ。鷺ノ宮家視点みたいだな」

新八

「あれ、先生は？」

姫史

「なんでも『確変の嵐だから手が離せねー！！』とかで代理に私が来た次第だ」

一同

（ダメ教師だ……）

姫史

「では最初の質問だ『ヒナギクに質問。夢にはよく好きな人が出てくるというのがどうなの？』
『イライラした理由は胸が大きい方がいいと言われ子供に興味が無
いと言われたから？』」

ヒナギク

「な！？そんな訳ないじゃない！！」

姫史

「フツ、何だそうだったのか桂。何照れる事は無い。ヒトは誰しも必ず経験する感情だ」

ヒナギク

「だから違いますって!!」

姫史

「否アアア!!」

夢にまで異性の人間を想う、

それは愛情^{ラブ}!!!

そして彼が自分より他人に興味があるのにイライラする、それは嫉妬^{エンヴィー}!!!」

新八

「どこのスクンだよ」

ナギ

「……………ホント面倒な奴？」

姫史

「さあ!!質問に答えたまえ迷える子羊よ!!」

ヒナギク

「そんな夢くらいで…!!」

と、とにかく何でもありません!!」

姫史

「フツ、まあ良い。それが青春……………では次の質問だ『新八に質問。江戸に帰った時にゴリラが兄の座についていたら?』」

新八

「もう一回こっちに逃げてきます」

姫史

「シスコンも大概にしたまえよ新八君。私にも姉がいるが、そんな事は考えた事は無いぞ。年上の何が良いのだ。時代は断然年下だろ
う」

新八

「アンタが言つと犯罪ですよ」

姫史

「では最後だ」ナギ、新八、東宮、ツラに質問。銀時と野々原、神楽とハヤテが戦ったらどちらが勝つと思つ?』

ナギ

「まあ一つ目は銀時ではないか?」

東宮

「いや、野々原は負けないぞ!」

新八

「ううん、そもそも比較が難しいですね」

桂

「ツラじゃ無い桂だ」

ナギ

「二つ目は無論ハヤテだ」

東宮

「俺も綾崎だな」

新八

「うん。僕もそう思います」

桂

「ハヤテ君だな」

神楽

「うおおおおい！！何で即答アルか！？そもそも何の勝負アルか！？」

ナギ・東宮・新八・桂

「女装勝負」

神楽

「なるほど」

ハヤテ

「納得するなアアア！！！！」

姫史

「それでは、また次回だ！」

伽藍

「怒りの矛先を向ける為だよ（笑）……と言うわけで、ようやく再開です。本当に長い間すみませんでした！

どうか愛想を尽かさずに、これからもよろしく願います！

因みに駿^{バカ}が出てるハヤテのごとくの二次小説もよろしく願いますね。

シスコンの話ですが、どうや見てやって下さい」

ハヤテ

「では、始まります！！」

第九十六訓 旅行は行くまでが一番楽しい

早朝の西沢家……

家の前にはマウンテンバイクに乗ってライドサングラス姿の歩の姿があった。

「ね、姉ちゃん……本当に行くの？」

その傍らには寝巻き姿で姉を半ば呆れたように見ている一樹の姿。

「うん。ちょっとひとつ走り行ってくるわ」

「だって伊豆って静岡でしょ？ここ東京都だよ！？」

「大丈夫。アンタと違って体力には自信あるから」

歩はシレッとそんな事を言っただけ。

「いや、でも電車で行けば……」

第一宿は……」

「そんなお金ないわよ。」

それに、親戚のおばさん家に泊まるからさ。そこんところも心配なし……」

そう言うとペダルに足をかけるジミー姉。

「んじゃ、行ってきまーす！」

「おい！！姉ちゃん！！！」

第九十六訓 旅行は行くまでが一番楽しい

く鷺ノ宮家く

「よし、いいかオメーら。

今から始まるミッションは難易度が最大レベルだ。
心してかかれよ」

「はい」

「うツス！！！」

鷺ノ宮家の門の前には万事屋三人の姿があった。

「んじゃ、作戦開始にあたって各自のポジションと役割、フォーメーションを説明する」

銀時はどこからかホワイトボードを引っ張ってくるとプレートと指し棒で何やら説明し始める。

銀時 眼鏡 神楽

伊澄 初穂

「はい、注目。」

ここに五つのネームプレートがあるな」

「すみません。僕の名前が違ってますけど」

「んじゃまず始めにフォーメーションの説明をするぞ」

新八のツッコミをスルーして銀時はホワイトボードをトントンと叩いた。

(先導)

(見張り)

(見張り)

「え、見ての通りこのようなピラミッド型のフォーメーションだ。先頭の間人は駅までの道を先導する。後ろの二人は真ん中の人間がはぐれないように見張る」

「「うんうん」「」

銀時

(一番楽じゃね)

伊澄 初穂

(迷子親子)

眼鏡

神楽

(ボケ処理)

(護衛)

「っー訳だ。」

この形を維持すれば、あの二人と言えど迷子にはならねえ筈。新幹線に乗せちまえばこっちのもんだからな。勝負は駅までだ」

「ツツコミ所は多々ありますけど、わかりました」

「合点アル。護衛と機内食なら任せるネ」

銀時は説明を終えると、またどこかへホワイトボードを退かした。新八と神楽は取り敢えず理解したのか頷いてみせる。

「んじゃ、行くか。」

(絶対エ温泉の効能を試してやらア……!!!)

密かに欲望に燃える銀時であつたが……

……

「はあ！？迷子オ!?!」

「ああ……」

鷺ノ宮家の門の前には困つたような表情の銀華と銀時達が向かい合つていた。

「つい先程、執事達が二人を呼びにいったらしいのだが……
既にもう姿を消していたみたいだな……」

「……………」

「奴等が言うには、先に初穂が行方不明になってそれを探して伊澄も先程迷子に……………」

三人の前でため息混じりにそう説明する銀華。

（オイイイイイ！！）

俺のサラサラヘアープランに早速赤信号か！！）

（僕の眼鏡キャラからの脱却プランが！！）

（私の駅弁食べ放題プランがシグナルレッドネ！！）

三人はそれぞれの思いの元、内心に大きな不安を抱かずにはいられない。

新八は素早く隣の銀時に顔を向けた。

「ちよつと銀さん！？

どうすんですか！？作戦云々の前にもう既に失踪してるじゃないですか！！」

「ま、まあ落ち着けよ。

ついさつきだろ？慌てなくても今からしっかり探せば大丈夫だって」

新八の言葉に銀時は手を振ってそう答える。

しかし銀華は首を横に振った。

「伊澄は一昨日北海道まで迷子になったが……………」

初穂は伊澄の数十倍の方向音痴だぞ。驚異的な速度で迷子になる。

下手したら海外にー」

「行くぞオメーら!!」

「はい!」

「駅弁!」

言うが早いのか、三人は鷲ノ宮家から全速力で後にした。

*

〈東京駅〉

「おお、人がいっぱいだな」

「ですね」

東京駅のホームにはハヤテ、マリア、ナギの姿があった。ナギ達は物珍しそうにキョロキョロと駅の様子を見回している。

暫く歩いていくと、ハヤテが二人に声をかける。

「お嬢様、これですよ踊り子号」

「おー、これが踊り子号か」

真横に停車している踊り子号に目を向けるナギとマリア。

「へー、グレーっぱいですねー。青と白のデザインしかないと思っ
ていたのに色々な形や色があるんですねー、新幹線って」

「いやいやマリアさん。これは新幹線ではないですよ？」

「え？でもここ東京駅ですし……」

「東京駅には新幹線以外の電車もいっぱい乗り入れててですね…
えーと……ああ、説明するのが凄くめんどくさい……」

ハヤテはマリアの世間知らずっぷりに呆れたように頭を抱える。
そして何か思い出したように顔を上げると二人に向いた。

「あの、僕は一旦下の時刻表を見てきますから、お二人はここに居
て下さい」

「「？」」

「絶対にここから動かないで下さいね？」

一応頷く二人にハヤテは念を押すと、早足でその場から離れた。
そして近くの階段から地下の駅に降りていく。

（お嬢様とマリアさんを連れて旅行……）

改めてだけどお嬢様もマリアさんも超度級の世間知らずだ……！！
これは責任重大……僕がしっかりしなければ……！！）

そんな決意を胸に、ハヤテは人がこった返す電光掲示板の場所に向
かっていこうとするが……

「あ、ハヤテ様」

「まあ執筆君」

「え？」

突然聞こえてきた声に思わず足を止めて振り返った。

「い、伊澄さん!？」

「おはようございます」

するとハヤテの前に居たのは伊澄と初穂であった。

初穂はポケーっと、伊澄はその側でオロオロしている。

「えっと……何故こんな所に？」

「お屋敷の玄関に向かおうとしたのですけれど……」

気が付いたら……」

「あ……なるほど」

伊澄の返事にハヤテは思わず苦笑いしてしまう。

「本日は大切な用事があるので……早く家に帰らないといけないのですが……」

「大切な用事ですか？」

「実は銀時様達にご依頼をしていたので……」

ご迷惑おかけしていないか心配で」

ハヤテがはてなと首を傾げると伊澄は困ったようにそう答えた。
しかし隣の初穂は相変わらずポーツとしている。

「まあ伊澄ちゃん、人混みの中に蝶々が飛んでいるわ」

「お母様!！」

そんな母の調子にパタパタと袖を振って怒る伊澄。

「え、銀さん達の依頼相手って伊澄さんだったんですか」

「ええ。」

母はこんな調子ですから……一体どうしたら」

「うーん……」

ハヤテもこればかりには首を捻らずにはいられなかった。
何せ上のホームにも超不安要素を抱えているのだ。

(だからといって……お二人をこのままにしておくのも……)

東京駅内部でハヤテがどうしようかと悩んでいる頃……

*

「伊澄イイイ!!
居たら返事するアルウウ!!」

「伊澄ちゃん!!
お母さん!! 居ますかー!?」

銀時達とはかく伊澄達を捜査していた。
いつも通り反対方向を探してはいるのだが一向に見つからない。

「いねーな……
この短時間で一体何処に……」

「銀さん……このままだとマズくないですか?」

新八は顔をひきつらせて銀時の方を見る。
いつも以上に時間がかかっている事に焦っているようだ。

「ああ、このままだと依頼が……」

「そうじゃ無くて……
もし誘拐とかに遭ってたり、危ない目に遭ってたら……」

銀時と新八の脳裏に浮かぶのは危なかつしい伊澄達の様子。

「それは僕らの責任になりますから……」

「つまり……」

三人仲良く……打ち首獄門……

「オボロロオオオ……」

「新八イイイ!!」

三つ並んだ首を想像したのだろう、いきなり新八が道の端で吐いてしまった。

「おい、オメー吐いてるばー

オボロロロオオオオ……」

銀時も慌てて駆け寄るがつかられて道の端で吐いてしまう。

「オイ、何やってるアルかバカ共……」

神楽はそんな二人に呆れたようにジト目で眺める。

「オーウ、マジカヨ!」

「「「?」「」」

すると、そんな三人の前に二人組が会話しながら歩いてきた。二人の格好は黒いニット帽を被って黒の革ジャンの男達だった。

「ソナナ事が可能ナノカイ?」

「ああ、この“お金持ちお嬢様発見レーダー”にかかればどんな令嬢も一発で位置が分かるぜ!」

男の一人がポケットから 아이폰 のようなものを取り出した。

「ソレジャ、早速レッツ誘拐シヨウゼ!!」

「そうだな……この辺なら……」

よし、鷺ノ宮家の令嬢あたりにしておくか」

「シカシドウヤツテ使ウンダイ？」

男はレーダーの大きな画面に向かって指を付ける。

「使い方は至って簡単さ。

まず名前をここに入力!!

そして検索ボタンを押すと……

一発検索さ!!」

「オーウ、ソナ便利ナグッズノ気ニナル才値段ハ？」

男はクルリと回転すると、キラーンと歯を見せる。

「今ならなんと、19800!!」

「オゝ!!才買得ネゝ!!」

「んじゃ、早速検索するか」

男は再びレーダーを持ち上げると画面に手を持っていく。

「「「……………」」」

そんな二人組の様子を眺めていた三人は顔を見合わせるとコクリと頷き合った。

ドカツッ！！バキッ！！グサッ！！

「「……………」」

ポコポコにのされている男二人組の前で銀時達がレーダーを不思議そうに見つめていた。

「オイ、こんなん役に立つのか？」

「背に腹は換えられませんか……とにかく検索してみましよう」

訝しそうな銀時に新八が取り敢えず頷いてみせる。

「神楽ちゃん、お願い」

「分かったアル。ポチっとナ」

神楽がボタンを押すと、画面は暫く検索中の文字が浮かび……

その後、場所が画面に浮かんできた。

運転手は帽子を取ると自分の頭を三人に見せつける。
綺麗なバーコードヘッドだった。

「東京駅までお願いします」

「いや聞いてエエエエ!？」

「うるせーヨ。ぐずぐずしているとそのバーコードむしるアルヨ」

「ちよつとオオオオ!！」

そんな訳で、三人はタクシーを乗っ取り東京駅に向かった。

一時間後……

「はい。東京駅に到着だよ」

「あんがとなオヤジ!」

「ありがとうございます」
「急ぐアルヨ!」

三人は慌ててタクシーから飛び出して目の前の東京駅に向かって走っていく。

「ちよつとお客さん!？」

お勘定は!？」

「つけとけ!！」

「つけとけって何処に!!!?」

「アンタのバーコードに!!!」

銀時はテキトーにそう叫ぶとリーダーを持った新八達と駅の中に入っていく。

「あ、銀さん!?!」

「ん!?!」

すると、左側から聞き慣れた声がかかってきた。振り返るとハヤテ、その後ろには伊澄と初穂の姿があった。

「ハヤテ君!?!」

それに伊澄ちゃん、お母さんも……」

「良かったアル。何とか見つかったヨ……」

新八と神楽は安心したように息をつく。

「皆さん、どうしてこの場所が?」

「あ、ああ……」

まあ色々あってな」

銀時はそう言葉を濁すと疲れたように息をついた。

「皆様、すみません……
ご迷惑をおかけして……」

「ん……まあ見つかったから良しとすつか……」
「そうアルな」

申し訳なさそうな伊澄に銀時達は肩を竦めてみせると、頷き合った。
しかし彼らはまだ知らない……
鷲ノ宮親子の本領はここから發揮されるのだということに…

「取り敢えず、出発の時間には間に合いましたから、早めに電車に
のりましょうか」

「はい」

そんな事は露知らず、新八の言葉に一同は電光掲示板に目をやって、
上のホームに向けて歩き始めたのだった……

*

〜愛沢家〜

「エリザベスウウウウ!!」

『桂さ……ん…』

同じ頃、

愛沢家のお屋敷ではそんな声が響き渡っていた。

『僕の……事は……いいから……』

先に行つて……下さい…』

「何を弱気な事を言つてるんだエリザベス!!」

俺達はいつでも共に道を歩むと約束しただろう!!」

桂がエリザベスを抱えてそんな事を叫んでいた。

『僕はもう……ダメです……』

「エリザベス!!」

『最期に……また桂さんと……』

ソバ食べたか……た……た……』

「エリザベスウウウウウウウウウウウウウウウウ!!」

スパーンスパーン!!

「やかましいわアアアアア!!」

桂が渾身の叫び声を上げると同時に二人の頭にハリセンが叩き込まれた。

突っ伏す二人の後ろにはハリセンを持った咲夜。

「朝っぱらから何しとんねん自分らは!! 昨日見た刑事ドラマに影響され過ぎや!!」

「痛つつつ……」

どうした咲夜殿? 今日はいつにも増してツツコミが鋭いな」

『意気揚々』

桂とエリザベスはゆっくりと立ち上がると、咲夜の方を見た。

彼女は呆れたようにため息をつく、ハリセンをテーブルに置くと腰に手を当てた。

「昨日言つたやる?

今日から旅行に行くって。

だから準備しとんのか様子を見にきたら……」

「おお! そうだったな。

何、心配無用だ。しっかりと準備はしてあるぞ」

桂はそういつと、何やら袋を取り出して中身を開いてみせた。

「……………何やコレ?」

「インスタント用の蕎麦だ。
非常食にぴったりだろう」

「……………これは？」

「爆弾だ。いついかなる時に襲われても対処出来るようにしなくては武士失格だからな」

「……………」

「ああ、それはエリザベスのプラカードだ。
エリザベスはたくさん文字を書くからな」

咲夜は再びハリセンを持ち上げると、

「ーから準備せえ！！」

このドアホがアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「ぶべらア！？」

その後暫く、

愛沢家にはツラのボケに対する咲夜の叫び声が繰り返し響き渡った
という…………

第九十六訓 旅行は行くまでが一番楽しい(後書き)

すみません。質問コーナーは次回からにします。

伽藍

「次回、電車旅行では更に鷺ノ宮母娘の本領発揮です!!」

銀時

「マジでか」

第九十七訓 いつもいつでも本気で生きてる（前書き）

クラウドの前書き通信！！

クラウド

「え、また新しくコーナー名が変わりましたが、内容はさしてかわりません。

ただ今回はゲストをお呼びしています！

因みにこのゲストと何話分になるかはわかりませんが、暫く前書きを盛り上げて行きたいと思います。では取り敢えず鬼兵隊の皆さん、どうぞ」

武市

「ふむ、私は鬼兵隊の参謀兼フェミニストの武市変平太です」

また子

「フェミニストじゃ無くてロリコンでしょうが武市変態。

あ、私は北島また子っす。どうぞよろしく」

武市

「ロリコンじゃないフェミニストですってば馬鹿」

また子

「オメーが馬鹿」

武

「あと変態じゃ無いって言ってんでしょう死ね」

また子

「オメーが死ね」

万斉

「止すでござるよ二人とも。

拙者は河上万斉でござる」

高杉

「あの作者が……」

また面倒くせえ事を……」

クラウド

「どうも執事長のクラウドです。まあ、出番が少ない者同士、仲良くやって行きましょう」

また子

「っーか、出番が無いってどういう事っすか!？」

せっかくヒナ祭り篇で初登場したのに!！」

万斉

「落ち着くでござるよ。」

それに伽藍殿の話だと短編でちらほら出てくる事になったようだし……心配いり申さん」

武市

「そうですねよまた子さん。

それに我々がこの世界に入れるだけ光栄に思わなくては……輝かしい美少女達が住まうこの世界に……」

これは奇跡と呼ぶにふさわしい」

また子

「取り敢えず死んで下さいロリコン先輩」

武市

「フェミニストですよ、お前が死ね」

高杉

「……………」

また子

「あ、晋助様！どこに行かれるっすか？」

高杉

「拾った猫に餌やる時間だから、先に帰らあ」

また子

「え！？

……………猫拾ったんすか？」

万斎

「待て晋助！

せつかくならこの前書きで鬼兵隊バンドをやるのはどうでしゅるか
！！！」

武市

「いやいや、我々とハヤテのごとくの女性メンバーとの対談を設け
ましょう」

また子

「変態は黙ってて下さい!」

高杉

「餌やってからな」

クラウド

「いやはや、愉快な方々ですな。では暫く鬼兵隊の皆さんよろしく
お願いしますと言っことので、
本編、始まります!」

第九十七訓　　いつもいつでも本気で生きてる

『伊豆行きビュー踊り子号は間もなく発車致します。乗車される方は乗車券を確認してから指定席に……』

東京駅のホームに響き渡るアナウンス。
停車しているビュー踊り子号の周りには人がゾロゾロと動き回っていた。

「んじゃ、後でな」

「はい、また後で。銀さん」

ハヤテとナギ達は前の方の車両に、銀時達と伊澄達は後ろの方の車両に指定席があったのでホームで一旦別れる。

「キャッホオオオオ！！駅弁アルヨ駅弁」

「三杯までだから暴食娘」

踊り子号の入口まで道のり、嬉しそうにはしゃぐ神楽に銀時が釘をさした。

「新八……分かってんな。

ここからが本番だぞ……」

「分かってますよ銀さん」

キヨロキヨロと興味深そうにホームを見回す鷺ノ宮親子を見て銀時と新八は頷き合っただった。

一方ハヤテ達は……

「おおー！！いっぱい席があるなマリア」

「ええ。これだけいっぱいあるのですから空いてる所に座りましょう」

ガシツ！！

「お二人とも！！席は指定ですから。とにかく僕から離れないで下さいね！」

責任感重大な唯一の常識人、ハヤテは超世間知らずのお嬢様二人の手を掴んで引っ張っていた。

因みに……

「こうやって外に旅行に出るのは久しぶりですね姉さん」

「ええ、そうね姫君」

二組から離れた真ん中の車両の前には姫史と蒼妃の姿もあった。

「めくるめく幼女達との出会いが今から始まると思うと……!!
温泉〓ロマンス〓ヘヴン!!」

「あらあら」

蒼妃は人混みの中でそんな叫び声を上げる姫史を見て少し困ったように微笑むと、ゆっくりと乗車するのであった……

いつもいつでも本気で生きている

ガタン……

「銀ちゃん……」

「駅弁まだアルか……駅弁」

乗客の会話が飛び交う車両内に神楽の声が響く。
踊り子号が東京駅から出て30分程の時間が経っていた。

「なに言っただクソガキ。

オメーさつき二箱平らげただろーが。少しは我慢しろ」

「何でだよー!!」

お腹減ったアル」

駄々をこねる神楽の叩く銀時。

その様子はまるで親子のように見える。

「まあ、神楽ちゃんは食いしん坊さんね」

「ハハハ、神楽ちゃんの胃袋はブラックホール並ですからね。
おかげで家計は火の車でしたよ」

そんな二人を見て向かい側の席の初穂は微笑ましそうに口を開いた。
新八もかぶき町での万事屋氷河期を思い出して苦笑する。
その点今の状況は大変恵まれている訳であるが。

「……………」

一方伊澄は車両の窓から広がる外の景色をキラキラと目を輝かせながら眺めていた。

(銀さん…………この分なら大丈夫そうですね)

(多分な……仮に車内なら迷おうが範囲が知れてらあな)二人は一度自分達の席の周りを見渡すと頷き合った。
しかし……これが二人の油断であった!!

*

「おゝ!!中々良い眺めではないか!」

「本当ですね」

場所は離れて前の方の車内。
ハヤテ達が座る席ではナギとマリアが窓の外を眺めていた。

「この踊り子号の売りですからね。伊豆の方に近づけばもっと綺麗な景色が眺められますよ」

「へえ」

二人は話を聞くたびに興味深そうに周りをキョロキョロと見回しては、また窓の外の景色に目を向ける。
それほど珍しいのだろう。
電車という乗り物が……

ガタン……

「アイス、ジュース、お弁当はいりませんか？」

暫くすると、車内の連結部分の扉からワゴン車を押した女性が現れた。

「む、ハヤテ。アレは何だ？」

「ああ、あれは車内販売ですよ。新幹線やこういう列車によくあるんです。

お弁当やお菓子、飲料やグッズ、他にも地域特産のモノとかも売ってたりしますね」

「へえ」

ナギは頷くとワゴン車を興味津々に見つめている。

「ちょっと、アイスか何か買ってみますか」

「おお、良いのか!？」

「まあ、良いですね」

「ええ」

ハヤテは軽く手を上げると女性がワゴンを押ししてこちらにやって来た。

「何になさいますか？」

「えっと、ではバニラアイスを二つお願いします」

「はい」

ハヤテがそう言うつと女性はクーラーボックスからカップのアイスを取り出してくれた。

「どうぞ」

「ありがとうなのだ」

「ありがとうございます」

ナギとマリアがアイスを受け取るとハヤテが財布を取り出そうと執事服の内側を探る。

「む………!?!」

美味い………!!」

「あら本当。美味しいですわ」

二人はカップのアイスを一口運ぶと驚いたように声をあげる。

そう。新幹線等のバニラアイスは高いが何とも美味しいのである。庶民の楽しみの一つと言えよう。作者視点とは関係ありません。

「ハヤテ！これは美味いぞ！

一体どこのセレブ御用達のスイーツだ!?!」

「せ、セレブ!?!」

「お嬢様!!」

いきなりのナギの発言に女性は面を食らったように一歩さがる。

「このアイス、一体いくらならば会社をかえるのだ？
是非話をしたい」

「は、はい？」

「生憎今は手持ちが五千万円程しか持ち合わせていないのだが…」

「じゃ、5000万円!!?」

「お嬢様!!」

慌ててハヤテがナギの口に手を当てて黙らせると、女性の方を見て
お金を渡す。

「すみません!!ちょっとこの娘はアレなので……
気にしないで下さい!!」

「うおおおお!!アレってどういう意味だ!!」

頬をひきつらせ首を傾げながらワゴン車を押していく女性の後ろ姿
を安堵したように見送るハヤテ。その彼に向かってパタパタと手を
上下させて抗議するナギ。

「ダメですよお嬢様。こんな所でそんな発言しちゃ」

「そうですよナギ。
危ない人も多いですから。気をつけないと」

「む………」

困ったような二人にナギは仕方無く席に落ち着くと、再びアイスを突つつき始めた。

*

時刻は11時……
列車が出発してから大体一時期経った頃……

「オイ、神楽
ここにあった俺と新八の分の弁当どうした？」

「ああ、落ちてたから勿体無いんで食べたアル」

銀時達の席では銀時が周りをキョロキョロと見回していた。
伊澄と初穂は駅弁を興味深そうに食べている。

「……………は？」

「だから食べたアル。
ホラ」

神楽は空になった弁当箱を二つ、ケロツとした表情で銀時達の前に出してみせた。

「『ホラ』じゃねーよオオオ!!」

何人の分まで食ってんだクソガキ!!」

「だって落ちてたヨ!!」

「落ちてる訳ねーだろ!!」

ちゃんと袋に入ってただろ!!」

銀時が指差してみせる袋の中には既に空の袋が……

「ハハハ、やっぱり神楽ちゃんに食べられちゃいましたか」

「ハハハじゃねーよ……」

「たく五杯も食いやがって」

いくらか予想通りだった結果に新八は苦笑してみせる。

とは言っても、二人ともお昼が無いわけで……

「仕方ねえ。」

新八、前の方でちつと飯探してくらあ。三人の事見てるよ」

「あ、はい」

「そうアル。済んだ事は気にせず前に進むヨロシ」

「『オメーのせいだよ』」

同時に神楽の頭を叩くと、銀時は面倒そうに席から立ち上る。

そのまま、彼は頭を掻きながら前方車両の方に歩いていった。

(残されたのは問題児だらけで、まともなのは僕一人。銀さんが居ない間、なんとかもたせなくては……!!)

そんな銀時を見送ると、新八は決意も新たに三人に目を向けるが…

「ところで伊澄ちゃん。これからどこに行くのかしら？」

「伊豆の温泉ですよお母様」

(なんとか……)

「あ、そうだったわね……

……何しに温泉に？」

「……………お母様」

(……………)

激しく不安になるツツコミ役、新八であった。

「あ……

腹減ったな……」

そして、そんな不安要素を残して食料調達に向かう銀時。

立ち上がって移動する乗客や置いてある荷物等を避けてどんどんと

前の車両に向かっていく。

一つ、また一つ……

ざわめく車両をいくつか通り過ぎると、半分程来たところで少し広く開けた場所に着いた。

そこには客室乗務員や置かれたワゴン車等が並んでいて、お茶や水、コーヒーが飲めるメーカー等も置かれている所謂休憩室のような場所であった。

(お、この辺からちつと食料調達でも……)

「あれ、銀さん？」

「ん？」

おお………ハヤテか」

すると後ろから聞き慣れた声が聞こえてくる。

銀時が振り返ると、そこに居たのはハヤテであった。

「どうしたんですか？

こんな所で」

「うちの暴食娘がよオ、俺と新八の分まで飯食いやがってな。んで、仕方ないからこうして食料調達に来たんだよ」

「ハハハ……

神楽さんらしいですね」

ため息をつく銀時の様子に、ハヤテは苦笑しながら答えた。

「あ、でもお昼だったら僕達のお弁当分けましょうか？」

「え？いや……」

「大丈夫ですよ。」

「気合い入りすぎて作り過ぎてしまったので二人分くらい。」

「あ、もし良ければですけど」

「マジでか。」

「おーおー、食べる食べる！！」

「では、お嬢様達の席に行きましょうか」

「ハヤテがそう提案すると、銀時は思わぬ幸運と勿論OKをした。」

「二人は休憩室から前の車両に向かって歩き始める。」

「いや、流石だよハヤテ君。」

「どっかの神楽とは大違いだな……」

「そっぴや、オメーは何でこんな所まで？」

「ええ、お嬢様が喉が渴いたと言うので飲み物を買いに」

「二人はナギ達がいる車両まで歩いていこうと通り抜けていく。」

「大体真ん中の車両まで来た所だろうか。」

「あら？」

「銀ちゃんに綾崎君！」

「「「？」」」

突然横から女性の声が二人にかけられた。

「あ、ヒナギクさんのお母様。
お久しぶりです！」

「ホント久しぶりね〜」

声の主はヒナギクのお義母さんであった。
彼女の周りにはキラキラと何故か輝きが……

「お母さん？」

……また若くなりました？」

「やだ〜、銀ちゃんったら。」

そんなお世辞言っても何も出ないわよ」

（いや、お世辞じゃないよ……）

ヒナ母は頬に手を当てると嬉しそうな仕草を試みせる。
彼女はもう20代の若さに見えない。
そんな様子を二人は呆れたように見守っていた。

「そつえば、お母様はどうしてこの列車に？」

「ええ、実はね」

ヒナ母が手を当てたまま、理由を言おうとする……

「お義母さん。こんな所にいた」

「あら、ヒナちゃん」

彼女の後ろからヒナギクが歩いてきたのだった。

「ヒナギクさん。こんにちは」

「おお、よオ」

「ハヤテ君、銀時!？」

え、どうして二人がこんな所に?」

ヒナギクはハヤテ達に気付くと驚いたように声をあげる。

「ウチは万事屋の依頼でな」

「僕はお嬢様の付き添いで」

「あ、そうなの……」

「ところでヒナギクさん達は、ご家族で旅行ですか?」

ハヤテはヒナ母とヒナギクを交互に見ると尋ねた。

「えっと……それはアレよ。」

ちよっといつもとは違う環境に身を置きたくなつたと言っか……」

「そういえば伊豆の温泉には沢山効能があるらしいから楽しみね」

「あっ……／＼／」

ヒナ母の何気ない言葉に彼女は顔を赤くして固まる。

((そういえば……))

ハヤテ達は何かを思い出そうと考え込む。

二人の脳裏にはテレビで見た温泉の効能レポートが浮かび上がる。

『まず女性は胸が大きくなります………』

「「ああ、なるほど」」

「ちよつと二人とも!!!! / / / /

何で納得したように頷くのよ!!!

そして何処を見てるわけ!?! / / / /

「「……では」」

何だか長くなりそうなので二人は手を上げると、二人の元からそくさくと離れて行った。

「あ、ちよつと待ちなさいよ!!!

ちよつと!!!! / / / /

「またね」

ヒナ母だけは愉快そうに手を振っていた。

*

「しかし、ヒナギクさんも来ていたなんて……」

「アイツが来るとは……」

本格的に効能を狙ってきてるな」

「それ、言ったら殺されますよ銀さん……」

銀時の呟きに、ハヤテはゾツとしたように身を震わせる。

「む、綾崎に……」

銀時ではないか」

今度は左側の席から二人を呼び止める声が聞こえてきた。

「あ、湊川先生。

それにお姉さんも。いらしてたんですか」

「まあ、お二人とも。

奇遇ですね」

席には姫史と蒼妃が向かい合って座っていた。

姫史は腕を組んだまま、蒼妃は微笑んで挨拶をする。

バツ!!

「ホント奇遇ですね、
いや運命というべきか。
まさかこのような列車の中でお会いするとは」

「な!？」

いきなり銀時は姫史の隣に無理矢理座ると足を物凄いスピードで組んで蒼妃に顔を向けた。

「貴様いきなり」

「蒼妃さんはご旅行ですか？
もしかして温泉に？」

「だから貴様」

「ええ。この間からテレビで話題になっていて、せっかくだから今
回行こうって姫君と」

銀時が阻止しようとする姫史の手をひよひよいとかわしながら話す様子を見て、蒼妃はクスリと可笑しそうに返した。

「銀さんはどうしてこの列車に？」

「いやあ、万事屋の銀座、渋谷支店の増設も落ち着いたんで、
慰安旅行も兼ねて温泉に。
まあゆつくり頭を整理するには環境を変えるのが一番ですからね。
温泉なんて特に」

ペラペラと有ること無いことを身振り手振りで話す銀時。

「へー、凄いですね銀さん。
でも社長が留守で大丈夫ですか
(棒読み)」

「心配ねえよ。残った数十人の精鋭従業員が捌いてくれんだろ」
ジト目のハヤテに彼は肩を竦めて返す。

「フフ、それなら安心ですね」

「ホントお前と言う奴は……」

呆れたように隣の銀時を見る姫史と可笑しそうに笑う蒼妃。

「実は温泉大好きなんですよ私。嫌な事とか疲れとか、色々忘れさせてくれるから」

「ですよね」

「ホント最高ですよね温泉って」

「フフ、銀さんも温泉街に行かれるなら向こうでもお会い出来ると
良いですわね」

「ええもうそりゃ！
なんなら……」

銀時はコホンと咳払いをすると、足を元に戻して姿勢を正す。

「蒼妃さん。もしよろしければご一緒に温泉街を回ら」

「回るか!?!」

言い終わらぬ内に姫史の手刀が銀時に炸裂した。

「痛えな。どうした姫史君？」

「止めるその気持ち悪い呼び方。まったく、人の姉に何をしようとしているんだ。弟の目の前で。」

もしコレが妹であったらお前を八つ裂きにしていた所だぞ」

「あゝハイハイ。」

お前も行きたいんだな姫君」

「お前がその呼び方をするなア!?!」

テキトーな銀時に今にも掴みかかからんばかりの姫史。
そんな様子を相変わらずニッコリと見守っている。

「あ、銀さん。そろそろ戻らないと……」

「ん？ああ……」

ハヤテに肩を叩かれると、銀時は思い出したように眉を上げて、ゆつくりと立ち上がった。

「じゃあ。蒼妃さん、と弟。」

また向こうで「

「ええ」
「誰が弟だ」

そんな訳で、ハヤテと銀時は湊川姉弟に一旦別れを告げナギ達がいる車両に向かつていった。

*

「おお、ハヤテ。
随分と遅かったでは無いか」

「お待たせしましたお嬢様。
飲み物をお持ちしましたよ」

「うむ。
ん？何で銀時までいるのだ？」

ハヤテと銀時がようやくナギ達の席までたどり着くと、ナギが待ちくたびれたように振り返ってきた。

「ウチの暴食娘が俺達の飯まで全部平らげやがったからな。
ハヤテに聞いたら余分に飯があるってんで」

「流石神楽だな……」
「神楽さんように沢山ご飯作って差し上げれば良かったですかね」

感心三割呆れ七割くらいの表情で頷くナギとマリア。
その横でハヤテが鞆を中身を探っていて……

「はい、銀さん。」

取り敢えず二つお弁当箱がありますから、器は後で返してくれば大丈夫ですよ」

「おー、サンキユ。」

流石高性能の執事だよ。一家に一人だよなコレは」

「当然だ。ハヤテは宇宙一カッコイイ最高の執事だからな」

銀時の言葉き何故か誇らしそくに無い胸を張るナギ。

「うおおおおおい！！」

誰が無い胸だ！！誰が！！」

「んじゃ、あんがとな」

天井に向かってツッコミをするナギ横目に、銀時は弁当箱を掲げてハヤテに礼を言う。

「いえ、今度は気をつけて下さいね」

「ああ、分かって」

ちょうどその時。

踊り子号が反対方向に走る新幹線とすれ違った。

だが、二人の視線はそのすれ違った新幹線の中にいた人物に釘付けになる。

一瞬だったが、それは少し長めのショートヘアでポーっとした女性と、その横でオロオロとする黒髪でロングヘアの少女だった。どちらも和服を着ているというおまけ付き……

……

「……………銀さん。」

今のつて……………伊澄さん達じゃありませんでしたか？」

「……………ば、馬鹿言っちゃいけねーよ。お前、あの二人は新八達が見てんだし、第一この列車に乗ってたぞ？
見間違いかなんかだろ」

「で、ですよねー！！」

和服の人なんて世の中に沢山いますからね！！
すみませんなんか！！」

「おーよ、大丈夫大丈夫」

ハヤテは慌てて取り繕った笑みを浮かべて言う。

銀時も半ば自分に言い聞かせようと呟くと手を上げて彼らから離れていった。

だが……

『 駅 』

ハヤテ達と別れて真ん中の車両まで若干早足でやって来た銀時。

ちょうど列車がどこかの駅に停車したらしく少し揺れてアナウンスが車内に響く。

「銀さん!!」

「あん？新八？」

と同時に、向かい側から新八が走ってやってきた。

「銀さん大変です!!」

ほんの少し目を離していたら、
伊澄さん達が、失踪を!!」

「……………」

理由は分からない。

詳細も分からない。

ただ一つ分かる事は……

(やっぱアレかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!)

先程すれ違った新幹線に乗っていたのが鷺ノ宮親子であるという事であった。

一方……

ピシッ

プシュー……

「ん？」

そのどこかの駅に一人降りている少女。黄色い髪をツインテールにしている……ナギであった。

彼女の目の前にはちょうど扉が閉まってしまった踊り子号……

ゴオオオオオ……

そして当然のごとく駅から発車していく踊り子号。

「え？」

その後をポカンとした表情で見送るナギ……

ここにも迷子が一人……

「お嬢様アアアアア！」

去りゆく踊り子号からは執事の叫び声が響いていたという……

第九十七訓 いつもいつでも本気で生きてる（後書き）

銀八

「席に着けオメーら。」

えー、今日はそこそこ真面目な発表がある。

実は作者が質問コーナーをサボっていた間に結構な質問が溜まってしまったらしい。

んで、今回は急遽質問コーナー兼銀八先生の閑話休題的なグダグダをやるそうなんで……

そついう訳で。以上」

一同

「えエエエエエエ……！」

銀八

「仕方ねえだろ。伽藍が全部悪いんだから文句ならアイツに言え。

本編は次回の質問コーナー終わったらな。
んじゃ解散」

新八

「いやいや！？解散って！！」

ナギ

「うおおおい！！迷子の私は一体どうなってしまうのだ！？」

ハヤテ

「そつですよ！早くお嬢様を助けにいかないと！」

神楽

「私はまだまだ駅弁食べたいアルよー!!」

ヒナギク

「第一閑話休題的になって、何やるか決まってるんですか?」

歩

「私の出番は!？」

長谷川

「俺も出るんだよな銀さん!？」

ツラ

「先生!お菓子にんまい棒を持って行きたいのですが、300円以内ですか?」

咲夜

「どーでもええわ!!死ぬほど!!」

ワタル

「つーか俺の出番ねエエエエエ!!」

サキ

「若、ファイトです!」

伊澄

「オロオロ……オロオロ」

虎鉄

「俺の綾崎は伊豆にいるのだな！！だったら直ぐに駆け付けるぞ綾崎！」

お前の身体は全て俺のモノだアアアアア！！」

ハヤテ

「消えるオオオオオオ！！」

高杉

「うるせーなア……」

万斉

「む、この騒ぎ……」

良い曲を思い付いたでござる」

武市

「ふうむ……見め麗し少女達を通うこの銀ごと高校。素晴らしい学術機関ですね……」

また子

「ロリコンも大概にして下さい先輩」

武市

「ロリコンじゃないフェミニストですっば」

ガヤガヤ！！ガヤガヤ！！

銀八

「うるせエエエエエエ！……！！」

発情期かテメーらは……！！

決まった事にグダグダ言ってるじゃねえ……！！

授業始めんぞコノヤロー」

高杉

「オメーが一番うるせーよ……！！」

閑話休憩篇

私立銀ごと高等学園〜1時限目 質問処理〜(前書き)

クラウドの前書き通信!!

クラウド

「今回は質問処理兼、閑話休憩のオマケの話です!」

また子

「本編中には出てこないキャラ達も学園形式で登場してるらしいっすよ」

武市

「いやはや、きつと素晴らしい学園なんでしょうね」

万斉

「良い曲は思い浮かぶでござるか……」

高杉

「……………始まるみてえだなア」

閑話休憩篇

私立銀ごと高等学園〜1時限目

質問処理〜

皆さんは知っているだろうか。

東京都内の杉並区にある超巨大な学院があることを！

これは……

そんな学校で巻き起こる何か色々とアレな物語である……

閑話休憩 私立銀ごと高等学園

〜1時限目 質問処理〜

キーンコーン……

無機質なチャイムの音が鳴り響く中、階段を登ってくる一人の男子生徒がいた。

皆さんこんにちは。

ぼくの名前は志村新八です。

東京の杉並区にある“私立銀こと高校学園”に通うごく普通の高校一年生です。

この学園はとにかく巨大な学校で、高等部は勿論中等部、初等科まであるんです。

他にも様々な最新の設備が充実されています。

あ、話していたら教室が見えてきた。ここ、1年Z組が僕の教室です。

ガラ……

新八

「おはようございま、ぶっ!?!」

新八が挨拶をしながら扉を開けた瞬間、彼に二人の男が飛んできて直撃した。

新八もろともそのまま後ろに倒れ込んでしまう!

妙

「近藤君?

本当にいい加減にしてくれないかしら?」

ハヤテ

「虎鉄君もいい加減にストーキング止めるって言ってるじゃないですか……」

扉の前にいたのは新八の姉、志村妙と綾崎ハヤテだった。どうやら二人が扉に向かって二人の男子を投げ飛ばしたらしい。

妙・ハヤテ

「これ以上すると……」

怒りますよ（殺しますよ……）」

二人はニコツと笑顔でそんな事を言っただけ。しかし声が被さってとんでもない言葉が……

ガバツ！！

すると新八の上に倒れていた二人がいきなり立ち上がった、

近藤

「違いますお妙さん！！

これはストーキングじゃありません！！愛なんです！！」

虎鉄

「そつだ綾崎！！

俺達は困らせたいんじゃない！！

愛しているんだ！！愛を伝えたいんだ！！」

右側にいる男子は風紀委員長の近藤勲。

その隣は瀬川虎鉄であった。

近藤

「そつだよな！その通りだ虎鉄君！！」

そして廊下に引きずっていった。そして廊下では殺戮が……

そんな様子を教室の壁にもたれ掛かって眺めているのは二人の男子生徒。

沖田

「あゝあ、土方さん。近藤さんまたやられちゃってますぜ」

土方

「まったく懲りねーなあの人も。」

「つてか、俺達コレが初登場じゃねえか？」

沖田

「そりゃそうできゃ。」

元々この小説は旦那達がトリップする話なんですから」

土方

「じゃあ何で今回は俺達が出てんだよ？」

沖田

「さあ？閑話休題だからじゃないですかい」

壁にもたれているのは、風紀委員副委員長の土方十四朗。

その後ろで机に腰かけているのは風紀委員の沖田総吾である。

土方

「まったく……」

閑話休題だかなんだか知らねーが、出すなら出す出さないなら出さないでちゃんとして欲しいもんだな」

沖田
「だったら、土方さんはいつも通りごみ溜めでマヨ井（犬の餌）でも食ってりゃ良いじゃないですかい」

土方

「テメーヤんのかコラア！！」

土方が何故か帯刀していた刀を抜くと、沖田はひょいと机から降りて逃げたした。

沖田

「犬の餌がお似合いでさア、土方死ねコノヤロー」

土方

「ぶった斬るぞテメえ！！」

土方は逃げる沖田を追って廊下に飛び出していく。

咲夜

「小太郎、何やコレ？」

桂

「おお、よくぞ聞いてくれた咲夜殿。これはだな」

ワタル

「CDプレイヤー？」

その後ろでは席に座った長髪の男子の周りに三人の生徒が集まって

いた。

席に着いているのは桂小太郎。
このクラスの副委員長である。

そして彼の机の周りにいるのは右から愛沢咲夜、橘ワタル。勿論このクラスの生徒だ。

四人はどうやら桂の机に置いてある物について話しているらしい。それは白い丸く平べったいCDプレーヤーのような形に目とくちばしがプリントされていて、脇にはスピーカーが立ててある。

桂

「違う違う！」

これは音楽を流す機械だ」

ワタル

「だからCDプレーヤーだろ？」

桂

「CDプレーヤーじゃ無い、

“カッラップレーヤー”だ!!」

.....

咲夜

「……何やねんソレ」

桂

「これは見ての通りエリザベスの顔がプリントされている丸い機械でな、各種ボタンが両目、くちばし、おでこに設置されているんだ。これを押すと……」

ピ……

桂がプレイヤーに書かれたくちばしを押すと音が鳴った。
そして……

『やるなら今しかねーZURRA！
やるなら今しかねーZURRA！
攘夷がJOY、JOYが……』

桂

「このように、スピーカーから随時俺のカツラップが聴けるのだ。
これがカツラッププレイヤーだ」

咲夜

「くだらんわアアアアア！」

スパーン！

取り敢えず咲夜のハリセンが桂の頭を机に沈めた。

ワタル

「因みに……目やおでこを押すとどうなるんだ？」

桂

「痛たたた……」

よくぞ聞いてくれたワタル君。

右目は“カツラップ2” 左目は“カツラップ3”

おでこは初代カツラップとカツラップ2をマッシュアップしたカツラップが聴けるぞ。

ハハハ、凄いだろっ」

咲夜

「ああ凄いわ!!」

自分の馬鹿さ加減も含めた色んな意味で!!」

誇らし気に笑う桂に咲夜は呆れたように頭に手を当てて言葉を返していた。

高杉

「まったく、朝っぱらからうるせーなア……」

俺ア今日寝不足なんだよ」

また子

「晋助様、何してたんですか？」

高杉

「ソロバン塾の宿題」

また子

「は、はあ……なるほど」

机に足を投げ出してダルそうに呟く男子生徒は高杉晋助。
その話を聞いている隣の女子は北島また子。

武市

「まったく、お二人とも元気が無いですねえ。」

このクラスにはこんなにも見め麗しい美少女達が太陽のごとく輝いているというのに」

また子

「それはアンタだけっスよ。」

ロリコン」

武市

「ロリコンじゃ無いですから、
フェミニニストです」

二人の後ろから声をかけてきたのは武市変平太であった。

武市

「それよりも、見てくださいホラ」

また子

「はい？」

武市は何やら鞆を探ると、何かを取り出してきた。

それは綺麗にプラスチックケースに入れられた紙のような物。

また子

「写真つスカ？」

武市

「ただの写真じゃありませんよ。これは、このクラスの私的に最も輝く美少女達の着替え生写真をですよ」

また子

「何を撮ってんスカオノレはアアアアアア！！」

ピクッ！！

しかし、武市の言葉にクラスの何名かの男子が思いきり反応したように見えた。

武市

「大丈夫ですよ。チラリズムが重要ですからねえ」

また子

「全然大丈夫の意味が分からんわア！！」

しかし次の瞬間、武市の手にあったプラスチックケースは丸ごと抜き取られた。

ヒナギク

「じゃあ早速、これは没収ね。」

ハル子、お願い」

千桜

「はい」

武市から写真を奪ったのは、このクラスの委員長とある桂ヒナギクであった。

書記の春風千桜にそれを手渡すヒナギク。

武市

「ああ!!」

委員長、何て事を!??」

ヒナギク

「そういうかわしいモノは没収します」

また子

「ナイスです、委員長!」

慌てる武市に対したまた子はグツと親指を立てて合図を送る。

武市

「いかがわしくなんてありませんよ。アレは健全な男子生徒なら誰でも持っているアイテムです」

ヒナギク・また子

「アナタ（あんた）は健全じゃないわよ（っスよ）」

見事にハモるヒナギクとまた子のツッコミ。

また子

「あ、春風さん。それ燃やしてくれて構わないっすから。むしろ全部燃やして下さい」

千桜

「わかりました」

武市

「ちよつとオオオオ!!」

燃やすのは嘘ですよね……冗談ですよね!?!? ねえ!?!?

そんな武市変態、じゃ無かった武市をスルーして、ヒナギクは高杉に目を向ける。

ヒナギク

「高杉君、机にはちゃんとした姿勢で座ってくれるかしら?」

高杉

「……………オメーさんはちゃんとした姿勢で座り過ぎたせいでそんな体系になったんじゃないのかい?」

ピキッ……………

動くのが面倒だったのだろうか。高杉が足を投げ出したまま言った一言でヒナギクの額に怒りマークが浮かび上がる。

ヒナギク

「……………高杉君、どういう意味?」

高杉

「クックック……どういう意味だろうな」

二人の間には強烈な火花が散り始めた。やはり委員長と不良は簡単には相容れない存在同士らしい。

万斉

「ふむ……」

西沢殿、主は中々歌のセンスがあるでござるな」

歩

「ホントかな!? かな!？」

万斉

「ああ。貴殿の声は間違いなく売れると勘がいつているでござる。これを機に歌を書いてみてどうでござるか?」

歩

「ちょっと私やってみるよ!」

ギター片手に頷いているのは河上万斉。

その前で何故か先程まで発声練習をしていたのは西沢歩であった。

歩

「やっぱりテーマは明るさかな。最初の行は……」

万斉

「語尾にしりとりのように言葉を繋げればヒットする気がするぞ！」
さるよ」

その万斉の後ろには女子が三人固まっていた。

ナギ

「そして12次元からやって来た落武者大將軍の精鋭軍とアラスカの地底人達の軍が地球で大激突するのだ！」

神楽

「うおおおお！！」

マジでか！？どうなるアルか！？」

伊澄

「ワクワク……」

謎の原稿を片手に熱く語っているのは三千院ナギ。

この原稿は彼女が自作した漫画らしい。

その周りで楽しそうに話を聞いているのは神楽と鷺ノ宮伊澄。

二人ともナギの親友である。

ナギ

「だがその時！！その戦争を止めるべく、一人の魔法少女が！！」

神楽

「おお、遂に主人公アルな！！」

伊澄

「ドキドキ……」

ナギが立ち上がり、原稿を振り回すと、神楽と伊澄は感銘を受けたように目を輝かせていた。

一方教卓には……

サキ

「あの……何でしょうかコレ？」

愛歌

「さあ？誰かからの贈り物でしょうか？」

東条

「うーむ……私宛ですかね。

もしか先日行ったお店から……？」

九兵衛

「風俗からそんなものが届くわけ無いだろ」

東条

「いえ、もしやと……」

「行ってませんよ若！？」

「一本一万円コースなんて行ってませんからね！？」

「嫌いにならないで下さいね！！」

九兵衛

「心配するな。元から嫌いだ」

教卓の周りにいるのは、木嶋サキ、霞愛歌、東条歩、柳生九兵衛だった。

そんな四人の前には教卓に置かれた大きな包みがあったのだ。それを彼らは不思議そうに見ている。

愛歌

「あら、でも東条君。この間女子更衣室を覗いた時のデジタルカメラが今ポケットに……」

東条

「霞殿オ！？何故そのような事を知って……いやいや違います」

ドオオオオオン！！！！

弱点帳を開いて愛歌がそう言うと、東条は肩をびくつかせてうろたえがちに弁解しようとした。

が、それは九兵衛が発射したバズーカに消し去られた！

九兵衛

「まったく、少し反省している」

愛歌

「あらあら、まだ面白い話が沢山あるのに」

Sモードの瞳で残念そうにノートを閉じる愛歌。

サキ

「でも、本当にこの包みはなんでしょう?」

???

「決まってるじゃないの!!!」

九兵衛・サキ

「!?!」

サキが再度包みを見て呟いたとき、いきなり包みの中から叫び声が聞こえてきた。

???

「これは愛の証。

私自身をプレゼントにするというものよ。かの有名な女王クレオパトラも自分自身を捧げて愛の大きさを示したというわ……」

九兵衛・サキ

「……………」

???

「そう……つまりこれは……」

ガバツ!!

あやめ

「銀さんへの愛の大きさを示した私自身という最高の贈り物なのよ！！」

出てきたのは言わずもがな、さっちゃんこと猿飛あやめであった。

九兵衛

「また君か……」

サキ

「なんとかいうか、大胆な発想ですね……」

愛歌

「本当ですね」

彼女の相変わらずの銀八へのストーキングぶりに呆れたような二人と面白そうに成り行きを眺める愛歌。

あやめ

「ときにサキさん！！」

サキ

「は、はい!？」

あやめ

「アナタ、前から思っていたけれど、随分私とキャラが被っているわよね」

サキ

「え、ええ!？」

突然話を振られてうるたえるサキにあやめは包みから顔だけを覗かせて続ける。

あやめ

「ドジッ子眼鏡キャラという萌えの典型的要素が!!
まあ、アナタが狙ってるのは橘君みたいだから良いのだけどね」

サキ

「な!?!?!」

違いますよ、若とはそんなノノノ」

あやめ

「別にそんな事はどうでも良いのよ!!
問題はキャラ被りの件。
今すぐ違う別次元の個性に変えなさい!」

サキ

「へ?いやあの……」

あやめ

「なるほど。あくまでドジッ子眼鏡キャラを変えないつもりね。
しかし甘いわ!!
私と銀さんは既に や や を済ましてい
るのよ!!」

昨日だって で をして」

ガシッ!

銀八

「するかアアアアアアアアアア!!!」

自主規制の言葉を連発で叫ぶ包みごと、銀八は思いきり教室の外に蹴り飛ばした!

あやめ

「あああああああ………」

あやめの叫び声が下の方に遠ざかってゆく。
因みにこの教室は三階です。

九兵衛

「あ、先生」

愛歌

「ちょうど良いタイミングでしたね」

銀八

「ったく……来てみりやまた馬鹿な事ばかり……」

「オイ、オメーら席に着け！」

「愛歌も弱点帳をしまえ」

愛歌

「残念」

頭を掻きながら教壇に立ったこの男こそが騒がしいこのクラスの担

任、坂田銀八である。

天然パーマにやる気の無い死んだ魚のような目。
白衣をだらしくなく着ている。

銀八

「オイ聞こえてんのか？」
もう5ページ来てんだよ。
席に着けコノヤロー」

銀八がもう一度叫ぶと、徐々に教室は静まり、生徒達は席に戻り始めた。

あれだけうるさかった教室が静まり始めるのだから彼の統率力は優れているのだろうか……

銀八

「新八、オメーも床で寝てねーでさっさと席に着け」

新八

「……これが寝てるように見えますか……」

先程変態共の下敷きになっていた新八がようやく起き上がった。

一通りクラスの生徒が席に着いたのをみると、銀八は黒板を軽く叩いて教室を見回した。

銀八

「あゝ、今日は知っての通りこの小説で溜まっていた質問を……」

ん？」

銀八は話ながら気付いたように動きを止めた。

銀八

「全員居ねーな……」

制服姿が違和感バリバリの自称17歳メイド女と高校生の癖に煙管加えたアバズレ酒乱女は何処だ？

遅刻k」

ドン！！！！

銀八

「……………」

一同

「……………」

刹那……

銀八のいる黒板に何かが二つ突き刺さった。

銀八の頬をかすめる右側にはクナイが。左側にはボールペン恐ろしい事に黒板を貫いていた……

ガラ……

マリア

「すみません

委員の仕事で月詠さんとプリントを取りに行ってまして」

月詠

「すまない。

もうHRは始まっていたか」

どうやらボールペンとクナイを投げたのはこのマリアと月詠だったらしい。

黒いオーラを出しながらニッコリ微笑むマリアと煙管を加えたままクナイをチラつかせる月詠。

マリア

「それで先生？

何かおっしゃいましたか？」

銀八

「……………い、いえ。

お二人とも制服がとても良く似合っておられるなあ」と

銀八は顔の両端を凶器に塞がれ、冷や汗ダラダラで何とか返事をした。

マリア

「まあ、ありがとうございます」

月詠

「次は当てるぞ……………」

静まりかえる教室で二人はゆっくりと着席した。

銀八

「……………さっきの続きだな。」

知つての通り、この小説で質問が溜まり過ぎたため、今回は閑話休題を使って質問を捌いていく事になった訳だが……………
オメーらが馬鹿やってて前半のほとんどが潰された。
つー訳で本来HRでやる筈の質問コーナーは授業に代わってやることにする」

神楽

「キヤツホオオオオ!!」

勉強しなくて済むアルな」

近藤

「おお！粋な計らいですね先生!!」

神楽やもう復活した近藤を始め、勉強嫌いな生徒達が喜ぶ一方…

ヒナギク

「先生、何の授業を代わりに使うんですか？」

桂

「先生！カリキュラムは大丈夫なんですか？」

ヒナギクや桂を始めとした、一応真面目な生徒達は銀八に質問を投げかけた。

銀八

「あゝ、心配すんなツラツインス。授業は俺の現国を使う。カリキュラムは……まあテキストにやるわ」

ヒナギク

「その呼び方は止めて下さい！」桂

「ツラじゃ無い桂だ！」

銀八

「分アった分アった。

もう面倒くせえから先に進めんど。取り敢えずアシスタントのエリザベスに渡された質問を読んでくから、指された奴はちゃんと答えるよ。後は周りの奴がテキストにやり取りしてりゃ良い」

銀八はもう一度黒板を叩くと、隣から何故かエリザベスがやって来た。た。

そしてエリザベスがさっそく質問の書かれた紙を銀八に渡す。

キーンコーン……

銀八

「んじゃ、最初の質問。『銀さんに質問。効能でサラサラヘアになつたらまず何をしたい？』

そうだなゝ、やっぱりなつてからじゃねーと分からねえな」

神楽

「銀ちゃんがサラサラとか無理アルな。失敗するのがオチね」

妙

「神楽ちゃんの言う通りだわ。
そんな先生だと作品の趣旨が逸脱してしまいますよ」

銀八

「オーイ、どういう意味だソレ。オメーは効能でその壊滅的な料理の腕を直しても」

ドカツ！！バキッ！！

銀八

「……………えっと、次の質問。

『幸久に質問。温泉の話を知ったら飛び付く？』
どうなんだ？真田？」

幸久

「そうだな……………」

この女性恐怖症が直るんなら是非行ってーな」

沖田

「なんなら土方さんのマヨ病も直して欲しいですね」

土方

「テメーマヨ病って何だオイ。
何新しい病名作ってんだ」

沖田

「誰がどう見ても病気でさア」

土方

「んだとテメっ!!」

幸久

「まあまあ…」

ところで先生。俺はその温泉とやらに行けるのか？」

銀八

「知らん。作者に聞いてくれ。」

んじゃ続いての質問『鷲ノ宮の執事に質問。毎回銀さんが伊澄の迷子を発見しますが、どう思ってますか?』」

執事A

「いえ、本当に感謝しています。仕事柄お恥ずかしい話ではありますが…?」

執事B

「これ以上伊澄お嬢様の迷子が酷くならないようにしなければ…」

新八

「いや、もう既になってますけどね。時空越えましたからね今回」

近藤

「何だ新八君!!」

俺達だって愛する人の為なら簡単に時空くらい越えられるさ」

虎鉄

「その通りだ。そんな事は朝飯前だな」

妙・ハヤテ

「いつぺん地獄に空間移動しろ」

銀八

「あゝ、次な。『万事屋に質問。こつちの世界で定春が狛犬化したらどうする?』」

あの姉妹呼べば良いんじゃないね?」

神楽

「あの巫女姉妹アルか」

阿音

「何勝手な事言ってるのよ!!」

私はキャバクラを休む訳にはいかないの!!

馬鹿な男共から金を吸いとらなくちゃいけないのよ」

百音

「姉上。そういう事は堂々と言ってはなりませんよ」

銀八

「次の質問いくぞ。『この小説ではハヤテとアテネの過去篇とかやりますか?』」

作者」

伽藍

「やりません。つーかやりようがありません。原作まんまって事ですっ飛ばします」

銀八

「次、『銀さんが原作に出てきた奥義書を見たら?』
そーだな、カメハ 波使えんなら見るわ」

ハヤテ

「いや、三千院の奥義書ですから。気とかそんな奴ですよ」

銀八

「だったら、ぶっ壊したい厨二病の高杉にやったらどうだ?」

高杉

「テメーから先にぶっ壊してやるつかア」

銀八

「ハイハイ続いての質問『万事屋メンバーに質問。寝るときは私服
ですか?』」

んなわきやねーだろ。寝るときはちゃんと寝間着だ」

神楽

「何故か押し入れに寝間着が入ってたアルよ」

銀八

「新八は眼鏡だけだな」

新八

「寝間着だよ!!!」

東条

「先生!!! 若の寝間着姿もとても可愛いんです!!!
ほらここに写真がー」

ドオオオオオン！！

銀八

「九兵衛、あんまし教室でバズーカをぶっぱなすな」

九兵衛

「すまない先生。この馬鹿をしめたら片付ける」

銀八

「続いての質問『ハヤテに質問。ハーレムとか言われてるけど銀さんだって隠れハーレムだと思わない？』」

ハヤテ

「そうですね。そう思います！」

銀八

「オイ、それは嫌味かフラグ乱立執事」

ハヤテ

「だからその名前は止めて下さいって」

銀八

「ハイハイモテモテハヤテ君には困ったもんだ。次の質問な。『鬼兵隊に質問。武市変態にとって白皇はパラダイスでは？』」

武市

「変態じゃないから、先輩だから」

また子

「まあ実際パラダイスなんじゃないんすか？
ロリコンですし」

武市

「フェミニストですよまた子さん。しかし本当に素晴らしい学校ですよ。まさしくメツカ、聖地と呼ぶにふさわしい。世界が私にもたらした奇跡と言っても過言ではありませんよ。
ねえ、万斉殿も晋助殿もそう思うでしょう？」

晋助

「さあな……………」

万斉

「考え方は人それぞれでござるからな……
まあ賑やかなメンバーなら良い曲が思いつく事も多いかなとは」

銀八

「今才メーらの悪役のイメージがどんどん崩れてってるからな」

月詠

「正直ここ最近から怪しいものじゃったがな」

咲夜

「先生の世界にもホンマに色々あるんやなあ」

銀八

「次いくぞ。『ハヤテ組に質問。こつちの世界でエリザベスが侵略を始めたら?』」

あー、コレよく分からねーけど聞く所によると今週のジャンプらしいな。作者はジャンプを最近読んでねえから答えんの無理らしい。悪いな」

伽藍

「すみません?」

銀八

「んじゃ次、『作者に質問。前にヒナギクとハヤテが銀さん達の過去を夢で見ましたが、過去篇ってやるんですか?』」

伽藍

「ぶっちゃけ、今考え中です。色々考えてます。トリップさせるとか何とか……」

桂

「……………」

高杉

「……………」

銀八

「……………次の質問な。『人気投票っていつまで?』」

伽藍

「ああ、これは今回の長篇の中盤くらいにしようかなと思ってます」

銀八

「次で最後か……」

『蒼妃さんに質問。銀さんのことどう思ってますか？』

蒼妃さん本人が居ないので、手紙に書いて頂いています。

エリザベス」

エリザベス

「えっと、読みます。

『不思議な方だと思えます。』

何者にも流されないような……」

でも自分の生き方を貫くような芯の強さもあるようで。

羨ましいですね。

とても素敵なお事だと思います。』」

銀八

「来たアアアアア！！」

コレ来たアアアアア！！」

マジでか！？ちよつ、貸せエリザベス」

銀八はエリザベスから手紙を貰うと改めて読み始める。

ガタツ！

あやめ

「納得いかないわ！！」

何よソレ！！何でどこぞも知れぬパツと出の女に私の銀さんが奪われなきゃいけないのよ！！」

マリア

「色々と間違ってますよ猿飛さん……?」

月詠

「取り敢えず落ち着け猿飛」

席から立ち上がって叫びだすあやめを落ち着かせようとする二人。

あやめ

「アナタは良いのツッキー!!」

あんなパツと出に銀さんが取られちゃうかもしれないのよ!?!」

月詠

「何故わつちに振る!?!?!」

わつちは別に……奴がどうしようが関係ない!?!」

そうは言うものの、語尾が弱々しくなる月詠。

あやめ

「あなたもよお妙さん!!」

このままじゃ銀さんが危険よ!?!」

妙

「な!?!?!」

べ、別に良いんじゃないですか。あんなちゃらんぼらん、どうなっても知りません」

やはり月詠と同じように何故か少し語尾が弱々しくなる妙。

因みに手紙を読んでいる銀八にはなんにも聞こえていない。

マリア

(これは……………)

確かに銀さんもハヤテ君の事を言えないかもしれませんね?)

そんな様子を見てマリアは呆れ半分困惑半分でそんな事を考えていた。

あやめ

「まあ、毛頭あなた達なんか譲る気はないけどね。

しかし私が同じ列に並んでも良いライバルに認められた存在よ！それがこんな所で諦めて良いの!？」

妙

「猿飛さん？勝手に話を進めないで下さる？

ライバルにもそんなモノにも参加した覚えは無いわよ」

月詠

「右に同じじゃ」

あやめ

「まったく情けない!!」

良いわ!!私が今から手本を見せてあげる!二人は指をくわえてそこで突っ立ってなさい」

あやめはクルリと手紙を読んでも銀八の方に向き直ると…

あやめ

「銀さアアアアアん!!」

私の愛を
で m 「

銀八

「うるせエエエエエエエエ!!!」

銀八があやめを窓の外の遙か彼方まで吹き飛ばした。

キンコーン……

銀八

「あゝ、ちょうどきりも良く一時間目が終わったな。

んじゃ質問コーナーはここまでだ。次は英語で姫史……湊川先生の授業だな。

サボらず出席しとけよ。んじゃどっちかのツラ、号令」

桂

「ツラじゃ無いk」

ヒナギク

「きりがないわ。

気をつけ、礼」

一同

「ありがとうございました!」

こうして、質問コーナー処理の一時限目の授業が終わった。

閑話休憩篇

私立銀ごと高等学園〜1時限目

質問処理〜(後書き)

伽藍

「え〜、非常にグダグダな学園モノでした(笑)
このキャラとこのキャラはこんな絡みをするだろうなと思って書いた悪ふざけの一つです。
やって欲しいという方がもしいらしたら、また機会がある時にやってみたいと思います」

銀時

「次回は本編に戻んぞ」

新八

「最強の迷走者、鷲ノ宮相手にどう戦うのか!？」

神楽

「次回もよろしくアル」

第九十八訓 旅は道連れ世は情け（前書き）

くお知らせ

伽藍

「今回は前書きを借りてちょっとしたお知らせです。人気投票ですが、次回を投稿した時に締切日を発表します。発表は長編の最中に閑話で入れたいと思うのですが、ちよつとしたアンケートを」

- 1．人気投票の編をやる
- 2．人気投票は結果だけで良い

伽藍

「このどちらが良いか、出来れば投票と一緒に感想又はメッセージに書いて頂けると嬉しいです。どうかご協力お願い致します」

因みに、人気投票篇は原作銀魂のような争奪戦は無理だと思えます。理由はハヤテキャラは皆良い人なのでキャラ崩壊になりかねないからです

伽藍

「では、もう少しで人気投票も終了。ドシドシ投票お願いします
では、始まります！」

第九十八訓 旅は道連れ世は情け

ガタン……

前回までのあらすじ!!

無事にビュー踊り子号に乗車した銀時達と鷺ノ宮親子。

何事も無く列車は進み、万事屋一行は依頼成功を確信する。

昼頃になって銀時は神楽に奪われた昼食の代わりに調達するため、車内を詮索する事にした。

そこで様々なメンバーに出会う。

家族旅行で伊豆に向かっていているというヒナギク達。

彼女の目的は別にあるようだが…

更に姉弟で温泉に行くつもりだという湊川姫史と蒼妃。

銀時はデート(?)に誘おうとしたが、姫史に阻止された。

そしてハヤテ達に合流し、昼食を調達して鷺ノ宮親子と共に居る新八達の所に戻る途中……

すれ違った列車に親子らしき姿を銀時は目にする。

勿論何かの間違いかと彼は思った……しかし!!

新八の話によると既に親子は失踪していた後だったというのだ!!

これには……

「つてあらずじ言ってる場合じゃ無いでしょオオオオ!!
今の状況分かってるんですか銀さん!？」

踊り子号の車内。

車両と車両の連結部分の出入口ドアがあるひらけた場所に新八のツッコミが響いた。

「あゝ、空気読めよ新八。
せつかくあらずじを長引かして何やかんやで上手くいきましたゝ的
な行運びをする俺の作戦が台無しじゃねーか」

「ならねーよ!!
何したってここから動かなきゃ何にも起きねーよ!!」

「あゝ、ハイハイ。
落ち着けよぱつつあん。
今から動くトコだろーが」

「え?」

銀時は面倒臭そうに頭を掻くと車内のドアを指差した。

その言葉に新八は意外そうな表情をする。

「神楽」

「合点アル!!」

神楽は大きく頷くと走行中の為硬く閉ざされたドアに手をかける。

「え？神楽ちゃん？」

「ぬおオオオオオオ!!」

神楽がそのまま力を込めると、扉はギシギシと軋んだ音をたてながら開き始めた。

「銀さんまさか……!!」

ここから飛び降りる気ですか……!!」

「二人にもしもの事があつたら俺達の首も飛びかねねーからな。それによオ……」

驚いた声をあげる新八に銀時はため息混じりに顔を向けた。

「万事屋はどんな依頼もこなすのがモットーだろ」

「……………銀さん」

新八は感動したように彼の言葉を反芻する。

ちょうど神楽がドアを全開に開ききったようだった。

「「おー」」

「ぬおオオオオオオオオオオ!!
落ち、落ち、落ちるウウウウウウウウ!!」

銀時と神楽は猛然と叫びながらへばりつく彼を見て驚いたような声を出す。

「よし、行け新八。」

このまま手を離して線路に着地。鷲ノ宮親子を追跡しろ」

「出来るかアアアアア!!」

ぬぐ……し、死ぬわアアア!!」

現在新八はかなり危機的状況の為逆にツッコミは迫力が増しているように思える。

「心配ねーよオメー」

これギャグだから。ノリとタイミングでどんな不可能も可能にする小説だよ?

だから行け」

「無理無理無理イイイ!!」

死ぬから!! ホント死ぬから!!!!」

「大丈夫だばつつあん。

お前はやれば出来る奴だ」

「出来るわけねーだろオオオオオオオ!!」

いつ、一瞬で……っ！！
こっ、木っ端微塵になるわア！！」

死にもの狂いで外側のドアにしがみつきながら叫ぶ新八。
身体半分というかほとんどが外に投げ出されているので、ツッコミ
一つ満足にする余裕も無いのだろう。

やがて彼の両手はプルプルと震え始める。

「ぬごオオオオオオオオ！！
も、もう無理！！手が……握力が……！！」

「よし、そのまま線路にダイブだな。飛び魚になったつもりで」

「殺す気がアア！！」

車内の銀時と七割車外の新八が鬼気迫るやり取りを繰り広げている
中、神楽は二人から離れてゆっくりと後ろに下がっていた。

その様子に気付いのか、銀時は後ろを振り返る。

「ん？何やってんだ神楽？」

「助走を取ってるアル」

「……………は？」

啞然とする銀時の表情に構わず、神楽は目一杯後ろまで下がると今
にも前方に走り出しそんなポーズをとり始めた。

無論彼女の前方には開かれた外へのドアの前に立つ銀時と列車から

振り落とされないように内にしがみつく新八の手と顔。

「……ちよつと神楽ちゃん？」

ねえ、どこに走り出そうとしてるの？ねえ？

何か嫌な予感がするんですけど………」

「ぐぐオオオ！！もう無理イイイイイイ！！」

表情をひきつらせている銀時と叫ぶ新八に、神楽は一言。

「外アル」

銀時が何か反応をする間も無く、神楽は前方に向かって思いきり突進した！！

「だあアアアアアアア！？」

待てエエエ！！ちよつと待つて」

銀時のところまで走ってきた神楽は右手で彼を、左手で今にも落ちそうだった新八の手を掴み……

「キャツホオオオオオオオオオオオオ！！！！」

列車から思いきり飛んで、外に身を投げていった！

「ぎゃあアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

絶叫する二人を道連れに……

車内の乗客の中には綺麗な弧を描きながら飛んでゆく三人の姿を目撃した人もいたという……

第九十八訓 旅は道連れ世は情け

「こうして、マリアさんとお話するのも久しぶりですね」

「そうですね」

ホント、随分と久しぶりかも」

踊り子号のとある車両では、ヒナギクとマリアが向かい合って座っていた。

何故二人がこのような状況になっているのかはコミックス11巻の第6話を参照して頂きたい。

「しかしご家族で温泉ですか」

「ええ、誕生日の祝いが出来なかったからって義父おじいがどこかに旅行に
行って聞かなくなつて……それで伊豆がテレビでやっていたのでそこ
に行こうつて私が。」

お姉ちゃんは仕事で来れないんですけど」

「はは、相変わらず子供みたいな人ですねー」

「似てるんですよ、お姉ちゃんに」

ちよつと呆れたように息をつくヒナギクにマリアは可笑しそうに微笑む。

「でも良かった。」

「ご両親とは上手くやれてるみたいですね」

「はは、もう長いですから」

ヒナギクは何かを思い返すように頷くと、コホンと咳払いして顔を俯かせる。

「まあ、それとは別な理由もあつて……」

ちよつと旅に出たくなつたというか……」

「悩み……ですか？」

あ………」

マリアはその言葉を聞くと、屋敷で見たあるテレビの事を思い出した。

レポーター

「この温泉につかると……
女性は胸が大きくなり……」

「……………」

「？」

マリアは暫く考えるようにヒナギクの胸の辺りを見つめる。
そして顔を上げると……

「だ、大丈夫ですよ。
女性の魅力というのはそんな大きい小さいでは無く……」

「な、何でそうなるんですかノノノ私は別に……」

ヒナギクは慌てて否定しようとするが視線は僅かに泳いでいる。

「いえ……」

ただ色々と効能があるとテレビでもやっていましたから「

「ま、まあ確かに

効能の事は気になりますか……」

理由は違いますよ？

これは……そう

大きな噂になってきている効能が正しいのか調べようと思ったんです。
生徒会長として！」

（生徒会長は関係無い気がしますが……）

ヒナギクのかなり無理がある答えにマリアは思わず苦笑してしまっ
た。

「あ、もしかして……」

効能が必要な相手が出来たって事だったりしますか？」

「な、全然違いますよ！！そんなんじゃないやありませんから！！」

いきなりおかしな方向に話を振られたヒナギクは必要以上に首を振
る。

「フフ、冗談ですよ冗談」

「もう、マリアさん！」

二人が車内でそんな風に談笑をしている頃……

*

「……………」

「……………」

穏やかな音と共に、水面が浮き沈みを繰り返す。
そんな海を目の前にして、海岸沿いの砂浜には万事屋の三人が座つて上空を見上げていた。

「……………」

「……………」

「空が青いアルな」

パコッ！！

「青いアルな、じゃねーよ！！
どーすんですかこれから！！」

能天気な呟いた神楽の頭を叩くと、新八は目の前の海をそれから反対方向を指差す。

「前には海しか無いし、とっくに列車も行ってしまったし！！
完全にコレ迷子じゃないですか！！」

「仕方ないアルよ！！」

私は列車を飛び出してすれ違った列車の方向に走った筈ヨ！！」

「いや、明らかに真っ直ぐにしか突っ走ってなかったよね！？」

言い合っている二人の横で、銀時は面倒臭そうに寝転がって空を見上げている。

「あゝ、オメーらよオ……」

喧嘩してる暇があんなら何か伊澄達を追う手を考えるよ。

このままじゃ俺ら打ち首だよ」

「そんな事言ったって……」

「……………あ！！」

新八が流るように言葉を濁すと、神楽が何か思い付いたように声をあげた。

「どうしたの神楽ちゃん？」

「この砂浜におっきな“SOS”って文字を書くアルよ。
おっきく目立つように！！」

神楽は二人の前に立つと、目一杯手を広げてみせた。

「……………いや、そもそもそんなモノ書いてどうするの？」

「空から誰か見つけてくれるかもしれないネ」

エッヘンと自信満々に胸を張る神楽。しかし二人は呆れたように彼

女に目を向けるだけ。

「時間の無駄だな。

つーか別に遭難してる訳じゃねーだろ」

「やっぱり線路に沿ってを反対側に向かった方が良いですよ」

二人は顔を見合わせると、何事も無かったかのようにこれからどうするかの話に戻す。

「オイ！！私のSOS作戦はどうアルカ！？

オイ！！無視してんじゃねーゾ」

「あー、ハイハイ。

んじゃにその辺に書いとけ。気が済むまでテキストに」

銀時は砂浜を指してそう言うと、神楽は頬を膨らませて砂浜に向かっていた。

10分後……

「銀さん、やっぱり反対方向で追いかけてみましょう」

「だな。タクシーか何かを拾って追うしかねーか」

二人は暫く話し合った結果、やはりすれ違った列車の後を追うという結論に達した。

「じゃあ……行きましょうか」

新八は砂浜の方で砂遊びをしている神楽に目を向ける。

「神楽ちゃん!!」

もう行くよ!!」

「分かったアルよ」

神楽は砂浜から立ち上がると、銀時達の所に戻って走りだしたが、その時である……

バタバタバタ……!!

「?」

上空から聞こえてきたのは何か大きな羽音。
三人は不審に思い空を見上げた。

バタバタバタ……!!

「なア!!?」

そこには何と、大きなヘリコプターが音をたてて砂浜に降りて来ようとしていたのだ。

「おー！！」

きつと私のSOSを見てくれたからね！！」

「ほ、ホントに来たアアアアアアアアアア！？」

驚愕の表情を浮かべる二人と嬉しそうに飛び上がる神楽。そんな三人に構わずヘリコプターは砂浜に着陸した。

「……」

三人が見つめる中、ヘリコプターのドアが開かれる。そして中から出てきたのは……

「おー、やっぱり万事屋三人やったか」

「あ、咲アル！！」

「咲夜さん！？」

なんと咲夜であった。

彼女は三人を見るとやはりと笑って近づいてくる。

「おお、銀時ではないか！！」

『意外な再開』

「ツラア、エリー！！」

更にはヘリコプター内から顔を覗かせたのは、ツラにエリザベスだった。

「ヅラじゃ無い、桂だ」

*

「本当にありがとうございました。まさか咲夜さん達も伊豆に向かっていたなんて。助かりました」

「ほんまに偶然やな。」

ちよつどこの辺を飛んでる時に小太郎が『SOSが見えた』なんて言い出すもんやから」

万事屋一行は咲夜のヘリコプターに乗せて貰っていた。

一行はヘリコプター内で向かい合う形になっている。

「おー、やっぱりヅラはSOSの文字には反応するアルな」

「ヅラじゃ無い桂だ。」

俺もSOSの文字を書く状況が多々あるからな。特に砂浜付近にはいつも気を配っているのだ」

「どんな状況やねん」

神楽は会話はしているが、その視線は興味津々に外の空や町の景色に向けられている。

桂が腕を組ながらフツと微笑すると、咲夜はすかさず突っ込んだ。

「せやけど、何で自分らあんなトコにいたん？」

「あゝ、実はなア……」

銀時は頭を掻きながら事のあらましを説明し始めた。

……説明中……

「ははあ、なるほど。」

伊澄さん達がなあ……」

「ああ。だから助かったのはつかの間、このままじゃ……」

「三人仲良く獄門島流しですよ……」

そう言つてため息をつく銀時達。一刻も早く何か手を打たないといけないのである。

「そんな沈まんと。」

要するに下田駅に……というかウチらの所に伊澄さん達を連れて来ればええんやろ？」

「へ？」

しかし咲夜はそんな二人に気楽そうな様子で声をかけた。思わず顔を上げる銀時達。

「簡単な話や。」

ちっと時間がかかるかもわからんけどな。

巻田！！国枝！！」

「ハッ！！」

咲夜はお付きの執事と呼ぶと、何やら話をし始める。

暫く彼女の言葉に頷いている執事達だったが、やがて立ち上がり、

一人は携帯電話を取り出して、

もう一人は奥の操縦室に消えていった。

「えつと……咲夜さん？」

「ああ、心配いらへん」

状況が全く呑み込めてない銀時達。新八が代表しておずおずと尋ねると咲夜は『大丈夫』という仕草をしてみせた。

「愛沢グループに協力してもらっただけや。」

さっきの話からするに、列車の大体と検討はついたからな。

後は時間の経過を考えてその列車が停まるだろう駅に人間を片つ端から送り込む。

勿論列車も特定出来てる訳やないから疑わしい列車にも派遣する。

後は見つけ次第こっちに連れて来てもらえばええ。

まあ、数千人の小規模なローラー作戦つちゅーところやな」

「……………」

銀時と新八は啞然として言葉を失っている。
ツッコミ所が多すぎて何を言えば良いのか分からないのである。

((数千人が小規模……！！！！))

取り敢えずそれが二人の中に最初に浮かんだ驚愕するツッコミ所であつた。

お金持ちの凄まじいさは彼らの考えの及ぶところでは無いのである

……

「銀さん……」

僕達のやって来た事って一体……」

「完全に負け戦だつたな」

そんな二人の思いを余所に、一同を乗せてヘリコプターは目的地に進んでいった……

1時間後……

「本当に申し訳ございませんでした。

お母様を探していたら私までいつの間にか違う列車に……

ご迷惑をおかけしました」

何故か下田にある愛沢家の別荘に伊澄と初穂が愛沢家の執事達によって連れて来られていた。

この別荘は随分広い敷地であり、愛沢家の屋敷よりやや小さいくらいである。

そして先に到着していた銀時達と只今広く高い玄関ホールで向かい合っているのだ。

「まあ伊澄ちゃん。

ダメよ、いつも周りをよく見ないと」

「お母様が最初に居なくなっただのですよ！」

「まあ……そうだったかしら？」

「お母様……」

相変わらずポーツとしている初穂にため息をつく、伊澄はまた銀時達に振り返って頭を下げる。

「本当にご迷惑をおかけして……すみませんでした」

「ハハハ。もう大丈夫ですよ。とにかく見つかって良かった」

「千百二十歩譲ってそのまま地雷を爆発させてそれでもまだ生きていたエイリアンが発見されるよりも珍しくダメガネは良いこと言っ

たアル!!

二人が無事だったならそれが何よりネ!!」

「神楽ちゃん、同意してくれてるの? コケにしてるの?」

新八に続いて神楽も伊澄達に笑ってそう返した。

「ま、そうだな。

打ち首にならずに済めば恩の字だと思えりゃ」

銀時もため息混じりにそう言うが、二人と同様な意見のようだ。

「皆さん……ありがとうございます」

「私からも、ありがとうございます」

そんな三人の様子に伊澄は安堵したように笑みを浮かべてお礼を言った。

初穂も微笑んでそれにとくと…

「それで……

私達はどうしてここにいますでしょうか?」

「お母様……」

初穂は相変わらずいつも通りのボケっぷりだった。

「では、下田の私達の屋敷に行きましようか」

「そうですね」

「私お腹すいたアル!!」

伊澄はそう言うと別荘の出口にクルリと向きを変える。

新八と神楽もようやく目的地にたどり着く事が出来ると頷いた。

しかし……

「いや、待った」

「「「?」」」

しかしそんな彼女らに銀時は呼び止める。

「咲夜、ヘリで俺達をその下田の鷺ノ宮屋敷に送ってはくれねーか?」

「へ?別にええけど……」

何でや?」

咲夜は伊澄達と銀時を見比べて首を傾げる。

まあ当然の疑問であろう。

鷺ノ宮家の下田の別屋敷はこの愛沢家の別荘から大した距離があるわけでは無いのだが。

「いや、例えどんな距離だろうが……二人ならまた迷子になるかもしれないねーから」

「「なるほど」」

銀時の言葉にポンと手を打って納得する新八と咲夜。

「どろい意味ですか！」

「そろい意味や」

パタパタと袖を振って抗議する伊澄に咲夜はさも当たり前のように返す。

「いくら何でも空中で迷子にはならねーだろ。
つーかなったらもうお手上げだけだな」

「ハハハ……」

そんな訳で万事屋一行と鷺ノ宮親子は目的地である下田屋敷に入り
コプターで向かったのだった。

20分後、今度こそ無事に彼等は屋敷に到着したという。

一方……

もう一人の主人公は……

〈熱海駅〉

「わかりました。では僕は西沢さんを送らして頂きますから。
お嬢様達をよろしくお願いしますヒナギクさん」

「ええ。分かったわ」

熱海駅の改札口前に集まっていたのはハヤテ、歩、ヒナギク、マリ
ア、そしてナギだった。

何故ナギが見つかったているのか、歩が一緒にいるのかはやはりコミ
ックス11巻を参照して頂きたい。

「では、行きましょうか西沢さん」

「う、うん！」

ハヤテの言葉に歩は嬉しそうに自転車の後ろに座る。

そして二人はナギ達に一旦別れを告げて駅を後にした。

「よし。では我々も行くぞ」

「次は気をつけて下さいね、ナギ」

二人を見送ると、ナギとマリアも改札口から中に入ろうと……

「その前に、二人ともまず切符を……」

ヒナギクは慌てて二人を連れて券売機に向かうのだった。

*

く踊り子号車内く

「ふう……」

もうじき到着ですね」

「綺麗な景色……」

楽しい旅行になると良いわね」

車内では少し疲れたように息をつく姫史と窓から見える景色を見て微笑む蒼妃の姿があった。

「そうですね。」

特に綾崎が来ているということは姫も来ているに違いない！！
それに神楽嬢もいらっしやる！！

これはもう、素晴らしい旅行で間違いありませんね！！」

「座ってないとダメよ姫君」

思わず立ち上がり拳を突き上げる彼に乗客も少なからず注目する。
しかし彼はそんな事はお構い無しのようにだ。

『まもなく』

駅く、 駅く』

こうして、秘湯の潜む地『下田』に次々と人が集まり始めるのだっ
た……

第九十八訓 旅は道連れ世は情け（後書き）

教えて！！銀八先生

銀八

「あー、教科書閉じろオメーら。早速質問いくぞ」

『万事屋に質問。ハヤテの世界にお登勢とタマと神威が来たらどうする？』

どうするってもなア……ババアには家賃2ヶ月分を払っちみたい
な。

今結構稼いでるしな、金持ち多いし」

新八

「2ヶ月分じゃなくて5ヶ月分ですからね、家賃」

神楽

「あの馬鹿兄貴が来たら、今度こそ私がぶっ飛ばすアル！！」

銀八

「んじゃ次の質問。」

『神楽に質問。駅弁何個まで食える？』

神楽

「あと八杯は食べられるヨ！！
いくらでも入るアル」

銀八

「食い続けて圧迫死しろクソガキ。続いて『銀さんと新八に質問。温泉旅行と言えば？』」

そりゃオメーアレだろ」

新八

「アレですね」

銀八

「サラサラへアー！！（と見せかけて蒼妃さんと温泉デート！！）」

新八

「視力回復！！（と見せかけて効能で存在感を究極なもの！！）」

神楽

「どうせ裏でろくな事考えて無いアル」

ナギ

「下心見え見えだからな」

銀八

「因みに、デビルマンさんの小説の桂馬君より特選炒飯を頂いてんぞ。今から配るからオメーらありがたく頂いて……」

ハヤテ

「先生！

既に神楽さんが……」

神楽

「あ、ゴメンアル。あんまりにも美味しいからつい全部食べちゃったヨ」

銀八

「……………次の質問。

『ヒナギクとハヤテに質問。

夢で見た超男前な銀さん……………とオマケのヅラを見た感想といつものまたまた超カツコイイ銀さんと……………ついでにヅラについてどう思う？』」

ヒナギク

「質問が所々明らかに換えられてるんですが……………」

銀八

「何言ってるんだ。まんま書いてある事を読んだだけだよ俺は」

桂

「ヅラじゃ無い桂だ。

ヒナギク殿の存在は九兵衛殿以上に脅威だな。

かくなる上は俺が毒を盛った。ピザを配達……………ごぶっ!？」

銀八

「テメーに聞いてねーよくたばれヅラ。

オメーら、さっさと質問の答えを」

ハヤテ

「確かに凄いギャップですよ。戦争中って時代背景までシリアス一色でしたし」

ヒナギク

「普段見てると本当かどうが疑いたくなるけどね」

銀八

「んじゃ最後だな。」

『万事屋に質問。妙とナギの料理はどちらがマシっ、んなモン答えるまでもねーな』

新八

「まあ、即答ですね」

銀八・新八・神楽

「比較不可」

ナギ

「うおおおおい！！」

どついう意味だソレはアアアア！！」

銀八

「つー訳で、次回もよろしく頼まア」

第九十九訓 旅行先ではやたらとテンションが上がる（前書き）

伽藍

「えっと、今回も前書きコーナーはお休みです。すみません理由は実は二つお知らせがあるからです。それは」

・人気投票の締切日

・人気投票篇について

伽藍

「です。まずは締切日。

これは6月23日の午後23時59分までにしたいと思います。最後の投票、ドシドシお願いします！因みに結果は軽い発表の話を混じえて長編中に閑話として発表です。

そしてもう一つ大事なのが人気投票篇についてです。

皆様が1とアンケートに答えてくれたので、やることに決定いたしました！

そしてその方法なのですが、それは……！！」

・人気投票篇は読者の皆様と一緒に作る！！

伽藍

「そういうコンセプトにすることにしました！
方法は簡単です」

感想に見てみたいシーンやキャラのやり取り等を一つだけ書いて
頂く

集まったそのシーンややり取りなどを繋げて話を作っていく

一つのシーンというのは、
例えば、誰と誰が何をするとか、誰と誰がこんなやり取りをする
かです。

(バトル、ギャグ、ネタ、恋愛等々……)

伽藍

「あくまで一つのシーンであって、一から十までこんな感じにして
くれという要望は受け付けません。こういう形式での初チャレンジ
なので失敗するかもしれませんが今回は思いきってやってみるこ
とにしました。

本編とは関係無いので、極度のキャラ崩壊等で無ければ大概の事は
大丈夫だと思います」

この1シーンの募集は人気投票の結果が出てからなので、
その時にまた詳しくお知らせいたします。

伽藍

「では、本編始まります！」

第九十九訓 旅行先ではやたらとテンションが上がる

く下田駅く

ホームに到着した踊り子号の扉が開くと、ドッと乗客が降りはじめ
てきた。

「……………」

その中に、黒いスーツにボストンバックを肩に掛けた男性が列車か
ら姿を現した。

顔はかなり端麗で、背もスラリと高くルックスは極めて良い。

「ねえねえ!!」

あの人、かなりカッコ良くない？」

「あ、ホントだ!!」

うそ〜!!超美形かも」

そんな男性を見て、ホームにいた女性二人が顔を見合わせる。
二人は彼を見つめながら少しずつ近づいて行く。

「ちょっと声かけてみようか」

「ヤダ、うそ、逆ナン!？」

そう言ったその時、男性はポストンバックから大きな一眼レフを取り出した。

Nikonの一代古いタイプのかなり高級なカメラである

「……………」

啞然としている女性達を余所に、男性はカメラを持ち上げて列車に向ける。

カシャカシャカシャ!!!

そして列車に向けてシャッターをきり連写する。
女性達は驚いたように二三歩下がった。

「いや、やはりリゾート21黒船電車は最高だな」
前頭フォルムのこの曲線、この絶妙な角度、どれをとっても申し分ない!!!

「……………」

ゆっくりと大変幸せそうに汗を拭うこの男性は、変態ストーカーかと瀬川虎鉄であった。

「スーパービュー踊り子も良いけど、2100系も良いよな!!!
この角度、ここの角度だよ!!!
素晴らしい!!!」

虎鉄はそう言いながら更に列車の先頭をNikonで撮影し始める。

「なんか……」

邪魔しちゃ悪いし行こうか」

「う…うん…」

女性達は撮影を続ける変態からすぐごとと離れていった。

因みに、彼のような鉄道マニアの撮影中に話しかけると本気でキレられるのでご注意を（経験談）

「っは!？」

こんな事をしている場合では無かった!!

あの三千院のワガママお嬢様は今日、伊豆の下田に行くと言っていた。ならば勿論執事の綾崎も来ているはず!!」

（伊豆……温泉……）

運命の再会……）

変態の脳裏に浮かぶのは、

ピンク色のシャボントーンに包まれた世界。その中に浴衣姿で頬を赤らめるハヤテとそれを抱き止めようとすする虎鉄の姿。

（ロマンスの春は……）

すぐそこに……!!……!!……!!）

*

「へくちツ!!」

「どうした？風邪か？」

どこかの中庭を歩いていたのはナギ、マリア、ハヤテ。ハヤテがくしゃみをしたのでナギが振り返った。

「さあ？」

ちよつと悪寒が走ったというか……」

「ふーん。気をつけるよ」

三人はまた歩き出して、ようやく大きな屋敷の前に辿り着いた。しかしそれは練馬区にある三千院屋敷とほとんど変わらない外観である。

「あの……」

何かお屋敷に戻ってきたみたいな気がするんですけど……」

「気のせいだ」

ナギはさらりとそう言うと、三人でそくそくと屋敷の中に入ってゆく。

そしてとある渡り廊下に並ぶ窓の一つの前に立った。

「さあ見る!!」

この窓の外を……!!」

「うお！！太平洋が広がっている！！っていつかやっぱそれだけ！？」

ナギが開け放った窓には一面に青く綺麗な海が広がっていた。まあ景色だけで屋敷の外観内観は三千院屋敷と何ら変わらないようなのだが……

「しかしハムスターはどうしたのだ？」

「ああ、西沢さんなら、おばさんの家行かれると……それを言ったらヒナギクさんは……」

「ヒナギクは両親と食事だって」

「一応家族旅行みたいですから」

ナギに続いてマリアがそう付け足した。ハヤテは納得したように頷いて返す。

「じゃあ銀さん達は？」

「銀さん達なら伊澄さん達のお屋敷に無事に到着されたと先程連絡がありました」

「そうですか。良かった」

マリアの言葉にハヤテは安堵したように頷く。

「そっだ、ハヤテ。」

せっかく温泉地に来たのだからちよつと行って来たらどうだ?」

「へ?」

ハヤテはナギの不意な発言に思わず尋ね返した。

「私は夕方まで少し休もう(ゲームやアニメが主)と思うからな」

ナギとマリアはまだ日も高い外の景色に目をやるとそう言った。

「いや、そんな悪いですよ!

僕だけそんな」

「まあ、気にするな。

普段とは違う環境なのだから、たまにはゆっくりして来い」

「でも……」

ハヤテは躊躇うように言葉を濁すと、マリアを見る。

「ナギの言う通り、温泉は疲れもとれますから。

ハヤテ君はいつも頑張ってくれてますから、この旅行くらいは羽を伸ばして来て下さい。ね?」

「……ありがとうございます。」

ではお言葉に甘えて……」

マリアもニツコリと微笑んでそう言うてくれたので、ハヤテは好意を受け取る事にした。

「あ、伊澄の所にいる銀時達も誘って行ったら良い。どうせアイツらも暇だろうから。あと、神楽をこっちに呼んできてくれ」

「わかりました。」

あ、でもお嬢様達は温泉には行かれ無いのですか？

ナギはぐつと伸びをして欠伸を一つしてみせた。

「今日は屋敷でのんびりするさ。帰るのは明後日だから、明日はぶらぶらと温泉を回ってみるかもな」

「そうですね」

「そうですね。」

では、僕は少しお暇を頂いて温泉に行ってきますね」

ハヤテは二人にニッコリ笑ってそう言うと、部屋に向かって温泉街への準備をすることにした。

（温泉地か）

どんな秘湯があるのか楽しみだな）

若干スキップ気味になりながら、ハヤテは部屋の扉を開けるのだった。

第九十九訓 旅行先ではやたらとテンションが上がる

（鷺ノ宮屋敷（下田））

「あー、随分と世話をかけたみたいじゃな。礼を言うぞ」

「いえ、色々ありましたけど無事にたどり着けて良かったですよ」

屋敷のとある居間では銀華と万事屋の三人が向かい合っていた。

銀華は湯呑みを啜り、三人にそう言っていると新八が苦笑混じりにそう返した。

「そついや、あの二人はどこに行ったんだ？」

「二人なら、執事達が力の戻る温泉に連れていったぞ。

多分今頃、温泉に到着しているじゃろうな。迷子になってなけりゃ」

「……………それは聞かなかった事にするか」

東京駅までの道のりや踊り子号での惨事を思い出して思わず首を振る銀時。

「まあとにかく、これでお前達の依頼は終りだ。ご苦労じゃった。」

後は明後日まで自由にしてくれ。温泉街なら『鷺ノ宮の使い』と名乗れば無料で使えるようになっておる。屋敷も自由に使ってくれて構わん」

「「おー」」

「マジでアルか！？
温泉入り放題アルか！！」

銀華が部屋を見回してそう言うつと銀時と新八が意外そうに、神楽は嬉しそうに尋ね返した。

「ああ、大体は大丈夫じゃな。
ただ山奥の秘湯とかは分らんがの」

「だったらご馳走も食べ放題アルな！！キャッホー！！」

神楽は立ち上がると両手を上げて叫ぶ。

「それじゃ、ワシは少し休む。」

ちとあの馬鹿執事に構って疲れたのでな。
好きにして良いがあまり遅くならんようにな。
では、また後で」

「おー、分アったよ」

「あ、はい。ありがとうございました」

「また後でアルなばっちゃん」

銀華は口に手を当てて小さい欠伸をすると、万事屋三人が見送るなかで部屋を後にした。
部屋には三人が残される。

「いや〜、これは結構有意義な報酬ですね」

「そうだなア……」

三日間温泉地でゆっくりなんて、めったにない機会だからな」

「私は温泉だけで無く、料理も食べ放題が良いアルよ!!」

神楽は目の前で両手を大きく振り上げて目を輝かせている。

「ま、俺ア珍しい^{サラサラヘア}効能がある秘湯つつーのを見つけなきゃならねーけどな」

「そうですね。そっちの効能（存在感）も楽しみですね」

そんな風に各々が温泉に加えて自分の欲望を思い描いていると……

「あ、すみません」

「「「「？」」」」」

中庭の方から聞きなれた声が聞こえてきた。
三人が居間から縁側の開け放たれた扉の方に目を向けると、
そこにはハヤテが立っていた。

「ハヤテ？」

何でここにいるアルか？」

「あ、神楽さん。

お嬢様が呼んで来て欲しいって。今から大丈夫ですか？」

「ナギが？」

ハヤテは中庭から屋敷の縁側の方に歩いていくと、神楽に目を向ける。

「ええ」

「分かったアル！！」

銀ちゃん、ちよつと私ナギの所に行くてくるヨ」

「あ、ちよつと！！」

言うが早いか、神楽は居間から玄関の方に駆けていってしまった。
ハヤテは慌てて彼女に声をかけたが、おそらくもう聞こえていなか
つただろう。

「神楽さん……」

お嬢様達の場所分かるんでしょうか？」

「あ、多分大丈夫。」

さつきここに来る途中、咲夜さんに教えて貰ったから」

「あ、そうなんだ」

実は彼等は、ヘリコプターでの移動中に咲夜に場所を色々教えて貰っていたのだ。

ハヤテは新八の言葉に安心したように頷いた。

「ところでオメー……」

神楽呼びにここまで来たのか？」

「ええ、それもありますけど。」

実は……」

銀時がそうに尋ねると、

ハヤテは二人の前に鞆から浴衣を取り出して、ニッコリと微笑んでみせた。

*

（白皇学院）

「あゝ、ダリい……」

全く、せつかくの休みだったのに……」

学院の教室では参考書で顔を扇ぎながらうだる雪路の姿。

「こら雪路、ダメじゃないか。」

「一応先生なんだからもっとしっかりしないと」

「そっだぞ雪路。」

「大人だっただらもっとしっかりしろ、しっかり」

「そーそー。」

「桂ちゃんももっとしっかりしないと、しっかり」

その雪路に向かい合うように机に座るのは美希、理沙、泉の三人娘である。

「ふっ……」

「しっかりって……」

ダン！！

「あんた達がしっかり勉強しないで赤点なんか取るから、私が休日出勤で勉強教える羽目になってんだろーがアアアアアー！！」

「「「わっ」「」」

雪路はため息をつくと席に着いて教壇に足を乱暴に乗っける。

「全く、アンタ達さえこんな点取らなきゃ、私も今頃下田温泉で飲み放題だったのに……」

「下田温泉？」

美希はノートから目を離して雪路に向けた。

「ウチのバカ父がヒナの誕生日、ちゃんと祝えなかったからって温泉宿とつたの……」

まったくあいつめ!!

ヒナだけには甘いんだから!!」

「まあヒナと雪路じゃ、ヒナの方が可愛いわな」

「人として当然の道理だね？」

「うっさい!!!」

三人が好き勝手言うので、雪路はもう一度教卓を叩いて叫ぶ。しかし美希達は机から離れて何やら身を寄せていた。

「しかし温泉か。」

悪くないな」

「なんか隕石の影響で素敵な効能になっているらしいからな」

「あ?」

すると美希は雪路に背を向けたままスクツと立ち上がる。

「雪路、私は思うんだ」

「な……何を？」

「人間は同じ場所においても何も変わらない!!
違う場所に飛ばたいこそかわれるのだと!!」

そしてクルリと振り返るとグツと拳を握りしめて言いきつた。

「いやいや、だからって温泉地で勉強なんて……
集中も出来ないし、大体私旅費が……」

雪路は当然呆れたように顔を上げるが……

「私のクレジットカードの限度額は100万までであるぞ」

「ちよつ!!」

何してんの!!早く行かないと電車乗り遅れちゃうわよ!!」

そんな訳で、雪路を筆頭に三人娘達は下田に向かうために学院を後にするのだった。

*

温泉街

「わー、ここが温泉街ですか
人がたくさんいますね」

「浴衣姿の方もいっぱいいるね。こういうのも風情があって良いですね」

お土産袋を持った私服姿の観光客、浴衣姿に桶を抱えた温泉客、周りに並ぶ出店の数々。

そして言わずもがな、温泉がある銭湯の店の数々。

そんな賑やかな温泉街にいるのは、ハヤテ、新八、銀時の三人だけだ。

三人は浴衣姿で周りを見回しながら温泉街を歩いている。

「ここには色々な種類の温泉があるみたいですね」

大浴場、共同浴、露天風呂、森林浴……

二酸化炭素泉、炭酸水素塩泉、硫黄泉、医療泉……」

「でもよオ、隕石温泉の効能っつーのは秘湯なんだろう？」

この辺には無いんだよな……」

ハヤテが色々な温泉の看板を見て驚きの声をあげるが、銀時はテレビで言っていた秘湯の方が気になるようだ。

「まあ銀さん。

夕方までは随分ありますし、一旦どこか温泉に入ってから探しましょうか？」

「あ、良いですね！

露天風呂とか気持ち良さそうですね」

「……………んだな。

なら取り敢えずひとつ風呂入るか。どうせなら高い風呂つと」

ハヤテの提案に新八と銀時は同意すると、三人は下駄を鳴らしてどこかの温泉に入るべく再び歩き出した。

同じ頃……

「わー!!」

凄い、人がいっぱいだ〜」

「ホントね。」

連日テレビでも報道してたからかしら」

またある温泉街では、周りの景色に驚き嬉しそうに手を広げる歩とヒナギクがいた。

歩は桃色の浴衣姿でヒナギクは黄色の浴衣を着ている。

「でも偶然だね〜」

下田でさっそくヒナさんと会うなんて」

「ええ。」

家族と食事が終わって散歩してたらばったり歩と会ったものね」

「それで、弾みで温泉街に来ちゃったんですね〜」

「確かに弾みだったかもね」

歩はヒナギクの方を見るとクスリと笑う。

「せっかく来たんですから、
親交を深めるって事で温泉巡りしてみましょっよ
ヒナさん！」

「あ、ちよつと歩!？」

分かったから引つ張らないでよ。もう……」

二人の少女は変に可笑しそうに、それでいて楽しそうに微笑み合っ
と、行き交う人の中に入っていったのだった。

さあさあ、楽しい温泉旅行の始まりだ!!!

第九十九訓 旅行先ではやたらとテンションが上がる（後書き）

ちよこつと！！銀八先生

銀八

「あゝ、今回は質問コーナーはお休みだ。んで今日は簡単な注意がある。

それはこれだ。はい、黒板に注目ー」

原作の下田温泉篇は一泊二日ですが、この小説の温泉篇は二泊三日になっていきます。

なので、下田に出掛けた日が原作より一日早いと考えて下さい。

銀八

「そんな訳で、原作と日にちがずれてると思った奴、ちゃんと覚えておくように。

んじゃ、今日はここまでー」

特別訓 たかが人気投票 されど人気投票（前書き）

【結果発表】

～40位から16位まで～

クラウド

「やって参りました人気投票結果発表！！

沢山の感想投票は勿論、

今回はメッセージ投票も前回より多い八件も頂きました！

投票総数はなんと544票！！

皆様、本当にありがとうございます！！」

伽藍

「前書きでは40位～16位までのキャラクターを発表します！」

クラウド

「では、どうぞー！」

第40位

《SP界の黒豹》

【翠希莎喇】1票

（前回I：New）

第40位

《目付きの悪いSP》

【霧崎弥鈎】1票

(前回 | : N e w)

第 4 0 位

《オタクな呪縛霊》

【リン・レジオスター】 1 票

(前回 | : N e w)

第 4 0 位

《実は 9 1 歳の曾祖母》

【鷺ノ宮銀華】 1 票

(前回 | : N e w)

第 4 0 票

《最期まで紙芝居を愛したおじいさん》

【紙芝居屋のおじいさん】 1 票

(前回 | : N e w)

第 4 0 位

《ドジッ娘メイド》

【貴嶋サキ】 1 票

(前回 | : N e w)

第 4 0 位

《紅い弾丸》

【来島また子】 1 票

(前回 | : N e w)

第 4 0 位

《そもそも原因》

【洞爺湖仙人】 1票

(前回I:New)

第40位

《酒乱教師》

【桂雪路】 1票

(前回25位:)

莎喇

「投票ありがとね」

霧崎

「つーか二つ名なんだよ…」

リイン

「さて、秋葉でも行ってくるか」

銀華

「ふん、まあ感謝はしようかの」

サキ

「私に投票なんて、ありがとございます…!」

また子

「私は良いから晋助様に投票を…!」

仙人

「ジャンボリックマグナムウウウウウウウウウ…!」

雪路

「ドンペリイイイイ!!!」

第31位

《人斬り万斉》

【河上万斉】2票

(前回1:New)

第31位

《迷子パワー》

【鷺ノ宮初穂】2票

(前回1:New)

第31位

《ベテラン執事》

【巻田さん】2票

(前回1:New)

第31位

《万事屋のマスコット》

【定春】2票

(前回22位:)

万斉

「またいい曲が書けそうな気がするぞい」

初穂

「ポー……………」

巻田

「ありがとうございます」

定春

「ワン」

第27位

《謎の宇宙生命体》

【エリザベス】3票

(前回1:New)

第27位

《ドSな副会長》

【霞愛歌】3票

(前回18位:)

エリザベス

『投票ありがとうございます…!』

『これからも桂さんと一緒に頑張ります』

愛歌

「まあ、ありがとうございます。じゃあお礼に弱点帳の中身を少し

……………なんて冗談」

第25位

《猫?トラ?》

【タマ】5票

(前回1:New)

第25位

《夢見る少年実業家》

【橘ワタル】5票

(前回23位:)

第24位

《キング・オブ・ジミー》

【西沢歩】5票

(前回12位:)

第24位

《超イケメンロリコン教師》

【湊川姫史】5票

(前回13位:)

第25位

《元総理の孫》

【花菱美希】5票

(前回1:New)

美希

「ふむ……」

せつかくだから泉の恥ずかしい画像を」

泉

「わー！！ダメだよミキちゃん！！」

タマ

「フツ……人気者は辛いぜ……」

ワタル

「順位は下がったけど、票数が増えたから良かった」

歩

「……………」

がっくりと項垂れている

姫史

「これも皆の意見……」

甘んじて受けるでしょう。

歩君、そんなに落ち込むな。また次回がある」

歩

「……………」

膝を抱えて体育座り

ワタル

「そ、そうだよ！！人気投票くらいでそんな！！
きつと出番が増えればまた順位なんて上がるさ！！」

美希

「そつだな。明けない夜は無いぞ歩君！」

歩

「パトラッシュ……私もう疲れたよ……」

ワタル

「ああ、死ぬな……」

ネロ！！ネロオオオ！！」

姫史

「フッ……」

これも運命……」

第20位

《シヨウラーな式術師》

【澳門真司】6票

(前回15位……)

真司

「最近出番が少ないの……
もっと作者には頑張って貰いたいものじゃな」

伽藍

「すみません……」

頑張ります？」

第19位

《まるでダメなおっさん》【長谷川泰三】7票

(前回14位：)

長谷川

「票より仕事をー！」

生きる希望を……！！！」

伽藍

「この長編ではちゃんと出番がありますよ」

第18位

《裏で頑張る執事長》

【クラウド】8票

(前回17位：)

クラウド

「皆様！！投票ありがとうございます！！不肖このクラウド、誠心誠意頑張らせて頂きます！」

第17位

《陽気で熱い武人》

【真田幸久】9票
(前回16位：)

幸久
「投票、感謝する」

第16位

《色々謎な巫女》

【朝風理沙】10票
(前回1：New)

第16位

《色んな意味で過激派》

【高杉晋助】10票
(前回1：New)

理沙

「おー、随分と順位変動が大変な事になってるなー」

高杉

「ククッ……」

この先どうなるかねえ……」

クラウド

「えー、以上が40位から16位の順位です。意外と変動が大きな

キャラクターもいましたな」

伽藍

「では、本編からは上位キャラクターの発表です！
一体どうなっているのか！？」

クラウド

「では人気投票に向けて……」

伽藍・クラウド

「カウントダウン！！」

特別訓 たかが人気投票 されど人気投票

く祝！！第二回人気投票結果発表く

ハヤテ

「こんにちは！！」

ハヤテのごとくの主人公、綾崎ハヤテです」

ナギ

「ハヤテのごとくのヒロイン、
三千院ナギなのだ！！」

神楽

「銀魂のヒロイン、神楽アルよ！！」

伽藍

「銀魂のごとくの作者、
伽藍です」

挨拶をした四人は三千院家のお屋敷の前に立っていた。

ハヤテ

「ところで、何故僕らがここにいるんですか？」

ナギ

「決まっているではないか！

今回の人気投票は電撃発表だからな」

伽藍

「色々な場所を回ってみなさんに会って発表していく感じかな」

ハヤテ

「なるほど」

ナギ

「今回は私の順位が上がっている気が……」

伽藍

「うん。ナギはかなり票が集まってたからね。相当上がってると思うよ」

ナギ

「やはりそうか!!」

（これならばヒロイン一位!!あわよくば人気投票一位も夢では無い……!!）

伽藍の言葉にナギは目を輝かせて拳を握りしめる。

神楽

「私は早くパーティーで食べ放題やりたいアル」

伽藍

「それはまた後でね」

ハヤテ

「ではいきましようか。」

第14位の方は……」

ハヤテはそう言って“14位”と書かれた冊子を一足先に開いた。

ハヤテ

「……………あ」

かと思うと、
直ぐにパタンと閉じる。

ナギ

「どうしたのだ？」

神楽

「どんな奴が出てきたアルか？」

ハヤテ

「い、いやこれは……………」

ナギ

「どれどれ？」

ハヤテ

「あ!？」

渋るハヤテからナギが14位の冊子を奪いとった。

第14位

《変態馬鹿作者》

【伽藍】 12票

(前回1:New)

神楽

「……………」

ナギ

「……………」

ハヤテ

「ハ、ハハハ……………」

伽藍

「あ、あら……………」

僕ですか？」

中に書いてあった文字を見て呆れたようにジト目になる神楽、ナギと困ったように笑うハヤテ。

ナギ

「こんな奴が14位とはな……………」

神楽

「世も末アルな……………」

ハヤテ

「取り敢えず一言どつぞ……………」

伽藍

「え、えっと……」

伽藍がおずおずと前に出ようとするが、次の瞬間！！

????

「「「ふざけんなアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」」」

伽藍

「ぶべらアアアアアアアアアア！？」

後ろから何人もの人が伽藍を思いつきり吹き飛ばした！

伽藍は顔面から地面に叩きつけられる！！

ワタル

「何でオメーが14位なんだよ！？

おかしいだろ！！」

銀華

「貴様のような小童がア！！」

歩

「これは流石に納得いかないかな！！かな！！！！」

幸久

「いつぺん地獄みせてやる……」

真司

「いくらか実験したい醤油があったのう……」

姫史

「貴様の存在を消して幼女達に光を当ててくれる……」

愛歌

「伽藍さんの弱点帳は結構埋まってますよ」

美希

「我々も伽藍の痛い映像を流出させるか」

理沙

「ああ、全国ネットだな」

それは順位が下位のキャラクター達だった。

一同は伽藍の前に立ちほだかる。一部のキャラクターは怒りに拳を向ける者もいる……

伽藍

「ちょっと待つて!？」

これはどうしようも無いことでは……三人も何とか言って、あ!!

伽藍はハヤテ達に助けを求めようと振り返ったが……

ナギ

「さて、次にいくかハヤテ」

ハヤテ

「あゝ、そうですね」

神楽

「馬鹿の犠牲は無駄にはしないネ」

三人は既に歩き出していた。

伽藍

「ちよつと待て!？」

ちよつ、オイイイイイイイ!!」

哀れな作者は、この後燃えるゴミに出されて帰ってくる事は無かったという……………

特別訓 たかが人気投票 されど人気投票

〜愛沢家〜

咲夜

「へ?」

ハヤテ

「おめでと〜ございます!〜!」

ハヤテ達三人は愛沢家のリビングで咲夜と向かい合っていた。

咲夜

「何が？」

ナギ

「人気投票の順位UP、おめでと〜なのだ!〜!」

神楽

「咲、おめでと〜ネ!〜!」

第13位

《命よりツツコミを!〜!》

【愛沢咲夜】 13票

(前回19位：)

咲夜

「ホンマか〜」

前回2票だったから嬉しいわ。

皆、投票ありがとうな」

ナギ

「一気に咲の人氣が上がったな。前回比が凄いぞ」

ハヤテ

「流石ですね咲夜さん！」

神楽

「咲なら当然の結果ネ！！」

私も嬉しいアル」

三人は各々賛辞を述べると、咲夜も『ありがとう』とニッコリ笑って答えた。

咲夜

「それで、自分らこれからどこ行くん？」

ハヤテ

「次の12位の方の所に向かうつもりです」

神楽

「咲も一緒に行くアルよ！」

咲夜

「せやな。小太郎も散歩しててどうせ暇やし」

ハヤテ

「では……」

咲夜はそう頷くと、ハヤテ達は次なる目的地に向かうために“12位”と書かれた冊子を開いた。

第12位

《流浪の天然少女》

【鷺ノ宮伊澄】 15票

(前回8位：)

伊澄

「ここは……どこ……」

ハヤテ

「あ、伊澄さん」

ハヤテ達が冊子を見ている横に、フラフラと伊澄が放浪してきた。

伊澄

「あ、ハヤテ様、ナギ、咲夜、神楽……どうしてここに？」

咲夜

「どうしてって……」

「ここはウチの家何やけど」

伊澄

「練馬駅に向かおうとしていたのだけれど……」

伊澄はキョロキョロと周りを見回して首を傾げる。

ナギ

「でもちよつど良かった。」

伊澄、人気投票の結果発表だ」

神楽

「順位は落ちちゃったけど、やっぱり伊澄は人気者ネ!!」

ナギと神楽は12位と書かれた冊子の中の紙を見せた。

伊澄

「まあ……」

こんなに投票して頂いて、ありがとございます」

ペコリと可愛らしく頭を下げる伊澄。

ハヤテ

「でも伊澄さんが12位という事は、トップ10は変動が大きくなっているって事でしょうか？」

咲夜

「うーん、前回上位のキャラが結構外れてるみたいやからな……」

神楽

「何にしてもいけば分かるアルよ!」

ナギ

「では次は11位だな」

一同は取り敢えず愛沢家を後にする事にした。

〈住宅街〉

ハヤテ

「という事で暫く歩いた訳ですが……11位の方はどこにいるんでしょう?」

ナギ

「さあ?あの場所に行けばいるんじゃないか?」

咲夜

「ってか、もう伊澄さんがいらへんのやけど……」

宛も無く住宅街を歩いているハヤテ達。咲夜の言う通り、伊澄の姿は既に四人から消えていた。

????

「あれ、ハヤ太君?」

ハヤテ

「え?」

すると横から不意に声がかかってきた。
四人は直ぐに振り返る。

第11位

《いいんちよさんレッド》【瀬川泉】 17票
(前回11位：)

ハヤテ

「瀬川さん」

泉

「こんにちはハヤ太君！
それに皆も」

ハヤテ達に声をかけてきたのは泉であった。
相変わらず元気にニコニコと笑っている。

ハヤテ

「おめでとつございます！！」

泉

「ふえ？」

ナギ

「人気投票で17票を獲得、11位でした！」

咲夜

「一言コメントを！！」

いきなりの事に戸惑う泉だが、ハヤテに続いてナギ、咲夜もマイクを近づける仕草をする。

泉

「え、えっと……」

こんなに沢山投票してくれてありがとう!!

これからも楽しんで頑張ります」

泉もマイクを持ったふりをしてそうコメントしてくれた。

神楽

「いよいよ次はトップ10アルな〜ここからが本番ネ」

ハヤテ

「瀬川さんも一緒に来ますか？」

泉

「えっと、私はミキちゃん達の所に行かないといけないから。また後でね」

ナギ

「うむ。ではまた後で」

泉は四人に別れを告げると、美希達のいる三千院屋敷の方に歩いていく。

四人はそれを見送ると、再び歩き始めた……

〈商店街〉

取り敢えず商店街までやって来たハヤテ一行。

ハヤテ

「いよいよ次からは上位10名、トップ10の発表になります!!」

神楽

「誰がどんな順位になっているか不安と期待が半々ネ」

咲夜

「自分らの投票したキャラクターは果たして入っているか!？」

ナギ

「では、発表なのだ!!」

そう言ってナギ達は“10位”と書かれた冊子を開けた。

第10位

《麗しの蒼》

【湊川蒼妃】 18票

(前回1:New)

ハヤテ

「第10位は湊川先生のお姉さん、湊川蒼妃さんです!!」

咲夜

「18票で10位……」

オリキャラの中では堂々の一位やないか。凄いな」

ナギ

「あの姫史のお姉さんだったな。二三回しか見た事はないけど」

神楽

「あ、蒼姉アル!!」

蒼姉〜!!こつちアルよ〜!!」

一同が驚いている中、神楽が商店街のとある場所に大きく手を振り上げてそう叫んだ。

蒼妃

「まあ、神楽ちゃん。

それに皆さんも。こんにちは」

ハヤテ

「こんにちは蒼妃さん。

ちょうど良い所に。実は……」

蒼妃

「？」

こちらにやって来て微笑みかけてくれた蒼妃に、ハヤテは挨拶を返すと今回の人気投票の件を簡単に説明した。

蒼

「まあ……」

人気投票ですか」

ハヤテ

「ええ、それでその人気投票に蒼妃さんが第10位に入ったんです！！」

蒼妃

「え？私が……？」

ハヤテの言葉に蒼妃は頬に手を当てて小首を傾げる。

ハヤテ

「おめでと〜ございます！！」

「18票獲得です！！」

ナギ

「オリキャラの中ではダントツ一位のトップ10入りです！！
何か一言どうぞぞ」

ハヤテとナギは先程と同じようにマイクを彼女に近づけるふりをする。

蒼妃

「こんな私に投票して下さる優しい方がいらっしやるなんて……
ありがとうございます。」

私なんかには勿体無いくらいですけど」

蒼妃は少し戸惑ったように、でも優しく微笑んでそう言った。

神楽

「勿体無くななんて無いアル。」

蒼姉は美人だしスタイルも良いし、それにとっても優しいから当然

の結果アルよ！」

蒼妃

「ありがとう神楽ちゃん。

お世辞でも嬉しいわ」

咲夜

「ホンマに謙虚やな」

ナギも少しは見習わないとな」

そんな二人のやり取りを見て、咲夜はニヤリと隣のナギに目を向ける。

ナギ

「何を言うー!!」

私は謙虚でおしとやかな女性ではないか!!なあ、ハヤテ!!」

ハヤテ

「え？」

え、ええ……まあ……

その………」

ナギ

「うおい!!」

何で目を反らすのだ!!」

ハヤテ

「いや………」

困ったようなハヤテにナギは両手を振り回して抗議をする。

神楽

「これから9位以上に会って回るけど、蒼姉も一緒に行くアルよ！」

蒼妃

「あ、この後少し用事があるの。一緒に行きたいのだけど、ごめんなさいね」

神楽

「そうアルか……」

「じゃあ後で屋敷には来て欲しいアル!!」

蒼妃

「ええ、分かったわ。」

「神楽ちゃんに会えるなら、後でお伺いするわね」

神楽

「うん」

「神楽は元気に大きく頷いて笑ってみせた。」

ハヤテ

「用事の途中でしたか。」

「お止めしてすみませんでした」

神楽

「蒼姉、また後で会うアルよ!!」

蒼妃

「ええ、皆さんも頑張ってくださいね」

蒼妃は一同にもう一度挨拶をすると、商店街を後にしたのだった。

ハヤテ

「では、次は9位の方の発表ですね!」

咲夜

「前はナギが9位やったな」

ナギ

「うぐっ!!」

だ、だが今回は大丈夫な筈なのだ!!」

ナギは若干狼狽えたように一步下がるが、無理に強がってみせる。

マリア

「あら？」

皆さんと一緒にどうしたんですか？」

一同

「？」

さあこれからという所で、商店街にいたのかマリアがやって来た。商店街でもメイド服かよというツッコミは相変わらずスルーの方向らしい。

ハヤテ

「マリアさん……！」
どうして「ニコロ」？」

マリア

「ちょっとおつかいに行っていて、その帰りなんです」

ナギ

「そうか。ならばマリアも一緒に行こう」

マリア

「はい？」

ハヤテ

「ええ、実は……」

ハヤテは先程と同じように簡単に人気投票の事情を話した。

マリア

「なるほど……」

そういえばそんな事を言っていましたね、伽藍さんが」

ハヤテ

「その伽藍さんは多分もう戻って来れないと思うんですけどね……」

理由を知って納得したマリアを加え、一行は人気投票を進める事にする。

ハヤテ

「では9位は……」

神楽

「レッツオープンアル!!」

第9位

《ピチピチの17歳メイド》

【マリア】19票

(前回6位 :)

ナギ

「おお!!マリアか!!」

神楽

「凄いアル!!」

前回より票数UPよ!!」

マリア

「まあ、19票も……」

皆様本当にありがとうございます」

マリアはニコツと微笑んでお礼を言った。

ハヤテ

「でも、前回より順位が下がってますね」

ナギ・神楽・咲夜

「!?!」

グサツ!

マリア

「……………!!」

何気ないハヤテの一言に三人はビクツと肩を震わせ、マリアには何か矢のようなものが突き刺さった。

咲夜

「ホンマに自分アホか!?!」

ナギ

「な、何を言ってるのだハヤテ!!」

神楽

「デリカシー無さすぎヨ!!」

ハヤテ

「え?ええ!?!」

いきなり三人に責められるハヤテは何が何だか分からないように、あたふたとしている……

ハヤテ

「えっとあのすみません!!」

何か失礼な事を？」

マリア

「大丈夫ですよ。

そんな事くらいで気にしませんから」

ナギ・神楽・咲夜

「……………」

マリアは微笑んでそう言うと、クルリと四人に背を向ける。

マリア

「分かってますから。

読者の皆さんから“怖い”って感想に書かれる事も、いつも17歳じゃないように見られている事も、最近出番が少なかった事も、原作の人気投票でも二位から五位に転落した事も……………」

そして体育座りをして落ち込み始めてしまった。

ハヤテ

「ええ！？

ちよつとマリアさん！？」

ナギ

「ハヤテのせいだな」

咲夜

「せやな。

今のは自分が悪いな」

神楽

「女の子落ち込ませるなんて最低アル」

三人はジト目でハヤテを見つめる。慌ててハヤテはマリアに駆け寄っていった。

ハヤテ

「すみませんマリアさん!!」

さっきのはそっぴい意味では無くてですね……!!」

マリア

「……………」

何とか色々と慰めようとすもりらしいが、恐らく「ことごとく失敗に終わるであろう事は目に見えている。」

咲夜

「では、引き続いて8位の発表といくか」

ナギ

「うむ、オープンなのだ!!」

第8位

《狂乱の貴公子》

【桂小太郎】20票

(前回10位：)

神楽

「……………」

ナギ

「……………」

咲夜

「あー……」

コイツええか。面倒やしな」

おもむろに冊子を閉じると、咲夜はため息混じりに首を振った。

神楽

「そうアルな。

次行くヨ」

ナギ

「えっと、次は7位だな」

咲夜

「んなら、発表するで……………」

咲夜は“7位”と書かれた冊子を取り出す……………

?????

「ハハハハハハハハハハ！！」

そう簡単に事は運ばんぞ……!!」

ナギ・咲夜・神楽

「!?!」

突如、三人の頭上からよく聞き慣れた馬鹿の声が商店街に響き渡った。

声の主は言うまでもなく……

神楽

「ツラ!?!」

咲夜

「またアホが……」

ナギ

「つーかどうやって登ったんだあんな所?」

三人が見上げる先には、馬鹿の代名詞こと桂小太郎と隣にはエリザベスがいた。

彼は商店街のとある建物の出ツ張った屋上にある日除けの屋根に腕を組んで立っていた。

桂

「人気投票に感謝しよう!!」

俺は桂小太郎、好物は蕎麦だ!!」

エリザベス

『よっ!!日本一!!』

咲夜

「誰も聞いとらんわ!!」

ナギ

「また話がややこしくなる……」

咲夜は屋上に向けてまますッコミをいれ、ナギと神楽は呆れたように眺めている。

桂

「話は聞かせて貰ったぞ!!」

俺を抜きで人気投票を進めようとは笑止!!

今から進行はこの俺が仕切らせて貰おう!!」

エリザベス

『人気投票は我々が乗っ取った!!』

桂・エリザベス

「ハッハッハッハッハッハッハッハ!!」

出張ったルーフに立ったまま高らかに笑い声を上げる二人。

咲夜・ナギ

「……………神楽」

神楽

「合点アル」

咲夜達の言葉に神楽は番傘を桂のいるルーフに向ける。
そして……

ドオオオオン！！

神楽

「フウ……」

番傘からチャージショットが放たれ、桂達のいた屋上付近は無惨にも爆発した。

咲夜

「これで静かになったな」

ナギ

「さて、行くか」

神楽

「そつアルな」

一行は頷き合つと商店街を後にする事にした。

因みに、破損した器物は三千院家が全て弁償しました。

*

（通学路）

ハヤテ

「それで、僕達は一体何処に向かっているんですか？」

マリア

「上位の皆さんがいそうな場所に向かっているだと思いますよ」

ナギ

「二人とも……」

いつの間に復活したんだ……」

ちゃったり会話に戻ってきた二人にナギは突っ込む。

神楽

「次は7位アルよ」

咲夜

「目的地まで暫くあるし、いけるトコまで発表するか」

ナギ

「うむ！レッツオープンなのだ！！」

第7位

《夜兔族のおてんば娘》

【神楽】23票

(前回7位：)

ハヤテ

「神楽さんですよ!!」

おめでとございます!!」

ナギ

「順位をキープで票数も上がったな!」

マリア

「おめでとございます」

神楽

「フフン、まあ私にかかれば当然の結果ネ。でも順位はもう一つ上げたかったアルよ」

誉められて嬉しそうに胸を張る神楽。だがやはり順位アップはしたかったようだ。

咲夜

「いや、やっぱり……!?!」

ナギ

「ん?咲?」

咲夜は何かを言いかけて冊子を開いたが、中を見るなり急いで閉じて言葉を止める。

咲夜の持っている表紙には“6位”と書かれていた。

ハヤテ

「咲夜さん？」

「どうしたんですか？」

咲夜

「い、いや……」

「自分ら結果は見てへんのやろ？」

咲夜は恐る恐る尋ねると、周りもナギも頷いてみせた。

特にナギは期待に目を輝かせている……

ナギ

「当たり前だ。私の順位が上がっているのに楽しみを先に見ては勿体無いではないか

作者のお墨付きも貰った事だし……これでメインヒロインの座は……！

「！

咲夜

「それなんやけどな……」

コレ」

第6位

《超大富豪のお嬢様》

【三千院ナギ】 27票

(前回9位：)

ナギ

「……………!?!」

ピシッ!とナギが白黒になって輝が縦に入る。

ハヤテ

「……………」

マリア

「……………」

神楽

「……………」

咲夜

「……………」

取り敢えずアレな雰囲気がある場所を支配し、一同は一瞬黙り込むが直ぐに顔を見合わせて……

ハヤテ

「わ、わー!!」

凄いですねお嬢様!前回より三つも上がってますね!」

神楽

「ひ、票数も格段にアップしてるアルよ!!ナギ、凄アル」

ハヤテと神楽は慌ててナギに駆け寄って思いつく言葉で褒めるが、若干棒読みなのは否めない。

ナギ

「あの作者に騙された……」

ハヤテ

「いやいや!!」

そんな事無いですよ!!とても人気が上がってますよ!!」

神楽

「そつネ!!」

この調子なら次回はきっと一位に間違い無いヨ!!」

ナギ

「フッフッフ……」

二人の励ましにナギはゆっくりと顔を上げたかと、いきなり不敵に笑い出した。

ハヤテ

「お、お嬢様？」

ナギ

「甘い……甘いぞ!!」

これしきの事で、この三千院ナギがへこたれると思ったかア!!」

ナギは拳を握りしめると、目の前に思いきり突き出してみせる。

ナギ

「これぞ私の求めていた展開！！
全ては計算通りだ！！」

ハヤテ・神楽

「な、何だつてえ！？」

ナギ

「歴代のバトル漫画の主人公は最強にたどり着く為に、勝つては負け、勝つては負けを繰り返してきた！！しかし彼等は負ける度に着実に成長し、のしあがっていった！！そう、今の私はまさにその過程を辿っている！！」

一位では無かったが、着実に前回より順位を上げている！！
そして次回は更に上がる！！

これが王道なのだ！！」

ハヤテ

「流石お嬢様！！」

素晴らしいお考えです！！」

神楽

「うおー！！」

これぞジャンプ三大原則アル！！」

ナギの熱弁にハヤテと神楽は拍手をして感銘を受けていた。

咲夜

「ホンマにナギの負けず嫌いは筋金入りやな……」

マリア

「本当ですね……」

そんな様子を困ったように眺めている咲夜とマリア。
まあ、ナギが元気なので良しとするかといった感じであろう。

ナギ

「よし、続いては遂にベスト5の発表なのだ!!
だがその前に、一つ新しくルールを制定したいと思う!!」

咲夜・神楽

「ルール？」

ナギ

「うむ!!ヒロインで1位2位をとった奴には、罰として超恥ずかしい格好をしてもらう!!」

ハヤテ

「何で罰なんですか!?!」

マリア

「まあ、それは良いですね」

ハヤテ

「マリアさん!?!」

ナギの言葉にマリアも微笑んでそう答える。

神楽

「あ、そうこうしているうちに着いたアルよ」

咲夜

「では、発表は向こうでやるか」

ハヤテ

「え……ホントにやるんですか？」

こうして一行は、最後の目的地
“白皇学院”に入ってしまった…

*

〈生徒会室〉

ナギ

「お邪魔するのだ」

ハヤテ

「お邪魔します」

千桜

「あ、皆。

どうしてこんな所に？」

ヒナギク

「あら、ナギまで珍しいわね」

ハヤテ一行は白皇学院で最も高い場所、時計塔の最上階の生徒会室

にやって来た。

すると千桜とヒナギクが出迎えてくれた。

ハヤテ

「千桜さん、ヒナギクさん、こんにちは。実はですね……」

ハヤテはお約束の通り今回の人気投票とここまでのいきさつの説明をした。

千桜

「なるほど……」

人気投票ですか」

ヒナギク

「ていうか作者は助けなくて大丈夫なの？」

ナギ

「心配ない。ギャグ補正でなんとかなるさ」

ナギは肩を竦めると、シレッとそんな風に言った。

ガチャ……

???

「あん？随分人が増えたな」

???

「あれ、皆さん？」

どうしてここに集まってるんですか？」

すると、ハヤテ達の後ろから扉が開いて誰かが入って来た。

ハヤテ

「銀さん！新八君！」

神楽

「何でお前らここにいるアルか？」

生徒会室に入ってきたのは銀時と新八の二人だった。

銀時

「いやよオ、依頼が済んで屋敷に帰ったら、伽藍の馬鹿にココに行
けて言われてな」

新八

「何故かボコボコになってましたけどね、伽藍さん。
顔潰れてましたよね」

ナギ・神楽

(……………大丈夫だろうか作者)

銀時と新八はそんな風に言いながら、室内に入ってきた。

ハヤテ

「じゃあ、きつと人気投票の事ですね」

銀時・新八

「？」

神楽

「前に人気投票を集計していたアル。その結果発表の日が今日アルよ」

神楽は両手を広げて二人の前で説明してみせた。

新八

「あー、そうなんだ。

今日なんですか！」

銀時

「おー、んで結果は？」

ナギ

「うむ。実はベスト5まで発表されていてな。

これからベスト5の発表だ」

ナギは腕を組んだまま“5位”と書かれた冊子を見せる。

咲夜

「んじゃ、とつとと行くか」

ナギ

「うむ！オープンなのだ!!」

第5位

《疾風の借金執事》

【綾崎ハヤテ】 29票

(前回3位：)

神楽

「あ、ハヤテアルよ」

ナギ

「うむ。流石は私の執事だな」

ハヤテ

「29票も、本当にありがとうございます!!」

ハヤテは嬉しそうに頭を下げてお礼をいう。

ヒナギク

「ハヤテ君……」

このハーマイオニーっていう票も入ってるけど……」

ハヤテ

「は？」

ヒナギクは書かれた冊子の中身を見て、小首を傾げた。
途端にハヤテは表情をひきつらせる。

銀時

「おー、そういえば祭りん時にハーマイオニーちゃんっていう娘が

いたなア。

確かメイド服着てる水色の髪の奴だったんじゃないか？
オメーそっくりの……」

ハヤテ

「わああアアアア！！」

何言ってるんですか銀さんんん！？」

銀時はニタリと笑ってハヤテに顔を向けるが、ハヤテは慌てて銀時の言葉を遮るように叫ぶ。

千桜

「そですか……」

まさか綾崎君にそんな趣味が」

ハヤテ

「無いですよ！！」

神楽

「え、でもノリノリで鏡にウインクしてたアルよ」

ハヤテ

「根も端も無い嘘を言わないで下さいよ！！」

ナギ

「私は全然構わないぞ」

ハヤテ

「っていつかお嬢様達は知ってますよね！？」

ハヤテの必死な抗議も虚しく、

周りの空気は一度下がった気がした。まあ面白半分だが。

そんな中、新八がおずおずと遠慮がちに顔を上げた。

新八

「あ、あの……」

因みに僕は今まで出てきましたか？」

ナギ

「出てないな」

神楽

「残念アルながら、出てないアル」

新八

「ハハハ、そうなんだ……」

（やっぱり今回はランク外かな……）

咲夜

「……眼鏡の気持ち痛い程伝わってくるな。

まあ、次の発表行くで」

マリア

「では、4位の発表ですよ」

第4位（ヒロイン2位）

《書記とメイドのギャップ娘》

【春風千桜】32票

（前回4位： ）

ハヤテ

「千桜さんですね！」

前回と同じ4位、おめでとうございます……！」

咲夜

「流石ハルさんや！」

32票も入ってるで……！」

ヒナギク

「ハル子、おめでとう！」

千桜

「あ、投票ありがとうございます。ご期待に添えられるかどうかわかりませんが、これからもよろしく願います！」

ナギ

「因みにヒロイン2位らしいな。つまり……！！！」

千桜

「？」

「ありがとうございます!!
皆さん!」

新八の驚愕のランクアップもあって、人気投票はクライマックスになっってくる。

マリア

「では、次は2位の発表です」

新八

「さっそくオープンしましょう!」

神楽

「うおおおお!!」

私の拳が火を吹くネエエ!!」

ナギ

「燃える私の小宇宙!!」

新八

「ぎゃああああああ!?!」

第2位(ヒロイン1位)

《完全無欠の生徒会長》

【桂ヒナギク】49票

(前回2位:)

ハヤテ

「第2位は白皇学院の生徒会長、ヒナギクさんでした！」

ナギ

「む、不本意だが一応賛辞は送っておくか」

新八

「流石ですね！」

おめでとつございますー!!」

マリア

「おめでとつございます」

神楽

「一言どござアル」

ヒナギク

「…………え？あ、えつと…………」

二回も私にこんなに票を入れてくれるなんて、嬉しいです。

ありがとうございますー!!」

ヒナギクは一瞬驚いたように周りを見回すが、直ぐに笑顔でお礼を言った。

咲夜

「では、ヒロイン1位2位も揃った事やし…………次は1位を…………」

ナギ

「しかしその前に!!」

やるべき事が一つあるのだ!!」

咲夜

「は?」

咲夜が進行しようとするが、ナギは一步前に出てきてそれを遮った。

ナギ

「マリア!」

マリア

「はい

では、ヒロイン1位のヒナギクさんとヒロイン2位の千桜さんには、
罰ゲームで恥ずかしい格好をして貰います」

ヒナギク・千桜

(罰!?)

ナギ

「では、コスチュームチェンジ!!」

パチン!!

ヒナギク・千桜

「!?!」

ナギが指を鳴らした瞬間、ヒナギクと千桜周りに煙が巻き起こった
……
そして……

ヒナギク

「きゃあ！！！／／／」

千桜

「な！？／／／」

二人の衣装は時期外れも外れのミニスカサントクロースの衣装に変わってしまった。

かなり露出度が高く、上は胸が隠れるくらいで下はスレスレの短さのスカートである。
頑張れば見えそうなくらい短い。

ヒナギク

「なんなのよコレはー！！／／／」

千桜

「何でこの時期にサントクロースなんですか！！／／／」

二人とも恥ずかしさのあまり真っ赤になって叫ぶが……

マリア

「それは勿論……」

作者の趣味です」

ナギ

「今日一日はそれで過して貰うぞ」

ヒナギク・千桜

「あう……／＼／」

二人は見えないようにスカートの前に手をやり、顔を赤らめながら俯いてしまう。

これは決して作者がやりたかったから書いている訳ではない。あくまでルールなのだから。

ハヤテ

「……………／＼／」

新八

「……………／＼／」

健全な男子の諸君も二人の格好に顔を赤くしているが、当然と言えは当然の反応である。

咲夜

「……………じゃあ、遂に1位の発表やな」

そんななんか甘い(？)空気を変える為に、咲夜が進行を開始する。

ナギ

「長かったがようやく最後だな。いよいよだ」

神楽

「では……………」

神楽は票冊子の入っている箱から“1位”と書かれたモノを取り出そうと手を入れる。

銀時

「いやあ、ホントは誰かなんてもう分かってんだけどさ。

まあ照れくさいっーかなんっーか……でも発表しねえ訳にもいかねーし、ここはまあ筋を通す為に分からないふりして発表を聴くからな。んじゃ、銀魂のごとくキャラクター人気投票第1位の発表を……」

……

神楽

「銀ちゃん」

銀時

「あん？」

神楽

「冊子が無いアル」

銀時

「……………え？」

神楽

「どつやら業者の発注ミスで、冊子は39個しか出来て無かったみたいヨ」

銀時

「……………え？」

神楽

「だから、銀ちゃんの分は無いヨ」

チーン…………

こうして、第二回キャラクター人気投票はよく分からないグダグダのまま、幕を閉じたのだった。

この後、三千院屋敷では人気投票記念パーティーがそこそこ盛大に執り行われた……

ヒナギクと千桜はサンタクロース姿のまま終始真っ赤で、特に愛歌さんの弱点帳に記録が追加された事は言うまでもない。

新八は下位のキャラ達に色々追われ逃げ回り、ナギ、伊澄、咲夜はいつも通りトリオ漫才を。

神楽は蒼妃と一緒に色々楽しそうに話していた。

更には、桂がエリザベスと勝手に会場でカツラップを歌い出し、会場のモニターには三人娘が伽藍の痛い映像を流出させるなど……

それはもうハチャメチャなパーティーになったそうなの

めでたしめでたし

銀時

「オiiiiiiii!!!」

マジで終わるんかiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

第1位

《白夜叉》

【坂田銀時】 117票

(前回1位：)

特別訓 たかが人気投票 されど人気投票（後書き）

く人気投票結果 まとめく

第1位

【坂田銀時】 117票

一言（作者）

（まさかここまで票が集まるとは……流石銀さんあっぱれです!!）

第2位

【桂ヒナギク】 49票

一言

（前回に引き続き堂々の2位!!
個人的にサンタコスプレを書けたので良かったです）

第3位

【志村新八】 33票

一言

（今回の人気投票で一番の驚き。まさかのトップ3入り!!
組織票を疑う声も?（笑））

第4位

【春風千桜】 32票

一言

(前回同様4位!!)

サントコスプレは本当に見てみたいと思いました!)

第5位

【綾崎ハヤテ】 29票

一言

(前回より少しダウンした我らがもう一人の主人公。

これからはもっと活躍させられるように頑張ります!)

第6位

【三千院ナギ】 27票

一言

(前回からかなりランクアップしましたね。

今回はどうなる!?)

第7位

【神楽】 23票

一言

（前回同様の順位でした。

次回こそは新人を抜くと本人も燃えています！！）

第8位

【桂小太郎】 20票

一言

（ギャグとボケの代名詞！！

順位も票数もアップして個人的にも嬉しいです

実はシリアスも予定しているとか……）

第9位

【マリア】 19票

一言

（今回は残念、ランクダウン。

でもトップ10にはランクインです。票数は流石だと思います！

怖いけど……（笑）

第10位

【湊川蒼妃】 18票

一言

(オリキャラではダントツ一位の姫史のお姉さん。
まさかトップ10に入るとは、ビックリでした!!)

第11位

【瀬川泉】 17票

第12位

【鷺ノ宮伊澄】 15票

第13位

【愛沢咲夜】 13票

第14位

【伽藍】 12票

第16位

【高杉晋助】 10票

【朝風理沙】 10票

第17位

【真田幸久】 9票

第18位

【クラウス】 8票

第19位

【長谷川泰三】 7票

第20位

【澳門真司】 6票

第25位

【西沢歩】 5票

【湊川姫史】 5票

【橘ワタル】 5票

【タマ】 5票

【花菱美希】 5票

第27位

【エリザベス】 3票

【霞愛歌】 3票

第31位

【巻田】 2票

【鷺ノ宮初穂】 2票

【定春】 2票

【河上万斉】 2票

第40位

【翠希莎喇】 1票

【リン】 1票

【霧崎弥鈎】 1票

【鷺ノ宮銀華】 1票

【紙芝居屋のおじさん】 1票

【貴嶋サキ】 1票

【来島また子】 1票

【桂雪路】 1票

【洞爺湖仙人】 1票

伽藍

「沢山の投票ありがとうございました！！質問コーナーは次回に回します！」

そして人気投票篇の1シーン募集ですが、次回から始めたいと思います！」

詳細は次回の前書きで書きますので」

クラウドス

「では皆様、ご協力誠にありがとうございました！！」

伽藍

「次回もよろしく願います」

第百訓 渡り渡れよ温泉巡り（前書き）

今回と次回は百訓記念ということ他の作品から特別出演をお呼びしています！

灘様、デビルマン様、闇夜の黒鳥様、星空の侍様、
誠にありがとうございます！！

く人気投票篇についてく

人気投票篇は実はベースがまだ決まっています。
ですが今回から皆様が見たい1シーンを募集したいと思います。

方法は簡単です。

皆様が見たいと思う場面を一つ感想に書いて下さい。

恐らくどんな場面でも大丈夫です。バトル、恋愛、ギャグ、etc…

ただし、ハヤテ、ヒナギク、新八に関しては主軸にしようと思っ
ているので彼らに関する場面だけはかなり限定すると思います。
それは感想の返信でお伝えしたいと思います。

後は作者の独り言です……

伽藍

「なんかもう何がしたいのかわからなくなってきました。
僕はこの小説を一体どうしたいんだろ？そしてこの小説はどこに向
かっているんだろう？
僕は一体何なんだろうか……」

新八

「どんだけネガティブ思考に陥ってんですか!!」

伽藍

「正直最近スランプです。
面白く文が書ける気がしません。本当にすみません。
では始まります!!」

第百訓 渡り渡れよ温泉巡り

〔温泉街〕

まだまだ日も明るく、行き交う人々で賑やかな温泉街の一つでは浴衣姿の銀時、新八、ハヤテが並んで歩いてた。

「いや、いっぱいありますね。せっかいですから色々入ってみましょう銀さん。いくつか温泉を回ってからでも秘湯探しは遅くないですよ」

「まあ、そうだな。」

どうせならストレートヘア前に色々楽しんでおくのも悪かねーな」
ハヤテがもの珍しいようにキョロキョロと周りを見回すのを見て、
銀時も口元を緩めてそう言ってみせる。

「浴衣姿の人達が行き交うこの風景。趣きがあって良いですね」

「うん。これぞ日本って感じだよな」

新八は通り過ぎてゆく浴衣姿の男女や店から顔を覗かせる人々を見てそんな事を述べる。

ハヤテもその意見に首を縦に振って同意した。

「しかしよオ……」

オメー浴衣着てる、ホントに男なのか改めて疑問に思うよなア」

「は!？」

銀時は歩きながら横のハヤテを見てニヤリと笑うと、ハヤテは必要以上の反応で大袈裟に振り返った。何故か若干顔を赤らめているのはスルーした方が良い。

「何言ってるんですか!？」

男に決まってるじゃないですか!?!いきなり何を……」

「ハハハ……」

でも確かに、浴衣姿がよく似合って可愛いからそう見えるかもしれないね」

「新八君まで!?!」

ハヤテは二人のいきなりな発言に慌てて首を振って立ち止まってしまふ。その仕草が余計に女性に見えるのは言うまでもない。

「オメーが女装して万事屋のビルでも配ったら客が増えるかもしれないなア……」

「確かに。ナギちゃん達に頼めば喜んで協力してくれると思いますよ」

「何恐ろしい計画を目の前で立てているんですか!?!? やりませんよ!?!」

銀時達のハーマイオニー売り子計画に異議を申し立てるハヤテ。

「冗談だよ冗談

オメーは男だつて分かつてるよ、多分な」

「でも本音も少しあるような無いような」

「止めてくれませんか!？」

そんな他愛も無い事を話しているうちに、一つの旅館が三人の目に止まった。

そこそこ大きな木造建物で、入口に出た暖簾には“異次元の湯”と筆で書かれてある。

「あ、最初にここなんてどうですか？」

「古くていかにも温泉って感じだね。入ってみようか」

「ちよつ、オイ。オメーら温泉の名前には突っ込まねーの？」

異次元の湯だよ？異次元だよ？」

そんな訳で、三人はまずこの“異次元の湯”という温泉宿の建物に足を踏み入れることにしたのだった……

「はい、三人だね」

「はい」

ハヤテ達が建物の中に入って進んで行くと、番頭に初老のおばあちゃん座っていた。番頭は男湯と女湯の入口の間であって、そこにお金を払って中に入っていくのである。

ハヤテ達が男湯の脱衣所に入って行こうとすると、おばあちゃんが話しかけてきた。

「あ、お兄ちゃん達」

「「？」」

「ここは、面白い温泉だねえ。」

違う世界に色々と繋がっているっていう噂があるんだよ。もしかしたら不思議な出会いがあるかもしれないよ」

ゆっくりと笑って話すその様子に首を傾げる銀時達。

「違う世界？」

え、でも迷信ですよね？」

「さて、どうかね？」

それじゃ、ごゆっくり……」

おばあちゃんはわざと怪しげに笑うと手を振って三人を見送っていた。

「流石、下田ですね？」

そんな噂を持った温泉が普通に温泉街にあるなんて。

他にもこんな強者がゾロゾロと並んでいるんでしょうか？」

「ただの噂だろ……」

それより、とつとと入ろうぜ」

ハヤテは感心したように通路を見回すが銀時は素っ気なく手を振ると脱衣所に入って行く。

その後、適当に支度を済ませて温泉に出てきた。

三人は腰にタオルを巻いて脱衣所にあった桶を片手に持っている。

「うわー！！」

全部露天ですか！！

外観からは予想出来なかったけど、凄いですね！！」

「しかも結構広いですよ？」

良い温泉に当たりましたね！！」

「おー、確かにな。
秘湯探し前にはちょうど良いかもな」

三人は各々温泉を見回して賞賛の声をあげる。

その言葉通り、この温泉は古めかしい外観からは想像も出来ないものだった。

全てが露天風呂で温泉が四つも入っている広さである。周りには木々が生い茂っていてなんとも落ち着いた雰囲気になっていた。

「うっし！
んじゃ入るか」

「四つありますから、一通り入ったら上がりましょう」

まあグダグダ話しているのもアレなので、早速温泉に入ろうと三人は足を進めようとした時、

「アレ？アニキ？」

「「「「？」」「」」」

横から聞き慣れない声が聞こえてきた。三人が振り向くと、こちらに向かって二人の青年が歩いてきていた。

一人は緑がかった黒髪の青年、もう一人は赤みがかった茶髪の青年である。

両方ともかなりの美少年である。

「何でアニキがこんな所に？
今日は万事屋に依頼が入ってたんじゃない？
つてか隣の奴誰？」

「は？」

緑の青年が銀時に顔を向けるとそう話しかけてきたが、銀時は彼な
ど見たことが無い。

「銀さん、知り合いですか？」

「いや……知らねー。」

「オメーら誰だ？」

新八が不思議そうに尋ねると銀時はさっぱりと首を振って返した。

「……え？」

「俺のこと知ってんのか？」

「どっかで会った？」

「いやいや、何言ってるんだアニキ！！あ、もしかして新しいネタ？」

銀時は頭を掻きながら二人に尋ねる。緑の青年は慌てたように目を
泳がせるが茶髪の青年は何かを考えるように口に手を当てて考え込
むような仕草をする。

「もしかして……」

違う世界の銀さん達なんじゃないか？ほら、受付のジーさんも言っ
てただろ。“ここは色んな世界と繋がってる”って「

「……だってソレ噂だろ？」

「でも……」

若干慌てたような緑色の青年を茶髪の青年が止めて話しかける。

「あー、オイちよつと待て。

一旦状況を整理するぞ。

オメーらは俺の事を知っている。んで俺は知らねえ。

つー事はつまり……」

「……」
平行世界パラレルワールドおお！？」「」「」

そう。別世界に繋がるといふ噂が証明された瞬間であった……

「はあ」

んじゃオメーらはかぶき町から来たのか……」

「話を聞くと僕達と同じ世界みたいですね」

やっぱりホントに別世界だったんだ……」

二人の青年を含めた五人は真ん中にある温泉に浸かりながら顔を見合わせていた。

彼等の話によると、二人は銀時達の世界であるかぶき町からきた青年達だという。

と言ってもこの銀時達が知っているかぶき町では無く、平行世界にあるもう一つのかぶき町であるのだ。

そのもう一つのかぶき町では二人は万事屋とは知り合いらしい。

今回は仕事先で紹介された山奥の銭湯に来たらここに出てきたというのだ。

受付がおばあちゃんでは無く、おじいちゃんであったという話からもやはり違う世界なのだと改めて実感させられる。

「俺は悠基波弥斗（ゆうき はやぶ）ってんだ。

えっと、改めて挨拶するのは変な感じがするけど、よろしくアニキ、ハヤテ、眼鏡」

「俺は小宮広貴（こみや ひろき）。

銀さん、ハヤテ、眼鏡、改めてよろしく」

緑色の青年が波弥斗。

茶髪の青年が広貴。

二人はそれぞれどこか不思議な感覚を覚えながら挨拶をした。

「いや、待って下さい。

何で二人とも僕の名前が眼鏡なんですか？」

「……だって眼鏡は眼鏡だろ」「」

「アンタらそこだけは息ピッタリですねえ!!」

銀時、波弥斗、広貴は口を揃えて新八に顔を向けた。
ハヤテは苦笑しながらその様子を眺めている。

「でもまさか、こつちの世界のアニキが更に今、別世界に飛ばされてる最中なんてな」

「じゃあ今はハヤテが働いてる屋敷で一緒に働いてるんだ」

「あゝ、働いてるっても向こうと同じように万事屋経営してんだけどな。んで収入の三割は屋敷に払ってっけど。家賃みたいなもんだ」

今明かされる衝撃の真実。

万事屋の収入の三割は三千院屋敷に払われているのだ!!

「元の世界には帰れない？」

「今の所は手掛かり無しだな。」

それに目一杯の恩があるから、ソイツを出来るだけ返さねーと」

波弥斗に続いて広貴も尋ねるが銀時は曖昧に首を振った。

「銀さん達にはとてもお世話になってますよ。それにとても楽しいですし」

「フフン、まーアニキだからな」

「なんでお前が得意気なんだよ」

ニツコリと微笑むハヤテに波弥斗は何故か胸を張って答える。

しかしちゃんと広貴に叩かれて突っ込まれた。

「あ、待てよ……!!?」

二人がここにいるということは、もしや神楽さんもこの銭湯に!?

「いや、神楽ちゃんは別行動で今はいませんよ」

「くっ……!!」

こっちの神楽さんも見たかったのに残念だ」

突然広貴は思い出したように声を上げるが新八の言葉を聞いてガツクリと肩を落とす。

「また始まった……」

「つかお前なあ、そもそも神楽は女だから一緒に行動してても男湯に居るわけねーだろ」

「神楽さん呼び捨てにしてんじゃねエエエエエ!!」

波弥斗はやれやれと溜め息混じりに呟くと、広貴はそう叫んで彼の頭をお湯に沈めた。

「あぶぶぶっ!?

「テメーなにしゃがる!!」

「うるせー!!」

神楽さんに会えなかった憂さ晴らしだー!!」

こうして暫く、青年二人はお互いをお湯に沈めあって格闘しあって

いた。

「眼鏡!!」

「テーマも道連れじゃアアアア!!」

「あぶべあ!？」

「何ですかアアアあぶぶ!？」

眼鏡もお湯に沈んだり沈まなかったり……

「それじゃアニキ。俺達はもう仕事の時間だから」

「それじゃ!」

二人は銀時達に別れを告げると、そくさくと温泉から出ていった。

「いや、まさかこんな事ってあるんですね」

「まあ俺達も異世界から来たクチだしな。今更驚くこともねーけどな」

二人が去ったあと、ハヤテ達は顔を見合わせて、次の温泉に移ることにした。

「オイ新八、いつまで寝てんだ。行くぞ」

「……………どう」

隅っこで参ったよいにうだっている新八を引きずって、一行は一つ隣の露天風呂に移動した。

「わゝ、こつちも広いですね」

先程の温泉が岩で囲まれた露天風呂ならば、今度は木々に囲まれた露天風呂である。

「やっぱり風呂は良いですね」

「だな」

三人は肩までお湯に浸かると空を見上げて息をつく。

「あ、もしかしてこつちの世界のハヤテ君ですか？」

「「「？」」」

すると、今度は後ろからまたも聞き慣れない声がかかる。

三人が振り返ると、同じように肩までお湯に浸かった黒髪の青年が微笑んでいた。

「えっと？」

あのどちら様ですか？」

「ああ、すみません。

驚かせてしまいましたね。

僕は御剣桂馬みつるけいまです。三千院ナギお嬢様の執事をやらせて頂いています」

「ええ!？」

三千院家の執事と聞いてハヤテは驚きの表情を見せるが、青年はそれを予想していたのか、悪戯っぽく微笑んでいた。綺麗に整った容姿でその笑顔はかなり美しい。

「え？お嬢様の？え？」

あ、もしかして……平行世界の……?」

「はい。その通りですよ

僕はもう一つの世界でハヤテ君と同じく三千院家の執事をやらせて頂いているんです」

「あ、そうだったんですか！

これはこれは……」

桂馬はニツコリと微笑むと、ハヤテはペコリと頭を下げた。

「それでえっと……

そちらのお二人は？」

「あ、僕は志村新八です。

今は三千院家でお世話になっています」

「右に同じく坂田銀時です。

万事屋つっー何でも屋のオーナーやってます」

二人は桂馬に向かって簡単に挨拶を返した。

「あ、よろしくお願ひします。
新八君、銀時さん」

桂馬も丁寧に頭を下げて挨拶を返す。

「あの、それより桂馬さん。

どうして僕が桂馬さんとは違う世界の人間だって分かったんですか？」

「簡単ですよ。

僕がいる世界のハヤテ君は今は屋敷にいるはずですから。
ハヤテ君がお嬢様から離れて温泉に来ているなんて事は普通は無い
ですからね。

それにこの温泉には特殊な磁場があるみたいで、僕が入った時も感
じられましたから、もしかしたらって……
極めつけは銀時さん達と一緒にいたことですけど」

「な、なるほど……」

「凄い洞察力ですね……」

すらすらと話す桂馬にハヤテと新八は思わず圧倒されてしまった。

「あ、ではそろそろ僕はお屋敷に戻らないといけないので。
お先に失礼させて頂きますね」

「あ、はい。

えっと桂馬さん。向こうの世界でもお嬢様の事をよろしく願ひし
ます」

ハヤテは何だか不思議な感じだが、桂馬に向けてそう言うと頭を下げた。

「はい。こちらのハヤテ君も頑張ってくださいね。

それと銀さん、新八君、お嬢様達の事をよろしくお願いします」

「おー、任せとけ」

「桂馬さんもお元気で」

桂馬はそう言うと、お湯から出て一回礼をして、三人の前から去っていった。

「しかし……」

また色んな平行世界もあるもんだなアオイ

「でもこの調子だと、次の場所に移動しても誰かに遭遇しそうです
ね」

そうは言うものの、せっかく温泉に来たのでここは一回りはしたいとの事で、また何か起こるだろうとは予想出来るのだが、三人は更に次の場所に移動する事にするのだった。

*

く下田屋敷

「あ………」

「う………」

下田にある三千院屋敷ではナギと神楽がうだつてソファでゴロゴロしていた。

「何で旅行に来てまでゴロゴロしてるんですか？」

そんな様子を見かねて、マリアが呆れたように尋ねる。

「旅行っていつもの屋敷と何ら変わらんしな」

それに私はマリア達のような化物みたいな無尽蔵の体力は持っていないのだ」

「誰が化物ですか誰が」

ゴロゴロしたまま見上げてくるナギに心外だと言わんばかりに抗議するマリア。

「いつも銀ちゃんが言ってるヨ。『17歳には全然見えない。実は皮を被つてたりして』とか」

「まあそうですね。」

銀さんがそんな事を……

あ、ちょっと今日の夜にやる事を思い出したので失礼しますね」

神楽の言葉を聞くと、マリアはニッコリと微笑むとクルリと背を向けて二人の部屋を後にした。

その際に『必要なのは包丁とノコギリと……』などという独り言が聞こえたという……

「……神楽。

今の話つてもしかして省略してないか？銀時が言ったセリフちゃんと覚えてる？」

ナギはマリアが出ていった後を見て顔をひきつらせながら神楽に尋ねる。

「うん。私がマリアって凄いと思うアルかって銀ちゃんに言ったら

『確かに、気立ての良さも雰囲気もとても17歳には見えないけど、外見は17歳だよな。』

でも中身は本当に大人でしっかりしてるよな」

あの歳なら、色々と抱えてるモンもあるだろ。自分を作ってる皮とか被ってる部分もあるんじゃないか？』

って誉めて労ってたアル」

「……あのな神楽。

もう遅いけど……

そついう事はちゃんと最後まで言ってやった方が良いと思うぞ」

ナギはもう遅いの部分を強調しながら話す。

「　　」

「……………」

部屋の外から聞こえてくるマリアの口ずさみ陽気な曲に、ナギは今晚断行されるであろう計画とその犠牲になるであろう一人の男に少しばかりの同情の念を捧げた。

「そんな事より、少し休んだから早くゲーム続きをやってしまおう！」

「そつアルな！」

本当に少しばかりだった……

*

そんな未知なる恐ろしい計画が着々と進行している中、そのターゲットである本人は……

「……………」

ハヤテ、新八と共にのんびりと温泉に浸かっていた。ここはお湯が緑色の不思議なお湯で、看板によるとリウマチに効果がある弱酸性のお湯だそうだ。

「あ！」

銀さん、新八さん、ハヤテ君」

「「「「？」」」」」

そして今日三度目。

横から三人に声がかかってきた。しかしこれはどこかで聞いた事があるような……

振り返ると、

なんと前に一度だけ別世界からやってきたという火渡優也と水野進がいたのだ。

「久しぶりだな三人とも」

「おー、優也に……進じゃねーか」

「ちょっと待って。

今少し間がありませんでした？」

優也達は銀時達の方にくると、そう言っつて挨拶をした。

「何でオメーらがここに？」

まさかこれも異次元の湯の効果か何か？」

「いや、俺達はこの小説の百話記念でこの作者に呼ばれたんだ。下らない話なら断ろうと思ったけど温泉だからな。せっかくなんでのんびりしに来た」

銀時の問いに優也あっさりとがそう答えた。

「あ……
って事はもしかしてさっきまでの方々も皆そういつ訳でここに来た
って事じゃないですか？」

「なるほど……」

あの馬鹿が考えそうな事だな。

人様の小説にまで迷惑かけるたア……」

先程から起こっていた不可解な現象の真相を知った銀時達はやれや
れと首を振って溜め息をつく。

因みに真相を元々知っていたのは彼等だけで、先程出会った三人は
事の事情は一切知らされていなかったのである。

「あ！

ってか優也、それは言ったらダメって言われてたんじゃなかったか
！？」

「もう遅いだろ。」

そもそもここで黙っておく理由も無い」

ちやっかり真相を話した優也に進が慌てて取り繕おうとするが、も
う言ってしまったものは仕方がない。

「悪かったな、ウチの馬鹿が迷惑をかけて」

「いや。気にしないでくれ。それに温泉は好きだから」

取り敢えず代表して銀時が謝るが、二人は手を振って大丈夫だと返

してくれた。

勿論馬鹿とはこの小説の作者のことである。

「そういえば、お二人だけで来てるんですか？」

「いや、仲間と一緒に来たんだが……いつの間にか消えてるな。進、皆はどこに行ったんだ？」

ハヤテが二人を見て尋ねると、

優也はキョロキョロと辺りを見回した後、進の方に顔を向ける。

「えっと……」

彪牙と正はサウナで我慢比べだとかいって行っちゃったよ。

仁は水風呂に行った。

んで総司は………」

パコーン！！

進がそう言いかけたとき、向こうの方から桶が飛んでくる音が聞こえた。

「言わなくても分かるよ……」

「まあ、な」

優也はその音を聞いて呆れたように溜め息をついた。進は頬を掻いて苦笑してみせる。

「仕方ない……」

俺は総司を引き取りに行くか」

「じゃあ俺は彪牙達を呼んでくるよ」

二人は頷き合つとお湯から上がつて腰のタオルを締め直した。

「それじゃあ、銀さん、ハヤテ。俺達はもう帰るよ。

またどこかで会えると良いな」

「はい。またいつか」

「おー、そんな時はまた万事屋を利用してくれや」

銀時とハヤテは手を上げて優也に別れの挨拶をする。

「新八さん!!」

俺もこつちで頑張ります!!」

新八さんも頑張つて下さい!!」

「うん。お互いにこれからも頑張ろうね!」

進と新八は固く握手をして互いを健闘しあっていた。

しかしこの時既に、進は力を手にしてかなり活躍している存在だという事を新八は知らない…

「それじゃ、僕達もそろそろ出ましようか」

「んだな。いよいよ本格的に秘湯探しを始めんぞ」

こうして思わぬ形で様々な出会いや再会を果たした一行も、この温泉を出て、本来の目的である秘湯探しを開始する事にした。

*

一方……

こちらはまた違う温泉……

「はあ〜」

やっぱり温泉はいいね〜」

「そうね〜」

歩とヒナギクが小さな露天風呂に浸かっつてのんびりしていた。

尚、この小説は全年齢対象なので過激な表現は一切出来ませんので期待していた皆様には本当に申し訳ございません。

まあ胸とか無い方もいらっしやるので過激な表現にする事自体難しいのですが……

「今なんか物凄い不愉快なナレーションが聞こえた気がしたわ……」

「気のせいですよヒナさん!!」

私なんにも聞こえてないかな、かな!!」

額に怒りマークを浮かべて空を見上げるヒナギクに寄って慌てて寝める歩。

「でも、やっぱり下田に来て良かったよ。

こうしてのんびり温泉に入る機会なんて中々無いからね。それにヒナさんにも会えたし」

「ふふ、ありがと。

でも自転車でここまで来たのって、改めて考えると凄いわね」

「うん。でも途中からハヤテ君に送って貰ったから楽しかったかな。ヒナさん、ありがとね」

歩は下田にまでハヤテと一緒に時間が作れるように取り計らってくれたヒナギクにお礼をいった。

「ううん。

歩一人じゃ大変ですもの。

ハヤテ君が送るのは当然でしょ」

「でもハヤテ君凄かったよ」

高速道路でドンドン車抜いちゃって、

途中失礼なスポーツカーにパッシングされたんだけど、ハヤテ君にかかれば朝飯前。

勝負に負けた時の運転手の顔が面白かったな」

「……………そんな会話を普通に出来るアナタも凄いなと思うわ」

相変わらずのハヤテの超人ぶりを聞かされて、またその様子をさも当たり前のように話す歩にヒナギクは何と返して良いのか分からない。

「でも、ハヤテ君ととっても良い思い出になったよ」

「あら、まだまだ旅行は始まったばかりでしょ？
明日デートに誘ったりしたらどうかしら」

「はわわわ！！」

そんな温泉街デートなんて！！
それはまだ早いんじゃないかな、かな！！」

「あー、もう可愛いわね」

いきなり顔を真っ赤にして両手を振り回す歩に思わず苦笑いしてしまっヒナギク。

「あ、でも……」

デートと言えば、ヒナさんは誰かと一緒に回ったりしないのかな？」

「うーん、お義母さんとお義父さんは二人で色々と回るみたいだけど、私は別に……」

それにお姉ちゃんは向こうに置いてきたから……」

「銀さんは？」

歩が人差し指を立ててその名前を出すとピタリとヒナギクの動きは

止まる。

「……………歩？」

なんでその名前が出てくるの？」

「え……………」

だってヒナさんって、銀さんの事が好きなんじゃないのかな？」

「……………は！？」

爆弾発言……………

たった今、歩が無自覚にとんでもない爆弾を投下した。

「ちよっ……………！！」

何で！？？どうして！？？どこをどうしたらそうなるわけ！？？」

「わー！！ヒナさん近い近い！！」

必要以上に迫るヒナギクに歩は慌てて彼女を宥めようとする。

「私が個人的に思ったただけだからね、ね？」

「だから何で！！」

万が一にも億が一にもあり得ないそんな事を思ったのよ！！」

「え、えっと……………」

よく一緒にいるから、かな？」

歩はそう言って小首を傾けると、ヒナギクはようやく落ち着いていたのか溜め息をついて彼女から少し離れた。

「あのねえ……」

その理屈だと私と歩は恋人同士になるわよ」

「わ、私とヒナさんが恋人同士……？」

それは衝撃の真実なんじゃないかな、かな」

「いや違うでしょ……」

だからその理屈は間違ってるって話なの」

ヒナギクはもう一度息をつく、自分に言い聞かせるように話を続ける。

「大体、アレのどこに好きになる要素があるって言うのよ！！」

天然パーマで目はいつも死んだように無気力で、かなりグータラだしお金にはがめついし子供みたいな事ばかり言うし、デリカシーの欠片も無いし本当に失礼だし、それから……」

「クスッ……」

次々と欠点を述べていくヒナギクの様子を見て歩は思わずクスリと笑ってしまった。

「………歩？」

「いやあ、よくそれだけ悪い所知ってるな〜と思ってさ」

歩はそう言ってもう一度可笑しそうに微笑んだ。

「………何が言いたいのよ？」

「別に」

私が言ってもね」

歩はお湯に浸かったままニヤニヤとヒナギクから離れていく。

「ちよっ!?!」

言いたい事があるならちゃんと言いなさいよーっ!?!」

「私はなんにも知らな〜いよ〜」

そんなこんなで暫し二人は追いかけてつこを繰り広げることになった
そうだ……

*

〜温泉街〜

「へっくし!?!」

「あ、銀さん。

風邪ですか?」

大分人通りが少なくなった温泉街の通りを歩いているハヤテ達。
そんな中、不意に銀時がくしゃみをしたのでハヤテが不思議そうに
振り向いてきた。

「いや……
んな事アねーと思うだけだよオ…ちつと長湯し過ぎたか？」

銀時は身に覚えが無いと顔をしかめると少し浴衣を震わせた。

「もう少しで温泉街の通りを抜けて森の方に着きますよ。
そこには隠れ湯がいくらかあるみたいですけど」

只今三人は素晴らしい效能を持つと言われる秘湯を探して人目の無い森の方向に足を進めているのだった。

暫く歩くと、前方に中々大きな山が見え始めた。

「あ、あの山の中とかにありそうですね」

「へえ、まさしく隠れ秘湯ですね」

一行が更に進んでいくと、禁のほうに少し開けた広場があった。広場には寂れた休憩所と山に続く木で出来た階段がある。そしてペンキがボロボロに禿げた看板が一つ。

『珍しい秘湯あり』

だが邪な心を持つ者は入るべからず！！もし入れば………』

おどろおどろしい文字で書かれていた。

（（入れば………！？））

気になるそこから先は削れて見えなくなっている。

「この先……」

何なんでしょうか……」

「さあ……？」

でも何か良い感じはしないよね」

ハヤテも新八も若干不安になりながら看板を見上げる。

「この山に登られるのかえ!？」

「「!?!?!?!?!」

すると、いきなり三人に杖を着いた老婆が話しかけてきた。

「ここに登るのが邪な人間だと二度と戻れないかもしれんぞ……!」

先程も二人の黒髪の青年が登って行ったが……果たして」

「……………」

「それでも登るといふのか!？」

老婆はクワツと目を見開いて三人を睨み付ける。

「おー、望むところだ。

ストレートヘアになる為には例えどんな危険でも構わねーよ」

銀時はフツと微笑すると、新八達もコクリと頷く。

「そうか!!!」

ならば……一人1000円になります」

「「「金とんのかよ!」「」」

こうして、一行は遂に秘湯の潜む山へと潜入することになったのだ
った……

第百訓 渡り渡れよ温泉巡り（後書き）

〈感謝と百訓達成〉

伽藍

「長いものでこの小説もなんと百訓まで到達しました。これも皆様のおかげです。本当にありがとうございます！！」

銀八

「え、次に伽藍の馬鹿の頼みで本編に特別出演してくれた別の作品のキャラクターを紹介したいと思う」

【Vivre toute ma vie】

作：灘様

悠基 波弥斗君

小宮 広貴君

【ハヤテのごとく！〜超不幸な青年の物語〜】

作：デビルマン様

御剣 桂馬君

【黒と白の物語】

作：闇夜の黒鳥様

火渡 優也君
水野 進君

銀八

「え、こんな駄文の小説に出たいただいて誠にありがとうございます」

皆様のよりいっそうの活躍を願ってます。

因みに次回も他作品からのゲスト出演があるそうだ。

んじゃ、質問コーナーいきまーす」

「教えて！！銀八先生」

銀八

「んじゃ、最初の質問だ『ツラと野々原に質問。戦った時の感想は？』」

野々原

「そうですね。」

やはり強かったですね。

今度は是非本気で試合たいものです」

桂

「ふむ、野々原殿には是非攘夷志士になってもらいたいな。彼のような人物が入ってくれば我々も大変心強い」

銀八

「んじゃ次の質問『万事屋に質問。こつちの世界に来て欲しい人は？』俺ア当然結野アナだな」

新八

「僕は断然お通ちゃんです！！」

神楽

「私は姉御が良いアルよ！！」

銀八

「次な」

『銀さんはハヤテ以外の世界に飛ばされるならどこがいい？』
『そうだな……やっぱりキ　肉マンか？』

んじゃ次」

『銀さんとハヤテに質問。』

お互いの世界で服を交換するとしたら誰の服を着たい？』
俺アそうだな……

やっぱり執事服かな」

ハヤテ

「僕は銀さんの服を着てみたいですな」

銀八

「次の質問『万事屋に質問。風呂上がりに飲むものは？』
んなモン　　苺牛乳に決まってるだろ」

新八

「普通に冷たいお茶ですかね」

神楽

「私は酔昆布アル!!」

新八

「いや飲み物だからね?」

銀八

「あゝ、済まねーが作者がこれ以上は限界だつてんで今回はここまでにさせてくれ。」

ちつと質問が多すぎてもう書く時間が無いんだわ。
つー訳で次の質問は次回に持ち越すぞ」

伽藍

「すみません!!正直今回はここまでが限界です。
次回もよろしくお願いします」

第百一訓 目的が困難であればあるほど燃えるものがある（前書き）

クラウドの

（前書き通信！！）

クラウド

「今回では終わらなかったようですが、
秘湯巡りは次回まで続くそうです」

また子

「まったく……
いつまでダラダラやってんのか。早く私達の出番を……」

武市

「分かってませんねえ。
彼女達がタオル一枚で戯れるこの温泉篇は言わばサンクチュアリ。
簡単に終わって貰っては困ります」

また子

「キモいから死んで下さい先輩」

武市

「んっふっふっ
是非私も参加したかったのですが、それだけが残念ですねえ。
ですよ、高杉殿？」

高杉

「どーでもいい」

クラウス

「ハッハッハ。」

では、始まります! !」

第一百一訓 目的が困難であればあるほど燃えるものがある

〔温泉街〕

「いやあ、さつぱりしたんじゃないかな、かな」

「……………」

まだ日も高く、
浴衣姿の人々が行き交う温泉街。同じく浴衣姿の歩とヒナギクが涼
しげに歩いていた。

しかし晴れ晴れとした歩の表情とは対照的にヒナギクは浮かない顔
付きである。

「もう、ヒナさん！
いつまで拗ねてるのかな」

「な！？拗ねてないわよ！
そもそもこれは、歩が変なこと言うから……」

「まあ良いじゃないかな。
旅のお約束って事で」

「全然良くない！！」

愉快そうに笑っている歩に対してヒナギクは心外だとばかりに抗議
の声をあげた。

その後も『なんで私が……』等と呟く彼女を歩は何とか宥めようと
手をとって引いてゆく。

「今は旅行を、目一杯温泉街を楽しみましょう！」

きつとここ下田には面白い事や人がいるかもしれませぬよ……！」

「あ、ちよつと……！」

「………もっ」

ヒナギクはまだ何かを言おうとしたが、歩のとても楽しそうな笑顔
にまあいいかと微笑すると、成すに任せて彼女に引っ張られていく
ことにする。

「あ、あの……」

お客様、お風呂に入られるのにそのままではちよつと……！」

「何か不都合でもあつたか？」

そんな歩達が暫く歩いていくと、とある温泉宿の前に店員と思われ
る男と見知った二人が対面していた。いや二人というより……

「ですから……」

入浴なされるならば、その着ぐるみを脱いで頂きまして……！」

「コレは着ぐるみじゃ無い。

エリザベスだ」

それは紛れもなく、桂小太郎とエリザベスであった。歩のいった通り、早速面白い人の登場である。

桂は店員の指摘に対して異議を申し立てている真っ最中のようだ。

「アレって……」

桂さんとそのペットさんだよね？」

「あ、本当ね。

何をやってるのか……は大体分かるんだけど……」

歩とヒナギクは少しずつ近づいていきながら、取り敢えず桂と店員のやり取りを見守ることにした。

「いやあの……」

どう見ても着ぐるみ……」

「だから違つと言っているだろう！！これは俺のペットのエリザベスだ。エリザベスはエリザベスであつてそれ以上でもそれ以下でもない」

「は、はあ……」

訳の分からない持論を展開する桂に、店員は困つたように彼とその隣にいる未確認生物を交互に見比べる。

「分かつて頂けたらそこを通して貰いたい。
行くぞエリザベス」

「あ、お客様！

「ちょっとお待ち下さい！」

桂は頷くとエリザベスを振り返って銭湯に入ろうとするが、店員は慌ててそれを引き留める。

「何だ？」

「まだ何かあるのか？」

「いえ、その……」

入浴はお客様だけで。

相方の着ぐるみ……ペットの方はお控え頂きますか？」

「何？」

「この温泉はペット入浴が出来ると聞いたぞ？」

店員の言葉に桂は振り返って話と違うぞと尋ね返した。

「確かにウチはペット混浴OKですが……そのそちらの着ぐるみ……ペットはサイズが大きいので……ちょっと……」

「何だと!？」

「そんな事はどこにも書かれていないぞ」

「ええ、ですが……」

「やはりその……遠慮して頂いて……」

エリザベスを目の前にしてどうも歯切れの悪い店員。

やはりどうもエリザベスをペットとして温泉に入れる事は出来ないという感じである。

「まさか、ペット間で差別をするというのか!!」

いかなる客に対しても、ましてペット混浴ならばペットに対しても平等に接するのが貴様らの道であるっ!!」

そこに直れ、叩き斬ってくれ!!」

「ひ、ひい!？」

店員の態度に桂は目を見開いて腰にあった刀に手をかける。

『落ち着いて下さい!!』

桂さん!!』

「離せエリザベス!!」

こつこつ不届きは革命家として見過ごすわけにはいかんだ!!
些細な事でも積もりに積もればいずれは国家単位で……」

桂は店員に斬りかかろうとするがエリザベスに羽交い締めにしてそれを止める。

「……何してるんですか桂さん」

そこでようやくヒナギクと歩が彼らの前にやって来た。

「おお、これはヒナギク殿に歩殿ではないか。ちょうど良い所に」

「は、はあ……」

桂は二人に気付くと、柄から手を離して振り返った。

「二人からもこの男にビシッと行ってやってくれ。」

世の中には曖昧にしてはいけない事があるんだと」

「敢えて言わせて貰うならおかしいのは桂さんですよ」

「むう！？」

しかしあっさりと言いつき切ったヒナギクに桂は一步下がって声をあげる。

「まさか、ヒナギク殿ともあるう者が不正を見過ごすというのか。ハッ、そうか！！」

最近明るみになってきたキャラ被り問題に際し、ここでこの俺を消そうという……」

「全然違いますよ……
つていうか桂さん、何で刀なんて持って来てるんですか」

的外れな発言を連発する桂に呆れたように溜め息をついて彼の腰にある刀に目を向ける。

「ん？これか？
武士たる者、何時如何なる時も気を抜いてはいかんからな。
万事に備えあれば常に冷静でいられる。何が起きても臆することがないようにな」

「いやダメですよ！！
銃刀法違反になっちゃいますよ！！」

帯刀していた刀を抜いて持ち上げてみせようとする彼に、慌てて歩はそれをとめる。

「とにかく、刀をやく閉まっけて下さい」

「ふむ……そうか」

ヒナギクと歩の登場で桂はようやく落ち着いたようだ。

桂は鞘に刃を収めると、一息ついて腕を組んだ。

「ところで、こんな場所で会うとは奇遇だが、二人はどうしてここに？」

「あ、私は親戚の叔母の家に来ているんです」

「私は家族旅行で。」

お姉ちゃん置いてきちゃいましたけど」

歩とヒナギクは各々の下田に来た事情を簡単に説明した。

「桂さんはどうして下田に？」

「うむ。」

咲夜殿がこの場所に出掛ける事になっていたらしくてな。

俺達も一緒に連れて行ってくれるといたのでその好意に甘えさせて貰ったのだ。

なあエリザベス」

『コクリ』

彼は隣を見ると、エリザベスは大きい額いてプラカードを掲げる。

「ああ、そうだ。」

この温泉街に銀時が来ていると聞いたのだが、二人は奴を見ていないか？」

「へ？銀さんが？」

えっと、私は見てないですけど…ヒナさんは？」

「だから何で私に聞くのよ…」

私もずっと歩と一緒に居たじゃない」

「そうか……」

今度こそ奴を攘夷志士にさせようと思ったのだが……」

二人とも見ていないという返事に、桂は周りを見回して頷いた。

「まあ良い。」

とにかく、俺達は温泉に入らなくては……」

「いやですから、そちらのペットはご遠慮頂いて……」

「貴様まだ言うか!!」

桂は何かを続けて言おうとしたその時、隣にいたエリザベスがなんと二人の間に入ってきた。

「あゝ、もう良いっすわ……」

ちよっとこん中ホント暑いんで、脱衣所行ったら脱ぎますから通し
てくれませんか？」

「「!!!?!」」

突然、エリザベスの中から聞こえてきただるそうな声に、ヒナギクと歩は勿論桂と店員まで驚きのあまり仰け反ってしまう。

「え、エリザベス……?!」

「あ、じゃあ中にちょっと行ってくるんで……
お先です」

呆然とする三人を尻目に、エリザベスは口の中から出した手を振って温泉宿の中に入って行ってしまった……

「……………桂さん。

今……………喋りましたよね……………」

「エリザベスあれ……………
中が暑いって……………」

「……………」

「えっと、あの……………
桂さん……………?」

取り敢えず黙ったまま建物の入口を見つめる桂に気まずそうに話しかけてる二人。

「……………喋った?

何を言ってるんだ二人とも」

「え……で、でも」

桂は躊躇う二人を振り返ってニヤリッと笑ってみせた。

「実は今のは僕が話した裏声なんだよ（桂裏声#）

二人ともまんまと騙されてしまったようだね」（桂裏声#）

「……………」

「じゃあ今から温泉に行くてくるか」（桂裏声）
ハーツハツハツハ！！」

桂は腕を組み直して高らかに笑いあげた。

しかしかなり目が泳いでいる。

「あ、あの……」

大丈夫ですか桂さん？」

「も、問題ない。

エリザベスはエリザベスだ。

それ以上もエリザベスだし、それ以下もエリザベスだ。

原点も終点も、地球上の全てのエリザベスはエリザベスなんだ。

つまり我々はエリザベスに立ちエリザベスに生きる……

それがエリザベスであって……」

桂はブツブツとしきりに呟きながらフラフラと危なっかしい千鳥足で歩き始めた。

そして呟きながら温泉宿の中に消えていってしまった……

「「……………」」

二人は彼の去った先を見つめて不安気に顔を見合わせるのだった。

「エリザベスさんの事は……………」

無かったことにした方が良いんじゃないかな……………」

「そ、そうね……………」

私達は何も見なかったことにしましょう。

何も……………」

第一百訓 目的が困難であればあるほど燃えるものがある

「オーイ、いつになったら秘湯とやらに着くんだよ。
もうかれこれ一時間以上歩いてんじゃねーか……………」

「文句言っても仕方ないでしょ。簡単には見つからないから秘湯って言うんですから」

秘湯を求めて山に入った銀時達は一時間以上は山中をただ歩き回っていた。

先頭を進むハヤテと新八、その後ろから銀時がだるそうについてきていた。

「この先の道はまだ行ってないですよね……
行ってみましょうか」

「あゝ、早くしねーと日が暮れちまうぞホント……」

散々回つてみたが、まだ踏み入っていない道を見つけた新八が前方を指差して足を進める。

二人もそれに続く。

「新八君、銀さん、あんまり時間がかかってもアレだからこれで見つからなかったらもう帰ろう。」

お嬢様達も心配ですし……」

「そうですね……」

じゃあこれで最後にしましょう」

「まあ、仕方ねえな。」

もしダメなら搜索は明日にするか」

ハヤテが新八と銀時に顔を向けて心配そうに口を開くと二人は空の

色を見上げながら頷く。

「あ、人だ!!」

ようやく人がいたぞ将!!」

「「「?」」」

すると、森の中から青年と思わしき人物が叫びながら銀時達に近づいてきた。

その様子から察するに後ろにも人間がいるらしい。

「オイ待てよ和樹……」

つてあれ!? 銀さん!?!」

「んん?

オメー……将か!?!」

青年の後ろからもう一人青年がやって来たのだが、彼はなんと前にこの小説とコラボしてくれた星空の侍先生の小説の主人公、大和将であった。

「え、ええ!?!」

何で銀さんがこんな所に!?!」

それにハヤテと新八も!!」

「あり?

何だ、知り合いだったのか?」

驚いて三人を交互に見回す将にもう一人の青年が首を傾げた。

「いや、そりゃこっちのセリフだろ。んでオメーがここにいんだよ？」

「いや、俺達は凄まじい効能がある温泉が山にあるって聞いて、俺達の世界で調査してたんだよ。」

それで歩き回ってたら……

今、銀さん達に会ったんだ」

「っー事は何？」

オメーらの世界にある山の中歩いてたら、こっちの世界に来ちまったって訳か？」

「いやいや、ここは俺達の世界の筈だろ？」

銀さん達が迷いこんで来たんじゃないか……」

「いやいや、ここは下田だろーがよ。だって俺達次元とか超えた覚えがないからね。」

スター オーズみたいにワープとか出来ないから」

先程からしきりに首を横に振って自分達の意見を述べる銀時と将。だが、お互いの話の内容は一切噛み合っていない。

「いやいやいや……」

無い無い無い無い……」

「いやいやいや……」

あり得ないあり得ない」

二人は顔をひきつらせて恐る恐る見合わせると……

「ここ何処だアアアアアアアアアアア！?!?!?」

取り敢えず悲鳴に似た叫びが山の中に木霊する。

「オィィィィ!」

「テーマふざけんじゃねーぞ!!」

「何俺達を辺境の地に引き込んでんだコラアア!!」

「痛たたた!?! 知りませんよ!?!」

「すぐさま銀時は先頭を導いていた新八の首を締め上げて叫び声をあげる。」

「和樹オメエエエ!!」

「後先考えずに突っ走るからこんな事になんだろーがアアア!!」

「ハハハ、まあ落ち着けつて……それに甘いぞ将!! Mな和樹さんにはこんなんじゃ締め足りない!!」

「うるせエエエエエ!!」

将も動揺して隣の青年の首を締め上げるが、青年は呑気にそう言つと陽気に笑つてみせた。

「お二人とも!!」

「取り敢えず落ち着いて下さい。」

「今はとにかく状況を整理しないと……」

「あ、ああ……
そうだな……」

「う……すまねえ」

慌てて宥めるハヤテに、銀時と将は手を緩めて一歩下がると何とか
落ち着くためと息をついた。

……

「あゝ、取り敢えず……
久しぶりですね銀さん、ハヤテ、新八」

「おー、久しぶりだな」

「まさかこんな形で再会するなんて思ってもみなかったですね」

改めて向き合う一同。

その中で将が三人に向かって挨拶をすると銀時達は若干複雑な表情
で返した。

「えっと……
隣のコイツは式守和樹しきもりかずきっていうんだ。変態で変態で変態な奴だ。
まー、腐れ縁だな」

「その程度の言葉は辛辣のしの字も無いな。」

そんなんじゃないや 和樹さんを興奮させる事は出来ないぞ!!」

「お前いつぺんで良いから東京湾に沈んでくんない？」

和樹と呼ばれた青年は黒髪に瞳は綺麗な橙色。

容姿はかなり美形だ。

「いや、照れるな」

「地の文にのるなよ」

陽気に頭を掻く和樹に将は呆れたように突っ込む。

和樹の服装は山吹色のシャツの上にボロボロの白い羽織りを着いて、下は紺色のジーパン姿だ。

「えっと、僕は綾崎ハヤテって言います。よろしくお願いします和樹さん」

「男の娘到来!？」

「違いますよ!!」

とんでもない発言を返されたハヤテは勿論抗議の声をあげるが、

「いや、男でも……」

むしろ可愛ければウエルカムさ!! ウエルカム男の娘!!

出来れば女の子の方が良いけどね」

「話を聞けエエエエエ!!」

ハヤテの叫びも虚しく、和樹には全く届いていないようだ。
続いて新八が前にでる。

「僕は志村新八です。
よろしくね、和樹君」

「ああ、よろしく眼鏡君」

「反応薄っ!?!」

しかもなんで眼鏡!?

新八ですよ!?!」

「そーですね」

新八の言葉は和樹のいいも風の返事で返された。

「いや何でいいも?

何か腹立つんですけど……」

「「「そーですね」「」」

「……アンタら全員八つ裂きにしますよ」

以上新八。

そんな訳で最後は銀時が頭を掻きながら和樹に顔を向ける。

「俺ア坂田銀時つてんだ。

全国の貿易関係の管轄を取り纏め管理する総合貿易センター“練馬
セントラルトレード”のエグゼクティブオフィサーだ。

まあ日本の経済的治安を守るいわばヒーローみたいなモンと言って

いいなほとんど」

「ほとんど処か何もかもが嘘だろーがアアア！！
どこだよ練馬セントラルトレッドって！！
つーかエグゼクティブオフィサーってなんだよ！？
社長でいいだろそこは！！」

新八のツツコミを華麗にスルーして銀時は手を差し出すと、和樹も習って握手を交わした。

「よろしく……」

えっと、天p………銀さん」

「オイコラ。」

今天パって言おうとしたろ。

頭見ながら天パって言おうとしたろ」

こうして一通りの挨拶が済んだところで、改めて状況確認である。

「将君達は効能があるっていう温泉を探しに来たんですよね。

実は僕達もなんです。

ただ見つからずにもう帰ろうかと思つてて………」

「おー、そうだったのか。

確かに秘湯の効能は凄いらしいからな」

ハヤテが話をまとめると将が頷いて口を開く。

「何でも大抵の願いは叶えてくれるらしいからな。

努力ではどうしようもない体質系の悩みに特効があるって定評があ

るらしい。

不幸体質が180度転換して超幸運体質になったりとかな」

「……………!」

将の話聞いていたハヤテの肩がビクリと思いきり反応した。

「かくいう俺も不幸体質をなんとかしようと思ってさ。
んでコイツは……………」

「そんな話を聞いたら、モテモテのハーレム体質になると願っしかないだろ。」

和樹さんは負けません!!」

和樹はかなりカツコイイ表情でメチャクチャな発言をしていた。

「つと、ここがどこか分からない以上長居する訳にはいかないよな

……………」

んじゃ銀さん、俺達は来た道に戻る事にするよ。

元の世界に戻れなかつたら大変だし、行くぞ和樹」

「えー、こつちの世界に可愛い女の子がいるかもしれないだろ
それ見ていきたくね?」

「ねーよアホ。」

ほらッ、とつとと行くぞ。

それじゃあ、また会えると良いな銀さん」

「ちえく、まいつか。」

んじゃ、銀さん、ハヤテ……………眼鏡君、今度可愛い女の子紹介し

てな」

「おー、二人とも気いつけてな」

将は無理矢理和樹を掴むと三人に別れを告げて、もと来たらしい道を辿り森の中に消えていった……

「銀さん、やっぱり僕達も戻りましょう。」

これでまた異世界に飛んだとかいっただら大変ですし」

「んだな……」

仕方ねー、戻って明日出直すか」

新八の不安げな言葉に銀時も渋々と首を縦に振って来た道に帰ろうと……

「何を言ってるんですか……」

「「へ？」」

しかしハヤテは一步も動かず前方のみを見つめている。

「諦めたらそこで試合終了ですよ！僕達は何としてもその秘湯をみつけましょう……！

そして超幸運体質を手にな……」

（落ちたアアアアア……！

簡単にやられたアアアア……！）

ハヤテは力強く握りこぶしを作ると、秘湯を目指してぐんぐんと足を進めていく。

この中の唯一の歯止め役が失われた瞬間であった……

第百一訓 目的が困難であればあるほど燃えるものがある（後書き）

銀八

「え、今回もまた伽藍の我が俣でゲストに出て頂いた二人を紹介したいと思う」

【幻想郷の星空】

作：星空の侍様

大和 将君

式守 和樹君

銀八

「えー、こんな駄文にホントにありがとうございます。
お二人と作者様のよりいっそうのご活躍を願っております。
んじゃ質問コーナーいきまーす」

「教えて！！銀八先生」

銀八

「え、んじゃ最初の質問。

『ヒナギク、伊澄、蒼妃さんに質問。記憶喪失になって目の生きてる銀さんが顔を近づけてきたらときめいたりするの？』

「……………何コレ」

ヒナギク

「しません」

銀八

「いや即答は酷いんじゃないありませんか？

もう少し考える素振りくらいあっても良いんじゃないですか」

蒼妃

「ふふ……」

「そうかもしれないね」

銀八

「流石蒼妃さん。

ほら見る、これが大人な回答なんだよ。オメーも彼女を見習いなさいよホント。

だからいつまで経っても絶壁」

ドカツ！！バキッ！！ザクッ……

伊澄

「えつとあの……」

私は別に／＼／

ですが……」

銀八（頭に正宗が刺さっている）

「……………んじゃ次の質問な」

伊澄

「!?!」

銀八

「『ヒナ……いえ、ヒナギク様に質問でございます。」

銀八さん著作の混沌学院のヒナギクについてどう思……いえ思いま
すか?』」

ヒナギク

「……どつって言われても」

新八

「あつちのヒナギクさんは凄い事になってますよね。奇人化してま
すからね……」

神楽

「ヤンデレっていうかヤン化物アルな」

ヒナギク

「えっと……」

とにかく、向こうじゃ無くて良かったと思います」

銀八

「いや、おつかねえなオイ。」

今のキャラが将来あんななるなんてな……」

ヒナギク

「なりませんよ……!」

銀八

「次の質問『長谷川さんとワタルは二つの道を選ぶとしたらどっちを選びますか？』」

A 仕事もうまくいっており地位も高く生活も豊かだがどこか退屈で信念もない、あまり生きる希望がない心に大きな喪失感がある道

B 仕事はそんなうまくいっておらず地位も高くもない生活も苦しいがそれでも賑やかで楽しく信念もあり生きる楽しさがあり心も満喫している道『』」

ワタル

「うーん、俺はBかな」

長谷川

「俺はAだな……」

何故ならBでも心に喪失感があるからさ……」

銀八（まだ頭に刺さっている）

「……………次の質問だな。」

『銀さん達に質問。ハヤテとマリアの料理どっちが美味しい？』」

神楽

「どっちも美味しいネー!!」

新八

「そうですね。」

本当にお二人ともお料理が上手ですから」

銀八

「だそっだ。」

んじゃ次な『万事屋と桂に質問。マドモワゼル西郷とハヤテが会ったらどうなりますか？』
……………喰われんな」

新八

「やられますね……………」

神楽

「餌食になるアルな」

桂

「諦めるハヤテ君……………
あの人には敵わん」

ハヤテ

「え……………
どんな方なんですかその人……………」

伽藍

「続編で絡みを予定してます！
お楽しみに」

万事屋・桂

「うわぁ……………」

ハヤテ

「ええ！？」

銀八

「んじゃ今回はこの辺で。」

次回で長かった秘湯巡りは終わるそうなので、そしたら後はスイスイ進んでいくから多分」

神楽

「次回もヨロシクアル!!」

第百二訓 山奥には不思議がいっぱい潜んでる(前書き)

一ヶ月もの更新停止、

本当にすみませんでした!!

言い訳はいたしません。

全て私の不徳の致すところであります。

本当に申し訳ございませんでした!!

今後はこのような事がないように心がけたいと思います。

第二百二訓 山奥には不思議がいっぱい潜んでる

「面倒なので三行で済ませる」

「あらすじ!!」

- ・ハヤテ達は山奥で将達に会った・素晴らしい効能の話聞いた
- ・三人は温泉に向かって突き進む

「……最近手抜きになってませんか？この小説？」

「心配いらねーよぱっつあん。」

「この作者は存在自体手抜きみたいなモンだからな」

「二人とも!!」

「ちゃんと周囲に目を配って下さい!!もうすぐ言われていた場所の周辺ですよ!!」

新八、銀時、ハヤテの三人は懲りずに山奥を歩き回っていた。

日は傾き始めて薄く橙色の光が木々の隙間から漏れ出している。

三人の先頭に行くのはハヤテ。

心なしか目が輝いているように思える。

二番目には新八。

そして最後尾には銀時。

ダルそうな目でノロノロと歩いている。

「しかし気を配れなくても、どこまでいっても森しかねーぞ」

「諦めたらそこで試合は終了ですよ。僕達は目的を掴むまで歩みを止める訳にはいかないんです」

「ねえ、何でコイツこんなにやる気になってんの？」

「何で何事も無かったように180度も態度変えられてんの？」

「どンドン前に進んでいくハヤテを見て銀時はため息をつきながらそれに続く。」

「前回の“幸運体質になる”という言葉がよっぽど効いたらしい。」

「そんなこんなで、」

「やる気満々のハヤテを先頭に更に数十分ほど森を突き進んでいったところ、三人の前に一際狭い細道がつつすらと現れた。」

「む！？」

「この道……何かありますね」

「いや、ただの小道だろ」

「小道の前に立って何やら反応を示すハヤテだが、後ろからついてきた銀時は首を傾げる。」

「いえ、この先からは何かがある気配がします！
行ってみましょう！」

「……………」

ハヤテはかぶり振って断言するような口調でそう言うと、怪しげな小道を進んでいってしまふ。銀時と新八は顔を見合わるが、一人で行かせておく訳にもいかず後を追っていった。

小道は道幅の割りにかなり長かった。

しかも進んでいけば行くほど霧が立ち込めて視界も悪くなってゆく……
それでも後に引けない三人は仕方なしに奥へ奥へ進んでいった。

暫く歩くと、

長かった道からは徐々に霧が引き始め、そして……

「おおっ!?!?」

三人の前には広く開けた場所が現れた。真ん中にある大きな旅館のような建物がある。

「これ……」

旅館でしょうか?」

「こんな山奥に……」

三人は前方にある入口と思われる場所に歩いていく。かなりの山奥にも関わらず綺麗で凄く高そうな旅館である。

入口前は白い小石が敷き詰められた中に石造りの道が浮かんでいるように玄關まで通っている。

周りは森に囲まれているなか、かなり広く開けていて、小綺麗に整った庭や澄んだ池が風流心を駆り立てる。

鷺ノ宮屋敷の庭に近い感じがするなと周りを見回していた銀時はフと感じた。

三人は恐る恐るの足取りで入口の前までやってきた。すると、

「おお!!」

いらっしやいませ!!」

「「「!?!?!」」」

突然、三人に向かって男性の声がかかってきた。慌てて銀時達が入口へと振り返ると旅館の中から人の良さそうな老人が出てきたところであった。

紺色の半纏に灰色の袴を身につけた白髪頭の男性である。

「えつと……」

「やあやあ!!」

まさかこんな山奥まで来てくださるとは!!」

久々のお客様ですな!!」

老人は三人の前までやって来るとまるで好奇心旺盛な少年のように顔を綻ばせる。

「いや……」

僕達は……その……」

「ええ、存じ上げております。

秘湯の噂を求めていらしたんでしょう」

「え？

どうしてそれを……」

旅館に泊まるつもりは無いとハヤテが言おうとするが、老人は三人の目的をなんとやってのけてしまった。

「わかりますとも。

噂になっている驚異の効能とはこの旅館のものですから。

さあ、どうぞお入り下さい」

「「「………」」」

なんと、三人が目指していた秘湯は目の前の旅館にあるとの事だった。銀時達は意外そうな表情でお互い顔を見合わせる。

「さあ、どうぞ……」

老人はゆっくりと微笑むと背を向けて旅館に入ってしまった。

第二百二訓 山奥には不思議がいつぱい潜んでいる

旅館は外観通り、内装も綺麗に整っていて立派であった。
今は廊下を老人を先頭にハヤテ、銀時、新八と並んで歩いている。

「こちらの旅館は言わば秘密の隠れ家とでもいいたまいますか。
滅多にお客様が来られる事はございません。ですからお三方は運が
いい」

「はあ……」

ですけど、僕達そんなお金を持っているわけでは……」

「ご心配には及びません。

この旅館を見つけて下ったお客様からお代は頂きません。
無料で結構ですよ」

「「「え?」「」」

老人はにこやかに振り返るとそう言ってみせた。これには驚いて三人は顔を見合わせる。「あまりにも話が上手すぎる」と……

「ハハハ、そんな怪訝な顔をなさらなくとも。大丈夫ですよ、別に騙したりはいたしません」

「……………」

「さあ、もう少しで温泉です」

老人は愉快そうに笑うと廊下を歩いていく。

三人は訝しげな表情のまま、しかし彼についていくのだった。

三人は浴場に案内された。

脱衣場で三人はタオル一枚に着替えると言われるがまま風呂場に移動した。

「わゝ、大きな露天風呂ですね」

「また随分高そうな温泉だな。」

ホントに大丈夫なのか?あのジジイ無料なんて言っただが…」

風呂場はかなり開けていた。

荘厳な森に囲まれた大きな露天風呂だった。

木製の屋根が露天風呂の半分を覆っていて柱は湯の中から立っている。それもまた、風情がある雰囲気醸し出している。

「まあでも、取り敢えずせっかく来たんですから、入ってみましよう」

「そうですね」

「まあそうだな」

新八が露天風呂を見てそう言うと、二人もそれに同意し風呂の中に入っていく。

・・・

「はあ、いい湯ですね」

「ホントに、極楽だね」

ハヤテと新八は湯に浸かりながらのほとんど上空を見上げる。

空は夕暮れ時で、一面橙色に雲が薄ら薄らと雲が浮かんでいる様子は“いとをかし”といった感じである。

「でもよオ、何の効果も現れやしねえな」

「うーん、確かに」

「言われてみれば……」

銀時が息をついてそう言うと、ハヤテと新八は自分の周りに目を向けて首を傾げる。

「やっぱりデマだったんですかね？」

「まったく、わざわざ山奥まで来たつてのに徒労だったか」

銀時は深々とため息をつくと自分の浸かっているお湯に視線を落としました。

「ハハ、まあ仕方ありませんよ。元々怪しい噂だし……」

新八は苦笑混じりに銀時に伝えようとしたが、彼を見て途中で言葉を止めてしまう。

「新八君？どうし……」

その様子に気付いたハヤテが新八と同じように銀時を見て驚いたように言葉を止める。

「あん？」

銀時は自分の事を見て口を開けたままの二人を不審に思っただけに見返す。

「銀さん……あ、頭」

「頭ア？頭がどうかしたのか？」

「いや、あの、頭が……」

新八とハヤテはしきりに銀時の頭を指して何かを伝えようとしているようだ。

銀時は訳もわからず自分の頭に手を乗せる。

すると……

(……………?)

いつもとは全く違う感触。

天然パーマの時はクルクルと指が引っかかるのに、今は何故か全く引っかからずにサラリと下まで流れる。

「んん!？」

銀時は今の感触に明らかな違和感を感じ、何度も何度も髪を触るがその度にサラリと手は下まで滑っていく。

「……………新八君ハヤテ君。」

今、俺の髪はどうなってる?」

「……………」

新八とハヤテは顔を見合わせると、体を洗う場所にある鏡の前まで銀時を連れていく。

その鏡に写っていたのは……

「お、おお……………」

まごうことなきサラサラヘアの銀髪頭の銀時であった。彼は感動したように鏡を見ては自分の髪を必要以上に撫でる。そして……………」

「いよつしゃあアアアアア！！

何か知らんが来たコレエエエ！！

これで雨の日もクリンクリンにならなくて済むぞオオオオオ！！」

歓喜のあまり叫び始めた。

その様子を唾然としたように眺めている新八とハヤテ。

「まさか……………」

銀さんの髪が……………」

「じゃあ、この効能は本物なんでしょうか……………」

新八はそう言いながらあることに気がついた。

「あれ？

そういえば僕……………眼鏡かけてないのに……………眼が良くなってる！？」

そう。新八は今はお風呂に入っているので眼鏡を外している。

なのに視界が遠くまでしっかりと見えているようになっていてるのである。

「まさか……………！！

これも温泉の効能！？」

新八は先日鷺ノ宮家で見たとニューズを思い出してハツとした表情になる。

するとどうだろう。隣のハヤテも何やら様子がおかしい。

「ハヤテ君？」

「なんだろうこの感じ……」

なんだか心が今までに無いくらい温かい感じに……」

「へ？」

「それに、何だか色々な事が前向きに考える事が出来る……」

キョトンとした表情の新八に構わずハヤテはお湯から立ち上がる。その表情は何故か輝きが増し、物凄い自信に溢れている。

「そうか……」

これが将さん達が言っていた超幸運体質ですか……」

「ええ！？」

「そうなの……」

「今の僕は何でも出来る気がします……いや、何でも出来る……」

自信満々に拳を胸の前に出してそう宣言するハヤテ。

そして彼も、はしゃぎまくっているサラサラヘアの銀時の隣に寄っていく。

ハヤテが話しかけると、二人はよく分からないが何やら理解し合っ

て勝手に盛り上がり始めた。
どうやら効能を獲得した者同士喜びを分かち合っているらしい。
よく見ればハヤテからは桃色のオーラが纏っている。

(アレが幸せオーラ……?)

少し離れた所で二人の様子を見ていた新八は首を傾げる。

(ってか、僕の効能って地味じゃね?)

まあ眼が良くなったただだからそれは致し方ない気がする。

「失礼します」

三人、特に銀時とハヤテが上機嫌な様子でお湯に浸かっていると、
先程の老人が何やら旅館の従業員を数名連れて露天風呂にやって来た。

彼らは何やら料理やお酒を沢山もっているのだが……

「あの?」

不思議に思った新八達が老人達立っている所まで湯に浸かりながら
寄っていく。

すると、老人と従業員達はお湯に数々の料理を浮かべ始めた。
未だに銀時達は頭の上にハテナマークが浮かんでいるのだが。

「これは当旅館のサービスです。特別効能に加えて温泉に浸かりな

がら山の幸が豊富な当旅館のお料理を堪能して頂きます」

「ええ？料理まで頂けるんですか？」

いかにサービスの良い旅館でも普通ここまでするだろうか？
新八はますますこの旅館の事を怪しみ始めるが……

「おー、酒まであんのか。
いや良いねえオイ」

「うわー、とつても美味しそうな料理ですね！
温泉に入りながらご馳走を頂けるなんて、夢みたいです！！」

そんな事は最早どうでも良いのか、銀時とハヤテは何の疑いも無く
ご馳走に近づいていく。
新八が止める間もなく、銀時は徳利の浮かんだお盆を引き寄せて酒
をつぎ飲み始める。
ハヤテも豪勢な料理の乗ったお盆を引き寄せて食べ始める。

「ちよつと二人とも！？
そんな簡単に鵜呑みにしてもいいんですか！？」

「良いんだよ。
人様の好意も旅館の好意も受けんのが礼儀だろーが。
だからオメーは新八なんだよ」

銀時はいつの間にか従業員の一人にお酒を注がれながらおつまみを
食べていた。

「いやアンタ、どんだけ順応してんですか！？」

「一々細かい事は気にしてはいけませんよ。
だから君は新八君なんですよ」

ハヤテは山の幸が豊富なご馳走に下づつみをうちながら岩に寄りかかっているほほんとしている。

「だからアンタら二人とも適応し過ぎでしょうが!!
っ！かこんな時は息ピッタリだなアオイ!!」

「「そーですね」」

新八は大声でツッコミをいれるが、彼等はどこ吹く風といった感じである。

「アンタらねえ……」

新八が呆れるのも最もである。
しかし次々と運ばれてくる料理やご馳走の数々はどれもかなり美味しそうで……

数十分後……

「いや、これまでの苦勞は全部この至福の時の為だったんですね
く……」

新八は料理や和菓子、そして幸せな心地の温泉にまさに極楽浄土の気分を味わってしまっていた！

ハヤテは従業員や老人達と今までの自分の苦勞話に華を咲かせている。よほど老人は聞き上手なのかハヤテの話は弾むばかりだ。超幸運体質のおかげだろうか？

そして銀時は少し離れた場所で湯に浸かりながら岩にもたれて空を見上げていた。

その脇には徳利とお猪口が浮かんでいる。

サラサラヘアを手に入れてかなり気分が良いらしい。

(眠い……)

彼は幸せそうに欠伸をすると、少し休んでしまおうと目を閉じた……

……

心地よい疲れが抜けていく感覚。目の前が真っ暗になる……

銀時はそのまま意識を手放した……

*

「うんせつ、こらせつと……」

割りと険しい山道を歩いていく男が一人。

彼は農家らしい服を着ていて背中には籠を背負い麦わら帽子を被った中年の男性だ。

「んん？」

山奥まで来て暫く歩いた男性は、前方に誰かが倒れているのを発見した。

恐る恐る近づいていくと、時期外れな大量の落ち葉にくるまれた三人の男達が寝転がっているではないか。

しかもバスタオル一枚という意味不明な格好である。

彼等の近くには本人達の衣服らしいものが、やはり落ち葉に埋もれていた。

「おい！おい！」

「……んん？」

男性は手間に寝ていた銀髪の男の顔を叩いて声をかける。

それはなんと銀時であった。

「……悪いばつつあん。

すっかり寝ちまったか？」

「ばつつあん？」

銀時はうつすらと瞼を上げると、寝ぼけまなこでそう呟くが男性は

勿論首を傾げる。

「おい、寝ぼけるっぺか？」

そげな格好でなんばしとると？」

「……………んん!？」

男性が心配そうに声をかけると、銀時は何か気付いたように急に身体を起こした。

そして男性と目が合う。

更には周りをキョロキョロと見回す。

「……………あり？旅館は？」

「はあ？旅館け？」

見慣れない人間が目の前に立っていて、しかも先程まで温泉に浸かっていた筈が今は落ち葉にくるまれているのだ。

「新八!!ハヤテ!!」

「「ううん…………？」」

銀時は慌てて一緒にいた二人の名前を呼ぶと、近くの落ち葉の中から新八とハヤテがむっくりと身体を起こした。

二人はキョロキョロと周りを見回して銀時の存在に気づく。

「あ、すみません。

僕あのあと眠っちゃって」

「っていつか、ここどこですか？」

二人は立ち上がって初めて、自分達がバスタオル一枚の格好に気付く。

「「「ってうわー!!」「」」

二人は慌てて落ち葉の中に隠れるように沈む。

銀時はそんな事はどうでも良いと視線を目の前の男性に向ける。

「おいつアンタ!!」

この辺に立派な旅館があるよな!? それって何処だ!?!」

「いや、んなもん無えよ。」

こんな山奥に、そんな旅館はあるはずも無えべや」

「「「……………え?」「」」

あっけらかんと言いつつ男性に三人は呆然と顔を見合わせる。

「そ、そんな筈は!!」

だって僕達はさっきまでこの山奥にある大きな旅館の温泉に入ってたんですよ!?!」

「……………いやいや。この山にはんなモンは無えよ。」

オラはこの山さ40年登ってるけど、そげな大きな旅館あつたらとっくに見つけとるわ」

男性は暫く首を傾げながらそう言っていたが何かを思い付いたように手を打つ。

「もしかしたら、おめえら狐に化かされたかもな」

「『狐エ!?』」

「この山には、昔から旅人に悪戯する狐さいるって、よく母ちゃんもいってたべ。」

だとしたら、かなり貴重な体験をしたな。ハハハ」

男性はカラカラと笑って三人を交互に見る。

「『……………』」

まさか狐なんて、そんな風に思いながら銀時が髪を触るとそれはいつもの通りの天然パーマだった。新八も眼鏡をかけないと視界が悪いことに気付いた様子。

ハヤテも何となく自分から幸せオーラが消えている事を感じ取る。

「ま、そんな格好しとつたら風邪ひくさね。」

早いとこの山から降りるんだな」

男性は『じゃあな』と手を挙げると呆然とする三人の前からさっぴいった。

ガサツ!!

と同時に、三人の後ろの茂みから何かが飛び出してくる。

んでいた。

これには流石のナギも驚いたように尋ねる。

「何でもありませんよ……」

ただ、幻想は所詮幻想ですね……」

「は？」

ハヤテは自嘲するようにそう呟くと、屋敷の中に入っていく。

新八と銀時もどんよりとした空気のままそれに続こうとするが……

「まあ銀さん、お帰りになられたんですね」

「ん？」

ニツコリと微笑んだマリアが銀時に近づいてきた。

銀時は不思議そうに彼女を見るが、ナギは頬をひきつらせて一瞬恐怖に固まった。

「銀さん。」

ちよっと私の部屋で“お話し”ませんか」

「あゝ、悪いんだけど今はそんな気分じゃ……」

ガシッ

銀時が言い終わらないうちに、マリアは銀時の腕を掴む。

「へ？」

「来ますよね？」

彼女は美しく笑みで銀時に問いかける。だが目は笑っていないような気がする……

「銀さん？」

「あのすみません。」

何だかよく分からないけど誤ります、ごめんなさい。だから許して頂けませんか？」

訳が分からないが確実に彼女は何かに怒っている。

それだけは銀時も察知した。

しかし一切身に覚えが無い……多分最近は無いかと思う。

「いいえ。」

今夜は許しませんわ」

「……………」

結局、

青ざめたままの銀時は成す術もなくマリアに連行されていった。

残った新八とナギは顔をひきつらせながらその様子を見送る。

「……………ナギちゃん。
マリアさん、どうしたんですかアレ？」

「誤解って恐ろしいよな……………」

「え？」

因みに、銀時が帰って来たのは翌朝の明け方だったらしい。
新八曰く、気付いたら明け方に万事屋メンバーの部屋にフラフラと
帰ってきて、そのままぶっ倒れたとの事。

事の発端である神楽は『朝帰りアルか銀ちゃん？』と全く覚えてい
なかった。

確かにマリアの部屋からは朝帰りではあるが……………

彼の口からその事について語られる事は無かったという……………

こうして、色々な出来事が起きた下田での1日がようやく終わった
のであった……………

第百二訓 山奥には不思議がいっぱい潜んでる（後書き）

遅くなってすみませんでした！　く教えて！銀八先生く

銀八

「えく、前書きでも書いた通り遅くなってすみませんでした。これからも更新速度は落ちていくとは思いますが、どうか一つよろしく。」

つー訳で最初の質問『銀さん達とハヤテ達に質問。』

お互いの世界で一番戦ってみたいのは誰？』

俺ア特にいねーな。面倒臭えし」

新八

「僕は野々原さんとかでしょうか？稽古をつけて貰いたいです」

神楽

「私はヒナアル！」

桂

「ふむ。クラウド殿と一度手合わせはしてみたいな」

エリザベス

『タマ』

長谷川

「ハヤテ君。不幸勝負なら負けないよ」

ハヤテ

「いや、それ競い合うトコなんですか？」

ナギ

「私はギンタマンの作者に会いたいな！」

マリア

「西郷さんでしょうか」

ハヤテ君の女装に協力してくれそうですわ」

ヒナギク

「月詠さんかな？」

強くてカツコイイし」

歩

「山崎さん!!」

地味と言われる立場について語り合いたいです！」

銀八

「長くなりそうなんでこの辺で。次の質問『万事屋に質問。ナギのアシスタントをやるとしたらどのポジション?』」

俺アアレだ。スポンサーだけは嫌だ。理由は絶対失敗するから」

ナギ

「どついう意味だ!!」

新八

「僕はー」

神楽

「眼鏡アル。私はマネージャーヨ」

銀八

「はい、次い」

『万事屋に質問。真撰組のゴリラ、マヨラー、ドSが来たらどうする？』

え、ゴリラはタマの餌にして、大串君はマヨネーズでも食わせて送り返すな。

沖田君は面白そうだから残しとくか」

神楽

「サドが来たら私の拳が火を吹くネ！」

銀八

「次」

『鬼兵隊に質問。』

どんな秘湯があったら入りたい？」

また子

「晋介様との恋愛成就の効能か、先輩の変態が治る効能ですかね」

武市

「いやいや、美少女達が戯れる温泉であれば効能などありませんよ」

また子

「やっぱり先輩が死んでくれる効能がいいっすね」

万斎

「特に効能はいらんが、温泉はいい曲が浮かび易い気がするぞ」
「なるな」

高杉

「背が……伸び……」

万斎

「何か言ったか晋介？」

高杉

「なんでもねえ」

銀八

「んじゃここまで」

次回もまた遅くなるかもわからねーがよろしく」

第百三訓 お約束のイベントって結構大切（前書き）

万事屋

「読者の皆様、

今回はホント、すみませんでした

」

新八

「って、銀さん？

何かこの小説最近毎回のように謝ってませんか？」

銀時

「仕方ねーだろ？

伽藍の馬鹿がネタ切れだとか言い訳抜かしやがってずっと放置して
たんだからよお」

神楽

「心配無いアル新八。

あの馬鹿は謝罪前にボコボコにしといたアル」

新八

「それはそれで心配なんだけど。でもホントに焦りましたよ。
今度こそ本当に打ち切りになるのかと思いましたがよ僕」

銀時

「危なかったな」

まあ俺達が奴の枕元に毎回銀魂のコミックスを置いてじわじわと罪

悪感に刈られるように仕向けてたからようやく動きやがったっー訳だ」

神楽

「睡眠中もずっと脳内に『銀ごと更新』ってサブリミナル効果を与え続けてやったネ。

おかげで奴はみるみる痩せていったアル」

新八

「アンタら何やってんの!？」

銀時

「まあ、何にしても更新放置は良くねーんだ。

オメー下田編が始まったの何時かから知ってつか？

六月だよ六月。

もう四ヶ月もダラダラやってんだよコレ」

神楽

「ここからは高速で更新して欲しいアルよ!」

新八

「確かにそれは僕も同意見ですね!これからも伽藍さんに頑張って貰わないと!」

銀時

「うっし!

んじゃまずは俺達が気合い入れ直しにいつものいくか!」

神楽

「合点アル!」

新八

「え？いつもの？」

C・E・78……

連 軍とザ ト軍の戦闘は遂に最終局面を迎える。

そう。後に歴史に名を残し、後世に語り継がれる事になる戦い

ヤキ ドウエの戦いが…

新八

「待たんかいイイイイイ！！」

お前らどっから話を借用してんだ！！何がいつものだ！！丸パクリじゃないですか！！」

銀時

「あ、逆襲のシャ verの方が良かった？」

新八

「そういう問題じゃねえんだよ！！」

神楽

「私はワンスのC 9編verの方が良いアル」

銀時

「ああ、燃えるよなアレ」

新八

「うるせえ！！燃えてねーで銀ごとを頑張れ！！」

神楽

「んだよ駄眼鏡。

眼鏡割って存在意義無くしてやるつか」

新八

「んだとチャイナ娘！！」

語尾からアル千切って国に帰してやるつか！！」

ギャー！！ギャー！！

銀時

「あー、もう止め止め

前書きでドタバタ暴れんじゃねーよテメーら。

仕方ねえ、おふざけ無しでちゃんとやるぞ」

新八

「アンタが最初にふざけたんだんでしょ！？」

神楽

「それじゃあ行くアル！」

新八

「銀魂のごとく!!!」

神楽

「東京都練馬区にて!!!」

銀時

「始まるぜ!!!」

b y 万事屋銀ちゃん

第百三訓 お約束のイベントって結構大切

「ハハハ、じゃあハヤテ達は狐に化かされたという訳か」

「いや、全然笑い事じゃあないんですよお嬢様」

三千院別荘は下田での二日目の朝を迎えて、ナギを始めハヤテ、マリア、新八、神楽がテーブルを囲んで朝食を摂っていた。

昨日起こった話をするとなぎ達は冗談と捉えたのか笑いながら返したがハヤテ達はまだ結構引きずってたりする。

「お嬢様は今日はどうされるんですか？」

「うむ。今日はまあせつかくだし神楽達と温泉（効能付き）に出かけようと思う。」

だからハヤテは今日もお休みで良いのだ」

「え、いや僕もついて行きm」

ハヤテはそこまで行ってナギにガシツと肩を掴まれた。

「デリカシー……」

その言葉の意味を教えるるかハヤテ」

「あ、はい。」

行っつてらっしやいませ」

要するに効能目当てというのがハヤテに知られたく無いという恥ずかしさである。

「うむ、という事で。」

ハヤテは今日も執事はお休みなのだ」

「え？

宜しいんですか？」

ハヤテはナギの意外な言葉に思わず聞き返した。

「ハヤテはいつも頑張ってくれてるからな、こういう時くらいは休んでも良い」

「お嬢様……

わかりました。

では、お言葉に甘えて」

ハヤテはその好意に甘える事にした。

「でも、また狐に化かされるのか遠慮したいけどね」

「ハハハ……

今日のもっとちゃんとした所に行きたいね」

ハヤテの言葉に思わず新八も苦笑してしまう。

それを聞いたナギは『相変わらずだな』と笑っていた。

「それで……

銀ちゃんは大丈夫アルか？」

「「「……………」」」」

とその時、神楽が一言そんな事を呟いた。するとダイニングにいた神楽以外の全員がある方向に視線を向ける。

その視線の先は…………

「な、何ですか？」

「「「……………」」」」

マリアだった。

慌てような彼女に新八やハヤテ、ナギはジト目を向ける。

「いえ、別に…………」

ただ銀さんは大丈夫かなあと

「まだ起きて来ませんからね…………」

「ハヤテ君、新八君！？

そ、その目はなんですか！」

そう。皆が朝食をとっている中、まだ銀時は起きていなかった。

正確に言うとききれないというのが正しい。

理由は前回参照。

「マリアの部屋から帰ってきてそのまま動かなくなったアル」

「まあ確かに神楽の言葉が不足だったとはいえ、完全に勘違いだったからな……」

「そ、それは……」

続けて神楽とナギがマリアに目を向けていった。

マリアは申し訳なさそうに銀時達の部屋の方向を向く。

そう。

実は銀時がマリアの部屋に連行された翌朝、起きてこない銀時を流石に不憫に思ったナギが前回の神楽の言葉の不足を彼女に説明したのだ。

それを聞いたハヤテと新八も同情したと同時にマリアが一体何をしたのかと気になった。

「た、確かに勘違いでしたけど……！！それは仕方が無かったというか……」

「マリアさんって、意外と思ひ込みが激しいんですね」

「そんな事はありません！！」

珍しく慌てたような声。

やはり彼女も気にはしていたようである。

「まあ、勘違いや思ひ込みはどうあれ……」

取り敢えず謝った方が良いと思うぞ？」

「そうアルな」

そういうのは大切な事ネ」

「僕もそう思うけど、勘違いさせたのは神楽ちゃんだけよね？」

ナギを始め、どうやら世論は謝った方が良いという意見のようである。

「謝るといつても……」

((((じ〜……))))

今更謝るのが恥ずかしいのか気まずいのか浮かない面持ちのマリアだが、四人はジト目で見つめる。

「あ、謝らないとは言ってますわ!!わかりました、しっかりと謝って年上のお姉さんとしての威厳を見せつけてあげます!!」

(((威厳云々は関係ないと思うけど……)))

何故か変な強がりを見せる彼女にハヤテと新八はあらぬ疑問を浮かべる。

「でも、銀ちゃん一人だとどうなるか心配アルよ……」

あ、そうだ!マリアが一日看病すれば安心ネ!」

「ええ!？」

いきなり突拍子も無い提案をした神楽に思わず立ち上がるマリア。しかし周りは……

「うむ、確かにそれならば二人きりで、しっかりと謝る機会もあるだろうし名案だな」

「そうですね。」

「ナイスアイデアです神楽さん」

ナギもハヤテも頷いて賛成のようである。

「え……？」

でも、それは……」

昨日の事もあるし流石にまだ二人きりは気恥ずかしいのか困惑したようなマリアだったが、
神楽が更に人差し指を上げてこう言った。

「それに、最近銀ちゃんはマリアの事を怖がってるアル。」

銀ちゃんだけで無く読者の中でもマリアはかなり怖いキャラで定着しつつあるヨ」

「」「うんうん」「」

グサツ！！

クリティカルヒット。

普段から気にしていたのだろう、神楽達の言葉はマリアに会心の一撃を与えた。

「……………」

ズーンと暗いオーラで体育座りをして落ち込んでしまうマリア。

「分かってますわ……」

この小説では毎回のようにそういう形のオチで使われるし、人気投票も順位が落ちるし……

私なんて……………」

どうやらかなり気にしていたようである。

いや、ホントすみません。」

「で、でも!!」

今回優しい所を見せればきつと大丈夫ですよ!!

皆さんも認識を変えてくれます、ですよね新八君!!」

「そうそう!!」

絶対大丈夫ですよ!!

マリアさん本当はとっても優しい方ですから!!」

慌ててハヤテと新八は取り繕うようにそう付け加える。

「そ、その通りなのだ……!!」

そういった意味でもやはり今日は奴の看病をしてやった方が良くと思うぞ。な、神楽?」

「謝まるチャンスも誤解も解くチャンスもあって一石二鳥アルよ」

焦ったようなナギに神楽が首を縦に振って答えた。

「そ、そうですね……！！
分かりましたわ。」

確かに傷が開いたりしたら大変ですし、今日は私が付き添います。
そしてホントは優しい所を思う存分見せつけてあげます！！」

（ ）（ ）（ ）傷が開く……！！？

一体昨日何をしたんだ！？（ ）（ ）（ ）

こじつて……

各々の下田での二日目の予定が決まったのであった。

第百三 お約束のイベントって結構大切

「という訳で、僕達二人になっちゃったけど……
これからどうしようか？」

「取り敢えず、
また温泉街に行こうか」

新八とハヤテは屋敷を出て宛も無く歩いていたが、その足は昨日と同じように自然と温泉街に向かっていった。

「あ、そういえば……」

昨日は行けなかったけど、あの温泉街の中で一番広い温泉があるんだって。そこに行ってみない？」

「ああ、それは良いね。」

行ってみよう」

そんな訳で目的地も決まった二人は温泉街へ。

因みにナギ達は別行動で咲夜の屋敷に向かっていた。

*

途中経過は面倒……じゃなかった、話を効率的に進行させる為に泣く泣く省略。

そんな感じでハヤテと新八は人々が賑やかに行き交う温泉街に到着した。

「昨日もそうだったけど、

やっぱりここは賑やかだね」

「そうだね。」

やっぱりテレビの効能の報道が影響してるのかな」

私服姿でお土産袋を片手に楽しそうに歩く人々や浴衣姿で桶とタオルを持ち満足気に歩く人々を見ながら二人はそう呟く。
新八もハヤテも昨日同様に浴衣である。

「ん？」

新八君にハヤテ君ではないか」

「「？」」

すると、二人の後ろから聞き慣れた声が聞こえてくる。

「桂さん！」

「あ、こんにちは！」

振り返ると、そこには桂小太郎が腕を組んでこちらに向かって歩いてきていた。

「偶然ですね。

どうしてこんな所に？」

「この付近に一番大きな銭湯があると聞いてな。
エリザベスも留守番している事だしちょっと寄ってみようと思ったんだ」

桂は愛沢家の方向に目を向けたあと二人を見て頷いた。

「そうなんですか！」

実は僕達も今からそこに行こうとしていたんですよ」

「ほう、そうだったのか」

ハヤテは偶然だと驚いて彼の前に桶を差し出してみせる。

「良かったら僕達と一緒に行きませんか？」

「そうだな。」

では、そうさせてもらおうか」

どうせ目的地が同じなら一緒に行った方が良い。

という事で桂も加え、一行は銭湯に向かって歩き始める。

「そういえば、何でエリザベスは留守番なんですか？」

「うむ。」

実は昨日エリザベスと色々温泉に入ったのだが、今朝エリザベスが皮がふやけて脱皮をするから一緒には行けないとな。

まあ宇宙生命体には彼らの事情があるのだろう」

そう言った桂の背景にはもぞもぞと白い着ぐるみを脱ぎ始めているエリザベスに『行ってくる』と別れを告げて部屋を出ていく桂の姿の回想シーンが。

ただ、エリザベスの足元には明らかに脛毛が生えた人間の足らしきものが飛び出していた。

「そんな訳で今回は俺一人で出掛けてきたのだ」

「桂さん回想がおかしいんですけど……明らかにおっさんの着替えなんですけど……」

「咲夜殿はナギ殿やリーダー達と共に行動するようだしな。男達で親睦を深めるというのも良いことだな。ハハハ」

「やつぱりスルーですか？」

そこは是が非でも見ないんですか？」

新八のツツコミをスルーして愉快そうに笑う桂。

彼の中ではエリザベスはエリザベスでありそれ以上でも以下でも無いのだろう。

「む、そういえば……」

銀時はどうしたのだ？」

「ああ、銀さんなら……」

ハヤテが軽く事情を説明。

主に午前中の話。

「なるほど……」

奴も隅に置けんな」

((本当に隅にのされてなければ良いんですけどね……))

それを聞いた桂はニヤリと笑ってみせたが二人はまた銀時が余計な事をいって散々な目にあわないかと内心ヒヤヒヤだった。

「お？」

お前達……」

綾崎に万事屋の二人ではないか」

「あ、湊川先生」

すると、今度は三人の前方から見知った男性が一人歩いてきた。

それは白皇学院教師の湊川姫史だった。

万事屋の二人、新八と桂。

桂は万事屋では無いが、銀時の知り合いからそう呼んだのだろう。

「皆揃って温泉か？」

「はい。」

先生もですか？」

「ああ、ここらで一番大きな銭湯があると聞いてな。行ってみようと」

どうやら彼も目的地は一緒のようである。

「そうか。」

姫史殿も銭湯に。

ならば俺達と一緒に行かぬか？」

「ふむ、そうだな。」

言葉に甘えて一緒にさせて貰うか」

そんな訳でまた一人追加。

姫史を加えた一行はまたも温泉街を歩き始める。

「姫史さん、蒼妃さんはどうしたんですか？」

「ああ、今日俺は朝が早かったからな。姉さんなら別行動だ。姉さんも温泉に行ってみると言っていたが」

姫史は歩きながら質問に答える。姉弟だっていつも一緒にいるとは限らないのだろう。

「そういえば、万事屋の奴はどうした？
姿が見えんようだが……」

「銀さんはちょっと寝込んで。マリアさんが一緒にいると思いますよ」

「ま、マリアさんが……？」

ハヤテの言葉に思わず肩を震わせる姫史。
その様子に不思議そうに首を傾げるハヤテ達。

「先生？
どうかしたんですか？」

「い、いや……
何でもない……
とにかく行くつか」

彼はひきつった笑みを浮かべると、一人歩き出す。
三人は首を傾げるが取り敢えず後を追うことにした。

*

〈三千院屋敷〉

「しかしよオ……」

オメーさんもついてねえな。

せっかくの温泉旅行で寝込むなんて……」

「うるせーな……」

仕方ねーだろ、俺にだって身に覚えが無えんだよ」

万事屋の部屋。

その中に布団が一つ引いてあり、そこに銀時が寝ていた。
その横にはタマの姿。

「っーか……」

何でオメーがいやがんだよ？

屋敷に残ってたんじゃねーの？」

「つれねーなあ……」

俺を誰だと思っただよ。

お嬢の列車の貨物車両に密かに隠れてたに決まっただろ」

「それ何ソリッド？

タイガー・ソリッド？」

銀時は仰向けになったまま隣に腰かけるタマを見た。

タマは小枝を葉巻のように加えてハードボイルドを気取っている。

「まあ、これを機に普段でも怒らせる事をしない事だな」

「トラが言うセリフじゃねーよ」

ニビルに笑うタマに銀時は寝返りをうつて暇そつに横を向いた。
しかし彼は知らなかった。

この平穩はこの後崩される事を……

「え？」

何このナレーション？」

*

「ほう……」

これは確かに大きいな」

「ですね」

ハヤテ一行は目的地の銭湯に到達した。

そこは噂通りかなり大きく、温泉街の中心を主のように陣取る形で建っている。

ビルのような建物で、これぞ温泉ホテルといった風情も感じる事が出来る。

「じゃあ、早速入りましょうか」

新八がそう言つてハヤテ、姫史、桂の順に建物に入つていった。

「いらつしや……」

あ、新八君じゃないか。

それにハヤテ君、姫さん、ヅラうちも一緒か」

「長谷川さん!?!」

広い下駄箱のエリアに四人が入ると、ホテルのような中央のフロアに箒を持った和風にグラサンの長谷川の姿があつた。

「この下田で長谷川さんに会うとは思いませんでしたよ！
何やってるんですか？」

「ああ、実は清掃の仕事でね。
向こうで仕事をやってたんだけど、短期でこっちのバイトもやるこ
とになつたんだ」

「へえ　!!」

じゃあ仕事決まつたんですね、おめでとございます」

「アハハハハ!!」

まあね、こっちは短期だけど温泉も沢山あつてラッキーだよ」

新八とハヤテの言葉に長谷川は嬉しそくにそう答えた。

「あ、温泉入るんだよね。」

どろどろぞろぞろ」

長谷川は機嫌良く四人を下駄箱からフロアに案内する。

「しかし大きな建物だな。

まるでホテルみたいだ。

一体どんな銭湯なんだ？」

姫史がキョロキョロと周りを見回しながら尋ねる。

「ああ、ここは全部で七階になってるんだけど

各階に温泉が一つあるんだ。

一つ一つの温泉がかなり広くてね、各階温泉がどんな温泉かは案内図に載ってると思うよ。

でも一番のオススメは七階の露天の間かな。

この下田でも一番広い露天風呂で……まあ行って見れば分かるよ」

「へえ〜」

「ほう……」

四人はそれぞれ説明を聞きながら興味深そうに辺りを見回す。

「じゃあ、せっかくだからその露天風呂にいつてみませんか？」

「賛成」

「俺も賛成だ」

「私もだ」

長谷川の勧めもあってハヤテの言葉に皆賛成した。

「じゃあ俺は仕事に戻るから。
あ、そうだ。」

七階の露天は時間交代制で男性と女性が交互に入れ替わるような仕組みになってるんだ。
そこは気をつけてね。」

七階にいる番頭さんに聞けば分かると思うけど」

「あ、はい。」

ありがとうございます。長谷川さん。仕事頑張って下さい」

ハヤテは一礼すると、長谷川は手を挙げて仕事に戻っていった。

「それじゃあ、露天に行ってみるか」

「……はい（ああ）」「」

桂、ハヤテ、新八、姫史の四人は最上階に向かう為にエレベーターホールに歩いていくのだった。

*

（三千院屋敷）

おはようございます。

マリアです。

三千院家のメイドをやってます。ピチピチの17歳です。

最近読者の皆さんから怖いとか恐ろしいとかいう認識を持たれてしまっています。

これは由々しき事態です！

という事で、今日は怪我をしてお休みになってる銀さんを看病して私がいかに優しいかを皆さんにお見せして差上げます！！

(……………むむむ)

そんなモノローグから始まり、

マリアは屋敷内の万事屋の部屋、つまり銀時が寝ている部屋の前に立っていた。

何をやっているのか？

彼女なりの精神統一である。

こうして集中する事により完璧メイドマリアとして振る舞う彼女がいつもいるのである。

(……………今日こそ！

銀さんわ皆さんの中にある不名誉なイメージを取り払ってみせますわー！！)

そんな感じで決意を新たに集中力を高めるマリア。

つてか、たかが看病に精神を使い過ぎじゃね？

そのせいでいらぬオーラまで彼女の周りを取り囲み……………

「!?!」

室内にいた銀時とタマは外から感じられるオーラにビクリと反応した。

(……おい、何か知らんが外からヤバいオーラを感じるんだが。これマリアのじゃね?え?何で?銀さん何にもしてないよ!?)

(……………)

(おいタマ!!)

オメーちよつと外の様子偵察してこい!!

何か知らないけどヤバいから!!)

よく分からないが身の危険を感じた銀時は隣のタマにひそひそ声で訴えるが……

(ニヤーン……)

(てめエエエエエ!!)

何こんな時だけ猫に戻ってんだコラ!!誤魔化しきれてねーんだよ!!)

(ニヤーン?)

タマは可愛らしく首を傾げてみせると耳を掻いた。

(この期に及んで猫で通す気か!?!マスコット気取りかコノヤロー

！！しかも全然可愛くねーんだよ腹立つ！！鍋にしてやるーか！！？

銀時は必死でタマを掴んでブンブンと振る。

コンコン……

「銀さん？

起きてますか？」

しかし、ドアを叩く音と共にマリアの優しい声が聞こえてくる。
優しい「怒っていると勘違いした銀時は顔をひきつらせた。

「入りますよー？」

（待て待て待てエエエエエ！！

銀さんに身に覚えはありませんから！！いやホントに！！）

100%勘違いで怯える銀時と色々な意味で決意を新たにしている
マリア。

果たしてこの対決の行方は！？

*

カポーン……

コロコロと場所が移動したが、
同時刻。

ここは下田最大の温泉の最上階、露天風呂。

「いや、

やっぱり温泉は良いですね」

「全くだ。

人類が生み出した財産だな」

「これぞ武士が行くが道だな。

エリザベスも連れてきてやりたかった」

四人はのほほんと湯に浸かっていた。周りは岩で囲まれており、温泉内にも幾つか大きな岩がモニュメントのように浸かっている。

「確か、女性の交代の時間は11時でしたよね。

さつき番頭の時計を見たら9時半でしたから……」

「一時間くらいはゆったり浸かれるな……」

新八の言葉に姫史がゆっくり頷いて答える。

そう。

この露天は男女で時間交代制。

8時～11時は男性。

11時～14時は女性。

14時～17時は男性。

17時～20時は女性。

というタイムテーブルになっているのだ。

脱衣場こそ違えど、温泉は一緒になるから鉢合わせを避ける為にも基本時間の10分前に出ることが好ましい。

番頭の時計では現在9時半。

交代まではまだ十分に時間がある上に、なんとハヤテ達以外の人は居ないので貸し切り状態。

一行は気兼ね無く露天風呂を満喫しているのだ。

「ホント、温泉に出会って日本人に生まれて良かったって思いますよね。」

「俺は綾崎に出会った事で日本に生まれて良かったと思っているぞ。」

ハヤテの言葉に答えるように彼にピトリと寄り添う男が一人。

.....

「あぶぶぶぶばば!？」

「何してるんですかアンタは...」

取り敢えずハヤテは後頭部を鷲掴みにして思いきり湯船に押し込めた。

「がばっ!!
いきなり何をするんだ綾崎!!」

「それはこっちのセリフだぁーっ!!
なんで虎鉄さんがここにいるんですか!!」

湯から顔を上げて叫んだのは他でもない、瀬川虎鉄であった。

「それは勿論、お前をストーキングしているからだ綾崎イイ!!」

ガバっ!!

「あばばばばば!!?」

無言で虎鉄を湯に沈めるハヤテ。

「何だか近藤さんみたいな人ですね……あの人」

その様子に新八は向こうの世界でのストーカー、近藤勲の姿を思い出していた。

「そうか。」

姫史殿は教育者であられたか」

「ああ、担当は外来語だな」

「異国の言語を会得出来る事は国の発展に繋がる。
素晴らしい職業だな」

桂と姫史はお互い面と向かって話すのは初めてだが、盛り上がっていた。

そんな和やかなムードの露天風呂であつたが……

それは突然起こつた。

ガラッ……！！

「おおーっ！！

ここが下田で一番大きな露天風呂かいな」

「何かしらの効能もありそうね、咲夜」

「……！！！？」「」「」

突然少し離れた場所からドアの開く音がしたと思つたら、立て続けに聞き慣れた女子の声が聞こえてきた。男性陣はあまりの事に一斉に驚いて肩を震わせた。

「うわーっ！！

ホントに広いね……！！

ね、ヒナさん？」

「そうね」

どこまであるのかしら?」

「風呂くらいでギヤーギヤーうるさいぞハムスター」

「誰がハムスターかな!？」

「いや、でもめっちゃデカイアルよナギ!!」

ウチの百倍は広いネ!!」

「フフ、百倍は言い過ぎじゃないかしら神楽ちゃん?」

「そんな事無いアル。」

蒼姉も銀ちゃんの家のお風呂を見れば分かるヨ。

狭すぎるアル」

明らかに知っている声が、明らかに知り合いの女性達の声が立て続けに露天風呂に響いていく。

()()(な、ななななな………
何で女性が入ってくるんだアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!
()()

絶叫………は出来ないので内心大絶叫。

焦りのあまり思考が飛んでしまいそうである。

(な、ななな何で!?)

まだ交代の時間じゃないよね!?)

(分からない!!)

け、けどこの状況はかなりマズイよコレ!!
お嬢様達ですよ!!)

最悪の状況にテンパりまくる新八とハヤテ。

(落ち着くんだ二人とも!!)

幸い声はまだ奥の方だ。

湯煙でこちらの方は見えまい。

今の内にあの一番大きな岩場の後ろに姿を隠すぞ!!)

(そうだ！)

音をたてないようにゆっくりな)

桂が指差した岩場の後ろは女性陣の声の方向からは死角になっていて、こちらに近づいて来なければ見えない。

(俺は綾崎と一緒にならどこでもヘヴンさ)

(黙ってる変態!!)

桂と姫史を先頭に、五人は何とか岩場の後ろに姿を隠した。
幸い岩は大きいので何とか一行は収まったが……

(こ、これ……)

隠れても充分見つかる可能性がありますよね……!?)

(ああ、近づいてくればかなり危険だな……)

第百三訓 お約束のイベントって結構大切（後書き）

教えて！！

（銀八先生）

銀八

「ついにもう二ヶ月も放置されてたんで、どんな後書きだったか忘れかけてっけど質問いきま〜す。んじゃ最初の質問『ヒナギクに質問。温泉の効能が効果無かったら？』」

ヒナギク

「放っておいて下さい！！／＼／」

銀八

「はい。皆さんもお分かりの通り多分効果無いと思いまーす無駄な期待っー訳です」

ヒナギク

「!?!」

銀八

「続いている質問『ハヤテに質問。これからはビヂクソ丸って呼んでいい?』」

ハヤテ

「ぐはっ！！」

アニメコラボでもやっていたネタですか!？」

銀八

「はい、ハヤテ君暗唱」

ハヤテ

「…………… 寿限無寿限無ウンコ投げ機昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク〃フェザリオンアイザック〃シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしっかりとっているようではらないのを僕はしっかりとっている留守スルメめだかかすのここえだめめだか…このめだかはさつきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆつていみやおつきむこつペペペペペペペペペペピチグソ丸」

銀八

「つー訳で、呼びたかったら次回からどうぞ」

ハヤテ

「止めて下さい!」

銀八

「んじゃ次な」

『ハヤテメンバーに質問。』

狐に化かされても良いから欲しい効能は?」

ハヤテ

「幸運を下さい」

ナギ

「身長をよこせ!」

マリア

「引きこもりの娘が元気いっぱい学校に行く効能が良いですね」

ヒナギク

「は、発育をもう少し……／＼／」

歩

「地味さが消えるように!!」

伊澄

「ヒーローさんと会える効能を……」

咲夜

「小太郎のポケを減らす効能がええな」

ワタル

「商売繁盛!!」

サキ

「以下同文です!」

雪路

「金よ!」

それがお酒!」

三人娘

「頭脳明晰!!」

虎鉄

「綾崎とあんな事やこんな事が出来る効」

ハヤテ

「いるかアアアアアアアア！」

銀八

「長くなりそうなんでこの辺で。次の質問『ヒナギクに質問。

一方通行、セイバー、ダンテ、アサシンの中で一番戦いたいのは？』

」

ヒナギク

「セイバーさんかな？

とっても強いし同じ女性として尊敬します!!！」

銀八

「っー訳で今回はここまで。

答え無かった質問は返答が無理なもんだと解釈してくれ。

んじゃ、次回もよろしく！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5853m/>

銀魂のごとく！ ~東京都練馬区にて~

2011年10月17日02時58分発行